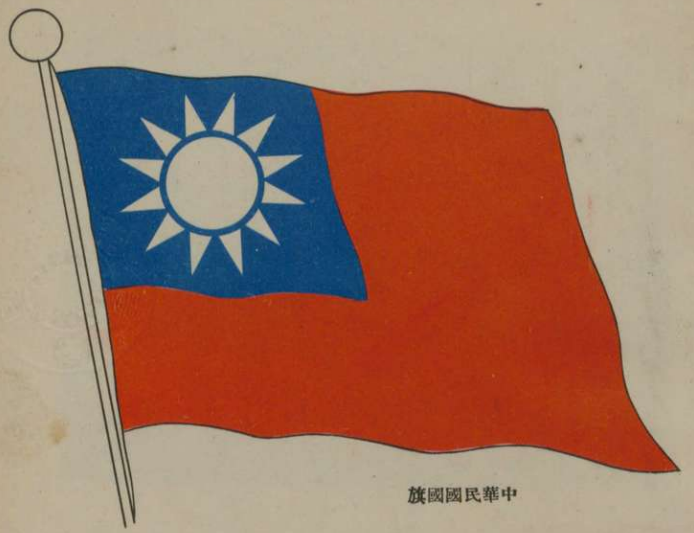
639-5
1200501565900
179
O
複写

488

支那及滿洲
旅行案内

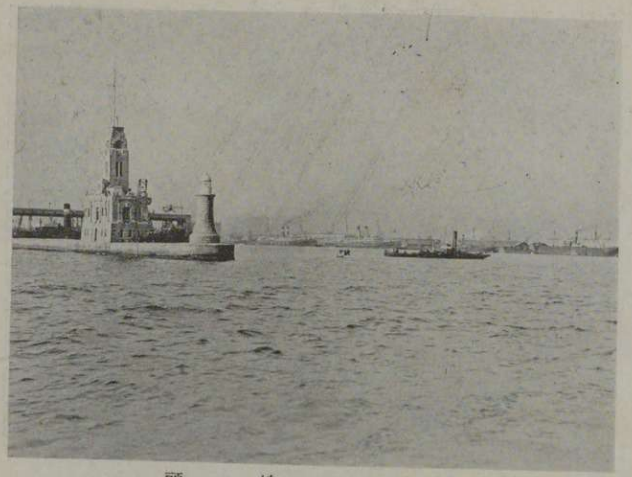
後藤朝太郎著

東京
春陽堂版

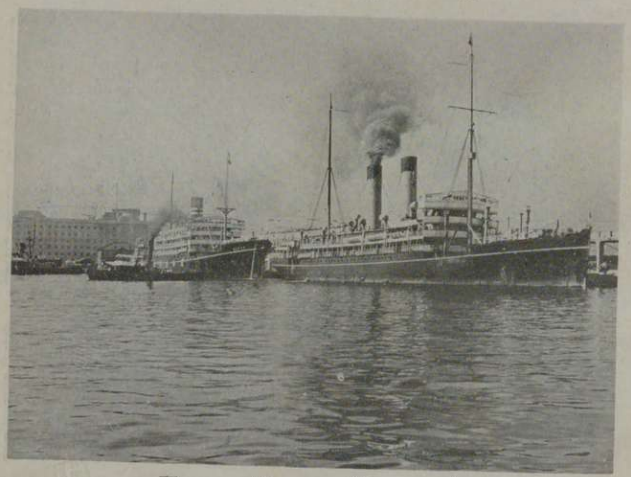


中華民國國旗

滿洲國國旗



大連埠頭



大連埠頭

景風外城原開

山東移民苦力

長春驛

活佛の別莊

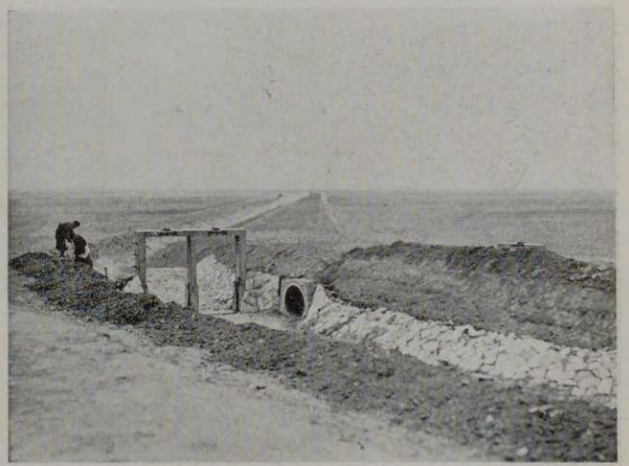
奉天舊張作霖邸

北支那及滿洲國に見る大藥房の店頭

寧古塔

小學生募集のビラ

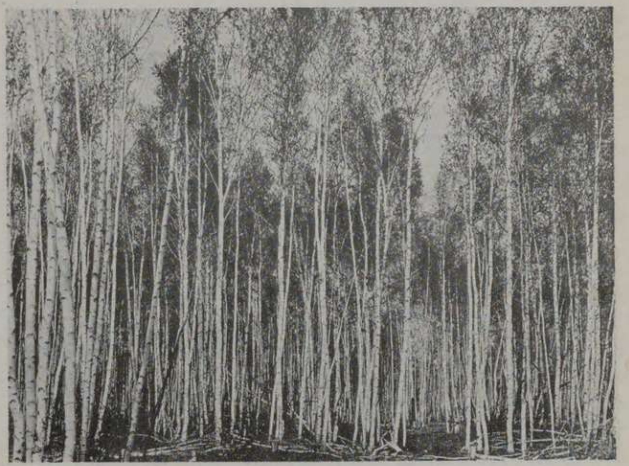
金福線附近農區



金福線附近農區

ハルビン市街

ハルビン冬の街頭

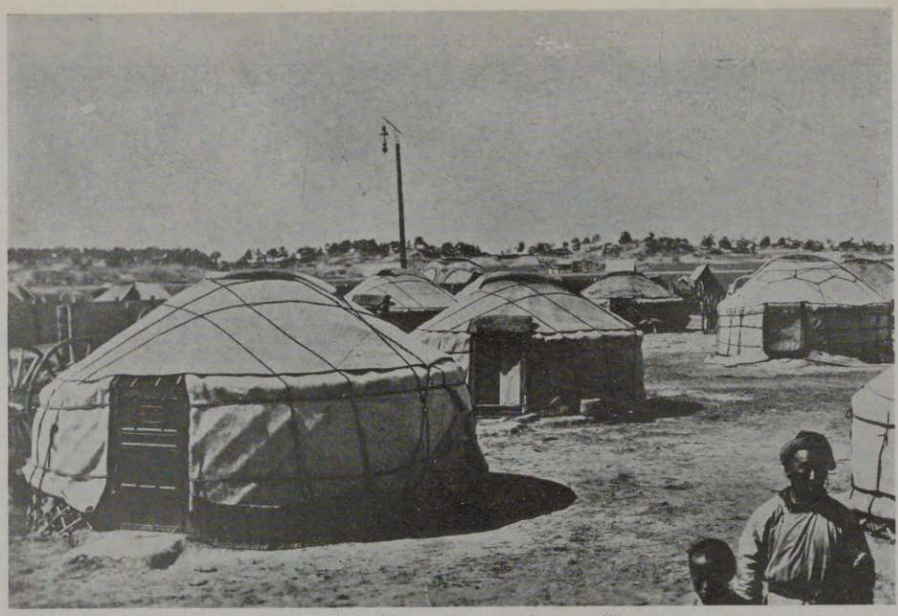


興安嶺の白樺

ハルビン松花江交通機關

蒙古路を長城遙かに北行する駱駝隊と蒙古人

蒙　古　の　放　牧



蒙古人部落

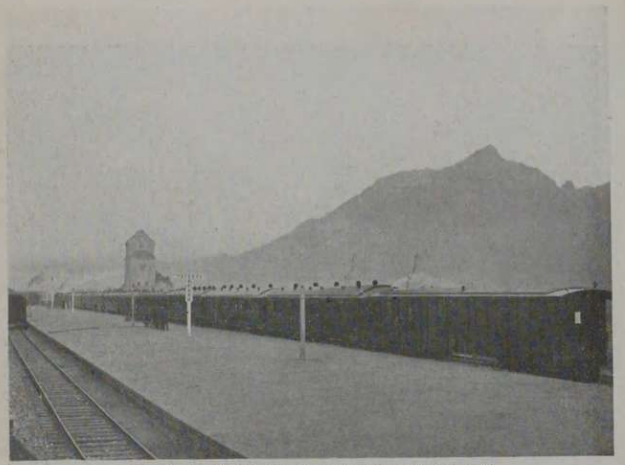
鄭家屯蒙古語の看板

河北省北平の南郊西陵の境内大觀

北平城内紫禁城の樓門及華表

北平紫禁城内午門の内壕

北平北郊南口十三陵の石頭牌樓

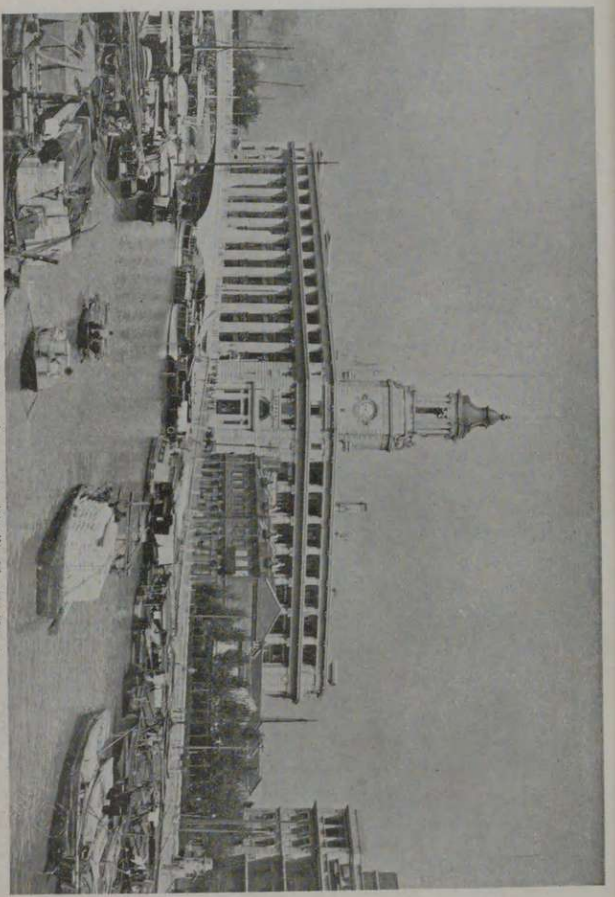


山東泰山南天門と傲萊山を泰安驛頭より望む

北平城內西城絨氈製造工場の實景

北平城內後門に見る什刹海（イハーチーシ）の水鄉

北平城外萬壽山に見る乾隆刻石獅



山東曲阜聖廟衍聖公府の當主孔德成公爵

上海租界に臨む河州蘇郵政局

上海租界地の交通整理に當たる印度巡査の偉觀

上海市中を散歩する民國女學生のモダン振り

上海の寒氣におびゆる印度人の巡査

上海佛蘭西租界邊路に集る安南巡査の群

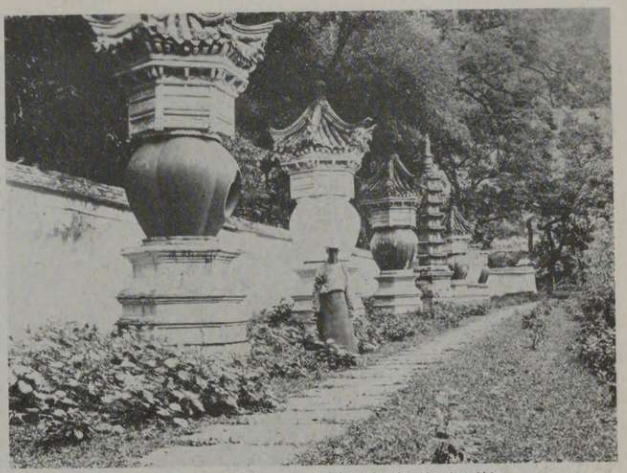
上海租界を練り歩く葬式の靈柩

南京城外紫金山に見る中山陵

上海場末の巷にねる推車上の老婆

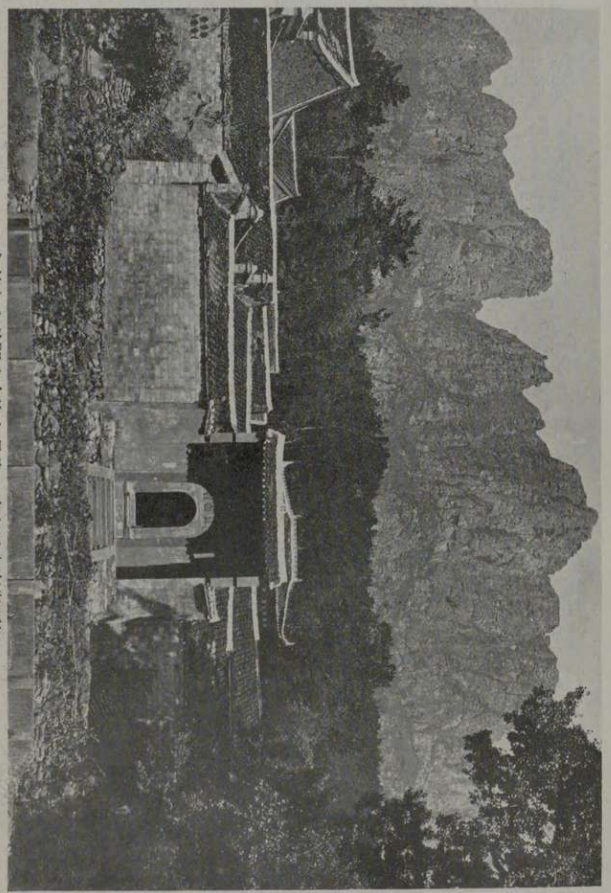
南支長江の江邊綠蔭に釣を垂るゝ牧童

師占卜遺大ぐ稼に巷の南江



浙江省寧波郊外天童山の古塔

南支の民俗に評判の飾り人形、城隍廟の祀りの行列に見る



江西省廬山五老峰を背景の牯嶺寺門前より望む

639-5
5877-27

支那旅行案内の序

支那旅行くらゐ、現在の支那や、過去の支那世相の内容、匂ひの的確に摑める方法はあるまい。幾ら萬巻の書を讀み破つても、その文字の美しさや、形容の語に妨げられることが多く、その眞相は容易に摑めない。と云ふのは、日本人には早や呑み込みをせんとする性癖があり、物の事相の輪廓だけは解し得たにしても、その内部の心持ちがわからなかつたり、又その規模の桁はづれに大きくて、山川風物の趣の汲み取れなかつたりする場合が多いからである。

支那旅行で見聞の出來るものも、之をかりに日本内地の島で經驗したもので以て、想像しようとした處で當たらないものがどつさりある。その社會相にしろ、歴史地理にしろ、又衣食住にしろ、年中行事にしろ、凡ての事が、日本式のものを持つて來たつて、眞相に觸れない。思ふに日支の間は、唯文字の形が同一といふだけであつて、第一その發音も違つてゐるし、又成語の意味の食ひ違つてゐるものも多い。同文同種など人が云

南支の田舎土農家庭内に見る論語の素讀

江南の市井に見る子供の日向ぼつこ

つてゐるからと云つて、早や呑み込みをしてはならない。實際に當つて見ると、互にピントの合つてゐないことのみ續出して來る。

日本で「東西（トンシ）」と書かるゝ語が、支那では「品物」の意味になつてゐたり、日本で「汽車」と云ふのが、支那では「自動車」のことになつたり、それから日本の「汽車」のことは、彼の地では「火車」と書れてゐるといつた式に、日本のインテリ階級の文字知識など云ふものも、必ずしも支那へはそのまゝ適用の出來ないものがあるのである。

支那旅行の要は、先づ、凡て日本式の常識を取り拂ふことである。又日本流の文字解釋を變へ、且つ日本流の一本調子の考へを何とかすることである。呑ん氣で又規模の大きい桁はづれの支那常識と讀み替へをした頭とで以て歩かねばならぬのである。こは大分むつかしい注文であるが、例へば、汽車、汽船の時間の不正確とか、警察權のあつてなきが如き實情とか、法律の保護などの殆んど當にならぬことだとかを不思議がるやうなことでは、一歩だも路み込めたものでない。

從來、中學の東洋史などで教はつてゐた史實の見方にしても、こは餘りに日本流にかつちりし過ぎてゐた。それに支那大陸らしい匂ひが少しも加はてゐなかつた。それにその教へかたや、教科書自身にも別に大陸舞臺としての匂が入れられてゐなかつた。又地理の方でその教材や、その教へ振りをみて見ても、これ亦日本流儀の山川風物、交通物産と云つた注入方法のとられてゐる計りであつて、その間、支那式の匂なんかは全く入れられてゐなかつた。あの取りとめのない要領を得ない如くにして得てゐるし、曖昧の如くにして、どことなく自得せしむる所のあると云つた効果を齎らす大きな線に就いては一向に考へられてゐない。これは大變な手抜かりであつた。唯々かつちりと、小さく纏つた地理の教授が年々歳々繰り返へされてゐるに過ぎない。

かういつた歴史や地理に、大陸味のぬけてゐた支那智識の科目は、丸でショウーウキンドーに飾られた見本市のやうな感じがする。形だけは纏つてゐるが、その大味の所が缺けてゐる。理窟以外の天地に漂うてゐる大陸味なるものは、見本式の陳列棚などからは汲みとれるものではない。實をいふと、支那の山川風物についての日本人の取扱ひ方は、凡てがいつも小さい寫眞のカメラ式で終始してゐるの嫌ひがある。至極結構では

あるが、その實際を知つてゐる者から云はせると、その心持にぴつたりと來ない。其處には粉はづれの理窟を超越したおほ味の出てゐない憾みがあるのである。

支那旅行の要領は思ふに、この邊の太い線を摑むべく、不即不離の間を行くに在るのである。その道に當つて、必ずや無警察狀態もあるであらう。がしかしその代りに、又小うるさい余計の氣苦勞がなく、自由な天地を横行濶歩の出來るゆるやかな氣持ちもする。汽車汽船の時間の狂ふために、先方へ迷惑をかくると云つた如きことも度々ある。その論語などで讀まされてゐたことゝはまるきり樣子の違つた世相にぶつかる。釣錢に贋金を摑まされたり、惡車夫や、碼頭の苦力たちから人なき里で、相棒に轉賣されたりなど、進退谷まる場面に出くはすことも珍らしくないのである。

しかし又支那旅行中には、きつとその世相を導く大きな黒線が見出される。紅燈街だの、芝居見物だの、長夜の宴だの、翰墨の遊びだの、日本に居ては考もつかない粉の大きい又深みのある歡樂生活に、どこまでも徹底して、打ち浸ることが出來る。そこには支那らしい匂のする幅びろの線が横たはつてゐるのである。旅行者にして、若し日本式一點張りの二二が四式の頭で歩いてゐる者には、折角かうした幅と深みのある大陸風は一向に味はれないで濟んでしまふ。而かもそこに自分の氣恥かしさに氣がつきもせず、支那を表面は見縊つてゐながら、尚且つ内心にはどことなく不安と淋しさを感せさせられてゐる。ところがその心持ちだけでも、一度大陸人側に仲間入りをしたつもりになつて來ると、今度は非常に氣が樂になり、その淋しさとか、ぎごちなさとかはなくなつて來る。そのあたまでもつて、遙かに日本の世相を振返つて見るとき、如何に日本の日常生活だの、修身倫理だの、歷史地理だの、日本人の外交活躍だのといふものが、單調で、窮屈で、型にのみ囚はれ、どうにも拔き差しならぬ破目に陷つてゐるかに氣がついて來るのである。

思ふに支那旅行は單なる支那世相の出現を見て廻はる計りが能ではない。更にもつと深いもつと貴い任務がある。その第一は上に述べたやうな日本全局面の人々の、氣づいてゐない氣の毒な心境を押しひろげ、之に活を入れることにあるのである。又天空海濶な風懷味をもたせることにあるのである。やがてこは支那自體を理解せしむる上に大

事なことであるばかりでなく、支那を旅行することなど考へてゐない人にした所で、かう云つた心境の進歩を念ずることは、人間としてお互の緊要事であると云へる。

本書は理窟を禁物となし、凡百の理窟を超越して人間生活に卽した處をのみ云々するものである。日本人に最もたやすく理解せらるべくして理解せられてゐない難物の支那を、出來るだけ氣輕るに、又自由に、そして又愉快に趣味深く遊歷して廻らうと云ふには、如何なる態度と方法をもつてすべきかを、判りやすく碎いて說いたものである。支那はあの通り、相手が相手だけに、常にその鄕に入つては、鄕に從への心持ちになり、その大勢に順應し、目立つ一切の旅行振りを避け、なるべく環境に調和するやう心がけて動かなければならぬのである。つまり桁の大きい又深刻味ゆたかな支那の社會相を周圍に持つてゐて、その保護色を十二分に利用し、時には自ら愚人の如くして、その實、あらゆる方面の眞相と之を動かす黑線とを摑み、且つ之を體驗することをもつて、何よりの要領となすべきである。

凡そ支那くらゐその點で手加減の難しい所はなく、その時と、處によつて、絕えず舵の操りやうを加減し、明るく朗らかに渡らなくてはならず、又その邊のこなし加減が大切であるわけである。その意味に於て遊歷にピストルを忍ばせたり、大金を帶びて出かけたり、立派な旅裝をしたりすることは、歐米なら知らぬこと、支那の土地では大の禁物である。これは支那旅行案內中でも一大文字としてこの序文に特筆しておく。不逞の徒などが、その人の兒器欲しさに、一發ポンと來る例はいくらでもあることである。

この案內書は、普通の旅館名だとか、船の出帆だとか、汽車の時間表だとかいふ方面のことを示したものとは、その撰を異にし、その目標がちがふ。その如何にして、支那各省各地は固より、赤道直下、南洋方面に於ける支那人の活躍、又滿洲國新天地に於ける風物大要の事までをも採り入れたものであつて、支那の人々の活躍する地方色を記述することに出來得る限り、力を注いだ。苟しくも支那民族の社會を形づくれる所に、日本人として踏み込んで行く場合、殊に一人旅で遂行してゆく場合の自分の體驗を基礎に、すべてをあるがまゝに、又見たまゝに物語つたものである。しかし人各見る所あり、他の探險跋涉家は本書と又おのづから見方を異にし、違つた事實插話を將來して來られた

ものも多々あることであらう。無論本書の紹介する所のものは、完全無缺とは云はないが、多年に亙る我が南船北馬の趣味の遊歴を生涯一度纏めて置きたいとの宿望のあつた矢先き、時代の要求もあり、書肆春陽堂主の需めもあり、旁々この機運に促されて、益〻その公刊の必要に迫らるゝものがあつた。そのやうな譯で、聊かこゝにわが年來の體驗を叙述し、あの摑みにくい支那の旅に立たんとする江湖の人士に呼びかけ、お互に研究を進めて見たいとの微衷に外ならぬものである。恐らく該案内書は自分の著述としても、この方面の材料を取り纏めた最初のものであり、又同時にこれが最後のものでもあるかと云ふ氣持がする。若し遊歴同好の士君子にして内容の不備の點、お氣附きの所もあれば、些細の事でもよろしい、道のために御教示を賜はらんことを切に希望して止まない次第である。

昭和七年四月十六日予が五十一の誕生日

後藤朝太郎しるす

支那及滿洲旅行案内　目次

一　支那を旅行せんとする人に……一
一　支那の見方……三
二　日本旅行との相違……八
三　金よりも肚……一五
四　旅行の日當……二
五　一人旅と團體旅行……六
六　都會と田舍……二五
七　旅裝と旅具……四一
八　參考書……五二
二　支那旅行中の手引き……卷七

一　船着場……五
第一印象　上陸の前後　役人の臨檢　大埠頭　露天食堂
苦力義渡　護照領事館　港の小景

二　荷物の取扱ひ……六
不用意な體裁　手籃　皮箱　抜取り　肚の問題
棺桶の荷造　グロの荷物

三　汽車と自動車……七
乘物展覽會　百姓と快車時間の遲速　發車前後
土匪襲來　寢臺車　貧民車　便所の清潔
青龍刀の巡羅　客車の設備　手荷物の心得　乘車券
食堂　途中下車不能　振子の鐘　自動車が汽車　自動車道路　モダン運轉手
巴渦の棧道　グロな自動車　ピストル强盜　城門の臨檢

四　轎子その他の乘物……一四
チャウツ　紅轎の花嫁　祕密の轎子　情趣ある思ひ出
轎夫と公館　簡單な爬山虎　羽化登仙の泰山　盧山の雲助　ねだられ賃
轎夫の氣分　マーツオ　馬夫の午睡　命がけの乘客　小膽者の支那觀
旅の保護色　南支の馬車　同一行動　ヤンツオ　ワンパオツオ

腳長の車夫　乘客の警鈴　狹巷の風情　十字街の行列　同行者の離散
城内の捨小舟　ショオツオ　哀音の情緒　軋る聲音　一家族の乘客
經濟第一主義　菜種畑の道行　驢　馬　郊外の遠乘　意地惡驢公
裸馬の曲乘　臭い駝公　盧山の强力　人間待遇　他山の石

五　輪船その他の船……一〇三
水鄕の思ひ出　運河の發達　輪船公司　統鎗の阿片客　安い民船
上海の划子　舟翁の風懷　閩江船の優委　魚眼の浙江船　蘆蓆の帆
三峽の大船　七十の舵夫　裸體の船子　峽中の曳子　濁流の飲料水
簡單な船料理　鬼門の武裝兵　地方訛りの客　聯のある船室　エロのパイプ
海賊船の懲罰　輪船の略奪　船の支那旅

六　兩替屋……一一四
大銀行の兩替　錢莊の帳場　支那銀行の札　信用狀　錢銖の銅貨
一圓が三百錢　銅幣と銅子兒　貨幣の種類　複雜な幣制　一角の支那通
贋札の鈞錢　兩換の注意　銀貨の倒取り　肚兜の財布　馬蹄銀と苦力
銀相場と旅行　一夜成金

七　郵便と電報……一二三
旅先きの仕事　綠色の郵便函　田舍の郵便　郵便函の無視　飛脚制度

郵便料金　呑ん氣な局員　親書の祕密　支那封筒　電報の種類
漢字の電報　誤譯料付電報　配達夫の慰勞　封書の出し方　郵政地圖

八　支那宿……一三九
自家撞着　考へ方の相違　絶句の落書　翰墨氣分　室內の調度
禁止事項の紙　便所の難關　外出の食事　正午の勘定　老班の立替
客廳の匾額　眼房の名札　來客の待遇　餘韻嫋々　表　看　板
中西旅館　薄暗い部屋　南支の寢臺　夜具と蚊帳　南京虫の檢査
蝸の瓶詰　衛生狀態　保管の確實性　剃刀と番頭　猪首の東家
臺所の材料　部屋の入口　相客の親しみ　不在の書置　七八寸の名刺
乗物の注意　不正旅館の罠　宿　泊　料　公安局の臨檢　賀筵の披露
朝寢坊の老班　夜の情緒　後房の阿片室　魔の宿の魅力　公寓の白首
船宿の魔窟　靈藥市場の宿　宿のない時　奇拔な體驗　排　日　宿
船　の　宿　光福の思ひ出　臘梅の風韻

九　茶　館……一六一
日常生活の實相　樓上の客室　田舍の茶館　都會の茶館　素客の優遇
職業別の種類　漢楚兩軍の雄　黄色な鳥籠　茶　の　特色　木版刷の赤包
熱湯の注ぎ方　排日ポスター　冷茶の無禮　施茶の設備　朝の蟬噪蛙鳴
竹筒の金箱　民衆倶樂部　喧嘩口論　便所の場所

一〇　飲食店……一六九
町民食堂　安い民衆料理　諸掛りの加算　實費の料理代　食器と竹箸
日本人の神經　板場の見物　五味八珍三昧　料理番の嘆息　複雜と香氣
紹興酒の醉ひ　客の接待振り　總勘定の差引　揩手巾の接待　都會料理の味
蔬菜料理　西域料理　純朴な地方酒　花彫の驚異　通人の料理番
塵紙の菜單　蒙古風の風帽　煤球兒の暖房　成吉斯汗料理　看板の雅名
關帝の肖像

一一　錢　湯……一七九
日常生活の中　入浴の情緒　祕密の小室　薄暗い浴室　看板の色々
上等の盆池　澡堂の共同湯　內部の構造　深い浴槽　脫衣場の理髪
不斷着の陳列　一文の長竿　千態萬樣の姿　和服の役人　人情噺の興味
按摩の風懐　湯錢の相場　二筋の手拭　慇懃な三助　清遊氣分
江戸情緒　エロ屋の別室　衛生狀態　濡れた木履　噪いだ瘋男
痛快な裸體　女人禁制　手製の女靴　婚禮と紅塗盆　錢湯の鐘
大理石の温泉

一二　理髪店……一九二
剃頭的の剃刀　髪の恰好　辮髪と支那帽　歪んだ大鏡　有名な耳掃除
目掃除の竹箆　田舍の床屋　合せ鏡の愛顧　回教徒の職業　支那語の練習

華胥の船旅　農村の唐子　毛拔きの技術　酒錢と茶代　料金の明細表
理髮店の廣告

一三　城内巡り……二一三
興味の半減　狹巷の雜沓　本格的光景　壯嚴な城壁　城内の砲臺
雲霞裡の樓門　城門の鐵扉　劍付の番兵　飛檐の風鈴　板看板の老鋪
銀號の大厦　寺僧の落魄き　片輪の伶人　北支の城門　南支の舟游
文廟武廟參拜　緣日の風俗　針廻しと占師　寺內の拔け道　囘敎寺の讀經
喇摩寺の髑髏　官官の古手　國民中央黨部　市黨部と大學　排日宣傳文
紫壇の細工物　書蠹古本漁り　夜の紅燈街

一四　家庭訪問……二二一
家庭內の知識　訪問の時間　晚餐會の招待　手土產の詩集　宋版活字の名刺
熱茶と撚手巾　座席の取り方　無禮な訪問　答禮の歷訪　深宮の思ひ出
記念の撮影　寢室內房の訪問　簡單な臺所　書齋と後庭　冠婚喪祭
家寶の拜觀　祕密の地下室　名家の子孫　土產の進呈　歸朝後の通信

一五　官衙訪問……二二八
見世物扱ひ　今朝幾個來　面會の手續き　物數寄の困却　血迷ふ名刺
兵隊の最敬禮　客廳の安樂椅子　老大國の御大　肚を讀む肚　朗かな話題
寫眞と揮毫　御大の晚餐會　演說の太刀打　餘興の奏樂　新聞記事の恥
歸朝後の答禮

一六　年中行事……二三三
緣日の雜沓　子供賣り　正月の火神廟　瑠璃廠界隈　春の淸明節
菜畑の寺詣で　壯嚴な會式　墓陵の紙片　酒食の饗應　端午の節句
柳枝と粽子　鯉幟の起源　六月の城隍廟　暗黑面の神　無邪氣な神體
七月の盂蘭盆　上海の三元宮　喜捨の競爭　中秋の節句　月餠の吉例
玉兎の色紙　十月の雙十節　靑天白日旗　盛大な觀兵式　暮れの纏口節
灶神の權威　糧秣の供物　口止め策の飴　國恥記念日　重陽節句
年末の追懷

一七　寺院巡り……二四五
明るい氣分　建物とところも　南北支那の寺　鯉魚と梵鐘　靜寂な山門
理解されぬ點　定法大和尙　道觀の一夜　山寺の客堂　淸眞寺と豚
信者の結束　コーランの壁　アホンの修行　淨水の淸め　囘敎徒の職業
統治上の惱み　碧空の喇嘛塔　念佛と髑髏盃　佛龕の陰陽佛　尼寺の曖昧宿
斗母宮の熱茶　讀經と大木魚　黃色の經文　前科者の僧侶　灸點の戒しめ
素菜の材料　多量な點心　墓陵の形式　寺僧と蠟燭

一八　社會事業……二五五
有志の喜捨　生活力の旺盛　苦兒院の孤兒　純粹な動機　慈善の訓練

鄉土會館の美　會館の仕事　水邊の孩舍　大理石の墓道　出稼ぎの安心
凉亭の熱茶　苦兒の見世物　慰し兒の始末　監獄の自由　施粥と施藥
雲水と門彈き　苦力の傭兵　苦力の親分　共產氣分

一九　事變と對策……二六二

最大の不安　變事中の觀光　無關心主義　行程の變更　蝗軍の襲來
軍隊輸送列車　親切な兵隊　排日と子供　在留民の引揚　軟派と硬派
日本の陸戰隊　町内の義勇隊　人質と燒打ち　日の丸の國旗　變名と變裝
變裝の發覺　暗殺と强盜　勿體ない一發　夜中の雲助　スリの巧妙
對人信用　護衞兵の任務　兵隊の内幕話　郵票の身受け　子供さらひ
戸籍のない國　土左衞門と鳥　一發の銃聲　彈丸の貫通　變事の豫知
流言蜚語　便衣隊の策動　麻睡劑と鴆毒　取越苦勞の人　懸賞付の叛人
亡命客の探索　飾り物の警察　公安局の役人

二〇　芝居と寄席……二六三

劇場の案内　車上の醉顏　チーパツパー　長髯の武人　濃厚な印象
戲場の看板　内部の構造　卓上の茶菓　横向きの座席　囃し方と位置
雉の羽毛の冠　俗人の飛入り　舞臺で飮む茶　不斷着の觀客　幕なし舞臺
化粧の苦心　隈取りと衣裝　木戸錢の平等　名高い外題　寄席の打鼓
西皮と二簧　唱文書と宣講　盲人の門彈き

二一　民衆娯樂所……二六七

禮游氣分　娯樂場の特色　安直と平等　奏樂の空氣　音樂趣味の要
狸猫換太子　俗謠の鼻歌　跑馬場の人氣　富籤の幸運　逸國の競犬
ハイアライ　籠犬場の模樣　拳闘の武術　瘋狀の肉塊　護身の竹扇
輕業の起源　輕業の色々　手品の色々　賭博の色々　紅寶の賭博
盛んな麻雀　麻雀の發祥地　寧波の麻雀通　道化役者　茶番狂言
覗き繪の歌　エロの覗き　北平の天橋路　泥棒市　野天の俱樂部
上海の湖心亭　娯樂所の安全　租界の大世界　四馬路の雜沓　肩に乘る美人
屋上娯樂の宿　南京の夫子廟　馮玉祥の緊縮　秦淮の畫舫　打鼓の語り女
牛飮馬食の眞　淋病除けの扇　蘇州の名所　租界の夜櫻　春の寒山寺
虎邱の羽團扇　支那人と娯樂　華僑の遊び場　龍頭鉾

二二　公園……二七五

寺院の境内　各地の公園　自然的な發生　南支の公園　公園の立札
北支公園　石の牌樓　濃厚な意匠　平具の障子　水郷の船游
畫舫の會談　紫洞船の幽趣　白樂天の風懷

二三　紅燈街……二八四

紅燈の支那　紅燈街の道中　外觀と雰圍氣　銀具の汁　佳人との應待
料理の喰べ方　二次會の便飯　蘆湖の醉蟹　豆胡瓜の油漬　蘇州の美人

返禮の宴　麻雀と阿片　阿片の惡醉ひ　阿片窟の出入　青樓の内部
阿片の七ツ道具　染つた爪の色　阿片の魅力　ダンスホール　日本の踊子
サボイホテル　ダンサーの朝　マゼステイツク　カルトンカフエー　深夜の祕境
壯麗なローンヂ　遊戲三昧　體裁ばる日人　日本の遊廓　支那の日本藝者
四馬路の青樓　冠生園の嘉賓　杏花樓の賀筵　バア式な梅園　美酵の競爭
藝者の態度　雨の宴席　更盡一杯酒　後房の婁見　日支無差別
北平の前門外　觀音寺街の奥　北平の祕話　劇通の壮大人　職業的な佳人
二號の名妓　張宗昌と藝者　佳人の略奪　奉天の平康里　佳人の名刺
上海の藝者名　遊興の種類　遊興の費用　チツプの多寡　紅燈の世界
支那人の人生觀　觀樂の支那

二四　土産物……四一〇
話より土産物　品物の特徴　土産話の色々　日本式な漁り方　理解なき買方
蓮華の模樣　土産物の見當　呑ん氣な土人　グロな假面　撰擇の方法
山東の白菜　繁忙中の買物　卽決の要　地方の特産　時代の匂ひ
蘭の香氣　土産物の色々　北平の絨氈　蘇州の緞子　廣東の蛇酒
上海の吳服　奥地の古書　城内の麻雀　土産の喰べ物　第一は支那服

二五　送金方法……四一八
不安の導線　腹卷の銀貨　金の減る憂ひ　札の惱み　最少限度の金
銀行の信用狀　日情汽船の利用　船長室の金庫　老舗の信用　個人の關係

二六　言葉……四三一
言語不通の喧嘩　方言の混雜　發音の相違　東京の發音　言語學的見方
演說と聽衆　一致せる民情　人情の機微

二七　パーミツト……四三六
嚴重な調べ　宿任せの荷物　碼頭の荷物　シヤンペンの晉　罰金と沒收
知らぬが佛　問合せの無體　法理一點張　虹口の通關屋　拔け路
忙中の荷造り　積込みの苦心　小荷物の持込

二八　稅關……四四四
稅關の惱　船中の珍談　長崎の上陸　長崎繁榮策　神戸の上陸
非紳士的態度　稅關吏の話　帶密輸の奥樣　外套裏の時計　副領事の密輸
安東縣の稅關　苦心慘憺の〇壺　荷物船の便　軍艦輸送　檢査係の感情
麻雀と煙草　申告書の書方　十割稅の品々

三　滿洲國旅行の行程……四五五
滿洲國……四五七

滿洲へ　大連　旅順　金州　魏子窩
大連より遼陽へ　遼陽　湯崗子と千山　蘇河屯と渾河　奉天
撫順　奉天より長春へ　長春より奥地　長春(新京)と吉林
哈爾賓通遼　奉天より安東へ　安東縣　奉天より山海關へ
滿洲の名所史蹟　滿洲の風物　滿蒙に對する日本人の覺悟
滿蒙新國家の建設

四　支那旅行の行程……五三
北支那……五五
河北省……五五
天津　北平　北平の郊外
塘沽及びその附近
湯山と明の十三陵　萬里の長城　張家口
山西省……六一五
大同府　雲崗石佛寺　山西省の概觀　北平より太原へ　太原
晋祠と天龍山　山西の穴居民
山東省……六四一
濟南　濟南の近郊　泰安　泰山　曲阜附近の遺蹟
山東の田舍　徐州附近　濟南より青島へ　青島　芝罘附近
即墨と膠州　山東の農產物
河南省……六九六
徐州より河南(洛陽)へ　河南(洛陽)　河南より西安(長安)へ
陝西省……七〇九
西安(長安)
甘肅省……七一〇
甘肅省の都城　河南陝西の旅
南支那……七一三
江蘇省　浙江省……七一三
上海　上海の郊外　上海より杭州へ　杭州西湖及びその附近
湖州　莫干山　浙東の旅　杭州より寧波へ
紹興及びその附近　曹蛾、餘姚、慈谿　寧波及びその附近
浙江の旅　上海から蘇州へ　蘇州及びその近郊　常熟
太湖　鄧尉と光福　無錫　常州　宜興

目次

蜀山溪陽金壇　上海より鎭江へ　丹陽
鎭江揚州南京　江蘇省の全貌

安徽省……九三〇
長江にまたがる安徽省　安慶　蕪湖　黃山三十六峰
漁亭の里　屯溪　徽州　安徽の峽中

江西省……九七八
九江附近　九江廬山　江西省の重要性

湖北省……一〇一〇
武穴大冶赤壁　長江中流の水鄕　漢口
漢陽武昌　漢口附近　沙市及その附近　宜昌
湖北省を大觀して

湖南省……一〇五二
湖南省に入りて　洞庭湖　岳州及びその附近　衡州と湘潭　長沙
武陵(常德)

四川省……一一六
三峽の險　萬縣及びその附近　重慶　重慶より敘州まで
敘州成都及びその附近　四川省を顧みて

福建省……一二四
福州及びその附近　厦門及びその附近　福建省の概觀

廣東省……一三七
汕頭　香港　廣東及びその附近　澳門
廣東省を大觀して　南方人の活躍

廣西省……一二五〇

貴州省……一二五一

雲南省……一二五二

——(目次をはり)——

支那旅行案内

本案内書を讀む上の栞

支那には、詩文古書から想像上に美化せしめた夢のやうな天地と今一つは普通人には一寸踏み込めない不衞生な臭氣鼻を突くと云つた現實の天地との二者がある。日本の讀書人は、前者のみを知り買ひかぶれる處があり、又支那在留者は後者のみを見て愛想をつかせてゐる處があると共に何れも事實ではあるが、之を無視するわけにいかぬ。ところで自分は年來その兩者に趣味を持ち、卽かず離れずの間を行つて、支那の世相滿洲新國家の表裏に潛む事實を窺ふことにつとめてゐる。しかしどちらかと云ふと現在に主力を注ぎ、過去の美辭形容に係り合ふことは或る程度に止むるやうにし、その邊は七分三分の綯ね合ひで、どこまでも事實の紹介、見聞の叙述、實感の描寫と云ふことを任務となしてゐる。

本書は大陸旅行の案内書とは云へ、學界に、紀行に、文藝に、教育界に、又數寄者に、實業家に移住民にかなり多面的に觸れらるゝだけふれておいた。その何れの方面から讀者が之を味はるるにしても、その對象には常に想像の世界と、實在の世相との互に相隱絶、甚だしきもののあることに考を致すべきことを注意したいのである。こは著者の體驗から特にこゝに老婆心までに附言しておくのである。

一　支那を旅せんとする人に

一　支那の見方

支那の旅行で見るべきものは、山川風土の特徴、政事、軍事や經濟財政の現狀もさることながら、むしろ日本人から見た民情の相違、社會の狀態、民族生活の內容等の實際問題に觸れた卑近な方面に今後は特に、重點を置くべきものであらうと考へる。

支那の山川風土が、根本的に日本と違ふ點は、支那の國土が大陸に位置を占めてゐることで、こは支那自體が始めから國家を超越した、國らしくない國をなしてゐるといふ點と共に、日本人には先づこゝに焦點をおくべきである。こゝさへよく判つてくれるならば、凡てが容易く諒解される。大陸に漲る取り止めのない大きな氣分は、自分自ら體驗をして見ることで、自らその土を踏み、その氣候を經驗し、平野なり、河江なり、山嶽なりに親しく直面して見るならば、そこに、一種いふべからざる電氣を感ずるに至る。その感じ方はどんよりとしてゐ乍ら、而かも力强く深刻に來るので、日本人の一般には勝手がちがひ、しつくり來ない。素通りの旅行者たちには、實いふとその大陸的のおほ味が直接ピリと感じても來ない。

それが爲めに一向利害問題も起らず、唯支那大陸の山川風物を對象とするピントの合はない、ふやけたやうなおぼさつばな概念が得られると云ふに過ぎないのである。

所が人情風俗の實相や、民族生活の內容といつた方面に目を放つて見ると、その民族性の發動としての世相、土民の心持が判つきり見えて來て、埠頭に働く車夫、苦力の一言一行を見ても、そこには忽ち旅行者の胸に少なからぬ衝動が與へられる。路傍の壁に貼付された青天白日のマークや、排日の宣傳ビラなんかを見せつけられるだけでも、自分が確かに支那の國土に踏込んで來てゐるといふ強い印象を得て來る。神經質にいへば、路傍に見る宣傳ビラも、埠頭に働いてゐる不潔な苦力達も、皆これ支那大陸の世相が生み出した表現に過ぎないもので、事々物々悉く之に深い根柢基礎がまつはつてゐることがわかる。國の力が弱く、すべて個人の行動によつて腹をきめて邁進しなければ生きて行けないといふ所に、支那社會の力があり、又力ある動きがある。政府や國の力が存外これを抑制する事の出來得ない事情も自ら解かつて來る。又一つには、長年に渡る社會的な習慣として、人の事に無關心をきめ込んでゐるといふ強い態度、卽ち無頓着にして而も自己の存在を全うせずんば止まぬといふ恐ろしい堅忍不拔の力、これが南支北支を通じ、都會田舍の區別なく、一つの大きな流れとなつて、滔々として漲り動いてゐる。その恐ろしい大きな動きを、親しく視察し、出來ればその流れの根柢を體得する事が、支那游歷の大眼目となるべきであるといへる。

支那の旅に於ては、上に述べた色々の大陸的の動きを自ら味ひ、歲月のかゝるのを厭はずこれが體得を辭しないといふ打込んだ態度を持ち得ないやうな人は、その人の身分資格の如何に拘らず、折角の時間と金錢と勞力との三者を捨てゝゐるやうなものだといへる。支那旅行の重要點は、普通の旅行氣分で、たやすく味はれる如きものゝ如くやすく見くびり、よい加減にこれを視察して來ようなどといふ態度では、始めから支那旅行をする氣を起さないがよい。

支那の旅は、輕々に又無雜作にやつてのけられるものだといふ氣分では、怖らく何物をも得られないであらう。第一、汽車にしてもその時間が正確でなく、出水、土匪、機關車の故障など、種々な事情のある爲めに、プログラム通り旅程の行かない場合が多く、旅程の變更は、寧ろ支那旅行者の常態であるとさへ見られてゐる。其處に理窟では喧嘩にならない支那らしい社會相が見られるのである。凡そ支那の世相に見る事々物々は、歐米や日本で豫定される如き常識的なプログラムは立たず、その場その場の行き當りばつたりでしかもその都度々々最も有效に納め得る最大限度の收獲を得る事に努力する事が肝腎である。これは所謂文明式の旅行方法で得らるゝかといふに、さうではなく、多くは豫定と豫想してゐた事が、事毎に向ふの方から當てがはづれて來る。その打合せ通りに事務が進行しない

からといつて、氣持を惡くして見た所で、そは喧嘩にもならず、結局は旅先きの事とて泣寢入りに我慢をするの外ない。かういふ豫想だもしなかつた事態が、頻々生ずるのも支那なればこそと諦めざるを得ない。普通ならば國際觀光局の施設連絡もあつて、サーヴイスも萬々遺憾なきを期すべきであるが、支那内地では殆んどそのやうな事も期待されない。

『勝手に奥深くはいつて來たのだから、氣を惡くしたつて仕方がないぢやないか』

これが支那の人たちの持つ大抵の考へである。木で鼻くゝつたやうなこの態度の中に、支那の持つ奥深い姿があらはれてゐる。世界各國の紳士淑女は、エジプトやイタリーの觀光に次いで、一にも二にも、支那に向つての旅行熱を集めてゐる。それにも拘らず、肝腎の支那では一向に平氣なもので、その爲めに寫眞繪葉書の便利なものすら作つてくれてゐる場所はない。あつてもそれは極めて少い。さういつた點では、世界の觀光圖内にまで這入つてゐないといつてもよい位な幼稚な程度である。ステーション一つ下車したからといつて、郵便を出すポストがあるではなし、殆んど閉口させられる田舍驛が多い。しかし半面から見ると、觀光客に不自由を感ぜしめ、未だ何んら施設のないだけそれだけ、支那世相の内容に測り知れないものが祕藏せられてゐるので、そこに重きを置いて、支那社會の中に、吾人の常識から到達し得ない或るものを摑むことにしなければ、視察に行つた意味をなさないといふ事になる。

この意味に於て從來の支那の旅は、徒らに奉天から上海まで、或は漢口までへと、一遍に廣い範圍を駈け廻る事に快味を感ずるのみで、しかもその中には肝腎の社會觀察の機微を全く抜きにしてゐる。大連から南下するにもなるたけ、海路上海に出るといつたやうならくな旅程を取り時局の急迫宣傳におびへてしまひ、輪廓だけの觀光にもたらぬ如き旅行をしてそれでその暮を閉ぢる人すらも少なくないのであるが、支那の旅を思ひ立つた以上は、單に一等汽車の窓からそとを眺望したり、西洋ホテルのベツトに起臥したりしてゐる態度だけでゐるのでは本當の目標を摑み得た旅とはいへぬ。從來支那旅行の癖が單に樂な旅をして、輕く自分ぎめの常識範圍内でこれを遂行し來ようとする傾向のあつた事は、多年の結果から見て根本的に改めなくてはならぬ事だらうと信ずる。若しそれ旅行者が一通り大陸の山川風土から、人情、社會相の機微に觸れた體驗を持つてゐる人であるとするならば、最早やその要領は卒業してゐるわけであるから、始めての人の如く、一々こだわるの必要もないであらう。けれ共、始めからまだ何も解らぬ白紙狀態にある人であると、とかく表面だけの視察に終つて、折角の支那遊歷の壯圖を豪なしにし、それ程に意味深長に考へようともしないものが多いのであるからして、此處に一言を費しておく次第である。

二　日本旅行との相違

支那の旅行は、その人の遊歴の目的又は身分の上下、使命の如何又その人のたち等によつて一概にはいへないことであるが、大體支那の旅ぐらゐ日本内地のそれと樣子の違つたものはあるまい。支那旅行は歐米の旅などの體驗を持つてしては、容易ならぬ手違ひを生じ、又意外な事件を引起し勝ちである。

大體旅行は、旅先きの愉快な氣分が日一日と重つて行つて、一種呑ん氣な樂天地を味はうとする氣構へで出發するものであるが、支那の旅はその點からは多くの人に多少なりとも不安な念を與へ、愉快は愉快であるとしても、時に危險を感ぜしめたり、又不衞生の恐れを抱かしめたりするなど、半面に於て享樂の天地を憙なしにさせる心配がないでもない。この意味から最近亞米利加人は、マロロといふ看板を掲げた廣軌の長い列車を、北支那秦皇島の港に陸揚けし、これに食堂、寢憙、客室、萬端を整へ、縱横に支那鐵路の上を運轉して、南支揚子江沿岸の浦口（プカオ）の驛頭にと、その姿を現はしてゐたりしてゐるのを自分は目擊したことがある。これは元來裝鋼列車で、安全第一主義に出來てゐるし、費用お構ひなしの亞米利加の觀光團が、世界第一の亞米利加らしき豪奢な支那旅行を行つたといふ一つのレコードを作つた譯である。支那旅行に對しては、外人も特殊な方法を案出し、日本人などの及びもつかぬ乘物携帶といふ大々的出で立ちでやつて來てゐる。怖らく米人たちは無人の境を行くの意氣を持つて天馬空を驅けるの觀光慾を十二分に滿たしてゐるものであらう。しかも鋼鐵車の中に身を入れて、旅先きの安全をはかつてゐるなどは、支那の旅にしてこそ始めて見られる事である。

日本人は日本内地の旅行と同じ行き方で、和服こそ着てゐないが、支那に行つても何處迄も床の間、疊付きの日本旅館を飛び石とし、日本人の宿屋の見つからない所は、旅程を取消すといつた行き方であるし、たまに日本領事館で宿でもして呉れるといふ返電でも手にしない限りは、田舍には殆んど這入らない。凡て日本同樣に、列車内から既にホテル客室の有無、其の他の事が電報で以つて打合せでも出來るもののやうに考へたり、或は驛から觀光區域の名所々々に自動車の數憙が通つてでもゐる如く考へたり、兎に角觀光客の便宜を見越して既にそれ位の用意は出來てゐるものだらう位に考へてゐる。所が大停車場にした所で、繃藥書、地圖、身の廻りの物、何一つ備へてゐる賣店がある譯でもなし、「謹防扒竊（ジンファンパーシュ）」（スリ御用心）の掲示をしてくれてゐるのが有難い位のもので、驛の構内は全く殺風景でガランとしたものである。待合室に這入つて見た所で新聞一つ備付けてあるではなし、床にはあ

ちこちにと痰がはかれ、痰壺の一つも備へられてゐない。衛生的な施設など細かな點まで注意してゐる日本式の驛に比較して、支那のは大驛小驛の別なく、眞に大ザツパで不衛生極まるものである。のみならず片田舍の驛に行つて見ると、夜中照明一つ備へられても居らず、客はプラットホームに出て月光に浴し、荷物に腰をかけて、時間の不精確な頼りない汽車を待つてゐる。支那では線路の上にかけられた渡り廊下を「月臺」と呼んでゐるが、多くはこれに屋根もなく、幸か不幸かその當てにならぬ汽車を待ちがてら、此處に坦々たる曠野の月など眺めてゐる農夫達の旅裝を見ることが多い。

今夜の月明人盡く望む
知らず秋思誰が家にか在る
（今夜月明人盡望　不知秋思在誰家　王建）

如何にも支那らしい驛頭の眺めではないか。日本の旅行では汽車の窓から見た景色が、山あり川あり田畑あり森あり、その間に見える人家も亦繁々しく、細かく目先きが變つて寧ろ應接に遑がない。所が支那の旅は、二日走つても三日走つても窓から見える景色は、唯一望天に連なる畑のみで、山もなく民家も見ない。たまに農夫が出て一人二人耕してゐる姿を見ることがあつても、その百姓の家が一體何處あたりにあるのか、見渡す限り地平線上どこにも家らしいものを見ないといつた場面すら少

なくない。殊に北支那から南へ下る汽車が、河南の平野に差し掛ると、それこそ一望千里の畑地續きで、人煙を絶つ眺めは獨り詩人の句のみではない。日本式の光景とは全つきり違つて、實に單調そのものである。それ故日本の汽車の旅では、窓外の光景を眺めるのが旅の徒然を慰める對象物となつてゐるに反して、支那の旅では、窓外を見た所で太平洋の眞中を行く船から、渺々たる海ばらを見て行くのと餘り變りがない。だから車外よりも車内に、色々と旅の徒然を慰する方法が講ぜられる必要が起つて來るのである。道理で長い汽車の旅では、部屋のボーイ、食堂掛りなども心得たもので、食事後の食卓は、忽ち麻雀の臺となり、賭博の棋局となり、車掌も乘客も給仕も一團となつて享樂に耽つてゐる。之には一勝負を打つて、往復の汽車賃をはぢき出さうといふ腹を持つ手合もゐるのか、夜半に至つても勝負をやめない豪の者もゐる。

又旅行の範圍であるが、日本の汽車では上野の驛から越後の日本海岸に出るのに、一晝夜も掛らないで、譯なく日本の胴腹を横斷する事が出來、凡て簡單に、又手つ取早くその部分々々を片づけて行く事も出來るが、支那は北の方哈爾賓から、長春、奉天、吉林、洮南、旅順、大連等、これだけ見るのでも容易の業でない。況んや北平、天津、又青島、泰山をといつて、無闇みに地理的範圍をのみ慾張り、遂には揚子江沿岸の各都市迄をも、一度に見てしまはんとする雄圖を實現せんとする者が多い。一度出

たからには、又二度とは何時の事か解らぬといふ氣持も手傳つてゐるのであらう。けれ共、さう北海道の果てから九州の南端迄も、一度に片づけるといふ事は勞多きのみで殆んど意味をなさない。時間と金錢と勞力とを無駄にして、唯人に誇る爲めの南北の地理的範圍を羅列し得るに過ぎず、全くくたぶれ儲けと云ふの外、顧みて何んら握り得なかつたといふ告白をなすに至ることゝ思ふ。

元來大陸の旅行は、細かい所に氣をとめないにしても、あらゆる點で勝手が違ひ、世相人情なども違つてしつくり來ないといふことと、其處に四六時中不安の氣分に襲はれてゐることなど、それだけでも一通りでない苦勞を積む譯である。鞄持ちをつれて歩くにした所で、下手をすると、自分でそのお伴の身上まで二重の心配をするやうなことさへも少くない。元來が馴れない旅のことであるから、徒らに南船北馬の範圍を擴げることは、旅行の効果を最惡に導く手段にしかならず、島國的の小さく纏つた旅行地域をあるく考へを持つて大陸を測ることは、思はざるも甚しいわけになる。寧ろその範圍を小さくし、南方ならば上海を中心に蘇州・杭州に又南京・寧波、或は北方ならば北平を中心に天津・大連にといつた風に、出來るだけ慾張らない旅程にしておいて、その代り力をその地方界隈の世相・人情・民衆生活・要路の人の訪問・對話・家庭往復といつた潤ひのある旅行態度に改むべきこと、さうした方が又何よりも有効であると信ずる。其處に氣のつかない旅行者は、今後時代の要求する本當の爲めになる旅行振りを、爲し得ないわけだと思ふ。

尙日本人として最も注意すべき點は、旅行先きに於ける自分のもて方、待遇法に就ての話である。大抵の日本人は、旅先きは金とばかり考へて、萬事を金で律する旅行法をのみ考へてゐるが、本當の支那の旅はそんなものではない。支那は都市にしろ、田舍にしろ、金なくして幾らでも愉快な旅行をすることが出來る。極端に考へれば日本の旅行の十分の一の費用でも、結構面白くやつて行ける。これはその人の支那に對する知識理解の如何にもよる事であるが、支那の料理と同じやうに、費用を多くかけない場合の方が、普通並みはづれた收穫の多い旅行が出來る。畫人・小說家・僧侶といつた文墨方面の旅行者には、殊にその點が徹底的に行はれるのである。これは多くのお伴をつれたり、護衞兵をつけたりするやうな道具立てを必要としてゐないのが、主なる原因となつてゐるのである。支那の旅は、用心の爲めにと心配をして來れば、殆んど際限のない事である。そんな警戒の爲めの護衞兵としても、實をいへば喰ふ爲めについて來るのであり、又その手合をうまく操縱して行く事は、旅行者が己れの體面を維持して行く方法にもなつてゐるやうな譯であるから、かなり骨である。堂々たるお伴を連れたりする事は、日本などと違つて莫大な旅費を要するのである。一圓で濟む者を百圓もかけ、尙手土產其の他の雜費がかゝり、直接間接の旅費は測り知れぬものとなる。この點は支那何れの地方

に於ても、社會政策の實際的方面が、すぐその場で行はれて行くのであるから、それを初めからよく覺悟してゐなければならぬ。

しかし支那の旅館あたりでは、その人の幾ら乘り込んだ時の身なりが、堂々として居ようが居まいが、又美しい鞄を持込まうが持つまいが、そんな事にお構ひなく、こちらが思ふ如き等級の部屋に自ら納まればよいのであつて、その部屋の取りきめに際して、始めから室料を幾らと切り出す事が、少しも恥でないことになつてゐる。又帳場の方でもその點の諒解が出來なければ、腑に落ちる迄、上中下各種の部屋へと案内をしてもくれる。その點は、いきなり床柱の立派な座敷に、薄氣味惡く案内される日本旅館の習慣とは、全きり違つてゐる。そこに日本の旅行よりも、極めてはつきりした明るい氣分が漂つてゐる。

三　金よりも肚

支那の旅先きは、凡て用心深くやるべきで、うつかりした事は出來ない。これは世智辛い世の中である以上、いづこの里も同じことであるが、殊に勘定高い支那に於ては、金のかゝらない笑顏と、接待の言葉だけは、かなり安賣りをしてくれるけれ共、隨分つきの惡い人もあり、ものをいつたら損だといふ態度を示す者もないではない。尤も日本人の如く「人を見たら泥棒と思へ」『あれは何處の馬の骨か」といつたやうな狹い態度は持つてゐない。唯何處迄も個人的に用心深いといふ點だけは、支那の人に共通した特徴で、怖らくこれは警察や法律の背景があつても、ないのと同じ狀態の社會の裡に成長して來てゐるからであらう。自ら用心深くならざるを得ないのでもある。その邊には大に同情すべき點がないでもない。又支那の人には存外旅人に同情を寄せ、遠來の客をいたはるといふ美しい氣持が溢れてゐる。つゆ知らぬ旅人に對しても、いきなりやさしい言葉を與へ、寄つてたかつて面白く話をかけて行く。固より根の解らないうちは、話乍らもそこに用心をして、肚を明かにせず、その邊の心使ひのほどはかなり外交的であるが、そこにも多少のゆとりを置いてゐる。しかしその身なりだ

とか、持ち込む手鞄とかの善悪には一向よらない。そこが日本人の身なりばかりから行く論斷とは餘程違つてゐる。その用心深い半面に、多少でも連中の間で尊敬を拂つてゐる人の話題でも出ると、忽ち敬意を表した言葉を發するやうになる。若し又ゆかりのある某方面から得た紹介狀でもとり出して、これを示すに至れば、俄然顏色を變へて聲を低うし、先生扱ひを改めて、閣下に昇格させるやうな滑稽な場合を見る事もある。支那の人は金以外に、その人のかうした社會上の地位に重きを置き、苟しくも文字のある人には、それ相應の禮を盡すのが例である。解らず屋の前で話が通らない時には、村なり町なりの村夫子の家を訪ねて、これと同道すると、村夫子の一言には二つ返事で從ふといふやうな、社會上の秩序のある事が、自ら物語られてゐる場合もある。事情の解らない所では、金の光りより外には道がないと窮屈に思ひつめて、一にも二にも金々と縞の財布を振り翳す癖のある日本人は、支那の旅先きでは、いつも却つてそれが爲めに馬鹿を見、危險な場合に遭遇する事が多い。戒しむべきことである。

日本人は、日本の旅行と同じ筆法で、あちらで兎角人前で財布や蟇口を平氣で出すものが多いが、これは殊によろしくない。支那のやうな用心深い社會では、怖らく自分の持ち金のありたけを人前にさらけ出す如き、非常識な振舞ひをする者は見ない。近くに交番や巡査のある譯ではなく、自分の身の廻りは自分以外に保證する者がないので、常に自衞策をとつてゐる人々の事であるから、ポケツトの中の何處に幾らの用意があるかは、全く秘してゐる。從つて平素ポケツトを財布と見立てて、嚢中に自分で手を入れ、暗中模索で所用の金額をつまみ出すのである。日本人の如くわざ〳〵蟇口を人の前で取出し、これ見よがしに札ビラをその中から取り出す如きは、嚢中を人に看破された事になるので、それが爲め後をつけられたり、卽坐に奪取せられたり、豫期せざる危險を來たすことになるのである。車夫に車賃を拂ふにしても、支那の人ならば、既に車を下りようとする前にきめただけの銅錢を掌中に用意して握り、更に銅幣の二三枚を酒錢として別に用意し、車夫から泣事でもいはれると、その二三枚を與へてさつさと行く。然るをわざ〳〵車から下りてポケツトから蟇口を取り出し、窓巢ねらひの車夫の目の前で蟇口を開く如き人種は、日本人の外にはない。そこ〳〵財布を見せる事は少しも自慢にならぬ。寧ろ危險を呼ぶ方法を、自ら氣づかずして講じてゐるやうな譯である。

總體に日本人の美點は、とかく旅行先きに於ける金ばなれのよい事である。之を無意識のうちに現はし、電車賃であらうと、料理屋の拂ひであらうと、釣錢を一々調べて受取る者が殆んど居ない。そんな事をするのは日本人としての恥辱であり、男子らしくないといふ長年に亙る訓練から來てゐるものらしい。從つて何んらの見さかひもなく、又その程度の如何をも問はず、美しい心からこれを惠み

與へんとする風がある。これを受取る者が日本人の場合には、恐縮の態度をとり、腰を低くして「折角だから」といひ乍ら戴き納めるが、支那の場合はこれと全然反對で、見さかひもなくよこす人間だから更に倍額要求しても出すだらうと「外人價倍」の俗語をそのまゝに巧みな言葉を並べてうるさくねだり、果ては聲を大にして周圍の人に向つて宣傳もする。そして取れゝば德だ、取れなくとも元々だといふ練れた外交手腕を發揮する。こんな場合に日本人は正しい道理で說きふせる事よりも人前が氣恥しいといふ方に驅られて結局體裁まけがしてせしめられてしまふ。これは支那旅行中に於ける多くの日本人が、日本同樣に氣前のよい事を立前にしてゐる爲めに受ける損失であつて、こはたしかに日本人の一大缺點が暴露されたわけである。

旅先きといへば、金の力をのみ考へるが、これは事情に通じてゐての事ならばその金も生きる。けれ共、事情を知らず又その裏をかゝれてゐる事にも氣がつかず、その上財布を見せたり、太つ腹らしき態度を見せてみたりした所で、それこそ少しの誇りにもならない。却つて車夫風情からなめられ、身の危險を誘引するのみである。日本人はかゝる虛構からは斷然醒めなければならぬ。

安徽の或る田舍の宿で體驗した事だが、何んの氣なしに茶代だといつて番頭に金を與へた所が、宿の番頭に喰つてかゝられた事があつた。

『私の旅館は、請求すべきものを請求して戴いてゐます。それ以上こんなお金を戴くといふ譯がありません。惠んで貰はなければ立つて行けない旅館とは違ひます。』

開き直つてかやうにいはれた時に、自分も『なるほど日本式だつたなあ』と思つたことである。その邊の人情の機微は、營業者の間に於ても凄乎として閃めいてゐるものがある。兎角日本から行つた人は金を無駄使ひして、金のみの觀察旅行といつた感じが鼻につき、臭い所が拔けない。支那では山寺なり、會館なり、知人の邸宅なり、比較的費用がかゝらないで、而も實生活の眞相に觸れた旅行振りが幾らでも體驗し得られ、それにポケツトは兎も角、たとひ言葉が通じないにしても、筆談でも行かれる。又筆が用をなさない場合でも、態度信仰の閃めきで以つて行つても相通ずる事がある。何んぞ必ずしも金錢のみといはんやである。その邊のゆとりのある美しい度量の大きい所は、見てやるべきである。日本人たるものはよく修養をつみ、その邊の腹で以つて、豫め交涉を開くなり、又いきなり直接談判に入るなり、如何やうともやり得るのである。問題は金よりも氣分、利益よりも腹で行く事が、本當の支那の旅の神髓でなくてはならぬ。支那は客堂・客室・寢臺・食卓・食料品等、何れの點から見ても、飛び入りの客と會食したり、突然の來客を迎へて泊らせるといつた社交的な要素が、十二分に發達してゐる。その邊の實際の消息を看破し、その氣分に乘じてまゐる事が、支那の旅に最も必

要な要道で又これが何よりの秘訣でもある。要するに金を生かして旅行するか、さもなくば金よりも氣分といつた立前で旅の腹をきめてかゝるか、これが支那旅行に對する最も大切な問題である。その一々に就ては詳細な心得の說明を要するわけであるけれ共、こゝには單にその要領の點のみを書きとゞめて置くのである。」

四　旅行の目當

支那へ出かけるのに、その遊歷の目當を持たない者は怖らくあるまい。その目標を兎も角も立てゝ出發するのが、普通の日本式の旅行振りである。所が實際は、幾ら目標を立てゝ行つても、支那といふところはその地に上陸して埠頭の光景や街の樣子に接すると、折角腹に描いてゐた計畫も思ふやうに着手が出來ず、目標そのものもどうやら大陸化して、摑むつもりでゐた氣分もいつしかふやけてしまふ。殊に時局の變化などの折は、成り行きに任せ、自ら大陸的な旅行振りを取らざるを得なくなる。『そんな馬鹿な事があるものか』と日本に殘つてゐる人は氣のきいた批評を加へたりするが、それは大陸氣分を解しない人の見解である。正直な所堅く胸に描いてゐた計畫が、がつちりとした順序手續きの通り實現される事は、たとへあつたにしてもそれは寧ろ支那では例外の方である。多くは計畫手順が違つて、思ふに任せないことの方が多い。樽の箍がゆるんだ如き世相を有する所であるから、自分ぎめの仕事が着々効果を上げて行くなどといふ事は、期待されない。かゝる結果を見ると、それに對して努力が足りないとか、睨みがきかないとかと、惡評を下す者もあるが、その邊はさう簡單に論斷

の出來るものではない。

支那の事は單なる觀光・仕事の進行上の事ばかりでなく、萬事がかつちり豫定通り行かないのを以つて原則としてゐる。國情が又かやうな結果を導くやうに出來てゐる。いくら地團駄を踏んだり、拳骨を驅ざして見た所で、何んら出來た事はない。その目標を掲げてゐるために、却つて誤解を招いたり、妨害を受けたり、つまらない金を取られたり、ろくでもない事のみが續出して來る。寧ろ始めからその目當を立てるやうな行き方でなく、その事は腹の中に深く藏してゐて、外見に現はす手順は、寧ろ無計畫の如くに行當りばつたり式にやつて行くがよいくらゐである。飄然として人の目につかないやう、軟かくして風に當らないやう、何處迄も周圍の環境と時の推移に着目して、暗々裡にその進むべき道を進むべきである。實は計畫があり、目標が確立してゐて、考へがない所ではないにしてもそれは露骨に現はさないやうにするのが、支那の土を踏んでゐる人々の一擧一動、一言一句の裏を流るゝ本當の動き方である。

此處に述べたことは、必ずしも旅行方法の上にのみ適用さるべきものとはきまらない。この行き方は苟くも前後左右に支那の民衆をひかへてゐる中に居て、身を處する上の大切な秘訣である。又腹の底をこの邊に落着けてゐる時は、よしんば旅行の目當がはづれたとしても、豫定の上の事だと諦らめられもして、人にも自分にも迷惑を來たさない。かつきりと列車のつく時間など電報まで打つて行き先きの支店長に通知してあつてさへも、隨分延着の事があり、土匪襲來の爲めに半日以上も遲くつくやうな事もある。

支那の旅は、始めからもり澤山のプログラムを立てゝ見た所で、大和巡りや京巡りのやうに、すつかり片付けて首尾よくその目的を達したといふ如き事は、仲々出來るものではない。始めから離しい目標を並べて見た所で、文字通りの希望にしか過ぎないのであるから、大體の目當は立てるのもよいが、決して細かい事を慾張つて計畫するものではない。その思ふやうに出來ない所に、支那世相の眞面目が物語られてゐるのであるから、たとひ出發前のある用向、目標が實現出來なかつたとしても、その妨げられた事情、その裏面に動く世相の機微が諒解せられたならば、その方が却つて大きな收獲を掴み得たものとして、滿足すべきである。これは鋭い小さな獲物を手にするよりも、柔かくて大きた獲物を得たものだとも評すべきであつて、日本人の支那旅行の目標は、この邊に就て根本的にその考へ方を改めなければならぬのである。

日本流の旅の概念からすると、日本人は何んといふ事なしに漫然と出かける事を好まない。一々几帳面な細かい目的手順を列記して、それを洩さず見て來なければといつた、窮屈極まる考へのもとに

思ひつかれる場合が多い。所謂旅費規定なるものの如き全くそれで出來てゐる。所が事實支那大陸を踏んで見ると、さういふ枡で量つたやうな細かい勘き方は出來ない。第一、車に乘らうと、博物館に這入らうと、買物に行かうと、何れの場合にしても目に見えぬ費用と、時間と、それに就ての手配が必要となつて、その點に融通がきくやうに出來てゐなければ動けない。理窟は簡單であるけれ共、少しも理窟通りに行かない。その局面を打解し、腹の中の計畫を實現して行く爲めには、自ら周圍をよくよく見乍ら餘程うまく切開いて行かねばならぬ。かやうな事情であるから旅程をきめる場合などには必ず先づ始めに終點の處まで行つてしまふことにしないで、途中の道草など喰ひ、彼處此處と巡歴に浮身をやつしてのみゐたりすると、殆んど目的地の半分にも達し得られなくなり豫定の日限が來てしまふ。それ故に目的地を一旦立てゝ、それを是非とも達しようといふのであるならば、何はともあれ道草を喰ふ慾望は凡て後廻しとし、一路終局の地點へ飛んで行くといふ事が、最も肝胥な方法である。萬難を排してそれに突進しなかつたならばあの廣い大陸の事だから何事が勃發するか判らず、遂に實現が覺束無くなる。それであつてすらも途中とかく故障が起り勝ちで、旅行の妨げを受ける事が多いのである。

かやうなわけであるから支那の旅は目標の確立に就て餘程腹をきめてかゝらなければ、容易の事で豫定通り出來るものでない。その目標の遂行に對する努力は十二分にするとしても、他の半面には又これらの豫定が全部妨害を受けて中途坐折し、或は全部毫なしにされることがあるかも知れぬといふ、最惡の場合を豫想し覺悟して居らなくてはならぬ。これが支那の支那たる所であつて、歐米や日本の旅と根本的に異つてゐる點である。その邊の用意なくして支那の旅を思ひつく時には、當人は固より留守宅に於ても手違ひを生じ、失望をする事が多い。

尙一つの支那城内の街に學術視察或は商用其の他種々の用向によつて入込んで行くといふ風な些事があるにしても、出來ればよし、强いて無理をしてまでその目的を摑むといふ風にしない方が安全である。三回にでも五回にでもなし崩しに試みてゐるうちには、いつか局面が轉回して、今度はさまで努力しないでも自ら提供されて來るもので、これは變なことであるが事實誰人も支那で體驗してゐる話である。每度無駄骨ばかり折つてゐて物にならないやうに考へられてゐるときでも、そのやうな場合に於てすらも、尙その目標以外の副産物、しかも容易に求めてゐて得られなかつたものを、不用意の間に收獲する事が出來るといふやうなこともあるのであるから、その點に充分意を注ぐべきである。それでこそ豫期以上の埋合せも出來るのである。旅行はビジネスではない。元來が漫遊である。その氣分を呑み込まずして支那の旅を思ふことは、宛ら畫餅に等しいことになる。ゆつくりと多方面

に趣味をもち、友をつくり、あらゆる方面に心眼を配るやうに努力することによつて、始めて本當の大陸的な收獲が納められるのである。

支那は老大國であるから、普通の旅行目的以外に、事務を離れた古い昔の名所を訪ねたり、又時代の立つた珍らしい品物を見たり、出來ればこれを記念に手に入れたり、或は友人古老の人に之を土産にしたり等、多少趣味的方面に心を配る事が、支那大陸を一層面白い天地とさせる。趣味の天地を持ち得ない旅行者は折角の支那の旅の價値を半減し、寶の山に入り乍ら手を空うして歸つて來ることになる。而かもさうした者が多い。よしんば心にその趣味は藏してゐても、主人上司の眼を憚り、餘計の氣兼ねをしたりして、わざとその心の赴くが儘に行動し得ない者が居たり、或は社長上司の者が、社員部下に對してその美しい趣味を發揮せんとするのを喜ばず、官僚式のみのつめたい態度でこれを見たりなど、支那の興味ある天地を味はせないやうにする者が少くない。これは頗る遺憾な事である。折角の旅の目當を單なるビジネス一點張りに終始せしめず、その弊害の伴はない程度に於て、よろしく支那に對する興味を養はしめ、又その氣分を奬勵する丈のゆとりを持たれたいものだと思ふ。平素その邊の心掛けが日本の朝野に滿ちみちてゐる時は、支那の有識者との間に暖かい潤ひのある情味も流れて來る。夫々取引關係や外交上の事も又趣味の交りと同じく圓滑に行き、兩國の間に氣まづい事の生ずることを、せき止める事にもなる。日常國民と國民との意志の疏通を缺ぐばかりに、一度排日の火の手があがると、燒野原の如くに惡風が煽き立てられ、手の下しようもなくなる。この點から見て支那の旅は、その目標の一つに、個人の家庭を訪ね、或は名士と談笑し、その情味を重ねて睦めて置く事が何よりも大切な事である。趣味の交りが年一年と濃厚となれば、磁石に引付けらるゝ如く支那の旅に頻々と出かける事にもなり、これが旅行以上のしつくりした氣持を養はせる結果ともなる。

されば支那の旅の目標は、單なる自分本位の目當から更に一歩を進めて、兩國民の握手情交の程度にまで進める事が、一大使命にもなり、意味深長な國交上の鍵ともなる譯である。この點は若い青年であらうと老人達だらうと、又商人學生であらうと動め人であらうと、區別なく一樣に必要な事である。その間に、文人氣分を味ひ得ない人は、それだけ支那の旅の上に利益を自ら放棄してゐる者だといつてもよい。これが歐米や日本の旅行の上に得られない點で、特に支那に於てのみ多分に得らる利益であると見ても差支へないのである。

五　一人旅と團體旅行

昔から旅は道連れ世は情けといはれてゐるが、支那の旅行には殊にその感が深い。言葉も出來ず、事情にも通ぜず、大きな聲を耳にしただけでも、すぐ怒鳴られたのでないかとびく〳〵する人に取つては、何よりも先づこのよい道連れがほしい。四面楚歌の聲といつた淋しさは、異境の地に於て殊にその感を深くする。事實支那を旅するのに單獨でスタートを切る人は少い。けれ共、眞に自分の都合通り意の向く儘に漫遊をし、思ふ存分の旅心地を發揮しようとするには、連れが一人あつても、氣兼ねやら妥協やら、結局思ふに任せないことになる、何といつたつて自分で自分の身を思ふまゝ處理するくらゐ自由な事はない。天上天下唯我獨尊で、旅から旅への旅烏をきめ込むのは、何はさて置き一人に限るのである。

尤も支那の一人旅は、その地方地方の方言に大體通じ、土民の氣持、風習、迷信などもよく知り、土地の衣食住に自ら溶け込むだけの度胸と體驗とがなければ出來ない事である。その點に腹が出來てゐれば、何を苦しんで道連れなどを求める必要があらう。行つた先々の村の人町の人、凡てこれ我が仲間となし、偶然に往來街道で連れになつた人をも侶伴として、談笑し乍ら行けばよい。老農可なり、青年可なり、漁翁又可なりである。眞に支那の旅を味はんには芭蕉が陸奥から北陸を巡歴し、橘南溪が名所舊蹟の道中巡りを試みた筆法で、水村山廓を歴遊する事が、眞の奥深い支那氣分を體驗し得る方法である。そこには難しい目的だの理窟だのを掲げないで萬事成り行きに任せ、自然の漫遊につれて、隨所々々に要領よく仕事をするといつた遣り方で澤山である。その方が大局から見て、支那世相に適應した無理のない材料を蒐集し得られる方法である。

かやうな一人旅を續けてゐる場合には、一向に危險を感ずるなどといふことはなく、無論護身用の武器の必要もなく、平々凡々、無雜作な態度のうちに要領だけは摑み得られるのである。始めから魚形水雷の如く、又隼の如く突入して見た所で、其處には自ら無理を生じ、周圍の環境にも適應せず、結局蘇蜂とらずの失敗に終るだけである。一人旅で行方不明になつたり、或は慘殺されたりしてゐるのは、多くこの間の要領を心得てゐないために生ずる自ら招いた結果としか見えない。幾ら支那の奥地だからといつて、鬼の如き人間のみの集つてゐる所ではない。寧ろ春風駘蕩の朗かな氣分が、水村山廓の天地を蔽ふてゐる。有名な陶淵明の「歸去來の辭」は大方の日本人にも讀まれてゐることであらう。

かへりなんいざ
田園まさにあれんとす
なんぞ歸らさる
……
富貴はわが願ひにあらず
帝鄉は期すべからず
良辰を懷うして以てひとり往き
或は杖をたてゝ耘耔す
東皐に登りて以て舒に嘯き
清流に臨みて詩を賦す
聊か化に乘じて以て盡くるに歸せん
夫の天命を樂しんでなんぞ疑はん

（歸去來兮田園將蕪胡不歸……富貴非吾願帝鄉不可期懷良辰以孤往或植杖而耘耔登東皐以舒嘯臨清流而賦詩聊乘化以歸盡樂夫天命復奚疑）

かゝる詩趣の中に、身をもつて溶け入つてゐる田樵の生活には、全く想像外のゆとりと腹がある。團體の旅行となると、一人のやうに容易く片田舍の奥地に這入つたり、又城内に於ても氣輕るに行動を取ることが出來なくなる。無論團體として動いた方が、役所其の他工場の視察などに便宜を得ることもないではないが、事情の解らぬ團員が、場所柄も辨へず地圖を出して印をつけたり、又手帳を出してこそ〳〵書込んだりなどすることがあるのであるが、それが意外な方面に響いて、どうかすると、汽車が驛に着くなり係員に呼び止められ、調べられたりする事がある。工場では又秘密でも書き記るされたが如き色眼鏡で見られ、以後一切工場を見せないなどといふ結果になつたりすることがある。歐米や日本で見る團體旅行の方式では、支那はこなされない。支那を視察する時の方法はそこに自ら獨特のものがある。宮殿や孔子廟などの見物拜見は格別で、その團體であるがために入場料が根切られるといふこともある。こんな時談判が破裂したからとて悲觀することはない。益々團體の力を利用して强硬な態度をとり、まさか違へば『そんなことなら拜觀を見合せる』と憤然と引返へすことも出來る。すると、屹度二三町も行かないうちに『今日は特別に負けておきますから』と向ふから追ひかけて來るにきまつてゐる。この滑稽な門番振りにも、支那の或るものが物語られてゐる譯である。

尙團體旅行によくあることであるが、或る工場を參觀してゐる場合、係りの人が長々と說明してゐ

るのに對して、根掘り葉掘り熱心に質問してゐる人がある。ところがその中には欠伸をしながら早くこの場を去りたいといふ樣子を見せて、もぢ〳〵してゐる人があつたり、又カメラを持つてゐるために始終後れ勝ちで、肝腎な要所の說明も聞かないといふ人が出來たり、仲々足並みの揃はないものである。又中には、折角思ひこがれてゐた翡翠の帶止め一つを買ふことすらも出來なかつたとか、のみならず、折角貰つて來た紹介狀が一つも役立てないうちに、そこ〳〵で出發しなければならぬやうになつたとか、折角愉快な漫遊を夢見ながら、事志と違ひ、頗る不足さうな面持ちで止むなく團體に合流してゐるといふやうなものも多いやうである。

元來が團體として出發した以上は、覺悟の上の事とはいへ、つい自己の都合を考へたり、睡眠時間を盜んでまで別の柔かい方面へ出かけて行つたり、かなり出來得べからざる無理をする者が多い。費用に於て、時間に於て、平素充分ゆとりのある人が、團體に應募したばかりに、出發後拔き差しならなくなる實例は屢々見る所である。かういつた手合ひは最後の都城で團體から別れ、後に殘つて自分勝手な行動を取るといふ方法を選んだがよい。又特殊の用向を帶びてゐる團員は、これ亦團體から離れて滯在を延ばし、ゆつくりと私用をはたすがよい。始めから團體旅行は、個人々々の自由を犧牲にさせる仕組になつてゐるのであるから、萬々その點を承知して居るべきである。しかし群衆心理からその催しを聞いた時に、多少の犧牲を拂つてもこれに應募する事は後日の思ひ出でになり、又皮切りにもなる。それが手始めに勢を得て、毎年一二回は自分で往復が出來るといふ自信も出來、始めは億劫な氣持であつたのが、團體の催しによつて打破られる事は、單なる費用や時間の問題よりも尊い事である。たとへ個人的な自由はしばられるにしても、未知の世界に對する不安だとか、自分で畫策する煩瑣とかいふ事なしに、唯ついて行けば輪廓だけは解るといふ最小限度の獲物はあるにきまつてゐる。殊に團員中に賢者が居たり、夫々の專門家が居たり、普通見られない所を官邊の便宜からたやすく拜觀が出來たりなどする外、共に遊歷した仲間同士が支那の思ひ出を中心に長く交りも出來、親しみの情を繰返し得られる點もあつて、此邊は一人旅の到底及びもつかぬ特徵を持つてゐる。又歸朝の際稅關などの手續き諸掛りも、數でこなされる點から著しく輕減せられる。唯團體行動となると、行つた先々の支那側の朝野の人々が、相當敬意を表してもてなして呉れるから、それに對する禮を失しないだけの心掛けが必要である。團長になる者の責任は重且つ大で、團員の面々もあるまじき行爲などがあつてはならぬ。國の恥辱となるばかりでなく、身を輕蔑されることにもなり。ひいては前にも述べたやうに兩國民間の感情の問題にも觸れる譯である。某氏の催しにかゝる千二百人ばかりの未曾有の觀光團が、上海の某所で過半甚だ香ばしからぬ行爲を敢てしたので、物笑ひの種となつてゐる實

話さへある。支那の諸名士から、悪意のあまり自分達に耳打ちしてくれてゐる實例は、決して少くない。支那側を輕く見て犯した行爲ではなく、ほんの出來心からの徒事であつたであらうが、これなどは日本人の支那觀光團に一大汚點を殘したものといへるであらう。

其他團體旅行としては、一人旅のやうに相手方と親しみの情を起させる程の時間も餘裕もなく、その機會を作る事も出來ず、凡てがうは面に偏し、うは滑りのしたお祭騒ぎになる傾きがある。眞實な支那の姿を味はうといふ目標からは、殆んど價値のない場合が多い。殊に滿洲旅行の場合は、滿鐵の施設を見る目的ならば兎も角、滿洲に於ける支那人の衣食住其他の生活振りを見、支那生活の力强い所を見る上からは、餘りこれ迄効果をあげて居らない。かういつた點は同じ滿洲の旅にしても、寧ろ一人旅の方が思ふに任せる譯であらうと思ふ。

六　都會と田舍

支那の土地を踏んだ事のない人には、支那の都會と田舍といつて見た所で、本當の所が解らない。支那の都會は縣廳の所在地である以上、稀には例外もあるが、大體市民の生命財産を保護するために、その市民住宅の周圍を方形又は圓形に取圍んだ城壁を有してゐる。その城壁には、東西南北に夫々堅固な鐵扉を有する城門をつくり、その上に牛天高く望樓を築きあげ、一望千里の外敵を見張るやうになつてゐる。それ故この城壁を具備する事が、支那の都會の第一條件となつてゐる。若し都會が山丘に延びて居る場合には、その山丘の上までこの城壁を高く築き、全く地勢の如何に依らないのである。かやうにして都會と城壁とが、切るに切られない單一の形式を組織してゐるものであるから、昔から支那ではこれを都城といつてゐる。日本の城は、大阪城、姫路城、名古屋城といつた如く、都會の中心に山城として又地城として築かれ、周圍の市民はその城下にあつてこれを支持し護つてゐるといつた形であるが、支那のそれはあべこべで、全くその趣きを異にしてゐる。古來支那の都城は、又一つの國をなして、都城即ち一國の意味がこれに含まれてゐる。だからその都が落城する時は、そ

の國は滅亡したことになるのである。

支那の田舎は、都城を一歩外に出れば城外即ち田舎であつて、城壁を境に全く二分されてゐる譯である。城内は紳士淑女が、輕車肥馬によつて紫陌を去來してゐるが、城門一つ外に出た郊外は、忽ち田舎の景色で、そこに住む人達の生命財産を守る何んらの設備も施されず、都城内の趣きとは全然反對で、無限の曠野や際涯のない水鄉を包有し、殆んど目を遮るものがないといつた天地を有してゐる。限られた城壁の中即ち都城には、往來の道幅も狹く、出來得る限り多くの住宅區域を占めるやう仕組まれ、橋の上の兩側にさへ店舗を張つてゐる所謂屋橋まで設けられてゐる位で、城内生活の窮屈さは豫想以上なものがあり、住民は非常な密度でぎつしりとこれに詰め込まれてゐる。後世止むなくこれが外に溢れて、城外の堀の附近邊りに新市街を設定し、これに住宅地又は店舗を求めてゐるが、機會ある毎に城内に居を卜せんとしてゐる者が多い。

田舎の奥地に這入つて見ると、最早都城の生活を斷念した農家小店が、隨所々々に交通の便のよい地を選んで砦を作り、村を形づくり、悠久な生活法を立て、所々に土豪の大建築が、楊柳や竹林に取圍まれて、その高屋を聳えかせてゐる光景を眺める。又山麓の森の邊りには、昔乍らの古寺が苔蒸す趣きを湛へて、南無阿彌陀佛の墨書も鮮かに高塔のもとに指顧せられたり、或は江南の水村には運河の水路が四通八達で地方々々に特色のある小舟が、村人の生活に相應しく動いてゐたりする。又巨大な江流には、幾十萬といふ多數の水上生活を營む船民が、水鄉を天地として悠久な生活を營み、江南の彌生の菜種畑は、新綠の桑田や喚き亂れる單花とその色を競ひ、全く千紫萬紅總てこれ春といつた詩の句を其の儘に、長閑な氣分を漂はせてゐる。黄鳥は囀り、白帆は風をはらみ、田夫は野に耕すといつた平和な情緒が、何處の田園にも充ち溢れてゐる。一方に幾ら共産氣分が漂つたり、南京政府が彈壓を加へて見たりした所で、要するに討伐の兵隊も亦田園に見る昔ながらの景色の動きとしか見えず、そのゆとりのある風趣の中に溶けこんでゐる。一部野心家のための戰爭が、時には止み時には醋に、動いたり靜まつたりしてゐるけれ共、田園生活の悠久な所からこれを見れば、年中行事の一つの現れに過ぎないので、田夫野人も案外長閑に傍觀してゐるくらゐのものである。

江南浙東の田舎の田の中に、次ぎのやうな立札が立つてゐるのを見た事がある。

治螟根本方法

一、齊泥割稻

二、掘毀稻根

三、冬耕灌水

四、不種糯稻

縣長　朱懋祺題

都會のめまぐろしさに引替へて、一讀田園の永遠性が暗示されてゐる。倘山嶽方面に於ける情勢は王維の詩に代言して貰はう。

獨坐す、幽篁のうち
彈琴また長嘯
深林人知らず
明月來つて相照らす

篁館　王維

（獨坐幽篁裏　彈琴復長嘯　深林人不知　明月來相照）

以上の說明は甚だ簡單であるけれ共、日本人の旅行氣分に映ずる支那の都鄙が、如何に日本のそれと勝手の違つてゐるかは諒解が行くことと思ふ。日本の旅に馴れてゐる目で、支那街を散步すれば、街幅は狹く、兩壁は高く、何んとなく薄暗い感じがして、殊にたそがれ時にもなれば暮雲棚引き、往來の景色も一層薄暗くなつて、心弱き人は何んだか道に我れを擁する惡魔でもあるかのやうに戰き、

魔の國を彷徨ふてゐるかの如き感じを抱く者が多い。辻に街燈の光りを見る所も少く、我が宿の表看板も薄暗い明りの下にほのかに讀まれるといつた光景である。支那街の目拔きを通り過ぎれば、後は大抵この程度の夜景を見るのが普通で、夜半に聞く夜廻りの竹の響き、遠吠えの犬の聲も、そゞろに異國情緒を唆るものが多い。此處に趣味を持ち得ない旅人は、一夜の宿を過ごすだけでも淋しくてたまらないであらう。必ずしも明るいことを要求してゐない支那街の夜は、紅燈街は別にして、大體暗い氣分に襲はれるのが普通である。その魔に壓せられるやうな氣分を逆に利用して、この暗い所にこそ興味があり、こゝに支那街の無限のグロやエロの秘密が埋藏されてゐるのだといふ氣持になり得た人は、それこそ我が天下とばかりに活躍し、寧ろ夜の短きを嘆ずるくらゐのものである。この程度にまで漕ぎつけなければ、一人前の支那の旅は出來ない。

所が田舍の旅には、また自ら都會と違つたものがある。大自然そのもの、中に溶け入つた生活をしてゐるのであるから、老農にしろ漁翁にしろ、凡てこれ我が友といつたなごやかな氣持で、心から握手するといふ腹を持つことが肝腎である。勿論都城に於てもそれは必要であるけれ共、田舍には我れを守る城壁がある譯ではなし、特にそれが必要で、さうしてこそ始めて恐怖心もなくなり、都城よりも却つて心を許してそれらの連中と共に熱茶を啜りつゝ談笑することも平氣になれ、寧ろ偉大なる人

間性に、敬虔の念をさへ覺えさせらるゝのである。兎角支那の田舍といへば、土匪や馬賊の横行する所であると思ひこんでゐる者が多いが、實際は何れの田園にも平和な氣分が漲り、農夫漁樵達は打寛ろいだ生活に耽り、生涯をこれに打込んでゐるのであるから、求めて危險を感じたり、心配をしないでも、城内生活より寧ろ呑氣でよいのである。兎角日本人は、警察權がなければ都會も田舍も安心して生活出來ないと考へてゐるが、支那のやうな大平野に住んでゐる者は、始めから無警察、昔から法律なしに自然の儘の田園生活を樂しみ、

田園自ら親しむべし

魚鳥亦相樂しむ

といつた氣分を、凡ての人々が腹に描いてゐる。たとひ土匪にした所が、その心の中のどん底には、この田園氣分を十二分に有してゐるのである。その眼で汽車の中から田園の景色を眺むると、水邊の水牛の歩き振りにも、墓陵に戯れる白羊の群にも、又運河に啄む白鳥の群にも、其處に得もいはれぬ悠久な平和氣分が感ぜられる。不幸にして日本の新聞紙上の報導は、餘りに戰爭戰亂の事と、殺伐な殘忍記事に偏し過ぎて、この和平漲る田舍の實況は、全然雲に覆はれてゐるうらみがある。支那旅行をせんとする人達も、出かける前既に頭からそれと思ひ誤つてゐる。田舍は恐しい所、泥棒の國ときめてかゝつてゐる事が、誠に大きな誤りで、又非常に遺憾とする事實である。若し眞に支那の旅を誤りなく遂げようと考へるならば、都會地を素通りしないことは固より、田舍の實相にも觸れるやう、豫め計畫を立てる事が大切である。眞の田舍を見てこそ、始めて一人前の支那旅行が出來たものといへる。

七　旅裝と旅具

支那の旅は前項でも述べた如く、都城を歩くと、田舎を巡ぐるとに論なく、目立たない見成りをする事が、旅行の効果を最も大ならしめる譯である。

目立たない見成りをさへして居れば、第一金がかゝらず、第二に人から特別な目をつけられることがなく、第三に自分の氣持がなだらかで、呑氣にやつて行くことが出來る。金をかけない支那旅行は支那風の旅行方法として最も上乘なものであつて、萬事これで押通すならば、全く間違ひは起らない。若し背廣に外套、中折帽の旅裝などとる場合は、自らハイカラな態度をとらざるを得なくなり、勢ひ持てなしが上流階級をもつて待遇せられ、お安くつかない事になつてしまふ。カラー、カフスにした所で、田舎の町には西洋洗濯をやつてくれる店などなく、アイロンなど無論ない。大都會にした所で、洋式の洗濯屋などは數へる程しかない。

支那旅行の祕訣は、その地方になじまない變つた旅裝を、なるべく避ける事にある。幾ら費用をお構ひなしとした所で、事實その地方で用のたせない場合が起り、却つて困ることが多い。萬年筆一つに就て考へて見ても、上海、南京ならば兎も角、田舎に這入つて具合が惡くなると、修繕は愚かそれを見たことのある人すら殆んどない。懷中電氣とても亦然りである。身なりの上は出來得る限り、その地方色を採り入れ、その周圍と同じ式に自ら順應し、その保護色を何處迄も利用して、自分の目的を目立たないやうに達する事が肝腎である。

目立たない旅裝とは、洋服又は和服をぬいで、支那服に着替へる事である。たとへ一葉は下手でも全然話が出來なくても、更に頓着はない。上陸と同時に身なりを保護色に替へ、汽車なり、汽船なり或は街の散歩なりをするがよい。一旦その着心地の味を占めると、最早窮屈なカラー、カフスは突張つてきてぎごちなく、ものの半月一月と立たぬうちに、人にも勸めたくなる。のみならず支那服を着たことによつて、支那の大陸氣分が理解され、これを取入れ、これを消化するといふことに、急速度な効果を持ち來たしてくる。これは理窟ではなく實際上の話で、誰れしも西洋料理屋、或は支那料理屋に行くと、夫々その環境に順應しその氣分に影響を受くることになる。その上、今まで理解し得なかつた事實までに、自ら合點が行くやうになり、支那料理を取つたり、支那家庭を訪問したり、又會合の席に顏を出したりしてゐると、理窟を超越した理解が自然について來て、萬事に悟りがよくなる。相手方も亦好感をもつて接してくれ、お互ひの間に無言のうちに既に理解の第一歩が出來る事に

なる。この點は、兎角ひがんで考へたり、言葉もろくすつほ出來ない癖に、身成りばかり飾つてゐるのは、却つて反感を招くばかりである。勝手の判らぬ處だけに何かにつけ取越苦勞をするは無理のないことではあるが、こは思はざるもまた甚しいことである。

凡て支那の旅に物事を理解して行かうとするには、先づそのもの境遇、雰圍氣を知る事が必要であることは、今更いふ迄もない。支那大陸を理解せんとする者は、なにはさておき、環境に順應し、その服裝を支那服に改めてかゝることが、最も大切なことである。服裝から來る氣分雰圍氣は、流石に爭へぬもので、その形から受ける氣分態度には、評價の出來ない大きなものがある。

北支那にあつては普通夏は青衣（チンイ）を、南支那にあつては夏布（シャプ）をつける。青衣とは藍色の氣流し姿の上衣で、木綿仕立のもの、夏布は白の麻のさらしたもので、北方の青衣に較べて、瀟洒たる仕立方に出來、洗濯もよくきくので、夏の旅行に殊にお誂へ向きである。

冬は北支那では、羊毛皮の裘をつけたもく〳〵したものが普通用ひられ、毛皮をつけない冬着では寒氣がきびしく到底凌ぎ切れない。と云ふのは零度以下二十度から三十度といふ寒さで、剌身まで氷つてしまふ所なのであるから、冬の旅裝は殊に注意が必要で、耳の被ひ、襟巻、足元の用意、何れの部分も怠つてはならぬ。到底東京地方の寒さの比ではない。長江沿岸から南支那一帶にかけては、北方に較べて餘程樂で毛皮の類を必ずしも必要としない位で、メリヤスのシヤツで加減が出來る程度である。しかし夫々の細部に亙つては、矢張り南北共にその地方色を帶びた千差萬別の冬着が用意せられてゐる事は、その方言言葉が違ふとの同樣である。

洋服にそれぞれ夏、冬、合着、禮服などのあると同じ樣に、支那服にも亦夫々その季節に伴ふ種々な服裝がある。殊に第一公式に用ひられる場合の黒の上衣（馬褂兒（マークワル））又は袖無しの短かい上衣（背心（ペーシン））など時と場合によつて相應な用意がいる。帽子は西瓜皮帽（シークワピー）と稱する丸帽があるが、それのつまみに赤、黒、白、青などの相違點があり、普通日出度い時の赤、平素の黒、悲しみの場合の白（父母の喪中）又は青（兄弟の喪中）の區別位は辨へて注意を拂ふ必要がある。しかし衣裳、帽子、靴など凡てを一切合切取揃へて見た所で、外套一着の價にも足りないくらゐ安くあがるのであるから、その點から見ても支那の旅には必ず支那服を着用すべきものであるといひたい。

支那の旅に注意すべきは、旅具に就ての問題である。

旅具は出來得る限り質素に、又少量に、極端にいへば一つの小さい手提の程度に止め、出來得る限り身輕な支度をするに限る。元より本據として定めた宿に、必要品の主なものを用意して置く事は勝手であるが、其處から各方面の田舍へ旅行をする場合、やゝもすれば日本流に考へて、小さつばりと

した手鞄、蝙蝠傘などを用意する傾きがある。又なにかとさまで必要でもないものを、取越苦勞して荷造りに取掛る者が多い。實際の所、顔を洗ふに要するものと、手帳、肌着、紙類くらゐな程度のもので、最小限度の旅具は揃ふ。雨の心配は行つた先々で、五六十錢程度の雨傘が手に入れられる。がそれも地方によつて雨のない所が多く、傘も賣つてゐなければ又その必要もない所が多い。よしんば降られた所で、雨を窓外に聽きつゝ宿に逗留してゐるのも惡くはない。わざ〳〵雨を侵してまで出かける事は、支那内地の習慣にも反してゐる。よし出かけて見た所で、訪ねた人との對談くらゐが關の山で、多くの用足は出來ない。寧ろ雨の日は悠々と宿に落着て、日記や書類の整理でもしてゐるべきで、それに最もよい機會である。

君歸期を問ふ、いまだ期あらず
巴山の夜雨秋池に漲る
いつか共に西牕の燭をきり
却つて巴山の夜雨を話す時のあるべき
夜雨寄北　李商隱（義山）

（君問歸期未有期　巴山夜雨漲秋池　何當共剪西牕燭　却話巴山夜雨時）

來し方の異國の旅の風韻が、自らかうした日記の紙面に溢れることであらう。

支那の旅に要する旅具としては、シーツ、手拭、風呂敷類、紐類、錐、鋏、筆、紙、墨は固より、出來れば磁石、時計、寒暖計等をも用意が出來れば上乘である。しかし凡て上物は必要としない。出來れば上海なり天津なり上陸地で買ひ求めて、それを携帶して這入ればよい。日本出來の上等品は、眼に立つて仕方がない。靴下にしろ手袋にしろ、餘りにすべてが垢抜けがしてゐて、氣持にはぴつたり合するけれ共、旅先きの周圍の環境には合はぬ。しかし日本人は何れも潔癖で、寢具の感じが氣になる方であらうから、さつぱりと洗濯されたシーツなり、薄い毛布なり、枕の被ひなり、さういつたものは滿足の程度に持つて行つたらよからう。しかし實をいへば、長い旅では到底かやうな贅澤はいつて居れない譯だから、凡てあるが儘のもので我慢をする事が、支那の旅に第一の教訓であるともいへる。

旅具に就ての心配は、旅に馴れて來れば來る程無雜作に考へられる。最後には齒ブラシ一つ持つて行かないでも、充分だといふ所に迄なる。すべて、八釜しく考へるのは始めのうちだけの話で、いつしか神經質でゐても、やりきれなくなり、結局向ふの夜具を其の儘、枕も其の儘、甚しきは齒ブラシまでも向ふで出してくれる古いので我慢させられるに至る。これはその地方の空氣の加減、風土の狀

態が、自ら長年の生活體驗の上に、適當に馴染んで來るが爲めであるから、旅客は唯そのしきたりの儘に理窟を並べないで、順應してゐればよい。敢て特別の我意を張つたり、相手のものを氣嫌ひしたりするの必要もなくなる。それに旅具の問題は、その人の個性に本づく潔癖性の現はるゝ程度と、又その人の支那の風物習慣に馴染み得る可能性の程度如何とによる譯である。支那の田舍を行く人たちの旅行振りを見るに、多くは夜具や洗面器に至る迄、諸道具を一切合切蔥にくるみ綱でしばり、一と財産にして體と共に運んで行く。これは多く南方の旅客に見る風習であつて、北方の大布袋に諸道具を藏め、肩にかついで旅立ちをする樣子とは、自ら異つてゐる。しかし手輕るに動く連中は、その食事の時の樣子を見てもナイフ一つ持たず、驛の停車時間に物賣りが油でいためた鷄の丸燒きなど賣りに來るのを買ひ求め、二三の連れを一緒にその鷄に食指を動かし、足を引裂き、翼を取りはづし、全く双物一つ用ひる事なく上手に骨まで、しやぶつてゐる。問題は土地の旅行振りになるたけ早く馴れて、無理やり日本式を發揮しないやうにやる事である。これがまた經濟的でもあり、又後の思ひ出に殘き體驗として深き印象を得る譯でもある。

日本の人は支那の旅といふと、二言目にはすぐ護身用の携帶品をどうしようかと、その點を口にする者が多い。武器を携帶するにしても、その人が巧みにその場面を切抜ける丈の腕のある者なら、それが短銃であらうと、何であらうとよからう。しかし近來は、驛の改札口に官憲がゐるので、兵隊立合ひの上、公安局の名に於て旅具の檢査を受けることになつてゐる。ピストルがあれば、必ず發見せられるにきまつてゐる。武器の携帶が嚴に上れば、特別の目がこれに光り、武器を持つてゐるばかりに、到る所で餘計の心を配る必要も起り、武器ゆゑに一大椿事を引起さないとも限らない。

先年、漢口の正金銀行員M君が、長江を渡つて武昌の郊外蘆荻の原に、獵銃をひつさげ獵犬をつれて出掛けたのであつた。數日立つた後、不思議にもその犬だけが江を渡つて銀行に歸つて來た。そのため銀行では大騷ぎになり、その犬を案内に武昌の郊外へ捜索に出かけた。すると村外れの草原に、血が流れてゐる跡を發見したので、百方あたりの農夫達に尋ねて見たけれ共、遂に要領の緒すら得られなかつた。凡て武器は支那の内地でかぎつけられたが最期、助からないものと見て置かなくてはならぬ。

尚當世流の旅行振りには、寫眞器、活動寫眞器、スケツチの道具などを携帶する者が多い。これは支那の内地の奥深く這入る場合、勿論携帶することも差支へはなく、又必要なことでもあらうが、時と場合をよく考へ、地方的の迷信のある所などでは、却つて事件を引起したり、後でひどくねぢこまれたりして、かなり厄介の伴ふことがあるのだから注意しなければならぬ。うつかり人や、水牛など

撮影すると、逆ねぢをくらつて、隨分ぼられて而喰つたり、それに應じないで頑張つたりなどしてゐると、不良の徒が澤山集つて來て、がや〳〵一騒動起すやうな事にもなる。鬼も角、田舍ではまだそんなものが非常に珍らしいので、不思議がりながら黒山の如くたかつて來る村が多い。老人達は撮影された爲めに、命が短縮されたとばかり故障を申迄んで來るものもある。

しかし、それも萬難を排して要領よく撮影をなし遂げたとしても、田舍の稅關あたりでは、疑の眼からこれを没收したり、不當課稅をしたりして、隨分困らされる事がある。現像をしてゐないフヰルムだけに、何とも仕方がなく、泣寢入りとなる場合が多い。尙フヰルムは、上海、漢口、北平、天津、奉天といつた大都會でなくては手に入らず、奥地に這入れば全く買ひ出す事は出來ない。それ故内地に深入りする者は、豫めその用意がいる。現像して見ると存外うまくいつて、見映えのする寫眞も少くないが、これが爲めに要する費用と手數、又人知れぬ心配と厄介の問題は、意外なものがあるのであるといふ事を承知して置かなくてはならぬ。少くとも寫眞器携帶の旅客は、相當人の目に立つ譯である。るから、それだけの稅が、知らず〳〵のうちにかけられてゐる事をも承知してゐるべきである。

尙用意の爲めの藥は、胃腸の持病のあるものは、不斷用ひ馴れてゐる賣藥なり、醫者の處方箋なりを携帶するがよからう。但し支那の處方箋は日本式のものとちがひ、支那には漢方の方でなくてはよく間に合はぬ。尙長江筋方面には、アミーバー赤痢と稱する風土病があり、生まの野菜を喰つた人に多くこれを見る。しかし藥は何病にしても、旅先きにそれぞれ昔乍らの草根木皮が發達してゐるのであるから、案ずる程の事はない。唯喰ひ過ぎ、飲み過ぎをやらないやうに、又睡眠不足をやらないやうに、風邪をひかないやうにといふ程度で澤山である。緊張狀態の旅行振りに對しては、病魔は殆んど來ない。唯とめてとまらぬのは夜の南京虫である。これには除虫菊可なり、アンモニア可なり、グツドバイフライ（goodbye fly）可なりで、色々藥もあるが、馴れて來れば、いつしか免疫狀態になる。病氣の事は、餘り始めから心配をしないで出かけるべきである。

八參考書

支那に關する知識といへば、新聞の記事から教へられる所が大部分で、其の他は雜誌、單行本、講演、ラジオくらゐの所である。古人の漢籍に見えてゐるものは、今日の漢文教科書に又東洋歷史に、多少散見してはゐるが、大した結果を見せてゐない。寧ろ教科書の上の材料は、その根柢をなさねばならぬ筈であるが、その教へ方に興味が足りない爲めか、或はそれを教へる人の素養がないためか、さまで參考となつてゐないやうである。又支那の地圖及び地理の知識が、その大體すらも具體的になつて居らず、通り一遍の味ひのない形式に終つてゐることは情けない。

支那を對象として研究觀察する現代人の知識は、抑も何を目標とすべきか、政治上だの軍事上だのといふ難しい高等政策に關したことは暫く別として、最も廣く且つ深く日本人としてこゝに知らなくてはならぬ事柄は、支那大陸の地理に本づく的確な事實と、それに關聯し山川風物の內容とである。これらを先づ第一の根柢となすべきである。第二には、過去及び現在の民族性、並びにその民族性が生み出した所の社會相、人情の機微、共存共榮に就ての重要な心理作用の研究洞察である。第三には、その大陸的の土地と、四億萬の住民の社會的生活の事實を前に、日本人たるものが如何にしてこれを取扱ひ、如何にしてこれと交り、眞の共存共榮が如何なる方法の上にしつくりと實現され得るかを見出すべき事である。この邊はすべて日本式の常識のみでは考へが立たないのである。

以上の三大項目を以つて、當面の支那知識に必要とする基調點であるとするならば、その目的に適ふ參考書を手にとり、あらゆる方面から研究をなすべきである。從來西洋人の支那に關する文獻には實際方面から這入つた旅行記、體驗にもとづく研究書、又は隨筆などが數多出版せられ、その中には世界的に重きをなしてゐるものも少くない。然るに日本には、折角漢籍は山の如くあり、これを讀破してゐる人も多く、のみならず、かの地の山川風土にも自ら親しみ、相當その事情に通じてゐる人が少くないにも拘らず、それらの人々は事務には明かであつても、これを文章とし刊行物として公にする人が、極めて稀れである。そのために、一般國民は殆んど支那事情に通ずるの機會が得られず、從つて支那の事に對しては縁遠の狀態となり、漢籍の事などは最早忘れられてゐるの感じさへある。又新聞記事は徒らに目先きのこと、殊に政事上軍事上のことのみ多く、然かも賣らん哉式に羅列されてるので目先きの出來事を越えて、それ以外に、本當の民族性の事なり社會相の事なりの尊き材料を殆んど並べてくれてゐない。その爲めに如何に多くの日本人が、支那に關する知識に缺乏し、支那民族

性の何たるかを諒解せず、その認識を確實にせず、空々漠々に過ぎ去つてゐるか。これを考へる時は、甚だ遺憾の點が多いのである。

支那の參考書は、人各々見る所があり、政治軍事の方面にのみ力を注いで、開卷第一先づいつも支那の事といふと二十一個條から說き起すといつた行き方をする人もあれば、對支貿易の統計やら、排日にもとづく取引きの消長やら、關稅の比較、內容等の方面にのみ力瘤を入れる人もある。或は又近來は、エロやグロの材料のみを漁り盡して、面白可笑しく記述したり、又演劇・工藝・美術から考古學・出土品等に關する研究方面の著述も出てゐる。また單なる旅行記としても、殊に最近十年以來の出版物は、數十種にものぼつてゐる。しかし、支那の民族性、社會相、或は日本人と共存共榮の目的に資する民情の機微をうがつた心得、遣り方、更に進んではその氣分に浸らせる迄の解き方をしたものに至つては、殆んどこれを擧げるに困るくらゐ少い。問題はこゝにある。今後の日本人は、何れの思考方法の上に立脚しようとも、支那を觀察しこれを取扱つて行く上には、その民族性に漲る根本の流れをよく〳〵看破し、その間に隔意なき態度と腹とを持たせる所にまで滑ぎつけなくてはならぬのである。

支那の旅の參考書は、其處迄踏み込んだ底力のあるものを撰ぶことが何よりも大切である。必ずしもそのいつも堅くなつて、思ひつめる必要はないが、支那の社會民情の半面には、國境を超越した思想、廣い意味に於ける人間としての味ひを感ぜしめる點が多いのである。支那の知識を本當に取り入れる事の出來た人は、實際の旅行によつて更に一層大陸的なゆとりを體驗し得るのである。そのゆとりこそは、支那の旅も、參考書も、凡てを取入れて一種の享樂的風韻のある天地を持たせる腹をつくるものである。

支那に關する參考書の中には、民族性、社會相の何たるかを露骨に說明してゐないでも、讀む人の心にその用意が出來てゐれば、必ずや從來の偏頗な又窮窟な解釋振りではなく、眞の深い所まで到達する事が出來る。又參考書を書き起す人もこの點に觸れ、讀者の心を啓發するやう努力せられて欲しいものである。始めから專門家向きの難しいものや、事務報告の如き形式的なものでは一般讀者に興味深く讀ませる事は出來ない。今や日本國內は元より、歐米の天地に於ても、支那の國民性と社會相に對する認識の足りない事が事實上暴露せられ、從來支那を律してゐたやうな日本流の考へを抱いてゐることは、全く誤りであり、又それは日本にとつての一大損失でもある事を力說すべき時となつた。

支那の旅には、豫備知識として色々多方面の參考書、地圖などを見て置くのはよい事であるが、いやに堅くなつたり、又一方に偏したりしてはならぬ。支那の事物、あたまの向かひ方は、歐米や日本

の常識圏内にあるものは殆んどなくて、凡てが意表に出てゐると云つてもよいのであるから、型にはまつた日本の教育家の常識や、小説家の筋書などを見て、それと日を同じうして語るべきものではない。洋書のものもよからう、古の漢籍もよからう、が虚心坦懐、種々の方面の出版物に目をさらし、唯その民族性の點に興味の中心をおいて、鋭い眼で紙背に徹してもらひたい。爰には際限のない事であるから、一般の支那參考書の羅列は割愛して、たゞ東京丸の内日本ツーリストビューロー、其の他丸の内の滿鐵内鮮滿案内所あたりに、旅程を作る上の事務的の案内刊行物を色々出してゐるものがあることを紹介して置くにとゞめる。旅費や旅程、旅館等に就ての目當は、その最近のものによるならば略々これらに信頼して大體の所が豫定せられるだらうと思ふ。こゝにはその時間表や旅費等のことにまで觸れて詳細を述ぶることは止めておく。讀者幸に之を諒とせられよ。

二　支那旅行中の手引き

その一　船着場

支那の旅に出かけて、先づ第一に出くはすのは港口である。その朝鮮經由で出かけるのでない限りは、港みなとに見る船着場の光景である。が、その船着場といふと處が支那だけに隨分物珍らしい光景が多く見られ、之には旅客の誰れでも、心を踊らせない者はない。南北どちらにしても船着場は、支那の旅にとつて、その第一印象を、一等深く刻みつける序幕の如きものである。

船は港へ這入る。埠頭近くの旅館や、店舗の見なれない軒並みが見え始める。すると、石段の側に集る黒山のやうな人群れがざわめき出す。船の中でも、人の事など構つて居られなくなり、銘々上陸の支度に忙はしく、トランクが飛ぶ、行李が跳ねる、支那籃の大きな荷物が、天秤棒でデツキに運び出される。やがて出迎ひの人達と、大聲で呼應してゐるものも見える。そのうちに、船は岸壁へ着けられる。厚板が埠頭へ渡されると云つた風である。やがて客は上陸の合圖も待ち切れず、押すな押すなの雜沓振り、大荷物を抱へた連中が、我を先きへと上つて行く。上陸前後のその氣持その騒ぎは、

日本内地のそれを二乗いや三乗しても及ばない。

埠頭の街の雑沓の中を、荷物擔ぎはさつさと飛んで行く。露店の喰べ物屋の混雑や、その邊から洩れて來る一種の匂ひが、異國の土を踏んだといふ氣持を先づ味はしめる。その混雑の騒ぎの中から飯屋のお嬢さんが、命限りの聲で叫んでゐる。袖を強くひかれながら、店頭につれこまれてゐる客もある。店頭には山盛りの支那料理が、大皿に暖かさうに運ばれてゐる。宿引の聲、苦力の叫び、車夫のいざなひ、人と人、聲と聲、埠頭界隈の街の雑沓さは、正に下船のときのそれの延長である。殊にこれが夜分の場合には、この雑沓に提燈が交り、あたりの暗い爲めに却つて聲も大きくなり、騒ぎの程も想像されるであらう。しかし最後の客が下船する頃には、水邊の石段もひつそりとして、大風一過の感が深い。打消されてゐた乘組み同士の話の聲もかん高く聞こえて來る。

○

近來船着場で役人兵隊などの客に對する調べは、以前に較べると餘程酷しくはなつたが、或る特殊の事情のない限り、考へるほど大した事でもない。急ぐ旅でもなし、上陸はなるべく後らせ、ひとり靜かに、埠頭に吐き出されて行く客の行列など、甲板の上から見てゐるのも面白い。時たまその臨檢に引掛かり、押し問答してゐるのを見ることがある。禁制品でも忍ばせてゐた者であらう、こんな時の役人の臨檢の目の鋭さは、意外に厳重なものである。これは支那によくあることで、怖らく利益分配か何かの不平のために、その仲間の者に裏切られ、入港前に電報で密告でもされた爲めに判つたものであらう。その否應なしに悄然と没收されてゐる樣は、寧ろ哀れを催すのみである。又、密使が來たとか、何んとかいふ時の役人兵隊の緊張振りや、それが又何んとなく不安な雰圍氣を醸さんとしてゐる時などは、今更いふの必要もなからう。がしかし大抵の乘客は、その混雑騒ぎを目の前に見ながら、蟻の行列の如く淀みなく、その行列の中に加はりさつさと上陸をして行くのである。

○

大埠頭になればなる程、人や荷物の出も多く、波を蹴り行く出船入船の賑ひ、色とりぐ〳〵な汽笛の音の響き、大空に吐く黒煙の渦から、働きうごめく苦力たちの雑沓など、殆んど名狀すべからざる狀態を呈するのである。官憲もそれだけに、整理や秩序の維持に忙はしく、上陸者が宿引や出迎人の手引きで、夫々その乘物を定めて次第に姿を消して行く。その後は、碼頭（バルク）艤船（普通に二階づきの建造物を有する浮棧橋）に働く苦力達が、親方に指圖され、船の大荷物の荷役に取掛り、船から港内倉庫へと、運んでは歸り、歸つては運ぶその姿がどことなく勇しい。足並みを揃へて「エーホー、エーホー」と掛聲

する滑き甲高い調子が、展望の廣いその附近の景物を背景に、一種の埠頭氣分を生み出してゐる。又炒餅（チャウピン）、粗飯（フウファン）、清湯（チンタン）などの價の安い喰物を賣つて、この働く苦力達をお客にしてゐる路傍のめしや、又支那の埠頭でなければ見られない露店食堂なども、あそこここゝに開かれてゐる。どうせルンペン生活をやるのなら、支那の天地に限ると思はせらるゝ程である。

○

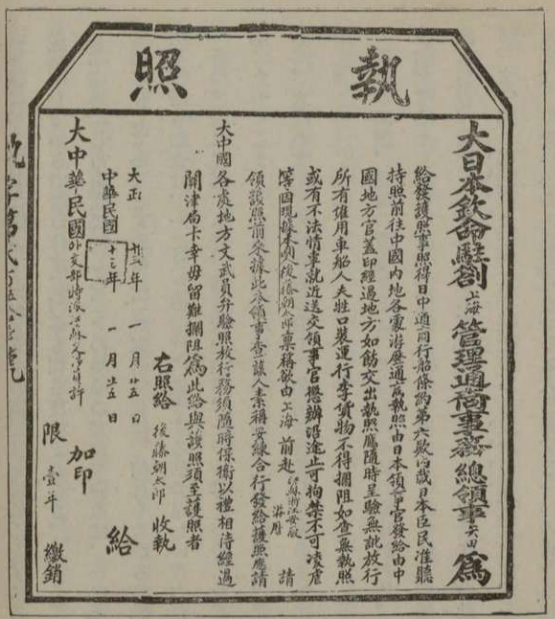
實際支那の埠頭くらゐ、芋を洗ふ程多くの勞働者の、夫々の仕事に從つてゐる所はあるまい。横濱や神戸の埠頭あたりに、幾ら二萬噸の船が這入つて横付けされたからといつて、到底之と比較になるものではない。上海、漢口、天津、大連、牛莊など、これらの大埠頭の現場といつたら、大抵の日本人は度肝を拔かれる光景に充ち溢れてゐる。その港々が背景としてゐる廣大な奥地の住民のことなどを考へて見るだけでも、略々想像はつくであらう。

この港々に働いてゐる多くの苦力達は、支那に於ても殆んど最下層に屬する者である。しかしそれらが、實に強味のある生活力をさらけ出してゐるのには、全く驚くのほかない。しかも何んの不平を訴へるでもなく、嬉々として働いてゐるのは、不思議な位である。働く人數は多い。だから人一倍働かされる。賃銀は安い。だから食物も最下等のもので我慢しなければならぬのである。それでゐて、皆笑ひながら陽氣に働いてゐる。支那の國民性を窺めんとする人は、先づこの苦力たちの態度、心事を理解してからでなければ、何事も判らないであらう。

北支那にしろ南支那にしろ、その奥地の文化の向上は、一にその入口の、天津とか、上海とかの船着場に存してゐるとも云はれ、外來の文化は、何れもこれらの船着場から輸入せられてゐる。その文明を物語る物資は、一に又その荷役に從事する筋骨逞しい苦力たちの手を經ないものはない。若し萬一その荷役に從事する者、卽ち苦力達が、その仕事を拒否したとしたならば、支那現在の文化は、卽坐に止つてしまふであらう。實に船着場に働く大衆勞働者が、衛生とか、理論とか、秩序とかを超越して、大陸の文明、人類社會の向上に如何に貢獻しつゝあるかは、實際上に於ても想像の外である。

○

田舍の碼頭、奥地の渡場などは、又自ら夫々別の意味がある。あの勘定高い地方の土民にしても、渡船だけは全く別で、決して賃銀なんかを要求してゐない。支那ではそれを義渡といつて、水を渡る旅人から、金をとるなどゝいふ事は罪であるとし、大抵は村の社會事業として、立派に經營されてゐる。文字通り呉越同舟の行人を乘せてゐる錢塘の義渡などは、その一例である。この義渡の制度は、支那人を慾深いとのみ思ひ込んでゐる人に對する一つの大きな抗議的事實で、又支那の國民性を知る



支那内地游覽視察の際に必要なる大型の旅行券、普通護照と呼ばるゝがこれである。

上にも、重大な材料である。

○

支那内地を旅行せんとする人は、その關門である船着場に上陸すれば、何はさて措いて我が領事館の手を經て、支那の役所へ、旅行上の生命財産に對する保證書を下附して貰ふ手續きをとるべきである。外交部の方面に連絡のある人は、直接政府から下附して貰つて置けば、度々面倒を見ずに濟むことであるが、一般の旅客は、先づ數弗の手數

料を拂ひ、その都度この下附願をするに越した事はない。その保證書は、支那語で「護照」と呼び、國籍、身分、姓名並びにその旅行範圍などが記入せられ、大きな割印が捺された物々しい支那式の印刷物で、その有効期限は一ケ年とされてゐる。若し期限内に、一度ならず各省に亘つて遊歷せんとする者は、始めにその豫定の省名を連記して申出る方がよい。

○

領事館では護照專門の係員が、敏活にやつてくれてはゐるが、早くても三四日、下手をすると一週間もかゝる事がある。それ故急な思ひ立ちから、二三省にまたがつて奥地入りを思ひ立つ時など、肝腎の護照が間に合はないことがある。その爲めに、閉口する事がある。だから、出來るだけ早くその手續きだけはして置くに限る。しかし實際の上では、親しい友人の護照を借りて代用したり、又一行のうちに誰か一人之を所持してゐる者があれば、後はそれの鞄持ちになつて出かけて行くなど、窮する時は何んとか智慧が出て來るもので、存外思つた程でもない事がある。領事館は餘り大きな聲でもいへないが、元來が役人の勤め人根性から、少し變つた内地の方へでも、自分どもが出かけようとすると、一にも二にも事勿れ主義をとり、若しやの事があつてはと、椿事の幽靈に脅され、あれやこれやと旅行中止の勸告をなさんとするの態度を見せる事が多い。無理からぬ所もそこにあるが、これで

は日本人の支那内地視察は永久にいつも阻止せられる譯である。自分はそれを遺憾とし、常に押切つて素志を貫徹して、その結果を念の爲めに地方領事に知らせる慣例をとつてゐる。

○

最後に、日本人に物珍らしく感ぜられる支那の船着場の小景を、二三左に紹介して置かう。

碼頭では出船入船の際、客を目當てに子供連れの輕業師が、數人掛け合ひで皿廻しをやつたり、壺廻しをしたり、その他色々の簡單な藝當をやつたりして、酒錢（チューチェン）を貰つて歩く者がある。折角の藝當最中に、船は出て行く煙は殘るといふやうな事もあるが、見た以上は大抵これに銅幣の一二枚投げてやるのが普通である。こんな寸時の場合をも見遁さないといふその生活力の强さは、日本では決して見られない處である。

或は又、あちこちと押しかけて來る物賣の中には、兩替屋の恰好をしてゐる者がある。所がこの兩替屋は頗る妙な奴で、ポケツトから紙幣を出すかと見てゐると、札は後にして、先づ持ち出すものは甚だ怪しかる品物である。

『旦那、如何です。』

特に言葉を低うし、人目を忍んだ囁き言葉で近寄つて來る。五彩の美しい繪のがあつたり、寫眞があつたり樣々であるが、君子の目には頗る毒なもの、取合はないのに越した事はないのであるが、中にはそれを買はされてゐるものもある。

又或る時は、船の下級船員を相手に、餘り品のよくない上海語など使ひ乍ら、女の靴下直しが「ソウソウ」と呼び聲もやさしくやつて來るものがある。この靴下直しといふのも、その「ソウ」とは縫ふと云ふことを示した語であるが一般にその手合の言葉となつてゐる、所が靴下直しは、實は表面的な假面で、船の乘客が上陸してしまひ、邊りの景色が靜かになつた頃あひを見計らひ、メスルームの廊下などをうろつき廻つて、相手を漁つてゐる姿が見える「船にやつて來る靴下直し」は、その筋では最下級のものと見てゐるのであるが、上海の船着場あたりでは、實は名高い景物の一つと見られてゐる。殊に月夜碇泊中などは、かなりな年增なども、蟻の甘きにつくやうに、船をめがけて稼ぎに來る。全くこは船着場のセンチメンタルな方面を唆るものがあるのである。尙上海城内の船着場、十六舖（プー）から浦東（プートン）あたりの曖昧屋のことは、餘りにもその名が高いから、こゝではそれに觸れないでおく。

その二　荷物の取扱ひ

支那旅行中の荷物に對する第一の注意點は、前にも述べたやうに、人目につかぬ方法をとる事である。從つて舶來物や日本出來の鞄などは、餘りにしやれてゐて氣がきゝ過ぎてゐる感じがある。體裁をつくることが、身の危險を呼び、金を餘計にねだられる唯一の目當になる事に氣がついたならば、出來るだけこれをさける方法を取るのが、支那の旅行に最も肝腎なことである。

○

支那人に目立たない荷物といへば、支那製の手籃、又は手鞄、卽ち支那語でいふ皮箱（ピーシヤン）を携帶するに限るのである。

手籃は、提籃式に竹の鉉のついてゐる楕圓形のもので、荒い目の網がかゝつてある。大中小種々あつて、買物でも何んでも詰込むのに最も簡便でよい。しかしこれは、荷造りが充分に行かず、又鍵をかけるといふ譯に行かないから、常に身邊に置くつもりでゐなくてはならぬ。

皮箱卽ち支那鞄には、籐で編んだものや、それに皮を貼つたもの、或は牛皮の箱に漆のかゝつたものなど、各種各樣であるが、何れも支那製の大きな鍵がついてゐる。日本人の目から見ると、何んとなく無細工であり、出來上りもきちんとしてゐないだけに、頗る價も安いから、その點で我慢が出來るといふものだ。その上、旅行中はたいしたものを持つて歩くことをしない支那客の中に雜じる以上は、その人々と同じやうに見えることが頗る好都合で、また第一に安全でもある。けれ共、支那のことであるから、いついかなる場合に、拔取られることがあるかも知れず、又鞄が支那出來だけに合鍵もあるわけであるから、油斷することは出來ぬ。しかし自分は、支那遊歷中は大したものを持つて歩かないのは無論であるが、未だ嘗て皮箱に鍵をかけて歩いたことがない。といふと不思議に思はれるかも知らないが、どうせ歩く間にとられるとすれば、拔取りなんかをするよりも、鞄ぐるみ持つて行くだらうと思はるゝからである。尙その都度々々に鍵をかけたりしてゐると、その中に如何にも貴重品でもありさうに思はれて却つて相手方の好奇心を唆るであらうとも思ふからである。こんの邊の呼吸は、讀者夫々の肚にお任せすることゝするが、尙自分の鞄に自分のマークを入れて置くことなどは良策であらうと思ふ。

○

又田舍の碼頭などで、普通よく見ることであるが、荷役をしてゐる苦力達が、その監督者の默認を

よいことにして、穀物袋などを運びながら、その袋の中から、自分の女房や子供に、大びらで抜取りをさせてゐるのを見ることがある。こんな事は支那の社會では、餘り八釜しいことはいへない事情もあるのであるから、いくら荷造りを嚴重にして見た所で、これで充分だとは思はれない。その點は頼りないこと夥しい。

しかし全部が全部泥棒や抜取り屋ばかりゐるわけでもない。皆がさうだときめることは早計で、唯心の中でさう思つて用心をしてゐるに越したことはない。が、又存外實際の上ではさうでない場合もある。いつぞや浙江省は寧波の停車場の切符賣場で、財布を忘れておいたことがあつた。しまつたと思つて後で取りに行つて見たら、そのまゝ元の位置に置かれてあつたことがある。時と場合によることもあらうし、又運不運もある事で、こればかりは何んともいへぬことであるから、つまりは用心をしながらも、餘り神經を惱まさないで、呑ん氣にしてゐる事が存外安全なことにもなるわけである。要はその人その人の肚の問題で、支那人が支那の社會に對してやつてゐる行き方と同じ行き方をしてゐれば、萬々間違ひはないのである。

○

しかし近來は、世の中が世智辛くなり、普通の荷物の形式では感づかれるといふので、表面禁制品になつてゐる阿片を運ぶ玄人の間などでは、その荷造りの箱を全然人の思ひもつかぬ形式にすることがある。その收益分配が多いために出來ることでもあらうが、例へば死人を入れる棺桶の中にそれをしのばせ、簡單な葬式の樣子に裝ひながら、その目的を達してゐるといふ者もある。又亡命の客は、身を遁がれるのに、自ら洗濯物の中にくるまり、人目を誤魔化して脫出するなど、支那の荷造りの中には、奇々怪々のグロを包んでゐる事が、興味深く豫想されるのである。昔て滿洲王を氣取つてゐた故張作霖の如きも、北京の城門脫出の芝居には、かういつた意外な一と幕を演じて、一時身を全うした事も、北京の界隈では知る人は知つてゐる。支那の旅に見る荷物と荷造りの秘話には、相當内容のある挿話もあることであるが、何れ後の機會に更に加へて述べる事にしよう。

その三　汽車と自動車

支那の乘物には、太古そのまゝの原始的生活時代に見るものから、最新式の飛行機に至るまで、凡そ文化の各時代に於ける發達のものを打つて一丸となし、何一つ持たないものはない程である。正に支那は、乘物の一大展覽會場の感がある。しかもそれが、空には一日二回の飛行機輸送が、定期に行はれてゐるかと思へば、地上には舊式な轎子が、皮肉にも空飛ぶ新らしがり屋を嘲笑しつゝ、遲くともこれが一番安全だぞ、といふ顏付で呑ん氣さうに客を運んでゐるところも見られる。それが江南地方の同一都市に於て、しかも同時に見られる光景である。

○

如何に突飛な新方法であらうが、如何に奇怪な新思想であらうが、之を採入れて日常生活に織込むモダン式の氣持は、支那人の頭には多分にある。しかし又、これと全く反對に、田舍の百姓達は、火車（汽車）の便による事を、さまで有難い事とは思つてゐない。十日の日數を費しても、金をかけずに歩く方が、氣持にぴつたり合つてゐるといつた流儀で、わざ〳〵荷物を擔ぎながら、仲間を作つて線路傳ひに歩いてゐるのが常態である。時は金なり、といふ急迫した氣持の存しない支那にあつては火車を必ずしも有難い乘物とは思つてゐないのである。

所が、その餘り有難く思つてゐない火車へ、萬一その農夫達が乘る場合があるとすると、これは又面白いことには、なるべく乘つてゐる時間を長く、出來るだけ賃金を安く、その火車中の人となつてゐようとする所がある。たとへば、早く下ろされるために、急行券などをわざ〳〵金を出して買ふといふことがあるものか、といつた調子である。だから出來るだけ快車（急行列車）をさけ、慢車（普通列車）を選ぶのが普通で、早く着けば着くほど、汽車賃の損をしたやうな氣でゐるのである。又火車にどうしても乘らねばならぬやうになつた時などは、發車前早くから、辨當携帶で列車内に席を占め、用談のある人をわざ〳〵車中につれて來て、應接間がはりに利用してゐるなど、どうせ切符を買つた以上は、五分でも長く席を占領してゐるのが、德でもあるかの如く考へてゐるものらしい。だから、火車そのものが惡いものだと思つてゐるのではなく、火車を利用せねばならぬ程の切迫した氣持がないからで、つまり支那の農民達は、火車を對照に出すのが滑稽なくらゐ呑ん氣なのである。と同時に、生活上にそれを利用せねばならぬやうな事情もなく、畦道を歩いてゐれば、それで澤山だからである。寧ろ火車が通じたために、村の野菜や鷄卵のよい品物が都會地に奪ひ去られ、村民はその

殘物の不良な品を、お安くない價で求めなければならない破目に陷つてゐるのを、却つてこほしてゐる手合すらある。

○

支那の旅の火車に就いて閉口させられる事は、時間通りに運轉しない事である。幾ら急行列車だといつても、或は軍隊輸送の爲めに、或は出水の爲めに、又は土匪夜襲の爲めにといつた事故はおきまりで、その上大官連中の乘車を見る場合などは、その時と場合によつて、隨分延着する事がある。しかしいつでも延着ばかりするものだと思つてゐると大間違ひで、時には又四五十分も早く着くといふやうな事もある。だから旅行者などの出迎へに、時間きち〳〵歩廊に行つて見ると、豫定の列車はとつくの昔に着いて、最後の客すら姿を消し、歩廊はガランとして淋しく、狐にだまされてゐるのではないかと思ふ事すらある。充分言葉も解らず、土地の事情も不案内な時など、當てにしてゐる出迎への人を見出す事の出來なかつた時くらゐ、心淋しいものはない。しかし、支那の汽車ばかりは喧嘩にならないのであるから、迎へる人も迎へられる人も、その心持でゐる事が大切である。

○

支那の車站（チャンヤン）（驛）に於ける火車の發車前後の光景は、日本などとは違つて、又隨分物凄い騷ぎである。殊に夜汽車などの混雜と來たら大變なもので、狹い一二等の廊下に大荷物を持込んで來たり、鬼のやうな腕つ節の强い苦力が次から次へと押掛けたり、おまけにその呼び聲や發音の荒々しい樣子などといつたら、氣の弱い者は肝魂を潰されさうな有樣である。都會地であれば尙更その騷ぎが甚しく田舍の車站ではさほどでもないが、その代り電燈は薄暗く、窓外から眼玉の銳い、辮髮のさばけた荒荒しい色の黑いのが覗き込んだ時などは、大抵の者がひやつとするほどである。

○

支那內地の火車では、隴海（ロンハイ）鐵路（徐州、開封、洛陽を通過する鐵路）沿線が、最も危險事故が多いといはれてゐる。これはその沿道地方が、土匪の巢窟の中心地域で、鐵路は正にそれを貫いてゐる爲めである。

民國十二年五月五日の夜半、この隴海線と津浦線（天津、南京の江岸浦口間）との交叉點、徐州驛附近の臨城驛に列車が差掛つた際のことである。闇夜に乘じて一團の土匪が襲來し、列車を脫線させた上、折から乘つてゐた亞米利加の紳士淑女の寢込みを襲つて、無殘にも山寨の奥まで拉致し、國際問題まで引起した事があつた。今でもこの車站へ行つて見ると、六名の警備兵が、背部に、又右手に大の青龍刀を翳して、拔き身のまゝ停車時間を巡邏してゐる物々しい場面を見せてゐる。探偵小說以

上のグロ氣分が漂ひ、支那の鐵路でなければ見られぬ光景である。

しかし田舍の車站にしても、かういつた物凄い氣分の漲つてゐる所は、他にはない。一時は國際間の制裁で、津浦線に裝鋼列車を運轉せしめることの約束であつたが、いつしかその堅牢な列車は、奉天政府の方に卷揚げられ、今は木造の廢車のみが配置されてゐる。しかし寢臺車などは、流石に外人などの使用に、耐へられるだけの設備が出來てゐる。

寢臺車のことが出たので、こゝに一寸書き添へて置くのだが、支那の列車に旅馴れた客は、寢臺券などを支拂ふかはりに、掛りのボーイに割り增の心づけなどをして、しかるべき妥協策を講じ、格安に車上の夢を結ぶ者もあると聞いてゐる。

○

日本人が支那の火車に乘つた感じは、第一に廣軌である爲め、內部がゆつたりしてゐるといふこと、又等級の頭等（一等）二等、三等の他に、地方によつては四等があり、又貧民車があるといふ事などが變つてゐる。

萬里の長城附近を走る特別三等車には、列車や郵便車が、無蓋車や貨車などを寄せ集めた汚ない箱で組織されたものなどもある、襤褸を着込んだ寒山拾得流儀の客だねには、如何にもよく調和してゐる。しかし運賃が非常に安いのだから、下層民達には有難い乘物といへるだらう。しかし見掛けは汚くても、筋骨の逞しい北方支那人が、艷々しい陽氣な、しかも豐かな感じを出してゐる車內光景などは、日本あたりのそれと全然違つて、如何にも大陸的な氣分を遺憾なく發揮してゐる。

また概して、各等共に便所が清潔であり、又無臭である。これは直徑一尺位な鐵の鑄物の圓筒狀をした便器が、斜に作りづけになつてゐるためで、その構造は極めて簡單であるが、實に要領よく出來てゐる。その上に空氣が乾燥してゐて、何んらじめ〳〵した氣分を伴はない。この點は大陸の旅として、誠にしやはせな事である。

話は前後するが、列車の食堂は、これ亦廣々としてゐて氣持がよい。食事は洋食と限られ、その價は決してお安くない。支那食は、食堂內に用意されてゐないけれ共、特に註文すれば、合ひの子式の什錦飯（シャーシンファン）（五目飯を油でいためたもの）くらゐのものはつくつてくれる。

○

一二等の客車は、座席が一つの窓際に四人宛、差向ひになるやうに出來てゐて、一等は黑色の厚い皮張のソーファーが設備せられ、窓の腰板に接して、必ず机が設けられてゐるので、茶菓を置き、讀書をするに好都合である。又頭等には、後ろの凭れる所に、地方々々の名所舊蹟が、引伸し寫眞にし

て硝子の框に這入り、一々説明もあつて、乗客の遊心を唆つてゐる。日本の鐵道觀光局なども、こんな設備を眞似て見たらどんなものだらう。

尚列車内では、ボーイが引切りなし「熱いタホルを客に配つて來る。一回銅錢二三枚で、氣分を小さつぱりとさせるやうに努めてゐてくれるのは有難い。又戸じまりや鍵が、遺憾なく設備されてゐるのは頭等のみである。頭等には又上下寢臺があり、一方にソーファーがあつて、車中豐かな旅行氣分に浸る事が出來る。

手荷物はなるべく預けることをさけて、邪魔でも身の廻り手近に、目を離さないやうにして置くに限る。そしてボーイに落ちなくいひ含めて、絶えず注意させるやうに手配する事が肝腎である。

○

又支那の火車では、ピストルをつけた三四名の武裝兵を伴つた車掌が、切符改めとして數時間毎に廻つて來る。軍隊の警備區域が變る毎に、違つた武裝兵がやつて來るのである。變裝をした注意人物などが、貧民車の中にもぐり込んでゐる事などもあるので、近來は殊に八釜しい。無理もない事であるが、兎に角これは面倒臭い。しかし時には、武裝兵に煙草の一本もやつて仲よくして置けば、夜半の徒然の時など、何かに就けて便利を得ることもある。凡て乘合客、車掌、監督、ボーイなど、皆同

樣な筆法で、手なづけて置くに越したことはない。

また兵隊が列車を占領した時などは、自國人であらうと、外國人であらうと、何んら眼中に置くものではない。いつぞや日本の代議士の一行が、日本の公使の名刺を振翳して見たけれ共、何んの効力も現はさなかつたことがある。その列車は天津北平間を走つてゐた國際列車であつたが、兵隊の前では、何者も脅かしにはならない。後で抗議を申立てゝ見たが、唯それはこちらの腹いせになつたにとどまり、事實は有耶無耶に葬られたのであつた。

○

最後に乘車券の事であるが、こは日本の汽車賃のやうに、規則で定められてゐる公認の賃金で乘れると思つてゐると間違ひを起すことがある。意外にも時局の都合から、その地方の附加稅、割增金、又はその切符の紙代、印刷代の細かい費用迄が、紫のスタンプで別に記るされ、追徵金としてとられる。この邊は支那の火車の特徵で、地方色などもこゝに見える。

又支那では、途中下車の制度がない。火車旅行の途上、うつかりその邊りの景勝に惹かされて途中下車をしようものなら、そこから先きの切符は無効になる。途中下車三回などといふ日本流に考へることのないやう、注意を要する。

○

要するに支那の火車は、白晝にしろ、夜半にしろ、又幾ら混雜や變動があらうとも、恐れこはがる必要はない。おど〳〵したりあわてたりしてゐると、却つて危險を自分に招くことになる。これは簡單なことであるが、立派な紳士がこれでやりそこなふことが多い。肚をちやんと据ゑて落着いてゐるに限る。

大陸の汽車の旅は、その列車が、廣軌であるだけでも、何んとなく異國情緒を唆るに足るが、特に北滿の大平野を走る列車は、汽關車の頂に振子の鐘がついてゐて、週期的に「カーン、カーン」と鳴り響くその音は、旅愁を唆ることが夥しい。線路を悪戯する熊を追ひ拂ふ爲めだと聞いたが、今も尚その鐘の音が耳に殘つて、荒涼たる北滿の野景が、目の前に浮んで來る。

支那の旅の火車については、何かにつけて思ひ出が深い。

○

支那では、自動車のことを、汽車といつてゐる。日本でいふ汽車は、支那の火車に該當するのである。支那街の盛り場など歩いてゐると、「汽車慢行」といふ文字が、街上高く掲示されてゐるのをよく見る。始めての觀光客にとつては、さぞ妙な氣がすることだらうと思ふ。

支那で自動車（汽車と書くのが正當なのだが、間違ひ易いから以下之れに準ず）を見るのは、上海か北平くらゐのものだらうと思つてゐる人があるかも知れないが、今では殆んど内地の奥まで、その影を見ない所はない程である。

近來の支那の道路は長足の進歩を示して來た。道幅の狹いあの舊式な支那街もよくなりつゝある。道といへば名ばかりの田舍路で、隨分ひどいのもあるにはあるが、近來出來得る限り、都市でも市區改正を斷行し、自動車道をつくるといふ事が、どこでも一つの大きな都市計畫の方針となり、田舍は田舍でこゝにもその道路建設に多大の努力を拂つてゐる。上海の市區改正に於ける城壁破壞の如き、南京中山陵に通ずる中山路の如き、或は太原附近の田舍道の如き、各省各地到る處に急速な進歩を見せつゝある。從つて自動車の需要も驚くばかりで、モダン式の青年達の中には、我れも我れもと自動車の運轉手を希望する者すら現はるるに至つた。新しい支那の一面は、この自動車增加の統計によつて、裏書きされてゐるといつても過言ではない。

巴蜀の棧道石徑などに、自動車を通ずることは、或は永久に不可能かも知れない。殆んど人の往來のない山間僻地でも、細道ながら石を敷いたり、石段をつくつたり、或は丸太を埋めたりして、所謂棧道の形式が、白雲深き所に見出され、石造の茶亭なども、棧嶺雄關に設けられて、これにはこれに

特異な幽趣がある。

○

しかし、支那に見る自動車は、鐵路施設未完成の今日、交通輸送上多大な貢献をなしつゝあると同時に、あの世相萬端に見る複雑さや、時局の裏を流れる計畫的な陰謀などから、半面非常に獵奇的なグロ氣味を持つてゐる。公人私人がその日常身に迫る危險を逼れて行くのも自動車なら出來ることであり、又その危險人物を迫ひ詰めて行くのも自動車なら出來る。ピストル强盜や、或はピストルの暗殺など、一としてこれを用ひないものはない。

月末銀行から、重さうな鞄を持つて出て來る支配人が、自動車に乘つての歸途、ピストルを一發見舞はれたのが最期だつたといふやうな話は、支那ばかりではないかも知れないが、上海あたりでは殊に頻々と聞くことである。

○

かうした事の頻發する事實から、都城々々の城門は之を護る役人、兵隊によつて、自動車の城門通過のことが、非常に嚴重に臨檢されてゐる。

元來支那では、その城内だけを走り得るものと、城外までをも走り得る權利を與へられてゐる者との、二者がある。城門を抜出て、郊外にでもドライヴせんとする者や、或は又田舍から城内に這入らんとする者なんかは、悉くこの城門の便門に警備してゐる武裝兵によつて、一々その監札を調べられるのである。萬一その一方の權利しかない者が、無斷で出入したとなれば、重い罰金が課せられた上、時には運轉手の許可も取消されるといふことがある。北平の程遠からぬ白雲觀へドライヴするのでさへ、途中の關門では武裝兵に一々調べられ、幾何かの通過稅を、運轉手が課せられるのである。

このやうなことで、文明の利器としての自動車も、存外支那では厄介な事柄が伴なつて來るために舊來の馬車や人力が、依然として案外重寶視されてゐるわけである。

その四　轎子その他の乘物

支那在來の乘物のうちで、最も支那氣分の濃厚なものは、何んといつても轎子（キヨウヅ）である。婚禮姿の美しい花嫁が、金絲の紅轎に納つてゐる時の趣き、或は巴蜀の大官省長などが、威風堂々と着飾つて、嚴かな翠轎に納まり、四人擔ぎの轎夫に、揺られ〳〵やつて來る有樣などは、到底支那でなくては見られぬ華やかな景趣である。しかも、それら紅轎翠轎に、つき從つてゐる長い行列の盛んなこと〳〵いうたら、日本の昔の大名行列を凌ぐものがある。今日も尚、各省各地到る所の都會にこの轎子の風俗は見出され、殊に身分の高い人々、良家の婦人乙女などの轎子にはかなりよいものが見出される。或は又仔細あつて世人の目を憚かる人々なんかは、特に轎子によるのほか、外出の乘物は見ないのである。

○

支那の道路は、大體北方は石塊の道か、田園の畑地を貫く路かゞ多く、南方は到る所切り石の鋪道が行渡つてゐて、如何なる山間僻地も、城内陋巷の奥も、その道幅の如何に拘らず、少くとも一尺位な板石が敷き並べられてゐる。徒歩の旅行者には有難い氣もするが、その敷石がくつきりとなつてゐない。それに南方は山形に高くなれる石橋もあちこちに多く、その爲め人車を利用するためには、甚だもつて都合が悪い。轎子の便利視さるゝのはこゝに在る。又支那人の氣分にも之がそぐふのである。殊に雨の日、外出しない習慣のある支那の人々たちにとつては、その止むを得ない場合には最も好都合な乘り物であるから、殊によく利用される。家を出るにしても自分の家の廊下から既にこれに納まり、二人或は四人の轎夫にかつがせ、訪ね先きの門内深く、廊下の中まで乘り入ることが出來るのである。だから、雨に濡れないのは固より、全然人目に觸れることなく大路を行く事が出來るのである。

街を過ぎ野を辿る支那の旅に、疲れた體を托すのは、この轎子に如くものはない。揺られ揺られてそのきしる竿の音に、調子をとつて行く轎夫の足取りも面白く、殊に時折り甲高い掛け聲に、うつらうつらとした假寐の夢を呼び醒さるゝ情趣や、湖畔の路に沿ふて垂れる楊柳の葉が、轎の屋根に當つて、ばさ〳〵と音のする時の詩興など、全く支那の旅の思ひ出は深く、轎子から始まつてゐる。

長州苑外草萋々
却つて遊程を算すれば歲月遙かなり

たゞ別れし時を今に忘れざるあり
暮煙秋雨楓橋を過ぐ

懐呉中馮秀才　　杜牧

（長州苑外草萋々　却算遊程歳月遥　唯有別時今不忘　暮煙秋雨過楓橋）

秋雨する楓橋を、轎子で渡つた思ひ出は、唯唐の詩人ばかりに許された事ではないのであらう。

○

轎子には、前面に幌があり、左右に窓がある。けれ共、これらは閉ざして行くのが普通である。しかし旅人としては、身を匿して行く理由は全くないのであるから、これらの幌や窓を開けて、出來るだけ道中の風物、路傍の實相を味ふことに、心掛けることが必要である。

又名山の麓だとか、名所舊蹟には、必ず轎夫の溜り所があり、又これが元締めの公館（コンクワン）もあるので、これに交渉して乘るべきはいふ迄もない。場所柄だけに客の足元を見て、法外な賃金を吹きかけて來るのはおきまりであるから、注意すべきである。

泰山その他北支那の雨の少いところでは四方八方を眺め得させる爲め、簡單なアーム、チエアーに二本の長柄を堅くしばりつけ、屋根をかるく布ではり、至極輕快な構造に出來てゐるものが用ひられてゐる。山東の土民は、その形からこれを爬山虎（パーシャンホー）と呼んでゐる。吹き下す峯の風を得れば、急轉直下忽ちにして下り、吹き上げる麓の風を孕めば、南天門外に、羽化登仙の思ひをさせるくらゐ氣持がよい。

又天下の名山廬山では、籐椅子に白ペンキを塗つたものに、これも亦二本の長柄を通した屋根つきの轎子が、山中山下あちこちに普く用ひられ、雲助連の唯一の仕事となつてゐる。

今兩者を比較して見れば、後者は歐洲風の趣きに勝ち、前者のそれは古の魯の國の遺風などを思はしめてゐる。從つて前者の方に懐しみが多い。しかも泰山の轎夫は、回教徒の獨占で、他の仲間を入れないだけにその結束も堅く、又純朴な所があり、手におへないなどといふ事はない。これに反して南方の轎夫は、ひとり廬山と限らず、どこでも、掛引きが多いばかりでなく、無理な難題を吹き掛けて時間を空費せしめたり、又は旅行の途上に頑張つて立停まり、動かなくなつたり、或は轎子から客を下ろしてしまふなど、頗る險悪な態度に出るものさへ少くない。殊に多數の轎夫を傭ふ場合には、出先きでいつもの慣用手段を用ひたり、或はその中に一人二人の青頭取りがゐて、全體を悪化せしめたりして、益々旅行者を惱ませるやうな事がある。その邊は時と場合に應じ、こちらでも然るべく、緩急よろしきを得なくてはならぬことである。尤もそんなときは、充分言葉に通じてゐる者が居ない

と、大抵負けになり泣き寝入りになる場合が多いのである。

○

轎夫に對する最も萬全の策は、直接これを傭はないで、宿か又は公館かの手を經て、責任を持つて交渉をさせ、金は歸つてからといふ事にきめることである。しかしそれにしても勞役の事であるから、出先きで二時間乃至三時間置き位には食事をとりたがり、山寺に這入つて一同が飯の支度をさせるなど、口實を色々に設けては酒手をねだることが、一度や二度でない。結局そのねだられ賃も、惡くすると轎子賃以上になる事があるのだから、轎子を傭ふ時には、豫算を倍額位には見て置くの必要がある。それにしても轎子の乘心地は、充分に倍額の金を補ひ得て餘りがある位に情味の深いものであることは、前にもいつた通りである。唯始めから雲助の氣分をよく呑み込み、氣拙い事のないやう絶えず先手を打ち、こちらの肚を見せて置く事が肝腎である。一旦氣拙くなつてしまふと、折角の廬山の快味も浙東の詩興も、轎夫風情に打壞されて、思ひ出の惡い遊行となつてしまふ。この點は特に注意が必要である。

○

北支那の田舍を巡るには、多く轎子は顧られない。馬車が一般に用ひられ、土語で「マーツオ」と

いへば、一種いふべからざる北支那の旅の氣持が聯想される。大聲をはなつて、「マーツオ」と發音すれば、力強い馬車の氣分も、自ら躍動して來るのである。蒲鉾形に木綿を張つた屋根に、彈機のないガタ馬車で、支那馬がこれにつながれ、馬夫は多く長柄のつけ根の所に、ゆるく手綱をとつて腰をかけ、路面の惡い轍の中をガタビシヤと、搖られ搖られて行くのである。氣持惡るげに見えるが、馬夫は案外よい氣持で、首をたれ午睡をむさぼりつゝ、馬を信賴して田圃道を辿つて行く樣子といつたらない。

○

この蒲鉾馬車は、普通幌の中に這入ると、三方どちらも窓がなく、唯前方のみ開いてゐるので、數人一緒に乘合ふ時などは、その坐席のとりやうで、中には全然景色の見られないものが出來る。殊に北支那邊りの田舍道と來たら、天氣の時は埃がひどく、雨後は又泥が深いので、前の方に乘つた者は埃なり泥なりを喰はされる譯であるから、たまつたものでない。殊に動搖のはげしい爲めに、左右の柱に頭をぶつつけたり、その爲めヘルメツトや麥稈帽子を取落したりするやうな事も屢々ある。その點からいつて頬被むりか、西瓜皮帽（シーコワピーマオ）とかいつた支那式のものであると、都合がよいので、腕組みでもし乍ら搖られつゝこくり〳〵と呑ん氣をきめ込む事も出來る。

田舎のガタ馬車は、激しい動揺のために、旅客にとつてはかなり骨節が痛み、疲れを催さす事が一通りでない。路面次第では、命がけで左右の柱をかたく握つてゐなくては、安心がならぬといふ力瘤を入れた旅行をする者もある。しかし田舎の旅にそんな馬鹿力を費すのは愚なことで、矢張り馬夫相手に呑氣な戯談の一つも交しつゝ、燕山楚水、四方山ばなしに耽ける位のゆとりがあつてほしい。

田舎の道に行き暮れて、轎子や馬車の旅を、まだ程遠い都の城門へと急ぐ氣持は、詩的な情感に打包まれ、夢の國へでも遊んでゐる趣きがある。しかし、旅馴れぬ人の中には、却つてこれを氣持悪く思ひ、恐れ戰く人もないではない。暮色蒼然とした森の蔭から、薄暗い姿を現はした五六人の農夫を見ても、土匪が待伏してゐるのではないかと取越苦勞をしたり、腕を組んでゐる長袖の中にも、ピストルをしのばせゐるのではないかなどと心配する。さうして遂には、己れの小膽は棚に上げて、支那は人殺しの國、土匪の國だと自分ぎめに過信し、折角の旅によい支那を見得ない氣の毒な人達もゐる。かゝる人の支那觀こそ、自分は最も遺憾な極みとしてゐるのである。

轎子や馬車に托した支那の旅に、そんな心配は斷じて不必要である。田舎馬車に乘つて旅してゐる程度の人を見て、それに危害を加へようとするやうな者は、幾ら支那だからといつて決してゐない。その點から見てこの蒲鉾馬車は、旅の安全を期する上からいつても、確かに保護色を利用した方法であるともいへるのである。

○

南支那の馬車は、北方のそれとは違ひ、見た構造がハイカラで、幌の中は四五人相對して腰のかけられるやうに出來てゐる。御者は車上高く腰掛けに納り、威勢よく手綱をとつて行くのである。馬車賃も、北方のそれに較べて著しく高いが、文化の程度の進んでゐるだけに、仕方もないことであらう。

南支の旅の名所巡りをするには、蘇州杭州はもとより、何れの地點でもこの馬車によるのが、最も便利な方法である。こは相對して車上で話の出來るばかりでなく、一行の行動が常に一緒にとれる事が有難い。若し一日幾らときめて、借切つてしまへば、自由にこれを使ひこなされ、黃包車（ワンパオツヱ）（人力）の如く前後にばら〳〵になつたり、時には前の車臺を見失つたりするといふやうな心配がないのである。

南方の馬車の乘心地は、北方のそれとは違つて、バネがある爲めに動搖が少く、その上後ろの凭れる所は皮張りで、之に氣持よく洗濯した布がかゝつてゐたりして、仲々よい。しかしこれも亦備ふ時に、豫め賃金を判つきりきめて置かないと、あとでひどい目に會ふことがある。近來は殊に、日本人

と見ると難題を吹きかけ、法外な酒錢を要求して止まない。その點は轎子の雲助と先づ同類と見てよい。

○

支那の人力車は、北方では洋車（ヤンフォ）といひ、南方上海あたりでは、黄包車（ワンパオフォ）と呼んでゐる。日本の人力車の如く、箱が宙に高く上つてゐないで、何れも皆路面近く下り、極めて安定した氣持を乘客に與へる。そして柄は日本のよりも遙かに長く、車夫は兩臂を鋭くくの字に張つて、肩で調子を取りつゝ、足音靜かにパタ〳〵と駈け出すのである。大體日本の車夫よりも脚が長く、支那服のズボンをつけ、破れた支那靴をひつかけてゐる。地方によつては車臺に警鈴をつけ、前方の往來に妨げありと見るや、客自ら脚でこれを鳴らすやうになつたのもあり、中にはひき切りなしにチン〳〵音をさせて、警告を與へてゐる者がある。福州の城内に見えるものはこれである。又中には、長柄の先きに警鈴をつけ、長柄を握つてゐる手先きで、これを車夫自らが打鳴らしつゝ駈け出してゐるのもある。

支那街の道幅の狹い巷に、十臺二十臺と人力車が押寄せ、その各車夫が警鈴を亂打しつゝ「ダアツオ、ダアツオ」を連呼してゐる時の樣子は、如何にも城内らしい風情がある。濟南城内には殊に勇ましく之が見られる。又乘客が脚で打鳴らす鈴が、清らかな餘韻を巷の軒並みに響かせてゐるのも、城内らしい趣きを添へてゐる。すれ違ふのにも難しい位な巷であるから、人力車の去來は、支那街の乘物として、かなり往來の妨げになる。下手をすると、二十臺三十臺もが、何か事故のために巷に停電の形をとる時など、前車が動かない限り行けない譯で、進退谷まつてしまふ事も珍らしくない。殊に雨の巷の人力車の停滯と來たら、城内路上の見物である。

○

支那の旅に人力車を用ひる事は、時と場合によつては便利であるが、馬車の如く一致協同の動作が出來ないために、甚だしく困ることがある。

上海や南京などのやうに、車馬を織るやうな目抜きの往來へ、腕車を連れて乘込むことは注意したがよい。十字街などでは、四方八方から同じ樣な形の人力車が集つて來るので、結局道の片側へ一列になり、しかも自分達の仲間の間へ、いつとはなく、見も知らぬ者が、三臺五臺十臺とはさまつて來る。さうなると全く連絡がとれなくなり、大聲を張つて叫んで見た所で、騒がしい巷では何んの効力もない。一行の案内者は言葉も解り、支那の貨幣も持つてゐるが、後にはぐれた連中は、心細い事限りなく、車夫をしかつて見た所で日本語は通ぜず、どう仕樣よう術もなくなる。車夫に惡意がある譯でなくとも、已れも解らないまゝに前にゐる車について、右なり左なりを折れ曲り、何處とはなく行

く譯である。先頭の案内者は、後から一行がついて來てゐる事とのみ信じ、既に到着地點へ着いて見ると、驚く勿れ同行二名、後の人は待てと暮せどやつて來ない。かういつた辻褄の合はない人力車の觀光團は、上海の租界に於てさへ、常に見る所である。

殊にそれが夜の見物に、妙な方面へ出かけるといふ時など、一行は案内者ばかりを信頼し、車夫も皆心得てゐるものと早合點して、何んら不安なしに路傍で拾ひ集めた人力車に乘てゐると、チンジバラ〳〵になつたこんな場合、全く大海の捨小舟になつてしまふ。はぐれた一行は、我が宿の名も日本語では通じもせず、字に書けば尚更解らない。世界四十七ケ國の人々の集つてゐる所だけに、往來の人々は幾ら居ようとも、頼りになる者は一人も居ない。結局夜通し當てなしに引つぱられて、翌朝やつと和服の姿を見つけ、飛びつかんばかりの思ひで事情を話し、漸く自分一人淋しく宿へ歸つたなどいふ話もある。

一行の者が馴れぬ支那の巷で、辻車を拾つて行動を共にする位、危險無謀た事はない。その點は馬車に較べて、著しく危險率が多い。

○

尚車賃に就てのすつたもんだの五月蠅い事は、轎子や馬車と同樣で、改めていふ迄もない。往來の巡査を頼りに話をかけても、やゝもすると車夫の方とグルになり、好意をもつてくれない事すらある、時には又、巡査と馬車屋とがグルになり、人力車を長い樫の棒で擲りつけ、車夫をいぢめつけるなど、物凄い騒ぎを起す事などもある。何んにしても人力車馬車は、旅人にとつて五月蠅い事が多いから、注意の上にも注意を要する。

○

支那の乘物のうちに、小車（シャウツヲ）といふものがある。日本の旅行者には、殆んど利用されてゐないが、支那の旅行者、殊に中産階級以下の人々には、安上りの方法として重寶視されてゐる。

この小車は、土語では又一つに推車と呼ばれ、幅廣の大きな一つの車輪を中央に、左右に格子造りの臺が、翼のやうに擴げられた構造の一輪車である。その車臺を後から押して、巧みに操縦運轉にして行くので、進行中に一種異樣な軋る音を立ててゐる。山東地方の一輪車は、殊にその音が高く、城内の巷に「キイ、キイ」と響き渡つてゐる哀調は、如何にも詩的な情緒を唆るものである。

この小車は、人力車や馬車と違つて、闇夜の道を行くにも燈火をつけないために、この軋る音で行人をさけさせるやうな手段になつてゐる。たまに紙の一端をしぼり、中に蠟燭を立てて、提燈代りにしたものを手にしてゐる者を見る事もあるが、先づ普通は自分の足元は問題にせず、人を避けさせる

といふ目的のやうである。

南北各地ともこの小車は、荷物を運ぶために用ひたり、工場地帯では工場に通ふ女工の一群を乗せたり、又學校行きの兒女を數多乗せたり、或は田舎の百姓共が、山なす野菜をこれに積んで來たり、又引越し荷物を運んだり、その用途は實に廣い。面白いのになると、家財を片方に積み、一方に親子家族が並んで乗つかり、片足をぶら下げながら一家眷屬がよい氣持で、一人の苦力に押させつゝ場末の道から這入つて來る光景など、思ひ出としても懐しい。

○

支那の小車は、その乗り賃が最も廉で、その割に乗り手にとつては便利が多い爲めに、これによるのが最も經濟的でもあり、また支那らしくもある。上海郊外の閘行（シンパン）とか吳淞（ウソン）あたりへ、これで出かけるなどは、思ひつきとしてもよいことである。

支那の家庭は、概して經濟第一主義で、體裁などお構ひなく、安くて乗心地のよいといふ點で、この小車が最も民衆的に歡迎されてゐる。日本の紳士淑女は、まさかあんなものにといつた風で、見向きもしないが、それは全く喰はず嫌ひで、一所懸命淀みなく一直線に道を押してくれると、かなりスピードも出で、下手な馬車などよりも却つて早い。菜種咲くほか〳〵した春の野を行くには、この一輪車ぐらゐ氣持のよい乗物はない。馬車よりも却つて大勢を乗せる事が出來るのであるから、支那氣分たつぷりの小旅行には、是非共體驗して見る事をお勸めする。唯輪が一つであるから、左右兩翼が同じ重さになるやう加減しないと、車臺が傾き、押す苦力の苦勞が多い。

この小車の通ふ路は、路面が固く、又滑かに出來てゐる事が必要で、上海あたりの石の鋪道、又はアスファルトなどの所はとてもよい。青島あたりでは、わざ〳〵一輪車の爲めに、道の左右に一尺幅の花崗岩をひき、左側通行する所などは、轍のくぼくなつてゐるのを見る位である。城内の道路の如き幅の狹い所では、わづかにその車輪の幅だけある細道でも、立派にこれなら通じ得る譯であるから、支那には最も都合のよい乗物として發達したものである。

○

支那の乗物の奇拔なものとしては驢馬であらう。これには滑稽味もあり、勇ましさもあつて、かなり思ひ出が深い。南方では、蘇州見物に驛を下りると、鈴の音の賑かな驢馬が、數多旅客を待ち受けてゐる。姑蘇城外寒山寺の巡歷にも、他の乗物よりか、この驢馬にまたがつて、運河の左岸楊柳に沿ひつゝ行き、途中楓橋を訪ねるのも亦一興である。北支那は、俗にも南船北馬といはれる如く、到る所に驢馬の鳴き聲を聞く。城外に出かけるにも、なるべくこれを用ひる方が、折角の北支那の旅が

いきて来る。紅塵萬丈の八達嶺を訪ふにしても、荒涼たる山西の田舎道を行くにしても、驢馬あればこそと思ふ日が多い。

紳士らしい旅行をしようとする人は、かういつた純支那式の乗物を、時代後れのものの如く誤解してゐる人が多い。自動車でドライヴするよりか、ぴつたりと氣持の合つた驢公を相手に出かける方が支那の旅の眞相を摑む上にも早道である。

○

大體驢馬は、おとなしい動物であるが、時には意地の悪いのもゐる。そんな驢公に當つた人は、餘り鞭をつかはないで、首元を平手で輕く敲いてやるか、或は尻尾のつけ根のあたりを指でなでゝやるなど、その氣持を柔らげるやうにしてやる方がよい。無闇に鞭打つたりすると、自分の氣持は滿足するかも知れぬが、驢公は益々怒り出し、悪くすると落される心配がある。こぢれ出した驢公は、見かけによらず意地の悪いものである。

驢馬の鞍には、乗心地のよいのと、しつくり來ないのとがあり、又鐙にも長短がある。コンパスの短い者などは、脚が宙に浮いてぶらん〳〵するやうな事もあるから、乗る前にその邊はよく見定めて置かなければならぬ。しかしやゝ馴れて來れば、鞍のない裸の儘の方が、却つて自由がきいてよい。

太腿の疲れて來た時、横乗りをしたり、又後ろ乗りをして脚の疲れを醫するのにも、その方が便利である。殊に北支那の曠野の小徑を行く時などは、二人並んで行く譯にはいかず、何れかゞ先頭に立つて一列にならなくてはならぬのであるから、そんな時は後ろ向きに逆乗りし、輕く絆を取つて仲間の方に面と向ひ、談笑しつゝ行く方が、徒然の慰めにもなり、邊りの景色も一層面白く見えるといふものである。かういつた自由自在の乗り方は、少し體驗して來れば、譯なく出來るものである。

尚驢馬の賃金の問題であるが、これは距離できめるよりも、半日幾ら、一日幾らと定めて、馬夫の食料を別に見て取りきめるのが、普通の遣り方である。小車や驢馬は、割合に法外なほられ方をする場合が少いが、それも所によりけりであるから、事情の明かるい人に相談をかけるに越した事はない。

○

山東の田舎、其他北支那の奥地には、まゝ驢轎といつて、前後二頭立ての驢公にかつがせた轎子の乗物がある。これはつまり轎夫がかつぐ乗物を、家畜に代理させたもので、主としてぬかるみの深い田舎道や、人間の歩みづらい悪道などに多く利用されてゐる。

乗賃は無論普通の驢馬二頭代よりも高い。しかし如何にも田舎の趣きがたつぷりあつて、趣味の旅には一度試みて見るのもよからう。青島の郊外、卽墨河の綠蔭に散見する驢轎の姿などは、得もいはれぬ。

れぬ歴史的背景に映えて、繪を見るの感じがする。

○

北支那の奥地では、蒙古街道はいふに及ばず、稜々たる山巒の彼方、寂莫たる曠野の果てを、夕陽のしづもりに包まれながら、駱駝の長い行列が動いて行くのを見る。支那服に身を包んだ駝夫達は、絆もゆるく默々として道を歩いてゐる。或る者は、駝背にこつぼりとはまつたやうに乘つてゐる者もある。駱駝の首にぶら下げられた一尺にも余る大きな驛鈴は、運ぶ脚並みの調子につれて、何んともいへぬ大陸的な音を、地平線の彼方まで鳴り響かせてゐる。支那の旅に、かういつた大陸的な乘物に乘る事は、エジプトのピラミツト巡りと同じ様に、絶大な好印象を得る事であらう。北平から八達嶺に行く長城巡りも、駝公を利用する事にすれば、一段の興味が湊られる譯である。しかし駝背は毛が深く、埃を含む事が一通りでないので、潔癖性の日本人には、その點がどうかと思はれる。又駝公自分には、いふにいはれない獨特の臭氣が伴ふてゐる事も、承知してゐなければならない。駱駝は、性質も溫順であり、速力も相當に出る。駝店も各所にあつて、交渉すれば幾らでも譯なく話が出來る。しかし南支那では、絶えて駝公の姿を見た事がない。

○

尙乘物の序に、日本の强力に當る手合が、廬山山麓の宿の附近などに見出される。客の荷物を運搬するのを主な仕事とし、客の脚元を見て、乘合自動車から下りる觀光客を相手に、かなり物凄い態度でむかつて來る。西洋人などは、大荷物のない限りはこれにかゝり合はないので、我關せず焉の態度で行き過ぎてゐる。しかし中には、大きな寢臺、オルガン、ピアノ、大鞄など、驚くべきものを背に擔がせて、あの五千尺の峻坂を登らせてゐる。雲助の正體を現はして、不當な酒錢をねだる事のあるのも、無理からぬ氣持がする。しかし晝間はよいが、東方未明の頃、又は夜半の山道を、强力と共に登るなどは考へものである。山中山賊がゐる譯ではないが、この强力共が、居直り强盜、追剝と早變りをする實例は、一度ならず見聞してゐる所である。

○

顧れば四十幾度、支那の內地をあちこちと遊歷して來た中には、氣候や季節も選ばず、邊陲闇夜の登山や、奥地祕境の跋涉を、杖一つ持たずに唯一人、敢行し强行し來たつた體驗も、思ひ返せば隨分ある。何が一等自分を喜ばせたか、何が自分を苦しめたか、それすら今は支那の大陸に馴染み過ぎ、自分のための天地とも思はれて、かぞへて語らん術もない。しかし唯一つ、遊歷者はいつも赤裸々な人間の心に還るべきこと、ゆとりのある肚をつくること、その點だけは判つきりといふことが出來

る。眞つ裸で生れて來た人間の姿を見得ない人には、決して支那は解らないのである。たとへば轎夫であらうと強力であらうと、人間として取扱つて行けば、自ら打寛ろいで話題も出てくる。坂路で苦しからうと思へば、麓の宿で豫め用意して來た提燈を片手に、乘物から下りて、氣の向いたまゝ山道を、先きへ〳〵と歩いて行き、疲れたら又乘つて行くといふ遣り方も、支那の旅の思ひ出として、決して悪くは殘らない。如何に無智獰悪な轎夫強力にした所で、人情で行けば必ずついて來る。こちらの氣持が相手の心にうつれば、どんな人だつて手のつなげない道理はない。「太湖の海賊と語る」話を拙著「翰墨行脚」に書いたことがある。まして轎夫強力は、始めから海賊などと同類の者ではない。支那の旅に、この轎夫強力と交渉を持つことは、自分の心を練りためす、他山の石ともなる譯である。

その五　輪船その他の船

支那の旅を終へて、あれこれと回想に微笑む時、何一つとして驚かされないものはないけれ共、心靜かに我々の氣をとらへるものに、運河水郷の思ひ出がある。殊に南方のそれは著しく、あちこちに架せられた大石橋には、蔦柱がからみつき、橋側に深彫りされた優雅な名も、楊柳の影にいとさびて橋上に漁翁の姿をなくとも、碧空を背景にした一幅の畫趣、賞味するに足るものがある。殊にへの字なりに高く盛り上つた構造は、車の旅には厄介であるが、江南民船の遊客には、またと得難い風趣である。或は水上十字路の賑ひや、船上の民の水村に、ゆくりなくも行會つたり、畫舫の胡弓の優韻など、何一つとして忘れ得難い。

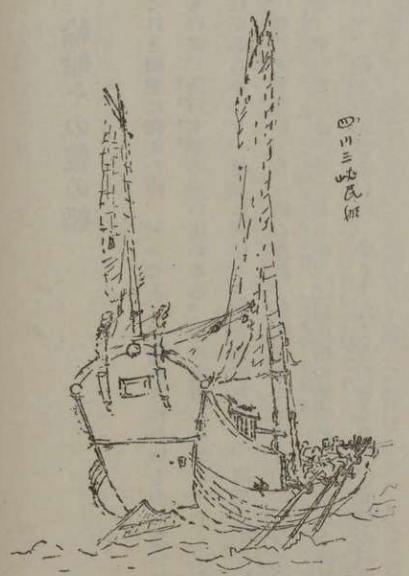
南船北馬の言葉も、今はもういひ古るされた。しかしこの言葉が持つ意味だけでは、到底飽き足らないものがあるのである。水の都ベニスといふ、しかし南支のあの蜘蛛の巢の如き運河網の水郷を、心置きなく遊んだ者には、それと比較するさへ滑稽に思へる。あの一望千里といはれる大陸に對して、鐵路架設の遲々として進行しないのも、一つには文化の程度にもよる事であるが、又一つには、

この運河水郷の發達に起因する事も、拒むことの出來ない事實である。

○

支那の旅には、この湖江運河の水郷を利用しない譯にはゆかない。これを行くには、輪船（汽船）があり、民船があり、划子（舢板）があり、その他渡船、曳船、大筏など、交通の大部分が水の利用にあるだけ、その種類も亦數へるに遑がないほどである。

長江を上る輪船には、日本の日清汽船や招商局、太古、怡和、三北などの輪船公司のものがあり、又四川の峽中には、地方的な輪船公司のものもある。又南北沿海航路は、大船は外國船



四川省即ち昔の巴蜀の天地として知られた秘長江上流を上下するジャンクの民船

小船は支那船に限られ、しかも支那船は、乘客を無制限にとるのと、船體が老朽なのとで海難事故を起すことが多い。日清汽船の長江方面に於ける航路は、後に漢口の所で詳記するつもりであるから、こゝには略すことゝする。

日本船や外國船には特等があり、洋食つき船室の設備があるほかに、支那一等二等三等の、特別な支那式の部屋もある。土語でこれを官艙、房艙、統艙（又は客艙）といつてゐる。このうち統艙即ち支那三等は、大きな共同部屋を持ち、食事はめいめい勝手にとる定めで、從つて運賃も極めて廉である。阿片をのむ客は、多くこの統艙にもぐり込んで

四川民船の三峽くだりに見る雄姿、左右兩舷に見る各艙にはそれぞれ八人八人の宛手漕手その位置につく

船が出るなり盛んにこれに耽つてゐるのを見る。

○

民船は機械力によらず手で漕ぎ、又帆を上げて走る支那在來の船である。田舎を行く農夫小商人等は、時間かまはずゆつくりと、民船によるのを普通としてゐる。その船賃は又驚くべく廉である。

○

划子（ホウツ）は江南地方獨特の船板で、日本の傳馬に相當するものである。

上海に見る划子は、半圓形の屋根を有し、漕ぎ手は左手で櫓をおさへ、右手で櫓綱を握つて漕いでゐる。その漕ぎ方は、支那獨特で、相當速力もある。冬は手袋やうの手套を綱にからみつけ、これに右手を差入れて漕いでゐる。水上を我が天地とし、風雪花鳥を友として、悠久な生活に身を委ねてゐる。これら舟人の朗らかな顔は、思ひ出すだに懐しい。

千山鳥の飛ぶこと絶え
萬徑人蹤滅す
孤舟蓑笠の翁
獨り釣る寒江の雪

江雪　柳宗元（子厚）

（千山鳥飛絶　萬徑人蹤滅　孤舟蓑笠翁　獨釣寒江雪）

白髭舟翁の風懐は、江雪の清雅にも比すべきであらう。

支那船は一體に、その舳先が鋭く尖つてゐず、左右に二本の角を出してゐるものや、又は箱形をしてゐる。

○

東海地方の民船は、魚の姿を描き、五彩の美に富むものが多い。そのうちでも、殊に福州の閩江、馬尾の港から漕ぎ出るものには、その規模が非常に大きく、且つ船側の彩色も、金銀紫白紅綠など豪奢を極めたもので、實に金殿玉樓の生活振りを其儘な、美術的のものをすら見る。時折これが黄海の沖合を經て、遠く大連の港外に、その優姿を浮べてゐるのを見る事がある。

また浙江の溫州、臺州から寧波、鎭海にかけての黒と青で描いた魚眼の民船は、上海の入口や、この邊りの水郷で、幾らでも見ることが出來る。帆檣に飜る紅または白の飛旒を見るのは、即ちこれらの民船である。

○

支那の民船は、近つけば見苦しく、遠望すれば風流である。蒙古襲來の繪巻物に見るやうな大船は、今もまだ幾らでも見られるが、破れた帆を茶布でつぎはぎしたものや、或は蘆の莖を敷き潰して網代に編んだ筵を綴り合せた帆は、甚だ間に合せで見苦しい。しかし眞帆片帆の使ひ別けは巧みで、特に船側に長方形の厚板を結びつけた即ちリーボード（鰭板）の用意のあるなどは、世界で最も發達したスカンヂナビヤ船の構造にも似て、絶對に風に吹き流さるゝ危險を防ぎ、又方向を調節する上の一等巧みな方法だといはれてゐる。

また長江流域夫々の水郷に見る民船には、四十數種類の構造特徴を有し、その櫓に櫂に又舵に、形の變つたものを見る。江蘇の船は安徽と異り、安徽のものは湖南湖北とその姿を變へてゐる。

○

更に三峽を遡つて、長江上流の四川に入れば、こゝの民船は又格別で、數百噸に餘る古の艨艟そのまゝな構造をなしてゐる。櫓の數も實に十梃二十梃の多きに達し、しかもその各々の櫓に、八人乃至十人の漕ぎ手がゐて、調子を合せた掛聲——いや、寧ろ思はず出る唸り聲も物凄く、あの坂落しに流れる四川の激瀬を、死力を盡して漕ぎ上るのである。艫の舵も扇形をした實に大きなもので、又舳には十間にも餘る長い舵を有し、それを操縦する舵夫の老練さは、また漕ぎ手以上の苦心を極めてゐる。若い時からこの四川の激瀬を乘切り、七十を越さなければ、この巧みな舵夫になる資格がないといはれてゐるだけでも、如何にその業が神域にまで達してゐなければならないかを、物語つて餘りがあらう。舵夫も漕ぎ手も四季を通じて裸體姿で、江岸の巖の色にも似た鐵の如き皮膚をしてゐる。

こんな激瀬を上るのに、漕ぎ手だけの力では到底至難なので、三峽の峽中には、曳子村といふ特殊な生活をしてゐる村がある。激瀬に差掛つた四川の民船を、二三百間にも餘る長い數條の竹索でひつぱりあげるので、江岸に穿つた岩徑を、百人にも餘る屈竟な若者が、四つ匍ひになり死力を盡して行く樣は、ボオルガの曳子のやうな呑氣なものではない。この邊の船の消息は、千哩下流の舟人などには、到底想像だも及ばない所である。古來四川三峽の水郷を描いた畫に、下流の優しい篷船などをあしらつてゐるのは、實際を知らぬ甘い空想で、手にして賞するに足るものではない。

○

船中に用ひる飲料水は、濁つた江水を汲み取つて用ひるのである。中には水瓶に明礬を投じ、泥を沈澱させて使用してゐるものもあるが、これは多くは輪船に於てのみ見る習慣で、一般にはその水郷に棲む魚と同じく、濁流をそのまゝ用ひ馴らされてゐる。

船内の食事は、これも亦頗る簡單な船料理で、その味は田舍式のものが多い。濁流を氣にしない境

涯に這入れば、料理のことなどは、批評するのも贅澤になつて來る。

○

船客の多くは、大荷物を持込んだ吳越同舟の手合であるが、每船每航、武裝した兵士が數人、意味ありげな面持で乘込んでゐる。これは多く、何れかの系統に屬する廻し者で、若し船底に銃器、彈藥阿片、銀貨などの密藏品でもある場合、寄港地の某方面と、合圖によつて連絡をとり、摘發せんとする手合である。又性のよくない武裝兵になると、只乘りするのは勿論のこと、船內に起つた喧嘩口論などを求めて仲裁し、相方から少なからぬ額を强要したり、或は又船長や買辦（コンプラドール）といふ。船中の世話人）などの內證の荷物まで探ぐつて、某方面に密告するなど、やらなければ損だといつたやうな手合もゐる。船內では、どうせ兵隊は鬼門の方で、船から摘み出すのにさへ、隨分骨を折つてゐるやうである。

しかし一般の乘客は、存外互ひに愛想もよく、熱茶を啜りながら夫々地方訛りを露骨に出し、大聲で語り明してゐる。麻雀をやつたり、サイコロを轉がしたり、五加皮を飮んだり、月に向つて胡弓を奏ぐつたりする者などもあつたり、隨分騷がしくはあるが、平和な空氣に滿ちてゐる。この兵隊とこの土民、これが現在の支那の兩極端を物語つてゐるものである。

○

統艙には、煙草、鑞詰、鷄の丸煮、長生果（南京豆）、點心、洋火（マツチ）などの賣店が、薄暗い階段の側に出來、又船內の心得や、船客の目を樂しませる聯なども壁に揭げられてゐる。寄港中の船には、船客のこみ合つてゐる間を縫ふて、手籃を提げた賣子が、

「香煙、香煙」（煙草）

「東洋萃果、長生果、要不要」、林檎、南京豆いりませんか）

などと、大聲で賣り歩いてゐる。耳かき、パイプ、玩具など、何くれとなく持つて來る。殊にパイプには、橫に針ほどの穴があり、覗いて見るやうになつたものなど、エロ氣分の客には喜ばれてゐるものもある。又中には、珍らしい繪だなどといつて、ポケツトから怪しげな手札寫眞の十二枚續きなどを持ち出し、聲を低うして賣つてゐる者もゐる。

○

支那名物の海賊は、船の旅では最も警戒を要するもので、外洋はもとより黃河では濟南の上流に、又洛陽の上流に、長江では、四川に、湖南に、湖北に、安徽に、江蘇にと、到る所に出沒し、水上こそは我が天地なりと、自由自在に活躍し、主として貨物船を襲ふてゐる。

長江江畔の柳塘に、時折り民船が真二つに瓜分せられたまゝ、立てて晒されてゐるのを見る事がある。これは、海賊船懲罰の見せしめで、一團の海賊を柳の下で銃殺の刑に處し、同時にその乘つてゐた船を瓜分して晒しものにし、鄕民漁夫に見せつけて、戒めとなしてゐるのである。蕪湖（ウーフウ）から九江（キユーキヤン）、武穴、黃石港あたりへ上る途上、この晒し船を見ることが多いのは、卽ちこの水鄕地方に、海賊の多いことを物語つてゐるものである。

又長江江口から浙江の沖、臺灣海峽にかけての、海上の黃色な外洋に出沒する海賊は、小型輪船が來ると見るや、棄ねて長い網で連絡をとつた二艘の小舟を持ち出し、その輪船の進路に、わざと位置をとつて網を張る。何げなく進む輪船が、その網に引つかかつたが最後、二艘の小舟は自ら引かれた形になつて、その輪船の兩舷にぴつたりと横づけになる。この時遲しと海賊共は、かねて用意した竿の鉤をサイドに引掛け、甲板によぢ登り、先づ無電のアンテナを切り、ピストルを振廻して船長を脅し、金庫の鍵を强奪したり、貨物を略奪したり、あらん限りの亂暴を働くのである。萬一船の方で萬策つき、なすがまゝに任せて置いたりすると、幾十人かの一團が襲ひ來つて、その輪船を占領し、島影の海賊村へと引張り行き、船ごとに略奪する場合すらもある。

凡て外洋の航海は、小型輪船によるのは危險で、近來客の方でも段々と用心をし、大型の船便を利用するやうになつた。臺灣新竹の海岸から、南は廣東安南の沖に至る亞細亞東南の外洋は、世界でも名高い海賊の本場で、その遣り方と被害の大きいことは、言語に絶するものがあるのである。

○

どうせ支那の旅は船の旅、いふべき事も際限がないほどあるが、旅程の順序の折々に、その場所に觸れて詳細は書くこゝとする。

その六　兩替屋

支那では、日本の貨幣が直接通用しないことはいふまでもない。從つて上陸の後、友人の手か或は宿屋の帳場かで、相當纏つた金を兩替することは、何よりも肝腎なことである。

人に賴んで兩替することを好まない者は、上海、天津、その他の開港地にある正金銀行、或は三井、住友、臺灣、朝鮮などの各銀行の支店へ、自ら出掛けて兩替するがよい。しかし兩替の相場は、大銀行は必ず率が悪く、それより支那人の兩替店、卽ち錢舖（チエンプ）（錢莊（チエンチヤン））を訪ねて、この後房に這入り、徐ろに算盤で話を進めれば、相當纏つた金なれば餘程割りよく替へられる。

錢莊の帳場は、眞鍮の棒の柵で嚴重に護られ、印度人の大男の護衞などがゐて、物凄い警戒振りを見せてゐる。自分自身の獨力で、如何にして己れを護つて行かねばならぬかといふ氣持を、刺戟されることが夥しい。この點からいつても、先づ兩替店を訪ねるといふことは、決して無駄なことではない。帳場に下つてゐる帳簿を見ると、流水帳（支出）謄清帳（決算）萬商雲集帳（大福帳）過清簿などの文字が見える。金の世界ながら、翰墨めいてゐて面白い。

小さい兩替店は、兩替の率は非常によいが、時に廣東の札や田舍の紙幣が雜つてゐたり、銀貨にしても民國九年或は十一年の通りの惡いものが雜つてゐたりするから、注意して改めなければならぬ。

○

又上海の支那銀行では、中國、交通、中南、四明などの大銀行があり、この邊りで兩替することは大丈夫である。けれ共、近來中央銀行の札も新しく出してゐるから、この點に多少の注意を要する。どうかすると中央銀行の札は現政府の保證はあつても、時折り取り付けもあつたり、信用が薄いやうである。

尙地方の銀行の兌換券は、餘程よく確かめる必要があり、又各札には、細字で上海なり天津なりの地方的な通用價値を示す文字が記入されてゐるから、その邊も特に改めなければならぬ。その文字に注意しないで受取つた時はあとでひどい目にあふ。

上海から輪船で天津に廻り、北平行きの火車の切符を買ひ求めようとする時、上海で使ひ殘した札を出したりすると、屹度拒絕される。よく見るとその札には、上海の文字が記入されてゐる。仕方なく附近の兩替店に飛び込ん、非常に割の惡い率で天津の札に兩替し、やつとの思ひで切符を求めたのはよいが、それがために一汽車後れて、北平車站の出迎への連中に、思はぬ迷惑をかけることなどは

よくある話である。同一な銀行から出てゐる札であるから、よさそうな譯であるけれ共、そこが仲々八釜しい。

札は大きく嵩張る缺點はあるけれ共、輕くて始末がよい。それ故旅する折は、面倒でも行地の札に兩替して置く方が便利である。その都度々々それが面倒だと思ふ人は、重くて不便であるが、銀貨の大洋（ターヤン）に替へるより他はない。これはどの地方でも適用する。若し金を携帶しないとすれば、正金なり、三井なりの信用狀に改めて、自署し、行先地で要るだけの金をとる方法もある。

○

支那の兩替屋は、大きいのを錢莊といひ、小さいのを錢舖又は錢店（チエンテイエン）と呼ぶ。街路を歩いてゐると、殆んど電車の各停留場毎にある位澤山ある。

小銀貨を銅貨に替へる程度の店には、百枚二百枚と積重ねた銅錢が、幾十本となく金網の中に用意され、中には紙に卷いて糊付けしたのもある。

一圓の銀貨を銅錢に替へて見ると、少しも一定してゐない。二百七十三枚になつたり、時には三百二三十枚といふ大變な數になつたりする。日本の貨幣流儀に、百枚の銅貨が一圓であるといふ常識を持つてゐると、とんでもない德をした氣持になる。しかし、それだけ銅貨の價が安いのであるから、

その邊のことを、南北各地何れに於ても心得てゐなければならぬ。

銅錢のことは、南方では銅幣（トンペイ）と呼び、又銅板（トンパン）とも云ふ、北方では之を銅子兒（トンツル）といふ。例へば上海では、四錢のことを四個銅幣（スウコトンペイ）といひ、北平では四個子兒（スウコツル）（銅の一字を省く）といつてゐる。かやうに呼び方も地方的に違つてゐる位で、金錢に關する知識は、特に細かい注意が必要である。

○

支那に於て現在行はれてゐる札、及び銀貨、銅貨の重な種類の大體を、左に列記して置かう。

紙幣——

十圓紙幣
五圓紙幣
一圓紙幣
二十錢紙幣（二角と云へば、大洋で別に小洋あり）
十錢紙幣（一角と云へば、大洋で別に小洋あり）
吊文紙幣（緡錢に相當するもの）
地方紙幣（奉天票又は哈大洋（ハーターヤン）の如し）

銀貨——

一圓銀貨（袁世凱の顔のもの、孫中山の顔のもの、メキシカンダラーなどあり）

二十錢小銀貨（小洋のみ、大洋相場のものなし）

十錢小銀貨（小洋の相場に限る、地方によつては流通せず）

五錢小銀貨（アラビヤ數字の5を透し彫りにした白銅貨で、上海の電車内のみに通用する）

銅貨——

一錢銅貨（質の善惡があり、地方の別があり、必ずしも通用價値を同じうせず）

二錢銅貨（奥地の田舍に通用し、一般的でない）

五錢銅貨（四川省にのみ用ひられ、その形大にして眞鍮製なり）

青錢——（制錢ともいひ、穴錢のことなり、今は名のみ殘り實用に見るところ殆んどなし）

大一厘錢（田舍の僻地に行はれゐたり、十枚が一錢に當る譯なれど一定せず）

小一厘錢（同上、その大いさまちまちなり）

緡錢（數多の穴錢に紐を通して長くしたもの、現在都會地では見ないが幾吊文と云ひ北滿地方にてはその票があまた行はる。標準の値は一定せず）

馬蹄銀——（貨幣ではないが、古來貨幣に準ずるものとして、今尚貿易取引上に重要視せらる）

二十兩（テール）（これ以上大形のものもあれど、普通はこれ以下のものが多い）

十兩（中形にして重要視せらる）

五兩（小形にして重要視せらる）

一兩（最小限度のもの）

尚テール（兩）とは海關兩（テール）などの語で知られ、貿易上の名稱に殘り、貨幣としては存してゐないのである。

○

以上述べた貨幣についての複雜な種類は、支那の世相を遺憾なく物語つてゐるものである。大洋、小洋、銅貨の間の關係が、十進法以外の複雜な組織を持ち、又地方別による相場の相違、或はその貨幣の眞僞の問題などの上に、それら全般に亘る相場の變動などをも伴ひ、七重八重の複雜な事情をかもしてゐるので、支那貨幣に關する智識ぐらゐ面倒なものはなく、且つこの方面のことは全く實地について旅行者が、自分で體驗を積むのほかないのである。支那貨幣の實地の運用が、胸算用で立派に出來るやうになれば、一廉の支那通といふ事が出來る。何にしても呑み込み難いのは、支那の貨幣制度

である。しかし、その難かしくて奥底の知れぬ幣制の複雑さが、取りも直さず支那世相の一般を物語つてゐるのである。

○

支那の旅で、日本人に幾度でもくり返して注意しておくべき事で、且つつまらない危險を呼び起す恐れのあるのは、前にもいつたやうに、財布を人の前で出す癖のある事である。それは絶對に各自に注意して直さなければならぬ事である。尚その上、日本人としては、勘定の際釣錢を改めて取る習慣を作る事である。といふのはその釣錢に腐札或は音の悪い貨幣がありはしないか、そこに氣をつける必要があるのである。又周圍のギザ〳〵の磨りへらされてゐるものがあり、或は又哀世凱の顔の頬の削り取られたものなどもあるから、特に注意を拂ふことである。やゝもすると、又自分の正直な氣持から相手を過信し、殆んど氣にかけないで釣錢を受取り、チンといふよい響きを發しない銀貨や、腐札を摑まされてゐたことに氣がつかなかつたりしてゐて、あとになり買物の際などに、兎角の失敗をやることがある。體裁の悪いなどいふことを氣にしないで、必ず釣錢は之を受取る時に、板の上に敲きつけて見るか、又は指頭に載せてその響きを聲くことを忘れてはならぬ。

支那店では、銀紛を集める爲めに、木箱に大洋銀を數多入れ、ガラン〳〵と打振りながら、磨滅させてゐる光景などを屢々見かける。又小刀で削りとる事もやり兼ねないのである。

○

支那服はポケツトが少ない爲めに、財布代用の肚兜（トウタイ）を、ズボンの上に腹帶としてしめ、臍のあたりに内袋をこしらへて、銀貨、札、銅貨の入れ別けをし、着流しの上衣で上を被ひ匿くしてゐる。これは一般支那人に、普通に見る金の携帶方法で、幾度も繰返す如く、支那に於ては金は全く祕密主義である。

しかし此處に最も不思議なのは、幾萬兩かの馬蹄銀を運ぶのに、全くの苦力任せで、一尺大の厚い木箱に小輪をつけ、二三間の網を數條結びつけるのみで、三々五々と上海のバンドを運んでゐる光景をよく見ることである。唯一人の監督もゐないのに、しかも最も確かに目的地へ屆けられ、未だ嘗て路上で不正なことが起つた例がないといふことは、習慣上とはいへ、最も支那らしくない金の運搬方法としての、奇蹟的事實であるといへる。

○

支那旅行に最も痛手を被むるのは、日支相方のかねの相場にバランスが取れず、高低が生じ、日本に不利益な場合の起つたときのことである。

極端に相場の悪い時は、日本金の百圓が、支那の四十弗を割つて三十七八弗にまで下つたことすらある。十五弗の緞子の土産品が、倍近くにもなつたり、旅費萬端を換算して見ると、目が飛び出る位で、千圓の旅費がわづか三四百弗にしかならぬことがあり、旅行の最後に餘つた金が百弗あつたとしても、日本金に直せば、たつた四十圓にもならぬといふ情けないこともある。

所がこれに引替へて、民國の十九年以來といふものは日本金百圓を兩替店に持込むと、默つてゐても二百二十七八弗と、更にその上、幾らかの銀貨をも添へてくれるといふ、今までにない割のよい率を見せたこともある。そのときは三百圓の旅費が、支那の金で六百八十弗にもなるのであるから、支那の旅をするとして、このやうな有難い時期を見たことは、殆んど空前のことである。

日本金の都合の悪い時に、支那の兩替屋から六百八十弗の現金でも受取らうとするには、日本金の千七百圓ばかりを手渡ししなければならなかつたこともあるのである。して見ると同じ六百餘弗に對して、こゝに三百圓と千七百圓といふ恐しい差額を見る。それ故銀相場の高い時に、支那から支那銀で以つて日本へ爲替を組んだとしたら、その割合で全く一夜成金が出來るわけである。

その七　郵便と電報

支那の旅行中、後に殘つてゐる家族を安心させるといふ事は、旅先きに於ける仕事の一つとして、忘れてはならぬ點である。兎角新聞紙上で、支那内地の不安が傳へられてゐる所から見ても、全く事情の解つてゐない父母兄弟は、餘計な取越し苦勞をして胸を痛めてゐる。留守中の家族の喜びは、いづこによらず旅先きからの通信である。

○

支那に大都會であつても、郵便を出す事は、日本のやうに自由ではなく、思ふに任かせないことが多い。電報打つなどは、殊に厄介である。況はんや一歩田舍に踏み出すと、郵便局を捜すことだけでも容易ではなく、たまに巷に綠色の郵便受函が吊されてゐても、目につかない場合が多い。その上田舍の郵便局は、夕方から先きは事務をとらず、葉書すら賣つてくれない所が多い。それ故、不斷から豫め葉書や切手の買ひだめをして置いて、宿であらうと峠の茶屋であらうと、暇さへあればいつでも書きためて置き、何處かで軒下の受函を見つけた時に投入するのが、一等よい方法である。下手をす

ると、一週間も十日も氣はついてゐながら、投函する方法がつかぬ事すらある。田舍の郵便くらゐ不便で思ふに任せぬことはない。

それでゐて事實村の人達は、何んら不自由を感じてゐない。用のある時は、郵便よりも自分で行くなり、使ひに手紙を持たせてやるなりして、しかも卽座に返事をとつて來るといつた方法を、確かなことと考へてゐるのであるから、郵便函の無視されるのも無理はない。郵便爲替だの、書留だのといふものは、萬止むを得ない他はやらないのが普通である。遠隔の地の送金法でも、飛脚制度によつてゐるのが一般で、每年南洋馬來あたりから、本國に送金する場合ですらも、信用のある飛脚が郵便爲替のかはりを務めてゐる。對人信用の固い支那の社會では、郵便よりも飛脚が重く見られてゐる事は當然である。

○

支那の郵便も、葉書、封書、小包、爲替などの、並び行はれてゐることはいふ迄もない。

葉書は、上海あたりでは市內が一錢五厘、全國及び日本に出すものは二錢と定められ、何れも大洋相場で、體裁は最近に日本が採つた葉書と同樣に、黃色い儘の厚手の紙が用ひられ、白く晒してない。しかし手さはりは、却つて日本のよりも手丈夫な氣持がする。表紙半分を宛名發信人の爲めに、後半は通信文にあてられてゐるから、日本の官製のそれよりも、餘計書ける譯である。

切手も、五厘から一錢二錢三錢と、順次出來てゐる事は、日本と同樣である。

又支那の郵便で、如何にも呑ん氣に感ぜられるのは、市內向きの葉書で、日本へ出したものが、不足稅の徵集もなく配達されてゐることで、大目に見てゐるのか、それともずぼらなのか、こんな所は支那らしい。又日本から出した葉書、或は封書が、一二ケ月の後數多配達不能の不筆がついて歸つて來るなどは、存外責任を持つて取扱はれてゐることも解る。

支那の郵便では、發信人の姓名は勿論、住所も記さないで、唯宛名と日附と消印のみを書いて出すのが一般である。殊に封書に於て然りである。しかし大抵その筆蹟から推定が出來るので、親書の祕密を重く見てゐる支那にあつては、これは當然の事と思ふ。支那封筒の紙の合せ目が、これを直接重ね合せる代りに、別のわざと破れ易い竹紙などをあてがつて糊づけしてゐるなどは、その意を用ひた苦心の跡なので、この點は日本の封筒よりも、過去の歷史に苦心の伴つてゐる事が推測せられるのである。尙支那封筒には封をする時には、糊をつけたものが一切なく馴れない者は、少なからぬ不便を感ずる。

○

支那電報は、相手が英語或はローマ字の讀める人ならば、横文字を使つた方が明確に解り、又便利の點が多い。普通英語或はローマ字は、十六字の綴り迄を一語と見なし、料金をその規定で計算するのである。例へば伊藤博文と書いても、ローマ字ならば十字であるから、一語で納まり、尚ゆとりをもつてゐる譯である。

しかし漢字の電報は、電報符號としては、漢字の形は出し得ない爲めに、從來便宜上四桁の數字、〇〇〇一より九九九九までを、夫々天地玄黄等の各文字に割當て、字の代りにその數字を連記して打つ事になつてゐる。それ故長文の電報でなくとも、受信器に現はれた電文は、のべつ幕なしのアラビヤ數字の羅列に過ぎない。電信局には、夫々その數字にあたる文字の原簿が具へられてゐて、飜譯料を添へた電報料金を仕拂つた者に對しては、世話のないやうにこれを漢字に譯して配達してくれる。しかし、局員に見られて都合の悪い文面であると、わざと數字の儘を受取り、その數字の羅列を、四桁毎に區切つて、自宅に備へられてゐる電報用文字表に照し、徐ろにこれを譯して意味を察するのである。何れにしても支那文電報は、かなり厄介な問題で、日本の片假名の如く簡單には行かない。尚各方面に、暗號電報の暗密に行はれてゐる事實のある事は、各國と變りはない。

○

普通郵便も電報郵便も、存外暇がかゝり、田舍の郵便配達の如きは、平均日に一度もなく、地方新聞の如きも、溜めて置いて便宜これを屆けるといふ所もあり、事務的に行つてゐない。これは日本でも山間僻地に這入れば、心安い爲めでもあらうが、その弊害が容易に拔け去ず、茶菓子の一つもだして撈らふ習慣になつてゐる。それと同樣に支那では、田舍でなくても月々相當心づけを怠る時は、配達の如何は掌中に握つてゐるといつた態度でゐる者もあり、若し排日騷ぎでも起つた時には、さつぱり當てにならなくなる。騷ぎなどのない平常にしても、例へば南京、蘇州あたりへ出す封書を、先方の同じ宛名で、領事館に一本、民會に一本、醫院轉交（氣附）で一本、更に自宅へ宛てゝ一本と、三重にも四重にも同じ内容のものを出すやうにする。これ程迄念に念を入れて置けば、二三通おさへられたとしても、どれか一つは手に這入る譯である。支那の事情を知らぬ人で、「城内の友人に手紙を出したのに、今だに返事をよこさない」と不足をたら〳〵いつてゐるのを、よく見聞することがあるが、先方では何んら配達を受けて居らないといつた頓珍漢なことが頻々ある。この邊は、支那でなくては見られない現象で、以つて如何に支那の官憲なり、配達人なりの裏面が、複雜であるかを知るに足るのである。價格表記で友人の王大楨君の杭州の自宅へ送金した香奠なども、鐵砲の彈と同樣、一向先方に着いてゐないなど、苦い經驗をなめてゐる。しかし立派な綺葉書などで、無事四川の奥地ま

で著いてゐることもあるのだから、さう見くびつたものでもない。

○

尙支那の旅には、郵政局から出版した綠の表紙の「郵政地圖」が、最も正確であり、又交通の程度も解つて、便利視せられてゐる。念入りの省別地圖よりも、簡にして要を得、郵局の分布、その間の配達系統なども明示されてゐて、全支の旅行には參考になる點が多い。

尙著者が外務省書記官岩村成允君と共編の中華民國新地圖（一枚もの）、交通物產詳記（神谷書店發刊）のものもある。今日支那の旅に適當のよい地圖のないのは、何よりも遺憾なことである。

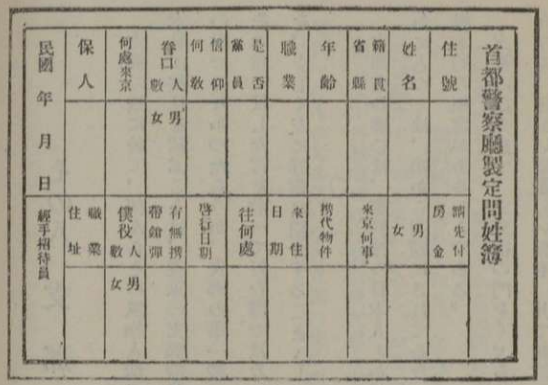
その八　支那宿

支那の旅に於て、何んらその風物人情に接觸のない日本宿を選び、支那の匂ひの全然見出されぬ日本疊に旅枕を結ぶことは、從來の支那觀光に於ける態度氣分の中で、最も注意せねばならぬ自家矚著の點ではなかつたらうか。支那の第一戰に立つて旅館業を營んでゐる、各地の日本人を無視したり、その意に反した言を敢へて好む譯ではないが、支那を理解するといふ大きい立場から、支那宿の內容を、少しく左に詳細に紹介することゝした。

○

支那宿の感じは、潔癖性の日本人とか、細かい所を氣にする日本人とか、異鄕を淋しがる日本人とかにとつては、頭から問題にされてゐない。なぜか？　それは日支人間に於ける宿の考へ方の上に、根本的の相違があるからである。

支那の旅先きで、支那宿の門をくゞらんとする人は、先づ努めて支那式の氣分になりすまし、潔癖な點も、細かい氣難しい點も、凡て超越して、大まかな呑ん氣な氣持に、自分を變へてしまふといふ



支那旅館宿帳の尖端を切る南京の旅客身許調べ他の地方ではこれ程細かくは訊き正されないなり

覺悟が必要なのである。其處迄の肚がきまらず、無理に强ひられ支那宿に這入つた所で、これでやり切れぬと、這々の體で逃げ出すが落ちである。支那を知らうとする者が、支那宿の一つも見極めることが出來ないやうでは、百の蔣介石に會つた所で、千の萬壽山を見た所で、何んら根柢に觸れない上面の支那觀光となるに過ぎない。

○

支那宿の日本人にしつくり來ない點は、第一その部屋が大陸的で、細かい點に注意の行屆いて居らず、ガランとした所にあるのである。壁は白く塗られてゐても、さはれば白い粉がついたり、桐油、ペンキで上塗りがされてゐても、大ざつぱな仕上げであつたり、又白紙が貼られてゐても、壁の片隅が剝げて、土が垂れ下つてゐるといふ有樣で、日本人の氣持に合つた飾りは、少しも施されてゐない。しかし棒樹や楊柳の窓邊に、時には唐人もどきの旅愁を詠じた七言絶句が落書されてゐたり、「掃風」「五福臨門」などの八分隷や、「聽泉」「出門見喜」などの篆書の、如何にも風韻の高い篇額が揭げられてゐたり、或は

人に千秋の志あり
家に萬卷の書を藏す

（人有千秋志　家藏萬卷書）

などの聯がかけてあつたりして、何處となく翰墨的な氣分が橫溢してゐるのを見ることもある。大體日本人と支那人との間に於て、宿といふものに對する概念は、そこに甚だしい隔りがあるのであるから、その隔りに思ひを致さず、唯日本宿を標準にして支那宿を批評して見た所で、全くそれは當つてゐない譯である。支那宿に泊るといふ事は、その點で既に支那を知らんとするものにとり、重大な第一步であることを思はねばならぬ。

○

支那宿の室内には、寢臺の外に、八仙卓、椅子、茶几、洗面器、鉢植、馬桶（便器）位な調度があるだけで、他には何んら用意がない。しかし戸閉りや窓の用心は甚だよく、ドアーのない宿は稀れで

ある。尙細かく見て行くと、卓上の壁に宿泊規定の印刷ビラが示されてゐたり、或は

一、私吸阿片（阿片を私かに吸ふ勿れ）
二、聚賭麻雀（麻雀の賭博をやる勿れ）
三、招引娼妓（娼妓を引張り込む勿れ）

民國二十年二月　廳長　吳思豫

などの掲示のある處があつたりする。南支の氣のきいた旅館にした所で、わづかに電燈の飾り笠が幾らか美しい位なもので、大した事はない。床柱を背負はなくてはといふ、日本戀しさの旅人には、支那宿は無論落第である。

支那宿に親しみの氣持を持ちたいと思ひ乍ら持つことの出來ないのは、多くは便所の關係である。北方の田舍は、壁の外側に奥深く煉瓦が二つ置かれてゐて、犬又は豚の番をしてゐる所、南方では部屋の中に用意された馬桶の上に腰をかけ、人前構はず用足しをする勇氣を出さねばならぬ事、これが何よりも閉口させられる難關である。この難關を突破してしまへば、後の事は凡て平々凡々で、寧ろ日本宿の如く、側に來て細かい事に小うるさく世話をやきたがる者もなく、萬事自分の氣持一杯で、思ふがまゝ振舞へるから、甚だ氣樂であつてよい。

○

支那宿は食事のついてゐないのが原則である。特に賴めば、簡單な朝食くらゐは用意してもくれる。けれ共、支那の習慣として、晝も晩も宿で食事する者は滅多になく、その邊は到つて呑ん氣である。從つて宿泊料も、單に泊り賃だけでそれに一割見當の酒錢を與へればよい。

大規模の旅館であると、勘定のきめが正午を限りにしてゐるから、おそくも十一時半位までに宿を立つ算段にするのがよい。若し翌日午後にまたがつて、鞄一つでも部屋に置いて留守乍ら占領してゐたことにしてゐると、たとへ一時間であらうと、二時間であらうと、二日分をとられる。萬止むを得なければ、勘定は午前中に濟ませて部屋を明渡し、鞄は帳場の一隅へ預けて置くといつた方法の方が、要領のよい旅立ちのやり方である。この習慣を知らない爲めに、宿泊二十四時間を楯にとり、二日分の勘定云々で、主客相爭ふてゐる光景を見る事がある。

尙馴れぬ旅の客は、勘定の支拂ひ、乘物の傭ひ方など、一切を番頭に任せて立替へてもらつた方が、多少の上前ははねられるにしても、大きな損がなく、先づ安心な遣り方である。

○

普通支那宿は、特別の食事をいひつけない限りは、何時になつても用意をしないのがきまりである

から、來客などがあつても、共に誘ひ出して心當りの菜館（ツァイクワン）に足を向ける。宿は單に寢る事と、來客に面會する事と、入浴する位がせいぐ〳〵である。

普通正面の廣い土間を客廳といひ、大きな姿見や、聯、篇額、置物、花瓶などの飾りつけがあるほかに、八仙卓や椅子、茶几などの調度の立派なのが、壁に沿ふてずらりと並べられてゐる。入口の賦（チヤン）房（ファン）（帳場）の側の壁には、幾十人といふ泊り客の名前と住所が、王先生廣東、陳先生四川、蔣先生上海、などと、一目瞭然に掲示せられ、前夜來たばかりの客に、滕先生東洋（トンヤン）（日本）、と自分の名前が白字せられた黒板を見るにつけても、一層懐かしく感ぜられる。時には、宿の門を這入つて客廳に立つたまゝ

座中千里近し
簷外四山低し

（座中千里近　簷外四山低）

などゝいふ聯の句を見てゐると、番頭が出て來て茶を出す。柔かい態度で挨拶してゐると、日本人とは露知らず、支那服支那帽の自分へ、廣東から來たかといふ「さうだ、廣東來的（ライア）」と答へる。すると巻て黒板にこんどは、滕先生廣東と白書されてゐるのを興味深く眺める。

○

宿にその友人を訪ねて來た人は、客廳で訪ねる旅客の在否を確かめ、番頭なりボーイなりに、その部屋の番號を目當てに案内される。しかし來客が、さまで親しい友でない場合は、客廳に待つてゐてもらつて、姿見の前あたりで聯の句を眺めつゝ、要談に這入るのが普通である。その席では、西瓜子（シークワ）などは出ないが、熱茶と蒸した手拭くらゐが普通出る。段々話が進んで、他の來客と立て合ふやうになれば、自然「如何です、私の部屋へ」と自ら案内し、煙草を出し、燐寸をとつて自ら火を點じて差し出す所までやる。客は恐縮し乍らも、よい氣持になつて、增々話が佳境に入る。設備のよい新式の宿であると、風呂ボーイに用意をさせ、互ひに譲り合つて前後に入浴をすませ、よい氣持で晩餐に出かけるとか、又はかねて招かれてゐる某君子の宅へ一緒に行くとか、そんな時は、既に乘物の轎子が門に來て待つてゐるといふ段取りになるのである。

かういつた支那宿の氣分は、誠に大まかであるが、はかどりよく垢抜けがしてゐて、而も餘韻嫋々、そのうちに呑ん氣な氣分が漂つてゐる、用語が充分に操つれなくても、大體の話相手さへ出來れば、相手の方でも半ば察してくれるので、言葉よりも氣分が大事である。今出かけやうといふ際に、先方から電話で、乘物を廻はすからとかいふやうな親切な氣分を味ふことも、支那の本當の旅を味つた者

でなければ解らないと思ふ。

○

支那宿の表看板には、「悦來旅館」とか、「迎賓旅社」とか、「紹興旅館」とか、或は「老公大（ラオコンタ）」「惠中（クエツン）」「一品香（イツピンシヤン）」などと、舊來の屋號の文字を見るのが普通であるが、又近來は、半ば西洋風を支那風に加味したモダン旅館が現はれて來た。これは凡て「中西旅館」といふ抽象名詞で總稱され、その表看板を掲げてゐる。洋風の枕の被ひや、電氣のスタンドなどを置いて、新人達の氣持に添ふやうハイカラな氣持を示してゐる。

しかし支那宿は、概して採光が悪く、薄暗いのが一般で、その方が氣持を落着ける特徴を有してゐる。窓は小さく、廊下は深い。白壁又は白紙を貼つて、多少の明るい氣分を工風してゐるうちもあるが、一般は必ずしもさうではない。

北方の宿の客室は、ろくに寢臺の置かれてゐるのも少く、中等以下の旅館になれば、床に敷物が敷かれてゐるのが、めつけもの位である。

北方の寢臺の少いのに較べて、南方支那の宿は、幾ら下の下まで下つて見ても、ちやんとした四本柱の寢臺が用意され、宿の等級にもよるが、その寢臺の床には、金網又は籐で編んだもの、又は棕梠で編んだもの、又は棕梠繩で編んだものなどがあり、餘程ひどいのになつても、板張りに敷物がつけられてゐる。そして多くは、紅綠紫などはでやかな絹表の洗濯された夜具が縦長く折り疊まれて、寢臺の一方に飾られてゐる。四本柱の廻りには、春夏秋冬四季を通じて、白布の蚊帳が吊されてゐる爲め、冬などは殊に枕元が暖かく、携帶品などもその中に藏めて置かれる。

清潔な宿には、夜具に南京虫の出る恐れはない譯であるが、こればかりは油斷がならぬから、寢る前に二つ重ねられてゐる洋風の枕などは、よく調べて確かめるなり、除虫菊などを蒔いて置く方が安全である。

○

南方には人の嫌ふ蝎の姿は見ないが、北方では屢々出くわすことがある。手拭を用ひる時、靴をはく時、下敷の鞄を持ち上げる時など、じめ〳〵した所に靜かにかくれてゐるから、念を入れた上にも念を入れなくてはならぬ。北支那の害虫のうちで、これにやられると痛いばかりではなく、忽ち毒が全身に廻る。部屋のボーイに頼んで、一匹二十五錢で買つてやるといひつければ、近所から手當り次第採集して來てくれるので、アルコール漬の瓶詰を土産物にするなどは、好個のしろ物である。

夏の午後、臍など出して午寢をしてゐると、胸のあたりなどに登つて、そろ〳〵と歩いてゐる事が

ある。見つけたら最後、團扇で靜にこれをすくひ上げるのが何よりである。若し上から敲きつけたりなどしようものなら、反抗的に卽坐にさゝれる。すると全身へ瞬く間に毒液が廻り、危險な狀態に陷る事がある。萬一さゝれた場合は、何はともあれその局部をいち早くメスで切り取り、その作用を擴大せしめないやうに、豫防することが肝腎である。道理で昔から、蛇蝎の如く恐るゝといふのも、實物を見ると一層その感を深くする。

○

支那宿の衞生狀態は、北方は空氣乾燥といふ天然に惠まれてゐるので、殆んどこの點は問題を超越してゐる。氣にすれば際限はないが、大體土地の住民と同じ行き方をするのが支那の旅の常道であるから、別段氣に病む必要はない。殊に田舍宿の部屋は簡單明瞭で、殺風景な位に何物も用意されてゐないのであるから、先づ空家に寢かされるよりはましだといふ覺悟がついて居れば、さして苦にもならぬ。

南方の支那宿は、北方に較べると甚だしう文化的である。部屋には大きな唾壺を置き、庭には下水のはけ口を注意し、煙出しの點や臺所邊りも、年一年と衞生に適ふやう改善されつゝある。何分にも住民が無頓着で、あの立派な體格で凡てを突破しようといふ、意氣の旺んな氣魄が見えてゐるのと、南方は到る所運河水鄕なので、何物をも凡て水で洗ひ淸めてしまふといふ天惠があるので、北方より文化的に進步の早いのは當然なことである。從つて空氣は濕氣を帶びてこそ居れ、存外その方面の心配はない。殊に熱茶を飮み、熱い料理を夏の炎天にも欠かさずたべてゐるのであるから、日本人が考へるやうな衞生上の心配は、結果の上から見て決してない。

近來三民主義の流行熱から、衞生方面の宣傳が城內に、街に、村に、盛んであるが、しかし實際に旅行して見ると、その宣傳の如く大したこともない。道路衞生なども、依然として變りがなく、砂糖黍を嚙み締めた滓など、南支到る所の路上にちらばつてゐて、これに箒を加へてゐる者など、見たことがない。

○

尙宿の用心の點は、これ又心配すれば際限のないことである。特に大金を携帶してゐなければ、何んら心配の必要はない。又多少所持してゐる場合は、賬房（チャン・ファン）（帳場）の主任に、封印をして預けて置くのが安心である。賴まれたら最後絕對的な責任をもつて保管してくれることは、昔からの習慣で、これには全く確實性がある。

用心の點に氣を配る人は、兎角ピストルを持ちたがつたり、人知れぬ何物かを持つ癖がある。これ

が悪い事は、前にも再三述べた通りである。所が何物も愚して居らず、虚心坦懐、手鞄一つで泊つてゐる時などは、番頭など〻話し合つてゐるうち、話題の都合では鞄を開き、何んといふ事なく趣味的に携帯品を見せてやるのもよい。例へば安全剃刀にしても、馬鹿に面白がる。或は西洋剃刀を皮で砥ぐにしても、これ亦生れて始めてと見えて、興ずる事夥しい。何んでも一つ面白く思はせると、後はこちらに好意を持ち、親しみの情を寄せて來るやうになるのは、何處も同じい人情の機微で、無用心な事は、番頭の方から注意してくれるやうになる。

○

支那宿の帳場には、北方では掌櫃的（チャンクイ）又は掌櫃（チャンクイ）、南方では東家（トンカ）又は老班（ラオパン）といふ、日本の番頭に當る者がゐる。主人そのものを、又かやうに呼んでゐる事もある。

宿に着けば、先づ帳場を覗いて、この一語を發して呼びかける。すると大抵、首の太い大まかな老爺が出て來て、會釋をする。その他上等の宿の帳場には數多の店員小僧達が居り、卓上には硯、筆、水滴、落花流水など風韻のある表紙の書かれた厚ぼつたい帳面が、無雜作にひろげられて、客の出入を大聲して挨拶してゐる。

北方では、眞冬になると、煤球兒（メイチュル）（小さき炭團）を入れた支那火鉢を置いて、暖房用に供し、口の長さ一尺もあらうといふ、大きな眞鍮の茶瓶を上にかけて、ガラ〳〵湯をたぎらせてゐる。爰に引寄せられて帳場に這入り、冗談などをいつてゐると、卓上に熱茶を出して「請坐（チンヅウ）、請坐（チンヅウ）」と椅子を勸める。その邊の愛嬌振りといつたら可愛い。帳場内部の氣持は、又何んともいへぬ暖かみとゆとりがある。かうして特に親しくしてゐると、外出がおそくなつて歸らうと、預けものをしようと、我儘がきゝ、手土産の一つも持つて歸つてやると、馬鹿に喜ぶものである。

○

支那宿の豪所は、前にもいつた通り、客に食事を出さないのがきまりであるが、しかし宿のうちの者だけでも相當に大勢であり、又申出でのあつた客の飯をつくる用意などで、相當時刻前は取込んでゐる。

山東方面では、名物の白菜、山東牛といつたものから、日本で餘り見ない魚類、或は河南料理をつくる時には河蛇の如き物珍らしい材料を、大きい一抱えもある丸太の俎の上で、むさ〳〵切つてゐる。しかもその庖丁といふのが、六寸大の鉞形のものや、或は一尺大の厚ぼつたい長方形のもので、それを輕くこなしてゐる所などは、支那でなくては見られぬ荒らごなしの場面である。

田舍の宿では、奥の裏口に豚が飼つてあつたり、鴨子（ヤウヅ）が飼つてあつたりなど、その生きものを見て

ねては、御馳走もうまくないと思はれるのは日本人の氣持だけで、あちらの人は平氣でこれを屠り、又料理をして無雜作に客の食前に出す。

支那宿では茶館に出かけるよりも、番頭達に賴んで、手製料理でやつてもらつた方が安くもあり、その間に得る所も多いのであるが、この邊は支那宿を我が家の如く考へてゐる者でなくては、一寸難しい相談であらう。

○

支那宿に逗留してゐると、隣室には孫先生、その先きの部屋には唐先生などと、五寸位な墨塗の札が、部屋の入口に揭げてあるのが見える。大規模の宿になると、三階四階五階夫々廊下に沿ふて、懷しげな名札が幾十と讀まれる。何れも賬房の揭示板に見えてゐる泊り客で、夫々省名が解つてゐるけれ共、役人であるのか、商人であるのか、漫遊客であるのか、その邊は解つてゐない。壁から洩れる話聲の調子を聞いてゐると、孫さんは廣東語で話してゐるやうだし、唐さんの方は品のよい北京語で話合つてゐるといつた風で、廊下で出くわしても、安心の出來る紹介者を得ない限りは、表面の挨拶くらゐはしても、さう立入つて話合ふ譯には行かない。

しかし田舍の小さい宿になると、一部屋に二人泊るやうに、寢臺が鍵の手に並べられてゐるといつた有樣である。旅の疲れた足で、黃昏時の城內に這入り、最寄りの宿を訪ねて、部屋の交涉をする。

『老班、賴むよ』

『相客がゐてよければ寢臺はありますが』

『それで結構』

船の客室と思へば、見知らない旅人の同室も、何んら苦痛なものではない。のみならず不案內な旅先きで、宿の一室に相客と泊り合せることは、寧ろ色々な點に便宜が得られる。事情の解らぬ事を質問することも出來れば、都合ではそれから先きの旅程を打合せて、一日や二日行動を共にすることも出來る譯である。どうかすると宿で共に食事をあつらへたり、又出かけたり、相手の妨げにならぬ程度に、遠慮しないで思ふ儘を語つて見るのがよい。存外はき〳〵と受け答があつて、宿の夜話は意外にも得る所が多いものである。

○

支那宿の夜は、泊り客に對して恐れを抱いたり、疑心暗鬼を持たない方が、支那宿の實際の價値を體驗し得られるのである。日本人は兎角心に立て隔てをつくり、接近する事をさけたがる傾きのあるのはよくない。若し來客などがあつて、取次ぎの名刺が持込まれた時は、喜んで辭を低うして面會す

べきである。多少の言葉が出來れば、次から次へと話題もふえて、結局支那宿の興味を增して來る。

しかし宿の取次ぎは、自分の不在の時など存外冷淡で、强いて來客の意思を尊重し、歸宿後報告をしてくれる場合が尠い。それ故若し自分で宿に人を訪ねる如き場合は、取次ぎを當てにせず、手紙で書置きをして置く方が確かである。不在中の電話など、殆んどこちらへ意の達しない事がおきまりである。さういつた取次ぎの方面は、支那宿は誠に賴りない。不在中に買物を屆けさせる場合にしても、歸る時刻を告げて、兎も角待たせて置く方が間違ひがない。支那宿はその點では、驛の待合所のやうな感じがする事を承知してゐなくてはならぬ。

○

宿に滯在中。客の名刺を手にした場合は、第一回目はこれを貰つて置く事はよいが、二度目から後は、恭々しく立つて、兩手でこれを客に返すのが禮である。田舍の名士、村夫子などは、訪ねて來る時には七八寸もある紅唐紙の大名刺に、木版で墨色黑々と印刷したものを持つて來る事がある。近來、白の普通の名刺に段々と變つて來てゐるが、しかし山寺の禪僧とか、田舍の土豪あたりには、その名殘りをとゞめてゐる。支那服のポケツトに入れるには、形がくづれて困る。之を二つ折りにしたり、不體裁になるのはいけないから、童子をつれてわざ〳〵名刺を持たせて來る。

自分の手元にも、湖南の學者で戲曲通の、故葉德輝先生や、又香港の謝家寶先生の大名刺を始め、幾枚かを思ひ出に蒐集してゐる。かういつた紅の大物は、二つに折ることは最も禮を缺く譯であるから、何處迄も廣げたまゝ卓上に置くのである。

○

支那宿に落着いて、暫く此處を根據に活動しようとする際、先づ第一にぶつつかるのは、乘物の問題である。

田舍の轎子や驢馬はもとより、馬車にしても、一輪車にしても、或は民船にしても、これらの交涉は大體旅客自ら當らない方がよい。都會で人力車、自動車をつかまへるにしても、矢張り宿の番頭の手で、顏馴染みのものを傭はせる方が、多少賃金は多くつくけれ共、凡てにつけて安心である。若しやのことのあつた際に、これが責任を持たせることも出來るし、人柄も解つてゐる點で、何處となく安心が出來る。下手に安上りなことを考へ、片言雜りで自ら交涉などして、辻褄の合はぬことになつた話は、よく聞く所である。日本旅館にゐて傭はせると、日本宿の格式を勘定に入れるので、これは又遙かに高くとられる。

幾ら何んでも無言の行では、行つた先きで下りたとしても、待つてゐるべきか歸つてよいのか、そ

の時の都合でどうなるか解らぬといふ時など、筆談では相手に解らぬから、多少の用語を心得て置くに越したことはない。しかし車賃は、何れにしても宿に歸つてから拂ふのが、間違ひがなくてよい。しかし支那宿のたちのよくない番頭にひつかゝると、こちらで目的地へ行かうとしても、乘物を贊成してくれないで、やれ途中に土匪が出るの何んのと、口實を設けて、立派に午後往復の出來る所を、今一泊させようといふトリツクにはめられる客も少くない。殊に田舍の淋しい驛前の支那宿や、外人を取扱ひつけてゐる中西旅館の主人などにはその手が慣用手段となつてゐる。

最近自分達も、山東曲阜驛の前にある中西旅館の主人武といふのにこの種の罠にかゝりかけた事があつた。驛に下車するなり、取りきめて置いた馬車の馬を、車臺から取りはづさせ、馬夫を睨みつけてゐるといつた態度である。結局一部屋借切り、鞄を置くことゝして承知をさせ、再び馬をつけさせて薄暮の泗水を渡り、十八町の田舍道を曲阜城へと急いだのであつた。かういつた時には、何んら途中に故障はなくても、旅人と見るとうまい事をいつて罠にかける事のある點に、肚をしめてゐなければならぬ。

○

支那宿の泊り賃は、その宿の格式にもよることであるが、結局部屋料を差すものである。例へば杭州西湖畔の新新旅館の如きは、水を隔てゝ黃鶴亭と相對してゐる三階ベランダ附の最上の部屋が、一人前八弗、但し二人部屋であるから、二人同宿すれば六弗宛である。これを最上の客室として、以下四弗三弗二弗から、一弗七十五錢一弗四十錢の一人部屋等もあり、その最も廉な室にしても、八疊の間の廣さがあり、洋風のベツドに洗濯をした寢具が、小ざつぱりと具へられ、椅子テーブルも無論具備してゐる。銀相場を換算して見ると、最近日本金の六十錢にも當らないのであるから、日本の木賃宿と相去ること遠くない譯である。

名所舊蹟などのない田舍の小さい宿になると、最上の部屋が一弗內外、安いので三四十錢、極端なのになると十四五錢のものもある。これとても彈力性のある棕梠張りの寢臺に夜具もついてゐて、四季蚊帳のついてゐることは、前に述べた通りである。

上海の一流所の支那宿は、先づ大中華、大東旅社、東亞旅社、惠中あたりで、極上が十五弗位から十弗位、普通は五六弗の所である。しかも部屋は大きいのになると、三十疊位のもあり、十疊位のもある。寢臺は一つ又は二つ置かれ、比較的清潔である。風呂も洋式で、いつでも這入り得る設備になつてゐる。風呂のつかない小さい部屋は、二弗半から四弗まで、日本金にして一圓から二圓までの間で、部屋數が非常に多い。しかし大抵皆滿員で、餘程前に明くのを待つて約束をしないと、部屋がと

れない。しかし一品香、惠中の如き從來の舊式の支那宿では、價も廉で、應接間娯樂所なども、支那式に出來てをり、自ら違つた味ひがある。虹口方面には、北四川路に虹口大旅社といふのがあつて、菜館を兼ねてゐる。これも亦部屋が多くて、價も高くない。

○

一般に支那宿は、呑ん氣な事はこの上もなく、趣味もあり、安くもあり、殆んど申し分はないのであるが、中には公安局の臨檢を五月蠅がる人があつたり、又その臨檢に來る事を全然知らない人もある。禁制品を持込んだり、ピストルをしのばせてゐたりすると、甚だ穩かでないとして目をつけられたり、書入れの多い地圖を携帶してゐても、一種の眼で見られるから、そんな事はくどいやうだが注意を要する。大した大金を持たない限りは、餘り鞄に鍵をかけて、大切さうにしてゐる事も考へものである。なるべく無雜作な態度で、公安局方面に障りのないやうにしてゐる事が、旅行の要領であり又宿に對する印象を悪くしない方法でもある。

以上述べ來つた所は、支那宿に關するその特徴の要點である。とまれ支那宿は、何處迄も支那氣分本位で、努めて自らこれを味ふ熱心さがなくては、長續きがしない。又親しみも起らない。田舍では止むなく支那宿に我慢しても、都會地に來ると洋式ホテル、日本宿を求め捜し、これに打ち寛ぎたい氣持になる者もある。洋式、日本式、各々寛ろぐ上からいへば、夫々美點長所はあるが、經費の點ではかなり開きがある。其の上支那宿の如く、呑ん氣な支那式の風韻に接する事も望まれない。尤もこれはその人の翰墨的な氣分趣味性の如何にあることで、他から強ひる譯には行かないけれ共、鄉に入れば鄉に從へ、支那に入つて支那宿に泊することは當然で、さうしない場合、支那に入つて支那を見る目を大半失はれることは、再三述べた所である。

○

支那宿の特徴は、時折り大客廳の廣間を利用して、婚禮の賀筵、被露、其の他宴會場の申込みに應じてゐることである。金銀紅絲を飾り立て、門には美しい花飾りのアーチをつくり、催し主の名前やら、日出度い賀聯の文字もおごそかに、往來を通る行人が物珍らしげに這入つて來るのに、よい氣持で、急しげにその仕度に餘念のない晴やかな、場面をよく見る。近來は、相當な土豪大官ならいざ知らず、中流どころではなるべく經濟的にと旅館の設備をかり、料理は城内一流の家の出前で、儀式に次いで奏樂の賑はひ、酒池肉林の歡樂氣分を漲らせるといつた華やかさを見せてゐる。

最近蘭亭曲水を訪ねる途上、紹興旅館に泊つたことがある。その頃この紹興旅館は、この邊りの出産往來のために、見る影もなく荒されて、廊上廊下も見すぼらしく、假寢の夢も亂され勝ちであつた

が、丁度その翌朝、夜もまだ明け初めぬ頃であつた。花模様に金色も麗らかな二尺大の赤蠟燭數對を初め（華燭の典とはこれからいふ）紅の緞子の品のよい夜具、花嫁用の紅の皮箱、その他見る目も華やかな色々の調度類が、屬々と持込まれて來た。やがて花嫁が紅轎で、仲人に守られつゝ乘込んで來る。丸ぽちやな母親が、つゞいて轎子から現はれる。瑞雲棚引く旅館の中庭は、金銀紅綠紫黃の大變な取込みで、我々泊り客も、よい機會に目の正月が出來た譯であつた。

○

支那宿の夜は、麻雀で夜明かしをしたり、泥棒に寢ずの番をつけたりなど、遲くまで更かすのが常なので、賬房（チャンファン）自身も自然夜が遲く、そのため朝はゆつくり客と同じ位まで寢てゐる。客が旅程の都合で朝一番の火車などといふ時は、前晩に勘定をすませて置くべきである。それと同時に、よしんば朝飯代を拂つて置いても、事實は出來ないのであるから、寧ろ朝飯は宿を出て驛に行く途中、又は驛の附近の茶館で、時間の都合を見てやつた方がよい。支那宿の朝は、事務的な行動をとる事には調和しないし、又不便な點も多いのだから、客の方でも餘り當てにせぬがよい。係りのボーイなどには、餘程八釜しく前晩から注意をして置かないと、これを賴つてゐて失敗する事が少くなく、又早朝に人力車自動車を呼ぶのも、仲々厄介である。しかし大都會は、朝寢坊も多いかはりに、早起きの者もあるのだから、都會地の朝の出發は、本人さへその覺悟でゐれば、さまで難しいことではない。

○

支那宿の夜は、情緒纖纖で、大旅館になると、イルミネーションの不夜城を呈し、ネオンサインに輝く娛樂場には、新派舊派の支那芝居、寄席、手品、茶館の類から、屋上庭園の逍遙など、殆んど深夜まで胡弓奏樂の音が絶えず、屋上で南瓜子（ナンクワツ）を噛りつゝ、友人と夜を徹する者も、夏の夜などは少くない。上海では又夜半のダンスホールであるカルトンカフエなどが、旅館の延長地帶として賑はひ、殆んど世界各國人がこれに出向いてゐる。尙田舍宿にした所で、附近の寄席に出かけて、面白い落語で笑はされたり、熱茶を啜つたりしてゐる光景は、よく見る所である。

又公然の秘密になつてゐる阿片室が、都會田舍の區別なく、夜の後房には大抵用意されてゐる。主人と懇意になると、その煙の香りも懷しくなり、宿の印象も一段と深くなつて、愈々支那氣分の本當の深い所に引き込まれる感じがする。

支那宿の中には、魔の宿ともいふべきものがあつて、何ものか解らない一種の魅力を持ち、それに引つけられて、抜き差しならぬ破目に墮る遊冶郎などがかなりある。殊に支那宿の誘惑は、例の野鷄の部に屬する手合が、胡蝶のやうに麗しく、花辨のやうに氣輕るな扮裝で、取替へ引替へ廊下に出入

して來る。宿のボーイ達も、それとぐるになつて、コツミツションを稼がうとするのであるから、持ち掛けやうも頗る巧みである。輕く受流してゐると、歌でも一曲吟じさせてくれと押賣り的にやつてくる。ポケツトから曲目の料金を列記したものまで出し、梅蘭芳のこわ色一曲六十錢、陳德林のが八十錢などゝ、うつかりしてゐるとつい引込まれる氣にもなる。兎も角支那宿の夜は、日本には見られないエロ・グロ氣分の濃厚な天地で、支那の旅には、最も思ひ出の多い一席である。

○

支那宿のうちには、下宿屋風の公認宿を公寓（コンユイ）といつてゐるものがある。北平には大興公寓（タイシンコンユイ）、北京公寓（ペーキン）など頗る多く、學生又は長逗留を必要とする者が、これに宿をとつてゐる、品行方正な學生にとつては目に毒であると思はれるやうな手合が、白晝門を出入し、奥まつた後房へまでも侵入して來るので、余程堅固な者でないと間違ひが生じ易い。中には公寓を看板に掲げ乍ら、その實曖昧宿の資格を有するものもある。

又船着場では、船宿專門の魔窟が各所にあつて、船の着いた月夜など、船員に誘はれて露次を這入つて見ると、いきなり門に更紗の暖簾なんかを掲げ、薄暗いさゝやかな豆洋燈をともして、奥の院に怪しげなのが、訛りのある方言で、客を呼ぶといつたなまめかしい光景である。

又四川の奥地では、樓上の客室に客をとめ、樓下は大室の土間にして、これに西藏、雲南方面の藥草その他の靈藥劑を、大袋のまゝ所も狹い位に並べ、靈藥劑の一大市場を演ずるといつた宿もある。

○

支那の内地に奥深く旅して、田舍町に行暮れた時、或は田舍の船の途上機關の故障などで、碼頭の夜に着いた時、その折角着いた田舍町に、賴りの宿屋が一つもなく、その上勝手も解らないとなると、施す策も全くない。心細さや恐しさに、泣きたくもなるであらう。しかしこんな場合に出くはしても、尚四つの方法がある。第一、曖昧屋を見つけるか、第二、路上の行人に事情を打明けて同情心に訴へるか、第三、お寺を見つけ出すか、第四、野宿である。この四者の一つを撰ぶことによつて、明日の旅を勇氣づけてくれるであらう。

夏の安徽の山中遠く行き暮れて、石徑に革を枕し、文字通りの夜營を體驗したこともあるが、却つて氣樂で面白い。蚊に攻め立てられる苦勞はあるが、身に何んらの不安もなく、天地即ち枕衾といつた感じがひしひしと身にしみる。

又或る時は、山中深く行人に出會ひ、自分の行く先きには宿などはないと聞かされ、前晩の支那宿まで、山道を引返さうと決心した所が、旅は道連れ世は情、眞の心の美しさはいつの日にでも忘れら

れない。

『まあお待ちなさい。隣りの山里に知るべがあるから、一夜の宿を乞ふて見てあげませう』

と、見ず知らずの旅人の自分をつれて、わざ〳〵土豪の家へ心から紹介してくれたこともあつた。雨露をまぬかれぬ旅の枕に、心嬉しい夢を結ばせてくれるなど、存外ゆとりのある田舎人の風懐が偲ばれて、今に至るも懐しい。

宿のない田舎町に行き着いた時は、山麓の禪寺を訪ねるのが普通の方法である。しかし山寺のない所に出くはしても、困つた時に出る智慧は、却つて平凡な支那宿にぶつつかるよりも、奇抜な體驗をすることが出來、一層思ひ出を深くするものである。

○

排日の八釜しい時は勿論のこと、平素でも支那宿に行く時に、洋服を着た日本人の連れがあると、世間體を慮り、時に、宿の番頭から斷られることがある。

『相濟みませんが、界隈の青年達が押しかけて來ますので、はい、窓を壞はされたこともありますので、濟みませんがどうか一つ……』

揉み手をしながら、事を別けて話されては、是非にともいひ兼ねる。東洋人の洋服が、鞄が、支那の内地で祟られることは夥しい。

先年も山西省の大原、柳巷街の采館にゐて、その城内第一の四美花園へ數日間の宿をとるために衛門の謝先生と一緒に行つて賴んで貰つたことがあつた。所が洋服先生と一緒だつたので、まんまと斷われたのである。

支那の旅は支那服支那帽ですべきことは前にも述べた所であるが、排日の八釜しい土地に行つても自分は宿帳も支那人名前で、無事に通つて來たこともある。

尙江南の田舍の旅で、夜遲く船で下行しようとして、船頭に斷われたことがある。土地は全く不案内な山里である上に、白黒も分かぬ闇夜のことゝて、心淋しさが先きに立つ。漸く山下の石橋の袂に錨を下ろしてゐる蓬窓の船を見出し、船頭を呼び起して一夜の宿を乞ふた。寢てゐたものであらう、灯もなく、流れの音のみ馬鹿に高い。所が船頭は、頑として乘ることを肯んじない。それを說き伏せる迄の苦心は、今も尙忘れずにゐる。

○

支那の宿は、都會であれ田舍であれ、なるべく愉快にその一夜を過さうといふ趣味的な態度で、思ひ出深い印象を得ることに心を配るがよい。最近蘇洲から太湖巡りを思ひ立つた時、光福の寺梅旅館

に泊した事があつた。そこの主人の氣持を今に忘れずにゐる。蛇足ながら附言して置かう。

蘇洲の邊りで梅の名所は、有名な鄭尉の梅林である。蘇洲の胥門（シイメン）の碼頭から、西に運河を辿つて木瀆（モー）に出で、靈巖山下の石工の多い兩岸を見て、西北に水路を取れば、善人橋（スイニンチヤオ）の碼頭に着く。こゝら邊りから、田舍緒の乘合客が攸々とふえて、船中は一入賑ふて來る。

『光福では宿屋は何んといふのがよいかね』

隣にゐた人のよささうな百姓らしい爺さんに、訊ねて見た。爺さんは、先程から庇ひの婦さんを相手に、大きな聲で冗談をいつてゐたので、多少心安立てがあつたのだ。

『さうですね。さう〳〵福溪旅館、大東旅館といふのが町にありますよ。それから場末の方ですが、尋梅旅館といふのもありますがね。』

『尋梅旅館？　いゝ名だなあ、それはどう行きます？』

『町の賑かな所を眞直に行きますと、橋があります。その袂を左に這入ると、すぐお解りです。』

光福の町外れの淋しい碼頭へ着くと、爺さん達に『さようなら、御機嫌よう』を取交して、教へられたまゝの道を歩いた。荷物としては小さい手提籃だけなので、何處を彷徨ふにも氣が樂だ。やがて橋に來た。高壁の狹い石徑に沿ふて、左に約二町、尋梅旅館の看板が見えた。

田舍宿としては割に大きい方で、街の目抜きで見た福溪、大東などの旅館に較べては、余り明るい方ではないけれど、何處となく落着きがある。門内の左右の壁に掲げられた梅の聯も嬉しく、突當りの大室には、八仙草や、阿片臺や、紫檀の大きな十景椅子など、堂々たる客廳で、賑房の一室も側に見える。

『老班（ラオパン）。』

と聲をかけると、主人が出て來て挨拶をする。ボーイを呼んで、熱湯を洗面器で運ばせる。梅を尋ねる吟客を取扱ひつけてゐるだけに、何處となく垢抜けて懐しい。

『光福の梅林を見に來たのだが、この宿のことを聞いてゐたので、とう〳〵深入りしてこゝやつて來た。明日はこの邊りを見て、更に洞庭（ドンテン）の方へ遊ぶつもりでゐる。寺巡りが出來れば、それもやつて見たい。』

と熱茶を啜り乍ら主人に話すと、自分の氣持が解つてくれるらしい。

『今はふさがつてゐる部屋もありますが……』

といとも慇懃に、部屋を案内してくれる。どの部屋も、梅に因んだ篇や、知名の古人が描いた南畫の軸物などで飾られ、流石風流韻士を遇する氣持も伺はれる。

自分は例によつて、中位な程度の部屋を選んだ。主人の部屋に近い一室で、部屋料は七十錢、酒錢その他を加へても、九十錢にはならない。しかし寢臺も小綺麗で、夜具、枕も洗濯したものが具へられてゐる。殊に賑房に近いのは、何かにつけて、便利である。別に荷物がある譯ではなし、田舍の遊歷に贅澤は禁物である。膝を入れるに足りれば——といふ事は、自分の行脚の掟でもある。

部屋の取りきめが濟むと、又客廳に戻つて、主人を相手に四方山話に時を過ごした。玄墓山、老虎洞、石樓寺、三歡堂、觀音寺、虎山寺、七眼泉、五雲洞など、地方の名所舊跡から、禪寺禪僧の話など、主人の風懷も偲ばれる。偶々來合せてゐた主人の友達も、仲々の物知りで、茶の香りの高い中で地方の歷史傳說から、梅林の話、柏で有名な柏因社の司徒廟の珍らしい歷史談まで、話は話を生んで行く。そこへ奥の上等の部屋へ、二三日前から泊つてゐる上海の三井洋行の買辦(マイペン)父子も加つて來た。息子の方は日本語も出來るので、上海や日本の話も出で、尋梅旅館の客廳は、正に梅の香のする春である。

こんな話をしてゐるうちに、自分と主人は全く翰墨的な氣持でむすぼれてゐた。食事に出かけやうとする自分を引きとめて、

『先生、奥の一番よい部屋を提供しますから、御遠慮なしに替へてくれませんか。部屋料は今のまゝで結構です。先生とは老朋友(ラオポンユウ)に願ひたいのですから、是非共さうお願ひしたいのです。それに賑房に近いと何かとうるさいでせうから。』

と心が言葉に現はれてゐる。そしてこちらの返事も待たないで手提を奥へ移さうとする。

『自分は梅林と禪寺に心があるだけだよ。宿では主人と語つて、地方の歷史や傳說を聞かせて貰へばこれ以上の待遇は願つてもゐない。それに奥の部屋は綺麗だけど、自分にとつては不便だから。』

『それはさうでせうけど、私の氣持も買つて下さい。……よいぢやありませんか。』

『いや、それよりもこの邊の學問のある禪僧を教へて貰ひたい。これはこちらからお願ひしたいのだが……』

『殘念ですね。どうしても部屋の方は駄目ですか。禪僧なら私の親しい人がありますから御紹介申しませう。』

といつて、次ぎのやうに墨黑々と書いてくれた。

五雲洞　勝堂大和尙

かやうにして部屋を替らなかつたので、主人は自分の親切が通らないとでも思つたのか、こんどは自分の部屋に自ら出向いて來て、部屋の拭き掃除をボーイに命じたり、鑵の始末を念入りに教へてく

れたり、電球を替へてくれたり、到れり盡せりである。夕方の食事から歸つた後も、遲くまで話に努めてくれ、宿の主人の程度を越えて、十年の知己の如くである。自分も賤房の中までも自由に出入し熱茶に點心をとりつゝ、語り明したのであつた。

其の後今日まで、手紙の往復までしてゐるが、梅の季節になる度毎、この尋梅旅館の主人の氣特が複郁として自分の心に蘇つてくる。江南の田舍宿の風韻を、今に至るも懷かしんでゐる。

その九　茶館

支那を旅行して、その日常生活の實相をつきとめようとするには、茶館の狀態を視察するのが、一番要領のよい方法である。

支那人達の日常生活の大部分は、朝早くから茶館に出かけて行つて、そこで人と面會をし、仕事の計畫を立て、資金運轉上の發展とか、友人間の爭ひの仲裁とか、生活の表裏に亙る凡ての事柄が、殆んどこの茶館の中で、事務的に取扱はれ、進行してゐる。

それ故茶館といへば、都會となく田舍となく、到る處その界隈民衆の、生活上缺ぐべからざる必要から、この職業が發達して行く傾向をもつてゐる。それが都會の中心であらうと、場末であらうと、便利のよい場所であれば、通りがかりの客も亦これに立寄つて、一服やつて行く。

○

都會では二階建ての堂々たる設備を有したものがあり、上海、蘇州、杭州の如き所では、正面の階段の踏込みに持つて行つて、一々鏡を嵌め、樓上の客室の四壁にも、大鏡を嵌め、立派な八仙卓など

數多並べてゐる。殊に夏場は、樓上ヴエランダまで、所狹いくらゐ卓を押出し、紳士淑女は固より、街の高級學生に至る迄、我が家同樣の打寛ろいだ氣持で、夫々卓を圍み、茶を啜りながら談笑に耽つてゐる光景が見られる。

遊びと云ふよりか多少の用談でも持つて樓上に登つてゐる客であると、時局なんかに關係はなく、茶館を全くの倶樂部と見て、どこまでもこれを利用してゐる。從つてこの茶舖氣分は、恐らく毎日の生活の忙はしけな日本の旅客にとつては、確かに眞の支那生活の零圍氣を見學する上に、大事な所だと云へる、いかにも呑ん氣さうに卓を圍んでゐる場面は、支那社會生活の一角をはつきりと物語つてゐるのである。

○

田舍の茶館に集まる客は、農夫たちが多く、その見成りも百姓姿をしてゐて、主客相寛ろぎ、朝に夕べに地方の訛り言葉で、打囁いでゐる氣分は、その茶館の黒光りのした薄暗い古建築の趣きと共にどことなく村落の平和な情緒が漂つてゐる。

茶館に集る客だねは色々であつて、都會地ではその職業の種類により、集まつて來る者が自らきまつてゐる。上海五馬路の怡園（イーユヱン）の如きは、骨董茶館の一つとして有名なもので、こゝへは學生兵隊など

は、殆んど足を向けず、いつ行つて見ても樓上樓下肩と肩とが摺れ合ふくらゐ客が澤山ゐて、その混雜裡に夫々客は、みつしりと取りどりに陳列された卓上の古玩、翡翠、文房具などを始め、何んと云ふことなき新舊の品物に目を注ぎ、場内をひやかし巡つてゐる。どの店にしても、そのひやかしの客を呼びとめんとする熱心振りには、物凄いものがある。

茶館には古玩商の外に、呉服反物商、藥種商、紙商など、夫々その商賣向きによつて自ら集る客だねを異にしてゐる。城内では、茶館は主に遊覽客を引付けてゐる爲め、地方のお上りさんや、時には又若夫婦などの、差し向ひに茶を啜つてゐる場面なども見る。

又何れの地方にも、場末の驛に近い方面では、旅人を客だねに這入り易い店構へをし、賬房（チャンファン）もあけつぱなしで、呉客越客夫々此處に來たつて、疲れを休めてゐる樣子も見える。中には茶館の番頭に、車、轎子などを傭はせてゐる者もゐる。呉越同席してゐる譯であるが、驛の待合所などとは違ひ、その氣分に落着いた柔かみの感ぜられるのは事實である。

○

茶館では界隈の人々も此處を娯樂所として、備へつけの碁將棋や、麻雀などに耽つてゐる者もある。どうかすると、漢楚兩軍の兵法を見るつもりで、村の兩雄が闘かはす將棋に、黒山の如く集つて、餘

念のない光景を呈してゐる事もある。將棋の駒は、日本のとは違つて、一寸大の扁平な木彫の丸いもので、香車、兵隊など色々あるが、その並べかたは次のやうである。

車馬相仕將仕相馬車
　　炮　　炮
兵兵兵兵兵兵兵兵兵

大體は日本のと同じであつて、江を挟んで漢楚兩軍が相對峙した形に置かれてゐる。これらの蒂將棋は　單なる娯樂ではなく、賭けて遊んでゐるのであるから、無意味に樂しんでゐる譯ではない。

又窓際近く離れた所に、二三人の客がお茶を入れさせてゐるのは、何か商談秘話に耽つてゐるらしく、その次ぎの卓には、時局の爲めに店を暈み、家財をわきへ預けて、一人は田舍へ歸るについての相談をしてゐるものらしく眺められる。

かういつた風で、茶館と云ふと、何れも之を利用して此處に落合ひ、面談をするといふのが、主要な目的となつてゐる。しかし小春日和の氣持のよい時など、茶館の軒には、曲線美に富んだ屋根の黄色な鳥籠が、二つ三つ吊るされ、ホワンミンの小鳥を入れて鳴かし較べさしてゐる場面なども見える、又紺色の布の被ひをした丸籠なども、そこに吊るされてゐる。

○

茶館で出す茶は、普通の番茶が多く、龍井などの上茶は、もとより出ない。しかし並み茶にしても、風味が日本の茶よりも、高いのと、色がよく出るのとが特色となつてゐる。卓上の習慣では湯は何回注がされても金をとられないが、葉茶を新規に入れゝば、その度毎に金をとられる。普通一度の葉茶に、湯をさす事四五回に達し、どうしても色が出なくなれば、これを取替へる。その邊のかねの事につき、細かいことは想像のほかである。のみならず、客によつては、趣味の上から、茶館ではたゞ湯を貰ふだけであつて、態ミ豫めポケツトに白紙で散藥の形に包まれた葉茶を用意して來る者もある。その包みには赤い木版刷のものを見ることが多い。茶館のボーイも心得たもので、この客は茶趣味の凝り屋だと見ると、心して熱湯を注いでゐる。

普通ボーイは、左手で蓋付の大茶碗の蓋をとり、右手に口の長い茶瓶を翳し、瀧のやうに遠距離から之に注いでゐる。しくじつて卓上にこぼすことなどは、殆んどない位慣れたもので、實に要領がよい。

店によつては、卓上に西瓜子、南瓜子を、長く爪を伸ばした手で、一摘み二摘み皿にも載せず、ぢかに取り出し、又干菓子なども出すことがある。半日座席を塞いでゐても、幾らも仕拂ふ譯ではなく

懇意になればなるほど金はかゝらない。

○

田舍では時刻になると、客の需めによつては、麵くらゐな支度は出來る用意してゐる所もある。けれ共、原則としては、食事の方は一切兼業してゐない。尤も麵は、日本では飯代りに見てゐるが、支那ではこれを點心（菓子）の一つに見てゐるのであるから、茶館の方の商賣に侵害した事にならない。何れにしても茶館は、談笑をし乍ら互ひに喫茶をする事が本格的な役目である。

近來排日屋の青年などが相集つて、ビラの配布だの、或は又直接に日貨排斥のポスターなどを、正面の壁に貼つて見たり、かなり人氣取りの活動をせんが爲め、若い衆だちの待合所になつてゐるところもある。又船着場附近では、出船入船の船街に恰好な場所として、當然繁昌をしてゐるものもある。

○

普通一般の茶館に集まる客は、日本人のやうに神經質でないから、茶碗が少々缺けてゐやうが、八仙卓の脚が不揃ひでガタつかうが、一向お構ひなどない。しかし日本人のやうに、一旦注がれた茶がさめて、幾らつめたくなつてゐやうが、主人も客も平氣でゐるといつた習慣は、支那には全くない。少しでもぬるくなると、ボーイ自ら許しを得てこれを捨て、熱いのを入替へる位である。又わざ〳〵

呼んであつた客に、さめた茶でも喫らせる事は、非常識な主人であると謂はれてゐる。この點は茶の禮であると同時に、人を持てなす上に、一等注意すべき點である。

○

田舍では茶の接待として、路傍片庇の下に、大きな壺を設け、早朝から行人に施茶を行つてゐる所が多い。南方江南地方の都會地や城内にも、この設備を到る所に見る。これは茶館の延長として考へられるものであるが、元より無料の施しであつて、隨意に誰人でも蓋をあけ、備へつけの竹杓と大茶碗を手にする事が出來る。

尙又田舍の習慣では、毎朝自宅でわざ〳〵湯をわかす面倒をはぶく爲め、夫々最寄りの茶館に集り、洗面器に熱湯を買ひ求め、向かふの手拭で顔を洗ふ習慣のある地方などがかなりある。そしてその序に、油滾（ユウグヮン）（油揚げをねぢりたる長きもの）や、乾豆腐などを取寄せ、輕く朝飯がはりをやつて親しき隣人と話合つてゐる者もある。江南の田舍の茶館では、朝五時前後から近所の客がつめかけ、その附近に住まつてゐる者は、茶館の樓上樓下の蟬噪蛙鳴で、とてもたまらない位騒がしい。けれどもそれも、大抵七時八時で一ときりとなり、九時頃からは、隣村から又續々集つて來て、先客と入れ替りになる。そこで打合せの出來てゐる相棒どもは、その幕へ又出て來る。晝は晝、夜は夜で、まるで殆んど引切

りなしに卓といふ卓は始終客に圍まれ、前垂れのやうな紺染の袴をつけた田舎姿のボーイ達が、忙はしげに取持つてゐる。勘定を拂つて行つた客の銅幣は、その都度々々腰房の大きな竹の筒の中に投げ込まれ、大きな音をたてゝゐる。

○

大體茶館は、民衆倶樂部としての役目を完全に果し、いつも太平の御代を物語つてゐる觀がある。しかし時には、喧嘩口論などをやるために、わざ〳〵その場所を茶館に求めてゐる者もある。陳と王とが口論をやり出した。すると來合はせてゐる客共も、その二者の論點に耳を傾け、お茶を飲んだり兩手を拱いたりして、如何にもその通りといつた恰好で、靜かにうなづくといつた有樣である。第三者の大衆に向かつて判斷をさせ、我が身に同情を集めようとする魂膽は、ひとりジュネーブに於ける支那代表ばかりではない。

尙茶館では、便所の位置が非常に不都合な所にある。屋外の風通しのよい場所へ、これを持つて行つたらよささうなものであるのに、事實はこれと相反し、湯沸かし場のすぐそばへあり、どうかすると側の石に散つてゐるやうな有樣であつたり、又怪しげな馬桶が、その邊に用意せられてゐたりなどする。誠に呑ん氣に又無雜作に取扱はれてゐるのはひとりこの茶館ばかりではないのである。

その一〇　飲食店

支那の旅行中に、忘れてはならぬ事は、その旅先きで必ず支那式の飲食店、卽ち菜館（ツァイクワン）に這入つて見る事である。日本の料理屋は、日本で幾らでも味はれるのであるから、よしんば在支日本人から、これに案内されるやうな場合があつても、こちらから場所の變更を申立てる位な熱心さがあつてほしい。

何れの街にも、町民食堂があり、その土地獨特の料理をたべさせる菜館が出來てゐる。料理は珍奇であるし、味ひは變つてゐるし、分量もかなり多い。それでゐて、價は又驚くほど安いのである。その鄕に入つて、折角の民衆料理を味はないくらゐ、間の拔けた話はない。

日本式に味をつけた日本の支那料理では、本當の支那氣分の出るきづかひはない。第一費用の上からいつても、日本の支那料理代は、その料理以外のものが、十分の六七も占めてゐて、少なからぬものが加算せられてゐる。これは店の設備、室内のかざり、稅金、給料、女中の服裝から、家族の生活費などの全部が、當然の諸掛りとして考へられてゐる。その高は、決して小いものではない。殊に材

料に對する運賃、倉敷料などから考へても、高いのは當然のことである。

所が、旅先きの本場でこれを味ふとすれば、部屋飾りなども大したことはなく、食器も粗末で、殆んど諸掛りといふものが加算されず、眞の料理代だけの實費に近いものでよいのであるから、その點を特に考慮に入れるべきである。ボーイのひどいのが出る位は、我慢しなければならぬ。

○

支那菜館の八仙卓に並べられた食器のお粗末なのは、我慢が出來るとしても、普通一尺に餘る無細工な竹の箸の古ほけたのが出てゐるのを見ると、馴れない日本人は、その穢なげなのに、げつそりするといふ。象牙の箸の、殊に銀冠のついてゐるやうなのが出される場合は、富豪大官か、特別な場合に限るのであつて、民衆料理の場合は、この竹箸が先づ普通の所である。日本の竹箸と違ひ、頭も脚も同じ大きさで、どちらがどうやら解らない棒のやうなものである。その邊が、支那氣分の最も見所とする點であるけれ共、ものゝきちんとした事を好む日本人には氣に入らない。そこで日本から來た者などは、食事をするに當つて、先づわざ〳〵白紙を出して箸の先きを拭いて見たり、匙をこすつて見たりなど、まるでまじないのやうな事をして安心をしてゐる。それをしなければ、黴菌にとりつかれるのだといつた心配さうな顏である。どうせ初めから、すべて熱く料理されたものが運ばれてゐるのであり、之にいきなり箸を向けるのであるから、その邊の心配は無用である。支那人も亦之を問題にしてゐない。日本人は神經質に出來てゐるのであるから仕方がない。

○

支那の旅をする人に、支那料理の味を賞める人は數多あるが、その料理番の料理振りや、板場の實際を深く踏み込んで見て行かうとする者は餘りゐない。しかし實際現場に踏み込んで見た爲め、その清潔でない處を知り、却つて頭ごなしに惡評を放つ者がある。やゝもすれば、板場を見たばかりに、料理まで食べられなくなつたといふ者さへある。支那の族には、潔癖性を極端に振廻すやうな人は、結局眞の支那料理を味ひ得ない人である。

支那の料理番は、頭の中で凡てを超越し、五味八珍の料理三昧に入り、目から火花の出る思ひまでしてやつてゐる。その氣魄は、全く神域に出入してゐる位である。單純なうは面の清潔、不潔の點などは、始めから問題にしてゐない。そこにはグロ以上のグロの頭が働き、料理の內容としては、實質が十分にあり、調味が完全に行つてゐれば、海碗（イーワン）（大丼）その他の食器類の美醜のことなどは、大した問題にしてゐないのである。その問題にならない所ばかりを、日本人は神經質にほじくり出してゐるのである。支那の料理番はその無理解に泣くであらう。」

○

支那料理の材料の複雑さと、調味の香氣のあることは、支那獨特のものであつて、日本の刺身、酢の物、つゆ物などの行き方とは、丸きり違つてゐる。

日本料理には、白鷹、月桂冠などの如き、日本人の口にあふ日本酒でなくては、舌に芳醇の感じが來ない。これは刺戟の弱い料理に對し、いくら強い日本酒を持つて來ても納まらないのである。

支那で發達した複雜、濃厚な料理は、支那出來のほんのりとしたぬる燗の、紹興酒（シャウシンチュ）（老酒（ラオチュ））を用ゐなければ、支那食としての味覺が納まらない。殊に時間長く、卓を離れずやつて行かうと云ふには、じわ〳〵ほんのりと來る酒でなくては合はぬ。所謂陶然と醉はせる氣持は、支那酒の場合に於てのみそれが本當の意味で生れ出て來る。その間のほろ醉ひ氣分は、日本酒のそれとは著しく違ふのである。

こゝに又國民性の相違點も窺れる譯である。

尚料理に馴れない旅行者で、始めて支那菜館に登らんとする者は、紹興酒の中に氷糖（ピンタン）を入れて、溶かして飲むもよい。砂糖の入つた支那酒は、口當りが柔かで、殊に旅の疲れを醫する効力がかなりある。しかし本當の酒客は、氷糖など入れないで、その儘乾杯又乾杯をやつてゐるのである。

○

支那の飲食店に於ける客の接待振りは、日本の料理屋のお座敷のそれとはまるきり變り、細かい微妙な所に注意するなどといふことは殆んどない。殊更らしい接待振りを示す替りに、何處迄も料理本位であつて、その價を安くするといふ點に力を入れてゐる。

日本では料理を誂へるに際して、よい加減に見計つてくれといへば、客の心を汲み、十二分のことをしてくれるのが普通であるが、支那では責任を恐れてゐるためか、駄目の上にも駄目を押し、「それならお好みの材料の指定をしてくれ」といつて、野菜や、肉の種類まで指し示し、書だしきは、それの目方を何匁用ゐると云ふことまでも承知させておいて、その話に出た範圍内のものだけしか作つて來ない。客が、手持ち無沙汰をして居やうが、たべ足りない顏をしてゐやうが、一向に頓着しない。その代り菜館酒樓に登つて、或る一定の金額で料理を注文した場合には、その最後の勘定の段となり、手をつけない饅頭などの殘つてゐる數であるとか、或はそこに出された飯の箸のつけないのが幾人前餘つてゐるとかを、目で勘定し、即座にこれを總勘定から差引くのである。これは金高の方で理窟に合はない要求は、一錢たりともしないといふ、極めて嚴肅な接待振りを示してゐるものと見られる。別段にニコ〳〵顏を賣物にしたり、又揉み手をしたり、お愛嬌をいつたりして猫なで聲で客からチツプを餘計出させようなどといふ微妙な小細工なんかは、殆んどやらないのである。その點は料理振り

と同じやうに、支那人は荒つぽいけれ共純朴な處があり、又かくれた力があり、判きりした頭が働いてゐる。殊に宴後の一座のたべ殘した全部のものを取り集めて、之を金を支拂つた人の自宅へ屆けるなど、日本と變つた習慣を見ることもある。その民衆料理であらうと、凝つた料理であらうと、その邊についての習慣は同じ事で、要するにこれらは、料理の支拂に對する勘定が、八釜しいための一反映であると見られる。

○

支那の料理の席では、絶えず擦手巾（ツンシュチン）といつて、熱く蒸籠で蒸したタホルが、卓上に配られる。濃厚な食事が、次から次へと出されるのであるから、當然これは必要な接待方法である。芝居の席でも、又茶館でも、これを客に出すのは、南北支那を通じて共通なことゝなつてゐる。

日本では和洋食の場合には、幾ら眞夏であつてもこれが出されないのは、支那の旅に馴れてゐる自分共には、物足りないこと夥しい。

○

支那に渡つて飲食を漁ることは、旅行の樂しみの中の最大なものであらうと思ふ。しかし都會城内に味ふ料理には、例へば、蘇州には蘇州の味ひがあり、寧波には寧波、奉天には奉天と、夫々味覺に違つた感じを受けさせる。

例へば滿洲の料理には、北京料理もあるが、多くは山東の田舍料理がひろがり、こつてりしたものが一般である。寧波の料理は、浙江の料理ではあるけれ共、杭州の西湖々畔に味ふそれに較べて、どうも鹽辛いところがある。日本人には矢張り蘇州料理か、北京料理などが口當りがよいと云ふものが多い。又廣東にも、料理を日本式にすればよいものがある。

内地の片田舍に這入ると、最早贅澤はいへず、大體が農村の野菜を主とした蔬菜料理であつて、それに鯉魚だとか、猪肉（豚）だとかを取り雜ぜて、味をつけたものがよい方である。囘々教の仲間に呼ばれると、所謂西域料理で、羊皮の料理が出される。これには豚の肉は、一切出されない。

○

田舍料理の舌當りは、大抵始めから地方色があるものとして、そのつもりで味ふべきであるが、殊に面白いのは、その地方獨特の地酒のあることである。ドブロクの類で、酒はひつこいが、如何にも料理の純朴さと相調和してゐる。何れの地方でも、名前だけは紹興酒と呼ばれてゐるが、本場の紹興酒とは似ても似つかぬもので、全く名にかぶれて味つてゐる全くの地方酒である。

しかしたまに土豪の家庭などでは、わざ〳〵浙江から取寄せた本場の花彫（ホワチヤオ）（紹興酒を二度釀し直し

た醇酒（などを出されて、びつくりさせられる事もある。

田舎人には味覚の強い紅酒、即ち五加皮（ウーチヤピ）と稱するものや、又北方では汾酒（フエンチユ）、高粱酒（カオリヤンチユ）などが、地方的にかなり喜ばれてゐる。

○

支那の旅で、飲食店に興味を持てば、なるべく晝と晩は菜館酒樓に行つて味ふがよい。市街に通人の出入する穴も見つかつて、人と變つた通な料理を誂らへる事も面白からう。通人の行く料理屋は、價が滅法安く、又材料も振つたものがある。菜單（ツアイタン）（獻立表）なども、おきまりの硝子張りの中に這入つたものでなく、二階下の一角に、釘にかけられた塵紙の十數枚を、一々めくり〳〵見るのである。その塵紙には、一人前、四人前、八人前とあり、その價も定食で二三十錢から七八十錢どまり、誠に便利であつて、一度足を運べば、又と必ず引付けられる。

これらは多く露次の中で、普通のきどつた紳士が這入りにくい所にある。從つて客の種類は、界隈の親方、兄貴連、又は食道樂の通人、或は料理屋同業者、その他高等ルンペン達が、主に姿を見せてゐる。

○

北支那で、冬の旅をする客は、零下十度二十度といふ寒さは普通で、その頃は蒙古風の風帽（フオンマオ）といふ、耳も頸も頭元も、全部包んでしまへる仕立方になつてゐる帽子を被り、戸外をモク〳〵した姿で歩いてゐる。菜館酒樓へ登つて見ても、部屋には煤球兒（メイチユル）が火鉢にたかれてはゐるが、これとてもさほど暖いものではない。暖房の設備としてはこれが普通で、ストーブがある家などは、滅多にない。だから出來るだけ澤山羊毛の皮のついた上着など着込んで、外に出かける必要がある。しかし乾杯又乾杯の獻酬が酣になると、流石に北支那の冬も暖かみを感じ、その上酒肴などを闕はして、一座は大いに賑つて來る。

北平の冬は、前門外（チエンメンワイ）の成吉斯汗料理とあつて、例の有名な正陽樓へと出かける。雪がちらつく寒風凜烈の夜、野天に焚き火で、羊肉をつけ燒きする趣きは、その左の片脚を上げて箸でつゝく喰べ方と合せて、如何にも北支那の冬の酒席を印象深く刻みつける。日本では、和田三造畫伯がこの羊肉鍋を提供して、鎌倉由井ケ濱の「濱のや」で催したのがこの成吉斯汗料理の關東に於ける嚆矢となつたのである。

又夏の夕べの菜館酒樓は、江南の水鄉にあつては、都人士漁郎のこれに足を運ぶ者が隨所に引きも切らない。殊に遊覽地の民衆娯樂場には、世の不景氣も物かはと、相携へてこれに出浮き、夏料理に

舌鼓を打つてゐる手合が多い。夏の觀光客はかういつた歡樂境の實際を、現場に這入つて味ふことが何より興味の深いことである。

○

支那街の料理屋の多い所は、紅燈街と考へられるが、必ずしも又さうでない。といふのは、菜館酒樓は、遊廓とは違ふ。日常生活の延長地帶として、謂はゞこゝは事務を取る所に過ぎない。飲み且つ食らひ、その間にオフイス以上の事務振りを發揮するといふところであるから、支那街の軒に、例へば「大陸春」とあれば、いはずしてその料理屋たる事を知るのである。

料理屋の看板は、必ずしも菜館酒樓の文字を用ゐないで、文學的の稱呼になるものが多い。單純にその雅名のみに惚れ込んで、登つて見ると案外なのもあつたりする。

しかし田舍の料理店は、樓上の客室の正面に、關帝の肖像軸物などが揭げられ、紅瓶酒盃などの供物がそなへられてあつたり、酒席とはいへ部屋の形式が、日本座敷の床の間式に出來てゐるものもあつたりする。

その一一　錢湯

支那人は風呂に這入らないとは、よく日本人の話題に上るが、實際の支那を見ない人は、この流儀の獨斷をして困る。

支那には、都會であらうと、田舍であらうと、各地に必ず錢湯の設けがあり、單に體の垢を落すといふことを目的とするばかりでなく、日常生活の中に、入浴の事を必ず編み入れてゐる。無論日本人のやうに、毎日或は隔日に這入るのではなく、大抵一週間目位に足を運んでゐる程度である。尤も女は、普通これに出かけない習慣になつてゐる。

○

一般の支那風呂に對する考へ方はその身を清めること以外に、此處で暢んびりした氣持になり、打寛ろいだ浴後の氣分を味ふといふ事が、その半分の目的になつてゐる。從つて設備の方でも、客の意を迎へる爲めに、娯樂的の部屋がつくられてゐる。

その設備規模には、所によつて、大小高下は勿論あるが、田舍の都會地に見るものには、却つて古

風な設備を施した風流なものがある。從つてこれに遊ぶ浴客も、その入浴の情緒を眞に味ふ事が出來るので、自分達が、支那の旅をなし續けてゐる時、田舍巡りの樂しみは、半ばこの支那風呂にあると云つてもよい位である。

○

支那風呂の等級は、上海、蘇州、杭州、北平などの大都市にあつては、かなり高級な又ハイカラなものがあつて、大體洋風を採入れたものが多い。しかしそこには、夏冬を通じて蒸風呂式に湯氣を充分に採入れ、長椅子に寢そべつてゐる乍ら、熱茶のもてなしが頻々あるなど、何處迄も支那式の處がある。又時には、脫衣場でなく、浴槽に接した次ぎの間に、一人一人這入れる氣持のよい祕密の小室を備へてゐるものすらあり、人情の機微を察してゐるところは面白い。

○

もと〳〵支那風呂が客にその氣持を味はせることを眼目としてゐる以上は、少しく採光、設備、取持ち方などの方面に、行屆いた注意をしたらよささうなものであるが、日本人流儀な淡い輕い方面の注意は、殆んどされてゐない。殊に休憩場の採光の如きは、薄暗いのが平氣で、むしろその方を落着きがあるとしてゐる位のもので、からつとした氣持を起させるやうには出來てゐない。そこへ紅綠の色硝子など用ゐ、その上等の部に屬するものでも、何んとなく古色蒼然の感じを伴つてゐる。

大衆向きの等級の低い風呂屋になると、その湯槽が共同であることは元より、浴衣場なども簡單で、別段特別な娯樂場など設けられてなく、誠に質素なものである。けれ共、浴客各人の夫々に與へられた坐席は、普通の安樂椅子以上に廣く、且つゆつたりと取られてゐたり、大切な携帶品は、帳場であづかるやうに出來てゐたりすること位が、先づ注意せられる。

○

支那風呂の看板には、普通「澡堂（ツァオタン）」又は「澡塘（ツァオタン）」と書かれたのがあり、或は「盆塘（フェンタン）」又は「盆池（フェンチ）」などいへる文字を見ることもある。

都會城内では、これらの看板を見る場所は、多く路次の入口でもあるかの如き觀があつて、その入口と云ふものも狹く、奥深き入屋敷になつてゐるのが多い。これは繁華な所では、通りに面した地價の高い所を、地坪廣く取ることが困難な爲めで、わづかに入口と、その看板とを見せてゐるに過ぎないのである。

盆池とある看板を見た時は、浴客一人入りの上等の風呂場のあることを示せるものであつて、一般の澡堂の方は、共同風呂のあることをこゝに告げてゐるものである。

○

支那風呂の内部は、南北によつてその構造設備を異にしてゐる。しかし一帯に共同風呂となると、大きな浴槽と、別に奥に一人風呂又は二人風呂などを有してゐるのがおきまりである。

大規模の澡堂は、門を這入り、控への間から奥へ通り抜けると、次ぎに大室があり、こゝに帳場を中心に、數十人からの客を入れるに足る脫衣場がある。更に冬は、暖かい設備をした廊下の突當りに浴槽の幾室かが別れてつくられてゐるのである。

浴槽の内部は、共同風呂の場合には、日本のそれに較べて遙かに深く、殆んど大人の乳の邊り迄、湯はなみ〳〵と湛へられてゐる。浴槽は、無論採光が悪く、なんらさつぱりとした氣持を唆つてゐない。北方では厚板を、浴槽の上に幾條か平行して渡し、浴客はその上に踞し、隨意に浴したり上つたりしてゐる。又流しには、背の高い臺を備へ、これに腰をかけて流しを取るやうに出來てゐる。尚流し場の一隅に、便所の備へのあるのはいふ迄もなく、釜場の方の樂屋内は、近來あちこちに大規模の汽關を備へ、火力をもつてどんどん沸かし、文明式の設備をなしてゐるものが少なくない。

浴客を打寛がせる設備としては、普通上等客を目當てにつくられたものが多く、これには姿見の鏡や、蘭の鉢植、清涼劑、熱茶等の程度で、浴後のお客が次から次へと入亂れて、隨意に休息し得るようになつてをり、椅子、八仙卓などの設備も十二分に出來てゐる。

○

支那風呂に於て、日本の錢湯と特に違つて見える點は、脫衣場の面白く出來てゐることである。脫衣場には、周圍の壁に添ふて、一人一人の客のために、大仕掛の座敷が設備されてゐる外に、場内に幾條かの通り路が作られ、更に數多の大椅子が並べられ、又各座席の左右には、夫々茶几が置かれてゐる。その他場内の一隅には、理髪所が設けられて客を呼んでゐたり、その中には或は爪つみ、或は耳掃除などの專門家を抱へてゐて、客に特別のサービスをしてゐる。

又脫衣場の四方の壁には、見上げるばかりの高い所に、衣裝掛けの金具が打ちつけてあつて、二十尺近い長い棒の先きに、浴客のぬぎ捨てた支那服をば、繩絆ぐるみ其儘ひつかけて吊してゐる。それ故脫衣場の壁を見ると、その四方の壁といふ壁は古着屋そつくりで、不斷着の衣裝の陳列といつた形である。そこに地方色も見えて仲々面白い。

○

支那風呂に於ける遑慮のない浴客共は、浴後タホルを腰にまとふたなり、髪床に納まり、散髪をやつてゐる姿も、前の鏡に寫つてゐる。散髪がすんでも、衣裝をつけないで、悠々座席に憩ひ足を伸ば

し、爪摘みを招いてゐる者があり、その隣りには按摩をとつてゐる者もあり、その他熱茶を咬つてゐる者、熱い手拭で汗を拭ふてゐる者といつた風に、千態萬様の姿で、兎も角それぞれ浴後の氣持を味つてゐる處が見られる。

眞冬の寒い時でも、場内ばかりはかなり高い温度が保たれ、一二時間かうして中間入りをしても、何んら寒さを感じないのである。

浴客の種類を見ると、先づその城内界隈の人が主のやうで、たまに遠方の方言をしやべつてゐる人も見當たるが、それは甚だ少なく大抵はその地の訛り言葉で親しげな話が交はされてゐる。客種の大部分はどこでも商賣人で、うつかり隣席の客にやさしく話しかけて見ると、向ふから「甚麼賣買（シェモマイマイ）」（何んのお商賣ですか）と挨拶の語を發する位である。しかし中には金持の隱居さんがゐたり、小役人がゐたり、又兵隊、巡査などの雜つてゐることも時にはある。そして面白さうな人情話が、大聲で交はされてゐるのである。

旅行者が、浴客としてこゝに這入つて來る者などは、殆んど見ない。たまに公安局の役人が、浴客としてでなく、私服で脫衣所に遊びに來て、如才なく帳場やら、浴客やらと談笑してゐるのを見るのは、何か種を引出す魂膽でもあるかのやうである。

支那風呂では、四方山話は附きものである。若し本當にその土地の方言が解れば、今一層興味の起ることであらうと思はれる。客だねなんかどうあらうと、その談笑裡に和氣靄々の氣分の漲つてゐる光景は、恐らく外の所では味はれないであらう。日本と同じやうに、按摩をとりつゝ界隈のうはさ話を聞いたり、按摩商買の景氣、不景氣、按摩から見た風呂屋觀などの耳寄りの話題も少なくない。幾ら客から賃錢をもらつても、無雜作に前かくしに入れるので「歸りの途にさらはれないやうにしなさい」などと注意したこともあり、その邊は存外慈のない按摩もゐるとか聞き及んでゐる。その風懐はなつかしい。

○

支那風呂の錢湯は、安い所でも銅錢の四五枚、頭一等又は二等の特別盆塘で二十錢見當、更に都會地又は遊覽地の高級風呂に這入ると、安い所で五十錢。一人風呂のハイカラな設備を求むるならば、先づ一弗といふ處が通り相場である。

杭州の西湖畔新豐園の如きは、江南でも有數の新式盆池の設備されてゐる所で、そのサーヴイスも至れり盡くせりである。殊に樓上の西湖料理は、支那の旅を思ひ出すのに、最も相應しい味ひを見せてゐる。

概して支那風呂は、他の生活程度に較べて、料金がお安くない。隨つて一週間に一度位足を向ける者は、風呂好きの方であると見られてゐる。しかし一度入浴すれば、三助が兩腕に力をこめて、手なり背中なり、血の出る位に逆にすり上げてくれる。その爲めに、殆んど盆池の湯は、灰色を呈する位に垢がとれる。これは殆んど日本で見ない場面である。地方によつては、三助から體の上下によつて二筋の手拭を求められる。これは江南地方では、手拭を腰から上と下と使ひ別けをしてゐる習慣があるので、さすがの日本人も三助の前で赤面をすることがある。

日本の三助のやり方と違つて、こすり方は心を込め、慇懃を極めたもので、體の如何なる部分を、こすつてくれる。しかもその時間は相當に長い。尤も日本のは昔しから「流し」といはれるだけにも湯をかけて流すだけに過ぎない。又日本の浴客は風呂に「這入る」といつて、文字通りに這入るだけである。この邊が「流し」といひ「入浴」といひ、誠に日本式で、誠にあつさりしたものである。支那氣分の風呂は何處迄も念が入つて重々しい所がある。這入つてすぐ出る如き入浴法は、支那風呂では殆んど見ない。一週間に一度しか這入らないにしても、その念の入つてゐる點で、充分取返へされてゐる。支那ではその存外身分の低い者でも、その點を勘定に入れて、いさ風呂へ行くとなると、お安くない盆地を奮發し、垢を十分に落し、塵を拂ひ、樓上の娯樂所で半日の清遊をすると云つた者が

少くない。宛らこれは日本の德川時代に見た江戸の風呂屋情緒を思ひ出させてゐる。

尙支那風呂の呼びものは、樓上に別室の設けのあることである。見張り番その他帳場のものはちやんと心得てゐて、その方へ渡りをつけてゐるやうである。蘭の花や、額緣の硝子越しに見る廣告美人ぐらゐで滿足の買ひ得ない、エロ氣分の浴客は、浴後いつしか姿を別室の方へと消して行く。

○

支那風呂の衞生狀態は、餘り考へられてゐる方ではない。北支那の田舍あたりへ這入ると、脫衣場の客の衣裝は、夫々毎客の爲めに、四角に仕切れた箱の形をしたもののあるのはよいとしても、これにその脫ぎ捨てた衣裝を、縱に深く落し込むやうに出來てゐる處がある。これなどは、どう考へてもよい氣持はしない。しかも邊りの光線は惡く、懷中電氣でも持ち合さない限り、忘れものなどのありさうな氣がしてならぬ。さらばといつて、浴後さつぱりした手で以て中を手さぐりする氣持にもならない。衣裝はどこででも見るやうに、一般普通の例の長い掛竿で、壁に高く而かも衆人環視の中で、壁上に揭げてくれるのが、一等氣持がよろしい。

田舍風呂の設備の小さいものになると、客が脫衣するなり、前の客の脫ぎ捨てた濡れ木履を引きづり、湯槽までカタン、コトン音を立てつゝ行くものがある。しかしその客が湯槽から出て來る時には、

誰れ人かに履き替へられ、別の木履を片かた引つかけて上つて來るなど、どうせ薄暗い場面のことであるとはいへ、あまりよい氣持はしない。

支那内地では、人のものも自分のものも、區別など考へない位の程度にならなくては、田舎風呂の味ひも味はへない。日本の錢湯の如く板廊下などはなく、凡て内部は木履又は草履を引かけてあるくのである。

又貸し手拭は、規則の上では注意されてゐるが、依然としてそのまゝ舊弊が改められてゐない。それ故風呂の衞生と云ふものは、殆んど考へられてゐないといふのが、實際の話なのである。

しかし大都會に於ける一流所になれば、これは最早到れり盡せりで、料金の高いだけに手落ちのない設備萬端が出來てゐる。香水、その他の化粧品も完全し、乘物の手配まで出來てゐるものがある。

○

何といつても面白いのは、北方の澡堂で、その規模の大になればなる程、脫衣所は廣く、廊下は長く、爪つみ、按摩等の賑はひもあり、最も支那らしき光景が、明るい氣分で味はれる。

中には、半日の浴後の氣分を、ゆつくり構へて味つてゐる大男の左肩の首元に、殆んど頭大に近い位の瘤がふくれ上り、宛ら二人首の片輪の姿を呈してゐるものなどを見ることがある。しかし何んらつらい思ひをしてゐるらしくもない、平氣の平左で話相手と囃いでゐる風情は、天下の一奇觀である。

更に尙、一層天下の奇觀として異樣に眺められるのは、支那風呂の浴客といふ浴客が、脫衣後その暖かい長廊下を、斜めに下つて行く道中に、日本式に手拭でおさへてあるくといつた、氣恥かしげな態度を示してゐる男は一人もゐないことである。何れも大きな裸體で、兩手を振り振り足並みゆつたりと、湯槽へ歩を運んでゐる姿は、全く堂々たるものである。その邊の大陸氣分は、殆んど想像も及ばぬ眺めで、日本の浴客なんか、眼中になしである。これは男子が持つてゐるものを、あらはに露出して歩いたとて、何んの恥かしいことがあるものかといつた、支那式一流の考へ方から出てゐるものらしい、如何にもその邊が、ものに動じない氣分の漲つてゐる力強い所であるとして、珍らしもあり又痛快でもあると思ふ。

○

尙支那風呂で、日本人に特に不思議がられてゐる點は、必ずしも女人禁制の譯ではないが、日本式に「右に女湯、左に男湯」(或はその逆)とあるやうな入口は、何處にもなく、いはずして澡堂といへば、男子のみの風呂ときまつてゐる。陝西方面には例外も一二あるが、その事はこゝに云はない。

そこで女人はどうするのだ、と疑ひの起るのは、無理からぬことである。所が事實支那の婦女子は

絶對に澡堂盆地といつた家庭外の錢湯には出かけて行かない。良家の婦女子は、自宅の門外に姿を現はすことだけでも、女の嗜みとして戒められてゐる位であり、又自分のはく靴を作る場合ですらも、他人に足を障らせて寸法を取らせたりする事が禁物となつてゐる。從つて夫々家庭内で、自分の手製で、女型の靴を拵へてゐる位である。この一事をもつて見ても、支那の婦女子が、そとの錢湯へ出かけて行くやうな氣持に、どうしてなれ得らるゝものであらうか。家庭の主人の方から見ても、家族の女達を、そとの錢湯に出すなんかと云ふ氣持は更にない。從つて支那四百餘州の澡堂といふ澡堂に婦女子向きのものゝあるのは、一二の歴史つきのものを除き、未だ嘗て他に聞いたことがない。餘程エロ的なモダン女性にしても、大抵その自宅で風呂をつかひ、殊に寢室では、毎日四五回の腰湯をつかふといふのが、良家の家庭のきまりとなつてゐる處である。されば、婚禮のときの調度のうちにもその爲めに使用する紅塗の大盆が、その數のうちに加へられてゐる。

○

支那街に滯在してゐると、朝東天の未だ白らけない頃に、城内の人々の夢を破らんばかり、カンカンと鐘の音を聞かされることがある。それは界隈の朝風呂が、その用意の出來たといふ知らせに打つ鐘である。城壁の影が、曉靄のうちに薄ぼんやりと見えてゐる時刻、この支那風呂の情緒を體驗することは惡くない。やゝもすると日本人の中には、支那の旅に、この鐘の音を耳にすると、「そら火事だ」などと騒ぐあわてる者もある。

○

支那風呂に就ての大體は、以上の通りであるが、支那は南北とも溫泉の出る場所が少く、北は湯山（タンシャン）、南は福州といつた程度でその他一二ないでもないが、誠に寥々たるものである。

北平の郊外にある湯山、溫泉は、支那氣分には乏しいが、洋風の溫泉宿が大分出來て、近來繁昌をなし、程近き所に輕隆帝の作られた、大理石の彫刻も麗はしい湯場が今尚殘され、徒らに山麓に白い湯氣を立つてゐるのを眺める。けれ共、誰れ人のこれを訪ねるものもなく、哀れを催うされるのである。

之に引かへ、南京城外に見る湯山は、近來名流の泊り客も頻々なので、今を盛りと、かなり賑はつてゐる。

その一二　理髪店

支那の旅の思ひ出に、時折り支那人の理髪店にも這入つて見るのは面白い。唯その手に及物を使つてゐる商賣である爲め、氣持悪く感ずるといふ日本人が多いらしい。

田舎の理髪店では、從來の支那式の髪剃（半月樣のナイフの形したもの）を用ゐ、丸剃りをするのが主となつてゐるが、都會では、普通の散髪をするのが主となり、漸次歐米風の理髪、又はその設備を採り入れ、客に對する待遇振りやその態度も、至つて柔かみを現はして來た。

元來理髪師は、及物を用ゐてゐる商賣であるとはいへ、幾ら洗練せられてゐない剃頭的（ティトウティ）（舊來の支那床屋）にした所で、相當その耳掃除などの細かい仕事になると、手際よくやる。否、寧ろ華客をよい氣持にさせる點では、實に手に入つたものである。これを危險がるやうなことでは、その日本人は思ひ切つた所へは踏み込めないのである。

○

支那に流行してゐる理髪の恰好は、正面の前毛をほや〳〵と高く長くそびやかし、そして左右と後ろのところを、急に短かく刈り落すやり方である。側面から之を見ると、衝立でも立てたやうで、如何にも不自然に見えるが、しかしこれは見馴れないせいかも知れね。一般青年達の最近の頭髪の恰好は多くこれで、この姿に從つてゐない者は、支那青年の仲間入りが出來ない位に見られてゐる。其の他洋行歸りのハイカラ連中は、オールバックを始めとし、西洋人まがひのつや〳〵した散髪で、寧ろ藝術的に頭を取扱つてゐるやうである。

城内に於ても、田舎に於ても、青年の頭は大體ハイカラになつてゐるのであるが、それへもつていつて、從來の西瓜皮帽を被ぶり、如何にもそれが不調和でぎごちなく見えてゐるのは、どうしたものだらう。從來の支那帽は、頭の中央の辮髪をおさへる爲めに被られてゐたのであるが、近來のやうなモダン式の散髪に對しては、一般の中折れとが、麥藁帽とかならば兎も角、支那帽はどちらにしても、木に竹をついだ感なきあたはずである。

近來長江方面では、大體昔の辮子（ピエンツ）をさげてゐる者は、殆んど見なくなつた。たまに上海の路上で、老人などがこれを保存してゐるのを見ないこともないが、それは珍らしい位になつた。しかし北支那では、田舎は元より都城に於ても、まだ可なりこれが餘習の名殘りを見るのである。その辮子の周圍は、殆んど丸剃にして始終髪剃を當てゝゐる。たまにはその辮子をつみ切り、頭上に二三寸程度の長

さに仲ばして殘し、その周圍を同樣に、テカテカと丸剃にしてゐる者も見る。北支那は、南方よりもどちらかといふと古風の人が多いので、理髪の恰好も何處となくまだ舊態をとゞめ、その理髪店の店つきから設備、理髪師の姿に至るまで、上海あたりのそれとは樣子を異にしてゐるのである。

○

理髪店の設備は、北方はまだ低級なのが多く、その店の鏡一つ見ても、何んだか垢拔けのしてゐないのが多い。光頭、平頭、剃頭などと、夫々定價表には言葉こそ美しく書立てられてゐるが、その手際はまだまだモダン式ではない。支那服を着込んだ自分が、店に入り、理髪をし乍らよい氣持で居寢りを始めてゐると、剃刀を持つ先生は、自分をそつくり支那式に自分ぎめで剃り上げてしまつたことさへある。その晩招待會へでも、出席をしようなどといふ時には、既に剃り上げられてしまふと全く拔き差しならなくなり、喧嘩にもならず、大笑ひをするといふやうな事もないではない。

支那の理髪屋の耳掃除の巧みな事は、天下に有名な話で、誰れ人もこればかりはかなはないとしてゐる。

尙其の他支那獨特の技術に、目掃除といふのがある。これは散髪後眼瞼を前方に引張り出し、薄い竹篦の如きものを用ゐて、その内部の赤味の部分を、隅々殘らずきれいに掃除し、目脂一つ殘さないやうにさつぱりとやつてくれるのである。普通上瞼はしないで、下の方のみをする。自分は先年山東の田舍、卽墨河畔の柳蔭で、これを專門家に試みさせた事がある。考へて見れば田舍の事とて、トラホームもゐたかも知れぬ。大衆のうちにはどんな患者がゐたかも解らぬが、しかし何れもあたりのものは、皆黴菌に抵抗力を持つてゐる豪の者と見えて、一向にその弊はないものらしい。あとで硼酸で洗ふといふ譯でなし、香水を用ゐてくれるのではなし、全く未開人のやり方だと云つてもよい。しかしそれをやると目元が涼しく、小さつぱりした氣分になり、邊りの盛んな牛の市の見物に臨んだことがあつた。

○

尙田舍の理髪屋に行つて見ると、バリカンを用ゐたり、又日本製の鋏を用ゐてゐたりなどする者が、あちこちにゐる。唯田舍の理髪で珍らしく感じたのは、理髪店をその持ち主が提供してゐるだけであつて、其處には鏡と椅子の設備を見るほか他の道具は何も置かれてゐないことである。朝早めに店へ踏込んで見ても、誰れも人が居ない。廳て十時近くにもなると、床屋が一人ふたり前後して、小さな手提鞄を提げてやつて來る。その小鞄には、鋏、髪剃、櫛、香水、石鹸、ふけ落しといつた七ツ道具を納めてゐる。殊に散髪後合せ鏡を持ち出し、襟元の邊りから横のあたり、そのお手並を見てくれよ

がしにうつし、正面の大鏡をしきりと指す所など、可愛いところがある。

○

支那の社會生活のうちで、床屋に風呂屋は料理屋と同じく、割りに清潔を目標としてゐる商賣であるだけに、潔癖性の回々教徒がこれに從事してゐるのを、あちこちに見る。豚肉をたべない清淨な宗教的信仰をもつてゐるので、その點が日本人の氣持に近いともいへるであらう。若し支那の髪床に、踏込んで見る氣持のした旅人は、支那語の練習のつもりで床屋にやらせながら、その好題目をつかまへ、世間話などしてゐると、又方面の違つた意外な知識を、くだけた態度で集めることが出來るのである。支那船に乘つて內地へ奥深く這入る時など、船中の剃頭的に刈らせて見るのも、これ又一興で、その間に案外な話題を見出したり、或は江上風清き佳境で、華胥の國に遊ぶことも出來たりする。

○

かやうにして支那の床屋氣分をそつくり取入れた支那の旅を續けてゐれば、散髪料が意外にかゝらないのは元より、これによつて一つの又新しい柔かい天地が見出される。そこにまた支那の旅の面白味を求むべきである。

田舍の農村の子女が頭の天邊に一個所、一二寸の髪を剃り殘し、之を赤い糸で絢つてピンと立てゝ

(電話一三一六一七)

新新男女理髪公司廣告

技師　歐美專學藝術　精良各式優美
修飾　用最上等各式　香料化粧物品
優待　藥水洗頭電氣　摩面不另取資
座位　清潔舒暢睡椅　靈便坐臥適意
樓座　仕學紳商閒閑　莊止尤爲適宜
招待　殷勤週到無另　索酒資之陋習
寒暖　裝置洒汀電扇　可謂各暖夏涼
定價　概從克已以免　靡費而廣招徠
價目　樓上　理髮五角　修面二角
　　　樓下　理髮三角　修面角半

英租界四馬路雲南路西首

ゐる唐子絵のやうな、無邪氣な姿も味はれる。或は又、娘や花嫁達が、額の生際の仇毛の伸びたのを二條の絹糸で之に絢りをかけ〱抜取らせてゐる技術など、床屋系統の仕事の中には、その趣味の多いものがかず〱ある。

○

支那の理髪店は、日本のそれと同じやうに、散髪賃のほかに、お心任せの酒錢を加へてやる習慣のあるのは、いふ迄もない。若し理髪後、よい氣持で熱茶など入れさせてゐると、理髪賃や酒錢のほか

に、茶代として書き加へて來る店などもある。

理髪の料金は、日本のやうに總體幾らといふのではなく、髪つけ幾ら、顔剃り幾ら、艶つけ幾ら、耳掃除幾ら、按摩料幾らと、何もかも明細に算盤して、客に要求することになつてゐる。

上海の理髪店の廣告が千差萬別にあつたから、左に載せることにする。何處迄も支那らしい巧言麗句の羅列が面白い。

(上) 小菜担　賣木梳　唱書
(中) 錫匠　馬車　賣鏡
(下) 篾匠　豆腐漿　賣武藝

（上）冷麪攤　郵差　捕魚
（中）小車夫　牛肉担　做糕
（下）說書　糖菓　釘馬蹄

（上）補碗　寶風箏　戲鼠
（中）黃包車　要碰魚　攤賣
（下）皮匠　磁玉菜　水菜

(上) 餛飩担　鏤花　賣炭爐
(中) 擠馬奶　唱道情　湯麵攤
(下) 賣蓆　賣炭　捉牙蟲

(上) 樵夫　畫墻招　打鐵
(中) 柏米　汁包子　撐木排
(下) 鋦匠担　賣長錠　賣火腿

（上）刻牌　鞋匠　賣洵竈

（中）補錠　理髮　錢攤

（下）扯鈴　賣柿子　梨糖糕

（上）化緣　烤山芋　水菓攤

（中）双簧　賣摺扇　包金

（下）賣紙花　補傘　戲壇

（上）成衣　賣拖把　轉盤
（中）甩三扭頭　吹糖人　唱戲
（下）賣畚箕　油条攤　賣鷄

（上）西洋景　賣甘庶　狗熊戲
（中）賣箏　剔脚　測字
（下）賣臭豆腐乾　磨刀　木人戲

(上) 賣洋襪　補缸　鈴絲匠
(中) 賣大鼓　攤蛋　賣粉人
(下) 賣汽球　算命　鷄毛帚

(上) 看相　賣西瓜　栗石匠
(中) 揣骨相　鮮瓜攤　泥水匠
(下) 送報紙　藕攤桶　攤子匠

（上）賣　蠟　　包　飯　担
（中）賣　棕　器　高　卜　荐
（下）粢　飯　　卜　卦

賣　紙　燈
賣　涼　粉
札　　花

（上）賣　簫　　畫　像
（中）賣　木　匠　磨　剪
（下）糞　夫　　賣　刀　布

綠　豈　　搖
估　衣　　船
湯

（上）獼猻戲　戲瓶　賣胡琴
（中）賣木杓　栈池　賣畫片
（下）肉攤　彈花　收舊貨

その一三　城内巡り

支那の觀光に、半ば西洋風な居留地ばかりを見て、城内に這入ることを恐れてゐるやうでは、折角の旅の興味を半減するばかりでなく、支那を知るといふ上からは、何んら意味をなさぬことになる。月に何回か入港する日本船の船長ですら、上海の租界に足を印するだけで、城内巡りなど思ひもよらぬなどと、ひどく恐怖心にかゝられてゐることを、寧ろ船客に誇りがほに物語つてゐる者すらあるのは何んといつても情けない。

○

支那街の城内は、いふ迄もなく多くの支那人の込み合つてゐる所で、街は狹く、臭氣鼻を突き、行人は雜沓し、これを見て恐れをなすのも無理のない話ではあるが、本來城内の空氣は、それが支那街としての本格的光景なので、租界に見るやうな道の廣い明るい氣分は、期待すべきではないのである。「都合と田舍」の項に述べたやうに、元來限られた城壁で取圍まれた面積の中に、出來得る限り多くの市民を包有せんとしてゐる都城のことであるから、かういつた光景を見るのは、當然の結果

である。

上海の城内の如きは、早くもその取圍んでゐた城壁をば、市區改正の時取拂つてしまつて、今では佛蘭西租界に接した道幅の廣い自動車道(民國路)となし、昔の思影は全然見られなくしてしまつたけれ共、田舍の大都城は、何れも尚、壯嚴な城壁の舊態をとどめ、殆んど古と變りのない佛を留めてゐる。蘇州の如き、杭州の如き、松江、嘉興の如き、又昆山、常熟の如き、何れもその江南に於ける都城の思影を見せてゐる。若し夫れ南京城、濟南城から、更に進んで北平の所謂北京城あたりへ行つて見るとせんか、或は又飛んで滿洲奉天あたりの城壁を見るとせんか、何れもその規模の宏大なのには一驚を喫せざるを得ないのである。

南京城の如きは、城内に獅子山の丘陵を包有し、これに砲臺まで設備し、今は昔の櫛比せる住宅地は半ば田園化してしまひ、所々に桑園、菜圃をすら含むこと夥しく、こゝに最近主都こそ設けられて居れ、古の金陵江寧時代の盛觀を再現するに至つてゐないけれ共、しかしその周圍を取卷く南京城の壁の延長は、日本の里數の九里に餘つてゐるといはれ、試みに城内の北極閣や、古鷄鳴寺の一角に立つて、全城鐵壁を見渡して見ると、その反對の方角に聳ゆる樓門などは、雲か霞の裏にその姿も微はれ、唯薄ぼんやり想像さるゝ迄である。

○

城門の扉は、前にも述べた如く、城内巡りの第一印象として、旅行者の目には最も深刻に來るもので、大抵二間三間くらゐの高さを有し、厚い鐵板をもつて嚴そかに蔽はれ、これに五寸大の鐵の百乳が並んで打ちつけられてゐる。見るからに支那式の嚴しさを漲らせてゐる。その上に要害な城門には五六人の劍付の番兵が立ち、そこを出入する行人の見張りをしてゐる。戒嚴令のしかれてない平時であつても、大荷物を持込まんとする者は、必ずこゝに車をとゞめられたり、又天秤棒からそれをおろされたりして、一々八釜しい臨檢を受けるのである。

その城門の上に仰ぎ見られる高樓の飛檐は、その曲線美を碧空に聳やかし、四隅には風鈴の音の高いのがぶらさがり、壯嚴を極めたこの城門に、一掬の優しみを添へてゐる。

○

城内の目拔きは、都會と田舍とを問はず、近來は大抵電燈もつき、各商店の飾りつけもきらびやかで、夏の夕べの人通りは、殊のほか賑ひを呈してゐる。呉服店あり、菜館酒樓あり、雜貨店あり、書林がありといつた風で、その狹い往來へ兩側の老舖が、軒並みに高く黒塗りの板看板を吊るし、又行人の頭上に、白布に紅の大文字を縫うた看板廣告などを掲げ、互ひに左右から參差して賑ひを競ふて

ゐる。かういつた街の特色は、南北共に變りはない。

近來は又軒並みに、萬國旗やら紅緑の紐の店飾りなど目を奪ふばかりのものがあり、日本でいふと二十年も昔に流行つたやうな、行進マーチの奏樂を、大太鼓、笛、喇叭入りで、樓上に嚮し立てゝゐるのも見る。銀號(銀細工屋)の大廈高樓の構へをしてゐるものなどは、殊に人目を惹いてゐる。その下を墨染の衣を着込んだ寺僧が、古風な椽のひろい冠に、四角な箱を胸に吊るし、兩手で鉦を敲きつつ、足取りもゆるく彌陀佛(ミタブツ)を唱へ唱へて、雜沓の中を落着拂つて別けて行く光景などは、殊に異彩を放つてゐる。

或は又盲、啞、聾の揃ひも揃つた片輪ぞろひの佾人が、三味線、笛、太鼓の一團をつくり、奏樂の音も賑かに、あたり靜かな高壁の狹巷を、月の夜など流し來たるのは、北京城内あたりによく見る光景で、先年も羊尾巴胡同(ヤンクエイパホウトン)の公館(コンクワン)へ之を呼び入れ、わづか一弗の祝儀で以つて、月夜を樂しんだ事もあつた。

○

南北都市の樣子は、南方の運河水鄉の多いのと、普通の城門のほかに、閘門と稱する水門などのあるのに較べて、北方のそれは、單なる東西南北四方の城門を有するのみである。

支那の旅には、北方ではなるべく城門に登り、高樓萬里の春を賞すべく、又南方ではその水門から城内城外の運河の船遊びを、たとへ少時間と雖も忘れぬやうに試むるに越したことはない。これは宿屋に豫めいひつけておけば譯のない話である。

南方の城内巡りは、あの狹い巷を車や轎子で行くよりか、民船を傭つて、水鄉から水鄉を巡り、隨時茶館に船を着けるなり、又文廟(孔子廟)武廟(關帝廟)に着けて遊ぶなり思ふが儘にやつて見るべきである。

○

城内巡りの主な見所は、どこにしても日本でいへば丁度公園に當る所が、あちらでは寺廟の參拜といふことになる。支那の寺廟は、日本の寺のやうに平素葬式を取扱ふでなし、境内はいつも朗かで、寧ろ陽氣な方である。寺によつては、緣日は殆んど毎日のやうにあり、甚だ俗ではあるが門内市をなし、城内大衆の娯樂氣分と、風俗の大體が此處で汲みとれるなら興味が深い。

飲食店、玩具屋、玉轉がし、針廻しの類から、チンドン屋などあらゆるものがこゝに打囃ぎ、大變な雜沓振りを示してゐる。中には運勢、待人、旅立、結婚、葬式などの占ひをしてゐるものがあり、之を一々お籤に問ふ爲めに、寺男から竹筒を振つて貰つてゐる善男美女の群なども、押しかけてゐる

と云ふ眺めもある。

城内巡りには普通の大路小路を歩くほかに、時にはかういつた寺内の抜け道をするといふと、意外の掘出しをすることがある。

城内には又各地とも、回教の寺で清眞寺の風の變つた禮拜振りや、讀經（但しプラビヤ語）などがあつたり、又北平では、髑髏盃に酒をもつて讀經してゐる喇嘛寺、雍和宮などもあり、見ごたへのするものがある。尚この寺の附近であると、ありし昔宮中の大奥で、今を盛りと時めいてゐた宮官あたりの古手が、以前のいやしからぬ姿を今だにとゞめて、城内北部の細巷あたりに、ちらちらと散見することもする。その生理的理由から、宮官の顔つきが何處となく女官然として、異性の相貌をとゞめてゐるのは、氣の毒でもあり、面白くもあり、一見してそれとすぐ解るのである。その聲が亦女らしい音色をもつてゐるところが、特徴の一つとなつてゐる。

○

南京城内では、今日呼びものとなつてゐる國民政府の各役所、行政院、軍政部、參謀本部、交通部、教育部などを始めとし、國民中央黨部、市黨部、中央大學、模範監獄、中央飯店などの名のある建物をも、一通り見て置くの必要がある。それは田舍に行つても、各都城に、矢張り中央統部の出張所や、又夫々市黨部などの、小規模ながら堂々と青天白日旗を掲げた光景を見るわけであるから、その本家本元たる南京の樣子を見て置くに越したことはない。

尚排日宣傳の文字は、時局の際は無論のこと、ほとぼりのさめた後でも、高壁に或は料理屋の壁にと、隨所に之を見るが、これを見てたいして不快に思ふ必要はなく、又氣にすることはよろしくない。そのビラを貼る時の氣持は、別段日本人を憎んでやつてゐる譯ではなく、宛らドブ掃除をする人間が日當をいくらかもらひ、それを當てにして一日の仕事をさづかつてゐるのと、同じ譯なのである。城壁などにも大文字で「勿用日貨」などの宣傳文字を見ることがあるが、朝夕これに接してゐる支那の大衆も、かなり頭が痲痺して、何んら氣に留めて居らないやうである。

○

尚城内巡りの序に、土産物を漁つたり、紫檀細工の机や椅子をあつらへたり、又文人趣味に心を寄せてゐる人は、古書畫や拓本、唐本などを漁つたりするのも快事である。若し城内の心安い家へでも紹介される機會があるならば、わが好む品物のことを豫告して、滯在中にその方面の商人から、持て來させるやうに手配しておくのもよい。しかし思ふ存分自分で掘出し物でもしようといふときは、自ら足を運ぶに限る。人だのみではいけない。

倘城内巡りの餘興として、夜の紅燈街を話の種に訪れて見たり、又その方面の通人にたのんで之に案内してもらひ、樓上後房で支那歌の一曲も唄はせ、西瓜子を丸ぼちやの佳人から投けられて見たりすることも、悪い思ひ出ではないと思ふ。たゞしこれは或る程度を越えないやう、程にやらなくてはならぬ。その邊はあちらの通人によく指導してもらつてゐれば、間違ひはない紅燈街のことは後に詳しく書くことにする。

その二四　家庭訪問

支那の旅で、從來とかく手ぬかりであつたことは、旅行に行つた總ての人が、大抵支那の家庭を見ることを忘れてゐたことこれである。支那の家庭は、これ迄新聞にも、雜誌、著書にも、又教科書にも、殆んど紹介されてゐない。そのため、殆んどその内部の樣子が、想像だにつかないのである。折角支那を歩いて、うは面の支那街を見て來たり、往來の人を眺めてゐたりしただけでは、相手の日常生活の實際を知ることが出來ない、支那人各階級の實生活を知るくらゐ、旅行の目標として肝腎なことはない。

支那の人々の生活は、その家庭内で朝夕どういふ風な暮し方をしてゐるか、住宅の構造、部屋の飾り付け、室内の客のもてなし、子女の遊戯、食事時の有樣、その他夜の寢室といつた方面にまでも、立ち入つて、それぞれ充分な知識を掴んで來なければ、本當に價値のある旅行とはいひ得ない。

○

支那の家庭訪問のコツは、日本と餘程違つた所がある。自分に都合があるからといつて、先方のこ

とも考へず、早朝出かけることなどは、禮を失することになるのである。といふのは、支那は何れの家庭にあつても、夜更しをする傾きがあり、そのため朝はかなり遲く、どこの家でも、朝飯をすませた位の時刻といへば、大抵十時前後である。無論商賣にもより、又階級にもよる譯であるが、普通家庭訪問の場合には、十時より早くては、先方に迷惑をかける。

云ふまでもなく、豫め紹介を得て置くか、或は紹介の手紙を持つてゐる時には、前日にその面會の機會を申込み、先方の都合をよく聞いて、十一時前後なり、午後二三時なりが、邪魔にならない時刻と思はれる。しかし相當な紹介をもつてゐれば、先方と一度會つたあと、その滯在中に、あちらから晩餐會を都合のよい時日に催したいと云つて、正式の招待が來ることがあるから、豫め訪問をする場合には、こちらの滯在日數のことと、宿の名などを、名記して置くの必要がある。これは特に大事なことである。

○

家庭訪問の禮として、手土産を携帶することは、望ましいことである。これには自分の著述、詩集などが最も上品でよい。がしかし、一般の旅客としては、之を望むわけにいかぬから、記念のしるしに、日本製の紙紗、或は風呂敷などであると、荷物にならなくてよい。これはその圖柄模樣など、意外に喜ばれるやうである。かさ張つたものは荷物になるので、旅先では厄介至極である。

尙訪問の時の名刺は、若し相當の身分のあるものか、或は文人墨客趣味のあるものかであれば、近來支那出來の宋版活字の名刺が、最もなつかしがられてゐる。これは上海に暫く滯在してゐれば、譯なく誂へられる。舊來の支那式の大形の紅名刺は、面白くはあるが、次第にこの頃は行はれなくなり、紅名刺といふと、最早や歷史的のものとなりつゝある傾がある。

○

住宅へ訪問をして、主人の應接間に通されれば、やがてボーイが、いきなり熱茶を持つて來たり、熱い手拭を運んで來たりする。遠慮なくすぐさま之を受けて、どんなに熱つからうが、卽座にこれをかたづけ、お茶もいくら大碗であらうが、なるべく之を飮みほすのが禮である。さめた茶を卓上に置くことは、客としても又主人からいつてもよいことではない。

主客共に席につく時の座席は、日本と異り、卓を隔てゝ互ひに相對するのではなく、互ひに直角に隣り同士に坐すので、さもなくば壁に沿うて、茶几を中間に相並び、互に顏と顏を横向けて坐すると云ふが禮法である。その邊は、日本人の應接振りと、樣子が全く變つてゐる。通譯を經るにしても、又單獨で話を向けるにしても、なるべく柔かみを持ち、穩かな態度を失はないことが大事である。せ

き込んだり、力瘤を入れたり、心あはたゞしく時間のない所を無理してまで合つたりするのは、氣分に添はない。それは訪問をして、却つて失禮になる位のものである。若し止むなく、時間のない時などは、手紙に要領をしるして使をとばす方が、むしろ禮に適ふ。

又滯在中に、支那人側から訪問を受けるとか、或は宴會に呼ばれたとかした場合には、出發前に必ず答禮の意味で、これを歷訪することを忘れてはならぬ。名刺を門番に渡して置くだけでもよろしい。外交方面になれた人は、名刺の右の肩の一隅を折つて、面會は遠慮する意味のしるしとし、唯形の上で敬意を表したことを示してゐるものもある。

○

支那の旅行中、支那側の婦人に面會をする機會は少いが、家庭訪問に際しては、なるべくその婦人室へも通して貰らへるやう、豫め願つておくことが思ひ出が深い。元より昔からの習慣として、深宮へ踏み入るなどは無禮千萬なことだ、といへばそれ迄であるが、しかし近來日本人に親しみを持つ者は、さまで迷惑がりもしないのである。唯菜館ホテルなどで、支那側を招待する時、令夫人の同伴を願ふといつたハイカラな招待振りは、なるべく遠慮した方がよい。無論來てくれるに越したことはないが、事實こちらから婦人の外出を求むるなどは、大いに考へものである。

それよりもこちらから大膽に、主人と夫人とが一緒に寫つた寫眞でもあるならば、之を戴かして貰ふことを願つて見る方がよろしい。さもなくばこちらでカメラを用意して、庭先きでなりと、御家族一同好記念にといつて、一緒に撮影をする誤解を求める方がよい。これも訪問の機會に忘れないやうにすることが思ひ出の種として望ましいことである。

○

次ぎに支那家庭の內房、寢室方面のことは、普通は遠慮して見ないですませる者が多い。けれ共、支那では住宅內部が割りに簡單で、何れの部屋も通り抜けて差支へない。殊に中庭を通り過ぎて、いきなり內房に達する仕掛の家も多いのであるから、內房を窺ふことは、諒解だに得れば難しくはない。しかし、さうまで苦心慘憺して無理を願つて見ても、事實內房には、それ程エロやグロの種がかくされてゐる譯ではない。從つて、存外平氣で見せてもくれるのである。それは唯紹介者の人柄如何によることが多い。

內房には、母親の側に戲れる兒女が、無邪氣な遊びに耽つてゐる。唐子の繪そのまゝの趣きを見せてゐる所など面白い。

尙臺所であるが、これ亦日本よりも簡單で、大の水甕に、鍋、釜、手桶などがわづか設備され、食

器にしたところで、さうこて〳〵と並べられてはゐない。複雑な支那料理から想像してゐるのとは、まるきり反對で、吃驚りするくらゐである。しかし一應臺所を見るだけは見ておく方がともかくも面白い。

尙中流以上の家庭であれば、主人の書齋とか、書棚、古美術、書畫などの拜觀やら、それに次いで廊下を出で庭園を逍遙し、或は後庭、柴門あたりまでをも案内して貰ふと、本當のあちらの日常生活といふものが見えて、參考になることが多い。

○

以上述べた所で、略々家庭訪問の要領はつきる。出來れば尙冠婚喪祭の場面に、又は兒女の讀書をしてゐる場面に、又料理番の料理をしてゐる場面になど、その邪魔でない限り見せて貰ふことは、特に支那の旅として最も意味のある土產話となる。

尙立入つていへば、その主人の氣持一つで、家寶の拜觀、秘密の地下室の拜見なども、願ふことが出來るならば、これに越したことはない。けれ共、これは餘程安心の出來る紹介者と同伴でもして、豫めこちらの人柄がよく〳〵徹底的に理解されてゐないと云ふといけない。よく先方に見極めがついた上でなくては、うかつに要求がましく話し出す譯にはゆかない。

しかし又、やゝもすれば訪問先きの家庭で、有名であつた先代の主人がなくなり、今は昔と違つて、實は支那人でない人に秘密の家寶を見て貰ひ、あはよくば一品お土產に進呈したいといふ魂膽から、向ふから進んで遠來の客に見せたがつてゐるやうな者もあつたりする。從つてかゝる家に行つて、うつかり訪問の記念に讃めちぎるやうなことでもしようものなら、進物の形にして、宿へわざ〳〵屆けて來てくれることなどもある。かゝる場合には、之を唯取りつぱなしにする譯にゆかず、さらばといつて大金を露骨に差出す譯にもゆかず、拔き差しならぬ破目に陷ることが少くない。それ故名家の子孫を訪問する時は、豫めよく先方の家運の如何を、序でながら確かめて置くことなども、實云ふと大切なことである。

○

支那の家庭訪問をした場合は、後で名刺を持つて答禮に行くなり、歸朝後禮狀を差し出すなり、又年賀狀のやりとりをするなり、通信を怠りなくやる習慣にして置く、とその間意外なる參考資料が又々集つて來る手づるともなる。

その一五　官衙訪問

日本人の支那の旅は、山川風物を空疎なものと考へ、徒らに大官要路の時めく人を、さも見世物でも見るやうなつもりで、會ひたがるものが多い。會ふ方だつて、迷惑なことであり、會つて見た所で何んのことはない。

今は大連に亡命して、月を眺めて暮してゐる段祺瑞大人の如きも、その時めいてゐた當時の執政府の面會人といつたら、ひきも切らない位であつた。今こそは閑日月を送つてゐる際のこととて、訪ねる人があればいくらでも閑談が出來る譯であるのに、當時無理矢理に北京の「段執政、段執政」と、猫も杓子も、三十秒でも一分間でもよいから會ひたいなどと、詰めかけて行つたものである。人のよい流石の段さんも、かなり迷惑さうな風であつた。

その位置を去れば、訪ね來る客は果して幾人あるか。宰相の地位にゐればこそ、門前市をなすといふ習ひは、昔からの人情である。一旦その位を退き、一平民となつてしまへば、何んのことはない。そこに人情の機微が窺はれる。

唐詩にも

賢を避けて初めて相を罷む
聖を樂しみしばらく盃を銜む
爲めに問ふ門前の客
今朝いくばくか來たる

罷相　李適之

（避賢初罷相　樂聖且銜盃　爲問門前客　今朝幾個來）

と。人情の趣くところ、今も古も變りはない。

○

大官を官衙に訪ねるには、その地方の領事館、又は公使館などを通じて、少くとも前日か前々日かに手續きをして置かなくてはならぬ。訪問の意味がよく通じ、先方で面會してくれる意志がある場合は、何んのこともない。早速定めの時刻に自動車で門前に到り、刺を通じて控への應接間に通される。そして先客が辭し去ると、そのすぐ後へ呼ばれる。場合によつては、五人八人の先客を出し抜いて、特に早く面會の便宜を計つてくれることもある。

しかし先方に氣が進まないといふと、二日も三日も返事をよこしてくれず、宿屋がかりの身には、さういつまでも待つ譯に行かず、困ることがある。さればといつて、催促がましくも申立てられない。最初に物數寄に面會を申込んだばかりに、自分で引くに引かれぬヂレンマに陷ることが少くない。

殊に中間の役人、又は下僚共に、煙草の一本もやつてあると、氣持が違ふのであるが、それでも場合によつては、唯半日も立ち通しに立たせて、奥では「今は忙しい」の「急に出かける」のなどと言を左右に托し、その實奥へは少しも通じてくれてゐない。名刺は中間でち迷つてゐる。かういふ實際の內幕話は、劍付鐵砲で衞つてゐる門衞のゐる所には、さらに存してゐる。しかし始めから、政府要路の方から知らせがあるとか、その方の紹介の手紙を持參するとかする場合には、急轉直下に奥へ通してくれることもある。

○

門を入つて、應接間からずつと奥へ通される道の兩側には、見るも花々しい一個小隊位の兵隊が、武裝して最敬禮をなし、天井の高い樓門をくぐること、二回又は三回、愈々その奥の大室に案內せられる。堂々とした裝飾のある大客廳で、しばしこゝに憩んでゐてくれといはれるまゝに安樂椅子上の人となる。するとやがて、隣室から御大自らが從者をつれて姿を現はし、定めの椅子に坐を占め、如何にも老大國の御大に相應しい底力のある聲色と鷹揚な態度で、挨拶がはじまるのである。立ち打ちの出來るだけの鷹揚さと話題、又その相手の肚を讀むだけの肚をこちらに持合せてゐないときは、なめくじの前の蛇の如くなる、心得るべきである。

○

手土產の一つ位はあつた方がよいが、必ずしもそれにも及ばない。諧謔の一つ二つは出して、談笑の裡に朗かな話題を取扱ひ、機會あれば寫眞を撮つたりすることも面白い。或は揮毫を乞ふことも又望ましい。先方が惡筆であれば、必ず後で右筆に代書させて、宿まで屆けてくれる。

又御大は、都合さへつけば共に晩餐をとりたいといふ。こちらに四五日の滯在日數さへあれば、大概都合をしてくれるが、しかし役所で會ふ訪問客は、その數が大變に多く、一ヶ月に夜の宴會を催うすことも五十數回、一夜に二席三席をかけもつこともあるといふ位である。

見世物を見に行つたつもりでゐる多くの日本人は、一世一代の鬼の首でも取つたつもりでゐるが、先方では極めて輕くこれを扱ひ、日本人の例の口頭禪や、日支親善、共存共榮の押賣りなど、又かといつた顏付きで受け流してゐる。支那側は獨自の立場から、もつと面白くユーモアたつぷりのテーブルスピーチを試みる。これに對する挨拶は、いくら日本人が得意な所をやつても、眞面目くさつてゐる

る。その邊の太刀打ちは、かなり段があるやうに見える。

又餘興として、支那側では音樂を奏してくれたり、或は評判の芝居に案内してくれたりする。阿片窟に出かけたりする古い習慣は、今の若手の太官には、口にするのも謹んでゐるが、しかし一度くらゐ見ておくことは、見學にたしかになる。

○

官衙訪問を、支那の旅の大事件の如く心得てゐる人は、歸朝した港で新聞屋に包圍せられたとき、えらい收穫があつた如く吹聽し、やれ蔣介石の、やれ誰れのと、その名前を並べて、得意の所を記事に出させる。

あちらの大官の方では、數も多いことだし、それに毎日のことゝて、入りかはり立ちかはりの來訪客に、さう力を入れてゐる譯でもない。それを歸朝者の方では、鬼の首式の云ひ方をしてゐるので、甚だお里が知れて、氣恥かしく思はれる位である。唯手輕く、歸朝後答禮としての刷物、又は新聞紙上の挨拶位の程度でとゞめて置く方が、奥ゆかしくもあり、又その方が罪がなくてよろしい。

その一六　年中行事

支那の旅で目を喜ばすものは、民衆歡樂の天地で、各都城には、寺々に催うされる緣日の雜沓、公園の出浮きなどを始として、芝居に、船遊びにと、各種の賑ひがある。

○

お寺の緣日は、特にお寺の方で催うしてゐるのではないが、二八の日とか、三五九の日とかといつたやうに、その緣日に當る日が毎月きまつてゐることは、日本と大差はない。その日は、飲食店、手品、輕業、芝居、寄席、鞦韆、門彈き、露店、物貰ひ、迷ひ子、子供賣りなど、かなり奇拔な場面を見せ、門前門內素晴らしい市をなすのである。支那の旅としては、最も似合はしい場面で、これらの催しに見る賑ひは、年中行事の一つとして、各地の話題に、かなり碎けた味ひを見せてゐる。

左に、北平に於ける晝市(花市又は白市)夜市の時と所を、參考のために列記して置かう。

隆福寺	九、十	花市
前門大街	二、五、八	夜市

哈德門外（崇文門外）	四	花市
西朱市口	一、四、七	夜市
護國寺	七、八	夜市
土地廟	五、六、三	花市
章義門內	三	夜市
香廠	三、六、九	夜市
齊花門外（朝陽門外）	十、五	花市

○

正月は、元旦の儀式を濟ませると、次ぎは三日の元宵祭で、その夜の賑ひは大變なものである。北平城內あたりに見る火神廟（ホーシンミヤウ）の祭の催しは、最もその呼び聲が高い。この祭りに際しては、目星しい骨董、古美術が、露店に安値段で陳列せられ、晝となく夜となく、ひやかしの客で以つて、道は溢れてゐる。そのため瑠璃廠（ルリチヤン）界隈はとてもひどい雜沓を極めるのである。

○

朔風もいつしかやはらぎ、ほか〳〵と郊外の畑に菜の花の咲く季節になると、例の清明節（チンミンチエ）になる。

清明とは、寒食（冬至より百五日をいふ）の習日をいふのであつて、寒さから解放された喜びは、先づこゝから起きるといつてもよい。

この頃は田舍の百姓達も、陽氣の加減で、冬籠りから田舍の晴れ着に着替へ、お寺詣でを始める。百姓の嬶さんや婆さん達は、青の晴れ着に黃色な頭陀袋を提げ、揃ひの鈴を振り乍ら、畦の並木の間や桃の花の咲く江邊を、幾十人となく塊つて、思ひ思ひの寺々へ參詣する。その長閑な光景は、思つて見たゞけでも、清明節當時の朗らかさに心の惹かれるものがある。殊に朝靄のかゝつてゐる見渡す限りの菜種畑を、頭布姿の善女達が行く平和な姿は、詩人ならずといへども感傷に溺れるであらう。

清明の時節雨紛々
路上の行人魂を斷んとす
借問す酒家は何處にかある
牧童遙かに指す杏花の村

杜牧

（清明時節雨紛紛　路上行人欲斷魂　借問酒家何處有　牧童遙指杏花村）

○

清明節當時の民家では、夫々佛間に香華を手向け、墓所の掃除をしたり、爆竹をあげたりなどして亡き人の英靈を招き迎へ、心あるだけの御馳走を祭壇に供へる。

この佛教の祭りと云ふのは、寺々に於てそれぞれその壇家の求めに應じ、壯嚴な鳴物入りの會式の催しが、賑かに執り行はれられる。その時は、世にも珍らしい賑ひを見るのである。これは江南地方の禪寺に、最も多く催さるゝので、西湖々畔の天竺寺あたりでは、毎年善男善女の參詣者は、無慮五六十萬人を下らないまでといはれてゐる。

又この清明節を機會に、南方でも北方でも、相當なる子孫のある家では、墓陵の頂きに紙片を飾りつけ、小石をその上に置いて飛ばないやうにし、その周圍をさつぱりと清めてゐるのは、見るも嬉しい。若し墓陵を守る子孫が打絶えてゐなくなつたものは、毎年この清明の佳節が來ても、唯草茫々、狐狸の巢に任されてゐるのである。

尙子孫の榮えてゐる家では、戸外に食卓を持ち出し、位牌を祭り、酒や料理なんかを供へ、路上を通りかゝつた行人までをも、見さかひなく呼びとめ、酒食を犒らひ、それによつて亡き人の心持を慰める手段としてゐる。

○

五月の端午の節句は、南方支那ではかなり盛んで、各民家では柳の枝を手折つて來て、屋根や軒に之を翳し、家庭では粽子（チヤンツ）と稱する粽をつくつて祝ふ。

あの鯉織の吹き拔きを作つて、之を風に翻へす風習は、日本には殘つてゐるが、支那には見られなくなつた。この風習は、昔し屈原といふ人が、洞庭湖畔の汨水（ベキスキ）に身を投じたとき、大鯉がその遺骸を口にくわへて、三峽の江流を遡つて、屈原の妹さんに、これを引渡したといふ物語から起つてゐるので、それから鯉魚を尊ぶの風をなし、端午の節句に之を結びつけて、この急流激灘を登る勢のよい鯉魚をかつぐと云ふ習慣が生れたのである。尤も長江から奥地の鯉魚は、五六尺からあり、その鱗は、一枚一枚宛をとつて、之を窓硝子の明障子に代用してゐるくらゐの大いさに達するものもある。以つて如何にその全身長が大きいかゞ想像されるであらう。日本の鯉のぼりは、決して誇張したものではなくして、實物大と見てよいのである。

○

六月は、各地とも城隍廟の祭の月として、それぞれ土地神が祭られてゐる。その祭神は、主としてあの世の幽冥界を司つてゐる神を御本尊として考へられ、その爲めに各界隈でも、盛大な催しが取り行はれてゐる。

本來この御神體は何れの家庭に對しても、人間日常の行爲のうち、暗黒面の方面に鋭い神通力のある耳を有し、又千里眼の働きをなす恐ろしい目を備へてゐると云ふ風で、人間界のあらゆることを知りぬいてゐるといふのである。天帝はこの使神をして、娑婆世界のすべての事を見張らせてゐるわけであると信じてゐる。

そこでなるべくその神様の意を迎へるために、費用お構ひなしの祭祀を催うするのである。當日は范將軍、謝將軍などといつた、恐ろしく大きい御神體を作り、その内部に人間が這入つて、之を操縦し得るやうに拵へ、信者の一人がその御神體の内部に這入つて、肩を搖すぶり〳〵兩手を大きく靜かに振り、祭の行列の中に交つて、人目を驚かすのである。その無邪氣な氣持のするうちに、その練り歩きぶりのグロ氣分を加へてゐる所など、仲々面白く拜せられる。

かやうにして守り神様にすがつて、自分の幸福を祈つてゐる處邊りは、支那氣分の正直に現はれてゐるところである。

○

七月になると、各地方とも例の盂蘭盆會の祭が行はれ、かなり盛んな場面が見られる。江南地方ではこれを盂蘭勝會といつてゐる。

上海虹口（ホンキウ）の三元宮あたりでは、租界にゐる廣東人で、武昌路、天潼路あたりから押しかけて來るものが多く、何れも色紙を竹の骨に貼つてこしらへた鬼神、人馬、乘物などを美しく飾り立てゝゐる。又芝居の舞臺までつくられ、その下には宴席が設けられ、露店又は境内に所狹い位に出張つて、祭りの景氣を添へてゐる。參詣人も當日は大變で、押すな〳〵の混雜振りを見せてゐる。その中に界隈のものどもは、神前に御馳走をしこたま供へ、亡靈を祭り、自分自らも飲み且つ慰んでゐる樣子が見える。當日その現場を見たものは、その大衆の信仰の厚い程度が、かくまでもあるかと考へられ、全く一驚を喫せられる位である。

近所界隈では、家並みにその喜捨を惜まず、むしろ夫々競爭的に各里閭ともその催しに少なからぬ費用をかけるやうになり、最近はイルミネーションまで之に應用してゐるなど、初秋の夕のその光景は、目も眩ぜんばかりの賑ひかたである。

○

八月はいふまでもなく中秋の節句のある月で、明月を祭り、中秋の月餅を頂くのを吉例としてゐる。これは日本の風習と略々同樣である。

中秋の月餅は、支那各省到る所に布及されてゐる菓子であつて、中秋の節句を物語る唯一の供物な

のである。日本に渡つて來てゐる各階級の支那人共も、家族的に八月の十五夜ばかりは、月下にこれを賞味してゐない者はない。その月餅は小は一二寸より、大は一尺五寸から二尺に至り、小麥粉でつくられた練り餅であるが、これには砂糖の餡、棗の實、木犀等で以つて風味を加へ、その表面には月兎の模樣、雲の形、太極圖などの、天界を形どつた立體的の凸凹のあるものをつくりあげ、これを幾つかづゝ積み重ねて、祭壇に祭つてゐるのである。同時に又竹の骨や木の骨に、色紙で玉兎の形をつくり、これに藝術的な裝飾を施して、樹下に吊るし、中秋の祭を壽ぐことをするなど、家庭的には秋の催しとして誠にゆかしい。日本の薄、里芋を供へてゐるのに較べて、一段の濃厚味が汲みとられる。三五の月に關する詩人の感興は、日本のそれと同樣である。唐の王建のものを揭げて置かう。

中庭地白くして樹鴉を栖ましむ
零露聲無く桂花を濕す
今夜月明人盡く望む
知らず秋思誰が家にかある

中秋望月　王　建

（中秋地白樹栖鴉　零露無聲濕桂花　今夜月明人盡望　不知秋思在誰家）

○

十月になると、中華民國の紀元節ともいふべき雙十節がある。これは例年十月十日にとり行はれてゐるために起つた名稱である。十月十日は、民國辛亥革命の旗揚げをした日に當るので、その月日をそのまゝ取つて、之を大祭日としたものである。

この日は目出度い國慶日であるとして、各省各地は、每戸軒端に青天白日旗を揭げ、孫中山先生の寫眞を祀り仰ぎ、酒杯を傾け、擧國一致で以つてその佳節を壽ぐのである。民國人にとつては、日本の紀元節と同樣で、この國慶日くらゐ目出度い祭日はないとしてゐる。兵營の所在地では、早朝から街路に水を撒いたり、又喇叭の音に繰り出される軍隊を練兵場に見たり、此處に又盛大な觀兵式を見たりなどする。各學校に在りても、民國の君が代に當たる歌を歌ふといふことになつてゐる。

○

十二月は暮れの二十四日の晚に、縫口節（フオンコウチエ）と稱し、神樣に餡をねぶらせる風變りの祭りがある。

こは北支那地方に盛んであつて、その御神體といふのは、灶神と稱し、竈の神である。朝に夕に家族の面々が、その竈の左右を來往してゐるので、老人も子供も每日そのすること成すこと細大洩さず、灶神の目にはちやんと知られてゐると見られ、從つて凡てを承知し抜いてゐる灶神に對しては、家族

のものは元より、下男下女、凡て之には頭が上がらないものだと考へられてゐる。心に暗い所のある者ほど、その縫口節の近づいて來るのを氣に病んでゐる。暮れの二十日過ぎにでもなると、鞄屋の露店が街にあちこちにとたくさん出る。東單大街（トンタンターチエ）あたりへは、自分達も一緒にその晩は買ひに出かけたものである。

○

縫口節の家庭では、後房に這入つて見ると、竈神の木版刷の掛軸が正面にかけられ、又その木像や練物などの神像を、卓上に祀つたりして、その前に酒茶水などを小盃に盛り、その他側に糧秣を供へたり、或は例の通り御馳走などを供へたりしてゐる。

その意味は毎年暮れの十二月二十五日になると、天界に八百萬の神々の大會が開かれるので、それへ滿都各戸の竈神が招集されて、列席することになつてゐる。竈神が天上に昇るには、天馬に乘つて駈つて行くと云はれてゐるので、糧秣と水の用意が必要だからである。竈神は正直な性質の持主であるから、我々の不斷の凡ての行爲を有りのまゝさらけ出されたりすると、天帝から如何なる天罰を下され、自分の身に覿面の祟りが來るかも知れない。そこで、竈神の昇天せんとする前夜に、なるたけ澤山の鞄を供物にして、出來るだけ神像の口もと、頬べたあたりへうんとなすりつけて置く。つまり鞄をなめさせて之を懷柔し、我れの非行をば内證にして置いて貰ふやう、口止め策を講じてゐる譯になるのである。俗間これを稱して、口を縫ふ佳節と云ひ、あちらで縫口節と呼んでゐる。支那の民衆全體に、最もうけてゐる暮れの年中行事は何かと思ふと、多くはこれであると答へるのである。

○

以上述べたほかに、五月三十日の所謂五・卅事件（上海）の如き、又四・三事件（漢口）の如き、又排日、排英を主とした紀念日などもあつたりして、示威運動を盛んにし、國民を鼓舞煽動してゐるものが少なくない。其の他、國恥記念日と云つてものは、殆んど三百六十五日續けさまに求めらるゝ位で數限りなく調べ出されてゐる。折りに觸れ、時に感じて、思ひ出したやうにいつも何か運動を始めてゐる。

こちらは、あちらの人々の製造工業の自己防禦の宣傳からも出てゐるが、外交方面の策動と、日支學生の生活方面、或は國民の自覺心などと云ふものから、糸を引いてゐて、容易にその熱のさめる時が來ない。

尚九月九日の重陽の節句のことは、日本でも餘りに有名な話であるから、此處には之を述べないで置く。

年末の感懐は、左記の詩に譲つて置かう。

旅館の寒燈獨り眠らず
客心何事ぞうたゝ凄然
故郷今夜千里を思ふ
霜鬢明朝又一年

除夜作　高適

（旅館寒燈獨不眠　客心何事轉凄然　故郷今夜思千里　霜鬢明朝又一年）

その一七　寺院巡り

支那の旅で、寺院巡りをぬきにすれば、甚だ無味乾燥なものになる。従つて、寺詣でを考へない支那觀光は、甚だ潤ひのない旅となる。

日本でこそ、お寺は葬式を取扱つたり、附近に墓地を持つてゐたり、頗る陰氣臭い所だと考へられてゐるけれども、支那のお寺は、境内がどこまでも明るい氣分に充ち、僧侶も朗かな樣子に見えてゐる。

○

日本の建築全體を見渡して見ると、そのうちで支那建築に最も近いものと思はるゝものは、寺院建築であらう。その屋根のそり、堂内の圓柱、佛龕の壯嚴美、鐘樓、廊裡、淨池、山門などの點をとつて考へて見ても、大體に於て支那のそれと相似た所がある。又僧侶の袈裟ころもなども、近いといふよりか、寧ろ其の儘である。尤も支那の僧侶が重々しい靴をはき、和尚の冠をつけた時の姿は、到底日本では見られない。唯長崎市外の山腹に、ずらりと並んでゐる禪寺が、福濟寺を初め、何れも由

來の珍らしい支那式その儘の寺々であつて、その構造は、疊こそ敷かれてゐるが、殆んど支那臨濟派の禪寺とそつくりで、その規模をやゝ小さくしたものと見て差支へない。長崎には古社寺保存會の國寶として、指定されてゐる山門もあるが、支那の本場には、それ以上のものが決して尠くない。

○

南北支那の寺詣でを試みてゐると、比較的支那の動かない方面、落着きのある澁い方面が遺憾なく靜かに味はれる。そはノヽした忙がはしい旅に陷り易い日本の觀光客は、例へば北方では、北平城外の白松寺(バイソンス)、大悲寺(タアエイス)、碧雲寺(ピーユンス)、臥佛寺(ワフース)などの禪寺を歴訪し、江南地方では、江蘇浙江のあたりで金山寺、甘露寺、棲霞寺、觀音寺、育王寺、天童寺、普陀洛伽と云つた寺々を巡歴することを忘れてはならぬ。かくして兎も角も山門をくゞり、樹下淨池に鯉魚を賞し、山僧と茶禪を語りつゝ梵鐘の音を味はふなどといつた、脫俗味のある氣分は、確かに支那土産としての好材料と云へるであらう。又折角支那を歴遊して居りながら、寺詣でを試みないやうな旅行振りは、寶の山に入りながら手を空しく歸つて來たのと同じ譯になるのである。

○

支那の寺詣では、專門家は別であるが、一般日本人にとつては、禪門を訪ねるのが、最も氣持よく感ぜられる。と云ふのは、日本人向きに、實に淸潔に掃除も行屆いてゐるし、その間靜寂な氣が漂うてゐるし、又山僧の氣持もどことなく日本僧のそれの如く俗氣紛々たるところがなく、確かに禪寺は訪問をしたゞけの價値がある。尙禪寺參觀は、單なる寺內境內の參觀だけにとゞめず、精進料理の方をも極め、又「靜觀」の掛札の出てゐる、座禪堂にも這入つて見たり、或は又大和尙の「方丈」の間にも通つて見たり、雲水の生活振りも見たりといつた風に、その內容を隅々まで細かく注意して見る事が必要である。見

北平城外道教の本山、白觀に用ひらるゝ奇雲古掬すべき提燈燈の身鯨尺にて六寸八分。

る人各々、その感じを異にしてゐるであらうが、支那の大陸生活の變つた一方面で、日本人に理解されぬところが、確かにこゝに存してゐるやうに思はれる。見かけとは違ひ、禪僧にはわりに學問のある者が少いが、しかし大規模の總本山に納さまつてゐる住職大禪師には、人格の高い名僧もゐる。直接之と面唔してゐるうちに、眞如の月に接する如き柔かい感化力を受けると云つたものもある。浙東

の旅に、慈谿の郊外山麓、普濟禪寺にゐる定法大和尚(テインファータウザン)の如きは、正にその一人であつて、浙江山門めぐりの旅には自分はいつもこの大和尚を訪ねることにしてゐる。

○

支那の寺詣でには、又樣子の變つた道敎の寺院が色々ある。普通「淸道觀」とか「白雲觀」とかいふやうに「觀」の字が之についてゐるので、すぐ佛寺と判然區別される寺であることがわかる。

この道敎の寺には、道服道帽姿の道士なるものがゐて、その唱ふる經文といひ、又道院内の飾りつけといひ、丸きり樣子が變つてゐる。殊に山の頂、深山の奥などと云つた、天地山川の大きい景色を背景に、悠久な氣持をいつも取り入れ、大自然と合一狀態の生活振りを採つてゐる。この點でこれは又支那大陸を旅する上の變つた參考資料となる。從つて、一夜の宿をこれに求めて見るのも、興味が深い。宿を求むるなら、譯なく應じてもくれる。

○

支那で、寺院に宿泊すると云ふことは、多少禪味のある試みに屬することで、半ば信仰の力や、或は物好きの氣分なども手傳つてゐなくては出來ぬ。だから、幾分か脫俗した變りものでなくては、思ひつかれないかも知れぬ。しかし山寺を訪ねんとする善男善女は、自ら雲水をもつて任じてゐる程のものでなくとも、一宵宿を求めたいとの意志を述ぶれば、殆んど無條件で以て直ぐとめてくれる。大寺であれば、一度に五十人や八十人、又は百人位の宿泊は、どこへか片隅の客堂に納め得て、尙充分のゆとりを持つてゐるくらゐである。のみならずその客の食料においても、客室に於ても、何んら不自由を感じさせないのである。

○

尙支那の寺には、樣子の變つた回々敎、卽ち俗に回回(ホイホイ)と稱せらるゝ寺がある。これは淸眞寺といふ名の寺が、各地に見出されるのがそれである。この寺では、豚を絕對に喰べない、信仰の固いものを集めてゐるので、結束力はなか〱强い。豚の代りにいつも羊肉を用ひるのを特色となしてゐる。

淸眞寺の經典は、アラビヤ語のコーランであることは云ふまでもなく、その大和尚は之をアホン(敎長)といひ、比較的學問のある又西亞細亞の本山へ巡錫して來た者が、それに納まつてゐる。この寺では、儀式の時にも、偶像は一切祀らない。四方は壁のみの殿堂で、神をおかない。堂内には信者が集まり、右手を腹に當て、伏し目になつて禮拜をする。又或は坐し、或は立ち、これを繰返し〱つゝアラビヤ語の經文を唱へる。一同は精神的にあたまに考へられた神に向つて祈りを捧げてゐるのである。

回々教信者は、天地宇宙あらゆる虚空に、無限の神が瀰漫してゐると見るのであるから、耶蘇教に見える形式的なマリヤの像であるとか、或は佛陀の像であるとか、又は孔子の像などを置いてゐる宗教は、之を低級なものと評してゐるのである。そして一日に五回づつ、正式に身を清める儀式が行はれるのであつて、人體に存する穴といふ穴を、悉く淨湯をもつて洗ひ清め、そして禮拜に取りかゝるのである。又アホンから說教のある時は、信徒はその職業の如何に拘らず、その定刻にはちやんと會堂へ集つて來る。支那で硝子商、翡翠商、風呂屋、羊料理などを職業にしてゐる者は、大抵はその回々徒であるものが多く、全支に亙りかれこれ三千萬乃至五千萬の信者があると云はれてゐる。殊に西の方甘肅省方面には、最も多數ゐて、政治的にも常にこれが統治上の懸念の種となつてゐる位である。

○

尚變つた寺としては、喇嘛寺がある。北平城内の雍和宮を始め、奉天に、又江南の各地に、到る所碧瑠璃色をなす大空に、喇嘛塔を聳えかし、ありし昔清朝宮廷の庇護を得て、榮えてゐた當時の俤を見せてゐる。

北平の喇嘛寺は、觀光客にその一種變つた鳴物入りの念佛、又曲線美に富んだ喇嘛僧の冠、或は燭臺盃、或は又佛龕に安置された抱き合ひの陰陽佛など、いつもながら旅の人の興味を惹いてゐる。

○

尚支那の寺詣でに、變つてゐるものとして知られてゐるものに尼寺がある。これに惡評を放つものは、尼とは名ばかりで、實は曖昧宿の變形であるなどいふ者もある。山東泰山の三合目あたりにも、有名な斗母宮といへる尼寺があつて、登泰客のうちには、話題の一つに必ずこの斗母宮にも立寄り、尼さんの接待で、熱茶でも戴くことを、樂しみとしてゐるものがないではない。尼服頭巾姿が、渡り廊下に隱見する樣子であるとか、又境内栢樹の陰に、石段を下りて客を接待する親切心であるとか、或は又その日向ぼつこをしてゐる頭巾姿の柔かい趣などと云つたら、何んとも批評の限りでない。その邊の尼寺の情趣については、讀者の想像に任せて置くの外ない。

尚泰山の絶頂捨身崖へ、玉皇頂の道士楊君と共に游んだことがある。その時同君は、溪を隔てゝ、遙か彼方にある石造の小堂を指して、次ぎのやうに說明してくれたことがあつた。

『あの小堂は、ほかなものではありませぬ。尼寺なので、今はたつた一人の尼姑が留守居をしてゐます。』

頂上から之に遠く羊腸たる石經が、斜に通じてゐて、天外の里にも一種の柔かみを思はしめてゐるのであつた。

○

支那寺を歴訪してゐるうちには、讀經の狀態を見ることが、又興味が深い。山寺を訪ねるには、先づ始めに山門を這入つて「知客（シカ）」の札の出てゐる所へ申出でるのである。すると大雄寶殿なりどこへなり、その場面へ案内してくれる。「念經（トンチン）」といへば、讀經の意味がよく先方に通じる。薄暗い寶殿のうちに、二尺大の大の木魚、三尺大の鐘なども見え、柱に垂れてゐる華蔓の色も何となく神々しく、そこに幾百人と集まる僧侶は、何れも藥の圓座に坐して、堆く積みあげられた黄色の經文を、奏樂の賑かな光景裏に、一卷々々と念じかたづけて行く。重々しい垂簾の奥は、全く晝猶暗く、燭を點にてそれ〴〵念經をしてゐる有樣は、いづこの寺でも幽玄な氣持が唆られる。讀經の聲に見る抑揚頓挫の調子は、日本のそれと如何にもよく似てゐる。

大和尚は普通のときはその讀經の席へは現はれない。何か特別な儀式、大齋の時くらゐに、姿を現はすのである。そして大抵は、方丈の間に納さまつてゐる。

○

支那の山寺は、僧侶の數こそ多いが、中にはその前身が俗界にあつて、商賣に失敗したものとか、又は放蕩をしたものとか、又前科者など、曰くつきのものも雜つてゐるらしい。であるから、身は墨染の衣を纏うてゐても、そこには俗僧がかなりゐるらしい。よく注意して見ると、圓頭の中央に、十二のお灸をすゑた跡を見せてゐる者が多い。日本では唯線香に火をつけて、近くまでもつて行き形式だけしか行はないさうであるが、支那の山寺では、事實上の灸點をすえてゐるのである。そして山僧として、拔差しのならぬ戒めに、これを利用してゐるのである。

○

尙寺院巡りには、前にも述べておいた精進料理のことを忘れてはならぬ。これ亦訪問の際豫め願つておけば、欣然として求めに應じてくれる。寺では之を素菜（スウツアイ）と稱し、油葉、筍、豆、豆腐、もやし、からし、野菜などが、主たる材料であつて、その味つけには、胡麻油、醬油、蜂蜜などが用ひられてゐる。菓子には又、黄粉（きこ）、米の粉、麥粉などで固めた落雁式の干菓子が、寺内でどつさり作られ、これを内部では點心と呼んでゐる。山寺の菓子は、誠に風味が高く、熱茶と共にこれをつまむのは、思ひ出の深い話である。

○

かやうに支那の寺詣では、日本と變つた氣分の味はれ、その堂塔伽藍の規模の大きい點や、僧侶の禪味のある點などに特に着目し、更に日本のそれらと比較するなども興が深い。

尙寺に關聯して、各地に散在する墓陵と、その土饅頭に見る形式、或は碑石の樣式などに見るものは、考古學上又は歷史上、趣味の深いものがあまたあるのである。

しかし尙こゝに注意したいのは、お寺の裏である。寺詣でだからといつて、僧侶はお人よしばかりだ位に輕く見てゐると、ひどい目に會ふこともある。元より始め「大雄寶殿」の前に備へ付けられた賽錢箱、卽ち「募化」の文字のはいつてゐる箱の中へ持つて行つて、金を投げ込むことはいふ迄もないことだが、しかし、香客の訪ね來たつて、佛前に紅蠟を供へ、そのまだ火の燃えてゐるのを見てゐると、寺僧がそこに姿を現はし、早速その手向けである蠟を惱燭店へ賣渡たす魂膽から、一々抜き取り、火を消して自分に收めてゐるやうな、抜からぬことをやつてゐる。又うつかり山寺に行つて、精進飯を依頼などすると、「おぼし召しでよい」といひ乍ら、後でひどく逆にぼられて、面にくい感じを起させたりするやうな者もある。その邊は、かなり參詣者の頭を惱ましめるものと云へる。

その一八　社會事業

支那は國家事業として、これまで慈善めいたことをやる施設は、わりに少い。その社會事業とも云はるべき仕事は、多くは民間有志の喜捨に成り、多くは民間でその仕事が計畫せられ、又實行せられてもゐる。

實をいふと、支那の社會相くらゐ、その救濟を要すべき幾多の事變の續出してゐる所は、ないと云つてよい。しかし本來支那は國柄が、我れは我れたり、人は人たり、といふ觀念のはつきりしてゐる所であるから、存外自分の身の處置、身の振り方についても要領がよい。從つて自分のこの世に生きて行く上の手段方法なんかについては、全く大悟徹底した頭を有し、理窟を抜きにして、すぐその名よりも實につき、實行に這入るといふ特徵を持つてゐる。

○

支那には各地に苦兒院といふものがある。養育院式のもので、之に貧兒、不具、孤兒などを取扱ひ全くの慈善事業を營んでゐる。かういつた事業の經營は、多くは富豪の苦兒に對する同情から集まつ

た寄附金で出來てゐるのであつて、その寄附の動機を解剖して見ると、不純な考へはわりに少い。眞に麗しい心の發動から、巨額の金を投げ出してゐるやうである。尤も中には、その人の過去の罪亡しにそれを埋合すため善根を積み、その因果應報を期待せんとする考へから、莫大の寄進をする者もあり又中には、神罰を恐れて、多大の犧牲を拂ひ、心の惱みをこれによつて打消さんとする者もあるであらう。

それから支那の人情の現はれの中には、同情から起つてゐるものが隨分ある。苟しくも、その細民階級あたりのものであつて、その手足目耳鼻といつた、身體の不具、又はその不自由なものに對しては、可愛さうなといふ氣持ち、憐れみの情と云ふものが湧き起り、路傍の物貰ひなどに對しても、その現狀をまのあたり見ると、之に必ず銅錢を投げてやる。その邊の慈善的氣分は、日本よりも進み、訓練が出來てゐる。

○

支那は、國家そのものがこれを救濟する仕事に取りかゝるといふ事は、あまり期待されない。だから、地方々々の社會人が中心となり、本氣でその事業を起し、これを處理して行くといふ考へが、盛んである。お寺に集つて來る雲水の如きも、見方によつては、之を寺といふ慈善團體に救濟せられてゐる意味も、含まれてゐると云へる。

又各地都城に見る會館の如きも、廣東會館、湖南會館、濟南會館、或は又寧波會館などといつた風に、倶樂部式の鄉土本位に出來た社會團體を云へるのである。出身者の富豪を數多有してゐる都城に在つては、會館の建築そのものも亦壯麗を極め、その規模も自然宏大なものである。處が出先きに金持ちのゐない地方人は、會館も亦從つて貧弱である。しかしその會館は貧弱でも、やつてゐる社會事業は、かなり行屆いたものを見ることがある。

會館の仕事の重なものは、鄉里から出て來て宿のないものに、宿泊所を與へたり、食事を與へたり、又鄉里へ歸る者に、旅費を融通してやつたり、病人に施療をしてやつたり、其の他、他人にいはれないこみいつた問題などを、人知れず内部で解決してやつたりする。又商賣に失敗した者で、再び立てなくなつた者に對しては、同業同士が互ひに無盡講をつくつてやつたり、或は返濟を目當てとしない醵金の方法で、何んとか目鼻をつけてやつたりするやうに盡力することがある。其の他葬式の出せない者に、弔ひを出してやるとか、墓所のない者に墓所を世話してやるとか云つた風に、かなり立ち入つて面倒をも見る。されば會館に於ける實際上の仕事は、かなり廣きに渡り、單なる社交倶樂部ではなく、大變たよりになる社會施設として考へられてゐるのである。

○會館は、一つに又「同鄉會（トンシヤンホイ）」ともいふ。又所によつては、「公所」といふ看板を掲げてゐる所もある。尙、江南地方では、田舍から出て來た家族のうち、誰れか死亡したものゝある場合には、その棺桶を一年なり三年なり、預けて置く習慣のある所もある。そしてそこには又別に「湖南殯舍」とか「寧波殯舍」とかいふ大文字を、白壁に記し現した土廊造りの長屋建を作つてゐる。蘇州でも杭州でも、水邊の到る所にこれが見出され、大抵運河沿ひの便利な所に設けられてゐるのである。普通こまかく一間幅位の、觀音開きの戸の有る小室に仕切られ、一棟が十又は二十位に區分されてゐる。杭州西湖の邊り、龍井寺の道中、叢の中には、この白堊の厚壁の長屋が、あちこちと散點してゐる。これらは何れも皆殯舍の古棟であつて、殊に西湖畔は天下隨一の名勝であるだけに、我れも我れもとこの湖畔の殯舍に永眠したいといふ希望が、物語られてゐるものと云へる。

○

「支那の住民といふものは、生前幾千里の遠き四川の秘境から踏み出して來てゐると云つても、いざ死亡したとなれば、墓所は必ず鄉里に求め、家鄉の人々によつて墓地の掃除をしてもらひ、子孫に位牌を護つて貰ふのを以つて名譽としてゐる。若しや子孫が榮えに榮えれば、その爲めに墓道も大理石の立派なのが出來、石人、石馬、牌樓で飾り立てらるゝのをもつて、無上の餘光あるものとして考へられてゐる。しかし多くは、先づ先づ思ふに任せず、暫く出先きの最寄りの殯舍に預かつてもらひ、故鄉へよい船便でもあるまでずる〳〵べつたりで、そこへ何十年となく置かせてもらふ習慣になつてゐる。しかし一面から云ふと、支那の社會事業のうちでも、この殯舍の建造と、その保存に面倒を見ることくらゐ、出稼ぎの旅人に安心を與へてゐるものはないと云つてよろしい。

尙支那都鄙の路傍に見る熱茶の施しに、凉亭の社會施設、又は高山の坂路に厚い石の板などを置き旅行者の休憩に便ずることをしてゐるなど、誰れ人の仕業とも解らせず、隱德を施せるものがあちこちに少くない。

○

支那の社會には、乞食の數が又かなり多く、見るも痛々しいルンペンが、路傍に憐れみを乞うてゐる。或は時には、路面に頭を敲きつけて、血を出して見せたり、又人力車の後を、五町でも十町も根よくつけて來たり、又名所舊蹟あたりには、賴みもしないのに乞食體の男がやつて來つて、說明の勞を取つてくれたりするなど、目に立つものが多い。

しかし又中には、金儲けにこれを利用し、民衆娛樂の盛り場あたりに乞をつれて行つて、衆人環視

の中で、地べたに苦兒を中心に圓を描き、白粉を用ひて俗語で哀れみを乞ふ名文を書き記るし、その粉文字を目當てに、しきりと喋々喃々してゐるものもある。「可愛さうなのはこの子でござる」と前置きして、その子の親に死別れてから、今日悲慘の極を嘗めるに至つた次第を、眞しやかに雄辯に物語つてゐる。大衆は興味につられて、七重八重と集りその乞食の哀れさよりも、その辯舌に感じて寄捨をして行く。つまりその苦兒を見世物として、一と稼ぎをやつてゐる譯であるが、大きな意味の社會事業は、その乞食を材料に、うまく進行してゐる譯である。

○

尙日本では見ないことであるが、內緣の妻とか、その他或る間違ひから出來た子供の仕末については、少しも惱む必要もなく、わけなくかたづくやうに出來てゐる處がある。

奉天の同善堂を始め、各地の慈善事業には、赤ん坊を抽斗の中に入れさせ、ベルを一つ押せば、親の名を明さなくとも、譯なく引取つてくれるといふ、誠に始末のよい手段方法までもが發達してゐる。又浙江省方面では、その子供を大洋の銀貨で買ひとつてくれる所もある。別段人身賣買の意味ではなく、一種の社會救濟であると見らるゝのである。

○

次に支那の監獄であるが、こゝには手におへない者が收容されてゐる代りに、又囚人の家庭の方で出來るところは衣服によらず、食事によらず、此の差入れが自由に出來たり、又看視付きではあるが、小窓を隔てゝ、家族の來訪者と面會が自由に出來たり、至つて自由なさばけた遣り方が見られる。內部を一とわたり參觀して見ても、夫れ〴〵囚人に職業が與へられてゐることは、日本のそれと同じやうであるが、氣分がどことなく陽氣で、花畑には胡蝶や雲雀が戲れてゐる。あれでは世智辛い娑婆にゐるよりか、却つて鐵門の中にゐて食べさせてもらつてゐる方が、氣樂だなど感じてゐるものゝ殖えるのは、當然の歸結かも知れぬ。

又支那各地の寺では、饑饉年とか、天變地變のあつた時などは、檀家から施米が寄進せられ、村人に施粥をしたり、施藥をしたりなど、その方面には、かなり行屆いた慈善的行爲が行はれてゐる。又寺々から旅僧が各地を巡錫し、結構食ふに困らないだけの雲水振りを發揮してゐるのを見る。その他盲人唖者などの門彈きは、山東省を本據に、各省各地へ每年夥しい數が出て行く。

○

支那の社會制度の上に、特に顯著なものとして云ふべきものは、苦力とその親方の話である。こはこゝに注目すべき目標となるものであるが、苦力に對する救濟の事業、失業者の救濟方法としては、

從來の權力者が、傭兵制度をとれることなど、特筆大書すべきことであると思ふ。この方法によつて動亂が續けば續く程、うまく仕事にありつくことが出來てゐるのである。自然の運用が、この兵隊の救濟事業ほどうまく行つてゐるものはない。

又兵隊に傭はれない方の苦力たちの群は、親方の青幇（チンパン）又は紅幇（ホンパン）などによつて、巧みに統制せられて行き、その間には又親分子分の關係なども出來、意外にも圓滑に、又人情味に富んだ空氣が汲みとられてゐるのである。

○

支那の共産氣分は、かういつた社會救濟、富の分配、不平分子の懷柔、その他軍閥打破と云ふやうな事象の上に、巧みに應用せられ、やゝもすれば田舍の土豪にしたところで、これからはその共産氣分をうまく利用し、これと平行して行くだけの心のゆとりを持たなければ、到底、長續きのしないものだといふ實情もあり、その邊から見て、國家として、又政府として力の弱い支那にあつては、共産と社會事業とは、或る程度まで切るに切れない密接な關係をもつてゐるものとして見られる。

支那の旅に、懷ろのゆたかさうに見えるやうな、目立つた裝ひをしたり、紳士振つた恰好をしたりすることの戒しむべきは、かうした點から見ても、大抵思ひ半ばに過ぎることであらうと考へる。

その一九　事變と對策

支那旅行で、最も不安を感ぜしめるものは、土匪、馬賊、又は動亂の突發などである。しかし彼等はさういつもあるものではなく、又その旅行先きの凡ての方面に亙つて、出くわすものでもない。北方がもめてゐる時には、南方は何んのことはなく、たとへ北方が動亂中であつたとしても、その地方によつて、何んら影響のない場合が多い。土匪馬賊にしても、その時と所を異にし、出沒の噂はあつても、こちらの注意のしよう一つでは、被害を蒙ることなく、何なく切り抜けることが出來る。

又排日騷ぎの如きも、商品をもつて歩くとか、その渦中に飛込むとかするのでなければ、唯當り前にしてゐる旅客に對しては、害を加へる如きことはないと云つてよろしい。唯取越し苦勞をして、常に神經をとがらし、おど〳〵してゐると、却つて自ら事件を起させるやうな結果になる。なるべく無頓着に、平氣でその中を突破し、觀光してゐるに越したことはない。

○

幾ら平和の時であつても、支那の旅といへば、お先眞つ暗の懸念があり、常に危險を伴ふものと相

場をきめてゐるが、これは支那の事情を、少しも理解しない人の氣持であつて、支那くらゐ人に無關心な態度を取る所はない。これは不親切なものではなく、互ひに無關心主義をとる習慣が漲つてゐるために生ずることである。

そのため支那の旅は、いくら周圍が騒がうとも、自分の荷物は自分で處理するといふことを原則にしてゐるならば、何んら恐れることは要らない。又いつも自分が兩手で提げられる程度を越えず、それ以内にとゞめて置くならば、何んらの心配も伴はない。人のことを顧慮しないで、ずん〳〵我がことを進行させるのが、旅行の秘訣である。事變中の觀光は、殊に然りである。

○

しかし支那の旅の特色は、俄かに夜汽車の不通を見たり、兵隊ばかり乘せて人民を乘せてくれなかつたり、驛に停車しないで素通りをしたり、規則通り汽車の役目を果たしてくれないことが往々にしてある。或は又土匪出沒のために、停車することもあり、又大水の氾濫のために、運轉不能に陷り、そのため南北交通の杜絶を見ることも珍しくない。

前にも述べたやうに、いくら日本でうまくプログラムを立てゝゐても、漢口に行き北上するに際し、大水のため、又は變事のために、こゝ二三日發車の見込みが立たなくなり、止むなく長江を下り、南京の對岸の浦口から、津浦線で山東經由の方に變更しなければならなかつたり、又一路上海へ下航し、汽船で青島大連經由天津に向ふのやむなきに至ることなども度々ある。變事の際の行程は、その時その時の都合で、如何やうとも融通のきくやうに、行程を變へるつもりでゐるべきである。

又大自然の惡戲とでもいふのか、船から岸を眺めると時に江邊の綠楊田畑の景色が、悉く皇軍のために喰ひ荒らされて、全く青色を見ないやうなことがある。見渡す限りの田園の畦道に立つて、農夫共が八尺に餘る大旗を振翳し、鳴物入りで以つて大騒ぎをしてゐるのを、汽車の窓から見ることのあるのは、この皇軍の被害を避けるべく、命がけでどよめいてゐる光景なのである。これらは旅人には、なんら關係のないことであるが、地方民にとつては一大變事であると見られる。

○

軍隊輸送の場合に於ける汽車は、一般旅客のことなど眼中になく、各等とも兵隊、軍馬、軍需品などが滿載せられ、その箱の續くこと實に四五十の多きに達し、屋上にまでも灰色の軍服をつけた手合が、うよ〳〵しやがんで運ばれてゐる有樣を見る。無理をすれば、箱の中へまぎれ込まれないこともないが、みつしり滿員なのであるから、中へ割り込んで見た所が、たとへ頭等の切符を持つて居やうとも、便所の側に押詰められる位が關の山である。これも時局の風景をさぐる興味からならば、面白

い場面ともいへるが　それにしても、太刀打ちの出來る肚と言葉を持合はしてゐなければならぬ。しかし兵隊にしたつて、さう捨てたものでもなく、存外親切で、夏の炎天驛頭で買ひ求めた黄色な水瓜を、窓框にぶち當て四つ割にしたのを、銅錢でかき別け、種を落して「さあ喰べなさい」といつた風に、差しのべてくれたりすることもある。當人達は種の儘むしやく〳〵やつてゐる。

○

排日騒ぎの場面は、動亂の狀態とは又自ら異り、驛といふ驛の壁に、柱に、日本の惡口、帝國主義の打倒など、さん〳〵揚げつらねてゐる。自分共が浙江地方を歩いた時も、その皮肉な色繪に、又文句の殺伐なのに、その時つれて行つた子供達迄不思議がつてゐた位であつた。けれ共、何一つ子供に危害を加へるでなし、菓子や果物を買ひ求めにやつても、何んら不安もなく、旅行者の氣分に對しては、矢張り親しみの氣味が見えてゐる。蓮の葉に菓子を包み、丁寧に掌中に手渡してくれる所など、小商人の心にも、手厚い氣持が窺はれたのであつた。

しかし領事館あたりでは、いざ排日となると、奥地の重慶、成都の如き四川地方では、先づ安全第一主義をとり、在留民の引揚げを命じ、日清汽船の船で漢口へ避難させるといふ手配をとる。奥地では、日本も列國も、要所々々に軍艦を碇泊させ、サーチライトで警戒怠りなくやつてはゐるものの、何んにせよ手薄のこととて、陸戰隊の手配も意の如くならず、結局安全第一の方法を取るより他に術もなく、司令官の命令によつて、引揚げの騒ぎとなるのである。奥地へ向つて、大々的の派遣隊を出すことは、費用ばかり喰つて實質が伴はない。それよりも引揚げの費用を補助してやつて、兎も角在留民をかばふ方法をとる方が得策である。

日本内地では、時局に對して軟派を唱へる連中が多いが、しかし第一戰に立てる在留民の多數といふものは、いつも硬派論者の方である。かくしていつもにらみつこの態度がもつれ合つて、あつさりと和氣靄々の間柄に行かないのは、實に殘念なことである。

○

排日騒ぎの絶頂に對すると、上海の陸戰隊本部とか、又日本人倶樂部あたりが中心地點となつて、萬遺憾なきやう、居留民の生命財産の保護は固より、北四川路又虹口（ホンキュウ）方面の外出交通上の安全を期することに、最も力を致してゐる。通學兒童の送り迎へには、夫々町内の義勇隊の人々が、これを保護しつゝその警戒怠りなきやうつとめ、又町内會の役員たちも、陰に陽にそのことを助けてゐる。

それ故騒ぎの時には、通學兒童の二人三人を持つてゐる家庭は、容易なことではない。變事に於ける旅行者も、この間の消息を目撃されるので、支那在留生活の一方ならぬ苦勞が、身にしみて感ぜら

れる譯である。沒收せられた日本の貨物なども、戸外に引出して、石油を注ぎ燒き拂はれたり、店主を引きづり出したり、之を人質にとつたり、果てはその住宅を燒打ちするなどと云ふ、おどかし文句で脅迫の限りを盡したりするのである。

あれほどの王一亭翁なども、日清汽船と大阪商船の買辦（コンプラドール）をしてゐた關係上、親友の排日屋から、理窟責めに押しつめられ、結局これを離間すべく脅迫されるに至つたのである。當時翁は、

『自分の手を切ることは少しもいとはないが、部下幾萬の船關係の從業員、苦力達が、路頭に迷ふことに想到すれば、輕々しく日清公司から引く譯に行かない。』と、己れの決意を語つてゐた。けれ共、『國家危急存亡の場合、部下の糊口のこと位が問題にしてゐられるか。』といきまき、『卽坐に自決してくれ。』と迫られ、言語に絶する手嚴しい方法をとられたことがあつたのである。

○

都合のよい時は、支那船へ日本の日の丸の國旗を掲げて、官邊からの高壓態度を廻避する手段をとつて見たり、仲々うまくやつてゐる。その癖、いざ排日の機運が高まつたとなると、官邊の力を得てよい氣になり、根こそぎに何處迄もいぢめつけやうとする。この邊の凄腕は、支那の旅をしてゐる人々には、想像以上のものがある。

尙時局に際して、支那人の間には、變名をしたり、變裝をしたり、その姿をぼかして行動するものが少くない。日本人はそこへ行くと、支那服の着こなしといひ、歩きつきといひ、顔の洗ひ方、墨のすり方など、どうもうまく行かない。殊に便所から出た時、手洗ひの水を求めたがる癖があつたり、又落し紙に字の書いてある紙を平氣で用ひたりなど、つまらない所から化けの皮が現はれるのである。食事の時、箸を横に置く一事をもつても、既に落第の資格がある。その邊のコツに至つては、かの蘆川、沖の二勇士であつてさへも、ついに事發覺して、北滿の露と消え果てた程に難しいものである。

○

上海の街では、事變の時でなくとも、平素からグロの話題が非常に多い。有名なガーデンブリッヂの袂で、突然一支那人が兩手をひろげて大の字形になり、進行して來る自動車に向つて「ひき殺ろしたければひき殺して見ろ」と、路上に立ちはだかつて怒號した壯漢があつた。自動車はとまる。相撲の數人が何處からともなく出て來て、いきなりドアーをあける。ピストルの音がする。大金のはいつてゐる鞄が奪ひ去られる。雜沓してゐる路上の行人は、引き金に手をかけてゐる物凄い姿に、振向く人さへない。

かういつた場面は、租界の目抜き、場末、埠頭、所を選ばず時折突發してゐる。殊に晦日、大晦日の頃は、かういつた襲撃、狙撃、暗殺の悲劇が、頻々として起つて來る。

最近上海ステーションで、財政部長の宋子文が狙撃された。しかしその流彈はお伴に當り、當人は幸ひに無事であつた。

いつぞや故田中大將が、稅關碼頭でやられた。その時も、彈は反れたが危ぶなかつた。

最近山本某君が、長春の驛頭で、張學良の便衣隊に一發見舞はれた。耳の側三寸の所をそれて、幸ひに當りはしなかつた。そしてすぐ日本兵のためにその犯人はとらはれた。

かやうな事實は、殆んど毎日の如く各所に續發してゐる。新聞に出るのは、ほんの一部分で、愚れた慘事は、枚擧に遑がないほどある。

○

支那の世相に、かゝる不祥事を見るのは、止むを得ないことである。しかしその多くは、つけねらはれた者に限つてゐる。緣もゆかりもない旅人には、一發の彈も勿體ない。しかし一旦ねらはれるとこれは又仲々うるさいのである。

先年段祺瑞の懷刀、徐樹錚將軍が、安徽派の某有力者につけねらはれ、一ケ年の久しきに渡つて、いつも目が光つてゐた。徐將軍は、世界を巡りて日本に立寄り、天津に上陸して、まさに北平に入らんとする前、遂に廊坊（ランファン）の驛頭で、敢へなくも射殺され、再び立つ能はざるものとなつた。

支那の事變に際しては、特別にかゝる事が多いと限つた譯でもない。闇黒面のグロ種は、平素だつて、無限に存してゐる。又それ程の殺伐な事件でないにしても、大仕掛な列車襲撃、又は旅客の荷物をねらつてゐる程度の泥棒は、何處の地方にもあるものと見て置くべきである。

○

又登山などの場合は、出來るだけその邊の事情に通じてゐることが必要である。嘗て廬山に於て、日本の某士官が、頂上の牯嶺（クーリン）を夜半に立ち出で未明の九江發の下り船に間に合ふつもりで、轎子を仕立て下山をした。元より轎夫は、箱根八里の昔の雲助同樣の徒であるから、よい餌が引掛つたとばかり、持物、鞄は固より、身の廻りすつかり裸にさせ、全くのサルマタ姿にされて、命からゝ〳〵九江領事館へ逃げ込んで來たのであつた。雲助は、容を下した籠に獲物を乘せて、擔ぐ足も輕く、東林寺虎溪橋の方指して、闇路に姿を消し、今もつてその調べはついてゐない。それもその筈である。夜半連れをこしらへないで、一人であのたよりない雲の峯を下るなどは、無謀も亦甚しい。

若し廬山を下る旅人は、必ず白晝を選ぶべく、止むなく夕暮れにかゝる場合には、廬山の主といは

れてゐる大元洋行主人、增田久次郎翁などを道づれにしてゐるならば、先づ〳〵大丈夫なわけである。

○

大仕掛の泥棒とは違つて、うつかり油斷してゐるひまに、ほつかりやるスリの巧妙さには、寧ろ感心させられるものがある。

よく話にも聞くことであるが、驛の待合所などに、手品仕掛けの大形手提鞄を持込み、外見してゐる客の側に、それから一廻りも小さいと思はるゝ鞄があると、譯なく上からそれをゴツプリ中へ嵌め込みかぶせてしまふ。その手鞄には、仕掛があつて、底が拔いてあり、無雜作に鞄を置くやうな恰好をして、その實、之を外覆ひにして、素知らぬ顏でさつさと提げて持つて行く。これは話のやうな話であるが、全くないともいへないことである。

その他電車内のこみあつた時、又城内或は租界地の夜の人ごみの間などでは、鋭利な刃物でポケツトをかすり切り、金をかすめて持つて行く話などは、常に聞くことである。小さい手廻りの持物は、必ず膝の上に置くべきこと、取つ手に腕を差込んでゐることなど、細心の注意を怠つてはならぬ。

しかしなるべく大切なものは身につけず、貴重品を持たないで歩くに限るのである。驛前の混雜、發車前の周章狼狽には、殊に間違ひごとが起り易い。

元來これはスリを働く者をにくむよりか、日本人自らが氣をつけて、如何なる場合でも、人目に觸れる所で財布を取出したりしないこと、ポケツトを膨らませて置かないこと、金はなるべく手に握つてゐるべきこと、其處まで極端に考へてゐて、丁度よい位である。

旅客は宿にあつては、貴重品を部屋に藏ひ込んでおくよりも、封印の儘賬房へ預け置くことが、何よりも確かな方法であることは前にも述べた通りである。受取など取つておく必要はない。支那は對人信用の堅いことは、日本以上のところである。如何なる支那宿にも、船中にも、「貴重品は各自必ず賬房（チャンフアン）に預けられたい。若し然らずして紛失しようとも、その責めに任ぜず」と、注意書は隨處に掲示されてゐるのである。

○

支那の旅先きで、旅客に最も安心を與へるのは、よい路連れを得ること、又護衞兵を得ること、これである。事情に通じた路連れを得て、これに案内して貰ふくらゐ安心なことはない。

しかし出先きでは、奥地深く這入る場合、さうこちらの思ふやうには行かない。そこで多くの人は、領事館を通じて、支那側の護衞兵を賴み込む。尤も護衞といつても名のみであつて、時には外人を監視する意味にもなり、又特別な旅費を負擔させて、遊山氣分を滿足させるために、こちらで賴まない

のに先方の方からついて來たがるものもあつたりする。たよりない氣持で歩いてゐる旅客にとつて、非常な安心を與へてくれるやうな大きな態度でついて來てくるものはない。この護衛兵のうるさゝに就ては、前にも大分述べたから、こゝでは略することゝする。

○

しかしかうした護衛兵と同道することは、支那の兵隊生活の半面を窺ひ知るのには、よい機會である。提灯、雨傘の行軍姿で、遠足氣分の實況を見たり、又不斷倉庫に藏つてあつた鐵砲を、わざ〳〵持ち出して、これに武裝させてゐるあたりの消息、又その着てゐる灰色の軍服の如きも、隊から渡るものではなくして、夫々自便であるといつたやうな實情などもよくわかる。それに月々手に渡る給料のうち、上官にはねられる上前の率、昇進運動に要する金額などの秘話に至つては、護衛をつれて歩いてゐる費用のいくらかゝらうと、かういつた場合でなければ、本當に體驗の出來ない話である。だからその話のたねは幾らでも發見される。山中雨雲の起つて、今にも降り始めようとするときなど、先生雨傘を翳して、帽子や服の濡れないやうにと心を配るのである。そのときその言ひ草を聞いて見ると、自便の服だから、自分の腹を痛めるのは馬鹿らしいと云つたり、又鐵砲をかついで、肩をよごしたりするのも好ましくないなどと云つてゐる。そして部下に重たい鐵砲を二人前も持たせたりするやうなのもゐたりする。

かやうにしてその赤裸々な場面が、そのまゝさらけ出され、意外にも貴重な材料が得らるゝのである。時には又軍隊の機密に關すると思はるゝこと迄も、語るに落ちて、色々た興味ある内幕話が續出する。總司令からの檢閲でもない限りは、平生は上官が頭數だけの費用をとつてゐる、我々には少しもよこさない。そして夫々を家庭へ歸らせる。いざ檢閲といふ時には、人員が揃はないものだから、人夫苦力まで驅り集め、之に服を着せてその場だけのごま化しをやり、その日だけの日當で、うまく辻褄を合せるのだといつた、滑稽千萬な實際の話までしてくれる者もある。

○

護衛兵の内容性質は、大略右に述べたやうなものだと云ふことが解つて見ると、罪がなくてよい。夜半兵隊はおそく、自分たちの宿の部屋に訪ね來たり、日記をつけてゐると、その文字を讀みたがつたり、地圖をそばから覗いて見たがつたりする。これなんども必ずしも意味がある譯ではあるまいが、しかし本當の奥地の旅には、兵隊などつれてあるくのは却つて見たい所が見られなくなり、又見せたい方でも、兵隊の手前堅く閉して打明けないやうな結果を見ることもある。確かに護衛兵などつれると、目的の大半は失はれてしまふわけである。又事實兵隊を必要とするだけの危險が、いつもある譯

ではない。早くいへば收入の少い兵卒に、酒をおごり、旅費を施し、土産を持たせて歸すと云ふのが落ちで、後は支那人に對する見榮體裁を張ること、今一つは矢張り萬一の場合にといふこと、それだけに過ぎない。

若し韜墨行脚で出發する者は、いつもいふ通り、兵隊など全く害があつて德がない。護照を下附されると、とかく賴まなくとも、これに兵隊がつきものとなる習慣がある。體裁はよいが、實は兵隊に喰ひ下がられるやうなものであることを、どこまでも考へておかねばならぬのである。

○

又支那の旅で、ひどく恐れられてゐる話に、人質の實話がある。事實英佛の耶蘇宣教師が、福建の奥でやられたとか、又山東の山中で人質になつたとか、或は江蘇の田舍でも、外人の旅客が時折行衞不明となり、後で人質の身受けとして金をねだりに來るなどいふ事も、珍らしいことではない。

人質のことは支那語で綁票（パンピヤオ）といひ、その人をさらつて持つて行けば、あとで金に替へられるとの意味から、かやうに債票の一つに見られてゐるのである。どうせ金になる代物である以上は、之を殺してしまふことまではしない。四川の奥地で人質になつた日清汽船の宮崎高橋兩君の如き、人質を金にする目的から、土匪は先づ如何なる場合でも、その金の出さうな目當てを見定めてからやる。そしてその耳を切り、板に乘せて、之をその家族の處まで持つて來る。家族のものが、その要求する額に應じてくれるまでは、根氣よく毎日のやうに續ける。そして結局ものにしてしまふのが原則ではあるが、しかし良家の子弟などを人質に取つた場合は、親の方でも、最早これ迄とあきらめ、取合はないのが多い。ものにならないときまれば、鬱憤晴らしに、その子供の兩腕を切り落とし、川の中に投げ捨てるやうなこともする。南方地方の水流に、時折りこれを認める。

○

北支邊の田舍では、眞夏の高粱畑を行く金持の主人どもが、待ち設けられた馬賊にかすめとられることがある。するとお伴をしてゐた手合は、何んら反抗もせず、その儘我れ關せず焉の態度で、引返して行くのである。その邊は誠にあつさりしたものである。どうせ喧嘩にならないと見れば、無抵抗でその事實を默認し、交渉によつて或る金額で引取ることを、覺悟してゐるらしくも見える。自分共奥地深く一人旅を續けてゐる際などは、人質の危險を感じないでもない。夜半の旅は元より、人煙稀な山里にあつて、かゝる氣持の感づかれた場合は仕方がない。どうせ自分も、土匪の仲間入りでもさせて貰ふ位に、腹をきめる外ない。すると却つて、何事も起らないですむのである。

○

子供さらひは、人質と形は違ふが、支那町の夕暮れ、戸外に戯れてゐる兒女に、菓子など與へつゝ或は手を引き、或は笊に入れ、天秤棒でかつぎ去るのである。そして方角の違つた意外の方面へ持つて行き、之を相當な價で賣りとばすことは、「年中行事」の中で述べた通りである。買ひ手はこれを育てあげ、或は女中代りに、又ボーイ代りにせんと、行先きを考へてゐる。そしてあつさりした氣持で家族の一人に見立てゝゐるのである。子供の方でも、存外氣に之をとめず、何んとも思つてゐないやうである。元來が戸籍のない國柄であるから萬事無雜作にかたづき、幾ら新聞種にならうと、頓着などしないのである。

人質は、子供さらひがかういつた無雜作に行はれてゐるやうに、奥地の旅では、殆んど毎日のやうに見聞し、殊に長江上流地方では、その人質の代金が這入らなかつたためか、江に突き落された土左衛門が、波間波間に浮いて來る。しかもこれに、烏がこれにとまつてゐるといつた風景を見ることが屢々で、四川三峽の珍光景を呈してゐる。

その他勤亂など、非常事のあつた場合には、奥地ではかたつぱしから敵を薙ぎ倒し、これを水に投ずる如き事もあり、又自然の大水で以つて、そのまゝ土左衛門となる者もある。喧嘩の言葉にも、重慶の野郎共の間に、「滅多なことをし出かすと命がないぞ、唐家沱（タンチヤタ）の流れで土左衛門に浮かせてやるぞ」といふ俗語さへあるが、之を大して物凄いものとも感じてゐない樣子である。

○

支那の旅に、ピストル其の他の銃聲を聞くことは、餘り珍らしいことではない。時折り夜の山中に、谷を隔てた彼方の上に、一發の銃聲を聞くことがある。そして長い尾を引いて、半天に斜に高く上る火の彈を見たりする。人語の響を聞き、牧童が警戒のために一發やつたもので、別段これは恐れるにも足りないのである。時には二發三發と、立て續けに來ることもある。しかしこれは夜警の報告をつくるためにやる材料なので、閻の山中にこちらを覗ふ譯もない。しかし銃聲を聞いた瞬間と云ふものは、餘り氣持のよいものではない。

又白晝四川の三峽では、これをおきまりのことゝいつてもよい位、その邊の土匪村で銃聲のひゞきを聞く。四川航路の船の煙突には、彈丸の貫徹した跡や、或はかすれた跡が、二三十個所も數へられる。けれ共、元來が客船のことであるから、甲板は鐵板で覆はれ、乘客に被害の及ぶことはないやうに出來てゐる。

都會地では上海の如き、まゝ戒嚴令下に、晝となく夜となく、非常を告げるピストルの音の耳に來ることがある。夜半廣東人が呼び賣る雲呑（ワンタン）の竹の音すらも聞えない死の街に響く、このピストルの一

發と云ふものは、これ亦悲凄を極めた感を抱かしめる。」

○

支那旅行中、變事の突發や、不祥事に遭遇する場合は、稀れに不可抗力的のこともあるが、多くの場合の遭難事變と云へば、多少とも豫知せられることが多い。

支那は流言蜚語の多い所であるが、その流言がたわいもない話のやうであつても、大體に於て當ることの方が多い。正月の頃北平の市中で、本年は初夏の頃、平津地方を中心とした一帶が動亂に陷り、交通が杜絶する云々の噂を、何處からとなく聞き傳へる。すると自然の廻り合せが、何んとなくそのはやつてゐた流言蜚語の導くがまゝに、局面が推移して來る。そして結局その噂が事實を生むやうな結果になる。

支那の事は、いつも雲を摑むに類したことが多いのであるが、遭難の事變と云ふものも、多くはその突然に先き立つて、虫が知らせて來る。そしてそれとなく豫知することが出來るやうである。そのため大官は、豫め家を疊んで租界に移つて行つたり、旅行を思ひ止つて、これが準備に頭をつかつたりなどする。支那の旅にありては、一々神經を尖らせるにも及ばないが、或る程度までは、これを胸に藏し置くの必要があるのである。

○

支那の事變に際しては、常に例の便衣隊の策動を見ることがある。一人又は三々五々と、市中を歩いてゐる平常服の姿をしてゐるものが、その袖のうちにピストルをひそめかくし、隙ねて目ざしてゐる注意人物の姿が見つかり次第、之を狙撃するのである。驛頭に、碼頭に、路上にと、如何なる場面にこれが姿を現はして來るかは、全く解らない。それが便衣隊の特徴とする處である。しかし旅先きで、旅客そのものが狙はれる如きことは、特別の札付きの人間でもない限り、決してないことである。その點は特に心を安んじてゐてよろしい。土匪にしろ、便衣隊にしろ、さう無闇みに普通の旅客を目ざして、襲撃するものではない。

又旅先きで、よく毒酒をもられるとか、麻睡劑を嗅がされるとか、鴆毒を御馳走の中にもられるとか、とてつもないことを云ふものがあるが、これ亦全く餘計の心配である。よく事情に精通してゐればくるほど、こは馬鹿げたことであることがわかり、初めての日本旅客の氣に病んでゐることは、十中九分九厘まで無用の取越苦勞であることが解るのである。

○

しかし支那の旅は、常に環境の順應と云ふことと、無關心主義でゐることとの、この兩原則をモツ

トーとして、プログラムを立てなくてはならぬ。さうするならば先づ間違ひはない。殊更に異を立て、目立つ行動をとつて見たり、或は威張り散らす如き行動をとつてみたりするのは、最も禁物である。支那世相の裏面には、常に懸賞付の犯人、亡命客などもあまたあつて、警察方面でも、かなり之が探索に腐心をしてゐる。

元來支那の警察なるものは、天下の飾り物であつて、大した期待は出來ない。しかし懸賞付の捜索方法ばかりは、かなり徹底してゐる。

近來公安局の名によつて、役人が旅館に押掛けて來て、旅人の身分、素性、携帯品、行先などのことを綿密に調べる。そして地方の治安維持に努めてゐるやうである。宿の方でも、或は書面で、又は電話で、泊り客の身元を役所の方へ傳へ、かなり嚴重な報告をしてゐる。日本の旅客が、幾ら嚴しい態度で臨檢せられやうと、その人の心にやましいことさへなければ、無抵抗主義で平和裏にこれに應じ、その聊かも疑念を抱かせないやうにすべきは固より、反感を持たせる如き言葉を發せず、又その素振りを見せないやうにしてゐるべきである。その點は、最もつゝしまなくてはならない。多くの日本人が、これ迄の支那の旅で、氣まづいことを仕でかしてゐるのは、こちらの出やう態度が、相手の心を激發させるやうな行き方をしてゐるのに原因してゐる。

その二〇　芝居と寄席

支那に漫遊に出かける客は、一夜を芝居、寄席に費すことを辭してはならぬ。旅行者を出迎へに出た古馴染の知人どもは、とかく驛頭で迎へるなり、西も東も解らぬ始めての客の第一印象をよくせんばかり、荷物の方は宿屋に任せ、豫め意中の紅燈街へとつれ行くものが多い。そして、よい加減醉眼朦朧になつた頃を見計らひ、第二次會を名ある劇場へと案内して行く。

○

珍らしい綾酒で乾杯をしてゐるうち、旅の疲れもいつしか癒え、芝居に腕車をつらねて驅る頃は、月も朧に清風は面を吹いて、よい氣持になるものである。日本から始めて來た客を、案内しつけてゐる連中のことであるから、料理屋で幾時間と時計を見、千兩役者が登場する芝居の時刻は凡そいつ頃と見計つてつれて行く。その邊は慣れたもので、多少早目に出かけて觀覽席に納まり、體を休めてゐる。ゆとりをとつて十時半頃迄に着いてゐれば、よいといふ段取りである。どうせ芝居のせりふなども、珍糞漢で、耳にチ！チーパーパーと響くだけであるから、何んの意味やら一向に解らず、唯騒々

しい奏樂の音と、長髯の武人の立廻りを見るばかりである。

その舞臺に現はれる武人の型は、三角旗を數多後ろの襟元に差し、腕を張り、足を揚げ、勇ましげに舞臺面で演じてゐる。その濃厚な光景が、場内に充ちた煙草の煙を通して、ぼやついて見えてゐる。これ位が先づ支那芝居の第一印象で、さうたうの長時間をかけて眺めるの必要もないやうに考へられる。

○

支那の芝居は、日本の芝居のやうに、畳々しい繪の看板が出てゐるのでもなければ、場内にこてこてと美しい裝飾がしてあるのでもない。唯軒端に、「第一舞臺」とか、「大戲院」とか、「開明戲院」とかいつた劇場の名が掲げられてゐるのと、後は紅白の紙に當日の外題や、上演する役者面々の名前が、無雜作に墨書されてゐるのが、門前に立てかけられてゐるのを見る位である。芝居の入口は、すべて簡單で、中に這入れば凡てのことが解るといつた風に出來てゐる。

劇場内部の構造は、本來觀覽席から芝居を見るといふよりも、聞くことの方を主眼にしてゐる爲め、所によつては席を舞臺面に對して、縱に平行してつくり、卓上に茶菓を置き耳を正面の舞臺に向けて坐するやう設備されてゐるのもある。

○

支那芝居は、元來聽くことを眼目としてゐる。言葉の上でも、芝居をば「聽戲（ティンシ）」といつてゐる位である。つまり芝居は聽くべきもので見るものではないと考へられてゐる。從つて支那の芝居では樂屋を舞臺の正面、幕の前に設けてゐる。鑼、太鼓、胡弓、三味線、笛、木琴などの樂器を手にした囃し方が、姿をそこに現はし、これに和して俳優がその前に出て踊り演じてゐる。

幕の左右は出入口があり、絶えずこれから現はれたり隱れたりする。そして南北何れの地方にありても、日本に見るやうな花道やうのものは設けられてゐない。あの狹い舞臺に持つて行つて、時折り數十人の役者がこてこていかめしく着飾り、登場することがあつたり、五尺に餘る長い雉の羽毛を、逆かさ八文字に冠にさし、縱横無盡に立廻つてゐる樣子など、支那武劇中でも最も目につく所である。

○

舞臺面は、囃し方が露骨にそれ〴〵その姿を現はしてゐるばかりでなく、時には伶人がその手にしてゐた胡弓を、俄かに下に置き、自ら樂屋から飛び立つて、上演者の中に加はることがあつたり、又出演最中、せりふを唱してゐる役者の喉を潤はさせる爲め、黒頭巾も何も被らず、いきなり大茶碗と茶瓶をその場に持込み無遠慮な姿で觀覽席を前に茶をなみなみ注ぎ、役者の口先へ持つて行つて飲ま

せてゐるところの恰好など、天下の見物であると評される。その間何んら之が舞臺面に對し、ぶちこはしになるといふ氣兼ねをしてゐるでもなく、正々堂々とやつてゐるのである。

又此劇で、その場に死んで倒れた者が、日本ならば黒頭巾の手で、黒布もて被ひ隠させたりなどして、その後ろをこそ〳〵這ひながら立ちのく所であるが、そこを支那芝居では、平氣で客の見てゐる前を、死んだ筈の當人が、によこ〳〵這ひ出したり、又甚だしいのになると、歩いて行つたりするのもゐる。その間、何んら濃やかな遠慮ならしい氣持をさへ働かせてゐない。

又かなり都で、晴れの舞臺を演ずる時ですら、觀客を前に右手で手鼻をかんで見たり、唾を吐いて見たり一向に平氣なものである。例の我れは我れたり、人は人たりといふ氣持が、どこまでも出て、この演藝の上にさへも力強く現はれて來るのである。

○

觀客にしても唯觀客席から、その役者の聲なり、立廻りなり、その役者が精神を打込んだ所を着目するのみであつて、日本人が氣にするやうな細かい點などは、少しも眼中に置いてゐない。

元來座席に納つてゐる客共にしても、日本人のやうに、特別に芝居見物とふれ込んで、晴れの衣裳を着て行くでもなし全く平常服そのまゝで、何んら身の廻りなどかまつてゐるものはあまりゐない。寧ろ一日の仕事勞役ををへたまゝの體を、芝居の内へ運んだといふに過ぎないのである。その座席にあつて、熱茶を啜り、西瓜の種を噛り、時折り熱い手拭の配られるので顔を清め、又菓子果物などの物賣りが笊を片手に賣り來るのがあれば、之を買つて摘んでゐると云つたところである。女子供をつれた客もあれば、職人體もある。又役人らしいのもゐる。色々様々であつて、全く場内は、民衆娯樂の一大場面を演じてゐると云へる。

○

支那芝居の特色としては、その幕がないことで、のべつ幕なしに次ぎから次ぎへと、場面は移り變つて行く。廻り舞臺といふものも勿論ない。そして見た所、如何にも騒々しくて、場内は濃厚な氣分が漲り、役者の隈取りや、衣裳に取りつけた小鏡の閃めき、紅緑の緞帳に飾られた肉太の文字の縫ひとりなど、何處迄も重々しい藝術味を見せてゐるのである。

樂屋内に奥深く這入つて見ると、役者の銘々は、素肌になつて薄化粧、厚化粧に、合せ鏡を用ひてゐる所、又あのこつてりとした厚ぼつたい衣裳に、冠をつけてゐる所など、苦心慘憺たる所が見えてゐる。梅蘭芳などが、夜十一時頃の舞臺面「天女散華」に出演する時などは、かれこれ八時頃からその化粧にかゝつてゐるといふさわぎ。それ位に手のかゝつた仕度をしてゐるのである。

杭州西湖の名者を列記に見る共舞臺芝居の番付。白蛇傳は外題、下に

○

支那芝居の觀覽料は、日本に較べると著しく安い。田舍芝居になればなるほど、殆んど寄席同樣の木戸錢で、誰れ人も平等に、樂しく芝居氣分を味ふことが出來る。そしてはね時は、大抵十二時から一時頃になるので、千兩役者の腕を見るだけを目的にしてゐる者ならば、大抵十二時前後に出かけるのである。

左に名高い芝居の外題名と、それに出演する俳優の名を紹介して置かう。括弧内は、その演劇の音曲名である。

閻瑞生「美玉愛玉」（蘇灘）
高慶奎「御碑亭」（北京、西皮）
高慶奎「此家波」（北京、西皮）
陸菊芬、花旦「南京十杯酒」（南京、南調）
馬金生、馬媛媛「拾打波」（本灘）
林步青「拔け蘭花」（上海）
「賣花球」（蘇州、東卿調）
筱文炳、倪杏生「講堂」（寧波、灘簧）
「五卅春調、醉奉珍珍」（蘇灘）
范醉春「跳蹧」（蘇灘）
范少山「五卅數詞」（蘇灘）
小桂芬老生「四郎尋貫娘」（北京、西皮）
梅蘭芳「寶蓮燈」（北京、二簧）
梅蘭芳「武昭關」（北京、二簧）
花月英、陳河東「徐河增出燈」（申曲）
小楊月樓「黛玉葬花」（北京、二簧）

景玉峰、花旦「楊貴妃醉酒」（北京、平調）
小桂芬、小子和、老生、花旦「淤龍戲鳳」（北京、四平調）
小子和、花旦「孟姜尋夫」（江蘇、唱春）
載松甫、九連環、花旦「蕩湖船五更」（江蘇、小曲）

○

支那には、又芝居のほかに、寄席の方面が仲々勢力を持つてゐる。そのうち此民衆娯楽の呼びものとして、榮えてゐるものは、打鼓（ダーク）、西皮（シーピ）、二簧（アルフォン）などであつて、何れも民間演藝のかたわれとして、大衆の興味を唆り、各地方とも、隨分寄席の氣分を賑しく漂はせてゐる。西皮、二簧は、夫々民間で流行してゐる笛、太鼓の合奏曲である。

或は又江南地方では、唱文書（チャンウンシュ）と稱して、日本の琵琶歌に類した調子で、三味線、笛、胡弓などの合奏の遊藝がある。又田舍には、宣講と稱して、面白い節のついた古文學の讀賣りをして、人を路上に集めてゐるなどもある。其の他噺家、落語、安來節式の面白い大衆向きの催しも各地にあつて、夫々奏樂裡に百姓船人たちを喜ばせてゐるやうである。

又盲人が、門彈きに三味線胡弓の音も優しく、運河を行く民船の樓上に一曲を彈じて、乘客から喜捨を仰いでゐるなども、可愛げがあつて面白い。

東京では淺草に、支那人の李載と云ふ男が、愛嬌のある手品で成功し、日本人の妻を貰つて、大いに自ら親善振りを發揮してゐるのなど、これ亦有名な話である。

その二一　民衆娯樂所

支那の旅には、又その民衆娯樂の遺憾なく發揮されてゐる場面を見ることに、充分の時間をさき、肩のこらない大衆の嬉游氣分の現はれてゐる處を充分に味ふべきである。それに踏み入ることは、一つには旅の疲れを休めることになり、又一つには、嬉々として各地の大衆の生活にゆとりを示してゐる所が、赤裸々に味はれるのである。

○

支那の民衆娯樂の特色は、第一金がかゝらず、四民平等に、富者も貧者も共に打雜り、歡樂氣分を漂らせてゐると云ふ所に見所がある。折角の娯樂氣分が、高い費用をかけなくては、味はれないといふに至つては、民衆娯樂として眞の價値はない。

又支那の社會では、胡弓一竿にしても、わづか十錢か二十錢で求められ、優に百人千人の多數の人が樂しめる。その衆と共に打寛ろげるといふ所に、音樂としての力が現はれて來てゐる。

周代以來、常に歷史に見える所を以つて見ても、音樂をもつていつも時人の心をやはらげ、平和の空氣を漾はしむる事に努めてゐる。宮廷は宮廷なりに、下層民は下層民なりに、夫々古樂又俗樂が行渡つてゐて、一般支那生活の內容は、常にその奏樂によつて著しく着色せられてゐる。田園綠樹の蔭、誰が家にか玉笛を聞き、又江上の遊船に、胡弓の音のひゞきを聞くなど、江南の旅人にも、如何ばかりかその思ひ出を喚つてゐることかわからぬ。

○

支那を旅行するに當たり、音樂趣味がなくては、漫遊の樂しみの大半は失はれる。支那の芝居に這入つて見ようと、紅燈街の軒下を通らうと、その曲の耳朶を打つ音が、或は「御碑亭」「紅寶閣」「狸猫換太子」「一見哈哈笑」などの如き、人口によく膾炙した調子を耳に挿んだ時などは、何とも云へぬ愉快さがあり、その興味は全く人知れぬものがある。

永らく支那生活をなし續けてゐる在留日本人の中には、鼻歌で俗謠小唄の一つも歌つてゐるやうな先生も時折り見る。打解けた支那の友人などと、田圃道を行く時などは、餘韻嫋々と、或は泣くが如く或は訴ふるが如く、尾を長くひいた歌ひ振りを聞かせてくれるなどなつかしく、それがいつとなしに耳に殘り、かの地を歩いてゐる時の情緒など考へ出され思ひ出が深いのである。

○

支那の民衆娯樂のうちには、跑馬場（パオマーチャン）と云ふがある。こは競馬場の賑ひであつて、その第一等の金高は二十四萬弗、最近は又四十萬弗といふ大仕掛の獲物もあるやうである。全く上海邊りに見るその人氣と云つたら一通りでない。其他逸園、申園、明園など競犬、或はフランス租界のハイアライなど、上海の娯樂場界ではよく知られ、又最もハイカラな方面での催しとして、その人氣をひいてゐる。しかし近來、餘りに白熱的になり、度を過した爲めか、工部局の方では八釜しくなり、中園明園は廢止の運命となつた。逸園も遠からず南の方、澳門（マカオ）地方へ移轉させるとかいふ噂もある。

○

競犬の人氣と云ふものは、支那客は元より、日英米獨佛露印度邏羅など、殆んど在留四十七八ケ國の人々が、夜の歡樂に我れを忘れてそれぞれ競犬に札を入れてゐる。場内は見渡す限りの廣い芝生で、中央のサークルを挿んで、大規模の棧敷が後方ほど高くつくられ、それに屋根が施されてゐる。世界的に有名な脚の早い競犬が、約七頭、赤青黄藍茶黒白と云つた風に、色とり〴〵な着物をき、それに番號をつけて、定めの時間前にコースに一列に並ぶ。その時はそれぞれ箱に入れられてゐる。ベルの合圖と共にパタツとその箱が傾く。すると一勢に七頭の犬が競走のスタートを切る。その目標は白兎で、こはコースに電流の通じてある針金を傳つて走る、フールスピード式のものである。白兎は無論初めからつくり物であることは、勿論であるが、電流がかけられると、隨分速く走る。そしてその兎の四本脚は、ふんばつたまゝの形をしてゐて、針金を傳ひ、飛ぶが如く滑かに行く。最も速力のある犬にしても、やゝ近い距離を保ちつゝこれを追つかけてゐるのである。幾千呎の長距離を、一廻り或は二廻りと行くうちに、赤が勝つたかと見てゐると、青がこれを抜き、決勝點眞近になると、この赤青共に落伍して、茶がこれを抜き、名譽のチヤンピオンの名を占めると云つた風である。かくして第一着、二着、三着と、順番がきまり、之が黒板に掲示せられる。

○

競走に出る犬は、夫々專門的に、苦心慘憺して育てあげてゐる持主があり、その持主自身が、自分に自信のある尤物でなければ、晴れの舞臺には出さないのである。痩せてゐても、脚の姿のよい、首のさがつて腰の上つてゐるやうなのがよい。見るからに天晴れの勝利者になるだらうと思はれるものばかりが、そのゲームの都度都度選出され、引つぱり出されてゐる。そのコースに出る前、一應それぞれ色の着物を着せられると、ゆる〳〵幾十萬の觀客の前にお目通りをさせられてゐるのである。

肝入りの手合は、「青の二番」「いや赤の一番」と、夫々意中のものを言葉に出さないで、切符場に行つて札を買ひ求める。むつつり屋の英國人が、七番の茶を買つてゐるのも見られる。

愈々ベルが鳴る。皆箱から飛び出す觀客はつばきを飲んで、水を打つた如く靜かに、そして意中の青に、赤に、茶に、白に、と手に汗を握つて力み、走る犬の方へ眼を傾注してゐる。馳て勝負はきまる。決勝點にはいつた第一の勝利者は、赤である。次いで夫々名譽の冠を得た第二、第三などのものが正面の黒板に、アラビア數字で機敏に揭げられる。客にしてその第一の星をかち當てた者は、その札をもつて、夫々定めの場所へ出かけ、ぞろ〳〵と狹い通り路に人波を打つて行く。割當て金は、その時その時に渡る。それを取りに、我れも我れもと行くので、大變なさわぎである。人氣を集めてゐた赤や青は、札を買ひ求めた頭數の多いために、割當金も思つた程多く來ない。所が、餘り人の當てにしてゐなかつた七番目の茶などが、意外にも好成績をあげたといふ樣な時は、茶の札を買つてゐた客は、非常な札ビラを數多貰つてくる。

○

こんな譯でゲームは一切り一切りと進み油は乘る。賭けた金が五倍十倍となつて歸る。或は百倍になつて歸るものもある。最後の十時、十一時頃になり、思ひ切つて賭けると、さつぱりこれは當てがはづれたりする。その邊の所謂勝負は、誠に定めない譯である。

しかし目のきく連中は、日本人のうちにもかなりあつて、三井洋行の〇〇君の如きは妻君携帶で行つて、いつもしこたま福の神に惠まれ歸つて來る。又或るうちの奥樣は、主人公の留守中に、妙なことを覺え込み、理論はうまいが最後の一幕に、懷中淋しく自動車賃もかつ〳〵で歸つて來るといふやうな始末の者もある。

しかし近來は、日本の銀行會社でも、遊園へ頻々足を向ける先生達は、當人の懷でやつてゐることではあるが、翌日のオフイスの事務に、力が籠らないとか何とか、兎角浮腰勝ちになる。そんなわけで、兎に角上の方からの目が光つて、ぞろ〳〵整理の時には、かやうな先生が、先づ第一に俎上に載るとか噂されてゐる。

○

又支那在來の民衆娯樂のうちには、拳闘（クンフー）と稱するものがある。筋肉を練る武術で、上流の家庭でもこは屢々試みられてゐるのを見る。

男子で十二三歳にもなれば、ぞろ〳〵その道の稽古をさせられる。我々が遊びに行つてゐても、五間八間と云ふ距離のある所を、腕をまくつて歩み、握り拳を振りつゝ行つたり來たりする。近づいてその當人の腕を握つて見ると、筋肉のしこりの如きものが、ぞろ〳〵出來かゝつてゐる。大人の三十歳四十歳といふやうなものになると、野球の球を皮膚下に入れてでもゐるかと思はるゝ位、大きい瘤

狀をなした肉塊が、腕つ節の邊りから肩の方へとかけて、見る〳〵移動をして行くのを見せてくれることもある。當人の腕の筋肉は堅いこと堅いこと、まるで金鐵の如き堅さで、或は青竹の如くにも感じられる。あの平素豚聲で肥滿してゐるやうに見えてゐるのが、拳闘の力で以つてこれ迄にきたひ上げられてゐるとは、珍らしい話である。

○

曾て揚州の城内で、或る家庭に結婚問題から閙着ごとが起り、敵味方に別れて、豪の者が十人ばかり集り、愈々正に火花を散らさんとする刹那に、拳闘の仕合の王先生といふのが來た。先生は自分に今夜の芝居の打明け話をしてくれたのであつたが、風流な揚州城内の一夜のことで、特に物珍らしく、私は心の踊らんばかり期待してゐた。ところが、王先生の御入來とあつて、双方とも事なく手打ちとなり、折角の珍場面を、拜するの光榮を擔ふことが出來なくなつた。しかし王先生が、腕まくりをした時の右の腕を握らせてもらつた所が、如何にも外見にたがはず、實に仁王の如き筋骨で今も尚その時の感じが髣髴として目に浮ぶ。

支那の武術は、ひとり拳闘に限らない。竹扇の如きものにしても、持主の腕にこれを翳しかまへてゐれば、敵から闇夜に一本受けることがあつても、受太刀にへたばらないだけの厚味のある大骨がつけてあるのである。單なる風を呼ぶ目的ばかりでなく、支那の大扇は、その邊の用意到周振りがあり、之が支那の民衆娯樂の裏面の力ともなつてゐることを、考へねばならぬのである。

○

尙支那には、武術とか大武術とかいふ語があるが、これは日本の輕業のことをいつてゐる。その輕く身をかはして、敵の襲撃から切り抜け、飄然とその裏をかくといつた辨慶と牛若丸の場面のやうなことが、その起源をなしてゐるものらしい。しかしそれが後には、單なる奇を好んだ離れ業を演じて、大衆の喝采を博するやうなことを目的とするに至つたのである。

民衆娯樂場の人寄せの中に押し割つて這入つて見ると、よく四本脚の卓を、わざと一本脚で立たせるやうにして、あとはこれを中にもたげ、危なかしい位置に置き乍ら、その上に腰掛けを逆樣にひつかけ、又その上に椅子を喰ひ違ひに重ね合せその上を舞臺として、こゝで輕業師が逆立ちをしたり、蝦なりの形に兩足を後ろから折り曲げて、喉元で交叉させてみたりして、つまり花環の如き形をつくり、滿座の客に滑稽な笑ひ噺などして、一同を喜ばせたりなどするのがある。そのいつも危險な位置に身を置くことを、平氣でやることは、支那の武術の最も得意とする所である。

○

又時には、直徑四五寸、長さ七八間もあらうといふ大竹に、飾りの大旗をつけて、大の男が正月の寒中半裸體で、これを直立させたまゝ、ひとりの肩から他の一人の肩へと移し投渡すのである。竿の先きの鈴は、玲瓏と鳴り渡り、遠方にゐる往來の行人迄もが、その紅旗の美しいのと、鳴る鈴の音にひかされてやつて來る。

集つた大衆の足をとゞめさせ、それからそろ〳〵と、大武術について大演說が始まるのである。その間依然として竹の竿は直立したまゝ、何んらこれに手をあてがつたり、支へたりすることはしない。そして其處いら邊りを、踏む足の力も强く、數回歩き巡ぐるのである。日本にないかういつた馬廻げたうちに、一種の力强い何物かを物語れる輕業が各地に行はれてゐるのを見る。

○

支那人の輕業振りと云へば、幾ら素人でも手に入つたもので、どこまでも種を見せないで、技術の神妙に入つた極致のみ見せるところは感心である。雨傘一本に鐵の輪、五六個を持ち來たり、觀客の前で、ぱつと片手に輕く之をひろげる。そして、竹の柄をもみ〳〵、くる〳〵廻すのである。その上に例の輪を一つ投げて受け、二つ投げて又受け、悉く何れも之を落さないやうに受け乘せてしまふ。今度はその輪自身が、くる〳〵自動的に廻り始める。速力をかければかける程、くる〳〵速く廻はる。なんとかかけ聲をして、逆に竹の柄をねぢると、輪といふ輪が又反對に廻り始める。そこへ左手をぱつと開いて、上を睨み、忍術の如き術をつかへば、傘の上の一つ一つが、今度は火の輪になつて、炎をぼや〳〵あげつゝ、所謂火の車の光景を演ずる。炎は巡ぐる。傘は廻はる。見物人は齊しくあつけにとられて見てゐる。しかも油のひかれた唐傘は、少しも燒けもこげもせず、依然完全な傘の姿を失はないで、廻つてゐるのである。かうした理窟を超越した妙技を演ずることは全く支那人でなくては出來ない藝當と見える。

○

時には又、五寸の鎌を咽喉から食道へと通し、或は拳大の彈丸を呑み込んで見たり、又八挺十二挺といふ澤山の抜身を、空高く投げてあやつり、地上に落ちかける一つ一つの柄を、輕ぐとらへて調子をはづさず。閃めく片刃の秋水を、何等物凄くも冷めたくも感じさせない巧みさで、本人は平氣に扱つてゐる。

『まだまだやさしい……』

顎を上向けて、靜かに調子をとつて行く冗談まぢりの愛嬌は、馬鹿らしいやうでも面白い。

その他世人のよく知つてゐる通り、水を盛つた茶碗を綱の兩端につけ、巧みに遠心力を利用して、

右手に扱ひ左手に渡し、又どうかすると股の下までくゞらせ、或は後ろで又前でこれを一本の棒の如くに輕くあやつる。果ては頭の頂に、その勢のついた綱を乘せたまゝ、きり〳〵きり〳〵廻してゐる。そして又自分も廻り始める。そうかと思ふと、又宙に二三尺これを投げ上げて、落ちるその綱をば額で輕くうけとめる。鼻の先きであしらふ。かくして結局元の狀態に茶碗を戻し、兩手を持つて客の面前にこれを示すのである。尙衆人環視の中で、その初めに盛られた水を、其の儘滾して見せる處までやるのである。幾ら練習が出來たとはいつても、此處迄の業は、もはや人間業とは思はれない位である。

其の他例の皿廻しに壺廻し、鐵輪入れを始めとし、大道民衆の前で、人を笑はせつゝ慰み半分にやつてゐるあの場面は、これ亦支那人獨特のものである。

○

支那人の手品、卽ち奇藝の方面はこれ亦驚くべき神秘的な腕を有してゐて、これは輕業以上に見る者をして參らせる。周圍に見物人のゐる唯中に一人立ち、前に四脚の机一つ置かず、自分で被つてゐた帽子をぬぎ、之を足で踏み、手でもみ、その上これを客の前に持ち廻り、表も裏も改めさせる。やがてチーチーパーパーの掛け聲を合圖に、勢よく腕を差し伸べ、帽子の中にそつと視線を注いだと見るより速いか、右手でつまみ出すその品物の出ること出ること、實に驚き入つたものが出るのである。先づ赤い鞠、青い鞠が出たかと思ふと、又一匹の錦鷄が飛び出す。大きな硝子の水盤に、欄ちゆうの金魚の嬉しげに泳いでゐるのが出て來たりする。果ては五色の長いテープが、いくらでも出て來る。そして萬國旗の大きいのが、次ぎから次ぎへと出て來て千秋樂となるのである。

これだけの品物は當人の袖のうちにかくされてゐたとも思へず、地べたから湧いて出たとも思へず又風船玉をふくらませたやうに急拵らへに出來たものとも思へない。兎も角何が何んだかさつぱり解らず、唖然で八方から見てゐるが、まんまと感心させられてしまふ。

又空箱の中から、美しい絲衣の美人の實物を出したり、これを一旦蓋して見せ、なくしたと思ふとその次ぎは前方に之を傾けその蓋をあけて見ると、最早そこには影も形も見えないのである。これなどはよく二重底の仕掛がしてあるのだと噂するものもあるが、側によつて縱から見たり、橫から見たりしてみるが、さういつた氣色は見えない。その邊の手際は、種明かしのされない所では、素人にはどうしても合點が行かないのである。

○

恐らく支那の民衆娛樂中、手品輕業くらゐよく人の虛をつき、目をうばひ、心を引きつけるものは

あるまい。幾ら學問があり、注意力が鋭くても、電光石火の腕でやられた日には、あつといふ間もあらせず、魅せられてしまふのである。しかもその妙技に對する報酬、與へられる賃錢は如何にも薄く、普通銅錢の二三枚も投げればよいとされてゐる。見物人中に外人がゐると、十錢を通り相場として、帽子をもつてねだりに來る。要領のよい手品師は、人を集めるだけ集めて、黒山の如く人の桓根をつくるまでになつても、尚おしやべりをつゞけ、人をそらせないやうにする。その邊は、噺家以上である。そして技術を演ずる前に、幾らかの金を喜捨させようとするのである。時折りこれを集めもしないで、

『總計算がまだ豫定の額に達してゐない。やりたくもやる氣になれない……』

などゝ與太を飛ばすこともある。

かうした武術や手品や輕業に、驚かされたりたぶらかされたりしながら、民衆はそのことに興味を持つて打集つて眺めてゐる。殊に春の日永のぼか〳〵した日和などには、あちらこちらに人山を築き、人々の顔にもどことはなく柔らかみが見えて、大衆の娯樂、民衆歡樂の氣分が漂うてゐる。邊り近所には飲食店、駄菓子屋、砂糖黍、玉轉しなどの、露店商ひが始つてゐる。田舍から出て來た牧童は、水牛を草原に放ち乍ら、手品に引きつけられて、歸るのを忘れてゐるといつた場面も見える。

○

支那は田舍であらうと、都會であらうと、その朝に夕に暇さへあれば、賭博に心を奪はれる。三々五々集まれば、必ず卓を圍み、卓がなければ地面に線などひき、そろ〳〵やらかし始めるのである。路次の横町、馬の往來の繁からぬ所邊りでは、男女七歳にして既に何事をか賭け事をし、大騒ぎをしてゐるのを見るのである。打囃いだ大聲で、ころ〳〵轉げて行く銅錢の後をつけ、その表が向いたか、裏が向いたかについて、勝負をやかましく云つてゐる。其の他黒丸、赤丸の印のついた細長い歌留多を片手に、小さいサークルを描き、金をはつて爭ひ囃いでゐる小景も見る。

又四川省の奥地、岷江の岸では、紅寶（ホンパイ）と稱し、眞鍮製の四角の板に仕掛けられた紅白の刻み物に、同じ眞鍮の四角の蓋を被ひかぶせ、その中に愚された紅白のさいころが、何れの方向に向つて蓋されてゐるか、それは全く不明である。そのとき親になつた者が、その板の一片のぎざ〳〵のついてゐる方を、自分の分としてとり、他の三方をそれ〴〵子に、思ひ思ひはらせる仕掛けをする。幸ひにして親の持ち前の方向に、中身のさいころの紅が向つてゐたとすれば、親は子がはつただけの金を、全部殘らず取り集めることが出來るのである。

しかしその蓋を開けて見ないことには、すべて解らない。もし不幸にして、子のうちの一人の方に、

紅の刻みものが向つてゐたとすれば、そこにはられてゐる金高に滿つるまでのものを、その他の子のはつてゐたものから取集め、それ〴〵當つたものに仕拂はなければならぬ。それでもなほ不足すれば、親自らが手許のものから吐き出さなければならぬのである。

この紅寶の遊びは、極めて幼稚な方法ではあるが、人智の低い巴蜀の天地に、今尙行はれてゐる賭博の一種であつて、先年奥地の旅を試みたとき、序にこれが見本を大小二種持ち歸り、今だに尙愛玩してゐるのである。

○

麻雀に就ては日本では元來米國經由の舶來的流行であつたゞけに、その熱も又さめやすく、今では數年前に較べてその倶樂部も廢業又廢業の悲運を見せてゐるものが多い。

支那の本場では流石に民衆娯樂のナショナルゲームとして、彌榮えに榮えてゐる。茶館酒樓は固より、宿の泊り客、火車の食堂ボーイ、船のキヤビンボーイ、すべて身分の上下を問はず、これぱかりは老弱男女打混じてやつてゐる。そのワンゲーム毎に、麻雀卓の上へ兩手をさしのべてガチヤ〴〵まぜ返してゐるあの象牙の音竹の音の騒音は一種いふにいへない天國の響きを思はせるものがある。

紅燈衢に醉餘目醒めて見れば、紅裙達を相手に、酒仙共が嬉しさうに麻雀牌をパチン〳〵と、紫檀の卓の板の音も小氣味よくやつてゐるのを見る。目もさえて來て、求めらるゝ迄もなく、次ぎのゲームに自ら割り込むといつた粋人なども少くない。商取引の話を纏めようとするにも、又詩文の一つもひねくらうとするにも、先づ一番と、いつも麻雀を以て一夜を明かすのである。中には、旅の空の漫遊を一日々々と延ばす人さへある。

○

麻雀の發祥地として知られてゐる所は、浙江省天童山の裏山、象鼻山の麓にある東錢湖（トンチェンフ）といふ水鄉である。こゝは乾隆の昔、湖畔の漁人共があらしに閉ぢ込められ、漁船で漕ぎ出られない時など、家にあつて筐ツ葉を集めたり、或は小魚を持寄つたりなどして、これを賭け乍ら徒然をまぎらしてゐたものである。その時の催しの賭け事が、果たして今日の麻雀のやり方と同じ方法であつたかどうかは、審かでない。しかし兎も角、その小魚の代りにこれを繪に書いたり、又小筐を描いたりして、結局の所後世の麻雀牌に見る如き圖柄が出來るに至つたものだと云つてゐる。

浙東の地には、江南隨一の麻雀通が數多ゐて、その技術といひ、手付きといひ、第六感の働く鹽梅といひ、到底他省の人々の及ぶ所でないと、一目置かれてゐるやうである。道理で上海の麻雀倶樂部でも、寧波人がこれに加はると、一座の恐れをなすとまでいはれてゐる。まさかそれ程でもないが、

兎に角寧波の人は、勝負に強いよい頭を持つてゐることは事實である。

○

かやうにして、凡て支那の民衆娯樂は、先づ賭博に重點が置かれてゐる。賭博に、酒に、女に、芝居——この四つは、支那の歡樂世界に於て、四大中心となつてゐるのであつて、殊にそのうちでも、賭博くらゐ興味をひいてゐるものはない。

上海にゐる日本の所謂大班（タイパン）連中でも、いざ競馬の季節となると、何となく氣分を浮き立たせてゐる。

『若しこんどの競馬で、二十四萬當てたら君はどうするつもりだい。』

『當てたら早速今月限り銀行なんかやめちやつて、日本へ歸り、鎌倉と箱根に別莊を持つて無論左團扇ときめ込むのさ』

實に陽氣な期らかな希望と、想像に燃え立つた話があちこちに出る。

最近にも虹口の某自動車屋の主人と店員が、五弗宛コンパニーで出し合ひ、十圓の札をたつた一枚買つただけなのに福の神に見舞はれたものか、第一等の二十四萬弗にはならなかつたが、そのお隣りの番號を當てた。その爲め輕少ではあるが八萬弗とかの金が、寢耳に水の夢心地で這入つた。頭を轉がして夢うつゝに現金をもらつてくる。大分仲間から目をつけられてはゐたが、先生機敏に商賣の方の車臺をふやすやら、ガレツヂを擴げるやら、店員の方も昇格して株主に繰り上げられるやら、大變なお目出度いことになつたのであつた。

又羽左衛門丈が競馬目當てに、上海へ毎年春秋二期に出かける熱心家の一人であることは、有名な話であるが、未だに輕少な福の神も舞ひ込んで見えないらしい。あれ程まで根のよい支那娯樂の實地研究者のことであるから屹度そのうち、五福臨門の祥雲が漂ぎることであらうと思ふ。或はお弟子の一人位つれて、コンパニーでやつたら存外早くものになるかも知れない。

○

又支那のユーモアの方面のことであるが、こは田舍芝居によく道化役者が、鼻の先きに白い粉を塗り、滑稽な姿をして出て來ることがある。輕く面白く觀客を笑はせ、芝居の切れ目切れ目に、お茶を濁すユーモアたつぷりの輕快味を演じてゐる。滑稽氣分を喜ぶ支那の大衆たちは、これらの道化役者をひどく歡迎してゐる。又張り子でつくつた化面の隈取り、相貌の上なんかにも、破顏一番、腹の皮をよらしむる如き、奇想天外的の道化振りを發揮したるのが色々あり、一座をどつと笑はせてゐる。丁度日本の茶番狂言に當たるもので、こは大衆娯樂場の呼び物となつてゐる。

又町村に催ふされる夏の祭、春秋の催しとかには、相當滑稽な鳴物入りで登場するものもある。そ

の道化振りは如何にも荒削ではあるが、その質朴のうちにどことなく力強いものが包まれてゐる。低級な茶番のやうに見えてはゐても、一種深みのある又重々しさのある笑ひを忍ばせてゐる。これが日本の茶番と、特に趣きを異にしてゐる點である。

○

次ぎに覗き繪であるが、これは日本の三十年前のものが、丁度南北各地に行はれ、正面に高く舞臺として示されてゐる繪と、その兩袖に斜めに翳されてゐる繪とは、大抵古の戰爭の實況を示してゐる色繪である。

城壁の高い背景の上に、三角旗を偉風堂々と翻へし、銀鞍白馬に跨つた鬚武者の勇將が、三軍を叱咤しつゝ、その城門に攻め入らんとする物々しい光景を示してゐる。

その覗き臺の左右に立つてゐる男は、客の來り覗いてゐるのを相手に、調子の節も面白く、鞭を敲き敲き、軍の光景を語り續け、夫々嵌め込みの繪を一方宛、綱を引いてはかたつと落してゐる。村郎野娘共は、興につられて、何事かひしめきつゝ兩手を穴に當てゝ、しきりと覗き込んでゐるのである。

○

覗きの前に立つ大衆共は、先客の代るまで待ちわびてゐる。覗く子供等の嬉しげに打囃ぐのを、よくよく氣をつけて見ると、何事か解らない乍らも、貰ひ笑ひをしてゐるのである。そして子供等は覗き繪の變つた場面を見て、又もやどつと笑ひくづれる。何事であらうと、銅錢二枚を拂つて、一番はしの穴からそつと覗き込んで見る。所がこれは驚いたり、戰爭から凱旋して歸つた兵士が、歡樂の場面に狂態を演じてゐる眞最中の光景を示してゐるのである。紅燈街に浮れ込んだ兵士どもが、出征の疲れを醫し、その功に報ひられる名譽の待遇を受けてゐる所なのであつて、その實況たるや、誠に顏是なき子女などには、目の毒になる方面の光景ばかりでなく、決して見せしめにもならない怪しからぬ場面を、續き繪で現はし、その覗き屋の綱を引つぱるその上下運動につれて、一種の狂態が、しかも彩色入りで示されると云ふ仕末である。かういつた露骨な覗き繪は、南方福建省閩江の邊り、萬壽橋の袂で見せつけられたものであるが、日本でならば疾くの昔、警視廳からお目玉を貰ふ所なのである。流石に支那は民衆歡樂の天地だけに、あちこちに大陸振りを發揮して、その邊を大目に見る所は可笑しくもあり氣の毒にもある。

○

南北支那全體を通じて、民衆娯樂の最大天地は、誰れがなんといつても北平の南部に開かれてゐる、天橋路（テンチャウル）そのものでなくてはならぬ。

いつぞや德富蘇峰翁と、北平の名勝を語り合つてゐた際、北海や天壇のあたりの話に移り、飛んで、又民衆娯樂の中心地、天橋路のことにまでも及んだ。すると翁は「天橋路などいふ所がありましたかね。ちつとも氣がつかなかつた」といつて居られた。普通支那の漫遊客は、よしんば文人墨客の興味に燃えてゐる人々であつてすらも、北平に這入つて天橋路を見落される方が多い。天橋路の位置すらも知らずに、北平を立ち去る客が多いやうである。これは無理のないことで、怖らくその百人中九十九人迄は、天橋路が北平の前門外を眞直ぐ乘り切つて、天壇に差しかゝる手前の廣ッぱ、その小屋がけの澤山ある處で、あの中間地帶に位置を占めてゐることをば、一寸氣がつかれないであらうと思ふ。

○

天橋路は、元來北平市中の城内生活にとつて、打寛ろいだ大衆本位の唯一の娯樂場として提供せられた所である。一度その内部に踏み入つて見れば、凡そ支那各地にある、ありとあらゆる娯樂歡樂の目標物になれるものは、一つとして備はらないものはない。これあるがために、支那の中產階級以下のものは、眞に我が北平の街の存在を感じてゐるといつてよい位である。實にこの天橋路の天地は、大衆福音の樂天地であると斷言してもよい。

しかもこの天地は、すべてが經濟的で、金のかゝらないやうに遊べる老弱男女の夫々に向いた、好きな遊びが自由に出來、又こゝに思ひ切つて生活の道を得ようとすれば、樂にありつけもするといふところなのである。

尙そのほか、娯樂としてゞはないが、わが家で盜まれた盜難物の集まるところが、その一隅に泥棒市として設けられ、これに足を運べば、こゝに大抵の盜まれたものは出てゐるといつた、便利なところなのである。泥棒市に就ては「翰墨行脚」（春陽堂）に詳しく書いたから、それを參照されたい。

○

民衆向きの天橋路の、大衆向きな娯樂機關として數へられるものは大體次の如きものである。

一、田舍芝居
一、寄席
一、輕業、手品
一、見せ物（怪獸、奇島、豆男）
一、覗き繪（日清戰爭のもの多し）
一、茶館
一、曲書き

一、薬　草　賣
一、獸　膽、膏藥賣
一、玩　具　店
一、花　簪　屋
一、凧、繪草紙屋
一、赤本黄表紙屋
一、飲　食　店
一、駄　菓子屋
一、易　者、占　師
一、齒醫者、目醫者
一、講　釋　師
一、燒　つ　ぎ屋
一、古　道　具屋
一、古着毛皮屋

一、呉服緞帳屋
一、家　具　屋
一、門　彈　き
一、子供賣り
一、甘　栗　屋
一、燒　芋　屋
一、古　靴　屋
一、古　金　具屋
一、小　鳥　屋
一、蟲　籠　屋
一、盆　栽　屋
一、支那ソバ屋（麺、饅頭）

これらの店は何れも露店式で、雜然と相並んでゐるうちに、自ら大通りと横町道とが出來て、天壇に至る大通りを中軸に、その左右に十數町と擴がり、その一角は、又城南公園といへる中流の遊客を

相手とした、遊園地と相接してゐる。

○

天橋路は、一度之に踏込んだ者は、場内あちこちに、小屋掛けの田舎芝居があまた建ち並び、門外に洩れ響く銅鑼、胡弓の音の騒しさや、又その到る所みつしりと並んでゐる露店、茶館、飯屋などが競爭の形で賑ひを見せてゐる、色の黒い着流しの民衆連が卓に寄り、首をすくめ舌鼓を打りてゐる樣子や、店の嬶さん達が、聲の限りを張り上げて客を呼びとめてゐる騒ぎなど、如何にも打ちくだけた氣分が漲つてゐる。

又この人出の多いことと云つたら、恐らく朝夕こゝを野天の一大倶樂部と心得て集まり、嚢中わづかの金で、終日要領よく暮してゐるやうにも見える。北平の上流社會の人々の高級な生活振りから、若しこの方面の大衆生活のありのまゝの娯樂氣分を親しく視察して見ると、北平の城内生活の裏表が、いかなる有樣であるかゞ遺憾なく讀めて、そこに始めて昔ながらの北京の國都としての半面の世相がはつきり掴めるわけであると思ふ。

○

上海の民衆娯樂場としては、第一金のかゝらず、又城内氣分のたつぷり體驗せられる所を見なくてはならぬ。それは今日何んといつても湖心亭を推さねばならぬ。

誰れも云ふ話であるが、支那の旅で湖心亭といふ言葉を耳にすると、そこに一種いふべからざる詩的情趣を感ずる。湖南の洞庭に游ぶと、そこには南の方湘水(サンシュイ)に、聽雨亭といふのが、雲煙模糊の山水石橋を背景に倒影の美を見せて、孤立する雅景を眺める。その屋根の反りに見る曲線といひ、又その四柱の情趣きといひ、誠に畫圖の如き感がある。又杭州西湖の水郷に見る湖心亭は、漫々と湛へた瑠璃盤の水中に柔かい柳の綠をぼんやりと現はし、これ亦湖上の一風景をしのばせてゐる。

○

上海城内の湖心亭は、その名も懐しい印象を旅客に與へてゐる評判の遊び場所であるが、しかし上海を一度か二度見たくらゐの人には、湖心亭の名さへよく記憶されてゐない。唯漠然と、城内の雜沓してゐる繁華な場所に池があつて、これに壊れかゝつた木の手摺りのある九曲橋があり、向ふに屋根のそつた面白い高樓の聳えてゐて、その石橋を渡ると、自らその樓下に這入れるやうに出來てゐたといふ、そんな朧ろな記憶を呼び起して、ぼんやりと話してゐるに過ぎない。

城内の民衆歡樂の天地は、これに足を踏込めば、目に、耳に、口に、鼻にと、非常な刺戟の強いものが、前後左右から迫つて來る。その周圍の雜沓、觀樂の雰圍氣は、急激に人の頭を刺戟する。色彩

も、臭氣も、奏樂も、話す言葉も、凡て皆異國情趣で終始し、城内入りを敢行した者にとつては、案内者から一度や二度湖心亭といふ名稱を云はれてゐても、頭にぴんと來ないのである。しかしその文字を明確に掴んでおくならば、その文字から來る氣持が、その民業歡樂の場所の意味と、ぴつたり台する譯になる。

○

湖心亭の廻りは、大世界、小世界の見世物、寄席、芝居があり、小鳥を集めて鳴かし較べをしてゐる鳥屋がかたまつてをり、色刷りの掛軸、錦繪などを飾つた店が並び、又寫眞の引伸しに、紅綠金銀の繪具をこて／＼と點彩した千兩役者の舞臺面などを、いやが上にも濃厚に美化し、衣裳は元より、花冠、耳目鼻の隈取りも厚化粧で、如何にも支那氣分たつぷりの處をショーウインドの中に見せてゐる。又店の四壁に、額椽もきらびやかに陳列してゐるやうな店があつて、それが軒を並べてゐる。中には店頭で、その繪具を加へて行くにも、行人の目につくやう、わざ／＼明るい店へ持出して、筆を入れてゐる者もある。

又その附近には、田舍の宜興から店を出してゐる海鼠燒の店や、朱泥、白泥の植木鉢、筆洗、水瓶などを天井まで高く陳列して、文人めいた遊客をひきつけてゐる店もある。その他饅頭、炒餅、油條などと云つた、大衆向きの喰べ物など賣つてゐる店もある。その隣りを見ると、象牙細工の美しい店が出てゐて、痲雀の牌など、抽斗をぬいたまゝそれに並べ、硝子越しに見せてゐるものがあり、或は又象牙の箸、象牙の櫛、象牙の筆筒、耳飾り、腕環などと、何れも上海土産に相應しいものを飾り並べてゐる店がある。よく立ち寄る店に主人を訪ねて見ると南洋の耶子の木影に使役されてゐる象の群れが、それ／＼牙を鋭く現はしてゐる物珍らしい油繪など、新たに壁間高く揭げて店飾りに工夫をこらし、店員の五六名と一緒に、にこ／＼顏で自分を迎へてくれ、熱茶を前に久振りの四方山話するやうな店もある。

○

湖心亭の池の周圍には例によつていつもの覗き繪だの、タオル、靴下、紅洗面器、脚爐などの雜貨を並べてゐる店、佛手柑、苹果(林檎)などを出せる果物店、又安物の掛軸など、それ／＼片庇の露店をづらりと湖畔に出してゐるのを見る。その側へ、乞食體に近い、しかし卑しからぬ顏付をした老翁が、十幾竿の胡弓を紐でしばつて肩にかけ、その一竿を右手でかなぐりつゝ、雜沓の中を呼び賣つてゐるのなども見る。又田舍から出て來たらしい百姓が、一莖九花の春蘭などを笊に盛り、悠々路傍に陣取つて客を呼んでゐる小景なども見る。

大體湖心亭の池の邊りは、かういつた光景で、春夏秋冬、夜も晝も、殆んど歡樂の天地として遺憾のない賑かさを呈してゐる。さうかと思ふと、又附近には幽玄味に富んだ寺の靜かな庭が、高壁を隔てゝ別天地をなしてゐたり、或は又隱君子の別業とも思はれる高雅な樓閣、池亭、石橋、洞窟などのあまたある淨境などもあつたりする。又善男善女を四六時中引切りなしに引よせてゐる城隍廟などもあり、堂内手向けの香煙で、むせび苦しむばかりの光景を見せてゐる。

湖心亭の遊びには、かういつた方面をゆる〳〵心置きなく巡りつくせば、その附近の小東門や、老北門、新北門、乃至は高昌廟（カオチヤンミヤオ）あたりまで踏み出さなくとも、悠に半日や一日をこゝで費すことが出來るのである。

○

しかし城内に這入つても、その多少とも滋味を解してゐる風流人であると、こゝに逃べたやうな、がさ〳〵してゐる所は好まれない。むしろ靜かに隱君子の幽庭を訪ねるとか、或は又同じ湖心亭に遊ぶにしても、九曲橋を渡り、亭内の古玩店を一々軒並みに歷訪し、或は棚に飾られた古銅器だの、染付、青磁、その他錦の織物だの、玉器だの、古硯だのといつた翰墨の數々を、手にとりひねくり廻はし、之を味はひつゝ打眺め、これが値段を一々あたつて見たりなどする。氣に入らねば買はないだけのことであるが、半日の時間を消すのは、譯のない事である。亭の一階は廻り廊下の厚壁に沿ふて、尺餘の硝子瓶に、紅白赤斑出目など、各種の金魚の珍奇なものが、幾百種となく陳列されてゐる。恐らくこれは天下の見物である。これを見終つて、窓外の鳥籠に囀る小鳥の音をきゝつゝ、かうした娯樂の天地に翰墨を玩ぶなども、亦一興であるであらう。しかし他の店で買物をした包みなど、うつかり棚の上へでも置いて、古銅器を愛玩し、之に見とれてゐたりすると、氣のついた時には、いつしか包みは誰れ人かに持ち去られてしまひ、後で騷いでも始まらない。こはよくお上りさんに見る話であるから、注意が肝腎である。

○

湖心亭の二階三階には有名な茶館になつてゐる處があつたり、又素菜（スツアイ）（精進料理）の民衆食堂が開けてゐる處があつたりする。素菜は、その味ひもおいしく、價も極めて廉である。漁り疲れてよい加減の時刻になれば、石橋を渡つてこれに登るも、亦變つてゐてよい。都合では、茶館の窓際近く席を占め、撚手巾（ネンシュチン）（熱い手拭）を貰ひ、ゆつくりお茶で喉を潤ふしてゐるのも隨意である。

上海城内の歡樂は、湖心亭附近の雰圍氣を味ふのが、最も要領のよい遊び方である。少しも油斷はならない處であるけれ共、興味の深いことは、先づ第一等である。出來れば二人三人とつれをつくり、

勝手の解つてゐる案内者を仲間にして出かけた方がよい。しかしこゝでは、骨董品にしても、優良なものは殆んどないのであるから、餘り金を澤山つかふことは考へものである。支那の人にしても、ここでは財布をしめて、所謂民衆娯樂の裏に交り、氣分を養ふために出浮くと云ふに過ぎぬ。

○

最近の湖心亭は、池中の石橋も、石の手摺りに改められ、水も醫敗してゐたので、清水に改良され、湖心亭そのものも數年前改築されて面目を一新した。

以前は石橋の曲り角に、必ずむさくるしい氣持のわるい乞食が坐してゐた。そして紳士淑女の裾をひつぱつてゐたものであるが、それも近來は追拂らはれ、あたりがさつぱりして來た。三年五年前までは、隨分いやなところであつたが、最近行つて見られると、見違へたほどよくなり、むしろ樣子のハイカラになつてゐるのに驚かされる位である。

上海は、その滯在時間が幾ら短いにしても、乘物を小東門、又は新北門の廻り角あたりにとゞめて湖心亭覗きをやつてくるだけのことは、是非ともお勸めしたい。幾ら時局の際であつても、この民衆娯樂所ばかりは、時局動亂から常に超越してゐて、來たものは大歡迎、一視同仁の溫かい氣持で迎へてゐる。凡ての各國人も、こゝばかりはよい氣持になつて、城内氣分に醉はされる所である。上海に遊んで、湖心亭を見ないやうな人は、未だ上海を見たとはいへないのである。

○

若し湖心亭の城内入りが恐くて、踏み込めないといふ旅客があるならば、せめてフランス租界の大世界なりと遊ばれるがよい。又共同租界では、四馬路（スマロ）から三馬路あたり、又大馬路（ダマロ）の永安公司横町あたりの雜沓の巷がよい。このあたり一帶には、大衆向きの娯樂場が、隨所に出來てゐる。

殊に大世界は、朝早くから晩おそくまで、その場内で舊派、新派の演劇、手品、落語、動物園、メリーゴーランド、なんでも御座れである。殊にその最も高く貰えてゐる高閣に登つて見ると、千里の江南地方は一瞬のうちにをさめられる。中にも、上海の俗語たつぷりなモダン連鎖劇などが、斷髪のモガなどで演ぜられ、場内はいつでも西瓜の種のからが、一パイ散らばつてゐるといふ賑かさである。

又四馬路の娯樂場は、茶館、酒樓、茶館、とりぐ〳〵に綠の看板に金文字、或は紅の篇額に銀文字、五彩のイルミネーション、ネオンサイン等で、不夜城の觀を呈してゐる。二十年前には、四馬路の宵といへば、年若い美人を左の掌中に乘せ、それを肩の高さまで上げて、斜に風を切りつゝ、かけ聲の調子も勇ましくあの雜沓してゐる人波の中を、別けて行つたものである。鏡の間の、茶館樓上から、手摺り越しに之を眺めてゐると、薄桃色や、薄綠の衣裳に着飾つた丸ぼちやの姑娘（クーニヤン）たちが、藝者屋の

男の肩に乘つかつて、窈窕たる姿を見せてゐた。その當時のなまめかしい光景は惡くなかつた。

十年位前から、次第にかうした目出度い四馬路の夜景も、姿を消してしまひ、次第にモダン式のものと代り、今では長いストツキングをつけ、頭の帽子も何んだか洋風まがひのものに變り、口べにの色こそ楊貴妃や西施をあざむかんす美しさを見せて居れ、頭は全くのモダン毛斷となり、さつぱり古の奥床しさはなくつてしまひ、口には蘇州生れなんかといつてはゐるが、何んだか舶來のまがひもののやうな感じさへする。折角の上海の夜の風情は、この爲めぶち壞れてゐるやうな氣持もする。かやうに見えるのも一つには著書が五十の坂を越えた歳のせいかも知れぬ。

○

尙若し大旅館に宿をとる時は、先施公司の樓上、東亞旅社なり、又永安公司隣接の大東旅館なり、あのあたりであれば、いきなりその七階八階にエレベーターで登つて見るのも面白い。そこには屋上に民衆娯樂場の小天地が設けられ、芝居、落語、花園、茶館、奏樂、何んでも御座れ、ないものはない。その規模は小さい乍ら、エロとグロの取合せも面白く、簡便に用意されてゐる。これを見るには必ずしもこゝに宿をとらなくともよい。外來の遊客として、別の入口から這入つて、昇降機によりいきなりその屋上の娯樂所に昇ることも出來る。何れにしても、多少の支那語が出來ることが必要で、英語は思れた程役には立たない。日本語に至つては、「アナタ」「ワタシ」「クルマ」「オンナイルカ」くらゐの他は、殆んどよく解らないやうである。

○

次ぎに南京の民衆娯樂場として、先づ第一に上ぐべきは、誰れも知る夫子廟を中心とした、秦淮河畔の歡樂場である。

先年中華民國の首都が、南京に置かるゝに至つてから、暫くの間、一切の遊興歡樂が禁ぜられ、藝者遊びを始めとし、麻雀、賭け事、畫舫、一切の遊びは相ならぬとの法度であつた。これは儉約主義のクリスチヤン・ゼネラル馮玉祥大人が入城してゐた頃、萬事が節約第一とあつて、極度の緊縮主義の空氣が、城内を壓してゐたのであつた。その影響で、城内は丸で喪中の巷の如くに化した。しかし大官富豪を始め、その道の豪の者共は平氣なもので、七八時間の長い汽車も千里が一里とあつて、私かに内々南京から抜け出で、上海の四馬跡あたりへ出浮いたものである。所が、その後幾くばくも經たないのに、そろ〳〵南京城内の巷にも、奥深く胡弓の音が聞こえ出したり、麻雀のパイの音がし出したり、爭はれないのは人間自然の娯樂に對する慾求である。一年立ち二年立つうち、いつしか元の南京に歸り、秦淮の畫舫までが浮び上がり、復舊を見るに至つた。殊に夏の夕べ、寒暖計の九十六七

度と云ふ高熱が、夜半の十二時になつても尚とれないといふひどい城内生活に、秦淮水郷の禁制といふことは、全く人道問題であつたのである。

○

その後局面は變り、馮玉祥大人は河南に去り、甘肅に落ち、又山西の晉祠（シンス）に捲土重來を畫さん爲め引込むことになつた。南京の民衆娯樂所たる夫子廟の門前は、今や完全に又連宵不夜の世界を見せることゝなつた。高樓は軒を接し、胡弓、笛の音の絶間もなく、醉仙の出入引きも切らず、樓上樓下は遊冶郎、酒仙をもつて滿員の體であり、又大規模の茶館樓上には、看板高く金文字の色も鮮かに、頻りに打鼓（ダー）の音が冴え騒音のうちに賑やかな光景を見せるに至つた。

夏の夕べの散策の途次、悪友の誰れいふともなく、件の打鼓の音を聞きつけ、四明花園の樓下の蹴みに鏡の這込入つた階段を踏む足取りも輕く、樓上の大室へと昇る。五尺の長さの木製の扇風器が、高い天井の眞中に廻つてゐる。それから觀覽席の眞中に持つて行つて、場所もあらうにこゝに賬房がのさばり占めてゐる。そこから場内の華客に、熱茶が配られる。點心が運ばれる。熱い手拭が投げられる。キヤチボールの如く、片隅の客はこれをうまく受けてゐる。實に一種いふべからざる南京歡樂境の一場面である。

○

やがて正面の舞臺に現はれたのは、丸ぼちやの色の白い打鼓の語り女で、口元よくしまり、聲色鋭く歌ふ節廻しも頗る鮮かで、次第々々と油が乘つてくるのである。右手に持つ撥は、張り太鼓の中心狹く盛り上つた皮の眞中を、調子づいた語呂にうまく合せ、力強くも懸命に打ち敲くのである。そして左手には、紫檀の板を薄くはいでつくつた四つ竹樣の樂器を打鳴らし、これも亦歌ふ調子に合ひの手を入れてゐる。

壁に掲げられた語り女の名前の金文字を見つゝ、歌の調子のよい所になると、大向ふの客はたまり切れなくなり、その名前を怒鳴つたり、「うまいぞ、しつかり」などと、力を入れて聲援をやり出す。窓の方にゐた首の大きのが、又「好好（ハオハオ）」と、部屋の張り裂けるやうな聲を出す。ほめられる度に、女はにつこりと笑顔を見せる。百尺竿頭一歩を進め、汗みどろになつて言葉の調子は速くなる。フルスピードをかけて語り續ける。所が愈々クライマックスに達し、聽衆も手に汗握つてどうなるかと思ふてゐると、「これから次ぎは又明晩」といつた結びの言葉に、愛嬌を殘して風屏の影に姿を消す。つゞいて掲げられた金文字の語り女は、その間一秒と待たせず、同じ位置に又姿を現はして來る。外題は夫々違ひ、こんどは後ろに三味線を膝にのせ、竿を支へる左手の上下する調子も輕く、二上り三下り

といつた所を談じ始めて、語り女の調子をおびき出す。かくして萬堂の客を前に、執れ劣らぬ人氣商賣のこととて、その聲、その腕、間髪を容れぬ緊張振りを見せ、萬座の紳士淑女は暑さも忘れて醉はされてしまふのである。

○

かういつた打鼓場内の歡樂氣分は、極暑の夕べにでも登樓しやうものなら、その溽熱の雰圍氣に蒸し殺される程で、扇風器の風もなんのその、全く焦熱地獄そのまゝの感がある。

『えらい暑さですね、今夜は』

すると商家の内儀さんらしい隣席の女は、

『昨夜は九十九度ありましたよ』

と事もなげに返事をする。打鼓の興味に、暑さ所ではないらしい。しかし誰れを見てを、賬房から差しに來る湯を、大茶碗でがぶ〳〵やつてゐるのだから、暑くない譯ではないらしい。けれども、飲めば飲むほどその場ですぐ汗になり、支那服の襟も、背中も、たきの如く流汗淋漓。怖らく一夜に三四升の茶をあふるものだらう。牛飲馬食といふ言葉もあるが、この南京の茶を、自分で親しく牛飲して見て始めて、自信をもつてその語の誇張でないことがいへるのである。

○

賬房に賣つてゐる品物の中に、夏の大扇が幾本か見出される。ひどく匂ひが高い。一尺二寸からの大形のもので、大骨の刻も珍らしい。問はず語りに孀さんのいふには「これは老爺、淋病除けの扇ですよ」などと、面白いことをいひ出す。物好きな一人が、「こいつは面白い」とばかり、大枚一弗を奮發して卽坐にこれを求める。煽ぐ風の面を吹くのが、熱さを忘れるせめてもの香氣で、支那特有の白檀の大骨、小骨、流石に清高な氣分を感ぜしめる。しかし、苦熱に耐えかねた紳士達は、美人の品定めにも興さめ、秦淮の畫舫へと水の上に體を運ぶのである。

打鼓の女共は、その檜舞臺における努力、妙技の腕次第で、一般から評判をとり、天晴れの人氣を擔へば、更に本舞臺の格式の高い座に昇格して行くとのことである。南京民衆娯樂所に見る處の光景は、この一つのさかり場をもつてしても、その一般が推測せられるのであらう。

○

花の都の蘇州見物は、民衆歡樂の境として、菜種咲く虎邱の名所や、又は靈巖山、或は城内の玄妙觀など、何れ劣らぬ見所を持ち、その季節々々を待ちあこがられてゐる。

秋の霜葉の、二月の花よりも紅なる天平山の紅葉は、いふも更なり、上方山の遠足、鄧尉の梅林な

ど、これ文人墨客の杖をひく所、兎も角蘇州を中心とした太湖一帯の水郷には、民衆の樂しむ場所が、隨所隨所にある。

上海から南に、西湖の遊覽所があると同じやうに、又上海から北西に向へば、先づ蘇州が第一の遊び場所として知られてゐる。

若し日本の櫻が懷かしければ、蘇州城外の日本租界に行つて見るがよい。そこにほのかに輝く夜櫻がある。日本人にとつては忘れ難いものだらう。菜種、桃の眺めは寒山寺、楓橋の郊外から虎邱一帶の田舍に出て見ると、殊になまめかしいものがある。

○

虎邱には、春の彌生の佳節になると、運河沿ひの石徑に、ひきも切らぬ幾萬の參詣人が蟻の如くつづいて見える。門前門內には、十二三歲の村の小女子が、兩手に麥藁で編んだ大小とりぐの羽團扇を翳し來る。

『お土產買つて下さいな、魔除けの團扇いかゞ』と、可愛い聲して善男善女の後をつける。三町でも五町でも、追つかけて來るのでつい五月蠅いと思ひつゝ買はされる。荷物になるので、一度は考へさせられるが、上海への土產になどと、思ひ返して求める日本人も少くない。こは尖端の尖つた圓形の麥稈扇で、これに花形の紅い模樣が編み込まれてゐるのが特徵である。虎邱の禪寺に參詣した者は、この扇で一年中の惡魔を追拂ひ、來る年の福祿壽喜を招くといつた、かなり慾張つた思想迷信が、これによつて煽られてゐるのだとの事である。

虎邱の人氣を集めてゐる場面は、今更說明するにも及ぶまい。吳越の戰以來、この歷史ある遺跡が民衆の信仰をひきつけ、殊に吳王闔閭の葬むられた坟墓があると傳へられてゐるなど、何れにしても古い由緒を持つてゐる名所なのである。

○

玄妙觀は、蘇州城內切つての歡樂の天地で、これは又每年幾十萬の參詣者をひきつけてゐる。いふ迄もなく江南第一の道教の本山で、北滿の長白山、北平の白雲觀などと共に、天下に有名な寺である吉凶禍福の別れ目に立つ人々、又子孫の繁榮、富貴長命を希ふ大衆共は、夜に晝を次いで田舍からこれに出かけて來る。

境內には別段公園らしい公園、歡樂場らしい歡樂場とてはないが、猫も杓子も、先づ玄妙觀（シュエンミヤオクワン）へと寸暇を見つけ、之に足を向けてゐる。失業した者は職を得んが爲めに、病人を持つ親は、病氣平癒のために、又結婚、待人、惡魔除などといふ迷信の方からも御幣擔ぎの手合などが、續々やつて來る。

その他一日を唯面白く可笑う暮したいといつた手合共も、朝から晩まで、此處を我が民衆倶楽部のつもりで、共同の遊び場として集り戯れてゐる。

○

玄妙觀の境内には、寺の道士がこれらの參詣者を目當てに、まじなひ札を賣つたり、祈禱をしてやつたりしてゐる。從つて募化の賽錢なども夥しく、門前門内、春夏秋冬、非常な雜沓振りで、こゝばかりは城内隨一の淺草觀音式の雰圍氣、大阪道頓堀式の賑はひを見せてゐる。しかし千日前のきらびやかさは元より見ない。けれ共一般大衆はその信仰の力によつて、こゝに樂しげに集り、何ものかにひきつけられ、嬉々として我が家の庭の如くに、自由勝手に打囃ぎ、又日向ぼつこなどしてゐる。ひま潰しに、三々五々境内巡りをしたり、中には參詣がすんだ後、手品輕業に見とれて、終日を送つてゐるといつた手合なども少くない。

そのため境内といふ境内は、その正面の本堂に通ずる石徑の處だけを殘して、あとは殆んどそれこそ立錐の地なきまでに、あの廣い所が色々な、露店で一パイになる。その又露店に並べられてゐる玩具、人形、薄桃色の肉桂水、泥製の蛙形の笛、凧、弓矢など農民藝術的の品々の面白いものが並べられてゐる。豚肉や韮醬の匂の高い飯屋、飴細工の屋臺店、又例の富貴長命にあやかる、安物のはでな人物の掛け圖、といつたやうな陳列もあちこちに見られる。

○

近來は玄妙觀の堂内や丸柱の周圍などに、色繪、拓本などの表裝したものが、天井高く壁につらりと掲げられ、參詣人の目をひきつけてゐる。しかもその價は、大衆向きに出來てゐて、甚だ安い。行けば必ず何程か土産に買つて歸るので、それを當てこんで露店商人は、年一年と殖え、みつしり詰めかけてゐる。毎年行つて見る度に、境内は雜沓を極め、近來公安局からも巡捕が出かけ、門に見張りをしてゐるといつた光景を見る。これは少しぶち壞しの方ではあるが、兎も角玄妙觀の民衆娯樂氣分は、江南地方にありて、他に多くその比を見ない寮圍氣を呈してゐる。

○

以上述ぶる所は、普通の娯樂場について述べたのである。所が支那の大衆は、必ず住めば都といつたやうに、自分達の生れ故郷を以つて歡樂の天地とするばかりでなく、船に乘つて他所へ出かけると云ふ時でも、船内の大室など、人の集つて來る所を、すぐ一つの娯樂所となす傾があり、先づ初めに乘客の中で、藝の嗜みのある者が、いつとはなく胡弓の一竿で以て、一曲彈じ始める。すると心得のあるものが、これに和して歌ひ出すなど、罪のないところを演じ興じて、船内は自ら俄か仕立の民衆

娯樂所となる。出先きの移民地、南洋の島々に於ても、或は福建部落、或は廣東部落或は海南島部落と、夫々特色のある出稼ぎの華僑共が、民衆娯樂所を形づくり、殊に熱帶地の夕べとなると、戸外の便利のよい廣つばに、見せ物、遊び場、飲食店などの人氣をひく店を出して、メリーゴーランド、人形落し、玉轉がしと云つた類など、馬鹿々々しい低級な遊び場ではあるが、しかしこれが南洋華僑達の一般的歡樂物として、夜な夜な非常な雜沓を見せてゐるのである。白人、日本人は、入場料を倍額要求されてゐるが、華僑共には皆その半額で、而かも仲間同志樂しく出入が出來、婦さんは子供達をつれ、楚々蓮歩の姿を納凉裡に現はしてゐる。日本に來てゐる僑商達も、時折り祝賀會などの催しに龍頭舞など云ふを始め、支那獨特の催しを演じて、横濱に、神戸に、長崎にと、隨所に歡樂氣分を漲らせてゐるのを見る。東都の中華民國基督教青年會館あたりでも、雙十節その他の佳節に、鳴物入りの底拔け騒ぎを見せたりすることもあり、異境の空に痛快味を發揮してゐるところは、見るもよい光景である。

その二二　公園

支那の大衆が、日常戸外で、娯樂遊戲に耽らうといふには、相當廣い場所がなくてはならぬ。これ迄各地に見る城内では、街の道幅さへ無論廣く取れない位に、地坪が儉約されてゐる。それだから、幾ら民衆の娯樂遊戲のためだとはいへ、そのために廣い場所を得るなどは、思ひもよらぬことである。しかし、舊來の寺院、道觀の境内は相當ひろく取られてゐたので、之が自ら公園同樣の役目を果たしてゐた。所が近來は時代の進歩につれて、各地に公園の設計が出來たり、或は舊家の庭を開放して、これが一般に提供されるやうになつたり、次第に進んだ方法が講ぜられるに至つたのは、喜ばしいことである。

○

北平では、中央公園を始めとし、紫禁城内の北海、其の他あちこちに娯樂所としての庭の開放があり、中には入場料をとつて、乞食、浮浪者の闖入を防ぐと云つたものもあるが、大體に於て、市民大衆の目を慰め、散策にのんびりした氣持を味はしめるやうに、工夫が出來てゐる。

又上海では、半淞園であるとか、廣東公園であるとか、純支那式の公園がいくつか開放せられ、紳士淑女のこれに出入するものが多い。山あり、池あり、驢馬の稽古場があり、商品陳列場があり、飲食店、茶館などがあり、從來公園のなかつた城内生活に較べて、この頃は餘程郊外散歩の氣分を體驗させるやうになつた。

又江蘇省の無錫あたりには、無錫公園があり、又その城外十支里の郊外には、太湖に臨んでゐる有名な梅園があり、江南の風流人の足をひきつけてゐる。その他、杭州西湖はいふに及ばず、南京城内の夫子廟から昔の貢院（科擧の試驗所）跡、又前に述べた水の秦淮など、事實上何れも一大遊園地の觀があるのである。

○

支那の公園は、必ずしも公園の名前に拘泥するの必要なく、自然の廣つぱが、自ら實際上の公園と化する傾を有してゐる。その場所が寺内であらうと、又水郷であらうと、頓着などしない。到る所を我が歡樂の天地となし、夏の納涼に、秋の月見にと、それぞれこれを利用してゐる。それ故支那の公園には、大した設備らしい設備を施さうともしない。城壁の上の樓門を利用して、こゝにそのまゝ高樓式の茶館を作り、又隣接の小丘に亭を建て、之に歩道を通じ、古塔をとり入れて、こゝに俄かづくりの氣のきいた遊園地をつくるにいたつたものが、普通の支那式天然公園の通り相場となつてゐる。又市民達も結構それで滿足をし、特に八釜しい文明的の設備なんか要求してゐない。それで、いはゞ精神的の公園が多くて、形式的に出來た洋風の公園は餘りこれまで採り入れられてゐないのである。

○

近來南京の郊外、紫金山の中腹一帶に、中山陵を中心とした中山公園の設計が出來てゐる。小松を植え、歩道をとり、石段を取入れ、見渡す限りの中原沃野の展望を擅にし、所謂大陸庭園として、恥かしくないものである。しかし細かい設備に注意し苦心された點なんかは殆んどない。

尙上海に行つて見ると、次ぎに示す如き租界内外の洋風又は和風の公園があるが、これは支那公園としては、例外とされるのである。

一、ゼスフイールド公園（西の郊外）
二、フランス公園（フランス・タウン）
二、虹口公園（新公園）
四、パブリツク・ガーデン（公共公園）
五、蘇州河公園（支那人專用）

六、ペピー・ガーデン（牛浦路）

このうち虹口公園は、江灣にあつて、日本人の出入するものが頗る多く、入場料をとつて自由に遊覽せしめてゐる。中にゴルフリングや、日本式の築山などもあり、在留日本人が家族をつれて、夕食後の散歩に、のんびりした郊外氣分を味ふには、何より樂しみの處となつてゐる。時折り日本人の催しにかゝる運動會、其の他陸戰隊の分列式、居留民大會などが催うされてゐるのは、人の知る處である。其の他江灣には、尚日本人の附屬地があり、競馬場、ゴルフリングなどが設けられてゐて、これも自由に在留日本人が出入してゐるのを見る。天長節の祝賀なども、大抵この江灣で行はれる。しかしこの邊り最近上海事件の戰爭で大分ひどく荒らされてしまつた。惜しい事である。

○

ゼスフイールトの公園は、近來入場料を取つて自由に支那人、外人、凡て一樣に入場し得ることになつた。そのために、從來の如ききちんとした洋風の公園氣分は失はれて、隨分支那客の姿をあちこちに見るに至つた。最近は又門外の大空に、十層樓の大廈高樓を見るに至り、それに出入する曖昧な各國人の動きもあるとの事で、公園附近の人氣は、甚だしく惡くなつた感がある。

公共公園の位置は、船の出入りのよい黃浦に臨み、夏の凉風、秋の月光の金波銀波の閃めきなど、園内の遊人の目を喜ばせること一と通りでない。場内音樂堂の奏樂は、これ亦上海隨一の人氣を集めてゐる。これまでこの公園は「支那人入るべからず」の札の揭げられてゐた所であるが、民族自決の聲の喧しくなつた際に、工部局の決議で、銅幣十枚を支拂ふ者は、誰れ人たりとも入場隨意といふことに改められるに至つた。その爲めこれまでは、紅綠の色鮮やかな貴婦人姿の英米客や、しとやかな日本の良家の夫人達など、子達をつれて園内を逍遙してゐたものであるが、昨今はめつきりその姿をかくした。といふのは、支那や露西亞、馬來、其の他のルンペンに近い手合が、長髮姿で入場し、江岸のベンチに寢そべつたり、芝生に陣どつてのさばつてゐたりしてゐるので、一般の者は一寸寄りつかれないことになつた爲めである。

○

蘇州河の公園は、元來始めから支那人のみを目當てとしてつくられたもので、一方に支那人の入るを許さなかつた公園のあつた關係上、これをわざわざ設けてあつたのである。しかしこの方は相變らず今も尚支那人の出入する者が多い。すぐその側に、プールがあるが、これは公園とは關係がない。尚支那人が多く出入する公園には、次のやうな立札が立つてある。

毋得折花（花を折りとる可からず）

毋得赤身（裸になる可からず）

諸君自重（小使する可からず）

「諸君自重」などは、日本のものより品がよくて面白い。」

○

南北支那の公園を大觀して見ると、その顯著なものは、凡て上海に集められてゐる感がある。その他の地方には寥々として少ない。しかし北平の中央公園池畔に見る水樹、またはその老樹の並木から古玩店の軒並み、瑠璃色の石の牌樓などのあるあたりは、他の地方の公園で見ることの出來ないゆとりのある澁い特色が見える。この石の牌樓と云ふのは、もと獨逸が支那に對して屈辱的に城内の目抜きの場所東單大街（トンタンタイチエ）に、道を挿んで建造したケツトラーの牌樓であつた。それを歐洲大戰の結果、支那が聯合軍に加擔し戰勝國の側に這入つたゝめ、その腹いせにこれを取壞し、中央公園の門内に移して再建したものである。以前のことをよく知つてゐる者の目には、異樣に又變に感ぜられるわけであるが、既にその場所を變へた以上は、舊獨逸を思ひ出させる感じは、失はれたものと見られてゐる。

○

尙武漢の天地では、武昌の蛇山に、有名な抱氷堂（パオビンタン）の公園がある。元これは兩湖總督張之洞先生を祀つた所であるが、今はその歷史の由緒の尊いことと、四百餘州を見おろす展望のきくことから、遂に公園に準じた格式を見るに至つた。却つてこは黃鶴樓跡などよりも、實際上民衆の人氣を集めてゐる感じがする。

漢陽の古琴臺、漢口の跑馬場（パオマーチャン）（競馬場）あたりも、界隈での遊び所となつてゐる。四川重慶では、城内の目抜きである商業場の上の岩上に、新たに小公園が設けられた。元來場所が狹くて、公園を設けるのに適當な所ではなく、寧ろ城外の墓地浮屠關（フートゥワン）あたり一帶の天地が、天然の公園をなしてゐる感がある。

○

支那の公園と云ふと、どうも日本人の頭にはピントがしつくり來ない。といふのは、その設計が一面に濃厚な氣分の漲つてゐるものがあるかと思ふと、又如何にも一方に間に合せ的な設備のみをしてゐて、眞に多人數のものの遊び場として、適當してゐない氣持がするのである。無闇に石を重ねて亂立させ、グロ的な抜け穴をつくつたり、又濃厚な意匠を凝らせたり、嫌氣のさす程こて〳〵と作り上げてゐる所があるかと思ふと、手摺りだの、屋根の軒端だの、誠に危なかしくて、吹けば飛ぶやうな仕掛けにつくつてゐるのを見る。そして汚ない柱も繪具で塗り潰し、手で觸つてもすぐつくと云ふ位

のものである。老大國の癖に、公園の設備が如何にも間に合せ的であり、餘りに無雜作なものであるのは物足りない。しかし半面から見ると、日本の公園は、洋風の樣式を取入れてゐることに吸々とし東洋流の文人墨客氣分を加味した所が少い。否むしろ全くないといつてもよい。所が支那の公園は、設備そのものは粗末であつても、手摺りの圖案、窓の圖案、垣根の意匠、路面のモザイツク、屋根の反り、後庭の出入口、門の樣式、道しるべの石、孰れをとつて見ても風雅な所があり、如何にも翰墨的の餘韻を湛へてゐて、見飽きがしない。危なかしいうちにも、その圖案や拵らへ方が、何んとなく面白く行つてゐる。窓の障子に平貝を打ち、硝子の代りにこれを塡め、外から薄い竹でこれを押へてゐるその格子の組方なんかを見るだけでも、興味はかなり深い。

○

支那の旅に、若し公園を逍遙する機會があつたならば、右のやうな方面にも注意をして、出來る限り公園に漂ふ支那式の庭園美、建築美、並びに文人風の風韻にまで、興味を見出すことが必要である。大體理窟を超越して、あの柔かい楊柳の蔭に、旗亭の窓際近く憩ひ、西瓜子でも噛りつゝ、熱茶を啜るのも、亦支那公園から得る尊い體驗である。

日本の公園に見る如き、いつも清淨な水で洗ひ清めた如き衞生的な氣持を、支那公園に求むることは、始めから無理な注文である。色の汚れた熱いタホルを、茶館の番頭が客のもてなしに持つて來たとすれば、これを汚ないと思はないで、顏を拭ふた後のさはやかな氣分を樂しむといふ、一種の支那氣分に滿足しなければならぬ。支那の茶、熱い手拭、西瓜の種、蠅のとまつた菓子、これらを毛蟲の如く嫌ふやうでは、支那の旅でいくら公園を見ようとしても、眞の支那公園の味はひは、遂に味はれなくなるのである。

○

支那の公園で一と風變つたのは、水の公園である。夏の納涼、秋の月、水鄕の畫舫は、隨所々々の綠蔭や、石段の汀に橫づけされ、岸に呼ぶ佳人を乘せ込んだり、或は始めから舫內にその支度をさせたりして、紅燈綠酒の影も賑かに、艫を漕ぐ調子もゆつくりと、水鄕遙か出かけて行くのは面白い。岸に聳ゆる白堊の高壁の彼方、天に聳ゆる飛檐の高樓、又運河沿ひの寺廟の門前に蹲する獅子の彫刻或は石段に集へる村人の睡ぎ、かういつたなごやかな光景を水邊に見ながら、運河の水鄕を意の趣くがまゝに漕がせつゝ、舟遊の體驗を積むのも、南支の旅には興味の深いことである。

普通畫舫の遊びは、時間のない心あわたゞしい旅行には、殆んど願られない場合すら多い。怖らく話には聞いてゐても、事實上舟遊の歡樂を思ひ立たんとすることすら誠に少い。

水の公園に就ては、西湖では杭州の領事に、蘇州では蘇州の領事に、又南京では南京の領事にと夫々その適當な案内者を得ることが出來る。領事館内の應接室で、卓を前に煙草を手にしながら、四角四面の話を交はす時間があるならば、その場面を舟へ持出し、畫舫の中で四方山話をしながら、その中に編み込む方がどの位思ひ出も深く、又その効果の多いことか判らぬ。兎角舟遊の利用は、これまで日本の觀光客には、之を思ひつく者すら少なかつたのである。

○

廣東には、荔枝の影も紅い珠江の水郷に、舟の尻の高く上つたフラワーボートがある。おちこちに數多漕ぎ出で、遊客は終日この畫舫を我が歡樂郷となしてゐる。土地の言葉では、これを紫洞船といつてゐるが、その内部はグロ百パーセントの奥深い幽玄味を漂はせてゐる。ひとり廣東に限らず、南支那は、水流運河の水郷の隨所にあり、夏の夕、水の公園としてこれを利用する者は、夥しいものである。

音に名高い美人の本場揚州では、城外の水郷をもつて、夏の樂天地となし、富豪の隱居達は、佳人に取卷かれ、享樂の極致をこゝに味ひ、その詩歌管絃の響きが、幽かに綠蔭の彼方に洩れ聞ゆるあたりは、何んともいへぬ江南の情緒が偲ばれる。旅人は、かういつた趣きのある遊びに、誰れしも半日の隙を割くだけの勇氣がなくてはならぬ。

唐の昔、白樂天が、潯陽江頭に大弦小弦の玉音を味ひつゝ、佳境に入つた體驗は、今の觀光客も偲び得べく、これを體驗して古人を偲ぶと云つた心のゆとりを持たなくてはならぬ。これが古來終始一貫した江南の天地の畫舫に聯想せらるゝ歡樂の公園地なのである。」

その二三　紅燈街

支那の旅で、最も人氣をひきつけてゐるものは、怖らく紅燈街の魅力であらう。

支那の城内には、到る所に人知れぬ風流な所があり、如何に今はさびれた町であつても、その道の玄人筋に耳打ちして伺つて見ると、大抵その要領は得られる。

○

城内の紅燈街は、一に又斜街ともいひ、風流粋士の出入する所、たとひその規模は大ならずと雖も、兎も角軒並み、門戸の様子などに、何處となく、その雰圍氣を現はしてゐる。普通その方面の街は、餘り賑かな街續きではなく、寧ろ住宅つゞきの、ひつそり閑とした所である。そこを通り抜けて、突當つて右へ、又は左へ、斜に這入つた所といつた位置に設けられてゐる。大抵その道中は、やゝこしくなつてゐるのがおきまりのやうである。時には例外もあるが、多くはかやうな位置をとつてゐる爲め、始めての旅の客には、友人に案内されても、えらい不景氣な方面へつれ込まれてゐるやうな感じさへする。老樹茂り、厚壁の塀の長く續き、半圓の瓦で、透しの圖案とりゞ〳〵に出來てゐる、重くるしい巷をどこまでも行くといつたのが、紅燈街への道中の常である。時には又城内のうちにも、或は場末に近く設けられた曖昧屋の軒並みがそれであつたり、又船着場あたりに行つて見ると、碼頭近くの二階建の揃つてゐる一廓が、凡てその方面の中心地點であつたりなどすることもある。

○

紅燈街の普通取つてゐる形式は、厚壁の高い塀に、文字通りの紅燈が揭げられ、紅緑の一尺大もある札が、門の左右に貼り出され、金文字をもつて、その藝名がうらゝかに書きしるされてゐるのである。

門内には、數多の佳人がゐても、表札に出す名前は、特別の人氣をひいてゐる數名の名前だけである。風流粋士は、かうした金文字を見て廻るだけでも、その實物に接した如き感じを得るらしいが、旅の客は、よき案内者を得て、多くは一々これが探險に這入るのである。その邊の内面的秘話は、追つてあとでゆる〳〵述べることにする。

○

紅燈街の中には、繁華な巷と相接してゐる所もある。紅燈の影も賑かに、軒並みの聯の文字もいと美しく、往來の遊冶郎の興味を唆る樓上の光景や、胡弓の音、客の送迎に挨拶せる男衆の黄色い聲な

と、始めて踏入つた旅客には、豫想にまさる面白い氣持があふられる。

支那の旅では、晩餐を宿でとる場合は殆んどなく、多くは思ひ出のために、毎夜所を替へることは「支那宿」の所で述べた通りである。かうした風情の違ふ料理に、舌鼓を打つのも決して悪くはない。紅燈街の料理は、平生の菜館の料理同様に、その種類、分量、又その調味も複雑である。冬時にたれば、殊にこつてりしたものが卓上に運ばれる。

支那客には、健啖家が多く、その幾ら運び來られても、譯なく片づけもし、又酒の方も隨分酒豪が多いやうである。加ふるに、客に酒を進める技巧とその辭令が、又妙域に達してゐる。刺身や日本酒にきたはれてゐるだけの、日本式の風流醉士では、かうした場面に最後までのお相手を完全になし了へることは容易でない。しかし一旦紅燈街に踏み入つた以上は、どこまでも全幅の努力をして、これが太刀打をするだけの覺悟がいる。

○

支那料理の調味とその材料とは、地方によつて多少特色があり、北方の濃厚なのに比して、南方はあつさりし、殊に江南の夏の料理となると、おつゆものが多く、鰕具などのあつさりしたつゆものを見る。あつさりしたつゆの實の取合されてゐるのは、日本人の口には懐かしい。又四川の奥地で、野菜を多く用ひたあつさりした料理の出るのも、亦日本人の口に合つてゐる。

年若き者は、肉や鳥の重い料理を喜ぶが、高年の客は、どちらかといへば椎茸や白木耳（銀耳）、白菱（江南の蔬の根で筍に代用せられるもの）、白菜などの如き、淡白なものが歡迎せられてゐる。しかし支那料理は、老人の隱居の味覺に合せるやう、どこ迄もよくとろかせる迄煮つめあげるので、貝類の如きでさへ余程柔かく、咀嚼し易いやうに調理されてゐる。そのために、幾ら高年の老人や、齒の悪い客でも、萬遍なく之が受け得られるやうに出來てゐるのである。

旅先きの支那料理は、旅の疲れを醫する意味で、支那酒に氷糖を加へ、口當りのよいやう燗をして、ゆつくり味ふべきである。しかし次第に支那酒に馴れて來れば、却つて氷糖を好まなくなる者もある。

○

紅燈街の酒樓は、單に菜館本位に出來てゐるものもあるが、又中には、今少し意味のある仕掛の出來てゐる所もある。樓上樓下悉くこれ胡蝶を側に侍んべらせ、料理の方は第二段で、これを喋々喃々することに、時の立つのを忘れてゐるといつたのが多い。從つて樓上、宴席の如きも、普通の宴會とは違ひ、設備の方も簡單である。壁には、林下の美人の姿を描寫した美しい額緣など、風流な對聯と相對して揭げられ、又その横にかけられた花瓶には、梅の一枝が高尚な情趣を示してゐる。

紅燈街に案内をしてくれた主人は、始めての珍客を前に、打くだけた言葉で、表裏から佳人をからかつたり、笑はせたりしてゐる。席に現はれた佳人どもも、場面をすかさずこれに應酬し、目配せなどしつゝ白い手をさし伸べ、苹果（ピンコ）の皮などむいて客の方へ差出す。その間、卓を離れたり立つたり、室内を一巡りしたり、寝台に腰をかけたり、少しも落着きを見せない。キヤン〳〵そは〳〵して囀ぎ返るのである。そんな雰圍氣に馴れ切つて、又別の佳人をその部屋に訪ねて見ると、これは又打つて變つたしとやかさ、その側にひかへてゐる婆の指圖をもよく聞き、客のもてなし振りにも優しみがある。時折りその薄化粧を氣にして、手鏡を取出し化粧直しなどをしてゐるのも可憐である。

○

酒席に於ける料理の喰べ方は、特に取り立てゝいふほどのこともないが、兎角場馴れない日本人は、自分の前の箸の置き方を、日本式に横さまに置く。これはお上りさんのすることで、支那では無意識のうちにも、ちやんと前に縦に二本並べて置く。又日本人の多くは、小皿を枕に、或は皿の上に二本そろへて乗つけてしまふ傾きがある。支那では箸は卓上にぢかにそのまゝ置くのが普通であつて、卓上の汚れることなどは、少しも問題にしない。若し祝の賀筵などへ呼ばれて行つた際に、皿の上に箸を乗つけることなどは、特に戒しめなければならぬ。といふのは、支那では家に死人のあつた時、佛前に供へる箸に限つて、皿の上に縦に之を揃へてのつけると云ふ事實があるからである。紅燈街などで、案内の主人側はそれを見、客に遠慮をして嫌な思ひはしてゐても、言葉にそれを出さないけれ共、おきやんの佳人から、ひやかし半分に詰問せられることなどがある。大いに注意すべきである。

○

紅燈街の食卓は、元来他の宴會の終つた後、二次會に目ざさるゝ場合が多いので、料理の方でも、簡單な便飯（ビンファン）が多いのである。

便飯とは、本格的食事ではなく、數品をかりに取揃へた辨當代りの飯を云ふのである。しかしそれにしても、大抵余りに箸をつけないで、辭し去ることが多い。實をいふと、果物、菓子、お茶くらゐの所で、飲食の方は簡略にすまし、音曲を催して座興を保たしめ、後は雜談やら、エロ・グロの與太話などで、打囃ぐといつたのが普通のところである。

○

紅燈街の酒は、田舎者が舞込む場合に、毒酒が盛られるなどいはれるが、これは想像説に過ぎない。小説や芝居の上に見ることはよくあつても、事實かやうな不祥事は、滅多にないことである。又支那の酒そのものも、酒客を狂態に陥らしめる程のアルコール分はなく、至つて弱い。しかし特別の酒豪

や、勞働者階級の者は、五加皮（ウーチヒ）の如き強い赤酒を用ひてゐる。

又紅燈街の酒席の御馳走の一つに、醉蟹と云ふがある。これは江南地方の料理の特別なものであつて、こは蟹の本場の安徽の蕪湖（ウーフー）に有名な料理である。長江から取つたまゝの生きた蟹を、たぎらせた酒の中へいきなり落とし込み、料理したものである。賀筵の席には、殊にこれが珍重されてゐる。上海の三馬路陶樂春あたりにも、醉蟹を呼び物とし、江蘇鎭江の料理人が、これをこしらへてゐるとのことである。江南料理の醉蟹は、腐乳（豆腐の鹽から）と一緒に、酒仙の酒の肴に、最も歡迎せられてゐる御馳走である。

○

紅燈街の宴席に見る獻立は、粹人や食道樂の手合が多いために、その料理も特異の發達を遂げ、隨分變つた上戸向きのものが集つてゐる。

中には、北支那の酒豪連の好む豆胡瓜の油漬といつた珍奇のものまで出て來る。この漬物は、元錦州の附近で產する一寸大の胡瓜であつて、これを油と鹽で漬物にしたものである。形は小さいが、結構な風味も高くて、その色、そのぶつ〳〵の皮を有する點は、全く完全な姿をなしてゐる。元來このものは、豌豆の葉に、胡瓜の葉をつぎ木すると、自ら一寸大の胡瓜が成るといはれてゐる。その技術の巧妙なことは、一つの誇りとなつてゐる。天津北平地方では、さまで珍らしくも云はれてゐないが、これが鎭江、蘇州、上海と南下するに從つて、ひどく酒席の珍話題となつてゐる。

○

紅燈街に踏込んで、戸別的に覗き込み、その紅綠の金文字にひきつけられて、その門に入り、佳人の部屋に納まつて、卓上の熱茶を啜つたり、西瓜子をつまんだり、多少相手を嚊がせて、もの〳〵一時間も談笑し、愈々勘定をして出て來るといふ位な遊びなら、それが北支那であると、北平であらうが、太原であらうが、大抵銀の二弗くらゐ、田舍ならば一弗も置いて歸ればよいのである。それ以上置く必要はないときめられてゐる。

尤も北平では、南班（ナンパン）、北班（ペーパン）に、各樣の階級格式があり、青樓次第ではもつと奮發をしなければならぬ所もある。又二流、三流から、更にその下の下もある。しかし立入つた話であるが、三流以下は、門を這入り奥の部屋を覗いて見るだけでも、一種異樣な、三流獨特の臭氣が漂ふてゐる。この邊はその道の專門家の研究解剖を必要とする所である。

○

又江南地方では、何れの城内にも、紅燈街ばかりは特殊の發達をなし、上海方面で、鎭江と鎭江以

北の佳人、例へば揚州美人あたりは、これを蘇州以南の美人と區別して取扱ひ、自らそこに宴席の相場も違ひがある。その方面では、特にその出身地のことを立入つて尋ねる習慣があり、又客に對しても、どういふ譯か、地の人と江北人（コンパンレン）とを區別して取扱ふといふ習慣がある。

紅燈街の樓上で、江北人と呼ぶのは、普通にいふ商賣人といふ以外に、何んらか或る田舍の人、旅の人といつた氣持が加つてゐるかのやうに思はれる。遊廓方面の佳人に對する見別け方、又醉客遊士に對する一種濃やかな喚き別け方が微妙なうちに行はれてゐるやうに思はれる。

○

紅燈街に出入すること數回にも達すると、そろ〳〵そのうちには、旅立ちの前に答禮の宴の一回も開くやうなことになる。互ひに顏馴染の人同志を集めて、なるべく八人の顏振れに達するやうに、人選に心を配る。しかしその呼ぶ客が、何れも自分の方は皆親しくしてゐる客であつても、客と客との間に、顏馴染のないものが、どうしても二三加はるやうな場合も起つて來る。これは止むを得ないことゝしてその席で主人自ら紹介をするのが禮である。

又些な催しの場合などには、豫定の數に顏ぶれが揃はず、その日になつて、席を埋めるだけの人を要することがある。その時は相手の方から失禮だと思はれないだけの、平素懇意な友達を誘ひ出し、否でも應でも之をひつぱつてくる。どうかすると、既に家で食事をすましてゐる者迄をも、兎も角出席を願つてつれ出すやうな場合もおこる。殊にそれが一方の方の通人であり、佳人の名をよく〳〵諳んじて、場面を取り繕ふことのうまい第一人者であるといつたやうな時には、萬障繰合せて出て貰ふ。それは又他の客に對しての禮でもある。その人が支那歌の一つも、調子面白く朗々と歌ひ出ることが出來れば、尚一層妙である。

○

送別の宴が終ると、これが最後であるといふ名殘り惜しさも加つて、大抵二次會となるのがおきまりである。この二次會の場所は、これは又とてつもない奥まつた路次を這入り、その突當りを又左に廻るといつた、結局或るグロ味たつぷりな酒樓の二階である。そこには麻雀の部屋があり、鏡の部屋があり、廊下を隔てゝ向ふの後房には阿片臺の豐かな設備までされてゐる。待つてゐましたとばかり、こゝには又面白いハイカラな服裝をした若いのが、夫々熱茶を運んで來る。麻雀の支度をする。後房では阿片臺の用意をして、低い机の側に、耳に飾る翡翠を揺がせつゝ、嫖客を差し招いてゐるものがある。阿片をくゆらせる豆洋燈に、小火が點ぜられる。といつた奥床しいしが、何んとなく無限の深かみに引入れられるやうな場面が、夜半月三更の頃、こゝに展開せられるのである。かくして二

次會の夜の名殘りは、次第々々と更け行くのである。

○

唯こゝに注意して置きたいことは、生れ落ちるとから、支那で育てあげられたものならばいざ知らず、日本人であつて日本に育ち、日本の酒と煙草以外には、餘り多くを知らないと云つた者は、支那の旅に物好き半分の紅燈街あさりは、よい加減のものである。之に踏み込んだまではよいが、第一次の酒宴でしたゝか喰ひ且つ飲み、思ふだけの享樂に淫した揚句、第二次會の阿片臺にまで深入りをし、足をくの字に曲げて體を横たへ、こゝに愈々人生最大の快樂の極致に這入らんとするその刹那、酒の醉ひの餘りに廻り過ぎてゐる時などは、幾ら佳人が美しい手で阿片の煙管に火を點じ、阿片をつめ込んでくれたにしたところで、その匂ひとその煙は、悪くはないにしても、何處となく胸につかへる氣持がして來て、やゝもすれば吐き氣すら催すことにもなる。それ故、始めから第二次會のグロ・エロの野心を有する者は、始めの酒席は處女の如く、凡てひかへ目にしてゐる方が、結局最後の勝利者となり得るわけである。この邊は、餘り深く立入つて忠言するだけの資格は、實は自分に持つてゐないのであるけれ共、精々老婆心までに、大抵の處の輪廓だけを注意して置くのである。尚これ以上の臨床講義となれば本物の支那通から、際どい所まで立入つて、直接教授を乞れて貰ふことを希望する。

○

紅燈街の茶館酒樓は、誰しもその樓上の奥まつた後房に、阿片窟を有してゐる如く考へてゐるが、必ずしも上海の三馬路、四馬路あたりにした所で、どの店にもこれが設備されてあるとはきまつてゐない。よしんば秘密の別室がそこにあるとした所で、法律的に秘し愚してゐる點もあり、餘程打解けた顔馴染の者のゐる處でなければ、いきなり奥へ「さあどうぞ」とはいつてくれない。唯の支那觀光客が、しかも洋服に中折帽子といつた姿で乘込むやうなことでは、到底奥の院へ通されるなどは望みの薄い話であらうと思ふ。

阿片窟に出入するには、矢張り何處迄もその周圍と調和した姿・身成りが必要である。さもないと、阿片窟の經營者の方でも、第三者から洋服姿の人の出入を見られる事は、好ましくないと考へてゐる。

○

場所柄のかなりな所にある青樓であると、幾ら饅の巣のやうな奥まつた巷でも、その家に這入つて、その現場を見極めると、意外にも大規模な店で、天井に輝く彩燈（ファーテン）に楊貴妃、玄宗皇帝の色繪などが貼られてあつたり、又花鳥の描寫も意味ありげに客の目に映じてゐるのを見る。客を通す紅裙達の部屋には、夫々姿見やら、寢臺やら、八仙卓の豪奢なものや、調度の類の美しいのが飾られてゐる。天井

は高く、どことなく鷹揚な雰圍氣が漂つてゐる。この點は日本の紅燈街のそれとは趣きが違ふ。麻雀臺にしても、又客の憩ふ十景椅子、茶几、花臺などにしても、紫檀に大理石の嵌込みなどして、洒落てゐるものが別室に見られる。

高級な客を相手とする青樓は、その聯の形を見、扁額の大なるを仰ぎ見ても、どことなく重々しい豐かな氣持が直感される。阿片臺の七ツ道具にした所で、凡て七寶燒のもので、煙管の元に阿片膏を詰める筐一つにしても、象牙の立派な彫刻物を見るといつた風で、隨分貴族的な美術品を見る場合がある。

○

支那の旅先きでは、旅行用のゴム管の長きものの兩端に、その吸ひ口と雁首のついてゐるものを携帶してゐる人をよく見ることがある。しかし都會地の青樓に登つて見る阿片臺の煙管は、實に美事なもので、白玉或は青玉、孔雀石など用ひられてゐる。凡そ阿片の七ツ道具くらゐ、贅の贅を盡したものは見ない。阿片の盆にした所で、簡單なのは、眞鍮の四角なもの、又雜木の安つぽい丸盆などと云つたものも見るが、高級品となると、紫檀、黑檀、鐵心木に青貝の螺鈿を施した唐草模樣、祥雲、祥鳥などの圖案のもので、一尺大もある實に見事なのがあり、見るからに貴族的の贅澤品たることが解る。

清朝沒落の後宮廷大官達の遺愛品は、次第にかういつた紅燈街の阿片窟へと流れ込み、ありし昔北京のお奥でなくては、拜見することも出來なかつたやうな七ツ道具が、今は高級阿片窟の後房に、譯もなく玩ぶことの出來るといふ時勢となつた。

○

富豪の隱居達は、何れも我が邸内の後房で、この阿片に淫し、筐を用ひるのもまどろかしいとあつて、我が思ふまゝいきなり手で詰めてゐる者もある。豆洋燈の上で、焦がし焦がし、熱い所を我慢して、指で以てやつてゐるので、幾十年に渡るこの嗜みが、遂に當人の指の爪まで變色させ、今では茶色に染まつて、宛ら寫眞を現像する人の爪のやうになつてゐる者すらある。

紅燈街に出入する客の中にも、まだ年若く、三十の阪を越えること幾らでもないと思はるゝ肥大した若紳士にして、爭はれないのは、この爪の色を見せてゐることである。しかしかうまでして、老弱凡ての人々が、阿片の味ひに深く淫してゐる譯合ひは、そこに又いふにいはれない深い生理的の理由が、存在してゐることを思はなければならない。

○

尙この阿片に淫した客は、これが中毒して、殆んど毎日止めるわけに行かなくなり、醫者の手を煩

すまでもなく、銘々自分でモルヒネの注射を行つたり、阿片に代るにこの注射器をもつて滿足し、旅行を續けてゐるやうな人さへもある。結局は阿片もモヒも、幾十年の後には身體に顏面の害を現し、遂に憔悴して、骨と皮になり、道を歩行して居乍ら、そのまゝ勢力が盡きて、行倒れとなつてしまふやうな人もある。

しかし一命をなげうち、一生を棒にふつてまでも、尙且つこれを止めることが出來ないのは、そのこれを飮んだあとの快味の譬ふことの出來ない絶大なものがあるによる譯であつて、これは支那の國民以外の者には、到底理解し得られない別天地であると云へる。

日本では、法律で堅く禁じられてゐる爲め、支那人の日本觀光は、これがために中止の止むなきに至つてゐる諸名士も少くない。しかしそれにしても、まゝ東京橫濱の某所には、秘密裡にこれが犯罪の行はれてゐることを、新聞紙上で時折り見ることがある。

○

尙紅燈街のモダン氣分のする所は、ダンスホールの場面であらう。近來日本からも、上海の港に船の這入る都度都度、繰出されるダンサーの群れは、素晴しいものがある。殆んど始めは、何等當てなしに、上海威靈士（ウエイハイ）の碼頭に、上陸するのであるが、誰れ人に案內されるともなし、いつしか北四川路、又百老滙（ブロードウエイ）路あたりに、夜の仕事を稼ぐことになつて行く。近來サボイホテルあたりへも、日本から輸出されたダンサーが、日一日とふえて行く傾向を示してゐる。

近來日本人の在留民は、不景氣の勢でもあらうが、なるべく費用をかけないで享樂をつくし、刹那の娛樂を追ふて滿足しようといふ所から、萬事この方面の裏面の發展が、顯著になつて來た。北四川路でも、橫濱橋（ワンパンガウ）のあたり、演藝館を中心にして桃色氣分の陽氣な場面が、グロ的背景をもつて次第に進展して來た。

○

日本のダンサーや、其の他これに類する各種の踊子は、矢張り何んといつても日本式の淡いところがあり、いくら口紅を濃厚につけて見た所で、足は短かいし、家鴨のやうな恰好といつては可愛さうだけれ共、持つて生れた遺傳的骨格は、親をうらんで見ても始まらない。それにしても、大和女丈夫のその方面の努力振りは、驚嘆すべきもので、虹口方面の各界隈には、日本人は固より、支那人外人側へも、深く喰ひ入つてゐるとの事である。

船の着く滬山碼頭（ワイシャン）のあたりから、提籃橋（ディレンヂャオ）のあたり、培開路の廻り角の方へかけて、あの邊一帶にも相當それが擴つてゐる。相手が高級であらうと、さうでなからうと、第一戰に立つモダンの娘子軍

はめつきり近來その羽振りを示して來たやうである。

○

ネオンサインに輝くサボイホテルは、益利の大文字の看板のあたりから、づっと廣く一廓をなし、虹口界隈切つての米人ホテルである。主として亞米利加の乘組水夫達を相手に、經營がなり立つてゐるとのことであるが、ダンスホールは樓上に樓下に、煌々輝く百燭燈の下、ジヤズの奏樂も賑かに、現れる綠のドレス、紅のスカート、とり〴〵の組合せ、紅毛綠眼の背の高いのにつれ〴〵、肩と肩を運ぶ恰好も、面白いやら氣の毒やらである。兎にも角にも、目出度い夜半の時刻に、一帶は更け行くのである。

時々ダンスの休憩時間となれば、綠酒黃酒に足取りの疲れを休め、休めては又始め、かくして一つは身のため、享樂のためと、腹にはこの毛唐と思ひ乍ら、これも胃袋をふくらすための仕事と思へば、心ならぬ笑顏も氣の毒になる。半ば樂しみとはいへ、懸命の努力のことゝて、ハネの夜明けには、ホールを出て行く足もたよりなく、腰つきさへ變に歩きづらさうに見えてゐる。返す〴〵も、餘り樂な商賣ではないやうに見られる。

○

しかし更に目拔きの場所柄に出ると、美しい碧眼のダンサー專門で、うららかな周圍の不夜の巷に、出浮く客も亦西洋人ばかり、これこそ歐米の本舞臺そのまゝの形で、たまに支那紳士のこれに加つてゐるものなど見られる。一時榮えに榮えてゐたマゼステイツクホテルのダンスホールは、その點で最も人氣をひいてゐた。足許に黃、紫、薄紅、綠と、配合のうるはしいネオンの光りを薄ぼんやりと輝かせ、入り亂れたとり〴〵のダンサーの足の運びを、いやが上にも高雅に色彩つてゐる。奏樂の始まるとともに、どちらの方からともなく、一組現はれ、二組出場し、見る見るどれが誰れだか解らなくなる。肩の搖れる波の動き、手と手と進むカーブのゆるやかさ、如何にもその音曲の調子と合つてゐて、背景に見る純英國式の天井、柱、彫刻の模樣と相調和し、得もいはれない貴族的の雰圍氣を見せてゐる。とても船の水夫を相手にしたサボイホテルの、低級な紅毛ダンサーと同日の論ではない。

○

マゼステイツクホテルの土曜日曜は、そのメンバーも一段とふえて、全く下夜城の名にそむかない。殊に日曜のイブニングは、踊るメンバーも非常な意氣込みである。又これを見物かた〴〵デイナーにテーブルを圍む各國紳士淑女の金屬のなきらびやかさは、東洋の一廓とも思へない。その中に和服姿の日本の奥さん連が卓により、ナイフとホークの扱ひ分けをしてゐる景色も見えてゐた。日本から長

崎丸、上海丸で上陸した遊客も、N・Y・K（日本郵船）のサブ（次席）に案内され、英吉利にでも遊んだつもりになつて、珍らしげに打見とれてゐる者もある。

ダンサーのこみあつてゐる中をよく見ると、たまに日本人の紳士の影も見えるが、しかし支那紳士の影の方が、どちらかといふと多いやうである。又足の運びも、民國人の方が本格的に出來てゐるやうで、怖らくそはお安くない月謝を拂つてゐるものであらう。

しかし今は、流石に人氣を集めてゐたマゼスティツクも、ホテル業の經營困難から、遂に廢業の止むなきに至つた。新聞紙上では、蔣介石御大が、宋美齡夫人の名儀で、四百萬兩で敷地ぐるみ買ひとり、御大が下野の後の慰み場所に臍繰りをやつたのだなどと傳へられてゐたが、上海に行つて、その道の通人に確かめて見ると、それは根もない噂さに過ぎないとのことである。

○

上海のダンスホールは、尙佛蘭西タウンに、又目抜きの各所に、雨後の筍の如く出來て、不景氣風をよそに、何れもいや榮えに榮え、不夜城の上海を景氣づけてゐる。

中にも競馬場の近くでは、カルトンカフエの樓上が、殊に評判が高い。大宴會、芝居のハネた後、自動車の群れは、多くこれに向つてドライブする。ショツファーの方でも、大抵客の樣子を見て心得てゐる。夏の夕べなどは、樓上のヴエランダは、綠酒の匂ひ、シヤンパンを拔く音など、とり〴〵に賑かで、それこそ花の都の宵を文字通りに物語つてゐる。そしてプログラム通り奏樂裡にホールは進行する。

十二時であつたか一時であつたか、はつきり憶えないが、兎に角定めの時刻になると、ベルが鳴り響き、場內場外の電燈、彩燈は、悉く消されてしまふ。遙かに照らす永安公司塔上のイルミネーションや、佛蘭西租界の大世界のイルミネーションなどで、ホールは滿更ら暗中模索といふ譯でもないが、しかし不案內の入場者には、一寸勝手が解らなくなる。でも常連のメンバーはちやんと心得たもので、ベルの合圖で黑頭巾影帽子の手合が、あちらからも、こちらからも抱き合つたまゝホールに下る。しかも奏樂裡に一段の足取り勇ましく、又意味ありげに進行して行く。夜はます〳〵更けて行き、ベランダの客は、流石にしつとりと夜露を感ずる位である。

カルトンカフエのダンスばかりは、上海隨一のエロとグロをこきまぜた高級歡樂場で、少くとも一二度は船から上つて、これを味はない者はない。又上流のダンスを語るものは、これを話題の一つにするのを誇りとしてゐる。

○

元より船で上海に乗込む客は、日本の淺間、秩父、龍田といつた、一萬六千噸級のN・Y・K型優秀船に、壯麗なローンヂ・ダンスホールが設置され、その他日枝、氷川の沙都綠、又照國、靖國を始め日級の歐洲航路の船あたりにも、夫々廣いデツキがあつて、ダンスホールに向くやうに出來てゐる。エムプレス乃至プレシデントの外國大型船も、亦廣大なダンスホールを有せる事はいふ迄もない。かういつた船中で、その入港前に、ダンスの歡樂を體驗することも、しようと思へば出來ないことはない。

所が西洋人や支那人は、その自ら樂しまんとする時は、自分で熱烈な歡樂慾のほとばしる情慾に驅られて、力強く遊び、その時間の與へられた範圍内で、人の手前など少しも構ふことなく、痛快味の限りをつくす。所が日本人の遊びは、たとへ時間が與へられてゐても、側の人への氣兼ね、又自分自身の氣恥しさ、遠慮の氣持などが、兎角先きに出で、つまり體裁を主眼としてわが感情を殺してしまふ。さういつた點がある爲めに、外人の如く無邪氣に、朗らかな氣分で、小鳥のやうに遊ぶことが出來ない。そこへ行くと、露西亞人は、きついウオツカをぐい飲みし乍ら、次ぎへ次ぎへと遊びの場面を廻轉して行き、しまひには最後のヴエールまでをもはづして、天女の如く滑らかに猛り遊ぶ。この邊は、大陸人と日本民族とは、その遊び方の上に於て、又紅燈街を利用する上に於て、格段の差があることに氣づくのである。怖らく上海あたりへ、始めて觀光に出かける日本の旅客は、かういつた批評の言葉に、思ひ當る節々を發見されるであらうと思ふ。

○

支那の紅燈街を、具體的にその場面に就て述べて見るに、これは日本の吉原、島原、松島、福原、圓山あたりの廓の樣子とは、まるきり打つて變つて違つてゐる。吉原の角海老、圓山の桃太郎、知る人は知つてゐるであらうが、何れも日本人の粹人、遊冶郎の氣持を本位としたものであるだけに、何んといつても店構へ、座敷、佳人、待遇振り、長火鉢のあたりから、つき出しの味ひ、座蒲團など、凡ての感じが、何んといつてもあつさりと清楚に出來て、床柱、掛軸、天井板、食器類など、日本趣味本位である。あの長崎の廓にしてもが、唯行く道中の路面の傾斜地に、石の敷きつめてあるのが、支那式といつた位の程度で、廓全體としての色彩情緒は、何んといつても大和式たるをまぬかれない。こゝに爭はれない純日本の趣味が漂ふてゐる。所謂柳暗花明の巷など、文字の上でこそ支那式にいひ馴らせてゐるが、事實は柳の並木の蔭に、日本式の角行燈、格子造りに雨の降る日は、蛇の目の姿をあちこちに見るといつた、大江戸の錦繪そつくりな情緒が、今尚漂ふてゐる。こゝに西洋人や支那客が、日本風俗を樂しみに見に來る無上の好材料が得らるゝわけである。

○

日本に來た觀光客の目に映ずる紅燈街の概念と云ふと、大抵右に述べたやうなものが主な印象として殘るのであつて、それ以外に見るものは餘りない。況して日本通の外人などで、通を振り廻はし、とかく日本の藝者や、舞妓の樣子氣立てに、趣味を持つてくれてゐる者なども、純日本式で遊ぶときには、先づ此の邊を目當てに遊ぶのが常道である。

しかし、純日本式の遊びの中からでも、夏の簪や帶止に、支那渡來の翡翠の細工物を見たり、或は使つてゐる御本人は御存じなしに、「ポコペン」だの、「アチヤサン」だの、「ヂヤンケンポン」だの、「チヤンポン」だの、支那傳來の言葉を、時折り聞くことがある。近いお隣りの國だから、さもあることではあるが、別に支那氣分を採入れて見ようといふ氣持はないらしい。

今は灰燼に歸した上海六三園（白石六三郎翁の花園）だの、月硎家だの、漢口の福見屋だの、日本から藝者を呼び寄せてゐる家もないではない。又北平の朝日軒なども、北方では有名な方であつて、これ亦日本から見えた觀光客の足を止めさせる處である。日本在民間の紅燈街としては、かういつた花園の噂さも時折り出たり、中にも六三は、いつぞや西園寺公渡歐の際、上港に寄港され、打寛ろがれた花園と云はるゝだけに、評判も高く庭もよかつた。がしかし日本全體の紅燈街風聞記のうちに、六三の名を知つてゐる者は餘りない。

○

かやうな實情で、日本の紅燈街は、支那のそれと並べ考へる時には、餘り脈絡がないといつてもよい。一體その氣持の上からいつて、又建物、料理、酒、衣裳、音曲、香氣、何れの點からいつても、支那の柳暗花明の巷は、全體が如何にもこつてりとし、しかも奥深くて、陽氣な寮園氣のうちに、複雜味と幽玄味を漂はせてゐるのである。

支那の旅の滯在中に、之を手輕く味つて見よう、覗いて見ようといふには、南方ならば上海の四馬路、北方では北平の前門外（チエンメンワイ）、滿洲では奉天の平康里（ピンカンリ）といつた所くらゐが、先づ恰好な入門の場所であらう。

○

先づ第一に、四馬路の紅燈街は、小有天（シヤオユウテン）（園茶）から都益處（トイチユ）（四川菜）のあたり一帶、日本人のよく遊びに出かける巷は、今は昔に較べて、やゝエロ氣分の薄らいだ感じがする。しかしその範圍は、づうと三馬路から大馬路のあたりにまで擴大せられ、紅燈街としての賑やかさが、此の頃はネオンサインの流行と共に、俄然モダン化せられ、又濃厚化せられて來た。しかしその裏面には、相變らず力强い

深みが漂ひ、改築した杏花樓（アンホワロウ）や梅園（メイユワン）、又は冠生園あたりの瀟洒たる青樓あたりを中心とした所が、どうやら人氣を集めて來た氣もする。

○

冠生園は、食料品部を樓下に、樓上には貴婦人室、その他一般向きの嘉賓の室がいろ〳〵あるほか、更に氣のきいた高級寫眞撮影の大室までも用意し、引伸しの役者の姿に、美しい色の加へられた額縁までもが、あちこちの壁に揭げられ、彩燈の影もうらゝかに、千客萬來の雜沓振りを見せてゐる。

又杏花樓は、近來通りから多少ひつこんで、前に自動車を置くだけの餘地をつくり、間口を擴げ、そうして樓上のひろい嘉賓室は、幾百人を入れるも更に尙ゆとりがあるといふ擴張振りである。廣東の豪商などで、五金號（金銀銅鐵錫の商賣）あたりの婚禮の賀莚も、よくこの杏花樓の樓上で催され、賑かな鳴物入りで、祥雲棚引く光景を見ることもある。

又梅園は、近代式のバアーの店飾りで、樓上の座席は四人宛、丈の高い衝立用のしきりを背景に、それ〴〵料理をつゝくやうに設備され、見た處樓上の廊下も狹く、嘉賓室の樣子は、さも窮窟げである。ボーイが皿を運ぶ時など、客の通行を塞いでゐるといつた位に狹くるしい。しかるに、毎夜その繁昌してゐることと云つたら、全く他に比を見ない位である。夏の盛り場、冬の人ごみ、うつかり時刻にでもふら〳〵と這入らうものなら、ラッシュアワーだけに、豫め待たされることを、覺悟してゐなくてはならぬ。

その他喰べること專門で出かける通人には、三馬路の陶樂春（鎭江菜）と云ふがあり、又河南路の大綸呉服店の、二つ先きの角を左へ這入つた路次の中にある正興館、又老正興館あたりの料理は、これ亦時刻には隨分の人ごみで、押すな押すなの混雜を見せてゐる。

○

かういつた場面から、四馬路の小有天あたりの紅燈街を顧みると、いくらか時代後れの感がある。けれ共、福建、廣東や臺灣あたりの南方人は、口に合つてゐる爲めか、多くはかういつた店に足が向かふ。又日本人はあつさりした四川料理を喜ぶせいか、都益處あたりに足が向く。尙滿洲でも奉天の大陸春公記假店が喜ばれるのは、それが四川菜を出すからである。

酒樓に登り酒たけなはになつた頃、若し藝者でも席に呼ばうと云ふには、佳人を迎へる文章のちやんと印刷されてゐる紅の一枚紙に、その藝者屋の名前と、佳人の名前とを書入れ、黃包車を飛ばせば、平素馴染のものであれば、すぐ樣やつて來てくれる。それに胡弓をもつた先生がついて來る。するとその席にゐ並ぶ客の方でも、我れ劣らじと又別の紙に、意中の佳人を迎へにやる。早速顏はそろふ。

あちらの席でもこちらの席でも、かけ合ひで面白い調子の美聲の競爭が始まる。胡弓の先生も、亦合ひの手を入れつゝ、清き玉音の一曲を挿入する。曲の名前が判らないと云ふと、すぐ支那客から筆で書いて示してくれる。上海近來の評判の俗曲で、百代(パテ)公司の新レコードにも入れられたといふ、取つておきの歌曲であるさうだが、始めての日本客には、それ程名曲とも何んとも判斷がつかない。しかし愛嬌をたゝへ、その甲高い聲を十二分に張りあげ、又次の一曲をやつてくれる。かくて數曲を歌ひ囃やげば、それが濟むなり、誠にあつさりとした態度で、飄然と酒の座から姿を消して行く。他の宴席に先約があるからであらう。それにしても日本の紅裙連が、お座敷をはづす時の愛嬌振りとか、その挨拶の言葉つきを見せるやうなことは、一向にない。

君叫
速至三馬路大舞臺對面
陶樂春第　號房間侍酒
勿延
電話中央六千九百三十一號

上海菜館酒樓から藝者屋に使を出すとき持たせてやる呼び出し狀

支那の藝者は、どちらかと云ふと、何んだか水臭いやうな感じがする。しかしこれは、上海のものに特に多いやうである。殊に四馬路界隈は、いづこの青樓酒席にしても、先づ同じやうなものである。寧ろ何んなら、その夜借り切りにして、そのまゝ例の二次會の阿片室の方へつれ込むプログラムで進んだ方が、心一杯客に滿足が與へられ、自らもその心持を擅にすることが出來るわけである。

支那の紅燈街は、上海に限つたことはない。しかし御馳走なり、佳人なり、凡て實質本位に出來てゐるのであつて、その場面の飾りだとか、部屋の體裁だとかいふものは、割合に考へられてゐない。

○

或る夏の夕、三馬路のとある春の字のついた青樓に、御馳走に呼ばれたことがある。すると、その支那客の中にその翌朝漢口へ旅立ちすることになつてゐる陸大人と云ふがゐて、同君の送別の宴も兼ねられてゐるのであつた。陸大人は首許の大きい筋骨たくましい好紳士で、數日前に花嫁を迎へたばかりの先生であつた。そのために、酒席は滿堂春色を生じ、春風駘蕩の氣が漲つたのである。

所が宴酣なとき、氣がついて見ると、いつの頃から降り始めたか、篠つく雨が窓外に聞えてゐて、扉をしめてすら、尚且つ中へしぶいてくるといふ烈しさであつた。盃をくつがへす程度以上の狂ひ雨で、屋根裏の一部分からは雨が洩れ壁に傳はつて落つる。食卓には何んのこともなかつたけれども、兎に角戸外は非常な大嵐となつた。

やがて歌ひ囃げる佳人の後ろの壁面を見ると、こゝには茶色の濁つた雨水が、幅ひろく幾條にも分れて傳はり落ち、物恐しい光景を呈してゐるのである。白髪三千丈式の形容語を用ひるとすれば、全く高壁にかゝる長川から、瀑布の落ちるとでも評してよい位であつた。雨は降る降る。土壁は流れる今も正に粗築な青樓建築は、雨のために屋根が落ち崩れるのでないかと氣づかはれた位であつた。

ところがわが支那客一同には雨は雨たり、我れは我れたりと云つた風で、底抜け騒ぎに拳が始まる。詩吟が始まる。幾ら土壁が流れくづれやうとも、何等見向きもしない。若しもこれが日本人の酒客であつたとしたならば、酒の醉ひはさめてしまふ。そして、先づ番頭を呼びつけ、『君、土壁は大丈夫かね、見給へあの有樣を』などと、勘定そこ〳〵に總立ちとなつて立つて行くにきまつてゐる。所がこゝだ、流石に大陸人は騒かない。ビクともしない。眼中大雨の大の字もなく、完全に送別の宴の第一次を進行させ、やがて十二時近くまでも乾杯又乾杯と、本當の歓を盡す。やがて誰れいふともなく、

『妻若きもの、先づ一杯』

と陸大人に酒がつがれる。すると他の悪友が、そばから口を出し、

『明天旅立ちするもの、又一杯』

と來る。立續けに一座の年長者から陸大人に向かひ、又

『年若きもの、いま三杯』

とくる。陸大人嬉しいやら得意やら、大いに勇を鼓して、乾杯、乾杯、又乾杯。全く

君に勧めて更に盡す、一杯の酒
西陽關を出づれば故人なからん

（勧君更盡一杯酒　西出陽關無故人）

といひ終つて、又乾杯。全く「渭城の朝雨輕塵を浥す」の唐詩をそのまゝの送別振りであつた。

爾來漢口から歸滬した陸大人には、上海でいつも面唔してゐるが、肩をぽんと一つ敲くだけで、その晩の乾杯の席を思ひ出し、限りなき好印象を今だに繰返してゐる次第である。その邊の情緒には、勿論何んら日支間に見る差別觀などは全くない。

所で、十二時を過ぐる事かれこれ三四十分、狂ひ雨もいくらか脚勢を減じて來た。やがて八臺の黄包車に一同は乘つかつて、醉眼朦朧、紅燈の光りも夢心地に見え、左に行つたか、右へ進んだか、覺えはないが、兎も角落着く先きは例によつて例のところ。それから先きには、到着した家の樓上の後房に、八尺大の姿見が重々しく掛かり、それに我が姿のチラと映つたことだけを記憶してゐる。陸大人の思ひ出や、さぞ〳〵情緒濃やかなるものがあつたであらうと、今もつて人ごと乍ら語り合つてゐ

るのである。

○

北平では、有名な前門外、正陽樓あたりの、夜のイルミネーションの閃びやかさはいふまでもない。冬の夕、成吉斯汗（ジンギスカン）の羊料理を、野天で雅客めい〳〵つけ焼きしつゝ長い竹の箸で頬張つて行くあたり、荒削りのうちに力強い酒席氣分が體驗される。支那酒に、ほろ酔ひ氣分を贏ち得た後のこの蒙古料理は、誠に北支那の白雪紛々たる光景に相應しい情緒を伴つてゐる。

けれ共、これは唯料理趣味から云ふと、烤羊肉（カオヤンロウ）の珍料理を目當てに、一杯飲みに行くといふ程度のものであつて、その周圍の雰圍氣が、紅燈街氣分に化するといふのには、まだ〳〵相當の距離がある。又本當の紅燈街といふは、前門外は右の方の側、あのイルミネーションまばゆき大柵欄（ターサーラン）から這入つて觀音寺街（クワンインスーチエ）の奥、斜街に深入りしなければ、本當の雰圍氣には接せられない。普通その方面の通人は、單に前門外といへば、それだけで頭がその紅燈街の方に向かひ、聯想も柔かに、にこつき乍ら、それと直感されるのである。これは宛ら日本で、日本堤といへばすぐ吉原のあたりを聯想するのと同じ譯である。

○

前門外の紅燈街については、そのあら方は前に略述して置いたが、更にその佳人に對する遊冶郎のことや、又その氣持の味ひかた、それからその間に出くはす種々な操縱振りについて、一言觸れて置きたいと思ふ。けれ共この方面のことは、いづれ長年、その地にあつて日本からの客を迎へる度に出入し、三日にあげず之に淫し、耽溺してよくその裏の裏まで研究してゐる粋人が、日本在留民の間にも、そこらあたり少くないわけだらうと思はるゝから、深入りした微妙な消息については、その方の專門家の秘話情話によつて訂正せられたいものである。

北平の秘話は、芝居の方面にでも、支那劇の通人として第一人者である熊本の人、辻聽花大人のゐられたことは、天下周知のことであつたが、つい昭和六年の夏、六十二歳を一期として他界せられた。聽花大人の支那劇に於ける知識は、その表裏、又その裏面にからまる話の表裏と云つた風に、いかなる隱れた方面の消息にでも、よく透徹してゐた。支那人中の劇通を以つて任ずるものも、大人には皆一目を置いてゐた。日本内地で、支那方面の劇通をもつて任ずる者も、辻大人ばかりには、恐らく頭が上がらなかつたとまで云はれてゐる位である。道理で、生前子供をもつてゐなかつた大人は、自分自ら支那家庭から子供さんを貰ひうけ、これを我が子として自分の生命を打込んだ芝居を教授し、又一座を引きつれて、芝居を打つて廻つたり、或は陳德林、龔雲甫等の天下一流の千兩役者を向ふに廻

し、劇評の辛辣なこと、又その背景に當つてゐたこと、又その批評眼の裏面に溫い親切味の漲つてゐたこと、或は若い役者の夫々の特徴を見て、その天才的技能を伸ばさせるやう面倒を見てゐたことなど、實に到れり盡くせりであつた。支那近代演藝史上、特筆すべき功績をとゞめた方である。

○

從つて我々北平に遊ぶ度毎に、常に大人に芝居へ案内せられ、或は宿へ誘ひに來てくれたり、又順天時報社で落合つて出かけたり、又新豐樓の酒席で落合つて案内されたりと云つた風であつた。そうして劇場に這入るや、直ちに樂屋うちへと木戸御免で、つか〳〵這入りこんでゐたなど、少々興行主に氣の毒な感じがせぬでもなかつた。處が樂屋うちへも、例の通りつか〳〵と這入りこみ、化粧隈取りに餘念のない内部へまでも案内し、一々細かく紹介をしてくれたり、且つその若い役者達の特徴に立ち入つて說明をしてくれた「顏立ちは二流だけれ共、聲は一流だ」などと、露骨な紹介振りなどもあつて、はたでひや〳〵させられたことも一度ならずあつた。

觀覽席にゐる時も、役者の素性來歷から、その得意な役割、又それが妻帶してから聲色が悪くなつた話だとか、或は又その天壇の林中に寒聲の練習に苦心慘憺せる譽め言葉などもあつたり、兎も角何もかも手にとる如く高教を垂れられたものである。今や大人は、大陸から永久に姿を消された。返すも心淋しき限りである。

○

紅燈街の方面に就ては、これ程迄の打込んだ相棒を、支那人間、又は在留日本人間に得ることが出來るならば、こゝにそれこそ人を魅するだけの話も出來ようけれども、不幸にしてまだその機會を得ない。しかし、幾度か紅燈覗きをした程度をひつかけに、具體的の見聞談から、その人情美のあらはれた處について、簡單に述べてみる。

支那の佳人は、人もいふ如く單に酒席に侍り、御用を仰せつかるべく呼ばれた時は、その時間だけのことは努める。これは大抵以前に多少の係り合ひがあり、又その抱へ主との關係から、意外に便利を得ることもあらう。けれ共普通は、その座席に對する職業的意識の他に、大した情緒纏綿の事實はあまりない。甚しきに至つては、酒席に臨むに當つて、歌の曲目を書きつらねた横帳を懷にして、この曲ならば幾ら幾ら、この方ならば價が倍だ、といつた、まるで翡翠賣りが、鞄の中から品々を取出して商ひをするといつた式の行き方で、つまりその場限りをすませば、後は野となれ山となれといつたのが多い。又それについてくる胡弓、その他の伶人も、唯樂手として一緒に酒席に連りはするものの、さうその客の顏色や、話の調子に景氣づいて、面白う可笑しう場面を取りなすやうな氣配りもし

ない。唯佳人が歌ふから、自分はかなでるのだといつた位の氣持でゐるらしく、足を重ね、胡弓の竿に手をかけて、壁の一方を打眺め、彈くことは彈いてゐるが、さうそのお正月らしい笑顏も見せてゐない。大抵は、眞面目くさつた顏をしてゐて、酒の座を何んと心得てゐるか、といつてやりたい位な面構へをしてゐる。たまには客と客の間に割込んで、一曲彈じた後、西瓜の種の皮を、卓を隔てた向ふの粹人に投げつけたりなど、佳人と共に愛嬌たつぷりと囃いで行くものもゐる。がしかし、一般にはそこまでなるものは少い。

○

しかしこれも度重なるに從ひ、又年を經るに從ひ、矢張り馴染みの度が濃厚になると、嘉客の方でも、他の者は呼ぶ氣がせず、例のいつものを呼ぶことに豫定がきまり、つきそひの番頭も、主人の鶴の一聲で、すぐその迎ひにやる紅紙に、その名前を墨書するといふ譯になる。その間の顏馴染みと、日常の心持とが、次第に濃厚に度を加へ來れば、季節々々の身の廻り、晴れ衣裳、裝飾品に至る一切を、特別につくつてやつたり、祝つてやつたりなどすることが常例となり、佳人の方でも、他にたよる人もなければ、これを當てにしてゐるといふことにもなる。

ところがこゝ迄來れば、その間の關係は、日本に於けるそれと同じやうに、費用の點や、種々な面倒を超越して、大抵の願ひはいふがまゝ聞いてやることになり、場合によると、家庭の第一夫人にさへお眼鏡に適へば、これを家に迎へ、側室の一つをあてがふといつたことにもなる。しかしこの場合には、媒介者の手數は要しないで、凡てが直接に、內間だけの話ですむのである。しかしこは必ずしも家に入れるの必要はなく、外の從來通りの紅燈街に居らせ、滿天下にそれと歌はるゝ評判の名妓として、天晴れの榮譽をになはせて置くのも香しい話である。

○

主人が、一世に時めける地位を有する名門ならば、たとへそれを秘密してゐても、自ら佳人の背景に後光がさして來る。それからそれへと、名流の足もひきつけられ、身に餘る光榮をになふことになる。

かつて別府の溫泉に亡命してゐた張宗昌將軍の如きは、三十幾人と云ふ側室を手なづけてゐたが、これは又天下隨一の豪の者。あれだけの體格の持主でゝもなければ、思つても出來ないことである。

張大人は、天下に有名な親思ひの孝行息子で、常て老父を山東の衙門に迎へ、これを鄕里へ見送る時も、その宿場から宿場へと乘物の世話やら、宿の注意やら、その情報の蒐集やら、誠に至れり盡くせりの心づかひであつた。こは田舍農村の美談として、親しく彼の地で耳にしたことである。

されば張將軍にあつては、一方の方面も、その一度紅燈街に遊べば、極度の濃厚さを發揮し、佳人思ひに浮身をやつし、出來得る限りの情をかけてゐたものとも思はれる。現に先年、日本の藝者某を、別府で第二十五夫人として迎へる時の如きは、わざ〳〵大連から五味八珍の美事な料理を取寄せ、盛大な賀筵を張つて、新婦の將來を祝福し、御披露の宴も隨分賑かであつたことは、別府界隈の宴席史を飾るに足るものがあつたといはれてゐる。

○

これは知れ渡つてゐる話で、今は舊聞に屬することではあるが、先年張將軍が北平滯在中、城内王府井大街（ワンフーチンターチエ）を從者をつれてドライブしてゐた時、路傍に蓮步嫋々たる姿をした佳人が、偶然にお目にとまつた。いきなり車をストツプさせて、「あそこにあるいてゐるあの佳人を、一寸行つて、自動車の中までつれて來い」との仰せであつた。從者は二つ返事で、その旨を奉じた。宛ら春の野邊に咲いてゐる菫の花でも摘ませるが如く、輕く云ひつけるので、早速行つて引つ張り込み、車中に一人を加へた譯であつた。これがもし日本ならば、大變なことで、人權蹂躙の何んのと、すぐ新聞種になり、ひどく敵かれたり、ゆすられたりするだらう。暴力團もやつて來ると云ふことになるのであるが、流石は支那である。當の佳人も、よい氣持で車中に納まり、温い座席が與へられる。そしてそのまゝ城内へつれて行かれたのである。後で佳人の親達がやつて來る。そしてその云ふことが面白い「願つてもないよい親戚が、娘のお蔭で一つ出來たわけだ。」と、喜ぶまいことか、これ亦二つ返事で話は成り立ち、むしろ貰つて頂くことを光榮と考へてゐると云ふ始末なのである。誠に物解りのよい目度出い話と云へるであらう。

○

北平の前門外を中心とした紅燈街氣分の佳話は、語るに從つて次ぎから次ぎへとあるが、先づかういつた民情美が土臺となつてゐる。この事ばかりは思案のほかで、法律や人の噂、又は世間に對する體裁なんかと云ふものには、少しも頓着することがなく、唯我が思ふ所に向つて進む。紅燈街の天地を、我がもの顔に大手を振り〳〵、酒々落々と行く。そこに支那式のエロ・グロ兼合ひの面白い力ある情話が、無限の進展を示してゐる。日本の柳暗花明裏に見る豆しぼりの手拭を腰に、都々逸の一つも歌ひ乍ら、巷を忍び行く情緒などとは、多少違つた趣きが汲み取られるのである。

○

尚滿洲の天地に遊ぶのは、兎角さぞや滿洲は寒むからうとか、滿洲の野に屍をさらすなどと、うら寒い又淋しい氣分が聯想され、上海や北平に見る如き情緒たつぷりの話題は少なかりさうに思はれて

ならぬ。しかし安東縣にしろ、奉天、撫順にしろ、又大連にしろ、其の他長春、ハルビンに行つて見ても、いづこも同じ秋の夕暮れで、滿洲氣分のとりとめのつかない大まかな處はあるが、しかし又一方の方面は、滿更でもない。否奉天の平康里（ピンカンリ）、大連の小崗子あたりの空氣は、何れも遊客の既に耳に聞き覺えのある所である。

わけても滿洲の地で、平康里とさへいへば、奉天といふ冒頭の言葉をいはなくても、いきなりすぐ聯想せられる紅燈街である。やゝもすると日本人の華客は、懐の豊かな紳士は歡迎せられるが、隨分そこには又荒らして廻る連中も少なくないので、客だねは褒貶相半ばしてゐる。

しかしうつかり馴れないものが、案内者なしに舞込んだりなどすると、第一途中で人力に馬鹿にされ、酒樓に登つてからも、ボーイたちから田舍もの扱ひされたりして、ひどくぎごちない氣持に陷る。その邊は、滿洲紅燈街の雰圍氣をよく心得、相當粋をきかせた行動に出づべきで、その作戰計畫は、豈ひとり兵法ばかりではないのである。

○

尙紅燈街に使用せられてゐる佳人の名刺は、大抵一寸以内の大いさで、薄桃色、水色、緑色、白などが多く、形は長方形、或は扇面形、しかもその周圍にから押しの模樣が現はされ、その中央に、藝名のみ活字であつさりと入れられてゐる。しかし又全然そのから押しのない扁平そのまゝの小名刺もある。日本の藝者衆のもつてゐる小名刺に較べて、支那のそれは一般に色彩美に富み、又その藝名そのものが、黛玉とか、娥影とか、香妃とか云ふやうに、文學的であり、歴史的であり、又藝術的に出來てゐるのが多く、風流粋士の幽情を催うさせるものがある。左に最近上海三馬路四馬路邊りの紅燈街に時めいてゐる酒樓や、並びにその各樓に抱へられてゐる所屬の佳人の名前、その呼び出しの番號、又その巷横町の俗名などを、玄人筋の閻魔帳によつて紹介摘錄して見よう。

群玉坊　一弄　東一家		群玉坊　一弄　東三家	
慧娟	三一四三	湘妃	三六五八
小金鋼鑽		閣嬌	
花蕊紅		鶯云英	
情依		賽春	
高第	五四〇五	群玉坊　東四家	三九七九
冠群		淑蘭萍	
花蘭香		寄秀月	
第第		素娟	

林第　群玉坊　二弄　東三家
婉第芳　二一四三
春俏緣

小林黛玉　群玉坊　一弄　東六家
雅君　六二一一六
陶麗姮

寄塵　九四二四
玉珙

賈寶玉　三六四八
秋月閣紅
醉琴億

鳳　群玉坊　二弄　東二家
嬌樓　二七五七
秦君俠　二七五五

雪芳　群玉坊　二弄　東三家
月緣　三七二九
春宵樓
醉梅仙

仙　群玉坊　二弄　東四家
蘭　四〇三八
亞仙
明珠
張朱玉

慧　群玉坊　二弄　東五家
蘭妃
楊翠　五七〇五
媛媛

千紅　群玉坊　二弄　東六家
半梅　三一三一
花君
慧玲

一新會樂　一弄　四家
林心　七三二一
婉俠
翠貞
雲雲

春新會樂　一弄　五家
雲　九四七〇
美娥

曼新會樂　一弄　六家
探千　七六二七
春

美新會樂　一弄　七家
金鴻　三一五八
珍寶玉
珠
簫

芍　群玉坊　二弄　東六家
藥　五六八五
留
春
妙
芳
花
雲
蘭
芳

新會樂　一弄　一家

柳
燕
燕
湘　二〇二二
月
情
春
彩　霞
彩　紅

一　妃　七九五九
雅　妃
韻　琴

荷花琴翠青　新會樂　二弄　一家　八三七三

文奇作　新會樂　二弄　二家　七六一九

麗霞妃珠艷　新會樂　二弄　三家　七二八八

青春花麗紅　新會樂　二弄　三家　七二八八

春紅玉　新會樂　二弄　五家　九〇一八

青雪鴻第妹　新會樂　二弄　六家　七〇一八

美陳妹　新會樂　二弄　六家

鳳梅春意　新會樂　三弄　一家　四一二七

麗芸　新會樂　三弄　一家

舜華　新會樂　三弄　一家　九六一七

時群秀第　新會樂　三弄　三家　七五二九

芳英琴　新會樂　三弄　三家

楚陳美妃　新會樂　三弄　四家　八三六一

娟玉　新會樂　三弄　四家

春妙鳳樓　新會樂　三弄　五家　七〇〇二

新痕妃　新會樂　三弄　六家　八三七五

春燕樓　新會樂　三弄　七家

左儀貞蘭　新會樂　三弄　七家　七五八三

湘妃　新會樂　四弄　一家

麗青蘭　新會樂　四弄　三家　三六九九

紅玫瑰　新會樂　四弄　三家　三六九九

一然玉第　新會樂　四弄　三家　二一〇三

佩雲香　新會樂　四弄　三家

花云香　新會樂　四弄　三家

新會樂　四弄　四家
半天紅
慧　春
金賽云
蘋　香
繡云閣
八三七一

新會樂　四弄　五家
抱　月
妙　珍
八三二〇

媚　月
秋　霞
眞紅云
二四五三

時新花
回　春
春　花
蘇黛玉
二八三〇

福裕里　總弄　一家
紅情香
克　琴
花蘭英
青　蓮
八四五四

綺　春
樊寶玉
鶯　鶯
六二五〇

福裕里　一弄　西一家
花筱芳
雪　鴻
花寶玉
金翠娟
七八一六

麗　秋
云　第
寄　廬
七　弟
九三四二

福裕里　一弄　西三家
玉　環
姚　第
露　蘭
奇　香
九一一七

福裕里　一弄　西四家
寶　寶
美　麗
吟　香
八三六二

霞　珍
金湘娥
謝愛卿
筱月閣
雪　珠
八三六二

福裕里　二弄　西一家
花素珍
秦可卿
蘋秋閣
云　仙
五九八二

虫二閣
嫔　妃
藏　珠
六二二六

黛　玉
妙　玉
一三一五

福裕里　二弄　西三家
落　鴈　四八一八
三　三　五八九四
眞　娘
怡　紅
初　霞　一六三四

福裕里　二弄　西四家
花想客　六九九二
怡春　三一四〇
朱第
趙起鳳　三一四〇
紅梅

琴第　福裕里　三弄　西一家
冠芳　九一〇三
平兎
落雁容

艷玉英霞　福裕里　第　三弄　西二家　八六〇六

福裕里　三弄　西三家
吟月　六八九九
賽鶯鶯

羅金麗筱喬紅　福裕里　蘭第珍　三弄　六八九九　六七七五

小花園　北弄　里一家
民宛春玉　二六八八

民德里　二家
春密妃第　航　九八六二

小花園　總弄　第一家
鴻紫韓素情　筱娘娟梅　二五二九

小花園　總弄　第二家
愛金朱郎艷　春水采月　七六五六

小花園　總弄　三家
寶映　蓮紅　八〇二三

小花園　總弄　四家
秀迎　蘭春　五三〇七

紙帳梅娟　九〇一〇

民德里　四家
眞張志貞　麗仙　霞藏　花媚娥　三八五五

喬妃梅慧珠紅　二百　九四〇三

民德里　六家
慧琴　慧君　娥影　洪彩云　林素云　柳月　七二四三

小花園 總弄 五家
碧情
孟麗天 八四三一
祿菊
花月痕

小花園 總弄 六家
花製人
紅玉 九四〇一
賈寶玉
鳳樓
林小雲
醉香閣

小花園 東弄
張寶玉 六二七六八
瑞娥

花月樓 六二九四四
湘玲
金蓮
愛芳 四六一四
文素貞
婉琴

小花園 一弄 二家
萍妹
巧雲 三五五四
鴻雁
惠春

小花園 一弄 三家
抱眞 六二二七
陶菊芬

小花園 二弄 一家
賽昭容
妙第 六三六八
蓬芝

陳媛媛
錦月閣 六九八九
香君
香妹
柳春
惠然 一二六九七
紅蝴蝶

小花園 三弄 一家
賽春樓 三九三一
素文蘭
鴻艷 三九三一
含媚

小花園 三弄 一家
靜珠
蘇云 六八一八
榴紅閣

小花園 四弄 一家
蓮花
寶琴 八四四二
艷瑞云

韻芳 八四四二

情鐘
龍玉
雪月 九四〇二
謝玉珍

友蘭 七五三七
情月遇

福致里 一弄 一家
嫣紅
林花 六八〇三
良玉
素青

福致里 一弄 二家
双紅
林素娥 八五二七
鄭君玉
蟾影

福致里 一弄 二家
雅洪
篇篇
吟梅 一〇六三八
荷珠
傳紅
艶雅 一九三七七

福致里 二弄 一家
玉樓
秋月
晴雲 七四四九
晩霞

亞仙
抱云 八一九四
露蘭
賽珍

榴金 五〇四九

慧江
燕春 七五三九
明月 三百
玉英
惜春

春燕鴻 三三六七
愛第
林愛珠
金玉樓

平望街
花儷花
眞花媛媛
小金鐘 一一六九四

老民和 西一家
蘭君 六四五八
小翠娟

老民和 西二家
曼倩
曼君
元春 三一一〇
榴花

老民和 西三家
倚紅
王燕鳳 四六一三
若容
倍君

老民和 東一家
謝麗娟
月樓 四六〇六
玉仙
枝香
時春樓

民和里 右弄 東一家
鳳艶
韻秋
宛飛 五八〇六
會珠
夜明珠

民和里 右弄 東二家
香雪
嫣紅 二七四五
陳美齡
醉紅樓

民和里 右弄 東三家
花繁盛 三九六三
香田第 三九六三
徐碧緣 三九六三

天麟蘭 三四六一
天韻 三四六一
時梨花 三四六一
鴻雪 三四六一
美雲 三四六一

紅葉 三八三九
少芳鄉 三八三九
麗珠 三八三九
麗玉 三八三九

民花里 總弄 東二家
良慈珍 四六九三
訪情 四六九三
花群芳 四六九三
雪俠 四六九三

舜英 四五五〇
陳翠娥 四五五〇
林鳳亭 四五五〇
月鈴 四五五〇
雪艷 四五五〇

民和里 總弄 四家
妙珍 六七五〇
秋月樓 六七五〇
艷菊 六七五〇
紅拂 六七五〇

瑞娟 九一七五
鳳第 九一七五
龍篆 九一七五
夢花 九一七五

羞花 九〇三三
情媚 九〇三三
玉葉 九〇三三

鼎豐里 一家
樂第 三七五八
玉樓 三七五八
近霞 三七五八
葉秋 三七五八
陳小香 三七五八

寶福祥里 一弄 一家
鴻梅 六八五九
松妃 六八五九
賽湘 六八五九
降雨 六八五九

民和里 總弄 五家
香蓮 一二四九
慧月 一二四九
謝天香 一二四九
木蘭 一二四九

民和里 總弄 六家
如如 六〇六四
浙君 六〇六四
洪珍 六〇六四
珠 六〇六四
倚芳 六〇六四
閣 六〇六四

三元坊 七九四一
花非花 七九四一
花媛媛 七九四一

萍影 九六一三

福祥里 一弄
王筱洪
洪小云 三三一四
月明
筠倩

福祥里 一弄 三家
蕊珠
張麗華
尋梅
妹椿 五六九三
陳寶珍

福祥里 二弄 一家
黛云 七三四二
夢雲
林桂卿
情花

白牡丹 四百
花娟娟 一一九七八
棠影
齡美
艷云

金媛媛
寶蘭
慧茅 五一三六
黃娥

雪春
朱素云
春珠 七五九一
紫石英

玉人
小紅
楚娟
云根 六二五三九
小素

市穩
麗娟 四四六八
素秋
冠玉

樂餘里 一弄 一家
洪云仙
秋菊 五六一七
飛云蘭
樊素

愛菊
時第 三七〇〇
淑君
良韻

樂餘里 一弄 三家
㑊珠
麗云 七三四一
響鈴江

樂餘里 一弄 四家
張荷花
林芳館
花中花
羞藹

月影
鳳仙
陳綠云
飛霞

樂餘里 二弄 一家
桂雲
筱云
月裡紅
鶯鴻
素芳 六四九九
張志貞

梅　樂餘重　二弄　二家
美　妃　四九五一
玉　珠
好　梅
月

花　樂餘里　二弄　五家
寶　琴
醉　情　四六五四
秋　芳
一　妃
再　閣

花　樂餘里　二弄　四家
鳳　仙
素　珍　八五九七
素　情
美　君

萍　汕頭路　三元沿一家
鄉　卿　四九四二
翠　芳
萍　影
琴　舫

候　樂餘里　二弄　四家
飛　第
來　鴻　八四八三
小　含　春
清　心　閣

愛　汕頭路　群玉沿一家
鴻　卿
媚　媚　三六七一
筱　蓉
芙　第

香　汕頭路　群玉沿二家
客　女
串　紅　六七二〇
美　君
遙

富　汕頭路　群玉沿三家
春　樓
筱　林　第　九九七三
慧　月
柳　玉

億　汕頭路　四家
艷　情
愛　雨
貴　文　妃　九五七六
文　蘭
秋　雲

千　金
方　飛
愛　蓮　九八六八
賽　花
金

月　千
蘭　香
素　閣　一二四九六
落　心
霞

碧　汕頭路　樂餘里　東一家
霞　瓊
紫　女
素　翠
范　霞

秀　汕頭路　樂餘里　東二家
占　云
春　春
第　第
愛　員
幻

汕頭路　樂餘沿　東三家	沙鳳仙	日新里　第一家	清和坊　一家
花云仙	伊威	又姬	四一一〇
天情　一一八五二	愛紅	含芳	寶珠
鳳春	金小香	五二五一	計五二六
鸞嬌	文卿	芳秀芳	
汕頭路　樂餘里　東四家	芝芳		
愛雨文			
寄梅　一三九八			
韻秋			
吉慶坊　一家			
白玉霜			
楊蘭春			
林玉仙　六二二九七			
民慶里　二弄　一家			
秋琴			
李湘君			
菱花　九〇七七			

○

支那の旅に伴ふ遊びは、その觀光客の身分、地位、年齢、觀光の性質、又職業の如何等によつて、固よりそれ〴〵差等があり、同じ人が同じ旅程を繰返すにしても、その時の旅行の目的、懐都合で、どのやうにでも程度を上下する事が出來る。學生をつれて歩く時、又友人の相棒と行を共にする時、或は支那客と同行する時、共の他詩人文人と行を共にする時、家族づれのときと云ふ風で、夫々その出立の時から、氣分、態度、費用の輪廓からして、既に違つて來る。

しかし、支那の旅ばかりは、費用を幾らも使はなくて、却つて興味多き爲めになる資料が、どつさり手に入ることがある。これと反對に又金ばかり澤山かけ、體裁はよく見えてゐても、一向その内容に乏しく、唯空々漠々の旅程を終へたので、結局支那旅行とは存外空疎なものだとの印象を得て歸るものもある。

○

紅燈街に於ける遊興の費用は、支那の旅費と同じやうに、必ずしもその多寡によるものではない。却つて餘りかけないで、さん〴〵支那氣分を弄ぶやうにし、遣り方によつては、二次會をこめて、五弗十弗以下の範圍内で、悪友達と共に、結構よき夢を結ぶことも出來る。或は又、場末、船着場あた

りなど、處次第では、その半分、三分の一もかゝらない事もある。極端なのになれば、殆んど信じられない位の程度で濟むこともあるらしい。

上海の目抜きの場所ですら、十弗二十弗位の所で、八人一卓の酒席をまかなふことも出來る。しかもその次ぎから次ぎへと運び來る御馳走を見ると、かなりな材料調味が味はれる。しかしも、民國の人々殊に通人といはれる人を介して、その人から賑房へ申込んで貰ふやうにするのが得策である。旨い話が鯉魚の御馳走にした所で、日本人だけが申込んだとすれば、一色の料理しか出さない。所が支那の通人から誂へるといふと、前にもいつた通り、その身と臟腑と、骨のスープとの三段の扱ひ別けをしてくれる。そのスープは、飯の出る時運んで來るなど、細かい所に注意してくれる。

○

佳人の送り迎への費用にした所で、必ずしも馬鹿げた金をつかふには及ばない。問題はその氣分を陽氣にし、客をどこまでもそらせないことである。日本人はやゝもすれば、遊興に多額の懐を痛め乍ら、尚且つお酌の御機嫌までとるやう心を配る慣習が出來てゐる。これはお酌仲間での評判を、落としたくないとの魂膽からでもあらうが、支那流にいはせると、つまらない御苦勞な話である。

又御馳走遊興に對するチップは、全體の掛りの一割そこ〳〵でよく、二割を越えることはない。日本人は、矢鱈に澤山氣前を見せる傾向があるので、却つて紅燈街に惡習慣を殘して困る、と云ふ支那人側からの批難すらある。日本でこそ酒樓の設備は、床柱や庭園の石燈籠、玄關先きの植込みなど、凡て御馳走以外の經費が少なからぬ額に達してゐる。そのためチップを奮發する位は、日本では當然の思ひやりと見られてゐる。支那では壁に雨漏りを見ようと、皿にかすがひ止めがしてあらうと、茶碗がかけてゐようと頓着などなく、すべて客の前へ運び出すのである。從つて客の方でも、唯その喰つただけの料理の實費に近いものを拂つてやれば澤山で、それ以上多額の心づけなんかしなくてもよいのである。その邊は主客共に如何にも合理的に考へてゐる。

○

これを要するに、支那の旅として歡樂の天地を味ひ、視察するには、先づもつて支那の社會そのものが、紅燈の世界であり、色の天地であり、理窟のない柔かみに充ちた實生活を反映してゐるといふことを前提に考へるべきである。假令白晝は殺風景な場末であつても、黄昏の時刻からは、四方八方から蟻の甘きにつくが如く、自然と遊冶郎達が出浮いて來て、いひ知れぬ人間生活の本當の場面を演じてゐる。所によつては、夜になつても餘り街燈が點ぜられず、唯あちこちに、死んだやうにぼんやりしてゐる點燈の薄暗い下を、魔物のやうにうごめいてゐる人々を見る。覗きに行つた馴れない日本

人などは、身が紅燈裡にあることも忘れ、却つて肌に粟を生ずる位である。

○

しかし何處の里も、人情に變りはない。紅燈綠酒のもとに集る吳客越客は、何れも皆同じ幽情を暢舒せんがために、總一念に思ひこがれて足を向けて來たもののみである。その中に日本人が一人や二人居らうとも、何んの關することがあらう。目的は他にある。日本人だからといつて、特に殺伐な氣分などを起すことは、無論あらう筈がない。互ひに粋をきかせ、讓り合ひつゝ樓上樓下に出入してさへゐれば、目出度い氣分が通ひ合ひ、すぐさま解け合ふ譯でもある。

○

歡樂の支那は、城内に、水鄉に、到る所御馳走と、酒と、今一つのものとで、大抵一日の疲れをなほし、仕事を計畫するにも、人に相談を持ちかけるにも、又客を送り迎へるにも、勞を謝するにも、凡て皆この三者を用ひることはお定りである。いはゞ支那人の人生觀とは、日毎日毎のこの三者の連鎖劇に過ぎないのである。されば紅燈街の觀察は、最も根の深い、又最も意味深長な、支那生活の眞面目をこゝに表現してゐるのであると見られる。

支那南北各地に、常に見る動亂や、世界到る所に移住してゐる僑民が、堅忍不拔の努力を惜まず、營々孜々と努めてゐるなど、これらはつまり煎じ詰めて見ると、如何にして自己が年中歡樂の生活に到達し得んかにあることは明かである。

されば紅燈街は、世相の一場面でこそあれ、こゝにその樂しき理想境が展開せられ、その目出度い吉祥里がそのまゝ見出さるゝ譯であるから、支那旅行中これを突きとめ研究して來ることは、眞面目な意味に於て、支那研究の重要項目といつても差支へない。この點に力點を置いて憚る所なく、下腹に力を入れ、しまる所はよくしまり、遊ぶ所はよく遊び、心の裏と表の扱ひ別けをなすことは、蓋し支那の旅に、最も忠實な旅行振りであるといふことが出來るのである。

その二四　土産物

支那旅行の計畫を發表すると、出發前から兄弟や友だち、その他各方面から、土産物の申出でが、あれこれとうるさい程あるものである。人によつては、隨分厄介がられることかも知れぬが、しかし人によつては、又折角樂しみにしてゐる支那の諸地方を、思ふ存分自分で歩き、城内あたりも幾度か散歩かたがたひやかしに行くのであるから、多少の頼まれもの位は、趣味をもつても漁つてもあげようといふ親切心を持つものもある。他所からの頼まれものは鬼も角も、家族や子供、親類などから頼まれる土産物くらゐは、さう面倒がらないで、なるたけ希望を充たしてやる方がよい。

○

支那觀光の目的の一つに、土産ものを持ち歸ることは、空な土産ばなしを持ち歸るよりか、遙かに有効で、人にも興味を分つことになるのである。何んといつても、その品物の形、色、作り方、種類、値段、これらを具體的に目の前に見せてやられるのであるから、これを受ける人の氣持は、どれくらゐ愉快を感ずることかわからない。

支那は恐ろしい所だなどと噂には聞いてゐても、飛びつくやうな土産物を、目の前に出して見せられると、急に支那がよく見え、今更の如く懐しくもなる。

支那の土産物は、假令それが玩具であらうと、文具であらうと、又食物であらうと、何れにしても一種變つた趣きや風味が之に見出され、又どことなく呑ん氣な所がある。花瓶一つ見ても、又茶碗一組眺めてゐても、日本のそれとは違ひ、どことなく未成品らしいところがあり、而かも面白味があり、親しみの氣持が現はれて來る。

支那の品物は、日本品や西洋の舶來品とちがひ、見た目が完全無缺ではない。こゝに支那の製作品と、日本のそれとの間に、著しい相違點があるのである。

○

支那の旅から歸つて來る客は、多くは先づ上海の話に、蘇州杭州の話、又青島、天津の話に、滿洲新國家の話などと云つた風に、どの地方の話題が土産話として出るにしても、何んとなくそこに調子のはづれた、辻褄の合はない呑ん氣な話で持ち切りになる。やれ泥棒市場でござるの、やれ支那芝居でござるの、やれ滿洲料理屋でござるのと、その話題に含まれてゐる筋書の中には、屹度日本的でない荒削りな所があつて、しかも要領の悪いやうなよいやうな、ユーモアに富んだ興味のある題材が、

數多含められてゐる。人によると、僅か一二ケ月歩いて來たゞけでも、何んとなく支那らしい辻褄の合はないやうな氣持に、染つて歸つて來る人もある。支那出來の鞄を幾つか殖やして持ち歸る人があるが、丁度その鞄の出來映えと同じことで、金具の鹽梅といひ、持つ所の取手の恰好といひ、又その形全體のしまりのなさといひ、如何にも無細工で大まかで、日本式に出來たものに比べると、大變な違ひである。その鞄の式で、萬事がよく推される。人も土產物も、凡てよく調和してゐる譯である。

日本の品物は、日本人の人柄、又日本の國柄と同じやうに、殆んどその物の出來映えが、何處一つ缺點の打ち所がない位に、きちんと完全に出來てゐて、かつちりと纏つてゐる。そこが日本人の氣分に、ぴつたり合つてゐるものらしい。それが日本の品物の進むべき唯一の道であると、日本人は自分できめてゐる。

○

支那の旅に出かける多くの人は、殆んど殘らずの者が、右に述べたやうな日本式の氣持を胸に描いて、南北の支那街を漁つて歩いてゐる。日本式の型を破り、自ら心を空うして、支那獨特の國柄を理解し、且つ支那人の心持ちに興味を感じ、これに多少とも同情の心を寄せて見ようと云ふやうな者は、前に少ない。ゐればその種の人は、比較的呑ん氣な氣分で、支那らしい土產物を漁るであらう。所が事實は全くさうでなく、かつちりと纏り、又完全無缺な形をしたものでなくては、氣に入らないと云つた部類の人の方が多い。又さういふ人であると、てんで頭から支那出來の品物を褒めない。けなしてかゝらうとするのみである。その國情、人柄等に就ても、何んら理解同情の氣持がなく、始めから支那街を歩いても、油斷がならぬ處だとしてのみ、自分で警戒してゐる。從つて少しも自ら溶け合ふといふ態度に出ようとはしないのであるから、いざ土產物をと考へて見た所で、あれも氣に入らぬ、これも氣に召さぬで、結局纏りはつかない。いふがまゝに、城內の店へ案內して見ても、案外なことが多いのである。

○

支那の店に日本人を案內をして、最も困るのは、支那氣分を加味した買ひ方をしようとする心のないことである。日本式の細かい心情を、露骨に發揮されることである。

たとへば、城內の陶器店などに行つて、透しのある飯茶碗の蓋付のものを十人前求めようとする場合があるとする。すると店先きに立つて、あちらの棚こちらの棚からと、さん〳〵取り下ろさせ、一々藁をとかせて品物を改める。蓋をとつて一々あちこちと調べにかゝる。そして、やれ蓮の模樣があるの、菊の花があがりが悪いの、やれ蓋がかつちり合つてゐないの、形が正圓でないのと、文句の多

いこと夥だしい。

『蓮の繪は結構ぢやないですか』

といへば、

『でも蓮の模樣は香奠返しか何か、不祝儀の時のもので、お土産にはなりませんから』

日本流儀にいへば、御尤も至極な苦情である。ところが、支那では茶碗に蓮の模樣のあるのは、最も普通のことで、家に死人がなくても、一般にこれは用ひられてゐる。居室の間じきりの戸にも、又寢臺の飾りの彫刻にも蓮はいつもおきまりの圖案である。

又支那人仲間では、贈物をするのに、よく本場の銘茶を使ふことがある。お茶は支那人の生命である。所が日本のかつぎ屋であつたら、屹度次ぎのやうにいふであらう。

『死人があつた譯ぢやあるまいし、お茶を人に贈るなんて緣起でもない。』と。

茶碗に蓮華の模樣のあるのが悪いといふのは、誤まられた考へからである。色のあがりさへよければ、合格とすべきが當然である。それを五組も六組も取り下ろさせて置き乍ら、結局他の模樣の茶碗で我慢するのかと思つて見てゐると、こんどは蓋がぴつしやり合つてゐないなどと、一々細かく文句を並べ始める。そしてあれこれとうるさく吟味の結果、あれから一つ、これから一つと、八釜しく選定してやつとのことで十人前だけを並べ、これを買ひとるといふ有樣である。

『あれこれと撰り出され、どれもこれも荒されました。後はみんな撰り粕です。これぢや商賣になりません。その上値段をまけろといふお話では、甚だ困ります。』

番頭がべそをかいていふ言葉に、寧ろ同情し加擔したい程である。

○

支那の燒物工場は、實に呑ん氣なものである。陶工が轆轤を廻すにも、他所見をしながら、談笑裡に作つてゐる。蓋がぴつしやり合つてゐるゐないは、全く問題でないのである。購買者の方でも、亦そんなことに文句を並べるやうな神經は、持ち合してゐない、同時にそのきちんと合つてゐない所に、却つてゆとりある風流味があると見てゐる。その日支人間に於ける考へ方の方向が、全然違つてゐるといふことも考へないで、支那土産を買はんとする時、その支那の品物の中に日本式な趣味を見出し、日本式な文句を並べるのは、始めから全く間違つた遣り方である。勿論買ふ買はないの問題は別で、又無味にもよることであるから、當人の御勝手ではあるが、そんなことで買つて來た土産物は、支那の土地で買つたといふだけで、氣持の上では、決して支那土産ではない譯である。そんな人は、寧ろ始めから支那の土地で、舶來品でも買つた方が、いやな文句を並べないですみ、手數も省けてよい譯

である。支那に行つて土産物を買ふとするには、氣持の上にも形の上にも、本當の支那土産を撰定しなければ嘘である。

○

支那の土産物は細かく見て來ると、色々申し分があつて、日本人の氣持に添はないものが多い。と云ふのは、書物を買へば、中に落丁があつて見たり、織物を買つて見ると、中にしみがあつて見たり、指物を買つて歸ると、引出しがたびしやして、滑らかに一遍で這入らなかつたりなどする。そんな譯で、どことなくぎこちない感じを起させる。しかし前にもいふ通り、支那の品物は、何にしてもそれ自體にさういつた特徴をもつてゐるといふ事を考へて置くことが必要である。工場の工人は、皆んな呑ん氣である。ゆとりのある氣分で拵らへてゐる、だから、その漫はその國民のたちによることだとして見てやらねばならぬ。それが又、その國情にも支配されてゐるものだといへる。

しからば極上等の監製品はどうかといふに、これにしても程度問題で、大體が寸法など喧ましくなく、目分量本位に出來てゐるので、定規や分廻を用ひ、幾何學的にかつちり作りあげてゐるものは少い。それ故支那の土産物といへば、いつも皆呑ん氣に出來てゐて、間の抜けたやうな所に、とらはれてゐない而かも底力のあるものがある。又時には、溜飲の下るやうな奇抜なものもあると云ふことに着目すべきである。であるから、なるたけ日本趣味から離れて、支那を旅する人々は、出來る限り大陸氣分のあるものを撰んだ方がよいと思ふ。土産物漁りは、この意味からいつて、一體日本人の寧ろ意表に出た意匠、圖案、品物に目をつけ、人だのみでなく、自分自らが品物あさりにたづさはらなければならぬ。人頼みでは、その場面場面にぶつつかり、それを取捨撰擇し、その何れかに取りきめ、買ひとつて來ることは難しい話である。

○

近來はエログロ方面のことが景氣づいて來て、支那に流行する泥を塗つた貼りぼての假面各樣のものが、日本の觀光客にかなりもてゝゐる。その色は毒々しいが、隈のとり方やその相貌は千態萬狀で、細工も呑ん氣に出來てゐる。決して細かい局部に注意されてゐるものではない。けれ共、目口鼻耳などが、無雜作に描寫されてゐて面白く、その荒削り的に見える處が、却つて人の注意をひいてゐるのである。青があり、赤があり、黄があり、黒があり、鼻の形、眉の形、鬚の形、口から頬にかけての恰好なども、亦驚くべく多種多樣である。これなどは價は安く、しかも荷物として輕く、又こはれる心配もなく、支那氣分を味はせる手土産としては、最も妙品である。日本では、これを顔にかぶらないで、書齋や應接間あたりの壁がけに代用してゐるものが多い。

○

土産物の選擇は、なるべくその地方の特産物を買ひ求めるに越したことはない。その條件とする所は、先づ

一、價の廉なること
二、荷物のかさばらないこと
三、見た感じのよいこと
四、壞れものでないこと
五、なるべく實用になること
六、記念として受け得られるもの
七、上品なるもの、幽玄なるもの
八、稅關の餘りかゝらぬもの
九、支那風物を思ひ出させるもの
一〇、分量の多いもの

といつた諸點を考慮に入れて、土産物の見當をつけるならば、大して失策をしないであらう。それにしても、その地方の事情に明るい友人先輩に、一應相談するに越したことはない。

よく又青島へ出かける旅行者が、歸りの土産に、籠に一杯山東の白菜（パイツアイ）を船へ持ち込むなどは、冬の季節の土産物として、最も思ひつきのよい名案である。山東白菜の最大なものは、根元の大いさ一尺内外のものもあり、日本では床の間の飾りにしても恥しくない位で、一皮づゝむいて寄せ鍋に用ひても、充分に滿腹させることが出來る。これなどは、たしかにこゝに列擧した十項目に照して、最も恰好な土産品といへるであらう。

○

所で支那の旅先きでは、毎日のやうに見物やら、歡迎會やら、その又二次會やらで、かなり次ぎから次ぎへと忙しい。その上に側の友人などから、芝居見物はどうかなどと、親切に申込まれたりして、殆んど毎夜寢る前に日誌を書く時など、時間を盜むやうにしなければ、書く機會を全く失つてしまふ位である。かやうなプログラム以外の事も、好意的に云つてくれるのであるから、斷り切れぬ事が多い。

かういつて旅先きの忙はしい身の上からいつても、到底呑ん氣に土産物などを、自分自ら漁りに出かけたり、一々その店々を廻つて、品物をひねくつて見たり、値段の折合ひに暇を潰したり、荷造り

の注意などまで、細々したことにたづさはつて居ることは出來ないのである。

これは家郷にゐるものや、旅立ちの時に見送つてくれた友人達の、到底想像もつかないくらゐの忙殺振りなのである。誰しも、一度大陸旅行をして見ると、皆こゝに云ふ通りの實感に打たれるので、殆んど皆うなづかれる。全く睡眠する時間すら充分でない位なのである。

支那人の商店に於ける買物の受取り。普通は收入印紙印花を貼ることになつてゐる。

されば平素意中の土産品とか、頼まれものなどは、手控へにしておき船中、車中思ひ出したときその度に書き加へ、そして北平なり、上海なり、又漢口なり、大きい街についた時、機敏にうまく手蔓を得て、到着した第一日に、翡翠なり、緞子なり、燒物なり、戲畫なり、そのよい加減の程度を示して、集めておいてもらふか、それとも夜おそく、或は朝早く、宿屋まで支那商人直接持參させるやう手配をしてもらふかすることである。しかしそのとき、いくら澤山持込まれても、氣に入るものがなければ、更に又翌晩までに別のものを持つて來させるなりして、その時に値段の取りきめをすればよい。かねの方は、少しも急ぐことはいらない。又氣兼ねするの必要もない。もし都合で買ひとらないで返す時には、酒錢の二十錢か五十錢迄を限度にして、心づけしてやれば、それで滿足して歸る。でもしかし、なるべく始めて見當をつけたゞけの品物は、兎も角自分で見て、友人と相談をし、その場その場で取りきめて行くやうにした方が片がつく。つい一日延ばしに延ばしてゐると、屹度翌日は止むを得ず夜が更けてから歸つたり、或はそのうち出立となつたりして、つい土産物のことなど失念してしまふことになる。

○

土産物漁りをするとき、もし城内のその場所へ出かけ、軒並みを訪ねて巡る時間でもあつたとしたならば、長く滯在の出來ない旅の時は、なるべくその場その場で、大抵の處で要領よく話をとりきめ、美術品、文房具、身の廻りもの、何れにしても、兎も角その日にきめてしまふ方がよい。ついその時話が纒らず、何れ又他の店に行つて捜さうなどいつてゐると、結局どの店でも買はないでしまふことが多い。殊に歸りに立寄るなどいつてゐると、大抵歸りは夜分になつたり、他へ食事に出かける話が出たりして、自分一人別に一行から離れてわざ〳〵件の店へ立寄るなどといふことは、事實不可能な

ことになつてしまふ。

時としては、自分自身は意中に頼まれてゐることが氣になつてゐたり、この邊の品が適當だと思つて買ひとることを決心してゐても、もし連れの友人から、

『この種の品物ならまだ先きの店にもあるよ。』

などいはれたのが緣の切れ目となり、遂に全くその買ひ入れの機會をはづしたりして、空しく歸朝の途にのぼることすら少くない。

○

支那の旅の土産物の値打は、品物そのものゝ姿や、色彩のことよりも、その場所その場所で、氣分でこれを買ひ集めて行くといふ事務方面の事に、最も重きを置かなければならない。いつも念頭において、例へば北平に行つたら翡翠を、蘇州に這入つたなら緞子を、廣東に行けば蛇酒をといふ風に、必ずその地特有のものを思ひ出すことを忘れないやうにすることが肝腎である。しかし玩具の類とか、又扇、麻雀といつた一般的の土産物ならば、勸工場とか、夫れ〴〵の小賣店に、通りがゝりによつても澤山である。

○

支那全體を通じて、土産物として最も價値のあるものは、その品物よりも、時代のにほひのするものを買ふこと、又その土地の風物香氣を買ひ求めることにある。それ故、時代のなるべく經過してゐる古玩品、骨董は元より、書畫の如き、古瓦古硯の如き、又高尙なものでは、古銅器、石佛などを買ひ求めることが、最も土産品として望ましい。又それが高尙でもあり、支那氣分が豐かに現はれてもゐるのである。もしさもなくば、これらの古物に緣の近い筆墨紙の類が望ましい。或は香氣を愛するために、蘭花の如き、又銘茶の如きものも望ましい。其の他風味の高い菓子類、棗、その他の糖果なども相應しい。元より餘り高尙なものは、土産物として相手にもよることであるが、費用の點もあり、稅關の關係もあり、中々面倒な問題になるのである。

○

そこで一般に支那の旅の手土産として考へられてゐるものは、大體左の如き範圍のものである。

先づ織物類では、緞子、繻子、支那縮緬の類である。緞子の帶地は、その色、その柄、その地質に、夫れ〴〵よることであるが、北平では清朝時代の質のよい古典的なものが、まだ〳〵かなり殘つてゐて、南方江蘇、浙江あたりから來た新しい品物よりも、遙かに落著きもあり、品がよく、又手丈夫に出來てゐるので、良家の家庭では最も喜ばれる。尙大官や舊家から出た品物を取扱つてゐる老舖が前

門外の表通りから裏手に廻つた所に、づらりと軒を並べ、何れも奥深く、如何なる種類のものも持合せてゐる。しかしその價は高い。暇にあかせて漁つてゐれば、日本座敷の座蒲團用などには、その色といひ、織り方といひ、最も高尚なものである。唯今日の時勢から見て、いくらか重つくるしく、古典的過ぎる嫌ひはまぬかれない。繻子、縮緬にしても、古いものは何れも然りである。紫紺の大巾物で、座蒲團向きの古い緞子は、北平土産として最もよいものゝ一つであらう。しかし新しい緞裰類は、何んといつても蘇州、杭州が織元であるから、その本場で、少なくとも二三匹宛買ひとるくらゐは面白い。殊に蘇州は、上海で求めるよりも二三割安い。

○

上海であれば、大綸、老九章、老九綸を始め、大規模の呉服店がいくつもあつて、それらは何れも三越、白木屋、高島屋、松坂屋といつた類の老舗で、樓上樓下、凡て賈客の望むがまゝの仕入れ品が、充分に用意されてゐる。殊に近來は、何れも日本語の出來る店員を數名づゝ賣場に侍らせて、日本からの觀光客が店に來るのを見るや、すぐさま愛想をつくつて、

『お求めの品は男物でせうか。』

とか、

『娘さんはお幾つ位なのでせう。』

などと、愛嬌を振り蒔きながら、すばやく棚から十八娘に向く大巾の帶地など、幾巻きも抱へて持つてくる。そして日本の鯨尺まで取り出して寸尺を當たるのである。支那縮緬ならば、袖丈何尺、長襦袢ならば、これ〳〵といつた風に、日本の婚禮用の衣裳の仕立まで、凡て呑み込んで、單に呉服物の商ひばかりでなく、仕立て終るまでの全部を引受けて、客を反らせないやうに努める。お茶を出し、日本の三井銀行から誰れそれさんがとか、正金の支店長さんがとか、懐しい話までする。色のあまりさらされない太糸のへこ帶にするものや、或は絹紬や、蒲團の裏地などに適當なものなどでも、いふがまゝに取揃へて賣場に持つてくる。だん〳〵と顔馴染になればなる程色々な點に便利をはかり、相當我儘も聞いてくれる。自分共には、支那服の仕立直しなど、近來は殆んど無料でやつてくれるといふ、打くつろいだ親しみを見せてゐる店もある。

○

尚翡翠の帶止め、簪類、その他玉類の彫刻、置物、陶磁器などの類から、掛物扁額などは、上海ならば租界の大馬路、五馬路あたりに、手頃の土産品を陳列した店が多い。

絨氈は、北平、天津に、その羊毛の多い關係から、比較的安く製造してゐるうちを見る。しかし近

來は、亞米利加、日本への輸出の多い關係上、上海にその工場を持てる店も少くない。最近その圖案、色彩などの珍らしい奇拔なものが、次第に南方にも多く陳列されるに至つた。中にも長城を示したもの、又長江の戎克を表現した面白いものは興が深い。尙絨氈の土産には、その關稅の點を考慮に入れて、目方をよく調べて置かないと、十割稅で目の飛び出す程やられることがある。注意すべきことである。

尙古書、拓本、金石の類は、奥地の旅をしてゐる時にも、たまに珍らしいものに接することがあるが、近頃は大體都會地に運び出されてゐるので、その路々に手廻しよく依頼してさへおけば、搜して宿へ持込んでもくれる。けれ共この種の土産物は、中々急ぎ手間には行かない。度々出かけて行くうちに、幾年かの後、漸く快心のものに出くわせばよいといふ位の、呑ん氣な氣持でやらなければならぬ。支那土産で、近來やゝ下火になつてはゐるが、麻雀の道具は、上海では城内に行つて直接にとれば、割に安く求められる。又その紫檀の箱にも、かなり豐かなものが添へられてゐる。これ亦日本の港の關稅をよく考へて置かねばならぬ。

食べ物では、點心類、月餅、雲片糕、砂糖漬、棗、龍眼肉、荔枝などが、殊に日本人には喜ばれてゐる。

○

かやうな支那土産の品物は、その人々によつて、好みも異なるであらうが、この所當分銀相場がかなり下つてゐるので、旅費と共に土産物の買物には、惠まれてゐる譯である。

かういつた機會に、支那の旅に一等適切な記念物として、自分の體に合つた支那服を、夏は夏なりに、冬は冬なりに、仕立てさせて、支那帽子、支那靴、すべて取揃へさせ、日本の港に民國人の姿して歸朝し、水上警察の査公をして、一寸面喰はせて見るのも、輕い意味に於いての興味ある惡戯である。又日支兩國人の衣服からする親善の增進法にもなり、いかにも望ましいことであると思ふ。着心地のよいこの支那服の土産は、家庭にあつても夏は涼しく、冬は暖かで、洋服の如くぎこちないやうな感じは少しもない。自分が平素着用してゐるから、云ふ譯ではないが、特に支那旅行者の好記念物として誰れ人も思ひ出の種に、これをお勸めしておきたいのである。

その二五　送金方法

支那の旅に出かける者の、頭を惱ませる問題の一つはいふ迄もなく、旅費の携帶方法と、その送金の方法である。

旅費の携帶は、無論その程度にもよることであるし、歩く地方にもよることであるが、しかし大體はなるべく、之を身につけないことを原則にすべきである。別段大陸を以つて、泥棒ばかりゐる所だと考へる必要もないが、しかし旅先きでは、一切金を人目にふれないやうにしてゐること、金のありかを悟られないやうにしてゐること、これが肝腎である。支那ではかねのあり場所を人に知らせる位、不安を導くことはない。

○

支那の金は銀貨にしても、日本の明治時代の一圓銀貨のやうに馬鹿に大きく、從つてその目方も相當にある。嘗つて内地の片田舍に這入る時、一圓銀貨二百枚を、底のない腹卷に入れて卷き、その上に普通の支那服を着て、夏の炎天を歩いたことがある。何しろ一圓二百枚といへば相當な重みである。數日間歩いてゐるうちに、左右の骨盤が痛くなり時折り人目を憚つては兩手で腹の金を抱へ、腰の疲れを東の間でも休めるといつた風で、人知れぬ苦勞をしたこともある。その時ばかりは、なるべく毎日澤山支拂ひがあつて、金がどん〳〵減ればよいと思つた位である。百枚に減つてもまだ重い。小男の體の中心がとれないで、歩きぶりも變だつたであらう。その中に、朝の旅立ちなどには、銀貨のつめたさに腹の加減までも惡くなつたりした。胃腸の弱い人ならば、確かに腹下しでもやつたことだらうと思はれる。さればといつて、一圓銀貨を二百枚の大札にして持つて行つたのでは、第一ポケットが、夏服の場合には膨れあがつて仕樣がない。これは第一危險を呼ぶことになる。のみならず行つた先き〳〵で、その札が通用しなくなる恐れがある。通らなければ困つてしまふ。並み大抵の苦心ではなかつた。

○

又嘗つて、杭州の城内へ行つた時のことである。上海の或る砂糖問屋の手を經て、五百金の金を、杭州の山貨店に爲替を組んでもらつたのを受取る際、最初店主の注意はあつたけれども、自分は先づ大事をとつて、一圓銀貨ばかりにしてもらつた。所が大洋銀貨五百枚と云ふと大變で、無論ポケットには嵩が大きくて入らない。片手で提げるわけにも參らぬ。何にしても、隨分持ちごたへがする。さ

らばといつて、他に何等荷物がなくて、唯これればかりを手で持つて人力にでも乘らうものなら、すぐ悪徒から目をつけられるにきまつてゐる。止むなく三百枚だけを札に、殘りを銀貨にしてもらひ、無事に上馬市街（シャンマシイチエ）の宿まで歸りついた事がある。

かういふ譯であるから、片田舍に送金をするにしても、そのかねが必要以上な額を越えてゐる場合には、徒らに金のために苦心をさせらるゝばかりで、全くつまらない惱みをふやすに過ぎぬ。それ故支那内地を奥深く旅する時は、最少限度のかねを身につけ、大して目立たない程度にしてゐると云ふ考を、いつも持つてゐることが肝腎である。

○

送金法そのものは、田舍だつてさまで厄介なものではない。支那人間相互の信用と云ふものは、絶對的のものであるから、その點の心配は無論ない。もし行先地が、日本人のゐる場所であり、北平、漢口、天津、奉天、上海、廣東、などの大都會であれば、正金銀行の信用狀が、きくのであるから、之によるのを最も便利とする。又日清汽船の支店、出張所、代理店のある所は、その間で送金の受授も出來る。若し船の碇泊中だけを利用して、その附近を遊歷するのであるならば、船長室の金庫にちやんと預けて置くのも亦一策である。殺りに騙うた仕拂ひをするにしても、船で受授が出來るから、安心なものである。

○

日本から南北支那各地、或は滿洲各地に送金する場合は、多くは銀行關係をたよるに越したことはない。唯支那の奥地深く、日本人の取引關係のない地方へ、買物その他で送金をする必要の起つた場合には、先方の信用する取引先きで、上海なり、漢口なり、長沙なり、その便利のよい所の老舖へ送金するか、又はその老舖に關係のある日本人の手元へ送金するかの外、道はない。

しかし支那人は、二年でも三年でも打捨てゝ置くことがあり、長く途切れてゐても、日本人のやうにやん〳〵いはない。貸した金なども、三年と七八ケ月も經つて、飄然返して來ることがある。その邊は支那の國狀から見て、自ら理解せられることであるから、個人關係のことは、悠久な氣持から、のんびりとやつて少しもかまはない。その點に却つて學ぶべきものがあると思ふ。

その二六　言葉

支那人同士が喧嘩をする時は、その地方を異にしてゐる者の間では、一向に意味が通じないので、可笑しい場面を見ることがある。時折り船から上陸した遠來の客が、その土地の車屋といがみ合つてゐるのを見ても、どちらも言葉が解らんので、唯肩を張り、腕をまくり、目を怒らし大聲で何かいつてゐるが、結局要領を得ないので、益々いがみあつてゐるといふ有樣である。「さすがに大陸だなあ」と拙らぬ所へ迄も感心して見る氣になる。

○

曾て上海の碼頭で、そんな喧嘩を見たことがあつた。よく聞いて見ると、客の老婆は、河南の洛陽の田舍からはる〴〵南下し、更に長江を船で下つて、上海の十六舖（ヒロプ）に大荷物を抱へて上がるなり、行先きの地名を黄包車に告げて、いきなり車に乘つてしまつた。車は走り出した。しかし車夫には、河南語で告げられた行先地は、その實解つてゐなかつたのである。暫く行くと、車賃の割增をねだり始めた。車夫にとつては、行先地のことよりも、その方が目的であつたのである。所がよい鴨がかゝつたと思つた車夫の方にも、大きな誤算があつた。割增をねだるその車夫の上海語が、河南の老婆には解らなかつたのである。

『下りろ。』と上海語でいふ。

『行け。』と車上から河南語でいふ。

すつたもんだの所へ、巡補がやつて來る。巡補も亦浙江人で河南語が解らない。いがみ合ひも長びく筈である。結局河南語に通じた巡補をさがしあてた上、互ひに呑ん氣に口論を續けてゐるのであつた。しかし客の老婆は一克ものと見えて、仲々下りようとしない。支那人同志のことであるから、解らぬながらも熱烈につゞけてゐるので、黒山の如く人が集り、たいした光景を見せてゐた。

○

かやうな風で、雜沓を極めてゐる船着場あたりの支那方言は、大變複雜してゐて、殆んど互ひに理解出來ない。話振りといひ、アクセントの相違といひ、單語の違ひといひ、唯發音を聞いてゐるだけでは、全く南蠻缺舌そのものである。

平上去入の四聲にしても、廣東には九聲もあり、福建には七聲の別があり、中部支那は五聲があり、北支那は四聲（上平、下平、上、去）がある。麻子（あばた）の麻（マー）と、馬桶（マートン）、馬車の馬（マー）とは、大變な

違ひで、馬の方は上聲で長く、マーアとカーヴを描いた如き長音でなくてはならない。かういつた細かい違ひが、一語の上に於ても、一音の上に於ても存在してゐる。和尚は、北方では「ホーシヤン」と發音するに對して、河南地方では「ウザン」といふ。大和尚と面と向つて云ふときも、「ターウザン」と呼びかけてゐる。これは北平あたりでは、一寸通じない言葉である。

その他文章語の上に於ても、夫々現はし方の地方的に相違してゐるものが多い爲めに、一つの纏つた話をする時、上海語で語つて見ても、福州人には解らず、福州語は厦門語に一致せず、汕頭（スワトウ）、廣東は又互ひに別個の方言を呈してゐる。厦門の言葉で「タンキヤ」といふのは、北平の「トンチン」に當り、之が東京のことをいふのであることが判ると、厦門のタンキヤは甚だ變に感ぜられる。

○

かやうな違ひ方であるので、細かく之を比較してくれば來る程、言語學的には立派な脈絡が存してゐることは判るが、話し言葉としては、全く露西亞語と佛蘭西語、又は英、獨、などの間の違ひ位に違つてゐるとも云へる。

かやうな支那一國内の方言的相違の存することは、支那の旅を、一地方から他の地方へ試みんとするものにとつて、大變な不便を感ぜしめる。從つて始めてのものは、上海に行つては上海の通譯が必要であり。廣東に行つては又廣東の通譯を、是非共必要とすることになる。民國は今日尚、言語の統一がないために、各省の代表が南京に集つて來ても、方言を出されると、折角の演說が聽衆一般に通ぜず、變な結果を見せてゐる。されば東京に來てゐる廣東の青年と、北平の青年とが爭ひをする時には、兩方で止むなく日本語を用ひたり、英語を挿んだりしてやつてゐる。全く支那の旅に惱まされるのは、この言葉の上の方言的相違の多いことである。唯言葉の裡面に流るゝ支那民情の大きな雰圍氣ばかりは、宛ら料理や支那服の一致せるものと同じく、これを同樣に取扱つて、一向差支へない。その間の人情の機微に觸れ、その心の暖かさで、旅から旅へと動くならば、何んら差し障りはないのである。

その二七　パーミツト

支那の旅行中に、集め得た品物を全部荷造りして、港から送り出さうといふ時は、たとへそれが手廻りの土産品であつたにしても、相當嵩張つてゐる物であると、その船に積込む前に、稅關の役人から許可證を得て置くの必要がある。

近來支那の品物を海外へ出すことは、一面からいへば、輸出奬勵になる譯であるにも拘らず、支那の方では財源を得るためでもあらう、積出しの荷物に對して、かなり嚴重な調べを行ふ。若しそれと知らないで、荷造りの出來た品物を、だまつて船中の客室や、或はバゲーヂ・ルーム（荷物部屋）にでも運び込んでゐようものなら、出帆間際になつて、その係りの役人が目を光らかしてやつて來る。蛇（ダヤ）の道はへびで、實によく嗅ぎつけるものである。

○

支那の旅を無事になしをへ、荷造りや船の積込み一切を、何心なく個數だけを改めて、凡てを宿屋任せに依托する者が多い。宿の方でも、別に惡意のあらう筈はなく、これを碼頭に持つて行き、船の

セケン・シチヨウ（司厨次席）にすつかり渡して受取りの名刺までも貰らつて來る。

上海の威塞（ウエイサイ）土碼頭（タウ）で、連絡船や、或は歐洲船や亞米利加航路の大船などへは、いつもかうした方法で、荷物が持込まれてゐる。これには絨氈の大卷があり、紫檀の机、椅子があり、緞子の荷物があり、その他紫檀箱の中に立派な古銅器が納められてゐたり、又長い包みもの〻中に、吳昌碩だの、董其昌だの〻、名前だけにしても素晴らしいものが秘藏せられてゐる。吳昌碩にしても、江南地方には、既に贋せが十六人もあつて、大抵はいかものであると相場はきめられてゐる。けれ共、それは專門家の目で見別けがつくだけであつて、一般の人には少しも解らない。かうした荷物の持ち主は、支那の旅の思ひ出にと、思ふ存分の買ひ物をし、凡て船に積込まれたものとして安心をし、キヤビンに、又デツキに、或は社交室にと、見送りの紳士連や、又紅裙連に取卷かれて、シヤンペンを抜く音も賑かに眺められてゐるのである。

○

所が、さうした華やかな場面へ、殺風景にも呼び出しが來る。目を光らした役人は、パーミツト（許可證）を見せろといふ。その書類の手續きが出來てゐないばかりに、ひどく罰金をとられたり、品物を沒收されたりする。

所が、最も悪い場合には、荷物の持ち主の乘込まない間にやつて來て、そのパーミツトをとつて居ないことを確かめ、そのまゝ税關の方へ船から運び出されてゐるやうなことすらもある。何も知らない始めての船客は、バゲーヂ・ルームに這入つてゐるものとのみ思ひ込み、知らぬが佛で、盛んにデツキの手摺りに體を斜にして、ハンケチを振つたり、五色のテープを引つぱつたり、丸で浮れ氣分で陸の見送りの姿も、靄のうちにかゝるまで呼び囃ぎ、目出度い離別の光景を見せてゐる。

その先生は、船がいざ吳淞（ウースン）を出で、沖遠くベルヴイの赤船のあたりまで出た頃、ふと荷物のことに氣づき、そろ〳〵個數を調べんとて、荷物部屋へと下つて見る。すると案外の事にも、肝腎の絨氈の大巻や、紫檀の大机など、どれも這入つてゐない。それと氣がついて見ると、俄かに胸騒ぎがし出して、早速ボートデツキに上り、無線電信局へと駈けつけ、上海の宿屋宛、打電するの騒ぎを巻き起すのである。

宿屋の方では、宿引が一切之を引受けてやつてゐた關係上、宿屋に全責任がある。しかし手落ちの程は一向預り知らない。税關では「手續きのしてない不法の荷物は、積出させる譯に行かない。」といつた法理論一點張りで、沒收同樣な仕打ちに出てゐるのである。

○

時には寶石類、その他の貴重品の荷物をまで、パーミツトがないばかりに、幾十倍の罰金を吹きかけ、ひどくしぼられた實例さへもよく聞かされてゐる。かうした手落ちから來る失策は、宿屋の方でも注意怠りないであらうが、ツイ面倒臭く思はれるのと、一つには、又あはよくばその役人の目を遁れることもあつたりするので、氣はついてゐながらも、客から相談があつても、

『まあ大抵大丈夫ですよ。』

などといつて客を喜ばせ、又その言葉をはばむ。そのときさも親切げに云つてくれるのは、却つて後で氣まづい思ひをさせられる原因ともなり、それがために、その宿屋に對する信用も毫なしになつてしまふことすらある。

虹口方面には、所謂通關屋と稱するパーミツト專門の家も色々あるのであるから、やゝ嵩張つた荷物を持込む歸朝客は、少々のことをなまけないで、矢張り明らさまに仕拂ふものは仕拂ひ、その手續をすませてから積込むことにした方が安心である。

○

民國二十年の五月一日からは、殊に税關の方でもひどく、その方面の係員をふやし、正服をつけた若い役人共が、文字通りに目を光らして、出帆旗を掲げてゐる大船を見るや、どや〳〵木戸口御免で

怒鳴り込んで來る。鵜の目、鷹の目で、役人の目にはどうせ引掛からないでは居れない。たまに要領のよいものは、巧みにトリックをやつて、手柄話などしてゐる者もあるが、餘りほめた話ではない。殊に團體旅行の際など、そのうちの一員が不面目でもやると、全體の顏にもかゝる譯であるから、こゝに一應の注意をしておく次第である。

○

支那の買物は、之に稅を拂つて船に持込むなどといふ事は、始めから豫想だもしてゐないことである。これは日本の習慣とは、全然違つてゐることで、こんなうるさい手續きがいるなどとは、特に注意されなければ、知らないのは當然である。しかし、昨今の如き銀相場の安い關係を思ふときは、この邊の面倒も多少我慢をせざるを得ない。

上に述べたのは、表面から見たパーミットに就ての問題である。しかし又、その方面の專門家の話によると、幾ら大きい手廻りでも、その方法次第では、底には又底があつて、しかるべく要領のよい所をやつてくれる抜け路も、かなりあるとのことであるが、こゝにはあまり立ち入つて、その裏の話まで觸れることは、差し控へて置きたいと思ふ。

○

元來このパーミットの件は、パーミットそのものが難しいのではなく、又その仕拂ひが高くかゝるといふ譯でもなく、これでまごつくのは、多く旅馴れない人に限つてゐると云ひたい。といふのは、出發間際ぎり〳〵になつて、やれ絨毯の、やれ紫檀の机のといひ出して、人にも厄介をかけ、自分も心あわたゞしい思ひをしてさわぐ。上海なり北平なりに始めついた時、すぐその買物に取りかゝつてさへ置けば、絨毯も柄のよい、又思つたゞけの坪數のものも得られたのである。机にしても、彫刻のある上物が、さがし求められ、おまけに念のため蘇州磨きの一つもかけて、念入りに監督させつゝ、荷造りも出來た譯である。

所がそこが、旅馴れない人は、手順を誤り、出發間際まで呑氣に構へ、乘る船がきまつた頃から、そろ〳〵買物にあわて出し、ろくすつぽよい物を見て廻ることも出來ず、高い金を拂ひ乍ら、不滿足な品物で我慢をしなければならなくなる。況んや之を美しく磨かせるなどのゆとりもなく、向ふ任せに見かけだけの荷造りをさせたのだあるから、不安の念の絶えないのは寧ろ當然である。惡くすると城内の店で荷造りをしたまゝ、宿を經ないで直接出帆間際に、船のゐる碼頭へ、支那苦力に運ばせ、やつと時間に間に合ひ、積込むだけが勢一杯といふやうなこともある。それで間に合つたといつて、旅客は喜んでゐるのであるが、こゝに大事なパーミットを取り得なかつたといふ一大失策が伏在して

ねることに、氣がつかないでねる者が多い。

○

若しも應接室の八仙卓、十景椅子、茶几、書卷卓など、紫檀細工の一組を取揃へて、支那の旅の好記念物にしようと思ひつき、全部これをからだと一緒に船で持ち歸らうと思ふ場合は、餘程前から、ちやんと品物の選擇、荷造りの完了、碼頭へまでの運搬などすませておかなければならない。出來ればその運搬と同時に、パーミツトの方もすませて、いつ何時でも船の荷役の都合のよい時、バゲーヂ・ルームの置き場所なども、よくその係りの專門家に任せてやつてもらふだけのゆとりを持つたがよい。隨分大物であると、船の起重機でハツチの中へ下ろしこむ方法がとられ——隨分積荷の係員が、他の積荷と共に苦心するところである。所が天氣の都合が思はしくなかつたり、小雨が大雨となつて、遂に折角の品の積込みが、止むなく延期せられたりなど、仲々豫定通りには行かないのが普通である。それ故ひとりパーミツトといはず、船の積込みそのことが、大荷物であればある程、厄介なことになるのである。

手廻り程度のものであるならば、成るたけ船の室内へ持込んだ方が、船の日本へ入港した時、手近に取扱はれて、大騷ぎをしないで濟む。尙又個數は、細かく澤山ばら〳〵にして置くのはよろしくない。壞れもの以外のものは苦だ感心しない。なるべく頑丈に、そして積重ねられても心配のないだけの荷造りを肝腎とする。特に紫檀の彫刻などは破損の心配のないやう、念には念を入れて荷造りすることが肝腎である。

その二八　稅關

支那旅行の結尾は、頭に南船北馬の好印象、長途の旅の疲勞、各方面の思ひ出、珍らしい土産品などをもつて、日本の港に目出度く歸りつく事である。それで首尾よく支那の旅は終はる譯であるが、こゝに一つ最後の出來事として旅客の頭を惱ますものは、稅關そのものである。

○

歸朝の船の中に於ても、話題として歡迎せられるものは、エログロの事か、この稅關の話で、殊に稅關の實際問題についての談柄は、少しく旅馴た人は、何れも體驗を有することであるから、座中の誰れかゞ口を切ると、待つてゐたとばかりに、次ぎから次ぎへと銘々に珍談を持ち出して來る。

長崎丸、上海丸等の連絡船は、長崎に上陸する前、稅關吏が上海から乘込んでゐるので、長崎上陸の客に限り、船中でそつくり檢査を濟ませてくれる。

『一等客は尙のことですが、三等客の方も大變手柔かで、樂に見てもらはれますよ。』

などゝいひ出す者があるかと思ふと、又他の一人は、

『神戸上陸の客にも、同樣のサーヴイスがなくては不公平だよ。』

などと意氣込む。

すると又他の客は、

『だつてあれは長崎の港が次第にさびれて行くので、それを防止するために上陸客を吸收する魂膽から、特に稅關の方でも加減してゐるんだよ。』

などといふ。すると又一人がそれを雜ぜ返して、

『それにしたつて船から上るなり、客はすぐ港内の汽車の引込線で、北上してしまひ、長崎の宿屋や店は、何んら潤ひがないといふぢやないか。』

などと、稅關の話から、四方山話に花が咲く。しかし長崎の稅關吏の手加減は、他の港のそれよりも思ひやりがあるといふことだけは、一般の認めてゐる所である。

○

總體に日本の港では、支那から歸りついた客は誰しも、關稅の問題で神經過敏になつてゐる。無論これはあるまじき輩などを忍ばせてゐる年の若い旅客や、不良の半白の手合はこの限りでないが、普通當り前の手廻りを持つて歸朝して來た先生達にしても、支那の港を出るなり、すぐ稅關のことばか

り氣にしてゐる。又北支那では、天津航路の景山、南嶺、北嶺、その他長安、長城、長江などの近海郵船や大阪商船の船に、又青島航路の原田汽船や郵船あたりの、定期船にしても、門司の稅關、又神戸の稅關を毛虫の如く恐れてゐる。その他、南方香港から歸る歐洲船や、又亞米利加航路の船客あたりでも、相當これを氣に病み、中には橫濱の稅關が、割りに譯が解つてゐるなどいふ噂もあつて、これに共鳴する者もある。

○

先年新渡戸稻造博士が、聯盟から諏訪丸で歸朝され、神戸に入港された時のことである。ジュネーブの公文書類で、政府宛の紙包みを數多鞄にをさめて持つて上がられた。所が年若い係りの稅關吏は、その鞄をまで調べようとするのである。

『これは私が外務省宛の荷物として、聯盟から預つて歸つたものですから、さう一々檢査を經るにも及ばないものですが。』

と、博士はその樂瑣をさけるやうに話されたのであつたが、役人はいつかな聞かうとしない。

『見る見ないは私の職權ですから。』

と極つき、几帳面に封の下されてあつた書類の包みを、指を突込んではぐり〳〵破り、中味が讀めるのか讀めないのか知らないが、盛んに頁をばら〳〵と繰つて見たりなどして、如何にも赤い書籍の密輸でもしてゐるかの如き思はせ振りをするのである。流石に練れた老博士も、これにはあきれ返られ憮然と、

『私は別人ではありません。ニトベイナゾウですよ。』

と意味深長に話されたのだが、意地になつた役人は、「職權ですから」の一點張りで、尚も得意氣にばり〳〵破るのである。誠にその時の光景は側に居る者も、皆見兼ねた程であつた。

この話は事簡單なやうであるが、その役人は如何に國際的に非紳士的態度をとつたか。職權は職權でもあらう、法律は法律でもあらう。しかし間違ひのない國際的のお使ひをしてゐる老博士の言葉が、全然受入れられないで、かういつた殺風景は一場面をさらけ出したのは、側で見てゐた外人に對しても、きまりが惡いやら憤慨やらで、誠にお氣の毒に思はれたのであつた。爾來博士は、

『外人が日本へ入港する時の稅關吏の取扱ひ振りなどについて、とかく面白からぬ批評を聞かされるのも、誠に道理至極だ。』

といつて、語り會ふ毎にその點に觸れられるのである。

○

しかし又、税關吏の立場から、各港みなとの實際談を聞いて見ると、良家の奥さまともあらう者が、上海からの歸りに、しこたま緞子の帶地を荷物に入れてゐるにも拘らず、又別に丸帶を俄か仕立に、雄ん針雌ん針で輕くとめ、これを何食はぬ顔して結んでゐたといふ話もある。こんなのは、帶をとかされ、結局一人分としての持ち料の制限外だけの料金を請求される譯である。

又或る歳の冬、船で横濱に入港して來た中華民國のハイカラ紳士が、ラツコの皮毛の立派な裏のついた外套を着込み、金緣の眼鏡を輝かせ乍ら、荷物の檢査を受けた。荷物も荷物であるが、それよりも第一ラツコ裏の外套が、如何にも變に重たげに見えたので、それとなく係り員は觸れて見たさうである。すると驚いたことには、一枚宛はがれてゐるその毛皮の裏に、根氣よくも一々ウオルサムの金時計をかゞりつけてゐたのである。その數は驚く勿れ三千個近くもあり、一個平均五十圓と見ても、十五萬圓からのものを、忍ばせてゐたのである。これは勿論全部沒收されてしまつた。それだけの罰金でも、大變なものであつたといふ珍談がある。

又いつぞや、亞米利加の副領事をしてゐた某民國紳士夫妻が、二萬五千弗とかの價格に該當する阿片を、N・Y・Kの船で桑港に持ち上がらうとした所を、あちらの稅關におさへられ、遂に夫婦は說明が出來なくなつて、結局米官憲から罪に問はれ、夫妻は大恥を晒して、再び支那本國へ召換せられたといふ話もある。支那の役所でも、之をよい加減にして置かれなくなつて、法廷に召喚したと云ふ話の一とくさりは、新聞紙上で既に皆周知の事である。

○

又安東縣の稅關邊りでは、鐵路滿洲歸りの客が、奉天や北平、天津あたりで、苦心慘憺して手に入れた珍らしい風俗寫眞や、繪卷物などを、鞄の奥にしのばせてゐたり、又衣裳の間にはさんでゐたりしてゐるのが、どうかすると二三等客の手荷物の中から發見されたりする。しかし流石に一等客の荷物は、さうまで細かく手を差入れたりなどしないけれ共、見つかつたものは、無論卽坐に沒收である。それはその汽車の發した後、すぐ火をつけて燒失してしまふといふ事に噂されてゐるが、事實はどうかよく知らない。そのため歸りは近來なるべく奉天仕立の快車（急行列車）を選び、安東驛停車の時間の一番短いのを選び、檢査のこみあつてゐるどさくさ紛れに、見逃してもらへさうな僥倖を賴んでゐる不良客もある。

安東の諜は、人も知る如く稅關の調べが地下室で、そこへ持ち下りて、一々受ける事になつてゐる。さなきだに急行客の混雜を見る驛であるから、大抵の鞄はいきなり人品を見て、滿洲官吏がこれをよい加減にサインをしてゐる。しかし時たま運の惡い人は、矢張りひつかゝつて品物を擧げられ、燒か

れる方の組に入れられてゐるのもある。

○

支那の歸りは、よく船の樣子に馴れてゐる人であると、その人の鄕里が鹿兒島であるとすると、一二ヶ月に一回、上海から出る九州南巡りの荷物船などに品物を托し、心安い間柄のこととて、その邊御手柔かにパスしてゐると云つたものもある。

又遣り方次第では、或は四日市に、或は淸水の港にといつた風で、どこへでも着く船を選ぶ。必ずしも氣難かしい神戸の港に陸上げしなくても、よい方法はいくらでもある。殊に海軍の諸君あたりは、軍艦で紫檀の大机など、素晴しいものを自家用として持ち歸るものもあるとの事である。これも近來その筋で見張りの係員が出來て、次第にうまいことをさせないやうに段々手が屆き、昨今支那の銀相場がいくらか安くなり、買物に都合はよくなつても、港内の嚴しさに、それは漸次なくなつて來つゝある。

○

稅關吏に對する旅客の最も心得べき點は、各港内にゐる檢査係の氣持感情を、損はないやう氣を配ることである。別段腰を曲げて、へつらふにも及ばないが、しかし餘りつんとした横柄な態度でゐることはよくない。

嘗て子持ちの三等客の女が、上海から歸つて來て、或る港で信玄袋の檢査を受けた。その時、そのうちの一つに役人が手を觸れ、紐を解きなさいといつた。すると女は、

『これはあなた達の御覽になるものではありませぬ。』

と突つ放した「見るのだからあけなさい」ときつく出た。止むなく女は、その係員の紐を解いて見るがまゝに任せた。若い役人は、ぐつと中へ手を差入れた。所が、これは驚いたことに、五本の指といふ指に、黄色い卵の花散らしが一杯ついたので、先生怒る譯にも行かず、口惜しがつて變な顔をしてゐた。そこでその客は、

『だから云はないことではないのですよ。』

とそれ見よがしの顔付きをしてゐた。これなどは、他の包みに若し相當な金目なものがあつたら、無論必ず小氣味よく絞られる所であつただらう。

○

麻雀を持ち歸る者は必ずその牌の象牙の厚さ、程度如何によつて、或は十圓、或は十五圓、二十圓と、稅率も同一でない。その稅の外に三圓の切手料が、確實に課せられることは云ふまでもない。殊

に外箱の紫檀の箱の金具が、立派であつたり、蘇州みがきの艶のよく出てゐる高級品なんかであつたりすると、從つてその料金もお安くない。若し眞にその稅率を少くしようとするには、箱も引出しも全部求めないやうにして、唯の雜木の出來合箱に牌だけを入れて持歸るの外ない。かういつた買方をする人も隨分あるらしい。

若し又手土產などのうちに、麻雀を一箱二箱入れて歸る場合には、必ず先づ自分から進んでこれを明記して、申告すべきである。さうでなくて調べられた揚句、中からその箱が出て來たりなどするのは、甚だ紳士として顏が潰れるわけである。

○

稅關の申告書は、日本文と英文で印刷された、橫長い一尺大の紙で、これは船の入港前、必ず乘組から船客に交付されるに定つてゐる。若し交付されなかつたら、客自らこれを求むべきである。そして船の岸壁に橫づけされる前に、自分の所持する荷物を、全部明細に記入し、トランク、手提、鞄、袋物、籠類、その他の品目を示し、その內容殊に煙草、葉卷、酒、麻雀の類は、必ず數量を明記すべきである。曖昧な事は許されない。

○

葉卷は五十本、シガーは百本を限度とされてゐる。尤もこれは、船內では幾ら所持し、又幾ら喫んでもよろしい。若し餞別に、スリーキアスル或はウエストミンスター、其の他のエヂプト邊りの香煙を數多もらふことがあつても、上陸の際は右に述べた制限外をしのばせる時は、法律違反として、確か三十八倍とかの科料に處せられ、且つそのまゝ沒收されるのである。よく船客が、意地穢なく、親しくなつた客に賴んで、その客の煙草を持たないのを幸ひに、百本入りの箱を托したり、又五十本の葉卷の箱を托したりなどすることがある。托された客は、型の如く旅具檢查口でこれを差出し、通過許可のスタンプを捺してもらはんとする。その時人を見ることの馴れた役人は、いきなり窓口で、

『あなた煙草はのめますか。』

と一本參る。

『僕ののみ料です。』

と手輕く答へてしまへば何んでもないものを、そこが惡いことは出來ないもので、

『いやのめませんけれ共、つい知合ひ客から賴まれたものですから。』

などゝ口を滑べらせようものなら、

『のめない者が持つて上るのは法律違反ですから、沒收します。さもなければ、ひどい罰金がかゝる

がよいですか。』と手酷しい言葉を浴せかけられる。拔差しならなくなり、『それではどうか沒收してください。』

と窓口から役人にみす〳〵沒收せられるのを見ることがある。沒收した煙草は、各港内の稅關内部では、これをすべて燒捨てることに大藏省から達示があるといふことである。又若しそのスタンプの押してない密輸の煙草をくゆらし乍ら、連絡船で下關に渡り、特急で飛ばしてゐたりなどする時、列車内に稅關の廻し者が乘込んでゐて、「もし〳〵」と一言切込んで來る。意外な所でまんまとしつぽがつかまるといふ實際談は、これ亦屢々耳にするところである。

○

稅關の十割稅は、かなり旅客の頭を刺戟する問題であるが、銀器、陶磁器、彫刻、絹織物、骨董、古書畫、絨氈、紫檀物類、酒、藥酒類などが、重なものである。毛皮類、高級食料品、文房具類なども、亦相當高率である。唯しかし、凡て未成品の形で材料として取入るゝ分には、大してかゝらない。この邊の實際問題については、こゝに紹介することを避けて置く。唯どこまでも正當な規則面の料金だけは、國庫の收入を助長する意味に於て、心ある紳士は、當り前の事として正々堂々と仕拂つて頂きたいものである。

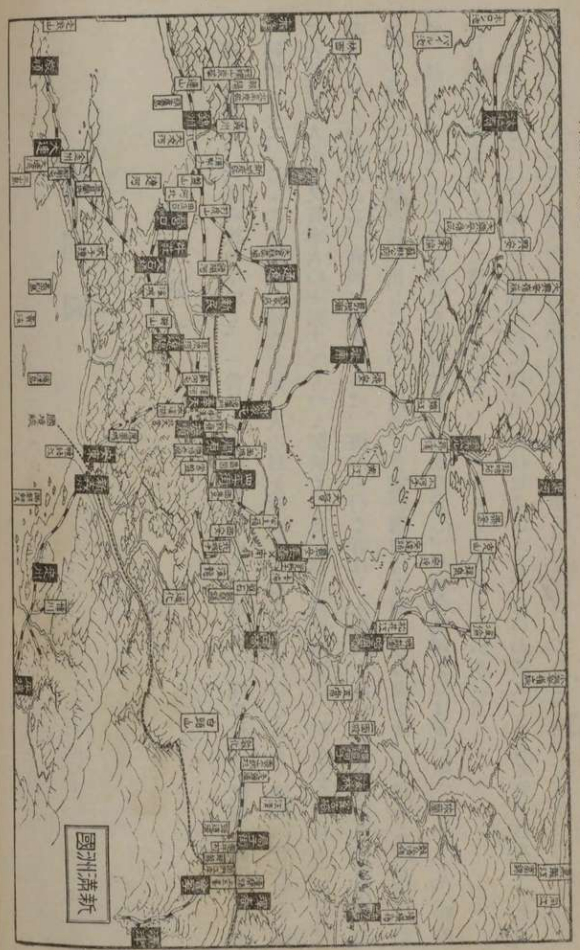
三　滿洲國旅行の行程

滿洲國

滿洲國へ

滿洲の旅は、大陸の旅の中でも、一番日本人に親しみのある地方で、殊に最近には例の滿洲事變を一轉機として、こゝに新國家の確立を見、人の目を牽いてゐることは非常である。滿鐵の背景を中軸に在留日本人や、又日本人の去來するもの〻影繁く、その爲め殊に南滿は、何んとなく日本の延長地帶でも歩くの感がある。滿洲に這入るには、海から行く者は、大連に上陸し、陸から這入る者は、鴨綠江を渡つて安東縣を振り出しに打つて出る。普通鮮滿旅行と稱する行き方は、下關から關釜連絡船で、釜山に着き、そこから數日を朝鮮半島の觀光に費し、平壤新義州までは夜汽車で行つても、鴨綠江ばかりは明かるくなつて渡るやうにと、プログラムを立てるものが多い。

大連に渡るには普通大阪商船の船に據る。今はるびん丸、ばいかる丸、うらる丸、あめりか丸の四大汽船があつて、神戸門司大連間を航路とし、定期に之を往復してゐる。門司大連間の海路は六百



二十浬と云はれてゐる。船内の設備、乗り心地、サービス振りのよいことは、いふ迄もなく、玄海灘、濟州島沖は噂ほどに荒れもせず、波は靜かに、月影清く、いつしか船は仁川沖を走つて、碧一碧の海原を進み、愈々大連へ入港し、埠頭に横着けせられるのである。はるぴん、ばいかる、うらるの三船は、もと大連航路專門に建造せられた優秀船で、會社自慢の構造、設備を有し、あめりか丸はもと豪灣航路に使用せられてゐたのをこの方面へ振向けたもので、幾分舊式の感はあるが、しかし乗り心地は落着きがあつてよろしい。船長事務長も客の待遇には殊に最善の努力をしてゐる。

大　連

大連港内は防波堤の構へも豪壯で、埠頭の規模の宏大なることゝ、設備の完備せることゝは、東洋一の評がある。それだけに到底日本内地や上海香港邊りで見ることの出來ないものがある。恐らく大連埠頭の豪奢振りは、滿鐵、東支鐵道から、シベリヤ全線に亙る歐亞連絡鐵路の玄關口として、いかにも相應しいものである。現に埠頭は全延長一萬三千尺、三十四隻の巨船が同時に横着け出來るし、倉庫も八十棟から作られてゐる。港内の海水は年中氷結を見ず、渤海灣の連山灣港内、ウラジオの港などとは同日の論でない。港内は巨船の幾杯となく毎日横づけせられる岸壁まで、滿鐵の引込線が這

入つてゐて、直接火車に連絡してゐる。そのため奥地に急ぎの用を持つ旅客は殊に便利である。埠頭の突堤には、旅客の待合所、庭園、動物園、音樂堂などを始め、イルミネーションや娯樂、屋上の設備、鋪道の堅牢、交通の整理、衞生の完備など、凡そ最近文明から得られるものは、悉くこれを採入れ、實に歐亞連絡鐵路の最終點としての名に恥じないだけのものを持つてゐる。恐らく大連市中で大連市民が、他に向つて誇りとして特筆する最大なものを擧げるとすれば、この埠頭の宏大にして完備せる點を先づ第一に數へることであらう。これぱかりは實に日本人の底力のある考案設計と、その技術上の腕前とを十分に發揮したもので、聊か吾人の誇りとなすに足りるものである。本來露西亞人がこゝにダルニ港を設計した當初のことに思ひ較ぶれば、今日のものは隔世の感があり、全く雲泥の差があるのである。先年支那側から租地問題を起し、又葫蘆島連山灣に築港のことなど思ひ立ち、英米を抱き込み、大々的な設備を畫策してゐたことは隱れもなき事實であるが、それと云ふが當時支那側にこの大連港を出し拔き、之を將來、經濟的に無價値なものたらしめんとの魂膽から出てゐたことが臆測せられる。今や滿洲國の樹立と共に今後この築港計畫もどう進むものやら今日の處見當だにつかなくなつた。

大連埠頭が我々日本人にとつて誇りとなすべき外形上の美質を有してゐることは無論のことである

が、往年の如きこれが運用、利用厚生の方面に就て著しき痛た手を蒙り、滿鐵平行線の完成と共に日一日と香ばしくない狀態を見てゐたことは埠頭の美の輝けるだけ、それだけ日本人にとつて、聊か感慨無量なるものが胸に刻みつけられてゐた。問題は必ずしも埠頭の美に在らず、如何にして滿洲の天地、大陸の奥地が日本人の手腕で、經濟的に又國防的に、これを進展せしめ得るや否やの一點にかゝつてゐるのであると見られる。滿蒙は從來の奉天、吉林、黑龍江、熱河の四省のほかコロンバイルを加へて、こゝに全面積は、七萬七千餘方里、冬は固より極寒の地、零下三十度と云ふ凍結甚だしい處もあるが、三千四百萬からの住民も之にゐる。何にせよ日本の島國に比べ尨大な境域である。これだけのひろい奥地を擁してゐる大連埠頭は、その奥底に如何に大なるものがあるか想像するに難くないのである。將來主として滿洲の人々の腕で、これだけの面積とこれだけの大港が、經濟的に巧みにこなし利用して行けるか、それとも日本人が自分の腕で以つてそれに取つて代り得らるゝか、それとも共存共榮の大方針で行くのであるか、三者その一に出でるの外ないのである。

大連の埠頭に上陸する客は、その陸地に第一歩を印した刹那にそも〳〵どう云ふ感じを得るか。大連人の自らもつて誇りとなしてゐるものは、曰く中央大廣場、曰く滿鐵本社、曰く大和ホテル、曰く山縣通り、曰く連鎭商店、曰く星ヶ浦といつたものが澤山あり、その他工場としては、油房があり、

沙河口の工場などがある。

外形上の大厦高樓又設備の偉大なものは、何れも皆所謂滿鐵式の堂々たるものばかりである。道路のペーヴメントを見ても、それから水道、衞生、電燈、交通機關、何一つ形式の上では遺憾なものはない。賦品などを賣つてゐる所謂露天市場なるものですらもが、煉瓦造りのハイカラな店構へをしてゐて、支那内地に見るそれとは、まるきり趣きが變り、例の泥棒市場らしくない姿をとつてゐる。

かやうに大連を旅行者の目から見ると、その目に映ずる限り、外形の上では東京丸の内よりも亦上海の租界あたりよりも、又香港のそれよりも遙か上位にある。これは懸値のない處の話である。設備萬端よく整ひ、東亞細亞に於ては、恐らく群を拔いた都市美の王座を占め、文明都市として第一位を贏ち得てゐる。誠に大連の市中は殆んどその場末に到るまでもがよく行屆き、誇るに價する外形設備を完全に兼ね有してゐると云へる。

大連を旅する日本の客は、かういつた文明都市に始めて身を置き、埠頭から上がるなり、大和ホテルへとドライヴし、こゝで宿帳にブックして晝飯には星ケ浦へと飛ばす。ホテルの別館で沖の小島を眺めつゝ、滿鐵の友人からの厚意で、卓を圍み、ナイフとフォークの持ち加減も輕く、萬事すべて、滿鐵風に吹き飛ばされてゐるのも悪くはない。

かういつた極樂のやうな文明圈内に這入つて、生れて始めて滿洲氣分とはかやうなものかと、しみじみ味はされる時には、自分の身に、日本帝國の有難さが本當にこゝで感銘せられる。聞くもの、見るもの、凡て日本内地の細かいけち臭い話とは桁が違ふので、何んだか俄かに我が身の懷工合も富豪階級へ列せしめられたやうな氣持になつて來る。

この旅行者がもし滿鐵氣分に一度醉はされたら最後、いづれは日本へ歸朝したときの土産話に、素的な大連の持上げ話をして、田舍者を煙に卷いてやらう位な、柄にない野心も内心むら〳〵と起る。さてこそ實際見た大連の輪廓に更に之に尾鰭をかけて話をする。話る當人は得意げにやるに極つてゐる。けれ共その實、大連路上の内幕、裏面の悲哀、經濟の行詰り、山縣通りあたり一帶にかけてのやりくり算段の大變な話、それから、目拔きといふ目拔の地所家屋が、日本人自身の手許で殆んど首が廻らなくなり、名前こそ日本人の名義であつても、實は、時價に見積り一億萬金に近い支那名流の資金が融通されてゐて、それでどうにかガソリンの車が廻つてゐるなどと云ふ裏面の消息通の話なんか、少しも御承知がない。唯向ふ贔ひのホテルの洋食に舌鼓を打つたり、大連の建築美や埠頭美に、醉はされたりするもの計りで、その氣位ばかりはバロメータを高めて來るが、本當の大連の消息に思ひを致すものが少ない。

大連の市中に第一歩を印したものは、今日此の際の大連の観光も観光であるが、しかし殊にこの點について、思ひを致さなければならない。これは特に立ち入つて日本人客の耳に入れておきたい事である。幾ら見た目を驚かすに足りる美の殿堂があつても、これをよく運用し、奥地の大満洲をよくこの港であやつり得るだけの成算、計略を有する者が、こゝに位置を占めて居ないことには、寂れるに極つてゐる。長江沿岸奥地二千哩の富は、一つに上海の港、上海の市民によつて遺憾なくこれがあやつられ、運用されてゐる。されば上海の港は、埠頭の規模こそ、大連にかなはないけれ共、そこには腕のある人材が吾を争つて集つてゐる。

大連は埠頭建築が上海を遙かに凌いでゐるといふだけであつて、今のところ果して七萬七千方里と云ふあの奥地の富をあやつり得るだけの腕利きが集つてくれてゐるだらうか。この點を思ひ、大連市中を見物してゐるときは、大和民族の大陸經營の方面には、その利用厚生の秘術がまだ〳〵理解せられてゐない氣持ちもするのである。

ホテルとしては大和ホテルの大ものゝほかに、遼東ホテルが親しみがあつてよい。これには新館と舊館がある。新館はハイカラには出來てゐるが矢張り舊館に泊る方が便利でもあり感じもよい。ホテルの者に大連市中で最近一番に見て置かなければならないものは何であるかと聞いて見ると、誰れしも皆連鎖商店（チェンストール）だといふ。新聞社の幹部連も亦その通りだといふ。いはれるがまゝに樂しみにして出かけて見ると、期待ほどのものでもない。そのわざ〳〵二十萬から居る支那人街から遠い不便な所に設けられて、しかも夫々本店のある者が止むなく陳列店をこれに出しおつきあひといつた恰好である。内部の構へがきちんとしてゐるだけに誠に這入りにくい感じがし、一向に日本人の客の足が向かないと云ふので、何れも本店の主人共はこぼし切つてゐる。最近裏手の方を卑俗な軒並みに替へ人氣を引かうとしてゐるのは氣の毒に思はれるほどである。その元來亞米利加の眞似をした點は得意のやうではあるが、結局巨額の資金をこゝに固定させ、期待はたいしたものであつたが、内實その主人も店のものもこぼし切つてゐるとは香ばしくない話である。

若し眞に大連の繁昌を心配する智慧者がゐるとするなら、わづか九萬しかゐない日本人を相手にかかるものを建造するよりも、よろしく支那住民たちに利用させるやう、始めからその場所と設備を考へた方がどんなによかつたか。しかしそこが大連式の特色を物語れるところであつて、實益よりも先づ外形本位で、而かも資本の固定に首が廻らないと云ふのである。事小なりと雖も、以つてその最近の大連消息の一斑が讀み得らるゝのである。

日本から行つた旅客は、その名も懐かしい大連日本橋の橋上に立つて、遙か彼方の空に聳ゆる富士

山形の大連富士を打眺めるとき、誰れ人も流石に異鄕萬里の心が唆られる。

山城町の青年聯盟本部を訪ねて見ると、流石に滿洲の天地に飛躍せんとする日本青年達が、現在の狀態にあきたらないで、理想と希望に充ちた聯盟的活躍舞臺に入らんとしてゐるのは賴母しい。兎も角大連人は全滿洲を大觀するだけの頭を養成し、滿洲生活の責任の重且つ大なることを痛感しなければならない。といふのは南支那にゐる日本人は何れも、たよるべき一滿鐵の庇護もなく、一商、一吏、凡て皆單獨に孤軍奮鬪、十年一劍を磨するの躍進振りである。在滿の士は實際をいへば、その點に就いて、溫室の花式に大いに惠まれてゐる所があるといはなくてはならぬ。

支那街の方面は、特に大連の呼びものとなつてゐる。これには小崗子を中心に、柳暗花明の巷があるので、靈間の味ひのない觀光振りに、疲れたからだを、この方面に運ぶのも、旅先きの思ひ出に何よりのことである。

大連の呼びものとして、著しいもの〻一つには、支那名流の亡命客を數多とゞめてゐる事實がある。軍閥時代の巨星、段祺瑞大人や黎元洪を始めとして、各總理級、大總統級の面々は、徐ろにその邸宅をこゝに構へ、少なからぬ巨財を擁し、支那の中でのこの別天地に平和な餘生を送つてゐる。別府の溫泉で鳴らしてゐた張宗昌將軍の如きも、二十五人の夫人連中を始め、家の子郎黨打ちつれて大連の抱家に明月を賞してゐるなど人のよく知る所である。

今日事實上、北支那、南支那の各地で、時めいてゐた以前の巨頭連中が自ら亡命客として、それ〴〵これに渡り、それが絶對安全地帶として之を別天地視し、こゝに餘生を送らうとする。ところが一方大連は、新滿洲國家との條約はどうならうと、從來の關係を尊重し、日本は之に巨額の費用をかけて生命財産の保護方に多大の力を致してゐる有樣である。

東亞一般朝野の識者達はこの間の消息を知り、寧ろ亡命客のため、又有産階級の者共の爲め、こゝに避難地を一箇處ぐらゐ設置させておくことは事實上必要なことである。のみならず、大連の如き特別區域が半島の一角に殘されてゐることは輸囂のためにも、妙趣ではないだらうか。

旅順

旅順は大連から汽車で、又自動車で飛ばせば譯はなく、大連滯在中の一日を割いて之に振向け、成るべく立廻りよく戰跡巡りと出かけるのもよい。思ひ出深き二〇三高地、乃木將軍の詩に名高い白玉塔から鷄冠山、それから閉塞隊の沈沒した灣口一帶の戰跡を巡らうとするには、急がば半日もあれば大抵見てしまへる。

支那街の方に立ち寄るとすれば、多少珍らしい品物の掘出せる古玩店なども一二ないでもないが、しかし考古資料は、官設の旅順考古博物館を參觀するに越したことはない。

半島の石器時代に見る武器、食器類、石棺、祭器から、後世各時代に渡る土俗、風俗の參考品まで、が階上、階下に幾十點となく陳列せられてゐる。殊に千有餘年を經た唐代西域の風俗そのもののミーラ（木乃伊）が九體箱入り硝子越しに寢かせてあるものが、あるなどは最も珍とするに足りるものである。その中に一人の子供の姿の見えてゐるのは、特に興が深い。その道のエキスパート八木奘三郎翁がこの方の調査の責任者に當たられてゐるのは賴母しい。

旅順にはなほ關東廳の廳舍や旅順工科大學を始め、大廈高樓の影が、山手あちこちの綠蔭に隱顯してゐて全く繪のやうである。近來旅順にも亦雜振玉翁等の支那亡命客がこゝに居を移し、又大連の繁瑣を避けてこゝに落ち延び、大きな構へをしてゐるものなどもある。

以前肅親王の一家族が、こゝに住つてゐたのは、世人も知る通りであるが、その他文人學者達のこゝに雛を避け餘生を送つてゐるものが少くない。

金州

大連より程遠からぬ鐵道の沿線には、金州の町がある。金州は金州灣に臨んだ風光明媚の地で文治派の故王永江を出してゐた事は有名な話である。こゝには內外綿の工場があり、この附近の農家は、娘達にとつて、よい職業が與へられてゐるので、ひどく有難がつてゐる。人情はいかにも純朴で、租借地問題など持出す議論家は見ない。又日本人の中には、古代發掘品を幾萬と集めて、靜かに研究に沒頭してゐる篤學者岩間翁などもゐる。町外れ一帶には林檎の栽培が盛んで、近來大連市の林檎を壓倒し、日本內地へも積荷されてゐる。

貔子窩

半島の東海岸には有名な貔子窩の町がある。こゝには岡山縣人が中心となつて近來移殖民が奬勵され農業經營上特に見るべきものがあるといはれてゐる。

大連より遼陽へ

關東州を滿鐵沿線によつて、北へ拔けると云ふ時には、普蘭店の驛を過ぎる。稅關の關係で乘客はその荷物の調べ煙草の臨檢などを受ける。

鐵道によつて、更に北行し、瓦房店から得利寺・熊岳城・蓋平と過ぎ行くと次ぎには大石橋の大驛につく。この間沿道の平野よく開け、山は低く、廣濶の氣分が充ちてゐる。熊岳城には、日本人經營の農業園藝學校の內容組織の特別に見るべきものがある

大石橋から北へ進めば海城・沙河・鞍山店を經て遼陽・奉天に向ふべく、又大石橋を支線に乘換へて、西に折れて行くと營口から溝幇子に出てこの驛で山奉線（山海關、奉天の名からとる。事變前は北寧線と云ふ、北平遼寧の略である）に接續することが出來る。

鞍山店は滿洲唯一の製鐵工場を有する地點で工業家の目を惹いてゐる所、特に最近は例の昭和製鋼所の建設地問題で、之を新義州に置くか、それとも鞍山に置くか、但しは蘇河屯におくべきか、朝野の有力者間に、八釜しい議論があることは周知のことである。

遼陽

遼陽の街は驛から程近い所に有名な白塔の聳えてゐるので有名で、市中は南滿屈指の美都である。この邊りは日淸日露の役で非常な武勇を日本の軍部が顯かした所だけに、その歷史は立札に名記され、プラツトホームにも嚴々しく揭げられてゐる。しかし驛長に會つて、最近の驛の收入について聞いて見ると非常な激減で、とてもお話にならないとこぼし切つてゐた。いつも武力の方には强くて、收入の方のことになると、損ばかりしてゐる事實が、滿鐵沿線到る所に見らるゝのは遺憾な事である。

湯崗子と千山

大連から奉天に來るまでの間で、旅行者にとつて興味の多い所は、名所舊蹟としては、先づ湯崗子の溫泉と千山の巨刹であらう。

湯崗子は南滿屈指の溫泉場の一つで、その六ケ所の湯壺を中心とし、宏大な設備、建築美が見られる。滿鐵の經營してゐる處だけに、豪壯なるものがある。怖らく大連、奉天、ハルピン、各地の大官、富豪連にして、その俗塵を脫して、壯快な氣持にならうといふには、この地は全滿隨一の佳所であつて、先年宮殿下の御淸遊を仰いだこともあり。滿洲には珍らしい設備の行屆いた湯治場である。怖らく日本の箱根雲泉あたりよりも遙かに上位にあるものといつてよい。日本人は勿論、外人支那客などのこれに節を曳くもの、每年少なからぬ數に達してゐる。

千山の秀境は南滿の別天地と稱せられ、殊に道教の巨刹を始めとし、閑雅な淨域をあまた有し、遊客の心を唆るものが多い。奉天行の乘客は、數日の暇を割いて山中に入り、寺内の聯句を味ふのも妙である。

泉石煙霞眞の樂みあり
松籟風月幽襟を共にす

（泉石煙霞有眞樂　松籟風月共幽襟）

簾影靜かに垂る新月のうち
鐘聲徐ろに出づ落花の間

（簾影靜垂新月裏　鐘聲徐出落花間）

詩趣に乏しき南滿の旅には、たとへ一日でもその機械文明の裏から脫して、幽邃靜謐の天地に遊び、心身を洗ひ淸めることは、何よりも愉快なことである。

蘇河屯と渾河

奉天に程近くなると、奉天平野は見渡す限り廣く開け、四方何れを見ても、窒と曠野の相接してゐる地平線を見るのみである。安奉線（安東、奉天間）から來る火車は蘇河屯の驛で、滿鐵本線と合し渾河驛を經て奉天の驛頭につく。

渾河は撫順の視察に出かける者は、必ずこの驛を通るのであるが、もと、偶に渾河といふ水流があつて、これには數多の材木を筏に組んで悠々奥地から流して來るのを見る。この渾河は滿洲の平野を流れ〳〵て、遼河の本流に牛莊（ニウチヨワン）の所で合し下流の營口で渤海灣に這入つてゐる。

奉天

奉天は、首都の長春とは別の意味で、以前から南滿第一の大都として、經濟的に、又政治的に、非常に重大な位置を占めてゐる。それのみならず、今日全滿、全支に亙つて考へて見ても、上海を除けば、怖らくこの奉天の右に出る都はない。今や東洋の天地に於て、一大新國家の建設新興を見たるのとき、時局は、そのあらゆる點に於て、日一日と世界注目の的となりつゝあるのである。

奉天は大連から、二百四十八哩、火車で十一時間の地點にある。驛頭に立つて、その邊りの大觀を試みれば、驛の前の廣場は宏大である。その驛の輪奐の美、又驛前の支那宿滄陽旅館（舊名悅來旅館）鐵道事務所・大丸旅館などの高壯建築美が、正面にづらりと仰ぎ見られる。その廣場を中心として、

幅の廣いアスファルトの大通りは、五本放射狀式に遠く走つてゐる。宮島通・浪速通・千代田通・平安通・若松通と云ふのであつて、宮島通にはもと大倉の經營であつた鐵道馬車が、今は支那人の手に移り、主に支那人客を滿載して日夜繁昌してゐる。

驛前の廣場には、人力、馬車、自動車、背中に番號のついた袖なしを着てゐる奉天獨特の苦力などが、汽車の着く度毎に、うよ〳〵する程雜沓を極めてゐる。奉天新市街は、これら五本の放射狀道路のうち、殊に浪速通、千代田通を目抜きとして、同租借地の新市街を形づくつてゐる。驛に平行をして、又直角にとつて、恭盛目に、アスファルトの横町がたてよこに整然とつくられてゐる。

驛から浪速通を眞直に城内の方に向つて進めば、中ほどに圓形に設計された日露戰役の記念碑の建つてゐる廣場がある。この記念碑のところを中心に、浪速通、富士町通、北四條通、加茂町通などと云ふが又放射狀につくられてゐる。記念碑の廣場に面しては、大和ホテル、その他の大厦高樓が、軒を並べ、瀋陽館の宿屋も程近き所にある。

新市街には、中央公園、奉天神社、苗圃市場、赤十字社病院、醫科大學、高等女學校、陸軍の營舍、練兵場などがある。新市街の外觀は、日本内地では見られない明るい高壯な建築で、街衢は頗る立派である。一旦緩急のあるの際は、どさくさまぎれに、奉天の城内や商埠地から、幾萬の支那市民が、平素思ひもよらぬ混雜を荷物を背おつてその空高い記念碑を目當にこの新市街へ避難して來るのを見るのである。

商埠地には、日本總領事館を始め英米佛などの領事館があり、吉祥里、幸福里、慶福里、浩然里、惜陰里など美しい名前のついた支那街がある。何れも道幅廣く到る所に柳の綠蔭があつて、何處となくのびやかな氣持を見せてゐる。

驛前の馬車鐵道は、新市街と商埠地の間を縫うて、奉天公園のはづれ瀋陽驛頭をよぎり、城内へと這入つてゐる。商埠地から城内に這入る城門には、大西邊門と小西邊門とがあるが、普通城内觀光の客は、日本領事館前を過ぎて、道を小西邊門へと取る。支那式の瀟洒な飾りのある門頭に、この名稱のすかし文字を仰ぎ見る。左に少しく奉天城内の觀光に必要な條件を略述しよう。

奉天の城内は、大體圓形をなし、内外の二城からなつてゐる。その内城は、方形の城壁でかこまれ、周圍一里半、城壁の高さは約三十尺、道路は東西南北に通る目抜きの大街を有し、外城に出る大小八つの門に連絡し、井桁の形をなしてゐる。その中央の區劃内は、宮殿を中心に、各官衙の地區となつてゐる。その他城内には滿洲八旗の舊官邸、公館などが多い。城内の目抜きとして知られた通りは、四平街、鐘樓街、鐘樓北大街などであるが、殊に四平街の通りは、東京の銀座にも當る所で、こゝに

は豪商軒を並べ、毛皮商、大藥房などの著名なのが集り、その中でも、吉順絲房の如き大百貨店の建物は、市中を壓して半天に聳立してゐる。奉天觀光の遊客は順路、これに登りて、屋上から滿洲大平野の展望を恣にする。奉天市中を取卷く外城は近く、指顧のうちにあり、北の方東北大學の校舍、北陵の黄甍の眺め、又北大營から無線電信局の傍、それに鐵路、兵工廠、飛行場の彼方東陵の聖域のある邊りなどが遙か山の麓に見えてゐる。更に霞のうちに撫順の方角が指される。

尚城内にある目星しい建物としては、宮殿、四書文庫、官銀號、中央銀行、市政公所、滿鐵公所、鐘樓、鼓樓、長安寺、孔子廟、東華門、西華門、其の他舊將軍公署に將軍府、卽ち最近まで張學良のゐた所などが數へられる。新國家の獨立と共にこは當然改名せらるべきものである。

内城の城門を出ると、又造幣廠、被服廠、同善堂（慈善事業）清眞寺（回々教の寺）などがあり、最近城内の市區改正と共に、純支那式の趣きのあつた街は、殆んどその面目を一新し、ハイカラな體裁になり、沈重の趣きに富んでゐた軒飾りの龍の彫刻物などは、殆んど全くその影を沒してしまつた。又以前奉天名物の一つとして客を引つけ賑つてゐた城壁下の泥棒市なども、今は次第その影が薄くなつた。

奉天市中の小學校は、商埠地に、城内にと隨處に見らるゝが、その中[redacted]は寺小屋の體態をそのまゝ

見せてゐるものもあるし、又新式に理科、體操などを教へ、オルガンの音を響かせてゐる所もある。

奉天見物で風流才士の呼びものとなつてゐるのは、平康里（ピンカンリ）の遊廓である。奉天市中到る所このピンカンリの發音を耳にする時は、直ちに陽氣な氣分を漂はせ、旅先きの徒然を蘇らせる。ピンカンリの話題は、實に何とも云はれない好調を感ぜしめるとまで云はれてゐるのである。

奉天見物は、人により、時と場合により、その宿を必ずしも一定しないがよい。時には純支那式の瀋陽旅館あたりも趣きがあり、且つ經濟的に行くのである。位置が驛前であるだけに便利もよく、樓上の客室は設備もよく、その數も多い。又割に清潔で、展望のよくきく住室もある。しかし又新市街の中心地、大和ホテルに瀋陽館なども、これ又堂々としてゐて、旅行の用向き次第では、こゝに宿をとつてゐる方が便利なこともある。商埠地の方に這入ると、支那料理では有名な公記飯店だの、四川菜專門の「大陸春」だの云ふのがある。奉天切つての御馳走と、又佳人との兩方面から云つてよい評判をとつてゐる。

奉天市中は、冬の季節になると、滿蒙各所の極寒地から、蝟集し來る各種毛皮の市の盛んなものが見られ、又草根、木皮の藥種の取引もかなり活潑に行はれる。

奉天城内の市況は、世の景氣不景氣に拘らず、常にその非常な活氣を呈してゐて、流石は滿蒙の天

地に於ける一大都城である事を有力に物語つてゐる。怖らく今後滿洲の新天地はこの奉天都城を中軸としてめざましき空前の活躍を見るべく、同時に在滿三千四百萬の住民達も、漸くこゝに和平生活の緒につくことが出來るであらう。

奉天滯在の客は、北陵や、東陵にドライヴして、老松の下に石象石馬の肌を撫で、墓陵の建築美に觀光慾を擽にするもよい。又東北大學の工廠や、並びに陶工廠、無線局、それから宮殿内部の玉座、金ぴかの飾りつけあたりを視察し、又滿鐵公所を訪ねては、奉天に於ける最近の在滿大和民族の進展を見て、互に語り合ふなど、興がつきない。

撫順

奉天から日歸りの旅には、撫順の見物が適當である。奉天から撫順線に乘り渾河の驛を過ぎると間もなく撫順驛につく。

撫順は奉天から東二十哩、人口は十三萬、撫順炭として有名な石炭の出てゐるは云ふ迄もない。大山坑あり、東郷坑あり、露天掘あり、夫々その規模の宏大なることは意想外である。市中全部はその石炭層の上にあつて、その埋藏量は、山西省のそれよりも多く、その量に於て、又質に於て、驚くべきものがあるといはれてゐる。

撫順炭の採掘には、最新式の方法が採用せられ、大山坑の如きは、車仕掛けで、大規模のエレベーターが、地下千二百尺の下までも掘り下げられ、これに乘つて親しくその坑内に下りて見ると、耳鳴りがして、眞に文字通りの奈落の底へ落された如き實感を得るのである。空氣の壓力の變化で、誰れしも鼓膜に一種の異狀をきたすのである。大山坑の内部には、縱横十文字に幾つかの坑道が開け、數多のトロツコで石炭が自由に運搬せられてゐる。又その坑道の傍には廣い事務所が幾つも設けられ、煌々たる電氣が點され、盛んに青寫眞など開けて、坑脈試掘の計畫などの進められてゐるところを見る。そして要所々々の通路には、廻轉式の開閉戸がつくりつけられ、一人々々次ぎの坑道へ這入るやうに出來てゐる。又奥深いどん詰りの支坑へ這入つて見ると、そこには電燈の影も暗く、殆んど地獄の鬼とも思しき姿した支那苦力が、鶴嘴を振り上げ、無煙炭の壁層を打ち壞してゐるものがあり、これを臺車に盛つてゐる者があり、ごろ〳〵レールの上を押して來る者があり、いやはやこの世の金掘りの世界とも思へない位の凄みを見せてゐる。先年見た坑内爆發の珍事は、この千二百尺地下の出來事のことゝて、全く言語に絶する慘狀を呈したのであつた。

露天掘は、これとはその場所を異にし、別の所にこれ亦驚くべき地域を有し、幾段かの雛段式に廣

く且つ深く掘り下げられ、腕の形に次第に大きく四壁を掘りくづしてゐる。坑内各所には、ダイナマイトを仕掛け、物凄き爆發の響を轟ろかせ、礦脈に沿ひ、次第次第にと深く掘り廣められ、その各層に持つて行つて、軌道が敷設せられ、幾萬の工夫はその採掘と運搬に從事してゐる。その從事振りの盛大なことは、東洋の天地で恐らく他にその比を見出すことが出來ない。

滿洲の石炭は、撫順炭をもつて第一となすべく、渤海灣では、開灤から出る開平炭をもつて第一となすべきであらう。しかも無煙炭の優秀なのに至つては撫順の右に出るものはないと云はれてゐる。滿洲の旅をしてゐる者はこれ程素晴しい撫順炭の事業振りをそばに見てゐながら、特にこれを視察することを忘れるやうではいけない。唯しかし之を視察しても、その當事者の案內說明を求めるとき、餘りに專門的に、又餘りに親切に、釋明の勞がとられると、時間の關係上却つてこちらで恐縮することもあるのである。

かゝる廣い炭礦視察は、坑域をドライヴするだけでも、少なからぬ時間を要するのであるから、寧ろ始めからその時間の制限をしておいて、それからあとは方角の違つた撫順のオイルセル（石油）の新工場の視察の出來るやう願つておくがよい。

石油重油に乏しい日本にとつては、撫順炭から重油をしぼり取る裝置の完成せられたことは、國家のために慶賀すべきことで、その當時者の苦心經營振りも一通りでない事が察せられる。山條翁の始めてこれを開設されて以來、未だ年淺く豫期の成績を揚げるまでに至つてはゐないが、今後の擴張の程度によつて、必ずや有終の美を致すことであらうと考へられる。

撫順の市中には、支那街も相當に開け、支那料理店もかなり榮えてゐる。又街の中央の道路には、二抱へに餘る槐樹の老木が、枝繁く茂り、その幹枝に、土民達の祈願を籠めた有需必應の扁額や、黃色の呪符など無數に揭げられ、樹下に小祠堂までも建ち、如何に深く、界隈の土民が、これに迷信的の思ひをかけてゐるかゞ懷かしく思はれる。明朝がはかられぬ坑內生活を營む苦力達の氣持の上には何一つこゝに賴るべきものがないのであるから、かうした巨大な天然木を守護の神として祭つてゐることは、その心事察すべきものがある。

撫順の名所舊蹟として、特に取り立てゝいふべきものはないが、清朝發祥の地であつた興京の古城が、東方二百五十支里の處にあつたり、又その興京街道に清朝三大陵の一つである永陵が百九十支里、幽邃な樹林の中にあり、見るからに壯麗な宮殿を聳やかせてゐる。今はその附近一帶を東山と呼び、風景は絕佳、啓雲殿といへる陵宮がある。其の他永安橋の渾河に架せられたのは、郊外の風景を彌が上に添へてゐる。公園、四方臺等は、日露の戰役に懷かしい所である。

奉天より長春へ

奉天から北の方、長春までの百八十九哩、車中約九時間の處は滿鐵圈内にはひつてゐるので、その間は自ら滿洲の旅の觀光地帶として見らるゝものが多い。鐵嶺、開原、昌圖から四平街に出ると、所謂四洮鐵道の支線が、西の方鄭家屯から通遼（白音太來）に、又洮南に通じてゐる。更に洮南から北の方洮安へ、洮安から嫩江、昂々溪の諸驛を經て齊々哈爾に達することが出來る。これらは何れも皆滿洲事變にその名のやかましかつた處である。

四平街から本線を北へ進めば、公主嶺、范家屯を經て、長春驛に至る。

長春より奥地

長春より東の方、山紫水明の吉林に出られ、吉林から吉敦線によつて、白頭山下の敦化まで鐵路が延びてゐる。又長春以北は滿鐵の氣分から全く違つた東支鐵路で、寬城子、窄門驛と南行し、どこまでも渺々たる北滿の野を北に走る。地平線下の彼方に陶賴昭だの、又雙城驛だの云ふを過ぎて、こゝに松花江畔、哈爾賓の驛頭につく。北滿の天地は東支鐵道によつて、東の方、滨林、寧古塔から、浦鹽に達することが出來、又西の方昂々溪を經て海拉爾、呼倫貝爾の奥地外蒙に通ずることが出來る。又、東北滿洲、吉林の奥地では、朝鮮北部の會寧に近く、間島、圖們鐵道から龍井村を經て、局子街（延吉）老頭溝などへ達する地方的の鐵路も既に開通してゐる。

滿洲で、これまで問題になつてゐた滿鐵の平行線とは、奉天の瀋陽驛から、東北朝陽鎭を經て、吉林に至る線や、それから又前に述べた洮南、鄭家屯、通遼から南下してゐる、所謂打通線などを呼ぶのである。打通線に見る打虎山驛は、山海關、奉天間の所謂山奉線へつながつてゐる。

先づ滿洲の旅の順路だけは、これで大體を列記して了つたが、そのうち、奉天以北の目星しい觀光地點として云ふべきところは先づ、長春、吉林、哈爾賓、通遼などであらう。序でに哈爾賓の賓は滿洲地圖にはよく濱の字に書かれてゐる。

長春（新京）と吉林

長春は、全滿洲國、七萬七千方里の領域に於ける國都として、新國家樹立の宣言と同時に決定せられ、こゝに二十年計畫の下に、三十支里に亙る大都市案が目論まれてゐる。

元來長春の都城は清朝同治四年に、匪賊防備の爲め、周圍十支里の長方形の城壁が築かれた城内

と、新市街の日本人町と、商埠地の内外雜居してゐる處との三區から成り立つてゐる。新市街は、日本が明治四十年九月に、百五十三萬坪を買收して鐵道附屬地となして之を開拓し、舊稱は頭道溝と云ふ所であつたが、滿鐵の手で、すつかり區劃整理も出來、こゝに文化的都市の出現を見るに至つた。商埠地は新市街と城内との中間にあつて、露西亞の後を受け支那人の經營した大陸的市街で商業地區として最も繁昌をしてゐる所である。

もと長春の地は、蒙古人の放牧の地であり、松花江の源流伊通河の左岸平野にあり、我が北海道、旭川と緯度を同じうしてゐる。冬は、氣溫零下三十度、凍雪かたく外面をとざすと云つた土地柄である。昭和六年九月十八日までは、日本勢力圏の北端であり、滿鐵の終點であつた。大連に七百キロメートル、哈爾賓へは二百四十キロメートル。尙滿鐵と、東支線と、吉長線の接續點となり、ロシア時代の都市經營のそのまゝ殘つてゐる處もあつて、歐露氣分がかなり濃厚に窺はるゝ市街である。その滿洲の中心地點であるだけに、中部滿洲農產物の市場として、物資の集散、活潑に、商業金融の地方的中心としても又最も長足の發展を遂げつゝある新興都市である。

新しい氣分で作られてゐる滿洲國の新京として長春は、地勢の上から、又交通の上から、どの點から見ても、少しも缺はれてゐない。滿洲五省の巨頭、又は軍閥、何物からも周圍に臭味ゆかりがなく、誠にその點で長春は一番適當な處である。萬寶山事件の餘波なども、日本の軍事行動ですつかり滯められ、兵匪の姿も消え失せた。

新首都としての長春の總人口は十二萬（滿、十一萬、日、一萬、外六百）と云はるゝも、日に、日に、すばらしく、激增しつゝある。もし多年の懸案である吉會線（吉林、會寧）の全通した曉には、朝鮮北部との交通貿易もめつきり盛んになつて來ることであらう。從つて長春は一段と、恐ろしい大都會となる。將來その新國都としての發展は、矢張り、日本勢力中心に新市街が中心となるは云ふまでもないことで、既に滿洲新國家の建設に伴ふ新政府の廳舍なども、二千萬元の豫算で計畫が着々進捗しつゝあり、執政府、日本軍司令部、滿鐵、などもこゝに建設を見るのだらうと傳へられてゐる。

從來日本から、旅行に出かくる者は、長春を打止めにして、引歸へしてゐたが、今後は長春を中心として十分に各方面の視察を遂ぐべきである。

吉林は長春から吉長線によつて譯なく行かれる古都でその風光はさながらわが加茂川に臨む京都の古都を思はしむる所があり、全滿數ある都城のうちで、吉林の街くらゐ潤色に富んだ山水明媚の美都はない。

滿洲國執政溥儀氏（舊宣統帝）はその長春に居館の造營を見るまで、當分の間、吉林に居住し、親

族の熙哈氏（吉林省長より財政總長へ）の保護を受くることになつてゐると云ふことである。あれやこれやで、吉林も要人、游士、吟客の去來が益々繁くなることであらうと思はれる。

哈爾賓

哈爾賓はロシアの東方經略の爲めに出來た特別都市で、支那街としては傳家甸がある。ハルビンに進む車中の感じは滿鐵の列車中に經驗した樣子とはかなり違ひ、すべてがロシア式に出來てゐて、列車内には二階三階の棚まで出來てゐる。沿線の光景は、北に進めば進むほど、寂寥の感があり、停車場の如きも北滿式の大陸的の眺めがあり、大平野の唯中に、その時刻だけ停車するのであるが、併しその停車を目當てに、何處の里より集まり來るか、土民たち忽ち列車を中心として一大マーケットを形成するのである。俄かに賑ひを示し、鷄の丸煮などしこたまひつさげて賣りに來る支那人があり、露西亞パンを入れた提籃抱へて、窓際近く賣りに來る露西亞人もあり、停車時間は相當長く、乘客は徒然のあまり多くそとに飛び下りる。プラットホームのなきため、足の短かい日本人などは困ること夥しい。

北滿の鐵路を走る汽車は、箱の數も三十幾つと云ふほどに長く續き、長蛇の姿をなしてゐる。行け共行けども果てしのない曠野の中を、汽關車の上で絶えず鳴つてゐる大きなベルの音は、如何にも北亞細亞の奥地に奥深く這入つた思ひを唆るものがある。

さて哈爾賓の驛について見ると、廣場に集つてゐる馬車、自動車はあわたゞしく動いてゐる。その混雜せる間に、地べたに新聞を並べ客を呼んでゐる露西亞人や、支那の賣子が、異樣に目につく。あの大袈裟な露西亞新聞を、わざ〳〵鋪道の上に擴げて、叫び賣つてゐる光景は何んといつても哈爾賓氣分である。滿洲新聞も、こゝに大袈裟に負けず劣らず競うてゐる。日本字の新聞など、賣子の膝元を見ても影も形もない。キタイスカヤの目拔きを通り、日本人經營の二三の旅館支那らしくない香ひを見つゝ領事館のあたりを始め、一とわたり歩いて見る。露西亞文字の並ぶ看板も異國情緒を思はしめる。新市街の方は、街といふ街は露西亞氣分に充ちた軒並である。路面は石の鋪道が出來てはゐるが、滑らかに出來てゐない爲め、乘物の乘心地は餘りよくない。

市中公園地の綠蔭に憩ひ、松花江の鐵橋の上を歩んで、中程まで運んで見ると、江上を走る露西亞の小蒸汽が、その威勢も勇ましく、そゞろに露西亞人の活躍意りなき雰圍氣をあり〳〵と見せてゐる感じがする。鐵橋の袂に建造せられた砲壘式の番小屋は、壁の厚み三尺に餘り、窓は小さくて暗く、中にゐる露西亞人の哨兵と語り合ふのも、一種のグロ氣分を催ほさせる。

哈爾賓の夜は、又ときグロ百パーセントの興味が漂ひ、殊にスラヴの毛深い美妖や、又きめの荒い佳人などは、次ぎから次ぎへと出て來るが、露西亞式の歡樂の場面を呈して遺憾がない。その大陸氣分のうちに、どことなく支那とは變つた無邪氣なナンセンス振りが見える。ウオツカの酒の味と共に、こはいふにいはれない忘れがたみとなる。

しかし土地が緯度の北に偏在してゐるだけに、冬の寒さは想像の外であつて、九月の初め既に東京の十二月よりも寒い濕度で、二重窓の硝子には内に雪の如き結晶物が固着するのを見る。住宅、ホテル、凡て暖房はペーチカが用ひられてゐるのはいふ迄もない、羊毛の裏をつけた防寒服に、小羊の毛の黒く染めた深帽が、露西亞びいきな市民達によつて被ぶられてゐる。

哈爾賓の支那街は玆にもいふ如く、傳家甸と稱し、新市街から別に特別の一廓をなしてゐる。新市街にも似てどことなく洋風の構へをなしてゐる。それでもその樓上、樓下に支那氣分が漲り、北滿の天地にその濃厚な紅綠の看板が旅客の目を惹いてゐる。

若し奉天地方を遊歷する旅人で、往復五六日の暇を取ることの出來るものは、是非支那氣分からかけはなれた哈爾賓の街の樣子、露西亞人の生活、躍進振の一端を見るべく、こゝ迄遊歷を延長せられん事をお勸めする。必ずしも齊々哈爾、海拉爾、滿洲里まで進まなくともよい。しかし尚東蒙の一部をのぞかんとする者は、前に述べた四平街から西の方洮南に又白音太拉にまで深く入り、白羊の群を天涯に仰ぐの大陸光景を味ふのも亦一興である。序でに哈爾賓の貨幣で、銀貨一弗は哈大洋と稱し、奉天の奉大洋といふものと多少相場がちがつてゐるが、この地に這入つては土地の大洋を用ひることが便利である。大洋の外に小洋、吊文札、銅子兒などのあるは云ふまでもないことである。

通遼

東蒙に入つて、通遼即ち白音太拉の街は、日本人の事業家に思ひ出の深い地方である。こゝは曾て大倉喜八郎男が、大倉組農場を拮据經營してゐた所で、今は喜七郎男がこれを繼承してゐる。たまたま西の方赤峯の北、林西の奥地に、米人が巨萬の投資をして、林西農場と云ふを經營してゐる事實と相對し、土民の間には、かなりな評判になつてゐる。大倉農場の成績如何は、將來に於ける邦人の奥地滿蒙新國家の開發にとり、多大の期待がつながれてゐる。或る意味に於て、こは日本人の滿蒙事業の將來を卜するバロメーターとして、朝野の士から眺められてゐる所である。

由來滿洲の天地は最近の滿蒙問題、新國家建設の大業に刺戟せられ、その重大性を國民一般に痛感せしめらるゝに至つた。滿洲奥地の開發事業は、滿洲の旅に出かくる青年事業家、教育家遊士の特に

注目を率いてゐるところである。

奉天より安東へ

奉天から安東縣に至る百七十哩、鐵路六時間の車中は、平野の中と云ふよりは、山の多い境を通つて行く。その間目につく驛としては、蘇家屯、本溪湖、橋頭、連山關、鷄冠山、鳳凰城などがあるが、五龍背の驛を過ぐると、滿洲を名殘りの最後の驛安東縣に着く。安東から奉天に至る間の鐵路は、安奉線と稱せられ、北滿や南滿本線の沿道に見る光景に比し、わりに平野が少なく、窓外、山中景色のよい所を通るのである。沿線は水鄉少なく、山麓農家の住ひや多少田畝のあるを見ることがある。けれ共大體は山嶽重疊し、摩天嶺を始めとし、處々に珍らしい奇峰の天に連なるを仰ぎ見る。

本溪湖は人も知る如く有名な炭山のある所で、かの九億萬噸からある撫順の炭田には及ばないこと遠いが、滿洲屈指の炭坑があり、滿洲事業界に於いて、依然覇を稱へてゐる。明治卅九年大倉組の手で開坑式を擧げ、その後日支合辦のことになり、煤鑛公司なるものを組織し、爾來その業績は年一年と見るべきものがある。炭田はかなり廣く、炭質も無煙炭に次ぐ良好なものと稱せられてゐるもので評判がよい。

本溪湖から南、橋頭、甜坟を經て、連山關の驛に近づかんとする頃、右手の空に高く聳ゆるは、上にも述べた有名な摩天嶺の奇峯である。安奉線全線のうちで風光第一の眺めであつて、滿洲の山景として、稀れに見るの大自然美、その嶺容の鋸齒狀をなして天空に起伏せる有樣は何とも云へない。

尙安奉線には溪水の流れ清き釣魚臺の名所があり、奇巖山麓に傾き、碧潭千古の水を湛ふ。文人趣味に富む旅客の讃嘆措く能はざる處となつてゐる。溪に伏し、峯を仰ぎ、窓外の眺望を恣にすれば、橋頭、連山關兩驛の間の自然美は、最も味ふに足るべく、又たその個處も多くて、應接に遑のないくらゐである。滿洲の旅にかくの如き山水の境を見出すことは、旅客たちの豫期しない所である。日露の戰役に黑木軍がこの地方の難關を擁して、攻略に盡くされたと云はる當時のことなど思ひ起せば、山水美を賞する以外に、感慨無量なものが胸に迫るのである。

鷄冠山は驛の北方二哩の所に安奉線中第一のトンネルがあるのでよく知られてゐる。そのトンネルは延長三千二百呎、その東口には松方公、西口には西園寺公の題字が刻されてゐるのが讀まれる。

鳳凰城は日淸戰爭以來その名も懷かしい所で、山中の景觀は、幽邃閑雅、佛寺、娘々廟（ニヤンくミヤオ）、觀音閣などの巨刹がある。又山上に登れば、高勾麗時代の城跡が訪ねられ、この城跡は永樂大王の百八城の一つだとか傳へられる歷史を有し、安奉線中隨一の銷夏の仙境として呼ばれてゐる。

高麗門の驛を過ぎると、例の五龍背に達すべく、こゝには有名な温泉場があつて、四時浴客の絶えない處である。浴後欄干によつて窓外の山容を望めば、白雲離合して、頗る心身の爽快を覺えしむるものがある。

安東縣

安東驛は、安奉線の終點驛として、又朝鮮半島より行くものは、鴨綠江を渡りて始めての都會地であるだけに、滿洲の旅には最も印象が深く、日本への歸朝途上にある旅客はこゝでいやでも應でも、稅關の調べを受けなければならぬのである。朝鮮經由で滿洲に入る客は、多くこゝに一服すると云ふので、しばし下車し、所謂鴨綠江節でよい氣分を味ふ者がある。安東縣は舊市街と、新市街の兩地區よりなつてゐる。が郊外の鎭江山は、その展望を恣にし得るこの地方隨一の遊覽地であつて、今は公園がこれに設けられてゐる。山は高からず、手頃である。秋の紅葉に、春先の花、四時節を曳くに適當な別天地である。又有名な鴨綠江採木公司と云ふのは、その貯木所の宏大なことに於て、又その作業振りの壯觀な點に於て、滿洲唯一の處として呼ばれてゐる。日本內地の能代、臺灣の嘉義のそれ、又スカンヂネビヤのスエーデン採木工場などに較べて、聊か意を强うするに足りるものがある。

鴨綠江の上流は道溝より轉安縣あたりの奥地から本流支流一帶にかけ、深林地帶がひろがつてゐるため、年々その伐採される木材の料は、夥だしいものがある。その流す筏の悠暢振りは、あの鴨綠江節にもよく唱はれてゐる通りそのまゝで、流石に滿洲情緒をたゝへてゐる。朝鮮の白衣に因んだ風物が、この鴨綠江を境にくつきりと區別され、河の西岸は、正に打つて變つた大滿洲氣分となつてゐるのである。

鴨綠江の鐵橋は、全長三千九十八尺、桁脚十二連にして東洋第一の長さを有し、毎日四回時間を定めて、その中央にある一桁脚が開閉せらるゝやう出來てゐる。一回約一時間半離開してゐて、船舶の航行に便ぜられてゐる。尙この鐵橋の特色としては、汽車の軌道の左右に持つて行つて、幅八尺の步道が設けられ、特に行人の便利をはかつてゐることである。

奉天より山海關へ

奉天を起點として、北支那、北平に向ふ汽車は、現在山奉線（山海關奉天）又は平奉線と稱し、支那側では北寧線（北平遼寧間）とも云つてゐる。その全延長五百二十三哩、約二日の時間を要する鐵路である。こゝには便宜上、山關以南の處は、北支那の部に含め、關外山海關から奉天までの部分、卽ち

山奉線だけの間に見る沿線に就いて述べることゝする。

奉天から天津北平に向ふ鐵路は、今や滿洲事變以來、滿蒙新國家の方の手で經營するものと、山海關以南の支那側で經營してゐるものとの二つの部分から成ることになつた。滿鐵の車中に見る氣持とは、萬事ちがつてゐるのである。奉天驛を經て、本線を大連に向ふ汽車の方は、純日本內地式といつて差支へない感じがする。車掌、ボーイから食堂、凡て皆純日本式である。唯その列車が、廣軌といふ以外は、何等變つてゐない。所が平奉線はそのプラットホームの光景氣分からして、既に純支那式に出來てゐる。驛頭の乘り下り、車中の乘り心地、荷物運びの苦力、ビストルを腰にせる切符改め、乘客の行儀作法振り、停車中の物賣り、又停車時間の不定、時間の不規則など、その枚擧に遑のない程樣子がすつかり變つてゐる。

恐らく滿鐵沿線を、割引の恩典や、日本ボーイの親切振り、言葉の上の自由などの惠まれ切つた滿鐵の旅から來て、一足飛びに、この平奉線を西の方、北平さして南下する時は、少なからぬぎごちなさ、或は不安、或は驚異などを受け、萬感交々來るのである。支那事情に馴れてゐない旅客にとつてはかなり不自由を感じさせらるゝ譯である。が思ひやう取りやうで、これ迄の此の方の滿洲旅行は、實は支那旅行の氣持が加味されてゐなかつた。寧ろこの平奉線に來て始めて本格的の支那旅行といつた形に這入つたものとして見なければならない。

この意味に於て長春以北の火車であるとか、奉天以西の火車であるとか云ふものは、共に支那本來の火車としての眞面目が、ありく〳〵と強く表現されてゐる。滿洲の大衆を相手とする滿洲の火車は、かういつた純支那經營のものを見て、始めて支那生活の延長たる車中風景が味はれる。されば列車內に於ける清潔不潔の問題などは、始めから超越してゐなければならない。又客だねも山東だね、其他滿洲育ちの肥つた荒々しい姿した者が多く、滿鐵車中に見る如きかつちりとした日本人客などは、滅多に見ないのである。

奉天線からこの線路で南下するに當つて、主な街を擧げて見ると、新民屯、打虎山、溝帮子（カオパンツ）、錦州（チンシエン）（錦縣）、山海關、秦皇島、北戴河（ペイタイホ）などである。

新民屯は奉天平野中での有數な田舍都市として、法庫門、牛莊、雙臺子などと共に數へられるべき所で、水陸交通の衢に當り、商業取引も亦盛んな所である。

打虎山は前に述べた滿鐵平行線の打通鐵路の交錯點となつてゐる大事な驛で、その東蒙の奥地をひかへてゐる都だけに、將來大いに伸びるべきところとして、有望視せられてゐる。

溝帮子は滿鐵本線の大石橋から、營口、雙臺子を經て、本驛に合してゐる平奉鐵路の支線の起點な

るものではなく、漸く明朝時代以後になり、雅客のこれへ訪ね来る者が殖えたに過ぎない。今日これには鞍山店、又は湯崗子から進む二路があつて、千山の仙境は、滿洲隨一の幽邃閑雅な天地とせられ、前に述べた無量觀のほかに、青雲觀、太安宮、斗母宮、龍爪泉その他二十に餘る道觀が、夫々遊覽客をひきつけてゐる。又禪寺の方でも、大安寺、中會寺、香巖寺、祖越寺等の古刹が人間離れのした秘境にある。高僧大和尚達が、その禪道にいそしみ、滿洲の天地を超越して、西方十億萬土の開拓につとめてゐる讀經の聲は、林間に洩れ聞こえてゐる。

滿蒙の風物

「平沙萬里人煙を絶つ」と唐人の詩に歌はれた朔北蒙古の天地は、今や時代の文化に彩られ、最新式の自動車は長驅し、航空學校は開始せられてゐる外、長距離電話は設けられ、外蒙鐵路は起工せられると云つた風で、外蒙最近の開發振りは、文化各方面に亙り、かなり刮目して見るべきものが續出してゐる。

由來蒙古と云へば、滿目蕭寥たる沙漠地としてのみ考へられ、民國朝野ですら餘りに無關心であつたのであるが、やつと此の頃かうした雄々しき形勢が、一つに露西亞の蒙古進出の手に出て居る事に氣付き、俄然西藏方面の問題と共に之を適當に處理すべく、蒙藏委員會なるものが出來、北平には駐平辦事處の設置せらるゝ段取りにまでなつた。のみならず又長城以北には、綏遠、察哈爾（チャハル）、二省の新設を見ると云つた風で、邊防統制の事が深く考へられて來た。けれども尚長鞭馬腹に及ばざるの嫌があり、手が屆き兼ねてゐると見えて、事實上今日の外蒙は、謂はゞ赤露の力を滿喫し、赤露本國延長地帶の觀があつて、外蒙の内政は秘密主義が採られ、一切外人の入國を喜ばないとの事實さへ傳へられ、外蒙現時の風物などの事も、知るに由なき有樣である。

内蒙は、北平に達嶺より張家口（チャンチヤコウ）ドロンノールに通ずる蒙古路や、包頭（パオトウ）歸化城より東して北平に入る平綏鐵路など、從來幾多の交通路が開けてゐる。でも蒙古は千古以來駱駝の隊を組み、悠々曠野を通ふ光景を見るのが眞面目の處である。年來自分どもが蒙古路を跋渉せる折り、常に駝公の列を見、又その駝背で運ばるゝ物資の中に、鐵鍋、石油、藥草、麥粉と云つた物のあることなども認めてゐる。蒙古路と云へば、吹き荒む朔風の中に、駝公の胸に鳴る二尺餘の大鈴の音いとゆるやかに、その運ぶ足並みの鷹揚さ加減など、何れも皆思ひ出すだに懷かしみのたねである。その又大陸の夕暮れ、西天より投ぐる斜陽に照らされて、駝公の毛深き顏の麗はしき眺めなど、特に得がたい大陸畫とも云へる。蒙古路は長城、北門鎖鑰の石刻をあとに北行し、自ら畫中の人となり、駝公を道連れに駝夫の蒙古人

らしきと片言交りに語り合ふなど、趣があつて面白い。路傍時たま低き岩積みの厚塀で取圍まれたものを見るは、夏の炎天駝群の休憩に便ぜる駝店である。人間はからだを休むるに足を伸ばせるが、駝公はわさ〳〵四脚とも正しく折曲げ跪坐したまゝの姿をとつて休む。その樣が又いかにも可愛い。

駱駝と云へば蒙古を聯想させる風物中隨一のものとされてゐるが、北平に居て見ると、毎日曉靄にぼかされたあの城壁を背景に、駱駝の列の哈達門邊りから繰出されて來る景趣が指顧される。寒風颯烈肌を剌すと云つた零度三十度の時分でも、駝公は持ち前の毛深い肌毛以外何等纏へるものとてはないが、駝夫はもく〳〵とした綿入の袍子に褲子、それに風帽と云つて日本で云へば消防用の被ぶる物にも似た肩まで垂れのある帽子を被り、全身を十二分に包んだ扮裝でゐる。市民だちは平素かうした異風を見慣れてゐる故、その風帽をつけた人をさへ見れば、「他是蒙古來的」などと云ひ、笑ひ興じてゐる。又在留日本人の間で、誰れ云ふともなく有名な烤羊肉の野天料理を成吉斯汗料理などと呼びなせるも、その料理振りの奇拔な野趣から見て、こは誠に興味が深い。總じて蒙古風物の市民のあたまに映ぜる所と云へば、昔からその傳統的の邈とした概念のある中に、どことなく柔かい又大きい感じを以て受入れ、その間內蒙の、外蒙のと云つた別なんかは固より考へられてもゐない。況してその昨今傳へられてゐる如き、時々刻々急進しつゝあるガソリン文化南漸の新事實などに於いてをやである。

此を思ひ彼を考へると、民國邊境の將來は、益〻多事なるものがあると云つた氣持がする。

今之を日本にゐる日本人一般から見ると、蒙古の事は愚か、滿洲國の風物すら全く馬耳東風で、無關心も亦甚だしい者が多い。それでゐて日滿兩國の消長とか、經濟進展の方策とか云々することなど、どうして出來たものであらう。一般日本人の滿洲呼ばはりや、滿蒙の標語など飽くほど聞かされてもゐるが、實は多くは唯の掛聲のみに止まり、眞に滿洲風物に就いての理解のあるわけでもなく、又深く敎養の方面が考へられてゐるのでもない。それと云ふが、その山川、風土、世相、民情の日本と全く異れる舞臺へ持つて來て、日本人はいつもの理窟本位に出來てゐる常識を當てはめ、之で押し通して行かうとする。而かも日本流の狹い縱斷關係の組織に成る命令一下の事務振りで、萬事が取扱はるるものだときめてゐる。その飽くまで共に倶に手を握つて行くべき筈の滿洲住民を土臺に、之を立てて行く氣持を持たないのみか、兎角すると牢として拔くべからざる感情上の行違ひをそこに醸し、果ては隨所に香ばしくもない悲劇をさへ生ずるに至つてゐる。日本人が日本式の態度で行くは、自國內だけならば宜いか知れぬ。苟しくもその滿洲の天地に踏出し、大陸の空氣を吸ひ、大陸の世相の中で生き伸びて行かうとする者が、土地に流るゝ樣斷關係の相互扶助の心持も判つて居らず、之が實行が出來て居ないやうな事では、物になるわけがない。日本人はその土臺すら出來てゐないで、唯その理

窟の上のみに立ち、條約や物質の力だけを過信し、之を楯にとつて急進しようとする。ところが相手側はさるもの。もつと大きく出て、人間の作つた理窟など越え大自然の力を利用したり、大勢の潮流に乘つたりして、呑ん氣な態度でゆつくり進まうとしてゐる。同じ舞臺で鎬を削るにしても、双方の活躍は、本質的にこれ程の違ひがある。國際條約は固より嚴守さるべきものなるも、滿洲の天地に之を適用して見ると、いくら固い特殊權益が存してゐようと、又いくら立派な鐵道會社が立つてゐようと、日本が若しその理窟の一方にのみ執し囚はれ、神經を尖らせてゐるだけでは、決して伸びられる譯がない。寧ろ暫く法律離れのした高所大所から理論を超越して、世相民情を重く見、柔かい悠久な氣持で大勢の機微を握つて行くことに改めない限り、事志とたがひ、折角確保したつもりの權益、その物もいつしか水泡に歸して了ふ虞がある。

虚心坦懐、一般日本人の氣持を解剖して見ると、日本人は日清日露滿洲事變の戰勝に驕れるものばかりで、支那と云へばあたまごなしに見縊り呼ばうとする。そして日本人自身が、その最も短所とする大陸的生活の體驗や、その世相民情の機微の窺ふべきものを、隣人から見出すことに思ひを致すと云つた緊要事は全く忘れられてゐる。今日日本が、いくら大連の埠頭や廳舍ホテルの大を擁してゐるとも、さうした輸奐の雄のみで、滿洲の天地に漲る世相民心の大勢は、導いて行かれるものではない。時代は既に變つた。今日の滿洲は東亞の滿洲と云ふよりか、世界の滿洲となつてゐる事實を前提としていつも考へねばならぬ。さればこそ武力萬能の理論の蒸し返しや、蝸牛角上の爭など止めてしまひ、それに代るに民心の機微を察した有爲の士女があまた渡つて行つて、その各人が自ら進んで理解ある悠久な努力と、相互扶助の精神から、本當に土着民と融合し、共存共榮の實を擧ぐる事に專心盡さなくては嘘である。こは理窟の上で百の條約を結ぶよりも、幾百千倍の力となるか判らぬのである。ここに大陸陶冶五千年の眞理がある。この邊の眞理すら理解されず、徒に高く止まり、滿蒙新國家の殿堂に立て籠り、こゝに終生の安逸を貪らんとする如き徒のところに、どうして百年の福祉が來るであらう。繰返して云ふ。滿洲百年の成功は、理論の殿堂裏に安閑として居る徒に下さるべき者ではなく、寧ろその風物民情を會得して、共存扶助の實を擧げ得たる者にのみ下さるべきものである。今こゝには日本人一般に見る平素の行き方が、滿洲住民のそれと照し合せ、どれ位習性上の食ひ違ひを來たしてゐるか。そこを明かにする爲め、滿洲牧羊生活に見る民情風物の一斑を少し述べて見ようと思ふ。

滿蒙の牧羊生活

滿蒙から北支那一帶にかけ羊の放牧は、到る處見ない處はない。從つて羊毛皮の産出の如きも、非

常なものである。その奉天、吉林、哈爾賓から四平街、白音太拉（バインタラ）にかけ、又天津北平から包頭鎭にかけ、各都市と云ふ都市を目がけ、田舍から毎年その出盛りどきに集まつて來る羊毛皮の量と云つたら實にたいしたものである。この集散狀態を瞥見するだけでも、その奥地各地方に見る放牧の殷盛なことが偲ばれる。羊毛皮は羊毛羊肉と共に、支那一般日常生活の必需品となつてゐる處から、上古以來牧羊の體驗は、重要視されてゐる。ところが日本ではどうかと云ふと、そは昔から乏しい方で、國民生活のうちにも殆んど交渉がない。從つて羊に因む教養と云つたものも出來てゐない。何れの國にしても、思想風物の上から見て、羊が國民文化史の上に見えてゐると否とは、その民族の力が進展して行く上に、至大の關係を持つものと考へられる。今滿洲の地で之を見ると、あの廣い原野の地平線上から、都を指して幾十日となくひとりの牧童が鞭一本持つたきり、群羊を命よりも大切に放牧しつゝ渡つて來る。その始め遠き田舍を出る時分には、羊は仔羊であつたとの事であるが、道みち路草を食はせつゝ來るうち、都城近くなる迄には、立派に肥大するのである。牧童はその曠野のたゞ中に、毎日羊の群と一緒に起臥してゐるので、凡て人間生活を羊の生活中に編み込んでゐる形である。のみならずどこ迄も羊の氣持を尊重し、その意を迎へて、朝に夕にその毛なり皮なり肉なりの經濟價値を增さするやう苦心してゐる。それが爲め、いくら自己を犧牲にしても厭はない。心から自らを空しうし、

萬事羊本位に流れ流れて、而かも之を氣長く導くと云つた尊い體驗を繰返してゐる。仔細にその羊飼の執れる放牧振りを見てゐると、鞭一つ羊のからだに當てることさへしないのである。時たま鞭の音のパチンと、隨分遠くまで鳴り渡ることもあるにはあるが、そは路上の地面や岩石の壁面を力强くまゐるに過ぎない。群羊はその鳴り渡る音に刺戟され、散在してゐたものが忽ちにして統制されて來る。そのとき衆てよく馴らされた一疋の山羊又は狗が、群羊裏より現はれ來たり、きび〳〵した姿で勇ましくも先頭に立ち、全線に渡り右顧左眄の氣を配り、天晴れその働き振りを見せる邊り、何とも云へぬいぢらしく眺められる。かやうな風で、總べてが牧童の意の如く手足のやうに動く。羊か人か、人か羊か、渾然別なきに似て柔かい木訥な氣分を漲らせてゐるのである。

支那は上代から、羊の生活は卽ち自分たちの生活であると見られ、丁度家の字に家豚の含まるゝ如く、羊も亦家族の一員たるの感じがしてゐる。事實又こゝに羊のお蔭で衣食住が出來てゐるとの根本觀念も手傳つてゐる。從つて文學上にも、美の字、善の字、義の字などに羊の含まれてゐると云つた風で、羊そのものが生活行爲の善美の目標にまでされてゐることが見らるゝのである。今日支那の紳士淑女から、農夫漁翁船頭たちに就いて見ても、その性格中に、必ず羊の氣分に似たとでも云ひたいやうな優しい處が潛在してゐたり、又そこに大陸的の抱容力の閃めいてゐる處が認められたりする。

こは尚支那の藝術品で、石獅、高麗狛などのその相貌の猛々しい處のあるうちに、どことなく必ず優しい滑稽味の漂うてゐるものが認められるゝにも似てゐる。そこには必ず一本調子でなく、ゆとりのある情味と丸味のある氣分とが漲つてゐる。

滿蒙に對する日本人の覺悟

今若しかりに、牧羊の事が我れ〳〵日本人の手に托されたとしたらどうであらう。日本人はその從來の民族性からすると、自分の氣持を曲げてまで、羊に迎合せんとする氣の長い事は出來ない。寧ろ自分本位の露骨な一本調子で臨み、その牧羊の經驗のなかつた爲めでもあらうが、短兵急に時を選ばず鞭を使ひたがる。打たるゝものゝ氣分になつて見ることを忘れ、無暗みと鞭をふり上げ、內心快哉を叫ばうとする。いくら溫順な家畜でも、これでは氣持を損じひねくれて來る。日本人のかうした一方ぎめの高飛車的態度は、支那で之に驢馬を當てがつて見れば、一層鮮かに判る。たちのよい驢公であつても、日本人が乘つかると無駄な鞭が多いので、意地惡くなり、却つてその客を落馬させてかたきを取ることがある。支那人は優しい要領で馬の心になつて乘つかる。故に仇さるゝこともない。かうした態度は、家畜の場合のみに止まらない。朝鮮臺灣の如き新領土の同胞に對する時などは、特に心すべきであることは云ふ迄もない事であるのに、直ぐ地金を露はして來たり、はたで見てゐてはらはらさせられた事が一再ならずある。日淸戰役この方、隣邦の人士に對して取つた日本人の露骨な態度に至つては、言語に絶するものがある。心ある日本人は、何れも皆日本人側に遺憾な點多きことを確認してゐる。

思ふに日本人は歷史あつて以來未だ嘗つて外國からひどく叩き附けられた苦い體驗を持つて居ないせいでもあらう。國際交誼の深刻な處を思ひやる丈のゆとりを持つてゐない。そして唯弱者を見ると、高飛車に高く出で而かも得意顏に之を優越視なりと早合點し、快哉を買はうとする。かく自己の小さい刹那的の氣持を滿足させる事を以つて能事となし、相手の心意を尊重する氣持の乏しい譯は、恐らく日本現時の縱斷關係に成る世相にのみ慣れた弊の暴露したものとも云へるであらう。然かし今後國際舞臺の第一線に立たんとする大國民にして、かゝる情味とゆとりに乏しい態度で得意になるやうな事であつては、果して滿洲全土の民心と、眞に相和し、その間隔意なき進出など期せらるべきものであらうか。物の云へない羊や、驢公をして無理に物語らしむるまでもなく明々白々の事なのである。

つまり滿洲の新天地は、政治の方面、國際の方面、經濟方面と、その見方は色々あるも、何れも一方ぎめの理窟にのみ立脚した態度なんか超脫して、高所大所から全滿の民心に重きをおき、氣長く、

大きく、且つ柔かい態度で漸進し、そのうちに急所の處だけは要領よく獲て行くと云ふ風にならなくては、萬全の策ではあるまい。日本側からいくら權益論ばかり騒し、獨り神經を尖らせて見たつて、決して始まらぬ。のみならず、將來總勘定を見ると云つた時、日本は結局滿洲そのものの核心に觸れた成功を得ることは出來ないであらう。埠頭や鐵道の大を擁してゐても、大きい所で四方八方から相手側に致され、理窟負けがした形になつて了つたり、又列國側に漁夫の利を占められたりして、事志とたがひ、畢竟するに日本は滿洲の國際舞臺に事實上降り坂を辿る悲運を見るに至るかも知れぬと云つた氣持もする。されば日本人たるもの、一等國など云ふ夢に醉ふことを止め、今日餘程の重大時期に際會してゐる此の秋に於いて、飜然過去の小さき優越觀など云ふ糠喜びを棄てゝしまひ、謙く内省一番羊飼の故智でも學んで、世相を達觀し、民情の流に棹し、春風駘蕩の情趣を滿蒙の天地に漲らせるやう、御互に努むることを望むや切なるものがあるのである。

滿蒙新國家の建設

滿蒙事變を一轉期に、今や滿蒙新國家の建設を見るに至つた事は、高所大所から見て、東亞の平和保證のために、又人類幸福招來の爲めに、慶賀に堪へない。既や滿洲三千萬の住民、竝に機會均等の下に活躍せる内外人達も、茲に始めて門戸開放の實を味ひ得る緒を得たので、滿足して居る事であらう。今後の新國家存立進展の如何は、殊に吾人日本人にとつて最も關心の深い問題である。

所が舊來の所謂滿洲に對しては、種々の不合理や、國際法無視など慊らないものが多かつた。同時に又日本人側にも、反省を促したい事柄が少なくなかつた。茲に新たに國家の組織を見た以上は、少なくとも、日本人側の舊弊は打開して、更により大なる新天地の基礎建設に向つて力を致すべきである。動もすれば、從來は單なる國際法上の特殊權益にのみ重きをおき法律を本とした議論に終始してゐた。が一旦その武力行使によつて總勘定は精算せらるゝ大詰となつた。此に於て國民は軍事行動に感謝し、滿洲の野に屍を埋めた將卒に滿腔の感謝を捧げ、そこには涙ぐましい美談逸話も數限りなく生れた。然し飜つて考へて見るに、幾ら滿蒙の天地に新國家の確立を見たにしても、その主體は支那人同族の滿洲人であつて、他の者でない。

支那民族が社會生活の上に堅忍不拔の意氣と、粘り强さを持つてゐる事は、武力の一時的效果よりも一層侮るべからざる者がある。日本の方で廿四時間以内の最後の通牒を振り翳して見ても、支那人心理では何の事やら諒解されてゐないと云つた有樣である。名目の上では幾ら新政權を云々して見た所で、その根が常に國家を超越したタガの弛んだ行き方をしてゐる手合である。建設の當初こそは物

珍らしげに鼓腹撃壌で、調子づいても居よう。けれ共物の五年十年と經つた先の事を考へて見れば、人の手を煩す丈煩してゐて、そこにいつとなく民族的の本音を現はして來る場合があるかも知れぬ。古來三千年の歴史は之を最も有力に物語つてゐる。

支那では二と二を加へて四になるやうな結果を滿足な感じで見てゐる者は恐らくゐない。法律問題や利權問題は支那以外の法治國に於いて始めて有效だと見てもよい位である。支那民族性から云ふと、二二が四で出來てゐる大連の埠頭だの、奉天新市街だのいふ處はピツタリ合つた者とは云はれない。滿洲の天地には滿洲獨特の行き方があり、常に之が培養に努力をしてゐてさへ、思はしい結果が見られない。我が滿鐵に見る苦心振りを以てしても、その一斑はよく判る。又日本人の朝野の眼は滿鐵を育て上げようとする事よりも、寧ろ喰ひ物にしてゐる傾も見られ、事實の眞相は知らぬが、歴代の大政黨も總選擧その他の物入りの際、常に之を米櫃となし、又それに忠義立をせんとする者もあり、それによつて首の安全を計らうと迄考へてゐるとの話もある。又在留民側でも滿洲に渡つた動機は直接、間接、滿鐵王國又はその傍系會社の餘澤を當てにせんとする者が多い。口に滿蒙を說き、常に優越感を振舞はして高く嘯くことを事となし、その自ら滿蒙の奥地にまで細胞組織的に粉骨碎身する者は少ない。あの大連市民の生活振りを見ても、同じ市民である支那人街の連中とは一向にしつくり來てゐない。大連は名こそ日本の租借地になつてもゐるが、實は支那富豪連の所有に歸してゐる土地家屋も少なくなく、底を流れてゐる財力は年一年と日本人の手から離れつゝある實情であつた。

新政權を前に、日本民族の滿洲に於ける態度とその生活振り、並に財力の方面は一向に板につかず、殊に日本内地から滿洲々々と云つてゐる者は濡れ手に粟を夢見てゐる嫌ひがあり、何處までも滿洲そのものに深く根を下ろすこと、宛ら南洋に於けるかの華僑が打込んでやつてゐる如き肚を見せてゐる者は少ない。今や滿蒙を云々する者は、先づ舊弊を打開すべく今日この好時期に於いて國民的覺悟を鼓吹することが緊要事でないかと信ずるのである。

その衝しくも、異民族が形造つてゐるよその社會へ這入り込み、行末長く經濟生活を營んで行かうとするには、特に日本人としてそこに心掛くべき幾多の問題がある。始めから云ふ事を肯かなければ敲きつけるぞと云つた態度を一枚看板として進む事は、新國家建設の將來より見て考慮を要することである。

とどの詰り最後の幕は、これ亦仕方がないとしても、二た言目には直ぐサーベルをと云ふのでは、軍閥に懲り懲りしてゐる土着民にとつてその意中が察せられる。形式的には嚴令も行はれるであらう。が目標は春風駘蕩の雰圍氣の裏に經濟生活をどこまでも遂げしむるに在るべきである。由來日本

民族は、家族的生活の方面に、幾多の美點を有し、互に相助け合ふ丈のゆとりもある。所が異民族に接する場合の當り方、交際振り、心使ひ、思ひやり、話振りなどに至つては、修練を要する者がないでもない。その上いつも短氣が手傳つて、すぐ相手方を睨みつけ、腕を振り上げると云つた態度が見える。

滿洲の人は喧嘩をするにも、その文字の示してゐる如く、常に口論を圖はすのみであつて、今も手が出さうな氣配を見せるが、唯肩をビリビリさせる丈で容易に腕を振り上げず、結局言葉の方から、うまく要領を得て行く。氣は長く、我慢は強い。自治の精神と自己防衛の手段は個人個人に可なりよく發達してゐる。日滿雙方の長所、行き方には深刻なる喰ひ違ひがあり、互に香ばしくない言葉を吐いてもゐるが、雙方そこには理窟がある。

若し日本民族が眞に滿蒙新國家へ乘り出さうとするには過去の武力一點張りの外に、民心の機微を摑む丈の修養を積み、今少し朗らかに、相手に感じよく打つて出る丈の心のゆとりがあつて欲しい。兵匪の滅絕には特殊の長所を有してゐても、長閑に地方の百姓、商人などを相手に心を惹き付くる丈の懐かしみを持つてゐてもらひたい。從來臺灣に朝鮮に官民の取つた態度は、民心收攬の上には殆んど落第に近い成績を暴露してゐる。それと云ふが行つた先の風俗習慣を理解せず、民情の濃やかな所に思を馳せず、つまりこは異民族に接する上の修養と經驗に乏しかつた結果の致す所であつたと云へる。

滿洲の天地は勿論あの通り一望千里の大平野である丈に大陸氣分を總ての土民が持つてゐる。勞働者風情にしても、食後、鳥籠を提げて散歩に出かけると云つた風韻を示してゐる。別段大陸かぶれをする必要もないが、あのロシア人が五年計畫の下に、宏大な外蒙古に踏入り、庫倫の都を中心に、自動車路や鐵道その他航空に、軍事に、政治に、財政にとあらゆる方面の侵略を敢てし、今や露語に直された地圖までを完成してゐると云ふ有樣である。而かも支那官憲から之に一言の厭や味さへ云はれてゐない位すらすらと進行してゐる。その間スラヴ族のふうわりとした大陸的のこつが支那側に對して何等ぎごちない感じさへ與へてゐないことが判る。ロシア人の支那人に接するやり方は日本人の滿蒙に對する出方よりも確かに民心の機微を摑む上に於て二枚も三枚もうは手である。いつも號外式に景氣よく打つて出ることばかりが能ではない。

今日滿蒙新政權の確立と同時に日本の武力行使を土民達が感謝してくれてゐることは當然の譯だが、滿洲事變以前、あれだけの秩序維持に就いての日本の緣の下の力が感謝されてゐたかどうか。餘りよい氣になり調子づいてこちら計りきめ込んでゐた所で、相手國の內容は依然支那民族であり、そ

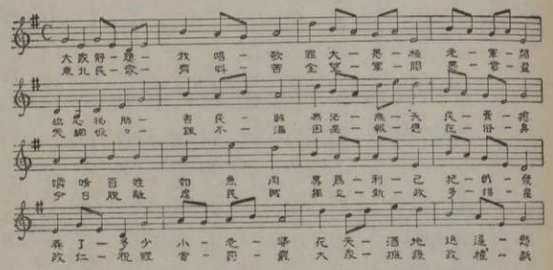
こに日本としては武力以外に民心を掴む或る者を用意してゐなくてはならぬ。そこに今までの努力が水泡に歸してしまふ心配がないでもない。將來滿洲が單なる優越感のみで行けるものと思つたら大變な間違ひであると云ふ氣がしてならぬのである。

支那は阿片戰爭以來八十年間に亙り、英國の實力を以て各地に租界を作らせ、文化施設をあらゆる方面に完成させておき乍ら、最近上海のそれを除く外は悉く皆奪回し去つた。この事實は支那側の長期に亙る外交上の凄腕とも見られる。大英國こそよい迷惑で馬鹿を見た譯である。

支那は愚の如く見えてゐるが列國人の目の屆かない長期の外交には、かなり冴えた腕を見せてゐる。新國家建設の機運の生まれるに至る迄の、日本の努力は、軍事に外交に、殆んど血の出る思ひをなし、國民は號外の出る度に血眼になつて滿洲の空を眺め、聯盟の雲行を考へてゐる。然し今迄の滿蒙の天地は、空き家同樣の殿堂とも見られ、日本は手辨當旅裝持出しで、零度以下三十度の氷上につらい思をして迄、各堂内の蜘蛛の巢をとり、鼠を追つ拂ひ、柱に壁に天井にホルマリン消毒を完全に成し遂げ、實に住み心地のよき大掃除の大任を果した形である。然し殿堂は元來向ふの物であつて、決して日本の物ではない。その間何ら野心のない事は、英米その他の列國も諒としてゐるところである。所でこに住まふ主人公達は人の手で綺麗さつぱりと濟めて貰つて、よい氣分をきめ込んでゐるであらうが、是から先の問題は、軍事行動以外、日本人側にこれ迄の武力に匹敵する丈の文化的貢獻の用意ありや否や、この問題は爰で最も重大視さるべき日本の浮沈にも關する重要性を持つてゐる。今頃になつて始めて、思ひ出したやうに、拓務省が出張所を奉天におく必要を感じて見たり、文部内務は一向まだ滿洲どころの騒ぎでありませんよと云つた目先き主義にのみ追はれ、維れ日も足らずと云つた有樣である。

滿鐵の沿線と云ふ沿線を親しく歩いて見るに、奥大將が何師團の兵を持つてこゝを占領したとか、三十七八年戰役にあそこの山を占領したとか、その過去の武力を宣讃した立札のみは到る處驛の構内に立てられてゐる。が悲しい哉、その半面に遼陽の驛でもどこの驛でも、その收入額の實際を耳打ちして聞いて見ると、驛員は「いや早やお話になりません」と云つて平年の半分にも足りないみじめさをこぼしてゐる。

こゝには何も收入の多寡のことをとやかうと云ふ譯ではないが、日本人の滿蒙に對する關心は常にその武力行使の一點張りでゐることである。滿洲人と直接自ら取引の交涉に當たるといふ決心の堅い者もわりに少なく、やつと此の頃滿鐵では採用する社員に、支那語を課するの必要を悟つたと云ふ手ぬるい、しかも鷹揚な行き方をしてゐる。

新政權歌

新興の滿洲國に新政權の唱歌として生れ出たいの一番の歌の譜

た用意を持たせることに國民的の努力を向はしめるやう努めなくてはこの舊弊を打開しうべき千載一遇の好轉機を逸してしまふ處れがあると考へる次第である。

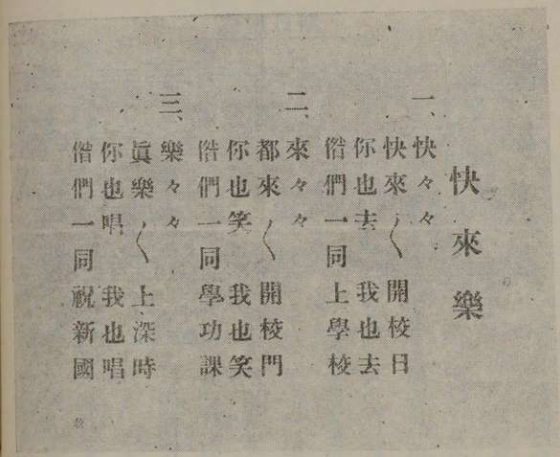
○

滿洲國は、世人も知る如く、昭和七年三月一日（大同元年三月一日）、舊來の中華民國の領土から、完全に獨立し、中外に滿洲國樹立の宣言を發した。新國家の面積は奉天、吉林、黑龍江熱河の四省及び蒙古、コンバイル諸地方を加へた七萬七千三百十四方里、人口は約三千四百萬人、更に又興地なる興安省が編入せられたわけで、東亞の旅行者は、新天地の盛運を祝福すると同時に、出來得る限り、その民情風物を察し、大自然の資源、產業、交通等の方面についても、うはすべりのしない觀察をなし、意義ある旅行の目的を達すべきである。

新天地の首都は、中央の長春に定められ、二十年計劃で、東

滿洲を歩いて、一等印象深く感ずるのは在留民の多數が所謂お役所氣分に馴れてゐると云ふ點これである。別にそれが惡いとも云はぬが、あの廣い曠野で滿洲人がこつこつ一日五錢十錢で喰べて行かうと云ふ粘り強い氣分の、裏面に流れてゐるに比べて、餘りに懸絶があり、非滿洲的であり大陸生存の第一義を沒却したものとも云へる。何れの日か、細胞的に深き根をこれで下ろされるものか。百年河清の感がしてならぬのである。

日本人はアフリカに行つて、洗濯屋をしたり、アメリカに渡つて、皿洗ひをしたり、外國船に乘込んだ日本ボーイはお掃除が一等行屆くと云つて褒められたり、常に清潔法を以て世界から褒められてゐる。滿洲の兵匪を大掃除したのも、これ亦世間から賞讃される價値が十分にある。然しそれ丈で、軍事行動以外にあとの實を結ぶ丈の用意がまだ出來て居らず、その間百年の計が立てられてゐない。行當たりばつたり主義では、たとへ支那は、八十年間無駄骨をした大英國の二の舞を踏ませる程に腹黑くもないにしても、然し日本人に自らその言葉も通ぜず、風習にもなじます、人心の機微、思想の轉換が奈邊にあるかの細かい頭も働かず、唯各地に軍事顧問の一人位をおいておく丈で大滿蒙の要領を摑ませようとする、それは出來た相談ではない。拓務文部は固より、民間の有力な方面からも、この際あの廣い又意味深き滿蒙文化生活の實相に就いて、十分の認識を持ちその潤ひのある實際に即し



滿洲國少年少女たちの歌ひ踊る勇ましき開國の歌

西三十支里にまたがる大都市計畫がなるに至つた。上に述べた元首の溥儀氏（二十九歳）が執政の位につき、王道にもとづく民主政體の政治が敷かれ、從來の壓迫的軍閥政治から完全に脫却して、明かるい朗らかな王道のもとに善政を謳歌するの世となつた。殊に軍政方面の經費については一切公表主義を取るに至つた。これは如何に三千萬の住民の幸福とするところか知れない。又住民は漢、滿蒙、回、日、鮮、露、その他の白人等、世界何れの人種たるを問はず、在住三ケ年に達する者は、滿洲國の人民たりうる權利を享受しうることになつてゐる。從來の機會均等、外交條約などの國際關係も一層確實に保障せらるゝこととなる。列國間に於ても、こ

れ迄の不安、もつれが一掃せられ、今迄にない福祉をもたらすこととなつた。

新國家の建設と同時に、國號、國體、元首の決まつた外に、憲法も制定せられ、年號もきまり、國旗もきまつた。（滿地黃旗に紅藍白黑の四線を、その四分の一のところに描く）首都の位置も定まり、領土内の人民はもとより、遠く蒙古諸地方の群王達も、日に日に、新國家の瑞兆を祝福するため、はるばる來朝すると云ふお正月氣分を見せてゐる。

滿洲諸地方の片田舍で、人口の稀薄であつたところ、また資源調査のこれまで官憲に邪魔せられてゐたところなども、俄かに明るみに出され、これからは、平和裡に勇ましく、公人、私人の去來も繁しくなるに至つた。もつともたまには、滿洲名物の馬賊も名殘りが見えないでもないが、これは某方面の手ですつかり滅絕させることであるから、從來の奥地の交通不安、秩序の紊亂は全くなくなつた。從つて、如何なる片田舍へも安心して出かけられる有難い御代となつた。

吉林を奥深く這入つた森林地帶には、無限の原始林があり、前人未踏の祕境と云はれてゐるところもある。從來、日本が要求する木材は、北米、カナダ地方から、はるばる輸入せられてゐたが、今後は吉林から、鐵路又水運により、北朝鮮の港に、これを伐採して送り出し、日本海を經て、我に持つて來ると云ふ計畫も、氣の速い人達の間では、着々進行しつゝある。また北朝鮮では、溫泉場の開發

貯木池の設計、保養地の分譲など、事業家は、それ〴〵腕に撚りをかけて、東京へ低利資金の運動に往復してゐるものが少くない。

滿洲は奉天に、撫順に、長春にと、仕事を漁るため、または何かにありつかうと、當てもなく出かくる青年達も多く、一時は、軍部でも、無錢旅行者の始末に、殆んど手を燒いてゐたくらゐである。大きいところでは、製鋼所の問題で、今は蘇河屯に、決定を見たが或は鞍山站に、また新義州にと、その所在地の奪ひ合ひで、巨頭の去來も相當に賑つてゐた。また商賣方面では、東京から、又大阪から、生産過多の化粧品、はみがき、各雜貨等、あらゆる品物の見本市、或は展覽會を移動的に開催して、滿蒙の天地隨所に、これを說明し、宣傳し、もつて大いに販路の擴張を計らうと、景氣のよいところをやる快男子の叫びもある。

行けよ、行け！　滿蒙の新天地。日本の新青年、新興の意氣に燃ゆる實業家、農夫、園藝家、操觚業者、教育家、醫者、技術家など、この機を逸せず、一日も早く滿洲大陸の大自然に接し、それ〴〵その專門とするところに向つて、要領よく視察をとげ、その大いに爲すあらんとする急所を、周圍の社會相と合せて、視て來なくてはならぬ。唯しかし、滿洲を見る目は、日本流の氣のきいた、ハイカラた觀察では、底力に足りない所がある。また滿洲の相手は、あの悠久な急がない態度で、根氣のよい仕事を營み、生活をしてゐる人達であり、その日常の生計費が、極めて安く行つてゐる連中のみである。氣のきいた、高級な考へ方などでは到底消化しきれないものとなる。その邊は、よほど程度を下げ、而も堅實味第一主義で、大陸的の氣分に合致することを眼目とすべきである。

四　支那旅行の行程

北支那

河北省

塘沽及びその附近

日本の港を出て、大連に寄港し、西に渤海灣の海上を突切り、黄河の沖合から白河に至るその間は、一面に黄色の濁流が湛へてゐる。遙か彼方の水天髣髴、雲か陸地か判きりはしない水平線上に、何んとなく黒點らしいものが、あちこちに認められると云ふ光景。これは天津航路をとる旅行者が、常に經驗する所の太沽(タークー)沖合の眺めである。海岸近くなつても、遠淺は幾十哩と長く續き、この邊り一帶の海濱といふ海濱は、何處を海岸線に見立てゝ地圖を描けばよいのか、さつぱり解らない。

船はいつしかその泥海の中に、わづかに航路を見出して、西へ〳〵と船首を進める。そしていつしか海岸から遠淺を深く別け入り、白河の流れを遡るのである。太沽の燈臺や、砲臺の處をそばに認めつゝ、船は次第に向つて右手の岸を沿うて上る。港らしい港といつてはないが、塘沽(タンクー)の碼頭と云ふ

が、普通天津航路の船の横づけされる所となつてゐる。一寒村に過ぎないが、船着としてはなつかしい。客船は右岸に、荷物船はどうかすると左岸に錨を下す事が多い。白河を上る船は、吃水が淺く出來てゐて、所謂九十九曲の流れを廻り、天津の租界まで行けるやうになつてゐる。が兎角航路の水深が流れの都合で毎年變はり、誠に思ふに任せないのは遺憾である。事實天津まで這入つて行ける機會は少く、大抵はこの塘沽止りである。時には數多の汽船が、太沽の沖合ひに舳艫相銜んで錨を下してゐる光景を見ることもある。これは多く白河河口の潮時を見て入港せんとしてゐる光景なのである。

塘沽の船着場には、大阪商船、近海郵船の出張所が、驛の近くに設けられてゐて、船の入港するや、天津の支店からも、それ〳〵客の出迎へやら、揚荷、積荷の手仕舞ひやらで、その係りの店員が船中まで伺ひに來る例である。

天津行の乘客は、無論日本を出るときから、天津までの切符を持つてゐるのであるが、塘沽に上げられると、會社の方で塘沽天津間の火車の切符を手交してくれる。これで奉天から來る北平行きの火車を待つて之に乘り、一路天津、北平へと向ふのである。これらの日本人客も、若し興味があり、又た時間の許す者は、なるたけ案内者を得て、この塘沽あたり一帶の大きい海濱の風物を觀察するとよろしい。と云ふのは、日本人には物珍らしい鹽田がこゝにある。こは北支那地方で有名な鹽田で、その大仕掛な事業振りに又支那式の風車を時計仕掛けに用ひた巧みな水揚げの裝置、それから沿岸地方に於ける田夫漁夫達の生活の實狀など、一應見物するも亦一興である。或は更に北に進み、山海關、長城の一角の樣子を見るべく、或は秦皇島に又北戴河（ペイタイホ）の海岸に、或は又山水美に富む灤州河邊の風景、それに有名な開平炭の本場の開平驛頭の盛大な景況などを觀察し、唐山（タンシャン）の驛から塘沽へと歸る。

このあたりの海岸を傳つて行く關内の旅は、小時間にして事が足りる。しかも天津、北平方面に這入つてしまつては、誰れ人も全然體驗することの出來ない珍らしい旅の趣味の味はれるところである。元より奉天から南下する天津行の旅客は、自らこゝを通過し得るわけであるから、陸路をとつた客には、改めて勸めるまでもないのである。

塘沽の船着はさゝやかな漁村の、やゝ發達したものに過ぎないものとも評し得べく、從つて驛も大して振つてゐない。誠に北支那寒村の一碼頭たるに過ぎない。がしかし、この界隈での見物は、何んといつても宏大無邊のあの鹽田事業と開平一帶に於ける石炭事業のこの二者でなくてはならぬ。實にこの兩者は、支那の旅で始めて足を北支部に印する者に、絶大の印象を與へる所である。怖らく海國日本の製鹽事業と云へども、この地方に見るそれの如く廣い面積に亙つた製鹽場は見出されない。臺灣中部、鹿港のそれを以てしても、その幾百千倍なるかを知らない。しかもその際涯のない鹽田の唯

中に、猛烈な音を立てゝ、車仕掛の鹽釜の裝置と煙突の黒煙天に漲れる光景を見るのは、又一段の壯觀を覺ゆるのである。

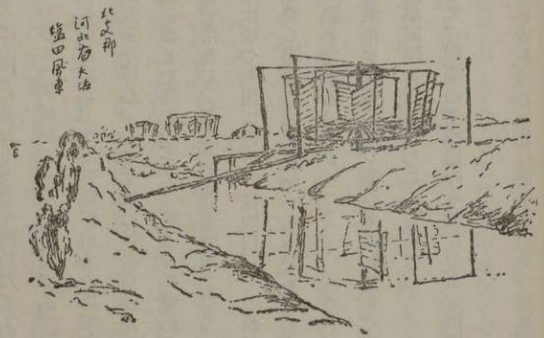
塘沽の驛から、天津に行くまでの沿道は、北支那獨特の泥屋ばかりが、村々に散點し、畑の土も、道路の土も、民家の壁も、屋根も、凡てこれ一色、瓦のある家などは、お寺か何かでない限りは殆んど見ない。所どころに柳の綠色を見ないでもないが、秋の暮から、冬枯れにかけては、滿目蕭寥として、誠に單調又單調の北支那らしい景趣を見せてゐる。

白河は、冬の流れは幾分結氷すること多く、碎氷機をつけた船の上下してゐるのを見ることがある。白河の沿道に、物珍らしく感ずるのは、窓外見渡す限りつゞくあの鹽山の多いことである。曠野に壘々と連列せる鹽山は、何れもアンペラが被ぶされてある。その鹽山の幾哩となく曠野に續いてゐる壯觀は驚くのほかない。怖らく北支那幾千萬の住民達を養つてゐる食鹽は、これらの鹽の山から供給されてゐるものであらう。車中で偶然奉天衙門の役人吳融春(暢侯)大人や、お伴の陳某と一緒になり、差向ひに窓外の光景を眺めつゝ、四方山の話に耽つた。その中に色々な珍らしい話題も出た。その話の一節にかう云ふのもあつた。

『御覽の通りこの鹽山は、たゞ地方民の食糧に之れが供せられてゐるばかりでなく、土民があゝいつた土壁を造るに當つても、大層役に立つてゐる。その建築用の煉瓦を練る時分にも、二寸位に切つた藁と一緒に、鹽なんかも振り込み、その土質を固めんとする上に大層大事な役目をなしてゐるものである。それにしても、隨分この鹽は澤山藏せられてゐるのです』云々。

と說明してくれた。道理で建築專門家から聞いてゐる話に、壁土に鹽を雜ぜるときは、壁の締りが堅くなり、わけて、防火の目的にも最も妙であると云ふことである。

太古ながらの田舍生活を營み續けて來てゐるこの地方の農夫田夫達は偉いもので、長年の經驗からこの難かしい學理に合つたことを、ちやんとその儘實行してゐる。河沿ひの路傍に、荷揚げをしてゐる煉



天津の入口塘沽白河畔に見る鹽田の光景、船の帆と同じ形の羽を利用し、風力によりて海水を鹽田に導き、之を煮て鹽を製す。その規模の大なる驚くべきものがある。

瓦を見ると、宛ら六朝時代の塼と同じ大きい長方の形で、唯太陽に乾かしたまゝ固めたものであつて、別段火力にかけたものではなく、粗糙なもののやうである。大抵長さ一尺、厚み三寸位のもので、これを積みかさねて家を建てる。木匠(ムーチャン)、瓦匠(ワーチャン)の手を要することなく、たゞ百姓が自分で以て無雜作に四本柱を建て、それを力に、一枚々々とこのお粗末な煉瓦を積重ね、そして柳の枝の束ねたのや、藁の束など、垂木の代用として、天井に渡し、これに又鹽を雜ぜた泥をべた〳〵塗り、外壁から屋根の上まで一樣に無雜作に塗り潰すのである。窓を一つ作るではなし、全く原始的な住宅である。唯一つ、必ずその屋根の一部、又は厚壁の側面から、土管が一本にゆつと出てゐるのは面白い。これは屋内の床下を、温突(オンドル)式にくゞらせた炊事後の煙をば、壁中にうまく導き、之を戸外へ吐かせる爲めの煙突に過ぎぬ。この煙突のあたまを諸處で見うけるのは面白い眺めである。

始めての旅客が天津への沿道に、かういつた單純なる風情を見るのは、鹽の山にしても、煙突にしても、凡て一年を通じて、雨の少いといふ地理上の理由が原因をなしてゐるのである。

窓から左手に見えてゐる白河の流れは、濁流滾々として、岸邊の老樹叢の木蔭などから隱顯してゐるのである。

奥先生の話す所によると、白河の名稱はもと『百河』といふべきであつたのを、この水流が餘りに極端に曲りくねつてゐて、文字通り九十九曲もある。そこで百の字から一を差引いた殘りの、九十九を意味する爲め、百から出た白の字を用ひてゐるのだと説明し、さう云ひ乍ら自分で笑ひくづれてゐた。子供だまし見たやうな無邪氣な話であるが、さう聞いて見ると成ほどと思はれ、すぐ向ふの楊樹の蔭からは、舟の帆が見えて來てゐるのに、水路はSの字形に、大廻りをして、曲りくねつてゐる樣子が判る。河邊の牧童、農家の子供達は、夏の土用頃になると、眞裸であの灰を溶かした如き濁流の中で泳ぎ、燥(はしや)げる無邪氣さなど、支那の旅には最もふさはしい眺めである。それよりも尙もつと支那らしいのは、河邊の農夫達が、あの濁流を汲んで炊事をしてゐる光景であつて、早くもこゝに太古そのまゝの感じのする風情を見出すのである。

天津に着くまでは、かうした窓外の光景を話題に、よき話相手の支那客と語り續けてゐると、思はず、支那風土の實況がしつくりと理解される。そばに乗り合せてゐたお內儀さん風の日本の女が、詰めよつて來て、活潑な九州訛りの辯舌で以て、一鎖り日支親善論から、風物研究の打込んだ所を一席始めたのである。そのいふ所を默つて聞いてゐると、かう云ふ話である。

『天津在留の支店長の奥さんだとか、領事館のお役人さん達の家族どもとかいふものは、不斷お上品に構へてゐるばかりで、城內の支那街、估衣街(クイチェ)あたりに買物があつても、支那人を使ひに出すばかり

で、御自分自ら出かけて行くなどいふ氣持がありません。だから、いざといふ時は、尚更支那街に這入つて行かうなど云ふ勇氣も出ませぬ。私達は、かれこれ十七年間も天津にゐるので、出來るだけ平素支那人の家庭とも懇意にし、城内邊りへも毎日のやうに出かけて行き、お互ひに交際をしてゐます。天津の、北平のと、太いことばかりいつてゐても、奥さん氣取りの日本人ばかりがゐるのでは、日本は伸びて行かれまツせぬ。』

などと、時折りはバツテン言葉も雜へて、九州女丈夫の鋭い閃きを見せてゐた。

吳先生はこれに當てられてゐた樣子も見せず、唯支那服の長い袖をこまぬいて、支那流に首を圓く廻して頷いてゐた。內儀さんは益々得意になつて、こんどは最近の天津時局の一鎖りの席に這入らうといふ時、河向ふの空に高く聳ゆる煉瓦工場の煙突が見え始めた。自分は

『そろ〳〵天津へ近づきましたね。』

と言葉を遮つたが、內儀さんの辯舌は當るべからざるものがあつて、その列擧する實例の如きも、大いに耳を傾けしむるに足るものがあつた。

天津

天津の港については、特に日本人の旅客として注目すべきものが多い。第一日本から來る船の着く碼頭は、これ迄度々問題になつて、そのかみ手の方の碼頭を造るにも、莫大な金をかけたものである。といふのは、塘沽に船を横づけさせるよりも、奥まで遡行させる方が、天津の繁榮策にもなり、天津租界の發展上にも是非共といふ所から、遂にその大方針のもとに、工事を完成したものである。詰る所が、白河を遡る船の爲めに、冬季河上の結氷を破碎させてゐたのであつた。すると一見この碎氷の思ひつきはよいやうであつたけれども、昔はかやうなことはせず、自然の流れのまゝに任せてゐた。水は結氷した氷の下をもぐりもぐつて行く爲めに、勢ひ河床を自ら掘りさげつゝ下つてゐたものである。それだから河床はいつとはなくその結氷期間になると、却つてよく掘れて行つた。河底はこのため淺くならないで、うまく調節されて行つたものである。然るに此の頃は文明の利器を利用して、わざわざ結氷を打碎き、航路をたやすくするやう打開いたその關係から氷は上滑りがして、表面の方を流れるやうになり、河床を深く掘りつゝ下るといふ自然の作用がなくなつてしまつた。その結果、河床は年一年と泥を抑寄せ淺くなる一方になつた。

天津の日本人が、折角多額の費用をかけてつくつた日本の碼頭も、工事は完成したが河が淺くなり、船が上れぬといふ思に任せぬ悲哀を見るに至つた。怖らくこれは、天津在留の日本人一人としてこぼ

さぬものはなかつた、所が支那の自然はどう云ふ加減か、最近になつて次第と泥が掘れて來て、遡江に都合よくなつたといはれてゐる。それが又この頃は甘く行かなくなつたと云ふことである。

天津の驛は、中央車站（ツオチヤン）と、東站（トンチヤン）、西站（シイチヤン）の三驛があり、下手をして西驛などへ下りやうものなら、支那街に行く者は便利であるが、日本の租界に行く者には、飛んだことになつてしまふ。天津市中で見物するものとしては、日本租界、英租界などの新式街路から、大和公園、ビクトリヤ公園、李公祠（リーコンス）（李鴻章を祀つた祠）鼓樓、海光寺などのほか、舊露西亞租界の黃色塔などが、最も目を惹いてゐる。

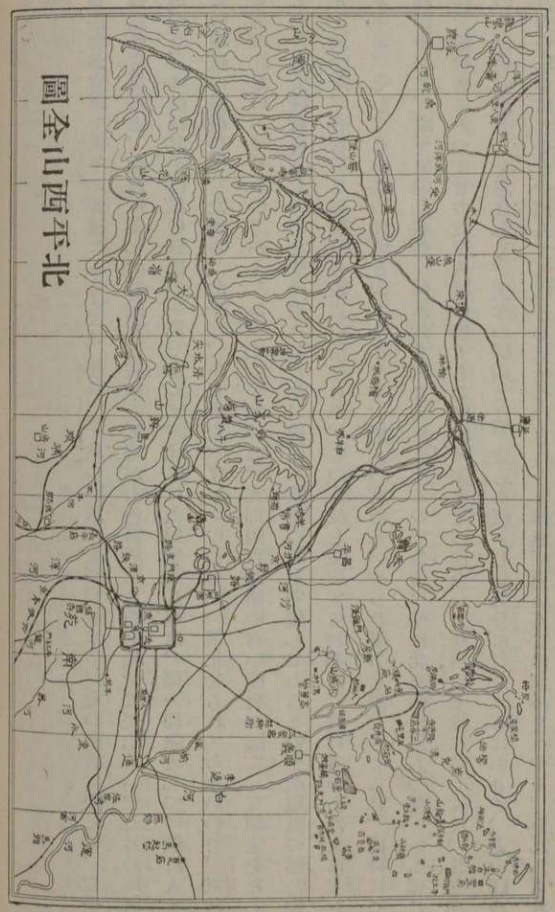
ホテルとしては、壽街の常磐ホテルを始め、日本宿に有名なものが多い。尙英租界のアストルハウス、佛租界のインピレアルホテルなどがよく知られてゐる。

天津の料理としては、支那街に有名な菜館があり、何れも、天津名物烤鴨子（カオヤーツ）が、自慢の料理となつてゐる。北平にもこの料理はあるが、矢張り天津の方が本場である。この鴨子は、家鴨をなるべく運動させないやう暗黑裡の箱に養ひ、食料として二寸大の縱長き高粱の團子を、一回に二個宛與へ、手で喉をしごき〳〵無理矢理に嚥み下させ、その後で水をのませるのである。あの養ひ方はかなり厄介で、手のかゝること夥しい。しかし鴨子（ヤーツ）には、運動が禁物で、なるべく歩かせないやうにすること、つまり榮養價値百パーセントにして、運動をさせないことに原則を定むべきである。すると富豪の樂隱居と同じやうに、脂肪腹になり、見る見る肥滿して來て、何んともいへぬ天津鴨子の味ひを持つて來る。その料理法が天津の鴨子（ヤーツ）は、巧みなもので、これを狐色に、又鼈甲色に半透明にこがすのである。その皮の味ひは、ぱり〳〵と香うばしくして、菜迷（ツアイミ）（食道樂）のものも、支那四百餘州中これ程結構な料理はないといつてゐる。評判の鴨子は、所謂掛爐鴨子（コワルヤーツ）と稱して、葱の切つたものに味噌をつけ、鴨子と共に薄皮の圓い包みにはさんで戴く。その美味は、天津支那料理の經驗のあるものは、またと之を味ひたくなるくらゐおいしい、誰しも之を賞めないものはない。天津の文人方面は、日本人に親しみのある方藥雨先生が福島街にゐる。六朝以來の瓦塼から、古銅器、古碑など金石の珍らしい物を數多集めてゐる。殊に古泉（古錢）は最もその造詣の深くて、その集藏も頗る多く、著述も亦色々ある。瓦當文の天下に珍と稱せられてゐるものは、今日は殆んど方先生の集藏品から求めなくてはならないとせられてゐるくらゐ、金石家に於て重きをなしてゐる。又學者方面では有名なのは陳資琛羅振玉兩先生を始めかなり碩學もゐられた。しかもそれらの碩學老儒はもと宣統帝が北京から都落ちをせらるる時ついて來られ、租界に侘住居をしてゐられたのである。ところが世人も知る如く、一陽來復、宣統帝が滿洲新國家、元首の位置につかれると、羅振玉翁なども、參議府の爲めに陰に陽に盡力される事になつた。租界に亡命客としてゐる連中は多々あるが、その運命の程は測られない。

天津から汽車で動く旅としては、天津を起點に、津浦線があり、南の方濟南、泰安、曲卓を經て、浦口（カオ）に出て、楊子江岸に至つてゐる。又天津から津浦線で南下し、濟南驛にて乘替へ、東の方青島に出る鐵路もある。しかしこゝには天津から一路廊坊（ランファン）、豐臺（フォンタイ）と西北に向ひ、北平の驛へと進むことにする。天津北平間の鐵路は、奉天直通の鐵路、卽ち平奉線の一部であつて、沿線に見る窓外の光景は、正に中原の一部を物語るものである。その眼界の屆き得る限り、一望千里の野が續き、どちらを見ても、目を遮る山もなく、岡もなく、全く地平線上までおりて來てゐる大空は澄み渡り、極めて明確な大極の弧を描いてゐる。その線はくつきりとしてゐて、幾十里の彼方に見ゆる農家の土廊も、又樹林の影も、極めて鮮明にあちらこちらにと指される。實に大平野の天と相接する彼方の果では、築山に見る如き小屋の散點してゐるのを見るときは、思はず中原の大を感ぜしめられる。古の春秋戰國時代に於ける燕の國は、つまり今日のこの天津北平間一帶の天地をさしたものであつて、二千有餘年の星霜を經た古國が、今尙昔ながらの一望千里の田畑を見せてゐるものである。その邊の事にと思ひを馳せる時は歷史上の有爲轉變が、頭の中に去來して來て、うたゝ感慨無量なるものがある。今も尙この時局に際して、沿線の大都市が、或は時局の影響より、兎角の風雲を卷き起し、國際場裡に絕えず大波亂の絃臺として指出されてゐることに思ひ到るとき、一段の劇的氣分の唆らるゝものがあるのである。

北平

遊客が火車で北平（ペイピン）の都城に入るには、前門車站（チエンメンチヤチヤン）の驛頭に先づ到着する。その到着に際して、右手の窓外を見ると、線路に接して莊嚴なる城壁の瓦堞が古色蒼然たる趣を見せて長く續いてゐるのに氣がつく。これは北平內城の壁面の一部であつて、北平に入城するものは、第一印象として、誰れ人もこの城壁の莊嚴美に打たれる。北平は、今日まだペイピンの發音が一般化せられてゐないので、或はもとの北京のペイチンの方がよくひゞくかも知れぬ。支那四百餘州の古い歷史の跡に、又國家をなしてゐない大陸社會としての北平の重々しさや、或は又歡樂の巷を守護してゐるこの金城鐵壁の感じなどと云つた、有らゆる感想やら懷古の情やらが、この入城を體驗する刹那に、旅行者のあたまにピンと來る。そしてその爲めに何と云ふことなく、絕大の重苦しいやうな壓力を感じさせられ、同時にこれがやがて、北平と云ふ名前に伴ふ最も深き印象となるのである。殊に北支那に這入つたといふ感じは、旅行者にとつてこの北平入城の時くらゐ深刻に來るものはない。塵沽（タンクウ）の上陸に際しては、北支那の片田舍の淋しさを思はしめ、天津の驛頭では、徒らに騷々しい氣分に打たれるばかりで、その驛の苦力の車中にどやどや出入する樣子を見せつけられると薄氣味惡い不安の氣持さへする。それから北



平に來るまでの窓外の大陸光景にしたところで、誠に曠野萬里の心が味られるのみである。

北平の都城は、文學的には燕京ともいはれ、古くは秦の始皇帝以前、周代春秋戰國の世から、こゝに都が定められ、北狄、獫狁、匈奴の侵入を防ぐべく、北郊に長城が築かれ、又北柵を繞らしてゐた事實は、史上明らかなことなのである。始皇の天下を統一して以後は、又兩漢に、三國の魏に、六朝にと、爾來二千有餘年の變遷沿革を閲する間、常に朔北外民族の防備自衞關係の上から、常にこゝに都を置くの必要が痛感せられてゐる。今も尚朔北の一大勢力に對抗し、その計略を劃する時には、いつも北平の都城に根據を置かなくてはならぬといふ實情に迫られてゐる。

北支那の天地で、北平くらゐ政治上、軍事上、又外交上重きをなせる地點はない。その位置が山海關以内にあるだけ、關外を扼するにも重きをなしてゐる。滿洲朝廷三百年の國都もこゝに置かれ、康熙、雍正、乾隆以來の榮華の夢は、この城壁の中に結ばれ、最近蔣介石が軍閥を倒し、北伐完成の幕の切りおとされるまで、民國になつてからも、ずうとこゝに都が置かれてあつた。それまではペキンと云へる發音の語調と、その發音から來る聯想が、吾人にいふにいはれない意味深長な情緒、感想を與へてくれてゐた。今も尚ペイピンの語よりも、昔ながらのペキン、又はエンキン(燕京)といつた言葉の方が、北支那の文化を思ひ出させるには懐かしみが深い。芝居にせよ、料理にせよ、宮殿にせよ、

離宮にせよ、又「三千の宮女春殿に滿つ」といつたこの雲深き王侯の生活振りから、天高く馬肥ゆる秋の大自然の風物にした所で、矢張り何んといつてもペキンといふ言葉に率かされることが多い。青天白日旗が風に飜り、三民主義の宣傳や、排日氣分の生々しい色繪のポスターなどを聯想さす最近の國民黨系の北平（ペーピン）では、一向に味ひが伴つて來ないのである。

ありし昔の北京を知れる在留日本人達の多くは、怖らく著者と同じ感を有してゐられることだらう。又支那の旅に赴く多くの漫遊客も、怖らく北京としての大支那氣分を味はれることが、得もいはれぬ詩趣を獲得されることであらうと信ずる。又事實名のみは北平の街と呼ばれてゐるとはいへ、目に見るもの、耳に感ずるもの、口に味ふもの、何れも皆「北京」としての事物の名殘りであり、新しい「北平」としての事象はさう澤山はないのである。けれ共現實は如何とも出來ず、矢張り今日の表面的な北平の雰圍氣を亦一通り視察するくらゐの心のゆとりを持たなくてはならぬ。

○

北平の驛頭に著くと、第一、その思ひ出として、支那の旅に最も深く殘るものは、文化の都としての大北京に足を始めて印したといふことこれである。驛のホームに出迎へに來てくれてゐる支那の紳士淑女、又諸外國人などの樣子も、亦どことなく大北京を背景としてゐるみやびやかな感じが覺はれる。殊にその北平の發音の捲舌音の鮮かな柔かみのある音色は、一層優美な感じを起させ、宛ら日本の旅で、京都や奈良に著いた時の氣持とよく似てゐる。

北平の大觀は、これを最も簡便に一目瞭然と云つた風にかたづけてしまふには、城内の東長安大街（トンチャンアンタージエ）に聳ゆる北京飯店（ペーチンファンテン）といふ北平第一の高層ホテルの屋上に登ることである。その屋上から遙ちこち四方を概觀するに限る。天高く秋色濃やかなときの屋上大觀と云つたら、北平市中は元より、周圍の城壁を、城門から、更に遠く千里の郊外をも一瞬のもとに收めることが出來る。殊に脚下、紫禁城内の各殿堂、樓閣が整然と配置され、宮殿を蔽ふ黄の屋根は幾十となく樹間に指顧せらる。又秋の紅葉した樹林の間に散見せる市中の民家、大街小街の路上の光景まで一々手に取る如く眺められる。北平西北の城外に有名な萬壽山、西山の方面は、遠く霞に被ふはれて見えないが、南の方天壇の祈年殿の影は、高く碧空に聳立し、そのむつくり屹立する輪廓の曲線美は、わけても鮮かに仰ぎ見られる。その他よく注意して見ると、周圍の城壁の東西南北、各方面に指される城門の高樓は、近い所に哈德門（ハーダーメン）、宣武門（シュエンウーメン）を南に、朝陽門（チャウヤンメン）を東に、又安定門（アンティンメン）、德勝門（ダーシェンメン）を遙か北に、西直門（シーチーメン）、成阜門（チョンフーメン）を遙か西の方にと、一々これらの建築の輪廓が薄くぼかされた眞一文字の城壁上に、一際目立つて眺められる。驛頭に孤立して聳ゆる前門（正陽門）（チエンメン）（チョンヤンメン）は殊にその形も鮮かに仰ぎ見られる。

もとこの前門は、城壁に連接して存してゐた城門であることは無論だが、このあたり交通の關係から、その左右の城壁を米人の手で取壊はさせ、城門のみを取殘して迹は取拂ひ、くつきりと左右に目抜きの通りをつくり、之を所謂前門外の大街と連絡させることにしたのである。今ではこの取殘された前門の高樓が、北平城門中の第一位に呼ばれ、その修築、美觀の點に於て、蓋し北平名勝の一つに數へられ、寫眞に、繪葉書に、北平風物を物語る劈頭の呼び物とされるまでに至つた。怖らく北平大都城の支關には、前門の車站驛といふよりも、寧ろこの前門（チエンメン）（正陽門）の方が、普通内外人からひろく認められるゝことゝなつた位である。

北平を大觀するには、又便宜上、哈德門の城壁に登つたり、或は東壁觀象臺、渾天儀の裝置されてゐる所あたりから見ることも出來、或は又禁裡、午門の上から展望を恣にすることも出來る。その外景山の高樓に上つて廻りを打眺めたり、その他鐘樓、鼓樓の上から展望を擅にすることも出來るのである。

しかしこれらは何れも、北平市中でも一方に偏在してゐるため、その城内城外の全光景を、居乍らにして見廻すといふ譯には行かない。尤もこれらのうちで、鐘樓鼓樓は、元來が千里の野に敵軍の襲來を豫知し、城内の市民達に警報を與へる目的で建造されてゐるものであつて、今も尙高樓萬里の心

を喚り、太鼓、大鐘がこれに備へ付けられてゐる。北平大觀の試みは、旅客夫々の考へ次第で、如何やうにとも隨時催ほされる。以前天下太平であつた頃には、我々二三の友と、驢馬の鈴も勇ましく哈德門の城壁を登つて、壁上道を東の方、朝陽門、德勝門、西直門へと順次巡り行き、尙、各便門（ビエンメン）（門の袖）にも殘らず立寄つて、悠々一日の馬上散策を試みたりなどしたものである。

由來支那の人は、この城壁に登ることすらも許されて居らず、日本人その他の外人に限つてこれが大目に見られてゐた爲め、かやうな呑ん氣な城壁巡りなんかも出來たのである。近來は裏の矮樹が、大變壁上に繁茂して來たので、壁上を乘り廻すには不便であり、散歩するだにその枝の棘に氣を配らなくてはならないことになつた。

○

北平の旅で驛頭に着いた容は、普通、驛の表門に出ないで直ちにその城壁に沿ひ、ホームを裏口の方へと出る。月臺（ユエタイ）（陸橋）を下つて正に後門を出ようとする所に稅關があり、そこで臨檢を受ける。どうかすると、そこでうるさく引掛かることがある。その心してゐるべきである。

北平の驛は、漢口から來る驛も天津より來る驛も、その驛は夫々違つてゐるが、旅客は必ず一應それぞれその定めのところで、この臨檢にあふ。そはどうしても、遁れる譯に行かない。近來は殊に手

きびしく、日本から始めてのうぶの客であらうと遠慮會釋はない。支那稅關吏は旅具を開けさせ、手土産の菓子箱であらうと、繃はずこれを掻き破り、內容を細かく見てあます所がない。この點は北平入城の第一印象をかなり悪くするが、又止むを得ないわけである。

驛を出で城門をくゞれば、公使館區域の東交民巷（トンチヤオミンシヤン）となる。交民巷の名は、誰れしもなつかしい安全地帶の處である。日本公使館、英國公使館を始め、米佛伊など夫々儼然として互ひに相接しあひ、堂々たる公館を聳やかせてゐる。その沿道には、又六國飯店のホテルや、橫濱正金銀行のビルデングなどが見られる。日本の駐屯軍は公使館に相接してその營舍を有し、その向ひに道を隔てゝ英公使館があり、巷中最も宏大な地域をこゝに占めてゐる。公使館區域の周圍は、壘壁をもつて圍まれ、これに數多の方形の穴がうがたれ、內部から銃口を向けて外をねらふに便ぜられてゐる。北淸事變團匪の亂の當時、あれ程までにわからずやの匪賊が、この公使館區域を襲撃して來た不祥事があつたので、爾來この交民巷の廻りには、廣き緩衝地帶を設けさせることになつた。今はそれが草原のグラウンドとして、大變ひろく伸々と取られてゐる。グラウンドは平和な時であると、春秋二季居留民たちの運動會を催す場所に當てられたり、冬は冬で、水をこゝに氷らせて急ごしらへの溜氷（スケート場）にしたりなど、色々と利用せられるたりした。通りから、この廣場をへだてゝ壁壘を見渡すと、古色蒼然、紅綠の蔦などからみ生ひ、繪のやうな眺めを呈してゐる。

公使館區域を出れば、普通哈德門の通りと云はれてゐる東單大街（トンタンターチエ）の支那街になる。哈德門の高樓をのうちに眺めつゝこれを背景に、北の方日本人宿の扶桑館の方へと乘物を走らせるものが多い。それが普通である。北平の友人、知るべでもあれば、此に靜かな宿を求むるのもよいが、日本宿をとるとすれば、此の頃滿鐵經營に移つた扶桑館（フーサンコワン）があり、そのほかには一二三館（イーアルサンコワン）あり、又一聲館（イーションコワン）がある。尙洋式のホテルとしては、前に述べた北平飯店（東長安街）街があり、また六國飯店（東交民巷）がある。英語又は支那語の出來る者は、この兩ホテルで何んら差支へはない。但し電話はこれらの外國語で呼出しが出來ないと、ひどく不便を感ずるであらう。支那語の呼出しは、馴れない者には一寸面喰ふ。例へば「トンチイ、チーパイ、ウーシリュウ」と發音する時はこれが文字に書き現はすと卽ち「東局七百五十六號」となる譯で、上海邊りのワンツウスリーノートと云ふ外に、ワンだのセントラルだの頭に加へ、數字ばかり並べるのとは樣子が丸きり違つてゐるのである。

北平の事情について、又滯在中の觀光小旅行などについて、聞きたいものは哈德門の通りに日本ツーリストビューロー（觀光局）の支局が設けられてゐるから、大體はそこで、旅程、觀光方法、費用、車馬、案內、通譯などのことを萬端にわたつて相談によく乘つてくれることになつてゐる。しかし北

平の實狀については、宿屋がかりよりも、個人の緣故を辿つて、北平住宅の一部に、其處のうちの家族同樣の住ひ方を體驗する方が、本當の味がしてよい。實際によく諒解もされる。北平に這入つた甲斐がある。何でもない事のやうであつても、矢張り直接支那夥計（ボーイ）に言葉をかけたり、又抱へ車に乘つて、安心な氣持ちで車夫と話合ふなど、これ又手近かな北平見學の第一歩である。

日本人の多く集つてゐる場所は、北平ではこの東單大街方面であつて、詳しくこの町名をいへば、東單牌樓大街と云ふのである。これは紫禁城を挿んで、西に西單牌樓大街といふのがあるのと對立してゐる。東單を何處までも北へ、哈德門の城門から次第に遠ざかり、眞一文字に行くと東四牌樓の大街がある。これに對して同じく西の方に西四牌樓の大街がある。

西部の城内は、これを總稱して西城と呼び、これに對して東部を、凡て東城といつてゐる。四牌樓は四辻につて、交叉大道に、夫々一基宛の五彩美しき牌樓が互ひに對立して聳えてゐる。往來を行く人馬は、その下をくゞるのである。東單にも、以前は單に一基の美しい牌樓があつたが、民國になつて間もなくこれは取拂はれ、獨逸人の建てたケツトラーの石門も、亦その場所から姿を消し、今は全く東單には門の影は一つもなくなつた。

街の調れは上に云ふ通りであるが、日本人の澤山ゐる場所は、東單の大通りから、西に又東にと這入つたところで、次ぎに示す如き横町がよく知られてゐる。

二條胡同　三條胡同　椿子胡同　錫拉胡同　無量大人巷同
外交部巷同　乾麵胡同　總布胡同　羊隘胡同　羊尾巴胡同
觀音寺胡同　猿猴胡同　官帽胡同　麻線兒胡同　堯治園胡同
蘇州胡同　船板胡同　以下略　（胡同は横町のことで滿洲語である）

そのほか東單に平行した王府井大街を中心として、その方面にもあちこち住まつてゐる者がゐる。その他、東四牌樓の北の方にも、たまに日本在留民がゐる。現に本願寺の所在地は、四牌樓に近き八條胡同あたりかに設けられてゐる。尚東城の方ばかりでなく、西城方面にも、西單から北の方、西直門の後門あたりに、住居を持つてゐる者もあり、更に土地に馴れた者であると、前門の外に出て、支那の商店街に門戸を構へてゐる者もある。しかし日本の三井、三菱、大倉、並びに大和倶樂部、小學校、海軍武官室などの大會社、又は公共的のものは、多く東城方面に設けられ、北平通信員の特派連中の諸君も、多くは東城方面に住まひ、又は事務所をもつてゐる。

○

尚支那宿として、日本人に便利なものは、東長安街で、北京飯店に並べる長安飯店、中央飲店など

の一流どころを始めとし、王府井大街にも相當な大きいのがあり、又東華門の方面にもそれがある。下宿屋としては南池子（ナーンチーツ）に大興公寓（タークンコンユ）があり、東單に北京公寓があり、その他公寓は各所に散在してゐて、月定めの滯在者には、極めて廉であり、且つ便宜も多く、殊に北支那見學の青年達には、あらゆる方面で得る所が多いことであらう。

北平の滯在を、假りに支那宿に取り、支那式の數日を送ることゝせんか、これは滿洲地方や、江南地方のそれとは異なり、頗るのびやかな、又奥床しい北支那生活の一端を體驗し得る。といふのは北平の宿は、その旅館の者共、番頭となくボーイとなく、如何にも穩やかであり、機敏な點はあまりないが、心のよい者が多く、氣はきかなくても、何處となく上品な所があり、こせつかない所がある。これは周圍の山川風物といかにもよく似合つてゐる。忙しない心持ちは捨てゝ、北平に這入つた以上は、昔しながらの北京情緒を味はうつもりでゐるべきである。日本式の氣分なんか脫し去り、暫く北支那の大陸氣分を經驗するのだといふ態度になつてしまふことが肝腎である。これは支那の旅に赴いた人の考へやうひとつで、譯なく出來ることである。その意味で、宿を支那旅館に決定することは、至極目的に適つた次第である。よしんば全體の支那旅行中、他の地方では支那宿をとり得なかつた人も、北平ばかりは、特に考へをこの點に致すことが大切である。折角の支那の旅の印象を得る上にも、これは最も大事なことである。

江南地方の氣のきいた支那宿は、馴れない旅客には、多少無理かと思はれるところもあるが、北平では相手ののんびりさ加減を見るだけでも、泊る價値が十分にある。そして何處迄も、客を反（そ）らさないで、親切に待遇してくれるのである。最近は銀安のためは、米人は元より、外人の家族連れの逗留客などが、北京飯店その他に逗留して、かなり呑ん氣をきめ込んでゐる。米國の一弗が支那の四弗乃至五弗に當ることもあつた位である。日本の一圓は一時支那の二弗二三十錢に當つてゐたこともある。それほどでないにしても、銀は目下のところかなり安い方であるから、支那宿の滯在は、もつて如何に好都合であるかゞ察せられるであらう。北京飯店は、食堂といひ、應接室、喫煙室、賣店、客室、屋上、何れも上流の貴顯紳士に適合するやう出來てゐて、食事は佛蘭西式である。大食堂の色彩、裝飾、食器、カーペットなどは、何んとなく歐洲の宮殿内部を思はしめてゐる。家はこのホテルに泊らない迄も、或は食事のみに、又屋上の展望を試みんため、喫茶に出かけるものなども多い。ホテルは位置が中央に近くて、便利のよいため、日本人もこれに宿泊する團體、又は個人もかなりある。時には日本語の出來る番頭が置かれてあることもある。尚交民巷の六國飯店は、規模は小さいが、英國式のホテルで落着きがあり、料金もかなり勉强をしてゐるので、これに泊する日本人もある。殊に向

ひの角に正金銀行があるので、何かにつけてこは便利である。

又扶桑館は純日本式で、近來滿鐵の手に之が移り、經濟の方も待遇の方も、めつきりよくなつた。しかし、手輕に個人の宿でゆつくり見物でもしようといふには、日本人の個人のうちが重寶がられてゐる。

○

北平滯在中の北京料理漁りは、料理通であるとないに拘らず、公私の關係から、自然各方面の菜館、酒樓へ出入する機會が得られる。もと禁裡の大膳部に勤めてゐた料理人が街に出て、民間の北京料理を始めたといふことで、評判を取つてゐる東華門の東興樓などは、殊に日本人の足が多く之に向ふ。公使館連や、滿鐵關係、その他個人で催ほされる宴會なんかも、殆んどおきまりの如くこれに會場が定められる。或は又文化事業の方とか、支那側の方から日本人を正賓として迎へる場合なども、多くこゝで催ほされるやうである。それ故東興樓（トンシンロウ）は、日支人間の夜の倶樂部の觀さへあり、店のもの達も殆んどそのお常連の顔を見覺えてゐる位になつてゐる。東興樓の構へは、上海方面の菜館とは違つて、何處となく各客室の感じが重々しく、落着いたどんよりとした氣分が充ち滿ちてゐるのはうれしい。しかし餘りに近來日本人の出入が多いため、本來の北京菜の特色ある風味が、多少拔けて來たといふ批評をするものもないではない。

北京料理としては、東單方面では、以前に總布胡同に燕壽堂と云ふのがあつて、賀筵の客の出入も多かつたのが、近來經營がつゞかなくなり、閉店をした。その外二三よく日本人客の出入する所もあるが、最も民衆的の酒樓で名を賣つて毎夜繁昌してゐるものは、東安市場（トンアンシーチャン）の内部にある二流三流の酒樓である。こゝは殆んど客を待たせることなく、極めて活潑に、又面白く、次ぎから次ぎへと卓上へ民衆料理を運んでくれる。例の烤鴨子の料理にしろ、又水飴を長く引いた如く見ゆる拔糸山藥（ポースシャンヤク）の料理にしろ、北京料理の名のつくものは、何品によらず手取り早くこゝでは作つて運んで來る。又その側には西域菜館の看板で、例の羊肉料理を中心とした囘々教の民衆料理を出す店もある。場所柄が北平で屈指の賑つた大市場の内部であるだけに、蓋となく、夜となく、千客萬來の景況振りである。日本人のかたまつてゐる場所に近い方面で、料理店をと求むるならば、大體こゝに示した程度である。が尚更に、周圍の環境から支那氣分を味ひつゝ、北京菜を戴かうといふには、何んといつても交民巷を通りぬけ、前門外まで出かけなければ嘘だ。

前門外の方面で日本人間に一等評判の高いのは、大通りから左に這入つて、イルミネーションのア一チの光りまばゆき正陽樓である。これは日本人の所謂成吉斯汗（ヂンギスカン）料理即ち烤羊肉（カオヤンロー）の料理でよく知られ

てゐる店である。又大通りから右手に這入れば年中不夜城の觀を呈してゐる大柵欄（ダーヂャーラン）があつて、その中程で右側にあるのが、有名な厚徳福（ホウトーフー）である。厚徳福は賑かな街の中にあるが、ひとりこの店の入口は暗く、殊に鰻の巣の如く奥へ深く這入つたうちで、それと知らないものは、迂つかり行き過ぎてしまふ位である。料理のうちは河南菜で、鯉魚の料理や揚げ物類が殊に評判である。三百年と云ふ古い歴史を有する北平一流の古風なうちで、その店つき、樓上樓下の客室、料理場、材料の置場、何處を一つとつて見ても、乾隆の昔榮えてゐたうちの佛を思ひ出させ、どことなく古色蒼然たるものがある。その内部は、部屋數が少いので、階下のどんづまりの物置然たる天井の低い部屋や、又料理場に近い廊下沿ひの奥まつた所あたりに、白紙で壁をはり、間に合せの客室を拵らへてゐるが、客の込み合ふので、こは又止むを得ないことである。

しかし店の客を引きつくる底力の強いこと、云つたら、たいしたもので、その平素如何に狭まくるしく、又込み合つてゐても、通人達は奥へ〳〵と割込み、卓を圍み、番頭をつかまへ料理を誂へるのである。その時評判の二寸もない小さい手垢のついた菜單帖をもつて來る。普通の一枚紙の形をとつてゐないところが喜ばれる所である。何れも法帖の式に折り疊まれてゐて、その料理の品目は數十頁に亙つて列記されてゐる。がかたり讀みにくい書體で墨書されてゐる。その各頁は殆んど茶色によとれ、その字體も鮮明でないのが多い。けれ共度々見てゐるうちに、書き癖もわかり自ら讀めるやうになる。かういつた古い老舗へ始めて這入つた觀光客は、とかくその料理に馴れないために、番頭に「よい加減に見計つてくれ」などと云ふ。でもいはれた番頭は客の味覺の程度が、さつぱり解らず、又その料理についての好き好み、客の氣持も解らないので、責任が持てない。そこで結局やはりこちらから盲滅法でも書いて渡すことにしなければならなくなる。支那ではいくらおのぼりさんでも、日本の料理店へ行つた時や、ホテルで定食をとつた時などのやうな式にはまゐらぬ。何と云つたつて、支那には支那式のきちんとした誂へ方がある故、それに見倣はなければならぬ。厚徳福では鯉魚が一等呼びものとなつてゐるだけに、その鰾膠から骨の料理まで、實に結構な味ひを出して見せる。しかもその費用、勘定が又細かい。飯の代りに出す饅頭を二つに割つて見ると中から手品のやうに無數の細かい絲がきらきらと長く垂れ現はれ、その銀絲の味ひ、その口當たりと云ふか、何んともいへぬ程よい。日本に來てゐる北京料理にはまだこの種の饅頭（點心）の出たうちがない。

厚徳福の料理は、寧ろ古典的な風味がたゞよひ、通人中の通人しかこゝに出かけて行かない。店はいつ行つて見ても相當繁昌をしてゐるが、その利益を常に料理の改善と、材料の嚴選とに當て、專ら菜迷（ツァイミー）（食道樂）の味覺を滿足させることにのみ努め、上海あたりのやうに、すぐ樓上の改築に取りかゝ

つたり、大廣間を增築したりなどはしない。華客の料理が濟むと、熱茶に濕手巾を出すことはいふ迄もないが、小さな紙に包んだ熱帶植物の種に、いくらか味のついたものを一袋宛出してくれる。これは檳榔の實の種であつて、食後の口中を涼しく感ぜしめ、又不老長壽の靈藥ともなるのだといはれてゐる。本當かどうか保證は出來ぬが、何分かをりがあつてよい。しやぶるには少し大き過ぎるやうに思はれる。見たところ、三四分大の三角形をなし、かなり堅い。その色は茶褐色、何れも輕く鹽で味がつけられてゐる。店を出る時分に、多く客は口中にこれをしやぶりつゝ出て來るのを見る。厚德福の外に、前門外方面から菜市口あたりにかけての支那街には、新豐樓を始めとして、まだまだ新式舊式になる各種各樣の菜館酒樓があり、何れも客を呼び、日本人も亦時折り店を變へて食べ漁つてゐる。時には川蛇料理の極めて美味なものをつくる菜館もあり。これは氣味が惡いと云つて箸をてんでつけないものもあるが、恐れる必要はないのである。又鴨子（ヤーツ）の美味で評判をとつてゐる所があちこちにあり、又綠味齋の如き素菜（精進料理）で、北平一の評判を取れる所もあつたが、これは既に閉店をしてしまつた。又牛街（ニウチエ）方面ではその特色とも見られる菜館が澤山ある。それは回回教の羊肉料理であつて、これは慣れない人はとやかうと批評するが、珍らしいものである。牛街あたりには之を安く且つおいしく食べさせる菜館酒樓が多い。

總體に北平の所謂北京料理は、開明戲院のあたりから、南の方に行けば行く程場末になるわけで、民度の低いためでもあらう、割にうまいものが安く提供せられ、悠々一人前一元以下の安料理が、殆んど喰べ切れない程どつさり出される。北平の日本人間では一時食道樂の通人約十名が相集り、每月一元を越えない實費で以て、移動美食俱樂部なるものを組織してゐたことがあつた。輪番の幹事が次ぎから次ぎへと物珍らしい而かもおいしい料理をたべさせる菜館酒樓を見出し、メンバーの意表に出で、通人の味覺を驚かすといつた天下太平の雅催が續けられてゐた。

北京料理のうちにはいふべきものが多いが、變つたものとしては、この回回教の羊料理である。これは他の都城でたべるよりも、一際目立つてよく出來てゐるから、特に北平の旅で忘れてはならないものであつて、自ら進んでもこれには足を向けるべきものである。尤もこは初めから心得てゐるべき民衆料理なのであるから、部屋の設備だの食器だのと云ふものに贅澤をいつてはいけない。

序で乍らこの西域菜館には、表看板に面白い特色を見出すのである。と云ふのはアラビア文字を示す曲線を集めたものを必ず大書して出してゐるほか、屋外には尙高く棒の先きから回教徒特有の圓形の制帽を、やゝ實物大よりも大きく拵へて軒端にぶら下げてゐる。或は又その制帽の形をば、薄肉彫に看板式に現はし、これを磨いた眞鍮の板で以て被うてゐるものを揭げてゐるのもある。さうかと思

ふと、例のみゝずの匐つた如きくねく〳〵した曲線のアラビヤ文字で、西域菜館の意味をそのまゝ飜譯して、ハイカラな樣式で揭げてゐたりするものもある。時には又その清眞寺の回教寺院内に用ひてゐる神聖な水瓶の形を、そのまゝ壁に描き、或は又石に刻してこれを看板としてゐるやうな變つたものもある。何れにしてもその特殊な料理を指して、しきりと客を呼んでゐるのであるが、一つにはその半面に羊肉の料理のうらに宗教上の誇りを示してゐるものらしく思はれる。だからもし店に喰べに這入つて、回回教徒の惡口を云つたり、口を滑らしてマホメット教の批評でもしたり、或ひは教祖が豚の胎内から生れたために、凡ての回回教徒は豚を喰べなくなつたのだなど云ふ蔭口でも、その耳にしたまゝの傳說を語りあふだけでも、ひどく店の者の感情を害し、その客の不敬な言葉を耳に挾みでもしようものなら、勘定などは兎も角として、卽座退場して貰ひたいと楯突く。俄かに近所隣りの同じ宗徒まで糾合して、一大事をかもし、客は結局そこで袋叩きにされるやうな始末になる。恐しいことである。

先年も天津の租界で、某漢字新聞が、からかひ半分の氣持から、滑稽文學の欄でもとマホメットは豚の腹から生れたから云々といつた事を戲文として書いてゐたといふので、市中の回回教徒連は、その記事を讀むなり、固く結束して新聞社を取圍み、窓硝子を打割り、印刷機械までめちやくちやに壞し、再び同紙の發行を不可能に陷らせたといふ事實談もある。又奉天でも、先年張作霖が或る雅宴に城内の貴顯紳士を招待せんとした時、その招待狀の文句のうちに、回回教徒の氣分に障る文字が挿入されてゐたといふので、連中が俄かに結束して、手ひどく抗議を申立て、結局謝りの使者として御曹子張學良を差遣はし、そして辭を低うして數萬金の賠償料を出し、やつとのこと示談濟となしたといふ事實談さへもある。

かういつたことを胸に含んでゐて、北平の羊料理を喰べに出かけるのも、又一種の支那氣分である。北平の東單は、扶桑館の筋向ひに當たり、古くから回教徒の屠羊を專門の業とする羊肉店がある。每夜九時過ぎ人通りの少くなつた頃、店頭では、その鮮かな技術を見せては、數多の羊を屠り、生き生きしい羊肉を數多天井高く吊し並べてゐる光景を見る。これ亦北平では餘り注意されてゐない風物の一方面であると云へる。

○

北平第一の紅燈街は、前門外（チエンメンワイ）というて見るだけでも、すぐそれが聯想されるほどである。上に述べた大柵欄（ターヂヤーラン）の賑かな狹い街を、奥深く這入り、更に左手の方へ、又右へと、入り組んだ小路を這入りつめると、そこには所謂狹斜の巷が並んでゐる。こゝが紅燈街の一角をなせる所で、大體南班北班の

兩者に別れ、夫々格式によつて、書館（高級）茶室（最下級）などの隱語のもとに、青樓遊屋がかたまつてゐる。こゝが打茶圍（ひやかし）の手合の氣分を吸るところであつて、その扈色の厚壁の奥には、夫夫風流が營まれてゐるのである。時には紅燈綠灯の下小徑の幽境に通ずるところ、紅裙佳人たちの姿を認める所もあるが、大抵はその班子（南班と北班の二方があり）門戸の側に掲げられた樓名の金文字に、紅燈に讀まるゝ文字で以て、ほゞその樓の内容は察せられる。北平紅燈街では客はよほどその方面でなじみになつても、姑娘の方から泊つて行きなさいと云はれるやうになる迄は年數がかゝる。自分から云ひ出すと肝鐵砲を食ふ。泊り客は友人などつれ込み麻雀をやるのがおきまりである。この邊りは打茶圍のひやかし客、游治郎のおひやかしに廻る天地として、夏となく冬となくいつも賑つてゐる。その嬉客の乘物は、斜街の入口にとゞめおき、後はお拾ひで、別段忍び足といふ必要もなく、大手を振つて踏み込んでよいところである。しかし可愛い氣持ちで、日本からの遠來の客などは、あれでも外套の襟を立て、帽子を目深かに、三々五々と、嫌ひでもない物好き漁りをしてゐる影法師が見える。薄暗い曲り角で出くはした客は、北京歌の輕い鼻唄で、通人らしいのに案内せられ、何處といふことなく紅燈の下にあちこち舞込んでゐるらしい。どうかしたはずみに、衆々あの人かと思ふほどの聖人君子でも、北平の夜の情緒の研究とばかり、書館の外門を出でやうとする刹那に、觀音開きの扉の側で、ふと出くはし「やあ」と唯挨拶のみして後はにや〳〵雙方で笑つてゐるといふ味ひのある光景など時折見る。あまり天機洩らすべからずであるが、これも北平大都城の觀察のエピソードとして、包みかくしておくわけにもまゐらぬ。廊の中は上流、中流その他、すべて階級によつて、それぞれの設備品格、情趣などの違ひのあるのはいふ迄もないことである。

尙同じ方角をもつと南へ、城南公園に近き場末の方に行つて見ると、こゝは東京の新宿にも當たるところで、こゝに又風流な一廓が出來てゐたのであつた。それを當てこんで、譬て日本の中山太陽堂の經營に成る化粧店兼カフエーが開かれてゐた。一時はかなり人氣を博し、太陽堂獨特の販賣方法で色街を背景に相當繁昌をしてゐたのであつた。その後色々の原因から、廊の方もさびれ、從つてその附近がさびれ、夜の淋しい圈の巷となり、ひとり城南演藝場や、天橋路の方に賑ひの中心が奪はれてしまつた形となつた。

北平紅燈街の一角には、前の前門外から、觀音寺街の左手、奥深く這入つた所には、寄席で有名な「四海昇平」といふのがある。例の民衆に受けてゐる打鼓、西皮、二簧などの曲が、殆んど毎夜のやうに開演せられ、客はいつも滿員の體である。舞臺に現はれる語り手、伶人達も、取代へ引替へ、人氣のある者が現はれ、北平城内、その道の通人達は殆んど毎夜缺かさないやうに通うて來る。

しかし日本からの旅人は、一度ぐらゐこれに遊んでも、あまり意味が聞きとれないゝ爲めか、長時間に亙つて之を聞いて見ようと云ふ者は少い。大體様子だに見れば、さつさと城内から出て行つて、更に中和樓とか、第一舞臺とか、或は開明戲院とかに、乘物を廻はし、そろ〳〵千兩役者の陳德林とか、翼雲甫とかの出る舞臺面を目當てに、支那芝居の見物の方へと出かける。梅蘭芳などは日本でこそ一流の千兩役者のやうに見られたり、甚しきは女俳優の如くいはれたりなどしてゐるが、北平の演藝界では、まだ〳〵上には上がいくらでもある。その音聲、臺詞に於て、又立廻りに於いて、場内を壓するといふ迄には至つてゐない。

そこになると七十八歳の高齢ではあるが、陳德林翁の如きは、平素あのよぼ〳〵した腰構へであるに拘らず、その一度舞臺に出演したとなると、足の運びもたしかで、その音聲は、珠玉の如く、且つ又非常な力を有して、魅力百パーセントの値打がある。

自分は親しく故辻聽花君の突つ込んだ說明、批評を座席で、又樂屋内でうけたまはつてゐたのであつた。同君の遺愛の小俳優などは肝煎りの仕込み方であつたから、何れそのうちに北平でも名をなすことであらう。

城南公園は、市中、中流階級の都人士淑女たちの遊ぶ遊園地で、芝居の外に茶館、手品、寫眞屋、草花屋、古玩店、菜館、酒樓、茶館など、凡そ娯樂機關と見らるべきものは、何でもその楊柳の蔭に設けられてゐる。黒のスカートをつけた斷髪の若い夫人が、背廣姿の色の白い紳士と相携へて、寫眞撮影所から、朗かな流暢な支那語で語り合ひつゝ、公園の歩道へと逍遙してゐる。

公園の左半分の廣場は、電影（映畫）の屋外撮影所で、既にそのときは、夜間の支度に白い幕を張つてゐる。長いベンチは何處も同じやうに、數多設けられてゐる。撮影場の彼方には、低い丘陵が起伏してゐて、春酣な頃など、千紫萬紅總て富貴の花とばかり咲き競ひ、路邊には長い池が取めぐらされ、睡蓮の丸い葉があちこちにと浮んで見える。遊客は三々五々園内を歩き、ベンチに憩ひ、大聲で談笑してゐる者もあり、國民政府の中山服を纏ふた兵隊など、腰をかけて面白げに話入つてゐる小景も見える。入場料を取つてゐる公園だけに、餘りやくざなルンペンなどは這入つて來ない。しかしかなり澤山の客を集めて、境内新綠の蔭には、人の動きが相當に賑かに見られてゐる。

自分はそれとなしに、兵隊のかけてゐるベンチに背中合せに腰を下ろし、何事を語つてゐるかと、聞かぬ振りして靜かに耳をすましてゐた。すると一方は奉天軍の兵隊であるらしく、片方は南方から廻された兵隊であつたらしい。元々互ひに知り合ひの間柄と見える。

『奉天の方では、月八圓しかよこさないのだが、君たちの方は四圓多いのだねえ。』

など話の一節にちらと聞こえる。すると、一方のものが、

『でも被服は自辨だからね。』

と來る。かやうにその何心なく平氣で打明けた所を云つてゐるなど、一寸耳寄りの場面であつた。

北平に遊ぶ者は、兎角やれ萬壽山の、やれ北海のと、すぐ宮殿内部の庭、離宮の池などに重きをおき、かういつた市民一般の喜ぶ春夏秋冬の打寛いでゐる民衆公園なるものに、足を向けようとするものがない。甚だしきは公園の所在地さへも知らないでゐる者が多い。

されば今一段低い大衆本位の歡樂場、ルンペン達の必要欠くべからざる樂天地として、この大都城が生んだ天橋路の如きは、尙更注意されてほしいものである。天橋路の場所は、城南公園に接續して、更に東の方天壇の北側迄も延び、又先農壇公園のあたりへまでも伸びてゐる宏大な面積をもつてゐる。

天橋路の內容については、前にも既に觸れて置いたのであるが、その娛樂所としての主なものは、凡てが下層民、細民階級に適當したものばかりであることである。しかもその芝居といはず、手品、輕業といはず、飮食といはず、音樂、救濟治療、求職、賣女など、凡そ一般下層民にとりて、日常生活に又年中行事に、なくてはならぬことは、凡て滿足に揃へられてゐるのである。

されぱこそ全市を擧げて、ルンペン並びにルンペンに近い者が、これを樂しみに終日來たつて、ここに心身の滿足を買ひ求めてゐるわけである。決して淺草の公園に見る如き、警官がこれを厄介拂ひをするといつた如き殺風景極まる處置は、これに見出さんとしても、見出すことの出來ないものがある。怖らく日本全國には、名ばかり美しい慈善事業、孤兒院、社會救濟事業などと澤山出來てもゐるが、この天橋路の如き、公平に、又包含的に、來る者は拒まず、自由に自己滿足を與へてくれてゐると云つた施設はないであらうと思ふ。

その意味に於て、この民衆娛樂の別天地は、今日八釜しい社會救濟事業の一大解決を無言のうちに、如實に示してゐるものといへるのである。しかも日本の社會事業を云々する人にして、北平に幾週間か滯在してゐながら、天壇を見ることは忘れなくても、この特殊な別天地を素通りしてゐる者が多いとは、どう云ふわけなのであらう。

天橋路の內部には色々のものがある。泥棒市もあれば、又大犯人の死刑銃殺場もあり、時には生首を大道にさらして大衆の見せしめにしてゐるやうなところもあると云つた風で、珍無類の物凄き光景を、公々然と開展してゐる。

何はともあれ、天橋路の見物は、北平に於ける最も變つた珍光景の集まつてゐる所であつて、これはかの回回教の寺院の內部とか、又土豪の祕密の地下室などと共に、北平に於けるグロ方面の話題と

して取つて置きの材料ともいへるのである。繰り返して云ふが、全く北平に見るべきはこの天橋路の歡樂場である。

天橋路の中央の大通りを、南に突切り、先農壇の前を通つて、更に外城の壁下近くまで進むと、その邊りは、これ又全然樣子の違つた一大蘆荻の原となる。そこには路らしい路はなくて、たゞ水澤打續き、一寸北平城壁の内部として、かゝる潤ひに富んだ文人風の天地は珍らしいくらゐのところである。左手蘆荻の彼方に、遙か先農壇の綠林を見、左に近く城壁の女墻の影を指すのである。その蘆原の中に、その名も懐かしい陶然亭といふ隱君子の故宅ともおぼしき古建築が、孤立して存してゐる。乾隆の昔宮廷大官のこゝに遊び、一輪の名月陶然を照らすとも吟ずべき中秋の月をこゝに賞し、詩嚢を傾けて雅會を催したと云はるゝ仙境である。

今は禪僧の留守居などのゐて、豫め雅室を約束して置けば、簡單な酒席の用意ぐらゐは出來るといふ事であつた。壁に嵌め込みの古人の名句、文人墨客の筆蹟の中には殊に懐かしいものがあり、邊り靜けきこの幽居の里に、もし出來れば紅塵萬丈の巷をさけて、徐ろにこゝに逗留して書見でもして見たいといつた寮園氣の味はれるところである。門に俗客なく、古人の書を繙くといふのも、かうした別天地の幽居に於てこそと思はれるのである。

かくして、色々あさつてゐると、天橋路があり、陶然亭があり、先農壇、天壇があり、北平内の天地には實に變つた場面が見出されるのである。

○

北平城内で、もし古玩、骨董漁りでもして見ようと云ふのには、前門外から右に這入つた有名な琉璃廠（リウリチヤン）に越した所はない。その中央部にある海王公園を中軸として、後方、師範大學の邊りから、左右一帶にかけて、西琉璃廠、東琉璃廠とあり、共に數知れぬ古玩店、書籍店、文房具店、拓本店などが軒並みに古色蒼然たる漆黒の看板を掲げ、賈客を呼んでゐる。別けても延古齋、論古齋、尊古齋、式古齋、掃葉山房、典古齋と云つたもの、其他百餘の老舗が何れも風流な名前を振りかざし、翰墨趣味ゆたかな奥ゆかしい店構へを示し、見るからによい掘出し物でもありさうな風致が窺はれ、店飾りの趣は、何れもまたよく相似てゐる。一寸見さかひがつきかねる位である。老舗の中には時に隨分學問もあり、相當話ごたへのする主人のゐるうちもある。

近來洛陽の掘出物なども次第に出なくなり、國都が南京に移つてから以來と云ふものは、もとの舊家から出る古玩、珍品、書畫などで、わづかに遺り繰りをしてゐる樣子である。それも昨今は、兎角上海の方へと流れ出る傾きがある。琉璃廠の附近には、又太古山房と云つた店の如く、全然古玩店ら

しき店構へをしてゐないで、堂々たる大官の住居の如く、高壁重門奥ゆかしく構へ込んで落着き拂ひ、靜かに商ひをしてゐるものもある。

元來北平の古玩店は、ひとり古玩商人のみならず、昔時めいてゐた大官達がその手元へ贈物として寄越す骨董、書畫の類をば整理し、これを吐かせる爲めの手段として、人に托して店を開かしめ、その大官の許へ屆けものをする時は、必ずその店の裏面のからくりを承知してゐて、そこで金を拂つて、その品物を大官の手許へ贈呈するといふ内幕があるとの事を物語るものすらある。

それ故北平の古玩店を訪ねて見るといふと、一向に實用にならないで、唯贈呈用のみを目的とした骨董品や、文房具などが、色々出來てゐる。書畫のうつしには、殊にこれが多い。箱書きのみ立派で中味は遠うの昔にいかものとすり變へられてゐるなどいふものもある。北平の旅で最も戒しむべきものは、これらをつかまされないやう呉々も注意することである。卷物の形した金襴の函の中に入れられたやくさの墨なども、この類の品物であることを承知しておくべきである。

尙宣武門内頭髪胡同あたりにも、古玩店の一廓があり、中にはがらくたもあるが、仲々値が安いので客を引つけてゐる。時には珍書籍や書畫などのめくりものとか、或は重寶の組の片割れ、扉の彫刻の端物などといつた實用向の古道具も見出さるゝので、暇のある人は、寧ろこの方へと足を運ぶがよい。

その他東單に近い方面では、北の方、東四牌樓の附近、鼓樓のあたりを後門（ホウモン）の奥に行つて見ると、こゝにもかなり古玩店が軒並み續いてゐる。こゝでは又時に意外な掘出物をすることがある。或は武英殿の歸り路に、東華門の通りに面して、石佛陶磁器、古銅器などの豐富な材料を藏してゐる店が、幾つか見出される。いつ行つても踏み込めないくらゐな品物はかなり澤山もつてゐる。古玩漁りとしては、大要右に述べた處で判るであらうし、又その品物の求めかたも上述の範圍内でつきる。

宮殿見物としては支那四百餘州中、北平の街くらゐ見ごたえのする所はない。

先づ順序として正面の玄關口である正陽門から、次いでその奥に見ゆる堂々たる中華門の構へが人目を惹いてゐる。中華門は、もと清朝の頃は大清門と呼ばれてゐた。次いで紫禁城の内部へ這入ると、周圍を取圍んでゐる高壁は、凡てこれ紅色に塗り潰され、その瓦は黄色の釉藥がかゝつてゐる。宮中關係の建造物としては、樓門、飛閣、宮殿、凡て皆黄色か、さもなくば、綠色、或は碧色の釉藥のかゝつた瓦が用ひられてゐる。

中華門内の正面は、午門と稱し、高さ五十尺に達する煉瓦積みの壁をもつて取り圍まれ、その左右に東華門、及西華門と云ふが、遙か彼方の空に聳えてゐる。午門の城壁の上には、宏大な歷史博物

館が設けられ、夏殷周三代の古銅器から、金石の全體に亘り、又瓦塼土器類から、青龍刀、武器類一般、それに歴代皇帝の肖像の圖繪を描いた大の掛軸が飾られ、又新しい所では、伊太利から飛んで來たと云ふ飛行機の類など、いかにも豐富に陳列されてゐる。

更に午門の奥には、大理石の鋪道いと壯嚴に、中庭を隔てゝ彼方に、辟雍の池の周圍を、彫刻こまやかに豪奢な、大理石で以て取圍み、そのわきの石段といふ石段は、皆これ亦素晴しい白質大理石の彫刻で築かれ、左右の陛階は固より、中央に斜に敷詰められた双龍の豪奢を極めた彫刻は、數十尺に餘る一枚の大理石である。その龍の爪、龍の鱗と云ふものが、實に荒削りではあるが力のこもつた壯嚴美を漲らせてゐる。かうした世にも珍らしい絶大の大理石の陛階を、靜かに登りつめると、その上には南面して建てられた宮殿、大和殿と云ふが、巍然としてその重々しい趣きを見せてゐる。柱櫨の美、軒端の五彩美から、蔀戸を越して内部に窺はれる天井、その他の裝飾美が、これ亦たいしたものである。こはかの天壇に見る祈年殿、圜丘、齋丘、皇乾殿あたりの建築美に比べても、決して相讓らないだけのものを示してゐる。そしてその周圍の外廊は、すべて歩めるだけの餘地を存してゐる。

續いて中和殿、保和殿など、何れ劣らぬ金色燦爛たるものがあるが、何れも相似た樣式の宮殿造りであつて、夫々清朝時代皇帝がこゝに出御せられ、大官始め文武百官に謁見を給ふてゐた所である。その内部には、玉座が設けられてゐる。

保和殿の後ろは、今は區劃されて、更にその大奥、宮殿生活の内部は、全然別に南京政府、行政院の手で保管されることになつてゐる。今や清室博物院として、これらが清室善後委員會の手から行政院の手にゆだねられた形になり、財政逼迫の折柄、かねにする爲め競賣しろなど云ひ出してゐるものもある。反對の側の景山に近い方の宮門から、こゝに這入つて拜觀させるやうになつてゐる。その博物院と云ふは、樓門を最近紅緑の美しい漆で塗り立て、一段の鮮かさを見せて、游客の目を牽いてゐる。毎年期日を定め、入場料をとつて、一般内外人に拜觀を許してゐる。

尚先きの大和殿の左右には、古物陳列所と云つて、向つて右に文華殿があり、これには古書畫を陳列してゐる。左には武英殿があり、これには、陶器、玉器、漆器、文房具、經卷、衣冠、武器、書畫の類まで悉く陳列してゐる。文華殿陳列の名畫を見ると、その中に明の憲宗筆、冬至一陽、米芾の雲山煙樹、明の袁尚統の寒江放棹、宋の馬遠の仙岩坐月、宋の燕文貴の江千雪霽、清の錢維城の甘霖應禱圖、陳居仲の茄子圖があつたり、又變つたものでは、緙絲に山仙壽芝だの、ゴブラン織に瑤池集慶の大幅などを見るのである。又左の別の宮殿には、夏殷周三代の古銅器を各種類に亘つて陳列し、世界的な最大文化を思ふ存分閃めかせてゐる。

これらの古物陳列は、時折り陳列替へをして、觀覽者や研究者の便宜をはかつてゐる。尙その側の後方には、乾隆皇帝が鍾愛してゐた香妃（シャンフェイ）のため建てゝ賜つた土耳古風呂の遺物が、煉瓦の建造物でそのまゝ殘されてゐる。當時浴水を汲んだ機械など、井戸側の上にそのまゝ殘されてゐるのは面白い。その又後方には、無盡の寶物を祕藏してゐる祕庫が、半天に高く聳えてゐると云ふ風で、實にゆたかなものである。

普通北平の旅で、こゝへ寶物拜觀に這入つた者は、そこから一旦東華門に出るのが順序であつて、更に禁裡の庭として、世界的に有名な北海、中海、南海を拜觀し、又白玉塔下に遊び、遠帆樓、瀛瀾堂の下から蓮池を遊船で渡り、向ふ岸の柳蔭に見えてゐる五柳亭を訪ね、九龍の影壁を賞するのも又雅である。

○

紫禁城内部の拜觀では、北平の城内を一目で見下ろされる景山の拜觀が最も望ましい。以前この山は、石炭を貯藏してゐた軍事上の重要な煤丘であつたのを、その後禁裡の祕苑として、四阿飛亭を建立し、苑内最高の逍遙所とされたのである。

景山を下り博物院に入場すれば、清朝宮廷生活の面目は、手にとる如く躍如として觀ふ事が出來、乾清宮を始めとして、交泰殿、坤寧宮、欽安殿などがあり、或は又皇極殿、寧壽宮、景福宮があり、又太極殿、禮元殿、長春宮、咸福宮、永壽宮、寶華殿があるなど、紅綠極彩色の飛閣、寶殿が殆んど あます所なく建ち並び、老樹瑞木の影に、大理石の鋪道は整然と取られてゐる。各宮室には、皇帝皇后女官達の住居の窺はれる金色燦爛たる裝飾調度の類が、凡て窓越しに窺はれ、女官の部屋の寢臺、卓子ですらも、かなり結構なものばかり見られ、格天井の青龍の部屋には、七寶、乾漆、磁器などの寶物が、所狹ばいまでに陳列せられてゐる。これらは今日、親しく室内まで縱覽が誰れ人にも許されてゐる。

或は又清朝黄金時代以來、西洋各國から獻上した寶石入りの大の時計の各種各樣が、づらりと幾列にも並べられてゐる。その恰好は、殿堂式のものがあり、高塔式のものがあり、箱形があり、樂器形があり、中にも樂器形の大時計はその音響の音の如く、誠に珍とするに足りるものがある。怖らく、これらの時計は、そのうちの最も粗末なものにしても、價數萬金を下らないものであらう。今は唯それが塵芥にまみれ、誰れ人のこれを手入れするでもなく、徒らに蜘蛛の巢をかけるに任せてゐるのみである。

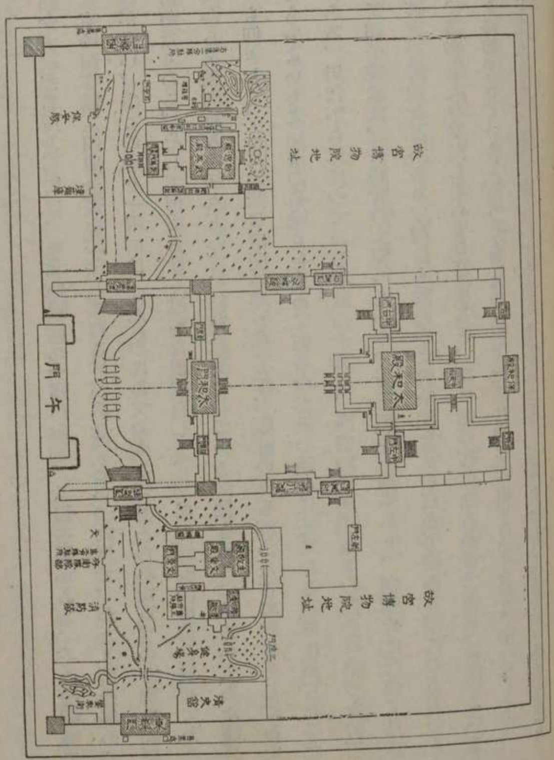
行政院の役人たちにあつては、力一杯その取調べと整理に從事してゐるらしくもあるが、何分にも

數限りない國寶の山積みをなしてゐることとて、開設の日尙淺く、わづかにその一部緒についてゐるに過ぎない。

紫禁城を拜觀する日本の游客は多いけれ共、この名時計の陳列された大室にまで、深入りする者は少く、途中で多くは足が棒のやうになつてへたばつてしまふ。事實又頭もかなり疲れて、嫌氣がさして來る位である。よろしく又時を更めて再來を期し、よくよくその邊の神宮拜觀を遂げなくてはならぬのである。怖らく世界的の博物院で、ブリチツシユムジアムに行つても、どこのムジアムに行つて見ても、これだけの寶物は纒つてゐないであらう。實にこれは世界の寶庫といふ事が出來るのである。

・　○

北平の市中に見る文化研究の材料として珍なものは、尙東城裱褙胡同から、城壁に上つた所にある有名な天文臺の設けられてゐるものこれである。こゝには渾天儀を始め、各種の複雜な天體觀測の精巧な機械が裝置されてゐる。一時これが團匪の亂の時分、佛人によつて運び去られてゐた方はこゝに歸つて來てゐるが、獨逸に行つてゐたものは判つきりしないとか云はれてゐる。しかしそれを世界戰爭の折、支那の方で奪回して、今はこゝに復舊してゐるのだとも云はれてゐる。支那側としては、その邊は聊か誇りとなし、中央公園へ東單から移して再建したケツトラーの石門と共に、得意の語り草



國民政府內政部北平古物陳列所全圖

北平紫禁城內午門內部に見る宮殿平面圖、正面の奥に、大和、中和、保和の三殿あり、右、東華門を入れば、文華殿、左、西華門を入れば、武英殿がある。保和殿のうらに更に宮室があるもこゝに省く。五六五頁參照のこと。

となつてゐる。

尙東城方面で紹介すべき名所としては、東北の隅に孔子廟がある。又國子監がある。その他喇嘛寺の雍和宮があり、京師圖書館（四庫全書を祕藏してゐる）がある。といつた風で、かなり觀光客の心を唆る重要なものが多い。尙この邊り一帶には、昔宮中にゐて拳丸を切りとられた宦官のお拂ひ箱になつた先生達が尙かなりゐる。そして何處となく雅かな相貌をして、胡同の壁の間に姿を見せてゐるものがある。それから又滿洲族人の婦人として、特別の姿をしてゐる女性もゐる。時めいてゐた時分には、その髪飾りも仰々しく、一尺に餘る巾廣の笄を挿して、頰紅の色も鮮かな古典的姿をしてゐたものである。今でもちよいちよいその名殘りを止めてゐるのがその邊に見えてゐる。それから北平北部には尙孔子廟がある。周代から傳はつてゐる石鼓の十顆に、清朝時代進士及第の記念に奉つた碑石の林などがある。又國子監には、日時計の大型のものや、十三經の石刻があり、喇嘛寺に行つて見ると、抱き合つた歡喜天の佛像などがある。何れも旅の空に興味深きものばかりである。このうちでも例の評判の宦官や、滿洲婦人の掘出しものを見付けると、殊に話の種になるわけである。運のよいものはその八旗婦人を路傍でちよい〳〵あちこちに見るが、近來は滅多に出くはさない。

尙雍和宮の牌樓を這入ると、肺病患者らしきやつれた乞食どもが、群をなして洋服姿の外人客にうるさくついて來るものを見る。寺の中には、喇嘛僧でない寺男が、變な白檀の珠數とか、或は怪しげな小さい六朝鍍金佛などわざ〳〵持ち出し、寶殿の內部の薄暗い所に差掛ると、わざと聲を低くして、內所話のやうにこれを賣りつけやうとするものが來る。値打は五分の一につけてもまけるが、これは眉唾もので、安物買の手合ひはいつもこの手で引つかゝる。と云ふのは、多くは練り物のイカ物で、明るみに出して見ると、三文の値打もないものである。注意すべきである。

○

北平で學校巡りをするに先づ訪ぬるべきは次の各大學であらう。北京、北平、燕京、中國、華北、民國、郁文の諸大學は、何れもよく知られてゐる。北京大學は國立北京大學のことで、第一院、第二院を始めとし、國學研究所、圖書館、陳列室など云ふがあり、その他師範大學だの、各種專門以上の官立私立の教育機關は極めて多い。南京に首都が定められた際、北京と云ふ名稱が北平と變り、凡て何んでも北平、北平と、北平ばやりであつたのである。ところが國立大學の中堅どころは、浙江出身の若手の學者が多く、侃々諤々の八釜し屋であつた。蔣介石の亞流を汲み、その大學名まで時流を追ふて「北平」と冠するかと思つたら、意外にも硬派論が出て、學術の淵叢である大學は、よろしく世論を超越して、何處迄も從來の態度を持し、北京の冠語を改むべきにあらずと、毅然として唱へ出し、

今以つてその校名が用ひられてゐるわけである。北京大學には京都大學出の文學士張鳳擧君が居たり、師範大學には東京帝國大學文科出の王同齡君がゐたりして、先年三上參次先生を同道して行つた時なども、種々待遇して貰つたのであつた。大學の學生は、日本のそれよりも學究的の士が多く、學問そのものに沒頭し得る境遇の者が、一般の風潮をなしてゐる。

最近學校の經營難から、教授連が私立掛持ちの者も多く見るが、しかし北平の改稱を見て以來、何處となく落着きのある文化の古都の觀を呈し、學者のためには、今からが本當に靜かな研究の雰圍氣の味はれるやうになつた。尙大學以外に、西城には地質研究所の設けがあり、西洋人ラウヘル氏翁先生などが、その調査を指導してゐる。その蒐集調査には見るべきものが多い。

北京にも尙國民黨の中央黨部、市黨部の役所はあるが、何分にも南京あつての地方都市と云ふことに、格が下つた都城のことであるから、幾ら宮殿樓閣は多くても、行政上からは、今は大して重きが置かれてゐない。將來の風雲を卷起す野心家が、再びこれを國都になし得る時代が來れば兎も角も、今の所はありし昔の北京とは違つて、風流閑雅な古都に過ぎないものとなつた。

○

北平市中で、最近の施設として訪ねるべきは、日本關係のものでは、西城にもとの黎元洪大人の邸宅跡に設けられた外務省の文化事業部がある。瀨川淺之進翁が主任となつて、專らその事に當り、支那服を着て悠々努力して居られる所は賴母しい。同處内部の建築設計は、流石に黎大總統の遺宅だけに實に宏大で、普通の親王家の邸宅を凌ぐものがある。しかし親王家でないために、門の左右に大理石の獅子の像は置かれてゐない。

次ぎに支那關係のものでは、西四牌樓に禮親王の故宅が、高壁を廣く繞らし、堂々たる宮殿建築の佛を殘してゐるものがある。幾萬坪の境内で、老樹は列をなして鬱蒼と茂り、大理石の舖道はいふも更なり。しかし、今は繁蕪貝勒の未亡人が詫び住ひをしてゐたに過ぎなかつたが、これも二三年前亡くなられ、今は殆んど狐狸の巢同樣の空き家となつてゐる。一時は、日本へ賣物に出てゐた事もあつた。國亡びて山河ありの感が深く、その現狀を見るにつけても、哀れ詩興を催うさせるものが深い。

思ひ出せば往年外務省の岩村成允君と、同未亡人を訪ねた際の如き、未亡人は、情をこめて、

『この邸宅は香ばしくない民國人などに渡したくない。出來れば日本人に問題を超越して讓りたいものですが。』

などと貝勒大人の引伸の照像の前で、熱茶を啜りながら懇談されたこともあつた。

この未亡人の孫さんに當たらるゝかたが此の度の新滿洲國の元首執政溥儀氏の夫人であるとは誰れ

が知らう。嘗つては宣統帝の皇后として慶事もあつたが、その後世が世でなくなつた爲め、淋しき都落ちまでされて、天津に、旅順に、と轉々としてゐられたが、時、來たり、今や其の祖先發祥の地、滿洲に迎へられ、七萬七千方里の新國土と、三千萬の生民とを有する新天地に君臨せらるゝ朗らかな御代となつた。溥儀執政が二十九歳の青年元首であることは滿洲の天地に明かるい氣分を漲はせてゐる。貝勒未亡人は數年前に他界せられたが、若し今日在世せられてゐたならば、さぞかし喜ばれることであつたらう。

北平の街へ這入つた日本人は、旅行者であると在留民であるとを問はず、必ず三條胡同の大和倶樂部に顔を出す。もとこの建物は、清朝時代に豫親王の王府であつた處であるだけに、青龍の格天井に紅柱の宮室を始め、すべて殿堂造りの設計になつてゐて、見るも落著きのあるゆかしい倶樂部である。附近には米人ロックフエラーの出資にかゝる協和醫學專門學校、及びその附屬病院の豪奢を極めた碧瓦の宮殿建築が天に聳え、その規模はかなり周圍を威壓してゐる感がある。それと並んで日本の同仁病院が小規模ながら軒を接してゐる。天津、漢口、濟南に於ける同仁病院よりも、確かにその位置を得てゐるが、何分にも隣接せる協和病院に壓せられてゐる感がないでもない。しかし醫術上の點では、遙かに支那人間に好評を博してゐるので、院長始め各員の評判が高い。

大和倶樂部は、從來公使館を始め、駐在武官、滿鐵、三井、三菱、大倉等の主要な處や、各個人からなつた民團が、これを維持してゐる。從來年中行事としての催ほしものや、圖書の購讀、娯樂講演會、社交など遺憾なく行はれてゐたが、近來の不景氣と動亂に伴ふ不安や、首都南遷の結果などから、めつきり、維持困難に陷り、運動會、芝居、射的、その他の催しものも、勢ひ振はなくなり、今では靜かに圖書室で、ひとり書見をするには、却つて好都合だといふ位の淋しい狀態になつた。

尙王府井大街から霞公府（シャーコンフ）に這入ると、同學會といふのがあつて、支那語の稽古やら、其の外支那に志す者の實地の學修やらに便じてゐる宿舍が設けられてゐる。これ迄に支那に關係ある人材を、數多出してゐることはいふ迄もない。宇野哲人、鹽谷溫兩大人の如きも、支那留學の當時、こゝに居られたことがある。

○

尙北平市中の散策では、北海に次ぐ遊覽地點として、中央公園を擧げなくてはなるまい。何分にも北平の市中は、始めての人には廣くて纏りがつかず、又何處を歩くにしても、とても埃つぽくて、靴も、外套も、埃だらけになり、それに又通りによつては、朝早くから夕方おそくまで、路傍を行列長く歩いてゐる駱駝が、さながら火鉢の灰の中に足を突込み突込み歩いてゐる狀態で、とてもひどい光

が知らう。嘗つては宣統帝の皇后として慶事もあつたが、その後世が世でなくなつた爲め、淋しき都落ちまでされて、天津に、旅順に、と轉々としてゐられたが、時、來たり、今や其の祖先發祥の地、滿洲に迎へられ、七萬七千方里の新國土と、三千萬の生民とを有する新天地に君臨せらるゝ朗らかな御代となつた。溥儀執政が二十九歳の青年元首であることは滿洲の天地に明かるい氣分を漲はせてゐる。貝勒未亡人は數年前に他界せられたが、若し今日在世せられてゐたならば、さぞかし喜ばれることであつたらう。

北平の街へ這入つた日本人は、旅行者であると在留民であるとを問はず、必ず三條胡同の大和倶樂部に顔を出す。もとこの建物は、清朝時代に豫親王の王府であつた處であるだけに、青龍の格天井に紅柱の宮室を始め、すべて殿堂造りの設計になつてゐて、見るも落着きのあるゆかしい倶樂部である。

附近には米人ロックフエラーの出資にかゝる協和醫學專門學校、及びその附屬病院の豪奢を極めた碧瓦の宮殿建築が天に聳え、その規模はかなり周圍を威壓してゐる感がある。それと並んで日本の同仁病院が小規模ながら軒を接してゐる。天津、漢口、濟南に於ける同仁病院よりも、確かにその位置を得てゐるが、何分にも隣接せる協和病院に壓せられてゐる感がないでもない。しかし醫術上の點では、遙かに支那人間に好評を博してゐるので、院長始め各員の評判が高い。

大和倶樂部は、從來公使館を始め、駐在武官、滿鐵、三井、三菱、大倉等の主要な處や、各個人からなつた民團が、これを維持してゐる。從來年中行事としての催ほしものや、圖書の購讀、娯樂講演會、社交など遺憾なく行はれてゐたが、近來の不景氣と動亂に伴ふ不安や、首都南遷の結果などから、めつきり、維持困難に陷り、運動會、芝居、射的、その他の催しものも、夢ひ振はなくなり、今では靜かに圖書室で、ひとり書見をするには、却つて好都合だといふ位の淋しい狀態になつた。

尙王府井大街から霞公府（シヤーコンフ）に這入ると、同學會といふのがあつて、支那語の稽古やら、其の外支那に志す者の實地の學修やらに便じてゐる宿舍が設けられてゐる。これ迄に支那に關係ある人材を、數多出してゐることはいふ迄もない。宇野哲人、鹽谷溫兩大人の如きも、支那留學の當時、こゝに居られたことがある。

○

尙北平市中の散策では、北海に次ぐ遊覽地點として、中央公園を擧げなくてはなるまい。何分にも北平の市中は、始めての人には廣くて纏りがつかず、又何處を歩くにしても、とても埃つぽくて、靴も、外套も、埃だらけになり、それに又通りによつては、朝早くから夕方おそくまで、路傍を行列長く歩いてゐる駱駝が、さながら火鉢の灰の中に足を突込み突込み歩いてゐる狀態で、とてもひどい光

景を見る處がある。

中央公園のあたりは、アスファルトの道路もひろく開け、特に公園内部の舗道に老樹の並木の下から、水樹池畔の清潔さとその風流味は、文人墨客ならぬ旅行者にとつても、如何にもすつきりした氣持を漂はせる。植物園の中にも、これに劣らぬ庭園池亭で、かつて昔、皇帝親王達の清遊を恣された幽邃閑雅な所もあるが、それとは又こゝは趣きが違つて、極めて明るい朗らかな感を與へてゐる新式の游境である。

日本人のこれに杖をひく者は、割に多くないが、園内の入場者にはモダンの女學生や又紳士淑女の連れもあつて、三々五々優美な姿を隨處に見せてゐる。嘗て汪永寶大人や、柯劭忞博士、それから王樹枏、陳寶琛等の碩學老儒を始め、當代一流の文人學者達を集めた文雅の清會がこゝに催ほされ、楊敷谷君の肝煎りで、古名硯の陳列雅會が行はれ、日本人側からも、故辻聽花、今關天彭、渡邊哲信、土屋禎二、山口察常等の諸君を始め來游の士多く、日支兩國の麗はしい小宴が、この水樹で催ほされたのであつた。かういつた風流韻事を樂しむ雅會には、最も相應しい場所である。

○

北平市中の個人の邸宅を訪問するのは、又一段の興味があり、こは北平生活の内面を理解する上からいつても大事なことである。なるべく名所舊蹟の巡歴の時日を割いても、紹介を得て家庭訪問の體驗を持つことは必要である。

嘗て西城後門（ホウメン）の三眼井三十二號に、鄧初先生と云ふを訪ねた。清嘉慶、鄧完白山人五代の孫に當たられ、今は藥劑師をしてゐられる。完白山人の篆隷楷だの、尺牘だの、羅聘山人との合作など、見るべきものが多く、主人はいと鄭寧に取りもつてくれるのである。三眼井と云ふ巷名は、後門路次の奥、四辻になつた所に、共同の井戸があり、石の厚板で蓋がしてある。その石に釣瓶を汲むための小さい穴が、品の字なりに三つ穿たれてゐる。なるほど三眼井とはよく名づけたものだと、肯づかれたのであつた。或は又東城に文人として知られた白先生の門を訪ねると、豫め打合せがしてあつたので、早速先生は客室に請ぜられ、お茶に自家手製の點心まで出され、厚く待遇された。書齋に自分ども一行を請じ、金石出土の珍品を一々見せられ、特に敦煌發掘の記錄、魏志の斷片までも取出でゝ熱心に說明され、その印刷物をそれ〴〵一行のものに贈られる。又先生の居室から、庭園屋外の楸樹（日本の梓檀の木に似たり）に就ての日本のツバキと相違せる話なども主客の間に出でゝ興味が深かつた。

先生は又古名硯を有し、漢の年號の刻せられてゐるものを愛藏してゐらるゝ。これは南支那骨董界でも、有名な珍硯とされてゐるものである。又東城の方では日本人に親しみ多き金紹城大人を、東四

牌樓の錢糧胡同の邸宅に訪ねたこともある。金氏は日華聯合展覽會の創設者の一人でもあり、又自身古畫の模寫にも長けてゐたので、自ら名畫收藏も多かつた。今は故人となられて、その令息の開藩君が後を繼がれ、先代同樣に日本人の來訪を歡迎してゐる。其他文人の楊晉翁や、又許卓然翁、鐵筆家の程清翁などをそれ〴〵訪ね、その家庭內部に於ける日常の樣子を窺ふなど、頗る人知れぬ興味が多いのである。

話は飛ぶが、北平市中の觀光には、更に北平で出來る工藝品の製作工場にまで視察を試み、出來れば紹介を得て、西城の棚縵胡の絨氈工場を見て、その製作振りの如何に大仕掛であるか、又その柄模樣を出すに、如何に職工達が呑ん氣に色毛を結び、織つてゐるかを、見るのは興味深いことである。或は瑠璃廠の裏手に這入つて、翡翠工場を見、彫刻師が或は糸鋸をつかひ、或は砥石をつかひ、巧みにその圖案意匠によつて精巧な出來映えを見せてゐるかを實地に見學するのも、珍らしい土產話となる。其の他琺瑯（ファトン）の工場、又菜館の料理場あたりも、本場だけに、よく見て置くに越したことはない。恐らく北平は、これらの工藝、美術、料理、嗜好の方面に、無限の材料が藏せられてゐる所である。その人の心掛け次第では、如何なる方面でも研究視察の歩を進めることが出來る。全く北平は、どの方面から云つても、無盡藏の古都である。

更に北平では、その城內に住まつてゐる富豪が、その實物財產を如何なる苦心をして祕藏してゐるか、又現金を銀行に託することなく、自宅に藏する場合に、如何なる仕掛けをなしてゐるものであるか、この點は、銘々支那人同志かたく祕密を守つて、人に打明けるやうなことをしない習慣がある。けれ共特別にその道をもつてすれば、却つて外人の日本客にはその祕密の穴藏まで、主人自ら打明けて案內をしてくれる。そこには意外にも無邪氣な態度で、愛すべきものがある。現金や家資は、多く地下室に祕藏して、主人一人のほか殆んど何人をも入れない。多くは居室の一隅に石の蓋がしてあつて、その下に狹い石段が設けられてゐる。繩を取つてその地下室に案內されて見ると、なかは丸天井で、周圍の壁には幾段も石の棚が設けられ、これに石佛、古銅器、古硯、玉手箱と云つたものがづらりと並べられてゐる。いざ動亂、いざ一大事といふ時に、一々これが運び出される譯のものでないから、流言蜚語の樣子によつて、大抵數ケ月以前からそろ〴〵荷造りをし、祕密裡に手蔓を求め求めて、安全な地點へとこつそり移し行き保管を賴むわけである。三百有餘年と打續いた太平の北京王城の巷にも、尙且つこれ程迄の思ひ惱みが、今尙あるといふことを考へて見ると、北平士豪の胸の中も察せられ、おさ〳〵枕を高うして安眠するわけにもまゐらぬのである。

○ 支那旅行の行程

様子の變つた北平風物を漁り出せば、數限りなく求められもするが、その中には又相當變つたものがある。それは一日五回宛、或は信仰のもとに、儀式的に男子は男子、女子は女子と、それぞれきまつた回教のお寺に出かけ、陰部其の他穴といふ穴を、神聖な開水(湯のこと)をもつて洗ひ清める風俗のあることである。これは前にも述べた支那回教徒の連中が、清眞寺の寺内で行ふ大洗、小洗の儀式に見る古禮の風の變はつた點である。

回教寺は北平牛街の勅願寺東大寺と西大寺に參詣して、教長アホン(アラビヤ語にて住職を意味す)に會ひ、參觀を求むるならば、譯なくその洗ふ所から一同の禮拜をなせる殿堂内部を、悉く參觀させてくれる。又アラビヤ語のコーラン(經典)までをも目の前に開けて、詳しく説明をしてくれる。祈りの言葉は、全部アラビヤ語でなだらかに稱へられ、如何にも壯嚴な雰圍氣を呈してゐる。

支那の佛寺や孔子廟あたりでは、門番、留守居、寺男などが、外來の參觀人と見るや、手ひどくチツプをねだる癖があるが、回教の寺ばかりは、かゝる忌〳〵しきことはなく、徹頭徹尾眞面目そのものである。淨水を前に、信者が口腔、鼻、耳、目、指の又、足首などとあらゆる所を洗ひ清めてゐる際ですらも、口中でムニヤムニヤとアラビヤ語の題目を稱へつゝやつてゐる。陰部を洗ふ時と、その大洗といつて全部脱衣して頭から被るときだけは、觀音開きになつた銘々の定めの小室に這入り、しやがんでその儀式を行つてゐる。宛ら電話室ぐらゐな狹い板で仕切られた部屋で、床下は漆喰になり、湯を流せるやうになつてゐる。首と足元だけは、その戸の外から見えてゐる。之を訪ねるには、女人の行く方の寺は、參觀人を女に限り、男子の行く方の寺は、參觀人を男のみに限つてゐるので、その邊の規則は不文律ながら、かなり八釜しいらしい。これは日本の函館に見るトラピストの修道院のやうな式で、その仕組みは男女を嚴重にわけてゐるのである。

清眞寺に這入つたものは、そのつもりで嚴肅そのものをモツトーとしてゐなければならぬ。かりそめにも、その一場面に物好き半分に覗き込んだり、或は湯場で考へのない笑聲を洩らしたりするやうなことがあつては、神に對して不敬にあたるものだと心得なければならぬ。

恐らく日本人でかういふ祕密の寺の内部に深入りして行つた者は、自分の知つてゐる範圍では、川村狂堂翁と自分とで、尚最近小野船長と佐野君とを、これに親しく自分が案内したことがあるだけである。上海老北門の清眞寺に行つたときなどは、日本人で未だかつてこゝに入來したるものは一人もないと云つてゐた。清眞寺はどこでも神聖な處と考へられ、もし界隈に行つて豚の話をしたり、豚料理のことを云つたりして、袋敲きにされた例は少なくない。いつかも某富豪が、祕かに月夜豚を蒸包みにして、牛街から奥へ深くこつそり持ち込み、宴會の支度をしてゐたと云ふ事實が發覺したことが

ある。大變なさわぎになり、どさくさの揚句、たうとう流血の椿事まで見たといふ恐ろしい話もあるとの事である。

○

北平の市中で、別に變つた風情としては、城内を流して歩く物賣りに面白いのがあることである。それとなく注意をしてゐると、時折り頗る奇抜なのがある。小さい果物の熟したのを五つ六つ串に挿し、その全體に水飴のやうな透明のこもをかけ、屋臺車に列べ飾つて、午後の日向まちに賣りに來るのを見る。その物賣りの呼び聲が振つてゐる。これが東單の各胡同、靜かな土塀を越えて高く響き渡る。「タンコウル」（糖果兒）と云ふときの呼び聲と云つたらない。その果物には、皮の黄色なのと紅色なのとがあつて、甘味のうちにいくらか酸味をも交へ、しやり〳〵して舌當りがよい。その値は銅子兒の三四枚も出せば、一串呉れる。大抵その大路小路を流して歩く範圍がそれ〴〵きまつてゐて、どの胡同はどの糖果兒屋があるくところだと云つた風に、局限されてゐるものらしい。その勢力範圍を互に侵すことのないやう、親方が之を監督してゐる。從つて大抵その時間を定めて、そのきまつた地點に屋臺をとゞめ、中にはそのまだ朝夢の醒めない時刻からして引いて歩るき、澄み亙る大空に、高く響き渡る例の「タンコウル」を二三回宛連呼してゐる。一寸したことであるが、これで如何にも北平情緒の優美な感じが出て來るのである。

胡同といふ胡同には、毎日幾人かの剃頭的（ティートウティ）が、天秤棒で理髪道具に洗面器、鏡などを擔つてやつて來る。これは客を呼ぶ爲めの一聲も發しない代りに、天秤棒を支へた左手に、二尺に餘る鐵のでつかい音叉を輕く持ち、その音叉の中にばちを差し入れ、右手で強くしごき鳴らせるのである。すると胡同を挟む兩側の長壁に之が響き亙る。その「ビーン」「ビーン」と餘韻長く聞えるところは、のどかでよい。これを幾回となく繰返しつゝ、ゆたり〳〵と流して歩いてゐるところは北平らしい氣分である。

時折は椿樹、老槐の綠蔭で、路傍の行人がこれを呼び止め、よい心持ちで丸剃りをさせて、圓頭になつてゐる小景を見る。又公館の重門の扉を半ば開き、その邸の門番小使らしいのが、その剃頭的を内に呼び入れてゐる所なども見る。自分達も先年乾麵胡同の諸橋君客寓の庭内にこれを呼び入れて、やらせてゐたのはよかつたが、いつしかその間によい氣持になり、居眠りを始めたのであつた。椅子に凭りかゝつてゐることに氣がついたときは、最早やその時おそしで、自分のあたまはそつくり支那式に圓く剃り上げられてゐたのであつた。折悪しく丁度その晩は、約束の公使館の宴席に出たので、ひどく先輩同人からからかはれ、一つ寫眞をとつておいたらなどと云はれたのであつた。

○

北平の買物は、殊に北平仕立の衣裳がよい。支那服に支那帽は、北平獨特の品のよいスタイルで、上海あたりのそれに較べて、風流閑雅な趣きがある。わけても衣裳はゆつたりと袖丈長く、全體に非常なゆとりをもつて仕立られ、帽子も亦同じ西瓜皮帽ではあるが、兩肩が充分に張つてゐて、南方のなでがた式の恰好とは違ふ。南支那で、もし北平帽を被つてゐる老紳士に會へば、間はずしてその北平客たることを察することが出來る。

北平の衣裳、身の廻り、料理など、凡てこれを短かい滯在時間のうちに要領よく見學するには、王府井大街あたりへ出かけ、山本照像館の先きの東安市場（トンアンシーチャン）にでも遊び、こゝで半日を費やすつもりならば、大抵の風物は殘らず見學し得るのである。そこには玩具であれ、繪草紙であれ、新刊物であれ、雜貨であれ、旅具、點心、漬物、何んでも御座れで實に便利に集まつてゐて又非常な賑かさである。

○

最後に、北平の滯在には、北平語を幾分でもあやつり得るだけの語學が、出來てゐないといふと、少なからぬ不便を感ずるであらう。洋車（ヤンツア）に乘るにしろ、驢馬を傭ふにしろ、又買物一つして見るにしろ、先づ第一に必要を感ずるのは北平語の問題である。

宿を「イーサンスー」館に取つてゐる日本人が、若し出先きの往來で、東單の「イーアルサンコワン」と發音し得たならば、路上の行人は或はすぐ教えてくれるかも知れぬ。しかしこれをにヒフミカンとか云ふ風に、純日本式で發音したとすれば相手方には少しも通じない。張學良と云へる名前にしても、これを「チヤンシエーラン」と發音しなければ、土地の人にわかる譯がない。北平の地名にしても、必ずこれは「ペイピン」と呼ばねばならぬ。又料理店の東興樓にしても、これは必ず「トンシンロウ」と發音しなければ、土地のものには解らない。上海に行けば上海語、廣東に行けば廣東語がある如く、北平にてはその土地の言葉を以つて語るのが、旅行の秘訣の最も大事な點である。されば若し通譯を要する如き場合には、東單の觀光局に、又それ〴〵の宿に、その相談を持掛け、その上の事にすれば何とかなるであらう。

北平名物の一つに乞食がある。こはそのつもりで支那到る所に注意してゐると、支那乞食の姿から、その生きて行く上の眞面目なるものがよく解つて來る。日本の乞食は支那のそれに較べると、高級乞食に屬するものである。かなり有產ルンペンの方に屬する者と見られる。

北平市中に見る乞食のひどいものになると、殆んど身に纏ふものはつゞれの錦で、その親方といふものの風體を見るにとてもひどい。多くは亂髮で、胸部は半分以上も露出し、冬の嚴寒零度以下二十度三十度といふ時でも、胡同の高壁のもとに立ち、にこ〳〵顏で血色のよい皮膚を見せ、子分をよ

くいたはり、仲々親分子分の統制よろしきを得てゐる狀勢が見える。いつぞやも東城で、東裱褙胡同の廣場の一隅に、あの正月の寒い朝早くから三軍を叱咤してゐる有樣を見た事がある。この界隈の勢力範圍に屬する子分が、あちこちで拾ひ集めて來たぼろきれとか、馬糞とか、石炭の塊、鍋釜のこわれ、紙屑などをば、親方は比較的よい値段で引取つてやつてゐる。又朝早くから漁りに出かける子分を勵まし、溫かい稀飯（シイファン）のお粥を振舞つてやつてゐるところも見える。かくしてともかく、恩威並び行はれてゐる樣子は、全く見上げたものである。「乞食三日すればやめられぬ」とはひとり日本で云ふばかりではなく、支那にも亦現實にその空氣が眼のあたり窺はれる。

西裱褙胡同、西湖堂の門前には、古くから一間四角にも充たない、火の見番にあてられてゐたささやかな番小屋がある。一尺の厚壁、土廓造りの頑丈な小屋であるが、界隈の乞食の親子が之に五六名も住み込み、既にこゝ五七年を經てゐる。今では何んだか之に住居權でも付いてゐるかの如く、我物顏にヅウ〳〵しくも住み込み、ひるまは巷を稼ぎあさりをして、晩方になると歸つて來る。あの樣子では、やつこさん中々出て行きさうな景色も見えない。町内でも、さはらぬ神に祟りなしと、全く無關心でゐるらしい。多少近所からの貰ひものなんかもあるらしいが、何んで食つてゐることやら、又どこにどう云ふ聯絡のあることやら、一向にその命つなぎの方法が外部のものには解らない。

小屋のことであるから膝を容るゝに足るだけで、すし詰めに寢るとしても、到底並び切れたものでないものを、どうして毎夜そこで睡眠が出來てゐることか判りかねる。矢張り乞食社會のことは、その道はその道によつて賢しで、ほかから揣摩臆測など許されないのである。とも角乞食の人生觀と云ふものは、土豪の貴族生活なんかよりか、却つて心にゆとりもあり、何かの機會には、料理店から大變な出前をとり寄せ、青天井の大廣間に出て、君に勸めて更に盡くす一杯の酒などゝしやれ込んでゐる文人肌の先生もゐたりなどするといふことである。

○

以上は先づ北平城内に就ての觀光手引の大略である。しかしこれ以上は、旅をする銘々の自由意志により、更に專門の方面にどちらへなりと、走ることも出來、その道その道のよき相談相手、案内指導者を得て、ほど〳〵に然るべく視察を續行せらるゝがよい。こゝに述べたのはホンの手引きに過ぎず、その長い歳月に渡つて北平及この地方を深く極めんとする人々のために述べ來たつたものではない。北平城に入城した旅客は、とかく宮殿見物にのみ重きを置き、やゝもすれば大事な民衆生活、市民の娯樂とか、信仰方面とかいつた方面になると、さつぱり見ようともしない。日本からの觀光客は、民衆とか大衆とか云ふと、すぐ之を恐れたり、きたながつたりして、多くは粗略に見てしまふ。

甚だしい先生になると、民間の生活振りなど、見る價値がないのだと頭から問題にしない者すらある。その爲めこゝには、その問題にされない點を特に問題として取扱ひ、之を力説紹介したわけである。寧ろその宮殿巡りなどの方は、古い文化の研究に這入り、之に憧憬して沒頭してゐる如き手合には好まれるであらうが、今日以後この時代の勢ひによつて、動くところの民衆大支那なるものを考へて行かうとするには、必ず忘れてはならぬ處である。將來の支那に目を放つものの爲めには、何んといつても、この大衆生活、信仰、趣味、娯樂といつた方面に重きを置くべきであると信ずる。北平視察に出かけても、その城内にのみ局限されないで、出來れば城内の事は半分割愛してもよいから、更に近郊に出で、近郊から萬里の長城方面の風物視察にも、暇をかけるのが本當であると思ふ。

北平の郊外

北平の朝陽門外は、自動車で約五十分行つた所に、饗橋の無線電信所がある。これは表面に日本の三井が立つて、約六百萬圓からの投資をして造つて東洋一の大規模のものである。今では奉天城外の千二百萬弗からの無電が出來てゐるので、餘り饗橋の方は世間からいはれなくなつた。のみならず亞米利加のフェデラルと支那側とのものれが、やゝこしくなつて、結局日本ひとりでこれを公然使用せられなくなり、今は唯折角の文明的裝置が、空しく建ち腐れの姿となつてしまつたのは殘念である。之が先年出來た當時訪ねて行つたときは、フランスの議會の演説もありありと聞えれば、濠洲での放送も判つきり聞えてゐた。今やこれが國際問題からして、無價値にされてしまつたとは、返す〳〵も外交上の惱みが思ひやられてならない。

饗橋から郊外の大平野を走る道を、更に東の方、白河の上流へとドライヴすると、まもなく有名な通州の都城に達する。日清戰爭當時は、北京への運輸交通は、すべて船で天津からこゝまで持つて來たものである。今はひどくさびれて、淋しい田舍の古城となつてゐるところであるが、城内に聳ゆる大觀廟（タークワンミヤオ）十三重の古塔や、唐時代の貞觀七年、燃燈師佛舍利塔の古碑などの壁中に散見するのは、殊に金石漁りの上に興味しく思はれる。又城内の古寺紫清宮は、孤兒貧民の救濟事業に充てられた場所を始めとして、その社會事業の意外に進んでゐる樣子が窺はれるのである。施藥施米をしたり、細民の葬式を出したり、墓地の世話をしたり、苦兒を收容したりすると云つた所が、今尚そのまゝ殘つてゐる。その主なるものは次の如きものである。

敬信齋　施粥處　敬惜字紙　刊印善文　養塾育才　淨手施茶　結社放生　捨藥救疾　施衣禦寒
施術飽衆　施棺檢屍　義地埋骼　國誼學塾

これらは大抵、字面から察せらるゝ所で明かであるが、壁書の紫雪、仙境の文字と、いかにも調和してゐるやうに思はれる。北平朝陽門の門衛は、城外に出入する自動車を一々誰何し、その手荷物を調べたり、運轉手の鑑札を調べたり、車の郊外行の許可證の有無を一々點檢したり、仲々八釜しいところである。

北平城の北郊には、元時代の歴史を物語る土壁の殘骸が今尚殘つて居る。又南郊には遼代の名殘りも散見する。天壇の片われである地壇、月壇、日壇もその城外に遺蹟をとゞめてゐる。

北平城壁の西北隅西直門（シーヂーメン）を外に出ると、便門の下に下手物の土器、土瓶、壺、土管、鉢類などを、野天に陳列して客を呼んでゐるところが見られ、如何にも場末らしい趣きが路傍に偲ばれる。樓門も重檐がひどく垂れ下り、半ば荒廢しかゝつてゐるその有樣は、同じ城門でも前門の正陽門などとは、雲泥の違ひがあるやうである。

城外の道路でよく人に知られてゐるのは、萬壽山、玉泉山から湯山（タンシャン）に通ずるあの街道であつて、玉泉山までの路面は殊によい。始め西直門の車站を右に見て、場末の民衆軒並みの間を通り抜けると、動物園植物園を合併した天然博物院が路傍に指される。大の男の門番に立つてゐるのをちらと見て、楊樹の並木を驢馬の手綱ゆるく歩を進める。萬壽山の廣場門前に着くまでは、右に又左に土豪の墓陵や、百姓の土饅頭などが、そちこちに認められる。その途上、米人經營の清華大學の聳ゆるは、洋風であるだけに旅の人の目を率いてゐる。

昔に名高い天下の萬壽山は、北平郊外隨一の名勝地であつて、清朝の全盛時代、離宮「頤和園」として響き渡り、後ろに山を負ひ、前に湖水を受け、その地の利を得てゐる點に於て、又その建築美と庭園設計の優れてゐる點に於いて、又その部分的の藝術的裝飾の完備せる點に於て、世界に比を見ない一大祕苑として、國際的に噂されてゐる。湖水は昆明湖と稱せられ、之を南方杭州西湖の公園に倣ひ、西湖の孤山に比すべき中島から、陸へかけて十七孔橋の大理石の橋梁を架してゐるのは見ものである。正面の山上、山腹には、佛香閣、排雲殿、銅閣等を始めとし、長廊、仁壽殿、文昌閣、知春亭などと、文字通りの金殿玉樓をそのまゝに、大規模の設計が理想的に成り、王者の庭としてその配在の妙を得てゐることは、最も賞すべきである。靜かにその宮殿樓閣の柱や軒や天井などを細まごまと見て來ると、支那美術の粋を盡し、その華麗いはん方なく、殊にその宮殿、樓閣の全部に施された黃金色鮮やかな瓦の屋根は、コバルト色の碧空、並に昆明湖の碧水に上下相映じて、目も醒めるばかりのうらゝかさである。西太后の居室にあてられてゐた垂簾は、奥深き幽趣を湖濱に見せ、道を左に逍遙すれば、水晶の如き水の中に、純白の大理石の石船が浮んでゐる水景を見る。宛ら龍宮世界の繪

のまゝの眺めが表現されてゐるので、低徊去るに忍びない感がある。石船は舷頭に小閣をつくり、今は雅客のために、啤酒（ビール）汽水（サイダー）などを提供してゐる。

もしそれ心あるもの、石船の下に遊船を傭ひ、湖上靜かに漕ぎ出づれば、五彩に輝く萬壽山、金殿玉樓の全景は手にとる如く湖心にその反影を投げて、誠に西太后が當時理想的の榮華絶頂の生活振りを思ひ浮べさせてゐる。怖らく紫禁城内の北海の遊山舟遊もさることながら、それよりも遙かに萬壽山に味ふ清遊の方が、一段と清朝全盛時代の黄金生活を聯想せしむるものが多くはないかと考へるのである。

萬壽山昆明湖の水は、かみ手の玉泉山にその水源が求められてゐる。名前に背かない丈の水晶の如き水の源泉をなし、唐の陸羽の茶經にあやかり、天下第一泉の名を恣にしてゐるくらゐである。玉泉山の水郷は又北平城外での唯一の夏の水の遊園地ともなつてゐる。むかし西太后が北洋艦隊の經費を流用して、この萬壽山の修築にあてたといはるゝが、全くその頃の贅を盡した實に美しい畫舫が、今も尚二艘、玉泉山の奥深き舫庫のうちに浮んでゐる。その一艘はやゝ傾きかゝつて、花の都の榮華な生活の反面を皮肉にも物語つてゐる。

幾十尺の深き玉泉の水は、薄青くあちこちの水底から、玉の如く泡が浮び上り、何とも云へぬよい清楚な水趣を呈してゐる。今はこの泉水を利用して、啤酒汽水の製造會社がこの附近に設けられてゐる。西太后が畫舫を浮べて、運河の水上を北京の宮中指して漕ぎ下つてゐたといふ當時の事など思へば、一般の黄金生活が髣髴としてこゝに考へ出されるのである。

玉泉山の後方には、香山が聳え、西山と云はるゝ連山が屏風の如く續いてゐる。山の麓に又中腹には、有名な禪寺、臥佛寺、碧雲寺から八大寺の大悲寺などが、とび〳〵に綠蔭に見出され、游客を待ち迎へてゐる。殊に白松寺だの、又熊希齡翁の慈幼院などは珍らしいので、人の之に杖をひくものが多い。

碧雲寺には、先年孫中山先生の靈櫬が安置せられてあつたので、その名が高くなつた。今その後へ青天白日旗を掲げて、中山先生の寫眞をまつり英靈を弔つてゐる。尚寺の境内には近來私立の中學校などの設けもあり、相當學生がある樣子に和尚も話してゐた。

尚北平郊外には西の方にゴルフリンクがあつたり、或は遠く前清朝の西陵の墓を參拜することも出來る。或は又城壁の近くにあつては、天寧寺の高塔が仰ぎ見られる。或は道教の本山白雲觀のあり、之に雲水のあまたに集まつてゐることや、一月十九日の大祭の賑ひは、人のよく知る處である。

かやうに城外には、相當見所があつて、應接に遑のないくらゐである。又南方には、清朝時代の南

苑が見出され、或は東壁の周圍には二閘（アルチャ）の運河水郷があつたりする。寺で有名なものは、德勝門外に荒廢し切つてゐる喇嘛寺の黄寺（ワンスー）といふのがある。今は殆んど破壞されて、徒らに乞食の巢となつてゐる。しかし城内に於ける唐の法源寺や、元の隆福寺（ロンフース）などの建築とは違つて、頗る豪奢なものである。清朝宮廷のお聲がかりのあつた寺院であるだけに、喇嘛塔の紬藥のかゝつた壁瓦だけでも、相當藝術價値のあるものがあつて、大いに見ごたへがする。暇にあかし、北平城外の視察觀光を、よき友を得て漁り〳〵歩く時は、尙幾多の歷史、傳說、文學、宗教など各方面について、どれ程の收獲があるか測り知れぬものがあると思ふ。

湯山と明の十三陵

北平の旅は、旅程を更に延長して、萬里の長城附近から、山西省大同石佛寺方面までをも取入れ、北支那一帶の地理風物を十分に味つて見ることにするならば、大支那の横顔の線が會得せられる。北平附近のことは、上に述べた所を以てして、大略その文化の輪廓だけは諒解せられる。しかし北平から北へ、又西へと奥深く進んで行くと、都城を離れた本當の朔北の氣分なるものや、宏大無邊の北支に漲る絶大の淋しい興味が解せられて來る。その點は、北平邊りを見てゐた丈ではわからない。

先づ北平の西北から漁つて行くと、湯山（タンシャン）の溫泉と云ふがある。火車で沙河驛から行くことも出來るが、又北平西直門から萬壽山經由で、自動車を驅ること約五時間、山麓の一寒村に、田間から湯氣の盛に立昇つてゐる光景を見る。これぞ土民が小湯山と呼んでゐる溫泉場で、勿體ないことに、唯徒らに熱湯の噴出するに任せてゐる。冬の寒中に行つて見ると、盛んにその界隈あちこちの泥田の中から、泡立つた湯壺の散在してゐる處が見出される。後ろに連山を負ひ、南に千里の沃野を控え、冬枯の靜かな田家の光景は、宛ら倪雲林の山水繪卷でも眺めるの感があつて、寂しさのうちに風流の趣きが味はれる。

やゝ同じ道を進むと、畦畔に當つて、大理石の彫刻ゆかしい湯槽の廢墟が二つ三つ、誰れ人の訪ね來る客もなく、唯淋しげに見出されてゐる。土地に行つて農夫達や物知りに會ひ、その語る所によつて見ると、

『この邊りは、昔し乾隆皇帝の沐浴所が設けられてゐたのです。當時はその行宮に、溫泉井、澡雪堂、瀛瓊室、飛鳳亭など云ふのがあつたさうですが、長髪賊の亂以來、宮廷からも見えられなくなり、今は荒廢してこの通り崩壞し、唯徒らに無心の溫泉が湧き出てゐるだけであります。』

といふことであつた。尾をびこ〳〵ふつて飛び廻つてゐる雀を見るにつけても、今昔の感に堪えな

いわけである。

道を更に山麓に沿うて奥へと進めば、土民たちの所謂大湯山（タータンシャン）といふ温泉場に達する。世間では之を一般に湯山（タンシャン）と呼んでゐる。湯山は、北平方面の湯浴客が、春夏秋冬かなり集る所だけに、洋風と支那風折衷の中西旅館が、數多軒を並べ、中央の廣場に行つて見ると、盛んに湧き立つてゐる湯壺があり、湯氣で見えないくらゐであるが、その切り石に疊まれてゐる中を覗き込んで見ると、音はたいしたことはないが、何せよ物凄いくらゐである。石管をもつて熱湯はそこから四方に引張られてゐる。大衆向きの共同風呂だの、紳士向きの一人風呂だの、種々浴槽の設備があり、相當賑つてゐる。日本の温泉場の如く、浴客がその肩の處までたつぷり這入れるやうには出來て居ない。その爲め日本人客には物足りない氣持もするが、北平界隈他にない唯一の温泉場であるから、内外人のこれに遊ぶものがかなりある。殊に土曜から日曜にかけて、こゝに一泊旅行を家族連で試みるなど、手頃の小旅行が昨今行はれてゐる。大體湯山は場所が清潔であり、費用も割にかゝらない所から、湯山の名は此の頃次第にひろがり、南京郊外の湯山の名と共に、支那の旅では有名な所となつた。浴後、ゆつくり後方の別莊地帶にでも遊ばんか、境内には池があり、丘があり、舊交通系の親日派、曹汝霖、陸宗輿兩大人の別莊を始めとして、瀟洒たる別業や、自然の庭園などがあちこちに隣接し、綠蔭巨巖深草の間に麥

戀ふ鹿の遊べる姿なども見え、游客の來たり遊べるに狎れて、おとなしく頭を出してゐる樣きなど、日本の大和、春日の杜を思ひ出させるものがある。園池はひろく、冬季は之に二三尺の厚い氷が張りつめるので、モダン式の湯治客のスケート遊びが賑かである。又氷商人でゝもあるか、大鋸をもつてこれを挽き切つてゐる音や、その氷上を滑らせて、次から次へと運んでゐる青衣姿のもく〳〵した大男の動きが鮮明に眺められる、又一方の樹下に佳人打連れ、ラツコの毛皮でくるまつた好紳士が、氷上の記念寫眞などとつてゐるのも、湯山に相應しい氷上の一場面である。

湯山から更に奥へ進んで、有名な見所のあるところは例の南口（ナンコウ）郊外にある明の十三陵である。これは北平を觀光する客の、萬壽山と共に見落してはならない絶大の名勝地であつて、紫禁城、萬壽山、十三陵と云ふこの三者は、北支那に於ける雄物のうちの白眉である。十三陵の見物は旅程の都合上、多く北平から直接火車で、南口へと飛ばすのである。やゝもすれば氣の速い日本人は、自動車で湯山まで、それから先きは一路十三陵へ飛ばせるものと無雜作に考へるものがあるが、途中は石ころ路や畑中などが打續いてゐて、碌なみちはなく、その間タイヤのパンクしたり、ガソリンの供給所がなかつたりして、到底ドライヴすることは困難である。むしろ南口から、十三陵の石頭牌樓（シイトパイラウ）へと驢馬で行くのが一等賢い方法である。その間絶えて自動車道などは見出されない。

十三陵の見物を思ひ立つた者は、始めに北平の西直門車站を、朝七時の一番汽車で立つプログラムが最もよい。北支那の田舎旅行のことゝて、この一番汽車には一二等車がなく、三等車のみで連結せられ、とてもその箱はひどい。旅客は之に驚かされたいやう含んでゐるべきである。と云ふのは、貨車やら郵便車やら、殆んどやくざ函の寄せ集めと云ふ列車に過ぎないのである。この邊のお粗末さ加減が北支那の風物にぴつたり合し、周圍の背景とも、客だねとも、相調和してゐると見られる。南口につくと、驛から程近き所に、南口旅館、一名通商飯店といふホテルがある。之には無論電燈の設備なんかはなく、ランプが用ひられ、田舎ながらも中西式（中國風と西洋風の式）に出來てゐる。北平以北、隨一のハイカラな中西旅館とも云ふべく、樓上、樓下、客室もかなりある。しかし宿につくる洋食は、名ばかりの洋食でまづいことはまづいがせめてもの食事である。中國菜をあつらへると、外から出前を取寄せてくれる。風呂の設備はないから、もし入浴をしたいなら街に出て、民衆向きの澡塘に出かけるのほかない。田舎に行つたら、すべて田舎風呂、田舎の髪床などよく體驗する心がけでゐるべきである。そこに又一種の味ひを見出すことが出來る。風呂は錢湯であるが、毎日その客を呼ぶ爲めに、沸いたとなると朝早くから、その時刻を知らせる鐘を打つ。そのかねの響きは、清らかでよく透る。南口の髪床唐山理髪館に這入つて見ると、理髪の値段書が墨蹟美しく次ぎの如く掲示されてゐる。

價目表

理髪	銅元五十枚	
平頭	銅元五十枚	
推光	銅元四十枚	
剃頭	銅元四十枚	
括臉	銅元二十枚	
取耳	銅元十二枚	
茶資	隨意	

括臉（かほそり）取耳（耳さうじ）按摩など、それ〴〵別々に勘定をせられることいづこも同じわけである。

南口は田舎町ながら十年二十年前の樣子に比べて見ると、大分開けて街らしくなり家數もかなりふへた。郊外の彼方には、大規模の列車の車庫まで見るに至つた。街をあるいてゐると、色々のものが目につく。先づ路傍右手に聳ゆる高壁は、相當大きな土地の豪家らしく察せられ、月夜壁下に村人共

の打鼓書（田舎らしき節をつけ、面白く古書を讀み聞かせる讀み賣りの職業）の宣講を營める男を取巻き、それ〴〵樂しげに聽き入つてゐる場面なども、田舎ながらに優しみがあつて純朴の處が汲みとれる。

南口から明の十三陵は二十五支里、之に參拜に出かけ、日歸りで之を往復せんとするには、前夜に驢馬と馬夫の交渉約束をなしておくが便利である。ホテルから十三陵行の客のとる順路は、鐵道線路から離れて道を右に取る。連山の麓、幾哩と續く柿畑に沿ひ、又野畑の中を白羊の群と前後になりつつ進み行く。郊外の天地はひろく、高原の起伏せる所に自然と出る。すると何處迄も同じ方向を、更に山麓に平行して辿り行くと云ふと、結局十三陵天壽山の盆地の入口である石頭牌樓の下に達する。十三陵は明の成祖文皇帝から莊烈帝に至る十三帝安葬の地である。その靈域の入口なる牌樓を背景に、遙かに前方を見渡せば、沃野ひらけ、殆んど際涯なきまでに打續き、北支南口の天地の如何に宏大なるかを思はしめてゐる。牌樓は高さ三十尺、その下に駒を留めて小憩、或は撮影をしたりスケッチなどするのもよい。四邊人なく、誠に寂寥の感がある中に、柿の小枝に叫ぶ幽鳥の聲がひとり高く聞えてゐる。晴れ渡る空には大の鳶が三羽、大きな圓を虛空に描いて靜かに飛び廻つてゐる。この靜けさに滿ちた天地を、我物顏に駒を進め、牌樓の下をくゞつて一路北のかた盆地を長陵さして行く。幾哩の行く手、遙かに聳えた天壽山の嶺は、右に左にと秀麗な連峯を兩翼に伸ばし、その間突兀たる山巓や巖々たる山骨の輝やけるのを見る。そのあたりの光景は朔北に近いだけに、如何にも豪健な感じを游客に與へ、連峯の麓各所には、十二ケ所に亙つて綠林の散點せるものが見え、林間には紅壁黃屋の建築美の指顧せらるゝのは、全くの畫趣である。遙か正面に見える山腹の紅壁は、これぞ明の成祖文皇帝を葬つた長陵であつて、その左に仁宗の獻陵があり、右に宣宗の景陵があるのを始めとし、谷を隔てゝ諸陵が散在してゐる。その盆地靈域内に見ゆるものは、都合すべて十二陵だけ數へられる。尚一ケ所はこの盆地のそとに在つて、柿林の山下に思陵と稱せられるものが、飛び離れて存してゐる。石標の白く屹立せるものゝ指さゝれる奥にあるものが卽ちこれである、迂つかりしてゐると。これだけは氣づかないで過去つてしまふことがある。十三陵の觀光は、先づ上述石頭牌樓から始まつて、陵域を中央の石路に沿うて進み、例の有名な大理石の藝術的建造物の左右に配列されたのを打眺めつゝ行く。すると、先づ始めに仰ぎ見らるゝ高き圓柱がたのものは華表である。面に祥雲の刀痕鮮やかな薄肉彫りの模樣が現はされてゐる。日本では普通華表といへば、鳥居のことをのみ意味することになつてゐるが、支那で云ふ華表は全然その形が違ひ、長き棒狀をなしてゐる。同じ大理石の華表で、乾隆刻と稱せらるゝものは北平にもある。北平は紫禁城、中華門の門前、長安大街の路傍に、一對相

並んで聳立してゐるものがこれである。全く十三陵のそれと大同小異のものであつて、その樣式を一にしてゐる。

次ぎに十三陵の呼びものとして、支那藝術史上尤物となすべきものは、例の石人石馬である。これは石象、石馬、石獅、石駝などを始めとして巨大な各種の性物が、或は坐し、或は起ちたる姿で、一對宛配置され、その容姿は凡て皇陵の靈前に、謹愼の情を表現してゐる形をとらせたものであると傳へられてゐる。更にその萬象の並列せる奥に、これも亦巨大な大理石彫刻の衣冠束帶姿をとつた文官と、甲冑帶劍の姿した武官との立像が數對並列してゐるものがある。その文官の冠の一角や、石象の牙の破壞してゐる位の傷は見出されるが、大體に於て珍らしく破損の跡もなく、むしろ完全な彫刻物として、こゝに道を挾みおかれたまゝ殘つてゐるのは、天下の異數とする所である。各石人石馬は見たところ何れも丈餘の高さを有してゐるほかに、尙地中に埋つてゐる臺石の深さが隱れてゐるわけであるから、全體としてそのそれぞれの績いた石材を考へるときは、大變巨大なものとなるのである。つまり始めからこれらは巨大な一個の大塊を取り寄せ、之を括り拔き、脚を刻し、鼻を現はすと云つた風に作りあげたものたることが解るのである。南口の土民達に云はせると、これらの石人石馬は、遙く長江を越えて、雲南省大理の都から貰いで來たものだと傳へいつてゐる。かしかし、この話は信用するわけにいかない。

十三陵は天壽山の裏山をさぐつて見ると、山骨溪谷、凡て皆大理石から成りたつてゐる珍らしい所があつて、あらはに巨塊のそのまゝ見えてゐる所も少くない。恐らくこはこの盆地陵域に近い範圍で、これだけの巨大な石材が集められたものであらうと推測する。

石人石馬の送迎も忙はしく、尙陵域内を一直線に進めば、軒傾き、黃瓦の落ちかゝり、屋上草木の茂れる荒廢した大紅門を見たり、滿洲文字、漢文の對譯になる大理石の碑（大明長陵神功聖德碑）とかの紅壁黃瓦の碑亭に納められたるを見たりして、時折りかうしたものに昔を偲ぶことが出來る。碑亭の下を過ぎ行けば、大理石の敷詰められた一大古橋に差しかゝる。古橋とは名ばかりで、その欄干はこはれ、凡てその河床に落ちてゐるが、元來水流のない川床で、雜草が徒らに生ひ茂り、蟲の音も聞こえてゐる。陵域は廣く、秋の眺めはうらゝかで、旅客の游心は益々唆られるばかりである。いなな く驢公は脚並み輕く北驅を續けて行く。するといつしか明の成祖の長陵の下に達する。牌樓よりこゝまで十五支里あるとのことである。この附近は叉柿林の光景が目につく。道を迂回し靜かに辿り行く。陵の番人の耕してゐる畑なるか、珍らしく人影をこゝに認むる。陵に達すれば、朱壁のいかめしい樓門に銃劍を帶びた兵隊が一人、日向ぼつこをし乍ら門衞をしてゐる。刺を通ずれば扉を開いて奥

へと案内をする。例によつて内部の案内をさせてもらひたい口振りであるが、自分はすべて勝手が解つてゐるので案内を斷わる。すると何處から集めて來たか壁下に古銅器の贋物、土器、龍の模樣のある黃色の瓦當など並べてある小室の入口を指さし、「お歸りに立寄つてくれ」などいふ。

長陵の境内は廣く、老松、柏林の影も靜かに、順治帝陵墓重修の上諭、それから乾隆、嘉慶兩帝の明陵八韻を刻せる牌樓など仰ぎ見る。

恩陵殿内に、三十二本の美しい楠の圓柱の並立せるを賞し、正面の拜殿、樓下のトンネルをくゞつて、その上に出づれば「明成祖文皇帝」と、肉太の筆蹟で深彫りにほられた大理石の神位が、重々しく南面して立つてゐる。陵殿の上には、女墻の趣きも古めかしく、雜の小木が雜草と共に生茂つてゐる。脚下、境内に見る大門牌樓などの建物や、庭はその來たり訪ぬる人もなく、ためにひどく寂寥の感を催ほさせてゐるのである。

先きほどから大空に翔んでゐた二三の鳶は、又この邊りへ姿を現はして來て、大圓をのどかな碧空に描いてゐる。その鳴方のピンヒョロヒョロと繰返し繰返してゐる清き響きは、支那も日本も變つてゐない。陵殿から右手、半天に聳ゆる天壽山脈は、西に走りて居庸關の險に連なり、その嶺に仰がるる山骨と云ふ山骨は、岩の皺も縱に深く切れ込み、秋の陽に照らされ實に鮮明に見えてゐる。龍の線

林朱壁と相映じ、それは又何んともいへぬ強い支那畫の色彩美を現はしてゐる。碧空は高く、鳥は舞ひ、陵は紅に、陵殿の祀りは絶ゆること既に久しく、あたりは全く大陸的の靜けさである。目を放てば、山河依然として舊に似たり、實に又何たる十三陵の詩景であらう。國亡びて山河ありとはいへ、古今の興亡感慨無量なるものがあり、轉た吟客の心を痛ましむるものが深い。明の文化を思ひ、萬曆年間當時に於ける王侯榮華の夢に思ひを馳するとき、懷古の情に堪へないものは、自分一人ではあるまい。右に左に遙か山下に散點する紅陵の影を打眺め、往年幾度か訪ね來し墓陵巡りのことなど、印象に呼び起してゐると、こゝに低徊去るに忍びないものがある。豆の如く小石の如く見ゆる石人石馬の並ぶ姿を越えて、かなた石頭牌樓の白く見ゆるものは、殆んど小さく幽かに指さゝれる。やがて、明朝各皇帝が永久に眠むるこの廣い陵域をうしろに、感慨無量なる氣分を新たにして、自分は再び歸路へとついたのであつた。

南口から北行の旅を試むるとき、もし假りにこの明の十三陵巡りを思ひ立たないとして、更に北の方、萬里の長城八達嶺の方へと向ふとすれば、朝の一番汽車で北平を立ち、長城の見物をすませ、歸途、驢馬に打ち乘り、溪谷の間を拾ひ拾ひ下るとしても、夕暮までにはたしかに南口の街に着くのである。

萬里の長城

八達嶺は、南口からこれ亦四十支里の山境にあつて、こゝが萬里の長城を見るに最も便利な所とされてゐる。長城は、東は山海關の海邊に到り、西は遠く甘肅省の嘉峪關に達し、蜿蜒峯を超え、谷を渡り、日本里數の八百里に垂々として、丁度我が青森鹿兒島間に相當してゐる。專門家の調査によると、その工事費を今日のかねに見積もり、少なくとも二百五十億萬元に該當するとの事である。(横濱高工校長鈴木達治氏の計算に據る)

普通長城の見物に出かける者は、南口の先き居庸關を經て、青龍橋の車站で下車する。驛前で驢馬を傭ひ、彈琴橋を訪ね、線路から左手の山道をとり、爪先き上りに登つて行く。程なく八達嶺の關門に、四大文字の「北門鎖鑰」と刻されてゐる所に達する。右に天高く、山の嶺まで城壁の打續いてゐる壯觀を見、又左に峯から峯へと段一段と高くその城壁の登り登つてゐる壯嚴を仰ぎ見る。途上汽車の窓から、居庸關の邊りで、峯から谷へ、谷から峯へと續いてゐる長城の輪郭を見たそれとは違つて、一層の重々しさと、大規模の構造を見るのである。

八達嶺では、關門を過ぎて更に蒙古路の山道を、駱駝の行列と共に悠々北行するのも面白いが、それは特殊の旅でなければ出來ない。普通長城を見に來る旅客は、驢馬を城壁の下に待たせておき、輕裝直ちに城壁を攀ぢ登り、壁上の煉瓦の敷詰められた所を、吹き卷く朔風と戰ひつゝ、段一段と頂さして踏破するのである。烽火をあげる高臺に登ると、古の蒙古族、匈奴と戰つた支那歷史の奮鬪振りがあり〳〵と胸に浮び、北方民族の猛威を防禦せんため、二千有餘年間いかに、これ程迄の防備を必要としてゐたかゞ、しみじみ察せられる。更に最高の峯へと壁上を攀ぢ登つて見ると、關門に待たせておいた驢馬などは豆の如く小さく、又遙か蒙古路より一人の牧童に導かれて、悠々來る白羊の群れも、埃ほこりの間に微かに見えてゐる。古代に築城のとき、煉瓦をやいてゐたといふ窯跡の屋根も、遙かに小さく指される。烈風が耳朶を打つので、北路を辿る駱駝の鈴はよくは聞えない。遙か彼方の空は、山又山で、何んとなく蒙古を越えてシベリヤの空までも迫つてゐるかの如き感を添へる。日本の婦人で、萬里の長城一番乘の名譽を擔へるは、自分の知つてゐる處では、現在貴族院の陸軍中將阪西利八郎大人の夫人であつたが、今は故人となられた。近來の新しい日本婦人は、果してこの長城踏破の意氣込みなりとありや、滿蒙問題の日本人にとつて、その運命を卜すべき重大性を有するの秋に當つて、この長城踏破の壯擧は日本の男子にも亦婦人客にも、一樣に奬勵せられるべきことだと思ふ。

長城の煉瓦は、何れも約二尺大で、全體の高さ七八間、その過半は石の煉瓦で、上半は塼で出來てゐる。壁上の幅は一定してはゐないが、平均五六間を有してゐる。古來苦力の勞働賃金が如何に安い北支那であるとはいへ、全長八百里、しかも要塞の地は、三重、四重、五重と重ねられてゐる。よくも之を幾千年の久しきに亙つて完成したものである。文明は徒らに進み、勞金は高くなる一方で、この向きで進めば、最早や驚天動地のかゝる紀曾的民族的の工事は、再び實現されないことになるであらう。幸ひ支那は勞銀が安く、まだ〳〵今から世界の文明諸國を一蹴し得るだけの大工事を起しうる可能性がある萬里の長城は皮肉にも薄つぺらな歐米一人威張りの文明風を嘲笑つてゐるかの感がある。

八達嶺・南口間の跋渉に見るものは、山間に散點せる山里の石屋であつて、こは石塊を積み上げ、築きあげたと云ふ低い小屋で、屋根の上に出た一枝の柿の木と共に、靜かな趣きを見せてゐる。山村としては三官、三堡、居庸關などと云ふがあるに過ぎない。何れも白羊の休み場所や又は駝店などを營んでゐるので、北支那特有の光景がこれに窺はれる。又要所々々に、釐金局の未だに廢せられないものがあつて、門前を過ぎ行く牧童や、駝夫の足をとゞめて之から稅金をしぼり取つてゐる。

居庸關にはその附近に、三つの關門があつて、そのうち一番南にある關門には、サンスクリット、チベット文字、蒙古字、回紇（ウイグル）文字、滿洲文字、漢字などの六國文字が、片方の壁に彫られ、拓本を取る人の多いために、いつも黒光りがしてゐる。壁面の長さは、自分が兩手を開いてあらましの寸尺を計つて見たが、かつきり自分の手で十數に達してゐた。壁面の石刻は、一部分破壞され、完全には讀み得ないが、漢文の中に「哩」「囉」「嘛」などの音譯文字の數多見出されるのが目に立つ。既に學界では、佛蘭西のナポレオン記念の出版物中に收められてあるものもあり、拓本の寫眞と共に、各國文字の發音まで詳しく示されてゐる。この附近一帶の光景は、山巓の一角を仰ぎ見ると、右に又左に、隨處に城壁の半ば壞れた輪廓のくつきりと描かれ繪の如き趣きを見せてゐるものがあることである。之を見ると、如何にも廢墟の國を訪ねてゐるの感が深く、支那各省各地の旅のうちでも、この邊りは最も史的悲哀を感ずる所である。

居庸關壁上の如きも、古はこれに樓門高く聳え、一夫關に當れば萬夫も通ることの出來なかつたといふ要害の地であつたと云はれる。然し今は昔し空しく炎上の厄に罹つたまゝ、それきり廢墟の姿となつてゐる。かやうな風で、何處を見ても寂寥そのもののほか何物もないのである。

張家口

長城から更に火車で北へ走るとすれば、八達嶺の山境は、峯に一木の生ゆるなく、唯岩骨を露はせ

る山の斜面に、青草の原など見るだけで、牧畜の行はれてゐる山里が淋しく打眺められる。しかし、しばし西北に進路をとるに従ひ、山は後ろに遠く去り、朔北の一大平野が前に開展して見える。屋根瓦を見ない扁平枡形の土廓から出來てゐる都城に火車は着く。懐來（ホワライ）、宣化（シュエンホア）と云つた驛など、同じ様式の趣を見せ、凡てこの地方獨特の單調な風物を漾はせてゐる。山に木なく、野に水なく、誠に長城以北の天地は、寂寥そのものと云つた殺風景な眺めで、見るものすべてのどの渇した如き感じを與へてゐる。火車は途上張家口（チャンチャコウ）の大驛を過ぎて、西へ西へと走り、大同、豐鎭を經て山西省の北、內蒙境邊の包頭鎭まで延びてゐる。歸化城の古都を訪ねんとするもの、綏遠、察哈爾の北方新省を踏破せんとするものなど、この鐵路を利用するものが多い。この鐵路は、平綏線（北平綏遠）と云ひ、支那政府自身が外國の資金によらず、獨力で架設したと云ふ支那隨一のものであるとて、支那人御自慢の語り草となつてゐる。今や西支那、甘肅省城蘭州へ別け入るにも、鐵路この平綏線を利用して、歸化城包頭鎭へと出で、そこから乘合ひ馬車で、一路甘肅に向はれる順路になり、交通機關はかなり開けて來た。涼州から新疆省廸化に出るにも、近來よい道路が開け、昔日交通不便な時代に較べると、全く隔世の感がある。しかし廸化から來てゐる友人陳君邊りの話によると、シベリヤ線で行き、天山南路を越えて、廸化に入つた方が便利であり、時間も著しく短縮せられるとのことである。

平綏線の沿道で、先づ大きい都城と云へば張家口と大同府である。

張家口は、土廓造りそのまゝの都城で、朔北にお定りの土廓の泥家ばかりから出來た民屋住宅が見え、瓦葺のうちは見ない。物資の集散は、羊毛を主となし、農産物の集散が又活潑で、內蒙方面との取引はかなり繁々しい。以前には三井洋行の出張所も置かれ、日本の領事館も開かれてゐたが、年々事變頻出のため、今は日本關係の目星しいものもなくなり、特殊の出張員が、北平方面から出かけて行く位の程度である。都城全體の感じも、北支共通の潤ひの乏しい景觀で統一せられ、一言で云へば、つまり黃土質の一色の街の感が深い。氣分は固より呑ん氣なところであるが、至つて淋しい。

山西省

大同府

大同府は張家口に較べると、その規模も雄大であり、千五百年の昔、跋拔魏の國の都城であつた歷史を有し、そゞろに蒙古境地の古都の趣きを漾はせ、歷史上でも重要な地點を占めてゐる。支那の旅に見る北支の田舍都城として、恐らく朔北氣分を最も濃厚に漂らせてゐるものの一つであらう。有名

な山西炭田の無煙炭の集散地であり、又この地方一帯の西瓜の市場であつて、毎年夏田舎から百姓達の出入するもの多く、素晴しい賑ひを見せてゐる。其の他清朝時代は支那四百餘州中、美人の纏足の最も細く恰好のよい締め方をしてゐたので有名な處であつた。道理で今でも大同城内をあるいて見ると、尚市中に蓮歩楚々と細い三角形の先の尖つた紅靴で逍遙してゐる美人姿を見る。それにつけてもその評判は偶然でないのである。固よりこの邊りは水の潤ひの乏しい所ではあるが、しかし水瓜の美味なのがあることと、纏足の繊細な點とは、以つて大同都城を北支隨一の美人地と見る所以でもある。漢の昔王昭君が、匈奴（蒙古）の地へ遙々贈物同樣の身としてやられ、思ひを宮裏に馳せて惱んでゐた際、偶〻匈奴から漢室へ歸る使に言寄せて、胸に思ひ詰めてゐた寄を傳へてもらはんと述懷した詩情をば、唐の白樂天が七絶で吟つてゐるのは有名な話である。その七絶の大要にいふに、

「あなたが都へはるゞ〳〵お歸にならるゝを幸ひに、宮中へお傳へ願ひたいことがあります。王樣にはいつになつたら黄金で匈奴の王樣の手から、妾の身をば買ひ戻してもらはれるのでせうか。おかみの方から若しや妾の消息をお尋ねにでもなつた節は、どうか以前宮仕へをしてゐた時と少しも容色は變つてゐませぬ、やつれ衰へては居ませんでしたと、きつぱりとおつしやつて頂きたいものです」

漢使却回すよつて語を寄す、

黄金何れの日か、蛾眉をあがなはん
君王もし妾が顔色を問はば
いふなかれ宮裏の時にしかずと

王昭君　　白居易（樂天）

（漢使却回憑寄語　黄金何日贖蛾眉　君王若問妾顔色　莫道不如宮裏時）

この詩はまさかに美人王昭君が、千年近い時代を隔てた唐の白樂天と對話したとも考へられないのであるが、白樂天の才筆をもつて雲煙萬里の淋しい心境を抱く美人の詩胸を吟じやつたものであらう。漢の當時、王昭君の蒙古行にこの大同に街道がとられたかどうかは、審かにしないのであるが、こゝには美人の話が持上つたのを序でに、この佳話を挿んで置く次第である。

大同の都城を訪ねるには、城外なる驛の近く東華（トンホワ）客棧（コウサン）に宿を取るのが便利である。この客棧は構へも大きいし、客室も澤山あり、それに清潔な方であつて、日本人客の取扱ひ振りにも大分馴れてゐる。

若しそれ、大同の旅を、雪崗の石佛寺に取る豫定でもゐる者は、自由にその時間の融通がつくやう、兎も角城外に宿を取るのが便利である。若しや雲崗行の旅程の都合で、遲く大同へ歸るやうな時

など、時刻次第では城門の扉が締つてしまひ、城内に宿をとれるものは、全く締め出しを喰らふことになる。この點で東華客棧は、石佛行の旅には都合がよい。

東華客棧の樣子は、北支那獨特の構へに成り、門を這入ると、入口の右手に賬房があり、奥には方形の中庭が廣くとられ、その周圍に建並ぶ棟は數多の客室に仕切られてゐる。先年木村莊八、木下杢太郎兩君とこゝに泊した時なども、宿の待遇は心地よく、兩君よい氣持でパレツトをもつ手も忙はがしく、その中庭から屋上高く見ゆる城壁の一角や、晴れ渡る秋の大空を鮮かに寫生し、見る〳〵機敏に描きあげられたのであつた。その當時の作品は、夙に纏めて兩君の大同寫生帖として、天下に知られてゐる。しかしその寫生の時、客棧の番頭小僧泊り客などが生れて始めて見る繪具の美しさや、寫生振りの機敏さに、見惚れてゐた光景の方は、帖に藏められてはゐない。之をそつくり當時の情景と共に、頭に藏めてゐたのは自分一人である。

雲崗石佛寺

大同石佛寺の旅は、古城を左に見て道を北郊高粱畑の中へと取る。出かくるには車馬があり、驢馬もある。旅客はその何れかその好む方を取る。踏切りの下をくゞつて更に北行すれば、大同城の影は次第に後ろに遠さかり、遙か彼方の行手には、黄色の豪地丘陵の長く續けるが見える。時たま田家の二三散點してゐる土廓を見ることもあるが、大體は目を遮るやうなものもなく、たゞ廣々とした朔北の野である。

路に當たつて天秤棒に、西瓜を澤山盛つた筵を擔いでゐる體格のよい田夫に出くはせる。價を聞けば、一個六個子兒（銅子兒六枚、約三錢位）だといふ。ひやかし半分兩個子兒に負けないかといへば、卽坐によろしいといふ。買ひ求めて路傍の石にぶちあて、二つ割りにし、又四つに割る。サイダーの代りにのどを濕ほすべく、體裁など構はず一同はしこたま平げる。その味ひ、甘露の如く甘く、意外な獲物をしたのであつた。

路は丘下、觀音堂の前を過ぎる。とするとその裏手、さゝやかな水流の傍に、崖壁の面へ刻された「佛」の字の磨崖文字を見る。流れに沿ひ、尙も野の中を北行する。すると、遙か彼方に草木の影一つ見えない岩山の平たい丘陵のつゞきを見る。朔北の光景に淋しい、眞一文字に走つてゐるその崖壁にあたつて、幽かに瑠璃色の片庇なす屋根が見える。次第に近づくに從ひ、又蜂の巢の如き洞窟の壁面に無數存するが眺められる。崖上にも亦一つの寺廟らしき建造物の影が指される。有名な雲崗石佛寺の遺蹟と云へるは、是である。片びさし式の建物を中心として、かなり廣く續いてゐる。着いて見

ると、瑠璃色の屋根の下には古錆びた山門が仰ぎ見られ、之に「石佛古寺」の四文字が刻されてゐる。之を中心に、約一哩に亙り、七十二尺の露佛、天女、その外大小各種各樣の佛像が、或は薄く、或は厚く、夫れぞれ岩窟内に浮彫となつて刻されてゐる。その姿は神々しい。

古へ北魏時代に榮えた佛教藝術の粋をこれは現はしたもので、その數は實に無數である。手前の洞窟には、高塔の彫り抜きになつたものがある。最大の露佛は燭を掲げて、後背のうしろ闇の中へ手探りをし廻つて見ることも出來る。これらの巖崖を細かく一々見て來るとすれば、これに數日を費すも尚物足りない。京都大學の濱田青陵、東京帝大の原田淑人兩君などの一行は、その後これが調査に從事せられ、洞窟内の天井に、北魏の年號のある銘刻を發見し、手拓した事實もある。

元來この大同石佛寺は、明治三十六年の頃、伊東忠太博士が、始めて踏破發見せられたのが抑々で爾來東西の學者、探檢家、旅行者などの唉稱措く能はざるものとなつた。昨今やゝもすると、北平姦商達の手によつて無殘にもその佛首は拐ぎとられ、佛體は削り去られて、箱詰めに荷造りまでされ、天津の碼頭、塘沽河岸の船着に運び出されるといふ實に憎むべき罪惡が行はれるに至つた。支那當局の間で、歷史記念物保存會か何かでも創設され、かうして千古の史蹟破壞の罪惡を防止する方法が、一日も早く講ぜられんことを望むや切なるものがあるのである。しかしこれは北支那の土地柄と今日の國狀から見て、到底實現される見込みはない。結局はボストンやニューヨークの博物館の陳列棚へ漢の王昭君と同じやう身賣りせられる運命になつてゐるものかも知れぬ。仕方のない運命である。

大同の城門からこの石佛寺へは、確か三十支里と聞いてゐるが、あたりの天地が廣いので、幾らもその道のりがないやうな氣持もする。尚石佛寺を訪ねた序でに、裏山の中腹の方へと廻はつて見ると、古い遺跡が尚幾個所かあると土農から注意を受けたこともある。物好きに自分は、ひとりで根よく見舞つても見たが、それらしきものはたうとう一向見當らなかつた。大同郊外は呑ん氣でよろしく、淋しいのは淋しいが、靜寂の觀があつてよろしい。しかし唯一つ恐ろしかつたものは、三角耳の立つた黒狗の大きいのが群がり集つて來つて、見馴れぬ人間を見ると、たかつて來て矢鱈に吠えつき、一犬我れに吠ゆれば、萬犬忽ち集るといつた光景を呈する事である。犬の嫌ひな人は、よくよく御注意あつて然るべきである。かゝる場合には、支那服が何よりも安全である。

山西省の概觀

山西の天地は、北支那中でも、山東、河北、河南あたりとは違ひ、特に潤ひのない奥地の景趣を最も露骨に漾はせてゐる。同じ一望千里の高原地帶であつても、この邊りは全く極端にその風物が山西

の色に染められてゐると云へる。從つて目に觸るゝ風物で、如何にも太古そのまゝの情景を喚るものが多い。といふのは、山西の地は多く山に青色を見ず、近來閻錫山大人が一人一木主義をとり、之を實現させて、植林のことに努めた結果、幾分か綠色を見るに至つたとはいへ、まだ〳〵野に山に潤色を增すまでには至つてゐない。又省內土民の生活振りを親しく見てもそは太古乍ら穴居の住居を續けてゐるものが多く、日進月步の文化生活なんかよそに見て、一種特別の奥地生活を墨守してゐる。

周代春秋戰國の世には、晋の國として他地方の國々を向ふに廻し、相當榮えてゐた時代もあつたやうだが、その當時こそは山に老樹の繁みも見たことであつたらう。しかしともかく、今日は山に林木を見なくなつたけれども、山には有名な無限の炭田を藏してゐる。その爲め、省內各地に見る山脈胴腹には斜め眞一文字に黑き太い線の通つてゐるのを認める。これは山西無煙炭の地層を示すものであつて、行人が足で踏んでゐる路面そのものにも、屢々その艶々と光つてゐる炭層を發見することすら少くない。

山西省は、人口約一千二百萬、面積約八萬二千方哩の大省で、その名物は、寺に石佛寺あり、五臺山あり、關門に、雁門關あり、娘子關（ニヤンヅクワン）あり、山に石炭あり、明礬あり、又岩鹽あり、家に穴居あり、土娼あり、それから民に原始人あり、神農氏ありといつた風で、誠に樣子の變つたもの計り集まつてゐるのである。殊に珍らしいのは、地震の多いことである。と云ふのは、省內晉嵐縣を中心として、北の方、黃河の折曲りのあたり一帶にかけて、頻々地動（ヂートン）（地震）のあることを聞く、近くは日本の大正十二年、震災のあつた少し前のこと、こゝにも大變な震災騷ぎがあつた。幾千人の土民がそのとき死んでゐる。近世史の上では、明代にも大地震があつて、非常な慘狀を呈したことが史籍に記錄されてゐる。先年閻錫山大人と太原で親しく物語つた話のうちにも、山西省の三厄は、一に饑饉、二に地震、三に無水（旱魃）である。かやうな三厄のある爲め、山西は將來人口も中々殖えない譯なのだといつてこぼしてゐた。現在でも一方哩について、約百三十人の密度しかない。徒らに地下に寶物を埋藏してゐても、かういつた幾多の悲哀のたねを藏してゐるとは、うたゝ同情の念を禁ずることが出來ないのである。

北平より太原へ

山西の省城は省の中央にある太原市である。この太原に遊ぶには順路として、北平の前門平漢鐵路の驛頭から南に下り、漢口行の火車で房山、西陵、易州などを西に見て、高牌店、保定、定州の諸驛を過ぎ、正定の都城へと進むのである。するとその次ぎの驛が、交叉驛となつてゐる。石家莊と云ふ

がこれである。この平漢線によつて旅客がもし更に南して、順德、新縣、鄭州、信陽と各驛を過ぎ、そのまゝ下車をしないで行つてしまふならば、終點の漢口に達するのである。

ところが山西の旅を思ひ立つものは、途中の石家莊で正太鐵路といふに乘替へなくてはならぬ。元この正太鐵路とは、正定と太原を結びつけた名前から出てゐて、鐵路は佛蘭西の資本により架設されたものだと稱せられ、又佛人の監督を車中に見る。列車は狹軌の小形であるが、佛蘭西式の裝飾になり、又カーペツト窓掛など佛國流の氣分が見える。乘心地もよく、落付きがあつて、優美に感ぜられ乘客の心使ひも樂である。

古史に有名な獲鹿、井陘の史蹟のなつかしきところを順次經て、山西第一の關門、娘子關（ニヤンツクワン）の城壁下に達する。山の頂上より、長蛇の如く走り下る長城の偉觀は、天下第一の山海關や、又居庸關などの趣きとは違ひ、意外の所に伸び來つてゐる城壁であるだけに、旅人の心を刺戟することが深刻である。

火車は普通この崖下でかなり長く停車する。山西入りの第一印象を味ふべく、乘客は何れも思ひ思ひにホームに下り、驛頭を散策して、山郭城壁の聳ゆる景觀の神々しさを仰ぎ見る。山西の風物は、この娘子關に於いて著しも深刻な印象を受ける。娘子關を西に進めば、山西高原の盆地に差し掛かる。山巒に富んだ盆地の光景は又氣分を新たにする。平定、陽泉、壽陽の三驛を經、榆次驛あたりにさしかゝると、こゝにはやゝ綠蔭を見、地名の示す如く、この地方一帶は楡の木などの綠樹の所どころに見ゆるものがあり、多少の潤ひを感じて來る。水流も時には見出さるゝこともあるが、極めて淺く河床があらはれその水は濁つてゐる。

線路から左手に見ゆる山麓には、數多の穴居の民が蜂窩の如く穴を掘り住まつてゐて、穴孔は幾段にも雛段式に並んでゐる。穴居の入口には木材で庇を加へ、幾らか家屋の住ひと折衷した樣式をとれるものもあり、又そこに何んらの飾りもなく、唯長方形の土を掘つたまゝの穴孔を見せてゐるものもある。時たま山麓に清き流れのあつて、これに山魚の泳いでゐる清趣を見出すこともあるが、山西の高原には、極めて珍らしい方である。又時には小山の起伏して、畑地に穀物の貧弱な出來榮えを見せてゐる眺めもある。太原の都城に近づいて來ると、すべて一色泥の黃色の壁や屋根が、路面の色と何んら變りなく、窓一つ穿たれないで、凡て塗り潰した棋形の建築の群つてゐるのを見る。やがて太原驛に著く。

太原

太原の城壁は黄色の黄土質の天地のたゞ中に、さすがに重々しく仰ぎ見られ、驛頭に聳ゆる太原旅館は、奥地に珍らしい中西式のホテルで、ハイカラに出來てゐる。附近の民家の樣子とは違つて、特に目につく。城門を這入つて城内の風物を窺ふと、大同のそれとは又趣きを異にし、目抜きは柳巷街のあたりを中心に、かなり繁華な街が續いてゐる。雨量の少いのに拘らず、大街横町の路邊の溝のかなり深く取られてゐるのは、時に、俄かに降雨大水の來たるを物語れるものでもあるか。名の示す如く、柳巷街は老柳の並木があつて、城内の中心地に潤ひを添へてゐる。菜館には人も知る晉谷香（オシンクウヤン）と云ふがあり、これへと衙門から出迎へに來てくれた謝維輯君に案内をされ、一先づこれに身を落付けたこともあつた。市中城内城外に就いての山西の風物談は異國情緒のたねになるものが多い。

太原城内は、電柱に寺の塀に、又民家の壁にと、到るところ格言、名句、古人の警句などを數多貼付し、凡そ目に文字のある者は、往來を歩いてゐて各自日常生活の心得、自治の精神、經濟の目標、社會の進路、その他衛生に、教育に、修身、社會、治國平天下、各般に亙るあらゆる方面の標語が、教科書を讀まされてゐる如く示されてゐる。旅客が太原入城の第一印象はこれである。その平易に鉄力板にペンキ書されてゐるのを見ると、閻錫山大人のいかに經世の事に心を碎いてゐるかゞ察せらるるのである。恐らく支那各省都城の中で、太原ぐらゐかういつた點に親切の行届いてゐる所は見出さない。

太原の客棧としては、城内で有名な古建築、四美花園（スウメイホアユヱン）があり、その他迎賓旅館（インピンリユイクワン）などと色々あるが、四美は庭園に一寸した支那流の築山もあり、石樓、これに聳え立ち、園内には芝居を演ずる戲臺や、觀覽席の設けまである樓閣なども出來てゐる。その入口の門から奥深くトンネルの如く這入つて行く薄暗い壁の路の左右には、所々に天井明り窓から採光方法を施し、これに面白い風雅な聯なども掲げられ、客を歓迎してゐる用意の周到さ加減が、之によつてよく讀める。

太原城内の觀光には、先づ省城第一の役所である。「文武爲憲」と大文字の掲げられてゐる門轅を這入つて行くと、さすがに城内第一の宏莊な衙門建築が聳えてゐる。古色蒼然、どことなく古めかしい奥床しさを偲ばせてゐる。山西の父と仰がれた尊信厚き閻錫山大人は、民國革命のあつて以來こゝに納まり、その自ら身を持すること簡素に、常に寢ても覺めても、保境安民を唯一の目標として、銳意省民の幸福と天下の和平に思ひを致してゐる。毎朝夙に親しく將卒を見、雅容に會ひ、事務を執る。その誠心誠意のある精勵恪勤振りは、常に省民、地方市民の模範とされてゐる。

城内では、博物館、孔子殿、國立大學の外に、工業專門、農業專門、女子師範など、その教育程度は奥地ながらかなり進み、特に日本の東大、京大、藏前あたりの卒業生も數多居て、隨意に日本語で

以て遠來の客のお相手、もてなしが出來ると云ふ風であり、日本人には特に懷かしみのある所である。

市中には、書畫古玩店なども相當にあり、山中の古い都城ではあるが、又柳暗花明の方の巷は、池水の彼方に存し、これ又相當に晉家燕人を吸收してゐる樣子である。

明末清初の學者で、醫を業としてゐた傅山は、この地の出で、今尙その德を慕ふ者が多く、傅山公祠を始め、その外博物館など到る所に傅山逸士の大幅、墨蹟は盛に揭げられてゐる。その筆蹟は大幅が多く、見事なもので、全く天下稀れに見る寶墨であると激賞することが出來る。

文人墨客の訪ね巡るに興味深き所は、城內のうちでも特に大中市邊りであらう。山西古來の歷史を物語る色々の美術、工藝、書畫、拓本、骨董の類は、大抵この界隈に多く集り藏せられ、半日の暇を割いて、これを窺ふだけの價値がある。

山西は上にも述ぶる如く、石炭の本場であるが、こはその埋藏せる富が莫大であると云ふだけであつて、存外工業の方は發達して居らない。工業學校はあつてもあまり振はない。紡績會社の榆次縣に設けられてゐるものがあつても、その工場には約一萬三千錘ぐらゐの裝置がされてゐるが、その生產高は、やゝもすれば生產過多に陷る怖れがあるといつて、閻大人はその實情を語りながらこぼしてゐた位である。

太原に長く滯在してゐても、觀光客の目を喜ばせる意味に於いては、さうその別に大して見るべきものがあるわけでもない。しかし漢代や隋唐頃の古碑拓本に興味のある者は、之を手に入れたり、石佛の古拓を漁つて廻つたり、その他路傍に讀まるゝ例の珍らしい警めの宣傳文字が數多目にとまるくらゐのものである。今その一例を左に示して見よう。

亡國之民。不如喪家之狗。

衞國以武備。戰以財。

主張公道。爲國民之天職。

新國民之要。有活潑潑的氣象。

天下具萬能之力者。其惟秩序乎。

懶就是墮落起點。

尙武爲國民必要之精神。

尙柳巷街の目拔き、上述の晉谷香（チンクシャン）の門の壁を見ると、之に次ぎのやうな橫文字の貼り紙をしてゐた。

THE STUDENT MOVEMENT

IS NOT BOLSHEVIK
NOT ANTI-CHRISTIAN
NOT ANTI-FOREIGNER
BUT CRY FOR HUMANITY

城内には相當ハイカラな手合ひがゐるために、かうした新しいハイカラなポスターも掲げられる。しかし學生には、學生自ら政治運動に馳せて、治國平天下の坊げをなす如き輩はゐないといつて、閻大人は自ら誇り顔にいつてゐた。

閻大人が役所で雜談中に話してゐた話題の中には、山西省全體の人口は兎角減り勝ちであるが、今尙千二百萬を有してゐるとのことであつた。尙その話のうちには、このやうなこともあつた。山西省内で、屈指の土豪のかたまつてゐる所は、南方の田舍、大谷縣（タークーシエン）であつて、こゝには、ギヤマンの飾りのある立派な寢臺を有する豪家連中もあり、支那の内情、文化の有樣を調べられる貴君には、自分で紹介をするから行つて見たらどうか、などといつて呉れた。由來北平でも、天津でも、北支那の銀行業者は、その出身地を聞いて見ると、大抵山西出のものが多い。日本でいへば江州商人から、偉い實業家を出してゐるやうな譯で、自ら地理的の原因がこゝに存してゐるものであらう。

尙太原名物の一つに、背の丈二尺にも足りない年の程四十近い一寸坊がゐた。これは博物館の案内役をしてゐる。多少の學問があり、愛嬌もあり、かなりの才物で、來訪者にはよい感じを與へてゐた。見たところその顔立ちは、一人前よりも大きく見え、色は黑く、いかにも元氣旺盛な先生のやうな恰好をしてゐた。くの字に曲つた足で兩手を振り乍ら、參觀人を案内してくれるその樣子は、全く北平植物園の八尺大の巨人門番君と好一對の談柄となるのである。これであつて夜な夜な遊びに出かける癖があるといつて、内輪で笑ひ話の噂になつてゐた位であつた。

晋祠と天龍山

山西の旅には、更に太原の街あたりよりも、歷史上有名な天龍寺の千四百年前の石佛調査に出かけるといふのが、學者探檢家には興味のあることである。之に分け入るには太原を基點として、それから旅程を更に奥地汾水の彼方山境へと取るのが順路である。

閻錫山は、山西の田舍は年來自分の苦心した自動車道路が出來てゐるから、何んなら自分が乘物を提供しよう。途中の晋祠（チンス）までも乘つて行つたらどうか。などと親切にいつてくれる。

晋祠は太原高原の西の果て、山西盆地の盡くるところ、山の麓にある里で、馮玉祥が久しく靜養し

てゐたところで、時人にも有名になつてゐる。山下水清く、千古の老柏の鬱蒼として茂つてゐる處である。

太原に就いては、こゝに自動車路の城外、各方面から早くより開けてゐる事は大抵の日本人の思ひもよらぬ所である。流石は産業、交通、植林各方面に意を用ひてゐた大人だけあるとて、少なからず感心させられたのであつた。しかし大人祕書役の謝維梓君から、途中の汾水支流の長橋は先般の出水で落ちましたが、といふ注意があつたので、乘物の話はおぢやんになつた。止むなく洋車で城外を西へと、自分はその時は、高橋亨博士、その他、西田、加治の二君と洋車（ヤンツオ）でまゐり、橋の落ちた廣い河原を渡つたのである。

山西の河にしては珍らしく流水がある。河身に灰を溶かした如き濁つた色を見せ、波を立てゝ流れてゐる。全く現場へ着いて見ると、謝君の言の如く、橋の桁は落ちてゐるので、河原を水邊へと下つた。車夫共はそこでどうするかと見てゐると、早速ズボンを全部ぬぎ捨て、客を背負ひ徒わたるのである。足を一歩一歩、運び行くにも、懸命に力をこめ、水流に斜に遡りつゝ方角をとり、浪立つ流をともかく突破して、彼岸に渡りついた。若し一歩を踏み誤れば共に水を呑み、あへぎあへきするうちに、いつしか黄河の本流まで運ばれ、土左衛門となつて浮き上る運命を辿つてゐたのであつた。下も手の水流彼岸からは、太原指して行く硝石を滿載した荷車が、幾臺となくその何れも、「山西省硝礦局軍用硝車」といへる旗を河風に翻しながら、栗毛の馬に曳かせつゝ渡つてゐる。大分おほ聲を立てゝ賑やかさうである。しかしよく見るとそのうち一臺が馬諸共に、流れの中にへたばつたまゝ動かなくなつてゐるのを見る。馬は水中に跪まづいたまゝ、硝車と共に停電の形である。後から渡る同じ馬車の群れは早や既に彼岸についてゐる。河原は時ならぬ騒ぎで掛け聲も高く聞こえてゐる。

しかし何事もなき我々一行は、この場面を氣の毒に眺めながら彼岸に達した。そして再び車上の人となり閻大人御自慢の街道を一路晉祠へと進んだ。往來で笊にうんと棗の實を山積みして擔いで來る老農に會ふ。ひどく心を之に牽かされ、打碎けて談判をして見た。すると老爺は二つ返事で、譯なく譲つてくれるのである。その粒の大いさと云つたら、實に拇指の二倍くらゐもあり、黄色、茶色、何れも甘味は強く、種は小さい。豫ねて北平の市上で聞いてゐた山西の棗とは、卽ちこれかとその香味の德を頌しながら、風も樺はず道々頬張りながら田舍路を行へ。ところどころ老棗の並木を路上に見たときは、これある哉と思はれ、且つその人情の厚き果樹の並木の美風を氣持よく思つたのであつた。

太原城外汾水河畔にある太原縣の影も、はや後ろに遠く幽かになり、いつしか一文字に道を辿り辿

つて晉祠の村に着く。千年の昔を物語る晉祠の古廟樓閣は、老樹の間に隱顯し、晉祠境内の「仙閣梯雲」の文字も、錆びた扁額のうちに仰がれ、綠蔭の樓閣と共に神々しい。寶殿の下には清冽な水源があつて、水の湧立つ音まで聞こえてゐる。龍の棲み家とも疑はれる淵のやうでもあり、綠鮮やかな水草は水底に茂り、水勢につれて動き靡いてゐるその眺めは、殊に清淨な氣を喚つてゐる。そばの深き幽處には晉溪書院と云へるがあり、境内隨處には公祠、神殿が多い。水神を祀る祠堂には、その神位に持つて行つて、

勅封廣惠顯靈昭濟沛澤翊化聖母

と云へる金文字が、楷書で刻銘せられてゐる。境内綠の下を縫うて、あちこちに散點する樓閣、戲臺の多く、それには次ぎのやうな麗はしい文字の扁額が揭げられ、何れも見るからに筆蹟の奇雅、古色の偲ばれるもののみである。例へば、

萬古流芳　　靈源廣潤
甘霖　　難老泉
晉陽第一泉　　滄浪之水
懸山蘊玉　　萬頃之流
水鏡臺　　惠洽桐封
惠流三晉　　景淸
三晉名流門

かやうな詩的文字の雅句が、隨所に讀まれ、且つ味はれるのである。又この晉祠は文人墨客の來たり吟游するものが多く、そのうち古來景勝八景として稱せらるゝものに、次ぎのやうな詩的なものがある。實景と併せ之を思ひ出して見るだけでも、その吟客の心を喚るものが深い。卽ち、

一、望川晴曉
二、仙閣梯雲
三、石洞茶煙
四、蓮池照月
五、古柏齊年
六、勝瀛四照
七、難老泉聲
八、雙橋掛雲

これらの風韻文字が現はせる詩趣に富んだ雰圍氣は、こゝに游ぶものは誰れしも漢柏桑綠の間に汲み取られるのである。しかしこのうちでも、境内第一の名勝として、自分どもに氣に入つたものは、水流を山下の村里へ七分三分に別けて流してゐる水鏡臺の景色『難老泉聲』であらう。この山里界隈では、古來清流が珍らしく豐富にあるので、農家では、それぞれその門前の廣場を利用して、何れも皆斜に南面した六尺大の漆喰を築き、之で以てこの地獨特の白紙が漉かれてゐるのである。地方特産物として、こは晉祠在一般の民家の生業となつてゐるものらしい。さうした關係から紙の材料を水に酒す必要のあるためであらう。水鏡臺の水流を、村民ども何れも自分の方へ少しでも餘計に引つ張らうとする人情が爭ひもつれのたねとなり、遂にその埤圳を中心に、水騷ぎのいきさつがかなりやゝこしくなつてゐたとか云ふことであつた。

晉祠の神樣は、常にその村民各方面の訴へを聞き、村里の幸福を考へてくれてゐる筈だといふ所から、自然參詣人も踵を接してゐるとのことである。

境内には又傴僂の寺男と綽名されてゐるわけでもないが、一人の年寄の不具者がゐて、參詣者と見るや、直ぐその案内役を務める。斜めに伏せる漢柏老樹の幹に登り戲むる童女達を相手に、不斷は日向ぼつこをしてゐる。ところがこの寺男は、餘分たちがよくない方で、客をつかまへ寺男に似ず、貪ぼること夥だしく、參詣者と云ふ參詣者はこの寺男の事を承知してゐて、何れも嫌な爺だといつてゐる。

晉祠には別段旅館もなく、茶館もなく、全くの田舍村里のこととて、唯チョプンイーテンと發音する馬宿がある位である。土民に教えられるがまゝに、此を訪ねて行つて見る。すると「忠義店」と看板が出てゐる。門内に駄水をたゝへた石の巨大な水鉢がおかれてゐる。なるほど馬に水をやる爲めのものと見える。この風では仕方なく、老爺を呼出し、何とかして部屋と、食事の用意させたのであつた。部屋はあることはあつたが、あばら屋同樣で、天井は破れ、蜘蛛の巢はしたゝか掛かり、壁には落書が多い。とても踏込めたものではなく、天下一品の坐席であつた。でも床上には、一行の膝を入れるに足りるだけの廣さはある。それに山下の事とて、空氣はよし、待遇は心からやつてくれる。熱茶、棗、葡萄、田舍料理が出る。空腹にまづいものなしで、大いに舌鼓を打つたのであつた。

村外れに出ると禪寺がある。高壁を繞らせてゐる。高塔のもと、綠林の蔭に靜かな寶殿、坊屋が見え、庭も濶達である。訪ね這入つて見ると境内は廣い。後門に掲げられた看板には「古唐村模範小學校」と云へる文字が見讀まれる。校門を入り、參觀を求める。村夫子の支那服の授業振りを見た。たしかそのときは、外國地理を教へてゐたかと記憶する。その外、尚生徒の習字、作文などの成績の壁

に貼られてゐたのを見た。すると、教壇に立つ先生は、

「折角だから一場の話を」

と無邪氣に求めるのであつた。すると一行の高橋大人は、先生に代り、教壇に立ち、無論支那語で一同に地理の質問をなし、即席ではあつたが、模範村の學童のメンタルテストを試みた。一人としてはにかむ態度も見せず、博士の指された子供はすぐ立つて、明快に答へる。さすがに氣持のよい模範の生徒であつた。壁に掛つてゐた成績のうちには、彩色をした自由畫なども貼り廻され、相當氣のきいたものであつた。黒板の側には、又時間割が明細に示されてゐた。よく見ると禮拜（日曜日）にも平素通り課業が割當てられてあつた。誠に一週間無休の授業振りである。さすが閻錫山の見てゐる省内、勇將のもとには弱卒なしと感ぜしめられたのであつた。

村外れの田家には、又所々に重々しげな君子の古宅らしきものが老樹の下に見える。門に掲げられた扁額を見ると、「耕讀第」の金文字が肉太く書かれ、今はその漆の色も錆びて、何處となく昔し都で宮仕へをしてゐた大官が退いて、晴耕雨讀の餘生を送れる家でもあるかと察せられたのであつた。

畷の並木街道を進みゆくと、山路にさしかゝる。

願れば太原の盆地は廣く、脚下の村には、あちこちに製絨の白き乾燥場が散點して見える。道は次第に峽の狹き崖下を傳ひ傳ひて、かなり險しい樵夫の小徑となる。羊腸たる山道を、忠義店から傭ふて來た案内者を話相手に攀ぢ登る。殆んど人跡稀れなる岩の峽や、棘叢の中に踏み迷ひ、猿か羊かでもなければ通はないやうな祕境を辿り辿り行きて、遂にたうとう峠を越す處まで行つた。すると、漸くのこと天龍山の山門、聖壽寺の裏手にあたる方角に出た。それから勢を得て目的の寺に辿り着いた。大和尚の淨亮（智光）といふのは山下して白雲寺とかへ出かけて不在であつたが、留守の空秀といふ耳の遠い七十歳ばかりの番僧がゐた。宿を求めてこゝに數日を山寺生活と云ふことにきめ込む。

こゝは天龍山聖壽寺と稱し、佛教藝術の史上大同に次いで、有名な北齊時代の石窟石佛のある所、石佛は即ちこの寺の後方に高く、天涯に屏風岩の壁面に見出されてゐるのである。

普賢文珠の巨像は固より、天女菩薩など、幾多の石佛の古彫刻が洞内にあまた窺はれる。洞窟は石質が砂岩であるため、風化作用をひどく受けてゐる處もあるが、中には又完全なところもあり、繪具のついてゐる跡の尚殘つてゐる處も見られた。しかし手頃の石佛と云ふ石佛は、十の中八九、肝腎の首が大抵捥ぎとられてゐた。寺は北齊建皇元年に開かれ、隋の開皇、元の至正、明の弘治と、各時代に渡つて幾度か重修復興されたとの來歴が詳細に門内の石碑を見ると刻されてゐる。山門内に藏められた四天皇の巨像は、その面に塗られた彩色も美しく、かゝる祕境にあつて之を見るは、意外の感に

打たれるのである。

山門に泊し、禪寺の旅寢を體驗するのである。曉鐘裏に聞く鐘聲は、山谷に響き渡り、寺男達の朝霧のうちに、驢馬の手綱もゆるく、後門を出で行く。その姿の樵路のかなたに消え失せ見えなくなる趣きは、古人の淡墨の畫を見る如き感じが唆られる。窒秀老僧は、自分共が暖い粟のお粥をすゝると、その味つけに角砂糖の二三點を用ひたのに視線を注ぎ、ひどく驚いた目で以てこれを眺め、不思議さうにしてゐた。聞けば生れて未だかゝる四角の甘いものなんか見たことがないといつてゐた。三つ四つ與へると、この上もない喜びの色を見せて頂き拜み、大和尚が歸山する迄大事に取つて置かうなどいつてゐたところは罪がない。

山西の穴居民

山西の旅は、大同といひ、太原といひ、又この晉祠の臭といひ、支那の中原から見ると、大行山山脈を越えた西の豪地であり、正に海上幾千尺のテーブルランドをなしてゐる高原地帶である。從つて凡ての山川風物はかくの如くひどく變つてゐる。奥地に進めば進むほど、海洋の影響を蒙ることが少なく、全くこれが大陸内部の有樣なのである。その乾燥し切つた氣圍氣の中に、住民の日常生活が營まれ、地方によつてはその村落を幾つか越えて行かなければ、手桶一杯の飲料水だも得られないといつた不自由な處もある。これは更に陝西省から、甘肅省に這入れば、益々極端になり、陝西は長安の郡の北部、黄河の上流地方では、水を渡るに木船を得ることが出來ず、河上は黄牛の皮を集め、つぎはぎして辛うじて作つたと云ふ皮船に棹してゐるといふ實狀である。

水の多い長江流域の方面とは丸きり違つて、日常生活がその雨量水流の如何により、どの位變化を受くるものであるかゞこれらの事實によつてもたやすく想像されるのである。

穴居の民は、河南地方も同じことで、元來山に潤ひと云ふものがなく、穴居内部に這入つて見ても濕氣を感ずることが全くない。そのため、山西方面の穴居生活には、寢臺も、食卓も、凡て皆これらの山の土を掘り殘して、その形に作つたものに過ぎない。唯敷物としてアンペラを布いたり、又羊毛を糊で固めて作つたものを下に敷いてゐるに過ぎない。

穴居を營むところは、日本人の考へるが如く、じめ〳〵した風土を見る地方には見出されないのである。恐らく堯舜禹の時代にしても、今日にしても、穴居の民の生活振りとその内容とは、大して違ひのあるものとは思はれない。つまり穴居の生民たちは平たく云ふと、動物に近い生活を營み、毎日年が年中、夜が明ければ穴から出て行き、陽が沒すれば穴に這入つて寢る。石油を用ひることすら殆

んど考へられてゐないらしい。恐らく滿洲地方の片田舍に見る百姓の生活振りよりか、更に一段の原始的な生活であつて、或は世界でもこは珍らしい太古そのまゝの寢息法と見らるゝべきものではないかと思ふ。土俗學、人類學の上から見て、却つてこは貴重な人生の生活樣式を物語れるものとして、今日こゝに寶藏されてゐるのだとも見ることが出來る。太原の旅はかういつた意味に於て炭田、羊毛の視察以外に、更に文化的方面から見て、興味のある材料にかなり富んでゐるものがあるといへる。

山東省

濟南

山東の旅で見るべき所は、濟南を中心に南の方、泰山曲阜の方面に又青島方面にと、見るべきところは隨分あるが先づこゝには、奥地に近い北平寄りの濟南方面から紹介することとする。

濟南は、天津を基點として南下せる津浦線の鐵路のうち、滄州、鵲州、德州などを經、黃河の鐵橋を渡つて始めての驛のある所でこれが卽ちこの都城である。

濟南驛からは、南のかたに泰安、曲阜、兗州、徐州、鳳陽を經て、浦口まで下り、揚子江に出られる路と、又東のかた、膠濟鐵路で以つて、青州、高密、濰縣と順次經て、青島驛に出る路との兩方がある。但しその兩線の基點となつてゐるステーションは、それぞれ別の車站となつてゐる。

濟南都城は古代周の世、齊の國都として知られた處であつて、南の方魯の國と隣接してゐた。今も尙濟南城內には齊魯銀行、齊魯病院など、その懷かしき古名の用ひられたものが多い。今でも車中の雅客などは、或は齊に行き、又魯に至るなどと、詩的情味を唆るやうな云ひ方をしてゐるものもある。

濟南の街は、城內と商埠地とから成り立ち、日本人の領事館はその商埠地の方にあり、傍のツルヤ旅館と共に、日本人には親しみの深い處である。城內で見るべきものは、乾隆皇帝の船遊びを催せられた有名な大明湖（ターミンフー）、歷下亭（リンヤティン）などを始めとし、趵突泉（パオトチュアン）など云ふ民衆娛樂場、其の他廣智院、博物館などを擧ぐべきであらうが、その都の古いだけに、城壁そのものも一巡する價値がある。巍々として聳ゆる濟南城の樓門の如きも、頗る古雅に出來、趣の興味深いものがある。觀光客にして夏季の濟南入りは、大明湖の舟遊を催ほすをもつて、最も雅趣のある淸游となし、湖上の蘆荻の間に、隱顯する畫舫の優しい姿は、北支那に於いては珍らしい水鄕の眺めである。又舟を歷下亭にとめて、山東料理の美味に舌鼓を打つのも好印象を與へる。北平の萬壽山にも、舟遊の雅催のあるは云ふまでもないことであるが、濟南のこの大明湖の方が、民衆的であり、遊客の氣分にもぴつたり來る。

趵突泉（パオトーチュアン）の方は、上海の城内湖心亭にも較ぶべき、大衆本位の夏の遊び場で、泉水といふよりも、その水の躍り湧き立つ狀態は、むしろ湧淵といつた方がよいくらゐである。杭州西湖畔に見る龍井寺の山門に湧き起る「龍の井戸」と稱するものと、同じ有樣のもので、その龍水の不思議な躍動振りは、誰しもこれを神爲のものとして、神々しく眺めてゐる。

夏の夕べ、團扇を手にして欄干に凭り、そゞろに賞せんとする民衆客など、我れも我れもとこれに集まり、かなり雜沓を極むるのである。

博物館は、古の齊魯の故地に蒐集された歷史的材料を陳列してゐるところ、殊に嘉祥縣の武梁祠に得た畫像石その他出土品や、金石類などを多く藏してゐる。この畫像石は、孝堂山のそれと共に、漢代に有名な藝術品の遺物で、何れも當時、その王者の墓陵石室に用ひられてゐたものから、發見されたものである。東京帝大の工學部建築學教室には、それが大部分將來されてゐるが、その殘りは、この博物館の外壁目通りの高さの處に列べて、嵌め込みとなつてゐる。もとこの畫像石も地方の古玩商人共が互ひにぐるになつて、驛頭から某方面へ運び出さんとした所を、官憲の手によつて抑さへられ、危く海外に出る所が、之によつて妨止された形となつた譯である。

濟南城内には個人として文人、墨客、學者、軍閥、役人の各方面に亙つて、知名の士があまた住ま

つてゐる。曾て舊政府時代に、巡按使衙門に、姚鵬圖大人であるとか、鄧際昌大人など云ふ文人風の役人がゐた。之を訪ねた時などは、その役所の部屋は、さながら書齋そのまゝの體裁で、いかにも高雅の感が漲ひ、文學、歷史、隨筆、拓本材料は、殆んど天井までも高く積み上げられ、壁には古畫扇面などの掲げられて、一向に役所らしくなく、むしろ全く個人の住宅内の書齋を見るが如き寧閑氣を呈してゐた。役人そのものが、その役所内部で以つて、自分達のために、登倍の送別宴をやつてくれたり、墨色麗しい自筆の雅卷を贈つてくれたり、全く文人氣分に滿ちた芳ばしい待遇振りであつた。

其の後また城内に遊んだ時でも、例へば陸軍中將の萬其誼大人をその家庭に訪ねたときなど、まだまだ風雅なことが多かつた。萬大人は軍籍に身を置いてゐながら、珍らしい藏硯家の一人であつた。訪問をした自分は客廳に通される。見ると三四十面の古硯が、八仙卓上にづらりと並べられてゐる。噂に聞いた程のものでもなかつたので、自分はかまはず、

『これらの御藏硯は何れも結構だが、端溪水岩のうち、青花紋の見えてゐる上品の部のものはないでせうか。あれば拜見させて頂きたい。』

と一本突込んだ。所が、快心の質問だと萬翁は思つたかどうか知らないが、言下に、

『それならば後房の方へ來て下さい。』

といつて、書齋の次ぎの奥の部屋へと案内するのである。後房に納まるとやがて洗面器で、水が運ばれる。それに窓外の光線を採り入れ、直射させて見る。するとこん度は、客廳で見たものなどとはその撰を異にするものばかりであつて意外にも秀逸な古硯があつた。しかしそのとき陳列中にあつた黄色の紅糸硯ばかりは、翁はまゝ予扱ひをし、幾度聞き正しても、

『これは木目硯と稱して駄硯ですよ。』

と云ひ、一向に珍重して居らなかつた。

『これは唐代天下第一硯といはれた札つきの石質の部に入るものですが……』

と自分は極力説明して激賞をした。すると、自分がそれを激賞したのは、寄越せとの事を遠廻はしに云つたものと取つたか、

『それほどお氣に召すならば』といつて、自筆の紙片までを添えて、自分の宿まで贈つてくれたこともあり、ひどく恐縮して、恐縮しばなしで済まない事さへもあつた。

支那名流の家庭訪問の場合には、その客の粒によつて、いきなり藏品拜見の事を申出ても、家寶はたやすく見せない。一通りの品物でお茶をにごしてゐる。しかしこの客はと見ると、そろ〳〵尊敬の氣分を見せ、奥へ通ずるのが普通である。又前にも云ふ通り、自己の所藏品が、餘りに方外に激賞せらるゝことがあると、あちらでは、自分に贈物として寄越せよといふ意味に取られる場合がある。賞めたために贈物とされては却つてこちらでは困り入る。今更ら氣に入らぬ顔も出來ず、進退谷まる事になる場合が少くない。旅行者は考へておくべきことである。

濟南では日本から行つた領事の中で森總領事の如きは、今はイクリの大使になつてゐるが、當時細君諸共に城内を名硯あさりで、毎日曜日暮しあかしてゐた程であつた。その藏硯實に六百面その中には尤物も少なくなかつた。

山東に有名な青州、紅絲硯はその本場に近い地であるだけに、青島や濟南の古玩店あたりには、時折り掘出物を見る。日本でも近衛公爵家舊藏の紅絲硯板が驚く勿れその價二萬四千六百金と云ふ額に上つた事すらもある。

濟南で城内に思ひ出深き印象は、誰しもあの道幅の狭い陋巷に去來する、推車（一輪車）のヤイヤイきしる響きの趣きである。暗夜、巷の石徑を行くにも、この音で提灯の代りをなし、行人に注意を與へて路を避けしむる効力があるのである。日本ではそれが、御大喪の時、二重橋をお出ましになる御轜車の輪の、悲しみ深きあの特殊の音だけである。この音のみは不思議に、我國民の心を無限の哀調を以て動かすのである。而も殆んど今は、この音の出る作り方をする匠人がゐなくなり、何でも聞

くところによると、京都の市中にたつた一人しか残つて居ないとかいふことである。ところが濟南城内には、之がざらにゐるのである。

濟南の近郊

濟南城を外に出れば、東の方、程遠からぬ所に、論語に見えてゐる閔子騫の古廟があり、高粱畑の中に淋しく眺められる。百姓に道を聞いて見ても殆んど知る者がなく、かなり捜し當てるに骨が折れた。やつとの事見つかり之を訪ねて見ると、門内には看門（番人）がゐる。番人とは名のみで、實は番人といふよりは、乞食と云つた方がよい。そこに巣喰うてゐるものは、亂髪の色の黒いルンペンたちで、丸で不浪の徒と云つてもよい。自分たちが之を訪ねたとき、やつこさんたちは晝寢をしてゐたのであつた。廟内の祠堂に踏込んで見ると、堂内には鋤鍬や、高粱の藁などが入れられ、何の事はない農家の物置代りとなつてゐる。

日本に於てもし之を考へたらどうであらう。論語の文面を、羽織袴で眞面目くさつて讀んでゐる先生達は、若しこのだらしのない閔子騫の廟をめぐる場面に接し、その實狀を眼の前に見たとしたら、どんな氣持ちがすることであらう。こゝに支那現代の本當の呑氣さが見えてゐるのである。

山東、濟南、城外、先賢、閔子騫の祠堂、論語に見えたる閔子騫はこれであるが、今や荒廢し見るかげもない。

濟南城外で見るべきものは寺である。城外の半天に聳ゆる歷山の中腹、絶壁に掛かる千佛山の禪寺は、誰れしもなつかしい處である。全身に汗して、急坂の石段を上る。いよいよ登り詰めると、壁上いつしか隋、大業二年の文字のある摩崖碑を始め、さゝやかな石佛に俗惡な紅綠の泥繪具を塗りつけたものなどを見る。そこから山門に這入る。

千佛山は、崖上高く碧空を突き、脚下は低く濟南城の城壁樓門の全景を見る。山東大平野の光景が一眸のうちに指顧させられ、爽快の氣を覺えしむる。高樓に茶館の設けがある。展望を恣にするには、天下屈指の所である。壁に聯があり、その句に思ひ出深きものがある。

萬里長空開眼界
一川春水潤心田

又

片雲生半壁
一榻臥千峯

又

戸外千峯秀
窓前萬木低

或は又壁に見る扁額には

臥游五嶽
坐擁百城

などいへる文字は、古雅掬すべきものがある。卓に凭り、熱茶のおかはりをとり、西瓜の種でもかぢりつゝ濟南城外の大景を賞するは、たしかに亦一興である。山上の歷山は、上古の舜帝が、こゝに畑を耕してゐたといふ傳說のある故地で、今尙古を偲ばせる詩情が漂ひ、濟南都城のこの上なき史的背景をなせる處である。

尙濟南都城の散策で、日本人に珍らしい風光は、黃河の河畔に見る濁流の動き、鐵橋の壯觀である。がしかしそれよりも橋の袂のさゝやかな露店に、老媼が熱茶を大碗に盛り、銅子兒一枚で行人に飮ませてゐる光景や、又路傍屋臺店に、水煙袋を並べ、刻み煙草をつめつゝ畔道を通る田夫を呼び、「一服なさい」とニコニコ愛嬌を見せてゐるところなどは、如何にも山東の農村風情を物語つてゐるやうである。

濟南界隈で評判の甘栗は、初冬の季節が來ると到る處、路傍で賣り始める。これは粒の小さい程味がよく、充分焦がせてつまむ時は、殆んど際限なく喰べられる。しかしこれを小包などにして日本へ送らうとすると、買つた値段よりも稅の方が高くつく。日本の甘栗太郎が、よい値段を維持してゐるも、そのためである。

又夏の濟南名物は、山東の西瓜である。その色は黃色く、味は甘くて、日本人の口には珍とせられる。支那家庭を訪ねると、お茶の後にこれを出すうちがある。

夏の山東の旅は、お茶なり水瓜なり、水物を十分にとつて、絶えず胃袋をだぶ〳〵にしてゐる位の方がよい。夏は戸外炎天百二三十度になることも、決して珍らしくないのであるから、水物はつまり

山東、濟南城外に見る黄河の鐵橋。津浦鐵道の鐵橋である。
黄河には尚河南の鄭州、甘肅の蘭州の二個所にこを見る。

日射病除けの藥になるわけである。

又山東の麵は評判で、量が多く、價も安い。しかし、田舍で喰べると、よく小砂が茶碗の底に殘る。

一般の民衆食料としては、この麵のほかに、とてつもない大きい大の饅頭がある。直徑一尺以上に達するものもあり、圓き平扁なもので、之にいくらか鹽で味がつけてある。その價は又驚く程安い。生活程度の低い山東の片田舍の民は、之に大蒜を副食物として用ひ、不斷の常食となしてゐる。これで結構食事がはりとなつてゐる。あの山東苦力、農夫達の頑丈な體格も、之で以つて養はれてゐると云へるのである。大蒜と饅頭と麵は、山東一千萬の住民大衆に向かつての、缺くべからざる食料品であるといへるのである。

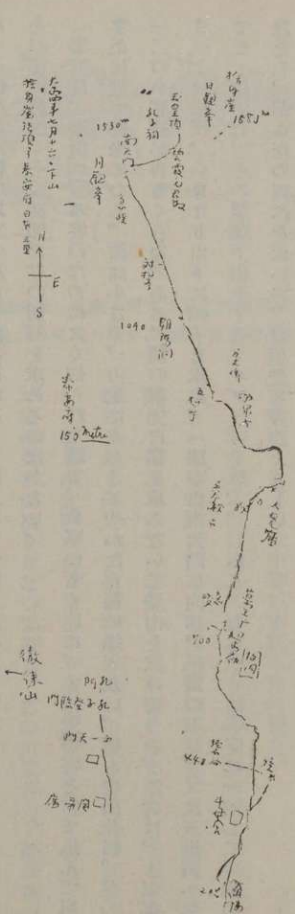
泰安

濟南城の視察を了ふれば、これから順路を南にとり、山東の旅に懷かしい泰山、曲阜巡りの壯圖を試みることにしよう。

これには先づ、泰安府までの火車の切符を求める。支那の火車は、前にも云つたやうに切符に途中下車の制度を認めてゐないから、一旦下車をしてしまへば、それから先きは通用がきかず、無効になる。それ故津浦線で以て、たとへ南の徐州なり、南京なりへ行く旅程が豫定せられてゐたとしても、その都度都度、その區間だけの切符を求めるのほかない。

泰安は、泰山に登る客のためによく知られた驛で、火車の着く度に、大抵登山客を當て込んで宿引きが出迎へに來てゐる。街は小さく、山麓に在るさゝやかな古都に過ぎない。宿も中西旅館、其の他一二の小客棧があるくらゐである。麓の泰安に宿を取らないで登山を試みようとする者は、天氣都合さへよければ、いきなり山下に轎子を求め、一路泰山南天門に向ひ、絶頂の石室、又は玉皇頂へ參つてこゝに泊し、その翌朝下山をするプログラムを取る。しかし、なるべくは泰安に一泊して、轎の用意をし、からだの疲れをぬいて、翌朝登る方がよろしい。

泰安の支那宿中西旅館は、西關順河街の橋の袂にあり、主人を武家盛といひ、町内での顔役である。それだけに相當宣傳もうまく、驛頭に來て下車客に、自分の宿の特徴を紹介したり、又役人方面



山東泰山登りの栞。麓の岱廟、萬仙樓より頂上の玉皇頂に至る巡路を示す、數字は海拔メートルを示す。

に向つては、自己をうまく廣告してゐる。一例を擧げて見ると、民國人の意氣を旅客に示さんがため、排外的な文字をその中西旅館の各客室に記してゐる。こはその客室番號札の替りに、掲げたものである。その邊から見ても、主人は頗る遣り手のやうに見える。宿は中西式とはいへ、純支那式の小さつぱりした客棧で、賬房のほか七八つの客室を有し、門に掲げてゐる文字にも、中西旅館の看板のほか「勿忘國恥」の四大字を出してゐる。又客を留める部屋の入口には、楕圓形の板金を貼り、ペンキでその室名を「大連號」「九龍號」「漢口號」「南京慘案號」「威海衞號」といつた如き國恥文字をつらね、その各札の下へ持つて行つて、更に說明を加へ、年月日や、國恥を蒙らせた國名、事柄の大略まで示してゐるのである。例へば、

一、大連號（西曆一八九八年被俄國强迫去租旋被日本所奪）

二、九龍號（民國十四年六月十一日英水兵刀戮同胞）

三、漢口號（——）

四、南京慘案號（民國十六年三月二十四日英美兵艦炮轟寧揸）

五、威海衞號（西曆一八九八年被英國强迫租去）

これらの例から知られる如く、その泊り客に一々國恥印象の感想を深からしめ、以つて民族自覺の

社會的敎唆を暗々裡にあふつてゐるのである。

右のうち九龍號は、香港の對岸、支那街のある所で、排英ボイコツトの當時、一方ならぬ騒ぎのあつた所、又俄國とは露西亞の事を指し、寧坦は江寧を意味し、南京城のことを指したものである。又英美とは、英國と米國を指させることいふまでもない。

かくて中西旅館の客室内部は、壁に泊り客の心得を記し、所持品貴重品、信書などの類は、これを掌櫃（番頭）の手許へ必ず預けられたい、若しさもなくて紛失することがあつても、旅館は責に任ぜず。關係はないのだ云々と「告白、諸君云々」と云つた書出しをして「本旅館謹啓」といふ言葉で之を結んでゐる。尚客室を挿んで中庭には、花柘榴の植込みその他で綠蔭をつくり、樹下に書卓様の平扁な石の臺を備へ、側に水盤やら、草の纖維を穗としてつくつた大筆やらを添へ、隨時泊り客の徒然の折り〳〵、顔眞卿流であらうと、王義之流であらうと、御隨意に水をつけて手習ひが出來るやうに拵らへられてゐる。しかも主人自ら書をよくするので、客が庭前に姿を現はすと、大字を水書きして、文雅な話題を持ちかけて來るなどさすがは古魯の地だけに、風流な仕掛けをしてゐるのである。

主人の部屋へ通されて見ると、壁には寫眞が掲げられたり、紅筋のある郵便の封筒など數多挿されたり、卓上は文房とり〳〵、先づ書齋と云つた體裁に作られてゐた。

泰山に登る轎子は、普通旅館の主人に傭はせることになつてゐる。泰安の街には、目下轎子は四十臺、轎夫は八十人からゐて、いつ何時でも用意は出來てゐる。泰山のかごの乘り心地は惡くなく、かくて登山の順路としては、先づ街外れの虞に見える岱廟に路をとり、その門前牌樓の側を過ぎて、次第に爪先き上りの山道にかゝるのである。

泰山

泰山の全景は、泰安驛のホームからでもよく見えてゐる。仰ぎ見れば、徠萊山の輪廓を左手に、南天門の屋根を右手に、はつきりと指すことが出來る。海拔八百米、ざつと五千尺に近い山である。愈山道にさしかゝると、嶺の方の姿は見えず、全景を窺ふことは却つて出來なくなる。

泰山は、道敎の方で云ふと東嶽と稱せられ、西嶽（華山）、南嶽（衡山）、北嶽（恆山）、中嶽（嵩山）の名山と共に五嶽の一つに數へられてゐる。古來三千年間、支那四百餘州から崇められ、殊にその中でも泰山は、地の利を得、齊魯の境界線上に聳え、天下の尊崇の念を唆つてゐる。北平の都城の朝陽門外にも、東嶽廟と云ふがあり、晝夜香華の絶え間なく、善男善女を集めてゐる事は、人のよく知る所である。これはこの泰山を祀つた寺である。其の他各省各地、里閭に到る迄、東嶽廟の存してゐない

所はなく、泰麓、杏村岱廟の中にも、この東嶽廟は見出される。

天下の人心を牽きつけてゐる名山數あるうちに、泰山の如き尊崇心厚き名山は、世に又となく、歴史の上に、文學の上に、思想の上に、何かといへばいつもこの泰山の名が引合ひに出る。曰く

一、泰山鳴動而鼠一匹

二、泰山を小腋に挟んで北海を越ゆ

三、泰山に登つて天下を小とす

といふが如く、泰山ぐらゐ人口に膾炙してゐる名山は見ない。南の方廬山の方も、文人吟客に歌はれてゐる點は多いが、六朝の頃匡廬の名で知られたのが、抑々その世の中に出た始めである。周代や秦漢の頃その山はまだ嶂にすらのぼつてゐない。それに比べると、泰山の方は、既に殷の時代、詩に吟はれ、詩經のうちにも「泰山」「徂徠山」「新甫峯」と共に織込まれ、魯頌の中にも見えてゐる。例へば詩の伴水篇に、泰山巖巖。魯邦所詹。奄有龜蒙。遂荒大東。至于海邦。淮夷來同。莫不率從。魯侯之功とあつたり又、徂徠之松。新甫之栢。是斷是度。是尋是尺。松桷有舄。路寢孔碩。新廟奕奕。奚斯所作。孔曼且碩。萬民是若とあるのは、その證左である。その歴史的に古い謂れを有してゐることは、恐ろしい力である。從つて歴朝の名天子は、泰山を以て大名、諸侯と同樣な地位待遇を與へ、所謂封禪の儀式が行はれたり、又傳説の上では、秦の始皇が山中雨に降られ、松樹の下に雨宿りした因緣から、その松に「五大夫」の地位を與へてやつたなど、一木一石にすらこれ程までの尊信の念が結付いてゐる。

泰山は最早やこゝまで來ると、丁度曲阜で孔夫子の子孫が七十三代の間、世々公爵を授けられてゐると同樣で、全く泰山そのものは、立派な人格化せられたものだといへるであらう。歐洲で見るアルプス、印度で見るヒマラヤ、又北米のロツキーと云つた山々には、かうしたやうな名山を人格化した麗はしい情味が一體あつたであらうか。大いにこの點は東洋人の間に、お互ひに深く誇りとする所であると考へる。

話はそれたが、登岱の雄圖は、その順路として、先づ麓の泰廟と先農壇の間の山徑を通り、石の敷きつめられた岩道を轎子により、或は徒歩で以て登る。路上、右に左に石造の廟宇、樓門、祠堂が、枚擧に遑のない程澤山あるが、その中でも最も目に立つものは、路傍の到るところの岩面に彫り刻まれた摩崖碑の文字である。この石刻の文字の美、又その文句に風雅なもの〻多いことは、拙著「翰墨行脚」に詳記しておいたから、それに讓ることゝするが、別けても、三合目あたりにある谷流の底、石一町餘のところに彫りきざまれた六朝大文字は、最も秀逸なもの〻一つである。こは金剛盤若經を

刻したもので、登岱客の足を惹きつけてゐるものである。その谷を稱して、山では經石峪といつてゐる。

泰麓から或は緩に又急なる石徑を辿り辿りて、絶頂まで行く間で、一番旅行者の目につくものは、中天門の題字鮮やかな石門（下り道の時に見る場合はその裏に伏虎門と書かれた文字を見る）と、南天門の樓門とである。

之を泰嶽の石徑中最も大きい足どまりの處となすので、誰しも印象が深い。尚その間の途中にあるもので、麓の方から指折り數へて來ると、やゝ登つた所に、一天門、漢柏第一、飛雲閣など云ふがあり、三官廟萬仙樓があり、その樓門をくゞつて更に進むと山中の尼寺として有名な斗母宮がある。ここから右手の溪に下ると、高老橋、水簾洞など云ふがあり、岩間を傳ひ溪流のある谷に下れば、經石峪がある。例の金剛經の刻字を味ふべきである。本通の石徑に歸り、之を壺天閣へと進み、回馬嶺の樓門にさしかゝると、それから先きは、にはかに急坂となり、登るに著しき困難を感ずる。だから馬上で來た游客は、馬をこゝで歸へすのである。

雲を分け、雲步橋に步を休めてこゝにしばし憩ひ、崖上から落ちる玲珠瀑の眺めを賞する。又石段を登り、老君洞に白髮の老子の祀られた祠堂を拜する。打續く登岱客の轎子は、之より下より仰ぎ見ると、その影やさしく、ゆるく搖れながら移動してゐるので、土民達はこれを呼んで、爬山虎（パーシャンフー）といつてゐる。如何にも山路に相應しい形容の言葉である。朝陽洞の洞口に差し掛る頃、始皇帝が雨宿りをしたと傳へらるゝ五大夫の松、それに乾隆皇帝の御筆の萬丈の碑の刻石などが仰ぎ見られる。そばに近來新らしく刻みつけた張宗昌將軍の摩崖碑なども讀まれる。たなびく雲を押し別けつゝ、急峻な石段の各階に勇を鼓して步を運べば、龍門坊、升仙坊など云ふが見られ、俄然石段の傾斜は急になり、殆んど垂直に近い勢を示して險しくなる。纖の鎖は左右兩側にかゝり、轎夫は足の運びも疲勞のため、進むが如く進まざるが如く、到底一氣呵成に登りつめることは難しく思はれる。登つては休み、休んでは登る。やがて頭上、雲間に紅壁に輝く南天門の樓門は、笑みを洩らして游客を呼び迎へてゐる如く見らるゝ。

南天門に登りつめ、こゝに息を入れ、登り來しあとを展望すると、一天門その他の石徑は、殆んど蟠龍飛岩松柏の枝にかくれて見えない。脚下傲來山の彼方一望千里沃野は開け、汶河（ウンホ）の水流は銀色に光り、長蛇の如くうねりくねつて走つてゐる。その地平線が天空と相接する彼方は、漠渺たなびき、はつきりしてゐないのである。泰安の下界の如きも、民家のかたまつてゐる所が、綠野の中にほんの一つまみ位にしか見えない。さすが古人が「泰山に登つて天下を小とす」と傲語したのも、尤もである

山東、泰山絶頂に紅壁の捨身崖を繞れるものを見る。禁止捨身の
りを試むもも亦妙である。海抜、一五八〇米。道觀、玉皇頂よりの程

と首肯せられる。

蔣介石大人は、最近に部下をつれて登嶺し、南天門の壁に、大筆もて鮮やかに三民主義の宣傳をしてゐるところは、如何にも天下に覇を唱ふる英雄振りのゆとりを示してゐる。恐らくかゝる名山の高きに登つた者は、一人として英雄の心を起さないものはあるまい。飛行機のまだ出來なかつた昔にあつては、泰山の頂上を極め下界を鳥瞰することが、唯一の誇りとして、世人を煙に巻いたものであつたであらう。

南天門の奥には、更に日觀峯、月觀峯を始め、君子峯、東神宵山、西神宵山、東天門、西天門などがあり、何れも雲上に高く聳えてゐる。尚頂上に起伏してゐる奇巌怪石の間には、道教の神を祀つてゐる

文字鮮やかに、雲上の靈、驚時に此に遊び、道士を案内に頂上巡
遠かゞず探見するを要する。

宮殿祠堂が多く、碧霞宮の紅綠に塗り飾られたものを始めとして、碧霞元君殿だの、青帝宮だの、北斗臺だの東嶽廟だのといふのが、その安全な姿をとゞめてゐる。しかし烈風が、強く吹き當たるので、石造の祠堂でも、永年星霜を經るうちには破壊せられ、乾坤亭、觀風亭、更衣亭など、今は唯その礎石の跡を見るばかりで、孔子殿の如きも、半ば壊れた姿になつてゐる。以前はその軒に高く青銹びた風鈴が垂れさがり、風に揺られて涼しいよい響を出し、孤客の心を慰めてゐたのであつた。頂上最高峯にはさすが凡ての石造の祠堂を超越し、大石をもつて築かれた勅建玉皇頂の道觀が、高く大空に聳えてゐる。

最近玉皇頂に登つた時には、三十一歳の道士楊世珍といふがゐて、童子その他をつれお籠りをしてゐ

た。頂上、仙人橋の岩頭に、千仞の溪を見下ろし、手をこまぬいてゐた時の道士の姿は、全く南畫そのまゝの詩趣で、自分ども道士のつれを得て畫中の人となつた次第であつた。

又捨身崖の紅壁の外、日觀峯の絶頂にて、道士と物語りに耽つてゐる時であつた。側の懸崖の一角に、山鷲の親子二羽が、鋭い眼光をかなたに放ち、靜かにとまつてゐる幽趣を見た。谷間は薄紫に霞棚引き、後方の岩山の麓もかすかに見える。その中腹に石造の尼寺がありこれに細い石徑が頂の方から斜めに通じてゐる。道士のもてなす玉皇頂の山の料理や、どぶ六地酒などは、頂上の夜の寒さを凌ぐに足りるものであつた。頂の客堂は、膝を入れるに足りる小室で、壁に蔣介石がその登山を記念したキヤビネの寫眞を、署名の文字も墨色美しく掲げてゐたのを見た。その同じ部屋に、一行の友と一夜を明かし、隣室の客堂「浴日蓋雲」の大文字の額の掛けられた壁を後ろに、東海未明の空を待遠しく旭日を迎へたのであつた。身に滲みる寒さ強き天涯に、楊道士と語つたそのときの印象は今だに忘れられない。

泰山の絶頂は、鬼角暴風雨に出會ふことのみ多く、麓の里で、よし晴天を見ても、南天門に差掛る頃は、一天掻き曇り、俄か嵐に襲はれて、ろく〳〵玉皇頂へ辿りつくことすらも覺束ないことがある。いつぞや登つたときは、深山に彷徨する老虎の如く、唯岩蔭を四ツ這ひになつて危うく歩いたやうなこともあつた。

運のよい時は、何んの苦勞もなく、かうして天下の名山絶域を極めることも出來るのである。

南天門内の石室雙升老に、往年泊した時などは、夜半門扉を開き出て、小便をしようとした所が、山の男から注意をされたことがあつた。曰く

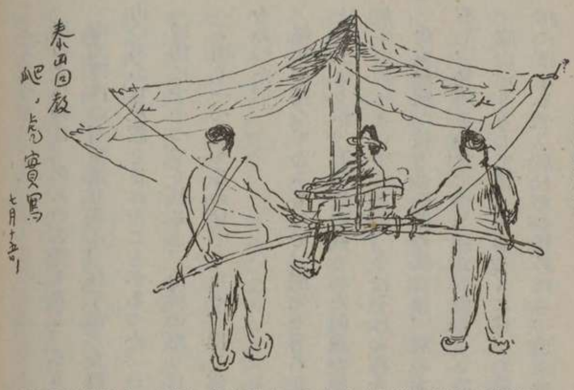
『所構はずやつてくれると、山神の怒りに觸れ、山が荒れ出すから今案内をする。』

と明り一つ携へるわけでもなく、崖を傳ひ、岩角を踏み、隨分下の方まで引つぱつて行かれたこともあつた。

絶頂に殘つてゐるもので、歴史上有名なものは、玉皇頂の門前に直立する方形の石柱である。碑石と云ふよりか、石の笠の被された體裁の整つたものである。古來土民は、これを呼んで「秦の始皇の無字の碑」といつてゐる。今はそれに蔣介石が、國民政府の宣傳文字を、ペンキで大書してゐる。

尚東嶽廟の後方の絶壁の面には、唐の太宗の「紀泰山銘」といふのがある。十間に餘る高き壁面を有し、足場をかけて寺男達が天氣のよい時には、拓本をとることに餘念がない。

泰山巡りとしては、大要こゝに述べた範圍ぐらゐを巡遊するのが、普通の處である。がしかし、これにはなるべくからだの爲めにも、頂上で一泊する方がよい。天候の程は誰れしも固より保證は出來



山東泰山登りの轎子と之をかつぐ同教徒の轎夫。土民はこのかごを稱して爬山虎と呼ぶ。安樂椅子に掛けた感じで乘り心地よし。

ない。荒れて來だしたならば、二三日は下山が難かしい。罐詰などを持込み登山する旅客もあるが、山に入つては山のものを、山の人同樣に攝るのが本當である。又多少の山の不自由は、忍ぶくらゐのことをするのが修養にもなる。轎夫達は例の一尺大の饅頭を持込むのである。それで自給自足をするのだから、唯石室の寢る場所を借りるだけで十分である。

南天門の石段は、登る時は下の方から吹き上げて來る風に誘はれ、爬山虎の天蓋の布に風を孕む。その爲め古人のいふ羽化登仙をそのまゝ文字通りに體驗することが出來る。けれ共いざ下山となると、下を見れば見る程物恐ろしく、恐怖心が生じ、一歩踏み誤れば他の仲間まで一緒に卷添へを喰らつて千仭の谷までスツテンコロリところげ落されるにきまつてゐる。所が轎夫どもの脚の運びの速いこと速いこと、殆んど爪先きで輕くこなしてゐる。掛け聲の調子に合せて、それこそ急轉直下に飛ぶが如くに下る。實に馴れたものである。恐轎夫に拂ふ轎賃は、一人前七元である。こは羽化登仙料と、急轉直下料とに仕拂つてゐるやうなものである。

曲阜附近の遺蹟

次には泰山から南方へ曲阜の旅である。これは泰山巡りを中止しても、これに足を向ける日本人客が多い。日本では、支那よりか、孔夫子の德を眞面目に信じ考へてゐる故である。又明治維新の大業を成し了へた事から考へても、その大業は儒學者の國民精神を鼓吹したことに基づいてゐるとの見界を持つ者が多い。何をさておいても日本人は孔夫子を尊崇し、孔子廟へ參りたいといふ者が多い。濟南から之に南下する曲阜行は全然支那内地のたよりなき旅となり、普通は濟南の領事館あたりでも、とかく大事をとる。多少の不安でもあるとすぐ曲阜行きは、思ひとゞまらせるやうに、勸告をする傾きがある。旅行者の方でも、一歩濟南をふみ出れば、たよるべき日本人の定住者は一人もゐないために、おびえて中止する者が多いのである。

しかし曲阜に遊んで、孔子の子孫のゐる衍聖公府を訪ねると、府員は云ふ、『每年幾人かは、必ず貴

國から夫子の墓前に參拜する學者教育家が見える。こは何よりも喜ばしいことである。貴國では儒教の研究が盛んで、毎年夫子の祭奠も行はれ、内心私かに羨ましく考へてゐる次第です』日本人の遊歷家は、出來れば北支那の旅には、往復一週間の暇を割き、北平曲阜間の史蹟めぐりをすることは望ましいことである。之によつて、山東奥地の風俗習慣民情などの視察が副産物として出來ることは云ふまでもない。

曲阜の驛は、城内から約十八支里を隔てた淋しい田舍に、ぽつちり孤在してゐる。そこの驛前には前に述べた泰安の中西旅館の主人の兄弟がゐて、同じ旅館名で遊客を迎へてゐる。急ぎの遊客は、この中西旅館に泊し、曲阜巡りを目的に、日歸りの旅を試むるもよし、又田舍馬車を仕立てゝ、バネのないガタ函の幌の中に體を納め、あの埃の多い畑中の路を行き、泗水の新橋を渡り、曲阜城指して進むもよい。高粱の高く茂れる炎暑の候は、なるべく、晝間を避け、早朝又は夜分に星を戴き、馬を驅ることにした方がよい。以前は泗水は橋がなく、車上の人となつたまゝ、輪の半分以上も水に入れて渡らざるを得なかつた。今はコンクリートの立派な長橋も架せられ、曲阜に向ふには、誠に便利になつた。自動車はもし濟南から遙るゝ〳〵持つてくればドライヴ出來ないこともない。がしかし路面は悪く、それにガソリンの供給場所など全くない。何としても山東の田舍は、馬である。馬車である。

曲阜は城門近くまで來ると、左手に監獄の塀とまがふやうな高壁を廻らした幾十萬坪の林域がある。これが孔夫子の墓地を祀つた「大聖至聖文宣王」と石刻鮮かな篆文の墓碑の立つてゐる所、所謂「孔林」と稱せらるゝところである。孔林の門前「萬古長春」の扁額神さびた牌樓をうしろに老柏の並木路を眞直ぐに右へとつて進むと、曲阜の城内にさしかゝる。樓門は低く、どことなく古く錆びたところで田舍街らしい樣子が見えてゐる。

城外の街は、荒つぽく敷詰められた石だたみの路で、車上の彈動甚だしく、乘心地は決してよくない。北門を這入つてしまふと、城内の路は、埃つぽいが車の乘心地はやゝよい。夜遲くなつてから、入城をしようとする時は、門に劍付鐵砲の武裝兵が二三人ゐて、取調べが嚴しい。

孔廟參拜のお客は、なるべく朝のうちに城門に這入る旅程をとるがよい。城内の街の樣子は、目抜きの通りにした所で、物靜かな呉服店、雜貨店、油屋、葉茶屋、楷杖店（龍の彫刻をした楷樹の杖を賣る店）などがあり、その間に拓本屋も、所どころに見える。その各商家は、軒も低く、人通りは少く、何んとなく古都の落着きを見せてゐるやうである。以前に泊つた事のある古い鴻昇客棧は、今も尚宿屋を營んでゐるが、最近に泊つた銘昇樓と云へる客棧は、聞けばこの頃、店を閉ぢたさうである。その他宿屋の數は少くないが、何れも高級なものではない。支那客の參拜者は、大抵知人の紹介など

を得て、役人の所へ宿泊をする。

城内で見るべきものは、第一に先づ聖廟を擧げるべきである。所謂天下に有名な聖廟である。北門を這入つたすぐの所にあるのは顔回を祀る顔子廟である。又その隣接地の原つぱには、陋巷井の遺跡が今なほそのまゝ、老栢の下に見出されてゐる。市中で漁るべき古玩の方面は何もたいしたものはなく、拓本や、如意、文具あたりであつて、之にはたまに見るべきものが掘出される。何といつても曲阜に來たものは、孔子殿と顔子廟の二者に足を向ける。之が參拜參觀には、一日又は數日の暇をかける値打がある。

尚城外の巡歴には、上に述べた孔林の外に、周公の廟だの、少昊金天氏の墓場だのを始めとして、魯の時代以來歴代歴朝の名家の墓陵がある。更にやゝ離れた所では、南の方、孟子故里の牌樓のある所、或は漢代の石棺のある馬山の邊り、又孔夫子が自ら說教されたと云はるゝ鄹雩壇の遺跡それから孟子の墓のある孟子林や、鄒縣あたりの由緒のあるところが、特に古代を思はしめる懐かしい所である。

孔夫子の聖廟は、その規模の廣いことに於て、又宮殿樓閣の壯麗なことに於て、或は秦栢、老樹の林立せることに於いて、又境内全部に渡つて掃除の行屆いてゐることに於て、實に支那四百餘州中第一位に擧げなくてはならぬところである。

境内最大の建築物は、雍正年間の重修にかゝる大成殿である。軒は高く、棟は長く、純白な二抱へもあらうと思はるゝ大理石の美材で出來てゐる丹柱が、正面に一定の間隔をおき、十基建ち並んでゐる。その各欅柱の周圍には、下から上まで、一面に深彫りの龍の彫刻が、刀痕鮮かに表現されてゐる。見れば見るほど、雄建に又華麗に、見事な出來映えを示し、聖殿内建築美の粋を壓倒してゐるの感がある。否、北支萬里の長城下の明の十三陵に見る石人、石馬のそれと共に、海内好一對の偉大なる藝術的作品として、誇るに足りるものである。支那四百餘州の全土を、古來二千有餘年の間風靡して來た孔子教の大本山だけに、聖殿の建築美として、恥ぢないだけの大作であり、これに無限の精神的魅力が籠つてゐると云へる。その力は、強く且つ深く、參拜者の胸に打込まれてゐる。尚階段を上つたところの中央の石の踏板や、疊一枚に餘る位の偉大な翡翠の板の嵌込みものなどは全く驚嘆に價する。扉を押し開き、殿内の薄暗きところに歩を運べば、豪壯な紫檀の祭壇に、漢の銅器、周の銅器などが、供へられてゐる。但しそれは、春秋の釋尊の時に限られてゐるのであつて、平素はそこに不斷使ひの模造品が代用せられてゐる。大成殿内、天井は仰ぐばかりに高く、

斯文在地
萬世師表

其の他支餘の大規模の扁額が、屋根裏高く數多かゝつてゐる。近來益々その扁額の數は殖えて、かさなり合ふ位になつて來た。幾段と並べられた祭壇の間を進み、中央正面の孔夫子の神龕近く歩み寄り、その尊像を拜すると、いつも乍らの溫容溢るゝばかり、その肩の邊りから、袖膝の邊りまで、凡て神々しい氣に充ち滿ちてゐる。夫子尊像の左右には、顏子、孟子、その他の先賢哲士が、悉く神位に記されて、嚴かに祀られ、言子だの、段玉裁だの云ふ懷かしい文字も拜せられる。參拜者は誰れ人も、これらの神位の前に立つと、そゞろに儒教の德に襟を正さしむるものがある。とりわけその殿堂は、內部の光線の暗いこと、外部の圓柱の偉大なること、祭壇祭器の大規模なること、從つてそこに動く人間の姿の小さく見えること、かういつた取り合せが、何でもない事のやうではあるが、如何にも天下の人心を收攬する上に於て、最も大事な事であり、又要領のよい仕掛けであるとも考へられる。

大成殿のほかに、尙幾多の神々しき祠堂があり、寢殿、樓閣廂廡、寶殿などが、左右雙相に整然と建ち並んでゐる。南の正門に廻つて見ると、金聲玉振の文字嚴かなる牌樓がある。又その內庭には、孔壁楷樹など、夫子時代を聯想せしめる遺跡の懷かしいものがあつたり、或は奎文閣に接して、その十〻前に聳ゆる同文門の下には 漢の時代から三國六朝にかけての、世にも珍らしい古碑の一かたまり

が、今も尙其の儘に集められ、その各碑身の面には、官憲の名によりて、二尺大のたて長き貼札を施こし、漫りに近寄つて手拓をしたり、寫眞をとつたりなどさせないやうになつてゐる。中には五鳳二年の古碑の逸品など、頗る奇古掬すべきものがあり、たしかに一見の價値がある。境內の事務所問事處を訪ねると、聖殿の案內記や、拓本、夫子に因んだ木版本の珍らしい大冊類など陳列され、之を竊いでゐる。庭の一隅、壁の一角には五名の掃除係りの名でもあるか。責任者らしい名前が揭示されてゐる。秋の落葉の散つてゐても、朝夕境內は忠實に掃き淸められ、白檀の下に落ちてゐる種を拾はうとしても、容易に搜しあたらない位である。

聖廟內春秋二季の釋奠には、北平からも學者役人などがこれに參列し、周代の樂器祭器は、悉く取揃へられ、極めて壯嚴に古式の祭奠が取り行はれる。最近では、南京の考試院に於ても、每週一回月曜の朝十時から、今は洛陽南京間を動いてゐる蔣介石大人を始め、大官當路者の面々が、こゝに集まり、周の樂器を取りそろへ、鳴物入りで、古樂の合奏とりどりに、三民主義の宣揚を之に織込み、中山先生の肖像を前に、青天白日旗の交叉せる禮堂內に、古を偲ぶ民族的の儀式が、取り行はれてゐる。曲阜の聖廟と併せ、こは今どきに珍らしい式奠であると云へるであらう。

聖廟門外にある衍聖公府は、夫子の子孫のゐらるゝ所で、今年十三歲にならるゝ夫子七十七世の後

齋、孔德成公爵を始め、叔父の孔垂舫大人などがこゝにゐられる。訪問客があれば氣持よく大室に請じ、遠來の珍客は殊によく待遇してくれる。近來世の推移と共に、國民政府の下にてやゝもすれば、左派の手合ひ共產黨員どもが、不穩な言動をあふり立つるものと見える。この頃訪ねて行つて見ると、夫子の子孫たちはお氣の毒で、餘り明るい氣分でゐられない。陽氣な話などは殆んど全くなかつたやうである。しかし最近、やゝ一般に了解されて來たので、一時ほどでもなく、田舍の孔子廟破壞とか、尊像の投賣りとかいふ、極端な奇矯の言動を弄するものはなくなつて來たとの事である。

大客廳を出で、別れを告ぐるに際し、自分は中庭、太湖石のもとで、記念の撮影をし、せめてものその心持を慰めたのであつた。すると門前騎石の所迄も丁寧に見送つてくれたりなど、その子孫の客を遇せらるゝの情は實に懇篤濃かなるものがある。

孔子廟の參拜を了へると、普通は誰れしも顏子廟の參拜に出かける。陋巷の井戶と稱する魯の國の昔を偲ばせてゐる遺跡や、顏回の廟内を隈なく巡拜する。すると、遠く孔夫子が鄒魯の間を徘徊してゐられた當時の事に、一層思ひを馳せたくなるのである。

曲阜ではいつも、例によつておきまりの如く、かういつた參拜に來た者の姿を見ると、町の小商人共、よいさかなが來たとばかり、或は與道子筆と稱する孔夫子の像の複製の拓本や、又はもつと怪しげな古拓のいかものなど數多抱へて持込んで來る。客の門を出る所を待伏せして、しつこく賣りつけやうともつれて來る。或は宿までうるさくつけて來たり、容易に放免してくれない。中には聖廟の前の處から、楷杖凭どのコテコテものをしこたま抱へ込み、どうでもかうでも押賣りしようとする。これらはダニの類であると見てもよい。しかし嫌はないで、愛嬌半分よい加減にあしらつて置く方がよろしい。

曲阜城内の風物を窺ふに足りるものは色々あるが、その中でも果物にはよいものがある。三寸にあまる甘味の多い柘榴、それから棗、桃などには素晴らしいのがある。山東は果物は豐富なところで、棗は種なしの珍果が樂陵縣より產する。又柘榴は曹縣から出るものが偉大であつて、評判が高い。城内に之を求むるときは之をたしかめて見るべきである。桃は肥桃といつて、肥城縣から出るのが一等味がよいと土民はいつてゐる。

曲阜城内に宿をとることは、孔夫子の時代を思ひ出させる上から云つても望ましい。たしかに曲阜城内には、自分の體驗から云つても、二千五百年前の魯の昔と同じ夜の氣持が、今尙城内に漂うてゐる。夜半いづれの方からか、遠犬の聲、かすかに聞え、一輪の明月は煌々として聖廟の空を照してゐる。何とも知れぬ靜かな曲阜の夜である。幾度か曲阜の月明を體驗し、城壁樓門の一角が、月光に照

らされてゐる光景を打眺むるなど、殊に自分には思ひ出が深いのである。土語でいふ「打更的（ターカンテイ）」（夜廻り）の敲いて來る擊柝の聲は、夜半の街の淋しさを層一層唆つてゐる。夜半小便に起き、宿の中庭に獨り佇んでゐると、宿の主人が愛してゐる鳥籠が布の被ひがされたまゝ軒に吊され、小鳥は靜かに眠むつてゐる。何と云ふ靜寂の曲阜の夜景であらう。その靜けさを破つて、幽かに夜廻りの聲の、耳朶を打つのは孔夫子の時代も今もあまり變りはないであらう。夜半城内を流して來る夜鳴き蕎麥（麵）の呼び聲は、殊に雲煙萬里の孤客、羈旅の感を唆るものが深い。多くは市民たちの賭博、麻雀に耽れるもの、夜半の腹ごしらへに呼びとめらるゝ客のあるのを當てこみ、夜な夜な廻つて來るのである。如何に孔夫子の膝許であつても、賭博徹宵の遺風ばかりは、その跡を絶たないやうである。

曲阜城門に見張る番兵は、山東の土匪のやうな物凄い恰好をしてゐて、行人の肝を冷やすこと夥しい。がその實心は溫かい人間味に富み、早朝城壁下の散歩に出かくる時、これに言語をかけ、キヤラメルの一つも與へ、「可以吃（コイチ）、可以吃（コイチ）」（たべられるよ）と說明して、こちらで口に入れしやぶつて見せる。すると、ニコニコ顔になり、やがて名所觀光の話し相手にもなつてくれる。どうかすると、「先生、今から、城内を背景に寫眞をとりたいから先生にこの鳥籠をさげて頂き、一緒に這入つて下さい」などと話しかければすぐそれ位の需めには應じてもくれる、といつた工合である。話のついでに又番兵君に向ひ、「城門を登つて、城壁の上を散歩したいのだが、よいでせうか」といへば、これ又二つの返事に默認してくれたり、「好好（ハオハオ）」とよい返事の聲も洩らしてくれる。又こちらが城門を出入する毎に、笑顔をつくつて首をタテに振つてくれたり、兎も角感じは打寬ろいできて、悪くないのである。

曲阜城外で、先づ觀光客の參拜すべき所は、秦栢の並木の路を北へ、眞直に萬古長春とある牌樓をくゞりぬけ孔林を訪ねると云ふが先つ第一である。孔林は境内白檀、楷樹、槐樹、椿樹（ツバキに非ず、むしろ栴檀に似たり）鬱蒼として茂り、洙水橋、石人石狗、祠堂、廟宇など、數多幽邃にあたつて建ち並んでゐる。林下は馬車禁制の甎城であるから、門を入るとすぐ馬車は留めなくてはならぬ。下馬すべきである。綠蔭の奥、孔夫子土饅頭の塋陵に至る墓道は、參詣者何れも敬虔の念に滿ち林間に歩を運ぶのである。最近その墓坟の正面を取圍み、新しい玉垣が廻らされたり、又それに持つて行つて、非ずもがなと思はれる駄足の刻字を見たりするなど、夫子の德を汚すこと夥しき感じさへする。寧ろかゝることをするよりも、墓墳の前後左右へ、出來ることならば今少しく綠樹の植ゑ込みを加へ、密林を作るやうに考へた方がよくはないかと思はれる。境内には村の童男童女達の遊び戲れ、それが參拜者と見るや、秦栢白檀の細枝を手折り、酒錢（チウチエン）をねだる資となしてゐるなど、旅人をう

るさがらしむるものが少なくない。しかし參拜の好記念と考へられぬでもないから、林木の靈種を拾ひ來り、日本にこれを蒔き、實生の苗木を育てあぐる如きことをするのも亦一興である。又世道人心の爲め、一助ともなるであらう。往年黑木欽堂翁がその種幾粒かを將來して、苗木の鉢植に仕立て、今はそれが本鄕駒込の三上老博士の書齋の卓上に、その餘香を漾はせてゐるとは、風雅な思ひ出ともなる一挿話である。

孔林參拜後は途を東城の郊外、少昊金天氏の古墳へと取る。魯の故地で、黃帝の子と云ふ傳說のことや、史上のこととはともかくとし、これ程古いものはない。坟墓は直徑十數間に餘る宏大な土饅頭で、その全面に亙り悉く一尺大の石板が整然と疊みつけられ、鎧式に被ひ重ねられてゐるのである。その規模の壯麗なことは、南京中山陵に見える孫中山先生のそれよりも大きく、實に見ごたへのする壯嚴さを呈してゐる。魯の國の有史以前と思はるゝ古い茫漠とした時代に、その起源を有し、その後幾度かの重修があつたにしたところで、何れにしてもかゝる由緒深い古墳が、今日亡びないでそのまま保存せられ誰れ人にも侵されることなく、かうして現實の狀態を保つてゐることは、如何に曲阜の天地の悠久性を有するかを思はしめてゐるものである。

境內は廣く、草茫々のうちに、多少の古木は茂り、祠堂も陵墟の形で殘つてはゐるが、しかしそこに墓守一人ゐる譯でなく、唯樹枝にとまる鴝鵒の鳴聲が、淋しく聞こえてゐるのみである。自分ども之を訪ね徊徊去るに忍びないものがあつたが、南京中山陵の盛事を思ひ、感慨無量なるものを禁じ得なかつた。秋の空は高く、金天氏の墓域に上代の歷史を追想しつゝ、道を周公の廟へと辿る。

山東の曠野はいづこと限らず、高粱畑で、その無限に打續く眺めは、高粱の原であるのが普通である。ところがこの邊りの野は、白檀柏の森影あちこちにと指され、老樹古木の幹も幾百年と云ふ時代を物語れる感じさへして、普通の山東の眺めとは、その趣を異にしてゐるやうである。隨所に見出さるゝ古碑の墓陵は、その龜趺を有する碑身、圭首、螭首の形に出來てゐるもののほか、左右兩方に長方形の瘤の出つ張りある碑身など、見るべきものがあちこちにある。歷史家、考古學者などには、特に參考になる墓の形式と見られるのである。

周公廟は、金天氏の遺坟から、曲阜に向つてかへる途中、その墓陵樹林の間を通して、ちらツと見られるゝ大規模の紅壁のあるところが卽ちこれである。廟門には、青空高く瑠璃色の燒物で出來た人物が、數多飾り付けられ、夕映えの光りに輝いてゐる。門前に架かる大理石の古橋は、旣に疾くの昔に壞れ落ちて、水の流れも今は亡くなり、全く枯れてゐる。唯徒らに秋の草が邊りに生ひ茂り、蜻蛉が飛んでゐるのを見る。黃牛をつれてゐる牧童は、牛を顧るでもなく、呑ん氣にあゝして正體もなく原

ツぱで晝寢をしてゐる。牛は牛で、自由に思つたところに動き、門前の草を喰つてゐる。自分たち參拜者の姿を見てとつて、駄菓子、柿など賣りに來た物賣りは、古ぼけた屋臺車を側に、客を呼んでゐるのである。田家の子供が四五人これに集る。中には裸體のまゝの童兒もゐた。その何事か話する話聲に、牧童は目を醒すのである。

周公廟の境内は、香人にたのみ扉を開けさせる。金天氏の墓陵とは違つて、祠堂や東西の廂廡を始め、その他の小廟もあり、かなり建ち並んでゐる。正面の祠堂には、周公の神位が祀られてゐる。それから春秋左氏傳に見る魯の國歷代の王名が、一々朱塗り金文字の神位に刻され安置されてゐる。けれ共天井は蜘蛛の巢がかゝり、神位は埃の中にまみれ、倒れてゐるのがあり、横向きのがある。しかし誰れ人のこれを整へんとするものがある譯でもなく、殆んど空き家同樣の姿である。係りの人がゐるかと心當たりをさがしても見たが、何處にも聲だにしない。

日本には林泰輔博士の「周公と其の時代」と云へる名著が出たり、井上哲次郎博士の東洋倫理學があつたりして、周公その人の德を慕ひ、周初の文化の研究も、かなりよく進んでゐる。一方には白鳥庫吉博士が、周公は傳說的の假作人物に過ぎないとか云つて、之を抹殺せる學說も出たりした。するとそれに反駁を加へたものもあつたりなどしてゐた。が見る角周公の研究には、近來刮目して見るべきものがあつた。ところが實地に、かうして肝腎の山東魯の故地を踏んで見ると、正直なところこの通りの有樣なのである。いやはや儒教の實際的感化力とか、影響の如何とかいふことは、本家本もとに於てさへ殆んど問題にされて居らない。

周公廟の參拜を終つた後、門前に出て見ると、牧童はまだ南柯の夢を貪つてゐて、なか〳〵醒めない。ぐう〳〵高鼾でゐる。何んたる長閑な周公のお膝元なのである。

道を曲阜の北門にとり歸路を辿る。すると、路上病蹇を乘せた一輪車が、キーキーきしる音を立てて行くのにすれ違ひになつた。靜かに之に言葉をかけて見ると、こは「曲阜の太夫（醫者）の所へ見て貰ひに行つた」のだといつて、片手に草根木皮を携へてゐたのを見た。路傍田家の門前廣場に坐してゐる農婦は、あゝして穀類を陽に乾す爲めか、莚の上に手で之を擴げながら、片方の手では幼兒の面倒を見てゐるのである。幼兒はしきりと泣いてゐて止めない。どうしたのかと念入りに見ると、ウンコをした子供を、左の小腋に抱へ込み、こんどはその子の大事なところを掃除してゐるのである。と云ふのは、肝腎の所を紙を用ひる代りに藷草樣の葉で以て、幾度か叮嚀に拭ひ取つてゐるのである。そのために子供は泣く。それを母親は素知らぬ顏で一所懸命やつてゐるのである。二三町行つた先きの農家の門前でも、又同じやうなことをやつてゐる珍場面を偶然にも見た。今度そばに待ちかまへて

ゐる飼ひ犬に綺麗さつぱりと舐めさせやうとしてゐるところであつた。凡てこの邊りの片田舎は、家庭にこれは本當の話だが全く落とし紙の一枚も備へられてゐない。さう云ふ家はなく、農家の事とて菜葉を代用する位の程度でゐるのである。だから子供の泣く位のことは、問題でないものと見える。

論語の文面を眞面目腐つて考へてゐるやうな日本の道學者、漢學塾の先生達は、この孔夫子のお膝元に見る天眞爛漫の禪味ゆたかな光景を見られたら、何んと考へらるゝことであらう。山東の天地は、今や論語の教を遙く超越して、最も原始的な簡易生活の極致を實現してゐるものと云へるのである。

日本人は孔孟の教などといへば、直ちに誰れしも山東の地を思ひ出し、かの有名な「孟母三遷」の傳説をも聯想する。ところが恐らく孟子時代にした所で、この箒草の話の程度のことは、同じやうにあつたことと思はれる。曲阜から南、今日孟子故里の文字美しい牌樓のある村里に行つて見ても、同じことであつた。古も今もあまり人情風俗に變りはなかつたやうである。

山東の田舎

尚考古歴史地理の方面山東の田舎に興味のある旅客は、曲阜から更に南して、高塔の影高き鄒縣に行くより遙か手前、馬山の田舎に行つて見ると、漢代の藝術をそのまゝ物語れる石刻が、數多時傍に

山東省鄒縣の田舎、馬山に見る漢代石棺の遺蹟。外側四方に薄肉刻の圖案あり、蒼龍(東)白虎(西)朱雀(南)玄武(北)の四神を現はす。四對八個路傍に横たはる。

並び、露出してゐるのを見る。それは今日自分の見たところによると、漢代の遺物と思ぼしきもので、四枚の厚い花崗岩より成り、物はたしかに石棺の恰好をなしてゐる。それが四個宛斜に相對して見出され、その各石棺の側面には、蒼龍、白虎、朱雀、玄武(蛇と龜の交尾せる形)の四神が、薄肉彫で以つて立派に刻されてゐる。刀刻は今尚髣髴として認められる。そのうち或る物は石蓋の蔽はれたまゝになつてゐるものもあり、或る物は又蓋が亡くなつてゐて、沙で埋められ雜草などの生えてゐるものもある。孟子林を遙か東の山麓に眺め、又孔夫子のおでこの頭の形に似てゐたといふ尼山の輪廓を、遙か南の空に低く眺める。この漢の遺跡の見出された處に足をとゞめた時の感じと云つたら、何んともいへぬ古代文

化の淋しき史趣に唆らるゝものがあるのである。

尙山東の田舍には、地下に埋藏してゐるものに有名なものがある。例の漢代文化を物語れる肥城縣の孝堂山の石刻や、嘉祥縣の武陵石室など、これらは世界的に有名な古代藝術の寶として今日に遺されてゐるものである。恐らく現代達し得る支那最古の繪畫資料として尊崇措く能はざるものである。平福百穗畫伯の先年の「豫讓の圖」に見えた人馬の構圖もこの石室、畫像の意匠から手がかりを得られたものである。英吉利に、佛蘭西に、獨逸にと、今や歐洲藝術界に於いてもこれらの漢代文化は著しくその研究の興味を唆つて來た。實に山東魯の故地には地下に漢の石室あり、地上に又漢の碑碣あり、古代文化の研究を思ひ立つもの、山東の旅ぐらゐ趣味津々たるもののある所はないであらう。

山東は、由來その田舍の方に這入ると、高粱畑のみ打續き、それが又土匪の巢窟の如くに云はれてゐるが、しかし和風綠野を吹き、清雲朱絃に入ると古人もいつてゐる如く、古代文化の懷かしきものは山東の天地都鄙到る處に見出すことが出來るのである。

山東の天地ひろしと云へども、そのうちでも特に山東の田舍らしく思はれてゐる所は、鐵道沿線では例の臨城（リンチヤン）驛のあたりである。國際關係の濃厚な處で、外人の旅行には、殊に意を用ひてゐるところである。こゝには前にも述べた如く四六時中ぶつ通しに六名の武裝兵が、青龍刀の拔身を翳し、ホームのあたり驛頭の警護にこれ努めてくれてゐる。古の淮夷、徐夷の如き未開の民の據つてゐた所も或はかう云つた田舍ではなかつたらうかと思はれる。場所が場所であるから、今も尙かゝる心得ちがひの徒の出沒することは又止むを得ないことで古を物語る話の種ともなると考へられぬでもない。

徐州附近

津浦線を南に下れば江蘇省に這入り、そこに有名な徐州（ヅイチヨウ）の驛がある。徐州は、ひとり南京行の客の目を惹く車站（ツオヂヤン）であるばかりでなく、西の方河南の開封、洛陽の行都（最近また蔣介石が南京より首都を遷したところとしても知られてゐる）に通ずる隴海（ロンハイ）鐵路の起點となつてゐる點でも、よく話に出るところである。所でこの徐州驛では、高く構內月臺の陸橋に登り、あたりを見渡して見ると、兵隊の輸送で取込んでゐる場合が多い。いつも何かと云ふ時は、山東に河南に、南京に、上海にと、陸續繰出す正規兵の何個師團とか云ふものが、邊りにうよ〳〵してゐるのである。如何にも軍事上重要地であるだけに、それだけ物々しい警戒氣を漲はせてゐるのである。

尙この徐州から南下すれば、火車の沿道には蚌埠（バンブ）の車站だの、又むかし苦力勞働者にからかはれ股潛りをした古事で有名になつた韓信の歷史を偲ばせる韓信臺だの云ふがある。飛檐高く丘上に聳えて

ゐる堂閣の景趣は窓外に涼しく仰ぎ見られるのである。かくて江蘇に這入つてからの邊りの山川風物と云ふものは、次第に潤色を增し、山東に見る北支那氣分の風物とは、丸きりちがつたところを見る。やがて長江の北岸、浦口（プカウ）に到着する。江を隔てゝ對岸に見ゆる大都城は、云はずして南京の江城であることを知る。江城五月の春と云はるゝ處だけに、春の江城の眺めは殊によろしいが、何れこの邊の案内紹介は、江蘇省の部に行つて詳述することゝする。

濟南より青島へ

山東の旅を思ひ立つものは、青島を振出しに、西へ西へと進むのが、普通の行き方であるが、話の順序として、こゝには先づ濟南地方から發足して、東に向ふことゝする。

先づ山東半島の旅で、特筆すべきものは、產業方面では石炭、硝子工業、紡績、高粱、酒、山東牛などである。しかしながら未だこれまで、世間に知られてゐないもので、自分の耳にしてゐるものには、支那四百餘州に冠たる掘出物としての、ダイヤモンドの採掘のあることである。場所は泰山の裏山で、清岱（チンタイ）から程遠からぬ山中の秘境である。黑色の結晶形のものが最も多いが、其の他良質のものも少なからず得られる。山東から四方に、又海外に、出稼ぎを業とする苦力（クーリー）つぎ、瀬戸物直しの手合が、手に持つ轆轤の尖端に輝かせてゐる寶石は、卽ちこのダイヤモンドであつて、濟南人はこれを單に鋼石と呼んでゐる。鋼は剛に通じ、金剛石と云ふ名稱の俗名である。この種の出稼ぎに、濟南人の男の多いのは、この鋼石の產地が濟南都城を隔つるあまり程遠くないところにある關係であらう。

膠濟鐵路に沿うて水田、茶園打續く田舍を東方さして進めば、金嶺鎭、周村の驛があり、やがて張店に着く。淄川炭坑や、博山の硝子細工の製造で有名な所である。これらは何れもこの張店驛から南に這入るのである。炭坑は、日支合辦の公司で營まれ、硝子工業はもと獨逸人の技術に據つて始められてゐたゞけに、頗る精巧なものが今以つて出來、花瓶、菓子鉢のカットグラスから、硝子の屛風、其の他美しい作品が、しかも價安く出來、主として國外の市場に歡迎されてゐる。この邊りは又夏の夕べ、星月夜の河原などには、地方獨特のなまめかしい風流な話も少なくなく、ローマンスも數知れず生み出されてゐるのであるが、こゝにはすべてそれは省いて置かう。

青州は、古來酒の名所として知られ、日本の灘にもあたるところで、上戸連には青州といへば、忽ちに芳醇佳酒の代名詞の如くに考へられてゐる。しかし文人墨客は、青州の名によつて、唐代第一硯の紅絲石の事を聯想する。その與地黑山が紅絲石の本場であつて、一時日本で紅絲石の評判の高かつた頃には、山から糸目の鮮かな良材を採掘し、之を大々的に石材として輸出したものであつた。又そ

の糸目の鮮かでない村は、油で煮しめ細工をしてよく見せると云ふ殺風景なことをするものもあつた。

尚東の方濰縣（ウエイシエン）には、山東古代文化の粋を集めて收藏してゐた、有名な陳介祺（壽卿）の舊家がある。有名な滿洲貴族の收藏家端方の名品なども、多くこゝに流れ込んでゐた。陳家の名品は、日本の住友男の手に歸した例の陳氏十鐘を始めとし、古銅器の方面は、三代の珍品尤物をすべてに亙り網羅してゐた。著述に「奇觚室吉金文述」があり、又それと同時に同名の「奇觚室藥石文述」があることは學者のよく知るところである。金石學者の間に、今日陳家のことを知らないものはないと云はれてゐる。

濰縣の城外鐵路に近き田園の中には、乾隆の刻とおぼしき大理石の白馬が、淋しく孤立してゐるのを見る。恐らくその邊は、昔名門の墓陵の跡で、石人石馬、石羊の列んでゐたその片割れだと考へられる。鐵路高密・膠州・滄口・四方の各所を經れば、火車は終點青島の驛に達するのである。

青島

青島は、今でこそ東亞屈指の名港の一つとなつてゐるが、もとは山東の一隅に存する一漁村に過ぎなかつた。獨逸人の地理學者リヒトフオーヘン博士の名著、北支那地質大調査に手掛りを得て、カイゼルがひとく胸を躍らせたのが抑もだと云はれてゐる。當時東亞の天地に野心勃々たりし獨逸のカイゼルは、實力を以てその好機會をつかまへんことに汲々としてゐたと云ふ。

當時歐洲列國は、支那各地、要所々々に夫々領地、又は租界、租借地を得てゐた際のことゝて、こは無理からぬ心境にあつたと察せられる。時宛も山東の片田舍で、獨逸の宣教師二名が、匪賊のために慘殺せられたと云ふ好口實を見出すことが出來た。その偶然の機會をとらまへて、手酷しくも、遂にこの青島村を押へ、獨逸の租借地となした。兩來カイゼルはその勅營でもつて二億萬マルクからの莫大な經費をかけ、港灣に、土木に、砲壘に、建築に、又屠牛場に、あらゆる方面に驚くべき科學の力を應用し、文明的現代都市としての典型を、こゝに實現したのであつた。

青島は、恐らく東亞細亞に於ける一等進歩した、又一等文化的港灣として比すべきものなく、日本の大連と相並べても、あまり見劣りのしない施設を有するまでに至つた。元よりその規模の點は、大連に及ばないのであるが、しかし綠林、黃瓦、山紫水明の都市美を有する港灣としては、大連を遙かにしのぎ、殊に郊外海水浴場は、その水溫の低きに過ぐるの缺陷はあるにしても、先づ東洋一の文化都市と稱し得べく、總體に云つてこは最も衞生的な感じのよいモダン都市であるといへる。

今日の青島は、人も知る如く、日獨戰爭の結果、一旦日本が獨逸からその租借を引繼いだものである。それからと云ふものは、その都市に、港灣に、治水に、教育に、公園にと各般に亙り、文化的施

設を一層完成した。殊に支那街の改良と、衛生上の設備には最も骨を折り、多大の努力を拂つた。その後日本の中外に向つてなした聲明に基づき、支那のために又東亞のために、これを民國へ向け還付するに至つたものである。しかし尙今日在留日本人の此にゐるもの二萬人からあり、日本の領事館、青島神社、片倉組、郵船、原田汽船などを始めとし、その他官民各方面の施設に基つくものが數限りなく存してゐる。古く獨逸時代から店を開いてゐた高橋寫眞館は、今尙榮えてゐて在留民中、依然重きをなしてゐる。

市中に見るべき重なものは、大港の埠頭、大規模の屠牛場の設備、大小便の地下淨化設備、支那街の衛生振りを始めとして、郊外の櫻公園、砲臺跡、戰跡、海水浴場、獨逸人の墓地などである。

獨逸時代に立てられたモルトケ、イルチスの連山は、市外の後方に聳え、今は山に茂る松樹の林相も著しく綠を加へ、誠に山東新都市としての美感を添へて來た。獨逸人の墓坟は、日本久能山下龍華寺の高山樗牛の墓に見る樣式と同じで、その同じ樣式の墓が數多並び、こは日本から行つた旅人の目には物珍らしく眺められる。無線電信、測候所の邊りから、全市を見おろし、灣中小島の孤在するのを、特に人は注意する。この孤島こそは土民これを青島（チンタオ）と呼び、抑もこの都市の名稱は、この島名から出たと云ふ起源をなしてゐるものであると云はれてゐる。

臺東鎭、臺西鎭と云へば支那街の面目を見せてゐる面白い所であるが、青島としては、こは場末の感がある。郊外の李村は水源地として知られてゐる。若し連れを得て、自動車を更に山手の奥深したたる仙境へとドライヴして行けば、九水の溪流を見る。又岸高き雲外の別天地に遊ぶことも出來る。この九水の山中には、唯一ケ所日本人の女將の豪膽なのが古くからゐて、旅亭を營んでゐる。幽境を訪ね來る風人のためには、心から待遇する偉ら者であつて、その女將の話のうちには、天晴れ日本男子の度肝を拔く底の珍談もあり、馬賊や兵匪にいつも惱まされ、鍛ひ拔いてゐるかの女の度胸には涙ぐましい感心すべきものも數々ある。

日本人の山東の旅と云へば、青島の戰跡巡りを第一にするものが多い。尙又郊外の海岸四方のあたりから滄口あたりにかけて、投資されてゐる紡績會社、鐘紡、富士紡、大日本紡を始め、支那人經營の工場などの中にも見るべきものがどつさりある。その工業方面から樣子の變つたものには、屠牛場がある。その內部の規模の大きなのと、その施設萬端の文化的なのとは、米國のシカゴのそれにも比ぶべく、こは世界一とは行かないまでも、世界第二のものであると評されてゐる。こは必ず見ておくべき場所である。

青島の名物は、人も知る牛と白菜であるが、そのほかに青葡萄の美味、落花生の良質なるもののあ

ることは、旅人の心を惹きつくるに足る。

尚青島の東方天空に高く聳ゆる岩山の峯は、嶗山と稱せられ、いかめしく嶗山灣頭の背景をなしてゐる。山中に名高い嶗山祠堂は四時參詣者が絶えない。

芝罘附近

山東半島の東端山東角には有名な燈臺が輝き、海上遠く航海者の便に供せられてゐる。時折り附近の海上濃霧立罩め汽笛しきりに鳴りて、あはや間髪を容れずと云ふとき、窒しく海底の藻屑となる衝突難破の不祥事を見ることがあり、山東角の沖合では、殊に旅客の心を刺激するものが深い。

海峽を西の方、劉公島から南に這入れば、是まで長らく英吉利の海軍根據地として東亞に武威を示してゐた威海衞の港がある。今は大部分を支那に還付して、支那大衆の歡心を求めてゐる氣持さへ見え、支那側ではこれを目下商港として引續き經營をしてゐる。

對岸の旅順から、海峽を隔てゝ南を指すと芝罘（チーフー）の港がある。大連から日本船のこれに通ふ船便もあつて日本商人の此れに在留し、取引に從事してゐるものが少なくない。其の他龍口、登州にと云つた風に、日本人に懷かしみの多い所はあちこちにある。

卽墨と膠州

卽墨は、史記の列傳、田單の卷に見る有名な史的古都である。青島からこれに遊ぶには、一日の行程であつて譯はない。城陽の驛で下車し、驢馬を驅り、卽墨河に沿うて畝畝楊樹の間を東行する。河原の楊樹の下に開かれる牛の大市はさすがに盛大を極め、橋を渡つて城門を這入れば城内となる。卽墨城内の光景は、山東の田舍街として何處となく特色のある澁い趣きを見せてゐる。衙門に知事を訪ねて面會し、その鄕土史や、古跡の佳話に山東の昔を偲ぶのは、古の齊の國の俤も判り、なつかしい。ところで史記の列傳に見えてゐる古の卽墨は城外更に東へ三十支里とかあるといはれてゐる。それにしても卽墨の名前の懷かしさに、古城は旅客の足を惹きつくる力が强く、時折り青島から出かけるものがある。卽墨城内の見るべき名所は孔子廟である。知事を訪ね、翰墨談をかはしなどしてゐるうちに、文廟の話が持ちあがる。これを訪れたいと申出ると、案内人をつけてくれる。案内は一人と云ふことであつたが、田舍のことゝて命ぜられた者の外に、路を行くうちに、有象無象が數多つけて來て、孔廟の門前に達したときは、十數人の多きを加へた。

文廟の門内は草蓬々、夏時などには殆んど身を沒するばかりの雜草深く生ひ茂り、全く蛇かじやで

も出て來さうな光景である。しかし大成殿は神錆び、漢柏は老い、荒廢のうちにも時代色の古びが漾うてゐるのはうれしい。滅多に參拜者の訪ね來るもののないためか、叢中黑狗が現はれて、ワンワン續けさまに吠えつく。ぞろ〳〵自分について來た手合は、何れも皆酒錢を目當てにしてゐることは勿論だが、うるさいくらゐあちこちと解り切つたことまで說明に及ぶ。知事のお聲がゝりと云ふものは、いつでも後で有難迷惑を感ずる次第である。又翰墨方面で山東で忘れられないのは、清の康熙雍正に、高鳳翰（南村、南阜山人）を出してゐる膠州の街である。山人は愛視家として有名であり、晩年右手を惡くし左手を用ひ、左手にて右字を書く。その書風高雅にして文人の愛玩殊に深きものがある。

山東の農產物

山東の旅は大要これで述べ了つた。山東は、人口三千萬、面積五萬六千方哩を有し、一哩に五百五十人、支那としても非常に高い密度を有してゐる。北支那の遊歷のうちでも、日本に近いだけに思ひつき早くもあり、又實際田舍を巡つて見ると北支とは云へ割りに潤ひがある。楊柳の蔭は到る處に見え、河川の流れも水量がかなりあつて、山西方面のそれとは大分違ふ。地方によつては水田の開けた處もあり、野菜畑も相當に指される。胡瓜は山東の名物で、その長さ二四尺に達するものがあり、五寸位の手頃の長さに折疊んで運んでゐるくらゐである。茄子や、西瓜にも亦珍らしいのがあり、豆畑（豌豆）などは、農家の門前に大抵これを見る。卽墨附近の田家には、漆喰詰めの廣場を門前につくり、穀類その他を莚を用ひず、ぢかにこれに擴げ陽に乾してゐる風習を見る。山東の田舍で麵類を食べてゐると、屢〻沙の混つてゐるのに嚙み當てることのあるはこのためである。山東には、又有名な粉豆（フンタウ）と稱する所謂豆素麵なる物がある。こは寒中に氷結させるもので、その纖維をなす清姿は水簾の如く、實に清淨潔白な眺めである。多くの家庭に賞味せられ、その價も亦廉である。かういつた農產物を一とわたり見ても、日本人に懷かしいものが多いのである。

山東の天地は、日本人にとり、なんといつても青島、曲阜、泰山、濟南、黃河の五者で、旅程を作るとき、忘れてはならないものである。經費も山東の田舍旅は比較的安く出來、若しかりに山東式のあの大袋を携へ、田舍の史蹟巡りを思ひ立つものは、本當に何程もかゝらない。現に每年山東の農村から滿洲へ向け、青島の勞働者船にデツキパセンデヤーとして積込まれる手合は、數十萬乃至百萬と云ふ數に達してゐる。がしかしこれらの各家族の生活費はどれほどか、と云ふと月額六元を出ないといはれてゐる。山東省くらゐ生活費のかゝらない地方は少い。

山東の旅は、特にこの點に注意をこめて考へ察する事が、一大眼目とならねばならぬ。結局

日本人にとつて滿洲生活の内容をよくよく知り極めるには、先づ以つてその滿洲農夫、滿蒙新國家の裏を流るゝ田夫の根據地である山東の田舍生活を知り、その眞相に觸れて、十分な理解を持たなくてはならぬ。徒らに青島の都市美とか、濟南の城壁の雄に驚嘆するだけであつてはいけない。自分の經驗から見ても、あの有名な山東の牛、又山東の落花生などと云ふものは、如何に田舍の奥地を歩き、又火車の窓から氣をつけさがすやうにして見てゐても、何處にも見當らない。牛の群、落花生の畑のあるところが判らない。しかも毎日市場に送り出され、それに集つて來るものは、殆んど萬をもつて數へられる位の量で、實に驚くべきものがある。流石に奥の深い農村、片田舍を持つてゐる山東は、實に測り知るべからざるものがそこにある。この邊は北支那を歩く旅行者にとりて、最も研究上興味のある好題目を提供してくれてゐるわけだと考へられるのである。

河南省

徐州より河南(洛陽)へ

大支那の天地は、長江一帶の流域を中部地方としてゐるのであるが、所謂北支那と長江一帶の中間に位する中部支那、即ち河南及陝西の地方は、一種特別の地帶を構成してゐる。

地質の上では明かに、北支那と同樣な黄土質の特色を有し、總體的に乾燥した蒼園氣を見せ、長江流域の方から之を評せば、特に文化の低い奥地の感じを呈してゐる。現代は、殆んどその文化もおくれ、交通も割りに繁くなく、何んとなく文字通りに、國亡びて山河ありの面目を、如實に物語つてゐる。ところが昔はどうかと云ふと、あの通り洛陽の都とか、乃至は長安の都とか、なつかしくいつも唱はれたところであり、文筆の上にも「洛陽の紙價を高からしむる」とか、「長安一片の月」とか、詩に、文に又歷史の上に、思ひ出の深いところであつて、殆んどその故地は、送迎に遑がない。過去の名所舊蹟は、恐らく河南、陝西をもつて、宇内第一となすであらう。それが今日では、唯詩人の心を痛ましむるもののみである。

學術の上では、殷の都の跡から、龜甲、獸骨の文字資料が出たり、物資の上から曹達の原料が數多出たり、夫々專門の方面には、注意を喚起する所もないではないが、しかし平漢線あたりにしても、河南に下車する乘客と云ふと餘り多くはない。昨今洛陽に行都が一時とは云へ置かれたりしたので、河南も交通が以前に較べていくらか開けて來たと。しかし何んといつても片田舍奥地の感がする。ここには先づ順序として、津浦線の徐州の驛から、西に向ひ、河南(洛陽)を經て、西安(長安)の古都へ

と進む沿道附近の要所々々のことに就いて左に大略のところを述べることゝする。

徐州の驛から、河南へ通ずる隴海鐵路は、動亂のために、運轉の妨げられることが多く、又平素一帶の人氣も餘りよくない。沿道にはあちこち土豪の壁高く、樹林の間に聳ゆる望樓、烽火臺など、一種の河南情緒を喚るものが多く、歸德、開封、鄭州、葉縣、洛陽等の史上に名高い地點を次から次へと過ぎ行く。鐵路は西半は海蘭線と呼び、澠池を經て觀音堂に至つてゐる。尙そこから遙かに函谷關の峽を超え、陝西境ひの潼關へ延びんとしてゐる。

黃河を越えて北の方には、彰德、湯陰、新鄉の諸驛もあるが、彰德の城外安陽河畔の小屯には、殷代の文字を物語る龜卜の斷片が幾萬となく出土しこれによつて略々殷の都の位置も推定せられ、その又龜卜の文章と文字の構造によつて、遠く三千年以上の古代文化を知ることも出來る。この地方一帶古代には、老樹鬱蒼として一大森林をなし、猛獸の害なども多かつたのであるが、世を經るに從ひ、森林はその跡を絶ち、從つて氣象に變化を起し、著しく降雨を見ることが少くなり、そのために幾千年の昔の埋藏物は、殆んど腐ることもなくそのまゝ、今日に保存されてゐるのである。

彰德のほかにこの附近には尙燒物で有名な磁州であるとか、又黃河を南に渡れば、北宋の都として史上に知られてゐる汴京、卽ち後の開封などの如き趣味深き古都が、數多あちこちに見出される。

開封は古來黃河の河床の十五回も變つてゐる處だけにその被害も多く、史的遺跡は少い。が曹達の集散が多い。それから西方鐵路の沿道に見るべきものを擧げると、是は主として佛教藝術の粹を物語れる寶塔、或は石窟の佛像建築などである。開封を始め、洛陽の附近には、殊にそれが多く、河南隨一の佛教史の材料も、主としてこの方面に實際の價値を現はしてゐるのである。又風物の上から見て來ると、このあたりは、土着民の生活樣式、貧富の程度の殊にかけ離れてゐる點が面白く見られ、前に述べたやうに土豪の王侯を凌ぐ城廓生活を一方に見るかと思ふと、他方には又殆んど全く動物に近い穴居生活を營んでゐるところを數多見出すのである。殊に鐵道の沿線地方ではその十字路に當つてゐる鄭州を中心としてあのあたり一帶の山の麓には、幾萬の穴居の民が群居してゐる。煉瓦を重ね牌樓に似た藝術的な立派な坊門を庇の如く入口に築きあげたるものもある。これは勿論金持の部類に屬するものゝ穴居で、一般多くの穴居民といへば、唯石で門の小口を築きあげてゐるか、又は土に穴をあけたまゝで、その入口に戸を備へてゐるくらゐのものである。日本の上古の穴居民に見る橫穴式の穴居とは違ひ、その規模は豪壯であつて、仕掛が大きい。穴居部落の中にも、客棧があつて、之に堂々たる設備をなし、客室があり寢臺があり卓があり椅子がある。凡てこれが殆んど木材を用ひないので、天然の山の土を、夫々の形に掘り拔き、又は掘殘してその用途に當て、これにアンペラ莚など

を敷いてゐるだけである。木造の片影を見ない穴居部落の光景といふものは、洞ひの感じが全くないので、如何にも殺風景の極致を物語つてゐる。恐らく河南鄭州附近の風物を、實地に目擊したものは、此の世の人間生活、文化の進歩なんか、殆んど問題でなく、太古も廿世紀の今日もこれを一つの平準線の上に於て考へざるを得ない事となる。山に草木が乏しく、川に水が乏しく、井水を得るのが又困難であるといふことは山西の奥地と全く同樣である。鄭州の附近で珍らしく見らるゝものは、黄河の光景である。車上からその北岸の北站、南岸の南站まで見らるゝことで、特に火車の速力がその間甚だしくゆるめらるゝので、河上の光景、濁流の實際を見るには最も好都合である。黄河のこのあたりの幅は二哩からあり、之を渡るに火車は橋上約十五分間を要する。鐵路の沿道から遙か南の空に、五嶽の一つなる嵩山が仰ぎ見られる。更に西へ西へと進み行けば、考古學上有名な鞏縣の都城につく。古玩物の方面で、洛陽の出土品として知られた馬、駱駝、人物、家具などの珍らしいものは、多くこの界隈の獻啟の間から得られる。そのうちの秀逸な又偉大なものは、今は北平國立大學の研究室に集められて、學術上極めて貴重なものが多い。その中に駱駝と駝夫の一組のわけても天下の珍品とするに足りるものがあり、その片影は拙著「輸墨脚行」の口繪に最近紹介しておいた。しかし近來の所謂洛陽出土品なるものには贋物は少なく、この地方で殷人が模造したものが多い。騙欺の色も生々しくとても唐三彩の風韻のたゞよへるやうなのは少い。又ひゞ割れの土中物をうまく誤魔化し、市場に出してゐるものなどもある。九州大學の小野寺教授の如きは、かりそめにもこれを手に入れんとする時は、一々レントゲンにかけ、X光線で接ぎ目の有無など診察した上でなければ、買求めない位にしてゐる。昨今の眉唾ものの多い洛陽の品物には、さもあるべきことである。

河南（洛陽）

偃師の驛を過ぎると、やがて旅人の懐古の情を喚れる洛陽につく。最近上海の事變以來蔣介石、林森等の主腦部は、洛陽に都を遷し、持久策をこゝに講ずるに至り、洛陽はその爲め世人の目に新たに感ぜらるゝに至つた。古來歷史の上に鳴渡る洛陽地方は、一帶に見るべきものが頗る多く、郊外で有名な天津橋の優趣、龍門の石窟石佛の美、都城に懐古の情ゆたかなる古建築の起など、一木一石凡てこれ皆古代美を無限に物語るもののみである。今や洛陽（ロヤン）、は人口わづかに二萬にさびれ果て、ありし昔の古文明の繁榮を示すものとてはなく、徒らに詩に吟はれてゐる洛陽の懐かしみのみが千古の殘骸としてこゝに哀れを留めてゐる。

洛陽城東、桃李の花

飛び來り飛び去つて、誰が家にか落つ
洛陽の女兒、頭色を惜しむ
行く行く落花に逢ひて
とこしなへに歎息す
今年花落ちて顏色あらたまり
明年花開きて又誰れかある
すでに見る、松柏のくだかれて薪となるを
更に聞く、桑田の變じて海となるを
古人また洛城の東になし
今人かへつて對す、落花の風
年々歲々花相似たり
歲々年々人同じからず
言を寄す、全盛の紅顏子
まさに憐むべし、半死の白頭翁

この翁白頭、眞に憐むべし
これ昔紅顏の美少年
公子王孫芳樹の下
清歌妙舞、落花の舞
光祿池臺に錦繡を開き
將軍、樓閣神仙を畫く
一朝病に臥して相識るなし
三春の行樂誰が邊にかある
宛轉たる蛾眉、よく幾時ぞ
須臾に鶴髮亂れて糸の如し
たゞ見る、古來歌舞の地
惟黃昏鳥雀の悲しむあり

かう云つた古の詩篇を味ひ、口吟をして見るにつけても、限りなき懷古の情が唆られる。河南文化の粹は、恐らく洛陽の故都に集中されてゐるといつてもよろしかるべく、又その龍門の石窟中に、特

に光つてゐる賓陽洞や、奉先寺の盧遮那佛の傑作などは、これ亦最も珍とするに足りるものである。其の他幾千の崖壁、蜂窩に見る露佛大小の遺蹟は、山西大同の石佛寺のそれと共に、天下の二大佛教美術の淵叢として、佛蹟踏査の學徒の心を強く惹いてゐるものである。

由來洛陽の天地はひとり蔣介石と云はず、吳佩孚にしても、馮玉祥にしても、軍閥巨星の河南に於ける一大根據地となせる所のもの、財政的に惠まれてゐる土地柄でないことは無論であるが、しかしこゝに面白いことには、精神的方面に極めて端的な又結束の頗る堅い或るものを有してゐる。事實のあることである。といふのは、河南で有名な紅槍會とか、黃槍會とかいふ、昔から地方的自治組織の大變堅いものがあるのであつて、これらの團體は、古くから之に生命を賭してまで、夫々その町村の間に連絡を取り、一種の結社見たやうなものを作つてゐるのである。元來その名前の示す如く、これらの團體は、團體特有の色のついた房を飾りとしてゐる鎗をそれぞれもつてゐて、これが對外的の防備に當つてゐる。紅があり、綠があり、白があり、黑があるといつた風で、その色をもつて各々その會名の特徵となしてゐる。これは滿州に於ける大刀會などと、その性質を同うするものであつて、支那地方自治政中、特に注目に價するものなのである。

河南の紅槍會は、他の會と同じやうに、夫々その自衞上責任ある一定の範圍持ち場を有し、その受け持ち區域內部に於ける治安、租稅、吉凶のことなどすべてに亙り力を致し、古くから歷史的相互の團結心を養ひ來つてゐるものである。それ故、若し縣城に新しい知事などの中央政府から任命されて來る者があつても、先づ以つて何よりもこれらの諸團體に渡りをつけ、挨拶をして廻らなければならぬ。若しその理解を經ることなくして、新稅を課し、村民に高壓的の態度を示したりなどしようものなら、各團體は敢然として夫々槍をもつて立つといつた、物凄い態度を示して來る。それ故たとへ蔣、吳、馮の如き名將軍にしても、先づ以つてこの方面へ諒解を得ることに努め、手なづけておくといふ必要があるのである。

河南の住民は土地柄が奥地だけに、極めて純朴であるが、又流言蜚語に迷はされやすい性質も相當にある。日本人で、この地方に深入りするものは、古玩商人や又桐材の買出しに出かけて行く者などであつた。最近は鄭州に日本領事館が新設せられ、經濟方面に、政治に、軍事に、漸次連絡がとれるやうになつたが、しかし土民達の間では、いざ排日といふときになると、忽ちに次ぎのやうなことをいひ觸らすのである。と云ふのは、例へば「日本人が河南まで這入つて來て、桐材を買ひ集めるなどとは怪しからぬ。桐材は之を日本人が蒸し燒きにして、火藥を作り、これで以て民國人を射殺するの底意があるのである。然るを何をもつて、土民たちは考へなしに桐の耳材を、日本人の手に賣り飛ば

すやゝなことをするか。」

かやうな物凄い權幕で以て、桐畑の持主を脅かす。折角うまく之を手に入れてゐた日本人は、又鹽金局の役人からも相當手ひどくねぢ込まれたり、或は沒收されたりすることがあるといつた不祥事を頻々見てゐる。今日日本で見る胴丸の火鉢や、又下駄の臺などは、會津桐の出なくなつた爲め、最近殆んど河南桐で代用してゐるとかいふことである。排日の影響は、本當に意外な所に波及してゐるものである。

一方にかゝる不祥事を見るかと思ふと、日本人の醫者で田島太夫の如きは、地方民から絶對の尊信を得、殆んど仁術の神樣として見られてゐる者などもある。これはひとり鄭州ばかりではなく、片田舍は、甘肅蘭州の前田大人や、河南信陽の村上大人の如きたいしたものである。問題は對個人的の問題である。その人物、その心情さへ、長くその地にあつて民心にぴつたり合して來たものでありさへすればよいのである。その間のコツは、誠に易々たるものであると見られる。

河南より西安（長安）へ

河南は、洛陽の都から西の方、函谷關を越えて潼關から陝西に這入り、古の長安の都へと行く道中は、例の黄土質の藥研堀式になつた鑿道を行く。その鑿道はずつと打續きその深さは五間乃至十間にも達してゐる處がある。幾百千年に亙る河南のかうした街道は、雨の爲めといふよりか、人馬の往來のため、年一年と轍が深く切れ込み、次第々々に窪みを增したのである。それ故、人馬の歩く路面は河南平野の畑の表面から見ると、著しく下に降つてゐる。時折り斜徑を攀ぢ登り、ひろい天地に出て畑地を見なければ、一望千里のひろ〴〵した大陸風景は見る事が出來ないのである。

かやうに深く掘れてゐる道の左右壁面は、黄土質の地層がそのまゝ現はれてゐて、地質年代の古きを、大體學術的に物語つてゐると推定せられる。恐らく今日見る畑地の表面と、三千年前の殷代のそれとは、二十尺、又はそれ以上の差を推定することが出來る。殷墟の龜甲遺片なども、今にして之が掘り出されてなかつたとしたならば、今後尙更に深さ幾十尺の地下土中に埋もるわけである。といふのは、北支那朔北地方一帶から吹き卷くつて來るあの絶大な蒙古風が、ゴビの沙漠を中心地として、春に秋に、定期的に恐ろしい砂を大地に蒔き散らし、これが空中では、紅塵萬丈となり、落ちては地上に黄土質の土沙の皮を、一枚又一枚と積み重ねて行くのである。

地質學者の話に、あの南支、長江の江底海中に吐き出される泥の量は、年々一平方哩につき、八寸づつの厚みを重ね、それが爲め船の航路の底を淺くすること夥しいといはれてゐる。幾十萬年に亙る北支那の天地、殊に雨の少い河南の奧地の長安街道にあつて、その兩地壁にかうした黄土の壁を見る

ことは、たとひ目じるしになる何等かの埋藏品が見出されないとしても、多大の興味の唆らるゝものがある。況んや、西へ〳〵と進むに從ひその所どころに、四方八方から落合つた驛道の中心地點の形づくられてゐるのを見ることすらある。その時は、宛ら石炭の露天掘の坑を見る如く、非常に廣いものとなる。二千年の昔、秦の始皇帝が、方士を除外例として、數多の儒者を坑にしたといふあの歷史上の話に見えてゐるのも、かういつた地形の所で、どん〳〵學者のからだを落し込み、土から土を被せてしまつたものであらう。誠にわけのない話である。支那としては、全くそれ位のことはありさうな話である。この街道は一つに又溝道ともいはれてゐるが、その道の溝底式に出來てゐるが爲めである。

潼關を西に出れば、黃河の支流、渭水に出る。流れに沿うて五嶽の一、華山の巍峯や、古玉の產出で名高い藍田などを南に見つゝ、臨潼の遺蹟へと進む。驪山の下に當時楊貴妃が每日姿を見せてゐたといふ名代の溫泉場がある。これは今も女風呂として、貴妃塘の名で呼ばれ、それに對して男風呂の方を太子塘といつてゐる。大層よい評判を博してもゐるが、恐らくこは傳說を本としてゐるに過ぎぬであらう。更に西へと道を取つて進めば、唐の長安の都、卽ち今の西安府を始めとし、西の方咸陽、醴泉、岐山、鳳翔の諸縣があり、又諸葛孔明の名を聯想せしめるので懷かしい五丈原の古戰場や、南の方秦嶺を越ゆれば、漢中に這入る。そこから蜀の棧道にかゝる。劍閣の天險を過ぎて、こゝにいよいよ、蜀の都、成都へと達し蜀の天地になるといふ順序になる。この棧道は唐の昔し玄宗皇帝が、安祿山の亂に都落ちをされ、美しいあの楊貴妃と手に手をとつて難を避け、道中をしたといふところで、全く支那各地で見る芝居の場面そつくりの懷しい光景があたりにずらと見られるのである。

陝西省

西安（長安）

西安府は、古へ久しきに亙る都城で知られてゐることは云ふを待たぬが、園匪の亂に西太后が、光緒帝と共に蒙塵をされたといふことで、一層近來はよく知れ渡つてゐる。今の西安は、古都の六分の一もない山中の一都城となり果てゝゐるが日本の京都奈良の古都の典型を示してゐる。又その古代文學の片鱗を物語れるものとしては、郊外の灞橋の情趣が、楊柳の蔭いと濃やかに漾ひ、又金石を物語る有名な碑林は、考古研究者の特に目を樂しましむるものとして見られてゐる。

或は佛蹟を訪ねる士には、大雁塔、小雁塔があり、その他孔子廟、大聖殿の建築美を始め、實に枚

擧に遑のない程、周代以來の古代文化を語れるものがある。殊に灞橋は、今も尚東の方、函谷關方面さして旅立つ友を見送る時には、その橋まで別れを惜しみつゝ見送つて出て來て、こゝで思ひ出の爲めにと橋の袂の柳を一枝手折り、これを留別の情の盡きない所を示すしるしとしてゐるのである。

又西の方咸陽の都城は秦の始皇帝の造營された阿房宮のあつた處、今はその跡かたを知る由もない。然し流石に榮枯盛衰の歷史を有する舊都だけに西安と同じく史的並に文學的の由緒深いものがある。

鳳翔縣は又西安の碑林にも見る事の出來ない珍らしい古碑多く、翰墨家の特に留意せる處である。

甘肅省

甘肅省の都城

更に境を越えて甘肅省に這入るとせんか、蘭州の省城は元より、涼州、肅州の如き大都があり、何れも新疆省に通ずる交通の衝に當り、更に奥地の中央亞細亞一帶の物資は駱背によつて大規模にこゝに運搬せられてゐる。殊に蘭州の都には黃河三大鐵橋の一なる長鐵橋が架せられ上流唯一の呼び物となつてゐる。その邊り中央亞細亞方面との商取引の活潑なことは寧ろ意外とする位の處である。

甘肅から陝西一帶にかけては、回々教徒の住民が極めて多く、從つて羊毛毛皮を主とした商取引は殷盛を極めてゐる。

河南陝西の旅

河南陝西の旅にては、同地方の經濟關係が北支よりもむしろ武漢の天地に密接の聯絡を有する事に着眼すべきである。然し先づこれら史的古都巡りは、要するに文學歷史を味ふ旅と稱し得る。唐の詩人の吟じてゐる處を見ても、洛陽に、長安に、多くはその風物を吟じ、今日の旅人にも又無限の詩情を唆らるものがある。有名な李白の詩について之を見るも、洛陽長安には云ひ知れぬ名吟がある。

洛陽

誰が家の玉笛か暗に聲を飛ばす
散じて春風に入り洛城に滿つ
この夜曲中折柳を聞く
何人か故國の情を起さざらん

春夜洛城聞笛　李白

（誰家玉笛暗飛聲　散入春風滿洛城　此夜曲中聞折柳　何人不起故國情）

長安

長安一片の月
萬戸衣をうつの聲
秋風吹いて盡きず
すべてこれ玉關の情
何れの日か胡虜を平げて
良人遠征をやめん

子夜吳歌　李白

（長安一片月　萬戸擣衣聲　秋風吹不盡　總是玉關情　何日平胡虜　良人罷遠征）

この二篇は、李白が自ら畫中の人となつて、洛陽長安の詩的風物を、わづかに數字のうちに含め、その詩興の千古を貫く所を現はしたるもの、讀むものをして實際に洛陽の玉笛、長安一輪の名月を仰ぎ見るの感を深からしむるものがある。

南支那

江蘇省・浙江省

上海

上海は東亞細亞に於ける大玄關である。實に地球を取卷く大交通路の衝に當り、現在又將來に於ける國際的一大都市として、恐らく日本の何れの港よりも、又遠く南洋印度のどの都市よりも、國際經濟の上に重きをなしてゐる處である。今や歐米の紐育か、それとも亞細亞の上海かと併稱せられるまでに至つた。最近更に又大上海の都市計畫が企てられ、今後益〻その計畫實現の偉大なる力が目睫の間に迫りつゝあるのである。從來逃べ來つた滿洲や、北支那の各地方はもとより、南支那の全部に亙つて見るも、上海ぐらゐ意味の深い又底力の溢れてゐる活潑な都市は外に見出されない。思ふにこの上海が、世界的の一流經濟都市として鳴り渡つてゐる譯は、次ぎの如き二大重要性を有してゐること

にあると斷ぜらるゝ。この二點は決して忘れてはならぬ大事な目標となるものである。卽ち、

一、その位置が前にも云ふ如く、世界交通路の大通りに直面してゐること。

二、長江の奥地三千哩の流域と、二億萬の住民とを控へ、それだけのゆたかなる内容をこゝでちやんと締めくゝつてゐることこれである。

云ふまでもなく、世界今日の經濟戰は、東洋に於ては上海を第一舞臺となし、支那四百餘州だけの上から見ても、國際都市として他に並びなき重要の價値を有してゐる。それ故日本の大阪や東京、或は大連、香港、廣東などを持つて來ても、何れも上に述べた二つの點から云つて、どうしても上海にはかなひつこない。それ故この大經濟都市としての生きた典型が、こゝに見出される譯である。

支那の旅は、これから出かけようとするものは、先づ以てこの重要都市を視察することに在る。之を視察事項中の一大眼目としなければ嘘である。日本の如き、大平洋上の一隅に存し、その世界交通路に觸れてゐるとはいへ、その國土の形は細長いだけのことで、奥行きはさつぱりない。大上海が物資の包容力と消化力の偉大なものを有つてゐると云ふは、何んといつても奥地三千里の地域のあることゝ、二億萬の住民を包容してゐることゝ、この二つの爲めである。從つてこれ程の大上海を見んとする限は、普通の見物氣分なんかで、唯そのうは面の文明の流れとか、五感に映じたところの普通の

知識とかだけでは、到底その裏面に流れてゐる太い黒線は摑み得られぬ。先づそれは出來ないことであるとされてゐる。見れば見るほど、味へば味ふほど、限りないその大都市としての底力と、それからにじみ出て來る不可解なおほ味とが、感受せられて來るのである。それ故上海ぐらゐ、その内容の複雜で、奥の深い都市はないと云へる。恐らくその點は、ニューヨーク、ロンドンをもつてしても、これに遠く及ばないことだらう。所謂グロの方面、又エロの方面、その他經濟の渦巻き、人種上の闘爭、支那民族の腕の冴え振り、又その列國人に對するあやつり方、からくりの巧妙なことなど、事々物々、晝に夜に何れも皆こまやかく又物凄く、深刻に現はれて來てゐる。

又さうかと思ふと、今度は、超越的態度で、全然時の流れや、世界の經濟と云ふものを馬鹿にした如き氣樂な支那式の出で方をして、どこまでも呑ん氣百パーセントの情緒をも漂はせることがある。

○

日本人で支那の旅に出かけたものは、上海の如き不可解な世界的の大都市に上陸をするといふと、その瞬間にいひ知れぬ電氣のやうなものを感じ、やゝもすれば豫定のプログラムなどは、茫然として驛から失はれてしまふ傾きがある。しかし既にこれは入港の前幾時間に亙つて、豫備的に海上遙か百哩の手前から支那流に敎育されつゝ來てゐる譯である。といふのは、そのあたり一帶、日本の海とは

選び、見渡す限り、太洋上の波は悉くこれ淡褐色の味噌汁同様の趣きを呈し、これが三千里の奥地から吐き出された長江黄土質の泥の仕事であるといふ事に、氣がつかぬものはあるまい。更にその陸地へ向け次第次第と船が近づいて來た時の光景にしても、何んらそこに要領が得られず、雲か霞かのうちに、唯點々として楊樹の影を幽かに認めるのみである。船は揚子江の入口に這入つたといつても、いつまでも太平洋上を行く眺めと一向變りはない。どの邊から果たして流れに乘つかつたのか、誰れしも明言の出來るものがゐない。百哩の沖合から既に流れを棹してゐるといつても、別に之が否定も出來ないのである。

しかし江口遙か崇明島（ツオンミンタオ）を右にして船は進み、どうやら本流から支流の黄浦江（ワンプーコン）に這入つて行く地點で、江上に石垣の長く突き出された吳淞砲臺灣（ウーソンパオタイワン）の石塘のそばを通過する時になり、そこで始めて我が身は大陸に來たのだと云ふことを直感するに至るのである。

黄浦（ワンプ）の兩岸綠野千里、水牛の水汀に戲れ、紅の三角旗高く飜る支那ジヤンクの帆柱を見る。さうなると、こゝに始めて支那風物の第一頁を體驗することになる。

青白のエンプレス型や、又プレシデント型の巨船の去來、そと車の舊式な支那輪船などの騒がしい音を立てつゝ出港する姿が見える。長い袖を着て、變な着ざ方をしてゐる支那の船頭も見える。最近昭和七年一月二日以來、上海事變でひどく砲撃せられた吳淞のあたりの戰蹟も指さされる。かういつた光景を見ながら、吳淞から、黄浦（ワンプ）を這入つて行く。すると、そろ〳〵旅客は、この奥に大上海の港が横たはつてゐるといふ事の豫感が強められる。かゝる第一印象は、上海の旅に出かけたものの誰れしも同樣に體驗する所である。

不可解な黄浦の江水、和風綠野を吹くの眺めなど右顧左眄するうちに、遙か彼方の空に棚引く黒煙の渦巻きは、たしか上海電燈會社の通りであることが判る。しかしそのあたりはまだ〳〵上海の港から、餘程手前の所である。右に水源地、左に浦東（プートン）の田舍景色、美孚（スタンダード石油）のタンクのあるところなど送迎にいとまがない。やがて公大（鐘紡）の工場のところから、滿鐵の埠頭、ＮＹＫ（日本郵船會社）、ＯＳＫ（大阪商船會社）などの碼頭を始め、招商局の碼頭などが右手にづらりと續いて見え出して來る。ブリューフアンネル、グラーラインなどの巨船も多く、江心のブイ（浮標）や浦東サイドに着いてゐるところを見る。

○

大上海の船着場は、その奥深き無限の背景を有してゐるところだけに、大船、小船、民船、划子（ホワツ）、渡船、漁船、荷船を始め、各國の兵艦など、殆んど秋の落葉を浮かせた如く、數多相接して江上をう

づめてゐる。從つて汽笛の聲、煙突から吐く煙、碼頭に働く苦力達の叫び、出船入船の混雜さなど、實に流石は大上海の玄關口であるといふ印象がかなり強く來るのである。

上海の船着きは碼頭と云ひ、その日本人に一等よく知られてゐるものは、威寨碼頭、（滙山碼頭のこと）虹口碼頭（一名三菱公司碼頭）、海關碼頭及び浦東サイドなどである。

上海の旅で、上陸前後のことについては、既に支那の船着場の處で殆んど述べ盡しておいたから、こゝには省き、大體旅行者が上海滯在中の心得として必要なことについてのみ、こゝに思ひついたまま大事なことから述べることゝする。

〇

先づ日本の領事館であるが、これはガーデンブリッジに程近き江岸に日の丸の國旗を揚げ、米國領事館、舊露西亞領事館あたりと相接して建ち並んでゐる。領事への面會とか、郵便や電報の留め置き、その他奥地への旅行に必要な護照下附の手續きをしてもらふことなどで、これに訪ねて行く者が多い。館内には日本の警察も設けられ、その方面の事務もとつてゐる。

日本人倶樂部は、虹口の文路にあつて、上海の旅には一等懐かしいところである。事變のある度にこの樓上は軍部の本部となる。倶樂部の内部には、在留民二萬五千人の消息や、又玉突、圍碁、大弓などの娯樂、それから宴會、送迎、講演、日本故國の出來事に關する電報通信の掲示などもあり、凡てに亙つてこまかく在留日本人の便宜が計られてゐる。上海觀光の客なども、多くはこゝで送迎の催しが行はれ、縣人會だの、同業者の聯合會だの、慰問打合會だの、海軍陸戰隊の會合だの、何事によらず、こゝで便利に又手輕く催ほされてゐる。近來倶樂部の前に集る日本人の自動車もその數が殖えたので、空地の狹隘を告げるに至つた。

しかし在留日本人の個人で、自家用のものを持つてゐる者は誠に少い。昨今は恐らく一人もゐないと云つてよい位である。英米佛の個人に比して、その生活内容に著しい距離のあることは、聞かされて見ると、日本人として感慨無量なるものがあり、實際に於て、この世界的の大上海に、日本人としての活躍競爭がまだ〳〵かなり劣つてゐるものであることが、些々たるこの一事によつてもよく判るのである。

會社や銀行まかなひの自動車に、馴れ切つてゐる大班の家庭では、いざその日本內地に引揚げた時などと來たら、如何にもみじめに感ぜられ、子供さんがたの通學の送り迎へも、最早や乘物は用ひ得られない悲哀を見る。さう云つた實情であるから、心ある者はその間の生活のがた落ちを歎じてゐる。

〇

上海に着いてから、先づ始めに誰れしも大事なことはその身の置き所である。旅館か、ホテルか、社宅か、それとも個人の住宅か、何れなりへと之をきめなければならぬ。

たまには觀光團の多數の場合は、色々の都合で、全部を船にそのまゝ泊らせることもあるが、これは例外である。しかし上海の事情に全く通ぜず、たよりない氣持の者は、船の方で船中に寢ることを承諾してさへくれるなれば、この位安心な事はない。又海員だとか、學生だとか、云ふ特殊の連中には、一種の倶樂部やうの組織が出來てゐて、いきなりそこへ身を置くことが出來る。日清汽船には日清汽船の乘組專用の倶樂部が、虹口（ホンキウ）に出來てゐる如きその一例である。

又もし上海を振り出しに、奥地に旅をしようといふ者は、特に上海で支那生活の實際に觸れて見ておきたいといふ所から、わざと支那宿に行李を置く者もある。これは全くよい心掛けである。それには上海語の話が幾分出來ることや、支那の錢の勘定がよく解つてゐる者でなければ難しいのである。

歐米の旅に馴れてゐる旅客は、日本宿を避けて、いきなりホテルへ向ふ。しかし全體から云つて、日本の客と云へば普通日本旅館に厄介になるのがおきまりである。それに外出でもすると、かなり氣をつかひ、體を勞するので、せめて寢る時だけでも疊の上で、樂々と足を伸ばしたいといふ氣持のするところから日本宿を選び、女中番頭に心置きなく、日本にゐる心持ちで以て滯在するといふものもあるのも無理のない話である。數ある上海の宿で、普通誰れにもよく知られてゐるのは、先づ次の如きものであらう。

一、日本旅館——豐陽館、萬歲館、東和洋行、勝田館、日の出館、扶桑館、メンスハウス、森館、（以下略之）

二、支那旅社——大中華、一品香（イピンシヤン）、大東旅館、東亞旅社、惠中、江西大旅社、中央旅社、虹口大旅社などである。尙上海大旅館、栄館、厨房の有名なもので、花柳界方面と聯絡のあるものを、序でながらこゝに附記して置く。各名稱の下に加へられたる數字は電話番號を示したものである。

大華	三四二三一	江南	六一七五五	僻祿	六〇六六六
一品香	一〇〇二〇	香港	六〇五一〇	大西洋	一五七〇七
新惠中	六六八六八	香賓	一七六八三	全家福	一四〇九八
東亞	六〇七七〇	皇宮	一〇〇二〇	新利查	一四六九三
亞洲	一六五五一	遠東	六六八七一	寶利	一三二三六
神洲	六一八〇一	安東	六八二三三	亨生	一五七二八

一家春	一三一八一	惠然軒	中九七八一	趙安記	中五六六七
中央	一四一八六	馬蘭記	北三九九一	楊桂記	西三七五三
醉如春	一一七一六	馬永記	北一四一一	樓金記	中八一〇五
福興園	一七二一二	都益處	中四八一五	新牛齋	一三四六五
聚豐園	中八六六一	大加利	中九六八〇	粵商	北二四七七

三、洋式ホテル――パレスホテル、アストラハウス、カサイホテル、（以下略之）、マゼスティツクホテルは數年前廢業をした。

ホテルは何れも、一得一失で、その旅客の氣持ち、又旅行の目的次第では、必ずしもその何れのホテルかに定めなくてはならぬと云ふ必要はない。訪問者の都合、人に對する見てくれ、或は宴會などを催ほする時の都合、又は懷の都合など、種々の都合からして宿を轉々してまはつて見るのも面白いことである。

支那宿の中には、支那西洋折衷の中西旅館といふものが多く、その方が日本人にも便利であり、又日本宿や、ホテルに較べて、著しく宿泊料も安い。

支那宿の都合のいゝ點は、客室の泊り賃が、一室幾らと、室本位に定められてゐることである。從つて數名の一行が、もし一宿を約束する時には、大層經濟になるわけである。たとへ風呂つきの高級なものであるにしても、一人あて一二弗を出ないで濟むこともある。

旅館の問題くらゐ滯在中の氣分を支配するものはない。たとへその室は薄暗くて設備も感心せず、形式の上に不自由なことが色々とあつても、そのボーイの心持ち待遇が、至れり盡せりであるといふと、非常に愉快な旅が出來る。その意味から、客はよく考へてこれを定め、決してむづかしくせまく囚はれてはならぬ。

○

支那宿を不安がる人はかなりあるにはあるが、上海の支那宿はその意味からいつて、泊り心地がよく、趣味津々たるものがある。若し支那觀察の能率を少しでも多く擧げようとするには、支那宿に逗留することによつて、その日數の短い割合に、多大の收獲が得らるべく、又親しく變つたことを自分で體驗することも出來るのである。

大中華の如き支那宿は、その客種もよろしく、競馬場前で見晴らしもよく、又最も新しい設備をなし、衞生の點は特に日本人の氣持に合してゐる。

一品香（イピンシャン）はその近所にあつて、出這入りはよいが構へが古い。しかしそれだけに支那式の匂ひが高い。

大東と東亞は、夫々永安公司、先施公司と云へる百貨店の樓上又はそのとなりにあつて、便利であり、上海情緒の研究でもしたいものには、殊に都合がよい。

惠中（ホイチョン）は、三馬路の橫町にあつて、舊式ではあるが位置が支那氣分の濃厚な所にありその構への舊式な所が、却つて懷しみの種となる。

江西、中央は共に佛租界にあり、大規模の中西旅館である。

虹口大旅社は北四川路の崑山路から突當つた所に聳え、規模は大きく客室も多く、廣東料理の菜館を兼業してゐる。

こゝに述べた支那宿は、何れも一流どころで衞生もよく行屆いてゐる。たゞその保證の限りでないのは例の南京蟲であるが、これもさう無暗みには出て來ない。

支那宿で誰れしも困ることは、買物土産の荷物を取纏める時のことである。その買物の數多くなつたときは隨分持てあます。從つて宿の方で、誰れか何んとか船に積込むまでの世話をしてくれて、之を纏めてくれるものがなければならぬ。その時支那人任せにしておくだけではどうも不安であり又間違ひの生じ安い心配もある。それ故荷造りは、特に虹口の日本人の荷造屋に托し、通關のことまで忘れないやうに手配をしてもらふべきである。

又支那宿は、電話連絡がとんちんかんになり勝ちで、餘程事情に馴れ、言葉もうまく行くものでないと困ることが多い。上海はたとひ日本旅館にしても、旅行季節にどや〳〵と込んで來る場合には全く戰爭狀態を呈する。そこへ行くとホテルはきちんとしてゐてよい。又ゆとりもある。こゝには自分個人としては、支那宿の方を力說するわけであるが、しかしそこに一得一失のあることを含んでゐて貰ひたいのである。

○

上海は遊び場所が無限にある。第一、春秋二季に、一等二十四萬弗と云ふ巨額のかねの贏ち得られる競馬がある。こは有名な話である。場所は大馬路の突當たり、靜安寺路の始まる所で、つまり上海市の中央に位置を占めた廣大な廣場である。綠芝のいつも美しく刈り入れられてゐるところで、眺めは誠によろしい。棧敷から、事務所から、コートから、すべて大規模のものが設けられ、時折り各國の陸戰隊がこゝを利用して分列式を行つたりすることもあるが、平素はゴルフやテニスのゲームが催うされてゐる。競馬場の周圍には、ホテル、商店、住宅などの堂々たるものが建ち並び輪奐の美を示

してゐる。

又上海市中には、犬の競走にかねを賭けて樂しむ競犬場があり、殊に近來は上海の呼びものの一つとなり、大變な人氣である。佛蘭西タウンの逸園と云ふを始めとし、明園、申園など、何れもかなり內外人の遊士の興味を唆つてゐるものがある。

しかしそのうちでも、場末の方のは景氣が續かず、今は逸園のみがひとり人氣を集め、毎夜少なくとも數萬の客を吸收してゐる。ところが支那政府當局の方では、之を禁止せんとする空氣が濃厚で、その爲め兎角の問題を起し勝ちである。

けれどもその競犬を飼ひ慣らしてゐる所有者たちの熱心振りに、又競犬迷（競犬に淫する人を云ふ）たちの手合の氣狂ひ振りと云つたら、實に目醒ましいものがある。恐らく上海に集り在留する四十八ケ國の各人種にして、一度や二度この園內棧敷の一角に姿を見せないものはあるまいと云はれてゐる。いつもその夜の催ほしであるだけに、殊に夏の夕は滿員以上の滿員と云つた盛況を呈してゐる。尙その附近に見るハイプライの毬投げ競技も、これまた相當モダン連の足を惹きつけてはゐるが、犬の競走ほど世人を惹きつける力を有してはゐないやうである。

○

上海の公園では、黃浦の江岸に細長くパブリツク公園と云ふのを始めとし、蘇州公園から、租界の各地各所には、佛蘭西公園だの、ペビーガーデンだの、新公園（虹口公園）だのと云ふのがあり、又廣東公園と稱せらるゝものがある。租界外遠く西の方の郊外に、ゼスフイールドの廣大な公園が設けられてゐる。

近來は何れの公園も、多少の銅幣を入場料としてとつて、苦力や乞食の自由勝手に這入るのを防止する手段としてゐる。

ガルデンブリツヂの袂にあるパブリツク公園では、特にその有名な西洋音樂が、毎週土曜日に催ほされることになつてゐるので、かなりその時分は賑つて來る。

尙城內に這入つて見ると、純支那式の半淞園と云ふがあり、南畫風の景趣を見せてゐる。又支那街には、公園に準ずる大衆向きの湖心亭と云ふものがある。ペビーガーデンは、虹口寬山路、乍浦路に接して設けられ、日本人の兒童や、西洋人支那人などの子供たちに、阿媽がつきそつてはしやぎ戲れてゐるのが見られる。

○

上海租界の目抜きとしては、南京路卽ち大馬路の通りからこれと平行してゐる九江路（二馬路）、漢

口路（三馬路）、福州路（四馬路）、廣東路（五馬路）並びに北京路、仁記路、博物院路など云ふあたりであらう。尚大馬路に直角に交はつてゐる通りでは、四州路、河南路、江西路、寧波路などと云ふあたりを數へるべく、又河を渡つて虹口側に來ては、北四川路の通りと、これに交叉せる百老滙路（ブロードウエイ）西華土路（シワトロ）などである。

尚上海市中に、日本街の觀を見せてゐる吳淞路や、密勒路、文路あたりのマーケット附近は、かなりの賑はひを呈し、人馬乘物の往復が頻繁である。

○

日本人の上海の旅に出かけた客が、上海在留の友人どもから招かれ、打寛ろいだ會合でも催すと云ふ時は、多く柔か味のある日本式の風流な場所が選定せられる。それには六三園（昭和七年二月、上海事件のとき燒失す）、月廼家、新月と云つたあたりに先づ足が向く。何れも庭の眺めがあり、綠深く薄生ひ、夏の納涼、秋の月見には持つて來いのところ。とりわけ、浴後浴衣らくらくと、團團扇を手にしたときの情緒と來たら、故國にあるの思ひを唆るものがある。滿洲に見る月、北平に見る月、漢口に見る月、蘇州の月、西湖の月と、夫々支那各地で見る月は色々にあるが、日本人の氣持ちに合ふ月を見る庭は、上海のこれらの日本式の庭で見るのが一番よいやうな感じがする。

○

やはらかい方面の話の序に、上海演藝方面の手近かい處を述べる。上海では北四川路の日本小學校のそばに、近來日本人經營の日本式演藝場が設けられた。日本の本場から見ると、やゝ流行後れの感はあるが、盛んに滊化粧のねえさん達が鳴物入りで、その檜舞臺に晴れの姿を現はしてゐる。二上り三下りの出ることもあれば、八木節、新內、安來節、カツポレ、何んでも御座れで、又新しいジヤズのモダン振りを發揮した場面も見られる。ともかく、四時桃色の感じのしてゐる所で、民衆在留民達は、長崎まで渡る暇を惜み、こゝでその片鱗を窺ひ得て、第一戰に立てる活動の疲れを、夜な夜な慰めてゐる。時には又、六段、越後獅子の琴に合せた尺八に、越後追分、松前追分の涼しい節廻しから筑前琵琶、薩摩琵琶、何んでも日本から先生の渡つて來られたのを聞けば、必ず願つて一席を演じて貰ふ、と云ふきまりである。同じやうに書家や畫家が見えたときも、その作品を倶樂部に陳列し、在留民の目や心を喜ばしてゐる。

しかし近來日本から來る先生は、やゝ押賣り的の氣持も見えるので、支店長連も重役社長の紹介狀に對して、義理立てに一點くらゐは賣約濟の申込みもするが、內々氣持に添はないなどといつてこぼしてゐる。しかしこれも、社會奉仕の一つで、一晩遊びに出かけたと思へば諦めもつくであらう。

芝居の方面は、大馬路永安公司の後ろあたりにかたまつてゐて、その邊りは昼夜不夜城の觀を呈し客を引きつけてゐる。

ダンスホールは、虹口方面では、サボイホテルを始め、いろ〳〵の所に出來、偉大なる國際都市だけに、階級の如何を問はず、夜半遲くまで大變な賑はひで、殊に競馬場の附近邊りは、かなり高級なホテルも新設せられてゐる。又これを當て込んで來た日本九州あたりからの美しい渡り鳥も、相當に多いらしい。日本から船の着く度にダンサー出稼ぎの一群の姿を見せるのも少くなく、昭和の娘子軍だけあつて、その樣子も大屑モダン式で、特に米人などからは評判がよく、ちやほやされてゐる。しかしこれも昭和七年の上海事件の爲め、オデオン座の燒失と共にその光りを失つた觀がある。

○

神佛の方面では、六三園境内に滬上神社（滬とは上海の雅名）と云ふが建立せられ、緣結びの神樣として、殊に參詣者が多い。佛寺では、本願寺や本國寺など、夫々在留民の佛教歸依に力を致し、殊にその佛教青年會の設立を見て以來、青年銀行會社員達を、眞面目な信仰方面に導き、講演會、遠足、小旅行などの催しも繁々とある。日本内地とは又違つた佛教活動の光景が窺はれる。しかし未だその支那街城南方向に過出して、日支双方の精神的和合の事業には、殆んど手が染められてゐず、今後一段の努力を願はざるを得ない次第である。

西洋人方面の基督教は、教會堂、天主堂の屋根高く、十字架の聳えてゐるものがあり、ベルの鳴る音も賑やかで、これ亦相應に見るべきものがあるが、しかしこゝにはこれにあまり觸れないでおく。

支那の方では、虹口、武昌路から、文路に抜けてゐる三元宮の寺や、城内の城隍廟、娘々廟などの大衆俗人向きの寺々が、ひどく市民の心を惹きつけてゐる。何れも線香の煙は、朝夕廟内に渦巻いてゐる。大馬路にある寺廟、又靜安寺路の電車の終點、折曲りの所にある靜安寺など云ふ寺も、これ亦參詣者がいつも多い。支那の寺廟を上海で見んとするには、多くはこれらを訪ねる。

尚小沙渡路や、城内の老北門あたりには、回々教徒の信仰による清眞寺が設けられ、達教長（アホン）の監督のもとに、マホメツト教の說教や、伊斯蘭（イスラム）語學校の經營やらが出來てゐる。特にその儀式による大洗（ダーシン）小洗（シヽ）の奇習の如きは見學の價値がある。

先年これに游んだ時は、本願寺の關係者、耶蘇教の連中などを帶同し、これを訪ねたのであつた。その時は日本人として、自分たちが始めて訪れ來たつたものであると云ふので、附近の民衆ども、驚きの目で眺め寄り、日本人と回教徒が何事をか畫策するのではないかなどと、噂されたくらゐであつた。が元來珍らしい宗教儀式のある樣子の變つた寺であるから、上海見學の變り種を得るところとした。

て見て置いた方がよからう。

○

上海の旅で、學校方面を注意すれば、東部、中部、西部の三ヶ所に設けられてゐる小學校であらう。その他女學校があり、今又商業中學創設の問題も持ち上つてゐる。

由來支那各所の日本人小學校は、海外發展奬勵の意味から、外務省からも多少の補助が出、在留民の負擔を輕くさせるやう考へられてゐる。

日本人の兒童は、支那で義務教育を受けるには、多大の不便があり、狹い意味に於て刺戟が少く、先生の方にも、名教師を得にくいといふ點がある。それ故父兄の方でも、出來ることなら日本へ歸して、教育を受けさせたいと考へる傾きがある。この心配は無理のない話である。けれ共幼少の頃、既に支那人や西洋人の實際生活をそのまゝ味はしめ、かうした國際都市で實地に世界學を學ばしむると云ふことは大きい意味に於て又と得がたい大事な刺戟になる譯である。たとへその子弟の通へる學校の教室内で得られる知識は遲れてゐたとしても、その見聞、印象、並びにその國際的競爭等の實際の場面の上に、非常な利益が得られるわけである。

支那人、印度人、馬來人から、歐米各國の紳士淑女まで、朝夕これを見てゐる譯であるから、將來日本にとつて有望な人物は、かういつた大上海の小學校で教育を受けた者の中から出るべきである。然るを父兄が、小さい試驗の成績くらゐの事にのみ目がくれて、折角この上海で教養を積ませてゐるといふ有難い機會を掴まへてゐながら、それを人生の悲哀でも畢めてゐるかの如く考へてゐると云ふのは、頓でもない考へ違ひである。寧ろ子弟の教育時代を、大上海といふ絶大の渦卷の中で過ごさせることを、心から念願としなければならぬ。親の考へ違ひから、子供までもが小さくて氣のきいた小才子めいたものになつてしまふ。箱根細工式の細かいお粗末なものばかり多量製産をしてみた所で日本のためには決してならない。大上海の根から芽生えぬけて來た國際少年であつてこそ、始めて母國をリードし得る大人才に成り得る譯であると思ふ。この意味から、むしろ上海の小學校を目當てに日本内地から續々入學又は轉學させるやうなものがあつてほしいと思ふ。

行詰れる日本の專門學校や大學で、實際に役に立たぬことのみを覺えさせ、卒業の後世間に出して見たなら、腹の出來てゐないこと夥しく、又一向に垢抜けもしてゐない。將來の日本は寧ろ荒削りのまゝでもよいから、大陸的教養のある腹の出來た人物を求めてゐるのである。上海の小學校に教鞭をとつてゐらるゝ先生方の責任も、亦重且つ大なりといふべきである。實際に又これ位の意氣込みをもつて教壇に立ち、民團の父兄方を大いに警しめ、十分に又鞭撻を加へても貰ひたいものである。殊に

又女學校に於ては、將來大陸生活に根を張れる良妻賢母を出す學びの庭のことでもあるから、尚一層この意味を強調し、日本内地の女學校よりも、當然遙かに高くとまつてゐてもらひたい。長れ多いことながら、恐らく雲深き國母陛下におかせられても、國力の發展に伴ふこの方面のことについては、一方ならぬ大御心を向けさせ給ひ、御軫念遊ばせらるゝことだらうと拜察し奉る次第である。

所が上海の某校長に、彼の地で親しく自分が會つて見ると、その實際の事情はこれとは丸きり反對で、『上海と云ふところは、帝國の陸戰隊が國旗を翻してゐてさへ、この通りおち〳〵街も歩かれない位である。若しや日本の警備が手薄にでもなつたとしたならば、校門を一歩も出られたわけでない。』などと實によわ音を吐き、悲哀の聲を洩してゐる。その肚に修養のないこと夥しく、大御心に對しても慙死すべきものではないかと自分は考へる次第である。

次ぎに有名な東亞同文書院のことであるが、これは上海郊外徐家滙（ジカヅエイ）にあること云ふまでもなく、佛蘭西の天主教、天文臺などと相並び、上海の旅には忘れてはならぬ見學の一つの場所と見られてゐる。元來これは、三十餘年前、荒尾誠大人が、日清貿易研究所として上海に創立したものに始まつてゐるので、その研究所からは、今日高木陸郎氏の如き一と廉の支那通も出てゐるが、その後これが形を變へ、東亞同文書院となり、幾千の卒業生を出してゐる。そして天津、漢口の同文書院が、支那青年を出してゐるのに對して、上海では日本人の畢業生を出してゐる。

今日支那各地に、又東京、大阪、大連の各地方に、その畢業生はそれぞれ活躍をしてゐる。該書院では、卒業前に學生を幾班にも分ち、四川入り、廣東入り、河南入り、滿洲入りと、夫々行を定めて實地の内地探檢をさせ、各省各地に亘る經濟、物資、交通、風俗、民情、趣味等について、見學を畢にせしめ、これを報告書に綴り、そのプリントは天下の好評を博してゐる。恐らく日本人青年の支那内地の實地踏査で、この書院の壯擧ぐらゐ觀察調査の網を細かく張つてゐるところはあるまい。その報告には、十二分の貴重なものが含まれてゐる。

近來支那政府では、日本青年の經濟侵略を名として、これを阻止せんとする傾きが見える。よろしく報告の印刷物を、南京政府當路者や、民國青年あたりにも配つて、更に日支共同の調査聯盟をつくる位の態度に出て見たらよくはないかと考へる。少くも私する如きけちな了見でゐるの必要はない。岸上博士の成都客死の如き悲哀の裏面を見ない足許の明るいうちに、大きく出るべきである。

書院の學生自身もその心して大上海に於ける勉學を、いやが上にも有効ならしむるやう心掛くべきではないか。所がいづくんぞ知らん、入學匆々郊外の淋しさにホームシックを起し、歸心矢の如く、塀を乘り越え、私かに學校を拔け出でんとする薄志弱行の徒さへもあるやに洩れ聞く。書院の顔よご

しではないか。

○

それから上海の旅に懐かしいものは、日本から往復する船便のあることである。長崎丸上海丸を始めとして、幾多の日本船の國旗を飜して入港して來るものがある。その時の勇しさ、その送迎には、在留民どもは取る物を取敢へず、碼頭へと駈けつける。その點に於ての郵船會社の船、又大連汽船の奉天丸、大連丸、その他たまに來る大阪商船の船、又日夕出入する日清汽船の輪船など、何れも皆懐かしの種である。

總體に日本の船會社は、日本に、大連に、又南北各地の港々に、頻々客を運んでくれるので、他の會社以上多大の關心をもつてゐる。近來支那稅關が、色々の理由で送迎の人々の出入を阻止せんとする傾きのあるに拘らず、船會社側では情を盡してなるべく心持を滿足させようと努めてくれてゐる。又荷物の方も何かと便利をはかつてくれてゐる。殊に奥地に深く這入る日清汽船の輪船は、日本人の内地旅行には、唯一の有難い汽船として見られてゐる。又支那側では、時局排日の際は、日清公司にひどい痛手を蒙らしめてゐる癖に、いざ亡命の身となると、掌の平を返す如く言葉を柔らげ、日本の船に身を托さんとするのが普通である。その意味から名流どもは、外國船であるがために、却つて安心をして利用してゐる譯でもある。

○

尚船便の話の序に、上海から蘇州、杭州、寧波、その他通州、湖州邊りの近い所へ遊歷する時分には、幾らでも簡便な支那輪船のある事を注意して置く。

これは蘇州河の白太橋（パイターチャオ）の碼頭か、或は城内十六舖（セーロプ）の碼頭あたりから、幾らでも便がある。旅馴れて來ると、日本からの船で上海へ入港するなり、その日にすぐ他船に乘り替へ、氣樂に支那客の鼻歌や胡弓の音など聽きつゝ、楊柳の影やさしき運河を行くことが出來るのである。火車で旅立ちするよりか、樂であり、費用もかゝらず、殊に家族をつれたり、荷物を持つたりした時などは、之に限る。上海につゞく運河は、かやうな支那船を利用してこそ、上海の背景をなせる大きい水村の柔か味も理解せられるわけである。あの騒がしい上海と趣きを全然異にした郊外の眺めと上海市中とを較べて見てこそ、始めて上海の實相も解るのである。

○

又支那の旅に特に目をひくものは、銀行方面である。正金、三井、三菱、住友から、臺灣、朝鮮の各一流銀行の支店が、バンドつゞきの銀行地域に固まつてゐる。

支那の旅は身に大金をつけてゐる譯に行かないので、多くは大抵かねをそのまゝ信用狀となし、夫夫日本の銀行と取引關係のあるあたりの諸銀行へ足を運び、その日の相場で、支那貨幣に換算してもらつて受取る。又上海を引揚げる時、若し旅費の餘りが相當あつた場合などには、夫々日本金に換算して貰つて來る。

兎角どこでも遊歷するときは、金は思はず減る一方であるから、歸りの船の切符などは、懷中の溫いうちにこしらへておくに限る。ぎり〳〵になつてからでは、困ることが多い。

尙銀行には、支那に有名な馬蹄銀の現物を、大小各種色々と持合せてゐるから、見たことのないものは一應見るなり、求めるなりして來るのも面白い。

兩替の率は、大銀行を利用するよりか、市中の支那人の兩替店で替へた方が、確かに割りがよい。唯僞銀があつたり、店の出入に氣を配らなければならなかつたりすることは、前にも述べて置いた通りである。

尙支那の銀行として上海で大きいのは、中國銀行、交通銀行、中南銀行、四明銀行（寧波人の銀行）のほか、南京政府になつてから出來た中央銀行などもあり、夫々兌換券を出してゐる。其の他餘り信用の出來ない紙幣を發行してゐる銀行が、あちこちにざらにある。日本と違ひ、一つの買物の釣錢にも、餘りに色々の札を出されるので、何んだか皆僞札のやうな感じがして、氣持の惡いことが多い。殊に札の面にべた〳〵樂書がしてあつたり、破れてゐるのがあつたり、だらしのないこと夥しい。しかしこれが上海の紙幣の實狀であつて、銀貨の如くに單調ではない。そこに大上海の閃きが物語られてゐるものだとして、これに顏をしかめず、興味を持つて取扱ふことが必要である。次第に馴れて來れば、支那人流儀の札の束の持ち方や、又數へ方も出來るやうになつて、仕舞には一見してその僞札の見別けも出來るやうになる。一ばし僞がねの鑑定が出來るやうになれば、最早老上海（長年に亙つて上海に在留する日本人の呼び方で、古きは明治十年頃から五十有餘年に亙り居る者もあり、最近老上海會といへる連中の得意滿面の雅會も出來てゐる）の名を恥かしめないのである。

序でに金のことは博士以上の老上海になつてゐても、それでゐてもまだ一度も蘇州、杭州をすら行つて見たことがないと、之を得意氣に語る人すらもある。實に尻の重いあきれた話ではないか。

○

上海の旅に見る日本人の海外生活は、虹口方面の小商人や、銀行會社の社員達だけであると思つたら、大變な間違ひである。眞に上海に打込んだ日本人の仕事といへば、郊外の各地に煙突高く聳やかしてゐる紡績事業、支那語の所謂絲廠事業なるものこれである。曰く內外綿、曰く大日本紡、曰く鐘

紡、曰く日華紡などと、枚擧に遑のないくらゐ紡績會社が澤山基礎を固めてゐる。夫々幾萬の支那工人を使ひ、その資金も幾億萬金に達してゐる。

江南地方の支那の中流以下の家庭では、多くは竦つてこれが女工となつてゐる。その辨當を入れた籃をさげ、毎日甲斐々々しい支那服姿で、田舍道を一輪車に乘つたり歩いたりして絡繹として通つてゐるのを見るのは可愛い。又構内の宿舍から日勤してゐる女工たちも、數知れぬ程ある。かくの如くして、この紡績のお蔭で、地方民は生業につき、勤儉貯蓄の美風をなし、身代を築きあげることに努めてゐる。又どれ程土民の生活和平の心境に貢獻してゐることか解らない。日本人の上海に於ける意義ある仕事を數へるならば先づこの紡績事業を第一に擧ぐべきである。

上海滯在中に、見るべきものは相當多かるべきも、一日を割いて是非必ずこのうちの何れかの工場を視察し、又紡績聯合の總理事船津辰一郎大人とも會ひ、談笑のうちにその苦心談を承るもよろしからう。實に日本人の支那發展も、かくありてこそ始めて工業第一の力ある將來を卜することが出來る。支那紡績、英吉利紡績などと、色々競爭はあるが、嶄然日本の紡績はその頭角を拔き、青島に、天津に、又金州に、或は安東縣に、漢陽にと云ふ風に、工場を延ばしてゐる。實に聞くも愉快な話ではないか。所がその常に排日を食ふ度毎に工人會や、うしろから糸を引く赤い手が動き、やゝもすればストライキ、ボイコツトなどの不祥事を見る。これ迄幾度か各社共にその騷ぎに惱まされ、折角の發展が妨げられて來たことか判らぬ。會社側には機械を直す技師は澤山置いてあるが、精神的のもつれを直す心理學方面の技師は一人も置いてゐない。片手落ちも亦甚だしいことゝ思はれる。

紡績の將來は、工賃の廉、販賣上の地の利のことなど、無論憂ふるに足らぬ事であるかも知れぬが、問題はこれからはどうしても細絲の製造能力の點如何にある。年一年と支那絲廠の方でも、細絲の方に近づきつゝあり、次第に日本紡績の壘を摩するに至つた。その間樂觀を許さないものがある。況んやその生產能率を擧げる上に於いて、常に支那工人の手を煩はさなくては出來ぬと云ふのであるから、勞働問題の起る度に、日本人資本家側は恐慌を來たしてゐる。

支那側では、曰く愛國罷工、曰く同情罷工などと、とかく都合のよいことをいつてはブローカーの糸を引つぱることを仕事にしてゐる。又極端な手合ひになると次ぎのやうなことまでいつてゐる。

『日本人が幾億の投資を紡績事業の爲めにしようとも、結局は土地が民國の領土である以上、最後は機械も煙突も、凡べて置いたまゝ身柄だけもつて上海の天地を去つて、歸國してしまふ斷末魔を見させてやるのだ。』などと豪語し、大手搦手から祕密裡にその計畫をなしてゐるものもあるとか云はれてゐる。そのつもりで紡績事業の將來も、一段先きの先までの方策を考へて置かなければ嘘であると

思ふ。

○

上海の市政としては、支那側では、上海市長なるものを置いて市政を掌握させてゐるが、租界全體に亙る範圍では、工部局（ミユニシパル・カウンセル）なるものが始めから設けられてゐて、委員制度で英日米が委員としてこれに加はり、共同租界の市政を掌つてゐる。佛蘭西租界の方は、別に獨立して佛人側でこれを又自由に掌つてゐる。

工部局の仕事としては、交通、土木、衞生、教育、警察など數あるうちに、最近電燈の事業は、これを工部局の手から入札で離させた。上海入港の時、誰れしも右岸に黒煙の漲る工場を仰ぎ見るのは、卽ちこれである。その入札の際、日英兩國の方では、容易にきめかねてゐた所を、年齡僅か三十一歳といふ米國青年サミエル・ダブリウ・マーフイー氏が、一億萬元近い札を入れて之を落札した。日本側では東京の丸の内に電報の往復があつたり、重役會議が開かれたりした。すつたもんだで仲々きまらない。英國側でも上海の將來を悲觀し、氣乘り薄であつた位であつた。

或る人が當時、マーフイー氏に訊ねた。

『何んで又大膽にもかゝる多額の入札をしたのか。』すると彼はにつこりして、

『自分は亞米利加の輿論を背負つて立ち、英國の如き時價を踏み倒した札を入れるが如き仕打は好まない。米國は正當な輿論に立脚し、何處迄も我が信ずる所に邁進すれば、いさといふ時いつでもその正しい相場で米國人は買ひとつてくれるのである。』

といひ乍ら、シガーをくはへたまゝ、すら〳〵と書き物を認めてゐた。

『若し日本や英國にして、多少仲間入りの御希望でもあるのであれば、少し位お裾別けをしてあげてもよい。しかし金は凡て手元の方で片をつけて置きます。委細は後で。』

と、實にしやあ〳〵したものであつたとの事である。マーフイー氏は、米國のパワー會社のメンバーで、上海に出張してゐた一青年に過ぎない。實に大上海に於ける國際競爭場裡に於いて、輕く日英を向ふに廻し、無造作な態度で以てやつてのけてゐる。その風格は日本の一流實業家、重役諸君に見せてあげたいやうな氣がする。東京側や滿鐵側で、やつさもつさと机上の論を闘はしてゐるうちに、大きな渦卷きはさつさと、過ぎ行き、局面は展開して行く。何んといつても後塵を拜するといつた不甲斐なさは、かう云つた大上海に行つて見ると一層身にこたへる。日本の青年で上海に旅するものはこの話をよく〳〵銘記してゐてもらひたい。ない袖は振れないでもあらうが、日本の大學卒業生あたりに、かうした意氣の百分の一でも胸に藏してゐてもらひたいものである。

○

尙工部局の大きい事業としては、水源地の配水事業がある。上海は二百九十五萬の人口で、一朝時局に際すれば、六百萬を突破するといふ彈力性のあるところで、この世界的な大上海の飲料水を供給すると云ふことは、實にたいしたものである。その水たるや、上海入港のとき誰れも見てゐるあの黃浦の濁流である。それを江岸の水源地の淨水場へ吸ひ上げそこで濾下したものを、蘇州河のそばに高く聳ゆるタンク迄引上げてゐる。全市に亙る各ビルデイングや、商店住宅あらゆる方面の飲料水は之より配給されてゐるのである。

上海市中に見る飲料水は、濾下こそされてあるが、實はあの濁流を汲み上げてゐる譯である。かう云つた水源地を視察することは、上海の旅に又一種の興味を覺えしめる。

所が支那側では此の頃今後百年の計畫で、工部局の租界問題には最早やしびれを切らし、英國自身も到底これを支那側に返してくれないだらうと云ふ肚を見越し、今や數哩のしも手で吳淞寄りの江岸に、厖大な新水源地を設計し、既にその工事に着手してゐる樣子である。

傳へ聞く所によると、この附近へ持つて行つて、又亙錨の横づけに便ずる幾多の碼頭をつくり、これを完成した曉は、これ迄の列國の持つてゐた碼頭は自然消滅に歸せしめるといふ遠大な考への下に、實現を急いでゐるとの事である。道理で一九三一年から、外國の兵艦、汽船は、黃浦に入ることを拒絶したいなど云ひ出した。その理由は黃浦の水上は條約の上に定められた租界ではない。租界外である江上に侵入して來るなど云ふことは、條約違反であると、今頃になつて逆ねぢを喰はす抗議を持出して來てゐる事實すらある。かた〳〵もつて民國に漲ふ新しい寮園氣と、民族自決の意氣の動きが奈邊にあるやが、この一事をもつてしても察せられるのである。

○

江灣（キヤンワン）は、新公園を取入れた北部の郊外を指したものであつて、日本人には殊にその親しみが深い。江灣のレース倶樂部や、又日本人の祝賀の催しとか、色々の集合などにも使用せられる廣場があり、近來は日本人專用のゴルフリンクなども出來て、かなりこれに邦人の足が向ふようになつた。

由來歐米人は、ゴルフでも日本人を阻外する傾きがあり、シンガポールの如きは、「日本人支那人入るべからず」ときめてゐるコートやグラウンドがある位である。江灣の天地は、上海市でも日本人の多い北四川路の終點に近いだけに、自然ここの邊を中心として今後益〻發展を見ることであらうと思はれる。現にチエリーテレスの一角は、日本人ばかりの永入らずの社宅街となつてゐる位で、海軍陸戰隊の日の丸の旗も翻り、日本座敷の涼しい旅亭なども、この附近にあちこちある。上海の旅には、

忙中閑を得て、江灣に夕映えの綠野を散策したり、又秋の虫を聞きに出かくるのも一興である。最近はこの江灣（キャンワン）から閘北（ザポ）あたり一帶、兵火を見て慘狀を呈してゐるが、やがて又復舊の日を見ることであらう。

○

上海に在る支那の役所のうちで、絶大なものはバンドの空高く聳ゆる稅關の建物であらう。江漢海關と稱せられ、その規模の大と輪奐の美は、素晴しいものがある。上海の天空に上海時間を公示してゐるその大時計の針は、誰れ人からも注目せられ、之に視線を注がないものは恐らくない。すぐ傍の江岸には、英人ロバート・ハートの銅像があり、その下に所謂稅關碼頭がある。入港の際吳淞港外や、黃浦江の中流に碇を下ろした汽船の上陸客は、先づ小蒸汽で、この稅關碼頭まで遡つて來て、こゝに始めて陸地を踏む。同時に荷物の檢査をこゝで受ける。

漁山碼頭（威案土）の稅關よりも、調べが兎角手酷しく、暇のかゝることも夥しい。出迎への人は、惡くすると戶外で物の半日も足を棒にして待たされる。

尙大上海には、民國官營の郵便局が、蘇州河畔に高く聳え、階上階下の規模の大なると、設備の完備せるとは、恐らく東京丸の内の中央郵便局よりも更に上位にある氣持がする。日本から行く郵便は、凡てこゝで取扱はれるが、電報は別に虹口天潼路に日本電信局があり、そこで片假名電報が取扱はれてゐる。凡て日本内地のそれと同樣で、日本へ打つ時は電報用紙も官用のもので、之に安心して日本流の書き方をすればよい。

○

尙警察には工部局のそれと支那のそれとがあり、近來又百數十名からの日本の巡査が虹口方面に採用せられ、日夕その姿を現はして、その交通整理に、治安維持にと、凡てに亙つて努力をしてゐる。日本の青年で支那語の稽古の出來てゐる者は、一つ上海へ渡り、工部局巡補の試驗を受けて見るのもよい。これにパスしてよい待遇を受けてゐる者は、近來益〻ふえて來た。

支那のスリ小泥棒で、日本の巡査につかまり、繩をかけられるものが時折りある。その支那巡補に渡される所まではよいが、いざ大道を引つぱつて行かれる段になると、道みち妥協の話が持ち上る。そして僅か五十錢か一圓のポケツトマネーで、いつしかその繩は解かれ、無罪放免の融通がきくとの事である。これは支那巡補の慣用手段で、全くありさうな話である。

支那監獄でも、俗に地獄の里も金次第といはれる位であるから、袖の下次第ではこれ又どうにでもなる。獄衣を脫いで家庭から差入れしてくれた暖衣に着替へさせられることも出來れば、又美食の方

も融通がつくと云はれてゐる位である。又その方が監獄自身の支出が減るわけで、經費が樂であると見られてゐる。さぞや監獄の内部は呑ん氣な明るい氣分のする大厦高樓だと、囚人には見えてゐることだらう。

上海の消防は又格別で、その仕掛けも大きい。市中は各處に八階十階と高層のビルデイングやホテルの多い所であるから、引伸ばし梯子を朱塗りの自動車に乘つけ、鐵鉢の深帽を被り、警鐘の音勇ましく疾走して出かくる時の光景は、人ごとながら物凄い。でもしかし、平素動亂さわぎのみ多く、各國の機關銃などのいくつと續いて走る物々しい光景に見馴れてゐる上海支那人どもは、割に平氣でゐるものらしい。

○

日本人の上海見物で、土産話の一つになるものは、虹口に見る大マーケツトである。これは三階建ての新しいビルデングで、年中朝は未明から、午前十時半頃まで、幾十萬からの買ひ物に來てゐるもので埋まつてゐる。手籃をさげた家庭の主婦、紅毛、白毛、黒毛、黄毛、雜髪とり〴〵の姿で、或は自動車や黄包車に乘つたり、又手くつて來たりする者、たまには馬車で乘込んで來る者共で、その邊り近處界隈は、それこそ戰爭のやうな場面である。そのラッシュアワーにでも出くはすと、まごまご

してゐるものは、はね飛ばされてしまふ勢を呈してゐる。

マーケツトは、支那人の野菜、肴、牛豚肉、血などを始めとし、豆腐、蕎麥、羊羹の類から、草花、植木、笊、味噌漉し、繩綱の類、何んでも御座れで、場内の階上階下に見る光景は、寥然たる店構へである。しかしその血眼になつて賣り場賣り場になだれ込む婦さん達は、抑潰されんばかりの思ひして聲を張上げてゐる。そしてその菜葉の値引きをしたり、卵の數の違ふのを怒鳴つたりしてゐるさわぎを見る。そこには又貴婦人らしき西洋人の綠眼連中もゐれば、立派なコートを着込んだ三井三菱の支店長の奥さんたちも阿媽をつれて鰯魚の生きのよいのを二三尾買ひ求めてゐるらしい。

露西亞人は場内の一角で、露西亞パン、バクチーズ、ウオツカなどを前に、圖體の大きな恰好して大まかに客を呼んでゐる。しかしマーケツトの内部は、その床の漆喰に散る魚の水、野菜の間から落ちて來る水、魚の鱗の散り飛ぶもの、鷄の血のほどばしるなどで、之も云はれぬ混雜を呈し、その中を押し割り買物などしてゐると、履物、衣裳は全く臺なしにされてしまふ。コートの袖などは、自然に引きち切られてしまふといつた位である。

日本人の内儀さんたちは、「マーケツトの中は高足駄に限ります」といつてゐた。入口の兩替屋に控へてゐる親爺は、いつも愛想がよくて親切であり、忙しい中に面白い話などしてくれ、日本人の氣持

をよく解してゐるやうである。

三階の樓上へ登つて見ると、こゝには凡てこれ新しい材料で以つて料理をした一大平民食堂があり、銘々粗飯（ワーウェー）、揚げもの、汁もの、コロッケー、豚カツといつた式の和漢洋に渡る振つた民衆食事が、目の前でつくられてゐる。出來たての熱いところを、吹き〳〵舌鼓を打つて平げてゐる。こは實に上海第一の見ものであつて、北平の天橋路邊りに見るものとは、又趣きの變つた近代式の平民飲食店が見られるゝのである。

さればこのマーケットの三階では、よろしく見物だけでなく、目の前で銘々の好きなものを注文し、內外人の連中と座席を接して箸をとるのも、確かに一興である。よくその露西亞人の毛のもしやもしやしたキルギス人らしいのが、支那服連中の間に割込み、五加皮の赤酒をぐい呑みしてゐるのを見ることがある。日本人の店は、うどん、そば、すし、ぜんざいなどがあるが、どうも客が少くて淋しい。又日本から輸出された幾百の鉢植が、樓上に並べられてゐる。趣味のある西洋人が、その寒咲きの梅の一鉢を買ひ求め、手に提げて行くのも見える。

場內はやがて十時近くなると、ぱつたり客は滅り、さしもにさわめき返つてゐた階上階下は、夫々品物がはけて、店をしまひ始めるのである。そして十一時になるとホースの水で床と云ふ床は悉く隈なく洗ひ清められて、臺は積み重ねて片づけられる。そして正午頃には、全く一人の人影をもとゞめない。これが先づ虹口マーケットの光景の輪廓と云ふものである。

日本のやうに、每朝各家庭へ御用聞きが廻つて來る如き習慣はなく、如何なるものでもマーケットで現金で買取つて行くといふ習慣はよろしい。殊にこれが一大廉賣場となつてゐるわけであるから、上海人の社會生活の上には、何よりも有難い點である。

虹口以外にも、尙市中各所にかういつた設備が出來てゐるので、市民達はどれ位安く日用品を買ひ求め得らるゝ事か解らない。日本のマーケット制度は、臺灣に於て一番早く先鞭がつけられてゐたが、內地各都市では、今以つてまだ〳〵支那のそれの如く徹底した組織方法が實現されてゐない。相場の點も、上海では郊外の田舍から百姓が、夜半二時頃から小車で以つて直接運んで來るのであるから、驚くばかり安く賣場に出るわけである。

○

上海の百貨店では、その大きいものは、大馬路の天空に高く屹立してゐる永安公司に、先施公司、新新公司である。何れも廣東人の出資によるものであつて、その規模、裝飾法、陳列振りなどは、互ひに競爭をしてゐると見えて、日一日と進步を見せてゐる。その品物は大支那流行界の先驅をなし、

中流どころ以上の客種を絶えず之に引きつけ、晝の飾りつけ、夜間のイルミネーションは、殊に上海の夜景を彌が上にも輝かせてゐる。

上海の旅に、一度でもこゝに足を運ぶと云ふと、最近の新しい支那文化がたつた一巡でもつてすつかり解る。又買物、土産物には、かなり重寶なものが多く集まつてゐる。のみならずこれら三大公司とも、上層の各階はすべて旅館に振り當て、又大食堂を之に設け、屋上を娯樂所、庭園にしたりしてゐるなど、かなりよく考へて經營してゐるところが汲みとれる。

上海市中を一目で見晴らすと云ふには、この邊の塔上に親しく登つて見るのが一番近道である。

これらの百貨店も、いざといふ騒ぎの時は、新聞面に不穩文字の一行でも見出さるゝと、すぐ直感でもつて朝から店と云ふ店は鐵の柵を閉め、ぱつたり客の出入一切をとめてしまふ。上海では銀樓（銀細工）とか、錢莊（兩替屋）とか、百貨店とか云ふと、神經質的に世相を見てゐるからして、すぐ店を閉ぢる。それ故上海は競馬場附近に散歩にでも出かけ、遇然これらの百貨店の店が鐵柵で締めてゐるのを見ると、それで以て始めて、今日は午後何か騒ぎが起るのではないかといふ天氣豫報的のしるしにこれが見られるのである。

日本の品物は、昨今たとへ排日の烈しいときと雖も、かなりそれでも這入つてゐるやうである。臙

法瓶の如き、萬年筆の如き、その他雜貨の目星しいものは、相當に裏をくゞつて這入つてゐる。時にはメード・イン・アメリカなどの西洋品の如くマークを替へて入れてゐるものもあり、又全然マークなしで入れてゐる味の素などを見ることもある。その邊のやり方は、そこに裏の裏があり、上海の港が八釜しければ臺灣に先づ廻し、臺灣人が間に立ち、陳とか王とかの荷主の名義で廣東經由で上海へ積み替へをし、遠廻りをして入れるのだと云ふことも聞いてゐる。此の方法をとる時は、多少の掛りはかさんで來るが、兎に角品物の動きはかやうにしてでも研究せられてゐる樣子である。日本の製造工業に從事する旅客は、特にこの邊の抜け道をよくよく研究して置かるゝ必要がある。支那側の方でも、却つて毎度の年中行事とて、よく裏面の研究が出來てゐるやうである。

百貨店に次いでは上海の目抜きに、ホワイトウェイだの、惠利だの、大きな西洋人の店が軒を並べ、雜貨、機械類などに、特に大規模のものが見出される。

○

上海の書店では、惠利の大馬路の店を始めとし、日本側には內山書店が本店支店を持ち、又大馬路に分店をこしらへた。又支那側には河南路方面に、商務印書館、中華書局を始めとし、文明書局、世界書局などいふのがかたまつてゐる。最近新刊の辭書類や、叢書、地圖、單行本はもとより、民國青年學

生を日當ての新刊雜誌など、殆んど毎月雨後の筍の如く時流を追うて發刊されてゐるものがある。今そのうち、商務印書館から出てゐる雜誌の目星しいものだけを示しても、次ぎのやうな多方面に亙つたものが見出される。

東方雜誌	每月二册	教育雜誌	每月一册	學生雜誌	每月一册
少年雜誌	每月一册	兒童世界	每週一册	兒童畫報	年出十册
婦女雜誌	每月一册	小說月報	每月一册	小說世界	年出十册
自然界	年出十册	英語週刊	每週一册		

などである。

尙又上海市中は、この雜誌類と限らず、ひろく市中各處に見る文字廣告の方で、特に觀光客の目につくものがかなりある。今そのうち少しばかり拾ひあげてこゝに挿入して見る。これは極めて俗な話であるが、よく上海の世相が之によつて物語られてゐるのである。

姚佐頓　除根白濁丸　各大藥房
補血壯陽片　六馬路雲南路口　百靈藥社
美髮霜　大馬路五百念八　美利洋行

大新銅鐵床　三馬路大舞臺東　銅鐵床廠
艷裝披肩　四馬路第一臺對面　時裝公司
寶芳日夜照相　三馬路廣西路口　寶芳
從此決心戒煙　法租界愷自邇路　靈速戒煙院
便利穩速　愛文義路　永安搬場公司
省時價廉　孟納拉路
生生牌上等香煙　有至味　上海華成煙草公司
哈達門（香煙）
紅錫（香煙）
好運動（香煙）
請吸
煙線黃嫩　的萬華林牌香煙
煙味芬芳
雅霜萬金油　第一嬌面香品　各大藥房

楊順興木器　三馬路靈南路口

請用 惠福花紙　表櫥房間 大馬路雲南路口　美麗紙總行

亨宇牌　振華染織廠

提倡國貨　時髦牌香煙　北浙江路海寧路口和興

益利汽水　益利汽水公司

狗頭牌絲線襪子　五馬路　鴻興襪廠

日月紅　四馬路　五州大藥房

味之素　百老滙路　鈴木商店

天厨味精　天厨味精廠

請備 橡皮雨衣便宜　四馬路　榮昌德

邊黍醫院　內外各科一切大馬路廿四號巴黎

殺蜂　大馬路四馬路口　煙袋莊家有賣

鷄血籐丸　能治百病三馬路　勒威大藥房

節育避孕粉　不可思議之妙四馬路第一臺隔壁中南藥房

孔雀皮鞋　四馬路　上海舞臺對面

取源利多賣主義的　孔雀皮鞋公司

九華綢緞商店　大馬路望平街口

吉宇牌跳舞背身、跳舞汗褌、質地柔軟、穿着舒適振豐棉織廠

請用精良國貨

國貨電風扇　上海華生電器製造廠

鴉速便利　省時價廉

時式客車出租

日夜出租

每時四元　搬夫四名

折裝迅速　不另取資

三處　電　同孚路　三〇〇三二

接哈　話　虬江路　四〇八八五

南陽橋　六三二七七

華界　電話　閘北　二九六
西　三一四三

懷德堂王雨香老醫生　專治花柳毒症　六馬路西首　格致公學圍墻對面
上海亞州醫院　西醫邱子宜　九一四及六〇六　一經注射限期包愈
國府偉人于右任介紹　地址新新公司後面
梅庵氏、戒煙露　新新公司後面天津路角

これらの實例によつてその廣告の一般が推しはかられると思ふ。

近來上海の讀書階級あたりでは、民族の自覺、國權恢復といつた孫中山先生の「建國方略」式の政治外交向きのものが多く出で、それに最近は又、極端な赤色左派のものが各所の書店から小册子でこそこそ發行されてゐる。文學、小說、世話本、家庭、兒童向きのものも相當に出てゐれば、又料理、博物、工業に關したものも大分頭を持ち上げて來た。又エロ方面の艷史、性史、小說などが、或る方面では殊に羽振りをきかせてゐる。殊に性史の青年女學生間に持てはやされてゐることは、特筆すべきことである。其の他繪畫に關する刊行書も相當に賣行きがよいやうである。

舊來の木版本である漢籍類は、袋綴ぢのまゝで、一方には倣宋活字を用ひ、高雅な製本振りを見せてゐるのもあちこちに見るやうであるが、しかし他方には盛んに洋紙を用ひ、四號五號の活字で活版本となし、又石印本の小册子となし、大衆向きを目的にした大廉賣が行はれてゐる。

上海の市中には、路傍に銅幣一二枚の相場で、赤本黃表紙と云つたものが露天にあまた陳列され、幾らでも安く册子類が普及するやうな仕掛けになつてゐる。この點は、日本よりも遙かによく行き屆いてゐる。しかし支那文字のことゝて、振假名のついた赤本は見ない。尤もその廣く滑稽半分に讀まれてゐる人情本には「一見哈哈笑（イーチエンハハシヤオ）」と云へるものの如き、その君子の口にすべからざる方面のことを面白く又可笑しく取扱つてゐるものもかなりある。凡そ支那人にして、この「一見哈哈笑」の名前を知らないものは恐らくあるまい。これから見ると、古から人の云ふ論語などは、時代後れの高級本とされてゐるものであることがよく判る。

上海の新人は、今や古文に飽き、白話體と稱する言文一致の打ちくだけた文體を歡迎するやうになつた。殊に極端なのは、モダン文士が歐文に見るコンマ、ピリオド、クエスションマーク、セミコロン、エツクスクラメーションマークなどを盛んに採入れて、甚だしいモダン振りを發揮し、民國の文章もこゝ迄來なければ一九三二年型の現代文とはいへないとまで嘯いてゐる。民國には其の他ローマ字とは又違つた支那獨特の母音子音を現はす爲めの「音表文字」なるものが夙に制定せられてゐる。

純發音式に、一字一字を音が現はしたものであつて、それで綴られた童謠、子守唄などの册子も、かなり刊行されてゐる。田舍の寺小屋邊りに用ひられてゐる教科書などの中にも、夫々その脚註に漢字を書き抜き、それに解り易く支那式の音表を加へてゐるものがある。その點は日本のローマ字邊りよりも、確かに頭抜けてハイカラであり、合理化されてゐると見てもよい。最近店頭に掲げられた、煙草の看板などにも、わざ〳〵それに音表字を添へ、氣取つたモダン式を見せつけてゐるものもある。

上海の文筆界、思想界の牛耳を取つてゐる有名な者には、郭沫若君だの、周樹人君（魯迅と號す）だのを始めとし、多士濟々で、今は澤山の新人がゐる。自治體を創唱した胡適君など、今では古い方になつた。がしかし、かうした操觚者が群立して、絶えず著述に雜誌にその名の賣れ擴がつてゐることは、新しい文運を卜する上に喜ばしいことである。

尙上海の印刷物には、古人の名畫、墨蹟などの石版模寫で、對聯、立幅などにしたものが、數多店頭に飾られ、客を引きつけてゐるものがある。しかし未だ日本の金屬版、光華版、オフセット版の如き高級のものは、殆んど出來てゐない。技術の方面はかなりまだ幼稚であるが、しかし宣傳用の圖案意匠に見る著想、人を惹きつける力の強きことに至つては到底日本人の遠く及ぶ所でない。これは萬寶山事件や、滿洲事變、又近くは上海事件などを描寫した上海市中のポスター類を見ても、その一般が察せられる。そこに日本人の考への及ばぬ深刻味や殘忍性は現はれてゐるが、又大上海、大支那の深みの一部分がこゝに閃めいてゐると見てもよいのである。

○

次にはこゝに文人墨客の趣味を基とした翰墨方面、殊に畫箋、詩箋、硯、筆、紙、墨の文房具類、それから扇面、壁飾りの類に亙つた方面のこととなると、上海は又無限の用意がある。

個人の家庭のことは別として、その老舖として知られてゐるものには、租界では河南路の九華堂（文具一般）や、朶雲樓（文具一般）錦雲堂（文具及扇面）、それから城內の胡開文（墨）、曹素功（墨）、李鼎和（筆）、老文元（筆）などの如きがある。小東門方面に行つて見るべきである。其の他紙專門の問屋も、小東門方面のあちこちにあり、婚禮用又摺式用の色紙から、支那式の流水帳（支出帳）や色々の横帳、縱帳を陳列してゐる店もある。租界では、大馬路河南路の交叉點近くに、色々とさう云つた店がある。

尙古硯、古銅器、石佛の首、古鏡、古錢それから漢玉堆朱、金襴、古書畫の類と云つたものであると、租界城內の各所にその店が見出さるゝが、別けても數多品物の取揃へられてゐる店のある所は、租界では五馬路の方面と、城內は湖心亭の後ろ邊の方面である。しかしその邊の品物は、目の高い人た

ちには何れも満足が與へられない。唯所謂土産品として、數澤山揃へられてゐる點のみが、便利視せられてゐると云ふに過ぎぬ。しかし始めから買はないつもりで、見乍らゆつくり茶でも啜らうと云ふには、風流でもあり、よい時間潰しの所である。上海語の話せないものであつても、古玩店に行つてゐると、却つて主人の心を惹きつける客ともなる譯であるから、どこまでも無言の業を守りつゝ、古玩書畫を前に、目のお正月が出來るのである。

○

又支那式の家具、古道具類を見ようとするには、上海には馬鹿にならぬものが相當にある。面白い絨氈や、紫檀の卓子、雲南の大理石を嵌め込んだ衝立の名品など、どつさりある店の續いた町がある。これは租界地では大馬路に平行した北京路と云ふ街で、かれこれ十數町に亙つて軒並みがすべてその商ひをしてゐる。大きい店を覗いて見ると、外人のオークション（競賣）に出たものなどもあつて、割に便利に集められてゐる。

又支那服の衣裳街としては、婚禮用のものや、子供の祝着なんかを專門に晝錦里と云へる明かるい氣分のする街がある。この一街は、大馬路の横にあり、兩側とも金襴紅絲の美しいものばかり店先きにづらりと陳列してゐて、支那の旅には最も鮮やかに目の醒むる如き所である。こゝでは花旗と稱し、誕生の子供に着せる晴れ衣だの、花や蝶々、虎の皮など飾りのついた飾り帽、又花靴などもあり、土産に買つて歸つても、家庭ではたしかに珍らしがられる結構なものである。

又煙管、水煙袋や、阿片の七ツ道具には、とりわけて面白い珍品がある。その四尺五尺に達する長い大陸的の大煙管の如きは、之を手で持つて見るだけでも、その情緒が唆られて面白い。なるべくその時代ばなれのした、とぼけた雁首と吸ひ口を有するもの程が、意表に出てゐて興味が深いやうである。

彫刻の方面は、殊に上海の城内でその彫つてゐる現場を訪ねて見るのがよい。行つて見ると、一段の興味が湧き起る。竹の聯に彫られてゐる詩の文句や、鄭板橋の筆使ひと同じやうな彫り方をしてゐる場面も見られ、又筆の軸に細字をわき見しながら彫つてゐる所などは、わけて離れ業の感がして興味が深い。

尚紫檀細工の工場で、その糸鋸の使ひ方やら、鑿の打ち込み方、刻刀の運び方などと云つたところを見ると、日本のそれとは違つて趣味が中々ある。又或は樂器屋で、玉笛、明笛、簫の類から、太鼓小鼓などを造つてゐる現場にふみ込んで見ると、意外にも興味のある處があり、殊に大太鼓の皮を張り、その胴の廻りに鋲を打込む時のその匠人の力の入れ加減などと來たら、之を見る者の手に汗を催ほさせる位の緊張味が見られる。その荒削りのうちに、鼓匠が力強い腕を見せてゐるところは、他人

ながら嬉しい。

又提燈屋の店頭で一向に折り疊みの出來ない支那提灯の胴の骨を編んでゐるところとか、又水牛の角をとろかして、先づ蓮瓣形の薄いものとなし、これを幾枚か合せて、燒きごてで以てつなぎ、つないで、遂にその圓い胴丸の形を完成する。その出來上りの美しい紅白の提燈に、城隍廟の名前だの「客堂」の古體の金文字などを入れるところは面白い。同じやうに結婚用その他の賀筵向きのものであらう、華燭や、紅蠟をつくつてゐるその花やかな場面に、線香屋が、細い竹の軸へ持つて行つて、粉をつけ、美しい蠟燭を拵へてゐる有樣などこれ亦荒つぽい仕事振りのやうであるが、そのうちに要領のよい手際を見せてゐる。そこに相當見ごたへのするものがある。

○

上海城内では、又古玩品が相當見當たり、陶磁器の染付、書き繪の花瓶、砧青磁に、三彩の壺、朱泥、白泥、海鼠の鉢類などと、趣味深きものがかなりある。殊に芝生に置く瀬戸物の腰掛け（凳）の如きものも、その染付けに、書き繪の模樣の相當品のよいのがあり、又無字の青磁物も色々とあり、その値段は無地の方が却つて安い。

城内の支那街には、路傍に蘭の花、佛手柑、草花などを賣り歩き、客に呼びかけてゐるものがあり、試みにひやかして見ると、存外安くまけてくれる。多少心得があると、蘭花の一莖九華で意外の掘出しをする事もある。

それから又時には、路傍に易者ト占師などの店を出してゐるところへ差しかゝることがある。その物思ひに沈んだ客を相手に、しきりと算木筮竹などいぢりつゝ、何事をか說ききかせ、首垂れた客は丸で裁判官の前の被告と云つたやうになつて唯「是、是」と連呼してしほらしい所を見せてゐるものなども見受ける。

○

上海の大きい呉服屋は、上海の旅にはかなり懐かしい所で、土産物の支那緞子、絹紬など求めんが爲め、これに足を運ぶものが多い。大きい呉服店であれば、多くは租界の目抜きにあつて、老九章、大綸、老九綸なんかを始めとして、幾多の信用のある老舗がある。大抵各老舗には、日本語の解る店員が賣場に顔を出してゐて、日本の觀光客に熱茶など請じてゐる。銀相場の安い時分には、蒲團の裏地に絹紬など相當買ひ求めて持歸へる者がある。しかしこんな場合、稅關のことを忘れてはならない。これは大事なことである。

尙銀相場の安い時には、銀細工の食器、裝飾物、灰皿、煙草入など求めんとする者があるが、大馬

路の景雲樓を始め、城内各所にその大老舗がある。この種の買物は又十割税の關税のかゝることを忘れてはならない。

その他支那街には、五金號と稱して、金物各種類を取扱ふ大きな店が隨分見當る。大抵この商ひには、廣東商人が之に當たり、相當資産家が多いやうである。日本の東郷鋼の格の商ひにも當たる譯である。

又上海には長江の奥地に、無限の販路を有する汽水（サイダー）の工場を有するものがある。屈臣民といふ大きな廣東商人が之に當たつてゐる。

又河南路大馬路の交叉點近くには、支那四百餘州中第一と稱せらるゝ、大藥房、蔡同德（ツァイトンター）といふ屋號の老舗がある。門は重々しく門聯嚴かに、頭上に布を卷いた色黒き大の印度人が、樫の棒をもつて門衞の役を務めてゐる。店頭の文字に、謹防扒竊。注意剪綹とあるのは、萬引御用心、巾着切り御用心の意味なのである。出入の華客は、夜を日についでその足も繁く、三蛇膽酒や虎骨酒の藥酒を始め、幾百千の不老長壽藥、補身壯陽劑などを鬻いでゐる。老舗の一角に老爺が見張つてゐて、その客に手交する藥種を、處方箋と一々見くらべ認め印を捺して渡してゐる。いかにも堅くがつしりしたやり方である。

草根木皮の專ら行はれてゐる支那舊來の大藥房としては、北平の前門外に同仁堂といふのがあるが、之と蔡同德とが南北支那に於ける双璧と稱せられてゐる。けれども今では上海の方が遙かに大きい。一つ話の種にこれを一度ぐらゐは訪れて、不老不死の藥でも買ひ求め、日本で待つてゐる鶴叟隱居たちの處へ土産とするのもよからう。

○

大上海に見る料理店、菜館には、これ又有名なのが多く、昨今時めいてゐる杏花樓（アイホウロ）、梅園（メイユワン）を始めとし、目抜きの場所には陶樂春だの、小有天、都益處（トイチュ）などと云ふのがあり、何れも門に日本人の出入が多い。

又素菜（スーツァイ）（精進料理）には功德林、覺林など云ふがある。最近は又モダン式の支那料理店で、飲糧品を陳列し、東京の明治屋、龜屋を兼業してゐるやうな大規模の店に、冠生園といふのがある。近來しきりと華客を集めてゐる。各地に支店も出てゐて、相當大きくやつてゐる。北四川路の日本人の澤山ゐる所では中有天といふのがある。大した店でもないが調法がられてゐる。

尙茶館酒樓と離るべからざる上海藝者のことに就いては、前に述べてあるから、こゝには一切省くことゝする。上海切つての名代の美人たちは、その名前も凡て前に列記しておいた。唯上海には、四

馬路の紅燈街を始め、夜になると隨所々々に横町の路次ばかりでなく、目抜きの大通りにまでのさばつて來て、その客がおのぼりさんと見るや、怪げな寫眞などを押賣に來、引つぱらうとしてゐる。この手合をその方面のものは野鶏（ヤーチー）と呼んでゐる。

○

上海は世界的に知られたグロの大都市であるから、日本人の想像する以上の魔窟が、あちこちにある。租界では到る所これが細胞組織的に行渡つてゐる。殊にその裏をくゞつて營業振り華やかにやつてゐるのは、三馬路、四馬路の横町から、フランスタウンの一帶にかけてのあたりで、國際的の豪の者などが、船の碇泊中に、又上海逗留中に、入りびたりに這入つてゐる。極端なのになると、その現場を覗かせるやうな所だとか、又鏡に寫させる所だとか云ふやうな百鬼夜行の活劇舞臺なども、手にとる如く見られるところがある。そのやうなことのみを專門に上海の旅を樂しむ國際人もあるとか云はれてゐる。時には又共産分子、國家破壞の運動畫策など、共同租界を離れたフランスタウンの一角で、祕密結社式に行はれてゐるところもある。その方へしのび込んでゐる方が、取締りが八釜しくない所から、常にこのフランスタウンの方面には、陰謀祕話の策源地が絶えないらしい。

支那政府の反對黨、毒殺の計畫なども、多くはフランスタウンで行はれ、その檢擧される手合、叛

罪の七ツ道具や、毒藥の類なども、この方面から刑事の手に集まつて來るものが多い。

又北四川路は横濱橋（ワンパンチャオ）の裏手の路次から奥深く這入つた邊りは、今は大分あの上海事件のときに燒き拂はれたのであるが、まだ〳〵相當ひろい部分が殘つてゐる。その界限に行つて見ると、迷路の如く入亂れた抜け路ばかり多く、一度そこへ踏込んだら最後、決して元の道へは出られないやうな仕掛けになつてゐる。支那街に這入ると、とかくかう云ふのが多いが、恐らくこの邊もその迷路の一部である。場末の魔窟といはれてゐるところもこの邊を云ふのであらう。

その巷の奥に、秋風寒き十一月の末つ方、浴衣をひつかけ、鬚武者の落ちぶれた日本人らしいのが、どうかすると、支那家屋の樓上にくすぶつてゐるのを見る。上海司法領事の君の實話によると、日本人で支那路次にくすぶつてゐる手合の中には、部屋代の二弗三弗も拂ふことが出來ず、水道はとめられ、三度々々の飯もろく〳〵喰べられないといつたのがあり、支那人の家主から立ち退きを要求されてゐるけれども、頑張つて立ち退かうとしない。すつたもんだで支那人側から、領事館へ訴への書類が來てゐるといつた持ちもさげもならぬひどいのがかなりまだゐるとのことである。これでもいつかの排日の際など、俱樂部で配給の布令でも出すと、早速姿を現はして來、手を出してパンを貰はんとする。當人は無論その原籍も姓名も領事館に屆出がしてないので、登錄はされて居らない。全く文字

通りの流浪をして、上海の魔窟を唯一の隠れ場所としてゐるものである。恐らく上海支那町の裏街へふみ込めば、かゝる日本人は、幾百人となくくすぶつてゐることであらうといふことである。

支那街に於ける魔窟の一等有名な所は、云ふまでもなく江邊十六鋪の裏街である。白晝でも、うつかりこゝへ踏み込まうものなら、七色の魔物が出て來て、眞直にはずうと道を歩るかせないやうに、どこへかひつぱつて行く。手に持つた品物も敲き落としふんだくつて行かれることがある。

日本人の女などで、城内目抜きに買物に出掛けたものがあると、この邊の界隈から飛び出して來て、白晝いきなり着物の裾など捲りあげ、頭から被せてしまふ、惡戯半分でやることでもあらうが、實にひどい事をするものである。その筋のチヤンピオン揃ひのゐる別天地のこととて、亞米利加水兵なども言語に絶する狂態を路上に演じ、その場面に相槌を打つ者もあるやうである。さすがは大上海だけに、その方面もその道のオリンピック大會の如き場面が演ぜられてゐるのである。

又從つてピストル强盜や、殺人犯の盛んにあちこちと行はれることは、少しも不思議でない。租界の目抜きにしても、工部局の警察の目を盜み・ドライヴしてゐる自動車をピストル强盜が襲ひ來たり、月末の銀行歸りの番頭の手から大金を手提鞄もろともに奪ひ去ると云つた場面や、又無軌道電車の通つてゐる目抜の通りなどで、路傍で射殺された死人の顔色の土の如くなり、その蔽れてゐる周圍には、黒山の如く行人のたかつてゐる場面などを見たこともある。大上海の暗黒面と云ふものは、實に沙法の限りで、花の都、榮華の生活が晴れ〴〵して營まれてゐる半面に、他方には又かう云つたグロの極致、流血の慘事もかなり頻々に見出され、まるで茶飯事のやうに行はれるのだから叶はない。されば上海市中の夜半の光景の如きは、時折り戒嚴令の敷かれることもあるが、隨分物凄い死の巷と化することもある。であるから、馴れない日本人の旅客は、あまり時刻はづれの眞夜中なんかには、街をひとりで歩く事はくれ〴〵も戒めなくてはならぬことである。

○

列國の軍艦は、米英日佛伊など、夫々上海の江上へ雄姿を現はし、國旗を風に翻してゐる。殊に米は大型の兵船、又アラビヤ數字のはひつた驅逐艦を數多碇泊させてゐる。時には陸戰隊の喇叭の音も勇ましく、租界の大通りを練り歩く光景も、一段ときは立つて見える。又サーチライトで、大上海の闇の空に、長き光を投げることもある。何んとしても、時折その國力を見せて、いざといふ時の伏線となしてゐるやうである。

日本の居留民達も、日本海軍の力に依頼することが多く、陸戰隊の送迎の時など、殊に在留民の心を躍らせてゐるものがある。しかし實際をいふと、これは兵艦の背景を超越して大上海を操り、これ

と共に榮えゆく對策と、それに伴ふだけの肚を持たなくては嘘であると思ふ。昭和七年春一月二月のあの事件によつて、上海稅關碼頭を中心に十五哩、北は崑山、南は松江あたりまでを中立地帶とし、之に支那兵を入れさせない條件が持出されたのであつた。これが實現さへすれば、上海の支那住民も外國在留民も枕を高くすることが出來るであらう。

上海の衞生については、毎年秋のコレラの季節になると、日本では上海歸りの船客一般に對し、檢便を行ふなど、頗る神經質に之を取扱つてゐるのである。從つて日本人の目には大上海といへば直ぐ之を黴菌の本場だと見てゐる。

租界の衞生狀態はいふまでもないことであるが、支那街の裏通り、路次の中などと來たら、無論お話にならぬ。しかし支那街に見る凡ての住民は、言葉にこそ出さぬが、その日常生活の萬般に亙つて、黴菌の被害からいつも超越した態度をとり、殆んど衞生のことなど眼中に置いてゐない。しかも尙よくあの通り一般に、日本人以上の體格と體力を有し、そのねばり强さを示してゐる。こは氣持ちの上で、大上海に處する上の道を、大摑みに心得てゐるものだと斷ぜられる。在留民の日本人たちがいつもあゝして、年が年中神經質でのみ暮しつゞけて行くことは、將來の大上海を向ふに廻はし、之に處して力を伸ばして行く所以の道ではあるまいかと考へるのである。

上海の氣候は、日本の東海道、中國方面あたりと大差はない。郊外に菜種の花の咲くのは、日本よりも幾分早いやうであるが、しかし土地が大陸だけに、春秋の期間が短い。春が來たかと見れば、すぐ夏になり、秋からすぐ冬に激變する。朝夕の溫度も變化が甚だしい。眞夏の熱氣は戶外百度以上に昇ることも珍らしくないのである。民國十五年の夏のことであつた。百六十度からに達し路面のアスファルトがすつかりとろけたことすらある。

上海の雨は、篠つくどしや降りを見ることもあるが、春の淸明（チンミン）の時節の雨は、霏々と糠雨が長く續き、雨中を行くのに傘など持つ人は殆んどない。上海の低氣壓前の空色は、一種特別の黑雲が低迷し、空模樣そのものも、何んとなく大上海に調和してゐる感じがする。

○

人情の機微から云ふと面白いもので、在留日本人は二萬五千人と云ふが、その一度、上海の味ひをしめると云ふと、日本がこせついて見え、最早このこせついた島國には歸りたくなくなり、足が故國へ向きさうなものであるが、どうも向かない。一度歸朝して見ても、亦上海を第二の故鄕の如く感じ、すぐ上海へと歸つて來るやうなものもゐる。しかし又上海事件の不祥事があると、女子供はすつかり引揚げなくてはならぬこともある。これは先づ例外と見るべきものである。

かくて之が例外であつてこそ、上海生活の偉大なる徳も感ぜられるわけである。又實際これまでの上海生活を見ると、平和なときには春の蘇州行、秋の杭州遊び、何れも思ひ出がよくて、呑ん氣であり、又たしかに命の洗濯も之によつて出來る。マーケツト通ひも大變だといへば大變だが、しかし何となく勇ましくて氣分があつてよい。

上海は無事平穩のときであると、その日常生活ぐらゐ氣樂ねがなくて、我が思ふがまゝ伸びやかな暮しの出來る所はない。幾ら不景氣の風が吹いて來ても、日本に居るほどのみじめさはない。唯しかし近來困るのは、年々繰返されるあの排日の不祥事である。誰れしも在留民の家庭では惱まされてゐることであるが、我が子供を通學させるにも、又城内に買物に出かけるにも、うろ〳〵歩いて居れないといふ場合が多い。人にもよることであるが、全くこの點は特に同情して見てやるべきである。しかし亞米利加ばかりは日本なんかとはちがひ、數年前たつた一度一寸した排斥を喰つたことはあるにはあるが、殆んどいつも無事に排貨騷ぎを受け寸切抜けてゐる。これはたしかに大上海に對する操縱振りの宜しきを得、そのコツを得てゐるためであると思はれる。その對策の上には、餘程變つた所があるものらしい。

日本人の上海に對する惱みは、この手酷ひしい排日排貨の點それのみであると云へる。しかしこれは、支那官邊の對内策から出てゐる場合が多い。内心政府存立の根本義に、この排日の一項目を必ず條件として加へてゐるくらゐでなくては、持てないと云ふ事實もある、從つてこれのみはどうしても避けられないものと見える。さればこれあることを覺悟して、平素充分に奥地へも手を伸し、躍進出來るだけ躍進をして、食ひだめをして置くほか仕方がないのである。

○

上海に行つて上海租界名物の一つと考へられてゐるものは、例の色の黒い背の高い印度人の巡査のゐることである。この印度人は、その交通整理に當つてゐるものが多いのである。

由來印度人は、日本人に多大の好意を持ち、見かけによらず優しい態度で、日本人一般に應接をしてくれてゐる。但しその用ひる言葉は英語を使つてゐる。フランスタウンには悉く安南人の巡補が用ひられ、共同租界の印度人が頭上に紅黄白などの大布を巻いてゐるのに對して、安南人は三角形の饅頭帽子を戴いてゐる。日本の巡査は工部局の正帽を被つてゐる。支那の巡補なども、夫々皆特徴を有してゐて、上海の旅には何れも懐かしい。上海語を學び始めた日本人が日本人の巡査にそれと知らずに支那語で道を尋ねることがある。するとにや〳〵笑ひ乍ら、巡査は日本語で返事をしてくれると云ふ滑稽な場合もあり、時折路上で吹き出すことがあるのである。

○

上海の旅に心細く思はれることは、旅先きで病氣をする場合である。倶樂部の前の篠崎病院や、北四川路の福民病院、その他日本人の醫院は多い。又蘇州河の河畔には、ゼネラル・ホスピタルと云ふものもあり、經濟的に親切に看護をしてくれる。

兎も角四十八ヶ國と云ふ世界中の人種の市中に雜居し、激烈な生活競爭の渦卷を見せてゐる所であるから、實に物凄さじい活動をしなければ上海には居られないのである。その渦卷の中に、支那人達は城内生活を營んでゐるのでは滿足が出來ず、租界に安全地帶を求めて、是に大廈高樓を構へ、こゝに生命財産の安固をはかり、多大の稅を拂つても、こゝでその經濟生活をつゞけてゐるわけである。市中は年々歲々膨脹するばかりで、南洋で儲けた華僑なども、その富を租界の地所に投資すると云つた傾向を見るに至つた。こは宛かも南の方シンガポールの街が、九割九分まで、支那人の富で持てゝゐる如く、上海も亦同じやうに、租界に於ける支那人の富でこの街は持てゝゐるわけである。伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、居張名古屋は城でもつといつた式で、大上海は專ら支那人の金で持ちつ持たれつしてゐる所であるといへる。それ程に最早や租界の支那人は拔くべからざる底力を、こゝに下ろしてゐるのである。支那人が租界に恩惠を蒙つてゐることは絶大なるものがあるのである、しかるを時の流れ、民族の自決に支配され、今や租界回收の熱さへ旺んになつて來てゐるのである。

南京要路の大官が、この租界に恩惠を蒙れることは、上海支那の商人たち以上である。しかし青年學生たちの叫びに左右せられ、內心有りがたいと思ひつゝも、口には租界云々を稱へてゐなくてはならぬ破目に陷つてゐる。結局自家撞着のジレンマに陷つてゐる事情のあると云ふことは、判つてゐるだけに氣の毒の至りである。

○

最後に「大上海」の大上海たる所は、途上の風物あらゆるものによく現はれ、北四川路の路傍に、花賣りの子供が、每夜店を出してゐるのを見る。が、その商ひ振りを見てゐると、その山と積んだ花を前に、手を拱いたまゝ高鼾で首を垂れ、居寢をしてゐるのである。それから又同じ町內をあるいてゐると、その先きに同樣の花賣りの居寢りをしてゐる場面を見たことがある。呑ん氣といへば、呑ん氣であるが、こゝに一種の大陸的の禪味が見出される。

在留の日本人間には、新聞として上海每日、上海日報、上海日日の三種があり。このうち上海日報は、不幸上海事件のとき兵燹同樣の不祥事を見た。これらが漢字新聞の申報、新聞報、民國日報などと拮抗をして、そしてそこに最善の努力を拂つてゐるのである。が支那人方面に多大の響を與へんと

するには、尚倍蓰の奮闘を必要とすることは云ふを待たぬ。本來からいへば、國際都市としての大上海に於けるこれらの邦字新聞は、日本の知識階級にもつと〳〵よく知られ、又よく普及されなければならぬのである。惟ふに、寧ろ現代日本の言論界は上海からといつたくらゐのモツトーのもとに、今一層權威づけられなければ嘘である。

日本から上海に廻はされる品物は、その道では、俗に二割ものと稱し、幾分段の下つたものとされてゐる。しかし人物の方は、決してかゝる見識の低いことではいけない。大連に曾て金子節齋翁の牛耳をとつてゐられたことがあつたと同じ貫目のある一流の人物が隱然こゝに居て、日本より來る名士有力者ぐらゐは之を向ふに廻し、又その一言一句が支那側にも響を與へ、歐米人の間にも重きをなすといつた位のものがゐなくてはならぬのである。舞臺が舞臺だけに、この地には大臣級以上の本當のしつかりした人物が、常時居を構へて悠々自適してゐて丁度よろしい。それでもつて在留日本人の父として、國際的にも、重きをなさねばならぬのである。それでないといふと、一體日本から上海に出かけて行つても、誰れと共に眞に時局を語り、風物を談じ得られようか。がや〳〵排日さわぎの一點にのみ囚はれてゐると云ふのではなく、悠々大局の上から翰墨でも語り合ふと云ふ別天地の風懷味とゆとりのある人物があつてほしいのである。

今日では夫々局部局部についてのエキスパートはゐるにしても、眞に母國に對し、支那側に對し、又列國に對し、しかも翰墨に對し、凡ての上に理解があり、又懷かしみのあるものがゐない。今日は優にゆとりのある大人物を日本からこの大上海へ出しておく位にしない事には、日本として一大手落ちであると思はなくてはならぬのである。上海が日本の中堅どころ、日本の輿論をリードする位の力を持たせなければ、日本は上海と共に、眞に國際場裡に於ける雄者の位置を贏ち得ることは難かしくはないかと思はれるのである。

上海の郊外

上海の旅は、これ位のところで止め、序に郊外の暢びやかな所へ遊びに出かくる場合の事について述べておく。これがその頭腦の轉換にもなり、又實際の田舍を知る材料ともなるわけである。

上海は江灣の新公園に近い所から、輕便車に乘つて、最近砲撃のあつたあの吳淞の突角、砲臺灣あたりまで出かけるのは、譯のない話である。そこで揚子江上の渺茫たる水景を味ひ、柳の蔭に涼風に吹かれつゝ、事件當時の兵火を思ひ出して見るのも、何んとも云ひやうがない。こゝに行く火車は、汽關車と客車一箱だけで出來た支那で他に見ない短かい列車である。箱の數を少くして、頻々出さん

が爲めに、却つてかく便利に數を少なくしたものである。黄浦江の田舍の農村綠野に、水牛の群の戲れ、牧童につれられてゐる有樣など、見るものがすべて變つてゐて面白い。之には自動車道も勿論あるが、なるべくは火車か又は一輪車かによつて、ゆつくり、田園氣分を味ひつゝ行くがよい。

又他の方面では、蘇州河から運河によつて民船上の人となり、北の方嘉定（カーディン）の町や、太倉（タータン）に、又常熟あたりへ、或は又南の方、松江（ソンヤン）の高塔のもとに出かけて見るも氣晴しになる。松江の鱸魚といつて、はぜのやうな形した大味のさかなを、昔文人がひどく賞め讃へたものである。火車の窓から見える松江の城壁は、一望千里の平野の中に、輪廓を鮮かに現はしてゐるのでよく目に立つてゐる。

又近い所では、黄浦の江上を行ると、閔行（ミンシン）の水郷がある。民船で運河によつて蘇州に遊ぶ時は、ここで稅關を經る。田舍街で、風光のよい南畫氣分の溢れてゐるところだけに、半日の清遊には手頃である。上海城内あそこには、高昌廟（カオチャンミヤオ）さして出かけようとすると、乘合のバスが通うてゐる。

その他上海郊外で誰れしもよく春先き桃の季節に出かける所と云へば、龍華（ロンホワ）である。龍華の塔は高く、飛檐の輪廓麗はしく碧空に聳え、桃林の色と相映じ、何んともいへぬ柔かみを見せてゐる。同文書院の所から程遠くはないので、日本人はよく土曜から日曜にかけて出かける。日本人家族連れの春の行樂として、この龍華の桃花は唯一の魅力をもつてゐる。塔下にひさぐ麵の風味には、田舍らしい處があつて殊によい。が値段はお安くない。場末の麵だからといつて、誂へる前に値段をきめないで喰べると、後でひどい目に遭ふのである。

尙上海の西郊の驛名に、梵王渡（ファンワンドウ）といふ所がある。此はゼスフイールド公園に近い爲め、自然下車客が多い。又附近に眞茹（ヂェンジュ）の驛がある。上海事件のとき、無電のあるところだけに、新聞紙上でも人によく知られたところである。

上海より杭州へ

杭州の旅は、上海見物を了へた後で出かけるのが普通である。今日では、蘇州、杭州を廻はつて來なければ、完全な上海の旅をなしたとは云はれない。謂はゞ蘇州、杭州は共に上海の延長地帶であると見てもよい位、上海との連絡が繁々しい所である。されば若し又上海逗留中の二三日を割き杭州に游び、西湖の周圍を一巡りし、船を湖上に浮べて見るのもよろしかるべく、又蘇州へ出かけて、寒山寺を見て來るのもよい。かやうにして頭を休め、更に元氣を恢復して、上海の用足しに活動の能率をあげるのは望ましい事である。

上海から杭州に出かける火車の沿道は、誠に廣々とした大平野であつて、殆んど見渡す限り山を見

ない。その大平野を、西南へ約五時間も走ると、杭州驛に着くのである。

上海の北站驛を出發した火車は、途中眞茹、梵王渡、徐家滙（シュイ）、龍華などの諸驛を過ぎる。龍華には、高塔高く仰ぎ見られ、人目を引いてゐる。新站、華莊、新橋、松江、楓涇と行く各驛は、すべて皆上海郊外として知られた處であつて、以上は江蘇省に屬するところ、それから西に進むと、省は浙江省となり、嘉善（カーシィイ）、嘉興（カーシン）、王店（ワンテン）、硤石、斜橋、周王廟、長安、許村、臨平、筧橋などの十驛を過ぎる。そして艮山門（コンシャンメン）の驛から、いよいよ城壁を這入り、城内杭州の車站に着く。

沿道に見る春の眺めは、菜種の花も色濃く蓮花の色は、紅に、絲野に採り合はされた黄紅の色は、毛氈を敷き詰めた如き風光で、美しいこと畫のやうである。見渡したところ水田よく開け、運河沿ひの水鄉には、樹下に水牛盤（ふかうぶ）と稱せられる灌漑用の古雅な牛骨車が裝置され、到る所江南の趣を見せてゐる。その水牛がゆるやかに盤車を引廻し、水を吸ひ上げてゐる趣きは、上海人の知らぬ優美な春を物語つてゐる。旅客が杭州に這入る前、既にかうした優しい江南氣分に打たれるのは、氣分の上に得るところが多い。列車は滬杭甬綫と呼ばれ、頭等始め各等とも大まかに出來てゐる。車中乘客には深いコップが配ばられ、浙江の風味高き熱茶が出で、日本に見ない取扱ひ振りを見る。ボーイも氣がきいてゐて、乘心地は決して惡くない。

ない。その大平野を、西南へ約五時間も走ると、杭州驛に着くのである。

上海の北站驛を出發した火車は、途中眞茹、梵王渡、徐家滙、龍華などの諸驛を過ぎる。龍華には、高塔高く仰ぎ見られ、人目を引いてゐる。新站、華莊、新橋、松江、楓涇と行く各驛は、すべて皆上海郊外として知られた處であつて、以上は江蘇省に屬するところ、それから西に進むと、省は浙江省となり、嘉善、嘉興、王店、硤石、斜橋、周王廟、長安、許村、臨平、筧橋などの十驛を過ぎる。そして艮山門の驛から、いよいよ城壁を這入り、城内杭州の車站に着く。

沿道に見る春の眺めは、菜種の花も色濃く蓮花の色は、紅に、綠野に採り合はされた黄紅の色は、毛氈を敷き詰めた如き風光で、美しいこと畫のやうである。見渡したところ水田よく開け、運河沿ひの水鄕には、樹下に水牛盤と稱せられる灌漑用の古雅な牛骨車が裝置され、到る所江南の趣を見せてゐる。その水牛がゆるやかに盤車を引廻し、水を吸ひ上げてゐる趣きは、上海人の知らぬ優美な春を物語つてゐる。旅客が杭州に這入る前、既にかうした優しい江南氣分に打たれるのは、氣分の上に得るところが多い。列車は滬杭甬綫と呼ばれ、頭等始め各等とも大まかに出來てゐる。車中乘客には深いコツプが配ばられ、浙江の風味高き熱茶が出で、日本に見ない取扱ひ振りを見る。ボーイも氣がきいてゐて、乘心地は決して惡くない。

ない。その大平野を、西南へ約五時間も走ると、杭州驛に着くのである。

杭州西湖及びその附近

杭州驛に着くと、壁に、柱に、三民主義を宣傳した大文字が、青地の中に際立つて白く目に映ずる。驛の構内を出ると、内外人の見境ひもなく、群がり來る支那宿の宿引から、きつと包圍攻撃を受ける。滬杭旅館（フーハンリュクワン）だの、新新旅館だの、聚英旅館だの、又湖濱旅館だの、滄州旅館だのと云ふのを始めとし、夫々その宿名の這入つた赤文字入りの大名刺を振りかざし、之を客と云ふ客の面前に突きつけ、物凄い競爭振りで手鞄の奪ひ取りが始まる。その聞きとりにくい支那音で、夫々受け持つ宿名を叫ぶ蟬噪蛙鳴と云つたら、耳も聾せんばかりである。ところがその中に、

『日本からのお客さんはこちらへ。』

と、いかにも鮮やかな日本語が聞こえる。

思ひがけなきこの日本語の出來るボーイは、聚英旅館と新新旅館とから出てゐるのであるが、その他の處にはゐない。他の宿に引張られて行くものは、その客自らに幾分の土地の言葉が話せないと、心細くなるであらう。

日本の領事館は、杭州城内の街を通り抜け、一路湖畔の通りに出で、湖濱路と云ふ道を右にとり、

左に西湖を右に街並みを見て、かなた初陽臺上保寧塔のもとまで行く。すると山腹にあたつて、風光明媚の位置に日の丸の國旗の飜るのを見る。これが日本の領事館である。恐らく日本外務省の關する限り、支那はもとより世界各地に見る領事館で、この杭州領事館くらゐ天下の名園を庭にして出來てゐる所は、斷じてないといはれてゐる。嘗て德富蘇峯翁も『若し老生が、かりに支那の領事を拜命するとしたら、この杭州の領事をお願ひするだらう。こゝでなら二年や三年は勤めて見てもよい。』とまで激賞してゐられた。初陽臺から嶺づたひに葛嶺に登る。晉の昔の葛洪を祀つた滄觀飛亭があり、山下の煙霞洞と共に、道敎趣味ゆたかな處である。西湖から裏山一帶の眺めは何とも云へない。

杭州の旅には、新新旅館に泊るがよい。街の中心から特に離れてゐて不便な所もあるのであるが、しかし西湖巡りをする目的には、却つて奥に引込んでゐるだけそれだけ都合がよい。しかし又友人などの都合で、街の方に宿をとり、湖濱の新豐園あたりで、支那風呂を浴び、さつぱりした氣分で樓上に西湖料理の風味を味ふのもよい。わけて風流を解する心置きなき雅友とでも、湖上の舟遊を思ひ立つのは思ひ出が深くてよろしい。折角杭州まで來て、天下の西湖に舟を泛べる雅游を試みないやうなことでは、杭州行の興味は半減せられるわけである。

西湖の値打は、四時いつもこの舟游びに在る。孤舟をやとひ、西湖獨特のしやもじの如き櫂で漕がせるのである。その船頭を案内に、雅友どもと、一葦の行く所を恣にし、水を渡る音も靜かに、先づ孤山の平湖秋月の濱に、舟をとゞむるが順路である。孤山の各名所をめぐり見て、白堤、斷橋の下から、湖上の中心たる湖心亭に寄り、楊柳の蔭深き所を味ひ、更に遙かに南して、三潭印月へと漕ぎ、之に遊びて蓮池に架けられた十三曲の石橋を逍遙するなどは、殊に懷かしい。池中、先賢祠堂と云ふがあり、亭亭亭といへる三角形の一亭もある。さゝやかな亭であるが、その名が振つてゐるではないか。左右の柱には、古雅な對聯が掛かつてゐる。その句が又如何にも香んばしく、暫し足を停めしめるものがある。筆者は、西湖で名高い退省庵主人である。曰く、

兩岸の涼は生ず、菰葉の雨
一亭の香は透る、藕花（はす）の風

（兩岸涼生菰葉雨　一亭香透藕花風）

實に風流な氣持のよい句である。自分はこゝに訪ね來る度に、舊知にでも會ふ心地がする。又池を隔てゝ左手の厚壁の古塀には、綠蔭に被はれた圓形の後門があり、如何にも文人風の南畫氣分を見せてゐる。その後門の頭上には「竹徑通幽」の四文字が、石に刻して嵌められてゐる。固より主人とは識合つてゐないのであるが、門をくぐり、徑に沿うて奥深く這入つて見る。なるほど竹林の籔の蔭深

く、石徑は斜に左へ左へと幽かに通じてゐる。その奥の突當りの池畔には樓閣があり、如來花（ニョライホツ）（芙蓉の花）が重たげに咲いて、枝は斜に水面まで垂れてゐる。側に隱君子の故宅らしいものがあつたが、しかし更に人影はなく、幽鳥がたゞ靜かに鳴いてゐたのみであつた。後門を出て、池中に聳ゆる太湖石の奇岩を仰ぐ。岩は年中蔦葛に蔽はれ、宛ら三潭印月を護つてゐる巨人の姿とも思はれる恰好である。石橋を曲り曲り渡り詰めると、かなり厚みのある石碑が正面に立つてゐる。これに肉太い楷書の深彫りで以て「三潭印月」の四文字が現はされてゐる。柳楊の下に立つて、湖上を遙かに眺めやれば、三基の石の供養塔が、水上に浮んで見える。誠に畫のやうな水景である。東の方、吳山の空に明月の登るを見るや、塔下にそれぞれ月影を印して、銀波金波の光りも美しく、三潭印月の雅名も、こゝから起つてゐたと解せられて來る。

尙湖上遙かに左にあたつて、以前は雷峯塔の雄趣も見え、西湖十景の一つにその數へられてゐたのであつた。こは宋代の古建築として、千有餘年の間西湖の呼び物の一つとなつてゐたのであるが、過ぐる民國十三年九月廿三日、惜しい事に自然の崩壞で、その姿は消え失せた。右手の湖上には、かの蘇東坡が、臨安の都に赴任中拵へて殘したと傳へらるゝ蘇堤があり、その水景のかなたに長く、柳楊の眺めが優しく打續き、ところどころに指さゝる六橋の情趣は畫のやうである。又黃昏の歸路を急ぐ牧童が、水牛の群をつれて、靄の中に次第に姿を消して行くところの趣など、これ亦いつも乍ら繪卷を繙いてゐる如く感ぜられるところである。

西湖巡りに名高い風景は、誰れも知る西湖十景である。こは湖南洞庭に知らるゝ瀟湘八景と共に文人墨客の殊に喜ばるゝ所のものである。左にその西湖の十景を列記する。

一、蘇堤春曉
二、雙峯插雲
三、柳浪聞鶯
四、花港觀魚
五、曲院荷風
六、平湖秋月
七、南屏晚鐘
八、三潭印月
九、雷峯夕照
十、斷橋殘雪

尙この外に、城内で名高いのは吳山である。湖上高く聳え、頂の城隍廟の白壁に、屋根の群がり重つてゐる光景は、西湖の船から東天に仰ぎ見られ、これ亦十景に次ぐの佳景である。明の太祖が萬里遠征の途上、雄圖を吳山に譽へ「兵を提つさぐ百萬西湖のほとり、馬を立つ吳山第一峯」と賦した處であつて、親しくこの吳山の山上に登つて見ると、右に西湖、左に錢塘江と云つた大きい水景を脚下に見おろすことが出來る。のみならず、更に遠く浙東の野の彼方には、會稽の山々まで仰ぎ見られるので、何んともいへぬ雄大な氣持が唆られるのである。

西湖巡りを少しく詳しく述ぶるとすれば、先づ第一に孤山である。孤山は舟を平湖秋月の彩色美しき牌樓のもとに乘り捨て、孤山に上陸するのである。

孤山には公園浙江圖書館や、乾隆皇帝の四庫を藏する文瀾閣があり、又入口の目立たないところではあるが、山上の眺めが廣い西泠印社と云ふのがある。庭内が至極風流で、金石の拓本、書畫の縮世、西湖遊記の類が、數多遊客の足をとゞめさせてゐる。丘の中腹にある印池の磨崖碑は、長尾雨山翁の殘したもので、書體に唐人の趣きが見えてゐる。丘を巡り、葛嶺に面した側に出れば、宋の林和靖の墓があり、その鶴塚と相並んで苔深く眠つてゐるところは懷かしい。背景にある臘梅の林は時代を帶び、墓前の放鶴亭には、左右の圓柱に持つて行つて、頗る豊かな風韻のある隷書で、林逋先生の風韻を偲ばせてゐる大きな聯が掛かつてゐる。

若し梅の消息を問はゞ
しばらく待てよ、鶴の歸り來るを
（若問梅消息　且待鶴歸來）

西湖の旅で、放鶴亭に杖を運ぶものは、必ずや眞の翰墨氣分が思ひ浮ばれ、西湖の妙韻はこゝに盡きる心持がする。しかるに最近、西湖博覽會の名殘りを留めるものであるが、亭前から新新旅館の門前へかけて、湖上に餘り風雅でもない長い木橋が架せられ、何んだか風韻をぶち壞した感じがする。時人この心を知らずで、誠に慨すべきである。

孤山の五味八珍と味覺の研究には、老樹のもと古屋蒼然たる樓外樓の料理を味ふに越したことはない。普通は早めに之に使をやつて、料理を誂へて置き、時刻を見計らひ、そこで一服し、夏の夕べ東天湖上の月を友とし、西湖の海老料理に酒杯を傾けるのである。これ亦西湖を知らぬ上海人などの想像し得ない處である。又孤山で呼びものとして知られた哈同の別莊は、水の別莊として有名であり、恐らく西湖はもとより、天下一品の評のある所である。湖上舟を泛べる者、誰れしもあの雅窓多く、白壁長く水に映つてゐる水庭に氣のつかない者はあるまい。一時は兵隊に占領されてゐたこともあつ

たが、今は復舊して美しくなつてゐる。

孤山を渡れば、本陸の濱に出る。曲院荷風の邊り、こは昔宮廷の麴室の設けられてゐた所だけに、なんとなく宋時代の佛を殘してゐる。丈餘の石獅並ぶ廣場には、拓本を賣る店が多く、正面に仰ぎ見らるゝ山門には、「岳王廟」の大きい篇額がかゝつてゐる。岳飛を祀つた有名な大廟であつて、門を入り右手の奥に歩を運べば、岳飛父子を葬つた墓坟の圓丘が並んでゐる。石人石馬や、秦檜の鐵像などが墓前に立つてゐる。樹下に「盡忠報國」の文字鮮かな白壁も見え、參詣するものが四時絶えない。

途を靈隱禪寺にとつて進めば、路傍幾千の三民主義を叫ぶ宣傳文字が高壁に見られ、或は破寺の人影なき淋しい山麓も見える。このあたり、湖畔荒廢するがまゝに任され、空院落花深きところに詩情を催ほさせる所が多い。清漣禪寺の山門を右に這入れば、綠樹の蔭深き所、玉泉鯉魚の群り戲れる仙境があり、日本の遊客は殊にこれを見て喜ぶ。山僧から麪など買求めて、五色の大鯉の口にばくつかせてゐる。池畔の精進料理は、特に清淨で日本人の口に適ふ。

山下の竹林に間道を求め、流れに沿うて靈隱寺の山門に出る。門外の黃壁にある「西天梵尺」の四大字が、先づ眼に映ずる。門内の岩窟、石佛多き飛來峯を拜し、布袋の石佛を崖壁に仰ぎ、冷泉屋の

求むるがまゝに布袋と並んで撮影などするのも一興である。溪流に臨む春淙亭の清趣は、流るゝ溪谷の水に映じ、一段の涼味を感ぜしめてゐる。第二の山門を這入れば、雲に聳ゆる大雄寶殿は、驚くばかり天井高く、奈良の大佛殿にまさるとも劣ることがない位に感ぜらるゝところである。殿内合抱の圓柱は、何れも皆亞米利加カリフォルニヤから、三百年の昔取寄せた米松だと山僧は說明してゐた。

山氣香る靈隱の山は傳說に富み、その開山は甘露出の老書生で、南宋臨安の都がこゝにあつた當時、湖畔には毎日毎日姿を現はしてゐた綠衣の美人（實は宮へ仕せし女官の精）と同棲し、寢物語りの怪奇に世を捨てゝ大悟徹底したものだといふ「綠衣の美人」の話の主人公である。

山門を出ると、路は湖畔から遠ざかり、飛來峯の裏山へと進めば、靜寂の氣身に迫る溪谷の間に入る。奥の幽境に下天竺（法鏡禪寺）、中天竺（法淨禪寺）、上天竺（法喜禪寺）の三禪寺がある。何れも六朝から隋時代の開山に係る。江南の天地、天竺詣での信仰の力には、頗る堅いものがあり、毎年浙東浙西各地から、清明の彼岸頃、青衣の胸に黃色の頭陀袋を提げ、チリン〳〵の鈴の音も優しく、菜種咲く畑の畦道を縫ひ〳〵、湖畔に集つて來る善男善女の團體は、驚くべく盛んなものである。恐らくその參詣人は、毎年數十萬を下らないだらうと云はれてゐる。若しそれ、新新旅館の高いベランダの上あたりから之を眺めてゐると、未明の曉鐘の聞ゆる頃、靄のうちを引き切りなしに集まり來たる

連中のうすぼんやりとした姿が見える。先きの方に動いてゐる善男善女の俤は、朝霧にかくれて見えないが、靈隱の山道にさしかゝり、何れ山門前から深く這入つて、結局天竺まで續いてゐることであらう。恐らくこの三天竺ぐらゐ、春のなまめかしい行列を引つけてゐる禪寺は、江南の地には他に見出されない。土地の俗語に「天に天堂あり、地に蘇杭あり」と云はれてゐたり、又古からよく「食は廣州に、死は柳州に、そして墓は杭州に」といはれてゐる句もあつたりする位である。江蘇の揚州が享樂の天地であることは云ふを待たず、又廣東廣西で柳州の壽材を知らないものはない。それに次いで杭州は、西湖々畔が永久の眠りに這入る隨一の天國樂土であると信ぜられてゐるのは、尤もなことである。そのため南方の支那人たちは、そろそろ老境に這入つて、半ば棺桶に足をつつこんでゐるとでも云はるゝ手合になると、毎年その切り詰めた生活費の中から、天竺詣での旅費とお賽錢とを工面する。そして何をさて措いても、遠い水村山郭からはる〴〵天竺さして巡禮詣でに出かけて來る習ひである。實際天竺の彼岸詣での盛んなことと云つたら、この季節に出くはした日本の旅人など、誰れしも驚かされぬものはない。老いも若きも輕快な扮裝で、杖をひきながら尻上りの浙江なまりを賑やかに操つり、春の日永を笑ひくづれつゝ參詣してゐる情景と云つたら、これは又何んといふ西湖の長閑さであらう。

天竺の奥は山が深く、全山竹林で蔽はれてゐる。その趣きは、江南第一の眺めがある。この竹林は、悉く孟宗竹で、幽徑を辿りつゝ境中を探るのである。浙江の特産として知られた竹の村とその加工品は、天下の竹工のあまねく賞美する所のものであり、日本の岐阜提燈に用ひらるゝ、青竹の材も、この界隈から出て上海を經、我が伊勢灣へと輸送せられてゐる。毎年春の筍が成長して、山を越え谷を渡り、新しい竹林として、ずんずん擴がつて行く有樣は、實に驚くべきもの、今や無慮幾百萬株に達してゐることであらうと思ふ。季節の時分に、藪の中に這入つて見ると、その各株の五六尺の處に、黑の桐油で買主のマークが悉く入れられてゐる。その取引きは、かなり大規模のものらしい。日本からも農學士の特志家が天竺の山に行つて、その竹林の業に從事してゐたが、昨今は一向姿が見えない。

由來江南の地は、江蘇といはず、浙江といはず、竹林に富んだ地方が多く、靈隱の奥、避暑地として有名な莫干山（モツカンシャン）から竹林寺あたりを始めとして、竹林の名所は數限りなくある。千五百年の昔、例の竹林の七賢が現はれて、史籍の上に稱へられてゐるのは、有名な話であるが、さぞ七賢人は、毎日藝蚊に攻められてゐたことだらう、天竺の奥、竹林の香高き小徑を、爪先き上りに、山を登れば、棋盤上から嶺づたひに、南高山の頂上に出らるゝ。龍井（ルンヂン）の禪寺や龍井の銘茶で名高い茶圃の谿谷、盆地などが、その先きの方に見下ろされる。右に左に見渡さるゝ峯みねの山境は、すべてこれ雀山で、吳竹

が邊り一杯に叢生し、山骨、壘々、岩と云へる岩はすべて、これ太湖石の奇怪な姿をしてゐるものみである。巨人の仁王立ちに似た形したもの、天成の水盤そのまゝの形したもの、狂熊亂舞、誠に變つた樣々の姿を見せ、その奇岩怪石の趣は、いくら天然とはいへ、夏雲に仰がるゝ奇峯の如きもののみ、面白く打續き、或はその洞穴の自然に穿たれたるがあるかと思ふと、その中から吳竹の丁々と伸び生ひてゐるもの、さうかと思ふと、その岩の窪みをなせるところに、夜來の雨が溜り、自ら庭の水盤を思はせてゐるやうなのがあり、或は又急に相迫つた岩の間に、數株の竹窒が枝を出し、その裏は介字の狀そつくりで、所謂南畫に見る寒巖竹石の詩趣を目の當たり現はし、天下の文人吟客が古來描き來つた風竹、洞孔の竹など、すべて圖らずもこゝに體驗することが出來る。日本の四君子を學び、墨竹を稽古せんとする者は、必ず西湖巡りから一歩を進めて、こゝまで深く足を運んで見たら、得る所が多いことであらう。三潭印月の蓮池に見る巨人姿の奇岩は、前にも述べたことがあるが、あゝ云つた奇石はこの山から運ばれたものだらうと云はれてゐる。かやうにして高山は、この界隈で名高い峯でもあり、又その山中到る處、雅な石材に豐富であり、又その形狀の珍奇であるところから、ひど く造園家の垂涎措く能はざるものとなつてゐる。江南の地には、尙太湖の方面にも無錫、洞庭のあたりにも、太湖石の産出する所は數々あるが、この山境ぐらゐ便利で、容易にその實際の見られる所ほあまりない。この石と竹の取り合はせは本當によろしい。昔から杭州の地が武林の名を持つて呼ばれてゐるがこれも、この地方竹林の名所多きに思ひ併せて、興深きものがある。

杭州の名物、龍井の茶は、この竹林の山境を中心として、邊り一帶の峯谷にかけ、かなり盛んに作られてゐる。この地は茶の栽培に恰好の條件をそなへてゐる所となつてゐる。嶺傳ひに細道を西へ西へと辿り行けば、隱君子の別莊らしきものがあり、柴門淋しく人影をとゞめてゐない。傍に瓦屋の工場があつて、日向りのよい廣場で盛んに作つて干してゐる處を見た。春の日永にしばし立停り、その作り方に視線を注いで見る。日本邊りとは大分やり方がちがふ。徑一尺もあらうと云ふ圓筒を型にして拵へた生乾きの泥筒を、型から取りはづし、之を糸で以つて四つに等分して切るのである。厚みは三分を出でない位の薄手のもので、日本の平瓦の如く厚からず、又その各片瓦には、への字なりになつた小峯がついてゐない。全くあの神戸湊川の瓦煎餅見たやうな形をしたものである。

峯を下れば、茶畑の急坂道となり、四方峯で圍まれ眼界は迫つて來る。丸で摺鉢形の盆地をなしてゐるが、その規模はかなり廣く谷間には遙かに製茶工場などのある靜かな里が見える。獅子峯、武華などと並べて、天下の三大銘茶と稱せられてゐる龍井の本場はこゝである。竹林の風流な名所と共にこれは又西湖の旅の序でに一巡して見るべきところである。

山麓に下れば、その苔深き崖下綠陰に、龍井禪寺の山門が見える。樓門を這入ると、最近鐘樓は改築せられ、面目を改めて來た。本堂は依然舊のまゝであつて、二尺大の古錆びた木魚が、薄暗の所に置かれてゐる樣子がもとの通りである。後庭に這入り大和尚を訪ねると快く、小僧をつれて庭前に姿を現はす。最近こゝを訪ねた時、案内せられるが儘に、崖下の八仙卓に和尚と差し向ひで語つた。大和尚には久振りのなつかしい挨拶があり、本場の龍井の熱茶が請ぜられる。和尚が庭で丹誠してゐる見覺えのある花柘榴は、今來て見るとよく咲いてゐる。思はずその鉢植を賞めた。又楓の盆栽などについても盡きない清話が交はされた。

すると、和尚は、崖下庭の一角に採集してあつた太湖石の一つを贈物にするから持つて行かないかといふ。好意は有難いが、何分外の物とはちがひ、荷物になる。次ぎの機會までお預けして置きたいと云つたのであつた。

山氣身に迫る如き感じのする龍井の禪寺は、西湖の畔の寺々とは違ひ、その位置が幽境に僻在するだけに、自然訪ね來る人も少い。山門を辭し去り石徑を斜に下れば、眼界やゝ開け、龍井の小亭に出る。康有爲の筆鮮やかな「龍井寺」の文字を掲げた四阿で、飛檐の趣に富んでゐる。山を行く樵夫老農の憩ふ所となつてゐるらしい。左右にある古井戸の水は、常時湧き立ちかへり、飛沫云はん方なし、山人はこれに神龍が棲み老い、あの通り水を蹴つて活躍してゐるのだと、かやうにこの光景を解釋してゐた。成るほど、龍井の名はこれから出たものだと見える。山麓を巡つて湖畔に出る道を辿る。湖水を隔てゝはるか彼方、初陽臺上の保寧塔や、葛嶺の頂上、葛洪廟の道觀など、薄もやのうちに仰ぎ見られ、孤山湖心亭の水景に、三潭印月の垂柳は、湖上の靄に眠るが如く見えてゐる。南屏に聳えてゐた雷峯の塔姿も、今は見られなくなつたので淋しいが、唐の昔、日僧空海の巡錫地として傳へらるる淨慈寺の山門は、近く右手に參詣者を迎へてゐるやうに指顧される。湖畔を淨慈寺の山門から離れて右に錢塘江畔の南星橋（ナンシンチャオ）へと路を取る。仰ぎ指す山々は、左も右も穩かな興味を帶びた峯である。中にも形のよい大慈山の峯に仰がるゝ頂上の森には、道教の寺があつて、邊りを護つてくれてゐるやうにも見える。路傍谷深き所に、虎跑禪寺の山門があり、山下の細道を辿り行けば、空院落花深きところにその古寶殿を見る。山中ながらも、機敏なる寫眞師の出張してゐる者などがあり、參詣者の足音をきくと、しきりによい掠鳥とばかり話かけて來る。寺男の待遇振りも叮嚀さうであるが仲々油斷はならぬ。下手をすると、寺男に似ずウンとぼられることがある。しかし寫眞の方は、自分どもも記念に撮り、料金送料を拂つて置いた所、約二三週間の後、正直に三枚一組取揃へ、郵便で以て送り屆けて來たのであつた。この邊の心理人情には、連中ども餘程堅い所があると云へる。

いよいよ西湖の湖山をうしろに、今や錢塘江に巡り出た。音に名高い錢塘の六和塔は、江南第一の大塔とも云はれ、山の中腹に、江を壓して高く雲表に聳えてゐる。何んともいひ知れぬ雄大な光景を江岸に投げてゐる。寺は開化禪寺と稱し、西湖々畔寺巡りに出かくるとき、最終に訪ぬる靈場とされてゐる。こゝで集印帖を開き、寺僧から寺印を受けるものが多い。塔は十三層樓、眞に江南第一の名に恥ぢない。塔に登つて展望を恣にすれば、杭州城外から、錢塘の上流、下流、又江を隔てゝ浙東の天地、紹興、寧波の方までも見渡され、雲雀の聲は遙か下界に聞えてゐる。恐らく杭州の旅に來て、この六和塔ぐらゐ、高樓萬里の眺めを自由にする所は外に求められぬ。

脚下には、對岸の西興に渡る吳越同舟の義渡、曳船に引張られてゐる、渡船の動きを見るなど、感深きものが數々ある。浙江の旅は、誰れしも西湖見物で持ち切りであるが、更に一歩こゝまで進めるとよい。この邊りぐらゐ又日本人の目を喜ばせる景色はない。安徽の奥地から、先年茶の荷物を積んだ民船に便乘し、峽中の開口、威坪、淳安、嚴州、桐廬、富陽、閘口などの港々を漕ぎ下つたことがある。その時の思ひ出などもあるので、自分にとつては錢塘祕境の民船下りは、殊に人一倍なつかしいものがある。

錢塘江畔かみ手の富陽から今は乘合のバスが通ふやうになり、六和塔の下を通り、南星橋から、江畔を離れ、山下を城内に這入り、西湖湖畔から、拱宸橋まで、常時通じてゐる。杭州の旅には、このバスを利用するとすれば、時間が大變省けるわけである。

錢塘江は支那隨一の江口の廣い流れで、舟山列島を前に、百哩近い幅を有し、大きな灣の恰好になつてゐる。所謂杭州灣とはこれである。毎年時を定め、世界的に有名な大潮の押寄せて來る觀潮は、八月十六日、又はその前後に見られると云ふことになつてゐるので、上海から臨時列車までも出る位である。杭州行の火車に乘り長安の驛で下車し、海寧まで民船で下るのが、一等よい順路である。海寧に行つたら、大觀亭の高塔のもとで待ち受け、そこらで見るのが最もよい場所だとされてゐる。若し夫れ自らこの地方獨特な魚眼の彩色麗はしい民船にでも乘り、纜綱を切つてその大潮の波浪に乘つかり逆巻く怒濤の勢を利用して、その力のまゝに舵を取り遡行するとすれば、見る見る六和塔の下はどんどん行つて、富陽、桐廬からまだ〳〵かみの嚴州或は本流の蘭溪、衢州邊りまでも上れる。その間檜一つ漕ぐの必要もなく、唯舵をとつてゐるだけで以つて上れるのである。

○

杭州城内の見物は、鬼角西湖巡りで時間をとり、城内巡りはおろそかにされる傾きがある。湖畔に

近い湖濱路、迎紫路を始め、茶館、酒樓、芝居、活動、旅館などのある大きい通りの界隈は、市區改正で、道幅が廣くとられ、淡紅色の小砂で路面が補裝されてゐる。

湧金門外、吳山街道あたりは、楊柳の並木もなまめかしく、絲草の廣場などもあちこちにあり、城内とはいへ如何にも暢びやかな湖畔氣分を漂はせてゐる。しかし舊城内の金泉巷から馬市街あたり、高壁相迫れる純支那街の中に這入ると、路面の鋪石の下は下水になつてゐる。時にはその路面に鋪かれてゐる石の下に、盛んな水流を見ることもある。

市中の飲料水は、城内でも有數な大家と云ふところでは井戸を持つてゐるが、多くは井戸を持たず、西湖までわざ〳〵出かけ、湖水の水を汲んで來る。これを濾過することもなく使用してゐる。

城内目抜きの處は、清河坊（チンホーファン）を中心とした邊りで、銀號（銀細工屋）、緞綢店、雜貨店などの、大廈高樓が軒を接し、武林筆で有名な邵芝巖あたりも、その並びのうちに見えてゐる。筆墨を求める雅人は、必ず自分でこゝまで訪ねて行く。尚市中には、四明銀行その他の銀行會社、省政府、市黨部、兵營なども見られる。

寺廟の大きいのは、前に述べた吳山に聳ゆる城隍廟で、山下の井水は城内第一の玉泉と稱せられ、これに天秤棒で汲みに來る男女は引切りなしにある。何れも夏は水桶の蓋に蓮の葉を用ひてゐる。その水汲みの風情にも、城内の邇足した婦さんたちが混り、井戸端會議の始まるときは、かなり賑かである。背景をなす舊家の土塀には、蔦が一杯からみつき、小鳥のとまつてゐるのが眺められる。

日本人の杭州巡りには、出來ることなら、日本の專管居留地ぐらゐは一瞥しておく必要がある。湖畔から大分距離はあるが、陸に運河に交通の便は幾らでもある。幾十萬坪の我が居留地は城外拱宸橋の一角にあり、十軒足らずの長屋の一と並びがそれである。一時は日本人の影も多少見えてゐたが、今では全く日本人は影を見せてゐない。

大谷光瑞倪下が、一時こゝで香水畑を經營し、機械の備へつけまでして居られたが、その後ジヤヴアに土耳其にと進展飛躍せられ、杭州の方はその後荒れ地同樣の姿となり、草深き野原と化してゐる。草むらに鳴く秋の蟲も、月の夜は日本の心細さを訴へてゐるかのやうにひゞいてゐる。日本の人に問題の八釜しき折から、かうして遊ばせてある杭州居留地問題こそは、日本人客たるものの、何んとか頭を捻るべきものではないであらうか。杭州の領事館にも、亦西湖の湖上に客を案内することのみをもつて事足れりとせず、ちと拱宸橋の荒れ野原の方へも案内せらるゝやう注意すべきである。以前こゝに農學士の君の根據を掘ゑて、天竺の竹を纏め、遠く日本へ輸送などする仕事に從つてゐられたのであつたが、今となつてはすべて皆夢物語りのやうになつた。

杭州巡りは殆んど西湖巡りでつきてゐる如く世人に考へられ、ほんの遊山氣分で出かける客の多いために、折角の日本の居留地など頭にない。日本人の支那の旅は兎角これである。今後はなるべく多方面に亙つてあらゆる點に見聞を廣むるやう、行く者も、案内する者も、大いに心掛けてゐてほしい次第にある。

杭州の近郊で遊ぶべき所は、秋の獵の季節には、龍井の奥から、葛嶺の裏山一帶にかけ、兎だの、鳥だの、隨分とれる獵場がある。

又民船を傭ひ艮山門から漕ぎ出で、運河に沿うて、城外拱宸橋の方に向ひ、緞子の製造工場など見て、小蒸汽か、曳船で、田舍の水鄉巡りを試むるのは殊にゆかしい。新柳の佳節、春のぼか〳〵した菜種畑を兩岸に見ながら、殆んど網の目の如く細かく走つてゐる運河を、或は東の方嘉興（カヽシン）に、又北の方湖州に、或は南して德清（トクセヽ）に、三橋埠に、莫干山にと出かけ、又時間さへあれば、湖州より太湖の沖合ひへと乘り出し、或は西北の長興あたりまでへも出かける。

凡て浙江の田舍は、行つて見ると全くの水鄉つゞきで、運河が非常によく發達してゐる。その點は恐らく日本の人々の豫想だもしてゐない所である。江蘇浙江は、大小の湖水もかなりあるけれ共、掘割運河の發達は實に驚くべきものがある。太湖を中心に、水路は殆んど放射狀に、又それに大枝小枝と枝がさいてゐる。その海面と湖面の殆んど同じ高さにある所から、その水運の發達も、自然に叶つたわけだと察せられる。これは火車の旅ばかりしてゐるものには全然解らない。昔から南船北馬の言葉にもある通りであるが、殊にこの地方は特別に水路に惠まれてゐるところである。

今假りに拱宸橋の石橋のもとから船出して、曳船で湖州へと運河を辿るとせんか、岸の田園は凡て湖桑と稱する桑樹の畑で、これが又見渡す限り地平線まで、一望千里の桑田つゞき、流石古の吳の國の跡だけあつて、その如何に養蠶業の盛大であるかを思はしめてゐる。その桑の幹は、何れも直徑五六寸大で、高さ六七尺の所で細かい小枝を出してゐる。

湖州

湖州は、支那四百餘州に、その名も高い名筆、卽ち湖筆の出る本場であつて、上海にも北平にも、天下到る所にこゝの筆が出てゐる。毛は羊毛、狸毛、狼毫、鷄毫など各種あるが、何れも皆文人墨客にひどく愛用せられてゐる。王一亭の如き、又金絹城の如き、日本人に親しみ深い文人肌の人々で、この地から出てゐるものはかなりある。土地柄が又風光明媚、山水の雅趣に富んでゐるので、自然の風土がこれを生んでゐるものとも見られる。

西の方安吉の水郷からは、故吳昌碩翁を出し、浙東上虞の水郷からは羅振玉翁を出してゐる。その他清明元宋各時代に、文人學者を出してゐることは贅するまでもない。

湖州は邊鄙の所ではあるが、上海からも、蘇州からも、毎日船便があり、到つて交通の便に富んでゐるところである。一遊を試むべきである。

莫干山

南の方、運河によつて德清に出で、西に折れて三橋埠（サンキヨウブ）の碼頭に船を捨てこゝに上陸する。周の昔、干將莫耶が劍を鍛へたといふ有名な山がこゝにある。莫干山（モカンシヤン）と云ふがこれである。轎上の人となつてこの山に遊ぶ。莫干山は、南支では廬山につぐ夏の避暑地として有名な山で、前にいふ通り全山竹林、高さは三千尺、赤瓦の別莊が竹林の間にあちこち隱顯し、頂上の遊園地は、避暑客の逍遙に最も氣持よき設備を施してゐる。鐵道旅館があり、商務印書館の分館もあり、夏は朝一番の上海北站發の火車で立てば、夕方これに登ることが出來る。夏季には、臨時の避暑列車が通ひ、又嘉興から臨時の小蒸汽も通つてゐる。山下の馬車屋で、先年休憩をした時のことである。正面の壁に木版刷の繪で「大東洋大震火災」と題した素晴しい光景の掲げられてあつたのを見た。三越、被服廠跡、横濱正金などの火炎に包まれた慘狀、飛行機上、日の丸の國旗を出して波多野中尉が大阪まで飛行してゐる光景、それから二重橋の雲の上に大正天皇様がインバネスをめされて、市中の慘狀に叡慮を惱ませられてゐらるゝ所、或は又その續きになつて次ぎの紙には、中華民國から屆けられた山なす慰問品の前に、ホーバの下駄をはき、衣腕に至る左袵姿の青年男子が二三人、恭々しく受取つてゐる光景など、誠に質朴な描き振りではあるが、實に面白く出來たものであつた。意外な片田舍の山下に、日本に同情を寄せた涙ぐましい隣人愛の溢れてゐる樣子を見て、ひどく動かされ、何とも云へぬよい氣持がした。

莫干山登りは、路は新道を上る方がやさしい。舊道はひどく、道面は惡いけれ共、此の方が趣きに富んでゐる。先年冬、之に登つた時は、夜中轎子を仕立て、或は乘り、或は歩きゆる〳〵頂上の鐵道事務所まで辿りついたのであつた。夜半のことゝて、山中萬籟寂として聲なく、唯溪流の音を幽かに聞くのみであつた。路上、絶えず轎夫を勵ませたり、ユーモアやエロで笑はせたりしながら、思はず急坂を突破させたので、何んら事もなく面白く登つたのであつた。

頂につくと、事務所に到り門を敲いたが、容易に入れてくれない。つぶさに來意を說明した揚句、漸くのこと奥へ通した。係りのでつぷり肥つた季國梁といふ先生が出てもてなしてくれる。しかし轎夫連は、自分のたのみ込む努力の甲斐もなく、締め出しを喰はせ、どうしても這入ることを肯んじな

い。止むなく邊りの樵夫の家に泊せしめ、自分は事務所の一室に案内され、山の歷史傳說などにつき係りの連中と語り合つたのである。

始めの程は季先生も、すげない取扱ひ振りのやうであつたが、次第に氣持ちも判り、よく諒解して來た。そしてどこから聞き覺えたか、日本のイロハ、アイウエオを學びたいなどといひ出した。それから又夜食に何をつくらうかなどと云つて、先生、自分で山の料理をやつてくれたり、果ては自身の寢臺まで提供して新しい毛布を持込んだり、俄かに待遇振りがよくなつた。又麓の運河に架つてゐる啞子橋の傳說、迷信の話などもしてくれたりと云つた風で、頗る趣味の深い莫干山の一夜を過したのであつた。

爾來歸朝してからも寫眞だの、案內記だのを送つてくれたり、こちらからも郵船の友を二三紹介してやるなど、情交溫きものがあつた。恐らく日本人は、夏の山と云へば、廬山の方にのみ傾き、莫干山の方は忘れてゐる。支那の名流大官共もよくこゝに會合を催し、自然美のうちに事務を執るといつた風韻が見出される。

莫干山の旅は、一人旅であつた上に、おまけに、冬の夜の登山であつたために、他に同行のつれもなかつた。始めに麓に上陸したとき、あたりの村夫子の所に行き、轎夫共立會ひの上で、轎賃を定めたのであつたから、再びあとで又そこに歸つて來て、そしてその村夫子の前で仕拂ひをすませた。大震火災の貼紙のあつた轎屋にも立寄り、好記念にこれをはがせ、剝がせ賃二十錢と云ふ思ひ出話もあつた。山を下りると、同じ三橋埠の碼頭から運河によつて杭州へ歸る。その途中の水鄉のうちで、德淸の手前にある石橋は、有名な傳說のある啞子橋である。

橋下に差掛ると、吳越同舟の乘合客は、何れも皆パツタリ無言の境に這入る。それとは知らないで自分は一人喋つてゐた。すると、船頭も客も目くばせにまばたきして、自分に默まれと注意してくれる。何んのことかさつぱり自分には解らない。全然口にマスクがかけられたのである。そして四人の船頭は、前に二人、後ろに二人、漕ぐ腕と踏んばる足とに調子を合はせ、一所懸命の樣子である。眼鏡橋の下を出てしまふと、始めて一同は朗らかな調子に歸り、物語が始まる。そこで橋名の由來を聞けば、これが例の「だんまり橋」であるといふことが解つた。莫干山上、季先生から聞いてゐた傳說によると、この橋のあたりの水鄉は、年が年中こゝで民船の難破轉覆の騷ぎを見るのである。懸命に船頭をして漕がせなくては、流れは速く、危險である。若し船頭にして家の話に聞きとれ、手がお留守にでもなると、忽ち船は進路を失つて飛んだことになる。この種のいひ傳へのあの石橋拱橋は、江南各地で時折り見聞するが、こゝは又特に聞こえても居り、橋の造りも見事で、古色蒼然殆んど橋側

の名前の這入つた刻銘も讀めない位に、一面に蔦が被うてゐたのであつた。錢塘江の北邊の話は、これくらゐにとゞめ、次には南邊に渡つて、浙東の天地について紹介することゝする。

浙東の旅

錢塘江を南に渡れば、對岸一帶のひろい天地は、之を普通浙東と呼び、山水の美に富み、和風綠野を吹き、風光又一新、宛ら日本の片田舍を歩いてゐるかの情がある。事實又浙東の田舍には、百姓屋の戸口で日向ぼつこしてゐる老媼が、鍋に繭を煮ながら手繰りの糸取りで絹糸を紡いでゐる趣きや、又古絹を源氏窓の中でビーン、ビーンと音をたてつゝ打直してゐる綿屋の風情の見ゆるなど、明治の昔を思ひ起させる處がある。或は界隈の田畑のつくり方から、低い松山の起伏してゐる優しい景色、農家の木造建築の樣子、水邊に啄む白鳥が、靜かに波紋を描き戯れてゐる場面など、どこからどう見ても日本の寒村僻地の趣きとよく似てゐる。氣候の點から見ても、このあたりは我が日本と同樣である。漢字の發音に所謂呉音といはるゝもののあるのも、この邊の土語と相似てゐる處がある。

しかし二十有餘年の昔のことを考へて見ると、この浙東の天地は大體越の國であつて、有名な越王勾踐が、呉を破つて歸つたあの歴史に名高い會稽の山もこゝにある。又更に四十年の前、堯舜の次ぎの禹王が、水を治めに、巡狩された臨終の地も亦こゝにある。兎も角古來の傳說、歴史に富んだ舊跡の多い所で、南支の旅には一巡の價値の十分にある所である。

殊に又特筆すべき最近の現象としては、大上海の關即ち浙江財閥なるものは、その浙東の天地から人物を輩出し、寧波の如き重要な經濟都市も有してゐる。今日上海に於ける數ある會館のうちで、寧波會館ぐらゐその内容が充實し、人物を多く出してゐる所はない。浙東の奥地では、商取引の上で重きをなせる山間都城の蘭溪があり、又常山があり、一時杭州から蘭溪までは水上飛行艇を浮べ、モダンな商取引を試みてゐた者があつた。又常山は古硯で知られた常山石の硯材を出してゐる。

杭州より寧波へ

寧波の旅は、上海を起點として、外海を舟山列島から這入つて行く海路もあるが、こゝには海路の方は後廻しにして、先づ錢塘江を渡り紹興經由の内地を行く路をとる。

錢塘の渡を南岸にあがれば、江岸の乘合バスの終點驛がある。以前は遠淺の泥地であつて、とても踏み込めた場所ではなかつたが、二三年この方、江岸から西興、蕭山、紹興經由で、東の方曹娥まで、坦砥の如き自動車路が出來、殆んど人通りのない廣い道を、バスが我が物顔に去來してゐる。

曹娥から曹娥江の義渡を渡れば、百官の車站があつて、一路寧波（ニンポー）に通じてゐる。この百官、寧波間の火車は、所謂寧滬杭甬鐵路の東端四十八哩を形づくるもので、今以て曹娥杭州間の鐵路は完成してゐない。曹娥江には鐵橋の橋脚だけは、獨逸人の技師によつて往年つくられたが、世界戰爭の始まると同時に、技師は去り、枕木レールなどの橋畔に堆積されてゐたものもいつしか何者かに持去られてしまつた。今では寧波から上海に出る鐵路は、この一部分の敷設中止になつてゐるために、中斷せられた形になつてゐる。こゝの處さへ錢塘江から通ずることになれば、結局寧波を起點として、上海、南京、天津、北平又奉天哈爾賓へと火車で以て北上することが出來るわけである。

蕭山を中心としたこの邊りの農村は、見渡す限り桑田よく開け、煙突の高く聳えた大規模の製絲工場（絲廠）なども、城外に設けられてゐる。田園に見る農夫は純朴であり、老農と道づれになり、急がない旅を共にするなどは殊に面白い。蕭山に於ける浙東第一旅館に宿を求め、運河を悠々民船で乘り廻し、老農田婦と共に、水鄉の旅を續けて見るのも亦一興である。

紹興及びその附近

紹興（シヤオシン）に近づくと、運河の兩岸には、明末清初に出來た苔むす牌樓が多い。何れも藝術美に富んだもので、その數は幾百となく仰ぎ見られ、旅行く人の懷古の情を唆つてゐる。南支各地方で、石造牌樓のこの地方ぐらゐ數多集つてゐる所は見ない。

紹興には、城内に紹興旅館、或は浙紹旅館などと云ふがあつて、最近はひどく共産黨員たちのために荒らされてゐるが、客の持てなし振りはよい。城内は、府山の望越亭から見るのが一等よい。すつかりその全景が手にとるやうに判る。ともかく水鄉が多く殊に古い都城だけあつて、越王橋だとか、望越亭だとか、その由緒の深いものがどつさりあり、相當名家の跡も見出される。又運河に浮ぶ民船には、紹興獨特の五彩濃厚なものが見られる。その船側には金殿玉樓の圖樣を表現した畫が描かれ、どうかすると檣の尖端にまで、寸地も洩らさず細かく描かれてゐるのを見る。これは紹興隨一の呼びものであつて、昔から、青雀舫、又は鷁首の畫舫として鳴らしたものである。

紹興城内で懷かしいものは、上にも述べた越王橋の石橋である。そゞろに橋畔に立つて、邊りの歷史沿革を回顧して見ると、詩的情緒のそゝらるゝものが多い。二千年の昔しを吟じた有名な詩に、左の七種がある。

越王勾踐吳を破つて歸る
義士家にかへりことごとく錦衣

宮女花の如く春殿に滿つ
只今はたゞ鷓鴣の飛ぶあり

越中懷古　李白

越王勾踐破吳歸　義士還家盡錦衣
宮女如花滿春殿　只今惟有鷓鴣飛

とあるなど當時の盛事を實によく思ひ浮べてゐるものがある。しかし今はその五彩美しき紹興の民船を見るにつけても涙ぐましいたねとなるもののみである。最近その船の姿も、段々と見えなくなつた。昨年の遊歴の時には、自分はひどくこれを痛み、城内の船頭に聞いて見た。すると、かう云ふ事情があるとの事を耳にしたのであつた。土地に此の頃出來た曹紹汽車公司（自動車會社）の手合が、自分たちの乘合バスの客を一手に吸收せんとする魂膽から、之が妨げになるといふ考への下に、これまでの美船を邪魔扱ひにし、立行かせないやうにしたのだといふのである。しかし恐らくその裏面には、例の赤い手が動いてゐたものだらうと察せられる。

城外には、又日本の技師の設計した大規模の電燈會社もあるが、今は支那側が一手で之を經營してゐる。

尙紹興の街が天下に最も鳴り渡つてゐるのは、その理由が二つある。それは人も知る例の紹興酒（シャオシンチュ）或は紹酒（シャオチュ）の産地であるためと、今一つは、王羲之の昔を偲ばしむる蘭亭の舊蹟があるためである。

紹酒の方は、この地方一帶清水の良質なのがあることと、米作の特に佳良であることとに起因するのである。各省各地を通じて、この酒の右に出る芳醇な支那酒は外にない。アルコール分は少なく、年數が經てば經つほど、質がよくなり、香りが高くなる。もと糯米を原料として釀したもので、泥の壺に入れ密閉したまゝ蓄へられてゐる。面白いことにこの地方では、女の子が生れるとこの紹酒をかもし、嫁入り時にそれを持たせてやるといふ風習さへもある。それで之を「嫁入り酒」とも呼んでゐる。特にそのうちでも上等の酒を、花雕（ホワチヤオ）と稱し、口當りがよく、文人墨客に賞味せられてゐる。紹酒は四百餘州に送り出すだけに、年產額も極めて多く、その酒壺の河畔に堆積せられてゐるものを見ても、ピラミツトの如く天に高く沖してゐる圓錐形が仰がれ、實に偉觀を示してゐる。先年の紹興遊歷のときであつた。正月の雪の日に、この地の月牙池、平德福（ピンヅフ）先生の宅に客となり、之を訪ねた時分には、同君の老翁がゐて、特に自分を待遇し、戸外は銀世界の靜かな晩であつたが、先祖の神像を描いた掛軸を前に、新手の祝物など數多供へられ、本場の紹酒のよいのをこゝで御馳走しますからといつて、適度な燗をして祖先傳來の高雅な玉盃まで持ち出し、之を互に傾けて、一杯一杯又一杯と、つき

ぬ雅宴を催したことがある。主客歡をつくして、三代の金石などについて語り明かしたのであつた。

次には天下に知れ渡れる蘭亭である。こは城外三十支里の山境にあり、千六百年の昔永和九年晋の王羲之が、時の群賢を集めて曲水の宴を蘭亭に開き、水上盃を流して一觴一詠の催を開き、その興の盡くる所を知らなかつたといふ有名な史蹟のある所である。この蘭亭に出かけて行くには、紹興の東(トン)廓(クワク)門の水門から城外に漕ぎ出て、運河を南へ、郊外の水鄉をめぐり、婁(ロウ)公の碼頭で船を乘り棄て、こゝから驢馬によつて山麓を溪流に沿ひつゝ分け入るのである。

山陰の麓、溪水の瀠流するあたり、綠林深き所に風流な曲線美を描いた樓閣の聳えてゐるのが見える。こゝが卽ちその王羲之の蘭亭の遺蹟である。正面の門前、橋の落ちた流水を徒ち涉り、境内に這入つて見ると、康熙帝の御筆「蘭亭」の扁額のかゝつた門や、又乾隆勅額のかゝつてゐる「流觴亭」の飛閣などがあり、又その向つて右手には、右軍祠堂の古建築などもある。羲之に因んだ碑石、對聯などこゝに數多集められてゐる。又「鵞池」の刻石を藏めた小亭も見當たる。拓本をとる雅客が多いと見えて、石は漆黑に染まつてゐる。

曲水の跡と稱せらるゝ所には、草が蓬々と茂つてゐるが、そこには石が澤山藥研形に並べられ、水の瀠流するに便じた仕掛けが見られるやうである。今はそれに泥が溜り、雜草深く、殆んど見る影もない有樣である。唯老梅の古木がその邊りに立ち並んでゐるのを珍とする位のものである。上述の乾隆勅額「流觴亭」のかゝつてゐる所には、又他に珍らしい對聯が讀まれる。曰く、

寄傲林邱三春陶和氣
散懷山水千歲挹遺芳

この十八字は最も印象が深い。その外曲水に因んだ文句には、曲水趣歡處と云へるものも見ゆる。流觴亭と右軍祠堂の間には、切り石で疊んだ深い水路が設けられてゐて、以前に訪ねたときには、ここに手で掬したい位な淨水が流れてゐたが、今はひどい汚水が溜り、見るからに何となく哀れをとゞめてゐる。

山下に一人の番人が居る。けれども唯營寢を事としてゐるらしく、格別淸潔掃除のことなども考へてゐないやうであつた。境内隈なくあるいて見ると、最近には共產黨の靑年どもが、手酷しい文字をあちこちに揭げ、史蹟名所保存も念頭にないらしく、徒らに荒廢に任してゐるのは殘念に思はれてならない。裏の畑の隅に、沈家と云ふ小さい農家がある。娘さんを訪ね、曾遊の時の二人の少女桂英と秀英と云ふものにもあつた。その時は立派な乙女になつてゐたが、昔はお菓子を與へんとしたとき、はにかんだ思ひ出ばなしなどして笑つた。

蘭亭の歸り途は、もとの山下を辿る。頻べにに總角の可愛い飾りをした稚子などのつどひ遊んでゐる處を過ぎ、婁公の船着きに出る。歸りは婁公も素通りして、林中を辿り、休み休みしつゝ紹興城内に向ふ。路上林下の新しい石牌の文字を見ると、共産黨の分子が「この邊り刻字の碑など立つる者を見るなら、見つかり次第制裁を加へる」との物凄い文句を掲げてゐるのを見た。もし今日、王羲之がこの文字を見たことなら、さぞ泣くであらうと思はれた。

紹興は、城外を運河によつて南に出て、蘭亭行の水路から右に折れると、會稽山下に大禹を祀つた禹皇廟に出られる。禹王殿に窆石と稱する古石がある。又東の方、水郷へ漕ぎ出ると、この界限で名高い東湖の名所に出る。幾十丈の巨巖峭壁が半天に突き立ち、屏風巖の狀をなし河水を壓してゐる。崖上には東湖精舍の古刹があり、界限土民達の游ぶ唯一の別天地となつてゐる。見るからに奇抜この上もない仙境である。崖上からあちこち銀線の如く光る運河の水郷を眺めやると、手と足で漕ぎ行く所謂搖櫓船（これは土語の發音であつて、一つに叉脚挖船ともいふ）の珍らしい姿が河上にあまた指される。此の船を漕ぐには、左右二つの櫂を一人のひとの手と足で漕ぎ別けるので、頗る珍らしく見られる。宛ら飛行艇が水上を滑走する姿にも似た恰好を示し、モダン氣分がたつぷり見出される。

紹興の旅にはかやうな珍らしいものが數々ある。その名物名所は忘れてならぬ。殊にその酒であるが、例の紹酒は、アルコール分が輕く、醉酊のうれひもなく、何處迄行つても眩線することがない。全くこは酒席の禮を守らしむるやうに出來てゐるのである。又この界限の水郷に見る優しい景趣は、恐らく天下一品と稱し得べきもので、實に山青く水清く、船は美しく酒はよし、全く浙東の旅の極致ともいひ得るところであらうと思ふ。巴蜀の天地に見る長江上流は三峽の豪怪な絶景に較べ、これは又瀟洒たる優しみの極致を示せる山水美であるといひ得るのである。誠に紹興と三峽とは、全支を通じて東西相對比すべき柔剛兩極致の名勝區域であると稱するも、溢美の言ではないと考へるのである。

曹娥、餘姚、慈谿

紹興を東へ寧波指して進むには、陸路をドライヴするよりか、矢張りこの風流な艮船、或は曳船によつて、運河を行くに限ると思ふ。紹興水郷の五雲門を出て、泰埠鎭、樊江鎭、東關の各水村、碼頭を過ぎ行くと、曹娥の船着に來る。こゝには越信旅館その他越安輪船公司關係の二三の小客棧がある。

この船着は、むかし漢の世に孝女曹娥といふ者が、その父親の誤つて江水に落ち込んだのを見て、之を救はんと自ら水に入つたが、そのけなげな思ひも屆かず、一週間たつた後、その少女の死體が、父親を抱いた姿で浮び出た。これを時人はひどく憐れみ感じて、その偉めこゝに祠堂を建立した。その

傳說がこの地名の由來であつて、かなり古い街なのである。

曹娥江を渡れば、かなたに桃の花咲く百官と云へる處がある。寧波行きの車站は、江岸に近い小高き岡の上にある。鐵路を二十哩東に向つた處が、卽ち寧波の驛なのである。沿道には五夫、馬渚の諸驛があるが、そのうち目星しい所は、餘姚と慈谿である。

餘姚は明の王陽明、朱舜水の兩先生を輩出してゐる所で、精神文明の上にかなり社會的に感化力を與へてゐる。餘姚の城外、龍山の丘陵は、あちこちにと五つある。その一つに、王陽明先生父子の坐像を祀つた祠堂がある。神像は泥細工で出來、之に紅藍の俗惡な色が塗られ、堂前には界限の田家の鼻垂小僧達が群り來たり、日向ぼつこなどしてゐる。しかしさすがに教へを後昆に垂れた先生だけに、心ある後人の扁額、對聯などを獻納するものが多く、堂内にはそれがあまた掲げられてゐる。

又城外の水鄕、竹山橋の袂には、養金局がある。友人の王雨耕君などと、こゝに數日泊したことがあるが、附近の尼寺から窓外に洩れ聞こゆる「ナモセ、ナモセ」の念佛は、その聲も優しく、夕映に輝く白鳥の水に戲れてゐる光景など、一幅の畫のやうに思はれた。

慈谿の街は、この界隈でも市場の盛んな所である。街外れの湖水の彼方に見ゆる山門は、唐時代の石幢の遺物を有する由緒深き禪寺で、普濟禪寺とある古い扁額が見える。和尚の定法、大禪師と云ふは、度々自分も訪ねた事がある。見るからに、圓滿な相貌をたゝへ、珍らしい懷かしみのある高僧である。訪ねる毎に詩僧書僧などを方丈の間に集め、精進料理で思ひ出の深い待遇をしてくれる。日本の訪客の筆蹟があるから見てくれといつて、書齋に通される。見ると、友人の水野梅曉師が、紙片に書き殘した佛蹟巡錫の述懷であつた。思ひもよらぬ所で、同君の筆を見たのでまの當たり本人に會つた氣持がした。清明の佳節にこれを訪ねると、賑やかな儀式も行はれ、數多の禪僧も集り來たり、檀家などのお籠り客もあつて、客堂はかなり賑ふのである。料理の氣のきいたのに、酒の味もよい。定法大和尚は、ほとけそのまゝの風貌をそなへられ、こちらから斷るのもきかず、歸る時は山門の外まで見送り來たり、手を拱き、その懃懇振りの情趣には、涙を催ほさせるものがあつた。全く大和尚のことなら、その溫かい慈悲の懷に溶け込みたい氣持さへした。

寺から程遠からぬ山麓には、白い菫の咲き亂れてゐる野邊がある。小徑をしばらく行けば、他の地方に見ない大きい墓陵の集まつてゐる處がある。時が清明節なので、その法會振りもそばに近寄つて行つてよく見た。彼方道教の寺清道觀へと通る。松林の間に蕨狩りをするなど、春の行樂を試みたときの思ひ出は深い。

寧波及びその附近

寧波は、古くは四明と稱せられ、郡縣衙門の所在地である。人口七十餘萬、甬江を挾んだ浙東第一の大都市で、城壁は桃形に圍く、市中を取り圍んでゐる。近來交通の發達と、蔣介石大人の根據地の一つとなつてゐるので、萬事近代式を標榜する景圍氣が、こゝには濃厚になつてゐる。近頃その城壁なども取り壞されて、新開の大通りに改められ、著しく市中の面目を一新した。鎭海を玄關口として、南北諸港との通商貿易も盛んであり、又慈谿、餘姚、紹興の諸要地を經て、杭州その他の奥地安徽省との取引なんかも旺んである。

凡そ江南地方で、寧波人ぐらゐ商業眼の鋭く、經濟の樞機を握つてゐるものは、他にないと云はれてゐる。その點で、支那民族は、凡て商業國民といはれてゐるぐらゐであるが、寧波はそのうちでも特にすぐれ、又第一人者をあまた輩出してゐる。從つて城内の目抜きに見る大厦高樓の店頭に於ける取引振りはもとより、一週六回に亙る大船は、次から次にと碼頭に横づけされてゐる。その時の光景といつたら、全く戰爭狀態と云つてもよいくらゐな景氣である。新北京、新寧紹、新江天、寧興などの大型の輪船が、夫々太古、招商局などの輪船公司の碼頭に横着けせられてゐる。何れも劣らぬ激烈な競爭で、上海寧波間の定期航路に從事してゐる。日曜を除く外の日は、上海は午後の五時に出帆し、寧波は午後の四時に碇を揚げてゐる。各船何れも三千噸級のものであるが、乘客は何れも毎航三千人以上を取り、甲板に、階段に、便所の側に、賄部屋にと、到る所立錐の餘地なきまですし詰めに乘せてゐる。階段には天井から網を垂れ、板を渡し、客の上り下りに妨になるなど、殆んど眼中にない。上下の甲板も、風被ひの厚布を張り廻して、二列三列にと座席をとり、大荷物を持ち込むといふ有樣であるから、到底踏み込めたものでない。わづかに外人客專門の洋艙（ヤンツアン）と稱する特別一等の所だけが、ゆとりを見せてゐるのみである。

上海を船出する時よりか、寧波の出船入船の時の方が、一層混雜の光景を示してゐる。恐らく支那各地、南は廣東、北は營口、何れの港にしても、寧波のそれの如く活氣の溢れてゐる所は見ない。

城内から洋關（ヤンクワン）碼頭に通ずる大通り小通り、又甬江に架つてゐる船橋の上にしても、殆んど往來と云ふ往來は、人馬車で互ひにすれ合ふ位であり、時折り黄包車轉覆の事故を見たり、荷物の衝突、破壞を見るなど、中々の騒ぎである。全くさすがの大上海にしても、この光景程の熱狂的取引場面を見出すことは出來ない。

城内には、又寧波獨特なる錢行街と稱する銀行街（チエンハンカイ）が、軒を並べてゐるところがある。京都風のしもた

た屋の構へで、店頭には何れも焦げ茶に塗つた細かい櫺子窓をつけてゐる。入口は大抵三尺ぐらゐ、奥は土間で之に卓椅子を置き、それぞれ店員は椅子によつて算盤をはぢき、流水帳その他に筆を走らせてゐるのである。見るからに、日本の關西あたりの街に見る趣きがあつて、如何にも懐かしさがある。上海九江路あたりの銀行地域の如く、洋風でないだけに古めかしい趣きが見え、算盤玉が太くて圓味があり、桁の上にたまの二つ重ねられてゐるのも亦何となく面白い。支那服支那帽をつけた寧波商人は、聞きとりにくい寧波語のはや口で日本と同じ、二一天作の五、六一下加の一などといつた式に、指で弾いてやつてゐる。重苦しく見えてはゐるが、そのうちに寧波式の機敏さが見え、何んともいへぬ寧波市場の情緒を物語つてゐる。

日本では銀行學の歴史專攻の武藤長藏教授が、長崎の高商にゐられるが、同君の面相を見ると、この錢行街がなつかしく思ひ出される。

由來弘法大師の時代から、遣唐使のおきまりの上陸地點であつたゞけに、奈良朝以來日本とこゝは緣の深い關係がある。その當時の留學生達は、こゝから杭州に出で、運河で北上し、西に折れて洛陽から遠く長安の都指して出かけて行つたものである。定めし當時の旅も、寧波の上陸宿で今と同じ南京蟲に襲はれてゐたことであらうと思ふ。

旅館としては、洋關碼頭に見る東亞大旅社、大東旅社その他一二の宿を見るが、何れも寧波氣分の見えた氣持のよい客棧である。

寧波で見るべきものは、上に述べた錢行街のほかに、佛寺としては、有名な天封塔（テンフホンター）を始め、七塔寺（チータース）とか、觀宗寺とか云ふ亙刹があり、殊に天封塔は城内高く聳え、市民の目を喜ばせてゐる。學術上では、乾隆皇帝の四庫全書の編纂に材料を提供した范氏の故宅が、城内南部の水郷に殘つてゐる。荒廢して今は番人さへもゐなくなつてゐるが、樓上樓下には當時の面目を偲ばせる扁額、對聯なども殘つて居る。又その書庫には、禁煙のことを注意した揭示板などもそのまゝ殘つてゐて、訪ねる人をして當時の盛事を偲ばせてゐる。

又市中には花鼓桶（フヮクートン）と稱し、この地方上流家庭の婚禮に用ひられる梓木製の桶形の優美なものがある。金銀紅綠白黃などの美しい乾漆を用ひ、人物花鳥などを盛り高く外側に現はし、内側には寧波の黃色のワニスを塗つた面白いものである。これは婚禮の第一夜に、「或るもの」を入れるためのもので、實に贅澤に出來たものである。その形には、提籃形があり、瑞鳥形があり、又柳樽形のものもある。日本の柳樽は、これから來たものかと考へられる。凡てこれらは、子孫繁榮に因んだ意味をもたせてゐるので、一種いふにいへない目出度い聯想が結びついてゐる。從つて品物は大體紅色を主として塗り

光らせてある。價の安いのは乾漆など用ひないで、又表面の模様彫刻もなく、唯無地の紅漆のまゝのものである。花嫁の腰湯を使ふときに用ひる一尺大のものは、元寶桶（ユワンパオトン）と稱し、馬蹄銀の形をしてゐるが、これ亦紅漆で、内面に金色の麗はしい圖柄が這入り、楊貴妃の姿や花鳥などの圖が見られる。

又紅燈街としては、城内の聚福園（安徽菜）のほかに、寧波料理の有名たのがあちこち五六ケ所ある。總體にこの寧波の街は、工藝品だとか、學術方面だとかいふことは向かないところで、唯市中はどこまでも商賣爲替一式であることと、今一つは、周圍の郊外に有名た寺々のあることが、寧波の街の生命となつてゐるのである。

由來日本人は、この寧波が上海を夕方船出すれば、翌朝早く着く位の近距離にある重要都市であるに拘らず、寧波の港をば全く眼中に置かない。近來幾らか舟山列島の普陀山巡りとか、又天童巡りの序に立寄る位の者が多少出來た位のもので、誠にこの要港に對しては冷淡であつた。

先年のことである。上に述べた花鼓桶を買ひ求めて、自分は上海に持ち歸り、老上海の連中や、教授達に集まつてもらひ之を見せたのである。ところが、誰れもその用途のことはもとより、名前も何も判らず、又何れの地方の産なるかも明答を與へてくれる者がなかつた。寧波の風物は、江南のうちでも、特に著しいものがあるのであるから、上海滯在中寧波の旅ぐらゐは思ひつかれることが必要である。

毎年佛蹟巡りに、定海（ティンハイ）から鎭海、寧波を經て、天童育王の寺々を巡錫する寮園氣が、上海有志の間に出來たことはよいことである。越前の永平寺からも、道元禪師の記念法會に、乙部呑海師が、かつて同行されて、天童入りを果されたなども、その現はれの一つである。

○

天童は寧波の東方にある禪林の一つで、その育王寺と共に、寧波界隈での名山である。育王、天童は、共に歷訪の趣味をそゝる所、育王の天王殿、四天王神像は、殊に驚くべく規模が大きい。山寺の近くに聳ゆる象鼻山は臥象の鼻を伸ばした形そつくりの山で、優しい姿をなし、さながら奈良の三笠山を思はしめてゐる。又山下の東錢湖（トンチエンフ）は世界に喜ばれてゐる麻雀の遊びの發祥地であり、風光明媚、舟山列島以上に、地方の土民はこれに足を向けてゐる。

最近の寧波は南四十支里、蔣介石大人の鄕里奉化の地を有するが爲めに、一段と一般の人々に知れ渡つて來た。今は寧波の南門外から、乘合のバスも出て、途中段塘、石渡、樓胜、横漲、喫口、大埠と順次經て奉化に達してゐる。

奉化縣は、總司令を生んだと云ふお蔭で、今は田舍には珍らしい立派な道路も開け、バスの往復も

頻々あるに至つた。蔣介石の名を取つた中正公園や、岳林寺、中塔禪寺などの古寺があり、殊に中塔禪寺は、丘陵の中腹にあり、山紫水明の光景に包まれ、仙境の思ひがある。蔣介石の生家は、奉化より程近き溪口にあつて、今は宏大な別莊も見らるゝに至つた。

尙浙東の田舍では、天台山の名山がある。こは普陀、洛伽の名山と共に、浙東屈指の巡錫地とせられ、日本からこれを訪れる高僧もまゝある位である。尙南の方、臺州の港は、寧波から南巡りの輪船が定期に通ひ、更に南の方溫州へまで達してゐる。

臺州は竹細工の名産地として夙に知られ、殊に近來柱掛けに用ひられる竹の對聯が評判になり、數多出てゐる。乾隆時代の鄭板橋の右上り文字の刻された聯で、藍色をたつぷり入れたものなどは、趣きがどことなく高くて、文雅の士に賞せられてゐる。

溫州は、日本には溫州蜜柑の名で知られてゐる柑橘類の本場である。臺灣の文旦、ポンカンなどと較べて、遜色のないもので、上海のマーケットにも、その季節にはかなり出てゐる。溫州は海外に出稼ぎに出てゐるものが非常で、日本に見るものでも、支那勞働者、荷役、土木に働く者の多くは、大抵溫州出だと云はれてゐる。これは茶碗直しの出稼ぎが、多く山東濟南出であるものと相對してその數も年々ふえる一方である。名古屋市御器所の一角に、支那街を形成してゐる連中があるが、それだけでも五百名からの多數に達し、名古屋港の勞働者階級に一段の力を示してゐる。

支那各地に見る住民の生活振りと風物のうち、この溫州ぐらゐ日本のそれに酷似してゐるところは少ない。從つて出稼人にとりても、日本の土地がその來たつて住むにぎごちない處があるためであらうと思ふ。大谷光瑞師がかつて日本の古代文化の系統は、多く浙江南部の文明の輸入されたものであると看破せられたことがあるが、これも一理あることゝ思はれる。日本の俗間キントン、(豆の料理)味噌、看經(カンキン)などいふ語を見たり、又雅樂の壹越(イチコツ)、盤渉(バンシキ)などいふ語の發音を見たりする事實のあると共に、日本文化の南方傳來說も考へられて來るのである。其の他故渡瀨博士の話のうちにも、日本の動物で例へば狸などは浙江の狗と同種であつて、もとこは九州が、浙江と陸續きであつた頃の地質時代に、狸狗などの群棲してゐたことがあり、その當時の名殘りを示すものが今日の狸であるとのことであつた。いかにも語學の上で、狸とは「田の狗(たぬき)」の音の變化であるといはれてゐるが、これなどもここに思ひ合せて、どことなく浙江の匂ひのする話である。

浙江の旅

浙江の天地についての話は、上に述べた所で先づ大體筆を擱く。この浙江省は、北方は江蘇に境し

西は安徽に隣りし、人口約二千三百萬、全支を通じて江蘇と共に最も文化的に進歩し、一方哩に六百人、人口の稠密した省と見られてゐる。

西方安徽の省境は、錢塘の上流威坪（ウエーピン）、街口の船著きの峽中に當たつて、そこには長き石標が建てられてゐる。民船で峽を下る際、船頭に注意せられて、その境界の目標を知るのである。四川湖北の峽中に見る省境の石標は、堠石（ヘーシー）と云ふところにあつて、これは色がどんよりしてゐて判然しない。ところが、浙江境のそれは色も白く、且つ長い棒の形をしてゐるので、綠蔭に鮮明に指されるのである。

浙江全省に亙る游歷の旅は、日本人にとつてかなり大切な支那旅行の一つである。その交通路の幹線をいへば、大體三角形をなし、上海を起點に西南杭州に、杭州からは東寧波に、寧波からは海路一直線に北の方上海を指して歸るのである。これが三角形をなす省内めぐりの大體である。ところでその海路は、舟山列島の小島々々の間を縫ひ北航するのであるが、毎航甬江の入口、鎭海の砲臺下を出る時分は、黄昏どきとなるので、その夕陽に照らされた大小の群島は、繪の如く美しく焦茶の色を彌が上にも鮮かせ、漫々たる黄色の海波と相映じ、浙江獨特の色彩美を見せてゐる。船は夜中長江の江口を這入る。曉天（ぎょうてん）を破つて黄浦を遡江し、汽笛の聲騒がしき上海十六鋪（シロプ）の碼頭へと横づけされる。上海といひ、寧波といひ、南支の旅には見目苦しい港ではあるが、共にこは神戸、横濱以上に底力のある重要な經濟都市であるから、旅行者は何れもその心して、深く徹底する所まで視察の目的を遂ぐべきである。又南支の旅で、上海、寧波の旅ぐらゐ、經濟視察の上に重要性をもつてゐる旅行は、他にないと云へるであらう。

上海から蘇州へ

蘇州の旅は、日本人には、特に懐かしい旅である。こは宛ら上方で、須磨、舞子の旅を思はしめる所があり、向ふに見ゆる淡路島、通ふ千鳥の何とやらと云つた如くに、いかにもやさしい風致に滿ちた小旅行の氣分が唆らるゝのである。實際に又、上海あたりにゐる銀行會社員たちが、暇のない所を都合して、春に秋に蘇州行を計畫してゐない者はない位である。近來は、家族連れで蘇州見物に出かくる者も多くなり、東京から鎌倉邊りの往復ぐらゐに考へらるゝに至つた。

上海から蘇州へは、急行の火車では崑山を通つて蘇州まで、約二時間。船では上海の蘇州河から、兩岸の水景を味ひ乍ら運河を行くと、先づこれが一晝夜、何れも旅の趣きは多分にあるが、せつかちの日本人は、殆んど皆火車の一方にのみ偏し、船をとる者は少い。

蘇州には城内、城外到るところに相當の水郷はあるが、行く道中は、ゐながらにして柔らかい氣分

のする運河を味ひ、又廣々とした湖水渡りを體驗して、菜種や桑の畑の續く田園風景に浸りつゝ、雲雀の妙音に聞き惚れ乍ら、運河を利用した方が遙かによい。又その方が、道中の獲物も多い。どうせ上海の雜沓俗塵から脫出するからには、出來る限り暢びやかな氣分に浸り、魚鳥と親しみつゝ蘇州行を試みる方が樂しみが深い譯である。

上海から蘇州行の船は、每日蘇州河白太橋（パイターチャオ）の碼頭から、臺灣人戴生昌の經營してゐる輪船公司の同榮號と云ふ船、その他數にハイカラな輪船がある。客室は官艙（クワンツアン）（頭等）房艙（ファンツアン）（二等）客艙（カツアン）（三等）と別れ、食事はついてゐないが、希望によつて一人前小洋二十錢で賄つてもくれる。

支那人は荷物のあるなしに拘らず、時間お構ひなし、船の方が乘心地がよいといつて、出帆の二三時間も前から乘り込んでゐる。その爲め各等とも、かなり混雜してゐる。夜具の方は、あまり美しくはないが、携帶しなくとも損料で客に貸してくれる事になつてゐる。潔潔家は毛布シーツ位を用意した方がよい。

月は朧に、上海の空はイルミネーションで明るく、船の窓から見える船出の光景は、騷しいうちにも何となく詩境が唆られる。やがて注文によつて、飯が卓上に運ばれる。皿に盛られた御馳走は、豆のもやし、白菜清湯、豆腐乾などで、飯は乾飯で茶に入れて持つて來る。具の匙がついてゐて、卓についても互ひに相讓り合ふ事もせず、後れたら損だといつた風で、盛んにかき込んでゐる。又中には首の太い商人體の客が、どぶろく、五加皮など取寄せ、酒杯を傾けてゐる者もある。その窓近く揭示されてゐる旅客への注意書は、どの船にもおきまりの如く、色々の事柄を暗示してゐる。大要次ぎのやうなものである。

（近來世が末になつて、人をだます術が段々巧みになり、賭博をやつたり、賭け事をしたり、うまい事をいつて、人を誘拐したりして、仲々油斷がならぬ。船内では特に御注意を申上げて置く。）

旅行須知

近日世風日下　騙術愈出愈奇
賭徒假充搭客　賭具紙牌銅錢
甘言誘人入局　一入迷蓋輪錢
奉勸諸君勿犯　賭博之財難賺

本局特白

食後は若い乘組員を相手に、四方山の話をする。窓外の月が夢のやうにぼんやりしてゐる。

『一體上海蘇州間の運河はどの位あるかね？』

『この船の行く水路は、三百六十支里です。他にも蘇州行の水路はありまして、しかもその方が四十支里も近いのですが、何しろ近來海賊が出るものですから、その方は通らないことになつてゐるんです。』

餘り氣持のよい話ではない。河鳥が身を切るやうな聲して飛んで行く。さすがに水郷は詩趣が深い。

『道々この船の寄る船着場にはどんな所があるかね？』

『龍華から王家、そして閘行です。こゝには稅關がありましてね、臨檢のお役人さんが、鐵の長い棒を持つて來ますよ。調べが仲々ひどうございまして、荷造りの嚴重なものは箱まで割つて見ますぜ。その次ぎが德興、それから大洋橋です。この大洋橋から別れ途になつた運河があります。龍王廟もここです。それから俞涇、謝河塘、その次ぎが煉瓦の窯のある蘆處、そして三白塘、金家濱、半邊街、桃村、それから桃村湖水になります。こゝでは鵜飼ひが盛んですよ。それから高地湖、金鷄湖、八里塔ですね。その次ぎが蘇州郊外の水郷でして寶帶橋、それから海關、密渡です。こゝは蘇州の城外で、洋關碼頭のある所です。それから日本租界のある盤門、その次ぎが胥門、そして蘇州閶門に着くのです。訓れてゐる者はさうでもありませんが、始めての人は皆んな景色がよいといつて賞めますよ。』

船は夜の水郷を、機關の頭も靜かに走つて行く。時々吃水の音が船底に聞え、そぞろ旅愁も思はれて來る。

朝は熱茶と炒餅で、トーストの代りとする。朝めしの後、自分は側に居た十五歳の少年小僧と話をする。小僧は蘇州閶門外の觀音山、中峯寺のもので、僧水生といふ者、可愛いゝ茶坊主である。いつも、心經、阿彌陀經などを口誦んでゐた。蘇州の名山、古寺の事を聞くと、天平山、一馬山、少花山、苑文山、天地山、上峯山、林巖山、金楊山の寺々を始めとして、まだ〳〵牛豆山、石筆大魚山、小魚山などがあると、これらの山寺を殆んど空らんじてゐて、すら〳〵と物語るのである。蘇州で有名な寺院山門は、先つこんなものだといつてくわしく說明してくれる所など、わづか十五歳の君とは思へぬ位ませてゐた。

『中峯寺の大和尙は何んといふ方です？』

『僧緒試といふ老師です。』と答へてくれる。傍には又同船してゐる家族づれの客もあり、それの幼い子供が、そばにもつれて來る。支那船の中は和氣靄々の寮園氣で、到底火車の無愛想と比較にならぬ。

蘇州及びその近郊

蘇州城外寒山寺の石刻に見る寒山拾得の畫像。和合二聖の神として之を拓し黒拓のまゝ裝し愛玩する雅人が多い。

蘇州の旅で見るべき所は、一々こゝに上げるのもくだ〳〵しい、普通、急ぎの旅では、驛頭につくや、すぐ車又は驢馬を驅りて、城内見物や、又大分離れてゐる蘇州の日本領事館の方は後廻しにし、多くは先づ道を、城外の寒山寺（ハンシャンス）へと取るのである。

その道中に、留園と西園とを訪ね、

楓橋夜泊　張繼

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

の詩の石刻の遺物や、俞曲園の筆になる同じ楓橋夜泊の石刻を見たり、又寒山拾得の拓本を買ひ求めたり、或は山田寒山翁の寄進に係る古鐘を見たりなどして、境内を一巡する。どんどんあるけば、五分か十分で濟む。さしもに憧がれてゐた姑蘇城外の寒山寺も、そこそこに門を辭し去るものが多い。が、少しはゆつくりした方が味がある。

寒山寺を出ると、狹い民家の間を通り抜けて楓橋の橋畔に出でる。先づ多くの者が一口同音に『何んだこんな橋が、今少しく詩的な趣きでもあるところかと思つたら、まるで破橋だ』などゝ、さんざん悪評を放つ。ひどい人になると、『なんだ、唐の張繼は嘘つきだ』などいつて立去るのである。思は

ざるも亦甚しい評である。

元來いふと、寒山寺の壁の中に見える石刻に、康有爲が「唐の時代の古鐘は日人の收め去る所となる」と書き、つまり日本人が泥棒していつたのだと書かれてゐる。風流を賞する點に兎角ゆとりのない旅人は、夜半東方未明に、詩人が客船にあつて、楓橋夜泊の體驗をしたことを思つてやらない。本當の詩の心持ちは、その曉鐘を自ら親しく水鄕で聽き、その體驗をした心持になつて見てこそ始めてわかる。さうしないでは、到底解るものでない。張繼のそのときの詩境を解しないで、たゞ心あわただしく而かも午後の三時頃、陽のカンカン照つてゐる所で楓橋を見、それが面白くひゞかなかつたからと云つて、さんざこれを悪評するなど、詩人の心を察しないのも程があるといつてやりたい氣持がする。

抑ゝ蘇州の旅は、懷古の情に惹かされ、古く歷史を辿り、詩人の心に憧がれて見てこそ、始めてそこにこの旅の値打がある。それを飛脚旅行のビジネス式では、蘇州の名所舊蹟は、定めし泣くであらうと思ふ。それは兎も角、途中の留園は、淸朝岑春煊大人の古邸であつて、老樹池畔に茂り、亭上の風致もいと掬すべく、今は入場料をとつて、內外の文人觀光客を呼んでゐる。壁中に嵌め込みの石刻、篇額には、見るべきものが多く、風人の足をとゞめさせる。

又西園は、後庭の池中に、李鴻章の祠堂があり、その左右の石橋から水中を眺めると、數多の龜が戯れてゐる。

蘇州城外では、更に見所として、虎邱の廢塔がある。呉越の頃、呉王闔閭の坟墓があり、その他顏眞卿の刻石など、史實に富めるところである。二千有餘年の由緒深き情趣をたゝへ、到るところなつかしい風韻を漾はせてゐる。それだけに、又詩人文人のこれを訪ね來る者が絕えない。春先き桃花の咲く頃山門の邊りで乙女らが、魔除けの麥稈團扇をあまた携へ來たり、風に飜しつゝ遊客の後を追つかけ、押賣せんとする賣り聲の調子は、又となく優しくもあり又可愛いゝ。虎邱の境內は廣く、岡あり、谷あり、池あり、寺あり、春秋の季節には門前市をなし、かなり雜沓を極める。寺內には、地圖案內記を並べてゐる賣店が出來たといふモダン式の景色も見え始めた。何んといつても半ば壞れかゝつてゐる虎邱の塔の姿は、蘇州城外に聳ゆる唯一の呼びものと云へるであらう。

更に暇のある遊客は、城內巡りを後にして、西の方靈巖山の淨域に攀ぢ登り、木瀆の街から船を仕立て、運河を渡りめぐるも興味がある。或は又天平山の紅葉を賞し、或は南の方上峰山の高塔に遊ぶのもよい。又蘇州の日本租界に、淋しく咲いてゐる日本櫻の並木を賞で、日本領事館や、片倉組の紡績工場のあたりに立寄つて見るのもよい。繁徧家の日本座敷に立寄り、こゝで足を伸す團體客も、近

來は漸く多くなつた。

領事館附近で見るべきものは、三國の歴史に知られた吳の孫權の墳墓である。こは城外に孤在し、昔乍らの秋草が坟上に生茂つてゐる。それから又程遠からぬ水鄉には、寶帶橋の石橋が指さゝれる。蘇州、石橋中での随一の眺めを有する長橋であるから、こゝに橋を背景に、夕映えの記念撮影をするなど悪くはない。

蘇州の旅で、食道樂の手合の忘れてはならないことは、蘇州城内の川舟料理を味ふことである。これは蘇州の美人の研究と共に、何よりも思ひ出を唆るものである。運河水鄉に畫舫を傭ひ、徐ろに城外指して漕ぎ出でると、行く行くその船の上で、有名な茨白（チャヅパイ）とおいしい川蝦のおつゆ、その他自慢の舟料理が、次から次へと數限りなく出て来る。何れも日本人向きのあつさりした風味で、仲々評判がよい。又點心の甘味は、蘇州獨特の高價な品で、その種類も多く、これ亦料理と共に忘れられない味覺を唆つてゐる。

又城内巡りには、界隈の名流顧（鶴逸）家花園を始め、個人の邸宅を訪問して、寶物の拜觀、書畫の清賞など、領事館を介して請ふのもよい。

日本人によく知られた人では、元の駐日公使汪榮寶大人である。同大人は學者であり、この地の出

である。名所舊蹟として名の知れてゐるのは、孔子廟である。滄浪亭がある。印心石屋の庭園美が之にある。その他拙政園だの、獅子林だのといふ名園が少くない。又例の道教の本山で有名な玄妙觀があり、民衆娯樂所を兼ねた靈場であることはいふまでもない。或は又北寺に聳ゆる高塔は、城外遙か十數里の水鄉からも指顧される位高く、それこそ雲表に聳えてゐるといつてもいひ過ぎではない。その最高の樓上に登つて、江蘇の平野一帶を眺め渡すと、西に太湖の水、東に常熟の野までも、一眸のうちに納められ、全く高樓萬里の心が唆られて、遠く東海の天を偲ばせるのである。

蘇州は古の吳の國の都である。越の絹興に對して、吳の蘇州と云へば、都城の古いだけそれだけ史實も豐かに、又工藝美術の方面も、特によく發達してゐる。現今絹織物で、上海市場を賑はせてゐるものは、蘇州産を以つてすると云はれてゐる。美しい緞子、繻子、つゞれ（刻系）、刺繍など、何れもものは、蘇州産のものに優品があり、殆んど蘇州のそれで持ち切りである。道理で城内民家の裏通り邊りは、毎戸色糸を染めたり、機を織つたり、圖案を描いたりなどしてゐる家が多い。むさ苦しげなあの軒の暗い家で、よくもかやうな垢抜けのした無邪氣な柄模様が出來るかと思ふと不思議なくらゐである。何れも年若き嫁入り前の乙女らが、赤糸青糸を忙がはしく抜き差して、刺繍の框に針仕事三昧に入つてゐるのを見る。日本の三越、白木、高島屋、松坂屋等に來てゐる支那の絹織物も、大抵はこの蘇州

出來と見ればよい。唯染めが京都のそれにかなはないといつて、今では上海の呉服屋の手を經て、京都へわざ〳〵染めに出すこともあるといつてゐた。

それから又城内の民家では、蘇州磨きといつて、紫檀細工の品のよい卓や椅子、書棚など、みがきのよいのが出る。さすがに、つやもよろしく、仕上げは美しい。その外、銀細工、ニツケルなどの彫刻から、篆刻、文具、色紙などにも、高級なものがこゝには多い。新聞にも各種日刊新聞があつて、相當政治記事なども多いが、矢張り何んといつても工業美術に因んだ呼びものが、どつさりあるやうである。しかし雜誌單行本の類は、無論上海から這入つて行く。

蘇州の思ひ出深い樓船、畫舫の船遊びは、親しい友と支那客雜りに、春の佳節、秋の紅葉どき、東に西に又南へと、悠々自適到る所佳所を求めて、水鄉の旅を恣にすることである。江南の文學は、この體驗を重ねかさね、胡弓、玉笛の鳴物を入れた情緒を味つて見てこそ、始めてその文學を語る資格が得られるのである。机の上の桃花扇、琵琶行なんかだけでは、いくらくり返しても、到底本當の魂の打込んだ理解には到達し得ない。

蘇州の本當の旅の味ひは、上海から日歸りの旅なんかではなく、幾日か城内に又城外に、支那客を相手に親しく夜の蘇州を體驗して見なくては嘘だ。蘇州旅館あり、姑蘇大旅社あり、大東旅館あり、幾らでもそこに一流の中西旅館がある。

支那宿の朝は又、他の地方で見られない趣きのあることがある。と云ふのは外でもない。まだ未明に床の中で、眼も碌々醒めない時刻に、默つて戸を開けて這入つて來る乙女があるのである。ゆすぶり起こされるので、氣がついて見ると、左手に提籃を提げ芳香高き蘭花を賣り付けようと云ふのである。元より乙女は、この女ひとりに限つた譯ではない。それ夫れ賬房の諒解を得て廊下をかうして奥深く這入つて來る許しを得てゐるものであらう。許しはなくてもよいのであるが、あいまいな先生とは違ふ。當を雜ぜて二三輪、細き針金で手際よく纏めたものをしたたか持つてゐる。これは卓上のコツプにさゝせたり、又婦人客と見れば輪樁なりにハイカラ頭に飾れるやうになつてゐるものであるが、それを取り出し、「蘭花はいかゞです」と呼びかけるのである。花もよし、その價も廉である。遊覽客の多き蘇州の宿のことゝて、相當その花はねむけざましにもなることだし、よく賣れてゐる。

蘇州城内の古物漁りは、都城の古いだけに、名品も相當多く、吳門顧二孃の女流作家として聞えた古硯は、見つかればたいしたもの。顧女史と云へる愛硯家の手になれるものであるから、之を硯癖家はあさつてゐる。その他精巧な雅硯古銅器など、城内に時々掘り出されることがある。上海で顧二孃の名硯と云ふと、これが由緒深き名品に模せられて出來てゐるのが多く、どうかすると模刻で以て、

父祖三代それを專門にやつてゐる者さへある。今日その模刻した物が、上海から蘇州へさして逆流して來るといつた譯である。うつかりすると摑まされることもある。

しかし兎も角蘇州は、どの方面でも奥が深くて、滯在にはもつて來いの所である。由來日本の領事連中も、蘇州に赴任すると、自然書畫美術のことに實地の勉强が出來て、一面の古名硯に、大枚一千弗を投ぜんとするものもあり、いつぞやもその下相談を打ちかけられたことすらある。兎も角、眼福を肥やすには、恰好なる博物館の如き所である。

蘇州を中心として、その周圍程遠からぬ所には、有名な場所が數々ある。東の方は常熟の都城から、西は太湖の湖上、洞庭の東山、西山の島々、それから梅の名所で名高い鄧尉、光福があり、北には又工業の中心地帶たる無錫の都城や、その湖畔に梅園と云ふ公園があつたりする。更に北の方、鐵路沿線に常州の都城があり、又長江江畔に出ると江陰の街がある。西、太湖を經て、彼方宜興の燒物の本場があつたり。その窯元から少し離れて、有名な鼎山とか、蜀山とか云ふ處があり、宜興の城外西玖湖の水鄕から西に更に進めば、昔から海賊の本場といはれた人の恐れる溧陽の舊都がある。更に運河を長蕩湖の西岸に沿うて北行すれば、その名もゆかしい金壇の古都があり、金壇から又北へ指して丹陽の街道に出れば、遠く西の方鎭江に至り、更に金山寺塔下の水鄕に達し、こゝで長江の洋々たる流れに目を樂しましむることが出來るのである。

常熟

先づ蘇州をうしろにして出かけるとすれば、旅程の順序として常熟の方から片づけることにする。常熟は、蘇州の古都から出かくるには、運河によるの外なく、蘇州城內吊橋の碼頭から出る曳船により、東北さして漕ぎ行くのである。行くこと約六時間、一日二回の定期船が出るので、存外その交通は便利なところである。

常熟の都城は、郊外、沃野千里の天地から產する所謂常熟米の集散地で、その取引の盛んな都である。從つて富豪もかなり多いらしい。街は富み、運河は四通八達、八方に放射狀の水路が開けてゐる。江蘇の鐵道大動脈に沿つてゐない田舍都城としては、太湖を狹んで、西に溧陽、東に常熟といはれる位で、その名が高い。清朝の繪畫史に、その人ありと聞こえた四王の一人、王石谷の如き巨筆を出し、今尙常熟公園の門前に、先生の古宅がある。壁に仰ぎ見らるゝ楷書の「王石谷先生故宅」とある七字は、いかにも奥ゆかしく讀まれる。門は貧弱ではあるが、何處となく君子の故宅らしき趣きを見せ、先生の遺居の室も、斜め廊下をたら〳〵登れば、そこにその儘殘され、當時用ひられた調度類は、す

べて遺愛品として一堂に陳列されてゐる。その子孫に當たらるゝ方は、庭に數多の土燒きの雅壺を並べ、綠色龜（養龜）の飼養に、閑日月を送り、これを生業の糧としてゐるものらしい。背甲は、頸もとからして綠濃き苔毛はいかにも長く且つ優美に伸び、清高の氣に充ち、宛ら祖先の風格を偲ばせてゐる感がある。由來常熟の地は、養龜の名産地として聞こえ、民家各所にこれを飼つてゐる處が多い。一尾の價はと聞くと、若し頒つならば三弗乃至七弗位でよろしいとの事であつた。

その他城内には、趙家花園と云はれた古庭があり、今は天寧寺の別院として游客の足を牽きつけてゐるが、境内の池に戯れてゐる鯉魚は見事である。

常熟公園の背景をなす山上には、辛峰亭の曲線美が仰ぎ見られ、又城外十支里の山麓には、六朝以來由緒多き破山興福禪寺の山門がある。門内は境内廣く、乾隆の篇額のかゝつてゐるところだけに、堂塔伽藍は實に夥くべく大規模のものである。應慈大禪師、正道大和尚以下禪僧雲水凡て三百餘名におよぶ。檀家の人々の之を訪ね來たつてお籠りをしてゐるものも多く、善男善女は美しく着飾り、寺内の光景にどことなく豐かな常熟氣分を見せてゐる。餘り他で見ないどつしりとした寺の落着きのある雰圍氣を漲らせてゐる。興福禪寺の門内に見るべき主要なものは、寶殿、禪堂、樓閣などであるが、先づそのうち目に立つものをそのまゝに紹介して見ると、一、大雄寶殿　二、觀音殿　三、地藏殿四、韋駄殿　五、齋堂　六、禪堂　七、客堂　八、祖堂　九、念佛堂　十、護法堂　十一、天王殿、十二、大賚、十三、雲水堂、十四、救虎閣　十五、白龍池　十六、講堂　十七、方丈堂である。その外そとに出ると、一、空心潭　二、空心亭（法界學院）三、日照亭　四、印心石屋　五、曼達辣室　六、塔辣室　七、高僧殿など澤山あり。境内には又唐桂、宋梅と大和尚の説明した木がある。千有餘年の星霜を經た老樹であるだけに神さびてゐる。

寺内の生活は、大變な人數を有してゐるだけに、毎日四度の食事も賑かである。が然し、雲水を始め禪僧達の念佛の儀式による吃飯は頗る嚴かなもので、その法式は日本の禪寺あたりに見るそれと變りはない。朝の六時は稀飯（シーファン）（粥）、十時は乾飯（カンファン）、午後三時の稀飯に、六時の乾飯と云ふ順序で行く。

その料理は、云ふまでもなく、精進料理であるが、先づ、油葉、推芽、野菜、もやし、筍、漬物を油で煮たもの、豆、胡麻あえなどのところが普通のところで、その量もかなり多い。春の清明（チンミン）後に行つて見ると、水陸大齋の供養、念經（ネンキン）の儀式が鳴物入りで、頗る晴れやかに、又にぎ〳〵しく行はれてゐる。しかしそのうちに澁い雰圍氣が漾ひ、正道大和尚を始め重な和尚と云ふ和尚が、紅の金爛の袈裟や大冠を着飾つて、その歯薄の列に加はる。大雄寶殿の中庭にて、長蛇の如く蜿蜒ぐる〳〵と巡り巡るのである。各僧の足並みもゆるく、夫々手に翳す焚香の禮器も、いと神々しく拜せられる。門

内隨處に見る中庭と云ふ中庭を、しづ〳〵巡り巡つて、結局歯薄は山門外に出でて行く。野外山下の老樹の影に、かねて用意された祭壇神位の前で、紙馬寒神を燒き拂ひ、讀經最後の儀式をこゝに滯りなく執り行つて、こゝにすつかり終ることになる。その間約二時間を要するくらゐ、慇懃に又莊嚴である。その悠々佛光に和し念ずる行事の趣きは、何んともいへぬ古雅な妙音を感ぜしめられる。

その行列のうちには、供養の施主として、良家の婦人達が同じ香器を擎し、綠濃き繻子の晴れ着に、高尚な漆色のスカート姿を見せてゐるところなど、つゝましやかで又奥床しい。

寺内の客堂の入口には、紅の繻子の刺繍麗はしく施された重々しい緞帳を深く垂れ、中には寧波出來の家具、蘇州磨きのどつしりした寢臺など、幾つか並べられてゐるのが見える。客堂は多く良家の家庭の善男善女たちに、幾日間となく提供せられ、讀經の時間が來ると、何れも寶殿、禪堂のとばり深く歩み入り、その式に列席する。何れも珠數をつまぐりながら、大の古びた經文を前に、和尚たちと聲を立てゝ合唱をする。地獄極樂を描いた極彩色のきらびやかな佛畫の大軸の掛けられた部屋へと通される。見ると、そこで毎日午後三時から、善女たちがいつも申し合せたやうに集り、金襴姿の高僧達と一緒に經をあげてゐるのである。

針山に導かるゝ罪深き人間、火焔に包まれた鹽奘の上に高く縛られた人間、青鬼に舌を拔かれる人間、赤鬼から鋸で體をひき切られてゐる人間、といつた此の世の惡事を犯したもの共に對するあらゆる懲らしめの場面を描いた圖柄が、一々示されてゐる。又一方の壁には、之と相對して、その善事を勸むる美行ばかり示した圖柄が、掲げられてゐる。かくの如くして一目瞭然、因果應報の消息が誰れ人の心にもすぐ呑み込まれるやう、平易に興深く示されてゐるのである。

讀經半ばに、小僧たちは藥鑵と茶碗を手にして、一同の前に夫々配つて行く。お茶のおかはりの時分は、その場所柄など構はず、一向平氣で熱茶を注いで廻る。その堂内の寧園氣には、敬虔の念のうちに、荒削りの所が見えてうれしい。時には又金襴の高僧にしても、所もあらうに讀經最中に、平氣で手鼻をかむこともある。これ亦支那でなくては見られぬ場面である。こは曾て東京帝劇で檜舞臺で梅蘭芳が出演中例の手鼻をかんで冷汗を催させたことのあつたのと思ひ合はせられる。

寺内に幾百人からの僧侶のゐると云ふこの興福寺には、又世にも珍らしい變りだねの禪僧が隨分ゐる。之には、ひどく肝銘させられたのであつた。と云ふのは、日本で見る僧侶と云ふと、多くは才氣に富み、賢しこき道を唯一の目標としてゐる如くに見ゆるのが相場である。ところが之に反し支那の禪僧と云ふと、その中には如何にして自分で大痴の極致に到達し得んかをその道の目標となしてゐる如く見えるものがある。これがあつてこそ始めて大悟徹底の風韻が、その僧侶の人格として窺はれる

のである。

大雄寶殿に見る正面の柱、左右の楹聯に、禪寺の氣分をたゝへた佛語が讀まれるのである。その文字は二十二字の對句で卽ち、

三世佛誰分過去未來見在
一堂僧莫是聲開維漢辟支

とある。又その文字の墨蹟も雄渾でいかにも寶殿に相應しく誦ぜられたのであつた。

禪寺の宿泊に、殊に支那の旅には、頭の轉換ともなり、又寺を中心として、古代支那の素朴な民情も解る。わけてその山境に見る經濟生活の最も徹底した場面又その內容のこまぐ〳〵した處も、よく〳〵合點がゆく。大きい禪寺であれば、必ず之に客堂の設けがあり、客を泊める設備も出來てゐるのであるから、人の紹介など求めるの必要もなく、思ふがまゝにその目指す山門を訪ね、雲水の旅の氣持をそのまゝ自ら體驗して見ることもよき思ひ出であると思ふ。

常熟の城外には、尙見るべきものとして、山上に劍門の照崖があり、藏海寺の奇嶂があり、東湖西湖の眺などがある。劍門には、康熙帝の御筆と傳へられる「雲煙高騰」の刻字の磨崖碑が讀まれる。又城外で一と風變つてゐる例の方塔寺の高塔をば、城壁の空に高く仰ぎつゝ、水鄉運河の便により、郊外へ靜かに漕ぎ出づることにすると、程なく「先賢言子先生故里」と題せられた石柱を水邊に見る。言子が、山東曲阜孔子廟に祀られてゐる先賢の一人であることは、こゝに云ふまでもない。

常熟城外に見る春の野は、蘇州城外のそれと同じく、河泥滓（ホニクン）と稱して、農夫達がその佳節に、運河と云ふ運河に船を泛べ、川底の泥をば肥料にせんと、盛にすくひ上げすくひ上げ、之を河畔に溝を作つて溜めてゐる光景を、到る處に見る。このあたりの農家は、田夫ながら何れも皆腰に紺袴をつけ、その泥汲みにいそしんでゐる姿が、いとも優しく眺められ、その泥まみれに汚れてゐるつら構へも、却つて南畫そのまゝの趣きがあつて面白い位である。田夫たちがその雲雀鳴く妙音に、足取りの調子を合はせその肥やしを運び行くかけ聲の諧調は、あたりの菜種畑に殊に優美に響く。

運河には又鷭（ロチ）と稱して、色黑き水鄉の鴨群をとまらせた小船が、あちこちにと數多漂ふてゐる。所々廣い湖水に出ると、殊にこの鴨飼ひの光景が見らるゝのは、この地方に多いやうである。又河畔の田家每戶、軒下に見る紅紙には「平安吉慶」と四字を入れた木版刷りの札が貼りつけられてゐる。名にしおふ常熟米の水田が、見渡す限り開けた沃野の中を、西に〳〵と進み行けば運河の岸邊、紡績公司の煙突の高く突き立つ無錫（ウシヤンシー）の碼頭に入るのである。がしかし、こゝには先づ旅程の順序として、南の方、太湖洞庭（ドンテイン）の東山、西山の方を片づけることにする。

太湖

太湖洞庭の水郷に出かくるには、順路として蘇州城外、上方山下を過ぎて行く。曳船によつて、老柳の並木續く運河を西に乘り切り、太湖卽ち洞庭の湖中に出る。こゝに洞庭とはもと湖南省の洞庭、湖上君山がむつくり飛び上つて出た際、この太湖が引込み、この湖水を生じたのだと云ふ傳說のある に本づくのである。沼池多き陸續きの半島の突角である。東山と土語で呼ばれたかなり大きい湖上の島である。莫釐峯の山は高く空に聳え、湖上の眺めは繪の如く美しい。湖上眼界の廣きは云ふまでもなく。霞棚引く水景の情趣はいと柔らかである。がしかし、この地方一帶の人氣はどうかと云ふと決してよくない。東山で見るべき名所は、明の董其昌の墓所を始めとし、山上の大尖頂や、中腹に雨花臺など云ふ禪寺があり、その他山茂峰、法海寺、靈官殿、金安寺、靈源寺、吳臺寺、北臺寺、炳因洞などがある。大和尙の破岐禪師は雨花臺にあつて、「湖山共仰」の篇額を背景とし、訪客を相手に茶をすすりつゝ禪を語る。全くその場面は詩趣に富んだ一幅の畫である。麓の客棧から、殿前を振出しに、道を西街巷に取る、路傍、咿唔の聲高き趣に心を牽かれ中天王行宮内に見る寺小屋を訪れる。村夫子が村の子供たちを集めて、論語、三字經、國語讀本などを順次讀み上げ、それ〴〵夫子の聲に和せしめてゐるところは、如何にも古風で奥床しい。子供たち、論語讀みの論語知らずでやつてゐるのであらうが、正面の猛威佛の尊像を、紅い古幕の後ろに押込めてしまひ、青天白日旗を前に盛んに聲を合せ、節をつけて高らかに誦じてゐる所は、片田舍ながらに時代の機運が見える。

山を越え湖畔を行く。桃花くれなゐに、湖山一色。宛ら畫圖の如き風光。たしかに聞いてゐたよりも、太湖の眺めは美しく又大きい。

白帆は湖中老楊の並木の間に隱顯し、湖畔に燃ゆる花の色美しき桃林と相映じて、春風駘蕩の氣を漲らせてゐる。

新綠の楊灣、槎灣の水鄕は、殊に風光明媚の湖村であつて、人情も亦厚く純朴である。その日湖水を渡つて西山の島に行くつもりであつたのであるが、實はその地點に宿なく、渡るに舟なく、全く旅の空に進退維れ谷まり、方法のなく困り果てゝゐた一人旅の自分は、偶然にも路上の行人邵念祖先生と云ふに出あひ、先生の情けで、道連れとなり、それが緣となり、楊灣は仁濟堂大藥房と云ふに、一夜の宿をかりることが出來たなどと云ふこともある。

西山の島の言葉は、伊豆の大島の古語を聞くの感があり、容易にわからぬ。色黑き田舍紳士風その まゝの邵先生の勞情と慇懃振りは、よくよく汲みとられたのであるが、しかし何分にも島の方言の理

解されないのには、殆んど閉口をした。

しかし當日お蔭でその東山の島で一夜の宿を得たばかりでなく、その翌日自分の豫定してゐる方面にも友人のあることを語り出で、その後湖水を渡り、西山に行つたとき、東宅河の徐裕庭先生の家庭を訪ぬべしとまで云つて、之を紹介してくれた程であつた。六巷の淋しい水鄕まで見送つてくれ、楊樹の影まばらなる、水村へまでも見送つてくれた。殆んど我が出船の姿の見えなくなる迄、碼頭孤影淋しく手を拱き、別れを惜しんでくれてゐたのであつた。これが全くの見ず知らずの人であり、文字通り路上の行人であつたことを思ひ出して見ると、その旅人に對する村民たちの情味の深いことは、奥知れぬ暖かさを感ぜしむるものがあるのである。唐の王昌齡が、

寒雨連江夜入吳。
平明送客楚山孤。

と云つた七絕の起句と轉句は正に、こゝに思ひ出され、今以て萬感交至る詩情を禁じ得ないのである。

西山の島は、太湖中でも最も明媚な風光を有する所で、さながら琵琶湖の竹生島にも該當してゐるところである。船着場の鎭夏から道を左に龍洞山（天下第九洞）、東宅河、法華寺、金鐸山など、見所は數多ある。その外叉寶山寺、石公山なども見落としてはならぬところである。

龍洞山は、島內湖畔近く綠野に聳ゆる一丘陵に過ぎないが、全山大理石の奇巖をもつて骨となし、その石と云ふ石は、すべて亂立し欹立してゐるので頗る奇拔である。桃林その麓を繞り、綠竹之に散點し、龍洞禪寺の紅壁飛檐は、中腹に平和なる情趣を漂はせてゐる。見るからに全く南畫に窺はるゝ景趣そつくりである。龍洞山の畫趣は、恐らくこれ描寫の資料として取扱はれたことなんかあるまいと察せられる處である。全くの一人旅の自分には、唯之を印象から呼び起こすの外はないが、その登山を思ひ立ち、恐る恐る足場を見付けて、注意しながら岩から岩へ匍ひ渡つた蘚當は、側で見てゐたものゝ目には、さぞ可笑しかつたことであらう。荊棘は岩脚を埋め、うつかりその深みに飛び下りでもしようものなら大變なことになる。しかし頂上の岩頭に一人立ち、千里の湖上を遙かに打眺め、所謂湖山一色の春景を我物顏に取り入れ、日本人の未だかつて知らぬかうした仙境に身を置くことの出來た氣持は、王者といへ共恐らくこれに及ぶ濶達の氣魄は有しないであらう。かゝる仙境が、蘇州の田舍の程近い湖上に取殘されてゐる事は、返す〳〵も觀光客に知らせて置きたい所である。

やがて徐先生を訪ね、弟の葵痴墨君（綠雲軒と號す）を東道に綠野を辿り、小川に沿うて和風薫る金鐸峯へと道をとる。春霞棚引く野邊の桑畑に、萬の小枝の入亂れて見える彼方は、薄綠に色彩られ、

桃林の深紅色がこれに又映えて、何とも云へぬ優しみである。そこへ又汀渚の小波靜かな湖中に、岸に沿うて見渡す限り遙か向ふの方まで、水中の老楊がこれも新綠の色を呈してゐる。何れも色彩の層とりどりで、綾にしきの如く麗らかに、又やさしく眺められる湖畔の景觀は、下界の山水美とは思へない位であつた。これが又路傍の小枝に囀づる小鳥の音と相和して、西山に漂り渡る南畫以上の雅趣を漾はせてゐる。連れの蔡君に向かつて、自分は思はずさゝやいだ。

『なんともいへぬ優しい春景ですなあ、一體この界隈の土名は何んといふ所です？』

同君は、この湖畔の景色に全く見惚れてゐる自分の樣子を、不思議さうな面持で見てゐる。年が年中、この絶景の中に暮してゐる同君には、物珍らしく思はれないのも當然である。道理で平氣な顏付で、唯輕く聞いただけの返事をしてゐる。

『チンザセイ、チンザセイ』

と繰返して教へてくれる。何事もなささうな返事振りをしてゐたのであるが、第一その地名に當る文字が考へつかない。そこで色々聞き直して見て、やつとのことそれが、「金鐸山」であることが判り腑に落ちた。

桑田桃林の一隅に、五六の田家が見える。君子の村ともいひたい平和な眺めである。その後方の緑濃き山が、卽ちその界隈の小字「金鐸山」となつてゐることがやつと解つた。

山道にかゝり、爪先き上りの綠林の小徑にさしかゝる。行くこと暫し籃を負うた樵夫に出會ふ。蔡君に恭々しく挨拶して過ぎ行く。そろそろ樹林深き所にまで上ると、山門が見え、「法華禪寺」の文字が、門額に讀まれる。境内の樣子は、普通の山寺のそれと變りはない。春ながらひつそり閑として、禪堂の窓に見る明障子は、紙を貼らないで、半透明の平たい貝を嵌め込んでゐる。には蘇州附近一帶に見る地方色であるが、雅な障子である。堂内は綠蔭薄暗き感じを示してゐるが、そのうちにも風雅な落着きを見せ、山寺らしい香も漾うてゐる。禮堂の左右に讀まれる聯の句は、これ亦山寺の晩の詩趣を物語つてゐるもので、今も尙印象に新たなるものがある。

海天明月上
山寺晩煙藏

その墨色も古めかしく、又澁く眺められたのである。前方に聳える漂渺山（ピヤオミヨオセン）は、島内第一の高峯で、湖上遙かに東山の莫釐峯（モリフオン）のフロフイルと霞を隔てゝ相對し、寢むるが如く薄ぼんやりと現はれ、その倒影を湖上にぼかして映じてゐる。

山下をあちこち逍遙してゐると、東嶽廟の紅壁が見える。又村外れの一角には、半山庵といはれる

さゝやかな尼寺がある。珍らしさの餘り庵に入つて、尼姑を訪ねて見る。

堂内幾多の圓坐は形の如くおかれてあれども、一向に念經をする樣子も見えない。蔡君の云ふところによると、

『この尼さんはお經など知つてゐるもんですか、大分新しい方なんですもの』

それ以上のこの尼姑のことを評するのは、酷であるから遠慮するが。見るからに上海あたりのモダンに見るやうな斷髪振りで、袖の短い藍色の婦人服をつけてゐる。肉づきもかなりの方でふつくりした尼であつた。しきりと愛嬌をたゝへて挨拶をし、禮にも倣はず豌豆をかぢり乍ら平氣で談笑すると云ふあたり、確かに上海四馬路界限に姿を出させた方が、適材適所の感もしたのであつた。尼姑の語る說話は、明解の方であつたが、島の女だけに訛りが多く、聞きとれ苦くかつた。その庫裡の方へも廻つて見たが、かなり荒廢してゐて、何んだか破れた物置のやうな樣子に見えてゐた。

西山の見所として最も有名なところは、島の西の外れにある佛蹟である。これも亦大理石の名山として知られた石公山（サクコンセイ）の靈場である。道は遠く、巡禮の容多き樵徑を、湖中につゞく柳の並木を伴として辿ること十八支里。山寺には浮出しにした石刻の神々しい丈六の觀音を始め、見るものが多い。觀音は洞窟の中に、金色燦爛として輝き、線香を手向け、銀の元寶を焚く煙が絶え間なく、念佛三昧に耽る村女が隨分多い。尙

一輪名月照石公

の石碑がある。太湖の風光を、吟じ得てゐるの感がある。山の頂から急轉直下に、斷崖を立切つたやうに垂れさがつてゐる石壁には、「雲梯」の磨崖碑の大字が、綠蔭間に窺はれる。

岩頭に立つて遠くかなたの湖光、春色を賞すれば、白銀盤上、青螺を伏せた如き大島、小島が點々として指顧せられ、誠に淡彩の洞庭畫卷を眺めてゐるの觀がある。奇屋、峭聳の崖壁にかゝる石公禪寺に詣で、頂上の祠堂まで、そろそろ攀ぢ登つて見ると、これはしたりと云ふ變な事を見る。和尙は念佛を稱へつゝも、その善女たちの一團が今供へたばかりの大小の紅蠟をば、未だ佛光の火の點つてゐるのも構はず、拔き、拔き、その火を消してゐるのである。その蠟の流れかゝつたものは、手の爪でかき落したりして、如何にも新しい蠟の如く見せかくるやう修理してゐる。その長きものは全長二尺近くもある。大抵はなるべく亡くならぬうちに、それを一々取り込み、まだ手向けた參詣者が傍に拜んで居るのもお構ひなく、箱に入れて持ち運んで行くのである。洞庭石公山の老僧は、さすがに悟り拔いた坊主だといへるであらう。支那の和尙の中には、かうしたものもあることを、序でながら云つておく。善女達のすることをそばで見てゐると、こは祠堂の側で湖上の風に吹き消されるのも一向

樗はず、幾度か銀の元寶を焚き燼かんと、根氣よく何度でも火をつけてゐる。そしてその苦心をして燒いた元寶の淨灰をばしきりとかき集め、風の吹く中で紙片に之を包まうとしてゐる。餘り不思議なので、

『何にしますか』とやさしく聞いて見た。すると、その返答が面白い。

『これは勿體ない淨灰ですから、萬病の妙藥になるのです。』といつてゐた。

尙善女達は、神前で銅幣二枚宛を喜捨して、しきりと竹の筒から御籤をひき、例の徹底した和尙の手から、黃符をさづけて貰つてゐる。和尙はよく判るやうに、一々面倒を見てやらない。參觀人の自分どもをつかまへ、何と書いてあるかと聞くのである。

西山徐先生の家庭にゐると、每日湖水からとれる田螺の田舍料理が大層おいしく戴かれた。生薑を入れて味がつけられてゐる。始め貝の渦を卷いた底の方は壞はして料理されるが、蓋はその儘にしてあるのである。

家庭では昨年老父を失はれ、喪中にあるとのことで、母堂には夜な夜な自分達が寢室に退いた後、まさか聞えよがしにでもあるまいが、佛前で細い聲を立て、泣き且つ經を念じてゐる處が聞えてゐた。その泣き方はさも哀れを催ほさせる例によつて形の如き悲しい調子で、愚痴をこぼしてゐるやうな泣き振りである。隣家藥舖の主人銀月軒徐先生と云ふは。偏僂がたの好好爺であつて、書畫の事に明るく、店頭には古めかしい鍍金の壽星の神像など掲げてゐた。噂に聞く太湖の島には、水上海賊の出役も多く、近來發動機船で荷船を追かけ廻はすと云ふてゐる。この西山の島でも外人殺害の噂とりどりで、銀月軒先生のうちに訪ねて行つたときなども、土民の老爺で注意してくれたものもあつた。がしかし自分は終始安全であつた。何んら不安を感ずる事實もなく、却つてこの通りよい氣持ちで太湖の旅を了へることが出來たのであつた。

鄧尉と光福

湖上を走る船には、遠北輪船公司の發動船がある。太湖の絕域から、もし本陸の岸に渡らうとするには、湖上を蘇州航路によつて船出する。先づ木濱の碼を差して東航するのである。木濱からは又例の運河を往き、善人橋經由で光福に出で、梅の名所で有名なる鄧尉の山景を訪ぬるのである。

鄧尉の梅林は、蘇州附近で第一の名所と呼ばれてゐる。玄墓山を中心にこのあたり栢因社、司徒廟、雪海亭など、見るべきものが隨分多い。殊にその栢因社に見る老栢は、千年の昔落雷のために、一株の古幹が四裂分散して、不思議にも四株となり、枯れることもなくそれぞれ斜に倒れた如き姿して老

い榮え、今以つてその老樹の大枝小枝に千古の趣きを見せ、綠葉を神々しく茂らせてゐるのである。清樹、奇樹、古樹、怪樹と云はるゝ四栢の雅名は、卽ち昔乍らこの傳說をそのまゝに物語つてゐるものである。

玄墓山は山門を聖恩寺と稱し、梅林中に聳え立つ香山の南麓にあり、自ら世塵遠く別天地をなし、遙か林間に太湖の碧水が見えてゐるところはなつかしい。

梅林は、極寒の頃から客を惹きつけてゐる仙境として知られてゐるが、彌生の頃の如來花（芙蓉）の紫色の香の鮮かなると、その數の多きとにより、梅林と共に同地の呼びものとなつてゐる。福溪、大東、尋梅の三大旅館のあることは、前既に述べておいたからこゝには繰返さない。

光福の市中には、春の彼岸に旅僧が大きな木魚を胸に掛け、神位を背中に負うて、巷といふ巷を、念佛ゆるやかに唱へあるく。その悠々落著き拂つて、木魚の音高く練り歩き、而かも氣取つたやうに見えない大陸的の光景は、如何にも田舍のお彼岸氣分を漲らせてゐるのである。

穹窿山の高峯を仰ぎ見、幽居、人なき谿谷を下に見て、香山五雲洞の禪寺を訪ねる。人里離れた靈域のことゝて、萬籟寂として聲なきも、時折り麓の里にかすかに聞こゆる太鼓、鉦の奏樂は、これ亦彼岸の田舍氣分を思はしめるものである。山下の林中の路傍には、石人石馬のある古陵があつたり、又女の轎夫が旅人の一行を擔いでゐる處を、更に兵隊の護衞までつけてゐる行列を見るなど、蘇州の田舍としては珍らしい風情である。田家水邊の絲蔭には、乙女らが家庭仕事に、椅子に棍付の簗を持ち出し、黃色の龍の刺繡などしてゐる小景を、あちこちに見たりなどする。蘇州の田舍だけに、かやうな手工藝や美術作品のすさびの見らるゝ處は又ゆかしい。

無錫

蘇州の都を後に火車の旅を北へと進めば、無錫から常州の方に行かれる。車窓の左右に見える田園水鄕の眺めは、上海蘇州間に見るものと大差はない。

田園のほとり、農家の一とかたまりがあると、その村外れにはきつと水牛盤（龍骨車）と云へるものの設けがあり、又小川、運河の岸には前年用ひた水牛盤の跡とも見えて、問い大きな齒車のそのまゝ投げ捨てられてあるのが見えたりする。その他、畑地といふ畑地にはその方角を定めず、思ひ思ひの方に向けて築かれた田家の墓が幾らでも見つかる。その煉瓦積みの瓦家根式なのも、古風で、半ば壞れたその中から棺桶の覗いて見えてゐるのもあつたりするが、又堂々たる土饅頭の築かれ、その入口を切落とし、正面を煉瓦で築き上げ、大きい丸穴を穿つてゐるものもあつたとする。こは夫婦者の

墓らしくも見られる。土俗で、こはあの世へ行つてからも、互ひにその魂が棺廓の間を來往の出來るやうつくられてゐるのだとか、乘合の客が說明してくれた。本當かどうかたしかな話ではない。何んだか出鱈目のやうでもあり、又本當らしくもある。

また中にはよく見ると、土饅頭の中にある双方の穴の仕切りの處に大きな二尺大の穴の穿たれてあるのも見える。これなどは正に確かに二世を契つた靈魂の通路かとも見られる。

しかし今の支那の人のあたまには、死後の世界のことまで考へるものはなく、二世を契るなどいふ日本式の考へは聞いたことがないのである。現實的な快樂本位の支那人のあたまには一寸考へられないことである。恐らくこは他に理由のあつてのことだらうと思ふ。

江南の旅に見る車中談には、時折り、支那客から、不思議さうな顏付で聞かれることがある。

『日本の奥さんたちの背中に負うてゐるあの布の箱見たやうなものは何ですか。又どういふ譯であのやうに大きい箱をうしろに携帶してゐるのですか。』

この疑問は尤もであらうが、餘りに意外の感に打たれる。その間ひに對して自分は之を幾ら力を入れて「箱ではないよ」と說明してやつてもどうしても解らない。その必ず四角に結んであるため、一種特別の容れ物でゞもあるかと見られてゐるのである。そして更にもつと「あれはわざ〳〵飾りのために日本の女たちは、なるべく大きく結ぶのである」と說いて見る。するとそれでも不思議がつて尙その譯を聞かうとする。そこで「日本の女は昔から支那と同じく、腰柳を裝ひその邊りの大きく見えることを成るべく愚さうとする爲め、その女のたしなみとしてあれだけの必要があるのだ。」と際どい所まで說明に及ぶ。するとそこで遂に成程と合點が行き、腑に落ちた氣持を見せるのである。

民情風俗を異にする支那の家庭人には解らないことは隨分ある。尙車中でよく見ることである。その支那婦人として見目形のよく、相當良家の婦人とも考へられ、身の廻りの飾りも相當であるに拘らず、同席の客の手前もお構ひなく、平氣であぐらをかいたり、又無作法に、片足を垂れたりしていかにも見にくい恰好をするものがある。或は又手鼻をかんだりするものは、ざらにあるのである。かう云つた日本人に諒解の出來ぬことをするものがかなりある。しかしこは必ずしも教養の足りないための風習ではなく、江南は勿論廣く南北支那諸地方で見る所の一般のしきたりである。

無錫（ウーシー）は人口約二十萬と稱せられる大都であり、江南に於ける有數の工業地帶を占めてゐる。蘇州と相並び、民國實業界方面には相當の人物を出してゐる。無錫（ウーシー）といへば、その方面で、誰しもよく知つてゐるところである。しかし支那の旅に、こゝまで旅程を延ばすものはあまりゐない。又南京、上

海岡の火車の旅に、途中下車をしてまでこゝを觀光しようといふものもゐない。

無錫は火車の旅よりも、むしろ江南特有の運河を利用し、出來る限り水鄉を味ふ旅行振りをとつた方が價値が多いのである。すると、船は無錫旅館の大橋の袂に着く。城內城外に見る幾多の工場巡りの話は暫く割愛するとして、その目抜きの通りから無錫公園に行くとする。園內には近代式の娯樂の設備、陳列館、遊戲場など綠蔭にその配在よろしく設けられたものが建ちならびその境內も廣く、晝に、夜に、出浮く市民達の群れは大變なものである。又隨時園內寺內の大雄寶殿にはこの地方の產業の一つとして名の知れた養蠶の桑葉や、繭の展覽會など設けられ、それに化學的分析の結果など一々細かく圖解され又統計で示されたりなどしてゐる。日本、伊太利、佛蘭西、亞米利加などのそれらと比較研究などもされてゐて、一々入場者に之を指摘して說明をしてゐる青年もある。その黃色で形は正圓。如何にも繭らしき恰好をしてゐない珍らしき種もあつたり、又長手の方の繭には、化學分析の結果、意外にも絹の多い事實が表示されてゐたり、必ずしもその質が優良でないことを一般に告げてゐる。そして曰く、無錫の養蠶家は、この方面の改良について銳意研究する所がなくてはならぬと警告を發してゐる。さう云つたところ、意氣愛すべきものがある。

城內の殷盛振りは、緞綢老舖、雜貨店、旅館などの高樓建築にも見られ、街路は擴げられ、交通巡補は辻々に立ち、人馬の往來を整理してゐる。城內は一般に、活氣がありいき〳〵した氣分が漲り、碼頭から光復門內にかけての雜沓振りと云つたらさすがに目抜きの通りだけあると思はれる。燦びやかに見えた看板のあまた並べるうちに、實業建築公司との看板の下に、江王麟博士の中西式建築設計を標榜するものなどもあり、これなどはやはり無錫城內の近代式の明るい氣分を物語つてゐる一つである。若々しい製圖の係りの技師連中を指圖して營々孜々とやつてゐるビジネス振りなど、そこに無錫らしい氣分が見えてゐる。確かに蘇州の街よりかもつと大いに躍進振りを示してゐるやうである。

城外に見るべきものは、江南にその地ありと云はるゝ有名な梅園（メイユワン）である。西成門を出て、西の方十支里、乘合バスで二十五分、途中丘上の新しい小塔を右に見てドライヴする。路面はよく、乘心地も惡くないが、バスによらず悠々とてくつてゐる遊士の客も多い。湖畔、梅園に近づくと、山上半天に聳ゆる高塔は、その輪廓も鮮かに、梅林の勝地からむつくりと拔け出でゐる。これに續く渡り廊下、遊園地などが、高臺の上に遙かに指される。それが碧空の朗らかさと相映じ、その規模は宏大なものがある。

梅園の門前、柱に

丈夫貴立志

君子不憂貧

との痛快な文句を見る。支那は到る所に、この句を見るが、紳士淑女の出入多きかゝる遊園地に、之を見るのは君子をして出來るだけ散財せしむるの意味にもとられ、悪友の言葉のやうにも考へられる。入口の正面には、梅園の二文字、鮮かに、鋪道の天井、左右は、老葡萄の棚が出來て生ひ茂つてゐる。内に這入るに從つて、道は次第に登り、羊腸たる鋪道が、七重八重と通つてゐる。全山これ梅林で、その樹齢は若い。冬は、梅花の香氣高く漲り、春は、又桃林のあちこちに、その薄紅、深紅の散點して咲き亂れ、或は、又四阿の程近き道に當つては、一枝に薄紅、深紅、兩樣の花を咲かせてゐる珍らしいものもある。頂の高塔に登り、彼方の湖上を眺むれば、脚下、青山のもとに、五厘湖といふ内湖も指され、浙江杭州の西湖に較べ、著しく眼界の廣く天空開濶の氣に滿ちてゐることを知る。南太湖の洞庭、東山、西山は青山に妨げられて見えないが、水天髣髴の彼岸は、霞立ちこめ、全く水平線さへも見えない。塔下の遊園地には、屋上のグラウンドなど出來、その面積は極めて廣い。園内道に當つて、砲臺跡の如き洞穴をつくり、遊客に孔内深くグロ氣分を唆らせるやうにしてゐる。孔から出て、天空を見る出口にもつて行つて、「豁然」の文字を扁額に入れてゐるのは面白い。

由來梅園の地は文人墨客の來り訪ねる者多く、樓閣のもとには、蘭花香ばしき高雅な飛亭が聳えてゐる。こゝに雅聯、扁額、寫眞撮影、茶菓の饗應、詩文の雅催などとりゞに打興ずる事の出來るところも設けられてゐる。又太湖石の奇抜な形はあまた庭の一角に聳立し、蘭石を描く雅人の、生きた手本となつてゐる。吳昌碩翁なども生前梅園を愛して屢々足をこれに運んでゐたのであつた。

常州

常州は一に武進の名で知られ、畫人、錢維城を始め、文人墨客を輩出してゐる。又城内には、放生禪寺、崇法禪寺、その他の佛寺があまたあつて佛教研究者の足を惹きつけてゐる。又江陰（キャンイン）は長江に面した都城である。上海から長江をのぼる輪船は江流の對岸南通州の街と共に、こゝには碇を下ろさないで速力を緩め、客や荷物の上げ下ろしをする所として知られてゐる。もしそれ動亂の際になると、江陰は注目の的となる大事な要港であつて、支那軍艦の一二隻は、江上に碇を下ろし、これが警備の任に當つてゐる。又外國の輪船なども、こゝで夜間の航行を禁止せられ、止むなく一夜を過して江上夜泊をすることがある。

宜興

無錫から太湖の湖水を隔てた對岸の宜興（ニイシン）は、土語の通りニイシンとして上海方面でよく知れ渡つてゐる。殊にこの地は昔しから燒物の本場として、奥に九江景德鎭のあるに對し、この地方はその道の人に懷かしがられてゐるところである。

朱泥白泥の名を知るものでこの宜興の地名を知らないものは片手落ちといはれる。又古來、海鼠燒の火鉢、植木鉢を愛する者は、同時に宜興の地名に深き愛着を持つ。無錫から出る船は丁度その無錫飯店の碼頭から出帆し、運河を一路、西に走ること二十支里。こゝに宜興の船着場に達する。更に朱泥、白泥と云つた窯元で、細かい燒物を作るところは、南へ三十支里、蜀山と云ふところに到るべく、更に又蜀山から、鼎山（俗に丁山とも書く）には三支里であるが、こゝでは大形の睡蓮の鉢だとか、小判なりの水盤であるとか、火鉢類各種、植木鉢各種といつた海鼠燒きの作品が主としてつくられてゐる。

宜興をさして來る無錫發の船は、洛社、戴溪橋、運村、和橋、其の他貽亭橋（ナーテインチヤオ）と、各所の水鄉を過ぎて進むのであるが格別、變つた湖畔の風景もない。唯巧みに山と積み重ねた燒物專門の大荷船が、東をさして悠々漕ぎ出て行くのと行違ふのを見る位のものである。日本に來てゐる大の火鉢や水瓷などもきつとあゝした火鉢船、水瓷船によつて、一旦上海の浦東（プートン）にまで運び出され、それから轉々して日本へ輸入されて來るものである。その海上に行違ふ大船、小船の殆んど全部は、宜興燒きの積荷ばかりであるといつてもよい位の盛況を見せてゐるので、如何に、その本場の窯元が、偉大であるかゞ想像せられる。又その陶土を出す山に行つて見ても、如何に無盡藏であるかが察知せらるゝのである。

宜興で見るべきものは、城内では、葛德盛の燒物工場に於ける仕事振りとその製作品、或は又國民黨區黨部の役所又城外では東玖湖、西玖湖の水鄉の景色くらゐのものである。殊に東玖湖（トンヂウフ）、張澤渡の燈樓の趣は、その飛檐、輪廓の古雅なこと、誠に愛すべく、あたりの綠蔭と共に、湖面にうつつてゐるところは南畫そつくりである。燒物の本場だけに山川風物も風流で、その背景が自ら製作品の趣きを生み出してゐるとも云へる。しかし今や、城内の目抜き中心街を散歩して見ると、突當りに堂々と構へた中央黨部の派出所が、頑張つてゐて、武裝兵を街に出したり、又縣廳の名義で、打倒○○、剷除○○、撲滅○○、肅正○○といつた如き誠に殺風景極まる殺伐な文字を振り翳し、宣傳ポスターを壁高く貼り廻してゐる。これには全く興がさめる。道理で宜興滯在中にも、程先生といふのが見えて次ぎのやうなことを談笑裡に云つてゐた。

貴國政府、對於中國政府。何以往々起糾紛々。眞正互助親善。先生曰能否著書宣傳弊國國情。俾貫

國上下覺悟親善益。

などといつた事を土民は聞かんとしてゐる位であつた。

蜀山

蜀山の窯元は、その中央にある丘陵を利用して、その麓から頂まで、十幾條の長き窯をつくり、作業時間には、盛んに黒煙をあげ、山火事の觀があるくらゐである。窯元の董事（支配人）汪澄林先生に案内され、燒窯の中を見たり、藁や草を入れてたきつけるところの狀態を見たり、又未製品を內部に積重ねて行く樣子を見せてもらつたり、或は仕事場で婦さんや子供達が薄暗い土間に土を練り、低い臺の上で轆轤をしきりと廻してゐる所まで細かく實況を見せてもらふことが出來た。蜀山の轆轤は日本のやうに中軸を用ひず、唯全くの手加減で、陽氣な唄など歌つたり、談笑したりし乍ら、いはゞわき見半分に拵へてゐるやうな場面も見た。その邊の壁のあたりにはまだなまの形の出來たばかりのものをずらりと並べてゐた。どれを見ても、何れも恰好が呑み氣に出來、一種の風味が見える。又釉藥の白いのをかけてゐる所、或は絲をかけてゐる所など、夫々仕事場を異にしてやつてゐる處も見た。その又仕上げをする部屋では、筆洗、植木鉢、水差などの小口を砥石で刷りへらしてゐるなど、相當細やかな手際を見せてゐる處もある。或は描繪をする陶土や、又小刀でその下繪を削つてゐる助手もゐる。夫々その專門に並んでやつてゐる所は、恐らく千年の昔も今も餘り變りはないのであらう。窓小さく、室內暗く、如何にも落着きのある所で、拵へてゐるのであるから、その作品にも雅致が現はれて來るのである。

蜀山は運河沿ひの工場街である。振新陶器場を始め、相當燒物の卸屋が軒を並べ、大小の品物を河畔の廣場に高く積上げ、荷積みの便利な位置がとられてゐる。街幅狹く、向ひ同士樓上から手を差伸べると、互ひに握手の出來る位ゐ迫つてゐる。

軒には鳥籠が吊され、向ひの家の小鳥もよく聞かれ、又鳥籠を手にして巷を樂しみつゝ歩いてゐる者もある。又胡弓を彈じつつ流して來る旅藝人なども見える。

さゝやかな緞綢店を覗いて見ると、戸棚には日本製の更紗が太卷にして、縱に並べられてゐる。その隣りの茶館には、日本の味の素の瓶が幾つか並んでゐるのを見る。又邊りの雜貨店に並べられた文具の中には、黃色の六角の鋼筆（鉛筆）が見えてゐたりする。これも亦日本製であることが一見して解る。

又荒物屋を見ると、黑砂糖を、馬糞紙の薄いのを取り出で三角形に包み、昔風の古い秤で機敏に計

つてゐる所、又油壺の口から奥深く柄の縦についた杓を以て突込み、銅幣の五枚に對して、なみ〳〵と、客の瓶に入れてゐる所なども見える。

田舎村だけに凡てがかやうに古風に見え、日本の江戸時代か、明治初年の氣持がそつくり漂うてゐる。

汪先生の好意によつて、先生の家庭の樓上に數日宿をとつてゐた。先生は夜な夜な部屋に來つて、界隈の風俗談などを試みる。その中に、前晩、夜半にカチカチ、ヂヤンヂヤン鳴らして來た夜廻りの話が出た。この邊でも夜廻りは、打更的（ターヂンティ）といひ、泥棒の用心に人を警しむるもので、夜半二時には、竹筒と銅鑼を敲き、二時半になると竹筒のみを敲く。三度宛銅鑼を敲くときは夜半三時、四つ敲くと四時のしるしである云々。

なるほど先生の話の通り、それと知つてゐて聞くと、興味が深いのである。しかしその道幅の狭い夜半の巷に、しかも頻々ガンガンやられるので、おち〳〵寢て居られない。全く夜廻りのお蔭で、睡眠不可能な晩もあつた。その時は、有難迷惑であつたが、今では懐かしいたねである。殊に夜明けの四つの時は、銅鑼に續いて、曉天の安來節に似た俚歌を、しかもわれるやうな大聲で調子のよい所を、誰人か毎朝獨唱しつゝ窓外を行く。日本のやうな、カランコロンと下駄の音の代りに、支那靴のお蔭で足音は全くしない。がこの高吟には、かなり閉口させられた。しかし江南内地の純朴さ加減はこれで以て略々解るのである。すつかり馴れ切つてゐる汪先生が、朝の六時頃、目醒し自分に向ひ「よく睡眠が出來ましたか」と挨拶してくれる。「よくは寢られなかつたが夜廻りと曉の高吟はよい氣持でしたね」と答へたのであつた。すると先生は笑つてゐた。

やがて向ひの小鳥の囀づる、家の樓上は甲高い談笑の騒ぎでとても賑つてゐる。賑ふ筈である。これは德義樓といふ界隈第一の茶館なのである。朝五時、六時と云ふ頃には大抵邊り近所の者、目醒めると皆こゝへ集り來たり、熱湯を買ひ求め、タホルを湯に浸したまゝ、顔の方をくる〳〵廻して洗ひ清めるのである。熱茶を啜り、八仙卓を圍み、瓦ひ瓦ひに瓜、西瓜子をかぢりつゝ、「早起（ツアオチイ）、早起」の挨拶がある。又「吃飯了麼（チハンラマ）」（飯を喰つたかの意味でお早やうの挨拶と同意）といつてにこ〳〵、笑顔を見せてゐる者もある。

店の亭主は、樓上の一隅の穴から、大の藥鑵を綱でたくり上げ、手速く、これを持ち廻り、各卓上の茶碗に湯をさしてゐる。仲々の騒ぎで、どの卓上も、滿員。うろ〳〵立つてゐると、藥鑵に當つてやけどをする。少しは「油條（ユウチヤオ）」（長き油揚げ様のものをねぢつたもの、長さ八寸に達す）位のものは、用意もされてゐるが、朝飯をこゝでとる者は一人もない。どの客も、どの客も、殆んど寢巻姿で、遠

慮のない恰好をしてこゝに集る。早く云ふと、村びとの一日の仕事の手管、相談をする民衆倶楽部と云つた形が見える。その和氣靄々のうちに濃厚な郷土生活の躍動してゐる處が見える。

正面の壁には、高く古ぼけた額がかゝり、顔眞卿風の筆で「群賢畢臻（グンケンコトゴトクイタル）」の王羲之の文句も見える。確かに氣持の上から云つても、華客は皆賢人のみの集まりである。毎朝いつも正面の卓にきまつて席を占めてゐるでつぷり太つた圓顔の賢人は、にこ〳〵して自分に話しかけるのである。汪先生にはあひだを取り持ち自分を紹介してくれる。その賢人はかなりの年で、窯元の工人の親方をしてゐるとのことである。徳望のある翁と察せられる。卓上には小皿に切生姜が二三枚宛出される。朝の熱茶に添へられた點心（ヒヂヤウ）である。この界隈では、普通朝顔を洗ふとき、牙粉（ヤーフン）（齒磨粉）を使はないで、昔乍らの生姜を用ひ、口中を涼しくする習はせであるのみならず。朝の村びとの氣分を爽快にする。生姜、梅干の習慣は舊式のやうだけれども、東洋人には之がよい。舊式でも、これでなくてはならぬ。仁丹やタカヂアスターゼなんかは、それ程に歓迎されてゐない。

土地の風では、朝飯は、別の茶館に出かけ、大碗で以てお粥をすゝることになつてゐる。そろそろ九時近くになると、界隈から來た樓上の客は、すつかり入替りになつて、こんどは、近村近郷の田夫陶工などが、これに集り、午後の二時には、又土地の者が集まるといつた風に、一つの茶館が利用されるテンポの早いには驚かされるばかりである。

郊外の義渡を渡つて汪先生と鼎山の水郷、葛徳和の窯元を訪ねる。主人夫人を始め、家の子郎黨數百名の者が大規模の庭内に、又各工場に干場にとそれぞれ、その仕事に忙はしく、又樂しげにやつてゐる。

案内役の若い陶工の數名は、叮寧に大轆轤、小轆轤、土練り、釉藥、仕上げの各工場を順次見せてくれて、一々細かい説明がある。唯驚いたのは、大の火鉢や、水盤、水甕などの出來損なひ、傷もの、いびつ、などをすつかり纏め、そればかりにて、高い高い壘壁の築かれてゐた事である。支那四百餘州に出す海鼠燒の窯元だけあつて、これらの屑物きず物で一つのビルデイングが出來るのであつた。

裏山に案内されて見ると、こゝには陶土の原料の採掘されてゐる洞窟があり、何れも石骨兀たる岩山である。トンネル深く這入れるのである。山山には、見れば見る程、あちこち無數の穴がある。嶺あり谷あり、又窯を焚く松葉と、枯草の堆積した山が、彼方の原つぱに指される。水郷の運河に、横づけされてゐる民船荷船は、何れも海鼠とか、又は黄とか、綠とかの釉藥の色、美しき缸（カウ）、甕（ヨウ）、火鉢の積み荷で一杯になり、誠に忙はしい樣子が勇ましく見えてゐる。

蜀山に歸り、田舎風呂に這入つた。家庭では、汪先生のほか、蔣先生や、その細君、妹子、四五歳

の女少孩などゝ打混じ、田舎洋燈の五分心の暗い照明下で、心溫かき水鄉料理を戴くのであつた。地酒の味は、又格別田舎の風味を濃厚にしてゐた。

要する宜興には、宜興城内の葛德盛（主人は葛漢文先生）、振新陶器所（主人は蔣鴻當先生）、葛德和（主人は葛伯寅先生）の三者が互に鼎立して、天下に宜興燒の名を輝かせてゐるのである。古の磁州、（河北、南隅）、景德鎭（江西、東南隅）などと共に、支那の旅には最も興味深き所と云へるのである。

宜興の西のはづれ、西玖湖の水鄉に出る邊りは、人氣があまりよくない。あまたの武裝兵が、民船に大砲を構へ、警備に從事してゐる樣子は物々しく、水を渡つて聞こゆる喇叭の音も、湖上に一種變に響き、水鄉の景色のよい割に、どことなく不安の氣持を起させてゐる。

輪船は、每朝七時に、無錫を出ることになつてゐて、宜興から九十支里の、溧陽の都城に通うてゐる。結局無錫、溧陽間の二百四十支里を走つて、夕暮れの六時には溧陽に着く例となつてゐる。

所が西玖湖の漫々とたゝへた湖水の沖合で、自分共の乘つてゐた輪船の機關が壞れ、夕映えの光を浴びて我が船の姿は風流に見えてはゐるが、一向乘組はこの事故を前に、修繕をしようともしない。又乘合客の方も大していら〳〵騷ぎもせず、待てば海路の日和ありとゆつくり構へ、鼻唄小調などを歌つて、甲板に寢そべつてゐる者もある。夜に入つて、外の船の通りかゝり、汽笛の聞えるのを呼びとめ、これに引かせてやつとのこと、暗夜九時、溧陽の碼頭に着くことが出來たといふやうなこともあつた。

溧陽

溧陽は江蘇省、西南の一隅に位する奥地の街で、安徽街道から蘇州、無錫に出る交通の衝に當り、昔からかなり富んだ田舍都城として知られてゐる。その爲め、片田舍の奥地である割に、交通の便も意外によろしく、城内の樣子も、想像以上に市況が活潑に見えてゐる。

溧陽の街に見る客棧は、大華飯店を始め大廈高樓を聳やかしてゐるものが色々ある。殊に大華飯店は、新式の構へを有し、門を這入つた正面の大客廳には、姿見の鏡も素晴らしく、奥床しき八仙卓も壁に沿うてすらりと並べられてゐる。賬房の入口には、泊り客の名を列ねた一覽表の黑板が大袈裟に揭げられてゐる。正面姿見の左右に掛かる聯の句には、

下榻宜留哲士
授餐每歎高士

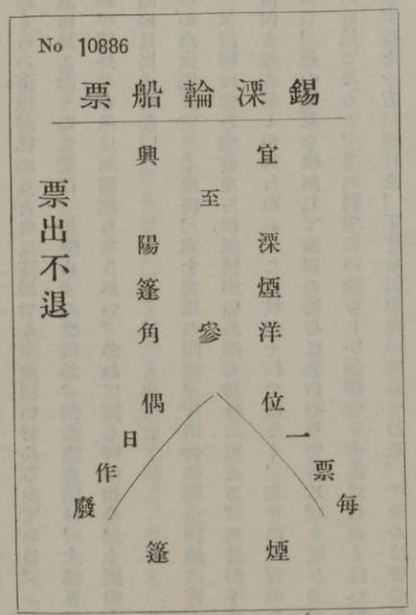
とあり、客の氣分を喜ばせてゐる。殊に又人を驚かせるに足りる者は、米國の船會社、ダラーラインかプレシデント型の船を宣傳せる大油繪が、その額緣も麗しく、掲げられてゐることで、その渡米客の吸收に努力してゐる熱烈さが見える。かゝる田舍にまで及んでゐる米國人の注意力は採つて以て學ぶ所があるのである。又客室は六十幾つもあつて、その設備裝飾などもかなりよく行屆いてゐた。

城内で見るべきものは、聽松亭、夫子廟などの文人の氣持に添ふものも多くあり、國民黨の中央黨部からも、例によつて兵隊が數多派出されてゐる。碼頭は船の出帆を市民に知らせるため、毎朝未明の頃から、しきりと汽笛を揚げ、城内の空氣に勇ましく活動的の心持を起させてゐる。

運河によつて北のかた金壇に行くには、西門碼頭まで出なければならぬ。碼頭の賑かさは、これ亦豫想以上で殆んど舳々相摩して水面の見えない位輪船、民船があまたぎつしり輻湊してゐるのである。

金壇

漂陽を船出して、金壇に行く道中には、道人橋、甕橋、紙錢標、王母觀、古龍塔、など云ふ處がある。この附近は、公安局長の名で匪賊討伐を名として、ピストルを帶びた兵隊が各所に配置されてゐる。金壇行の輪船の中にも、煙篷（三等の追込み）の中へ一人廻はされてゐた。しかしよい話し相手にして四方山話を交はして見たが、愛嬌のある快男子で少しも氣味のわるい先生ではなかつた。しかしこの邊では海賊をかくまつてでもゐる者が見當たると、すぐ先生たち之に闖入し、銃殺するのだとある。



江蘇省無錫から溧陽へ行く一錢蒸汽の乘船切符。大洋銀の三十錢で當日限り通用。この切符は宜興より溧陽に至るもの。原寸大である。

いふことであつた。

それくらゐ海賊討伐のことには當局でも意を注いでゐるのである。

運河に見る邊りの光景は、相變らずの桑田が、何處迄も開け、水鄉と云ふ水鄉には家鴨、鴨子などが戲れ、郊外の春色は如何にも柔らかい。かねて聞く噂の如く、土匪の本場らしい生ま生ましい景色は一向に見出されない。

北のかた金壇まで行く水路、六十支里の間は、片田舍の鄉土情緒に富んだよい所で、船内に見る乘合客、又河畔に佇む老農たちの風情がいかにも純朴に見える。老農が手にする五尺の長い竹の棒は、讀者は何と見らるゝか知らぬが、こは杖のそれではなく、先きに雁首のあるキセルである。悠々落つき拂つて、その煙草を吹かしてゐるところは畫のやうである。

船から見てゐると、手に翳すこの珍らしい長煙管を老農は口にくはへたまゝ、椅子に寄つて腰をおろす。すると一方の雁首は、丁度足元の處に達してゐる。キセルは管の長ければ長い程、煙草の味のよいもので、その邊は自然の理窟に叶つてゐるのである。

水鄉に見えるこのあたりの墓陵は、その土饅頭の天邊に持つて行つて、大きい紙の旗を置き、三角形を倒にしたくさび形の土塊で以て、之をおさへてゐる。その旗には、色繪が描かれてゐて、清明の時節には、その春風に飜り動くさま、一種の江南氣分を唆つてゐる。北支那の野に見るやうな、唯白紙をのせて小石で之をおさへてゐる光景などとは、趣きが違つてゐる。王母觀の村里には、瀟洒たる白壁の幅の廣い新築が江岸に聳え、これに「金壇縣王母觀小學校」と墨黑々と書かれてゐるのを見る。

金壇に通ずる運河は、東にずうと長蕩湖の水鄉をひかへてゐるのであるが、王母觀の邊りから次第にそれが遠ざかり、水路は白龍湯の湖中まで出ると、著しくあたりの水景は眼界が廣くなり、遙か彼方、水汀綠楊の裡から、天高く破塔の聳ゆるものが見える。影は湖心に落ち、得もいはれぬ痛快な眺めを見せてゐる。

船内で先きからしきりに、漢籍の大册を眼鏡越しに繙いてゐる村夫子をつかまへ、之に自分は耳打して、「向ふに見えるあの高い塔は何んといひますか」と尋ねて見た。すると古龍塔（クーロンタ）といふ塔だと答へてくれる。「今は和尚などゐるのだらうか」と疊かけて聞く。すると「あの下に破れ寺があつて少しはゐるやうです」かやうな話をしてゐるうちに、次第に船は航路を進み、その塔下を過ぐ。あまり聞えてゐない古塔であるが、規模は實に雄大である。佛寺は半ば傾いて見えるが、これも亦かなり大規模であり、小僧らしいのが五六人湖畔に出て戲れてゐる。邊りに民家もあつた。

そろそろこの邊から次第に大きな都城の郊外らしく思はるゝ風物が見える。廣い水鄉から次第に右

に方向を轉じて來ると、水天髣髴の彼方に街の景色が見え始める。運河は田園の間を縫うていつしか金壇の城壁下に這入る。漂陽の街とは違ひこゝは何となく、田舍らしい街で、大した活氣のある町ではない。

金壇城内の碼頭は輪船の影も少い。古色蒼然たる船影を僅かばかり見るのみである。船頭の嬶さん達が、青竹の竿を使つて、船の操縱を助けてゐる樣子なども見える。

金壇の街は、清朝の學界で說文學の泰斗として史上にその名も高い段玉裁を生み出してゐる所であつて「段注說文解字」の著者の鄕里としての金壇は金石學者の間に夙に知られた所、先年段玉裁は、山東曲阜の聖廟に先賢の一人として加へられ、新らしい神位にその名が刻され祀られてゐる。見るからに城内の雰圍氣は落着いた靜けさで、人氣もよろしく純朴である。城内に評判の城隍廟は、今は國民政府の金壇教育館に當てられ、青天白日旗の旗が門前に風に飜つてゐる。このやうな處もあるので多少近代風の處も認められるゝけれども、城内一帶の光景は寧ろ古い感じがするところで、街外れの民家の軒には、江南の田舍に普通どこにでも見る例の魔除札が戸毎に揭げられてゐる。卽ちその文字は、

姜太公在此、百無禁忌

とあるのがそれである。この意味は太公望の神樣が我が家に居られるから魔物は一切這入ること罷りならぬ。といつて、つまり太公望を魔除けの神樣としてゐる氣分が物語られてゐるのである。又民家の門扉に見る春聯には、恩蒙北出、紫氣東來などの古めかしい氣分を紅紙に現はしてゐる處もある。城内の道面は石の敷かれた舊路面そのまゝで、小車の乘心地など感心しない。

要するに金壇の都城は、新らしい文化にあまり多く浴してゐない。上海から蘇州無錫邊りの文化の影響は南のかた、漂陽あたりが最終の所となつてゐるらしく、最早や金壇の土地は古くより殘された舊都に過ぎないやうにも思はれる。城壁の樣子を見ても、何處となく神さびて、近代都市の俤は全く見出されない。城外遙かに聳ゆる金壇の白塔も古色をたゝへ、その霞のうちにぼかされて見えるところは懷古的である。

かやうにこの地方のさびれてゐるわけは、全く交通の關係から來てゐることで、運河の水路について見ても、通ふ民船の數少く、漂陽金壇間の船の去來も一向に繁くない。殊に金壇を中心としての東西南北各郊外へ通ずる交通は、運河の水量も兎角不足勝ちで船が動かない。殊に北の方丹陽に出る六十支里の水路と云ふものも名ばかりで、途中民船や竹の筏などの、川床に坐礁して拔きさしのならぬ困つた狀態になつてゐるのを見る位である。

といふのは、金壇から西北の平野は、ずうと幾らか小高い臺地となり、その地勢が自ら水運の便と

相容れない景觀を有してゐる。それ故さしもに評判の江南運河の便も、金壇以南、溧陽以東に於て、始めてこれを論ずることが出來、現實に實際の地理がかやうに見られるのである。

浙江から江蘇の天地にかけて、殆んど人體の血脈にも比ぶべき、運河網の組織は、金壇以北になると、殆んどその働きをなさなくなつてゐる。しかし城外沃野十里に見る春色は、誠に麗らかで、聚村で畑地に肥料をやる時の百姓達の陽氣百パーセントの高吟振りは、青空に鳴りひゞき、雲雀の聲と階調をたゝへ、如何にも和平なる田園情趣が窺はれる。蚕豆の畑や、菜種畑などの懐かしき光景の澁りに見えるのもよろしい。がしかし沃野よく開け、見渡す限りどちらを見ても四方に山を見ず、全くの一望千里の天地なのである。

かやうに曠野の唯中に、金壇から眞一文字に、北の方、丹陽さして十間幅に餘る自動車みちらしい廣い道路が遠慮會釋なしに切り通され、行手の彼方は、殆んど雲か霞の裡に消えてゐる。路上には人影を見ない。全くの片田舍の事とて、たまに、田夫や、一輪車の影を見ないこともないが唯普通は、江南の鵲が、三々五々路に下りて啄ばんでゐる位である。時には路の水流を横切れる所など、橋梁の架設工事で、苦力などの集つてゐる所も見る。

かゝる片田舍の田畝の中にかゝる立派な土木工事の敢行されてゐるといふ事實は抑も何を物語るのであるか。恐らく、こは南京政府の軍用道路を主としたものであつて、運河の不便な點をこれで以て補はんとしてゐるものであらうと察せられる。同時に又失業者の救濟事業をも目的として、かゝる大事業を起したものだらう。南京から程遠からぬ東郊の地點に當たる事とて、恐らくこは中山路に接續せしむる所の往還かとも見られる。今は新道に沿うて電柱が立ち、電線が二條も架つてゐる。將來これが十線二十線となるのは、遠いことでもあるまい。

金壇の旅で一輪車を傭ひ、郊外の田舍を遊歷してゐると、白塔は遙か後ろに、綠野を吹く和風はしきりと我が耳朶を打ち、車夫の話す言葉の調子は甲高い。懸命に我が車を押してゐる骨折りで春先きながらも兩肩に汗をしてゐる。時たま水流を見るとやつこさん岸に下りて行つて兩手で水を掬し、幾杯となく河水を呑んでゐる。生ま水と云ふものは支那の人は一切飲まないのだといはれてゐるが、田舍の勞農たちのかやうに河水を沸かさないで、そのまゝ飲む場面は屢々見るのである。田舍出の兵隊なんかでも、戰時には大碗の飯に、水をかけ、かき込んでゐる所を見ることすらある。例外であるかも知れぬが、これらは支那の旅に現實に目擊し得た話の一例である。

金壇の田舍、新道に沿うた古寺に立寄り見ると、壁や門前の扉に持つて行つて、無暗みに青天白日の青い紙が貼りつけられてある。門の看板は、「黨部農會」などの文字を掲げ、寺内には事務所らしき

ものを設けて、田舍ながらもモダン氣分を見せてゐる。

毎年季節定めず、大空に飛び來る蝗の群には、何れの江南の農村にも被害の莫大なものがあり、その蝗軍に對するデモを相談し、その遣り方として二十尺の大旗に太鼓、鉦鐘の微發、經費の出所などこれだけでも農會として大仕事があるわけである。恐らく如何に不景氣や、動亂の風が吹き卷くらうとも、それとこれとは別問題なのであるから、絶えずこの蝗軍のことにかけては、これが對策に腐心しなければならぬのである。

上海より鎭江へ

鎭江に這入る旅客は、最も普通は、上海から火車で蘇州、無錫、常州、丹陽の諸車站を經て此に至る。これが一等時間のかゝらない行き方で、上海南京間の八時間の途中、こゝに道草を喰ふことが出來る。尤もその通し切符では途中で下車は許されないことは、前に述べた通りである。もし旅客にして、からだを休めてゆつくり行かうとするならば、三千噸の河船で以て水路によることが何より好ましい所である、それには支那船、外國船と色々あるが、普通には上海で日清汽船の船に夜中乘込み、夜明けの潮時を見て吳淞港外を左へ進路を進め、右手の彼方水上に、崇明島（ツォンミンシン）の點々として見ゆる柳の影を指し、海の如き廣い水上を次第々々と遡航する。これが長江の本流なのである。長江の流れは、淡褐色、船底に水音のざわめきを聞きつゝ、乘心地のよい航行を續けて行くうち、水天髣髴の遙か彼方に、水鄕の單調を破る山が右手の方にあたつて見える。船長は、向ふに見える綠山は狼山（ランシャン）だと敎へてくれる、始めての長江の旅には、水彩畫にも描きたい位の秀逸な光景で、最も懷かしみの深い所である。近づいて見ると、山は三つの丘陵がかたまつてゐて、狼山のほかに、倚劍山、軍山と云ふのが相重なつてゐる。狼山はそのうちでも殊に高く、頂きには禪寺の白壁が見え、中に白塔の天を突いて立つてゐるのも指される。あたりの廣々とした天地に、たつた一つこの高塔の景色を見るのである。見渡した所、長江の蘆荻とこの狼山の塔影とが、江上遙かに、いつまでも眼を樂しませてくれてゐる感がある。やがて船は南通州の碼頭の沖で客を下ろし、又上り客を拾うて行く。大抵その狼山を通過した頃、岸には船會社の旗が碼頭の一角に揭げられる。日清汽船のであれば、赤筋の四本這入つたのが、風に翻つてゐる。

南通州の街は、ずつと碼頭から奥にあつて、自動車道は、江南第一の新道と云ふ評判のが通じてゐる。棉花の栽培を始めとし、紡績會社、學校、工場、その他文化的設備のゆたかなモダン都市として中部支那での先驅をなせる所。恐らくこの南通州に見る文明の空氣は、外人などをも驚かせるに足る

ものがある。といふのは、先年亡くなつた有名な張謇翁が、畢世の事業として綿絲工業、自治生活、交通運輸、衞生教育、電氣、ガソリン工業などと、あらゆる方面に、近代都市經營の先驅を標榜し、多大の努力を拂つた。それ故今や江蘇に於いては、上海以外、隨一無二の文明モダン都市と呼ばれ、天下に普く知られてゐる。從つて近代支那を云々するもので、南通州のことを知らないものは、支那を語る資格がないのである。

名前は同じことでも、北平の城外の通州の街に較べて、これは月鼈の差がある。唯、しかし南通のモダン都市としての缺點は、上海からこれに行く連絡船が甚だ悪しく、風波の荒れ模様の日であるなら上陸も何も出來ない。支那船なんかも、顚覆の慮れがあるので、時化る時は出さないことになつてゐる。兎に角その碼頭の設備よろしきを得ないのが、甚だ物足りなく見られてゐる。

狼山水道を、海北港の燈臺から、次第に西に折れ、江陰（キヤンイン）の港では、そも南通州と同じやうに船をとめないで、客の乘降に便じ、餘計な時間をなるたけかけないやうにして、かみへ遡る。

多く上りの船は、この邊りは夜中になる。その江上の三角洲など、晝間であるなら、綠柳の柔らかい並木の光景に蘆荻の眺め、烏鵲南に飛ぶ南畫式光景まで味はるゝ所であるが、それもさつぱり見られないのである。又對岸には、口岸（コアンシ）と云へる船着もあつて、時折りこゝに船を寄せてゐたこともあるが、このあたりも夜分であるから一向見えない。

やがて江上を行く船は大きく廻つて進み、美人岩で名高い甘露寺の崖下へと進む。焦山島の綺の如き水鄕の禪寺を賞しつゝ、鎭江の港に這入り、蘿船（ルウ）に横づけされるのである。

美人岩は、船長からでも注意されないと氣がつかぬ。船の甲板に立つて、左岸の崖下を見詰めてゐれば、いつしか、岩の二つ相並んで重なつてゐるのが見える。始めは人の姿をしてゐるわけではないが、船が進むにつれて、岩の重つた姿がさながら十六島田の日本娘に見える。立て矢結びのしとやかなところ丸でそつくりの樣子である。打ちはしやぎながら之に見惚れてゐるうち、次第に船は進むと、こんどは西洋髷の束髮美人に見える。コルセツト姿で、スカートを段々と擴げて行く恰好となり、その移り替りの妙趣は、いかに自然の造化とはいへ、如何にも不思議でならぬ。こは往年四川の奥地で土匪にやられた細川新吉船長が、客を摑まへては常に「あれ御覽」とニコニコ顔で說明に及んでゐたのであつた。長江下流の旅でこの岩くらゐローマンスに富んだ怪石はあるまい。上水（シヤンシユイ）（遡行）の時には、月明の夜など朧ろに見えてゐるが、下水（シヤーシユイ）（下航）の時は、夕暮れの時刻であるため、夕陽を斜めに受け、乙女の姿も暫し黃金色に顯き、スカートの眺めも薄紫にぼかされ、そのまゝその玉姿が闇のうちに消え失せるのである。

長江の旅は、こゝは特に急流の所でもあり、水路の折れ曲れる所でもあり、一方に焦山、片方に美人姿の岩、いやはや何かと忙はしい事で御座るといひたい場所なのである。

丹陽

又南の方、溧陽（リーヤン）の都城から、金壇經由で北行して來た客も、金壇を去ること、三十支里、石橋高き珥陵（アーリン）の田舍町に來る。その邊から丹陽に出て鎭江に火車で到達することになる。その珥陵附近には、延陵（エンリン）の街とかその外ちよいちよい町もあるが、この邊りから丹陽縣の管內に這入る。

橋上に鄒縣長の佈告が出てゐる。衞生淸潔のことをしきりと力說し、路上の不潔を警しめてゐる。これを犯す者は嚴罰に處すなど、頗る健氣な文句を毛筆でみやびやかに書いてゐる。しかし界隈の路面は、宛ら塵捨場の感もあり、臭氣鼻をつくものがある。若しかりに五百年の後世に、この佈告を古文書にして調べて見るやうな歷史家があるとすれば、眞ッ赤な嘘を事實の如く誤信するに至るであらう。今日東洋歷史に取扱はれてゐる忠臣孝子、節婦烈女などと美名を冠せられてゐる美談佳話なども、事情を知つてゐる者から一皮剝ぎ取つて見れば、中味は沙汰の限りであるといつたものが多いことであらう。これはひとり、丹陽の田舍の一風物に限つて云ふのではない。一般にさやうな事が云へると思ふ。

尙滑稽なのは、その町內に、最近開業した某新醫師が出してゐる宣傳である。自分の名前で、己れの手前味噌をだら〳〵盛り澤山に並べ、技術が海內一であるとか、藥の效能がどうだとか、色々讀む者をして齒の浮く如き事を大書して、橋の袂に貼付けてゐるのである。その勝手な熱を吹いてゐる所に、罪のない可愛い點はあるが、日本あたりでこのやうな事をしたら、醫師法違反で早速警察へ御用のある方のものである。

支那の田舍は、到る處、純朴の風物ばかりで充ち滿ちてゐるなどと思ひ込んでゐると、飛でもないことになる。その例はまだ〳〵幾らでもある。その一つを序に附記して置く。

金壇から、丹陽までの乘り物賃の定めてある旅客をば、一輪車から平氣で下ろし、途中酒杯を傾けたり、腹拵らへをしたり、草鞋をはきかへたり、さんざんひまどらせた上に、その費用までを客に持たせる。そして、いざ立つてあと半分の處をやつてしまはうと云ふ段になると全額のかねを強要して止まない。そして曰く、急に譯があつて自分は先方まで行かれないことになつた。もとの金壇まで引返すのだ。これから先は新規に一輪車が賴んであるから、それへ鞍替へをしろと、木で鼻を括くつた仕打ちに出る。さう云つて頑としてその無理を通うさうとする。結局客の方では、泣き寢入りで、負

ける。そして、豫定の處まで達するには、始め決めた旅費の倍額を取られてしまふと云ふやうなことになる場合もある。

かやうにして慣れぬ客が惡車夫に、轉賣される習慣は、各地到るところにあることながら、かういつた縣の管轄ざかひの分岐點になる田舍街では、特によく見る事である。

丹陽の都城に近づくに從ひ、運河の水は枯れ、曳船は水なきに惱んでゐる。竹の筏は、小舟と共に停頓してゐる。夕暮れの靄の中に、水牛に馴れた農家の少年達が、河邊に歸路を急いでゐるなど、田舍景色として優しく見える處もある。或は總角の童女が、二三人、船の苫の上で戲れあそべる光景など、夕暮れの情緒に寂しく眺められる。

或る年の春の旅であつた。丹陽の寶塔が幽かに指さゝるゝ頃、夕映えに輝いてゐた空模樣が、俄かに暗澹たる灰色の雲に蔽はるゝやうに變つて來たと見るや、一天かき曇り、物恐ろしき蒙古風に襲はれたのであつた。

見渡すかぎり田園の土砂を吹き卷くつて、濛々たる光景を呈して來ると、丹陽の都城は紅塵萬丈の中に包まれるのである。

丹陽城内では惠中旅館といふのが最も聞えてゐる。舊式の薄暗い客棧ではあるが、江に臨んでゐるので、朝日もよく差込み落着きのある明かるい氣分を客に與へる。橋畔には菜館が軒を並べ賑つてゐる。武裝した兵隊が近來市中の巷の各所を巡つてゐる。その爲め何處となく物々しい氣分がする。

丹陽は滬寧線（上海南京間）の通つてゐる所であるが、到底深陽の如き都城の賑やかさに比べ、足元にも及ばない。殆んど活氣のある點を見ないところである。

惠中旅館の客室に「本旅社規定」と題し、次の如き注意すべき事柄が見出された。

その一つは、貴客榮行の御來館になつたかたは、上午十二句鐘（正午十二時）までに賬房に御申出でのあつた方は、翌日の正午で以て一日分の勘定を申受けます。若しその時刻が過ぎると、二日分を頂きます、云々。とあるのである。又、「貴客不得携帶」といつてその下に「違禁物品」並びに「吸食鴉煙」と明記してゐる。阿片の事はこの通り八釜しく云つてゐるのである。

鎭江

城外の丹陽車站から、鐵路によりて鎭江（チンチヤン）に出る。鎭江は上海から水路百五十六哩、江陰からは六十一哩の地點で、南京へは四十五哩、漢口へは四百三十九哩の所である。

鎭江で見るべき有名なものは、最近英吉利が放棄した英租界の居留地跡、城内の目抜き、又天下に

聞こゆる金山寺の高塔、甘露寺の鐵塔、郊外の竹林寺、それから揚子江上の焦山島などであらう。

金山寺は金山寺味噌の元祖で、特に日本の僧侶には懐かしみが多く、毎日三百人からの禪僧が、大雄寶殿に圓座について讀經をしてゐる。高塔の頂まで登つて江南第一の天地を見渡せば、夕陽に輝き桃色なす江水、薄綠の蘆荻の原、沃野千里に餘る薄紫に長く尾を引いてゐる遠山の姿など、誠に眼界ひろく、江南江北の山水を一度に脚下に收め得て勇壯な氣分に打たれるのである。恐らく江南の旅で、この高樓に登る時くらゐ畫圖に富んだ自然美に打たれることはあるまい。是非とも鎭江の旅には、他の佳處を省いてもこの登塔のことを忘れてはならぬ。もとこの山は江上の孤島に過ぎなかつたが、江流のため三菱洲が埋まり近來半島成りの出つぱりを形造り、蘆荻の原で以てつながれてゐる。山下の水鄉は、奥地洞庭湖上から、千里の水を流して來る大筏が、こゝでその竹索を解き、船に材を積み替へる所である。それだけに、金の動き加減も荒く、從つて船頭の氣風もかなりさばけてゐる。仲間で女房の賣買、轉賣の風習などもあり、大衆的なエロやローマンスの材料の多い面白い水鄉である。

蕉山島は定慧禪寺、自然庵、夕陽庵、文昌閣など、有名なものが多く、長江に臨む風光は殊によい。禪寺に寶藏された胜鶴（ヲホカクイ）銘の石刻、その他周代の大鼎と稱せられるものなど、金石に因んだ資料が色々藏せられ、水景の美と共に夏季はこれに渡る遊客が多い。

甘露寺は又鐵塔を始め、乾隆帝の「江天一覽」の四文字を刻んだ飛亭、其の他堂塔伽藍の規模は大で、江を壓して聳えてゐるだけ、風光亦一新の趣きがある。

竹林寺の清越は、南の杭州西湖畔靈隱寺の奥の韜光竹林と、南北相對して有名な見所である。昔六朝の竹林七賢を出してゐるので、これは更に有名である。

揚州

鎭江に遊ぶ客は、美人で名高い對岸の揚州を訪ねなくては片手落ちの憾みがある。昔から揚州は、詩に文に唱はれ、今も尚鎭江から、午前午後に瓜州（クワシウ）の碼頭まで渡船が通ひ、長江を遡る船も、十二圩（シーリーウヰ）の港に速力を緩めて停まることがある。

揚州は、古くは廣陵ともいはれ、日本の廣島の如く、山紫水明の地として吟じられてゐる所であつて、藝州に廣陵をもつ事は、支那に揚州を持つのと同じ意味にとれる。

昔は文學の上で、廣陵の潮といつたらたいした處で、鳴らしたものであつたが、後世そのお株を錢塘江の方に奪はれ、爾來何の事もなくなつた。

長江から吐き出す泥土の堆積は、東へ東へと太平洋に進出し、そこに陸地を新たにつくつて行くの

で、今では揚州は海岸から二百哩もある奥地となつてしまつた。昔はもつと海に近かつたので、大潮の波がこゝで見られたのだらう。

長江も一種の動物のやうなものであり、千年を單位に常に動いてゐる。江岸の田畑なども、絶えずその水流のために動き、形を變へることがあるので、支那の人はこれを不動産としては見てゐない。支那式にいへば、實に全くこれを動産といつてもよい理窟が立つ。

隋の煬帝の一大土木事業として、史上に八釜しく歌はれた大運河は、揚州を起點として、北の方は遙かに天津の城内まで通じてゐる。恐らく當時は海岸まで距離が近かつた譯であるから、今よりももつと便利に水運を助けてゐたことだらう。煬帝が當時その兩岸の長堤に植ゑさせたといふ楊柳は、今尚名殘りを止め、宮女を侍らせてゐた當時の舟遊のなまめかしさを偲ばせてゐる。

瓜州に渡つた客は、その有名な運河を、煬帝氣取りで長堤の新柳を背景に優しい曳船に乘り、悠々曳子に引つぱらせて、揚州の城内へと這入るのも悪くはない。先は遠く天津まで立派に通じてゐる名代の運河であるから、今少し郊外を乘廻すもよい。

曳船は樓船であつて樓上の乘合客は、呉越同舟とはいへ、胡弓三味線をもつて半ば職業とし、悠々彈じ來りて、滿座春色を漂はせる、乘心地よき煬帝の運河を、彌が上にも面白く味はせ、河畔楊柳の影は靜かな水面に映じて、實に仙境の思ひがする。唄を知つてゐる者は胡弓をとり、一曲又彈じ始める。彈じ去り彈じ來るうちに、船はいつしか城内の碼頭に深く横づけされるのである。翠鳥の煙草の宣傳ビラは、「哈德門」「紅錫包」などのポスターと共に、民家の壁に幾十枚と貼られ、垂柳の影に隱顯してゐて、その倒影が又美しい。せつかちの客は、その別天地の水路を取らず、鎭江から來て瓜州の岸へ上陸するや、すぐ乘合の、バスに身を托し、一驅揚州へと急ぐのである。揚州の傳説は、腰に十萬貫を纏ひ、鶴に騎つて揚州に遊ぶといふ昔の故事のあるのも解るが、更に唐の詩人が、

故人西のかた黄鶴樓を辭し
煙花三月揚州に下る
孤帆遠影碧空に盡き
たゞ見る長江の天際を流るゝを

黄鶴樓送孟浩然之廣陵　李白

（故人西辭黄鶴樓　煙花三月下揚州　孤帆遠影碧空盡　唯見長江天際流）

と吟つてゐる詩も思ひ出され、揚州を背景として長江下流の水鄉が、遺憾なく吟じ盡くされてゐることを見るのである。

揚州の土地は、古來風光明媚といはれ、水清く、美人系統の土地でもあり、城内城外を通じて、蘇州に負けないだけの美しい佳人が姿を見せてゐる。比較的近代文化の侵すものが少く、どちらかといへば舊式一點張りの都城である。江むかひの僻地であるため、凡てが南京鎭江には著しく後れてゐる。揚州人をつかまへて、上海あたりではコンボニンといつて、幾らか田舍者扱ひにしてゐる位の處である。コンボニンとは江北人と書き、江南の開けてゐるのに對して、多少の差別待遇をしてゐるかの氣持が見える。それ位に、何處となく、古風な所もあつて、揚州獨特の奥床しさを持つてゐる。

南支那の旅で、江蘇巡りには此に一遊を試み、城内城外の面目を味ふべき所である。

揚州城内の特産物には、青貝をちりばめた細工物があり、黒漆の玉手箱、机、文箱など、殊に優しく、又古人の詩の句など聯に仕立てる時も、この青貝をもつて手際よく細工されてゐる。大小各聯共に揚州の風物を見るには手頃の土産物である。

又城内城外の水鄉河畔には、曲柳といつて、柳条の螺狀をなして、くる〳〵巻いてゐるものがある。これ亦揚州のほかに見ない物珍らしい柳の種類で、揚州の情緒を窺ふに好記念となるものである。枝を手折り、船で持歸らうとするには、花瓶の中で白い根を鬚の如く生じ、誠につき易い植物である。揚州の面影を聯想せしむるに、この曲柳くらゐ可愛げのあるものはない。

揚州で見るべきものは、城内の庭園で、何家花園、張家花園などが、殊に知られてゐる。又李盛鐸の故宅なども見ごたへがする。しかし、何れも今は荒れはてゝ古の面影がない。何家花園の如きは、蓮池、渡り廊下、飛亭、太湖石の岩組み、その他瑞樹祥花の美は徒らにありし昔を偲ばせてゐるが、何處となく見た目が淋しい。池畔の客堂は、柱軒部戸など、凡て殘らず白檀楠の香木で建造されたものであり、今も尚昔に劣らぬ芳香を放つてゐる。神さびて古色の出てゐる所に、懐かしさが深い。留守居の老人の話によると、土地ぐるみ一木一石全部をこめて、二萬弗といふ見當で賣物に出してゐるが、一向に話がないとてこぼしてゐた。恐らくその香木の一棟だけでも、五萬弗や十萬弗の眞價があるであらう。惜しいものである。

城内には拳闘が盛んで、良家の子弟達は、これを日課に學び、時折りその試合がある。美人騒ぎから、入組んだもつれを生じたやうな事もあり、たまには一刀兩斷的にこれを拳闘の方法で裁くの必要もあるらしい。

若き闘士達の腕を試みに摑んで見ると、それが鐵の如く堅い。武術の進んでゐるだけ、又半面に武俠的の人情美もあり、大いに闘ひ又大いに談笑するといつた古武士の面目が見えてゐる。

城内では老人達が、草結明といつて、日本のハブ草に當たる藥草を栽培し、庭の一隅に藥園をこし

らへてゐるものなどを見る。これは痢尿劑となり、視力を強め、腦の働きを囘春せしむる特效があるといはれてゐる。必ずしも不老長壽に直接のきゝめがあるわけではないが、日常のお茶替りにこれを煎じて飲んでゐる。

揚州の城外の見るべきものは、多くは水鄉にあつて、五亭橋、法海寺の喇嘛塔、平山堂、觀音寺を始めとし、徐家花園、蜀岡、天下第五泉などである。又明末の有名な宰將史可法の墓などもある。城內から畫舫を泛べ、運河によつて水門を出で、城壁高き城外の水鄉に乘り出すと、天空海濶、實に明るくて靜かな別天地がある。彼方に見ゆる水邊の綠林には碼頭があつて、これを綠陰といつてゐる。

夏の夜は、女の船頭が、客を乘せて漕ぎ出でる所で、色々なローマンスがある。それから先きの方は、行手の右に左に、垂柳が枝を水面に浸し、夏の夕べは大きな螢が數多群がり飛び、その流星にまがふ螢の光が水にうつる趣きは、又何んともいへない。垂柳の彼方姿は見えないが、胡弓、笛を雜へた管絃樂が、幽かに水を渡つて聞えて來る。又右手の彼方には、五亭橋の清趣を背景に、水上を渡る樓船畫舫が、佳人、老紳士を乘せて漕ぎ來る場面も見える。昔に變らぬ五亭橋下の水鄉は、誠に江蘇第一の歡樂鄉ともいへるであらう。今は工業地帶のけば〳〵しい手合も、こゝ迄は這入つて來ず、翰墨の雅人、吟客共が、我が天地となして集まり來る所だけあつて、氣持が暢びやかである。

水鄉の眞中に聳え立つ五亭橋の水景は、恐らく天下一品で、瀟湘八景や西湖十景にも、これに及ぶものはない。江南江北隨一の風致であるから、つまり天下無二の境地といつて差支へあるまい。

船を停めて、五亭橋の橋上に登り、こゝに涼を入れ、邊りの水景や、それから城壁の上に高く仰がれる黃ろい喇嘛塔の荒廢した趣きなど眺める。一種云ふべからざる詩興がこゝに漂うてゐる。恐らく折角の揚州に遊ぶの士は、この五亭橋下に來たつて、始めて揚州の都の奧床しさを知ることが出來る。又揚州が天下に名を悉にしてゐるのも、偶然でなく、全くこゝであることゝ思はれるのである。

揚州の水鄉では、尙平山堂の名所を見逃がしてはならぬ。こゝに宋の代、揚州の太守となつてゐた歐陽修が、この堂を造營して、こゝに風流を樂んでゐたところだといはれてゐる。堂は水汀の小高い丘陵にあつて、法海寺大雄寶殿のすぐそばの左手に當つてゐる。庭園の風致は殊によろしく、又後方の歐陽修の像を祀つた祠堂や、その傍にある天下第五泉など、茶道の嗜みのある人には、殊に懷かしがられてゐる。平山堂から、遙かに揚州城の空を見渡した眺めは、煙雲のうちに閉ぢこめられ、一段の畫趣が唆られる。昔歐陽修が文人墨客をこゝに集め、揚州美人を席に侍らせ、詩酒の間に風流を談じてゐた當時のことなども推察せられるのである。夏の夕べ、こゝに宴席を設け、揚州情緒を味ふのは又妙である。

水郷巡りは、更に程近き觀音寺へ詣で、これへ船を着けて、その靈域をさぐるのもよい。しかし揚州城外の觀光は、何んといつても夏の舟遊である。夏は白晝よりも、夜の水郷が殊に床しく、城壁の上に三日月の仰がれる頃、城内から繰出されて來る納涼の大舟小舟と云つたら、たいしたものである。その薄ぼんやりとした闇の水面を、明かり一つ點さず漕ぎ寄つて螢飛違ふ垂柳の蔭に、互ひ〳〵に挨拶を交はすところなど、女の船頭だけに興深く、隨分物好きの手合で、中にはこれを當てこみに出かける者もある。その間には、又珍談挿話の奇抜なところが生れてもゐる。

音に名高い揚州の川舟料理は、又思ひ出が深い。例の鷄の睾丸を集めて作つた柔い料理であるが、これは富豪の隱居達に喜ばれてゐる。家に飼ふ幾百の雄鷄からとり出されたものであることはもとより、これにメリケン粉を加へ、輕い天ぷらにした熱い所を戴くのである。

城内の家庭では、この睾丸料理をつくる日は、朝から庭の群鷄を集め、料理番が一々その鷄をつかまへるのである。左右の翼を背中のところで喰交へに合せ、小刀をもつて肋骨の下から二枚目の所をプツツと破る。そして更に内膜を切り開き、それから竹でつくつたピンセツト様のもので、さがし求めるのである。すると目的のものは背部にあつて豆狀をなし、行儀正しく二つ並んでゐる。その去勢せられた鷄公は、兩翼を元の位置に直してやるなり勇み立ち、からだをゆさ振りながら走つて行く。

そして知らぬ顏して、庭のはこべなど啄んでゐる。實に可愛げのあるものである。

尙江北地方で、相當有名な所としては、揚州の北方、運河沿ひの地名に、淮陰（ワイイン）の都城があつたり、又古い時代の奮黃河の流れてゐた樣子を見せてゐる河床の跡があつたり、又湖水として名高い洪澤湖や、高郵湖のあるを始め、無數の湖沼水鄕が打續き、その間、高郵縣（コーユー）の如き學者文人を輩出してゐる都城もあちこちに散點し、海岸地方では、北の方海州が江蘇北隅の海港として知られてゐる。こゝは山東に近く、土匪の本場としても評判になつてゐる處である。山手の方では、津浦線上に、例の韓信臺の故蹟のあることは、既に述べた所である。

要する江北の天地は、全體が水鄕地帶をなしてゐる。沼澤か、陸地か、季節によりその何れにもなるといつた所が多い。海拔幾らもない平地續きのところであつて、その澤國としての景觀は、湖南、湖北のそれと誠によく似てゐる所がある。

南京

南京は、上海から火車による者が多い。蘇州、無錫、常州、鎭江を經由する外、尙途中龍潭驛（ロンタンイー）を過ぎる。龍潭驛頭に見る水泥公廠（スニイコンチャン）（セメント工場）は見るからに、盛大な官營事業である。南京都城に

近づくと、沿線には棲霞寺の山門が眺められる。やがて堯化門、太平門、和平門の三驛を過ぎると、南京都城の火車站に着く。今は首都として洛陽もあるのだが兎もかく、豪華な古都である。大きくもあり、又新しくもある都城である。

最近南京驛は改築せられた。その規模大きいと云ふ程でもないが、面目は一新され、驛前の廣場も取擴げられた。船で南京までのぼつて來るには、上海から夜乘込んだ輪船が翌々朝十時前後に着く。南京の手前の鎭江には大抵その日の未明、これが冬季であると、金山寺の塔上に殘月の仰ぎ見られる頃につく。全く鎭江の寄港はなつかしい。夏であると、甘露寺、焦山の空に、東雲の光りが紅に鮮き、江上東天の旭光は朝起きの客には誠に氣持がよい。詩にも畫にも現はせないくらゐ曉天の情趣が味はれる。謂はゞ丁度伊勢の二見ケ浦に見る日の出の光りを拜する場面にも似てゐる。遠く母國の空を偲ぶには、最も適當な景色である。

鎭江の港の荷役にはさう暇どることもないが、どうかすると意外に時間の掛かり、從つて金山寺塔下を拔錨する時刻の遲くなることもある。そのときは、南京までの四十五哩の水路が遲くれて來る。惡くすると、正午頃になることもある。

上海南京間の航路は二百一哩、上海漢口間の五百九十五哩、さつと六百哩のそれに比べると、約三分一である。船は南京を起點として考へると、上海へは一晝夜、かみ手の蕪湖へ一日、九江へ二日、漢口には三日目に着く。だから結局上海漢口間の六百哩は四晝夜を要することになるのであるが、下りは一日省けるから、南京までは二日、上海へは三日目に着く勘定になるのである。

南京の碼頭は、揚子江岸下關にある。日本の日清汽船の日清公司碼頭や、招商局の碼頭、太古碼頭、怡和碼頭などが、此に並んで相接してゐる。船は碼頭の躉船に横づけせられる。躉船には、樓上にハルク・マスターのゐることは、鎭江蕪湖などの處と變りはない。

南京の江上には、時局でないときでも、日英米の軍艦や、民國の軍艦などが、舳艫相銜み、それぞれ居留民警備の任にあたり、わけて日本の海軍旗はどことなく勇ましく江上の朝風に翻つてゐる。黃色の水流を隔てゝ對岸には浦口の港が指され、津浦線の驛の建物や大倉庫の棟々が幾つも江岸に並び街の活氣に充ちた樣子が窺はれる。鐵路への客を乘せた連絡船も、絶えず江上を往復去來してゐる。又上海を出た上りの船の上から南京の街が見え始める前に、先づその見當をつけて見ると、南京城内に聳ゆる獅子山の姿、それから城外中山陵のある紫金山の高峯あたりの輪廓が、遙かに指される。水鄕から眺めた南京の都城は、見るからに活氣のある江城で、輪船の去來、碼頭の混雜、江岸の人影、火車の汽笛、獅子山頂の砲臺など、一つとして新らしい大都の面目を物語つてゐないものはない。

わけても江岸に聳ゆる箱形の巨大なビルデイングは、窓の數多く、非常口の階段を示せる黒線は、外壁に、ジクザクと畫せられて眺められ、煙突高く黒煙を吐いてゐる。これは和記（ホーチ）と呼ばれた製造工場で、もとは冷藏肉の會社であつた。世界大戰當時は、聯合軍へ向け、隔日に六千噸級の船へ、牛豚鷄などの冷肉を滿載して彼の地へ輸出してゐた有名な會社である。當時社長は英人とかで非常な景氣を呈し、六百割といふ空前絶後の利益配當をしてゐた。その經營振りの大陸的なることは、支那でなくては見られない位大規模のものであつた。その頃毎日二億斤からの肉を此に集め得たといふ。青島の屠牛場は、毎日三千斤の肉をレコードとしてゐる由であるが、とても比較にならない。歷史的に幾千年の發達を遂げてゐる大都だけに、することなすことが凡て大袈裟である。南京の旅の第一印象は、この和記のビルデイングをそのつもりの目で見ることである。

下關（シヤーコワン）には江岸の通りに、瀛洲（インチヨウ）旅館と云ふを始め、規模の大きい支那宿や、老舗などが軒を並べ、景氣のよい光景を示す。下關の碼頭からは、新らしく出來た幅の廣いアスファルトの中山路が、一直線に紫金山の中腹中山陵下まで通じてゐる。自動車や馬車、黄包車（ワンパオツオ）が、かなり繁々しく去來してゐる。舊名儀鳳門と云へる城門から城内に這入る。そこに武裝兵が三四人見張つてゐて、出入する行人の荷物を一々調べてゐる。爆彈、阿片などを忍ばせてゐるものがあるからである。

城門を這入つて、城内巡りをする。城内には山あり、池あり、寺あり、衙門（ヤーメン）あり、日本の總領事館もある。飛脚旅行で急ぎ足に之を見て廻らうとするには、日歸りで濟ますことも出來る。しかし一方に此の頃洛陽の行都が定められたとは云へ、折角の四百餘州の民國首都である。二千有餘年の歷史に富める古都でもあり、城内には菜園、桑田寂しき田園地帶もかなりある。何にせよ周圍の城壁が、四本里數で九里半と云ふ支那第一の大都城なのであるから、出來れば、數日の滯在くらゐは惜しむことなく、充分の嵌つた視察を遂げ、又忙中閑を偸んで、江南情緒の味のある處をも訪ぬべきである。

南京の都は、古くは金陵、江寧、建業などと、枚擧に遑のないくらゐ色々な名稱をもつて呼び來たり、今も金陵大學、江寧鐵路など、懷かしき雅名が襲踏されてゐる。唐の昔詩人文人の口にも、云ひ知れぬ風懷が吟ぜられ、中にも人口に膾炙してゐる七絶には次のやうなのがある。

千里鶯啼いて綠くれなゐに映ず
水村山廓酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の樓臺煙雨の中

江南春　杜牧

（千里鶯啼綠映紅　水村山郭酒旗風　南朝四百八十寺　多少樓臺煙雨中）

朱雀橋邊野草の花
烏衣巷口夕陽斜めなり
舊時の王謝、堂前のつばめ
飛んで入る、尋常百姓の家

烏衣巷　劉禹錫

（朱雀橋邊野草花　烏衣巷口夕陽斜　舊時王謝堂前燕　飛入尋常百姓家）

南京の都城は、その古いことに於ては二千有餘年の歴史を有し、又その新らしいことに於ては共産黨の份子の赤い手も這入り、學生の赤化運動もこれ亦盛んに見られるといふ、古今を打つて一丸となした大都城なのである。中々海千山千の複雑な大都市である。旅客がこれに一泊もしないで、そのうは滑りのした見方で片付けんとするなど以ての外である。寧ろ始めから、南京に來ない方がよい位である。しかしともかく來て見ると、實際に江南の柔らかい錆のある處が味はれ、落着いた趣きが、何處となく身に沁みて來る。上海などのあのけばけばしたさはつき方が淺はかに見えて來る。何んといつても南は南京、北は北平で、これが大支那南北に於ける兩大關なのである。

城内に見るべきものと云へば、それこそ無限にある。新しい俗客にも、古い詩人にも、共に充分の滿足を與へ得る所である。先づ始めに民國政府の衙門（ヤーメン）、鐵道部、教育部、司法部などの堂々たるものを見て廻り、鼓樓前から日本の總領事館に敬意を表しに行く。

若し城内に滯在をし宿を求めるとすれば、洋式では江南第一の中央飯店がある。又領事館の近くで宿をさがすとすれば、鐘和旅館など云ふもあり、旅館はかなり多い。が近來入り込んで來てゐる旅客の數の夥しく激増してゐるために、何處もこゝも滿員の態である。人口は既に五十萬を突破し、住宅難に陷り、建築が間に合はないといふ騒ぎである。但し宿屋の泊り客に對しては、かなり公安局から嚴重な取調べをしてゐる。他の地方の如く、簡單に手ぬるい事では濟ませない。保證人を立てゝからでなくては客室へ通さないやうな規則もあり、その外かなり厄介な條件がある。その宿帳記入事項は既に圖で示した如くである。これは赤化份子その他政治關係から來てゐるのだらうと思はれる。

旅客がもし始めての見物で、あまり樣子に通じてゐないと云ふものならば、先づ領事館を振り出しに順路を立てるのが普通である。それで人にもよるが、名所巡りをしようと云ふには、先づ鼓樓の下から鐵道を踏切り、北極閣の丘上に登り、天文氣象臺に遊ぶのである。續いて城壁の上へ出て、古鷄鳴寺に詣で、遙かに城外江南の天地の展望を恣にし、唐詩の所謂「南朝四百八十寺」「多少樓臺煙雨

中」と云つたあの詩景を味ふのが何よりである。

城壁の上の眺めのうちでも、特にその脚下、玄武湖の水景、蓮花の香ひ高く、畫舫の楊柳の間に隱顯する趣きを賞するなど、一段の興味が湧く。

南京の水郷は、揚州のそれとは違ひ、その眺めに展望がきゝ實に廣い。犬養木堂翁、頭山滿翁などが、先年中山先生の移靈式に臨まれた時も、こゝに舟遊の雅催があつた位で、一度南京に見えた佳賓と云ふ佳賓には、此處を水庭として清遊を請むるのが常例となつてゐる。

古鷄鳴寺の麓にある考試院は、元の城隍廟跡であるために、舊殿堂造りのその儘が今も用ひられ、之を禮堂としてこゝに政府主席委員を始め、大官連中は毎週月曜日の午前これに會同し、中山先生の神位を祀り、之に叩頭したる後、周代の古樂雅奏によつて、嚴肅な儀式が行はれてゐる。

日本では廟堂に立つ大官が、毎週かくの如く、その古を尚び、今を省みるの儀式を考へるなど云ふ暇さへもなく、唯刹那々々の公務私用にのみ追はれて、心に餘裕のあるものが少ない。唯生活に狂奔してゐる事を能事としてゐるのは如何なものであらう。

國立の中央大學は、最近に於ける南京の代表的建築として、輪奐の美を湛へ、鐵道部の殿堂造りの樣式と共に、支那民族としての新らしい力ある意氣を示してゐるものといへる。青天白日旗が、校門高く翻つてゐるのも、亦勇ましく見られる。

城内の中心地、夫子廟から、秦淮の邊りにかけては、夏冬共に大變な賑ひで、殊に畫舫の出る時節と來たら、全く立錐の地もない位な雜沓振りを見せてゐる。四明樓を始め、名ある茶館酒樓は、こゝに建ち並んでゐる。その茶館樓上ののぼせ上る計りの賑ひは、又とない南京第一の歡樂情緒を漲らせてゐる。

尚城内、目抜きの通りは、最近の市區改正で、官邊の鼻意氣とても荒く、立ち退きの日限が來てもまだぐづ〳〵してゐる民家は、何んの用捨もあらばこそ、軍隊の力もて早速どし〳〵取壞しと云ふよりか破壞にかゝる。かういつた支那式の片付方で今や着々大路は擴げられ、路面がアスファルトに改められつゝあるのである。

尚城内の一角には、模範監獄の瀟洒たる建物がある。周圍の壁はさまで高からず、門前に茂る柳の影も優しく見え、差し入れや面會に來てゐる人々が、三々五々と姿を見せてゐる。日本の刑務所とは違つて、甚だしく囚人に自由が與へられ、中には晴着とも見られる衣裳を着て、ミシン裁縫に從事してゐる者などもあり、案外陽氣に寛はれる。事實又中には悟つてゐるのか、どうせ一生この鐵門の内でくらす方が呑ん氣で心配がなくてよいなどと考へてゐる者もある。女囚人の中には、又阿片の犯罪

とか、又反革命の運動に參加したとかで這入つてゐる者などもあり、事務室の帳簿を一々開いて見ると、そこに色々の罪名が面白く讀まれるのである。

歷史的の名所として南京で聞こえてゐるものは、明の故宮跡に見える廢墟、それから古物陳列所の樓上樓下に並べられた江南地方の昔を偲ぶ古銅器、古碑、古瓦、武器、家具などと云つた金石關係の貴重品などが、かなり多くこゝに集められてゐる。中にも三國、吳の時代の「天發讖神」の刻石は、現物のまゝ實際に見られるので、こは天下の珍中の珍なるものである、又この地方で集められた大理石の井戸側には內側の面に持つて行つて、一々釣瓶繩の跡が永年こすられて自然に生じた深い切込みが見え、それが夫々放射狀をなしてゐるので、それが宛ら菊の花瓣を見るの感があるのは嬉しい。これ亦頗る珍とすべきもので、その石には大小各樣のものがある。中にも六角と圓形のものが一番多いやうである。

尙城外に出かけると、中山陵の大々的の陵域がある。その眺めは殊に雄大で、中山總理の靈を奉安する場所として最も適當な位置が選ばれたものである。境內は紫金山の中腹にあり、その幅の廣いゆるやかな石段三百三十三段を登りつめると、正面の禮堂は「山河清壯」の題額も見事に、豪華な建築に成り、すべて大理石で疊まれ、蔣中正(介石)、胡漢民、譚延闓など巨頭連の謹直な刻文が、壁に深く鑄込まれてゐる。堂の後ろに甲の鉢形をした圓い大理石の墓坟は、これぞ正に中山總理の遺骸を安奉したところ、更にその地下二百尺のところに先生の肉體は、防腐劑もて埋められ、千古の眠りに這入つてゐられるのである。靈域の展望は眼界廣く、石段の左右から後方前方、凡て步道を殘して、あたり隈なく松林をもつて蔽はれてゐる。今やこの紫金山下を國立公園化せんとする計畫も出來てゐる。後凋の松林は、綠葉年一年と濃厚さを加へるべきもの、何分山に水がなく、果角植林當時から株の枯れて行くものが多く、當事者のこれを補つて行く手數は骨の折れたものである。

しかし長江の江岸から中山路を一望こゝにドライヴすることの出來る便利さは、南京の旅に於いて最も痛快とする所、その路上、遙かに正面の綠蔭、紫色鮮く墓陵の屋根を目擊したとき、誰れか中山陵上に眠れる英靈の四百餘州に君臨してゐた當時の盛事に想到し得ないものがあらうか。

陵下の道を右にとり、麓の陵墓、明の太祖を葬つた孝陵に參拜するのは、中山陵歸りの道順として適當はプログラムである。孝陵は、近來特に淸められ、その境內龜趺を有する古碑の雅亭を見て正面に架かる大理石の石橋を渡れば、これ亦規模の大きい紅壁の廢址に至る。うしろに綠林茂る土饅頭の靜域がある。頂上に穴あり、誰れ人か、その內部に於いて墓泥棒を働いたものがあつたらしい。穴深うして奥は暗く、窺ふに由なしである。墓陵の規模が徒らに宏大で、今は昔の榮華を偲ばせるもの

のみである。陵道に立並ぶ石人、石馬、石象の趣きも、何處となく物淋しさを唆つてゐる。

太祖逝いてこゝに五百年、今はたゞこの荒涼たる土饅頭の悲哀を見るのみである。知らず中山陵の運命も、千年の後には如何がなり果てるものであらう。五千年の昔の少昊金天氏（黄帝の子）の墓陵の淋しさを、山東省曲阜の城外に現實に訪ね來たつた著者は、この孝陵、中山陵の徒らに雄大なるを見て、嘆美を禁じ得ないと同時に、支那に於ける英雄豪傑の墓陵の將來辿るべき運命は、大抵ほゞ先きの見えてゐるやうな感じがしてならぬ。誠に南京城内の盛事や、共產學生の紛擾を見るにつけても悠久なこの江南の天地に對し、結局のところ「南朝四百八十寺」と云つた悠久な氣持の中へ、雲か霞の如く消え失せて、「國亡びて山河あり」の嘆聲を詩人に發しめるだけのものではないかと思はるゝのである。

最近の南京通信によると、中山陵へは、十三層の精巧な八角の塔が、その石段の側へ五十萬元の豫算とかで建てられる事になり、既にその建設見取圖までも公にせられてゐる。その寶塔の建築といひ、又石段の構圖といひ、凡て支那のことは先づ以て常にその裏面に流れてゐる複雜な魂膽のあり、それによつて話がうまく行つたり、ぐらついたりする。該陵の設計の如きも、たしか三度も請負師が○に苦しみ、逃亡し行衛不明になつたことさへある。その幾ら立派な先哲英傑を祀る廟宇の建造にしても、半面には常にその天下寄金の募集率から來る分前の部合とか何とか、その邊のことが確實に握れるといふ成算がつかない以上は、決して着手されないのである。

これが奥深く裏面を流るゝ一般の氣持の物語られてゐる所であつて、その表面では先哲の偉人の英靈がいかに天下に轟かされ、その又「山河清壯」の題字まで鳴り渡り、その意氣込みの壯とすべき處がいくらあつたとしても、その實、内面的にかくれた消息を窺つて見ると云ふと、皆夫々底には底がある。幾ら輪奐の美を表はす天下一の偉陵であつても、これが日本的の犧牲的精神にピツタリ合した處の心持ちから出てゐるものでもあるやうに、日本流儀に考へるときは大變な見當違ひとなるわけである。

桃山御陵明治神宮などに對する國民の敬虔、尊崇の念の發露に之を比べて見るときは、あまり露骨にも云へない事だが全くそこに雲泥の差のあることをよく〳〵胸に藏して、この石段を踏み味はなければ意味をなさぬ。

中山陵はこの絶大の石段と、禮堂、墓坟設備萬端にわたり總體の上の工事費は幾百萬元とか、洩れ聞いてもゐるが、實際に全國民から絞り上げた額は、その幾倍幾百倍あつたことか想像が出來ない。最近民國廿二年長江流域に見た大水害の救恤金の分配方に就いて考へても中央から出てゐる幾萬の

巨額に對して、事實實際に罹災民の手に渡つてゐる正味の額は、わづか數千金を出てゐないとかいつて、あの當時ひどくねぢ込まれ、新聞紙上で、各地方その當事者を敲きつけてゐたくらゐであつた。この間の消息は、以て民の膏血を絞る方面にかけての免疫性となれる惡習慣のある土地柄のこととて、今更別に不思議とも思はれないのである。

支那は、各地到る處の大工事、大造營に對して、或は又、實業方面の新興事業に對して、我々の最も深く眼を注ぐべきはこゝである。いつぞや支那第一の輪船公司招商局の總辦趙鐵橋翁が殺害の憂目を見るに到つた裏面の事情も、その暗黑面にわだかまる翁の非行が、遂にこの運命を自ら招いたのであつた。このことは支那の本場では皆周知のことである。自分はこの中山陵を參拜し、又その中山路面の美を頌する氣持の禁じ得ないと同時に、聊か支那世相の裏面のからくりに想到し、甚だぶしつけ乍ら、多少穿ち過ぎた嫌ひもあるかも知れぬが、南京遊歷考の一端をこゝに述べて置く次第である。

これを憶ひ、南京城内に見る秦淮の畫舫や、そのあたりの歡樂境に見る極致の情緒を味ひ併せ來る時、唐の詩人がその當時既にその間の世相を看破し、商女の罪なき後庭花の調にこと寄せて、無言の情を述べてゐるところは同感に堪へない。

煙は寒水をこめて月はいさごを籠む

夜秦淮に泊す酒家に近し
商女は知らず亡國の恨み
江をへだて、猶ほ唱ふ後庭花

秦淮　杜牧

（煙籠寒水月籠沙　夜泊秦淮近酒家　商女不知亡國恨　隔江猶唱後庭花）

この商女の遊客を前に歌ひ興じてゐる場面は、今日の秦淮池畔又畫舫のうちにも同じやうに求められる。結局前にいつたやうに、英雄の坟墓も、皇帝の靈域も、何れは歲月と共に辿るべき道を辿るに過ぎなくて、悠久に續く支那社會は、商女の歌ふ音と千里鶯の啼きあふその音とに殘るのみである。

その折角、所謂泰西文明を向ふに廻し、支那は支那としての獨自の悠久社會を持つてゐながら、徒らに一方歐米にかぶれ、他方にその文明の崩壞を自ら招く如きことをしてゐるとは、少しく心あるものの考ふべきことではないか。

最近南京の新らしい學生共は決議して曰く、北平の紫禁城内歷史博物院内の寶物は、全部國民黨内政部の管轄に屬してゐるもの。之を幸ひ、今處理してしまふことはこちらの勝手である。よろしくこの際、之を賣り飛ばして三十萬元の軍資金にしたらどうか。馬占山の應援の資に當てたらよいでない

かなどあられもなき言を吐いてゐたものさへあつた。こは前にも述べた通りである。

世界無比の支那文化のこの結晶物が、又と得られないものであることに考へを致さず、之を端した金にせよなどとは、餘りに支那民族の面子（メンツ）對面を汚す了見違ひではないか。當時連中はこの決議をした日の下直後、某氏はその馬占山應援軍資金の集つたのを上海でうまく着服したとかで騒ぎになり裁判所に引張られてゐたのであつた。これ亦江南地方の世間では周知のことである。

これらの話によつても、支那の天地に見る大事業の多くは、皆その裏面の魂膽、消息がいつも頭を去來してならぬ。なぜに漢民族は、世界無比の天然物史蹟名勝保存會と云つた如き悠久性のあるものでも創設しようと云ふ氣にならないのであるか。又各名所、史蹟にゐる係りの輩をして、瓦をはがしたり、寶物の一部を内所で遊客に賣り飛ばしたりしてゐる不心得者を銃殺でもしてしまはないのであるか。

今日の民情は、既にこれら末輩の監督すらも出來ず、又各個人に自覺心を持たせることすらも出來ないといふ尾大振はざるだらしなき世相民情である。これで滿足をしてゐるのであるか。國士餘りに廣くにらみがきかず、所謂長鞭馬腹に及ばないことをもつて既にあきらめの境界に這入つてゐるのであるか。さう云ふ風であるから、山海關以北には滿洲新國家の毅然として、完全に民國から反き獨立を宣すると云ふやうな事實も生じた。中山陵の神位に對して民國青年たるもの、少しく心に省み恥づるの感はなきか。こは余が私かに國民黨、中央黨部、並びに南京政府各位に問はんと欲する所である。餘談ながら持説をこゝに挿入し、民國志士に訴へんとするところである。

南京の空には、一日に午前と午後各一回づゝ、上海南京間に航空輸送があり、二三百米の低いところを飛行機が定時に翔つてゐる。こは旅客飛行であつて、火急の用を控へた大官連は、いつもこれを利用してゐる。いつぞや一度、呉淞で民船の檣にひつかけ、しくじつたこともあつたが、大體怪我なしにうまくやつて來てゐる。上海事件のときは南京上海間は、かなりよく支那飛行機の空中偵察があり、日ざましいはたらきを見せてゐた。又城内から下關の碼頭かけて時折り幾萬の軍隊の出陣振りも勇ましく、あたりの市民を驚かせてゐることがある。日本人間に知られた十九路軍、察廷階の如き根强いものもゐるから相當近來の支那軍も見上げたものである。しかし根が總司令も一兵卒も、皆商賈根生で動いてゐると見るべき處もあるのであるから、日本の軍隊の出征振りのそれとは、まるきりその精神がちがひ、雰圍氣も違つてゐる。しかしユーモアがあり、柔らかみがあり、時には本氣の沙汰とも思へない感じを與へてゐることもある。

南京市中到る處の壁に見る打倒帝國主義の大文字、又塀に見る三民主義强調の文字など、その熱烈

な意氣込みは新支那の寮園氣をかなり明るく漂はせてはゐるのであるが、何處となくそこには新文明にかぶれて淺墓な所も見え、氣の毒に感ぜられる。

それにつけても、日本の領事館や、在留民達の時折り、不安に襲はれる境遇は、これ亦同情に値する。悠久の天地に、共に手を握る氣持さへあるならば、お互ひに氣拙きこともなく、談笑裡に交遊の出來る譯である。古くは須藤理助ドクトル、近くは松崎醫院の如き又寶來館の如き、幾度かその主人家族が、生死の苍を出入し、又此の度の上海事件に見る江南各地在留の日本人が大牛引揚げのさわぎを見たなどは、特に何れも同情にたへないことである。

今や、市區の改正、大厦高樓の建築、政府の建直し、色々南京都城の面目は、躍如たるものがあるけれども、南京城内は見たところ、今尚その市區の面積よりも桑田の方が多く、廢墟其の儘になつてゐる處が多い。都城はいつの世にもお定りのやうに、常に建設の後に破壞が來たり、破壞の後に、復興が來たり、絶えず同じことをかうやつて繰り返してゐる。結局、漢民族自身の誇りある文化と、その努力とを雲煙化してゐるに過ぎない。唯殘るものは、廢墟と、漢族のねばり强さの二點これのみが、南京の天地に特に濃厚に窺はれてゐるやうに思はるゝのである。

南京の名勝で、尚遊客の足を惹きつけてゐるものは、清涼山、擷葉山房、莫愁湖、雨花臺など、それから田舍に這入つて、棲霞寺、湯山（タンシャン）の溫泉などがある。中にも、清涼山は展望が裏南京の巻を越えて、遙か江南の田園、燕山、楚水の風光を賞することも出來る。又莫愁湖は傳說に富む柔かみのある蓮池打續き、楊花三月、池亭に訪ね來る吟客文人などまた少くない。唯餘りにその遠いためこゝまで南京の旅を延長する者が少いのである。

南京では、つい十年前まで、夫子廟前に、貢院と稱して、都で科學の試驗を全國から受けに來る試驗場の宏大な遺蹟があつた。田舍の鄉士で、秀才の試驗に合格し、各縣で擧人の試驗をパスし、次いで、その選拔された者が、更に國都に登つてこゝに進士の試驗を受けるのである。その受驗者が幾千幾萬の多きに達し、非常な壯觀を呈するので、場内には縱橫に整然と平行した長廊が建並び、各棟は、天地、玄黃、宇宙、荒洪とその名札が打たれ、更にその各棟の中が、一號、二號、三號と細かく仕切られ、試みに、身を之に入れて見ると、机一つと小さな椅子が入れられ、天井は低く、少しく臂を張ると、壁に當たると云つた窮屈この上もない者であつた。

試驗官はその天の字、地の字の夫々札のかゝつた入口の中心地點に見張つてゐて、若し手を出し、足をふんばり出し、不正なことがありでもしたら、すぐそこは見通しがきくと云ふやうに出來てゐるのであつた。北京にも、東城萩楂胡同に、之と同じ貢院があつたが、この方は早く取壞はされ、今は

原つぱになつてゐる。南京の方も、その後取拂はれ、今は綠樹、植込みなど多く、立派な公園地になつてゐる。城内の古本屋に、時折り一寸大の豆本で薄葉紙の頁に、米粒の一分一大くらゐの細字で以て詩文の書かれた美本の掘出されることがある。こは皆この貢院の試驗所でカンニングに重寶視されたものである。

南京の旅で、誰れしも一等興味の唆られるのは夫子廟前にある例の評判の歡樂場である。料理に、茶館に、寄席に、とあらゆる遊びはこゝに集中せられ、さながら大阪の道頓堀千日前のやうな感じがする。旅客は一度は必ずこの夫子廟前の夜の光景を味ふの必要がある。冬よりも夏の方が賑ふことはいふ迄もないことで、こゝに足を向ける以上は、一晩を徹にふるつもりでゐなければならぬ。尤も料理を味ふつもりであるならば、目抜きの老萬全が一番評判もよく、その構へも奥深く堂々と出來、又料理の味ひもよい。けれ共その邊りの雰圍氣に浸り、南京遊冶郎の氣分を十分徹底的に窺つて見ようと云ふには、通人と共にこゝに遊ばねばならぬ。

寄席の有名なのは四明樓であるが、その樓上の旺んな光景は、既に紅燈街の所で、詳しく述べてある。夏の夕べの畫舫遊びは、一時馮玉祥が入京してゐた頃、一切の遊興を禁じ、畫舫はもとより、孃雀女、あらゆる歡樂めいたものを法度で以て、嚴禁してゐたことがあつた。しかしそれも東の間で、南京の夏の夕べの溫度九十六度、九十九度といふ暑さには、氷の上でなくては夜が明けない。微宵、緣臺を戸外に出して、路上に夜明しする者もあるが、氣のきいた手合は、何れも畫舫の上で雞鳴を聞き歸つて來る。

民國の十九年七月一日から、解禁になり、それまで、岸につながれ、雨漏りのしてゐた畫舫も、俄かに活氣づき、五彩に塗り廻すやら、彩燈がかゝるやら、優美な聯や、額が飾られるやら、卓の周圍の椅子には、洗濯をした白いカバアがかけられる、といつた風で、全く面目を恢復した。こゝでは、自慢の川舟料理が運ばれる。胡弓や、笛の伶人、佳人をつれ込んだ良家の老爺達が、嘉賓を招待するときなど、その「好々（ホーホー）」と萬事受容れた氣持を笑顏に現はし、肥滿した姿を瓔珞の下に見せてゐることもある。揚州の五亭橋下とは違ひ、この水鄉は幅狹き秦淮の運河であるから、碼頭の所は、大小幾百の畫舫でぎつしりである。早く乘つた客は、櫓を漕がせて、夏の夕べを涼風に吹かれつゝ、閘の中へと遠ざかつて行く。後から後からと、幾らでも櫓音靜かに續いて來る。兩岸の酒家は近く、後庭花の曲らしき胡弓の音も聞こえ、舟の玉笛と和してくれてゐるのである。舟に持込んだ川舟料理は、廚子（チュウツ）（料理人）が溫め直して、盛り澤山、卓上に運ばれる。銀冠のついた象牙の箸に、銀盃の影も鮮かに、一乾杯毎に料理が變はる。醉ひの廻つて來た頃、右舷に、左舷に、木琴、洋琴など抱へた騷人

が、漕ぎよせて來て、しきりと呼んでくれよがしに、舷で眼配せをする。又後の方から、漕ぎよせて來た小舟には、低い調子の胡弓を抱いたのが、泣くが如く、又訴ふが如く、闇の秦淮に一段の詩韻を漾せてゐる。

酒酣に琴を彈ずる聲も涼しく、いつしか秦淮の江上を一巡りして、碼頭近く歸つて來る。實に、秦淮では、この濕熱を忘れしむるには、畫舫なくては始まらない。これを法律で禁ずるなどは、甘肅の山奥から出て來た山出しの馮先生などは兎も角も、生粋の南京子には、秦淮なければ、事實、夜も日も明けないのである。世を憚り、蘇州や、上海の四馬路に出浮くやうなことをするのは、厄介な話である。南京としては、市民の生活に、秦淮を是非必要な場所としてゐる。秦淮の畫舫なくしては南京市民の人道問題にもなる位に考へられてゐる。三伏の候、釜中に坐する南京子には、この秦淮ありてこそ、南京情緒の無限の樂しみが味はれてゐる。これが又生命でもある。花の都の南京は、この水鄉の天地に盡きてゐる。

秋の秦淮の月は、これ亦一種の趣きを漾し、雅人には喜ばれてゐる。何にしても、南京に二三泊する人は、こゝで秦淮の夜泊を體驗すべきである。十一時の終列車で、上海へ歸るなどいふ手合が、秦淮の畫舫へと氣ぜはしく一寸酒落込む事もあるが、それでは十時前に舟を乘り捨てねばならぬことになる。

本當の水鄉の味ひは十二時過ぎてから先きである。それから先きの、銘々の自由な天地は、天機洩らすべからずであるが、兎も角、火車のことなど考へてゐては、秦淮氣分を味ふ資格などないものである。

以上、ほゞ南京の旅の大要を述べ終つたが、南京の都くらゐ、落着きのある江南氣分を漾はせてゐる所はない。宣傳のポスターや、壁の宣傳文字は、年が年中、眼先きに見え、赤い學生の騷ぎも、よく繰返へされてはゐるが、その裏に流れる千古の江南氣分は、何處迄も懷かしさがある。その點は、さすが北方の北平と相對し南北兩中心地點といへる。

若し日本で支那文學、歷史、地理その他幽玄な支那思想、又老子莊子の流れを汲んで、本當の生きた江南の天地、民情、風俗、宗教、學術などに志さんとする青年は、よろしく笈を負うて、南京の古城に入るべきである。城外の棲霞寺にも、こゝに一二名の日本青年が遊學し、極めて少額の金で毎月を賄つてもらつてゐる。眞に意義のある支那研究を、將來の仕事にせんとする肚のあるものは、支那の匂ひの少しもしない島國にゐて、漢籍のみを繙いてゐるよりか、環境の凡ての事物、風土が、支那そのものの生きた材料となつてゐるこの江南の天地に來たつて、修めるのが、何よりも眞の研究の

道である。

言葉を學び、土民に接し、田夫と語り、學者高僧を訪ねるなど、一つとして生きた學問とならないものはない。寶の山に這入つて、無意識のうちに、その衣食住を味ひ、又年中行事を見、然る後に漢籍の文字を讀み又味ひ來る時は、言々句々その眞意が明察せられ、眼光、紙背に徹するの感がある。實際の地理も知らず唯地圖の上で、燕山、楚水を想像し、二十四史に、古今の治亂興亡を想像して見た所で、本當に役に立つ力ある歷史は修め得らるゝものでない。

今や夢のうちに描かれた畫餅は腹を太らすに何んの價値もなく、全くの徒事に過ぎないことを知れ。史記に韓信の列傳を讀むにしても、江蘇韓信臺の實際に踏み込み、苦力、ならず者共の群居してゐる陋巷の氣持を味つてこそ、當時の股くゞりの現場の眞相も知ることが出來る。

問題は現場の動きであり、觀察の力である。この動きと、力を取り入れて行かうとするには、唯島國の圖書館に居るだけでは、殆んどたいしたことは望まれない。

大陸の知識は歷史、文學、藝術、商取引、外交、凡て皆その現實に身をさらす事なくして、決して得られない。こゝが、西洋文明の糟粕を嘗めてゐる人には、理解されないところである。

支那文明は全然泰西文明から別天地をなし、その研究法、味ひ方、取扱ひ方が、凡て赤現實の材料から直感的に來る文化であるから、つまり、凡て自分の手で以て觸つて見、眼で以て確實に見て見なければ、本當の信念のある知識とはなり得ないのである。この點について、南京を中心とした、江南の天地は、實に東洋無二の學修所であるといへる。不穩の空氣漲り、動亂の巷と化してゐる時局に際しても、それが又一つの古の歷史の場面を眼の前に開展してゐてくれるものだと、かやうに見て、これを味ひこなすだけの心のゆとりとその融通性を持たねばならぬのである。要はその自然の趨勢に乘つかり、又四季折々の巡り合せ、時局の波の高低に順應して、これに棹し得るだけのゆとりを修養して得て、江南の天地を、我が書齋の延長とするやうに心得る所まで、各自の氣持を進めて戴きたいものである。

江蘇省の全貌

江蘇全省に亙る人口は三千二百萬と稱せられ、南北各省のうち、その數に於ては、四川の五千六百萬と云ふには遠く及ばない。けれどもその人口の稠密せる點からいへば支那第一である。從つて都城の數も、かなり多く、全國で有數の富裕な土地柄である。殊に湖水と水流に富み、奥地二億萬の住民を養つてゐる大江揚子江の江口を扼し、亞細亞第一の大上海をこゝに持つてゐると云ふやうな點で、

全く大支那の門戸を扼してゐるの感がある。南に浙江の財閥を控へ、殆んど全國の生きた富を、江浙二省で獨占してゐるの感もある。

されば天下に覇を唱へる總司令主席も、常にこの二省を米櫃の種となし、他の奥地田舎の方は、大して問題にしてゐないのである。嘗て軍閥時代に、五省聯盟總司令として君臨してゐた孫傳芳將軍の如きも、自分に話してゐた事があつた。「形式の上では五省と申してゐますけれど、私の肚では足もとの江浙二省さへ、がつちりと統治下においてゐることが出來れば滿足が得られます。あとの福建、江西、安徽の三省なんかは、大して問題にしてゐません。」

この一言をもつてしても、その志が奈邊にあるかゞ、容易に察せられる。江蘇の富は、全く水流運河が多くて、交通が便であり、又河沿ひの要所要所に、大都市を持ち、或は幾多の工場地帶を持つてゐること、これが歴史の古いことよりも、又景色のよい事よりも、有力な理由である。江蘇の住民は、體格は肥滿してゐる方ではないが、頭腦が明敏で、目先きがよくきく。國際馴れがしてゐて、言葉も殊に巧みであり、その思ふ所の意中感情を發表することに於て、他省の機先を制する特徴を有してゐる。江南の旅は、この心持で車中に又船中に、その民情風俗を見てゐれば、自ら首肯せられるものが多いであらう。沃野千里の江蘇の田舍には、紫金山、三山を始め、遠山の翠黛を遙かに眺めることが多い。平野の廣く蜿蜒と續いてゐるため、餘り高峯らしきものは、見當らないやうであるが、しかし、相當に一萬尺以上の山嶽もあちこちにあつて、山紫水明の名に恥ぢない者が多い。序でに左に九千尺以上の峯の名前を列記して置かう。

牙山	一、九八〇〇尺	溧陽
瓦屋山	一、八〇〇〇	同
了髻山	一、八〇〇〇	同
仙人山	一、二〇〇〇	同
大清山	一、四〇〇〇	同
青峰山	一、一〇〇〇	同
銅官山	九二〇〇	同
石屋山	九二〇〇	同
茅山	一、八〇〇〇	金壇
黄悦嶺	一、八〇〇〇	江浦
狗山	九〇〇〇	東海

安徽省

長江にまたがる安徽省

安徽は、長江筋で江蘇に隣れる省で、長江を挟み南半北半の兩地方から成り、省名も南部の都城、徽州府から徽の字を採り、北部の都城、安慶から安の字を採り、そこで安徽の名を生み出した者であると云はれてゐる。人口は千九百八十三萬餘、さつと二千萬近いところを擁してゐる。この省は李鴻章の如き大政治家を出したり、桐城派の文學者を出したり、古墨や古硯の翰墨の氣分を生み出したりなど、支那舊來の文化の淵源として、天下に聞えた所である。

山には江邊の空に聳ゆる名山、九華山と云ふのがあり、普陀山、五臺山、峨眉山と共に天下の四大名山に數へられてゐるほどである。又黃山三十六峰は、文人墨客の間に特に愛せられ、九華山の佛教方面に知られてゐるのと並び稱せられてゐる。安徽の交通幹線は、長江の流れと、北の方、津浦線の火車便とである。津浦線の烏衣、滁縣、臨淮關、蚌埠、固鎭、宿縣などは、何れも時局の動亂に際し軍隊を北上せしむる時など、紙上によく出て來る名前で、世人に親しみ多き所である。

安慶

安慶の都城は舊名を懷寧ともいひ、又その西部に皖山の聳ゆるものがあるところから、單に皖とも雅稱せられることもある。江岸水邊に聳ゆる安慶の高塔は、まだ出來て新らしく生き生ましい姿を見せ雅情を唆るに足りない。安慶は百年の昔、鄧完白山人を出してゐることは世に知られてゐるが、その完白の雅號は、地名の皖の字から採られ分解されたものであらう。今尚その古宅は保存されてゐるが山人の篆隷畫卷は子孫の鄧初大人（藥劑士）の北平西城の僑居にあまた寶藏されてゐる。安慶は北郊桐城の地と共に文墨方面に懷かしみの深い所である。安徽の全省が南北に二大別されてゐることは上に述べた通りであるが、その江北の半省を安慶道、江南の半省を蕪湖道と呼んでゐる。

蕪湖

安徽省の南半で、名高い都城は、いふ迄もなく、蕪湖と徽州府である。

蕪湖は水路、南京から五十五哩、上海からは二百五十六哩あり、太平洋の潮の滿干はこの港まで、影響して來てゐるとの事である。尚蕪湖からかみに上れば安慶へは百六十二哩、九江に二百五十二哩、

、漢口へ三百九十四哩である。しかし長江を上下する旅客で、蕪湖に寄るものは極めて少ない。

蕪湖の名前は、むしろ名物の方の名で知られ、江南地方でウーフーチンと呼ばれると、皆蕪湖蟳(チン)の事を思ひ出す。こは蕪湖獨特の蟹の名物であり、その味ひは素的によい。殊に醉蟹といつて、まだ生きてゐて、脚の動いてゐるまゝの蟹を、沸ぎらせた酒の鍋中へ落として料理するのである。こは上海の紅燈街あたりでも馬鹿に評判がよい。その甲羅を指で割つて頂くのは、仲々手際を要し、慣れぬものにはむづかしいところであるが、兎に角酒の肴としてこは珍らしい御馳走なのである。

蕪湖の碼頭まで南京からのぼつて來る途中には、采石磯の水郷がある。之を過ぎると、古塔懐かしき蕪湖の江城に寄港するのである。例によつて日清のハルクがあり、船が着くとハルク・マスターの來船するは云ふまもない。江上から見た蕪湖の眺めは、亞米利加スタンダード石油、美孚のタンクのあるあたり、又廢塔の頂に生ひたる宿り木の綠色、或は稅關山の森影に赤煉瓦の洋風の官舍、白き丸柱の並んでゐる光景など、旅人の目には珍らしく鮮かに映ずる。日本人のわざ〳〵蕪湖に上陸しようと云ふ旅人は少ないが、城外の長街(チャンジエ)のその名も示す如く、馬鹿に長い街に古玩店あさりなどするも興がある。手前の稅關山には、鹽務稽核所、其の他の衙門、官舍などが散點してゐる。之を訪ねて山上に眺望を恣にすれば、長江の水を眼下に、江を隔てゝ、かなた、對岸の平野には、巢湖の邊りから、蚌埠(バンブー)の方角までもがぼんやりと霞の間に指され、安徽北半の大景が手にとるやうである。

何と云ふ事もなく、長街の商家、煙草を刻んでゐる店先に這入つて見ると、日本の泉州、堺から入れてゐる刻み庖丁の職人の手に使用されてゐるのを見た。由來長江の天地には、奥地四川の祕境まで、堺の製品が歡迎せられてゐることは特筆すべきことで、そは庖丁の恰好や刻名によつても知られるのである。

又城内にある日本の領事館は、船の着く所から、かれこれ二里近くもあるかと云ふ感じがする位、奥の方に位置を占めてゐる。いざといふ時、これでは間にも拍子にも會はないと思はれた。城内城外共に自動車の通はない舊式の純支那街であるから、動くにはたゞ黄包車か、轎子のほか仕方がない。それに土地の習慣上、動くにはなるべく、てくるのが普通の事になつてゐるらしい。こは路面と云ふ路面が石道の多くて、人力車の乘心地の頗るよくないためでもあらう。日本人は日清公司の蒸船にゐる日本人以外、城内にも多少ゐることはゐるが、重に役人を除けば、少數の商賣關係の人々である。これも動亂、排日の騒ぎにいつも引揚げたり、何したりするので、隨分氣の毒なものである。全くその孤軍奮闘振りには、人知れず一掬の涙を催ほさせるものがある。

蕪湖の港を出で、水路西南、荻港(テイカン)（桃沖山鐵鎮）、銅陵(トンリン)を經由、六十二哩にして大通(タートン)の碼頭がある。

安慶につくよりか餘程手前の處である。がこゝは南の方、九華山、黄山があり、又その奥に墨の名所の徽州府もあり、かうした何れも由緒深き天地へ別け入るには、この大通の港を起點として、跋渉に取りかゝるが一等順路なのである。

自分が先年安徽の奥を跋渉し、徽州の祕境に視行脚を試みた時には、この大通からの山道をとつて這入つたのである。水郷、蘆荻の奥深き寒村に着くと、江岸の丘上には、瀟洒たる飛亭が見え、碼頭には、沖遠く朱塗りの美しい篷船が浮んでゐる。見るからに水彩美に富んだ風雅な田舎港である。

この附近江邊に茂る楊柳の並木は、打續く連年の蝗軍に惱まされ、その被害は殆んど、冬枯れの如き慘狀を呈し、綠葉を見ない春さへ多い。

大通を中心に、安徽一帶の江邊の景觀は、見渡す限り蘆荻の原で、その幅は恐らく數十哩以上に達してゐる。眼界の達する限り天際に及ぶものは、唯凡て蘆の原のみである。渺々たる天地は、その天際を流るゝ長江を見るの外、唯天と蘆を見るのみである。時たま蘆原の彼方に眠むる如く靜かに、帆船の風を孕みて滑つてゐるものが指される。蘆原を越えてかなた帆船の散點せるを見ると、まだあの先きに長江の水路のあるかを思はせる。こはその蘆原が陸地ではなくて、一つの洲島をなし、三菱洲に過ぎなかつたことを物語るのである。和風綠野を吹く天地に、楊樹の影の興味を帶びた色の淺い輪廓があちこちにと認められる。誠に大きい江南の景色である。どちらを見ても、見渡す江邊と云ふ江邊は、千里の蘆原のほかに何ものも見ない。

船の進むにつれて、いつしか天際に山遠く、水長き光景が見えて來ることもあるが、その山は地平線上に薄紫の色をなし、長く裾を曳いてゐる。所謂翠黛の眺めで、こは南畫の卷物に見るものそつくりである。その山の紫色なるを背景に、綠なす蘆原を前に、そして淡褐色の長江の流れを我れは行く、と云つたこの大きい景色は、淡彩畫でうまく之を描けば、たしかに一幅の長江圖卷が出來るのである。

この蘆原については、こゝに述べておきたい事がある。嘗て日本三菱の設計で以て、長江下流六百哩に亙る兩岸のこの蘆の纖維を使ひ、工業用の原料として、こゝに亞細亞第一の製紙工業を創設せんとしたことがあつた。年々歲々、その江岸に生ひ茂る蘆の葉と莖は、恐らくこれを用ひて製紙事業をすれば、世界の製紙業は壓倒せらるゝの感を呈することであらう。每年その秋の末つ方、幾百噸と云ふ大の民船が、その江邊に刈りとられた尨大なる枯れた蘆の荷物をば滿載以上に滿載して、その幾十百杯となく、江上を流し漕ぎ行くときの光景は、眞帆片帆の秋の夕陽に照され、黄金色に染められるゝところ、實に長江でなくては見られない大きい、長閑かな水景である。

三菱のこの折角の計畫は、その工業用として鹽を要すること莫大なるものがある。支那側は、當時その鹽を安く供給してくれないと云ふ行きさつもあり、結局この一大事業は頓挫して、二十有餘年この方、さしもに有望視せられてゐた一大製紙業も、計畫許りで沙汰止みとなり、今はその話を知つてゐる者さへゐない位になつた。

今後時局の安定を得て、この計畫が再燃でもし、之が日支合辦の事業でなりと、實現するやうなことが出來れば、兩國提携親善のために、それこそ眼覺ましい一轉機が劃せらるゝことゝ思ふ。又大通（タートン）蕪湖間には、有名なる桃沖山の鐵山があり、坑内から採掘される鐵鑛は盛に火車により、山下、荻港（ティカン）の碼頭に積出されてゐる。そのためこの荻港は、日支工業家方面の間には湖北の大冶に次いで、相當知られてゐる。

かやうな譯で、安徽江邊の天地は、事業家の目から見ると、無限の富を有し、上に漢口あり、下に南京あり、上海あり、實に長江寶庫の一つとして、國際人の興味をそゝり、且つ注目の的となつてゐる所である。

支那の旅は、單なる都城あさり、或は名所舊跡めぐりばかりでなく、心ある士は、靜かに眼を安徽の天地に放ち、内地の山川風物を親しく見て何んぼかその閃めきを摑むことが、又大きな旅の役目であるとも云へるのである。

黄山三十六峯

大通から奥地、南の方、黄山の祕境は、山又山の山郷であつて、殆んど日本人の間には知られてゐない。がその奥には、古來翰墨社會に、文人墨客の騒いでゐる有名な硯材、歙州（シュウジウ）石の出る山があり、溪があり、更に又名墨の産地歙縣、徽州だの、休寧だの云ふ處もあり、たしかに北安徽よりも趣味の深い所が多い。

先年自分が安徽の奥地跋渉の際には、親しく上述の大通（タートン）の水郷より這入つて、九華山を越え、石埭（シーアイ）縣（シェン）に下り、更に又、黄山三十六峯を踏破して、羊山嶺（ヤンシャンリン）から黟縣（イーシエン）の里に下り、漁亭（ユーティン）から水路、萬安街（ワンアンガイ）、休寧屯溪（シュニントンチイ）の各山域、山境の佳處を巡り、徽州府に落ち着き、更に又峽中の祕境から水路錢塘江の上流を民船で下り、嚴州から杭州に出たのであつた。本當の奥地山河の旅行を體驗し了へたのであつた。

この時の黄山の跋渉は山嶽重疊の安徽の幽谷、人煙稀なる仙境に分入つたので、山間に見る民度も低く、殆んど太古そのまゝの生活狀態で、遠く二千年、三千年の昔の原始部落を辿るの感があり、その山境一帶の文化はお話にならないのである。

當時自分は、或る山里で山人と語り合つたことがある。そして日本の話を路みち樵夫達にして聞かせたのである。すると、樵夫の質問する處が面白い。全くの奇問である。曰く、

「日本といふ國は月亮（お月樣）が出ますか」「出るよ」、「どんな形をしてゐますか」「まん圓い事もあるし、半分缺けてゐる事もあり、三日月のこともある」

と說明する。すると不思議な顏をして、

「それでは、老爺、安徽の山に見る月と同じ形のが貴國にも出るのですね」

と云ふばかりでなく、そのとき樵夫たち、いかにも感極まつて、不思議さうな顏をし、互に顏と顏を見合はしてゐるのである。

自分は「同じ形の月が別々にあるのではない。一つの月が天に高くかゝつて、それが支那中を照らし、又日本中を照らしてゐるのだ」と全く噛んで含ませるやうに云つて聞かせる。しかし、連中は益不思議がつて、小首を傾け、邊りの老媼たちをつかまへ、

「何んと不思議なことぢやないか」といつた目付をして同意を求めてゐるやうな樣子が見えたのであつた。尙樵夫は言葉をつゞけて

「それぢや、老爺、晝間は太陽は矢張り出るのでせうね」と訊く。「太陽が出るから晝間があるのぢやないか」と子供にいふやうな話までして聞かせる。

文化の程度は、この安徽の山奥まで這入ると、先づこの邊にある。昔千幾百年の以前には、安徽は有名な學者淮南子を生み出してゐる。淮南子の天文訓と云へば、天下既に定評のある所のもので、支那文獻の天文學上に於ける先驅をなしてゐる者と云つてよいのである。こんなものが一方にはちやんと出てゐるにも拘らず、黃山三十六峯の奥地は、正にこれ太古ながらの初ぶな狀態にゐる。

安徽には、穴居の民こそ見ないが、殆んど河南山西の穴居民よりもたしかに、後れてゐると云へる。

支那は、昔からその政治の根本が、民は知らしむべからず依らしむべし、との大方針のもとに出來てゐる。云はず語らずのうちに、その治下に、代を重ね、世を襲いで今日となつてゐる。知らないのが、むしろ當然ともいふべきであらう。

しかし外來の思想を知り、外國文明にかぶれてゐる山村は、江西に、福建に、その他、各所に、ソビエツトロシヤの出張國が出現して、全國あちこちに、島の如く現はれ、それが互に糸を引きつゝ擡頭してゐる。しかしこは共產ロシヤのうは面の文明にかぶれ、結局、それから村全體が、墓穴を掘り自ら滅亡期を早めつゝある實情に照して見て、寧ろ、こは外來文化の色氣など、眼中に措かず、又そ

の影響の圏外に立つて、月や、太陽の科學的知識なしにかうして天の與へた自然裏に、幸福な生き延びかたをしてゐる方が、どの位人間として仕合はせであるか。かういつた人生觀が人ごとながら、つくづく感ぜられたのである。

恐らく長江の奥地といはず、又萬里の長城外といはず、支那四百餘州の祕境は、千九百三十二年型の當世流な歐米文化の波及から全然離れた別天地に立ち、大支那としての行くべき道を取り、悠久な人間生活の平安にして自由な天地を求め、此に自ら耕し、自ら樵り、又自ら漁るに在るべきである。見方によつては、結局は國の文化をいくら進めて見た所で、少數の權力者、貴族達に弄ばるゝに止まり、唯その喰ひものにされるばかりである。いくら支那では身に汗して、多額の租稅を納めて見た所で、結局は總司令の贅澤三昧な生活を助長せしめ、身邊を守る兵隊の費用を貢いでやるやうなものだといふ手取り早い本音を吐いてゐる者もある位である。

かやうな奥地に深く分け入る旅行の知らせでも、豫め支那側へ通じやうものなら、官憲の方では、得たり賢しと、十數名の護衛兵を仕度してくれたり、上官の命令で、否應なしに押しつけられたりする。幾ら斷はらうと、旅行者は旅の人、兵隊は土地の者、決してかなひつこはない。

その兵隊と云ふが、何れも、いふ迄もなく地方の傭ひ兵で、灰色の軍服に卷ゲートルをつけ、銃劍を帶び身を固めてはゐるが、別に雨傘、提灯などを持參して、軍人らしくない樣子もしてゐる。そのうちでもをとなしい兵隊となると、ひとりで二三人分の銃をかつがされる。要領のよい奴は、背に斜めに輕い雨傘の一本、腰に提灯といつた身がるい扮裝で、おまけに途中路傍の居酒屋などへ、引き切りなしに御輿を下ろし、地酒泥ろくをきこし召し、よい氣持ちになつてゐる。之を護衛兵だと思へば、腹が立ちもしようが、田舍の若い衆の有志くらゐに見て置けば何んでもない。唯護衛を名前に、凡て向ふ賄で、勝手にやつてくれる所は閉口するが。兎に角かやうな風であるから凡て宿賃から、日當、酒、あらゆる餘計の仕拂ひが癪つきの田舍旅には當然掛かるものとして、覺悟してかゝるべきである。

大通（タートン）の船者は、戸數千足らずの田舍町で、宿は通和旅館ほか二三あるが、碼頭から何れも遠い。船はたまに晝間につくこともあるが、多くは夜分である。夜半、輪船の着く時、出迎ひなど一切不要と云ふ事にしてあつたが、護衛兵共十一名、司令部からの命令達示があつたから來たとて、それぞれ提灯を點し、我が民船の中までやつて來る。到れり盡せりの愛嬌を振りまき、よい肴が引掛つたとばかり、もてなしてくれるのも道理である。若い宿引の居るのを逐ひのけ、道々田圃の中の小徑を提灯で照らし照らし町まで案内して來る。宿にあつても、絶えず、何かと、旅程、旅仕度のことなど、意

味ありげに面倒を見てくれる。

自分は初めから護衛のことなど不要了と、體よくはねつけてはあつたが、ダニの如く、屢き纏ふ。然し決してその間胸に藏する底意だけは捨てないのである。

通和旅館は田舎宿のことゝて、宿の食事も田舎らしい。豆腐、干大根、豚の火腿（ハム）にばら〳〵した支那のめし、これが先づ普通卓上に運ばれる處のものであつた。奥地に這入れば這入るほど、不自由になり、食事もその材料に窮し、得られなくなる、たまに饅頭の暖かいものを買ひ求めらるゝ處もあるが、普通山中は麺類で持ち切り、鶏卵一つない所もある。麺は大碗に盛られて出される。しかしどうかすると、半分以上喰べた所で箸の先きにひどく堅いものが當たる。見ると、綠なす光つた大の甲蟲で、麺の「だし」に入れてあつたとも思へない怪物である。面白いものが出て來る。神經質の人ならば、すぐ氣持ちを悪くし、嘔吐くらゐ催すかも知れないが、奥地の旅には、これ位のことが氣になるやうでは駄目である。自分は、早速兵隊によい獲物だとばかり箸でつまんでこれを見せた。空腹の體には、そのあとのつゆも構つたことはない。何んなく平らげてしまふのである。

青陽に着く。地方での縣城である。青陽は九華山の途上にあつて、純朴な田舎街である。折柄、盂蘭盆會の祀りに上げらるゝ爆竹や、その僧侶の行列に出て來るものに、さながら蓄音器の唱盤（レコード）のやうな圓板の大きいのがある。之を空高く、十間も二十間も、風を切つて投げてゐる。投げては受け、受けては又投げる。その藝當の鮮かさなど佛式の催しなどとは思へない陽氣な一種の地方色が現はれてゐる。そこには路上、見てゐても、大層興味の深いものがある。

沿道の田園は、桑の栽培が盛んである。青陽から楊田にかけては、隨處々々に繭店がかなり多く見當る。楊田で泊つてゐた紡暢旅館のあたりは山中に珍らしく、文明式の蓄音機が聞こえてゐた。支那曲の胡弓、笛の音まで清くやさしく聞えてゐる。又片田舎ながらも亞米利加「美孚」の石油がこの奥地に賣買せられてゐるのを見た。何れ取次販賣をさせてゐるのであらうが、それにしても、亞米利加人の商賣にかけて機敏なことは、この一事で見ても解かる。旅館の卓上に出る平皿は、どれもこれも英國製の焼物で、呉須の色濃く、王冠のマーク・イングランドのローマ字綴りなども裏に鮮かに見えてゐる。かうして英米の商品の、深く幽境にまで這入つてゐることを、日本の實際家、硬質陶器あたりの人々は安閑と見てゐるのであるか。一段の躍進振りが望ましい。

楊田の村外れに、王氏祖祠の建築修繕に取りかゝれるを見るなど、田舎ながらも、その子孫の繁榮してゐるうちの仕事であることが察せられる。田舎に見る祖祠、祠堂は、大抵始め立派に新築せられるが、多くは初代限りで子孫がどうも繁榮せず、荒れ果てたまゝ、打捨てられると云ふが多い。この

村里に重修を見るなど全く珍らしい方である。

九華山の靈峯は、空に高く仰がれ、白雲生ずる所に、禪寺あり、その廟宇の群がり集れる眺めの神神しさは、さすが天下四大山の一たることを思はしめた。山下の村々の比較的豐かなのも、その九華禪寺の餘澤の致す所であるかと見られる。

九華山を越えると石埭の縣城に出る。城内白堊の高壁多く、こゝも亦相當に富んだ民家の軒並みが見える。道に當たつて、偶然豪家の門前に、豚を屠る光景に遇ひ、その様子を見る。屠られた豚は體は約四尺に近い。熱湯をたゝへた桶の上に之を上向きに寢かせ、四肢の趾のつけ根に穴をあける。どうするかと見ると、そこへ竹管を突込み強く呼吸を吹き込む。腹はその空氣のために、見る見るふくらむ。十分張り切つた所で再び四肢をくゝる。からだは倒に吊りさげられる。腹部は切り開かれ、五臟六腑、血液、肉はそれぞれ別々に取扱はれ始末をされるのである。聞けば婚禮の御馳走にするためだとの事であつたが、如何にもその切り開き腹綿を取り片付くるときの手際よさは、全く見惚れる程であつた。そのとき血を嘗めんとしてそこに集まり來たる狗の群も支那らしき景色を添へてゐた。

江南の田舍では、よく家庭で、大豚を屠り、内臟と肉や血などを始末してゐる場面を見ることがある。その實況を親しく側で見てゐると、その殘忍性に富んだ行爲のあるのも、さこそと肯かれる。その大動脈の切り開かれて、どろ〳〵、鮮血淋漓とほとばしり出る時の生ま生ましい光景など、とても見て居れたものでない。

その大腸、小腸、肝臟、胃袋、膀胱の夫々に、手をさし入れ、指を突込み、よくその繋れないやう區別して、これを小桶に取別け、納めてゐるなど普通君子の手の下しがたいところ、論語や、孟子に「君子は庖厨を遠ざく」との精神を教へてゐるのも、この殘忍な場面を實際に見せつけられてこそ、始めてその道理あることを痛感するのである。

支那の人々が、日夕この光景を目撃して居りながら、酒宴に、平氣で豚料理の皿に箸をつけ、舌鼓を打つてこれを賞味してゐらるゝといふ氣持は、日本人には先づ理解されないところであらうと思ふ。

醫者が死體を解剖してゐてすらも、その臭氣が鼻につき、その日の晩酌に見る刺身には、箸がつかないとまで云はれてゐる。日本人としてはこは無理のないところである。支那は君子は固よりであるが、せめてこの吉慶事のある家庭にしても、その屠殺後興入れして來る花嫁には、何とかして、この物凄まじい場面だけは、どうあつても、目に觸れさせたくないやうな氣持がするのである。

城外の山里には、さゝやかな陳生泰といふ粥を賣る店がある。饅頭の暖かいのを蒸籠で蒸してゐ

る。此に立寄り憩ひ、腹拵へなどをしてゐると、一人の狂人が現はれた。そしてあたりの財神廟の彩燈を故意に壊して、その硝子を打割つた。その勢で以て店の方へと駈けて來た。路上に兵隊共の銃剣を組み合せて立てゝあつたのを片つ端から打倒すのである。あはや自分の方へ肉薄して來ようとする所を小隊長の王雨田始め兵隊共は、この時こそ大事とばかり思つたものか、それとも鐵砲を倒されたのが癪にでもさはつたのか、寄つてたかつて狂人をふんづかまへて、支那流に兩腕を後ろに又兩足を後ろにして、結局四肢を一緒にくゝりあげ、くゝり猿の逆さ形にした。そして面白半分、頭を蹴り胴をけり、路面の石にこつん〳〵打ちつけるのである。血はあたまの邊りに紅く、又生臭くそのあたりの路面を染めた。それでもその手をゆるめず泣くのも構はず、そこら中を引きづり引廻し、おもちやのやうにしてゐた。まるで豚を屠る場面以上慘憺たる光景を見せてゐた。

そこへ巡警が來合はせ、これを引取つて連れて行つた。どこへ引つぱつて行くかと、自分も面白半分ついて行つて見ると、むさくるしい郵局の後庭にこれをつれ込んだのであつた。その後はどうしたか、見屆けるほどの時間もないので、いざ店を立ち去らうとした。すると王の云ふに、

「どうか先きへ部下と一緒に出かけて下さい。自分は司令部公署へ一筆この椿事の次第を報告するため少しく後れますから……」

といふ。その日の晩は、難を逃れたのを誇り顔に、大杯で酒をあふるやら、えらい鼻息であつた。恐らく公署へも白髪三千尺の筆を弄して云つてやつたことであつたらう。城外には蕪湖に通ずるかなりな清流があり、城内には又田舍街に似合はぬ堂々たる孔子廟なども見當る。こゝでは宿を朱振泰の客棧にとる。夜具の備へなどさつぱり用意されてなかつたが、純朴さが溢れ取り持ちはよい。夜具の代りに、穀類を干すときなどに用ひる丈餘の圓い平籃を持ち出し、之に寢てくれと云ふのである。仕方もなくその平籃の上にねた。南京蟲の居ること〳〵、實にひどかつた。

次の山里、烏石壩と云ふについた。こゝは古風な樣式の二階家がならび一と筋町の街で何となく靜かな寒村である。或る民家の軒下に、かゝつてゐた小鳥の籠を自分の知らぬうちに、我が兵隊が失敬し、之を何喰はぬ振りして持ち去つたものらしい。その家の老爺はそれを返してもらはんと、半日も一行について來る。谷河の渡渉を渡るときにも、うらめしげに籠を視つめてゐるのである。兵隊が水中に之を入れ、惡戲などしてゐるのが氣になつてゐたものらしい。

そんなことゝは露知らぬ自分は、老爺から耳打ちをされ驚いたのである。そして兵隊についてその譯を語り聞かせうと先づその老爺に一伍一什を尋ねた。

實はかく〳〵の次第で、身どもは、朝からあの籠を返して貰ひたい一杯に、ついて參つたのです。

と聲を、ひくめ低めて打明けてゐる。と云ふのは、若しこれが兵隊どもに直接聞えでもすると、後で仇をされるのが心配だといつた樣子でこぼしてゐるのである。親爺の尤も至極な云ひ分に、自分は、早速兵隊に注意してやつた。兵隊は「そんなら返してやる」と云つて義渡の船からあがるなり、すぐ返してくれたのであつた。田舍の傭兵ども、この惡戯などはまだ輕い方で、徵發、略奪、强姦、何んでも勝手放題、すべて特權だぐらゐに考へてゐる手合ひだから、片田舍の良民が恐れをなしてゐることは非常なものである。武裝した山田の中の案山子に似た兵隊ではあるが、それで横暴を極めてゐることはこの一事でも大抵解る。

　太平縣に屬する苧麻園、桃坑口の山里に踏入つて見ると、こゝには周代に見えた建築、造營法の有名な中霤の樣式が、そのまゝあちこちに現存してゐるのを見る。こはつまり、方形の中庭に、周圍の屋根から落ち込んで來る雨水を溜め、之を霤となし、その水溜に神を祀り、惡魔除けのまじなひをする祭壇まで設けてある所であつて、これこそ見るからに歷史考古學の上に興味の深い材料となるものが得られるのである。

○

海拔一萬尺近くもあらうといふ桃嶺あたりに來ると、こゝはそろ〳〵黄山三十六峯の一つに差しかかつた處で、頂は白雲深く鎖さして、その姿を見せてゐない。が懸崖に仰がるゝ老樹のもとに、紅綠の色鮮かな塗り立ての周王廟が、幽趣を湛たへてゐる。幾萬級の急峻な石段の上、かなた遙かな天涯にそれが眺められるので、南畫に見る樓閣山水そつくりの詩韻が漾ひ、自ら畫中の今仙人となるの思ひがある。

　時には又山上遙かの雲境に、いつの時代に架けられたか、太鼓形の石橋も苔に蒸し、松蘿の勾欄から長く幾條となく垂れ下つてゐるところ、これ亦何とも言葉で云ひやうもない。かうした仙境にしばし自分は見とれ佇み、白雲去來する脚下の眺めに、浩然の氣を養ひ山氣を賞する。若今こゝにかう云つた場面に、日本の畫壇に倪雲林、沈石田、石濤和尙などと云つた手合ひでもゐれば、引つぱつて來て見せてやりたい位に思はれたのであつた。

　昭和の南畫を志す者はこの黄山白雲境に少なくとも數年の幽居を體驗し、その苦心と技巧と、詩韻とを實地に腹にこなす處まで嵌つて見たらどんなものだらう。續いて斷峽巖前寺の山里に入る。

巖前寺

巖前寺の山廓に宿を取れば、窓外の峯は天に沖して高く、脚下の樹枝は谷に臨んで長く垂れさがつ

てゐる。こゝも亦南畫以上の風致を見せてゐるところで、その部屋の壁に掛かつてゐる對聯の文字を見ると、

戸外千峯秀
窓前萬木低

とある。又窓際にかゝる扁額の文字には、

臥游五嶽
坐擁百城

又

高樓懸百尺
玉樹起千尋

など實に一言一句が千金の價を有し、この絶景にしてこの文字ありと思はれたのである。

主人に窓外の山を指しその名を聞けば、右に聳えるのは獅象把門山、左に仰がるゝは五里尖山と云ふ嶽であると、その言葉の云ひ終らぬに、山雨將に來たらんと欲して風樓に滿ち、白雲濛々猛烈に吹き寄せて來た。一段の畫趣は益々身に浸み入て來たのである。主人の話に、このあたり山水の美に富み、山上山下見るべきもの多し。山下、清溪河といふ溪流があり、峯には三十六峯がある。昔からこゝは三十六峯と云はれてゐるが、今では七十二峯と云はれてゐます、といつてをちこちの峯を指し語つてくれた。何分にも、山ざとの方言なまりが激しく、幾度か聞き直して、上述の山名の如きもやつとのこと、それに當る文字に考へついたのである。相手が目に一丁字のない手合ひであるから閉口させらるゝのである。

この邊りのは祕境のことだから、探檢家の陸地測量に從事した人のある譯もなく、たゞ漠然たる支那地圖をひろげる計りであるが、そのやうなものに一々的確な名前のあらう筈もなく、さりとて日本の參謀本部の地圖も、まだこゝいらまでは手が屆いてはゐない。山骨巖々たる棧道を登ること三十支里、黄山第十九峯と云ふが聳えてゐるのを見た。谿を渡る幽鳥の色は黄ろく、鶯は歌を囀つてゐる。又梢には日本のミンミンに似てやゝ調子の違つた鳴き方をする蟲の音が聞こえる。

この邊り、古硯、歙州石の絶品である羅紋、金星羅紋、金龍羅紋、とり〴〵の名材が、或は空に屹立し、或は懸崖から斜に伏してゐるものが、前後左右に見える。苔蒸す大岩巨石が、よく細かくほぢくつて見ると、凡て皆名硯の材料であるとは、これこそ、翰墨行脚の又と得難い境地である。蟲蛀の深く自然にうがたれたのは、頭上の蔦葛から滴たる雨滴のために出來たものであらう。又珍らしい穴

の自然にあいた視材もあちこちにと見出される。しかし幾千尺の雲の上、いくら天下の絶品とは云へ、採取せんにも方法はなく、唯あたら空しく寶の山に入りながら、手で以てその石面のガサ〳〵した處を撫で廻し、せめてもの後の思ひ出にするに過ぎなかつたのである。

古名硯の本當の名材は、谿を下つて溪流に入り、水中に深く沈んでゐるものを得るとか、或は山骨深く入つて風化作用を全然受けてゐないものを求むるとかしなければよいものは獲られぬ。しかし手の屆くところ邊りにでも、相當なものは多少入手せられぬでもない。その薄淺黄色の細雞紋に、水波雞紋、粗雞紋の肌の見えたるものなどは、さらに見出されてゐる。

○

黄山七十二峯の最高峯と、土民どもの呼びなしてゐる楊山嶺（或は羊山嶺とも書かんか）に差しかかつて見ると、峠の一角に白雲に包まれた人家がある。軒傾き壁破れ、如何にも無人の家かと思はるるうちである。山家に一人の少女がゐる。今尚纏足をして赤い股引をつけてゐる可憐な姿がいぢらしい。その最高峯、一萬尺に垂んとする山の祕境に着いてあたりの名石をあさつてゐると、目に觸れる山の岩と云ふ岩は、何れも歙州の硯材になる天然石のみで、その幾萬と云ふ數知れぬ石段が斜めに峠の上までかゝつてゐる。そこへ意外にも、誰れ人のしぐさか紹興酒の壺の惜しくも割れて、芳醇な香氣のそこいら邊り紛々たるものを感じた。時折り、この雲上の祕境にも、人間の訪ね來る者のあることを知つた。

絶頂を極め、あたりを歩いて見ると、山氣はさすがに高山地帶を物語つてゐる。幹の大きく、丈の低い椚樹が生ひ茂つてゐるのである。道理で、この山里には、あちこち椚樹の名前のついた地名が二三あつた。頂上の古亭は、その軒端にかゝつてゐる文字で見ると、「瑞泉亭」といひ、千古の匂ひのする峠の茶屋で、之に古ぼけた厚板に「棧嶺雄關」の四大文字の勢ひ逞しく彫りつけられたのが讀まれる。誠にこの祕境にしてこの文字ありで、全く邊りの光景が、この文字を得て、萬金の重味を物語れる如く感ぜられたのである。

遙かに瑞泉亭上に立つて、白雲棚引く彼方を望む。幽かに見ゆる紫雲の層の指さゝん天涯には、その向ふに又雲か山か、吳か越か、山色天に連なり、大自然の屏風を立て廻した如き嶺脈が、幾段にも遠く層をなし、重なり重つて、鋸形の輪廓を示してゐるのである。東、西、南、北、四方どちらを向いても、三段、四段と、濃淡とりぐ〳〵の色山を見せてゐる。

試みに福建境の方角にあたる山を見ると、近い山は黒ずんで見え、その次ぎの山層は綠に、その先きは藍色に、更にその向ふに幽かに指されるのは、雲か霞にまがふ淡紫色の峰と云つた風であつて、

その染め別けられた山色の天につらなる壯觀と云つたら、日本アルプスにも、見出されない絶大の大陸光景なのである。ヒマラヤはいざ知らず四川三峽の靈峯山脈といへども、この雄渾の極をつくした大陸光景は、天下第一とは行かないまでも、恐らく江南第一のパノラマといつてよからう。横山大觀畫伯や、亡くなつた寺崎廣業畫伯、清の董邦達あたりの靈筆をもつてすれば、或は描き得たかも知れない。

しかしその幽玄な神韻と山氣の悠久な核心を囚へ來つて、畫面以外に躍動せしめようとするには、この山色連天棧嶺雄闊の極致、楊山嶺の奥を窮めなくてはならぬ。それを跋渉してこそ、始めて大陸の山嶽美と同一體となり、筆者自ら黃山三十六峯の山靈と合致した心境に入ることが出來るであらうと思ふ。山陽先生の三十六峯外史の雅號は、比叙山を取入れた京洛の天地に見る山色連天の光景から思ひつかれたものであらうが、更に之を大陸化し、現代化することによつて昭和の吾われはいよいよこの雄渾偉大な山氣に觸れることが出來るのである。

○

黃山はその棧嶺、楊山嶺の絶頂を極めると、最早やその神域に入つた感に打たれ、山景は幽趣の極に達し、樵路は峠に沿うて俄然山容の變つた反對の側に出る。そして谷は澗く、南の方十一都、ワイツ際村街へと下る路となる。

降りの急坂はその險、登り道と變りはないが、硯材として考へらるゝ石質は、やゝ見劣りもし、平凡化する。途上、眼界のひろくなつた麓の里を見渡してゐると、叢雲忽ち起り、雷鳴さへ聞こえる。石段を下り下つて、急轉直下、溪流のひろくなつた處まで來ると、綠野開くる二都北庄の村閭に差しかゝる。村の小徑を行く、婦人達の樣子を見ると、乙女姿と變りがなく、この村さと一帶にかけて、紅の褲子（クーツ）と稱する袴をうがち、老女たち迄もが赤紅の腿帶子（トイタイツ）と靴下を穿いてゐる。四方羣嶽たて込めた綠野の中に、それこそ萬綠叢中紅一點の感が唆られ、古語の出所の如何にも適切である事が痛切に知られるのである。その紅色に輝く村の女の風俗は、綠野の彼方、一都黟縣（イーシェン）のあたりまでも續いて散見せられるのである。片田舍だけに、古雅な優しみの深い眺めであり、殊に跋渉に疲れた旅人の目には大層慰安になるものがあつた。

この黃山の麓、黟縣こそは、東京の中華民國公使館に生き字引と云はるゝ、江洪杰先生を生んだ處であり、殊に自分は先生とは年來懇意を願つてゐる關係もあるので、人一倍親しみの氣持ちを感じたのであつた。野よく開け、楊柳の間に田家もあちこちと見える。さゝやかな旅亭もある。立寄り之に憩へば、熱茶に次いで、蘿蔔（ロボ）（大根）を輪切りにして出したり、又ラツキョの皮をむき、中の心を出

してくれたり、或は韮のきざんだのを出したり、すべてお茶うけの點心である。先づ付け物と云ふ格で、日本の九州地方に漬物を出すのとよく似てゐる。

村民田夫とあたりの風物など語りつゝ道を行くほどに、この地方は昔から今だに錢をもつて、乙女を賣買するの風習の尚止まず、相當よい商ひがあるとのことなど、問はず語りに出るのは特に興深く思はれた。

漁亭の里

漁亭の里に出る。こゝは山間の水鄉で、このあたりに來ると、溪流、舟を通ずるに足り、水量も相當に豐かである。川舟の用意があるのは嬉しい。漁亭の水流は、南のかた屯溪に通じ、浙江の錢塘の水源地をなしてゐる處である。下るに從ひ民船の去來を見ること多く、所々に水を田に引く流れの堰に止められ、そこに青竹の立て並べられてある所なども見える。萬安街、隆阜など云ふ碼頭あたりまで來ると、水は漫々と湛へ廣い水鄉をなし、山色邊りを罩ちこめて、盆地の中の水村と云つた、一種山紫明媚の別天地を呈してゐるのである。

民船の船頭達は、かやうな環境に馴れ、年が年中清淨な水鄉生活を營みつゞけてゐるためであるが、殆んど味噌も糞も一緒と云つた風である。何んら清潔、不潔の別を立てやうといふ氣持すらもないらしい。と云ふのは舷板を拭ふた雜巾で以ていきなり食卓や、俎も拭けば、箸、茶碗もすべて見さかひなく拭うてゐるのである。これも山間の簡易生活だくらゐに見ておけば、それ迄であるが、しかし、この山ばかりでなく、全支に亙つてのこの無雜作な生活振りは、容易に改めらるべきものではない。

屯溪

漁亭から八十支里の水路を南へ下ると、こゝには山中第一の大街屯溪と云ふ處の碼頭に著く。胡開文、胡同文などの古墨の老舖があり、曹素功は三十三都休寧（休城）に本店がおかれてあるが、こゝには支店すら見ない。屯溪の街には、宿屋と云つては同春客棧その他相當な旅館もあり、浴堂にも、田舍には珍らしい盆塘がある。この地方の浴客は、普通入浴に二本の手拭を携へて這入る習慣になつてゐるのであるが、その理由は前に述べたからこゝには贅しない。

屯溪の年中行事としては、之に夏行つて見ると、羅祖會（ローツホイ）の緣日騷ぎがある。山の中の祭りとしては實に破天荒な賑ひを呈し、老若男女、それぞれその面白い道化た恰好をして着飾り、その囃し方の場

面など見ものである。

尙この地方の風俗として驚いたのは、土民がその肉身の親を賣買することの行はれてゐることである。人身賣買については、總體この安徽の南部くらゐ面白く又熱烈にその野風を守つてゐる所は少く、從つて嫁入りの行き違ひ騒ぎ、姦通の風の變つた行爲など、その方面の事には特筆すべき話題が數々ある。屯溪ではそこの農學校長の細君が、主人の留守にあるまじき行爲とかゞあつて、それが發覺し、校長自ら、或る夏の朝、二尺大の豚切り庖丁を携へ、蚊帳の中に飛入り、慘行の限りを敢へてした。その上に、その屍體をば、後門の桑田に埋め、全く素知らぬ顔をきめ込んでゐた。すると村の百姓がその悪臭に氣づき、それから足がついて問題となり、校長の非行を中心にその噂がぱつと擴がつた。そのやうな事情から校長は、縣知事の宅の座敷牢に入れられ、監禁させられてゐたといふ事實談もあつた。これはその界隈での有名な話題となつてゐる。

又錢莊（兩替屋）萬康では娘の嫁入りに六十萬金からの巨費を投じ、二三週間毎日立てつゞけに八十人宛の賀客を招いて盛宴をはつたといふやうな、田舍に不似合ひな豪奢振りを發揮した話題も少くないのである。

屯溪の街は、山里ながら、茶の名産地として、福建浙江に次ぐ有名な所である。富有な商家もかなり多く、金廻りも活潑賭博の遊戯は殊に盛んな所である。

人氣は山郷には珍らしく荒い所で、思想上にはかなり赤い份子が入り込み、最近は火を放つて得の大半を燒き拂ひ、全く見る影もなき狀態になつてゐる。しかし町外れの河流に架せる石橋の如きは、乾隆時代の豪華なもので、その規模は雄大に、欄干の嵌め石、鋪道に敷き詰められた石板、橋の桁の立派なこと、全く皆硯石界で名高い龍尾石の黒材が用ひられ、その壯觀云はん方なき位である。材は婺源（ウユワン）縣の龍尾山より採掘して取寄せたものであらうが、兎も角今その一枚の破片を採つて龍尾硯をつくつたとしても、大變な價値になるものである。でもこの地方の人には土地の石材だけに惜しげもなく、これを使つてゐるのである。

土民の語る所によると、龍尾の硯材は三十三都の休寧縣と、婺源縣との境界にあつて、今は古寺があり、そこの池の底から又その邊りの溪流から得られるものを以て最も上品であるとなしてゐるのだとのことである。又土地の老爺たちの話によると、近來羅紋の次品は、省を越えて江西南康（ナンカン）地方から産出するものが多いとの事である。それから安徽で名高い古墨のことであるが、この徽墨は、元來その原料を黄山七十二峯、並びに附近の新安、大好山あたりの松樹を焚き、松煙を採りて之で以つて作くつてゐたものが多いとの事である。昨今は、舶來の油煙をも用ひて作られてゐるが、そは墨色が感

心しないのである。これは胡開文の工場を訪ねたとき、主人から聞いた實話であるから、信が置けるであらう。

尙又主人の話によると、硯材の羅紋は、最近江西省の玉山縣、掌山からも掘出だされ、その近くの小玉山からも又採つてゐるといふ風で、あちこちから出るやうになつたと云ふことをつけ加へてゐた。玉山は、清朝の光緒二十年に禁令が出て、表面は硯材を取つてならぬことになつてゐることと聞てゐたが、事實は威令も行はれないで、自由に鑿が這入つてゐる樣子である。

屯溪から龍尾の硯材の出る山までは、百五支里、婺源へは百五十支里とのことであつた。

屯溪の街には、戴姓を名乘る音韻學者の後裔が多く、今も尙その道の學者が街内に居て、時流に染ます、こつこつ研究を積んでゐるとは聞くも美しい話である。自分の泊つてゐる同春客棧にも、學究的な村夫子がひとり訪ね來たつて、しきりに顧炎武の音學五書とか、古く音の學術談などを試み醴酒を傾けつゝ大いに夏殷周三代の韻學を論談したものである。これなどは屯溪の夜話として最も思ひ出が深い。

宿では夜半、竹筒と鉦を敲いて、戸前の巷を時間々々に戒しめて廻る夜廻りの、打更的の響きがなつかしい。山中の旅寢には、そゞろに淋しさを思はしめるものである。

所が單に今の打更的（夜廻り）ばかりでなく、夜半の二時に、又四時頃に、二度も天地の裂けんばかり、凄じい爆竹を揚げ、銅鑼を亂打し廻はり、窓外に恐ろしい騒ぎをなし、疲れてゐる身の旅枕もゆつくり寢かされず、隨分閉口した事があつた。そこで自分は、朝寢床を出るなりいきなり、老班（宿屋の主人）に、一體ゆうべの騒ぎはと聞いて見たのである。

所が老班、大きく笑ひながら「あれは、お客さん、さぞ吃驚りなさつたことでせう。實はこの頃、筋向ひの籠屋のお爺が、仔細あつて首を吊つて死んだ不祥事があり、その魂を慰め、悪魔の襲來を追拂ふため夜陰に乘じて儀式を行つたわけです。」と説明するのであつた。「だつて二度目に又盛んぢやつたが、あれはどういふ譯なんです」と疊みかけて聞き直す。老班の云ふに、「あれはなあ、先生は御存じありますまいが、つい一昨日、籠屋からその葬式を出したので、毎夜、そのお葬ひの通つた道筋を拂ひ清め、邪心を追つ拂ふためにと云ふことで、巷ちまたを敲いて廻つた譯なんです。町内の若衆達總出で以てやりましたよ」と明るい氣分でにこつき乍らこまごま説明してくれる。「ではその籠屋の現場を、見に行つても構はないだらうか」と物好きな要求をして見る。老班「構はないですとも、では私が御案内しませう」と云ひつゝ朝つぱらからそこへつれて行く。

現場へ行つて見ると、薄暗いといふよりも、寧ろ眞暗い部屋であつて、天井も、壁も、煤だらけ、

首を吊つたと云ふ處に來ると、天井に横に通つてゐる梁の一つを指して、「こゝなんですよ」といつてゐた。縊死とは常に支那で文字の上に、又日本語で「くびれて死す」など訓譯をしてゐるが、その現場を目の當り見せらるゝなどは珍らしい。

この地は時折支那には珍らしい男女の心中などもあるとの事で、兎も角、エロや、グロの問屋の如き感のある町である。從つて町の警察署長なども、その間の消息に通じ、頗る要領よくやつてゐるとのことである。法を犯せる賭博、骨牌、弗錢、青錢などの遊戲も、豫めその袖の下のコンミツションで次第では、いつでも本人見てゐて、見ぬ振りもしてくれる融通のきいた先生であるとのことである。

又この町には、門閭に旌表された石の牌樓がかなりあちこちに見出される、安徽全體に六萬三千基あるといはれてゐたが、この屯溪の山里にも珍らしく澤山ある。といふのは、清朝時代、役人の位置にあるものが、要領よくやつて、その細君や娘に限り、自己宣傳の考から建造させたものである。實は町の者どもは迷惑な寄附ばかりせしめられ困つてゐるので、內々舌を出して笑つてゐるやうなものもあるとか、打明け話もしてゐたのであつた。

同春客棧では滯在の夜など、窓ぎは近く小さき洋燈を點じて、その日の日記などつけてゐると、雨ではないが水が上から落來る。手帳の處へ細かく散り込むので、老班を呼び、二階から客に惡戲されては困るではないかと抗議を申立てた。すると老班は笑つて云ふ「つい便宜を使はないで、樓上の客が窓から筒を向けてやつたのでせう。濟みませんことですね」とあつさり片附けてゐる。腹を立てる譯にも行かず、こちらも苦笑してすましたのであつた。

屯溪の街外れは、溪流の河原も廣く、芝生には、水牛の放牧があちこちに見える。村郎野娘の鄙唄歌ひながら戲れてゐるのも天下太平の和氣を漲らせてゐる。岸の柳は枝を水中に垂れ、何處となく山村の風致を添へ、下りの茶船も碇をおろし、綠蔭に群つてゐる。對岸には例の農學校があつて、白壁が楊柳の間に陰顯し、風致は頗るよく、繪に描きたいやうである。

浙江に下る茶の荷物は、民船で次ぎから次ぎへと碼頭を出て行く。自分達安徽から浙江へ下りたいつもりでゐたので、船問屋の老班を訪ね便乘を申し出ると、譯なく二つ返事で承諾してくれる。

下る茶船の數は多い。季節になると、殆んど次ぎから次ぎへと拔錨して、勇しく屯溪を船出するので、兩岸に聳ゆる翠嶺を背景に、民船の峽中下りは、又とない快事である。溪流の中に聳ゆる一孤島小南海の崕壁下に船がつけられる。崖を登つて林間に幽徑を辿り、星巖禪寺と云ふに和尙を訪ねて見る。寶殿に輝く金ピカの觀音が拜せられる。菩薩は、塗り替へたばかりの生々しい光りを放ち、一向に神々しさが足りない。小南海の寺には、有名な木乃伊があると聞いてゐたのであるが、和尙が不在

で見られなかつた。

民船は、朱家村、漁梁の水郷を流れに從つて下る。所どころ岸邊に、村芝居が棧敷を構へてやつてゐる。笛、胡弓の音など聞こゆるが仰ぎ見られる。民船の中は、蠟燭の明りで夜は食事をする。半圓の窓によつて、豚に豆腐汁、ばら〳〵した飯の所謂民船料理が出る。之で舌鼓を打つ。

朝霧の溪流から立ちのぼるころ、流れに架かる橋下を過ぎるときの氣持ちは何とも云へない。石橋は何れも總に見る如き拱橋で、樣式は風雅な文人風の趣を呈してゐるが、石質は屯溪のそれに見たほどよくない。

徽州

徽州の碼頭に船は着く。こゝは溪流が急で城壁は城門を二重に有してゐる。しかし壞れかゝつてゐて、古色蒼然、翰墨の雰圍氣を見せてゐる。城內をあるいて見ると、街には胡姓を名乘つた墨莊の數數ある中、胡開文を訪ね、その墨莊の工場に行つて見た。その製法は頗る奇古を極めて面白かつた。その松煙の練り方から型に入れるところ、笊に盛つて干してゐる、若い墨匠が金粉の溶いてある小皿を前に、金文字をそれぞれ入れてゐるところ、仕上げを美しくしてゐるところなど、何れも製墨の古書圖錄に示されてゐる通りの趣きが目の當たり見える。別けても松煙を杵で舂いてゐるところ、しんこ細工のやうに之を延べ棒にしてよい加減に一定の寸法に切りとり、夫々八挺がけ、十六挺がけ、三十六挺がけと、一斤を小別けした型を取り別け作つてゐるのである。その邊は見るからに興味が深い。

製墨圖

天下に「筆と並べ稱せらるゝ徽墨の製造工場。場所は安徽省歙縣、今の徽州府城內で、その製墨の型に入れて之を壓めてゐる所の圖。墨匠の製作に見る悠揚はその徽墨の上に窩はれてゐる。

胡正文の店は、胡開文、胡同文などと、互ひに近く軒を並べ、店構へはさう大きくもないが、その工場に這入ると、庭が廣く、製產振りも旺んである。殊に仕上げの出來た夫々の寶墨を金網の蓋子に藏め、荷造りをしてゐる光景など、さ

すが四百餘州に送り出す本場だけあつて、何處となく、力強い氣持が見られてゐる。城内の墨商を一とわたり、巡歴した後、翰香室といふ龍尾の歙石、羅紋石專門の老舗に行つた。こゝでは、宋代以來の古硯の蓄へ多きものが見られた。羅紋石で刻された唐の獅子は、自分がこの入歙の好記念にと云ふことで、古硯あさりの序でに求めたなどは思ひ出が深い。そのとき、翰香室の老班の話によると妙なことがある。一體歙石の龍尾と云ふは、古來、一方に龍尾山があると同時に、他方にこの徽州舊衙門の古井の中から出るものがある。これが又相當尊ばれてゐる。この井底の硯材をばこゝでは龍頭石と呼び、大いに珍とするに足るものである、云々と說明する。早速言葉に從つて、訪ね求めたけれ共、一バイ食はされたか、遂に要領が得られなかつた。徽州府で歙硯、徽墨の慰み、翰墨行脚のみち草をくひ、碼頭から浙江指して下るのである。峽中の流れは、急に兩岸險しく、相迫り、巖角峻り立ち、溪流の瀨も多い。民船が流れに棹すときは、前後に二つ宛の櫓と、三つの權をつけて漕ぎ下る。相當船頭たち骨が折れてゐるらしい。峽中を下り下る間には、要所要所に捐局と云つて釐金局同樣の稅關がある。茶の荷物を第一に、その他積荷の稽查をかなり嚴重にやられるのである。

江上わが船の浙江へ出るまでに見た主な稅關、船著場、その他の目星しい山村と云ふと先づざつとから云ふ處であつた。徽州、朱家村、深渡、街口、威坪と云ふ順序で、それから、安徽浙江の境界の石標を越えると、それから東は、淳安、港口、茶園、洋溪などと云ふ處がある。嚴州の都城まで來ると、次ぎは東關で、こゝで以て蘭溪から流れ來る本流の濁水と安徽から自分共の降つて來た支流の清水とが落ち合ひ、大錢塘江となり、その河幅も著しく廣くなるのである。嚴州を過ぎて江を下れば、桐廬から富陽杭州の閘江に結局出て來るのである。このことは既に述べた通りであるからこゝに贅言しない。

安徽の峽中

錢塘の上流に安徽の峽中を願みて見ると、兩岸の眺めは江南地方としては、ともかく奇拔である。淳安邊りの眺めは、峽峯の開けてゐる處が見えるが、威坪から茶園あたりの水鄉と云つたらない。最も風致に富み、流のまん中にそゝり立つ奇巖怪石の上に、老樹が生ひ茂り、頂の廟宇も畫圖の如き情趣が見え、遙か半天に聳ゆる鋸狀の翠嶽は、南畫そのまゝの景趣が物語られてゐる。こは溪流の趣きと共に山水美の極致をなし、恐らく四川三峽の一場面に較べても劣る所がないであらう。

峽中下りの民船にはなるたけ船頭の嬶さんの足の大きいのを選ぶのがよい。纏足をした小さい足の女は、竹竿を突くとき、ふんばる力が出ず、江上を棹すにも、船足が遲くてかなはぬ。茶船の內部は

苫を半圓形にかけて屋根とし、屋内は八人乘の部屋に仕切られてゐるのが普通である。がその船底から、客室の床下から、どこからどこまでも總べて皆みつしり、三尺立方の茶の荷物が詰め込まれ、中の通り道さへやつと殘されてゐる位である。そして多くはその港々につくと、臨時の客を便乘させるので滿員以上になる。中には部屋がなくても構はぬと乘り込み來たり、舷に寢るものがあり、それでも一向に頓着をしない。

船頭は家族連れ幼兒まで入れて、頭數が十人にも餘つてゐる。十五夜の月の冴えて、峽中の夏の夜の碇泊は、蘇東坡の賦にある「山高く月小」、本當に星も稀れであつて誠に溪流の音も靜かに、金波銀波の閃く邊り全く惡くない。それに船頭や、茶商人などのよい氣持ちで歌ふ鼻唄が舷頭から聞こえて來る江上夜泊の感は益深くなる一方である。

船頭との話のうちに、「先生（シーヤン）は、この前私の船で矢張り下られたことあるが、私を見憶えがありますか。先生はこの前は鬚がなかつた。その後お孫さんがお出來になつたのですか」とにこやぎながら親しげに語つてくれるのである。「人違ひではないですか」といつたがどうしても承知しない。「違はない」といふ。

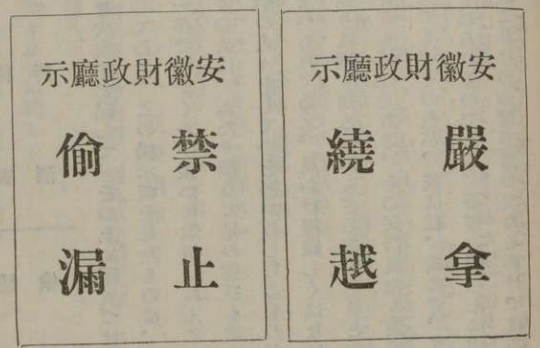
江南の地では、家庭で、その孫を見れば、その機會に鬚を貯へる習慣になつてゐるのだから、この言を聞くのは不思議ではない。しかし日本流の考へからすると、一寸解し得ない所である。船頭は快活な男で、三歳の女の子を頭に、年子を持つてゐる。その長女はさながら輕業師の子供のやうな恰好に、支那袴をつけ、上半を裸體で髮をお下げにし、可愛いこと夥しく、客の玩具になつてゐた。

茶の荷主は小さな豆燈火をたよりに、石印本の支那小說を讀んでゐる。蚊の鳴くやうな細い聲でその節も面白く、泣くが如く訴ふるが如き調子を見せ、一種の哀調を思はしめるものがあつた。

この邊り一帶は殆んど日本人の餘り這入つた形迹も見えず、山中秘境のお寺の壁に見る仁丹の廣告なども見當らず、寺はあるけれ共、そこに仁丹の仁の字も見ないのは、日本人の旅には淋しく思はせられた。

安徽の水村山廓をたよりに分け入る片田舍は、交通の不便な所で、長江の流れに沿へる處を除くほかは、かなり僻僻な奥地である。溪流の民船を通じ得らるゝ限りは、これが利用され、山鄉は樵夫の通ふ石徑でやつと通じてゐる位のもので、その交通路は至つて開けてゐない。但し意外にも峽中の水路には船が多くゐること、又山間の棧道には、滑らかな黑石がどこまで萬遍なく敷き詰められ、路面のあるき心地は決して惡くない。樵夫の往き來する小徑といへども、誠にその行屆いた黑石の鋪裝の完備してゐることだけは少なからず驚かされたのである。

山中に入れば、その重要都市、山城を結びつける石徑が必ず通じてゐるが、それが一筋道であつて岐路は殆んどない。枝別れがないため、山間の踏破のときにも迷ふことが少ない。若し別れ道のあるやうな山里には、必ずそこに民家がある。又茶亭涼亭その他捐局、今は亡くなつたが釐金局の舊稅關があつて、道を尋ねるに便じてゐる。されば若し荷物など數多擔いで山を下り、そこを通りかゝる者があつても、他に拔けられないやうに出來てゐる。全く誰れ人も遁れつこない。昔しから受負制度で立つてゐる釐金局の係員など、目を鋭くして、人の通過するのを見張つて居る。知らなかつたから、と云つて默止することはしない。必ずこゝで誰何せられる。そしてつまらないものでもきつと荷物を開かせられ、内容が調べられる。こは統稅又は捐稅などとも呼ばれてゐるが、今尚これが課せられてゐるところが多い。しかし釐金の臨檢は、溪流を下る民船に於て、殊に嚴重を極め、役人は閻魔顔をして、鐵の棒の五尺にあまるものを杖につきながらやつて來る。その棒は尖端が螺旋狀をなして尖りその頭には、二つの輪の飾りがついてゐる。お伴を從へ來ることがあるが、これが少し短かい四尺位の同じ形の鐵の棒を杖として、ちやらん〳〵と音を高鳴らさせつゝ乘り込んで來る。溪流に浮ぶ釐金局の船は見るからに、堂々とした唐門造りに出來た樓船で、その正面の看板には、物恐ろしげな文字で以て、嚴くろ〳〵と書いてゐる。いづれも安徽財政廳の告示と云ふ扁書で布告されてゐるものである。



又別の揭示板には色々また

稽查　嚴拿
菸酒　偷漏

の如き大文字を記して、その上に權威づけた青天白日旗の交叉したものを飾り繪として加へ、彩色まで施してゐる。この揭示板を見たものは、その檢查係りの顏まで物凄く見え、なるべく、した手に出て、一弗でも安くお手柔かに取扱はれんことを希望してゐる樣子を見せるのである。

係りの人は、ふたり揃うて足の運びも重々しく荷船に這入つて來る。その時いかめしい姿は、たしかに船の人々をして心を寒からしむるものがある。しかしこれを切り拔けるには、何れも裏面のこつが辨まへられてゐる。見かけ程難しくはないらしい。唯誤魔化して素通りする者などを見つけた時の後の祟りは測り知るべからざる者があるとの事である。山中の民情は、さすがは他の隣接せる江浙の兩省よりも純朴である。その民情風物も愛すべきものが多く、石徑の山家、茶樓の門前に戲れる鷄の雛を見ても、その色が、或は紅、或は青、又紫などと五色の美しい色彩で、旅人の目には、特に物珍らしく見られるのである。茶樓の嬶さんに聞いて見ると、

「別段これは卵の種が違つてゐるわけではありませぬ。雛で生れた時分に、脚をもつて色壺の中に垂身どぶりと浸し、夫々染別けをしたゞけのことで、それで足りるのです」云々と云つてゐた。うちの雛は紅で、隣りのは青、向ひのは黃色と云つたやうに、夫々、色によつて持主の違つてゐることを示したものである。夕方之をしまふ時に、まぎらはないやう目印をつけただけのものである。又夏の炎天、山家に憩ひ、邊りの山童が竹林の蔭に戲れる處を見てゐると、何處となく唐の古詩に吟はれてゐる、柳宋元の七絕を始めその他風韻のある句が思ひ出させるのである。例へば、

南州溽暑醉如酒　隱几熟眠開北牖　日午獨覺無餘聲　山童隔竹敲茶臼）

柳宋元

（南州の溽暑醉うて酒の如し
凡により熟眠、北牖を開く
日午ひとりさめて餘聲なし
山童竹を隔てゝ茶臼をたゝく

夏圭偶作

その他又、

松下童子に問ふ
師は藥を採りに去ると言ふ

只この山中にあり
雲深うして處を知らず

尋隱者不遇　賈島

（松下問童子　言師採藥去　只在此山中　雲深不知處）

これなどは、殆んど塵の境地を脫して、詩境に這入つてゐる安徽の山家をそのまゝ吟つたものとも見られる位である。尙楊山嶺の石徑遠き頂白雲去來する所に瑞泉亭の破屋を見るなどいへる光景は、唐詩のうちにもその寫生的の趣きの見えてゐるものがある。卽ち

遠く寒山にのぼれば石徑斜なり
白雲生ずるところ人家あり

車をとゞめてそゞろに愛す楓林の晩
霜葉は二月の花よりも紅なり

山行　杜牧

（遠上寒山石徑斜　白雲生處有人家　停車坐愛楓林晩　霜葉紅於二月花）

實に山境の峠に見る一軒家の趣きは、かゝる深山にあつてこそ、始めて古人の句に、「山雨欲來風滿樓」などいへる句の意味も眞に徹底して感ぜられるのである。

浙江で見る西湖の雨などもよいにはよいが、安徽の深山に見る山雨とは、その深味の神々しさに於て大變な距離を見出すのである。

安徽の旅をふり返つて考へて見ると、その最も印象强く來るものは何んかと云ふと、そは始めに述べた如く、あの長江の大きい景色である。船で上水（シャンスイ）、下水のとき、蕪上で見る最も雄大を極めた風物は、あの二千坪三千坪と云ふ大筏である。こは時には十、十五とかたまつて、江上の一方を流して下つて來ることもある。筏上の家は、夫々一箇村をなし、群つて一つの小さい巷をなしてゐることがあり、雞鳴を聞いたり、狗が歩いてゐたり、又支那服の洗濯物のほしたのが風に翻つてゐたり、全く陸上の水鄕生活を如實に物語つてゐる一種特別な大きい眺めである。

晩夜の江上を、胡弓の音賑はしく紅や、青の提燈をつり飾つてゐる光りも、水に映り、一段の優しみを見せて、筏上の巷の慰みを思はせてゐるものがある。晝間の樣子と云つたら、こは殊に悠々振りを發揮してゐて、その舵夫の舵棒につかまつてゐる者も見えたり、又色の黑い老爺が、材木の上に腰を下ろし、兩手で以て、立膝を抱へ、天の一方を見詰めながら、悠久な世界を觀じてゐたりする處を見ることもある。その禪味たつぷりの態度を持し、全くの不動の姿勢で、物の半日も平氣で納まつて

ゐらるゝ所は、何んといつても蘇湖沖合の蘆原の大自然と調和してゐると云へる。

時には又大通（タイトン）の上手、蘆原の方を見ると、その汀に立つ楊樹に、竹索で以て、大筏をつなぎ留め、例の通り十も、十五も一緒に碇泊してゐる。水郷の廣き天地には、そのため幾萬坪からの水上が塞がれてゐるわけであるが、誰か一人故障を申し立て、來る者もない。何の用事があつての事か、十日も二十日も、同じ渚汀に動かないで泊つてゐる。その悠揚振りは、そのどこまでも果てしなき、蘆の世界と調和してゐる。

又水郷に風物の變つた眺めは、家鴨の江上を渡る光景である。漫々たる江上に、幾百千の家鴨の群れを、一人の童子が、小舟に、又は黙舟に棹さしつゝ、一匹の落伍者をも出さないやうに、兎も角纏めて彼岸につれて行く。その手際と悠久な操縦振りとはこれ亦この地方に於て特によく見る眺めなのである。

土民百姓たちは最近に見た六十年振りの大洪水の如き、その非常時に際會してすらも、江上で何らかあわてる態度を取る事もなく、宛ら人間の方からこの大氾濫をからかつてゐる如き樣に見えてゐるものがある。

江邊を渡る百姓の一家族どもは、濁流に浮ぶ草屋根の上にかたまり乘つかり、わりに平氣で流れと共に悠々構へこみ、筏流しの故智を學んで、落つき拂つてゐる。若しそれ手の屆く所に、楊柳の枝でも見付けることなら、これに屋根を結びつけ、おまけに舁上で四ツ手網など仕掛け、魚をとつて見たり、又夜は江上の月を賞したりなどするといふ呑ん氣な光景を見せてゐることもある。

かやうにしてかゝる天變地異のとき、長江そのものを常に日常生活に編み込まんとする江邊の民は察するに何處迄も、老子、莊子の氣分を受繼いでゐるとしか見えない。實に蘇湖の水郷からかけて、九江、田家鎭、黃石港、小姑山の邊りに見ゆる景趣は凡て皆一樣にこの老莊氣分に合した悠久な詩趣を漲らせてゐるのである。

江北に於ける安徽は、巢湖の奥地から、固鎭、蚌埠（バンブ）の方面に至るまで、水運交通の便は、到底南安徽の山境のみ多き地方とは違つてゐる。從つて省當局者がその就任に、その管内視察巡りなどするとき、數多の兵をつれまるで周遊氣分でこれらの水郷を巡視するのである。

農民、漁翁たちの性質は純朴であるが、地勢が北に山東、河南、江蘇の交錯せる省境をひかへてゐるために、匪賊動亂の患ひが絶えず、兵亂の巷に思はず犧牲となるものが少くない。

近來三民主義の宣傳から、この地方の佛寺、文廟等の破壞が行はれ、偶像禮拜の排撃なども一時はかなり猛烈に行はれ、その爲めひどく、古老識者の反對に會ひ、新舊思想の衝突から血の雨を降らせ

たことなどもある。省の境を越えた蕭縣の田舎にまでも、その余波が及び青年は寺廟の金佛、木尊を破壊すると稱して、骨董屋に内證で賣り飛ばすなど云ふことがあり、心ある士の反感を招くこと一と通りでなかつた。結局そのどさくさのあつた揚句の果て、今では遣り過ぎてゐたことを悔い改め、偶像破壊の法律を徹廢する迄にも至つた。

安徽の田舎には、殊に保守的な古老たちが固まつてゐるので、堅實一方な所があり、尚古の美風が殘つてゐて、安定を得てゐる所が多い。東方の江蘇、浙江や、西のかた江西の如く、又湖南の如く、新しがつたり、又共産かぶれしたりする憂ひは、今のところ比較的ない方である。寧ろ和平で靜かな堅實な氣持のする天地であるといつてよい。その意味から云つて、安徽のうち北半分の地は、幾らか河南の民心風物と似通つてゐる點が見出されるやうな氣持ちがするのである。

江西省

九江附近

*九江（キウカン）は江西省の省城、南昌を後ぐだけの經濟價値を有する都城となり、長江筋に於ても屈指の要港と見られてゐる。上港から四百五十五哩、蕪湖から百九十七哩、安慶から八十九哩、かみの漢口へは百四十二哩、四川の重慶へは九百七十四哩と云ふ地點にある。

長江の交通は九江あたりまで來ると、愈々益々、水鄉の眞面目が發揮されて來る。江邊に連なるあたりの湖水には、鄱陽湖を始めとし、對岸の方に、泊湖、大官湖、慈湖、その他大小無數の沼澤がある。土民達は自ら稱して澤國と呼び、江南、江北、澤國の第一位にあるものをなしてゐる。六朝晉の陶淵明が、役について、その任地彭澤に守たる事がある。その彭澤の如きも、今尚長江を上つて行くとき、左岸の山手に、その縣城の遺蹟が指される。實にその彭澤縣から見た一望千里の天地は、正にその文字通りの彭澤で、到るところ水をたゝへた一大水鄉に外ならないのである。淵明は五柳先生と自ら號し、宅の周圍に楊柳を植ゑてゐたことが史に見えてゐるが、正にこの澤國には到る所、楊柳の柔らかい薄みどりの景色が打續き、殆んど見渡すところ、湖畔、江邊の樹木といふ樹木は凡て皆楊柳ならざるはなしである。

九江都城近くの水鄉には、江岸高く、馬當山の絶壁に、小姑山の孤島のあるを始め、愛すべき風致に富んだ所が多い。特に小姑山は樹林茂り、頂上の孤亭、山腹の禪寺の眺め鮮かに、その水に映つる倒影は、その島かげに四つ手網を垂れてゐる漁夫たちの優趣と共に、この邊での最も旅の目を喜ばせ

るところである。

減水期の頃は、その島の峯高く仰ぎ見られ、夏の增水期にはおのづから低く見られる。又長江の濁流に對して、常に清水をたゝへた鄱陽湖の湖口をなせる處は、湖口（フーカオ）の土名によつて呼ばれ、その吐き出す清冽の水が、本流の濁流と、馴染み合ふ邊り、一種の色彩美に富んだ水景を呈してゐる。遙かに眺められる鄱陽湖上の大孤山は長江の小孤山に相對するもの、その散點する翠島紅嶼の眺めは、この地方獨特の景觀をなせるもので、一段の風致を形作つてゐる。

鄱陽湖は、上海漢口間の水路から見える湖水のうちで、最大のもの、湖上幾多の島嶼を浮べ、近來その水鄉を曳船の七つ八つと打續ける動きが見られ、湖上の交通はいと便になつた。

湖邊に見る土質は、その色、深紅松樹の綠なす色や湖畔の映色と相映じ、大きい色彩美の水景をなしてゐる。湖畔に見る星子縣は、一寒村に過ぎない。が背景をなす廬山に登つたり、又湖上に遊んだりする遊客のためによく知られたところである。

○

南の方、南昌は江西の省城であり、南潯鐵路の終點になつてゐる。古來史蹟に富める名都としてその名が知られ、鄱陽湖畔の風光が、亦名實共によい。湖水を渡り東の方景德鎭に游ばんか。こゝは、安徽の祁山を裏山に有し、江西の一角に、その名を恣にしてゐる燒物の本場である。今は湖口からこれに通じてゐる道をとるが、最も便利とされてゐる。景德鎭の地名は今更ら贅するまでもなく、湖畔の饒州と共に、古來陶器界に於いて天下一の稱のあるところである。こゝは一つにその燒物の特別なる土を得てゐるためによることであるが、しかしその燒物の原料も、近來その原地に求められなくなり、鄱陽湖畔の山々から採掘せられてゐる樣子である。現に、隨所に、白色の土の採掘地が見られてゐる。

事實、景德鎭の燒物は今や宇內に冠たる盛運を見、九江の市場から廣く出され、上海にもかなりその流布を見る。しかし昔の如きものは出さない。多くは近代式のけばけばしきもののみに下落し、需要、供給の原則にひかされてゐるのでもあらう。高雅な力作を見ることがなくなつたのは惜しい。古の官窯の絕品を見た當時の盛事に想到し來たるときは、頗る藝術鑑賞家の心を痛ましむるものがある。水盤、花瓶、食器、置物凡てに亙つて、古の雅韻の名殘りだに窺ひ見られなくなつたのは返す返すも惜しいことである。

その染付けに、又赤繪に、年一年と、下り坂のやうな氣持がしてゐるのは獨り自分どもばかりではあるまい。わけても近來その花瓶に、皿に、又甕（トン）に、無闇み矢鱈に金色燦爛たるを作るに急にして、

俗人の目を惹くことに汲々たる嫌ひがある。

思ふにこれも幾度か繰返された兵亂のために窯元は破壞せられ、作品は掠められ、陶工は人質にとられ又慘殺の憂目を見たりと云ふやうな事があつた。その爲め萬事發達どころの騷ぎではなくなり、根本的な致命傷を受け、その妙品、絶品の作品と云ふ方から見て衰亡を來たした譯なのである。

しかし、年產額から云ふと、數でこなしてゐる關係上、相當な活氣を示し、今では、南京に、上海に、又漢口にと、到る所歡迎せられ、宜興のそれを凌ぐこと遙かと云つた感あるはいふまでもない。九江（キウキヤン）の燒物は、人も知る如く宜興（イーシン）の厚手なるに對して、何れも薄手の作なるをもつて誇りとなし、九江茶碗の如き、又錦出の平鉢、皿の如きは、乾隆時代の錦出に近い薄手の精巧なのを出してゐたりもする。

一般に九江茶碗として內外に廣く愛賞されてゐるものは、あの十人前一組になつてゐる小形の米花（ミイホワ）と呼ばれるもの。これは細かく、明かるく透しになつてゐるものである。西洋人はこれをライスチヤイナと呼んでゐる。之を側面から見ると、米粒の如き透しを見るがためこの名前があるのであらう。しかし又幾ら景德鎭燒の工作振りが衰へかゝつたからといつても、まだ轆轤に、蔔に、釉藥に、描き繪にとだんだん見て來ると、他の地方の陶工の及びもつかぬところがあり、吳須にもその後精撰され

た粒のよい原料が集つて來てゐる。その製產振りの盛んなことは、九江目拔きの大きいところを一瞥しても直ちに首肯せられるのである。

○

九江附近で、名所舊蹟の雄なるものは、誰しも知る白樂天の琵琶行で懷かしみ深き潯陽江の遺蹟である。

潯陽江頭夜客をおくる
楓葉荻花秋瑟々
主人馬を下りて客船にあり
酒を擧げて飮まんと欲するに管絃なし
醉うて歡をなさず慘として將に別れんとす
別るゝ時茫々として江月を浸す
忽ちきく水上琵琶の聲
主人歸るを忘れ客發せず
聲を尋ねて暗に問ふ彈ずるもの誰ぞと

琵琶聲停んで語らんと欲する遅し
船を移して相近づきむかへて相見る
酒を添へ燈を廻らして重ねて宴を開く
……
……
滿座重ねて聞き皆なみだを掩ふ
中に就てなみだ下る誰か最も多き
江州の司馬青衫濕ふ。

琵琶行　白居易（樂天）

潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋瑟々　主人下馬客在船　擧酒欲飲無管絃　醉不成歡慘將別
別時茫々江浸月　忽聞水上琵琶聲　主人忘歸客不發　尋聲暗問彈者誰　琵琶聲停欲語遅
移船相近邀相見　添酒回燈重開宴　……　滿座重聞皆掩泣　就中泣下誰最多
江州司馬青衫濕

この潯陽江頭の長篇の詩は日本では、中學生といへども知る名詩であるが、今はその名殘りが、長江江畔、九江の街外れ、琵琶亭の一祀堂宣化宮に偲ばれる程度のものである。殆んどその當時の江頭に見えたる「大絃嘈々急雨の如く、小絃切々私語の如し、嘈々切々錯雜して彈じ、大珠小珠玉盤に落つ、間關たる鶯語、花底に滑かに、幽咽せん泉流水灘を下る」と云つたやうなまめかしい妙趣も今は窺ふに由なしである。唯その僅かに祀堂の荒廢した壁に、上海蓄音器會社、百齡機の廣告大文字がペンキ書きされてゐるのを見るくらゐのものである。

潯陽江を這入つて廬山に向ふとすると、その途上の水鄉には、甘棠湖の名勝、鎭江樓、煙水亭、劉池寺を始め、少し進んだ處には、十里鋪（セリホ）の田園がある。そこに有名な周茂叔（廉溪）の墓坟などがある。その他何れ後に詳細に述べるつもりであるが、廬山山下には、柴桑橋の竹林には、五柳先生の故宅と稱せらるゝうちがあり、又五柳先生の醉石など、文人學者の心を喜ばせるに足りるものが隨所に見出される。

○

要するに、九江の附近は到る所、湖江の多く、景色が暢びのびとしてゐて、楊柳の影淡く、夕陽ゆるやかに照し來たつて、江邊の眺めは、實に長江流域を代表する一大水景をなす。從つてあたりの文人の故宅耕讀第あたりを訪ぬれば、水景そのまゝの名句が詩聯の上に唱はれてゐるのを見る。今その

一例を云つて見る。

遠水千里みどりに
夕陽半樓にくれなゐなり

（遠水碧千里　夕陽紅半樓）

柳塘に春水滿ち
花塢に夕陽遲し

（柳塘春水滿　花塢夕陽遲）

この兩者の聯句に見る味ひは、下手な南畫を見るよりか遙かによい。わづか十字の間に、九江千里の水景を吟じ盡し餘す所なしと評せられる。この水景の大きい面目は鄱湖だの、南京だの云ふあたりの江上では、一寸得られないものである。矢張り九江獨得のパノラマ的大自然の景觀と稱さなくてはならぬのである。

江邊の水鄉も之を細かく見來れば、何處となく一望千里の眺めで、かみ手の方は、水天髣髴、わづかに一點の船影を認むるのみ、單調の極を現はしてゐる。心あわたゞしき日本人には、敍頸唯淋しさと退屈を與へるのみである。しかし柳塘江邊に、水牛の二つ、三つ、牧童にひかれてのたり〳〵と、その悠久な歩み振りをしてゐるところの眺めとか、又田家の西の壁に夕陽のさして、紅漂る靜かな光景を見ると云ふと、いつになく長江の偉大さが如實に物語られてゐる氣持ちがする。

思ふに、その間のこのとり取めなき大景と、その裏に漾ふ靜けさ、長閑かさ並びに、その鯖のある處を十分に受け容れるだけの理解と興味を持つてゐなくてはならないのである。さもなき旅人にあつては、九江の天地は恐らく誠に淋しく感ぜられるであらう。左岸の空に、白雲深くとざす廬山の眺めも、殆んどその人には價値がわからず意味をなさなくなるであらうと思はれる。

九江

九江は人口六萬を有する大都城である。唐の時代、江州と呼ばれ、白樂天が江州の司馬として流されてゐたところ、兩來、明に清に重きがおかれ、尙その砲臺跡が見出されてゐる。今や九江は九江燒物、米、麻などの集散地として、長江下流地方で最も樞要な港の一つとなり、內外、船舶の出入も極めて繁々しい。最近まで、英吉利がその租界として鳴らせてゐた居留地も、江岸に茂げる並木の老楊に、その名殘りをとゞめ、今は手際よく民國の手に奪回し去られてしまつた。過去八十年に亙つて、有してゐた九江は、漢口、蕪湖、鎭江などの居留地と共に今は悉く英國の手から離れ、特別區として支那

の管理に屬することになつた。

永年、悠然とかまへ、英吉利に經費をかけさせて、その道路に、建築に、下水にと、文化施設は到れり盡せりと云ふ處までさせて、長江江畔の一新都市に作りあげさせてあつただけに、その都市の眺めも水にうつる倒影と共に、旅人の目をいつも樂しましめてゐたものである。日本の領事館を始め、大元洋行（增田久次郎翁の旅館）などもあり、漢口上りの旅客にして、碇泊時間を利用して上陸することのある懷かしの都港である。九江で聞えた八角亭、仁能寺、浪井址の古蹟名勝のことは云はず、城外南八哩の彼方に行けば、高く聳ゆる天下の名山、廬山がある。がこの廬山を目指さす客であるとか又又琵琶亭を訪ねんとする客であるとか、九江の燒物を漁る客、その外、麻に米にとその取引に從事するものなどかなりこゝに集まり、碼頭の賑ひは、又格別でいつ行つて見ても盛況を見せてゐる。碼頭にあつて、そこの倉庫から苦力の船に荷を積み込むときの有樣を見てゐるのも面白い。米の袋は、運ぶ苦力の役得とあつて、何れもその多少づゝは拔き取り自由勝手と心得られてゐる。何れも大分拔かれて自らゆるみを生ずるところなど看破せられるのである。見張りの監督にも特にこゝではその袋を見て見ぬ振りをしてゐるなど九江獨特の碼頭風景が窺はれるのである。

九江には南潯鐵路の起點となれる車站がある。南昌行の客と荷物でいつも雜沓を見せてゐるが、この鐵路は、日本の借款で出來てゐるに拘らず、例によつて一向に元利とも拂はれて居らぬとか何とかで、隨分日本側では、苦境に立つてゐる樣子である。ところが不思議にも土地の驛員、鐵路關係者の方のポケツト都合を探つて見ると、優に預金まで出來てゐるとの事である。それはそれ、これはこれと別に取扱はれてゐるものらしく、表面鐵路の收支はいつも償はれてゐないとの一點張りで、この南潯借款は今尙雲か霞の間を彷徨しつゝある狀態である。あたりの景色も借款、人足すべてがいかにもよく調和してゐるやうに眺められる。

廬山

天下の名山廬山は、上古に聞えた五嶽（泰山、華山、衡山、恆山、嵩山）ほどに古めかしい歷史を有してはゐないが、しかし六朝の頃、匡廬の名で旣に知られ、爾來文人墨客では、唐の白樂天、李白を始め、多くこれに幽をさぐり、詩を錬り、畫を描かないものはなかつた。古い時代には、又この地點が、楚の國の東のはづれで、同時に吳の國の始まる西端のさかひ目に當つてゐたと云ふことである。そこで土地の人は、「吳頭楚尾」と之を呼んでゐる。これ亦吳楚の地理境域を考へる上に、大事な材料となるものである。

○

廬山は、海抜四千八百尺、南に鄱陽湖を、北に長江、東に甘棠湖を、それぞれ控へ、文字通り山水明媚の地である。

九江から八哩の自動車道をドライヴするか、或は船に、或は轎子に、又合乘（バス）にと、何れによるもよろしいが、頗る便利よく、山下蓮華洞までは、極めて樂に行かれる。

凡そ支那の名勝地で、廬山くらゐ遊歷の交通路のよく開けてゐる所はない。それといふは、山上に牯嶺（クウリン）と云つた國際避暑地があるによるのである。もとこは英人リツトル（宣教師）によつて開拓せられ、英日米佛獨露支各國人の一流紳士の避暑地として恥かしからぬ別莊が幾千となく散點し、道路、プール、活動寫眞、圖書館、病院、學校、遊戲場などの文化設備の出來てゐる別天地である。オツクスフオード・ヴアレー、ケンブリツヂ・ヴアレー、その他の石徑の名が、それ〳〵その溪間にローマ字で現はされ、石徑はかなり廣い範圍に跨つて、縱橫斜に通じてゐる。

牯嶺は到る處松樹の綠林に、黃瓦白壁の輪奐麗はしきが見え、天涯の勝地として游心をひどく牽いてゐる。從つてこれらの避暑地を當て込んだ支那人街もその要所に開かれてゐる。雲上の文化避暑地として、支那南北を通じて、否、東洋の天地に、他に全く見ることの出來ない大規模の勝地である。

その夏季の好時期に限らず、冬であらうといつであらうと、その九江廬山間の交通の頻々たるは、固よりその筈である。

近來、日本の畫家、文士、吟客達も、次第にこれを知つて、この勝地に足を向ける者が殖えて來た。しかし西洋人は、最近支那側の新人たちの鼻意氣の荒いのに辟易し、折角堂々たる別莊を設けておきながら、二束三文で支那人に投げ出し、手離してゐる者も多いとの事である。曾ては、滿、蒙、朝鮮、日本、南洋、印度の各地に居た歐米からの宣教師達が、宗教大會に名をかりて、盛大な廬山會議を開いてゐたものであるが、今はその光景の俤だも見ることが出來なくなつた。却つてその後は支那側で、政府當事者が、時に政治上の廬山會議をこゝに開いたり、又名流、司令級の手合が、白喇嘛班禪喇嘛などをこゝに請じて、天下和平の祈禱を催すなど、專ら牯嶺の天地は、支那人の自由の天地に復した如き感がある。時移り世變り、廬山の避暑地は舊の如くではなくなつたが、尙幾千の客を每夏集めてゐて、別莊の數も今や三千戶を越えるの盛況を見るに至つた。溪流綠蔭には、鶯の音の絕え間なく、白雲去來する五老峯や、大月山、大漢陽峯の嶺々を背景に、牯嶺は雅客の心を牽いてゐる。暑氣の溫度は平均七十二三度、九江漢口の酷暑のときのそれに比し、二十四五度の差を見るのである。

○

古人の廬山五老峯を吟つた詩のうちで、最も人口に膾炙してゐるものは、李白の五老峯の詩であること云ふまでもない。

廬山東南の五老峯
青天倒り出す、金芙蓉
九江の秀色攬結すべし
われ將にこの地、雲松に巢くはんとす

五老峯　李白

（廬山東南五老峯　青天倒出金芙蓉　九江秀色可攬結　吾將此地巢雲松）

又ひろく文學の上で知られてゐる香爐峯の眺めは、日本では、清少納言が簾をかゝげて香爐峯の雪を眺め、遺愛寺の鐘を聞いたといふあの峯も、亦この廬山の山麓中に聳え、日支の文墨の上に美しい風韻ある聯鎖となつてゐる。幾度か江南の旅に此の山を訪ね、その風韻を味つてゐると、廬山山巓の別莊には次の如き聯句が誦ぜられたのである。

窓を開けは山影を納め
枕を推せば谿聲を得る
（開窓納山影　推枕得谿聲）

或は又

蹟石苔粘屐
眠松露滴牀

など云ふ句もあり、廬山の幽趣を遺憾なく物語つてゐる。山境はひろく、いくら跋渉しても盡きない。道理で昔から廬山はその山の餘りに廣く、容易にその全景を知ることが出來ないので、よく「廬山に入つて廬山を見ず」など評されてもゐる。しかしさうは云ふものの道順を判然と定めて、重な名所舊蹟を、無駄足をせぬやう巡遊するとすれば、その大體は見てしまへるのである。

○

廬山の順路は、普通には、先づ北口からする。卽ち北口の蓮華洞から登り、その頂上の方面に散在する前述の牯嶺、大月山、大漢陽峯、五老峯などを巡り、次いで、含鄱口より急轉直下して、息肩亭の棧道石段をましたに、南麓の觀音橋へと出る。天下第六泉に口を漱ぎ、道を右にとる。すると、秀峯寺、李白の瀑布、それから金輪峯下の歸宗寺、陶淵明の醉石のある紫桑橋、栗里などに出られる。

又左に路をとれば、朱熹の白鹿洞書院や、海會（イホイス）寺、鄱陽湖畔などに出られる。その他頂上牯嶺から道を香爐峯にとり、講經臺から西に下れば、虎溪三笑で名高い虎溪橋や、東林寺、西林寺など、廬の里に六朝以來の佛蹟の目星しいものが數限りなく見出される。

蓮華洞からする北口の山道は、頂上まで約五里、牯嶺までの山徑はだら〳〵阪でもないが、相當に遠い。南ぐち又は西口などに比べると、しかし一番樂である。とはいへ、幾萬の石段が急坂にかゝり一歩々々と、歩を運び上るには、決して樂な道でない。

嘗ては、外人側から之にケーブルカーの許可出願をしたこと再三であつたが、遂に許されなかつた。香港のピークに、又馬來彼南（ペナン）のピークなど、何れもその頂までケーブルで以て譯なく登れる施設が出來てゐる。しかし廬山のよい所は、これを文明の利器で登らないで、何處迄も人間の足を用ひ、全身に汗して攀ぢ登る所にある。

思ふにこれは、恐らく山の雲助强力轎夫達の失業問題を卷起すにきまつてゐる事情のあるためと、今一つには、在來の廬山の趣きが、ケーブルによつて毀はされてしまふためとによることであらう。何れにしても、無條件に自分はケーブルなどの設計を見ない方がよいと思ふ。今日電柱を山道に見るだけでも、何んだか文人の心を痛めしめてゐる所があるやうな氣がする。

○

蓮華洞の山道を登ることしばし、康溪書院と云ふ祠堂や、太平宮などのある處をあと廻はしに、先づ第一の茶亭まで爪先き上りに攀登する。そこには石徑の右に折れて、虎溪橋の方角に至るものがある。これを曲らないで、どこまでも更に急坂又急坂、綠林の間を過ぎ登れば、第二の茶亭がある。轎夫はこゝに一度轎子を下ろして休む。荷物を持たぬ外人共は、體刀剛健、石段を踏む足の力も輕く、悠々之に目もくれず、不休で峻坂の道を拾つてゐる。

坂を上る者の樣子を見ると、先づ强力である。あの六尺大の組立寢臺、數十貫に餘るシンガーのミシン、或はピアノの類から、セメントの大丸桶など、すべて皆苦力の肩によつて運ばれてゐる。石段は段一段と次第に高く、溪間は脚下に深く白雲の罩ち込めてゐる處があり、又凄々、去來してゐる處があり、行手の石徑は出沒隱顯、少しも先方の見通しがきかない。實を云ふと路上斷崖千丈の所もあり、かなり危險である。と云ふのは、路に、忽ち雲破れ、頭上に巨岩の出つぱりが垂れかゝり、山道その下をめぐると云つた所もあつたり、又路の平坦になつたかと思はるゝ處は、斷崖に直面してゐて、一歩もし誤ればと肝を寒からしむるものがあつたりする。しかし時には、更に一段上の方の石徑を見ると、崖壁に持つて行つて「雙妹」「露月水」のペンキ文字も大きく、美人姿の化粧の廣告など、

旅人の目を慰むること尠しい。藍に白字の「露月水」（化粧水）の文字は、筆蹟雄渾、氣持がよい。「金剛石牙粉」（齒磨）だの、「紅錫包」（煙草）だの云ふものも、岩面にすらりとあるなど、まるで廬山山道の崖壁は、廣告ペンキ文字の展覽會場見たやうな感を見せてゐる。

路傍に厚み一尺、長さ二三間の花崗石の休み臺なども隨所に設けられ、重荷を持つ客が任意休み、汗をひかせる場所に提供してくれてゐるのは嬉しい。轎子によつて、峻坂を擔がれのぼり行く時、窓外の溪谷を俯瞰することは禁物である。と云ふのは、直下三千丈深く幽かに奇岩の幾何となく峻り立ち、雲の海にそのあたまを出してゐるのが目につくからである。何にせよ、風景のよいだけそれだけ、全く物凄じい感じが伴ひよい氣持はしない。それも轎夫がわざ〳〵好んでその崖ぶちに近い方を選つて、歩んでゐるやうにも思はれ生きてゐる氣持がせぬ。若しや一歩踏みあやまれば、身は奈落の底へまつ逆様、お陀佛になることだらうなどと、氣を配ることが幾回となくあるのである。

○

分けのぼる山道も、さすがに頂上の牯嶺近くなると、なだらかになり、遙か彼方の雲のとぎれたるあひだに、黄色い屋根の五つ六つ見え始める。やがて二十三十と指されて來る。支那家の散點せる光景も見え出す。そしてこれらの山家が、何れも笑うて、旅人を待ちこがれてゐる如くにも見られる。

牯嶺の支那街も、近頃は旅館も殖え、商店も相當軒並みにつゞき、活動、寄席に至るまで、山中の巷と思へない位に、めき〳〵發展して來た。支那町の市場に行つて見ると、鷄卵、豚、白菜、その他の食料品も、山下の農村から集つて來るので、かなり豐富にあり、價も割に安い。峯高く、雲表に聳ゆる洋風の別莊には、圓柱が白く立ち並び、ローマ建築をそのまゝ思はせる如きものもあり、又ゴシック、ルネサンス、セセツション、コツテージなど、思ひ〳〵のスタイルが、嶺の松林の間にちらほら見え、これ又別莊地展覽會場の感を呈してゐる。

山は深く、溪流豐かである。山骨は、悉くこれ花崗岩のお誂へ向きであるから、それ〴〵、その別莊を建てるにも、先づ以てその境内の岩を取り、之をぶつかき、セメントの厚壁に塗り込むと云ふ建造法。從つて見るからに沈重の趣きに富んだ樣式である。別莊の一室に納まつて見ると、山氣身に迫るも、鎧窓を開けた硝子戸の明るい朗らかな樣子は、山上とも思はれない位長閑な氣分が味はれる。

日の丸の國旗翻る大元洋行の主人、增田久次郎翁は、日本人の間では、廬山の主といはれるくらゐの廬山通で、幾十年となくこの山上に雲霧を友として棲み老い、日本人の登山姿を迎へる事を何よりの樂しみとしてゐる。嘗て牯嶺の大林寺に白喇嘛の讀經の儀式の營まれた時なども、白大師、大虛老師などを宿に迎へて、門前にアーチの花門をつくつたり、毎夜アーク燈を點じて、牯嶺の空に時たら

ぬ後光を放ち、山道を辟かせたりしたなど、大いに廬山開發に盡瘁することが多い。山にいつか翁の壽像が出來てもよい位の氣持ちがしてならぬ。殊に又翁は山中の歴史に詳しく、名所案内は最その得意とするところ、傍々古武士の風もあつて、氣骨稜々、どことなく懐かしい所が漂つてゐる。

○

廬山で、近代的呼びものとしては、前に述べた牯嶺の文化避暑地たること疑するまでもない。これは千八百九十五年の頃、エドワード・リツトルが、こゝに避暑地を卜したのが抑〻の初めである。それから以來、リツトルは鋭意、道路工事に又病院に圖書館にと、文化設備の完成に努力する處があつた。その業績振り見るべきものが多かつた。その間幾度か、土民の排斥を見又妥協を見、波瀾重疊、交渉に交渉を重ねた末、漸くその道路を公道となすことゝし、各國人種十二名から成る民團委員會なるものを作り、之にすべて委任統治の形でまかせることにして、始めてやつと落着きを見るに至つた。それがこの牯嶺の今日をなすに至つた由縁であつて、そのいきさつ沿革の經路苦心については、察するに余りがある。かくて今日に至る三十七年間に、よくも東洋一と云はるゝこれだけの文化施設が完成せられたのを見ると、日本の叡山、箱根、輕井澤、乃至は浙江の莫干山（モカンシヤン）あたりのそれの遠く及ぶ所でないことが解る。

○

牯嶺から道を西に、峠傳ひにとれば、仙人洞、錦繡谷（一名錦澗溪）、佛手岩、御碑亭、天池寺のあたりから、六朝の古塔、白鹿昇仙臺へと出られる。何れも訪ぬる値打のあるところである。仙人洞は佛手の刻彫のある佛手岩、磨崖碑の下を通り過ぎ、斜に下へとくだれば岩窟の前に出る。内は天井高く、その奥深き所に、神泉の清く湧き出づるものがあり、花崗岩の玉垣を遶らせてある。洞口に、結髪の神農姿を髣髴せしめる仙人道士がゐる。道服道帽で、石の凳（トン）に凭り、旅人を相手に何事をか物語つてゐる。卓に凭り、毛筆など揮へるところ、仙境の一場面を匂はせてゐる。溪を隔てゝ、半天に高く石造の小亭御碑亭が聳えてゐる。明の太祖の御筆を刻し藏めてある處で、訪ぬる游客も相當に多い。

その先きに又白鹿昇仙臺と稱する石造の露臺があり、むかし、周顒仙人が、これに登つたとか何とか傳へられてゐる。

天池寺の六塔は、千六百年の歴史を有し、崖頭高く碧空に沖し、長江の野を次ぐ荒風に逆つて立つてゐるので、今や屋根は落ち、檐は壊れ、大半その形をなさない位にまで哀れな姿を見せてゐる。邊りの草間に、落ちてゐる古瓦塼をひろひ、その字を見ると六朝の年代を存するものがある。

天池寺の禪寺は、今は學問のある僧もゐず、經文の數も少い。門前の古池に得たと云ふ宮守（ヤモリ）を瓶に入れ、これを自分共に見せて、眞面目に空を翔ける龍の子であるなどと信じてゐる。賽錢などを得てゐると云ふ程度の和尚である。寺の前の突出した懸崖は、土民どもから捨身崖と呼ばれてゐるくらゐで、直下三千尺、溪深うして紫雲その下に懸かり、懸崖の一角にそゝり立つ危巖の姿も、幾つか指顧せらる。巖頭に立つて溪を望めば、その規模の雄大なること、目も眩ぜんばかりである。又形とその所在は見えねど、下界に轟く瀑布の落つる音は、山谷に響き渡り、これ亦一種いふべからざる壯絶の神氣を漲らせてゐる。この邊の廬山に見る天然の偉觀は、最早や文字や言葉で表現が出來ぬ。山に經を讀む仙人老僧たちの、納まり棲むべき山寺は、多々あることであらうが、しかし、この天池寺くらゐ大自然の奇峭に取りかこまれた祕境で、その所を得てゐる處はあるまいと思はれるのである。廢塔といひ、奇峭といふ、瀑布と云ふ、廬山廣しと雖も、この天池寺に見る大自然の深味と、凄絶味と、雄大味を、兼有してゐる神域は、山中他に決して求められない。崖下に虎の蝸を負ひ、所謂「猛虎一聲山下高」の畫趣をそのまゝに現はるゝ所で、誠に廬山名所中の隨一の所であるといつても、溢美の言ではないと思ふのである。

○

又道を黃龍寺の溪谷へと取る。幽徑を廻り、林間を下り行く。沙羅雙樹の大木の二株生ひ茂れる庵寺に達する。もとの堂塔伽藍は炎上して、今はその昔の佛だもとゞめてゐず、さゝやかな假堂の一棟があるのみである。輪奐の美のあらう筈もない。一老僧がゐる。堂内は藥の圓座の數多並べられ、自分を之に案内する。觀音開きの戸を開き、明りを入れて堂内を見せてくれる。自分は老僧が何の爲めにかくするかと見てゐると、床上に龍骨ありと云ふ。見ると、床の地面に、二十間に餘る所謂龍骨と稱する岩の根が蜿蜒と走つてゐるのである。さも龍の骨そのまゝの姿を現はしてゐる。その色は黃褐、龍頭あり、兩耳あり、四肢あり、鱗あり、如何にも山民樵夫の心に黃龍その者を思はしむるものである。寺名の生じたのも、こゝにその譯が存してゐる。最近之を訪ねて見ると、若い僧禪がゐて、蕨の鹽漬に茶を請じてもてなしてくれたのであつた。因みに該寺の扁額、「黃龍寺」の三字は康有爲の書で、よく出來てゐた。

廬山の東南には瀑布で有名な三疊泉と云ふがあり、三段になつて落ちてゐる。その規模は、誠に雄大で見ごたへがする。又李白の詩で、天下に鳴り渡つてゐる奇峯の五つ群つてゐるところ、所謂五老峯の絶景がある。

○

五老峯は廬山山嶺中東南の屏壁をなせるもので、その奇抜なる秀嶂崖容は、天下の見ものである。試みにその岩頭に立つて、脚下四千尺の麓の幽境、松林に見える海會（ハーホイス）寺から、瑠璃色たす鄱陽湖の湖上を一眸のうちに眺めやれば、これ亦山水の美を兼ね併せて、凄絶の極を盡したものである。又湖畔に下り、これを仰ぎ見れば、金芙蓉の大空に踊り立つ絶景を賞することが出來る。

五老峯は四時白雲を戴き、これを訪ね極めんとする詩客は、多くその全景を見ることが出來ず、青天にこれを別け登つて見ても、山氣忽ち變じて、白雲濛々咫尺を辨ぜず、空しく山上の白雲裏にあり て如何ともなし難く、誠に五老峯の正體を見きはむるのは運ものである。その人、その時の運がよければ、無駄足にならず、よく見られる。運が悪ければ折角、曉天よい日の出を見て宿を立つて行つても、その往復の一日が無駄になるのである。

歸途半天にふんわりと半月形の姿を現はしてゐる、行儀の正しい大月山を仰ぎ見、牯嶺寄りの路に出る。更に又日歸りの旅の豫定で、早朝に牯嶺を立ち、仙人洞の前から、講經臺の絶壁を雲を別けて下り、虎の嶋を負ひて叫んでゐる處を見ると云はれてゐる。奇抜な巨嶂つゞきの岩道を辿り、礫徑を辿つて麓の谷虎溪橋に至るの幽道をとる。

○

虎溪橋は山下、林間の溪流に架つてゐる破橋であるが、半ば石桁は落ち、遊客は水を徒渉りするのである。水を渡れば、六朝の僧慧山の開いた西林寺と云ふ禪寺と、同じく六朝の僧慧遠の開いた東林寺と云ふのが、林中に相並んで見える。

西林寺は大雄寶殿の後方に、千佛塔と稱する六面七層の古塔が聳え立つてゐる。今は全く荒廢して天井も落ち、塔の下から屋根裏まで、筒抜けに見通しのきくやうに仰ぎ見られる。邊りには、「晋太元二年」の銘の鮮かな瓦や、塼の落ちてゐるのが見られる。誰れ人の訪ね來る者もなく、誠に淋しさを漲はせ、自分共の遊歴の際には、手あたり次第幾つもその古塼が採集せられ、古硯をそれでつくるのも最も妙であると思つたのであつた。晋の慧遠が陶淵明、陸修靜の二客を送つてこの溪流の名橋を渡つた。その時、老虎のそばに吼ゆるのも知らずに、話し込んでゐた。がそのうちその吼聲に不圖氣がつき、三人は思はずどつと笑つて別れを告げたといふ話が傳へられてゐる。本當にあつた事實かどうか知らぬが、かやうに土僧たちも說明してゐた。古溪三笑の傳說は、これから生れ出で、こゝに千五百年の歷史を經てゐる。南畫家あたりの喜ぶ恰好の畫題である。

東林寺には、丈餘の鐵塔がある。以前は殿前に建つてゐたが、近來日本人が之を持ち去らんとした事實があるので、今はうちに收めたのだと和尚は云つてゐる。とかく日本人の泥棒めいた話を耳にす

ることが多い。

廬山で最も見所の多いのは、多く廬の方である。東西南北各方面の廬のうちで、南廬の一帯が一番多い。特に禪寺の名高いのが多くその選に入つてゐる。山には白樂天の詩によつて名高い遺愛寺の遺蹟を傳ふる香爐峯の名山や、雙劍峯の名峰があり、これには李白三千尺の瀑布長川が掛かつてゐる。これは李白の詩で三歲の兒童も口ずさんだものだけに、最も廣く愛吟されてゐる。

月は香爐を照して紫煙を生ず
遙かに見る、瀑布の長川をかけるを
飛流直下三千尺
疑ふらくばこれ銀河の九天より落つるを

望廬山瀑布　李白

（月照香爐生紫煙　遙見瀑布挂長川　飛流直下三千尺　疑是銀河落九天）

その他瀑布には尙金雞峰下に、とゞろく簡寂觀の大瀑布があつたり、それから又南廬の峻坂を下る溪谷途上に、その名は失念したが、何でも非常な轟聲を響かせてゐるものがあつたりする。これは誰れしも知つてゐるところである。しかし、何れも華嚴以上の大瀑布で、かなり壯觀を極めたものである。

南廬の禪寺と云ふ禪寺は、多く臨濟派に屬し、寺は豐かで、禪僧の品格も奥床しい。そこに何處となく廬山の風韻のあるところが物語られてゐる。轎夫雲助のたちの悪いのに、氣を腐らせてゐても、山門を訪ね、禪僧に會つて、共に茶を喫り、禪を語つてゐると、氣分がすつきりする。廬山に遊んだ氣持は、これらの禪僧と、總一心の境涯をゆるやかに語る所にある。

廬に下り、その順路に訪ぬる山門は、何れも紅壁黃壁を林間に現はし、得も云はれぬ懷しさがある。棲賢寺や、觀音橋のたもとの慈航寺を經て、萬杉寺から秀峯寺の巨刹を訪ねる。あたりの背景をなす雙劍峯には、三千尺の瀑布が碧空から長く垂れさがり、そのたきの音は、寺内にゐても響いて來る。たき壺は、森の奥深くて訪ぬべくもないが、青玉峽の淵は、碧水堪へ、正面の崖壁に見る崖崖の文字は、氣持よく深く刻み込まれてゐる。水汀の岩面また數多の刻字を見る。石刻數多く見らるゝ中にも、知名の士の題字もあちこちと見出され、「青玉峽」及び「第一山」の大字は、宋の米芾（一一七）の書であると傳へてゐる。又その潭の傍を見ると、石の牌樓の壞れたのが散點してゐて、ありし昔の盛事を偲ばせてゐる。石柱、石桁、篆額も、離ればなれに、亂雜に叢の間に隱顯してゐる。時人これを再建するものもなく、李白の瀑布や、青玉峽の潭淵は、今や之を顧るものもなく、そゞろに哀れを催ほし

てゐるばかりである。

○

秀峯寺は境内廣く、大雄寶殿には圓坐の數も多く、その内部の設備至れり盡せりである。南麓第一の名山たるの名を恥かしめない。秀峯寺に游び、その時居合はせた大和尚を訪ね、曾遊の頃の話などを持ち出す。熱茶を喫り閑談に時を移してゐると、和尚は云ふ。

『寺に東洋人（トンヤンニン）の描かれた畫があつて書齋に寶藏してある。何なら今出して御覽に入れて見たいが』

といふので、自分は如何なる遊客の描き殘した畫であるか、南畫か、洋畫か、それともどんな繪かと取り出して示さるゝがまゝに見ると、いづくんぞ知らん、小室翠雲道人の落款も鮮かに、幾年か前、共に遊んだ時分のものであつた。

游客の來り描き殘した筆跡を、かくも丁重に寶藏してゐることを知つて、意外の感に打たれたのである。

隈なく寺内の各處を見せてもらひ、臺所の方まで案内せられる。見ると、一隅で小僧が、二尺大の黄色の南瓜を、黄布巾で以てしきりと磨いてゐるのである。南瓜とは云へ、日本のそれの如く深き切れ込みの皺はなく、北瓜（ペイクワ）の如く、すべ〳〵の表面に、斑點の見えてゐるもの。その眞半分は截ち切られ、洞穴を見せてゐるのである。何の爲めに、その面を磨いてゐるのかは、譯がわからなかつた。が精進料理の材料に之を用ひるのだと云つてゐた。

廬山巡りの客を乘せた轎夫たちは、多くはこの秀峯寺邊りで腹拵らへをするのがおきまりである。轎夫は山門を見ると、「吃飯」「吃飯」と誰れ云ふともなく云ひ出す。そして客をおろし休ませて勝手に寺内に頑張り飯を焚かせ食事にとりかゝる。この邊の氣分は、彼等の游山氣分でやつてゐるものらしい。めしはよいとしても、そのために數時間を要し、悠々とやられるのには少々弱はらされる。併し、尚やつと、めしが濟みそろそろ寺を出て少し行き、他の寺々を巡るうちに、又もや腹拵らへにかゝりたいと云ひ出す。幾度かかやうな調子に强要して、かなりゆつくり時間をとられる。頂上の牯嶺から日歸りで南麓巡りを試みるプログラムにしてゐても、その豫定は半分も果たされない。この邊は甘まうまと雲助のトリツクに掛かつたわけであるが、又これが廬山風情の一つとも見らるゝのである。

○

秀峯寺の山門を出でゝ山麓に沿ひ道を西へと取る。するとかなり田間を行つた頃、金輪峯の下にある歸宗寺の山門へと着く。歸宗寺は古色蒼然たる山門で、何處となく翰墨味に富んだ趣きが見える。

昔晉の王義之が、潯陽の太守であつた時、この邊りの風物を愛賞し、後にこの地の任を解かれると、この金輪山下に來て、居を卜したのだと傳へられてゐる。今尚寺内に王義之が洗墨の池と稱せられる古池が殘つてゐる。

寺内の壁には、大字で「墨莊」と氣持ちのよい雄渾な筆跡が刻せられてゐる。寺僧は毎日これが拓本をとることを内職にしてゐる。見ると、一度に十枚の紙を濕ふし、石刻の面に貼り、無雜作のうちにも手際よい處を見せて手拓してゐる。土民の噂してゐる處を聞いて見ると、もと歸宗寺は由緒古く、その開山は王右軍義之であつた。がその後、寺院は炎上してしまひ、今の山門は明の萬曆に再建されたものだと云ふことである。

○

歸宗寺の山門を出てから、更に畦道を西へと辿る。麓に沿うて進み行けば、陶淵明の墓坟のある柴桑橋い栗里と云ふ村に着く。こゝには今尚淵明の子孫の住まつてゐる故宅がある。竹林のうちに二軒並んで見えてゐる。その二軒のうちが、どちらの家も自分の方が正しいと云つて本家爭ひをしてゐるとのことである。旅人の目には、そんなことはどちらでもよい。

五柳先生が、東籬のもとに菊を愛してゐられた田園生活の面影は、今尚その竹林のあたりから谷を這入つたところ、溪流を隔てゝ彼方一帶に眺められる。誠に塵外の平和鄉である。見るからに懷かしい。歸去來の賦を思ひ、竹林の故宅を訪ねて見ると、六朝晉の世の樣子が躍如として浮んで來る。

溪流に沿ひ、山童を案内に、醉石のありかを確かめんと、谷地深く奥へ奥へと分け入つて見る。小徑に佇み農夫を相手に、少しく五柳先生の傳說逸話など聞いて見る。一向によく承知してはゐないのであつたが、幾年か以前に、東洋人でわざ〳〵この栗里に訪ね來られた方があつた。それきりで頗來游客は一人も見えないと云つてゐた。その東洋人とは、自分の知れるところでは、京都の長尾雨山翁である。當時隨分苦勞をして故宅をさがし、醉石を求められたとのことを聞き及んでゐる。

溪窮まる所、二丈餘の四角四面の巨岩があつて、丁度溪流の中に蟠つてゐる。蔦かづらが生ひからみ、又垂れて、幽邃の趣きが十分に漲うてゐる。かづらに掴まり、足場を求め求めて、どうにか攀ぢ登る。岩頭には「淵明醉石」の四文字の深彫りのあるを始め、數多の雅句名句の題銘が刻されてゐる。恐らく淵明が酒を携へこの邊に來て醉うてゐられた所であらうと察せられる。正面の山溪、相迫る所に、溪流高く仰がれ、これに小瀑布の掛かれるを見る。幾段にもなつて、ちよろ〳〵と流れ落ちてゐるのである。ちびちびやりながら、詩を賦し、月に吟ずるには持つて來いのところ、全くお誂向きの幽境である。廬山山麓で、その隱君子の別天地に適した所と云へば、先づこゝが最もよい適所である。

ある。

唐の李白が吟じてゐる七絶の詩の中に、如何にも、斯うした山中の幽居を、長閑に表現してゐるものがある。

余に問ふは何んの意ぞ、碧山にすむ
笑つて答へず心自ら閑なり
桃花流水杳然として去る
別に天地の人間に非ざるあり

山中問答　李白

（問余何意栖碧山　笑而不答心自閑　桃花流水杳然去　別有天地非人間）

これなどは、宛ら淵明の胸中を歌ひ盡してくれてゐる感がある。今や、殆んど廬山巡りを思ひ立つもので、この醉石までを旅程に繰入れんとする者は少いが、「歸らんかな、歸らんかな」の賦の意味を眞に味つて見ようとする者は、足をこの栗里にまで向け、その別天地の雰圍氣に親しく浸つて見ることが、本當の研究法であり、體驗を以つて證明せらるゝことであらうと考へる。

尙この附近には、土民が天然の湯で鷄卵を煮てゐると云ふ溫泉の湧出する處がある。黃龍山の麓、野原の中にあるので、農夫樵民たちの間にのみ知られてゐる。その北に當つて栗里の鄕と云ふがある。これが抑もの淵明舊居の遺蹟であると傳へられてゐる。

栗里の鄕は山氣柔らかに、柳絮垂れ、如何にも五柳先生が支那服姿で、雨讀晴耕の餘生を送つてゐられた當時の面目が、そつくり思ひ浮べられる。

廬山山下一帶には、昔から杏花の名あるところがあつたが、今も尙、農家で杏林を持つ家が多い、又藥草を採り杏を摘むの古習が傳はつてゐる。こは何れも皆病を醫するの考へから出てゐるのであつて、病家にとつては、殊にこの杏花の栽培には力が入れられてゐる。よく「杏林」とか「杏雲」とか云ふ語が、醫藥、醫院を代表する言葉として用ひ古るされるに至つたのも、この邊り廬山の平和鄕から、その起源を發してゐるものであるとまで云はれてゐる。

○

廬山の南部を東に橫をやれば、廬山の背景はさながら屛風の如く、山色天につらなり、誠に壯觀を極めてゐる。その中にも、三角型の峯が二つ續いて見える。雙劍峯と呼ばるゝ有名な峯は、その左手の空に高く、五老峯の奇峯は右手の空に仰ぎ見られる。山に對して李白の瀑布と簡寂觀の瀑布は、山中の二大瀑布で轟聲高く、千里の外に響いてゐる。

畦道の一角に六朝風の六角の石亭がある。如何にも清趣のうちに奇古の感じを見せ、旅人の休憩におのづから便じてゐる。花崗石の角柱、軒桁、凡て太く、千古に亡びない丈の勁い氣持を唆つてゐる。自分は江南の旅に常にこれを訪ね、懐かしさのあまり、之に佇むのを例としてゐる。之に憩ひ、あたりの農夫が刈り入れにいそしむ秋の田園情趣を味ふなど、いかにも我が意を得たる心持ちがする。又亭下の南瓜畑におりて、手帳取出し、廬山氣分など日記帳の中へ思ふがまゝにしたゝめてゐると、畑に飛ぶ秋の蜻蛉の來つて、我が赤の萬年筆にとまるのである。筆をとゞめて靜かに見入つてゐると、蜻公も亦巨眼をくる〳〵動かし、吾れを靜視してゐる。その樣子は、全く命をとられるといふ心配もなく、かうして廬山氣分の中に人間と一緒になり、倶に共に生を樂しんでゐる蜻公の心境と、そのときのゆるやかな天地がなつかしい。これは秋の農夫が稻束を打つてゐる呑ん氣な音とも調和して、いひ知れぬ和平の氣を漲らせてゐるのである。日本の文化生活にのみ明け暮れ浸れる人々は、夢想だも出來ない武陵桃源の天地なのである。

○

南麓には、歷史に富む白庵洞書院と云ふがあり、旅行者を牽きつけてゐる。これは唐の昔、顔眞卿の子孫がこゝの洞中で經を講じてゐたと云ふ話が傳へられたり、又唐の李渤がこれに隱れ、白鹿を友とし、讀書に耽つてゐたこともあつたやうに傳へられたり、その後に宋代になつてからは、朱子がこゝに書院を開き、學徒の薫陶に從事してゐたなど云ふ話も傳はつてゐたり、かなり色々の歷史を持つてゐる。又明代には、近郊、南康（ナンカウ）の大守翟氏が、こゝに朱子學を講じてゐたと云ふことである。

書院は唐宋以來、時には兵燹にかゝつて炎上したこともあるが、常に各時代を通じて精神教育方面の學府として、世々その事業が續けられてゐて、清朝の末葉には、農林學校の開設をこゝに見たこともある位である。しかし今は堂内教室のあとを見ると、机のみ數多殘されてゐて、塵埃、蜘蛛の巢で以てひどくなつてゐる。あたりを限なく視て見ると、寶は多いが、しかし奥の院にある御本尊の白鹿の石彫は、徒らに洞中の淋しさを唆つてゐるのみである。晦翁（朱子）若しこの世にあるならば、これを如何に見られることであらう。たゞせめてもの氣休めになるものは相手の壁にかかる聯の句である。

財寶殺子孫
學問滅國家

天下國家を考へる人、子孫繁榮の希望に燃ゆるの士に、此の十字を見せつけてやりたい氣持ちがするのである。學者たるもの、よくその心して學問の職業化を自制しなくてはならぬではないか。

書院は松青く、水清く、瀟洒たる山下の風景に富む。背景の名山、五老峯の清秀を兼ね合せ、宛ら京都東山の麓にあるの觀がする。日本人の遊客にして、近來どうやらこれに下り、朱子の學德を偲び、來たり訪ねるの士が、やゝ多くなつて來たのは喜ばしい事である。

○

道を更に南の方の星子縣にとる。すると鄱陽湖畔眺めはいと清く、大孤山湖上に泛び、島影をちこちに散點して、まことに江西隨一の水鄉を賞することが出來る。星子縣から東、五老峯の眞下麓のあたりに出づれば、松林の間に古錆びて見ゆる海會禪寺の山門がある。參詣する善男美女たちも多く境內には、方丈、寶殿、客堂など、凡べてよく完備し、秀峯寺にまさる設備が出來てゐる。廬山五老峯の奇嶂をその全景として賞せんとするには、この山門から仰ぎ見るのが最もよい。他のどの地點から見るものよりも、最も雄大であり、且つ一等目近く仰がれるのである。恐らく廬山全景の風光に接せんとするものは、ピントをこゝに合はせて賞すべきである。これが最も適當な場所であると思ふ。

山門を出て更に道を湖口（ウーカウ）、又は九江に向ひ、麓について廻ると云ふと、こゝに始めて長江江邊のひろい天地に出るのである。

廬山の名所由緒のうちには、又かなり古く深いものがある。茶道に有名な天下第六泉の靈水のあることなどこれである。南麓に、金井と呼ばる觀音橋下碧澄の水景をそばに見、橋を隔てゝ慈航寺の山門と相對するのところ、こゝにさゝやかな石造の小亭がある。春夏秋冬泉水をたゝへ、游客輻夫達は喉を濕ほしてゐる。施茶の水もこの泉水からとられてゐるとの事である。唐の陸羽が、その親しく天下を茶道行脚して、嚴選した水と云ふことだけあつて、如何にも高雅な味ひのする水であるやうな感じさへある。支那の宋俗、鬪茶の風習ひろく行はれてゐた世相のあるを見、又この第六泉が親しく陸羽によつて定められてゐること、又その本場に踏み到りその水を味つて見ることなどは、茶道の雅客にとつて、何よりのよい印象が與へらるゝものだと思ふのである。

○

さてこゝには、廬山の全體に關する見方を試みて見よう。思ふに廬山は、人各々見る所があるのであらうが、誰れしもその廬山の雲煙に心を惹きつけられない者は一人もゐない。殊にその位置が四百餘州の中央にあつて、此に訪ね游ばんにも交通の便があり、山中名所舊蹟が多い。客を泊めるに、客棲別莊の設備多く、今や病院があり、圖書館があり、活動があると云ふ所まで發達して來た。

山東の泰山は、千古の名山には違ひない。又道士仙人の雲霞生活には適當してゐる。それには持つて來いの名山であるが、游歷者に便利な文化設備の點になると、そは全然出來てゐない。寧ろ泰山は

どちらかと云ふと、交通の便は悪い方で、國際人を惹きつけるだけの設備に乏しい。廬の泰安にも、頂にも、それだけの用意が出來てゐない。

南方の支那は、局面のひろいだけ、色々とある。浙江に莫干山があり、河南の湖北境に鷄公山があり、隨所に避暑地の有名なものが見出されるのであるが、何んといつてもこの廬山にかなふ避暑地は求められない。從つて、長江流域二千哩の各省各地に活躍する內地人は、殆んどその一流所の階級のものを、山巓の牧嶺の樂土にひきよせてゐる。宛ら今や亞細亞第一の國際公園としての條件を具備したものと、折り紙をつけられた。かくして廬山は、外客、觀光客の、夏に冬にと、四季折りをりに登り來る者が益々多きを加へるに至つた。又これを當て込んだ轎子の公館も次第に殖えた。今後の廬山の發展振りは、刮目して見るべきものがあるであらう。尤もその中には、餘りたちのよくない雲助もゐて、隨分南口に、北に、又虎溪橋あたりにと出かける游客を待ちかまへ、裸にすると云つた惡戲をするものも見ないではないが、元來老虎の棲まふもの多きひと里離れた幽境のことゝて、雲助の出沒、被害くらゐは、又止むを得ない。

雲霞に閉ざされてゐる祕境には、太古ながらの趣きを名殘りに、雲助や仙人道士のゐることは、亂暴な言葉のやうであるが、却つて廬山の眞面目を失はない重要點であると强調しておきたい位である。

この山が既に獨立した一團の山彙であつて、峯深く、幽居の別天地をなしてゐる。夏の涼、秋の月、冬の雲、春の杏花、何れも見ごたへのするものばかりである。詩人文人には、殊に受ける山であり、その都塵のうちにありて、日常の些事に携はるものにとつても、確かに頭の轉換になるところである。古くは唐の頃の李白、白樂天を始め、近來は日本の畫伯連、竹內栖鳳、小室翠雲たちを始め、大分これに向ふやうになり、又日本の僧侶達も、年一年とこゝに游ぶ者の殖えたことは喜ばしい。

長江を上る四百哩、江上の帆影を山上よりこれを望めば、黃流の帶水にわづかに點々として指顧せられる程度である。しかし何にしても、長江の眺めと鄱陽湖の水景、その他四周の展望は、限りなく求められ、誠に中原第一の國際公園としての自然の條件が、具備されてゐるといへる。

日本人の持つ別莊、並びにその附屬地は、牯嶺の各所にあり、狹小の地を占めて、之に日の丸の國旗が飜つてはゐるが、尙外人達の間に伍してやゝ壓せられるの慨がある。兎角又その邊に根强い所の足りないせいか、漢口を辭令の紙一枚で他へ赴任することにでもなると、同時に後は、折角の別莊も何も、空家同然となると云ふ物淋しさを見せてゐる。日本の須磨、舞子、箱根、叡山あたりに別莊を持つ富豪は、この浩然の氣漲る廬山の頂に、第二の別莊をなりと設けおき、その時折り國際避暑生活

には家族連れで行つて見ようといふ朗らかな勇氣は出ないものか。上海の地に、廬山の頂に、底力ある日本人の根のおり方の足らず、又その飛躍ぶりの香ばしくないのは、一つにその國際競爭に於て、何處となく人後に落ちてゐるの感なき能はずであるといひたい。

江西省の重要性

さしもに名所舊蹟の多いことや、共産モダン式の面目の躍り出づる江西省は、人口、二千五百萬にあまり、支那の新興國家として、實に重要な中心地點の一つを形づくつてゐる。といふのは、西に湖南、湖北の富庫を控へ、東に安徽、江浙、福建の要省を持ち、省内には、中支に於ける石炭の山として隨一の萍鄉坑を有してゐる。殊にこの萍鄉は大冶の鐵山、漢陽の製鐵所と共に、民國がその最も國防上重要視してゐる所謂漢冶萍煤鐵廠の所轄に屬し、列國も鋭い眼で常にこれを見てゐる。

萍鄉は鐵路によつて、湖南、長沙をさして、交通運輸の道も開け、省内西部地方の重要な地點となつてゐる、又南の方贛州は、廣東に通ずる重要な都城として知られてゐる。その他、南昌、建昌、德安など、何れも兵亂時に際し、常に新聞紙上で現はれ來る所、又東部福建さかひの武夷山（武夷山）は、茶の名産地としてこれまたよく聞こえてゐる。

最近に至り江西省の田舍は、社會上ゆゝしき異狀の動きかたを示して來た。と云ふのは、所謂赤軍と稱する露西亞式共産黨の赤衞軍が隨所々々に蜂起し、或はソビエツト政府と連絡をとり、又赤旗を揭げて、隱然こゝに勢力を張り、中央政府の命を始めから眼中におかず、その社會的組織を全然異にして、生活集團を營んでゐるものが殖えて來た。殊に又それが赤匪とぐるになつて、その勢力ますます猖獗を極め、南京政府が幾度か討伐隊をつかはし、又蔣介石總司令自ら陣頭に立つて、之が遠征に從つて見たこと一再ならずであつたが、遂にこれ亦失敗に終つた。總司令自身の率ゆる兵士も、やゝもすると、その赤軍に鞍替へするものがあつたと傳へられてゐる。今や赤露の離れ島が支那江西省内に癌の如く生じて來たわけで、之がどうしても溶けないのは、中華民國將來のために、どんな運命を誘致するであらう。又如何なる局面を展開するであらう。速斷し難いものがある。しかし、支那のことだから、存外案ずるほどの事もなく、いつしか良民と赤軍、赤匪とが、互になじみ合ひ、よい加減の處で鳥がつくに至るかも知れぬ。

江西の奥地、片田舍の交通はかなり不便である。山寨による兵匪は、却つてこの險を安全地帶と頼み、土民に向ひ、共産氣分の宣傳で以て益〻陣頭を進め、勢力を張つてゐる。たとひ中央から討伐隊が數多の銃器彈藥を用意して深く這入つて來ても、何れも買收されたり、銃砲を金と交易したりして、

そのまゝ赤軍に鞍變へする者の續出見るなど、一向に根絶が出來ない。それのみか益〻火に油を注ぐ感さへある。これが江西省奥地に見る近頃の眞面目であつて、陶淵明が千六百年の昔、「田園まさに荒れなんとす」と風懐を述べてゐたのも、今日の荒廢狀態に併せ考へて見て、今昔の感に堪えないものがある。事實邊りの農民が、もしその一家族の喰ふ以上の收穫でも得るとすれば、忽ちこれが沒收の憂目を見るといふ如き有樣であるから、耕農のことなどに田夫たちの力を用ひなくなるのは、寧ろ當然のことである。その卷揚げたものはどうなるかと云ふと、赤匪の頭目有力者の間で、事實は私されてゐるのだとのことである。かう云つた氣の毒な田夫百姓達の呻吟してゐる省は獨りこの江西省ばかりでなく、尚湖南に、又湖北に、福建にと、大分廣い範圍に渡つて蔓延しつゝある。支那現時の惡政を、これが正眞に物語つてゐると云ふことは、民國の爲めに裏心歎息せざるを得ないのである。

湖北省

武穴

漢口地方で、長江筋に名の知られた所は九江の對岸武穴（ウーシュエ）を始めとし、大抵の湖北東寄りのところに多くかたまつてゐる。

武穴は、今は麻の荷物が澤山出る所としてひろく知れ渡り、例の九江産と云はるゝ洒した純白の夏布（シヤー）、並にその原料がどつさり出てゐる。その外尚注意すべきは、殆んど日本全國にひろがつてゐる蚊帳、又は海岸で用ひられてる處の漁網の原料がこゝで供給されてゐる。そんな譯であるから、武穴の地は日本とは切るに切られない特別の關係を持つてゐる。

幾千噸の麻の荷物を滿載して船が神戸に入港するのを見るが、そは何れもこの武穴から來た荷物船である。毎航殘らず、神戸の支那商人福和成その外の手によつて、日本の工業家の手にそれが渡る。九江麻の名前で、日本に又支那四百餘州に呼ばれてゐる各種類の麻は、恐らく皆この武穴から出るものであると見ておいてもよい位である。こは臺灣産のそれに較べて、品は多少落ちるが、量が多く又價が安いので、前途益〻有望視せられてゐるのである。

又武穴の地は、中原の地に昔から鳴り渡る苦力の親方、義俠的人物などを常に輩出してゐる所である。その爲め武穴（ウーシュエ）と云ふと、勞働者間には殊になつかしく感ぜられてゐる。今も尚青幇（チンパン）、紅幇（ホンパン）などとと云へる親方を出してゐるが、遠く二千年の昔、秦の世が亂れ、漢の二世の後天下麻の如くなり、漢の天下の興らんとするに當り、その風雲に乘じ先づ中原に兵を擧げ、天下に名乘りをあげたと云ふ痛快

な男は陳勝、吳興の兩人であつた。この兩人は卽ちこの地の生み出した一種の傑物である。地の利がよかつたところもあらうが、しかし元來かゝる風雲兒を出すやうな土地柄に出來てゐたことも考へに入れなくてはならぬのである。

九江から船で江邊の蘆原を見て上ることしばらく、田家鎭と云ふがある。この水鄕は要害第一の所とあつて、江岸の岡の上に砲臺が築かれ、崖壁には磨崖文字「重鎭鎭海」の四大字が刻まれてゐるのを見る。新綠の楊柳の間に遊ぶ水牛の群れ、牧童の笛を手にして春を惜しむ水鄕の眺めなど、そゞろに唐人の風懷を思はしめるものがある。このあたりの詩趣は唐代も今も殆んど變りはないと云へる。

揚子江頭楊柳の春
楊花愁殺す江を渡るの人
一聲の羌笛亭を離るゝの晩
君は瀟湘に向ひ我れは秦に向はん

贈別　鄭谷

（揚子江頭楊柳春　楊花愁殺渡江人　一聲羌笛離亭晩　君向瀟湘我向秦）

邊りに聳ゆる牛邊山は長髮賊の亂のとき、匪賊が鐵鎖を渡し、江上をふさぎ、官軍の連絡を絶つて、大いに惱ましめた古戰場なのであるが、附近の水鄕は江道狹く、水田開け、楊柳の影淡く、そろそろ湖北らしい眺めとなつて來た。

その柔かい風景美に富んだ水鄕を遡ることしばし、黃石港の碼頭を南岸に見る。十九哩の奥地大冶の鐵山から鐵鑛を運んで來る鐵路がこゝに通じてゐるので、船舶の輻輳を見ることが多い。

大冶

大冶の鐵山は、その鑛脈が獅子山のほか三山に渡り、總面積は、日本の百平方里、その質また優秀にして、每年百万噸宛掘續けて行つても、尙今後五百年を支へ得るといふことである。しかし專門家の調査によると、實際はもつと豐かな鑛脈を有してゐるものらしい。この無限の豐庫を採掘する鑛業と、その經營指導の上に、最も顯著な功績を殘された人は、工學博士西澤公雄氏であつて、そのいかに全支に渡る排日熱の極點に達した時でも、大冶の天地ばかりは、和風鑛原に漲り、春の氣がしてゐたのであつた。民情の機微をしかと摑み、從業者工人達の心持にぴつたり合したコツを摑み、苦勞を共にしてゐさへすれば、三十有餘年の長き歲月も和氣靄々裏に、夏の短夜をかこつの感あらしむる如きものである。

赤壁

黄石港から遡ること二十哩、北岸に黄州の舊城がある。城壁を繞らした水郷に古都を背景として、丘上高く、蘇東坡の祀堂を有する東坡寺がある。城壁の下、江岸に削りなす汀は、凡べてこれ酸化鐵を帶びた赤壁であつて、東坡が四十九歳の時、壬戌の秋、客と舟を泛べ、靜風徐ろ來つて水波起らずと、よい氣持ちになつて舟游を試みたあの古蹟はこの邊りであるであらう。しかしあの山高く月小と山水を語り、曹孟德の戰鬪振りを述べてゐる赤壁は、實はこゝではなく、更に上流の地百餘哩を隔てた嘉魚縣である。この事は特に注意を要する點である。赤壁の古戰場と、東坡の舟游地とは、地理上大變な隔たりを有してゐるわけだが、共に何れも湖北省内であることだけは間違ひない。

東坡寺の飛檐高く聳え、紅壁に照り返す夕映えの光りに、江坡も亦からくれなゐに、楊柳はうす綠に、誠にその色の取り合はせが麗はしい。全く繪の如き水景をなしてゐる。夏の增水期に見る眺めよりか、秋の末つ方に見る東坡寺の方が、古を偲ぶには趣きが深くてよい。寺内には古碑多く、珍らしい拓本なども藏がれてゐる。黄洲の域内は亦古色に富み、城壁の一角には、寂寥の氣が滿ち、あたりに人影を見ず、落莫、轉た詩人の心を痛ましむるものがある。

長江中流の水郷

漢口武昌に近づくに從ひ、江邊の水郷は益〻廣くなり、沼澤は一段と兩岸のあちこちにと多く見られる。澤國に大きい景趣を添へた江山の眺めは、一段又よくなつて、蘆荻を背景に、濁流に棹さす民船、汽輪の動きも繁くなり、何んとなく今は大都城の近づいて來たことが想像せられて來る。

古來幾千年戰場となつてゐた中原の本舞臺は、この武漢の天地を中心として旗揚げをした者が多く、英雄豪傑の風雲を卷起さんとする者は、獨り民國辛亥革命の時ばかりではない。兩岸に見ゆる柳塘の平和鄉にも、幾多の無辜の民を殺し、生民の犧牲を出してゐる者幾百萬あるか知れない。實に中原に一人の覇者が、決然起つて現はれるためには、如何ばかり慘憺たる血が流さるゝことであるか解らない。唐詩にもちやんとその事は吟じられてゐる。

澤國の江山戰圖に入る
生民何んのはかりごとか樵蘇を樂しまん
君によつて話すなかれ封侯のこと
一將功成り、萬骨枯る

已亥春

曹松

（澤國江山入戰圖　生民何計樂樵蘇　憑君莫話封侯事　一將功成萬骨枯）

江邊に劉家廟の街や、亞細亞石油、美孚の石油タンクなどを見て、愈〻船は漢口の租界に達し、碼頭に横着けせられる。

これは上海から水路長江を遡つた行程であるが、尚湖北の地はまた北の方、河南より南下して、陸路火車により、此の地へ來ることも出來る。それには、遠く北平より、七百五十哩と云ふ長い鐵路を經、二日半の日子を要するが、漢口は大智門（ターチーメン）の車站につくのである。この北から南へ、大陸を縱斷して飛ばして來るのも、大平野の地相や、風土の違ひが見られるので、これ亦變つた旅行の興味がそそられる。

この鐵路は以前は京漢線と呼ばれてゐたが、今は平漢線（北平漢口）と呼ばれてゐる。その間河北に、河南に、過ぎ來る主な車站を擧げて來ると、保定、石家莊、彰德と南下し、黃河を渡つて河南の鄭州に這入る。更に南しては偃城、信陽を經、鷄公山（チーコンシャン）を越え、武勝關に來たつて始めて湖北境に入る。さかひを過ぎ南すれば、孝感、劉家廟を廻つて、漢口大智門驛に着くのである。

○

漢口の地は、支那全省から見て、丁度本當の中心地點にあたり、南北は北平廣東を結びつくる線上の略ぼ中央に、又東西は上海成都を結びつける線上の約三分の一の所に位置を占めてゐる。一哩を隔つる對岸、武昌の都城と、漢水を隔てゝ對する漢陽の街と、三都鼎立の形をなしてゐる。そこでこの三都が一つに武漢三鎭の名でも呼ばれ、或は略して單に、武漢とも呼ばれてゐる。

奥地、河南方面の大自然の樣子を振り返つて見ると、あのあたり、河南平野に漲れる黃色の土の色は、土豪の住宅土壁にまでも窺はれてゐる。山にも河にも、又野にも家にもすべて黃色のみである。ところがそれが次第に湖北ざかひに近づいて來ると、綠色が加はり、潤色を增して來て信陽の都城あたりから著しく湖北の色彩を帶びてくる。

南に來れば、來るほど楊柳の影に水溜り、池沼の風致など伴ひ來たり、鷄公山が、漢口の內外人に夏の仙境として足を向けさせてゐるのも、この潤色のあることが大いに牽引力となつてゐる。

武勝關、孝感諸驛の名前は、武漢から兵を進めて、河南に、北平に廻はす時、いつも出て來る地名で、その動亂關係で、よく知れ渡つてゐる所である。宛らこれは南京から兵を北上せしめて、蚌埠（バンプー）、固鎭、宿縣の諸驛を過ぎ、徐州、濟南にと進むので、それらの地名のよく世人に親しまれてゐるのと似てゐる。

尙湖北の田舍で、漢水の上流、河南境に、襄陽（ジャンヤン）の都城がある。水路による陝西と、武漢の天地とを結びつけてゐる重要な街衢である。僻在はしてゐるが、湖北のうちでも一等河南の雰圍氣を多分に有してゐる一孤城である。

尙長江筋の上流、宜昌（イーチャン）と、沙市、監利（チェンリ）などのことについては後に長江を遡行するときに述べることとする。

漢口

漢口は、土民の間では汗口（ハンカオ）とも書かれてゐる。上海より海上五百九十五哩、南京より三百九十四哩、宜昌へは三百七十哩、重慶へは尙八百三十二哩の地點にある。人口約百五十萬、實にその全支にとりてこの漢口は北米に於けるシカゴにも較べられるべきところ、その商業上に、政治上に、天下の重鎭たる名に對して恥しくないところである。又大陸的氣候の上からいつても、夏の炎暑、百度を越すことは珍らしい方でなく、夜中黃包車（ワンパオツヱ）を駈つて、江岸バンドを走り、夜明かしをする在留民もある位である。

漢口の街で見るべきものは、日本租界の領事館、銀行、會社、日本人俱樂部、小學校、本願寺などのほかに擴張租界、又東亞同文書院の經營にある江漢高級中學校などがある。この中學は郊外にあるが、一遊の價値があり、又銀行の中には正金銀行がある。その社宅の堂々振りは、他のビルディングの群を抜き、江岸に聳ゆる洋館のモデルともなつてゐる位である。日本在留民の社宅として國際的にこれ位のものを有することは當然のことであるが、人と建物の釣り合ひの取れてゐないことのないやうにしたいものである。旅館には、今は松廼屋旅館があつて、古くから日本客の親しみが之に集まつてゐる。又上述の江漢高級中學校は、支那學生專門の爲めの教化事業がこゝに營まれ、文化事業の實績見るべきものがある。云ふまでもなく、これは同仁會の病院經營と共に、かくれたる親善の實を擧げてゐること夥しいものがある。

○

尙租界地が、その江岸に沿うて、長く、その道路に、建築に、下水にと、あらゆる文化設備を比較的完全に整へ、又江上には軍艦を常時碇泊せしめ、在留民の治安維持に努めてゐる。舊露西亞租界を始め、英租界なども、碼頭に接して榮えてゐた時代もあつたが、今や何れも支那側に回收せられ、夙に特別區域のうちに繰入れられ、武漢政府時代以前までは、英國は稅關の空高く、その國旗を飜へしてゐたが、今はそれも下ろされ、青天白日旗がこれに代つて掲げられてゐる。

しかし、江岸バンドの路上に見る綠の並木から、郊外のレース倶樂部、競馬場の清趣あたりは、何んといつても、各國居留民をなつかしがらせる賜物だけあつて、實にありし當時の文化の恩澤を示してゐる。又日本の擴張租界には平素武昌漢口城内に排日の急先鋒として鳴つてゐた手合どもにしても、その御都合次第で以て、日本の秩序維持を德となし、これを唯一の安全地帶とばかり、續々移り來つて此に住宅を新築し、生命財産の安固を計らうとするなど、支那人側に盛んに利用せられてゐる。先づかうしてゐるのもよからうと租界回收の熱の高い折柄、こゝには皮肉な現象が濃厚に見られるのであるが、支那人のことだから一向その邊は頓着なしである。

漢口は租界跡の多い爲めに、中部支那に於ける上海に次いでの文化都市の面目を備へるに至つた。從つて路面の完備、競馬場の美觀など、上海市中に匹敵するものが數々ある。近年支那側は頭を次第にもたげて來て、英吉利の如きは、共産、童子軍のためにまんまと輕く舐められ、時の英吉利領事は軍艦へ避難したきり、事務所も何もかも、みな取られてしまつたといふ恰好になつた。

今日嚴然と、租界の面目をちやんと保つてゐるのは、日本租界一つあるのみであつて、佛蘭西は何なら返してもよいと云つた判つきりしない態度である。

漢口は時折り大洪水の氾濫に見舞はれ、市中、住宅は床を浸し、軒を沒すると云ふ所まで來る。地下室なんかも殆んどその用をなさない場合が多い。そのために租界はもとより、城内の方面各地も、慘憺たる光景を呈することがある。漢水の上手に張之洞總督の堤防が築かれて、その被害はいくらか輕減せられるに至つたが、それすらまゝ決潰する場合がある。

○

漢口生活はこの水害と、排外の二つで以つて脅やかされ、日本人の在留民たちは之を二大災厄であると云つてゐる。しかし上海とは違つて、街の空氣は穩かであり、平和な親しみの氣分があの落着きのある天地にまじり、どことなく懷かしい氣持がする。若しそれ北支那の旅から、河南の乾燥地帶を經て來た目で以て、この漢口に南下し、こゝに始めて長江の大景に接して見る時には、その潤ひのいかにも豐かに、且つその滾々として盡きない江流の動きを見、風光又一新の趣を文字通りに味はしめる。それ故、上海から溯つて、漢口に着いた時の旅客の感じよりも、北平から火車で南下してこれに着いた時の感じの方が、どちらかと云ふと、遙かに目を喜ばしむるものが多い。

○

中部支那の奥地を旅せんとする者は、先づ漢口を足どまりとする。そして纏つた旅費は漢口の正金銀行へなりどこへなり、信用狀を豫め組み置くことが肝腎である。或は湖南に、又四川に、河南にと

旅程の進むに従つて所要額だけ小出しにして夫々その行先地の通貨に替へて携帯して行くことにしたがよろしい。

しかし大金を身につけることは前にも云つたやうに、危險を呼ぶ譯になる。事實又これらの奥地に這入る旅は、經費のかゝらないこと夥しく、全くかねの使ひやうもないのであるから、極めて少額の旅費で濟む。その方が却つて收穫の多い旅が出來るわけにもなる。

漢口を中心とした奥地の旅は、日清汽船の手を煩はすこと多く、湖南線では長沙（チャンシャ）、湘潭（シヤンタン）に、又常徳（チャンテ）にと出かけられ、或は奥へ四川宜儀線をとるとすれば、漢口から宜昌に、それから先きは、萬縣、重慶へと進まれる。そのかみ叙州までも一時は上游航路を延ばしてゐたこともあつた。

それぞれ皆政府補助の下に之が續行せられてゐる。日清汽船は、何にせよ、漢口以上の奥地となると、その名前がきけたものである。日清公司といへば誰人も知らぬ者はない。宜昌にしろ、沙市にしろ、又長沙にしろ、殆んどその地方に於ける日本在留民といへば、先づ日清汽船關係者がその大部分を占めてゐるといつても差支へない位である。又漢口には日本棉花、東洋棉花などの棉業を中心に活躍せる邦人が多く、これは奥地との商取引に於て、莫大なるものがある。將來日本人の經濟進展は、兎にも角にも、この漢口を中心に、四方に放射狀に出なければ嘘である。租界では福見屋その他、かくれ屋などの紅燈街もないではないが、それらは陸戰隊の增減によつて、その景氣に消長を示してゐる。又租界の外れにある草花屋は、在留民の訪問客の手土産に又部屋飾りなどの爲めに、來たり求むる者多く、その客の足の繁々しいところに一異彩を放つてゐる。

漢口の旅を試むる者は、同地方に於ける日本人の共喰的生活ばかりでなく、凡べて支那住民を相手としての經濟活動に向つて考へねばならぬ。今後、その如何にして日本人は伸ぶべきか、又如何にして和平の氣分で以て、手を握り得べきか。心あるものは、これらの根本問題について、特に思ひを致す所がなくては意味をなさないのである。

○

若しそれ漢口は城内に這入つて、その本當の支那氣分を味はうとするには、舊英租界に隣接してゐる太平街（タイピンガイ）を通り抜け、それから左に折れ、夫々賑かな夜の巷に足を踏込むならば、かなり興味の多い所もある。支那菜館で日本人に親しみをもつてゐるのは、さうその深く這入らなくとも、大抵太平街の横町、翼江樓（イーチャンロウ）とか又その附近にある數軒でも用が足りる。そこには湖北料理の五味八珍が、漢口の氣分を感ぜしめてゐる。

城内の目抜きは上海の城内ほど、騒がしさを見せてはゐないが、さすがに民國のシカゴと云はれる

だけに、商家、錢莊、酒樓などの大廈高樓が櫛比し、城内碼頭邊りの肩摩轂擊の樣子と云つたら、大したものである。租界地に見る一碼頭から、六碼頭あたりまでのやうに、大船はこゝに横づけされてゐないけれ共、民船の輻湊することは、前に漢水の水鄉を控へてゐるだけに、宇内第一の輻輳振りを呈してゐる。その眺めは、全く陸上の漢口か、水上の漢口かと疑はしむるの感がある。

○

漢口に上る日本の客は、長江を去來する日清公司の黄色の船體に、船名を示す黒の大字を見るのが何よりも懐かしい。最近に出來た「洛陽」の優秀船を始め、「鳳陽」「南陽」「襄陽」「岳陽」「瑞陽」（以上を陽型の船といふ）「大福」（この船に限りダブルベツトの設備がある）「大貞」「大利」がある。以上を上海漢口線に見る定期の輪船となす。又「大吉」「大亨」「信陽」「當陽」は漢口宜昌線に、また「雲陽」「長陽」「宜陽」は宜昌重慶線即ち宜渝線に之を見、又「涪陵」「嘉陵」を重慶叙州線（瀘賓線）に、それから湖南洞庭航路では、「武陵」「沅江」を漢口湘潭線に、又「湘江」を漢口常德線に見ると云つた有樣である。

これら二十杯からの輪船のうちには、既に老朽船價を償却して只になつてゐるものも何杯かあり、又「洛陽」の如き、噸數の四千噸からあるものもあり、設備の點も英國船、「怡和」「公和」などと伯仲の間にあるもので、最近疊付き日本座敷の設備までをも加へられ、乘心地よき河船として日本内地人を一人でも多く乘せて見たいくらゐに思はれるのである。

思ふに長江は例の騒ぎだになければ、日本人の内航業も年一年と進展を見るべきであるが、事實は、一進一退、なかなかまゝならぬ實狀にある。この間にあつて、これまで知る人ぞ知る買辦（コンプラドール）の王一亭翁の風格と、その犧牲的苦闘振りは、大いに多としなければならぬものがある。又乘り組の支那人側には、その又いかにも從順にして愛すべきものが少くない。漢口に旅立たんとする者は、特にこれら輪船について豫め何んらかの知識と同情の氣持ちを持たれてほしいと思ふ。

日清汽船の、江上の風に翻る船旗には、赤筋が横に四本這入つてゐる。英國の船旗ユニオンジヤツクや、民國の青天白日旗などに對して、確かに日清の旗は異彩を放つてゐる。もとこれは湖南汽船、大東汽船、郵船、商船の四會社の合同した印を物語るものであつて、明治四十年に、このマークが定められた。そのうちでも、大東汽船は、上海を起點として、杭州、蘇州、鎮江の間に、又大阪商船は上海漢口の間に、又宜昌線にも、航路を開いてゐた。そは丁度思ひ返すと、明治三十年前後のことであつた。續いて湖南汽船が、長沙に航路を開いたのは、明治三十五年で、その翌年、郵船が上海

漢口線を開くと云つた風で、日本の汽船業者にして、その支那内航の開發に苦心努力する所は、甚だ少くなかつた。四者の合同せられた後、四川の奥地に、航路を延ばしたのは大正十一年であつた。これは日本人では別に天華洋行の四川航路を開いてゐるのがあり、それに刺戟を得て日清も始めることになつた譯である。

長江の内航はかく各國鋭意之に努め、中にも英佛の競爭船を突破して、日本は今や牢として拔くべからざる實力を長江に有するに至つた。又面白いことは、いざといふ時には、日清の船で、支那大官の亡命客その他が、その生命財産を心安らかに托して、下航すると云ふやうな便宜を得ることもあるのである。

○

日本の政府は長江の内航始め、沿岸各線を有する日清汽船に年額を定め、各航路に補助を與へてゐる。乘組各位も尊き犧牲的精神から、この第一戰に日夜身を洒し、長江の濁流を我が天地とばかり、活躍を續けてゐる。年々歲々眺めも變らぬ江邊の楊柳と、水牛の群などを友とし、江上の月に霜鬢の白くなるのをも知らぬといふ位に努めてゐる。その常に土匪に、海賊に、又排日排貨にと、荒ら浪な らぬ荒ら浪と一と通りならぬ苦闘を續けて、その航路に從事してゐる社員乘組みたちに對しては日本内地にゐる國民一般は同情の念を禁じ得ないものがあるのである。

漢陽

漢陽（カンヤン）は、漢水を隔てゝ漢口と對ひあつて居り、又長江を隔てゝ、武昌の古城と相對してゐる。三都鼎立、武漢三鎭の鍵を握り、殊に例の漢冶萍（カンヤピン）の大會社の製鐵工場がこゝに在るので、支那四百餘州の覇を事實上握つてゐるわけである。工廠の黒煙天に漲り、その壯觀云はん方なく、天下に志を得んとする野心家の胸を常に躍らせてゐるものがある。日本人の事業としては、こゝに泰安紡績のあることは世人の知るところである。

漢陽の存在は、街の住民大衆をもとにして考へなければ意味をなさぬ。その點からいつて、漢水の水上生活を營める住民は南支、廣東の蛋民三十萬を越えること幾倍なるかを知らないと云つた程に澤山ゐる。

○

漢水はあの幅の廣い又奥の深い水鄕にもつて來て、小蒸汽一杯通る道も搜しにくい位ぎつしりと、幾萬の大船小船が舷々相摩して繋がれ、丸で船の一大水上都市がつくられてゐる形である。否、四川

から、湖南湖北から、下游から、殆んど中部支那に見る江湖のあらゆる所から夫々特色のある種々雑多の民船がこれに蝟集してゐるのである。新造あり、老廃あり、その色も、黄、黒、灰、茶、緑、など千變萬化の妙を極め、荷船があり、樓船があり、划子があり、漁船あり、渡船あり、そして住民はそのあらゆる職業を、船上で營み、豆腐を賣り呼ぶ船があり、肉を賣る船もあり、麺を賣るものもある。その呼び聲の波上を渡る響は、何となく雅である。

水郷には船から釣瓶で、水を汲んでゐる者、米のとぎ汁を流してゐる者、洗濯をする者、小便をする者、凡べての生活の實相がそのまゝ、前後左右に見られてゐる。しかも叫ぶ聲、語る聲、笑ふ聲などがその櫓を漕ぐ音と交りなどして、その織りなす騒がしき雑音が又一種云ふべからざるこの水郷の面影を見せてゐる。水上には、半ば沈沒せる船があり、覆つて船腹を水上に見せてゐるものもあり、時には民船の舳と舳との間に挟まれて、船頭同士争を始めてゐる場合も見える。

漢水は、長江の支流をなせるところとして、此の漢陽の如きところは他に見ない。又支那全體を通じてこの漢陽ぐらゐ、船の博覽會氣分を見せてゐる所も見出されない。恐らくこゝは水上の衛生だとか、水郷の教育だとか、警備だとか云ふ點は殆んど考へられてもゐないらしい。唯わづかに最近は、公安局から税金の取立て關係で、毎船、番號札の青天白日のマークの這入つたのを船側に貼られてゐるのを見る位のものである。船上生活者は陸に上つても、をかの都會生活に關心を持つの必要もなく、勿論、火車の便にたよるなど云ふ必要も全くない。いつ何時でも船はお手のものだから、思ふ所へ漕ぎ出づることが出來るのである。その點は陸の民よりも、遙かに水上の方が自由な天地を有してゐる。

陸上のものは陸で六十年來の大水害があつたとて昨年も大分慘じめさに惱んでゐたが、その矢先き船の手合は、悠々月を眺め、釣を垂るゝのゆとりを示してゐるのである。海賊の患ひくらゐは仕方が

○

實に漢水の水郷は、陸上の城内生活と、趣きを同うする窮屈さを感じさせてゐる。見るからに四五百噸級の三峽の大船など、時勢の流れから彈き出され、よい買ひ手さへあれば賣り飛ばし、金にして歸らうなど考へてゐる者もあると傳へられてゐる。

水の都そのものが、大マーケットの觀をなせるところとして、此の漢陽の如きところは他に見ない。又支那全體を通じてこの漢陽ぐらゐ、船の博覽會氣分を見せてゐる所も見出されない。恐らくこゝは水上の衛生だとか、水郷の教育だとか、警備だとか云ふ點は殆んど考へられてもゐないらしい。唯わづかに最近は、公安局から税金の取立て關係で、毎船、番號札の青天白日のマークの這入つたのを船側に貼られてゐるのを見る位のものである。船上生活者は陸に上つても、をかの都會生活に關心を持つの必要もなく、勿論、火車の便にたよるなど云ふ必要も全くない。いつ何時でも船はお手のものだから、思ふ所へ漕ぎ出づることが出來るのである。その點は陸の民よりも、遙かに水上の方が自由な天地を有してゐる。

陸上のものは陸で六十年來の大水害があつたとて昨年も大分慘じめさに惱んでゐたが、その矢先き船の手合は、悠々月を眺め、釣を垂るゝのゆとりを示してゐるのである。海賊の患ひくらゐは仕方が

ないとしても、年が年中、子々孫々も、この水郷生活をなし續け得られるとは、一面から見て、樂天的氣分が養はるゝわけである。文獻に徵して見ても、昔しから、南方の民が、比較的自由なる人生觀を抱き老莊氣分を味つてゐると云つたものの多いのも、全くこの邊に、深き深き根據のあつて、その環境から養はれてゐることが判る。この意味に於て武漢の天地に游べば、一種獨特の水の都の實地見學が出來るわけであるといへる。

○

漢陽は名所舊蹟が多い。そのうち唐の時代に「芳草萋々鸚鵡洲」と呼ばれたあの鸚鵡洲は、漢水と反對の側の長江江邊にあり、今は楊柳の蔭くらゐはないでもないが、アンペラ屋根の筏上の民の群居してゐる所である。そこには大筏、小筏が、幾萬となく岸に横づけせられ、材木、丸太、青竹などの江岸一帶に立てかけられてゐる光景は、宛ら東京深川邊りの木場を幾千倍かしたくらゐのものがある。奥地の湖江から流して來る筏の數々は、何れも先づ一旦、この鸚鵡洲に繫留せられる。長江筋を見渡して見て、こゝ位叉材木の集つてゐる所は見ない。宛ら筏の水上都市を形づくつてゐるかの觀がある。

○

唐代の名所舊蹟のうち、最もその名高い晴川閣は、江岸の大別山下、起重機の裝置のある場所に近く江に臨んで仰ぎ見られてゐる。晴川閣下の奇岩、煙波石と云ふものと共に、詩人の心をひどく喜ばしむる隨一の古建築である。今日見る樓閣は明代の知府（知事）范之箴の建造にかゝるものであると云はれてゐるが、如何にも軒傾き哀れを催させる詩景に富んでゐる。晴川閣は漢陽の柳と共に、詩に吟はれ、一層これが有名となつた。その詩は後に黄鶴樓の所で述べることとする。

大別山は、全山芝生の山で、山上一木を見ない。頂上にある禹王廟は太古、大氾濫を治めた治水の神、大禹を祀つた祠堂である。今尚、その地方の水害連年頻々なるが爲めに、之を訪ぬる參詣者は絶えない。しかし動亂のある毎に、武漢の兵隊が、これを占領し、寺男どもを追ひ出し、我が物顔に之に侵入し、日向ぼつこなどしてゐるところを見る。

大別山を背景に晴川閣の古樓を取り入れた水景は、武漢第一の眺めであつて、唐詩を口誦む古風な游客は之に見惚れてゐて、足が進まない位のところである。今は晴川閣もその床下に河原乞食などが巢をつくり、減水期の時分の景色など、見る人によつては、殺風景を極むなどと評してゐるもあり、樓に登り床板でも踏めば、板は外れて誤つて落ちるかと思はれる位大半壞れかゝつてゐる。大風の江上に吹き卷くる時などは、最早や古屋根扁額は飛び去らんかと心配される位である。全く國亡びて晴

川閣ありの感のする所である。

大別山北麓の漢陽鐵廠が、黒煙濛々空を鎖ぢこめてゐるに較べて晴川閣から西麓の古琴臺、月湖の邊りの方の眺めはどうかと云ふと、こは全然別天地の趣きがあり、長江濁流の大を控へて天下無二の大陸光景を見せてゐるのである。

西麓、蓮華の香の芳ばしき月湖に臨む古琴臺は、一名伯牙臺ともいひ、古來桃花・流水に、又春風、秋月に、都人士の好んで來り遊ぶところ、こゝに來たつて彈琴の宴を開くものもあるので、全く仙境の思ひがする。

近來これを利用する紳士淑女が多く、昨今、飛檐、新たに成り、面目を一新した。が月湖の一隅に鐵廠から石炭の焚いた滓を運び來たり、年一年とその美しき蓮池を埋めて行つたのは、何んたる憎むべき事か。埋立工事など處もあらうに、心なきいやな業であるかなと思はれたのである。

○

漢陽は古琴臺から、西門橋の、池畔に沿うて行き、武漢第一の禪寺、歸元寺まで出かくる。山門のところまでも、土地の名物、乞食の群が旅客の轎子を目がけて盛にたかりついて來る。試みにその中の一人に銅幣（トンペイ）の一枚も投げてやらうものなら、忽ち數十人の河原乞食が襲ひ來たる。笑顏をつくり、

垢の染つた手をさしのべるのである。やるまじきものは歸元寺詣での喜捨の一錢である。若し喜捨してやりたいならば、そこらの叢か又は田圃の中へでも七八枚もばら投げすべきである。それを拾ひさがしてゐる光景を見ながら、轎夫の脚を急がせ一目散に逃げるやうに行くのである。それでもまだ追駈けてどこまでもついて來る。おしまひには、路上の石に首を打當て、流るゝ血を見せては、更に今一錢をくれといふ。その邊のねばり強さは、北平萬壽山街道に見る田舍乞食よりも、遙かに上は手である。大抵の參詣人は、道々之に邀撃されて乞食の軍にまゐらされる樣子である。

歸元寺は、門前の白壁にある南無阿彌陀佛の墨書鮮かに、境内の堂塔伽藍は、實に整備したものである。善男善女の參詣、外人客の來り拜する者あとを絶たず。中にも五百羅漢は、その現存する者のうちに元代マルコポーロの紅毛マント姿などのものもあり、金色燦爛、堂々たるものがある。唯如何せん、餘りに堂内の香の煙が濛々渦巻きくすぶり、兩眼を開いて正視することが困難なほどであり、呼吸の咽ぶことすらもあるのである。現在は禪僧四百名に餘り、方丈、客堂、炊事場など、その規模の大きい事は、この地方でも珍らしい方である。庭前の池畔、楊樹の蔭に逍遙せる僧侶の姿は、何處となく枯淡の趣きもあり、寺を背景とした野草の眺めと共に氣分が伸びやかに感ぜられるのである。

武昌

漢口の碼頭から流れの速い長江を渡る一哩、船は對岸、武昌の碼頭に着く。武昌は人も知る如く、天下要害の地で、三鎭中最も重きをなすところ、古來天下に覇を稱へんとする俊豪、野心家も一度は必ずこの武昌、黄鶴樓跡に登り、中原鹿を追ふの肚をきめる。實に宇内の地勢を前後に控へ、天下屈竟の好位置を占めてゐる。古から武昌の地勢は聯句に述べられてゐて、

山勢西分巫峽雨
江流東壓海門潮

といつてゐる。誠にうまい。西に分つ巫峽の雨もよいが、東に壓す海門の潮もよい。又更に語を變へて

煙雨湖山六朝夢
英雄兒女一秤棋

と煙雨湖山を夢に見立て、英雄兒女を將棋に見立てゝゐるのも面白い。實に高所大所から見た武昌の天地、又野心勃々たる英雄も子供扱ひにしてゐる所が、遺憾なく見えてゐる。

武昌の天地で見るべきものは先づ黄鶴樓の跡、奥略樓のあるところである。それから蛇山の眺め、張之洞の抱氷堂、少し離れては、洪山、寶通寺の高塔、それから城内武昌、國立大學あたりである。その他城外湖畔の春色も見るべき所が多い。殊にこれらのうちでも黄鶴樓が第一である。樓は省城の西北隅にあつて、長江を隔てゝ漢陽、大別山と相對し、その眺めは、雄渾壯絶、遙かに、河南、安徽、湖南の空から、地平線上、雲煙模糊の間にぼんやりと見渡さるゝ中原の眺め。これらは恐らく武昌第一の眺望である。この地もと黄鶴樓のあり、樓の高さ、百八十餘尺。八面形の藝術を凝らした一大玉樓が聳立してゐて、武漢の大空に呼び物として、壯觀をなしてゐるのであつた。然るに清朝、長髪賊の亂に惜しいことにすつかり兵燹にかゝり、空しく炎上してしまつた。今は唯その頂にあつた擬寶珠の五尺大の銅塊がその場所に落ちてゐるのが見え、その當時の面影を淋しく物語つてゐるだけのことで外に遺つてゐるものはない。その後方に奥略樓と云つて、三層樓の新しいのが建ち、游客風人を呼んでゐる。樓上の眺望の壯大なることはいふ迄もなく、熱茶、點心を出して客をもてなし、身心を打ちくつろがしめ、賃貸しの遠眼鏡で以て、兩湖の天地を見廻して見るなど惡くはない。けれ共古の黄鶴樓の美且つ麗なるに思ひ較べて、物足りない事夥しい。

土民の語り傳へる所によれば、この地、黄鶴樓の傳説稗史については面白いことが傳へられてゐ

る。序でながらこゝにその要點を紹介して見る。

○

昔し武昌の地に、辛某といふ老人の酒樓を營んでゐる者があつた。或る日のこと、貧民體の襤褸を纏た老書生が舞込んで來た。そして「どうか一杯飲ましてくれませんか、懷ろには何んの持合せもないのですが」といつた。所が、老主はいやな顏をするどころか、同情の餘り、これをいと待遇し、乾杯又乾杯までして歡待に努めた。傾け終ると云ふと、その客は、飄々乎として去つてしまつた。するとその翌又訪ねて見える。かやうにしてその後、毎日、例の通り續けてゐたのであつた。

すると、或る日のこと、その客が主人に向つて云ふことに、「平素お世話になりつばなしで相濟まないから、何か御好意に酬ひたいと思つてゐるのですが、一文なしのもので、何とも方法が立たない。けれ共私の腰にさげてゐる籃の中に、蜜柑や橘の皮があるから、これで今こゝで何か繪でも一枚書いておあげしませうよ」といつて壁に鶴の繪を一羽すらすらと描いた。そして、繪を見ながら、客は手拍子を打ち唄を歌ひ始める。すると壁の鶴は、生きた鶴のやうに、脚を上げ、翼を動かし出して唄に合せ、舞ひ踊るのである。歌ひ終つて、客は改まり、「實は私の名は費文禕といふ者であるが」といひ終らぬうちに何處へか立ち去つてしまつた。その後音沙汰なしで、一向に姿を見せなかつた。しかし噂はぱつとそこで擴がり、見に來る客は毎日大變多くなり、千客萬來の盛況を呈した。その後十年立たぬうちに、酒樓はおかげで、巨萬の富が出來た。これも全く費先生のお蔭さまと、內心深く思ひ、感謝してゐた。時折り思ひ出さないこともありして、長い年月には忘れてしまつてゐた。所がひよつくり或る日のこと、先生が店へ姿を現はして來られた。そこで「實はお蔭で」かくかくと禮を述べ、且つ酒を勸めて、乾杯をした。「お蔭でこゝまでになりましたから、若しお望みでもあれば、如何なることでも致しますから」と口を切る。すると、先生、靜かに笑つて「どうしてお禮などには及ばない。」といひ乍ら腰にさしてゐた一管の玉笛を取出し、之を吹き始めた。すると白雲が大空から下つて來て、壁に描いてあつた黃色い鶴は飛び來たり、先生の前にとまつた。先生はこれにまたがり、雲に乘つて、すうと姿を天の彼方に消してしまはれた。樓主は感慨無量なるものがあり、こゝにその思ひ出として、高樓の立派なのを建築した。そしてこれに題字して、黃鶴樓と呼ぶに至つたのである。

この話は、有名な黃鶴樓の詩の生み出した傳說の一端である。がこれを見て黃鶴樓の古い形が思ひ出され、又その詩を讀んで見れば、一段の趣きの思ひ浮ばれて來る。その詩と云ふはかうである。

昔人すでに白雲に乘つて去る

この地空しく餘す黄鶴樓
黄鶴一たび去つてまた返らず
白雲千載空しく悠悠
晴川歴々たり漢陽の樹
芳草萋萋たり鸚鵡洲
日は暮る〻郷關何れの所か是なる
煙波江上人をして愁へしむ

黄鶴樓　崔顥

昔人已乘白雲去　此地空餘黄鶴樓　黄鶴一去不復返　白雲千載空悠悠　晴川歴々漢陽樹
芳草萋々鸚鵡洲　日暮郷關何處是　煙波江上使人愁

○

黄鶴樓跡の現狀は、殆んど軒並み茶館と、照像館（寫眞屋）とであつて、その路傍には石の棒が數多立ち、これに「諸惡淫爲第一」といへる警しめの言葉を掲げてゐる。定めしこの邊りは、あいまい屋が多く、淫を戒ぐ手合の集つてゐる所でもあらう。始めて來た客は、うろ〳〵してゐると、天下の眺め所どころではなくなり、とんだ目に遭ふのである。石段を下り、江岸城壁の上に出ると、あのすつきりとした白玉塔の清趣が觀賞せられる。漢口から、江を渡つて來る客は、この塔を目當てに船を加減して來るとこの武昌の碼頭につくのである。

蛇山は、武昌第一の山である。城内に高く聳え展望がよくきくので、これに游ぶ者が多く、與略樓はその一角に建つてゐる。

又山上の抱氷堂は、張之洞が兩湖總督の重職にあつた頃、時代を達觀して、時の滿洲朝廷に勸學篇の建白書を奉り、舊來やり來たつてゐた科學の試驗制度を廢し、人物を海外に出し、人材登庸の必要なるを説いたなど、識見ある經綸を行つた。此の地武昌に於ても、學德共に一世を抜き、天下のものをして翹望せしめてゐたのである。抱氷堂は張大人の舊居の跡、好記念の場所として今尚青年、游士のこれに訪ね至る者が多い。山上、庭あり、亭あり、綠蔭の石徑には古人を偲ぶ石碑が見られる。祠堂に懸る故人の寫眞は殊に懐かしみ深きものがある。

寶通寺は、寶陽門外、六七支里、洪山、山麓にあり、山腹の高塔は二百尺、雲外高く聳え、八面の石塔でかなり精巧な藝術建築として武昌第一の評がある。今游覽雅客の縱覽を自由に許してゐる。

○

城内に見る國立大學は、近來新しい外國歸りの青年學者が、その教授の中堅となり、鋭意中部支那に於ける文化的進出に努力せる者が多く、科學に、文學に、特に見るべきものが多いとの事である。こゝには、米國留學と、日本留學の二大派があり、互ひに牽制し合つてゐる樣子も見える。城内の書林から發行されてゐるものには册子が多く、この頃は例の三民主義の册子には有名なのがある。又單行本には、隨分思ひ切つたものがあり、全國青年思想の急先鋒をなしてゐるものがある。

又同地發行の中華全圖などには、南京を經度の標準に置き、西に、東に、その度盛りを記入した地圖を作り、各學校に教科用として供へさせてゐたり、又言文一致體の讀本や、更に、民國式音表假名を用ひた教科書を普及せしめてゐるなど、見るべきものが多い。

日本では、日本出來の地圖が、悉く英國グリーニッチの經度を盲目的に遵奉してゐるのに較べて、こは確かに民國青年學者の意氣の愛すべきものあるを物語つてゐるものである。時局になると、こゝで對岸の租界地へ持つて行つて、外人をあて込み、武昌の城内から、野菜肉類卵など日用品と云ふ日用品を、小舟で碼頭近く賣りに出る者がある。すると、日本人いぢめの空氣濃厚なる絶頂には、かうした小賣商人までもが、本部へ引つぱつて行かれたり、甚だしいのは銃殺されたり、ひどい仕打に遭ふことがある。民族自決の聲には、その心事愛すべきものもあるが、しかし同時に、餘りに極端に馳せ、人情味や、隣人愛に缺ける所のあるのは私かに惜しむ所である。民國青年の間に知られた新人、胡適君などが一時羽振りをきかせ、これが思想の上に、又文學の上に、或は言文一致體の上にと、ひろく重きをなしてゐたと云ふのも此の武昌を中心としてゐた。又その流れがこの邊りに今尚擴つてゐるといふことは注目すべきことである。

○

武漢三鎭の天地に就いては、略ぼこれで大樣を述べ終つた。日本人で漢口まで旅する者は、長江の往復一週間を棒にふるといつて、これを退屈に考へる者が多い。長い人生に、長江六百里の一週間を退屈などとは餘りに意味をなさない言である。長江の大を知ることは何より大事なことである。支那との貿易に、外交に、又歡樂方面に、殆んどいつもその核心を摑み得ないのはかういつた長江の旅を無視したり、無用視する判らずやの多くゐる爲めであると考へる。よろしくその「白雲千載空しく悠悠」の氣持を江上に味ひ、又あの大氾濫に際して悠悠、屋上に釣りでも垂れてゐる場面を特に見るべきである。之を見所として、觀察するだけでも、五ケ年間の型に嵌つたあのせゝつこましい中學の修身、倫理よりか、どの位深遠な修養體驗が得らるゝことか解らない。

上海から漢口を直角に、北平に旅せんとする日本人は、やゝもすると、武漢の天地の不穩におびえ、

その噂を耳にしただけで忽ち旅程を變更し、津浦線をも捨て、平凡な外洋廻りの船の旅と改め、山東角を迂回して船で行くと云ふものが多い。噂ほどの不安は、大陸の旅行區域には、現實に餘り見ないのであるから、なるべく長江の見學を支那の旅には特別に取入れるやうプログラムを立てることが將來の日本の爲めに、かなり重要なことだと思ふ。その意味で、武漢の天地まで、或は南下し、或は長江を往復して之に遊ぶことは、何より有意義なことだと考へる次第である。

漢口附近

漢口から奥は、洞庭に進むにも、又上流にのぼるにも、必ず常に、漢口の碼頭を起點として出かける。事實また洞庭の入口、城陵磯の港あたりで、乘替へ、奥に向ふなどは、船便もなく厄介である。又火車は、武昌から粵漢鐵路があつて、湖南を通つて南の方廣東へ出ることになつてゐるが、今の所はまだ湖南鐵路は、長沙の南、淥口でとまつてゐる。そして東して江西の萍鄉の方へ折れてゐる。

漢口附近の長江筋は、どうかと云ふと山遠く水長く、水鄉打續く、平和鄉をのぼつて行くのであるが、南岸には、丘上雅亭の聳ゆる金口（トレンカオチン）鎭の眺めは旅の目を特に樂しませる。

この邊り一帶の平野は、毎年增水期にかなり水をかぶり、大地主の一夜乞食となり、漢口の郊外同文書院の邊りにアンペラ屋根の寄合所帶をしてくらす程のものにまで成り下つてゐるのを見る。

やゝ上つて、南岸に見る嘉魚縣に行く。こゝは漢口から七十哩、昔魏の曹操が、吳軍のためにあへなく大敗をしたと云ふ、あの赤壁の戰のあつた歷史上に名高い古戰場である。

蘇東坡の赤壁賦の中に、曹孟德の昔を偲べる名句があるために、下游、東坡寺の赤壁とごつちやにして考へられてゐる傾きがある。尤も江邊には赤土の崖壁打續き、これに柳生ひ茂り、何處も同じ秋の夕暮で、轉た赤壁の歷史を思はしむるもののみである。史家を迷はしむるものは書物に非ずして、寧ろこの赤土の江岸である。項羽の亭長と語つた烏江にしても、これにしても、今日の采石磯、華陽又黃州、嘉魚など何れも皆、歷史の遺蹟を物語れる由緒ある所であるが、相當史家をして懷古の情に堪へざらしむるものがあるのである。

沙市及びその附近

漢口からかみ手の長江に見る大筏は、何れも湖南洞庭から繰り出されるものであつて、上流、四川方面から流して來るものは殆んど見ない。洞庭湖上の話は後で述べるとして、今は先づ長江の本流に向つて遡り、その江邊の風物を述べることゝする。

漢口からかみ、宜昌（イーチャン）に至る五百十二哩は、これを漢口上海間の約六百哩の下流（下游）に對して、土民はこれを中流（中游）と呼んでゐる。宜昌から下、上海に至る約千哩の流域は、時に多少の山を見ることもあるが、大體平野つゞきで、見渡す限り、その眼界は、水鄉に非らざれば、田畑の耕作地のみである。

漢口が長江の水面から見て、上海のそれに較べ、わづか八十尺の落差を有するに過ぎないと云ふに對し、宜昌は百三十五尺を示してゐる。凡そ江口を遡ること、千哩と云ふにわづかにその水面の落差百餘尺といふ海拔の低い平野つゞきのところ、と云ふは世界にも珍らしいことである。これを一望千里と呼ぶ言葉のあるは、決して偶然の語に非ずして、地理上の事實を物語つてゐるものである。之を知らないものは形容の語ぐらゐに見てしまふであらう。殊に湖北、湖南の地は、これ亦その省名の示す如く、兩湖共に湖沼の澤國なることを文字通りに物語る通りであつて、平々坦々、實に海岸地方に見る沼澤地と何ら變る所はないのである。從つて昔から「兩湖實のらば、以つて宇内を養ふに足る」といはれてゐる位、水田よく開け、土地肥沃にして豐饒の氣が漲つてゐる。

されば長江の沿岸から見た眺めも、沃野千里であつて、見るからに和風綠野を吹き、自ら中原の寶庫たることを思はしめてゐる。唯餘りに到る所、湖沼のみが多く、大都會が創設せらるるには不適當であり、不便なところである。わけても江邊は、監利あたりのやうに、頑丈な堤防でも築かれない限り、夏の增水期には、常に氾濫の憂れがあり、江邊の地面は江流の水面よりか以下になることが多いのである。從つて中流地方に見る田家は、その建築法が一種特別の仕掛で出來てゐる。

といふのは、其民家は、江邊の蘆の莖をもて屋根をふき、四隅の柱と柱の間は梯形に蘆の莖を並べて壁となしてゐるのみである。それ故、夏の氾濫期に家は水に浸される場合があらうとも、水は梯の齒の間を流れ、家は依然として元の位置にあることが出來ると云ふわけである。濡れた衣裳などをひろげて屋根に干し、小舟に住居を移して、傍の柳の蔭に避難してゐる農家を見るなど、湖北獨特の氾濫風景が開展されてゐるのを見るのは面白い。

五千年の昔以來、年々歲々、水に浸され馴れ切つてゐる田夫漁翁達のことであるから、年中行事とばかり之を輕く見て、島國の人のやうにあわて騒ぐことをしない。されば中流江邊に於ける土民生活の實相を見んとするには、秋冬の候よりか、晩春盛夏の頃の方が、出水風物の見ごたへある旅が出來る。

氾濫の天地として、長江は下流よりも、確かに中流地方の方が、その本場所であつて、別けても沙市の附近から上車灣、中車灣、下車灣のあたりが、最も氾濫光景に富んでゐる所である。中流の水村

は長年に亙る年中行事を心得てゐる。そろ〳〵夏の出水期にでもなると云ふと、水廓、荻家、何れも逃げ仕度をせんとしてゐるのか、水牛と共に家をたゝみ、之を空家にして、楊柳の蔭に避難場所を見つけてゐるものを見る。

○

支流を上る輪船は、湖南、洞庭湖の入口、岳州にまでは這入らないで、その手前の城陵磯に寄港する。そして稅關を濟ませ、水路を西にとつて、水鄉を進む。監利の街はこの附近での賑かな都城であつて、日清公司の代理店の旗旒が水上遙に飜つて見え、大堤防は築かれ、水難の備へも嚴かに出來てゐる。

江上この邊りの眺めは、時折り波間に色の黑い背中を出したものが群り出沒するのを見る。これはいふまでもなく千里の流れを遡つて來た海豚（イルカ）の群で、夏は殊に多く躍り現はるもので、旅人の目を喜ばせること夥しい。

夏の增水期には、石首（シーシュー）の街を越えて、遙か彼方に、洞庭湖の水景を見る。碧空のもとに極めて偉大なる澤國の觀が指される。新河口（シンホーコウ）、塔市（タースー）など云ふ水村には、取立てゝいふ程のこともないが、夏の氾濫期などには、時折り船の航路、水底の深さが解らないため、よい加減のところに江上夜泊をすることがある。濁流滾々船は畑の上にゐることやら、又江上にゐることやら、全然見さかひの付かないことがある。誤つてもしその江岸のさかひ目にでも、夜泊をしてゐる時など、夜中に突然減水したとすると、船體は畑中に置ざりになつたり、或は本流へ落つる危險を見るなど、容易ならぬ事態を醸す場合があるのである。

あたりの水村に働く田夫などは馴れ切つたもので、氾濫期を控へて水の中を水牛と共に、悠々田の土を耕してゐるなど、これ亦湖北水村の一光景である。江畔、安穴（アンシュー）の街には水上に、日本の仁丹の廣告が高く揭げられ、日本客にはこれが特に懷かしい。上車彎あたりの氾濫區域になると、千年の昔から、江岸を離れる十里の所に、第一の柳塘を築き、更に又第二の堤防を二十里の地點あたりに繞らしてゐるのを見る。しかし盛夏の頃西藏、ヒマラヤから四川に落ちて來る水勢は、幾千里の惰力によつて押し寄せられ、滔々と漲り來たり、恐るべき力をもつて、柳塘に押し寄せ、第一の突堤を決潰し、更に又第二の柳堤へと來たり、之を見る見る破ることがある。綠野千里の天地も見る見る黃色の濁流の海と化し、唯わづかに所どころに田家の屋根の一角と、柳の梢の散點するのを見るのみである。

堤上には、銅鑼を敲き、喇叭を吹き、濡れた夜具を枝間に干し、非常を傳へ叫んでゐるのである。かくして、次から次へと、村人の群がどよめき立ち、凄まじい光景と云つたらない。彼方の氾濫地域

は誠に物恐ろしく眺められるのである。敲く銅鑼の響きも引きりなしに幽かに水面を傳はつて聞えてゐる。船上双眼鏡を取出し遙かの出水地を眺めやると、子供嬶さんなど、避難民の家族が、哀れにもその決潰した堤の一角に取殘され、手を上げ、號叫して救ひを求めてゐるさまなど見える。やがて見る見るその堤は押流され、濁流の中に女子供は卷込まれ、阿彌陀佛の自然水葬を演じてゐるといふ慘狀である。定めしもつと近くに寄つてその現場を親しく見たことならば、たしかに阿鼻叫喚の水地獄とは、この湖北の夏の水害地をさしていつたものだといふことが、判つきりわかつたことであらう。

民國二十一年（昭和六年）の夏の大氾濫は六十年來の大洪水だといはれ、長江附近、その水害を被つた者は約三千萬。殆んど日本人口の約半分に當るものが、かゝる水地獄の犧牲となつた譯である。しかも流石大陸人のことゝて、誰れ一人政府攻撃をするでなし、新聞で女々しい事を書き立てるでもなし、始めからてんで問題にしてゐない政府のことでもあるが、かゝる天災地變は凡て人事を超越したものとあきらめ、政府に對しても神樣に對しても、何んら救ひを求めようとせず、又求めたところで仕方もないといふ諦めの氣持がある。

土民たちはたゞ「沒法子（メイファーツ）」（仕方がない）の一言を放つだけで、萬事を諦めつくしてゐる。日本から慰問の金が屆けられても、別段感じもせず、折角だが喉に通らぬといつて受取らなかつたあの當事者宋子文夫人の胸のうちもお察しが出來るが、事實日本人が思ふ程に思ひ惱んでゐる譯でもないと見える。

しかし半面から見ると南支に於けるこの大水害は、北支那蒙古風と共に、支那二大地變の一つであつて、これら天の惡戲に對しては幾千萬の生靈が一夜のうちに殺し盡されても、これ亦「沒法子」の一語で以て諦めてゐる。その點は實に世界に類のないすなほな民族性が養はれてゐると見られる。民族的に現はるゝ殘虐性をば、日本人はどうかすると物珍らしげに特筆しようとするが、支那に於ては五千年來大禹の時代からのことである。これで鍛ひに鍛はれて來てゐる。それがために、住民を治めることよりも、先づ第一に水を治めること即ち治水そのものの方が、政治の根本となつてゐたといふ特異性を有してゐる。であるから政治の治の扁が三水を取つて來てゐる譯でもある。これ程迄に、大水が支那民族の上古以來の文化に、大きな影響を及ぼしてゐることが事實の上に明白に證明されてゐるのである。この間の消息は、親しく夏の湖北の旅を試みて見るとたやすく目擊が出來るのである。

○

江を遡つて、沙市の都城につく。日清汽船のハルクは碼頭にN・K・Kの羅馬字も鮮かに、輪船はこれに碇泊するのである。

沙市の城内は、堤防の下、江流の水面以下にあり、わづかに堤防によつて城内の市民の生命財産が防ぎ護られてゐる譯である。宛らこはオランダのアムステルダムの都市と同じ譯で、若し一滴の水でも洩れる穴があれば沙市の城内は、非常なることになる。

沙市には日本の領事館があり、奥に荊州の都城がある。唐の時代には江陵と呼ばれ、李白、白帝城の詩に「千里の江陵一日にして還る」と吟じられてゐる江陵は即ちこの荊州を指したのであつて、當時江陵は江岸にあつて、碼頭を有してゐたものと見える。城隍廟を始め、關羽廟や關羽の石帶など、史蹟遺物見るべきものがあり、運河によつて沙市、荊州間はつながれてゐる。夏の增水期には、時折護岸工事の頽丈に出來てゐる堤防を越え、濁流が沙市の市街に溢れ、市民は隨分水難被害を見ることが珍らしくないのである。

沙市の上の水村には、毎年の氾濫を見越して、屋根に穴を穿ち、いざといふ時の出場所をつくり、屋上に釣りを垂れ、四手網をおろしてゐる光景など見ることがある。

氾濫區域は更に上の董市のあたりから枝江のあたりまでもが取入れられてゐる。董市の水村は、土豪多く、白壁高く聳え、江岸の眺めも美しい。しかし、いざ洪水となると、濁流屋を沒し、楊樹の梢と屋根の一部がわづかに見えてゐるばかりである。味の素、仁丹などの大きな廣告をその水上に見るはなつかしい。尙楊溪の水村を過ぐれば、この邊りから、日本式の松樹の茂みがある。丘陵に農家の優しい山水明媚の光景を見る。屋根に反りなく、建築の樣子は何處となく日本式である。日本に歸つたやうな氣持がする。枝江の手前、山上に壓色の高塔、小さい白塔の聳えたるがあり、そろ〳〵今までの水景平野の眺めがこゝに面目を一新し、山の景色にうつらんとする樣子が見えて來る。白陽を右に、宜都を左に見るあたりから全く澤國の觀はなくなつて來る。右岸の虎牙山、左岸の荊門山には圓筒狀をなし、あまた林立して江岸の風景は著しく山氣を漾はせ、亞細亞石油やスタンダードの美孚のタンクを見るあたりから、益〻山國の入口たる感じを唆られ、こゝに愈々湖北の奥なるイーチヤン宜昌の都城につく。

兩崖開き盡し水廻環す
一葉わづかに通ず石鋒の間
楚客嫌ふなかれ山勢險なるを
世人の心は更に山よりも險なり

荊門山　雍陶

（兩崖開盡水廻環　一葉纔通石鋒間　楚客莫嫌山勢險　世人心更險於山）

山を借り世人に警告を與ふる所、皮肉のうちに大いに學ぶべきものがあり、宜昌の面目を躍動せしめてゐる所が見られる。

宜昌

宜昌の碼頭には、日清公司がある。赤煉瓦の建物で堂々と聳え立ち、樓下のくり抜きになつた石段を上り下りする客足も繁々しい。又波の音も忙しげに、江上の民船から支那碼頭に上る客の姿もかなりあつて、奥地祕境の關門を扼する船着場だけあつて、邊たりの雰圍氣は、かなり珍らしい活氣を呈してゐる。

宜昌には日本の領事館があり、その他多少の日本在留民もゐるが、その數は少い。宜昌の城内は、一郭をなしてゐて、道幅も狹く、商取引は活潑に喧噪を極めてゐる。碼頭大通りは、大廈高樓が軒を並べ、銀號、古玩店あたりの軒並みの明るき氣分のするに引かへ、城内は著しく舊式な暗い感じを漂はせてゐる。時折り、共産分子の竹鎗をもつて市中へ襲ひ來り、市民居留民の肝を寒からしむるものがある。

湖北の西陲にある古城のことゝて、市中の古玩店などには、珍奇な骨董、古美術も多く、狀元、榜眼、探花など進士及第の名譽ある席次を示した象牙の彫刻板を始めとし、康熙、乾隆の燒物、花瓶、玉器など、棚の上に數多陳列されてゐるのを見る。又城内の書籍店には、峽江圖攷を始めとし、珍らしい版本古書などを陳列し、他の地方で見られないものが少くない。その他城内には舊式な二尺に達する紅の堂々たる大蠟燭を作つてゐる。その心が萩の莖で出來てゐて、柄が馬鹿に長く、その尻に針金をつけて、天井に幾百本となく逆まに吊されてゐるのである。その古風なうちに壯觀を呈してゐる所は面白い。又紅燈街には、萬年春、その他の酒樓茶館があり、巴客楚客共三峽の唄を歌ひ、妄醋なる場面を見せてゐる、峽口の片田舍だけになつかしい。

宜昌は千里の平野盡きて、こゝに山國に入るの關門都城をなせる處であるから、風物に富み、人氣もどことなく物凄い氣持を見せ、市民の目付きも、何となく、鋭いやうに見える。急流に棹さす船の船頭達も、下流に見る如き暢やかさがなくて、敏捷なちやき〳〵が多いやうである。

交通の點からいつても宜昌は、水路重慶に至り、又漢口に下る。宜昌はその上下、航路の起點となつてゐる。そのために極めて商業運輸の關係上重きがおかれてゐる。

奥地四川巴蜀の天地は、水路宜昌の險要によつて、關門が扼されてゐるため、軍事上から見ても、亦重大視せられ、宜昌の要害さへ固ければ、巴蜀五千萬の住民は、天下泰平をきめ込んで居られると

いふ譯のところである。日本の軍艦その他英、米、佛、伊、各國の軍艦は常にこゝに姿を見せ、いざといふ時の用意をしてゐる。朝に、夕に、艦上から響く夫々の喇叭の音は勇ましい。その急流の間を縫うて、集り碇泊せる民船の間に、豆腐賣りの呼び聲のする響きは、朝まだきの靄の中に聞えるのである。流れの早き水郷であるため、舟人の水死する者また毎年幾何なるを知らない。

宜昌の水郷と都城の眺めは、山を背景にしてゐるだけ一種特別の宜昌風景を生み出してゐる。

○

城外に聳ゆる山上には、有名な東山寺の古廟がある。こゝには又文星閣だの六一書院、爾雅堂、歐陽公の謫居の遺跡などもあり、宜昌游歴の客を惹きつけてゐる名山であつて、虎牙山、獅寶山、天寶山、珠寶山、西陵山などの群山に圍まれ、江を隔てゝ對岸の葛道山、筆架山、文佛山などの諸峰が、呼べば應へる所に集まつてゐる。對岸の筆架山下には、絶大の仁丹の文字廣告が鮮かに掲げられ、宜昌の街から、よく見えてゐるものがあつた。が度々の排日騒ぎでたう〳〵大半壞されてしまつた。恐らく支那各省に見えたる仁丹廣告のうちの最大なものであつたであらう。

尙宜昌附近の名所として有名なものは、三游洞や、對岸の孝子岩、二郎廟（アールランミヤオ）、石門洞、靈泉寺、鷄冠岩、平善壩（ピンシヤンパ）などである。

○

宜昌を流るゝ長江の水の、夏に、冬に、物凄じいことは、江流そのものが縞目をなしてさわついてゐるのを見て、一種物凄い光景がしのばれる。決して下流で見る流れとは面目を同じくしてゐない。游客はこゝでは、多く、その坂落しに流れる水を遡つて、江上の西壩（シーパ）、葛州壩を經、南津關を右に峽門口を這入りて、右岸の名勝三游洞へと游ぶのである。陸よりする者は、宜昌から野を過ぎ、水を渡つて、これに行く。しかし急ぎの客は、ランチで水路を行く方が速い。宜昌から水路七哩民船で漕がせるには流れが激しく、岸傳ひに遡つて行くとしてもかなり苦しい。

○

三游洞はもと唐の白樂天兄弟と元微之の三人がこゝで游び、後蘇東坡父子三人の共に游んだ所だと云ふことで有名になつてゐる洞窟である。洞口迫るところの岩窟内に禪寺があり、線香の煙がこもつてゐる。洞は江岸から峯傳ひに登つた山の丁度裏手にあたり、途中の岩徑に、石橋があり、穴居の山民があり、又路傍の石碑に乾隆の頃建てられた「千古萬秋」の刻字の枱子（タイツ）（土臺）などを見て登る。斷江の眺めは奇拔である。峠を越え裏山に出ると、千仞の谷ともいひたい深い溪流があり、脚下の溪は深い。水は碧く、白沙は鮮かに、幽邸がその傍に見えるが、人はゐない。この谷は下牢溪と呼ば

れ、その絶壁の中腹に「山清水音」の篆額のある山門があり、古篆の磨崖碑のあるところを見て、洞窟の門に至る。斷崖はもし一歩誤れば、溪底に落ちるといつた危路を辿るのであるから、深山の趣きに富んゐる。洞口に日本游客の姓名が見え「白岩龍平」「加藤正義」など知人の墨書なども讀まれたのである。

○

宜昌から對岸に渡つて、孝子岩に至れば、江邊に岩あり、江水を汲むに便ずる所がある。そばに二郎廟が綠林の中に建てられゐる。昔の二十四孝のうちに見えてゐる一故蹟として傳說と共に懷しい所である。

二郎廟の綠蔭を過ぎ、溪流に沿ひ、山道を辿ること五十支里、石門洞の仙境に至る。山境は、人煙稀れに、山家、門前に見る竹林は、南畫に描く介字の笹つ葉をその儘に現はし、田夫の手に弄せる煙管は、長さ五尺、自然の竹莖をそのまゝに、雁首は、根元を殘してこれに穴をつくつたものである。時折り、軒場に吊す煙草の枯葉をむしり取り、之を圓めて雁首に入れ、洋火（マッチ）で火を點じてゐる。吸ひ終れば、支那靴でぽんと蹴り、灰を出すところの樣子などは、如何にも無雜作のうちに昔ながらの純朴な風が見える。

これは湖北の四川さかひに見る山家の風俗であるといへば、如何にも古俗な閃めきが現存してゐるものとして尊く感ぜられたのである。

山畑に働く田婦の姿は、麥稈帽の緣の一尺に餘る大型のものをつけ、しかもその緣がひどく波を打ち、優美な恰好に見えてゐる。日本の常磐御前が牛若丸を懷にした時の樣子にもなぞらへられて、これ亦床しく味はれる眺めであつた。纏足をした小さい足で、畔道をよちよち、手に辨當の籃など提げて辿り來る姿は、凡て古代の風俗繪卷物を繙くの感があつて古雅である。

溪流清けれども水少く、意外にも山畑はよく開け、祕境に這入れば這入るほど、山容が特異性を示し、絶大の圓筒狀の峯は深溪から聳立し、その頂上は圓くなり、銳くない光景を見せてゐる。丁度宜昌のしもの虎牙山に見る山容と相似て、山骨は露出し、崖壁はカーブをなし、所々に岩苔を生じてゐる。又猫額大の空地には、山畑のつくられてゐるところがある。で石油タンクの大規模の工事がこの三峽の裏山に造化の鑿によつて天成されたかと思はれる位、實に巧に不思議に出來た筒峰が亂立してゐるのである。

彼方の空には、雲を破つて、山高帽子の如き山の峯や、鷄の冠の如き岩がぬうと現はれてゐる。山下の溪間は溪流を見ず、凡て皆よく耕されてゐる。山畑には人影を見ないけれ共、秋の實のつてゐる

黄金の色が一帯に認められるのである。誠に何んといふ静かな平和郷であらう。唯あたりに聞こゆるものは、黄葛樹（ホアンシュ）の樹に鳴く幽鳥の聲のみである。武陵桃源の語も、この邊に當てはめて、呼んで差支へない位に思はるゝ處である。

○

山路を辿り、岩下の細道を進む。路上禪僧の姿が見えるので、禪寺の近づいたのを知る。石門洞はその樵夫の道の盡きる所を右に廻つた所である。

半天に垂れさがる巨岩の下、奥深く靈泉寺の廟宇は、その洞窟内にところ狭く建立せられ、方丈客堂はもとより樓上、樓下に、幽室數多設けられ、軒端を被ふ懸崖には、蔦葛に露珠の滴る音も清く、樓上の見晴しのよい客堂には、「臥雲樓」の扁額や、「聽瀑」「抱嵐」の左右の額も、仙境を聯想せられ、殊に面白いのは、有客禪流水、無花問落花とあるものである。場所が場所だけに何處となく、人間の天地に非ざる感じを與へてゐる。

和尚は、月樵大禪師と呼ばれ、この禪寺に幽居の生活を續け、この寺の訪ぬる度にこれと禪を語るは、何よりの心眼を開く手掛りともなる。禪師の話によると、この山寺は明の洪武年間の開山で、雪庭禪師と云ふを祖師となし、禪師は廿八代、今年六十九歳である。尚前代は朗照禪師であつた云々。

山寺の和尚のこととて見るからに大分枯れた禪師で面白いところがある。しきりと、蕨の鹽漬に、熱茶點心など取り入れて、珍客の待遇につとめてくれるのである。

和尚の物語る話の一節にかう云ふこともあつた。嘗て獨逸人がこの山寺にお籠りをしてゐたことがあつた。その獨逸人はよく啤酒（ビール）を飲んでゐた。その人に設計を依頼して、こゝに樓上更に一樓をつぎたしてもらつた。云々。道理で寺の様式が何となく、半ば洋式がかつた高樓になつてゐるのも、そのためであらう。しかし和尚は、費用の續かなかつたため竣工を見ることが出來ないのだといつて、自分たち之を訪ねる度に募化寄進を要求せられるのである。人里離れたこの幽境のことこととて、恐らく年に幾人も訪ね來るものはあるまい。かやうな山寺に屋上屋を架する目論見をするなどは、餘りに世相を超越した考へのやうにも思はれたのであつた。

洞窟内には尚、觀音寺があり、又臥雲樓、佑聖宮、張仙殿、龍王殿、后天宮などと云つた道教の神神を祀つた小廟もあり、又その奥深き洞窟の盡くる處には、千古の靈泉を湛へた龍潭の水溜まりがある。洞内の光線は廟宇に遮ぎられてさつぱり様子が判らず、水際すらもはつきりしない。幽玄の闇の裡にどこの邊にか玉音のやうに水の滴る響きが、とぎれとぎれ聞こえる。

和尚の話によると、天下旱魃の打續きで、百姓の雨を待ち望むの時、この龍王廟に祈願をこむれば、

この靈泉の奥から雨蛟が出現して、山に雲を起し、天下に雨を降らせることが出來る。實に靈驗あらたかな神池である云云といつてゐた。なるほど廟前を仰ぎ見れば　有求必應、護法滿座、閤宅沾恩、神靈有感、惠我無疆、勅賜靈雨などの金文字黒漆の扁額が大小數多奉納されてゐる。これもこの地方の田夫達の長年にわたる祈りのしるしでもあるであらう。

○

山色天に連なる宜昌の天地は、陸に、水に、處として佳ならざるはなしである。どちらへ出かけて行つても、半日や一日の遊びには珍らしい處ばかりである。東のかた楚客の平野の景色に馴れ切つた目には、特にこの邊りの山色は物珍らしく感ぜられるわけである。その中でも宜昌から、十二哩江を遡つたところに、左岸に民家の集つてゐる村がある。こゝは有名な平善壩（ピンシャンパ）で、四川下りの民船と云ふ民船は悉く皆こゝで稅關の臨檢を受けることになつてゐる。阿片、煙草、その他、四川からくだして來るかね目の貨物は、こゝでかなりいぢめつけられるのである。そのため、わざ〳〵阿片などは之を菰包みにして、江上に落とし流し、峽中に遊ぶ小舟とぐるになり、これを何くはぬ顏して拾はせる、稅關吏の目を盜むなど云ふ方法に出るものもある。色々ずるいことがたくらまれてゐる。平善壩の稅關のある所は、特に江上から目立つて見えてゐるのでよくこれが噂に上る。そのしも手の山下には、

又小平善壩の漁村がある。

斷江の連峰は數哩に亙り、峽門口のところにまで續いてゐる。普通この峽門口は、南津關からかみの方を宜昌峽と呼び、その兩岸の景色の奇峰に富む點で天下に鳴つてゐる。所謂三峽の一つであつて、百里の中原の平野の大陸景がこゝに來て始めて山景と變るところである。平善壩はそのうちにある最も主要な山邑と見られてゐる所である。宜昌峽から奥の方に這入つたところは、何れ四川のところで詳述することとする。

湖北省を大觀して

湖北の天地は、水鄉豐かに、交通は自由であり、天下の物資の集散する一大市場、武漢三鎭を有してゐる。この地方、田畑よく開け、千里の沃野を文字通りに收め約してゐる。

元來湖北人は、浙江の寧波人と相伯仲するだけの鋭い商業眼を有し、よく團結して他省の者に當たらんとするねばり强さを持ち、頭腦も亦かなりよく働いてゐる。昔から兎角、巴蜀の四川とは隣人關係であるに拘らず、どうも仲が惡い。湖北四川の兩省を自分が、出入して見た體驗から見ても、これはよい話ではないが、湖北人からは四川人を稱して、「老狐（ラオフー）」と呼びなし、之を一種の目で見てゐる。同時

に四川人の方からは、湖北人を「老鼠（ラオスー）」と呼ぶと云つた風で、双方互ひに馬鹿にしてこなしあつてゐる。そのため何かにつけて問題が起きると、直ぐこの言葉を意味ありげに叫んでゐる。つまりこは互に「こん畜生」扱ひしてゐるわけである。清朝の末年、漢口から四川の重慶成都に至る川漢鐵路が目論まれ、その計畫が進んだとき、之が民營で行かうとするを官營にせんとしたので、遂にそれが導火線となつて革命の端を啓いたことは、事實有名な話であるが、しかしその頃も、一方には四川と湖北兩省も睨み合ひとなり、水路のあるのに何んの必要があるかといつた具合で八釜しく、その議論の大變であつた。滿人の大官、端方大人の多きは、當時四川に行く途中で、轎夫の爲めに、非業の最期を遂げるに至つた。のみならず遂にこの國有鐵路の問題からはしなくも天下麻の如く亂れ、兩湖の志士は、時こそ來たれと、年來の滅滿漢興を目標に、第一聲を武昌の省城に揚げた。こゝに第一革命の反旗が揚がつて、旗鼓堂々、結局清朝は亡び、中華民國の世と移り變つた。黄興、蔡鍔の志士は殪れ、袁世凱が大總統となつた支那大舞臺の芝居の演ぜられたことは天下周知のことである。

兎も角輿地四川の雄を以て鳴るに對し、湖北はいつも智をもつて鳴る。その間氷炭相容れざるものあることは注意すべき點である。

これはしかし、煎じ詰めて見れば、中原の大自然と四川巴蜀に見る地勢の上の關係が、この兩持異性を生み出したものであるといへる。恐らく、この天然の湖江、山下の形勢くらゐ、人心に影響を及ぼすものはないと斷じても差支へないのである。

○

地理上から大觀して見るに、元來、湖北は澤の國であり。四川は山の國、テーブルランドであると一語で盡くすことが出來る。これでもつて如何に地理的に兩省の變化を有するかゞ解る。西藏の高原地帶から、四川の盆地に下つて來た水は、更に又湖北の澤國へと、三段の雛壇式の江床を作つて流れてゐる。しかしその大部分の處はどこまでも平野である。悠々千里の長江を上り、上りつめても、尚上海附近の平野が、宜昌のところまでも、同一平板の上にあるとは、實に面白い大陸的光景である。湖江の交通の便に富むところは、隨處に都城多く、省内の人口は約二千七百萬と算せられてゐる。それがこの二千里の富を牛耳つてゐる。誠に鬼に金棒の譬へに洩れない處である。

湖南省

湖南省に入りて

湖南の旅は、省城の長沙を目標に、洞庭の湖水を見ることが、誰れ人にも興味を添へるところである。二千餘年の昔、屈原が汨羅に身を投じたといひ傳へられてゐる所も、今は洞庭の東、汨水のほとりにその名を留め、史家文學者をして轉た懷古の情に堪へざらしむるものがある。「離騷」を繙く者、誰れかこの汨羅の名に懷かしみを持たないものがあらう。三峽の水鄉に見る屈原公祠の名と共に、大鯉魚の傳說を生み出してゐる事實もあるので、俗間ではかなり有名な童謠にまで唄はれてゐる。

又洞庭は、南の方、湘水、瀟水の流れがあつて、これにはかなり風致に富んだところがあちこちに見出される。例の湘瀟八景中に吟はれゐる湘陰、衡州など、評判の山水美に富んだ所が手近い處にある。遠浦歸帆（湘陰）平沙落雁（衡州）の如き諸景は最もなつかしみのある處である。このほか湘潭、長沙の如き名都を有してゐる。或は西の方沅江の沿岸には、常德の都城を始め、辰沙の燒物で、その名のやかましい辰州の古城がある。その他、洞庭の湖水の中には、乾隆帝の茶畑として特別に評判の君山島や蘆林潭の水塔の風景、その外洞庭の秋月に、岳陽樓の賦で知られた岳州の古都城もある。

かゝる名所舊蹟を第一の呼び物として、更に湖南は物資の點でも全國で有名な處となつてゐる。俗に兩湖みのらば全國が食べられるとまで云はれてゐるくらゐ、農產物もよく出來、殆んど無限である。また林業の方も昔しながらの森林があり、實に奥深き資源を有してゐる。その他人物の方面は湖南は特に秀れてゐるものを輩出し、曾國藩、曾紀澤の如き學者を出してゐる。近くは又譚延闓などの新しい政治家をも出して居る。湖南と云へば王闓運、王先謙、葉德輝の如き碩學、老儒の出てゐることは知る人は知つてゐる。現在に在りても、尚、民國思想界にその名を知られた若手の新人がかなり澤山輩出し氣を吐いてゐることは、湖南の天地の爲めに朗らかな氣分を與へてゐる。

湖南の交通は、洞庭をもつて水路の中樞となすが、夏の增水期は漫々と湛へ、一大湖水の姿を呈し、殆んど海の如き感じを與へてゐる。之に反し、冬の減水期は、沼澤泥底を現はし、蘆の枯れたところに野生の鹿など跳び出し、誠に寂寥たる沼地の錆が見える。從つて冬季は夏の交通運輸のやうに自由には行かない。

しかし湖南の地は總體に、湖水、沅水、資水、何れも水量が多く、川幅は廣く、かなり舟楫の便が助けられてゐる。陸路は、西のかた貴州の銅仁に、文貴州境の沅州から貴陽に通ずるものがあり、或は南の方、長沙、衡州から廣西省の桂林、柳州に達するものがあり、又東の方、廣東省の韶州經由、廣東の省城に達するものがある。

鐵路は例の粵漢線が南北に通りぬけ、武昌を起點として、岳州、長沙から湘口にて中切れとなり、その支線は一方、江西省の炭山、萍鄉に至つてゐる。又南の方、廣東ざかひの宜章縣から始まつて、

韶州を經、廣東省城廣州に達してゐるものもある。

○

湖南の天地は、上海から、長江を遡つて這入ること約八百哩。かなり奥地にある省であるが、省内は洞庭湖を始め、水村山廓はよく開け、自分で身を親しく湖南の天地に置いて見ると、何ら奥地に來てゐると云つた心持がしない。今や湖南は人口二千八百餘萬を擁し、全支に於ける一大中心地としての實力を持ち、その民度に於て、經濟に於て、思想學術に於て、優に四百餘州の中樞となり得るだけの實を兼ね有してゐる。

元來湖南は、武陵桃源の本場であつて、民德厚く、和平の氣の漲つてゐる所である。そのため文化方面に在りては、常に支那獨特の新し味を發揮し、昔から屈原、宋玉を出してゐる所だけに、後世も亦尚いつも思想學問方面の先驅者を出してゐる。近くは、明末清初、湖南學派を起した王船山の如き偉ら物を出し、長沙の對岸、岳麓書院には、その人材を集めて大いに學徒を薫陶してゐた事實などは有名な話である。また曾國藩の碩學を始め、最近民國革命の志士を數々出してゐることは、天下衆知のことである。

昔から湖南の地は悲歌慷慨の詩を生み出すことが多く、清朝の時代にも、その時々の國政に不滿を抱く志士たちが、相集まり、例の有名な哥老會（コーラオホイ）だの、又洪江會だのといふ熱烈な自治會を組織し、隱然勢力を張つてゐたことなどもあつた。また大衆方面には、親方風の偉大な人間を生み出し、陸上には紅幇（ホンパン）を、水上には青幇（チンパン）をといつた風に、夫々その幟旗を鮮明にして時流を指導するといつた氣慨のあるものを出してゐる。今だつて同じことで、革命の氣分に燃えたモダンの乙女達は、束髪なんか、恥かしい陋習なりとして、我れ先きにと斷髪姿に、當世切つての新しみを見せ、大聲叱呼して天下に鳴つてゐると云つた手合が多い。

○

一時共産氣分の漲つてゐた際には、露人の顧問ボロジンの亞流を汲み、しきりと、農民や工人萬能の天地をつくり、當時は農民協會なるものも盛に羽振りを示してゐた。凡ての資本家、地主の上に力を振ひ、多少でもその資産のあるものは、土豪劣紳懲治條令なる法律のもとに引張り出して、これを拉致し、銃殺を敢てするなど、隨分突飛な思ひ切つたことまでしてゐた。

今その一例をいつて見ると、老舖の錢莊某主人が、もと幾年とか前に、外國貿易にたづさはり、數百萬の富を作つてゐるのを、態と昔に遡り、その先代の時にあつたつまらない事實をさがし出して之をあばき立て、その遺産を擁してよい生活をしてゐるのが怪しからぬと云ふ。そしてこれを針小棒大

に宣傳して、捕縛し銃殺の刑に處してしまふ。

又地主として相當名のある紳士で、息子を日本に留學せしめてゐる馬翁の如きは、親類一家諸共に長沙の郊外にまで引きづり出され、正に銃殺の憂目を見んとした事すらもあつた。或は又學者の方で之を求めて見るならば、戯曲に、說文學に、又占ひの學問にかけてよく通じてゐた有名な葉德輝翁などもやられた一人である。その學者の癖に、政治に嘴を出したといふ廉で、法に照し、前振れをした翌日處刑臺上に縛りつけ、衆人環視のもとに、胸部に命中する三發。氣の毒な最後を遂げられたのである。

當時は東京の上野の寛永寺裏で、自分ども白岩龍平、鹽谷溫、水野梅曉、諸大人などと共に、心ばかりの追悼會を催したのであつた。翁は生前、萬卷の藏書も、一時日本人の手に讓り渡しておきたいなど云はれたり、又櫻の時候には一度日本へ來遊したいなど私信を寄越されたこともあつた位であつた。然るに湖南人に容れられる事が出來ず、遂にこの憂目を見られた次第である。

その當時遺族に弔電でもと思つたのであるが、若しやこれを打電しようものなら、直ちにその長男が痛くもない腹を官憲からさぐられ、第二の銃殺を受けるときまつてゐるといふので取りやめにし、唯單に翁の遺墨追善を營む程度にのみ止めておいたのであつた。役人の方では、その少しでも引つかかりがあれば、何んら呵責する所などないのである。

かやうに何處までも、その急先鋒となつて、悲歌慷慨振りを發揮する所に湖南人の氣質が見えてゐるのである。それ故、湖南の天地の雰圍氣と云ふものは、之がよい方向をとれば、實に一世を指導するだけの眞價も發揮し、よい方面に向かうであらう。しかし惡くすると、全く田園將に荒れなんとするの局面を見る眞れがある。實にどちらにしても、湖南はその悲歌慷慨の士で充ち滿ちてゐるところであると云ふことをどこまでも見ておかねばならぬのである。

洞庭湖

洞庭湖は、支那第一の大湖であることいふ迄もない。これが湖南全省の交通に灌漑に、その他あらゆる方面の中心となつてゐる。長江の流れも、減水に、增水に、四時この貯水池のある爲めにいつも緩和されてゐる。長江流域の氾濫現象も、下流幾百の湖沼と共に、之が立派な調節機關の役目をなしてゐるわけである。從つて湖南全省に見る水流の水溜めとなつてゐるばかりでなく、城陵磯の湖口からして、いつも絶えず增減の際に於ける水加減が行はれてゐる。かやうな風であるから、洞庭には一定した湖水の形は事實上ない譯である。つまり、夏は漫々たる海の如き大湖となり、冬は泥多き水流

となつてゐるといふのが、この洞庭の正體なのである。

されば洞庭には四方八方から集る名物の筏なんかも、夏を好季節として、夫々の方角から流されて來る。その始めはそれぞれ小型のもののみであるが、一旦湖上まで出て來ると、これが數多連結せられる。そして次第に大型の大筏となり、時には二三千坪からのものも見る。

洞庭の筏上に見るものとしては、板葺或はアンペラ葺の假小屋の數多建並んでゐることで、さながら村落の形をなしてゐる。この事は前に既に述べた通りである。

洞庭の奥地は主として、湘水から、又沅水から流して來るものが多く、廣西ざかひの山や或は貴州境の山々から切り出されて來る木材は、樟楠木の類が多いやうである。時には、又青竹などの小筏を見ることもある。楠木の筏は、水面以下に三分の二以上沈んでゐる譯であるから、一つの大筏の量は本當に大したものになる。價格も大變なもので、大きいのになると七八十萬弗に達するといはれてゐる。その湖上に悠悠と、流してゐる七つ八つと連結された筏の列を見ると、全く壯觀を極めたものである。

筏上には數十人から百人に至るものが住まつてゐて、半歳近くも水上生活を營みつゝ、下流の漢陽に或は遠く鎭江さして流して來るのである。

これらの流す筏の眺めは、悠久な江流の光景に如何にもよく調和し、見渡す限り打續く蘆州を背景として、湖江を我が天地と樂しみ住つてゐる風懷は、これが又その潑剌たる湖南人の氣分と相表裏して一層面白く考へられるところである。

○

洞庭で見るべきものは、湖上の水鄕である。先づその北部に浮ぶ君山の孤島を始めとして、蘆林潭の島影など優しいものがある。君山は、上古から美しい傳說に富む湖島で、岳州の沖合から見ると眞一文字形の輪廓をなしてゐる。上古、舜帝が蒼梧（廣西省にあり）に南巡して、その地で客死せられた時、后妃湘夫人、女英が妹の娥皇と、この君山まで訪ね來たり、こゝで待てども待てども舜の歸還して來ないのを氣に病み、悲嘆にくれてゐた云々といふ故事傳說のある所である。その古い傳說に因んで、こゝに名高い湘君廟と云ふが今尙こゝに祀られてゐる。湘夫人を歌つた詩がある。李白の詩でよく人に知られた七絶である。

洞庭西に望めば楚江分る
水は南天に盡きて雲見えず
日は落ち長沙秋色遠し

知らず何處にか湘君を弔はん

遊洞庭　李白

（洞庭西望楚江分　水盡南天不見雲　日落長沙秋色遠　不知何處弔湘君）

又君島は、年中氣候が暖く、名茶の産出で評判をとつてゐる所である。殊に乾隆皇帝の茶園まで設けられてゐたことは既に述べた所で、ともかくも湖上隨一の名勝地として稱するに足りる所である。島の北岸から水を隔てゝかなたの水鄉を眺むると、蘆荻の色は綠に、遠山の色は紫。いかにも暢んびりした大きい景色で、それが湖上の淡褐色の水の色と相映じ、洞庭水鄉の色彩美を示してゐる。

又蘆林潭は、君山の南に當たり、又湖上の一風景をなせる所。殊に品よく、君島の細長い倒影を水に投げてゐる所はよい。又赤い自然の土壁に、柳の綠蔭の映えた眺めは、いかにも優しい。

仲秋の月の冴えた洞庭湖上の眞ん中で、烈風の起り、波立つ湖水渡りの航行に惱める輪船も、この島影をたよりに、此に避難して、思はず洞庭夜泊を經驗させらるゝことがある。秋の洞庭は、見る見る水が次第に減じ、底の泥がだんだん出て來るので、船の進んだ迹に、泥を卷上げることは珍らしくない。

湖上の航路は、南のかた湘水、長沙方面に、又西の方、沅水、常德方面にと、この二大水路に船影を見るのが普通である。大筏、小筏の浮ぶ姿もこの方面には多く見らるる。

曉靄に包まれた洞庭湖上の眺めに、明月に照らされた湖上、金波銀波を行く筏の黒き影、それに朧月の夜の眺め、これらは何れも瀟湘八景の中に入れられてない水景ではあるが、恐らくこれの眺めが眞に洞庭の趣に富める廣い水鄉を現はしたものだと思ふ。

○

古來、洞庭の清賞として、誰れ人も知る瀟湘八景の名句を型の如く、こゝにいま列記して置く。

瀟湘八景

一、平沙落雁
二、遠浦歸帆
三、山市晴嵐
四、江天暮雪
五、洞庭秋月
六、瀟湘夜雨
七、煙寺晩鐘

八、漁村夕照

これらは、上に述べた洞庭の概括的の大水景に對して、部分的な地點を求め來たり、これを集めて八景としたものに過ぎない。人各々見る所があり、見る文人によつて、その着眼、その當て嵌めかたの違つてゐるところもあるが、しかし大體は、南の方瀟水（湘水の上流）の邊り衡州に、平沙落雁を置き、又湘水、長沙の手前湘陰に、遠浦歸帆を置き、又岳麓山の雪景に、江天の暮雪を當てはめてゐるやうである。又その洞庭の東、岳州の湖上から見た秋の月に洞庭の秋月を當て嵌めてゐる。横山大觀畫伯の描かれた八景は、必ずしもこれらの實景に照して見ると、その具體的な接觸は見出されないやうに思はれた。

唯しかし、洞庭の光景としての特異性は、湖畔に見る蘆荻の色と自然に見ゆる陸の赤土の色とが、湖水の淡褐色に映ずるときの畫趣、又その三色の配合である。淡彩がかつた南畫湖水の寫生は、この點を先づ基調として考へ、これに配合するに、落雁、漁村、樓閣、楊柳、人物、船筏などをもつてすべきではないかと思ふのである。

岳州及びその附近

岳州は、古來、岳陽樓の名によつて天下に知られ、唐の杜甫、白樂天、宋の范文正公を始め、これに因んだ詩人文人の作は甚だ多く、何れも皆人口に膾炙してゐる。しかも岳陽樓の湖畔に近く、その聳え立つ樓屋の曲線美ゆたかな姿は、鮮やかに水に映り、畫圖の如き清趣を現はしてゐるのである。

唐詩のうちにも

昔聞く洞庭の水
今のぼる岳陽樓
吳楚東南にさけ
乾坤日夜浮ぶ
親朋一字なく
老病孤舟あり
戎馬關山の北
軒によつて涕泗流る。

登岳陽樓　杜甫

（昔聞洞庭水　今上岳陽樓　吳楚東南坼　乾坤日夜浮
親朋無一字　老病有孤舟　戎馬關山北
憑軒涕泗流）

憑軒涕泗流）

又曰く

日は長く風暖かに柳青々
北雁歸り飛び蒼冥に入る
岳陽樓上玉笛を聞き
よく春心をして洞庭に滿たしむ

西亭春望　賈至

（日長風暖柳青々　北雁歸飛入蒼冥・岳陽樓上聞玉笛　能使春心滿洞庭）

いかにも洞庭の心持がよく現はれてゐる。

○

岳州は、洞庭湖上の要港として、出船入船の去來繁く、又湖南全土の咽喉を扼し、武漢交通の衝に當り、又粵漢鐵路中の重要都市として重きをなしてゐる。天下一朝事あるの時は、英雄はこの岳州に先づ根據を置かんとする。水に、陸に、その出入の便を有してゐることは、省内第一の所である。嘗て吳佩孚が奉直戰爭で、一敗地に塗れ、手兵わづかに二十數名、淋しく共に山東角を廻つて、長江に向ひ、上海を素通りして、一路洞庭に這入つて來たのもこの岳州である。こゝに暫く根據を置き、捲土重來の畫策を有してゐたためであつた。

岳州は湖南の天地にとり、政治的に、經濟的に、その喉首を扼し、その詩文の上の意味を重もからしめてゐるばかりではない。由來、武漢の動亂に、或は長沙の事變に、敗殘兵がこの湖畔一帶を荒して廻り、行きがけの駄賃にと、都城を襲ひ、或は湖上の便船に發砲をしたり、又民船を略奪したりするなど、亂暴狼藉の限りをつくすことがある。

時には日清の汽船までが被害を被り、闖入し來て、船長のそば近く迫りおびやかすなどと云つた容易ならぬ事態を引起すこともある。そのため折角の岳陽樓も、洞庭の秋月もあつたものではないと云はれ、人氣を惡くすることが夥しい。文人の見る洞庭と、武人の見る岳州とは、その間大變な隔りが事實ある。そのため、湖南の旅には、火車によつて南下する者は少なく、日本人の岳州に遊ぶ者も、多くは船にのみよつてゐると云ふ有樣である。

近來は、稅關の關係から、錨を手前の港、城陵磯に下ろすのが普通になつたために、益〻岳州は客を引きつける機會が少くなつた。恐らく將來の岳州は軍事的に、又經濟的に省城長沙を凌ぐものがあるであらうと考へられる。

○

洞庭の東には尚歴史に有名な汨羅の古蹟があり、今も尚、屈原を偲ぶ傳説がこゝに漂うてゐる。二千年の昔、屈原が、汨羅に身を投じた際、土民はその徳を慕ひ、水中の鯉魚に向ひ、もし食物がほしいならば、粽子（ツォンツ）を投げてやるから、屈原の體を喰べないやうにしてくれと告げた。するとこの地方の鯉は、その鱗が四五寸大もあり、明かり障子に使はれてゐる位の大いさをもつてゐるので、その如何に實物の巨大であるかゞ察せられる譯であるが、鯉魚はその巨口を開き、屈原の體を輕くくわへ、流れを下り洞庭に出でた。そして長江を本流により三峽の險をどんどん突破し、今日の秭歸縣のそばなる烏石の水村まで、無事に持つて行き、鄉里の妹御さんにその屍を渡したと云ふことである。里人はひどくこれに感謝し、屈原のために祠を建て、今も尚、屈原公祠と呼んで、之をあがめ奉り、この人里さびしき峽中の祕境に、參詣者のちよい〳〵あるのを見るのである。現に三峽中、キヤプテイン、プラントの記念碑のある所から漢の王昭君の鄉里、香溪（シャンチ）の上流、右岸の山麓を見ると、そこにさゝやかな古祠が指さゝるゝのである。

爾來、汨羅の地は、端午の佳節についての傳説の起原をなし、支那に、日本に、鯉里や、粽子の昔を偲ぶ話のたねとなり、一段と懐かしみが加はつてゐる。長沙行の火車の通過驛として、そばを流る

る汨水の名によつて、この故事は歴史を知るものにとり、懐古の情を唆つてゐる。

○

洞庭を南に、湘水を這入ると、右岸に靖港（チンカン）の街がある。こゝには湖南の燒物として知られてゐる陶工廠があり、その產額少くない。陶土は、この邊りの酸化鐵を含んだものであるために、褐色を帶びた燒物で、釉藥も亦焦茶色のが多く、書き繪のものは殆んど見ない。

○

湘水には、左岸にあたり、特に目立つた風光絶佳の水景が見出される。遊客の來遊を待つあるが如き優しみをもつて迎へてゐる。湘水の水は、深く靜かに灣内に這入り、その水景としては、手前にさながら、天の橋立の如き綠なす水堤が長く出つぱり、その柳塘の一角に聽雨亭と題せられた飛檐美しき小亭がある。内湖の彼方には、遙かに長蛇の如き石橋が、數多の半圓形の桁を水に映し、遠山は色淡く、柳村は色濃く、白堊の水廓は殊に鮮かに、右手の方に群つて見える。遠浦歸帆の眺め優しきこの水鄉は、實によく纏つた景色をなし、一幅の好畫題をなしてゐる。とかく、とりとめなく感ぜらるる洞庭のこととて、眼を喜ばせること夥しい。これぞ、湘陰の水鄉と稱せらるゝものであつて、八景のうちに數へられた例の遠浦歸帆である。洞庭の筏上に見る秋月の趣きなどとは違つて、又一段の湖

南水景を物語るものの一つである。

○

尚南の方、鐵路を離れた瀏陽には、この地方で評判の夏布の織物が出たり、又綠石の硯材が出たり、その他菊花模様の大きく鮮かに結晶して現はれた硯材なども出る。その量が又相當に多い。世に湖南菊花石といふのはこれである。硯材としては餘りよくはない。けれども硯屏などに作られたものは、かなり文房具界でもてはやされてゐる。

衡州と湘潭

湖南の旅には、江西省萍鄉から出た鐵路に沿うて、醴陽（リーヤン）の縣城があり、又湘水の二流に沿うて衡州の都城があり、その下流には湘潭があると云つた風で、見るべきところが數々ある。殊に衡州は、山東の泰山、河南の嵩山などと共に、上古から五嶽の一つとして知られた衡山（南嶽）の麓上にある街であつて、こゝには寺が多い。南臺寺、祝聖寺や石鼓山、雁峯寺を始めとし、巨刹道觀の歴史に富むものがどつさりある。毎年その季節が來るとその頭陀袋を提げた善男善女の參詣するもの、引きも切らず、遠くは漢口地方から、又廣東からと巡禮に來たり、その數幾十萬人に達するといはれてゐる。中にも石鼓山の石鼓書院だの、雁峰寺の望岳亭、それから南嶽の聖街あたりには殊に客の來たり集るものが多い。山から得られる草根木皮の靈藥も亦この地に集るものが夥しい。こゝは八景の一に數へられなくとも、天然の山水美を兼合せた仙境であると同時に、又南の方、廣東方面から兵を進めて長江に向ふ際、是非共通過しなければならぬ重要地點ともなつてゐる。瀟水、湘水など云ふ水運の便も自由で、長沙に下るには殊に好都合のところである。

○

更に下流にある湘潭（シヤンタン）は、日本の日清公司、湖南線の終點に當たれるところ、こゝには代理店が設けられて居り、日本人の去來もいくらかあるところである。この地は竹に名を得た高節竹（羅漢竹）の野生せるものが多く、翰墨の士に愛賞されてゐる。この竹は洞庭の君山に野生する斑竹と共に、湖南の名物として評判が高い。日本では、とかく藥品を使ひ斑竹の模造品を拵へてゐる者があるが、未だ置漢竹の模造品まで、悪戯する者は見ない。尚この湘水の邊りは文竹、その他、工藝用の竹莖を見ることが多いので、近來日本の雨傘用の柄を目當てに、この地方から流れ出る品はかなり多いとの事である。

長沙

長沙は湘水を上る左岸にあつて、湖南省城としての種々な重要性を有してゐる。日本の領事館は街外れから遠く隔つたところにある。曾國藩の故宅だの、又城壁の上に高く聳ゆる天心閣だの、その他四明銀行だの、日清公司の碼頭だの、白沙井だの、中洲だの、見るべき所はかなりあるのである。

城内の目抜きには、錫細工屋、銀號、緞綢店、書林、米舖（ビホ）など軒を並べ、かなりの繁華振りを見せ、取引も活潑である。書林は從來學問の府といはれてゐただけに、學者文人を出してゐる關係上、古書珍書の藏せらるゝものが多く、その價も亦廉である。けれ共打續く兵亂騷ぎに、いつしか散逸、又燒失し、今では珍書漁りの遊客に失望させることが夥だしい。

目抜きの通りに、輪奐の美を盡へてゐた四明銀行なども、いつしか兵匪に破壞せられ、見る影もなくめちやくちやにされてしまつた。城内の生活は、大銀行の近所に住居を持つべからずである。普通銀行の正門は、武裝した兵隊によつて警備されてもゐるが、左右兩隣の民家は手薄であるため、先づ之を襲はんとするものは、二三軒手前の隣家から破壞し始める。そして側面の煉瓦を破り、窓を壞し、一時にどつとなだれ込むのである。

田舍の都城に聳ゆる大厦高樓には、鐵筋のものはなく、唯粗雜な煉瓦を玩具式に積重ねたと云ふだけに過ぎぬ。だから腕つ節の強い兵隊どもが、數人の力でやつたならば、いかな大銀行でも臺なしにしてしまうことくらゐ譯はないのである。事實自分は破壞の翌日、現場に親しく踏込んで見たこともあるが、内部は煉瓦の山となり亂れ、近所界隈は荒野の如くになつてゐる。全く見る影もなく、一物も餘さず奪ひ去られてゐるのである。

一大都城の中にかゝる慘事を見ることは、强烈な湖南人でなければ出來ない仕事だとも思はれたのであつた。我が日本の領事館が、わざ〳〵郊外の遠い江岸に設けられてゐるのは、如何なる都合のあつてのことか、その邊の事は兎も角として、城内にある在留民達にとつては、いざ事のあつた時は、間にも拍子にも合はない。ランチを飛ばして行つたとしても、片道二三十分はかゝる。日清の碼頭あたりに卷き起された過去幾度かの騷動事變には、毎度日支間に、血の雨を見たことが少くないのである。そのため漢口同樣に、長沙にはいつも日本の軍艦が日章旗を飜して警備の任に當つてゐる。時折りサーチライトでピカ〳〵長沙の空を輝してゐることもある。何れにしても、長沙並びに長沙附近の雰圍氣は、時折り度をはづした珍らしい事變を起し、暗雲低迷の形勢を作るやうである。譚延闓現はれ、唐生智出で、蔣介石北上すると云つたやうに、實に走馬燈の如くこの地は忙はしく、一進一退は

あるも局面轉回は見目苦しい。從つて出版物に於ても、赤色左派の印刷物が刊行され、共産黨ABCだの、馬克斯（マルクス）だの、モダン式のトツプを切つたもののみ多く版にせられてゐる。城内の目抜き通りを左派の冊子幾百冊となく小脇に抱え、揚々として歩いてゐる青年等をも見ることすらある。嘗ては英國宣教師が、この地に普教すること三十七八年、土民の信を得ること最も厚く、精神的にたしかに或るものを摑んでゐた。そしてその界隈の青年達をばすつかり引きつけ、專ら手なづけてゐたこともあつたのであるが、最近は最早や、それも一場の夢と化し、英人何者ぞ、英國何ものぞ、文化侵略の敵は是れ〇〇〇といつたやうな宣傳をなし、大聲叱呼するに至つた。その爲め遂に流石の忍耐強き宣教師も引揚げの憂目を見るに至つた。我が漢口に於ける總領事館の日支解決の件案は、數百件にも上つてゐると云はれてゐるが、その大半は皆長沙關係の事件である。以てそのいかに面倒の多いところであるか、この間の消息が察せられるのである。

○

長沙を流れる湘水は、もとより年が年中濁流であるが、陸には稀れに清水の湧き出る井戸がある。その街外れにも、一つの小井戸があるが、土民は之を白沙井と呼び、その井戸あるがために、地方界隈の名前までが白沙井と呼ばれてゐる。三町五町と、その邊りの民家の嬶さん達や男衆は、手桶に、又天秤棒に、早朝未明からこれに集まり、先客の順序で清水を汲んで行く。井戸は淺く、底に二枚の石板がいくらか開かせて敷いてある。手を差伸べ杓を持つて汲み取らるゝ位の深さである。底の石は面が半ば圓く減り凹くなつてゐる。濁流の水邊に生活せる住民達は、矢張りこの清き水の色に心が惹かされてゐるものと見える。

白沙井の苔を上りつめた突當りのうちは、隱君子の故宅と云つた構へである。之を友人たちの紹介にて訪ねて見る。すると、易演村といふ年のほど五十ばかりの學者が後房にゐる。全くの隱君子で、見るからに古風な相貌を有してゐる。通さるゝがまゝに書齋に這入つて見る。すると、帙入りの漢籍が壁に高く仰ぎ見られる。一方の卓上には、數多の古硯が無雜作に幾十面となく置かれてある。談は歴史に、翰墨に、風物にと、移り移つたが、結局は古硯の話に這入つた。易先生は、折角の古硯を愛藏してゐられながら、どれもこれも埃の堆くつもり、一々その紫檀の蓋をとつて見る氣にもなれなかつた位に、やりつぱなしになつてゐた。それもその筈である。先生は肥大した體格に、落着いた聲の沈んだ話振りである。そして一向に物に動じないと云ふところがある。卓上の古硯に、埃が積まうが、蜘蛛の巢が張られようが一向眼中にないのである。宛ら空家の中にゐるのと同じやうな態度でゐるところが讀める。

かつて廬山の麓、十里舗の里に、李盛鐸大人の留守宅を訪ねた時の部屋の様子と如何にもよく似てゐる。北支にはよく見る部屋の景色であるが、場所が湘南の長沙だけに、何となく物珍らしく感ぜられたのであつた。一方には、青年者流の間に、度を失した共産氣分、馬克斯（マルクス）の思想の叫びなど、かなり漲つてもゐるが、又他方にはそれを超越した悠久な天地がなだらかに流れてゐることが、之によつて物語られてゐることを知つたのである。

○

長沙はその延長地帶として、湘水の江上に細長く中洲をなしてゐる綠蔭懐かしい水郷がある。外人の邸宅衙門などもこれに設けられてゐる。更に水を渡れば彼岸の岳麓山が高く聳え、登山道路も坦砥の如く開け通じてゐる。長沙から半天に仰ぎ見らるゝ江天の暮雪は、八景に歌はれてゐる位であるから、相當な佳景をなしてゐるが、しかし親しく岳麓に登り、自分で、老樹の蔭深き愛晩亭を訪ねて見たり、又革命の志士で、特に日本人に親しみのあつた黄興、蔡鍔の墓碑を參拜して見たり、山内をあちこち逍遙し、脚下、長沙の水景を一瞬のうちに見ると一種又詩情の唆らるゝものがある。黄、蔡兩志士の英靈はとこしなへにこの名山に漾ひ、湖南の士氣を永久に指導してゐる感じさへする。碑前に立ち、碑身を眺むると、誰れ人の仕わざか、蔡鍔の方の花崗石の碑身から、その氏名を深肉刻りにした銅の鑄物をばきれいに拔き取り、持去つてゐるを見る。こは恐らく、煎じて飲ましめ、その精神の發露にあやからんとするの意も出たものか。それとも墓泥棒の惡戯に過ぎないものか。湖南の青年たちは之を如何に判斷せらるゝや。

山中で名高いものは、山下にその由緒も深き岳麓書院のあることである。相當な古建築であるが、こはもと千有餘年の昔し宋の朱洞の創設にかゝり、次いで朱子がこれに手を入れ、修築して專ら學徒の養成所に當てられてゐた。その後、清朝に至り、湖南の碩學、王船山がこれに據り、天下の士を引きつけ、所謂湖南學派の基礎がこゝに起り、大いにその學究に又士氣の鼓舞にと努力せられる所があつた。

今日、湖南の天地が、その士氣に燃え、時代の尖端を切る意氣を見せてゐると云ふのも、この岳麓書院の歷史の發露するところで決して偶然でないのである。

葉德輝先生の如きも、先祖の地、蘇州を早く出でて、こゝに半生を送つてゐられた。先生の德を慕ひ笈を負うて來たり集まる者は多かつた。その中には、第一に松崎鶴雄氏があり、又鹽谷溫氏があると云ふ風であつた。長沙には又上述の王先謙、王闓運の諸先生なども出てゐるので、湖南の學術は一世を風靡するに足りるものがあつた。既に革命事變以前にかうした一世に擢んでてゐるものがあつた

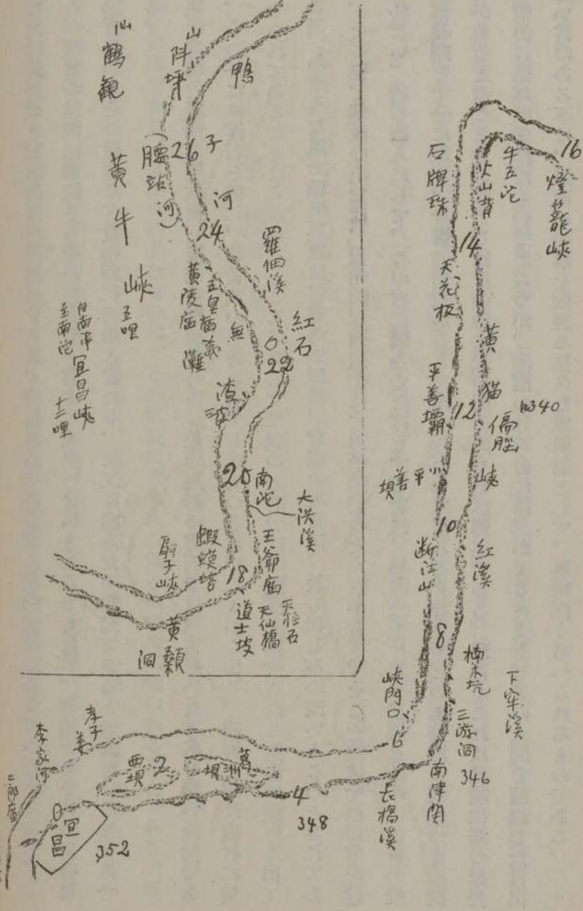
のである。

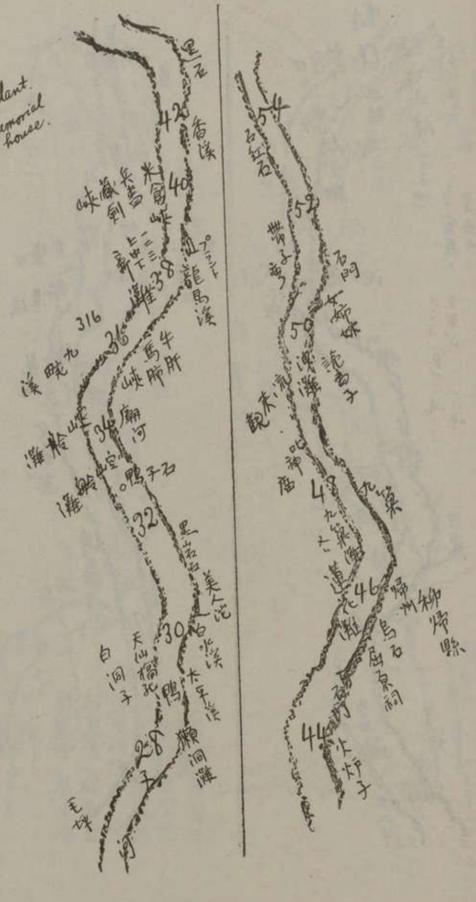
長沙の旅は、水を渡り岳麓山に游んでこそ、始めて長沙を語ることが出來る。しかしこれは長沙の山水、風物に就いて云ふ話である。若し實際方面のことに就いて、今日以後、長沙を中心とした日本人の發展せんとする者が、之を窺はんとするには、何んといつても、日清の碼頭あたりに着眼すべきである。それにしても日本人たるもの特に他の省のものを見る目で以つて、一層之を達觀し、長沙の人情、生活の裏にひそむ機微に觸れて深く察する所がなくてはならぬのである。洞庭を南に向かつた方面は、この邊で先づおき、更に西のかたに向ふことゝする。

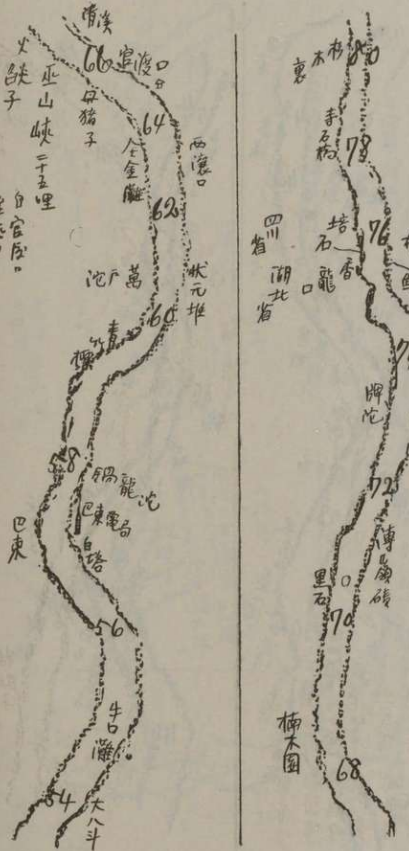
武　陵（常　德）

洞庭を西に渡れば、常德の街がある。漢口から直通の定期船が之に通うてゐる、こは長沙に於ける場合と同樣である。常德で有名なものは、その附近に古來人の知る桃源の名鄕のあることである。所謂武陵桃源の名はこれから出てゐる。もと常德は、古名を武陵といひ、この邊り一帶は、交通の便の少なかつたために、却つて平和の別天地をなしてゐた。桃源の西、三十支里の所に行つて見ると、晉陶淵明の故宅として知られた所があり、こゝに今も尙、淵明祠を祀つた古廟が殘つてゐる。文學上に見えた武陵桃源と云ふ所は、理想化せられ、一種云ふべからざる美的仙境として傳へられてゐる。ころが現實の桃源は別段さうその特異性を有する光景のよいところでもなく、普通おきまりの田舍町に過ぎない。その位置は、貴州銅仁街道に當たり、沅江に臨んだ平和鄕であると云ふだけのところである。

更に奥地、辰州の懸城は、辰州の聯想せらるゝ位で陶器の方面では、古來かなり名の響いた所である。その外に激溪石と稱し、綠黃紫の三層を有する珍石の名材がこゝから出る。硯屛に或は硯材に愛用せられてゐることは人の知るところである。又硯の方面では又蠻溪と稱せられる紫色の硯材も出てゐる。かやうな風で輸墨界では、省内で辰沙、常德の地方は、最も親しみの深いところとされてゐる。その他、傳說の上では、貴州銅仁街道には、男子禁制の女人村があり、そこを突破せねば省を越されない。若し旅人にして、この村に踏みこまんとする者は、鷄肉三十斤卵十二個を始め、色々の壯湯補身劑を十分に取り、身體の用意からしてかゝらなくては入るを許さずといふ特別の條件つきの關所があるとのことである。こはその地方民の間に聞くいひ傳へである。恐らくこれは武陵桃源の延長地帶から生み出されたものであらうが、湖南の片田舍には、かゝるユートピアの人間を超越した自出度い村のある事は、湖南の半面を物語る悠久な寧園氣として、興味深く考へられるものである。

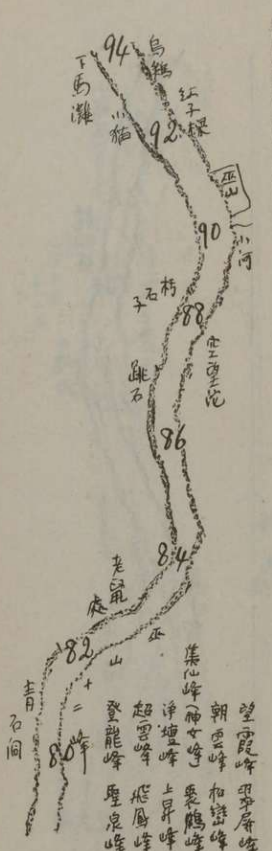

燈籠峡
石牌
黄牛峡
宜昌
南沱
大渓
紅石
黄猫
348
352
346
340

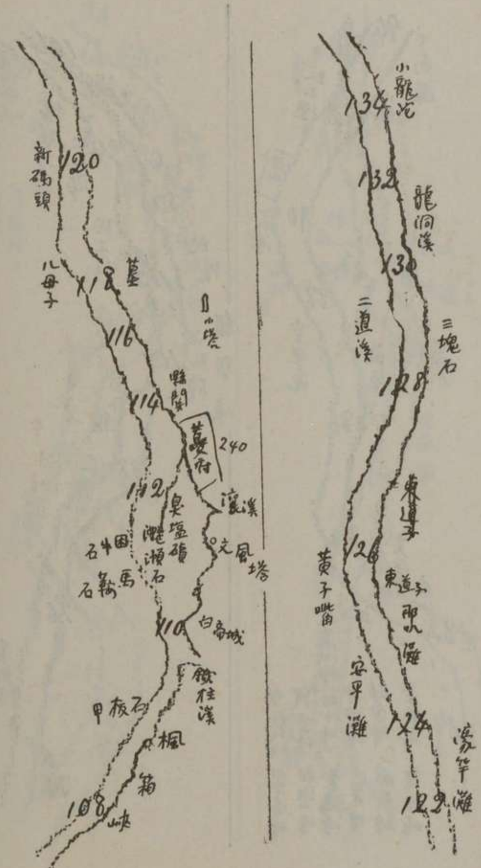

plant. memorial house.
香渓
兵書宝剣峡
牛肝馬肺峡
316
美人沱
白洞子
歸州
大炉子


湖北省
布袋口
鯉魚溪
萬流
金雨灘
牌沱
博厚磧
黑石
楠木園
68
70
72
74
76
78
80
四川省
湖北省
培石
龍口
香

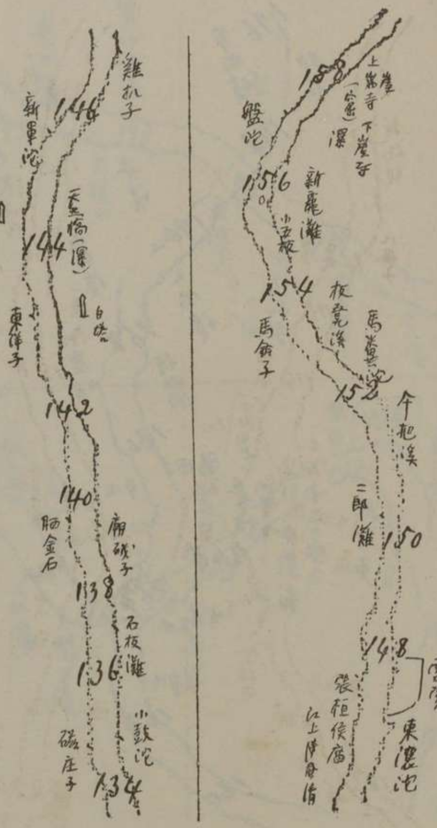
清溪
口合
渡
西瀼口
狀元堆
合金雞
萬流沱
龍沱
東西
白塔
巴東
牛口灘
大八斗
54
56
58
60
62
64
66
巫山峽二十五里
自宜昌至巫山
猫子
犬跳子

風箱峽
四里
鐵灘
狀元灘
猫子石
油私磧
宝子灘
流書子
枯肚子
下馬灘
錯開峽
100
102
104
106

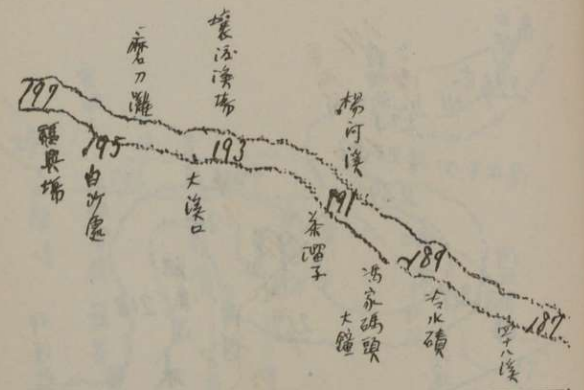

烏鴉
紅子碛
下馬灘
小溪
巫山
小河
杉木
石子
跳石
老鼠
虎
巫山
書石洞
十二峰
望霞峰
翠屏峰
朝雲峰
松巒峰
集仙峰
神女峰
夔鵬峰
淨壇峰
上昇峰
起雲峰
飛鳳峰
登龍峰
聖泉峰
86
88
90
92
94
80
82
84

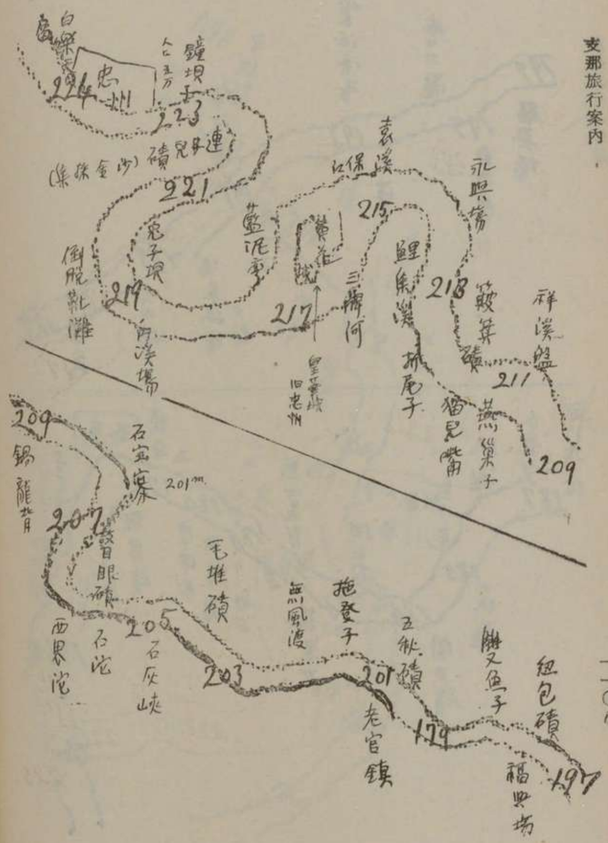


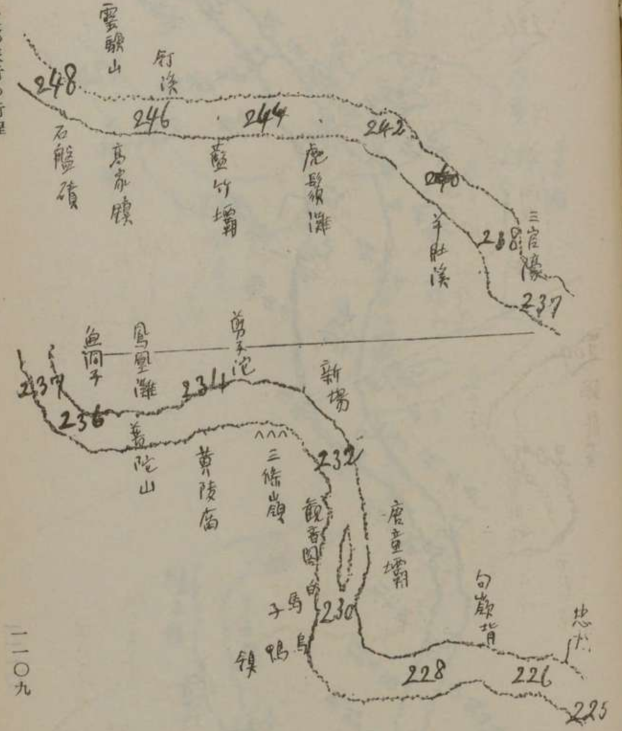
小龍沱
134
132
龍洞溪
130
二道溪
三塊石
128
東洋子
126
黄子嘴
安平灘
124
122
新獅頭
120
118
116
114
夔府
240
112
文風塔
110
白帝城
鐵柱溪
甲板石
108

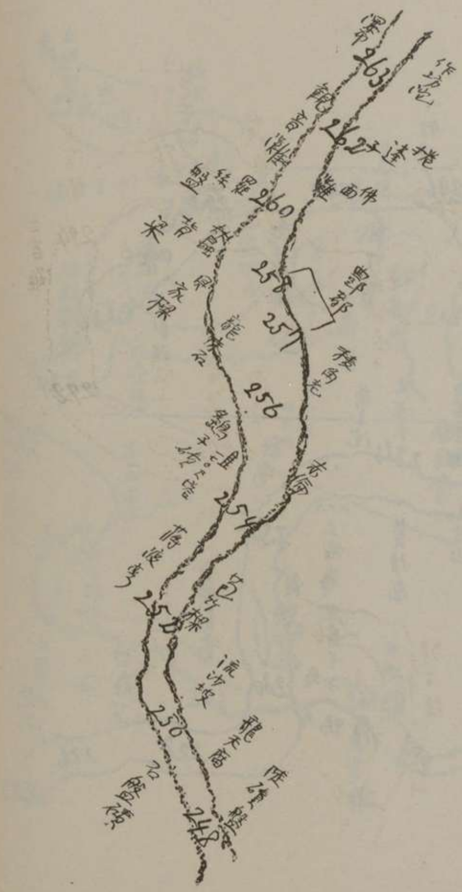


158
盤沱
156
新龍灘
154
馬鞍子
152
150
148
雲陽
東瀼沱
146
雞孔子
144
七層白塔
142
140
138
石板灘
136
134




224
忠州
223
221
藍泥亭
219
217
三撑河
215
213
211
209
祥溪盤
燕巢子
209
石寶寨
207
205
203
201
199
197
毛堆磧
無風渡
石沱
老官鎮
福興場
西界沱

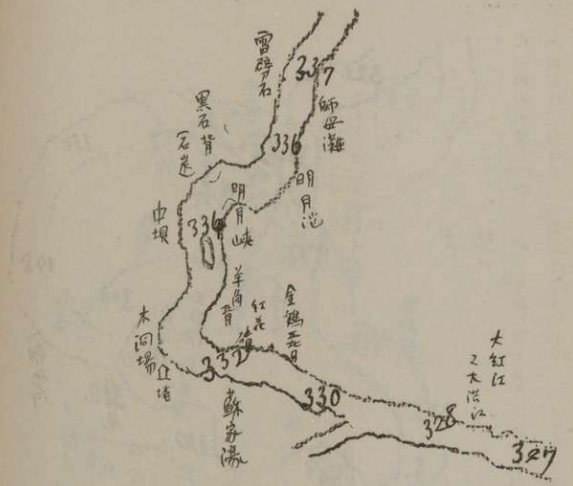

248
246
244
242
240
238
237
236
234
232
230
228
226
225
藍竹壩
羊肚溪
魚洞子
鳳凰灘
新場
黄陵廟
忠州

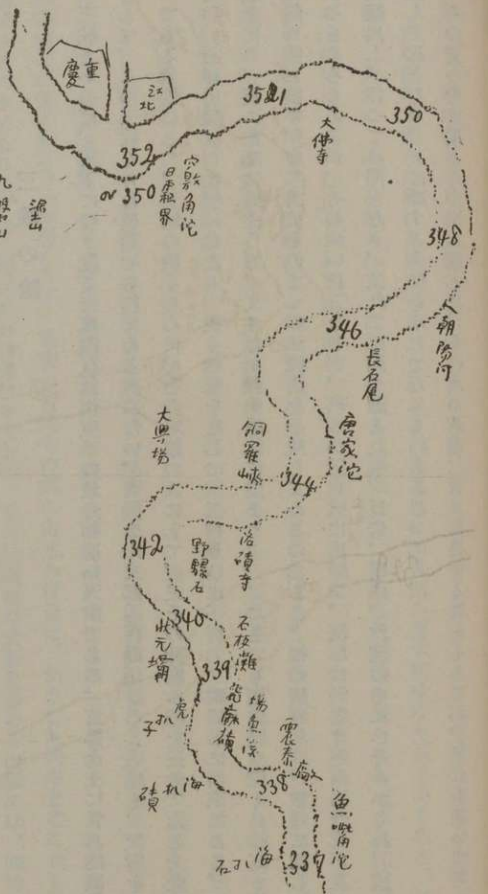

263
262
260
258
257
256
254
252
250
248

284
282
新場
280
銀盃子
278
276
深渓場
294
三官灘
272
土脳子
南沱場
270
268
中秋
266
立石鎮
264

牛尿磧
300
桿子磧
298
剪刀峽
296
里渡場
294
龍門関
292
分水嶺
目
桂林
290
288
浔州
騾馬
豬子
豬灘
286
目
浔陵江
又黔江
龍潯灘
龍王廟
目
284
黄茅嶺南

320
318
西嶺堆
(往昔煙墩)
獨溜廟
石住子
316
大堆梁
指鹿峰
314
長寺
老中磧
金家灘
312
龍
目
鉤魚背
無底
310
308
龍
目
黄茅梁
危園石
黄楝樹坪
白高家鎮
石牛欄
又黄魚溪
黄茅嶺
306
柏檜南
石家沈
304
仙女寨
青龍子
302
寧武
牛尿灘
300





〔三峽の天險を突破し、四川重慶に至る長江上流の航路圖、十六葉。四川省のところで本文を讀破して行く上に讀者は、隨時この水路圖を照し合はせ、その行程の變化と、名勝舊蹟の要所に注意せられたい。〕

四川省

三峽の險

三峽といへば、天下に鳴り渡る支那四百餘州中での最も物凄い天險である。支那全土に世界的風景として、この三峽くらゐ嘆美せられてゐる所はない。實際また支那四百餘州ひろしと雖も、天險をもつて鳴る景觀にして、三峽の險くらゐに、その規模の大にして、又その壯絶の極を見せてゐる大景はない。その山脈は百餘哩にわたり、長く嶂壁をなして、二列互ひに平行し、藥研形に出來てゐる。三峽を出て、更に重慶に進まうと、又さらに叙州岷江に進まうと、どこまでも兩山脈は深く且つ高く蜿蜒幾百哩と續き、宛ら天成そのまゝの江流溝を形成してゐるのである。幅の廣き所は、數哩に達してゐるところもあるが、その狹い所となると、わづか三百呎に出でず、流れは渦巻きと激湍急流が互に相續出し、停つては淵となり、流れては瀧つ瀨となり、巨岩、暗礁、江流の中にひそみかくれ、或は飛んで峯となり、天に沖する奇勢を示してゐるものもある。

その夏の增水期と冬の減水期とは、その水の落差二百尺に達することもあるが、それを除いて考へて見ても、常に四五千尺の高嶺が西岸にそゝり立ち、天に連なつて見ゆるといふ奇拔な光景なのである。或は綠なす老木の茂れる峯があるかと思ふと、又鶯色に深き苔の蒸す圓味ゆたかな山もある。又茶色に、黃色に、山骨の彩られて、江流の色とよく調和し合つてゐる色彩美も見られる。或は江岸灣頭の薄桃色に、又黃色に彩られた高山植物の花畑の開けた山の端に、白羊の二三が戲れ、あたりに人影一つ見ないと言つた武陵桃源その儘の別天地を見ることもある。全く言葉を飾るわけではないが、江邊の山に塵一つとゞめず、ビロードか絨毯でも敷きつめたかと思はるゝ如き優しみのある仙境をなしてゐる所もある。溪流かたはらにさゝめき、一幅の南畫をそのまゝ表現してゐるやうな所もある。さうかと思ふと、又峽中、天崖の一角がぼくり頽れ落ちて、幾千尺の溪流を激せしめ、飛沫を散ばしてゐる所もある。又峯の頂、白雲生ずる所に、穴居の民の虫の如く靜かに動ける影を見ることもある。又直下の溪流には、太公望をきめ込んだ山民の悠々釣りを垂れてゐる所などもあり、これ亦南畫の場面その儘である。「山高く月小」東坡の言葉その儘の山水の實景は、かうした峽中どこにでも、隨所々々に求められる。全く得がたい詩景のみである。その他滿俺の岩石を含める山脈には、四時を通じて紫色鮮やかな美景を湛へ、濁流の黃水なると相映じ、一種の山水美を呈してゐる所もある。かくの如き峽中の光景はその一例であるが、尚求むるに從つて限りなくいくらでも見出される所と

して、その平凡な眺めの一つもないのは不思議である。その何れの汀渚、何れの岸頭、また何れの峯の頂、どこの點をつかまへて取つて見ても、凡て皆これ千古天成の神境そのものである。全く人間離れのした新景のみを打列ねた山水美である。その中でも最も多く絶景の集まれる地域をば取入れ、これを世人の所謂三峽の名によつて稱へ且つ之を賞めてゐるわけである。今その三峽の名稱と、その名に見るそれぞれの峽中の長さとを左に示して置く。

一、宜昌峽――十二哩（南津關より南沱に至る）
二、巫山峽――二十五哩（官渡口より巫山に至る）
三、風箱峽――四哩（猫兒頭より白帝城に至る）

ところでこの三峽のうち、宜昌峽と云ふのは、宜昌を遡ること六哩の地點、峽門口のあたりから云ふのであつて、その地勢は次第に奇拔な山容を見せ、そろ〳〵峽中にかゝつたなあ？　と云つた豫感を與へてくれるのである。

次ぎに巫山峽の入口、官渡口と云ふは、宜昌を去る六十六哩の地點から始まり、峽中第一の絶景と稱せられる巫山十二峯のあるあたりは、その巫山峽でも最もよい場所と呼ばれ、右に左に、峯に、水に、殆んど應接に遑のない眺めを有してゐるのである。

又風箱峽の始まる所は、宜昌を去る百六哩の地點で、その附近には、鐵灘その他の渦巻のあまた見える所である。峽中の絶嶽は最も規模も大きく、白雲は常に兩岸の山を閉ぢこめ、兩岸の猿聲鳴いてやまざるに。云々といつたあの天下の秘境である。その兩岸相迫れるところの峽は、長江全航路中でも、一等幅の狹い所だとされてゐる。こゝはわづかに三百尺の距離しかない。全く呼べば答へる位の所であつて、四千七百尺の斷崖が、左右兩方から相迫り對立してゐる形である。その又急流の岩に當たり、さわめく音も相當物凄く、峽の長さはわづか四哩であるとはいへ、三峽中では最も有數な奇拔の秘境として、詩人の心をひどく惹きつけてゐる所である。

峽を出た所に見る右岸の山麓には李白の吟じた白帝城が彩雲の間に聳えてゐる。その側に文風塔の幽趣が指される。更にそのかみ手には小海を隔てゝ夔府（奉節縣）の山城があるのである。

三峽は、全體の長さが百十一哩と稱せられ、その間山色天に連なり、渦巻は各所に現はれ、激灘、水流、又緩に又急に、所謂三峽の領江、船頭の頭を惱ましてゐる灘が隨所にあるのである。今こゝにその灘のうちの名高いものを列記し左に示して見よう。

一、新　灘（宜昌を去る三十八哩、龍馬溪と牛肝馬肺峽の間にあり、上中下の三段に別れ、キヤプテン・ブラントの記念碑の下の所にて止む）

二、洩灘（宜昌より五十哩、流來關と讀書子の間にある）
三、牛口灘（ニウコウタン）（宜昌を去る五十五哩、大八斗と巴東の間にある）
四、下馬灘（シヤーマータン）（宜昌を去る九十五哩、下馬はシヤーマンと發音する）
五、寶子灘（パオヅタン）（宜昌を去る九十九哩、太古の大禹がやりそこなつたと云はるゝ錯開峽の下にある有名な峽である）

このほかに尙、三峽を出てから上には、狐灘（フータン）（萬縣の上）觀音灘（クワンインタン）（重慶の上）群猪灘（涪縣の下）などがある。何れも夫々特徴のある急流激灘で、古來船の進路をとる上に、一番危險を感ぜしめたものである。若し渦卷の中に卷込まれ或は坂落しに下つてゐる流れに逆つた如き場合には、容易のことでは、これを突破することは出來ない。

それについて面白い話が傳へられてゐる。かりに分厚い鐵板を一板、江上に投げ、それが渦卷の中心にかかつたとする。その時は、絶大の力でそれが奈落の底へ吸ひ込まれようとする。そこで見事にその鐵板は、恐ろしい音をして二つに割れてしまふ位である。云々と土民は云つてゐる。

今やこれらの難所を突破するためにとて、四川ではなるべく大きな巴蜀獨特の民船を作り、難破の患ひを輕減するやうにと努められてゐる。それにしても、プラントの統計によつて見ると、一年に少なくとも、一千人の溺死者を見る勘定であると云はれてゐる。

日本人では、明治の初めに、熊本天草の人竹添井々居士が、始めてこれを下つてゐるし、六朝以來峽江下りの船頭の船歌にも「黃牛黃牛又黃牛」といつた俗謠までが出來てゐるほどである。それ位であるから、唐の李白が白帝城を下つた時の詩にも、こゝに云つた通りの面目が、躍出してゐるのに氣がつくのである。

朝に辭す白帝彩雲の間
千里の江陵一日にして還る
兩岸の猿聲啼いてやまざるに
輕舟すでに過ぐ萬重の山

早發白帝城　李白

（朝辭白帝彩雲間　千里江陵一日還　兩岸猿聲啼不住　輕舟已過萬重山）

この詩は李白が、白帝城から三峽を下り、下流、湖北の荊州（江陵）まで達する間の矢の如き速力について吟じたものである。今も尙その流れの速い光景については、千年の昔と何んら變つてゐる所はないのである。實際の上から見て、今日の三峽は、猿聲を聞く祕境でもあるが、半面には、山の中腹

に、又頂にと、猫額大の天地をなりと求め、これに山民が野菜だの、穀類だの作り、あたり靜かな峽中生活を營める有樣が指される。大抵なところには人間を見るが、全然人影を見ないのは先づ巫山十二峯のあたりである。こは斷崖絶壁の所であるから仕方がないのである。風箱峽の如き所でも、その繩梯子をかけてまで、山上の藥草を求めに登り下りをしてゐる樣子である。

江岸の交通は、その絶壁に道をうがち、危く掘り割つた半ばトンネル式の棧道を往來に當て、之が去來に便じてゐる。しかし實を云ふと、これは山民一般の通路といふよりか、むしろ民船の曳子のために出來た小徑であると云ふ方が適當であると思はれる。

次ぎには、峽中に於ける重な都邑を一とわたり見、又その史蹟名所のあるものは、その大要を左に述べて見る

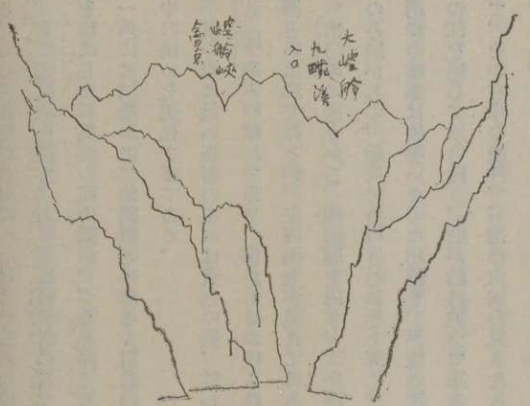
○

先づ宜昌峽中に見るものから始める。宜昌峽で見るべきものは平善壩の對岸、偏腦に石工の穴居村のあることである。そのあたり一帶は黃猫峽と呼ばれ、對岸斷江山の山色とよい風致をなしてゐる。江を上り扇子峽に到れば、對岸に高く聳ゆる天柱石が雲間に仰ぎ見られる。これに又巨岩が倒れかゝつて天然の橋をなしてゐる。船頭たちはこれを呼んで、天仙橋といひ、この邊りの呼び物となしてゐる。この天仙橋から南沱へかけての右岸の山景は、仰ぎ見るだに懐かしいところが多い。

更に宜昌峽を出て、上み手は鴨子河の名でこの長江の流れを呼びなしてゐる。左岸には黃色の山骨を現はした屏風式の高山脈が、づうと長く天に連なり、その長さ五哩からに達してゐる。最後の峯の一角には、遙かに、仙鶴觀と呼ばるゝ道敎の寺が指される。雲間に聳ゆる道觀のこととて、ひどく峽中の眺めを美化させてゐる。

麓の岸に近い森影の中には黃色の壁、鮮かな古廟のありて祕境の清趣をこゝに湛へ、土民の間では黃陵廟と呼ばれてゐる。懐かしさの唆られる山寺の眺めである。この邊りの流れは灘をなし、無義灘といはれてゐるが、左程渦卷が見えてゐると云ふほどでもない。

山斗坪の邊りから、獺洞灘を過ぎ、太平溪、鴨子石のあたり迄は兩岸の山は低く、水は淺く、仇波のみ騒がしく、船底にそのざわめきを聞く。所が忽ちその鴨子石のところを過ぐれば形勢は一變し、兩岸の峽峯は物凄いまでに相迫り、黒龍の天界から直下するかと思はしむる如き山勢を見る。双峯の江を扼して水に降り、我が船に迫つて來るかと云つた眺である。これぞ有名な崆給灘の難所であつて、その右岸の漁村、石造の山家の見えたるは廟河の里で、老領江（水先案内）李翁を出してゐる所である。



三峽の險のうちにて黃牛峽を出てまもなく出あふ物凄き天險。
瞿塘峽の奇觀。

峯を右に曲つたと思ふと、そこには牛肝馬肺峽と呼ばれてゐる物凄い斷巖絶壁がある。山景峭壁の中央に、紅の牛肝の形した巨岩に、叉馬肺の狀をなせる岩が、宙にぶらさがつた形で見えてゐる。今はその一つを失つて舊態をとゞめないが、その呼び名の奇拔であるだけに、巖壁の懸岩も亦どことなく物凄く仰ぎ見られる。キヤプテン・ブラントの石造記念碑は、丘上に高く指され、その江上、新灘の難所のある所も打忘れて、旅人は目を惹きつけさせらるゝ所である。

更にその上には、米倉峽といふ幽峽がある。平偏な頁岩が、數多よろひ式に絶壁に垂れかゝり、宛ら兵書の江上に亂れ落ちんとする如き趣きに見らるゝものがある。土民相傳へて、こは昔諸葛孔明がこゝに兵書と寶劍とを藏め匿してゐた所だ云々といつてゐる。それで一に又これを兵書藏劍峽とも呼んでゐる。これを米倉峽とも云つてゐるのは、矢張り孔明が兵を動かして、魏と鬪つた時こゝに兵糧を圍つて置いた祕密の倉のある所だといはれる傳說のあるところから、この名が起つたものらしい。

兵書藏劍峽は宜昌から四十哩の上に當るところて、特に峽行の旅客には史的興味を唆ることが夥しい。そこから更に二哩さかのぼると、右岸に漢の美人王昭君を出した歷史上有名な谷地がある、香溪と云ふがこれである。この溪谷には水流が見える。その溪流には特殊な鑛物の含まれてゐる爲め芳香が高い。溪流を奥へ遡ると王昭君を生んだ山里が見出されるのである。香溪からかみ手右岸の歸州、秭歸縣の邊りまでは蓮花灘と呼ばれ、かなりな急流で仇波荒くそゝり立ち、難航の場所と見られてゐる。右岸に指顧さるゝ屈原祠は烏石の里にあり、鯉魚の傳說で有名であることは既に前に述べた通りである。

流來觀の江上へ來ると、こゝは峽中屈指の水流激しき場所でこれを洩灘と呼ぶ。その名を聞いただけでもぞつとするところ。老練な船頭でも、こゝでは腕に撚りをかけて一生懸命やる所である。次いで牛口灘にかゝる。こゝを過ぎると巴東縣の山都に達するのである。

巴東は流石に山里としては相當大きい縣街である。白塔高く對岸に聳え、塔下には巴東電局の看板も讀まれる。こゝに電信局を見るのは珍らしく又懐かしい。

本來峽中ならぬ普通の所に出來た縣城であるならば、縣の形式として凡て皆城壁をもつて圍まれるのが原則となつてゐる。ところがひとり巴東縣のみは四百餘州中一例外として、人工に成る城壁を持たない縣城として知られてゐる。蓋し、これは人間のつくつた要害に比べて更に幾百千倍の天險をおのづから有してゐるわけであつて、人工城壁の必要なんか超越してゐることを物語るものである。天險に惠まれてゐる興味深き山都として忘れがたいところである。千年の昔、唐の詩人が望鄉の念に耐えないで斷腸の思ひをした歷史の蹟は、風韻嘯風の間に幾度か吟じつくされてゐる。今その一例で人によく知られたものを左に紹介して見る。

國を去つて三巴遠し
樓にのぼる萬里の春
心をいたましむ江上の客
これ故鄉の人ならず

南樓望　眞撰

（去國三巴遠　登樓萬里春　傷心江上客　不是故鄉人）

かくも唐の詩人の心を刺戟してゐる所に、今は電信局を見るとは、時代の推移、文化の進運も覿はれて、一段峽中の思ひ出を深からしむるものがあるのである。

巴東を出て青竹標、狀元推など云ふを過ぎると、愈〻こゝからは巫山峽にさしかゝるのである。正面の水鄉には高く聳ゆるピラミツト形の翠峯を見る。山腹に指さゝる孤廟は巫山峽に入る目標の思ひ出となるもので、こゝは宜昌から六十六哩のところ。評判の巫山の夢の傳說はこの峽中の奥、神女觀の廟宇から出てゐるといはれてゐるが、この邊りは物語り童謠などに富んでゐる。火酸子、楠木園、萬流の各名所を過ぎて上ることしばし、愈〻こゝに湖北盡き、四川省入口に來る。湖北四川の省境で萬流の各名所を過ぎて上ることしばし、愈〻こゝに湖北盡き、四川省入口に來る。湖北四川の省境である。右岸に見るは鯽魚溪の溪流と布袋口である。又左岸に見るは香龍口の溪流と培石（ペイシー）である。省標に立てられた石柱は神さびて低く、よく注意して見てゐると漁家の山里も見える。こゝに四川第一の關門培石（ペイシー）と云ふがある。愈〻巴蜀の天地はこれから始まる。この地點は實に宜昌を去る七十六哩のところで記念すべき心持のおのづから呼び起こされる所である。

○

巫山の峽中は、湖北四川の兩省にまたがりそのうち例の巫山十二峯と云ふは奥へ進むに從ひ、右岸

の空に高く見ゆる亂立の奇峯である。その山容の怪異なると、その規模の雄大なことは全く言語に絶するものがある。その江を壓して聳ゆる奇峯亂嶂の姿は懸崖幾千丈、しかもその山骨は大體水成岩様の帶層をかさね相迫つて現はれてゐる。十二峯何れも凸兀たる岩山の趣きで、頂上わづかに草を見るのみ。その頂上山、又山の上に亂立する峯を見る。その姿は或は美人の舞ひ踊るが如きものがあり、又鳳凰の將に飛び立たんとする如きものがあり、又仙人の醉ひ倒れんとする如きがあり、その變化の妙、造化の巧は到底人間の批評を許さないものがある。之を繪に描かんとして、畫工の腕を試めしみるのも無駄ではないが、しかしうまく成功したとした處で、そは萬分の一も造化の眞を傳へることは出來ないかと考へらるゝものがある。

巫山の連峯は誠によろしい。その實際を見ない人がかりに古人の畫卷を繙いたり、或は又陸放翁や竹添井々翁あたりの傑作を誦じ味はつたりして見ると、如何にも最早や山水の極致を吟じ來つて餘すところなしと云つた風に考へられる。所が親しく自分でこの現場を實地に踏破し來たる時は、その造化の神鑿の如何にも無限大にして、しかも誠に無雜作に出來あがつてゐるところが判る。殆んど詩文も畫卷も何もあつたものでない。これらはさう云つては相濟まないが、太陽の前の星の如きものとなつてしまふと云ふことに氣がつく。

恐らく支那大陸の山水の美は、三峽に入り、巫山十二峯のところに來て始めてこゝにその最高潮に達した神域が味はれるのである。安徽に見る黃山三十六峯は、造化の妙は即ち妙に違ひはないのである。けれ共唯惜しむらくはそこに水がない。又廬山に見る五老峯の美は、美しいこと美しく、霧峯煙雨の趣きに富んではゐるけれ共これ亦水に乏しい。ひとり三峽の名山、奇峯は常に山水の兩者を兼具し、濁流ではあるが、その濁流のところが却つて雄大味を添へることになり、一段の大陸風景が力強く表現されてゐる。

巫山十二峯は、その中でも水の色、岩の肌、霞の色彩、煙雨の配合、見る見る山氣を受て移り變り、或は紫に或は茶に又黃に綠に灰にと、これが煙雨の動く景色につれて色々に隱顯するのである。であるから全く、巫山十二峯は單なる山水の美ではない。刻々に變る生きた景色として受取れる。又瞬間に常に動いてゐる感じさへする。事實我が船の動く速力によりて、又自ら山容も刻一刻と變り行き、手前の峯に遮られてゐた怪巉奇峯が、次第に姿を見せて來るやうになり、霧立ち昇る祕境から又別の幽峯が天の一方にによきつと顏を出して來るのである。その隱顯出沒する煙雨の光景だけでも、筆紙に表現せられないものがある。たとひそこには表現描寫が出來たとしても、單なる寫生をしただけでは、その神威と環境の偉大な山氣並びにその造化の極致とは容易につかめない。之を言外に含めて表

はし來たるなど云ふは殆んど難かしい。況んやこれをその峽中に入らず、實地に踏破してゐない日本人の頭へ反映せしむる如きことは野望に近い話である。かゝる望みを抱いてゐたとしても始まらないのである。こゝにはその十二峯の名前として知られたものを古人の云ふがまゝの稱呼で示して見る。大體次ぎの如きものがそれである。

一、望霞峯　　翠屏峯
三、朝雲峯　　松巒峯
五、集仙峯（神女峯とも云ふ）　聚鶴峯
七、淨壇峯　　上昇峯
九、超雲峯　　飛鳳峯
十一、登龍峯　　聖泉峯

これら十二峯の盡くるところ老鼠虎と云ふがあり、その對岸から一目に十二峯をふり返つて見るに、餘りにその距離の近いのと山水美の規模の大きいのとで、寫眞のカメラをどう向けても這入らない。僅かにその水際が懸崖の一部は這入るにしても、頂上から水流のところまで之を一緒に一枚に撮ることは距離の關係上どうしても不可能である。唯口を開いて「噫十二峯、十二峯」と嘆美の言葉を餘韻長くうそぶいてるのほかない。加ふるに十二峯の下の江流は、老鼠虎からしもての青石洞へかけて、くの字なりに彎曲し、十二全峯は約四哩に亙る連峰であるから、これを一度に寫すなど始めから不可能のことなのである。如何につとめて見たとしても、これを未踏の游士にそつくり傳へることはともかくも困難のことである。

巫山峽の盡くる所、右岸に小河の清流がある。溪を隔てゝかなた山腹には巫山の城壁の山家を繞つてゐるところがある。その光景は白雲の煙雨の間にぼかされてゐる。その山城こそは上來述べてゐた巫山の縣城なのである。宜昌を去ること九十哩、峽中を遡つた輪船と云ふ輪船は普通この小河の流れゆるやかな水鄉を求めて錨を下ろし、巫山夜泊をすることを樂しみとなしてゐるのである。

峽中斷崖幾千丈の水鄉は、十二峯の邊り水面以下が又約六百尺の深さを有し、到底かゝる水深のある江上で錨を下ろすことは出來ない。汽船が碇泊をしようと云ふには、是非共流れのゆるやかな、しかも水深の淺い場所を求めなければならぬ。

宜昌を去つても峽中に遡らうとするは、是非共夜分にならないうちに豫定の碇泊地まで到達することが肝腎である。又事實峽中は絶對に夜の航行を警めてゐる。そのため上流の遡江には隨分無理をして激灘を突破することもないではない。

峽中の航行はその船の操縦に間髪を入れない所のみが多く、朝未明に抜錨するとすれば、夕刻の碇泊地點までへは船長領江（水先）全く一秒間の心のゆるみもあらせない。絶えざる注意力と細かい船の操縦法とによつて、兎も角も山又山の峽中の難航路を突破して行くのである。ひとり我が乘つてゐる船の進路を考へてゐるばかりでなく、地方地方に動いてゐる大小の民船、划子に對して所謂浪沈事件を引起させないやう氣をくばらなくてはならぬ。絶えざる汽笛の音と舵の取り工合で以て、この航路の警戒の上に頭を惱ませてゐる。やゝもするとそれが小舟を避けんと努めたために進路を誤まり、コースを變へんとして暗礁に乘り上げることもある。よくその邊のコースは水量によつてどう變化があるかを承知して居らねばならぬ。

江流は夏と冬によつて二百尺の差を現はすこと、以上も云つた通りであるが、巫山附近は每年七月の上旬ごろ、小標百三十尺を示すと云つた增水振りである。しかし出水の時になると百九十五尺の水標まで浸水して來ることもある。

巫山小河の入口からその中腹に仰ぎ見られる神女觀は、古來有名な傳說のある女神を祀つたところである。その御神體は傳說の上では巫山の煙雨を神像に象つたものであるといはれてゐる。峽中の船人が年中江上で困らされるものは、この濃霧と曉霧の二者である。これがかゝるので船の進路がいつも妨げられる。そこで航行者は每朝早く巫山の女神に祈願をかけて船出すべきことになつてゐる、もしそれをづるけたり忘れたりすると、いつ難破することか解らないと云はれてゐる。

現に四川再游の時のこと、自分はその祈願の熱の足りなかつた爲めか、我が船は小河に夜泊中一大旋風の俄然卷起りて船體諸共に、今にも秋の木葉のやうに卷揚げられんとするくらゐ物恐しい山嵐に弄ばれたことがあつた。そして小河にゐたわが船は今しも水鄉に折倒れんばかりの騷ぎをした。そこへさして篠つく雨さへ降り加はり、甲板のカーペットは空高く飛び去るといつた光景を演じたのであつた。夏の巫山はとかく夢まどかならぬことのみ多く、さてこそ巫山の夢の如きローマンスがゝつた傳說も生み出されたのであらうと考へらるゝのである。

巫山を出で遡行しばらく、丁馬灘から六哩の上流には寶子灘と云ふのがある。その右岸丁度宜昌から百哩の地點のところへ來ると、そこに有名な錯開峽と云ふが仰ぎ見られる。溪は深く斷崖八百尺もあらう、一萬尺と云ひたいくらゐの氣持ちがする。實に天下の名峽である。亞米利加のコロラドの絶峽にもましてその奇拔なる事いはん方なく、その奇峰の裂け目を示す左右兩峯の一角は急轉直下し、この邊り殊に穴居の山民が遠く高くあちこちに仰ぎ見られる。雲上の仙境は文字通り山の人として小さく動いてゐる風景が開展してゐる。昔大禹がかみ手の瞿塘峽を開く前、この峽に先づ手をつけたの

であるが、山深うして江流の水路思ふに任せず、つゐ失敗に終つてしまつたので、峽の工作を中止したのだと云つてゐる。そのためこれを大禹の誤錯から生れたものと云ふところから、錯開峽と呼んで後人に傳へられてゐる。上流の風箱峽が江流を通じ、舟揖の便を得るに至つたのは、この時分から始まつてゐるのだとかやうに信じられてゐる。

○

更に遡ること五六哩にして幾千尺の高峰幽嶺打連なる物凄げな峽中に這入る。これぞ三峽中の第三峽、元の瞿塘峽であつて今日云ふところの風箱峽なのである。

懸崖相迫り流れは深く峯は高く四季殆んど白雲に包まれてゐると云ふところ、雲間から繩梯子が垂れてゐて、これを上下する山民樵夫山僧などのあつたとか云ふ話も土民は傳へてゐる。兩岸猿聲も聞こゆるかと思はるゝ幽居の里があり、今は人なけれどもしかし尚「孟良梯」とか云ふ磨崖の石刻があり手に取る如く讀まれる。峯の高さは水路部の地圖によると、四千七百二十五尺といはれてゐるが、海拔は一萬尺を優に越してゐることゝ想像せられる。屏風の如くその巖壁をなせるところでその兩岸相迫り、最も狹くなれる懸崖は水幅三百呎であつて江流は速くかなり急である。この峽中の水はその兩岸の迫つてゐることと甚しければ甚しい程、水面はせり上げられ又抑し上げられ來る一方である。宛らこは水が井堰でせきとめられた觀をなすのである。その變り又その水流が峽口を過ぎれば水面がひろくなるので、忽ち矢の如く坂落しに躍り下る。その爲めその波の音もかなり騷がしくなり、見る目もこわいくらゐである。岩の岸にあたる波の頭はくだけて飛沫となり、上流から流れ來る莚藺だの、菰だの、又土左衛門、死豚だのと云ふものも、その邊りへ來て水と共に渦を卷いてゐることなども時折り見られる。

又江岸懸崖の棧道には、霧立ちこめたその間を深く穿たれた岩徑を長蛇の如く、長く幾十人と云ふ曳子の列が裸體姿のまゝで船を曳いてゐる。丸で民船の竹索を、胴體斜めに倒れんばかり前にかたむき、力の限りを盡し、爪先き強く足並みを揃へて引張つてゐる樣子など、如何にも峽中の秘境に相應しい眺めである。時にはその吹き寄せて來る荒々しい煙雨の間から、足並の揃つた曳子の掛聲も勇ましく、木魂に響く詩興はこれを何んと例へてよいか、描寫の言葉も見出されないのである。薄黑く神さびた峽路を、絲濃き山轎が數人の伴をつれて雲霧の中を行く行列の仰ぎ見られ、それが亦曳子の列と前になり後になりつゝ現はれてゐるなど、盡きぬ巴蜀の旅の思ひ出を一入深からしむるのである。

鐵柱溪の溪流を右岸に見て、風箱峽の盡きんとする所に白帝城がある。白帝城の處まで遡つて來ると最早や天開け江流は幅廣くなり、こゝに始めて天空開豁、大自然の青空を望み見ることが出來る。

三峽の天險中、最も繁華なる四川山城の一、奉節縣の全景山民之を呼んでクイフ(夔府)と稱し巴蜀の情緒に富めるところ。

江流の中心に、絶大の暗礁、灘瀕石が聳え立つてゐる。これを境に、右に左に、味噌汁色の濁流は大きく渦を巻いてゐる。水の音全山に響き、何んともいへぬ幽境の壯絶味をあふるものがある。左岸の山下に馬鞍石を眺め、右岸に白帝城の丘陵や文風塔の清趣などを仰ぐ。

この邊りの山水美は歴史上の聯想を伴ふので殊に懐かしみが深い。殊にこの白帝城は千有餘年の史蹟に富めることはいふ迄もなく、最近には吳佩孚將軍が二百人の手兵をつれてこれに據り、徐ろに再擧を畫策してゐた所でもあり、英雄の心を練り壯圖を唆るに最も相應しい天惠の要害地である。又そのかみ手には長江の江底に大の鐵鎖の今も尙沈められてゐるものがある。こは昔諸葛孔明が八陣の圖を敷き、大いに戰略を練つた所だと傳へられてゐる。その他尙こゝには又臭鹽磧と稱する一大製鹽所が江邊に見出される。秋から冬にかけて鹽焼きの竈が白煙を立て、山中の壯觀を呈してゐるのは珍とたすべきものである。盛夏の增水期に行つて見ると、こゝは江流二百尺の水底となり、何んら鹽の匂ひもしないのである。

右岸の瀼溪の清流は船を泊するによろしく、斷岩の上に仰ぎ見られる都城は奉節縣即ち夔府の船着場である。碇泊する船は清流に深く行つて一夜をこゝに安らかに過ごすことが出來る。江上をのぼる輪船は流れに遡つて徐行する。その徐行してゐる間に客の乘り下りと、荷役をすつかりすませると云ふのが殆んど常例となつてゐる。

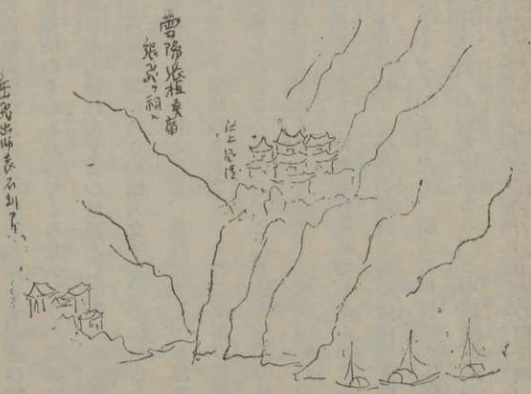
夔府ではその徐行中の船の寄港振りと云ふが天下一品の光景と評されてゐる。といふのは船を目當の山の商人達は、激流の間あひだを見て小舟で漕ぎ寄り、船から投げてもらつたともづなを頼りに力の限りを盡してこれに結びつくるのである。そして商ひの阿片、柘榴、點心など小篭に入れて竹竿の先きに之を吊し商ひをするのである。

船の前に後ろに、あまた寄りたかり横づけした小船では、四川なまりの大聲で叫び聲も騒がしく、一刻千金とばかりその商ひに熱中してゐる。

見ると、黒い鍋で以て阿片膏を暖め、子供に小瓶に詰めさせてゐるものがあるかと思ふと、相場の掛引で青筋を立て、叫び怒鳴つてゐる先生もあると云つた風で、船客と賣子との間は全く戰爭狀態なのである。しかし中には船を目當てに漕ぎよせた賣子で、纜をうまく握り留め得ないで、遂に激流に弄ばれた手合も大抵二人や三人はある。氣の毒であるが見る見るそは波を被り、船は轉覆する。船子賣子諸共に濁流に呑まくさらはれ、さながら西瓜の流れ流るゝが如く、浮きつ沈みつ水に弄ばれ、やがてその姿は見えなくなるのである。

荷役の小舟は幾杯となくそこに横づけせられ、輪船の船底から運び出す幾百の大の銅幣、袋など面白いほど早く機敏に受けては取り、取つては渡してゐる。その死ぬるばかりの熱狂的掛聲と云ふものは四川氣分そのまゝのもので一刻千金の荷揚げ振りである。かう云つた光景はたしかに峽中の痛烈な眺めだといへるであらう。

汽笛一聲、我が船は纜の解かるゝと共に徐行を速めてスピードを出して走る。江邊、縣關、小塔を城外に打眺める。山腹に廢墟かと疑はるゝものゝ指さるゝは城壁跡である。その丸く取圍まれて中に家なきものは、これぞ古の本當の白帝城、前に述べたるは後世誤り傳へらるゝものであると云はれそゐる。今呼んでゐるものがその形勝の地にある爲めそのお株を取つたのだと古老の人は云つてゐた。



三峽の險を突破し雲陽まで瀉ると對岸に旅客の目を慰むる張飛の祀廟がある。圖はその張桓侯廟の全景を示すもの。

夔府から三十四哩上流へ行くと、雲陽と云ふ山城がある。その途中には安平灘、三塊石、廟磯子などの難所名所がある。そこを過ぎると東洋子の激流にさしかゝる。千五百尺の山上高き所に七層の白塔が白雲裏に頭を出してゐる。對岸の白塔と江を挿んで一幅の畫趣をなしてゐる。この邊りは一帶に雨後瀑布を見ることが多い。又天然の石橋になれるところもあり、風景は殊によろしい。

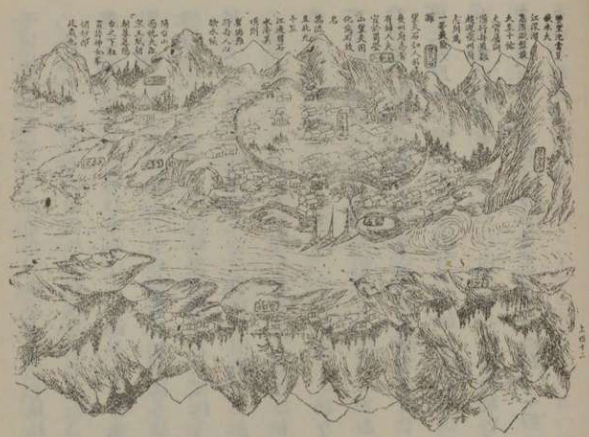
雲陽につくと縣城は高く江岸に仰がれ、城外の漁村は、床下の柱の長く峽中山家の佛を示してゐる。城壁を越えて見ゆる城内の飛檐樓閣の影が江上に清く寫つてゐるところは殊に優しい眺めである。江を隔て對岸には張飛を祀れる山寺がある。人呼んで之を張桓侯廟と云つてゐる。綠林深き所

に曲線美豐かな白堊の壁の相重なり、その飛檐の雅なること峽中第一の稱がある。恐らく峽中山寺の代表的のものと云つてよろしからう。正面の白壁に大書せられた文字は「江上風清」とあり、その筆蹟は最も優れた千古の壁書として傳ふるに足るものである。

四川の旅にはこの四大文字と、これから上流百五十哩のところの寧(ニン)石の石橋とは、共に最も風光明媚の好印象を得る所で、忘れんとしても忘るゝ能はざるものである。

更に十哩ばかり上ると、そこには峯の巨岩が雨後のゆるみで墜落し、そのために江上に一大難所を出來したところがある。これを船人の間では新灘に對して新龍灘と呼んでゐる。附近には上崖寺、下崖寺など云ふところもあつて、瀑布の眺めのよいのがある所である。雨晴れたつかのまで、やがては折角の小簾もその形をひそめてしまふのである。

左岸の山上、小塔の聳えてゐるのは供養塔である。江上の溺死者の爲めと同時に、多少とも水難の憂ひを少くせんがため、船人の目標にとて作られたものである。山下の都邑は巴陽(パーヤン)と呼ばれ、對岸に巴陽水府、小廟などがある。この邊が宜昌から丁度百六十六哩、更に十二哩を溯江すれば人口十五萬を有する例の萬縣の大都城に達するのである。



四川ワンシエン(萬縣)の全景。宜昌重慶間の中央に位する山城。
圖は四川船頭たちの用ひる航路圖にして瓦に差し向ひに見らるゝやうに描かれてゐる。

萬縣及その附近

萬縣の都城は四川の山城として殆んど代表的の樣式を備へてゐる。前方は江流に臨み、後方は屛風岩の奇嶂連山を負ひ、周圍の光景は正にこれ秘境、山間の古城として比類のない山水美を呈してゐる。殊に江邊から土民達の城内へあるいて行く歩道はと云ふと幾百級の石段が岩山を穿つてつくられてゐる。

この萬縣は元來一大磐岩の上に設けられた山城であつて、極めて急峻な坂の途中に構へられてゐる。それ故住宅も一般商家も床下高く建造せられ、之を街路より見れば

平家建の觀を呈してゐるが、崖下より之を見れば何れも二階又は三階建の如くに見えてゐる。

江流から上る石段は何れも急峻な坂をなし、それが幾條となく平行してつくられてゐる。これに幾萬と云ふ民家から毎日その江水を汲みとりに來る手合は大變なものである。天秤棒の水運びは殆んど四六時中絶え間がなく、その雜沓さ加減は名狀すべからざるものがある。建て込んでゐる城内城外の細道のことゝて、その混雜裏に桶からこぼれる水も少くなく、路面はその爲めに潤ひ、路行く人々の足もとはかなり厄介である。歩行の困難なことは他の地方のものゝ考へつかぬものがある。

碼頭附近に見る行人の騒がしさは又格別なものである。城内の水平に通つてゐる石道はその開鑿に多少の起伏を見るにしても、まだあるくに樂な方である。又市中は殊んど土壌を見ることがない。凡て路面は岩面の堅い氣持が唆らるゝばかりであるから人氣も亦岩を見る如き感じを漂らせてゐるやうである。厚壁の泥すら得るに困難を感ずる所であるから、石や煉瓦のみで出來た家並みである。又地質上井戸一つ掘ることも出來ず、如何にも潤ひのない街である。飲料水にしたところで、前に云ふ如く長江の濁流をもつてこれに充てるのほかない。たゞ上流の家庭あたりでは明礬を投じてその上澄みを作り、之を用ひてゐるところもあるが、一般には唯汲んで來たまゝの濁つたものを湯にわかしてゐるのである。

萬縣の城外は溪流を隔てゝ同じ右岸に別に一廓をなして出來てゐる。その全體としての都城姿は、宛ら上流の重慶の都城がその嘉陵江を隔てゝ江北の街と相對してゐるといかにも似通つてゐる。しかも萬縣は城内城外共に夫々一大巨岩の上に蟠居せる姿で、江上から仰ぎ見たときの光景は屋上屋が相重なり、山城として實に壯觀を極めたものである。

背景に見る連山巨岩の中腹には、磨崖で「同治四年水この所に到つて止まる」との文字が刻されてゐる。恐らく當時幾百尺の上まで增水して來たことがあり、全城内城外は濁流のためにすつかりさらはれてしまつた災厄があつたのであらう。かゝる偉大な恐ろしい水害は長江に見る四川風景でなくては見られないところである。水害後、あとに殘つた者は唯その地盤をなす巨岩のみであつた。根こそぎ以上の一大災厄をかうして時折り周期的に繰返へされる。それがおのづから萬縣人の心の根柢に着色せられ、非常な底力ある果斷決行の氣分を唆つて來る。

萬縣では若し日本船が江流遙かに姿を現はし汽笛を上げてゐると、いつかも在留の日本人は故國の人に待ちこがれてゐる情切なるものがあり、古城高き樓上の窓から大風呂敷や坐蒲團など持ち出し盛んにこれを振り翳して歡迎の意を表してゐるなどこれ又萬縣風景の一場面と云へるであらう。一時はんにこれを振り翳して歡迎の意を表してゐるなどこれ又萬縣風景の一場面と云へるであらう。一時は重慶の日本領事館の分館がこれに設けられてゐたこともあつたが、その後幾度かの事變のため在留日

本人も今は殆んどゐなくなり、從つて分館もその後閉ぢられてゐる狀態である。

萬縣郵局には故あつて舊露西亞ロマノフ朝の王族の片われがこゝに落ちのびて、局内に事務を取つてゐたるものがあつた。平素ひどく日本人に好意を寄せ、往來頻々たるものがあつた。

萬縣の物産としては、その附近梁山から出る紙類に桐油その他石膏などが重なものとしてよく知られ、又あまた積出されてもゐる。日本の三菱あたりからも桐油の買ひ出しで出張員を出してゐたこともあつた。之については出張員の悲史の挿話もあり、述べたいこともあるが割愛しておく。

萬縣市中の光景としては、曾て楊森が督軍時代に巨額の重稅を課し新道を開鑿したので面目の一新された所が少くない。城外江邊には珍らしく樹林茂り、兵營に洩れる喇叭の音も山に響き、江上の眺めは山氣濃まやかなるうちに懐かしさがある。もしそれ夜中江上から城内城外に點されてゐる民家の明りを仰ぎ見る時は、點々としてあちこちに閃めき、宛らこは香港の街を海上から仰ぎ見たときの光景など思ひ出される。又城内の樓上生活をしてゐる日本人が、日本船や日本の軍艦などを見るときにはその對岸近き水郷に碇泊せる日本船の夜の電燈を見るだけでもたまらなくなり、船の光りの水上に影を映せる眺めを見てゐるばかりで我慢しきれず懐かしさのあまり船まで遊びに來る。

最近に見る萬縣當局は色々とそのやりくり、軍費の捻出に困り果て、内外商船の來り碇泊するものを目當てに巡査船と稱する樓船を派出し巡訪せしめるのである。そして之に二旒の赤旗に例の平べつたい白字で以て「萬縣軍費樂捐處巡査船」の十字を鮮明に記し、之を風に飜しながら一々船に乘り込んで來る。そして荷物の臨檢を得意げに行ふのである。

船の方では何も別段樂しんで義捐する氣持なんか持つてゐないのであるが、向ふから高飛車に樂捐の話を駈して來る。さも喜んで課稅に應ずるものの如く臨んで來る。そのあたりは矢張り支那式のやり方である。

萬縣には本當の船着きに安全な碼頭を有せず、その爲め流れの割りに緩なる向ふ岸、蛾眉磧の水郷をその碇泊場としてゐる。堤防の楊樹の影は銃殺場であつて、時折り死刑の慘狀がこゝに見られたり、又豚を屠る景色なども見られたりする。日本船の客はこれを見て度肝を抜かれたり腦貧血を起したりする者がある。

萬縣隨一の名物は後方の山寨天生城に住まへる土豪の自給自足振りである。昔から幾代となく天崖の山嶺に連綿として住みなれて、その下界に大水があらうと勳亂騒ぎが始まらうと絶對安全な悠久生活をこゝに遂げてゐる。賀淑甫と云ふがその主人である。田畑、藥園その他文字通りの自治の生活がこゝに營まれ、その住宅も全く一王城の觀を呈し、その百近い窓を有する裝飾美しい正面の壁などは、

全く四川の建築美をそのまゝ代表するものといつてよい位である。夜は蓄音機のレコードをかけて遊ぶ。相當近代文化をも採入れて樂しき良家の家庭振りを見せてゐる。こはこゝに一挿話とするの價値が十分にあるのである。

○

萬縣を起點にして上へ百七十二哩遡ると重慶の都城となる。下へ又百七十八哩下れば宜昌の碼頭となる。だから萬縣は殆んどその宜昌重慶の宜渝線の中央地點となつてゐると云へる。

重慶に至る上流の方の航路は最早や三峽の險の如く、兩岸の奇拔にして絶大なる天地を示すと云ふものは割りに少ない。その代り急流、激湍、渦卷のゆたかな灘はかなり澤山ある。從つて船の操縱には骨の折れる所が多い。隨所に水難の目標が立てられ、普通二個所に柱のペンキ塗りの目印の置かれてゐるところは、その二柱を結びつけた延長上の水路には決して立入るべからずとのことが諒解されてゐる。稅關の方からこれは公布されてゐるのである。もしその浪沈の危險を避けんが爲め、一漁船のことを氣にして船體自らが運ぶるく暗礁に乘り上げ沈沒し、濁流の中からわづかに檣の頭を出してゐると云つたみじめな水景の一場面を見ることなども少くないのである

○

萬縣から上へ約十哩許りのぼると珍しい大きな難所、狐灘と云ふがある。名の示す如く全くおだやかなところのやうに見せてゐるがさうでなくひどく船は仇波に弄ばれ動搖が激しくなる。船長始め機關部のものもこゝでは一大努力を要する所である。若し船體が次第次第にと斜めに傾き、三十度近くも倒れかゝると實際氣が氣でなくなる。エンジン・ルームには濁流がどんどん侵入して來る。さうなると乘組みも客も一緒になつてバケツで水を汲み出すやら大變なさわぎである。よくこの邊りでは沈沒の椿事がある。次でその名も氣持ちのわるい白骨岩と云ふところに來るが、その白骨岩を過ぎるとこんどは氣分も樂になる。そして江岸には臨江學校と云へる瀟洒たる白堊の校舍などを見る。それから二十哩ばかり上に遡ると、右岸に當つて峽中の呼びもの石寶寨の山寨が仰ぎ見られる。

石寶寨は六百六十尺と云ふ高い奇巖の上に頂を出し、その巖壁に沿うて片庇式の十層樓がある。見るからに古色蒼然、殆んど岩も建物も同一の色彩に神寂びてゐる。これには古くより山寺の僧侶が據つてゐて秘境の山寨生活を營み、朝夕の時を知らせる梵鐘を突いてゐるとの事である。由來上流を行く船の旅には最もなつかしく興味を惹く山寨風景と目されてゐる所である。

○

石寶寨のかみ手は、江流の水路が俄かに變り、S字形にくる〳〵と漩流してゐる。殊にその山寨か

ら十哩ばかり上つた黄花城のあたりはその彎曲振りが最も甚だしい。この黄花城は、一に又皇華城とも書かれ發音は同一である。七哩上流のところには忠州の舊城址と傳へらるゝ所があり、江心の一孤島の上に存してゐて前後左右に濁流の音が聞かれる。元來その急流の眞中にあつて、而かも氾濫の被害が頻々であると云ふ處から、遂にそれから移つて現在の位置に忠州の山城は建造せられたものである。左に忠州城のことを述べる。

沙金の採取される連兒磧と云ふところを左に巡り進めば、右岸に綠樹茂り潤色たつぷりの都城が仰ぎ見られる。これぞ四川の旅になつかしい忠州であつて、峯嶽連脈をなし打續く上流の江岸に、人口五萬の山城を見せてゐるのである。旅人の徒然を慰むる何よりのものである。城外に見ゆる白樂天の古廟は、山麓にその曲線美を見せ、得もいはれぬ四川山寺の詩趣を漂はせてゐる。

碼頭の邊り人影の動き繁く、輪船の乘り下りも賑かである。流れはこのあたり相當急であるため、難破坐礁の災厄も多いらしい。下手の雙魚子の邊りに人肉の流れ來り、鳥鵲のこれにとまり啄いてゐる風景を見るなど云ふこともこの忠州邊りに多いやうである。

○

唐童壩の島影を過ぎ江を左に廻れば景色が變る。三條嶺と云ふ行儀正しき圓錐狀をなせる水成岩の峯が三座、江に臨んで聳えてゐるのを見る。對岸の新場と共に、この三山は眺めよき水鄉である。魚洞子、三官渡と云ふを過ぎれば土匪の出沒常ならぬ羊肚溪の山郭に至る。

羊肚溪に行つて親しく江岸を眺むれば、竹林の影に唐門式の堂々たる屋敷が指される。之を本據として手前の觀音堂窓寄りの邊りに土匪の群がつてゐる姿が三々五々見えてゐる。門前の山畑には、山童と狗の戲れてゐるのが見える。時あつては耕し時あつては船を襲ふ晴盜雨讀の生活を營んでゐる。幸ひ自分はこゝを過ぎること四度に及んでゐるが、未だこゝでは發砲襲撃を受けたことはなかつた。多くこゝでは小雨の時になつてゐるので、その爲め盜事を休んでゐたものらしい。藥園に戲れる山童も今は罪なく遊んでゐるが、末恐ろしき腕を見せるものかなと眺めたのである。しかし雨を催してゐない日にはどんな活躍を示すか判らないのだなどと領江の李子順翁は自分に物語つてゐた。

やがて鄧都の山城は近かい。それまでは蔣渡彎、鷄子磧など云ふがある。峯傳ひの山々は相當に高いが、その山の端に百七十尺と云ふ高塔が聳え立ち、右岸の眺めに一入の景色を添へてゐる。塔を見ながら上ること三哩。右手に鄧都の山城が懷かしげに船を待つてくれてゐる如く見える。外國船の永安號、日清公司の雲陽丸など舷々相磨して錨をこゝに下ろす。山城はこの地方切つての名山佛蹟のある所で、毎年山中の善男善女參詣者の來たるもの絶え間なく、現世の祈願三昧に入るの佛徒は、毎年

幾十萬となるを知らないと云ふことである。これもこゝに冥獄の信徒を率きつくるものがあり、之に參詣しなかつたならば佛になれないと信ぜられてゐるのである。ともかく土民の間で酆都詣でと云へば四川界隈では有名なものの一つとなつてゐる。

○

錨を上げて對岸蠶背梁、佛面灘へと突破して行く。やがて行く手には名高い觀音灘と云ふに差しかゝる。この激流はかなり長く、かれこれ二哩にもまたがり、濁流は段々をなして走つてゐる。この邊り船舶の沈沒多く、船の操縦を最も惱ましめてゐる所である。更に鷄公嶺の古廟を右岸に見て、三官灘、深溪場を過ぎると廟鷄子の水郷、平綏壩の島影に達するのである。

平綏壩は宜昌から二百七十六哩の地點である。遡航途上の輪船はよくこゝに碇泊所を見出して、一夜を過すことになつてゐる。島上秋の薄の茂り、田家の孤影を見るなど瀟洒たる風景をなしてゐる。

江上夜泊をなすとき、やゝもすると上層と一層の水流同じからず、下層江流の急なる場合が多い。そのため迂かりしてゐると夜半に流れの爲めに錨を切り取られる虞れすらある。その爲め岸に十分鐵棒を打込み、チエーンで以てこれにつなぐか、さもなくば老木を見つけてその幹に結びつけるかの方法をとるのである。これもよく邊りを偵察し、土匪のゐるかどうかよく調べた上でなければ油斷がならぬ。夜陰に乘じ、若し棒を拔かれ幹を挽切られることなどのあれば、それこそ一大事である。

この島は年によつては、匪賊の出沒繁きところであるから、こゝに細心の注意が要るのである。

萬縣から涪州さして上る江上で、島として最も大きく又その水郷の靜けさ、殊に夜半一輪の明月孤島を照し、いづくにか鳴く遠犬の聲を聞く時の羇旅の感などそゞろに國を去つて三巴遠しの感の唆らるゝ所である。

友人細川新吉君(宜陽丸船長)が大正十二年の秋九月涪州で匪賊の手に斃れた前夜、今生の思ひ出でに泊した島影はこの平綏垻であつた。自分は人一倍この島を見るにつけて感慨無量なるものがあるのである。

黃葛嘴の高塔を左岸に見る通りから、江上は又こゝに一大難所として知られた群猪灘の激流に出會ふ。この難所は名前の示す如く、江上幾千の群猪の波浪とたゝかひ亂れ狂ふ如き水勢を見せてゐる處、その激流のざわつく騷音は全く物凄いくらゐである。それにその距離が又かなり長く續いてゐるのである。定めし江底に亂立する暗礁の參差差凸兀たる狀態は想像のほかである。

龍王嘴の高塔を左岸に仰ぎ見て進むことしばし、南の方貴州から流れ來る涪陵江（黔江）の清流を見る。濁流にばかり馴れ切つた眼にこの碧潭ともおぼしき深い清流の眺めに接することは、日本人の

目にはそれこそ溜飲の下る氣持もする。恐らく普通の日本人はこの涪陵江を見ると、すつきりした氣持になる。

○

涪陵江と長江の合流地點には涪州の山城がある。こゝは四川貴州兩省の交通の衝に當り、四川長江筋では重要な山都の一つと呼ばれ、時折りこの江上に佛蘭西の軍艦が碇泊してゐるのは、布教に從事せる耶蘇宣教師をかばふためであらう。

日清公司の宜陽丸が湯子謨（タンヅモ）の匪軍の爲に襲撃せられ、敢へなくもこれに細川船長が斃れ、高橋宮崎の兩乘組が人質となり、十三ケ月間も四川貴州の野に山に引きずられた、その辛酸の憂目を見る發端もこの地點が抑々のところである。水流の關係で碼頭はこゝから約二哩上流の荔枝（リーチ）と云ふ處に碇泊することになつてゐる。

昔唐の玄宗皇帝が楊貴妃のためにわざ〳〵騎馬を走らせ、長安の都から嶺南（廣東）まで荔枝（リーチ）を求めにやり、途中こゝを通過したとかいふことで、今以つてその懷かしい地名傳說がこゝに殘つてゐる。村外れの佛塔を仰ぎ見て行くこととしばし、四川隨一の長江に架かる電信架線のある龜門關（クイメンクワン）に達する。電線にとまつてゐる黑鳥の姿も愛らしく、その鳴聲は幽鳥の音として、四川情緒を物語ること尠しい。

四川に關する地圖數あるうちに、現行の電局郵局の地圖は最も眞を置くに足るべく、巴蜀交通地圖としては最も貴重なものである。龜門關はこれら交通地圖を見る上にいつも重要視せられてゐるところである。こゝには傳說童話の興味あるものも耳にしてゐるがこゝには割愛しておく。

○

里渡場（リトチャン）の水鄕には、そと車の民船を江上に浮べ、四六時中唐黍その他の穀類の粉をひく碾車が之に設備されてゐる。水は流れ速く、紘の如く走つてゐるその流の音のうちに織込まれてゐる外車の廻る音は、いかにも亦四川水鄕の趣きを濃やかに物語つてゐる。自分の體驗からしてもその江岸近く碇泊した時の夜など、岸の山は高く月小、水車の音の靜けさを破つて聞える山村に犬の遠吠えを聞く、誠に四川奥地の靜寂を唆るものがある。

月光に照らさるゝ山下の老樹も、我が輪船のワイヤをつなぐ命の幹だと思つて見ると、邊りの秘境の夜景が一段と身に沁みて何とも知らぬ深い印象を得る。この印象は恐らく生涯を通じて忘るべからざる深みをあたまに刻みつけてゐる。丁度六哩下流の水鄕で亡友細川船長の非業の死を遂げたことなど碌でもない事と思ひ浮べると、一段の夜氣身に迫るものがあり萬感交々至る次第である。

○

剪刀峽、牛尿磧と云ふを過ぎればもはやこのあたり、宜昌からは三百哩のところになり、もうあと五十二哩で以て重慶に達するのである。左岸に見ゆる大規模の石橋は珍らしくも五つくり抜かれた眼鏡式の美觀を呈し、その水景は綠樹の間に隱顯して畫のやうである。これぞなつかしの寧石（ニンシ）の雅橋である。この邊り右岸には仙女寨の高く山上に仰ぎ見られるものがあるなど、頗る上流らしき詩情のある。金川磧と云へる島の影を突破して石牛欄、高家鎭を過ぎるとそこには江底の最ふらるゝものがある。も深き無底（ウヂイ）の淵の江流にさしかゝる。土民の云ふ處によると、こゝには大鯉の突破し得ない峽岩がこの江心にあつて、更にその下の方はとても底知れぬ深みを有してゐるとの事である。鯉魚の傳說の生み出さるゝところは各處にあるがこゝは又珍らしい處である。

右岸には黃魚溪といふのがある。この邊り一帶の峽は之を稱して黃葛峽（ホワンコシヤ）と云つてゐる。と云ふのは江岸に黃葛樹（ホワンコース）の多く茂れるによる爲めである。地方訛りではこの木を又ワンコスと呼びなし、人間の圖體ばかり大きくて一向に物の役に立たない者を、かく嘲り呼びたす習慣になつてゐるのである。この樹は熱帶地で榕樹と呼ばるゝもの。四川に見る天然木の中で、この黃葛樹くらゐ太とりの速く又枝の張る常綠樹は外に求められない。枝が地上におりてそれから又根がおりると云つた風にいくらでも張つて來る。しかもその幹は木材として一向に使ひ道がない、こは日本で云ふと「うどの大木」といへる嘲笑の語と同意義であると見られる。

○

龍舌梁の古廟、高塔のもとを過ぎると、三四十間とおぼしき高崖の上に、長壽と云へる縣城が仰ぎ見られる。崖下に碼頭がある。長壽と云ふ地名から考へさせらるゝやうな老人達をあまた乘せた小舟が、輪船目がけてあの激流の中を漕ぎ出て來る。

むかしからこの長壽は老人の多い街と呼ばれ、何首烏だのその他色々の藥草の栽培が盛んに行はるる所で、陸路重慶に旅する者は、先づこゝに上陸して轎子で以て街道を行く。すると少なくとも江上を遡るよりは二十哩も近かみちが出來るといはれてゐる。城外に知られた拾盤子は九哩の上流、洛磧場と共に、峽中、江底の最も淺い所だと云はれてゐる。又對岸には王家灘（ワンチヤタン）と云へる所がある。

○

右岸には珍らしい名前で强盜廟、性善燈など云ふがある。そこを過ぎると江上に絶大の蛙の形した巨巖が左右一對相並び、流れの中央に蹲まつてゐるのを見る。その形から名を取つて兩蟾堆（リヤンツアンツイ）と土民は呼んでゐる。その江流に逆つて頭を持ち上げ、蛙の面に水の譬へそのまゝに構へてゐる。秋の末つ

かた、頭上すゝき茂り、丁度峽にあたる邊り、濁流を平氣で受けてゐるのである。輪船はその側を遡行するのである。所が夏の增水期になると、船はその頭上數十尺の上を航行するので、兩大蛙は水中にもぐつてゐる形となる。しかもその兩蛙の大いさは何れも同じ姿して、約百間四方もあらうかと思はれるくらゐ偉大なものである。眞夏の航行には更にその大蛙は姿を見せず、その頭上すらも認めないである。大蛙の影も形も見ない一事をもつてしても、如何にその江流の水が偉大なるものであるかが察せられるのである。今こゝに物語れるところは、丁度上海から云ふと千二百八十三哩の奥地の實景に就いてである。重慶にはあとわづか三十五哩と云ふ地點に今は來てゐるのである。

○

木洞場（ムートンチャン）の古廟に羊角背と云ふを右に折れ曲ると明月峽の峽中に這入る。そこには明月泡の水鄉がある。野騾石（エロシ）、洛磧寺をそばに見て上れば銅鑼峽と云ふ名の通つた峽に達する。船人に教へらるゝがまゝに見ると懸崖の一角に銅鑼の如き圓形をなせる平岩が垂れ下つてゐる。これがこの呼び名の出たわけである。峽中を突破して右岸唐家沱（タンチャトン）に着く。こゝは重慶の下流七哩のところにある田舍町である。別段こゝには取立てゝいふ程のこともないが、重慶の碼頭邊りで苦力風情の間の言葉に聞かされる喧嘩の惡口がある。そのベランメイ言葉の中に、この唐家沱と云へる言葉がしば〳〵出て來る。そんなことで民衆にはよく知られてゐるところである。

この水鄉は重慶方面から莚や土左衞門などのしよつちう流れて來て、その鬱流する所であるからよく引掛るのである。そのため重慶界隈の苦力達は喧嘩を始めると云ふとすぐ惡口をたゝく。曰く、

「生意氣なことをいふと貴樣は唐家沱でお目見得をさせるぞ」

と凄いところを見せる。そのやうに云はれてゐるくらゐ江流に拋り込まれたものがあると見える。水中にはふり込まれたら大抵水鄉渦卷の中に土左衞門となつて浮いて出て來るのである。

○

唐家沱から朝陽河に出でると、こんどは左岸に大佛寺の大の石佛を見る。案外にも之が磨崖を水中に拜するのである。と云ふのは、その石佛は、巨大な立像の金ピカであつて濁流滾々のうちに佛光をあざやかに輝かせてゐる。如何にも勿體なく感ぜられるのであるが、增水期にはそれが殆んど水中に匿れてしまつてゐる。これは又重慶都城航路の安全をはかり、佛の御利益を祈るものにとつて何よりもよき禮拜佛として旅人の目を惹いてゐるものである。江岸の石佛を見てすゝむと愈々これで宜昌から三百五十二哩、上海から千三百十七哩の地點となり、卽ち重慶都城にいよ〳〵到着することになる。上海から考へて見ると實に長の船の旅である。

重慶

重慶は上海から云ふと冬の減水期のときで水の落差六一〇尺、宜昌の一三四尺なるに比べて遙かに高く叙州に比べ三一五尺低い。重慶は人口約七十五萬と云はれてゐる一大都會である。その對岸に塗山、九磐山を控へ、その四時雲に鎖されてゐるのが、時折りその山の端を見せたり、又その麓の江岸、「字水」の大文字の白く鮮やかに讀まれたりするところが特に懐かしいのである。又た下手の弦角沱には日本の專管居留地がある。これが特に日本人として有りがたい氣持をそゝつてゐる。こゝには海軍集會所（舊日清公司所屬）だの、大新鐵廠だの、又新絲廠だの云ふを始め、游仕勃大人の邸宅花園だの云ふのがある。昭和七年一月の上海事變で日本人は領事まで一人殘らず引揚げるに至つたが、この日本租界には民國人で東京淺草倉前出身の某氏がゐる。肥皂の石鹸會社を創設しかなり成功してゐる。その夫人は賢夫人と云はれ、日本人であつた。内助の功の見るべきものがあつたが、ついこの頃亡くなつた。生前その殆んど在留日本人と交りを求めず、努めて會はうともせず又會ふことを好まなかつたらしい。

四川に限らず日支兩國の雜婚はかなりよい鹽梅に行き、理想的の親善が出來てゐる場合は多いが、しかし日本人との面會をきらつたり、かういつた式にぎごちない生活を送つてゐるものが少くない。惜しい事である。又萬縣にその他に支那在留中に仲よくなり、至極圓滿な親善振りに浸つてゐる在留民もあることはかなりある。しかしその人達も日本に歸朝する際つれて來れないやうな事情もあつたりして、結局のところうまく實を結ぶ處まで行かないのが多い。ひとりこは此の地計りではない。

思ふに重慶はその日本租界そのものがどうもうまく實を結んでゐないうらみがある。長江、江上に帝國軍艦の警備の任に當つてゐる者があつてさへも、いざとなると城内の領事館までもが引揚げてしまはなくてはならんといふ實狀に迫られてゐる。これは下流の蘇州にしても、杭州にしてもさうである。こはかなり淋しい實狀であるがしかし又止むを得ない。

殆んど全く實を結ばないのである。雲煙萬里の秘境の奥地に於いては殊にさうである。重慶の日本租界が今日の有樣に立ち至つたのも無理からぬことゝいへるであらう。

重慶ではそのいざといふ時は多く漢口の租界へ避難し、そこまで落ちのびることになつてゐる。一動亂のある毎に根こそぎ根柢を覆へされ、賽の河原の兒戲と同じことを繰返してゐるのは氣の毒の至りである。四川奥地の日支經濟關係は誠に振はないこと夥だしい。どうも一進一退があつて困る。

日清公司の航路を大動脈としてゐる日本人の活動は、この數年前まで重慶の上流叙州まで滙賓線と

云ふのを營んでゐたが、これも休航となり、今は著しく凡てが手控への氣味となつた。何れ長いことでもあるまいが事實はさうである。英佛米伊何れも似たやうな經路をとつてはゐるが、問題は日支間の肚と肚との問題である。芝居の打ち方一つでどうにもなることである。唯その四川の民心をしかと摑むことの重大性を考へることが、何よりの秘訣であり解決の鍵でもある。

日本租界の寂寞を感ずること久しく、今や東京國士館の青年その他、有爲の新進氣鋭の青年たちも大分揃つてはゐるが、どうも四川の天地の偉大なのと四川人の肚をつかむコツの不如意なのとで、あたら年來投資した日本人の肝煎りの事業も實を結ばないでゐる有樣である。

若氣にはやつて、派手にやり過ぎ又手を延ばし過ぎ、結局破産を見る如き喫も時には耳にすることがあるが、しかし何んといつても四川在留民の草別けは、日本人としては宮坂九郎翁その人である。尊き草別けの恩人である。有名な新利洋行は翁の名と共に、日本人の四川入りには忘るべからざるものであり、又四川入りの歴史を物語る大切な中心點をなしてゐるものである。

○

重慶城内にあつてはこの新利洋行や日清公司を始め、幾多の商事會社の支店出張所も設けられ、運輸業に貿易業に又原料の買ひ出しにと人知れぬ苦心努力をしてゐるものが數多見えてゐる。

凡そ支那各省、各地のうちで四川の天地に活躍する在留民くらゐ、眞にその地に浸り、そしてその地方語を語り、地方の民情を察し、自ら持すること薄く、そしてその職に忠實粉骨碎身なるものを見たことがない。固より醫者として地方民から神樣のやうにあがめられてゐる者は鄂州の田島大人、信陽の村上大人、甘肅、蘭州の前田大人と云つたのがある。しかしこの四川ではその俗謡にまでもよく通じて、すつかり成り澄ませてゐる者（例へば清水銀次郎君の如き）すらもある。何れも三峽の天險を突破した有志だけに、あらゆる世相の渦卷とも闘ひ、練りに練つた尊敬すべき人士どもである。一騎當千の勇士揃ひが、かうして第一線に立つてゐる四川の雰圍氣は、實に賴母しくも亦懐かしい。

四川全體で日本人の在留民は、平均して數へて見ると大抵わづか五六十名で、百人の數に達したことは殆んどない。これだけの人數では小學校一つ設ける問題にしてもが仲々苦心慘憺のわけである。外務省の補助手續きのことから、民團負擔金のことなど容易ならぬ問題がそこに湧き起つて來る。その他民團に抱へる醫者の問題から、領事館對居留民のデリケートな關係など、場所が場所だけに一方ならぬいきさつがある。

又外務省の方でも、特にこゝには優遇法を設けて、四川赴任の領事館員にはその心持を盡してゐると云ふ實情である。外務省の旅費規定の規則によると、凡そ世界で東京から出發して最も日數のかゝる

ことになつてゐるのは、巴蜀、四川の天地を以つて第一となし、以前は片道かれこれ六十五日もかゝつてゐた様子である。今や交通の便がよくなり、だんだん開けて來たとはいへ、しかも尚上海から巴蜀への往復には少くとも二十四五日から三十日を要する譯である。その道中の危險はかりに無事に切り抜けるにしても、水待ち、船便、その他途中官憲の面倒があり、厄介なこと一と通りでない。どうもその邊は思ふに任せないのである。

○

重慶にある日本旅館は又來館（ユウライクワン）と呼ばれ、日本疊の敷かれた支那建築の懐かしい旅社である。これが先づ誰れ人も重慶に來たものの足どまりとなつてゐる處である。

重慶は上海から云ふと千三百十七哩の奥地に在る。今假りにこれに上海横濱間の千百一哩を加へて考へて見ると、二千四百十八哩の航海をつゞけなければ重慶には達せられない勘定になるのである。それであるからこの地在留の日本人達はざつと三千哩外の雲煙に隔てられてゐるわけである。かゝる異鄉にあつて震災後の東京も勿論知らず、日本内地の一事一物に關するニウスが一ケ月後れの新聞でやつと判る。わづかにその一端を想像するといつた淋しさを辿つてゐるのである。

たゞにそればかりでなく、故鄉懐かしさの情に堪へぬこともあり、日本人客を乘せた汽船の城外朝天門の碼頭、躉船（はうせん）に横づけでもせらるゝや、殆んど接吻せんばかりに、取る物も取りあへずこれに集つて來る。日本からの女客などの見えた時などは、又來館の樓上は、時ならぬお正月氣分になり、實に明かるく一同相貌をくづして談笑裡に夜を更かすのと云ふのが常である。藥種關係では若林洋行だしが藥草についで數多營まれてゐる。

四川の天地は日本の約二倍に當たる面積を有し、殆んどその品物の全部がこの重慶の市場に集まり來るので、今では省城の成都よりか又省内何れの地よりもこれが最も樞要な位置を占むるに至つた。

○

重慶は巴縣の所在地で、その地理上の位置は西に西藏、川邊特別區域の秘境を控へ、北は蜀の天地を控へ、南は雲南に臨んでゐる。凡て各方面とも水路によつて聯絡がとれ、地勢の關係上、自然にその水が重慶に落ちて來るやうに出來てゐる。と云ふのは人も知る如く、西は金沙口といふ長江の上流によつて聯絡がとれ、又北の方成都方面は嘉陵江によつて船がかよひ、南は綦江によつて山峽を貫州に出られるといつた風で、誠に水運に惠まれてゐる。全く重慶は四川の盆地全體の喉頸を扼してゐるといつてもよい。

重慶の城内は萬縣に見る如く長江と嘉陵江の合流地點の一角を占め、江上に蟠まる一大巨巖の上に出來てゐる街である。前方長江に臨む方面は幾百の石段をあがりおりして長江の水を汲みに行くもの晝夜ひき切りなしである。後方城外の方面は凡て廣大な墓地になつてゐて、成都街道の浮屠關の見ゆる邊りまで土饅頭の綠野つゞきの地となつてゐる。市街の出來かたがかやうな風であるから、前も橫も江流で限られ全くどちらへも伸びられる餘地は少しもないのである。重慶の賤民、漁夫達は太平門や朝天門外崖上崖下に寸地を求め、猫額大のところに差し掛け屋根をつくり、わづかに此に生を營んでゐる。しかしいざ增水となるとさらはれて唐家沱の下の方まで流されて行くのがおきまりである。

それが爲め近來は市民たちの江を渡つて對岸に延びようとして「字水」の邊りから塗山の麓下へと發展をしてゐる。又そちらへ發展をせざるを得ない事情に迫られてもゐる。しも手の日本租界を一日も早く何とかして支那側の手に回收せんと急いでゐるのも、時勢の然らしむるところ、又或は止むを得ない叫びだと見られる。日本側に果してこれが對策たるべき腹案でもありや。

一方の重慶と相並べる嘉陵江側に見る江北（カンパイ）の街は、由來重慶側の人と仲が惡く氷炭相容れないところがある。五に双方で惡口をいひ合つたりなどしてゐる。從つてその方へは重慶人としてどうも伸びて行く氣持がないらしい。

○

重慶城內の目拔としては商業場と云ふがあり、こゝには大廈高樓軒を並べ、茶館、酒樓、銀號、緞綢店、書籍店など夜も煌々たる街上の光りに客の游子を集めてゐる。萬國旗の色彩美しき開店祝の新舖では樓上に流行の樂隊の笛、太鼓、喇叭などにぎにぎしく、邊りの山に木靈（こだま）するところなど中々四川の新しい雰圍氣を漲らせてゐる。その界隈に見る繁昌振りは長江筋で、上海漢口に次ぐの盛況で、全く素晴らしい勢を見せてゐる。全く長江三大都市の一たる名を恥しめてゐない。

城內紅十字の董事魏國平大人は、最近この仕事をやめたと聞くが、親日派の一人で在留日本人には殊によく心から努めてくれてゐる。

又城內に見る巴縣師範學校の女學生達は、近代式の唱歌を歌ひつゝ行列の動きも勇ましく城門を出てて春の野に教師に誘はれ、遠足に出かけるあたりの光景と來たら殊に四川の新しい空氣を偲ばせてゐると云へよう。

重慶城內の商業場には、日清公司などのある聚興成のビルデイングであるとか、その他巍々たる高層建築が空に聳え、各老舖には巴蜀の風物氣分を湛へた對聯の句が讀まれる。又路上、外壁に沿つて行つて時折り「小心火燭」「出租茶担」などの面白い四字句の文字を見ることがある。小心火燭とは、

火の用心の意味で、特にその火の字をさかさまにして書いてある。又出租茶担とは、お茶の出前をさせるときその需めに應じて出るとの事を壁に掲示し廣告をしてゐるのである。こは重慶の習慣のみに限られた譯でもないが、四川省では婚禮、葬儀、開店の祝ひなど、宴席といふ宴席には、料理は料理の出前のあると同時に、料理の前後に持つて行つて、その客をもてなす熱茶、西瓜子、撚手巾などの事を一手に引受け、その責任を持つ商賣が發達してゐるのである。誠に調法なことである。その御用をいつなりと仰せつけられたいといふ宣傳廣告の文字に出租茶担の文字を見るのである。

その他商業上に特筆すべきものは藥草のあきなひの盛なことである。西藏から雲南から又成都から集つて來る不老長壽の靈藥の多種類に亘つたものがある。その四川獨特の草根木皮の賣買取引は誠に活潑である。これには例へば、鹿茸、鹿筋、鹿沖、鹿鞭（鹿の陰莖を乾し固めたもの）鹿膠、爐貝、紅花（カンホウ）、青果（チンコ）、冬蟲夏草（また一つに爐蟲草ともいふ）茯苓などを始めとし、秘境の藥草、靈獸のからだの一部分の乾し固めたものなどが數限りなく大藥房に見出され、且つこれが支那四百餘州に向つて積出されてゐるのである。遠くは滿洲、吉林、黑龍江までも出、又廣東、日本あたりへも來てゐる。

又反對に廣東からは三蛇膽酒の如き、蛇の藥酒が又吉林からは紅參と云つて紅い人參などがこゝへ這入つて來る。日本からは越中富山の藥種が若林洋行その他の手で以て多量に入れられてゐる。

上記、爐蟲草は西藏、打箭爐（ターチエンロ）産の冬蟲夏草の呼び名を略稱せるものであつて、その價は貴く、江南上海地方では大變高價な料理でなくてはこれが出て來ない。普通この藥蟲は清湯（チンタン）（おすましのつゆもの）のみにして用ひられ、さながら牛蒡のおつゆを味ふと云つたやうにさつぱりしたものであつて、決して喰べにくいものではない。その根は蚕の形をなした生物で、莖はつくしんぼうに似て普通二三寸大を限度としてゐる。しかし稀れには又本場では七八寸に達してゐるものもある。勿論植物性のものである。どうかすると稀には日本の支那料理屋でも求めれば、之が熊掌の料理などゝ相前後して出されることもある。尚四川に見る藥種には鹿の胎兒の丸藥になつたものがあつて、これは石女で子供のほしい婦人が服藥するものとして珍重せられてゐる。一寸大の函入りになつたもので、圓い米粉の殻の中に入れられ、振つて見るとガラガラ音のするものである。自分も二三個參考に持つて歸つて見た。一度誰れかに試して見たいと考へてゐる。その他老人向きの藥種は殆んど枚擧に遑のない位澤山ある。さすがは藥種の國の本場の名前を恥かしめないものがある。かうした大藥舖には店頭に持つて行つて、壽星の神像を金ピカの彫刻物に現はし、客の前に飾つてゐるなどこれ亦四川風物を物語るものの一つである。

四川省に老人の多いことは事實であるが、こは風土の關係、世相の純朴なのにも據ることであらう

が、又一方にはこれらの漢法藥劑の多量に産出することが、他の半面の原因をなしてゐるといへるであらう。西洋醫者がこのあたりでは一向にはやらないで民家と云ふ民家は、それぞれ草根木皮、陳皮の類などを日向に干してゐるところを見るなど、風物の上に長壽を誘致する光景すらよくつかまへることが出來るのである。

土民はいふ、西洋醫の藥はとかく副作用を起したり、又わざ〳〵うちへ呼ぶと診察料が高かつたりして困る。どうも民度に合はない。巴蜀の天地はどこまでも漢法でなくてはいけない云々。實に尤もな話である。

なるほどあの通り、春夏秋冬濃霧白雲に鎖ぢ罩められ太陽を拜することが少なく、昔から蜀犬日に吠ゆるとまで云はれてゐるところである。しかも市民七十萬の用ふる飲料水はと云ふと、あの三百段五百段といふ急坂の石段を天秤棒にかついで運び上げるのである。その桶から垂れる水は岩の面を傳はり、じく〳〵してあまり氣持ちがよろしくない。この邊は萬縣あたりの街の樣子と變りはない。行人は皆これを踏んであるかなくてはならぬ譯であるから不衞生なること夥だしい。そこには支那街共通の一種の惡臭が隨所に感ぜられ、鼻の鋭い人には鼻向けのならぬ巷が多い。それにも拘らず、あれだけの體力を持してゐるには餘程の抵抗力が各人に養はれてゐると見なければならぬ。

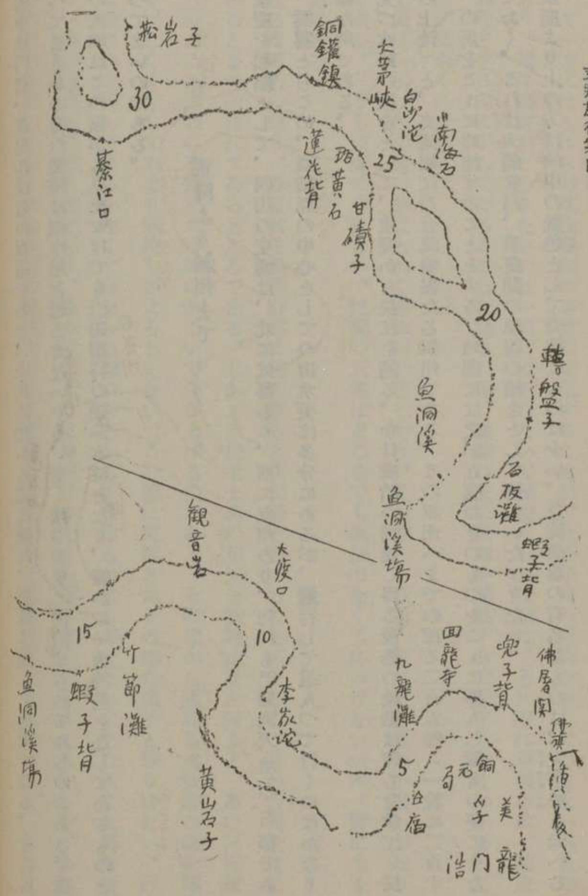
市中は門前一歩出れば岩の坂道であり、子供時代から足は練れ、筋骨は逞しく出來てゐる。それに加へてまさかの時の藥種は副作用を起させないやう、安く且つ多量に供給せられてゐるのである。重慶の天地はこの點から見たゞけでも巴蜀獨特の藥が本位となり、確かに一大特色をなしてゐるものといつてよいのである。

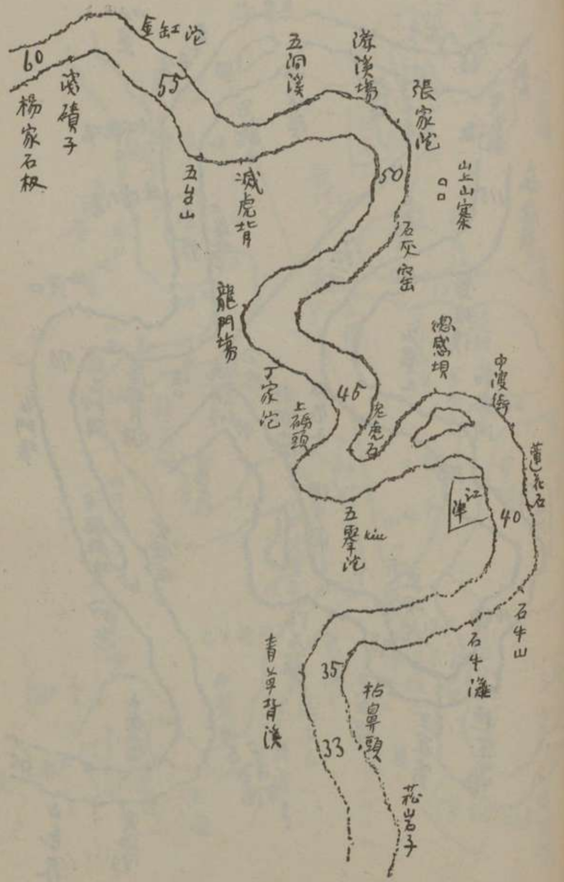
重慶より叙州まで

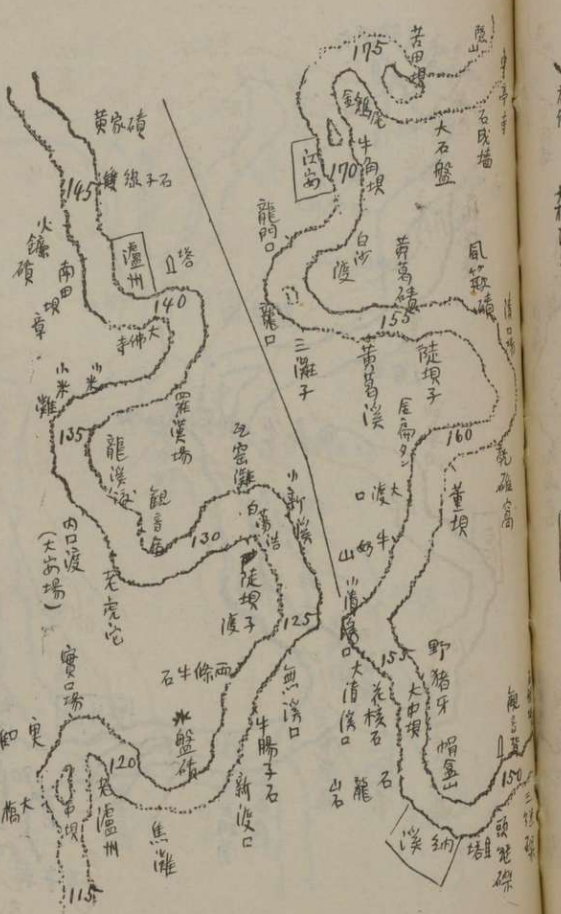
重慶を起點として、四川の交通は、北に成都あり、西に叙州あり、何れも巴蜀別天地の古都である。雲霧とぢこめ、亞細亞の中心としての山水美は多分にあるが、遡行して這入つて行くにはかなり困難な所である。

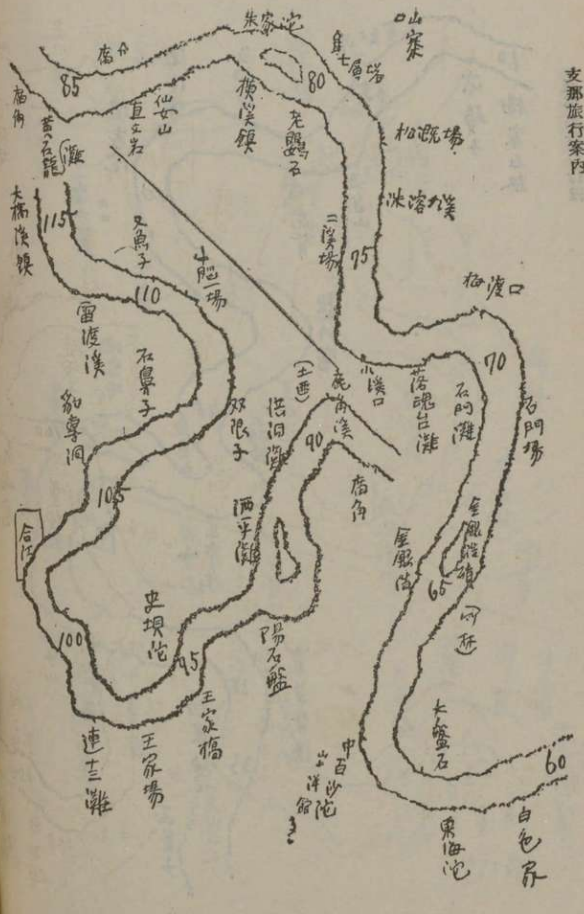
先づ水路の續きとして、重慶から長江を遡る。今日輪船の到達し得る最終の地點は卽ち金沙江（長江の上流）と、支流岷江の合流地點たる叙州である。この叙州へまでのぼる二百五哩（一說に二百十哩）の所をこゝに略述することとする。地圖には之が五哩おきのものをこゝに挿入し讀者の便にそなへておく。これは大體宜昌、重慶間の地圖の續きとして見ていたゞきたい。

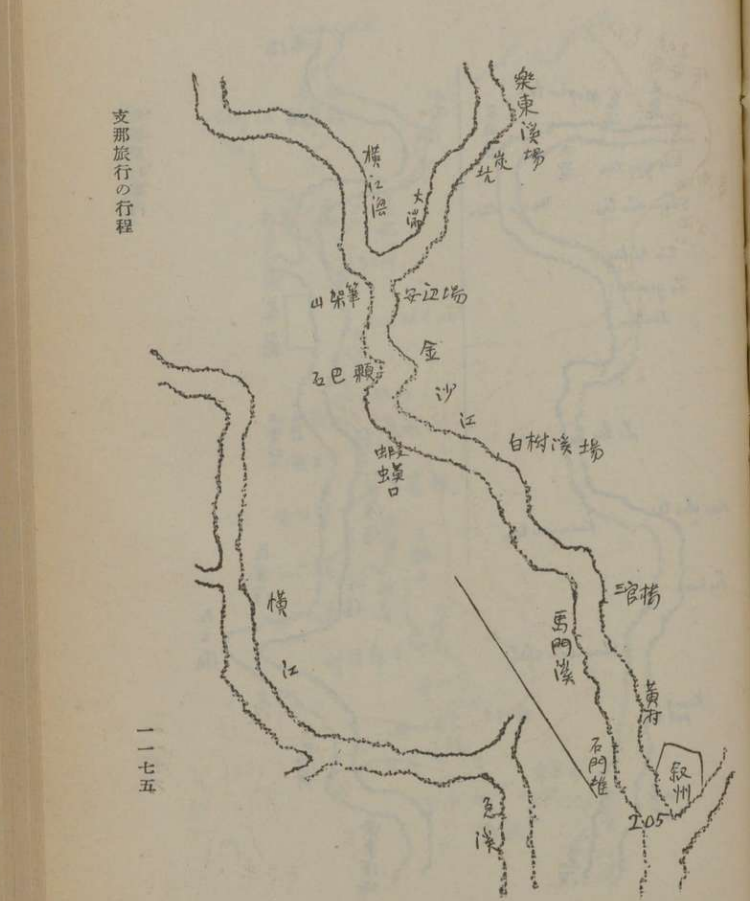
重慶より上の方は峽中の景色として奇拔なものは少い。急流激湍の有名なものは、大芋峽（クーヨーシュ）と云へる

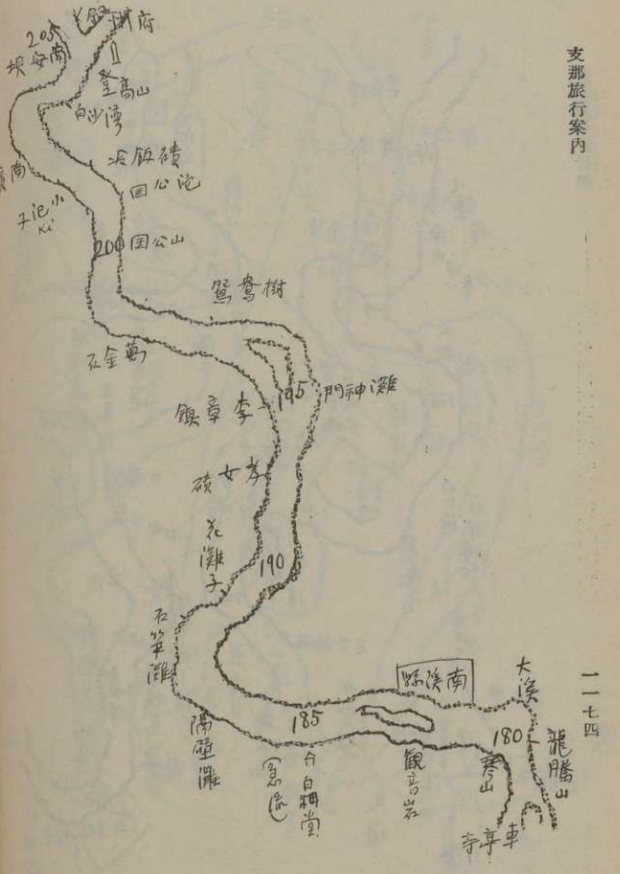

30
25
20
15
10
5
白沙沱
蓮花背
甘磧子
轉盤子
魚洞溪
石板灘
魚洞溪場
觀音岩
大渡口
竹節灘
蝦子背
黄岩子
李家沱
九龍灘
兜子背
銅元局
龍門浩

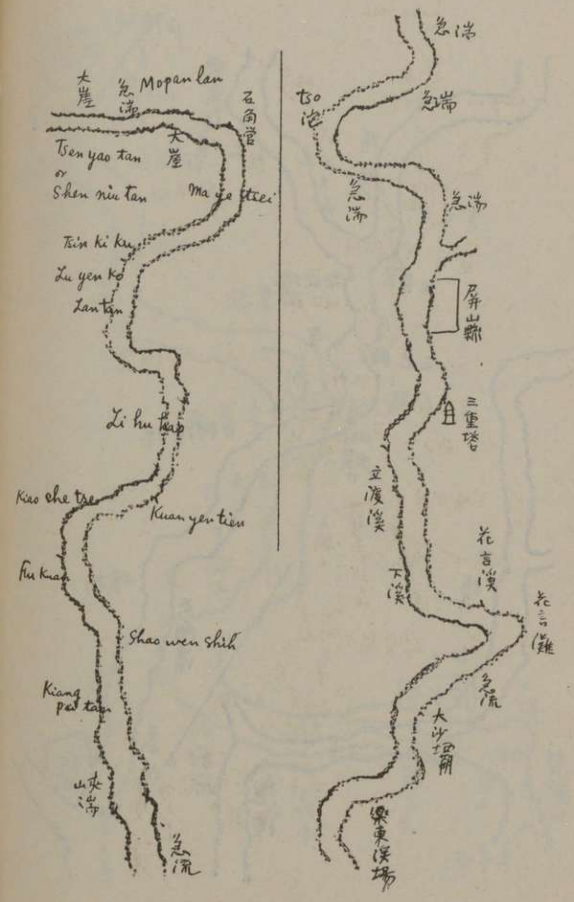

60
55
50
45
40
35
33
五洞溪
張家沱
楊家石板
五台山
龍門場
丁家沱
江津
石牛山
石牛灘

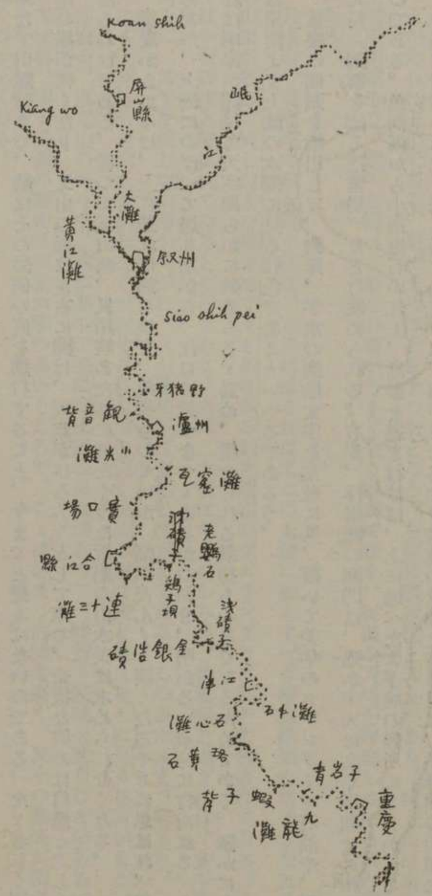

溫州
江南
江北
龍門口
三灘子
大石盤
牛角嶼
白沙渡
董壩
陡壩子
大渡口
小渡口
新渡口
無淺口
牛腸子石
新渡口
焦灘
小新溪
白溪浩
陡壩子渡
大牛山
小溪口
大溪口
龍溪場
龍溪浦
觀音庵
老虎沱
寶口場
東門灘
大橋
溪鎮
南田埡
火鎌埡
黃家埡
大佛寺
小米灘
羅溪場
白塔
苦田埡
金鵝沱
大石盤
亂箭嶺
黃葛埡
黃葛溪
屋角
大渡口
牛山
小溪口
大溪口
野猪牙
帽盒山
花椒石
龍山
觀音岩
頭號碼
二號碼
三號碼
大中壩
小中壩
新渡口
焦灘
無淺口
牛腸子石
新渡口
溫州
大橋
溪鎮
東門灘
寶口場
老虎沱
龍溪浦
觀音庵
龍溪場
小米灘
南田埡
火鎌埡
黃家埡
大佛寺
白塔
小新溪
白溪浩
陡壩子渡
大牛山
小溪口
大溪口
董壩
陡壩子
大渡口
三灘子
龍門口
白沙渡
牛角嶼
亂箭嶺
黃葛埡
黃葛溪
屋角
大石盤
苦田埡
金鵝沱
大中壩
野猪牙
帽盒山
花椒石
龍山
觀音岩
頭號碼
二號碼
三號碼
175
170
155
160
150
145
140
135
130
125
120
115


合江
連三灘
王家場
王家橋
史壩沱
陽石盤
雙浪子
洗河灘
石梁子
留渡溪
船場
石梁子
留渡溪
船場
雙浪子
洗河灘
陽石盤
史壩沱
王家場
王家橋
連三灘
合江
小溪口
老黃溪
洗馬台灘
石門灘
石門場
渡口
橫溪鎮
仙女山
直立岩
龍
大橋溪鎮
又島子
二溪場
冰溶洞
老鷄石
橫溪鎮
仙女山
直立岩
龍
大橋溪鎮
又島子
二溪場
冰溶洞
老鷄石
渡口
小溪口
老黃溪
洗馬台灘
石門灘
石門場
屋風洞
呼延
大盤石
白色岩
黑海沱
中百沙沱
95
90
85
80
75
70
65
60
105
100
115
110


樂東溪場
橫江渡
大灣
安辺場
筆架山
石巴嶺
金沙江
白樹溪場
蝦蟆口
橫江
馬門溪
二塘場
黃村
石門堆
叙州
205
急溪


府
205
安南坝
登高山
白沙湾
績公泊
回公山
小泡子
000
鸕鷀樹
金砂灘
門神灘
李子章
女儿破
花灘子
190
石笋灘
南溪場
大溪
185
180
龍腾山
南壁灘
白柏堂
觀音岩
琴山
草寺


Mopan lan
大崖
Tsen yao tan
or
Shen niu tan
Tsin ki ku
Lu yen Ko
Lan tan
Kiao che tse
Kuan yen tien
Fu Kuan
Shao wen shih
Kiang
pei tan
急流
屏山縣
三重塔
花言溪
花言灘
急流


Koan shih
Kiang wo
屏山縣
大灘
黄江灘
叙州
Siao shih pei
瀘州
合江縣
重慶

峡である。このほかには大したものはない。しかしたいした風景はないと云つても、兩岸はもとより翠なす山脈續きで、船はその巢研の底を遡行すること、今までと變りはないのである。たゞ著しく兩岸の峯が低くなり、又山の裾は左右に開け、天空がひろ〳〵として來る。奇拔な眺めは自然と乏しくなるわけである。從つて巫山峽、風箱峽あたりに見たやうな壯絶の山水美は求められなくなる。

重慶からかみは、上に遡れば遡るほど、氣持ちのせいか、幅がだん〳〵廣くなるやうに思はれ、何んだか、上流にのぼつて居りながら、江口に近づきつゝあるかの如き、明かるい氣分に打たれる。これは兩岸が開けて天空朗らかに眺めらるゝ爲め、壓せられる氣持ちのなくなるためである。確かにこは重慶より上流の水鄉に見る特色であるといへるであらう。

重慶の碼頭を船出して、對岸、宇水の磨崖文字を左舷に見、續いて美孚のスタンダード石油や、銅元局（銅幣を鑄る造幣局）など打眺められる。右岸、浮屠關の關門は、遙か半天に高く指顧せられるのである。魚洞溪から小南海石の江上、島影を過ぎ行けば、上に逃べた大芋峽（ターイユイシヤン）の難所にさしかゝる。

やがて貴州から流れ來る綦江の江口に、目のさむる如き清流の景趣を右に見て、拈鼻頭（ニエンピトウ）の山里につく。それから迂回し石牛灘を突破して行くと、江津（チヤンシン）の水鄉に達するのである。

江津は、重慶から四十哩の都城で、江邊には、いつも芝生に自由に晒木綿など數多乾し廣げられてゐるのが綠草の上に純白に見え、珍らしい清き眺めである。水汀には又魚籠なども數多並べられ、又山麓には、かなりたくさんの白堊の民家が打續きて後ろほど高く仰ぎ見られ、相當大きな都城であることが知られるのである。更に十哩ほどを上つたところ、右岸に張家沱と云ふがあり、山上には高く二個所相並んで、堂々と構へてゐる山寨があり、全く雲表に聳え、秘境の天地を睥睨してゐるかの感がある。

五臺山、東海沱の里を過ぐれば、左岸にはこれは又この上流に珍とすべき樓閣建築の集まつた大きい山里がある。宛ら白人の避暑地でゝもあるかの如き圓柱のヴエランダなど鮮かに指されてゐる。こゝは中百沙沱と呼ばれてゐるところである。更に二十哩ばかりのかみ手、松溉場を過ぎれば、右手の山上に、又もや美しい山寨が仰がれ、又七層塔が江を壓して聳えてゐる。このあたりまで來ると、如何にも上流らしき山水美が面白く表現せられ、山を行く秘境の旅の眼を慰さむるに足りる者がある。

仙女や、直立山のかみ手、洪洞灘の江邊には土匪の出沒があつて、時折り銃聲を聞くことがある。

王家場（ワンチヤチヤン）、連十三灘の難所は相當水難の多いところで、こゝはかなり波濤も高く、又その激流が相當長くつゞいてゐる。

○

重慶から丁度百哩の地點にあたり、左岸に合江の縣城がある。合江は船便の都合で、之に上陸をして見る。山鄉と云は、かなりなところで、黃葛樹、佛手柑など綠樹多く茂り、靜かな幽居にふさはしい別天地である。

四川の兵隊はかうした片田舍までも、這入つて來て、そして寺廟を占領し、山僧を追ひ出し、我が物顏に堂內に陣取つてゐる。合江の路傍に賣つてゐる赤本黃表紙の小冊を、何と云ふことなく求めて見る。多くは二三枚の袋綴ぢになつたもので、あとの方の表紙はつけられてゐない。又その綴ぢ口などの樣子も唯紙心撚りを突き通したゞけで、結んでもどうしてもない。紙は藁紙、版は木版、字は略字と云つた風のもので、誠に片田舍らしい文化の低い有樣が物語られてゐる。

梅干顏の婆さんが、山童を相手に赤本を賣つてゐる趣きは、重慶あたりでも見られない秘境の古風な光景である。時折り聞こえる喇叭の音は、半ば崩れかゝつてゐる古城の一角から洩れ出でて黃葛樹の綠蔭も、何んとなくうす氣味惡るげに眺められる。

城門を這入り、民家の畑にしばし憩へば、南瓜の蔓は長く伸び、黃花の香も日本のそれと何んら變りないものである。豆の蔓も亦、のび〳〵とよく伸びて、野趣をどことなく湛へてゐる。

この合江は、昔て涪州で人質になつた日本人宮崎高橋の兩君が湯子謨軍に引きづられ、しばしこゝに幽閉せられてゐた所である。聯想の餘り香しくない思ひもし、その後に訪ねて行つた時などは再び城門に這入る氣持ちがしなかつた。

○

合江から約二十哩上ると、實口灘がある。老瀘州の曲り角から、うねりくねりしつゝ、白蕩浩の島影を過ぐ。小米灘、羅漢場、大佛寺など云ふところがあり、之を過ぐれば、沱江の、長江に注ぎ込まんとする合流地點に來る。佛塔高く聳え、昔から歷史に、文學に、有名な瀘州の水鄉である。減水期には、江邊泥濘深く、歩行に困難を感ぜしめてゐるが、城內に這入れば、民家は堂々としてゐて豐かな感じを與へ、煙草の取引なども盛んに營まれ、土豪の住まひなどの集つてゐる巷があちこちにと見られる。煙草の工場に用ひられてゐる刻み庖丁をよく注意して見ると、こは日本泉州堺から輸出してゐるものであることを知つた。いつぞや安徽蕪湖の香煙店で見たものと同じものである。

更に十二哩を上れば、觀音背の高塔と相對して、左岸に納溪の高塔が仰ぎ見られる。綠樹影深きところに、白壁濁流に映じ、納溪都城の水影は繪の如き感を與へる。

かみての空には高く牛奶山の山容の誰れ人の目にもつく、牛の乳の恰好をしてゐる珍らしい山があり、頂は細く、そして中腹の膨れてゐて、見るからに、山童どもの思ひつきさうな命名法である。一

度この山の姿を見たものにはよい印象が殘る。そこから彎曲してゐる江流を、右に又左にと、遡り行けば、黄葛溪、白沙渡の先きに江安（キャンアン）都城と云ふがある。江安は巖の上に構へられた山里で、江岸の懸崖に足場を見つけ見つけ、蔦葛をたよりに危路を攀登するのである。岩上に民家軒を並べ、竹細工の小店が多い。竹筒、笊、竹索など、凡て上流地方の土民の實用向きのものを、何んでも竹で工夫するといつた苦心が見えてゐて面白い。中には家具で彫刻の精巧に出來たものなども見た。

長江の上流、曳子の腕に手繰つて歩いてゐる例の竹索は、その長さ、百間、二百間に餘るものもあり、その撚りのかゝつた一條宛の竹條を見ても、そのまことに滑らかに、いくら觸れて見ても各條ともそゝけた所などのなく、その幾條かを合せ撚りをかけ作り上げたるものも、皆悉く、手なれた麻繩を觸るより手なれた感じを受けるのである。幾十年の間、貴き歴史と體驗を有する竹索の製造のことて、その出來ばえもよい。ひとりこれは、船に用ひらるゝばかりでなく、或は百間、二百間、時には三百間といふ深い鹽汲みの井戸の釣瓶繩としても用ひられてゐる。舊式ではあるやうだが、これを改良することもせず、その手觸りのよい所と、その持ちの丈夫なのとで、今尚四川の土民の氣持ちがピツタリ之に合してゐる。

瀘州から支流を上つた奥地で有名な自流井邊りに用ひられてゐる釣瓶繩も亦大抵これである。その竹索は、用ふれば用ひるほど、年と共に古色を帶びて來る。手馴れて來たものは、光澤を生ずるばかりでなく、その色も飴色を呈し、亦チヨコレート色になり、何んともいへない味ひが出る。この幾百尺の繩の製造には、特殊の高い櫓を天空に造り、手でこれを絢ふに從つて、之がもつれないやうに自然に上から下ろし、渦を巻いて行くやうにして積みかさねて行く。その風俗は又四川以外の地では見られないものである。

○

金鷄尾、陰山、琴山、龍騰山など美辭に富む地名を味ひつゝ行くと、觀音岩の對岸、右手に南溪縣の都城が綺の如き風景美を見せて旅客を迎へてゐる。黄葛樹、竹林などが民家の屋上を被うてゐる趣きは、何とも云へぬ平和な眺めで懐かしい。隔壁灘の急流、石笋灘、孝女磧、鴛鴦樹、萬金石、國公山あたりの兩岸の景色は、綠嶺打續き、絶壁の頂上には土匪を見張る三角形の掘立小屋があちこちにと見つかる。武裝した兵隊が巻ゲートルをきちんと穿き、警備の任に當つてゐる樣子は甲斐々々しく見られる。所々江岸には、又卵石、眞沙の洲が、右に左に現はれてゐる。江上の水の中層、又は下層の流れは、それ〴〵層をなし、速力をちがへて走つてゐる。その流の變はる度に、この洲も亦どの地點へ持つて行かれるか解らないのである。

かうしたその眞砂のどつさりある江邊を見る度に、海岸近く我が船は出て行くのではないかといつた頭の錯覺を覺える。これが又一度ならずあるのである。

國公山は、重慶を去る二百哩の地點で、こゝから冷飯磧、白沙灣、登高山と云ふを過ぎれば、山下に碧色の清流と味噌汁色の濁流とが、すさまじい渦を卷いて相混合しあつてゐる大きな水景のところに出る。それが長江を遡る汽船の通ふ終點のところであつて、名前もなつかしい岷江の長江に注ぎ出るところ、卽ち叙州の縣城のある處である。長江はこれから先きの本流をば金沙江と呼び、屏山縣を右に、のぼれば上るほど、流れは急に、又隨所に坂落しに落ちる急湍、瀑布などのあつて、船の遡行が出來なくなる、從つて、これから先きの本流はいくらかの間は、民船ならば兎も角も、輪船では遡江不可能であるとして傳へられてゐる。自分は長江の奥を、この金沙江岷江の處まで舟楫の通じ得る終點まで極めてみた。日本の軍艦、又、英米佛伊の商船などもこゝまでしか遡江して來ない。しかし今は支那船が重慶からかみを上下してゐるのみで外國船は休航をしてゐる。

○

岷江の清流は、北の方峨眉山を過ぎ甘肅、西藏のかなた、岷山山脈に源を發してゐる有名な岷江の江流である。四川全省の水流のうちで、金沙江、岷江、嘉陵江と云ふ三大河は、長江の本流と共に、ともかく省民の日常生活に甚大の影響を持つものであつて、そのうち何れをとつて考へて見ても、流れは實に長く、支流には又支流があり、その舟楫の便と灌漑の便を兼有してゐることは、日本の石狩川や、信濃川の比でない。事實又その幾倍なるかを知らない。

この岷江は、金沙口と合してこゝに始めて、長江の流れを形づくるのであつて、本流に見る濁流の色は、こゝで清流を得るので幾らか薄められて來る。更に下の合江で貴州の赤水の清流が來たり、その下の江津で又綦江の清流を合せて來る。かくの如くして四川省内では、南方から注ぎ込む水流は、何れも清水である。水源地に深山を有するからであらう。ところが沱江といひ、又嘉陵江といひ、四川の北方から來るものは、濁流であるのを常としてゐる。長江は全くその文字通り、いつも清濁併せ呑んでゐる。だから長江がその濁流から清められると云ふことはない譯である。所謂百年の河清とは、豈ひとり黄河ばかりに就いての譬へではない。長江にしたつて同じわけである。唯いくらか長江の方が黄河に比べて濃厚でなく淡いと云ふまでのちがひがあるだけである。

叙州

長江の名稱の始まる地點は、金沙、岷江の合流地點であつて、そこに叙州の街がある。古は之を宜

賓と呼んでゐた。前に述べたやうに、叙州は重慶から二百五哩、上海からは千六百五十哩のところにある。

叙州の山城は、今日、文明式の交通機關が達し得る一番どん詰りの所であつて、重慶にゐる支那人ですら殆んどこゝに關係を持つ人は少ない。雲南にゐる山民にしても多くは鐵路により、佛領支那の東京（トンキン）、河内（ハノイ）の安南方面に出る者が多い。たまに山越しして叙州の碼頭へ辿りつくものもないではないが、多くの交通關係と云ふと、西藏や峨眉山方面の西北の關係の方が密接である。

それであるから經濟關係から見た叙州の都城は、四川と西藏と雲南の三方から、落合ふための一大マーケツトたるの感がある。城内には鹿の角、殊にその袋角と稱する貴重なものを取引する大問屋やマーケツトが開かれる。それぞれその現場に行つて見ると、五尺に餘る布製の袋がどつさり集まつてゐる。この袋は鹿角の詰められた荷物で、素晴らしく澤山こゝに集散するのである。宿屋にゐてもそこには西藏の匂ひ、四川の匂ひ、雲南の匂ひがして、それは夫々マークの相異によつてちがつた鹿角が分類されてゐるのを見る。又マーケツトにいそいそと立ちはたらく人々の言葉の上にも、それぞれ異國情緒を唆るものがある。

宿屋には、そのマーケツトを營ねた風の家が幾つもあり、その規模は大きい。そのうち大抵のものは藥草藥種が主であるが、更に又煙草の大取引も行はれてゐる。煙草の大荷物は、竹を割つて造つた三尺大の砲彈型のもので大きなタバコの葉つぱを頑丈に纏めてゐる。その他毛皮の類も又取引が大きいらしい。

城内の雰圍氣は、田舍の都城として古風な暗い所もないではないが、路面は石を敷詰め道幅は廣くとられてゐる。近代的の化粧品の店や新しい緞綢店なども色々あり、割に朗らかな又清らかな感じを出してゐるところである。

輪船が、岷江の江上に錨を下ろすと、山民は我れ先きにと群をなし、江岸の岩を埋め黒山の如くにたかつて來る。又その噂とり〴〵で賑ふところは罪がない。黒船から煙の立ち昇るを見ても、珍らしげに、又鉛の錘に紐をつけ之を振りふり、水深の測量をしてゐるのを見ても、不思議さうな目付きで見てゐるのである。宛ら嘉永年間に亞米利加の黒艦が伊豆の下田に來た時の光景も、かくやと想像される位である。

叙州は岷江寄りの碼頭に、船が着くなり待ち構へてゐたとばかり、煙草の荷主と云ふ荷主は、煙草をうんと積んだ小舟を漕ぎよせ、あの廣い岷江の水面がすつかりそれで以て被はれてしまふ位であつた。船は小さく、やつと四百五十噸。それらの荷物の百分の一も應じきれないと云ふ有樣である。

先年遊歴の時分には、時の督軍劉文輝大人が二十九歳の青年で以て、その地方、屏山縣、眉山縣などかれこれ二十一縣と云ふを支配してゐた時であつた。それで大人は宛ら飛ぶ鳥も落とさんす勢で以て、翠濃き轎子に納まり、お伴の兵隊數百名を行列に仕立て、向ふに見ゆる山の端から鹵簿堂々と、長く練り下つて來る。その光景と云つたらたいしたものであつた。又そのお伴を從へて、我が船に歡迎のために遊びに來てくれる時の光景と云つたらない。或は又兵隊共が、煙草船の荷物に跨がり悠々四川の端唄を歌つてゐる光景が面白い。又督軍自身、その城内にナイフやホークの用意もないから、船の食堂が借して頂きたいものだといふ申出でなど、全く罪がなくてよろしい。凡てかうしたことが奥地秘境の雰圍氣と如何にもよく調和し、他の地方とは別天地をなし、少なくとも二百哩しもの重慶なんかとは殆んど一世紀も二世紀も隔つるの感がしてならなかつたのである。誠に岷江、金沙江のほとり叙州の風物は峨眉の山下だけに奇古枯淡にして懐かしいものが多々あるのである。

成都及びその附近

古の蜀のみやこ成都は、巴都、重慶に對して、天下に廣く且つ古くから知れ亘り、日本人には一種の史的情趣を喚つてゐるものがある。もと蜀と云へる言葉は、その初めのわけを説明すると蠶の名であつて、そは蚕蟲のことを意味したものである。つまりこの地は古くから、絹絲、絹織物、蜀江の錦などで以て工藝美術史上に知れ亘つてゐるところである。

蜀の名物として、最もひろく又古くから顯著に知られてゐるものは、交通のとても險惡なこと、これである。既に述べた如く北の方、長安、即ち今の陪都の都に出るには、かの金牛道と稱せられる所謂蜀の棧道の天險がある。縣州、梓陽、劍閣（劍州）昭化、朝天の各名勝を突破して漢中の天地に出で、そこから秦嶺山脈を越えて、長安の都、今の西安に達することが出來るのである。それから今一方は、棧道の代りに水路によつて、例の三峽の險を下り中原に出て行く道である。これが成都を中軸とした南北の二大幹線となつてゐる要路なのである。

更に又、西の方、西藏の方面に向ふ道を求むるとするには、新津、浦江（プーカン）を經て雅州に出で、峨眉山を左に仰ぎつゝ詩に有名な清溪から、白雲鎖ぢこもる西藏の境地、瀘定からかなた打箭爐に出で、更にこゝから裏塘、巴塘を經由して西藏の都、拉薩に至る棧道がある。いづれも三者、互に相劣らないだけの天下の險であつて、さすがに亞細亞の背骨に當る位置を占めてゐる所だけに、容易な道ではない。

蜀の都が二千年の昔から、こゝに古代文化を發達させて、一種特別の意義を漾はせてゐるのは、支

那老大國に一段の深味を與へてゐるやうにも見られる。普通南方からする成都への道筋は之にも色々ある。例へば重慶よりする者、瀘州よりする者、又叙州よりする者と云つた三つの通路が開かれてゐる。中にも叙州から岷江を遡つて、成都城外の望江樓まで行く水路は、最も簡單である又わりに樂でもあると評されてゐる。而して最もその頻々利用され、且つ經濟上政治上一等繁々しく人馬の去來の多いところは、いふ迄もなく重慶成都間の往還である。重慶から成都へ通ずるには、官道と稱せられるものと間道とがある。西の方、永川から資陽、簡陽を經て成都に行くものを官道となし、今一つの間道と稱せられるものは、北の方鷲鼻場、合川、安岳、樂至を經て簡陽に出て、こゝで官道に合するものである。この二道がある。官道を行く者は千二百支里、間道を行く者は九百餘支里と云はれてゐる。何れにしても、九日乃至十二三日の日程を要するのがお定まりである。しかし官道の方は兎角意の如くならず、政變とか土匪の出沒とかゞ多く、却つて行人を惱ましめる場合が多いのである。

成都街道は、所謂四川の盆地を通りぬけてゐるもので、道中は罌粟の栽培が盛んである。こはその如何に地方財政を、官民共に、阿片の生產方法によつて豐かにし且つ之を處理して行かうとしてゐるかの底意が察せられるのである。恐らく阿片國、雲南、貴州のそれに劣らぬだけの阿片の產額を見てゐることであらうと思はれる。

成都は人口、かれこれ八十萬と稱せられ、日本の總領事館の設置されてゐることは云ふまでもないが、排日の八釜しくなつて來る時はいつも引揚げてゐる。名所舊蹟で、名高いところと云へば老子を祀つた青羊宮は云ふまでもまく、諸葛孔明を祀つた丞相祠堂（劉備を併せ祀つてゐる）であるとか或は文珠院などを始めとして見るべきものがどつさりある。文珠院に寶藏せられる唐、吳道子の觀音像と稱せらるゝものは天下稀世の珍として殊に專門家の間に評判が高い。その他、國立大學、博物館、萬里橋、駟馬橋、杜子美草堂、百花潭、望江樓など枚擧に遑がないのである。そのうちでも、望江樓はいつもお定まりの如く、文人墨客が送別の宴を張る時、こゝに慣例として雅催を見ることゝなつてゐるので、懷かしみの深いところである。又金石拓本を漁る者は武侯祠内に、所謂岳飛の出師表の石刻厚石があり、これは他の地方にその複刻の出てゐるものとは異なり、その本場のものだけにひどく貴ばれてゐる。成都全體としての感じは、こは山都ながらも道幅廣くとられ、蜀江の錦、その他の由緒深き工藝美術品もあり、かなり明るい零圍氣を漲らせてゐる。殊に又晉曲方面では、その古琴の奏樂が今以つて傳はり、その方の達人羅紀君の如き、古銅の琴を抱いて平沙落雁の曲をかなでたることもあり、蜀の別天地に偲ばるゝ雅樂は日本人に紹介したいものが多い。日東に云ふ琴は支那では箏と稱せらるゝもの、その十三絃にして紘の枕のないものを稱して琴と云ふのである。

四川省全體は昔から丁度全支那縮圖の國き觀を呈してゐて、いつも政變又動亂の絶え間がなく、打續く秕政にかれこれ生民は弱つてゐる。

今も尙、鄧錫侯、劉湘、劉文輝、田頌堯等の群雄が走馬燈の如く、次から次へと現はれ、その勢力爭ひをしてゐるので、その中心地としての成都はかなり市民を疲れさせてゐるやうである。

○

成都の西北、灌縣には自動車路も開け、その灌縣が岷江の水運の便を有してゐるところから、交通取引もかなり盛んになつてゐる。秦代蜀郡太守で治水の功勞者たる李氏父子を祀つた二郎廟と云ふがある。かなり有名なものであつたが、今は炎上して亡くなつた。そのしも手に安瀾橋と云ふがある。天下に知られた珍らしい吊り橋である。この橋は、幅十尺長さ千二百尺に達し全部竹索を用ひ、釣橋の趣は誠に雅である。今では四川隨一の呼びものとなつてゐる。一々細かい竹の綱で編みなした奇橋であるので、四川風物を漁るものは必ずその一つに之を數へてゐる。文人畫伯の筆にも常にこの安瀾橋の清趣は描寫せられてゐる。世界で新らしい英吉利の倫敦橋に對し、この舊文明の四川安瀾橋は優に東西の二大珍橋として併稱するに足りるものである。

○

尙、岷江の上流ずつとかみ手にある松潘縣は、水路としての終點をなせるところであり、甘肅から四藏、青梅の交通路の衝に當つてゐるところで、蕃地秘境の物資が大分こゝに集まり、岷江の經濟價値を一層大ならしめてゐるところである。

○

江の流域で天下の山水風物を壓倒してゐる所のものは嘉定の縣城高く聳ゆる峨眉の峯である。峨眉山は海拔二萬五千尺。李白の故里はその山下にあり、壯甫その他文人墨客の之に攀登したものは少なくない。その爲め古來詩に文に又繪に峨眉山の名前の現はれてゐないものは殆んどない位である。山は大峨、二峨、三峨、四峨の四峯より成り、その山頂には金頂寺を始め、萬年寺、大峨寺、仙峯寺、伏虎寺、保寧寺などと云ふがある。何れも千古の神さびた巨刹古廟であつて、四時白雲に閉ざされ、時折り白雲の間より洩れ拜せられる佛光を浴びて西藏人や漢人の之に參詣するものが少なくない。山にこもる高僧雲水は天外に秘境世活を營み、山西の五臺山、安徽の九華山、浙江の普陀山と共に天下の四名山として知られてゐる。山中には又峨眉十景と稱せらるゝものがある。曰く

金頂祥光　靈巖重翠　聖寺晩鐘　象池夜月　白水秋風　紅椿曉雨　雙橋清音　九老仙府
羅峰晴雪　大坪霽雪

蔵の里、清渓は、唐代に李白が有名な七絶を吟じてゐるので以前には三歳の兒童もこれを口に稱へてゐる位である。今は餘り漢詩など少年に讀ませなくなつたので之を知る者もゐなくなつた。いくら時代が推移してもこれだけは東洋趣味を忘れさせない爲め特に勸めたいものである。序でながら之を附記しておく。誠によい口調ではないか。

峨眉山月半輪の秋
影は平羌に入つて江水流る
夜清渓を發して三峽に向ふ
君を思へども見ず、渝州に下る

峨李山月歌　　李白

（峨眉山月半輪秋　影入平羌江水流　夜發清渓向三峽　思君不見下渝州）

李白の詩に見えたこの清渓は、峨眉山麓、今日の清渓たるといふ迄もなく、これから水路、岷江を下り叙州に出で、長江を一瀉千里に渝州（今の重慶）に出る。その時の秋の詩であつてよく吟じつくしてゐる。その實際の地理上の觀念をあたまに入れて考へると、この約四百哩に亙る奥地秘境、江流下りの風物も、誠によく聯想せられ、兩岸高く聳ゆる峯嶽の間を右巴蜀の別天地に見る所の顧左眄、その嘉定の宮にかゝる峨眉山月を伴として、盡きぬ詩趣を味はふことの出來たその頃の詩咏は今尚四川の旅に體驗することが出來るのである。

峨眉を西に雅州から打箭爐街道に出れば、最早や西の方、雪山を仰ぎ見、テーブルランドとしての秘境雲郷となる。從來打箭爐以西、巴塘あたり一帶の秘境は之を川邊特別區域となし、英吉利が、拉薩の主都を中心として、西藏に勢力を伸ばす政策の上から、特にこれを特別區域となさしめてゐたのである。所が國民政府が、南京に都を置いてからは、これを西康省の名で以て呼ぶことゝなした。こは宛ら北支那に於て、萬里の長城以北に、綏遠省察哈爾（チャハル）省、熱河省を新設したと同じわけである。但しこのうち熱河省は昭和七年三年一日滿洲國の樹立と共に民國から消えてしまつた。

しかるに西康省は面積の調べの判らないのは元より、人口もはつきりせず、財政、經濟の方もまだ何んら確たる基礎を立てるに至らず、唯藥草、毛皮、その他鑛物類の物資の物々交換が四川雲南兩省の土民たちの間に行はれてゐるといふに過ぎない。そして取引も大部分は緬甸境のサデイヴアの山郷まで印度カルカツタから鐵道の上つて來てゐるのがあるので、その方との交渉がある位である。恐らくこの西康省に見る色々の甘い汁は、緬甸印度の方へ吸ひとられてゐるだけのものであらう。南京政府は一時洛陽へ都を移し之を行都と云つて見たり、長鞭馬腹に及ばずの嘆があり、四川はもとより、

西康省などにしたところで唯机の上の地圖面に見る文字に過ぎない。西藏外蒙古などの地域と共に、こは表面國境内にありながら、經濟上に、又政治上に、又宗教上に、確かに全く行政區域外に置かれてゐる譯である。

古くから「率土の濱、王土に匪ざるはなし」などと文章の上でこそうまいことをいつてもゐるが、事實はまんまとせしめられてゐることが多い。一九三二年の春は、從來の通り、國民政府の幹部の一つに蒙藏委員なるものがあり、その部長なども任命されてゐるが、これ亦机上の任命に終らなければ幸ひである。要するに西康省は名のみであつて、一向に實が伴はない。だからこゝにもこれ以上記述することを避けて置く。

四川省を顧みて

人口五千六百萬を抱有する四川の天地は、日本内地の二倍に近い面積を持ち、他の省とは全然かはつた天然の要塞をもので、四周が區劃せられてゐる。その爲め昔から殷然一大獨立國の觀をなし、東、西、南、北、何れの方面からするも單なる武力をもつてしては、これを侵畧することの出來ない天惠無二の一大山寨國の實を有してゐる。思想上から之をどうかしようとするなら別であるが、それも中々に容易でない。ともかく何物を以てしても之を侵すなどは全く無謀と云はれてゐるところである。そしてその中に成都があり、重慶があり、萬縣があり、保寧があるといつた風で、その各々が又山寨以上の王城を以つて鳴つてゐて、獨立自給の力を有してゐる。それに又四川獨特の縮圖とも目さるべきものが、各地方々々に土豪に山寨として蟠居してゐる。これらがそれ〴〵又他から絶對に侵されない丈に自給自足の生活を營み、巴蜀の天地を睥睨してうそぶいてゐる。萬縣天生城の山寨に見る賀氏の故宅ですらも、山上に二百戸からの土豪がゐて、古くからこゝにかたまり、雲外生活に四川風物の何物かを物語つてゐる。實に四川省くらゐ樣子の變つた愉快なところはないのである。

凡そ政治と云ふものの根本概念に立ち返つて考察し、之を四川人の頭になつて評して見ると云ふと、全く支那らしい本當の見方が絞り出されて來る。と云ふのは元來政府など云ふものは必要がないのである。かりに必要があつたとしても、自分の私腹を肥やしたいがためのもの。又軍費にと稱して、美名の下に重い稅を取立てたい爲めのものに過ぎぬ。人民の爲めには、無用の長物でこそあれ、百害あつて一利のないものである。個人々々の生命財産を護り、幸福の增進を圖つてくれてこそ、始めてそこに政府存在の意味がある。政府が政府なら人民だつて人民だ。天に二日など云ふが二つあつても三つあつても同じことだ。天下は天下、四川は四川だ、不平のあるものがあるなら、いつなりと天險を

突破して巴蜀まで攻め寄せて來るがよい、と云つた式の考をもち、又實際に豪語してもゐる。それと云ふのも、その地理のしつかりしたあたまが根柢を作つてゐる。ともかく四川の盆地は、關門に、南に三峽あり、西に雪山あり、北に劍閣あり、一夫關に當たれば萬夫も侵入して來れないだけの天險を具備してゐる。これが何よりの強味である。それが第一の舞臺立でとなつてゐる。

今一つには又そのあらゆる物資を省内各所に有してゐることこれである。金、銀、銅、鐵、石油、石炭、鹽、硝石、滿俺などの類はいふ迄もなく、殊にその金は、金沙江の流域から砂金として、昔からあまた採集されてゐると云ふことである。又鹽は上述の自流井から無限に出てゐる。その井戸の數が幾百千あるかを知らない。その外貢川から夔府からと各所にどつさり產出してゐる。又岩鹽として秘境の山々から出るものがあり、その分量は夥しい。これは太古地質年代に、印度洋ベンゴール灣が或る年數の間緬甸から四川の奥に彎入してゐたことがあつた。その當時は、西藏の臺地はテーブル、ランドとしてあつたけれ共、ヒマラヤの山脈は海の底になつてゐた。又或る時代にはシベリアから北滿、四川の奥へと北氷洋が深く彎入してゐたこともあつた。地球の上の陸地がまだ本當に固つてゐなかつた、幾百萬年の太古の頃には、カンブリヤン時代の頃までまだ地殼の動搖時代であつたと見える。その時分になるまでは、あちらへ又こちらへと、海水そのものも動いてゐたものであらう。亞細亞内地へ奥深く流入してゐた海水が滯つては、谷間の極まるところ、穴の中に、又地の底にと、流れに流れかたまつてはそれが後世の岩鹽ともなると云つた風である。今日それが瀘州の奥の自流井その他で汲み上げられてゐる鹽水となつたり、又岩鹽の山骨になつたりしてゐる譯である。

石炭の層に至つては、奥地秘境の山々に黒色の山骨をなして現はれ、長江筋では船を岸につないで崖の一角から石炭をぶつかき落とし込んでゐる山民さへも目撃したことがある。何と云ふ豐かな天惠の國であらう。又滿洸の紫色をなす山脈は、上にも述べたやうに、三峽を出たところに幾哩となくつづき、天の青空に對してその山を染め、遡江する旅人の眼を慰めてゐる位である。

尚四川は、江岸の山々に、林業のわりによく奬勵せられてゐる處があり、重慶から上には殊に松柏科、針葉樹の常綠林が、山を蔽うて幾十萬株となく規則正しく植林されてゐるところを見る。又蜜柑山その他の柑橘類の山も上流地方には隨處に見出される。

煙草、阿片、米、麻、麥、茶、甘蔗、凡そ半熱帶國に出來るだけのものは、何んでも見られるやうである。わけても三川の盆地は緬甸の延長地帶をなせるところだけに、砂糖、煙草、茶の如きはその產額が著しい。又熱帶國で、榕樹として知られた老大木（臺灣では臺灣松と稱せられるもの）は、四川では隨處に生ひ、黄葛樹の名によつて到る所に綠深き蔭をつくり、日除けの代りをなし、凉味を唆

つてゐる。

四川獨特の呼びもの、蜀江の錦は今も成都重慶の如き大都市には、盛に織り場を有してゐる。古代の如き名品は求められないにしても、今尚かなり美しい藝術品として天下に受けてゐる。十二三の少女のその織り場に、又刺繍工場に從事してゐるもの多く、絹糸工場に通ふ女工のいそしんでゐる趣は蜀女ながらに可愛いところがある。その外、變つた方面では白木耳（銀耳）竹孫の如き、四川料理獨特の材料はいふ迄もなく、草根木皮に、靈藥の材料といふたら殆んど無限に出て來ること世人の知れる通りである。

かゝる無限の物質を有し且つ天下無二の天險に據つてゐる四川人は、山國の民のことゝてその思想は、堅實に又かなり純朴な處がある。一旦自分でかうと信じたことは、極めて正直に守り、不言實行の美風がある。昔し三國の時代に龐夫人が姑にいぢめられぬいて、その主人と離緣をした。けれ共、尚その主人の嗜好によるものを、日夜内々に届けてゐたくらゐであつた。所が或る時、珍魚が欲しいといはれたので、これを得んことに苦心してゐた。或る日のこと、あの濁流の漲る江岸に佇んでゐたところが、不思議にも突然清水が足元に湧へて來て、美しい珍魚が水中に現はれたので、それを捕へ主人のところへ届けたと云ふ傳説のある處すらある。里人はこれを呼んで今以つて孝婦泉と云つてゐるが、その清水から得た魚を見て、どんなに主人は喜んだことか判らぬ。後世これが二十四孝の一つに數へられてゐるのもその筈である。これは清魚を得たばかりでなく、唐の陸羽が茶を煮る時の味のよい水として天下第何泉とかに選定してゐるそれ位名高い水になつてゐる。凡べて長江の上流地方には氣持の純な住民が多い。如何に急流激湍のあるところと雖も、民船相互の間で、これを操縦するには、二十尺の青竹を使つてゐるが、その鋭い鐵の鉤のついた篙口で以て、船の胴腹に引掛けたり、又打込んだりして自分の船の進路を定めて行く光景が、重慶萬縣あたりの碼頭でも常に見られてゐる。若しそれ外國船にどうかして、要人をかくまつてゐる如き誤解などあり。その噂がぱつとひろがるとき、それと目指して、官憲が船内に成り込み捜索を行ふことがある。その際、船長から拒否されやうと徹底的に深く思ひ込みその要人のゐる處を突止めなければ承知しないのである。しかし若し捜索の結果、事實ゐない事が判明した時には、その官憲が銃殺に附されても文句はないかと一本痛い處をまゐる。さう突止められる如き場合には、それは困るとは云はない。そこが四川人である。その止めを刺された時、容易によろしいと承知するところは可愛い。誠によい處がある。事實船内捜索を行ひ、どこもかも見て、その結果要人がゐないことが判明する。すると十數名のものは卽座に舷頭で、一勢射撃を食らひ、江中にどんぶり投ぜられるのである。事終つたあとでこちらから官邊に向ひ事の仔細

を通告する段取りになる。それに對してムツと怒るかと思ふとさうではない。その筋では外人の言にしても、道理のあることならば何んな文句をいはない。「至極それは御尤の譯だ」といつて寧ろあやまる態度に出てくれる位である。その邊の心境には何等わだかまりを見ない。

四川の天地は、人情に於て、物産に於て、申分のない一大獨立國をなせる國である。又それだけの實力と資格を持つてもゐるが、これを支那全局面の上から見ると、かやうな世相、經濟關係などの問題から離れて考へて見ると、四川は世界的の天然公園として提供しても差支ないだけの條件が備はつてゐる。といふのは、先づ風景の上で雪山は天下の高として聳ばれ、峨眉は天下の秀として呼ばれ、巫山は天下の奇として歌はれ、門襄は天下の壯として吟ぜられ、瞿塘は天下の險として恐れられ、劍閣は又天下の雄として仰がれてゐると云つた風である。

かくして四川省と云ふ省は大自然の長所を凡て兼ね有し、燕山楚水、全國に亙つて考へて見ても、決して他に求め得られない景觀を聚めてゐる。これだけの世界的大自然美を探らんとする者が、なまぬるい通り一遍の旅行振りなどで、これに觸れて見ようと云ふ心掛けでは、到底本當の味ひは出ないであらう。矢張り、三峽の險といふ世界的の天險を越えてこそ、始めてその大自然公園裏に這入り、天與の一大美觀を仰ぎ見ることが出來るのである。かう云つた四川の幽境にして始めて、この天下無比の壯絶なる旅が出來るのである。

序でに支那は、この四川の旅をなし了へて、こゝに長江三千哩の眞面目に觸れることが出來る。この長江の本流と支流の流域一帶にかけて、支那全人口の約半分二億幾千萬と云ふ夥だしい住民がそこに生業に從事してゐる。尚長江の名稱のことであるが、普通の日本人や、西洋人はこの長江の全體を稱して、之を揚子江と云ふ傾があるが、支那では一般に之を長江又は大江と呼んでゐる。揚子江と云ふのは、安徽から江南に沿ふ下流の方を指し呼んでゐるやうである。しかし近來支那の新人たちは外人なみに一般に之を揚子江と呼ぶものも見るに至つた。四川の叙州から下游、南京あたりまでのところは勿論多くのものは長江、又は大江と呼びならはせてゐる。又古くは單に江の一字で呼んでゐることもある。上游は叙州から上の方を特に金沙江の名で呼び、長江とはその叙州からしもの方を云ふことになつてゐる。日本の地理教科書あたりの中に、揚子江の長さ云々とあるのも嚴密な意味からいへば、その上流地方は這入らないことになる。普通だれでも許してはゐるが、本當に云ふと、事實に反してゐる譯である。

しかし一方には、中部支那の天地は、之を中原と呼んでゐる。中原に鹿を逐ふなどとも云つてゐる天下のことである。ところが他方には又天下のことを一に江湖といひ、江湖の諸君などゝ用ひならさ

れてゐる事實もある。かくして長年にわたる用ひざまは色々に變つて行く。江湖とは、長江の本流支流の江水と湖水とが相連なり一大水鄉をなせるところを呼んだ語から來てゐるものであつて、萬天下の意味に見られる。それ位、この長江の江の字は廣く且つ大衆的の意味となつてゐるのである。

福建省

福州及びその附近

福州は、臺灣海峽を隔てゝ、臺灣の表玄關の觀がある。又その表玄關たらしむるの實を現はさなくては意味をなさぬ。福建省内に在りて、大都城として南の厦門と共に車の兩輪の如き關係にある。しかし福州は福建の省城として古くから重きをなし、その政治方面に又經濟文化の方面に、厦門と比べて自ら別の意味を有してゐる。又兩者同じ福建の都城であり乍ら、言葉の上に於ても、甚だしい差を有し厦門語とは殆んど無關係と思はるゝくらゐ樣子の變つた方言を話してゐる。支那古來の言葉の發音は、福州以南、廣東、海南島あたりに至る奥地では何れも、二千年乃至二千五百年以前の古代語を物語つてゐる。又たしかにその俤をあまた止めてゐる。臺灣あたりは誰れしも福建の天地であるから福建語で通ずるが如く思ふ。ところが決してさうは行かない。福州語では全然通じない。臺灣島内は厦門語及び廣東語と連絡をもつてゐて、福州語を耳にする時は、全然別語の感があるのである。

○

福州の旅で目につくものは、その北方にある三都澳の港灣と、閩江の江流である。閩江はその兩岸に岩山續きの連峯があり、松樹の影多く景色は堅い感じがする。總體に福建の景色は江南地方の柔かい柳塘絲野のそれとは趣きを異にし、どちらかと云ふと寧ろ日本式の所が多い。その山やまに生ひ茂つてゐる松樹の趣きは、たしかに支那といふよりか日本と云ひたい景觀である。しかしその閩江は濁流であつて、揚子江のそれと同じやうに、年が年中、味噌汁色をなし、清流を見るなど云ふことはない。浙江の沖合から、福建の海上にかけて、漫々たる黄色を湛へ、日本人の眼には、その點が一種支那らしい氣分を唆つてゐる。

昔し空海が、渡唐のとき福建まで流された時も、同じこの日本人の氣持に添はぬ濁流を眺めたことであつたらう。日本を船出して幾十日、折角用意して行つた飲料水は船中に缺乏し、水甕に溜めた雨水には蛆がわき、數多の下痢患者を出したとか傳へられてゐる。全くこの濁流では日本人の目には洗濯用にもなるまい。

閩江の兩岸に聳ゆる岩山の麓には、時に白堊紅壁の寺廟があり、飛檐、曲線美の水面に倒影を映してゐる所はよい眺めである。又江流に棹さす江上の民船は一風變つた姿をしてゐて、その帆の上げ方が又浙江あたりに見るものとは違つてゐる。その一例をとつて見ると船頭の嬶さんである。どの船にゐるかみさんも、皆一尺に餘る長い幅廣の銀笄を、二本づゝ差し違ひに差してゐる姿はさも勇猛に見え、見るからに福建情緒の尖端を切つてゐる。或は又江上に仰ぐばかり高く浮ぶ大船の金銀紅綠に色彩られた畫圖の意匠は大陸の夕陽に照され、檣頭に輝く黃金の珠は光彩陸離、あたりの光景に畫龍點睛の觀があり、特に物珍らしく旅客の目に映ずる。

江口のシヤンピークのヴイ（浮標）を廻つて遡ること四十哩、有名なる馬尾山の眺めがある。そこには羅星塔と稱せられる六重の塔の高く仰ぎ見られるのがあり、竹の簗を仕掛けて漁船のあまた出そろへる眺めなど水鄉の趣を添へてゐるやうに思はれる。

馬尾は支那海軍の軍港となれるところ、同時にこゝに造船所の設けもあり、全支沿海地方に見る隨一の重地として知られ、上海、江南船渠（ジヤンナンドツク）の價値よりも遙かに上位にあり、且つ支那式の匂ひが高い。現に船舶建造中と見えて、キールを設けてゐるものも二三見られた。

海軍査驗所と云へる船上の衙門は程遠からぬ江上の一角に設けられ、來る船、來る船をば必ずこゝで臨檢してゐる。江上には、支那兵艦としてその名も知られた吉雲、楚觀、海鵰などいふ餘り大きい船でもないのが、その舳艫相銜んで錨を下ろしてゐるところは流石に勇ましい。

元來これらは支那軍艦たることいふ迄もないが、しかし列國のそれの如く、政府にちやんと專屬してゐるものと見ると違ふ。どちらかといへば、民間又は有力者の間に管理せられた私有物に屬し、一朝事あるの時は、これを政府側へ雇ひ入るゝ契約をすると云ふものである。その契約と云ふのも、金額次第で水戰半ばであらうと、いつ何時でも交戰地點から錨を上げ、青天白日旗を下ろして、さつさと思ふ方へ行つてしまふかも知れない。實にたよりないこと夥しい。

近來時折り、南京政府から長崎の三菱造船所あたりへ軍艦の注文などがある樣子であるが、果して政府所屬の兵船として操縱せらるゝものかどうか、それとも又一有力者の所有物になつてしまふものか、結局は解らないのである。支那の兵船は支那の兵隊と同じく、浮き草見たやうなものである。兎も角もこの馬尾の港は民國の有する海軍根據地として、天下に鳴り響いてゐる所である。從つて福州の天地は、おのづから海軍に因んだ元帥薩鎭氷將軍を始め、又杜錫珪大人の弟子青年、有爲の海軍志願者などを數多出してゐる。かくの如くして閩江は、日清戰爭時分の水師提督丁汝昌以來、海軍と密接な關係をもつてゐるところである。

薩將軍は、若年にして海軍技術を英國に學び、名聲嘖々たるものがあり、福建省民の德望も厚く、長く省長の要職に迎へられてゐる。閩江は濁つてこそゐれ海軍方面の人物をこれが生み出してゐることを考へて見ると又別の深い聯想が起る。と云ふのは遠く海を渡り、南洋方面に於ける支那移民にこの閩江流域から夥しき華僑を出してゐる事實があるからである。

閩江に架せられた萬壽橋の長橋は、その名の示す如く極めて長く、その邊りに船上生活を營める蛋民は幾萬と稱せられるほど澤山ゐる。何れも水上に特別な一大部落生活をなしてゐる。上海、寧波あたりに見る船頭とは違ひ風俗も變つてゐるが、婦さんも子供も綺麗さつぱりとしてゐる。その船は多く黄色の桐油で塗られ、船板はいつ見ても清潔で見る目も小さつぱりしてゐる。然るに陸上の福州人は、これを一種見さげた眼で見てゐると見えて、之と結婚をしない。

その事について陸の者にいはせると、一尺の笄を挿す女は、遠く奥地の田舍から流浪して來た人間で、その素性が知れない。彼等同志はあゝして、賤民として水上に部落生活を營んでゐればよいのだなどと稱してゐる。ところが船頭の方にいはせると、我々はもと各地方をへめぐり、社會的に戰つて來た者で、婦のさしてゐる笄だつて元來武器の一種である。男を相手に鬪爭も何も辭せない生活上の勝利者たることを物語るものである。云々。なるほど今では婦さんに稼がせて、亭主は喰はせて貰つてゐる手合のやうである。

萬壽橋下の船民部落は、漢口、漢水に見るそれとは違ひ、著しく秩序があり、船の形も整頓せられ、行儀正しく流れに錨を下ろしてゐる。

橋の左手、丘陵の起伏せる邊り、老松の影に白堊の支那公館や、洋館が數多並んで見える。その中に日本の領事館などもある。あたり一帶岩山の事とて路面は砂地、泥はなくいかにも清らかである。白沙青松の日本式らしき感じがする。福州の南臺は、この邊を總體引くるめて云ひ、倘河の右岸方面をまで併せ稱してゐる。福州の城内と云ふとそれから更に遙かに奥の方で烏石山下にある。

臺灣總督府の經營にかゝる東瀛學校は南臺に堂々たる輪奐の美を見せてゐる。これは臺灣籍民の子弟を主として教育してゐる小學校程度の學校であつて、日本人の教員がその校長となつてゐる。

○

福州には白壁高き防火壁の設備された民家が多いので街の眺めは美しい。又路傍に民衆的な溫泉場が數多あり、浴客の出入が又相當繁々しい。又昔琉球王の使節の來貢してゐた當時の館址などもこゝにある。市中は人馬の往來賑かで、路面はすべて近來アスファルトに改造せられた。黄包車の去來するに、乘客の足で人を除けさせるに鳴らすベルの音のチリン〳〵と餘韻を清く響かせてゐるところは

福州らしく又懐かしい。市中の目抜きには所謂福建皮箱といつて、紅漆の支那鞄や、紅枕、太鼓まどの革細工の立派なのが客の目をひいてゐる。しかし紅鞄は、古く出來た喜の字を圓く金色で浮出させたものが品がよく、近來出來のものはよろしくない。たしかに新しいものは何れも出來榮えがしない。これは福州工藝のために惜しいことである。

又福州の旅には竹細工で、閩江の山水を額縁に納めた手頃の精巧な工藝品がある。山水のよい處を寫し、いかにも福州らしく懐かしさを唆つてゐる。

城内の福州衙門を訪ねて見ると、省長を始め當路の大官がゐて、天井の高い古色蒼然たる大室にそれぞれ納つてゐる。聞きとりにくい福建語で喋々喃々をやつてゐる。

○

城外で見るべきものは、五虎山、鼓山の禪寺で、殊に山上、湧泉寺の巨刹は四時參詣者が多く、高く雲表に聳えた霞の間から女の轎婦が善男善女を乘せて山門に入るところの光景は悪くない。山寺の本場だけにしつとりとした趣きがある。又江岸のあちこちには、綠瓦高く聳ゆる米人のミツション・スクールが堂々と旅人の目をひく。最近、福州青年思想の勃興と共に、かなりこれらが經營上の惱みに逢着してゐるらしく眺められる。

閩江の上流には、茶道で有名な武夷の銘茶の産するところがある。天心岩奇種、その他の茶道の方に名の響いた岩茶が出る。土地の天目茶碗と共に茶の湯の禮法が、これらの地方に廣く研究されてゐるのは面白い。唐の陸羽の茶經以來、唐宋の高僧、騷客の士の垂涎措く能はざるものである。福建から安徽浙江にかけての茶の本場は、我が臺灣の島にも及んでゐるのであるが、兎も角福建の天地は支那四百餘州に冠たる茶所だけに、茶道の先覺者をもつて任ずる人が相當多く出てゐる。省外に出す茶は、上海邊りでもよく見るが、こは點心と共に大いに茶趣味專門家の心を刺戟するものが多い。點心の雲片糕は特に福州のそれをもつて上品となしてゐる。

福州の田舍では、海岸方面に三都澳の港や、興化の都城がある。奥地には延平の都城がある。中にも興化は、厦門街道の衝に當たり、商取引の盛んであるばかりでなく興化石の硯材が出るので夙に中央の文人界にもよく知られてゐる。又興化の南、泉州灣に臨んだところに泉州の港がある。こは古くは鯨城の名で知られ、三百年この方、臺灣島さして移住し來る者が多い。我が臺灣の言葉は泉州語をもつて普通語としてゐるといつてもよい位に、臺灣との文化的關係はかなり濃厚である。又血族關係も、その親兄弟にして臺灣と泉州の間に家族の別れて双方に住まつてゐるものもある。されば日本にとつては、この泉州の都城はかなり大切な關係をもつてゐる所である。

厦門及びその附近

厦門は人口は三十萬内外を有する一大水城であつて、二つの島から出來てゐる。その一つは風光明媚の小島、鼓浪嶼（コロンス）と呼び、このコロンスの名を聞いただけでもアモイを聯想させてゐる。これに各國の領事館が置かれ、租界の風光が亦目の醒める如き清趣に富んでゐる。林本源始め、臺灣籍民の富豪で、この島に住まひや別莊をもつてゐる者が少なくない。見方によつてはこはいはゞ臺灣の延長地帶とも考へられる所であつて、言葉も殆んど相似てゐるところである。そのやうなわけで、福州よりも日本人には親しみがある。

城内は大きい方の島にあつて、その海岸の通りには大厦高樓軒打並び、我が臺灣銀行、三井銀行、大阪商船などがあり、又中國銀行等の支那の大層高樓も少くない。目抜きの思明南路は、殊に商賣も活潑に、大變清らかな感じを見せてゐる。福建の都市としての福州と共に明かるい氣持を湛へてゐる點がその見所である。尚これには、近來出來た陸軍の飛行場であるとか日本の昔の和寇の蹟であるとか、又明末、鄭成功の遺蹟であるとか云ふ見るべきものが相當にある。八十年前にはこゝは阿片戰爭で、英軍に占領せられてゐた所であるだけに、外人との接觸も早くから開け、これがおのづから海外に親しみを持つに至つた遠因ともなつてゐる。

○

厦門から西の方には漳州の城がある。こは厦門の延長地帶で、夙に臺灣の島に渡り移住してゐる者が多く、從つて臺灣語の中には、泉州と同樣、漳州方言の極めて多いことがわかる。引くるめてこれが厦門語と呼ばれてゐるが、日本人からいへば、凡べて臺灣語と同一語であると云へるであらう。

一例を取つて見ると、厦門では「東京」のことを「タンキヤ」と呼び、「早く來れ」といふことを「急緊來（キンライ）」といへる如き、その好例である。臺灣厦門は共に全く同一である。又厦門の料理は圍菜の名でよく知られ、臺灣は元より遠く上海の方面にまでもその名が高い。小有天の四馬路で圍菜の名で鳴つてゐることは人の知るところである。圍菜にはツアオヒ（草魚）といつた生魚を刺身に、橘子の二杯酢をつけて戴く所など日本と同樣のところがあり、生まの刺身を喰べ、夏の料理としては殊に喜ばれてゐる。實際また口あたりがよろしい。これは福州料理の蚌（ボン）（蛤の形して更にそれよりも大なるもの）の汁物の料理と相並べて、福建料理には何れもなくてはならぬ懷かしいものである。その他、福建の茶は臺灣でも包種茶、烏龍茶などの、ある如く、厦門の銘茶は遠く海外歐米にも輸出せられその評判は高い。殊に又奥地龍巖はその茶の集散地としてあまねく知られてゐる所である。

福建省の概觀

福建省は廣東と共に、閩粵地方として中原から別扱ひにされ、地勢に於て、氣候風土に於て、交通の點に於て凡て別扱ひされるだけの資格がある。その交通の不便といふ點は元よりそれにちがひはないのであるが、言葉の關係が廈門と福州の違ひ以上に更に又廣東とも違ひ、浙江とも違ひ、又上海、南京とも大いに違つてゐる。古から南蠻缺舌と云つて賤しめられてゐる位であつて、どうも滑らかな潤ひのあるところがなくゴツゴツしてゐる。又語勢そのものも急迫してゐてゆつくりした所がない。そのためであるか、芝居の臺詞などは舊劇などになると、矢張り都人の歌ふ北京語で以て舞臺に美聲を發する方が、受けがよいといふやうな事もある。その福建語まる出しで以て、南京の中央政府に上り、演壇に立ち卓を敲いて見ても、一向に珍糞漢糞、人に解らないといふ滑稽談も色々ある。

福建省は全省として人口千三百萬を有してゐるが、支那本部の一省として中央との關係が割に淡く、宛ら獨立した姿を有してゐる。省民たちの氣骨は稜々としてよい所もある。それだけに又武人としてよいところがあり、武人を出す點は、此の省が全國第一である。しかしその反對に文化の點はわりに低い。

閩江の江邊には風俗上から云つて、いかゞはしいエロ的の覗き繪の興業などがあり、七八才の童女などに見せて笑はせてゐる場面などをよく見る。無邪氣といへば無邪氣であるのであるが、しかし如何にも、田舍らしい古の面目をそのまゝ示してゐる。

又奥地の片田舍に這入つて見ると、近來そのひまをねらつて共產黨の赤い手が延びて居り、江西省の方面と相應じて、かなり深く良民を迷はせてゐるなどもある。この點は隣省廣東の田舍も同樣であつて、ソビエツト・ロシヤのゲー・ペー・ウー(國家政治保安部)の魔の手が伸びてゐるものと見える。そこには極端な恐ろしい勢力を張りつゝある。

傳へ聞く所によれば、死をもつてこれが入黨をちかひ、肉身の親兄弟であらうとかまふ所なく、その秘密をゲー・ペー・ウーに密告し、いつ何時親兄弟が銃殺の悲運を見るかも解らんといふ所まで來てゐる。それがもし厞やであるならば、何れも否應なしに入黨をせよと赤化を餘儀よくせられる。黨員には月額四十元宛給與せらるゝことになつてゐるとか云ふ。つまり一種の秘密結社のやうなものであつて、官憲もこれには手のつけやうがなく、田舍の土豪も之には手を燒き、かなり惱まされてゐる樣子である。ゲー・ペー・ウーのモツトーに、友人三名よればその一人は必ずゲー・ペー・ウーの黨員であると云ふ。ボーイであれ、車夫であれ、店員であれ、一切その見たところの表面には解るやうにして

ゐないのであるから、油斷も隙もならないのである。そのため純朴な田舍の美風、家族組織、社會組織は根本的に破壊されつゝあるのである。誠に身震ひを催ほすほどにこはがられてゐる。

○

福建の天地は日清戰爭の條約の結果、日本との諒解なくして、之を他國へ割讓すべからざることに取りきめられてゐる。この福建省に對して、日本人は福建研究そのものに甚だ熱がない。臺灣總督府の當局では、時たま判任官の下つ端のものを出張させる位が勢一杯のやうである。これまで大官自ら親しくこの對岸の世相形勢を視察しに出かくるといふ計畫さへも立てたことがない。まださう云ふ事を聞いたこともない。

臺灣四百萬の本島人は、口に豪語し「我々四億萬の同胞は……」といふ言葉すらも發してゐる位になつてゐる。臺灣の眞の統治は、島内のみに限られた官僚式の行政で甘んずることなく、よろしく對岸各地の實際をも突きとめ、双方よく相俟つて、理解した頭で以て當たらないことには本當の植民政治はできない。臺灣そのものが蟬の抜け殻の如きものとなつてしまふであらう。況んや福建の文化は日本の五山文學、鎌倉文學、殊に佛學、茶道、言語、料理など諸方面にわたり、その文化的交涉はかなりひろく且つ深い。たしかに日本の南方文化の源は、福建に負ふ所が多い。又動植物の上からいつても、海流の關係で殊に日本と福建とは親戚關係があると云つてもよい位の所である。臺灣本島人自身にしても、假りに對岸に家を持つてゐたとしたならば、海賊の患はいふまでもなく、動亂、政變、共産黨などの水深火熱の災厄をどこまでも味はされることは、火を見るよりも明かである。秩序の整然たる、又生命財産の安全なる、又經濟的に日本内地入よりもより多く優遇せられてゐる臺灣の土地でよく庇護せられてゐるその有難味は忘れてはいけない。その點は返す〳〵も感謝すべきところであらう。これは臺灣に見る支那街や、海岸漁村などの實際に照らして見て一層その感を深くするものである。

廣東省

汕頭

廣東省はその東隅の一角に嶺南の要港がある。汕頭（スワトウ）と云ふ。この港は臺灣から又上海から、支那の寄港地として重要性を帶びてゐる。厦門へは百三十五哩、香港へは百七十六哩、我が臺灣、高尾の港から定期の航路が開かれてゐる。鐵路で以て奥地の潮州、並びに漳州と連絡が取られてゐる。その潮

州は昔韓退之の流されてゐた所として普く知られ、唐宋の文學では、中學生といへどもよくこれを知つてゐる。今も南支の金石文に趣味を持つ者は、白鸚鵡の賦としてその石刻を見ることが出來る。又その拓本を手にすることもむづかしくない。白鸚鵡の賦は或は後人の模刻ではないかなどといふのもあるが、汕頭の思ひ出にはよい記念物である。

汕頭には、上海から厦門、廣東へと定期航路を有する日清汽船の代理店もおかれ、その他、日本人の會社關係でこれに在留する人は少なくない。時折り排日の打撃でひどい痛手を受けること、他の地方以上のことがあり、官憲の力を以てしても如何ともなしがたいものがある。青年達の間で排日熱の高まる時など、その抗日會の活躍振りは上海に劣らぬ騒ぎを見ることがある。船の入港や、荷役の妨げをなすことは云ふまでもなく、時には、あること、ないこと新聞ポスターの類を利用して相手を窮地に陥し入れ、船業者を懲り〳〵せしむることが頻々である。それについての興味ある挿話も多々あるが、こゝには省いておく。

汕頭からする南洋方面への海外移民は相當に多く、毎航そのデツキ・パツシエンヂヤーとして送り出されてゐる。これが鄉里にあつてぶら〳〵してゐるよりも、馬來に爪哇に、その腕を伸ばし、出先きの天地をすべて我が舞臺として、此に飛躍するの手合が多い。この點は、福建省各地に、この廣東の一角、汕頭も同樣の譯である。汕頭はその土地は狹いが寧ろ出先きの南洋をもつて我が活舞臺とも心得へてゐる位である。

○

汕頭の附近では、廣東への道の約半ばの所に、三ヶ所有名な海賊の本場がある。曰く陸豐、曰く海豐、曰く汕尾これである。この三港は殆んど海賊村同樣の形をなし、沖合ひ遠く游弋に出かけ、專門的の大仕掛の襲撃をなすのを以て業となしてゐる。その犧牲となる船は大抵二三千噸級以下の荷物船である。その船の航行中を目當てとしてまんまとこれをせしめ、船の操縱を心得てゐる面々がそれぞれ取つて代はり、その或は船長となり、又舵取りになり、船もろ共に我が鳥影へと引つぱつて來る。

海賊村に官憲はゐても、これを如何ともすることが出來たい。殆んど手の下しやうもなく拱手傍觀の態度をとつてゐるに過ぎぬ。幾らその船を持つ船會社から官憲へ捻ぢ込んで見たところで、糠に釘である。

又本場の沿海漁村あたりの習慣では、平素村民が海賊の親分のところへきまつた稅を納めておく。それがつまりその村の行政治安、並に防備のことまで託したことになるのである。すると親方の方でも亦心を盡して、その勢力圈内のところはかなり努力をしてくれる。そのやうな工合で、今ではこの

あたりが、立派な小自治國の觀をなしてゐる。

若し下手に官邊の方から役人などのこゝへ赴任して來たものがあつても、人民から云ふと二重の稅がその爲めに絞りとられる譯になるので、全く意味をなさないとして排斥されてゐる。のみならず官憲の手など殆んど全く物の役にも立たないのである。とても叶ひこないのである。かやうな譯で、海賊村の本場では、如何なる官憲の力も、これには商が立たないことに相場がきめられてゐる。一種特別な廣東省内の秘港であつて、こは南支那海では評判の所であるとされてゐる。この地方の海の旅には、それ故なるべく大きな汽船によるが安全であるとされてゐる。誠に變れば變つたところもあるものである。次ぎは海路西へ、香港の方面へ向ふことにしよう。

香　港

香港（ホンコン）は、南支那に於ける隨一の國際大港であつて、その英國の領地たることはいふ迄もない。對岸の九龍（カオルン）と共に、香港は、支那政府の全く手の及ばない天地となつてゐる。

街の樣子は上海と同じやうに、大厦高樓が海岸通りを始め、各街衢に建ち並び、目拔きのところは晝尙街上がうす暗く見ゆるくらゐに、高く聳えてゐる。港としては深く且つ相當廣くもあるが、市街は何分にも狹く、山麓がすぐ後ろに迫つてゐるので路上の感じは上海邊りに比し、たしかに暗い。事實七階建八階建と云ふ高樓が櫛比してゐるので、光線の供給は全く惡く、行人が往來を步いてゐても、石造のビルディングで以て、頭上から壓とせれると云つたやうな重苦しさを感ずる。

日本の領事館を始め、郵船、商船、正金、三井、三菱など一流どころの銀行會社はいふ迄もなく、早くからこゝに夫々支店を出し、或は出張所代理店を設けてゐる。大連汽船も、近來こゝまで、上海への航路を伸ばさんとしてゐる。亞米利加、グラー・ラインに見るプレシデント型の大船や、又カナダ汽船のエンプレス型、日本郵船の淺間、秩父、龍田の一萬六千噸型、その他、シヤートル船の氷川、日枝等の大船も、凡て香港を起點に定期の航路を持ち、政府の補助のもとに、日本海運界の一大飛躍を試みてゐる。又照國、靖國を始め、H級の歐洲航路の各船も、必ずこれを寄港地として、南支の華客と荷物の吸收に努めてゐる。尙、日清汽船の香港航路は、これを寄港地として定期に三千噸級の船を配し、大阪商船も亦相當の大船をこれに廻はしてゐる。

香港は、南支の旅に省くことの出來ぬ要港の一つである。上海から八百五十三哩、シンガポールへ千四百四十哩、神戸へは千六百八哩、橫濱へ千九百五十四哩と云ふ所にある港である。

香港は、日本から云うて見ると、その上海に較べて距離の遠いのと、奥地を上海ほどに深く有して

ゐないのとで、日本人との親しみが上海のそれの如くうまく密接に行かない。

しかし欧洲航路の船では、香港を出づれば、最早や東洋の氣持から殆んど離れるわけである。又復航に香港に入港すれば、日本の表玄關にも着いたやうな感のして、山川風物が何處となく懐かしく、赤道直下のシンガポールなどよりか遙かに懐かしさがある。

香港は英領とはいへ、支那街の殷盛振りを見ることはいふ迄もなく、大部分この島は支那人によつて埋められてゐるとも云へる。廣東の富豪もその功成り、名遂げたものは支那官邊の手の及ばない香港總督の治下によつて餘生を送らんとしてゐる。蓋しその大抵のものは皆かう云つた考へを抱いてゐる。そのため山手の綠蔭に見ゆる巍々として聳ゆるものは、多く支那人の別莊である。そればかりでもない。西洋人のうちや日本人の銀行會社の社宅もあるが、その間に支那人の別莊があちこちに見える。又ハツピー・バレーの方面から街外れの邊りには、二流三流どころの支那人街が細長く續いてゐる。その中に路上支身の繪の美しい看板を揚げた店なんも見える。そつと覗き込んで見ると、この支身屋は日本人の店らしく見えた。

香港の目抜きには、上海のそれよりも、一層西洋臭い匂ひがしてゐるが、しかし急坂に據れる支那街には、古玩店、草花屋などのかたまつてある邊り、その風情は香港の別天地の觀をなしてゐるところである。又香港市中大厦高樓の屋上には、南唐酒家を始め、廣東人の茶館酒樓があちこちにある。屋上の醉月花亭には、支那式の額や聯があまた讀まれ、廣東の支那街の氣分をこゝにおもしろく漾はせてゐる。さゝやかな篇額の句であるが、面白いものには、

不醉無歸

といふのがあつたり、又對聯の中には、

開瓊延以坐華
結緩亭而梯月

などいふのがある。一寸面白く味はれる。又花亭の客房には、次ぎの如き支那各地方の古代名を示した札が部屋の番號の替りに掲げられてゐるなど凝つてゐて興が深い。例へばその樓上にある十七個の客房にはそれ〳〵一字名の札が掛かつてゐるのである。即ち、

粵（廣東）桂（廣西）滇（雲南）黔（貴州）湘（湖南）閩（福建）隴（甘肅）
皖（安徽）蘇（江蘇）燕（河北）魯（山東）蜀（四川）豫（河南）晉（山西）
鄂（湖北）秦（陝西）贛（江西）

先づかう云つた風のものである。

これらの詩文に懐かしい雅名を部屋の入口に掲げることは、上海の東亞旅舍の客室にも見られることだし、そこには、或は西湖又は廬山、或は揚州などゝいつた聯想のみやびやかな地名を用ひてゐるのである。こはひとり料理屋とか、宿屋とかばかりではない。今日でも火車の驛頭に持つて行つて、例へば、山東の青州あたりであつたか、「如矢如砥、至魯至齊」などゝある文字を見たことがある。これによつて見ても今尚古代の雅名が、その如何に客の目を喜ばせるかの一端が窺はれるのである。南唐酒家の粵房に這入つて見ると、その聯の句に曰く、

建偉業於港
寒些事乎廬

風人新社崇祀

とあるのを見る。これはその爲め書きに、南唐大酒家開幕誌喜とあるのであつて、流石は土地が香港だけに英語の單語を採つて、この聯句に應用してゐるところは妙である。普通の漢文では、その意味が何の事やら理解されないのである。といふのは、その寒些事乎廬とあるの第二行目はサクセスフルの音譯語を持つて來てゐるのである。開店の祝ひの言葉として將來の成功を祈つてゐるものである。更に又同酒家に在つて、エレベーターの前に立つて見ると、そこには又支那客の目を喜ばせる趣味津々たる文句が讀まれる。エレベーターの來る迄の時間を文學的趣味で消させる仕組になつてゐる。唯ぼかんとして立たせられてゐるよりもどの位味ひのあることか解らぬ。その聯句に曰く、

有レ機可レ乘九連易レ達
諸尊光顧無レ限歡迎

とあるのがこれである。これなど香港の如きハイカラな天地にも、尚この翰墨の雰圍氣が見出され、何んとなく文雅の士には懐かしみが多いのである。郵船會社の同地の買辨、謝家寶翁などは、今もつて年賀の名刺など、紅紙の大形に木版で以て自筆の書を墨黒々と手刷りをしてゐるなど、これ亦香港市中の翰墨を物語る一例として味はれる。市中の支那街に、謝翁は康熙乾隆時代の精巧な燒物玉器など、數多寶藏せる小博物館を持つてゐる。香港の旅には、誰れ人も拜見の價値があるものである。その他、支那街の古玩店には、象牙彫の裸體美人を示した藝術品で、その色も飴色をなせる品のよいものを見出す。長さは四五寸大であるが時には七寸くらゐのもある。これは何に用ひるものかと云ふと、多くは上流家庭の婦人乙女達が、醫者の往診を受くる時、醫者をして大事な肌には觸れさせず、その代りに彫刻美人の腹なり、胸なり、局部的に指して、この邊が痛いとか痒いとか云つて、醫者の考へを聞く爲めのものだと傳へられてゐる。誠に支那氣分たつぷりのものである。いつかも、新渡戸博士や

西洋人などがいたくこれに興味を感じ、香港の支那古玩店で以つて漁られたことがあつた。

象牙人形がその左手を高く揚げ、右手に紈扇を持ち、そしてその局部のあたりをおさへ、横に寝てゐる姿はとてもエロ的である。かうした意味深長なものは廣東市中から香港の市場へ流れ出でたものであらう。上海の支那街では見ることが少くて、却つて香港の古玩店で之を見る。かう云つたものやその他古式寒暑計など相當趣味のある材料が少くないのである。尚支那街には、四蛇膽酒などの長壽の目的に喜ばるゝ藥酒も色々と見るが、これ亦廣東の大藥房から出てゐる商品だと思はるゝ。

香港の見物は、島巡りと天涯のピーク登りをもつて最も快事となす。島の周圍には、氣持ちのよいドライヴ・ウエイがあつて、その裏山には貯水池をあちこちに有してゐる。沖の島々は柔らかい綠濃き輪廓を見せ旅客の目を慰めてゐる。路傍にはホテルの庭の眺めも涼しく、草花は唉き競ひ、徂徊する雅人游士を迎へてゐるあたり、これ亦支那趣味とは變りて清秀の氣に富み、思ひ出が深い。ピーク登りはケーブルカーによつて、何んら動搖を感ずることなく、千有餘尺の雲上に遊ぶことが出來る。盛夏尚肌寒き別天地で、脚下港内に碇泊する大小無數の船舶は、木の葉の浮べる如く小さく散點して眺められる。

急坂の途中、隨處の岩影、樹間に聳ゆる住宅の趣きは又、これ香港獨特の山境の味を偲ばせてゐる。殊に又、珍らしいのは香港の夜景である。もし海上から仰ぎ見る時の山手の眺めは、螢の群を暗夜に仰ぐが如く、點々として誠に美しく、この夏の夜の香港水郷は、恐らく東洋の天地中他では見られないものである。神戸の夜景も悪くはないが、まだまだ足元にも及ばないと云へる。

香港には又大學教授に珍らしい學者がゐる。英人でその名をホンソンビー・リチヤードと云ひ、好紳士である。先生自身は本尊美利茶道と漢字を用ひた名刺を人にくれてもゐる位、東洋の文化史には通曉してゐる篤學の士である。

平素は暇のある度毎に日本に來て、京都上加茂の清郷に假寓し、專ら世を避けて鎌倉時代から、平安朝奈良朝あたりへかけての文學歴史をひろく專攻し、日本の羽織袴に下駄蛇目傘といつた日本風俗にそつくり浸りすましてゐられる。自分は共に食事をしたこともあり、又冗談交りに四方山ばなしをしたことも一再ならずあるが、味噌汁、澤庵、刺身、割箸、なんでもござれで、純日本式でなくては氣に入らぬものらしい。勿論疊の上に起臥し、日本の蒲團を平素用ひてゐる。實に珍らしい趣味生活の方面を有し、自分の支那服生活とよく話があふので、人一倍なつかしく思はれるかたである。今では確かに香港名物の一つになつてゐる。

曾ては、香港總督の秘書を務めたこともあるが、現に香港大學の教授をつとめてゐらるゝ。先年高

松の宮殿下御渡英に際しては、船中のお話の相手をされて英國まで航海を共にされたこともあり、知る人はよく知つてゐるが、ともかくも日本びいきこの上もない評判の人である。船内でも、「ぞ、なん、こそ、けれ」の文法上の語學談とか、年中行事とか、京都寺めぐりとかになると、下手な日本人もはだしである。スター博士のお札の話どころのさわぎではないのである。

香港政廳の政治上の話では注目すべきものがある。と云ふのは先年のボイコツトにこり〳〵して、以來對支政策を一變してしまひ、凡て今や、支那及び支那人に對し、不思議に思はるゝくらゐ事勿れ主義をとり、何事にまれ、一切積極的に出でず、すべて受け身の態度をとつてゐる。日本の官民に向つても、常に若しやのことを引起されては一大事だとばかり、ひどく神經質になり、心配をしてゐる樣子が見えすく。

日本人としても、一時は、その勢力も日の出の勢を示してゐたのであつたけれ共、海運界の悲況と連年に亙る排日抗日その他で、どうも思はしく行かず、唯香港から歐洲線やボンベイ、カルカツタ、南洋線の大船で以て、シンガポール南洋行きの出稼人デツキパツシエンヂヤーを積み出す位が、變つた話の種となつてゐる程度のものである。今後の同港の經濟界の切抜け策の根本方針については、官民共に頭を惱ましてゐる樣子である。

市中で珍らしく旅客の目に觸れるものは、路傍を走る二階付きの電車である。あまたの支那客を滿載して、チリンチリンと走つてゐる眺めは香港風物の一話題となつてゐる。香港はその地理的の位置が、北回歸線の熱帶圈内に這入つてゐるので、山の草木も大分樣子が變り、殊に又草花の香氣の高いこと、色彩のはつきりしてゐること、その他赤道直下からの果物として、マンゴー、マンゴスティン（果實の女王）ドリヤン（大王）などの珍果が船便のある度に直接輸入せられる。こはアリメリカ線の大船が米國産のネーブルを持つて來るのと好一對の呼び物となつてゐる。香港の上陸は、旅客にとりて一段の懷かしみがあるのである。

日本人から見た香港は、形式上では、文明都市としての一景觀を有し、山鄉は清く、且つ潤色に富み、之をそつくり住宅區域の中に採り入れてゐる。それこそ新文明の文化生活がこゝで充分に味はれ、又培はれ、自動車路は山道の隨處々々に限なく通じ延びてゐて、申し分のない文明地域となつてゐる。それにも拘らず、香港在留の日本人は、とかく家庭的に惠まれなかつたり、やゝもすれば神經衰弱病、その他香ばしからぬ病にとりつかれ、異國情緒の嘆きに、明け暮れ惱まされてゐる者が少くない。數日の旅くらゐならばよいが、幾年と、永く此に在留して見ると、その單調の生活に困り果て、何んら心をやる方法がないと云つて、折角の住處をこぼし始める。船の者、陸の者、諸共に泣き事を並べる

こと、香港の如き所は少ない。

口に香港の發展を稱へてゐながら、内心、かの廣東人の南洋進展熱に燃えてゐるに較べて、雲泥の差のあるものがあり、日支兩國の双方の間だけを考へて見ても、感慨無量なるものがある。況んや英國政廳は既にへこたれ、英國は、陸戰隊の喇叭の音を耳にしても、何んとなく底力が失はれてゐるかの如き響を感ずる。却つて香港の市中ではお客分であるところの支那人の方が、どんなに底力もあり又亡命客としてのあたまもはたらき、又それらの人々たちの、策源地ともなつてゐると云ふわけである。大英國は唯徒らにわざ〳〵輪廓と形式を整へることに苦心してゐるのみであつて、その實質は支那人に疾くの昔に弄ばれ、骨められてゐるやうなものである。香港に旅をするものは、この間の消息を豫め胸に藏しておいて、更に遠大な志を養つて戴きたいものだと思ふのである。

廣東及びその附近

廣東（カントン）は、一に又た廣州とも呼ばれ、古は嶺南の地として長い間知られてゐた所である。宋代以來はアラビアの商船などが通商を求めに來てゐた關係のあるところから、支那の海岸地方は、どの沿海地方よりも、早くから海外に觸れ、又その知識を採り入れる機會を有してゐた。この點で廣東は、天つ晴れ全支那の文化的指導者の地位に立ち、又よく革命思想の策源地ともなり、その事をなすや必ずその人に先んずるだけの意氣を有してゐる。省内の人口九十五萬と算せられるが、南洋に行つてゐるものがこの以外にどんなにゐるか判らぬ。最近の廣東は、既に孫中山先生を出し、康有爲先生を出し、汪精衞大人を出してゐる。之によつて見ても、その一般がどんなにその全體の腦袋として先驅者を出してゐるかゞ判るのである。

廣東の位置は、申分がなく、中にも珠江（西江）の江口に跨つて居り、奥地との水運の便を得てゐることはいふ迄もない。鐵路は北の方粵漢鐵路の宜章驛が湖南境にあり、之が韶州を經由して、廣東に達してゐる。

市内水鄉廣く、濁流の上には、骨相たくましき蛋民と云ふがゐて、三十萬からゐる。そして船内生活を營んでゐる。これらのものは、陸上の市民とは全然別個の生活をなしてゐるのである。

本來廣東人を人種的に見て來ると、その血液の中には、本地（ボンヂ）と稱し元からの廣東兒と云ふものと、旅から來たところの客家（ハッカ）と云ふものとの、二種類に別けられてゐる。臺灣の島へも、大分以前からこれらの種族が移住して來てゐる。臺灣では、この客家のことを俗に客人（カーラン）と呼びなしてゐる。客家は一目すぐ見わけのつくやうに、眼鋭く、筋骨逞しく、そして義に勇み、獨立獨行の氣骨稜々たるところ

がある。始めての旅人といへども、之を本地の顔付きから鑑別することが出來る。

しかし廣東の婦人と云ふと、何れにしても纏足の陋習にしばらるゝことなく、元來生れたまゝの大きな足をしてゐるのである。廣東の本場に行つて見ると、これが當たり前であるのだが、之を上海や天津あたりで見ると、何だかにくらしいやうにも見える。

廣東の市中は、他省の狀況とは趣きを異にし、かなり朗らかな南國氣分を漲らせてゐる。路上をあるいてゐるうちにも、その軒並みに仰がるゝ建築の上にも、又市民の服裝の上にも、又食物の上にも、あらゆる點に開國氣分の漲つてゐるところが、ありありと見えてゐる。從つて市中水鄉の遊びにも、五彩美しき紫洞船の畫舫が、水上をあちこちにと音曲の響きも賑はしく漕ぎ違つてゐる、又毎年五月の催しには龍船と稱する競爭船が、珠江の水上にえらい人氣を集め、長崎の海上に見るペーロンの催し以上の盛況振りを物語つてゐる。廣東の別天地、沙面（シャメン）の水鄉は、外國租界の設けられた小島であるが、之には、列國の領事館を始め、銀行會社の堂々たる高屋ビルデイングが聳え並んでゐる。しかしそれよりも更に高く、榕樹の老枝、長梢の綠濃く茂つてゐる眺めは、たしかに、熱帶氣分を思はせてゐる。日本の正金、臺灣等の一流どころの銀行會社、日清汽船あたりの大會社の支店、出張所もこゝに設けられてゐる。

水を隔てゝ向ふに見える支那街は、沙基路といひ、一名六月廿三日路とも稱せられてゐる。これはたしか、千九百二十五年、支那側が英佛聯合軍にひどく襲撃せられた所であるので、その時の國恥を記念するためにつけた名前である。この流儀の命名法は支那の新しい自覺心に燃ゆる手合はよく試むる所である。城内に見るべきものは頗る多く、中山大學、懷聖寺、清眞寺、六榕寺、五仙觀など云ふを始めとし、市立博物館や、黄花崗上の七十二烈士の墓などが殊に有名のところである。この墓は、黄興一派の革命黨の志士の英靈を慰むるために設けられたもので、今は屈指の名所の一つとなり、これを訪ね弔ふ客が引き切りなしにある。その他粵秀山、白雲山、黄浦の軍官學校などもある。この學校は、蔣介石が校長をしてゐた所だけに評判も高く、汕頭、福建、江蘇、浙江、遠くは朝鮮あたりからもやつて來てこれに入學するものが多く、卒業して支那の陸軍士官となるのである。

廣東市中の空氣は、新進氣鋭の志士に充ち滿ちてゐるだけに、革命結社の風をなすところが多く、從つてどことなく、常に何事をか畫策せんと頭を機敏に働かせてゐる青年たちがどつさりゐる。そのため、遠く南洋の天地までをもが、廣東の延長地帶として事實上我が物顔に取入れられてゐるやうな結果をも見せてゐる。年々南洋の天地から飛脚で又爲替で以て送金せられる金は幾十萬弗なるかを知らないといふ盛況を示してゐる。實に盛大なる力を有してゐる者であると斷ぜられる。

廣東城内で、その特別に見るべきものと云ふは、名所舊蹟を除けば、どんなものがあるであらうか。廣東を代表するものとしてやゝエロ方面のものになるが、一と風變つた珍なる場面があるのである。蛇酒の工場と、その蛇の市のあること、これである。廣東の蛇は、全支那でも有名な呼びものであつて、これに蝟集する生まの蛇はたいしたものである。主としてこれは、田舎の梧州方面から多量多種に亘つて城内に搬入せられてゐる。黄色、黒、青、斑などのものを始め、又時には天龍と稱し、四肢を有してゐる古代の銅器模様などに出て來る龍の形そのまゝのものも集まつて來る。之が城内のマーケットにひさがれてゐる。笊に入れられ生き生きましい匂ひを發し、その割れた舌をペロペロ出して、優しい目付きで人間に視線を送つてゐるときの光景は一種悲壯なものである。

廣東蛇の用途は、何れも皆蛇料理の材料として使用せられ、又藥酒の材料として珍重せられてゐるものである。毎年十一月から二月下旬の頃にかけて、最も取引きが盛んのやうである。冬の廣東料理のうち、卓上で賞味せられるものは數々あるが、蛇料理の右に出るものはないのである。その色その味ひは、宛ら鷄肉のそれにも似てあつさりしてゐる。その邊からやゝもすれば、安い料理であると、かうしたまがひものの代品が出されることがある。蛇の肉が料理の宴席に珍重されると云ふのは、廣東の地でのみ見る事である。支那各地をあるいて見たが、他の地方では食卓に之を見ることはない。

又酒の方面でも、蛇の膽を用ひたものがあり、又蛇のからだ全體を溶ろかして、酒に雜ぜてゐるものもあるなど、色々の方法で出來た蛇酒がある。こは補身劑として又壯陽劑として、つまり勃起劑として珍重されてゐるのである。

城内を蛇酒行脚であちこちめぐり、その蛇酒工場に行つて見ると、そこには、土藏の中に設けられた廣い暗室がある。幾多の大甕が密閉されたまゝ並べられてゐる。試みにその年數の古きものを取つて、靜かにその蓋を取り窓の明りをさし入れ、甕を斜に内部をそつと窺つて見る。すると、曲りくねつた數多の大蛇が、柔かい肌を酒中にぼんやりとカーヴをなして現はれてゐる。かう云つた場面は一種のグロの極を物語つてゐるわけである。

年數のさほど立たないものは、まだ生き生きましい姿を見せてゐて、酒の色もまだ柔かみを加へてゐない。工場を受け持つ老翁が、その間の專門的の説明を詳細にやつてくれる。そして「試みに折角だから味つて見ませぬか」といつて試飲をすゝめるのである。「よろしい、やつて見ませう」と云ふと、客にその年數の立たない若い方の分から、段々と古いのに至るまでのものを一々汲み取つて八仙卓上に並べ、酒杯の説明に及ぶのである。

なるほど之を飲み別けて見ると、その年數を十分に經たものは、幾分の酢つぱみを加味するまでに

なり、舌觸りが柔かく且つどことなく香んばしいやうである。そしてその色は淡黄色で如何にも清らかである。城内ではこれを商品として賣り出し、その名は三蛇膽酒と稱へ、近來瓶詰めとなし、多量に支那各省へ向け盛んに送り出してゐるやうになつた。日本の支那料理店でも東京あたりではちよいちよい見る。こは主として老人たちの飲む酒、又病人が養生として嗜む酒であるとしてある。その實壯陽補身劑としての一方の目的に適ふものである。それから又體の冷え性の人であるとか、血の道の不順な婦人あたりには、殊に福音の靈酒として歡迎されてゐる樣子である。あまり詳しいことはこゝに云はぬこととする。たゞ強いのになると青年たちが內證で用ひるときは鼻血を出すことがあることを注意しておく。

なほ蛇酒工場には龜齡汁と稱し、時候の變り目などに飲む補身用の靈酒が造られてゐる。

三蛇膽酒は廣東市中でも河向ふの河南街、兩儀軒に出來るのが最も有名であるが、近來は城內各所にこれを醸すやうになつた。三蛇の他に尙一蛇を加へて四蛇膽酒と云ふものも造るに至つた。そしてその効能を盛にぬけ目なく宣傳してゐるものもある。普通、その蛇は黄色、青、黒の三種の膽がとられてゐるが、又それが最も効力の多いものだとされてゐる。紅燈街あたりにも、どうかするとこの方の酒が多く部屋に用意されてゐる。之を見て思はず吹き出させることもあるのである。尙近來これを旅行用に應用して携帶に便利なやう造り、柑橘の陳皮に又生姜にと雜ぜ固めたりした物などもある。至つて簡便な點心のやうな姿をしてゐるものである。しかしその價は効き目のあるせいか、かなりお安くないやうである。

廣東人が、その精力の絶倫にして、ひとり省內ばかりでなく、南洋赤道直下までをも我が天地となし、一大飛躍に見ごと成功してゐるのも、半面には、その體力を養ひ、元氣旺盛なる底力を養ふことに怠りない結果であることが解る。これはひとり蛇酒のみでなく、虎の骨から造られた有名な虎骨酒と云ふものだの、又これに木瓜を加料とした木瓜虎骨酒といふものだのがあり、或は又青蜥蜴を加料した蛤蚧酒（ハップカイチュ）といふがあり、夫々皆その方面の勃起劑的効能を大ならしむるものであつて、工場翁の談によるとかう云ふ面白いことがある。男子は雄の蜥蜴の尾の先きを用ひ、女子は雌の蜥蜴の尾でなくてはいけないといつてゐる。これは和漢三才圖繪の中にも見えてゐることで、房中の秘藥として明記せられてゐるものである。これによつて古來守宮の黒燒以上にきゝ目のあるものと見られてゐる。價もさして高價なものではない。

近來、日本からも、その方面にかなり蛇が輸出せられ、滋賀縣、琵琶湖の周りから取れるものが支那で迎へられ、上海住友銀行の手を經る蛇の價格の一年平均が、たしか八十萬弗乃至百萬弗からの額

に達してゐると云ふ一事を以つて見ても、いかに蛇の力の要求が熱烈であるかゞわかる。その他にどれ位澤山入れられてゐるか解らない。

又臺灣は臺北の田舍、舊四脚亭の邊り、鐵道沿線のところに養蛇場が設けられ、煉瓦造りの工場まで聳えてゐるのが見える。臺北の高山仰翁の如きは、蛇でつくつた「精素」の妙藥を監製し、その靈藥の製造と宣傳には、浮身をやつし老の將に至るを忘れてゐらるゝ位である。日本内地に見る富豪の樂隱居あたりはも、これが方面にきゝ目のあることを物語つてゐる者がある。

支那に於ても、日本に於ても、この蛇酒とか又その系統に屬する補身壯陽の妙藥が、如何に半面に隱れた活動力を與へてゐるか。あの嶺南にある廣東が次から、次へと、全支那を指導する人物を出してゐるのも、その裏面に人知れぬ仕掛けのあることに思ひをいたすとき、廣東の旅は、この蛇の視察研究一つだけでも、祖國のためになることであると思ふのである。

次には廣東市中に見る工藝品であるが、その中には、廣東磨きの紫檀製の八仙卓、十景椅子、茶几、寢臺などがあり、その他彫刻にも物珍らしいものが多い。別けても雲南の大理から出る大理石であるとか、又は白雲山から來た大理石であるとかを用ひた家具には、なかなか素晴らしいものがある。良家の家庭に、書齋又は應接間の壁を飾れる嶺椽の鏡石とか、又對聯その他食卓、椅子類の鏡石とかは、雲煙模糊の間に聳ゆる遠山の連峯を髣髴せしめてゐるものがある。その石理模樣の中には、造化の妙を極めたものを見る。これらは廣東の工藝品として上乘のものとして評判されてゐるものである。

尙流石に新らしき廣東の街衢にも、住宅の屋根には、昔しから鯊魚呑背といつて、鬼瓦式の綠の釉藥のかゝつたのを飾りつける。鯊鉾樣のもので、之を棟の左右兩端に揭げ、之を魔除けの神となすの奇風があるのである。こは日本の鬼瓦の起源をなしてゐるもので、支那で魚類中最も恐れられてゐる猛々しい魚をこゝに揭げ、惡魔除けのしるしとなしてゐる譯である。古から、鯊（シャチ）と云ふ魚には物凄い攻勢力があり、大鯨も之には三舍を避けるとまで云はれてゐる。日本の築城法で、天守閣の魔除けの飾りに之を用ひてゐるのと同じ心理作用にもとづけるものと思はれる。

その他、城内の民家を訪ねて見ると、綠の圓盤に持つて行つて、易の八卦に神像を描いたものがあつたり、或は紫微神像、關帝神像など云ふ所の迷信的崇拜の對象となれるものがあつたりする。これらは他地方のそれと何ら變る所はなく、何れも卑俗の間に行はれてゐるものである。

廣東市中に見る明るい氣持ちは、熱帶的の風土を周圍に持つてゐる爲めでもあると思はるゝが、更に建築樣式が南洋馬來に見る支那家屋と相似たるものの多いことや、その大厦高樓の窓の廂へ持つて

行つて白布の幌など長く突出し、日除けとなしてゐる所など、いかにも又明かるい氣分を唆つてゐる。しかし沙面あたりに見る路上樟樹の枝の垂れ下がりて、どうかすると、大蛇の枝に巢喰へるかと思はるゝ氣持ちさへして、眞夏に見る廣東の光景と云つたらまるで熱帶氣分そのまゝの雰圍氣の漂つてゐるのを見る。

荔枝灣の江邊には又綠蔭多く、而かもその綠樹と云ふが悉くこれ唐の楊貴妃を思ひ出させる荔枝の綠蔭であるのは面白い。枝と云ふ枝に鈴成りに成つてゐる荔枝の實は、その色もくれなゐに、江流の黃色と相映じ、廣東郊外の色彩美をなしてゐるくらゐである。

灣内江上を去來する大船小船の姿や、又その帆の揚げ方など、よく見てゐると、何れも皆廣東の風致を物語るもののみである。廣東の天地はかやうに見て來ると、全く南國氣分を味ふ旅としては、思ひ出の深いところである。

○

廣東市街は、地勢の上から見てどうかと云ふと、その廣東灣に致んでゐることはいふ迄もなく、そこに數多の三稜洲が並んで出來てゐると云つた風に一大水鄉をなしてゐる。その水鄉灣内には、有名な東江、西江（珠江）、北江の三江が、注ぎ這入つてゐる。そのうち東江の流域には、惠州の都城があり、羅浮山の道教の本山がある。古來嶺南に有名な幾多の仙人道士は、皆この山中に入つて練丹の術を攻究し、不老不死の術を研究し、それで以つて結局尸解昇天してゐる。北江には韶州の都城即ち一名曲江と云はるゝところがあり、これと平行して鐵路が走つてゐる。

西江には遠く源を雲南に發し、流域には幾多の都城をつくつてゐるが、省内では、人も知る肇慶（高要縣）の都城や三水、並びに佛山（フツサン）の都城を生み出してゐる。廣東三水間には、夙に廣三鐵道が通じ、肇慶村には斧柯川と云ふ山がある、有名な七星巖から硯材としての端石の採掘されてゐるのは、今更ら云ふまでもないことである。こは古の羚羊峽の硯坑と共に、端溪の本場として天下の翰墨界に鳴り渡れる處である。安徽の歙石と共に、相並んで文人墨客の垂涎措く能はざる所となつてゐる。

今やその硯石の細工は、廣東市中に於て巧みに仕上げが出來、廣東遊歷を試みた文人どもの土産物としてこは忘るべからざるものとなつてゐる。しかし古のものに較べて、今日採掘されてゐるものは良材に乏しく、水岩、青花紋の名品と云つた類の優物となると甚だ少いのである。

今日では、廣東の硯石街の評判はどちらかと云ふと、そのお株を翡翠の街の方に取られてしまつた。緬甸さかひから出てシンガポール經由で持ち込まれる翡翠の原石は、廣東で以つて西瓜を買ふやうな式に運ぶてんぷで買ひ求め、專門の工匠が之を打割り小片となし、之に精巧な細工を施すと云つ

た順序になる。高尚な裝飾用の目的で磨きをかけ、すつかり出來あがつた加工品としての出來映えはよい。北平城内に見る翡翠街と南北對立して稱せらるゝ位の所である。その點になると、端溪の硯石の方は、宋代以來の墮性で以てその名を維持してゐるといふに過ぎないのである。況んやこれからの時代はむしろ之を骨董として取扱ふ方になり、實用からは名品は敬遠せらるゝ運命ともなつてゐるのである。

廣東灣上、黄色を呈する海面を挾んで、東岸には、香港の對岸、九龍から來てゐる廣九鐵路（廣州九龍）が通つてゐて廣東の遊客に少なからぬ便利を與へてゐる。又灣の西邊、三稜州の水鄉には、孫中山先生を生んだ、中山縣の名所がある。遊客の人氣を集めてゐること非常である。その他、厓山には歴史的由緒の深い古蹟があり、又灣口には、葡萄牙國の租借地として知られた澳門（マカオ）の美しい街がある。

○

澳門（マカオ）は、水鄉の間に榮ゆる小都會であるが、賭博の本場としてこれが官營であるだけ、それだけその規模も大仕掛であり、又その勝負の活潑であることや、又その設備萬端の行屆いてゐることなどで名高くなり、香港滯在の客でこれに一遊を試みないものはないくらゐである。日本近世史の上にもマカオとの關係はかなり深く、近來黒板博士その他史家のこれを訪ねる者も少くない。

毎日廣東香港から賭博を本業としてゐる手合が、數知れぬ程澤山マカオ指して乘り込み、晝に、夜に、一大勝負を試みてゐる。しかしその客の椋鳥と見らるゝや、ひどい目に合ふのが普通である。また、よしんばうまく勝つたとしても、そつくりそこで一方の遊びの魔道へと導いて行く仕掛けになつてゐて、スツカラカンにこぎとられてしまふのである。若し萬一、それをもうまく切抜けて船を仕度し、ほく〳〵もので、夜の闇路を漕ぎ出でにげようとしてゐると、今度は夜暗に乘じて計畫的に襲撃をされる。そして結局無一物の元の默阿彌とされてしまふ。これなんかはまだしもよい方であつて、大抵のものは、きつと海に投ぜられ水葬に附せられ、彌陀佛にされるのが普通であると云はれてゐる。隨分變れば變つたところもあるのである。

○

廣東の沖合、雷州半島と海を隔てゝかなたに海南島と云へる別天地をなすところがある。日本の九州よりもやゝ大きい島で、瓊州をその都城としてゐる。こゝには、漢族の他に原始民族である黎種族といふのがゐて、風俗人情言語を本陸とは異にし、人類學上貴重な種族と見られてゐる。

日本の天草あたりから出稼ぎに行つてゐる勇壯活潑な娘子軍の片割れも、この島を我が天地とばか

り開拓し、天晴れ成功をして大和撫子の氣を吐いてゐるけなげな者もゐる。ミスターギヤツプ（スコツトランド人）の夫人となつてゐる某女士の如きは、その一人でエピソードも多いが、こゝには割愛しておくことゝする。

海南島にゐる青年たちは、多くは島内に留まらずして、或は廣東に、またシンガポールに、爪哇に、スマトラにと出稼ぎに出かける。多くは何れも外人の家庭に入り、皿洗ひ、雜用を專門とするボーイ生活をなしてゐる。南洋の天地に行つて、どこででもその支那ボーイをつかまへ「君は海南の出か」と聞いて見ると、大抵皆「然り」と答へる位に廣く行き渡つてゐるのである。

海南島の安南に面した方面の海上は、これを東京灣と呼び、支那の國土の海に面する方向のうちで之が最も西方に位する所となつてゐる。東京の海港、海防までは、日本の山下汽船が廣東からこれへ航路を開いてゐたことがある。又海防から鐵路によつて支那領の廣西龍州に、又北の方遠く雲南の省城にまでも達することが出來る。今日では雲南の旅は、四川から這入るよりも、この佛領印度支那、東京灣に上陸して、こゝから火車で這入るのを便利としてゐる。

本來東京、安南は、佛領印度支那として佛國の領地となり、南の方西貢、甘浦寨方面との航路も開け、日本と佛領印度支那との交通接觸は年一年と親密を加へて來た。殊に大阪商船は、この方面に大

船を振り當てゝゐる。南口交通文化に靈してゐる。安南は佛領であるけれ共、土民の文化は支那系統である。又安南人の語る言語はどうかと云ふと、福建廣東よりも、更に古代色を帶び、秦の始皇帝時代を髣髴せしめる支那二千年の昔の古音が今尙ほ行はれてゐる。今その一例を擧げて見る。

安南では支那音そのまゝの系統のものが多く、十の音シフ（Sip）は嶺南國粵にてはツアプ（Tsap）となつてゐるのであるが、これが安南に這入ると、タツプ（Tap）となり、四貢では、ターブ（Taap）となつてゐる如き、その好例である。

又文字の方も漢字系統の形で、日支人には讀めない奇字が用ひられてゐる。三を巴と書き、百を𠀧と書くなどその好例である。その文字の音はその構造の一要素として、特に之を示すしるしの巴なり、林なり、を取入れてゐることがわかるのである。

廣東省を大觀して

廣東省は支那本部中、人口の稠密な省であつて、これまで發表されたものによると三千五百萬圓と稱せられてゐる。その住民の中には、漢人の外になほ客家（客人）と云ふがあつたり、獞族と云ふがあつたり、又黎族と云ふものもある。このうち客家はもと東北、越の國の方から彷徨ひ來つたともい

ひ、又さうでなく山東方面から來た者だともいはれてゐる。どちが本當なのか史料を比べて見なくては確かなところは云はれない。又猺族と云ふは緬甸族の東漸した者だと云ふことに傳へられてゐる。黎族は海南島に古くからゐる原始民族であることは上述の通でりある。

從來述べ來つた各省各地に見る住民とは異なり、廣東省と云ふところは人種の色彩が、既にかくの如く複雜多樣である。又その種族の移動が激だしくて、東は我が臺灣あたりから、南の方は南洋馬來、爪哇、スマトラ、ラングウーンの天地へまでも段々と及んでゐる。從つてその活躍の舞臺面と云ふが頗る廣い。

一面には、廣東人と云ふと世界の人々の承知してゐる如く、勇壯活潑であり、てきぱきした所があり、婦人の如きもなか〳〵テキパキしてゐて、北方の蹇歩蹉々と纏足をしたよち〳〵姿などは好まない。田舍で農婦あたりを見ても、跣足のまゝで活潑に路面を歩いてゐる。どことなく日本人式のさはやかなところがある。男女共によく勞働に堪へ、からだ惜しみなどしない方である。

これが廣東の地で、他の省よりも圖抜けて自治の精神と進取的氣象を發達せしめた主な原因ともなつてゐる。昔から又早く海外思想に觸れる機會もあつた爲めに、海に、陸に、かなり慓悍な所をも現はしてゐる。眼光はどちらかと云ふと、鋭い方で、頭は鋭敏で、且つよくはたらく。どことなく氣質まで他省とはちがつてゐる。そのため長江方面の田舍へ行つて見ると、廣東を外國と見、廣東人を外國人扱ひしてゐる。やゝもすると日本人をつかまへて、先生は廣東人ではないのかと尋ねることもある。廣東も日本も同じやうに外國と見てゐるのである。それ位、廣東人と日本人は相貌に於ても、頭に於ても、よく似てゐるところがある。そのためであるか、廣東あたりの海賊振りは、昔日本の八幡船で來た和寇が、手本を示したのだなどと、ひどいことを云つてゐる者もある。

廣東名物の有名な海賊の雰圍氣は、如何に外人の經營する汽船、渡船にしたところで、油斷のならぬものとされてゐる。二三千噸の商船であつても、一二等客のゐる甲板には必ず印度人の巡査を武裝させて、見張りを怠りなくやらせてゐる。三等客の方は、實はすまぬ譯だが、之をすべて動物園の虎のやうに見て、檻の如き太い鐵棒で柵を結ひ、嚴重に一二等の方から區別してゐるのである。と云ふのは三等客の方にゐるものは、どうかするとその全部が海賊に居直り、いきなり無電を切り、船長を襲ひ、之を銃殺するなど、時折り一大騒ぎを船内に起すことがあるからである。金庫のあるところなど殊にあぶない。廣東風景の一つとして、かうした近海を航行する船の裝置には、この鐵柵をデッキに見るのは、物珍らしもあり、又物凄くも感ぜらるゝのである。

廣東省と云ふところは、今之を支那全局の上から見て來ると、先づ身體に全支を警ふることが出來

るとする。すると、廣東はさながら首にあたるところであり、腦神經を司つてゐる所であり、同時に又目でもあると云へる。長江一帶、中部支那の邊は丁度胴體であり、胸部である。又心臟であり、胃であり、又手でもあると云へるであらう。北支那は、寧ろこの頭と胴に引きづられて動くところの脚部か、腰の如きところであると云へる。されば、北方の人をつかまへて考へて見ると、廣東人のビン〳〵してゐるに較べて、どちらかと云ふと、鈍重な、おつとりした趣きがあるやうである。それ故に、北方の人はあまり理想だの、主義だの云ふことは云はぬが、之に反して廣東人は理想を述べたがる。孫中山先生の革命思想、三民五權主義などを見てもそれはよく見らるゝ。そして常に世の先覺者をもつて任ぜんとする理想に燃えてゐるところがある。孫中山先生が苦節三十年、先生が日本に亡命し、須臾に、横濱に、また歐米にと、その亡命遊歷の間に養ひ得たところの滅滿興漢の思想と革命思想の鼓吹とは遂にやつとのこと實現され、「革命の功尚未だ成らず、同志仍つて須らく努力すべし」との激勵の言葉は、今や四百餘州、何れの里にも村にも、掲げられてゐる文句となつた。論語や、孟子の經書は、一册家庭に見出すことが出來なくとも、この方の宣傳のポスターは、殆んどいかなる陋巷の壁にまでも見らるゝといふ結果をもたらせ來た。とかくするうち、南京政府を惱ましめ、これに取つて代る者と云ふと、いつも最近には廣東から出てゐる。廣東がいつもその策源地となつてゐる。

この一事をもつて見ても以て全班を推すことが出來るであらう。

廣東の大自然は、煙草に、蔗糖に、唐木、香木、石材、麻にといつた風に、その物資に富めることはいふ迄もない、ところが實際上の仕事は、寧ろこの本省の中よりか、遠く南洋の天地を活躍舞臺となし、又經濟の基礎を南洋に、馬來において、そして民族自決の運動に、いつも根強い民族的の材料を提供してゐるのである。

革命の運動費、排日、排英の軍資金、國民指導の資本、一つとして皆南洋の天地から出てゐないものはないと云つてもよろしい位である。外交舞臺に活躍せる顧維鈞大人の如きも、その南洋の華僑に、その血緣を有してゐることが、如何ばかりその仕事上の底力をなしてゐることかわからない。されば若し廣東の族で、支那のために、又日本のために、遠大の計畫を思ひ立つ者があるとすれば、更に遠く南津の華僑までをも視察し、これと堅き握手をする所迄も進まなければ、根のしつかりしたねばり強い意義ある事業は出來得ないのである。これは廣東や、香港を見たゞけの印象では解らないところがある故、更に何んとしても、馬來、爪哇などの方面の千萬長者、一億萬長者の風懷がどんな風に現はれてゐるかの點にも、親しく接して見ると云ふと、そこで理屈なしに肯かれるのである。

南方人の活躍

最後に支那南方人殊に廣東省民あたりの心境について、之を率直にぶち割つて考へて見ると、そこには、眼中廣東なく、中原なく、又南洋もないやうである。と云ふのは廣東だから自國の領域である、南洋だから外國であるなど云ふむつかしい窮屈なことは少しも考へてゐない。亞細亞の東南部、赤道直下の南洋一帶の地面は、悉く皆是れ我が活動の舞臺である。自分たちが勝手に延びて行つて差支のない所であると見做してゐる。そこに統治者がゐて、それが外人であらうと、何人であらうと、そのやうな事は始めから少しも問題にしてゐない。

廣東の地は、海岸に海賊、奥地に土匪の患ひが絶えない。自國内で住むにしたところで何處に心配がない處があるか。よしんば北方他省に出て、居を構へて見た所で、苛斂誅求やら匪賊の害は頻々であるから、たいした事はないのだと見てゐる。廣東市中か、さもなくば「行け！南洋の天地へ！」である。これを標語に、自由の天地を南へ〳〵と求めてゐるとも見える。

福建省民も亦、「行け！南洋の天地！」、と叫び、今や南洋、馬來、シヤム、ビルマ一帶の南國の天地は、殆んど、廣東、福建の出稼ぎで以つてすつくり牛耳られ、その數は幾くなかれ、五百萬を突破してゐる盛況振りである。所によつては福建人のかたまつてゐる所もあり、又廣東人の根據を据えてゐる所もあり、或は兩者の相雜つてゐる所もある。色々であるが、しかしどちらかと云ふと廣東人の方が多くの場合に遙かに優勢を示してゐる。

支那本土にあつては、軍閥の高壓的要求とか、或は名は軍閥でなくても、事實兵を養はんがための追徴金の要求とかゞ絶えない。これが泥棒よりも何よりも却つて住みにくゝさせるのである。

日本では、三井、岩崎、住友、安田の大富豪があり、十幾億と云ふ産を擁し、それ〴〵一大財閥を築きあげてゐるが、若し、しかしこれが支那であれば、或る方面から、その相續稅の幾百千倍と云ふものをしぼられ、又舐められ、或は强迫されもするのである。それ故に支那に於ける一流資産家と云ふは、實業方面からは絶對に出でない。いくら溜めても〳〵、さらはれる一方であつて、太つて行く暇がないのである。

支那の内地は又特別のところであつて、支那在來の社會組織が、決して幾億萬元といふ如き巨大な土豪なんかは存在せしめないやうな狀態にもなつてゐる。と云ふのは今假りに一億萬元の巨財を擁する名家があつたとするも、それに五人の男子があれば、その家の資産は、卽ちそれ〴〵に五等分して相續せらるゝ習慣になつてゐる。その爲め急轉直下、各二千萬元づつの株に落ちる。だんだん遞下す

るわけで、子々孫々代を重ぬるに従ひ、等分又等分で以つて、五代十代と續いて行く間には、そのまゝ守つてゐたとしても、普通並みに成り下つて行く仕掛けになつてゐる。

これは社會の組織、家督相續の習慣が最も要領よく古くから守られてゐるによる爲めである。これは新しく改めようとしてはゐるが、どうしても容易に改めることが出來ないのである。そして一族のものは成るべく住むに一廓をなしてかたまり、大門、重門のうちに、高壁を繞らし宮室深く生活をなしてゐる。土豪生活の外觀は堂々としてはゐるが、しかし宛かも樹幹から枝に、そして小枝に細くなつて行くと同じやうに、財産の方もまた細かく分散主義がとられてゐるのである。

支那の內地に於ける生活は支那獨特のものであるから、支那の土地相續の方はどちらにしてもよいとして、その資産を狙はれてゐるからたまらぬ。一生浮ばれる時がない。唯浮び得るものと云へは、先づ政治家と軍人のみであらう。自分でその軍人となり、或は政客となり得るものならば兎も角も、さなくば標語の示す通り、別に天地を南國に求めて、自分で自由に伸びるの外ないのである。南洋は地圖の上でこそ色が違ひ、和蘭政府、或は英吉利政府、その他馬來聯邦、又シヤムといつた風に、上に立つ政權は色々であるが、しかしそこにはちやんとした庇護があり、それにより自ら自分の腕を信賴して、努力の全部を我がものとして納めようとする方針を取る。尤も至極の譯である。南洋には、匪賊は居らず、苛斂誅求はなく、そして秩序は整然として生命財産の心配など少しもない。貨幣に相場の番狂はせなんかもない。どこまでも確實性のある經濟的基礎が求められるのである。

廣東人の頭には、前にも云ふ通り、かういつた安寧秩序のある新天地を、別段外國と思つてもゐない。伸びられるだけ伸びて行き、努力されるだけ努力を積んで、そして天然の恩惠をば更に助長するに在るのである。そして官憲としては南洋到る處、その經濟發展の實現に努める各個人を庇護し、これを助けてゐる。それが爲めに、或は法律を設け、或は交通をよくし、又銀行を開き、衛生狀態を改善してくれてゐる。何れも自ら求めなくても、當然官邊の方で自分らのために心配をしてくれてゐる。又實際がさうなのでもあるから、支那の人たちは何處迄も自己本位に都合のよいやうに考へてゐる。又それで少しも差支はないのである。

南洋各地に見る官憲と云ふと、先づ海峽植民地とか、和蘭政廳とか、又馬來聯邦とかであるが、その何れにしても、その財政經濟の基礎は、一に支那の出稼人の力によつて得てゐるわけである。相互關係で以つて、それによつて、凡ての施設に心配をしてくれてゐることは、當たり前のことである。これは爭へない事實として認められてゐる。よしんばその形に現はれた上では何んであらうと、その開發とその經濟金融との兩舞臺で、どこまでも移住の本體となつてゐるのは、廣東人と福建人であつ

て、その兩者の努力の賜物によつて南洋の經濟産業が開發されつゝあるのである。

それ故南洋の天地から、この廣東人と福建人の努力を除いて考へるとすれば、後は殆んど零に等しいものとなると云つてよろしい。その自ら傲語して、我が天地は南洋であると嘯いてゐるのも、尤もな譯である。又白人自身にしたところで今は、その金融の財源をすべて支那人から得、事業も營み、生活もしてゐる。それによつて色々手ひろい活動も出來てゐるのである。

和蘭政廳の如きは、ジヤヴア、スマトラ邊りの南洋の植民地から得た稅金と、官業から生み出した上り高とから、その經費を差引き、後はそつくり本國に仕送りして、自國の經綸のからくりに振り向けてゐるとの事である。謂はゞ南洋の支那人が、和蘭本國を食はせてやつてゐるやうなものであると云つても一言ないのである。

かくの如き徹底した經濟進展をなし遂げてゐるこの五百萬の支那人をば普通華僑と呼び、又一に之を僑民ともいつてゐる。時折り日商、英商、美商(亞米利加人)、荷商(和蘭人)などといふ語も見えてゐるが、その絶大な構へを有し、大層高樓をひかへて、王城の如き生活振りを見せつけてゐるのは、何れも皆是れ華僑なのである。幾らその政廳から高い稅が課せられたといつても、その額は知れたものである。支那本國に於て、軍閥政客からしぼられるときのことを考へて來ると、如何なることでも出來る。

支那中央政府を顚覆させたり、又これを乘り取つたりする位の運動費は、小使錢の一部でも出來ると見てゐる。廣東人は、上にもいふ如く、全支を人體と見ると、その腦髓に當たる所である。よく思想の先驅をなすところでもあるが、その頭腦にして、この金穴を有してゐるわけである。全く鬼に金棒のたとへに洩れない。廣東政府が、常によく政治的に成功の當てがはづれず、着々見事な結果を見せてゐるのは、かうした赤道方面からの後援のあることが、大原因となつてゐるのである。

日本の人々は、やゝもすれば、かうした南洋の華僑までをも敵に廻し、日貨排斥の深刻味を嘗め、その間に英、米、獨、佛に乘ぜられるへまをやつてゐる。一度とられた分野は、容易のことで取返しつかないと云ふ悲劇を體驗しつゝあるのである。

南洋は、元より地理的には支那の國土ではないが、支那の本土以上に支那華僑の大手を振つて活動してゐるひとり舞臺である。見方によつては、一大租借地でもあり、或は一大租界の如きものであると云へる。名稱なんかはどうだつてよろしい。がその名よりも實をとつて、廣東、福建人が自分たちの思ふやうに働くことの出來る世界無二の樂土と化してゐるのである。これは新聞宣傳の上でのみ聞かされてゐる北の方滿洲國の所謂樂土なるものと相對比してよろしいものであらうかどうか。南北二

所ケに安全地帶なるものが出來た譯である。しかし滿洲の樂土を本當の南洋の華僑がよい氣持ちになつてゐる程度のものとなすには、よほど日本人の頭、素質から改善してかゝらねばなるまいと思ふ。

思ふに、南洋の植民は、之を古に遡つて見ると、既に千年の昔、宋の時代から始まり、アラビヤ人の廣東に通商を求めに來た頃から、そろ〳〵その樣子が知られかゝつてゐた。そしてその如何に有望であるかは、實際に移民を實行するに至つてから益々明らかとなつた。爾來赤道直下方面は、續々之に向かふものが殖え、行つて見ると、その國境を越えた天地に自國以上の樂土のあることがわかり、これに一家をあげて移り行く者が年一年と多く續出する。かうしてその華僑の盛況を見るに至つたが、その間何等、政府の移民奬勵とか、學者、新聞記者の强調とか云ふ如き他力の勸めによつて出掛くるのではなく、全く獨立自給で以て得た天地なのである。

南洋華僑の本を洗つて見ると、世人も知る如く、殆んど着のみ着のまゝ、風呂敷包み一つ持つた乞食に近い姿で出かけた出稼ぎである。それで以つてそのスタートを切る。所謂デツキパツセンヂヤーとして出かけたものである。多い時分は船の甲板に滿員以上、一噸幾人といふ荷物扱ひで以て運ばれて行く。雫雨俄かに至れば濡れやうと、どうならうと不平一つ云へない。又よし濡れた所で熱病になるやうな貧弱な體格の持主でもない。

連中はたゞ船上で飲料水を船から給與して貰ふだけであつて、仲間の間に野菜肉類を仕入れ持込んで來てゐる飯屋がゐる。それが世話をして極めて安價に三度三度喰べさせてゐる。自炊制度で渡航をしてゐる。一等室の船客などは、高いデツキの上から、シガーをくゆらせつゝ、ルンペン生活の華僑を馬鹿にして見てゐる。ところがいづくんぞ知らん。今日南洋で白人共がその前に立ち、腰をさげ、資金を融通して貰つてゐる金穴と云ふ金穴は、これらデツキ連中から仕上げた成功者以外の者ではない。そのスタートを切る時、幾らルンペン姿でもあつても、三十年五十年の後には、天晴れ百萬長者となり千萬長萬となる。中には建源翁の如き、シンガポールに於て、幾億萬の富を一人で有してゐるといふ馬來切つてのえら物もゐるのである。この頃この財神翁の他界したことは白人間にもひどく惜しまれてゐる。

華僑の商賣はどんな方面かと云ふと、先づゴム山に砂糖、珈琲に煙草、錫などであるが、何れも農工商を兼ねた大事業である。その偉大なるものに至つては、到底、日本内地で見出すことの出來ない頭腦を持つてゐる。これはその巨萬の富を有してゐるが故にこゝに之をえら物といふのではない。その精神に大いに採つて以つて手本となすべきものがあるによるのである。

先年自分の訪ねた彼南（ペナン）のスンゲイバカプ（水鳥の村といふ意）の華僑、紀德成翁の心事を今こゝに

その一例として述べ、その如何に日本の幾億萬長者と心掛の根柢の異なつてゐるかを指摘して見たいと考へる。

翁は驚くべき大規模のゴム山を經營してゐた。外に尚各般の大きい事業を持つてゐた。その半島切つての富豪家であることはいふ迄もない。自分を山に案内すると云つて、自ら運轉手をつとめ、ハンドルに手をかけながら共に山中を乘り廻はしたのであつた。ドライヴを了へて歸宅し、禮堂に於ける茶菓の小會に出た。席上翁は自分に五人の令息のあることを物語つてゐたのであつた。がしかし四人しか席に見えてゐない。一人缺げてゐた。その四人は何れも英語を巧みにし、教養も相當出來てゐたやうに見受けた。そこで自分はうつかり翁に向つて云つた。

「長男の方はオックスフォードかケンブリッジにでも御留學なのですか？」

自分は何心なくいつたのである。すると翁はいくらか變な顔付きをして、次ぎのやうに答へた。

「私の子供は凡て私が教育をしなければならない。仕事の上に必要な應用化學だの、經濟學だのいふものは、勿論專門家を要しもするが、しかしその方面は、サラリーさへ澤山拂へば、英米からでも、日本からでも、幾らでも來てくれる。しかし、この半島にまたがる幾多の私の大事業をやつて行く上の大黒柱ともなるべきものは、外國仕込のハイカラさんでは物の役に立ちませぬ。私には私の見る所があつて、自分の思ふ通り、人間の肚をつくるのです。腹の出來たものでなくては人事と仕事のゆとりが出ませぬ。これが南洋で仕事する上に何よりの基礎となるべきものであると考へてゐます。英國留學などは、思ひもよらぬことであります。」

かやうな意味のことを、唇邊にしまりのある恰好で力強く答へてくれた。その人間味ゆたかな簡單な返事、意味深長な言葉は、日本の南洋活躍者の採つて以て手本とすべき言であり、又日本の財閥主人公のむやみに外國留學かぶれをしてゐる者どもにとつて、少々皮肉ではあるが、しかし頂門の一針としてよくよく味ふべきことだと思はれた。千有餘年の間、南洋の天地を我が樂土として樂しみ來たり、平和なる生活舞臺と化してゐる事實を、こゝに靜かに認めなければならぬ。がしかし、日本人の支那旅行者は、この馬來翁の一挿話によつて、新滿洲國、否滿蒙の天地にいかなる決心の色を見せ得るか。果たして日本人の活躍の天地として、又樂土として、眞にこれに肝玉を打ち込み、デツキ・パツセンヂヤーとまでは行かなくとも、出來るだけ安い生活費で、百年たつた後、これをせめて物にし得ること、この華僑が南洋の天地に於ける程度にまで成功させ得るの自信ありや否や、財閥の諸君はもとより、若かきルンペン、ハイカラな當世紳士諸君も、大いにこゝに考へを及ぼさなくてはならないことではないだらうか。

廣西省

廣西は廣東の背景をなす極南の一省であることは云ふまでもない。省城の南寧を始め、梧州、桂林、柳州、龍州、百色などと相當都城に富んだところである。この地方は古から蒼梧の名によつて歴史の第一頁を飾り、舜帝が嶺南に巡狩して、蒼梧の野に果てられた傳説は餘りにも有名である。その蒼梧と云ふが、今の梧州に當たると傳へられてゐるが、それを否定するものはゐない。今尚このあたり毎年大洪水の氾濫があるのでよく知られてゐる。省内の人口は、最近千五十萬と算せられ、西南僻陬の省としては今日相當重きをなしてゐる所である。例の廣東に出す蛇の産地として、又山水の美に富む水郷の優都として、殊に藝術家連中の來游を待つてゐるの觀がある。

桂林は、省の古名を代表してゐる所であるだけ、その名もよく天下に響いてゐる。單に桂といへる一字で以つて、ちやんとこの省の感じが出されてゐる位である。

又柳州は、古來壽材を出す地として名が通つてゐる。天下の富豪ども、死は柳州に在りと云ひ傳へられてゐる位、棺桶のよいのがこゝで出來る。又その梓材のよいのを産する所である。支那の俗語に「生は蘇州に在り、食は廣州に在り、着は杭州に在り、死は柳州に在り」といはれてゐる。がこの一事によつて見ても、十分了解することが出來るのである。これは支那古來の習慣で棺桶に數百千金を投ずることを惜しまない事實のあるのと比べ興味のあることである。又廣西の墳墓の形式にはかなり豪華なものがある。山水明媚の地には、天下にあまり見ない墓陵の優秀なのがある。景勝の地點を占めて、その構造も實に堂々としたものである。廣東地方のそれと共に、墓陵建築に於ては廣西の地は最も藝術的な美觀を有してゐる。柳州地方には又殊にその秀逸なのが多い。

省内の西北部諸地方には、苗族の異種族がゐて、主として山野に散點してゐる。又西南山手の地方には、白夷族が蟠居してゐたり、その他、山猺、或は平猺などいへる異種族も見あたる。かやうな風でこの省は人種的に、かなり複雜な種族相を見せてゐるところである。深山の材木は、一部北のかた湖水によつて、湖南、洞庭湖に筏を組んで運び出されてゐる。しかしその大部分は、珠江によつて、東のかた廣東に流し出されてゐる。南部の文化は、鐵路の關係で、南の方東京（トンキン）の河内（ハノイ）から海防（ハイフォン）、その他の地方へと抑寄せて行つてゐる。近來、省内の有爲の青年で廣東に學ぶ者や、又遥く日本、歐米あたりに遊學に出かくる者も少くないが、大體は、廣東の留學熱に引きづられてゐる形のやうに見える。

貴州省

貴州は雲嶽、溪谷に富む西南秘境の一省であつて、その地理的關係の爲め、わりに文化の時流からは取り殘こされ、全然他省と緣のない生活を營んでゐる住民が多い。他省との交通は、東のかた湖南方面との交通運輸を主としてゐるが、他の三方は山深く鎖ぢこめて、烏江（涪陵江）綦江などの水運の便によつて、四川、長江に出る山道を有し、南は、黔江（珠江の上流）の水路によつて廣西方面との交通路を開いてゐる。しかし省内の住民は千二百萬と云はれてゐるが、そのうち漢人は少なく、四分の三は、古から苗族とか其の他の種族がはびこつてゐる。書經のうちにも三苗のゐたことが見えてゐるから、その由緒は極めて古いらしい。恐らく三千年の歴史を有する三苗の據つてゐたところも、これらの地方を指してゐたものであるかと想像される。今も尙その苗の中には白苗とか青苗とか黑苗とかの別があつて、漢人とは又全然違つた單綴語（モノシラブ）を語り、又漢人に理解の出來ない獨特の言辭を發達させ、苗族本來の樂器を奏でゝ、やさしい藝術生活に月を吟じたりなどしてゐる。苗族の音曲趣味に富める話は學者の間でも有名な話で、挿話も色々あるが省いておく。

土民は農業、伐木、牧畜、並びに筏流しなどを正業となし、罌粟の栽培は殊に盛んである。野に、山に、殆んど見渡すばかりの罌粟畑ばかりで埋められてゐると云つてよろしい。

貴陽の省城は、殆んど人に知られてゐない山境の美都で、人口は約二十萬。阿片の賣買のために生活の出來てゐる者が多く、到る處に、煙又は煙房と云ふ文字を現はした行燈を揭げて、阿片窟に出入する雅客をひきつけてゐる。王陽明を祀る扶風寺であるとか、その他孔子廟とか云ふ多少の見るべきものもないではないが、もと〳〵山中に取り殘された秘境のことゝて、文化はとても低い。

貴州の住民は食事が大抵、每日二食なるを例となし、他省の住民とは、生活振りを違へてゐる點が多い。殊に貴州の名物として誰れも知つてゐるのは土匪である。その土匪は多い。良民百姓たちの旅人姿を見れば、いきなり一と稼ぎをしようと心を變へる。

まさかいつも年がら年中さうと云ふわけでもないが、ともかくも、この地の旅はかなり困難視されてゐる。日本人の人質が、銅仁の山里で、頭目の手から引き渡され、山中藥の中に寢かされたり、虎の肉を與へられたりなどしてゐた挿話など物語つて見ると、その實況をしたしく知ることが出來る。しかしいくら匪賊にしたつて、相當人情もあり、話はわかりもする。掠奪の一部を本人に割戻しする時もあるし、又これこれの所まで出て行く旅費の足しをもらひたいなど持ち出せばくれる。さう云つた話のかみ分けは出來る。又心持はよく見える。

貴州の土匪は山紫水明の岐中に山寨を構へてゐる。頭目が率いてゐる部下の面々を見ると、各自それぞれ、底のない長い袋を持ち、之を左右の兩肩からたすき十字に帶びてゐる。部下の一隊は頭目に引率され、頭目の目差す部落を襲撃するのである。勿論豫めよくその金品、鶏の數、水牛の數、穀類の分量など偵察し置き、その襲撃を行はんとする前に、先づもつて穩かに、その方は貢を出すや否や、の談判ををさせて見る。話に應ずればよい應じなかつたとなれば、これを襲ふて、根こそぎに失敬する。銘々の袋は細長く出來たものであるが、一袋に一二升宛は這入るので、多勢出かけて行くと、かなり分量がとれるわけになる。部下のものどもは、これを奪つたものだからとて、むやみの使ひ方はしない。大事に少量づつ使つてゐて稀飯（お粥）に焚いてすゝつてゐると云つた風である。その邊には又原始的な可愛いいところもあるのである。

都會としては省城貴陽の外に、尙鎭遠、畢節、思南、桐梓など云ふ、特殊日本人の間にいくらか知られた所がある。貴州の物資としては、阿片の外に、茶、煙草、小麥、そのほか、水銀、銀など貴重な鑛物も出てゐる。

この省は、日本人と殆んど交渉のないために、今日のところ領事館も亦その分館も設置されてゐないで、今は四川重慶の管內に屬することゝなつてゐる。

雲南省

雲南は、罌粟の國といはれる位のところで、全省は阿片の製造をもつて生命となし、表面は禁じて居りながら、官邊方面でも、これを大目に見てゐる。又これが地方財源の主なものともなつてゐる。この省は位置が、緬甸、暹羅、及び佛領印度の老撾の各國に接し、全く熱帶國の觀をなし、支那にして支那らしくないところであり、支那四百餘州で春夏秋冬花を見ない季節のない所はこゝだけであると云はれてゐる。そして人口は一千萬と云はれてゐる。

省內は、高山の臺地で、地勢は北に高く、南に低く、北のかた四川、西藏の方面に見る交通よりも、南、熱帶三國との交通の方が頻繁のやうである。殊に省城雲南（昆明）の都は、鐵路によつて、南のかた東京灣に出でられるし、その外暹羅、メイコン河の上流にある水路がかなり豐かに開けてゐる。されば支那自體の他省との交涉よりかも、南國諸地方との經濟關係の方が密接であると云つた變な現象を見せてゐる。日本には雲南に據つてゐた督軍唐繼堯の名によつて、又その舍弟唐繼愚の名によつてかなり親しみを感じてゐるものもあるが、今日在留する日本人は誠に少い。しかし貴州のやうに絶無と云ふわけではない。

省内は、山地の罌粟畑、放牧など盛んな様子を見るのであるが、農産物としては米、茶などを見るくらゐで、他に餘り多くの農作物は見ない。これは耕作地の多く得られない爲めである。到るところ山又山の大自然の地であつて、大理石、岩鹽、鐵、錫などの鑛物の方が豐かなところである。しかし唯それが地下に豐かに資藏されてゐるといふだけであつて、未だ殆んど採掘の機運には向つてゐない。

都會としては南に、蒙自、北に大理など、幾分地理學者間に知られてゐる所もあるが、矢張り何んといつても雲南省城である。その滇池に臨んだ壯觀は他に求めらるゝものがない。

省内の住民はかなり多種に亘り、漢、滿蒙、西藏、回紇（ウイグル）、及び玀玀（ロロ）（或は猓猓）の六族を兼有し、支那第一の人種的に込み入つた狀態を示してゐる省である。そのほか尙、山間僻地には、白夷族と云ふがゐたり、又苗族もあちこちに散點してゐる。一見人種の展覽會の常設せられた天然會場の如き觀を呈してゐる。

雲南の天地は、前記貴州と共に中央政府とは、殆んど交渉が薄く、露骨に云ふと、半獨立といはんか、或は又半ば化外の天地と云はんが如き觀のあるところである。巴蜀の別天地といひ、黔滇（貴州、雲南）の秘境といひ、共に事實上は、南京の中央政府からは、雲煙萬里の地である。唯霞を隔てゝ天の一方を望むが如く、その自國の領土であり乍ら、一向にどうもならない。また雲南の方だつて、中央政府など眼中に置いてもゐず、辭令の紙などはるばる送つて來たとしても、こは唯形式の上、受取つて置くだけのことであつて、有難くもどうもない。尤も腹も立たないといつた譯で全然氣持ちの上では無關係で、翰墨生活に悠々我が人生觀を立てゝゐると云つた形である。しかし近來雲南の都から、又田舍の方から、日本の文理科大學や帝大、士官學校など目指して二ケ月に近い日子を費し、遙々笈を負ふて來遊する有爲の青年もある。こは特にこゝに見遁がしてはならぬ近代的の世相零圍氣を物語るものである。

○

本書の讀者は、そのよい加減な地理歷史とか、名所舊蹟とか、紅燈街漁りとか以外に、何物かを摑むだけの悠久な性質や、又、そのゆとりのある風懷とを持つて、支那の旅を、完全に、朗らかに、なし遂げたいものである。聊か平素の持論の一端を述べて、諸志と共に支那旅行案内の實を擧げたいと思ふのである。

支那旅行案内の參考となり、支那及び滿洲各方面の基礎智識を述べた拙著は約四十種に達するが、そのうちの主なるものを左に示す。

支那游記	三、五〇	同
支那文化の研究	五、五〇	富山房
支那趣味の話	三、〇〇	大阪屋號
支那風俗の話	三、八〇	同
お隣の支那	一、八〇	同
長城の彼方（絶版）	、八〇	同
支那民情を語る	四、五〇	雄山閣
支那風景と庭園	二、〇〇	同
文字の史的研究	二、〇〇	同
硯及筆墨紙研究	二、〇〇	同
支那旅行通	、七〇	四六書院
支那料理通	、七〇	同
支那勞農階級の生活	、二五	三省堂
支那今日の社會と文化	、五〇	文明協會

翰墨談（絶版）	四〇〇	富士書房
支那長生秘術（絶版）	三、五〇	同
支那地圖	一、〇〇	神谷書店
支那行脚記（絶版）	二、三〇	萬里閣
支那風俗趣味（絶版）	二、〇〇	同
阿片室（絶版）	二、五〇	同
青龍刀（絶版）	二、三〇	同
眠れる獅子（絶版）	二、三〇	同
日本より支那へ	、五〇	北隆館
支那の田舍のくぐり	、五〇	同
歡樂の支那	、五〇	同
不老長生	、五〇	同
長久の支那	、五〇	同
老朋友	、五〇	同

文字の研究（絶版）　四、五〇　成美堂
言語學（上下）　一、一〇　同
文字の沿革（建築篇）　二、〇〇　同
文字の沿革　四、〇〇　日本大學
哲人支那　一、五〇　千倉書房
支那の民情　、三〇　同
現代支那語學（絶版）　、四五　博文館

支那及滿洲旅行案内 をはり

支那及滿洲旅行案内 をはり

昭和七年五月廿七日印刷
昭和七年五月廿八日發行

支那及滿洲旅行案內
（定價四圓五拾錢）

著作者檢印

著作者　後藤朝太郎　東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦　東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武　東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

發行所　春陽堂
東京市日本橋通三丁目八番地
（電話日本橋（五）六四一）
（振替口座東京一六一七）

488

支那語獨習書　神谷衡平　清水元助著　金壹圓五拾錢　送料拾貳錢

大支那案内　馬郡健二郎著　金貳圓五拾錢　送料拾貳錢

支那遊記　後藤朝太郎著　金參圓五拾錢　送料拾八錢

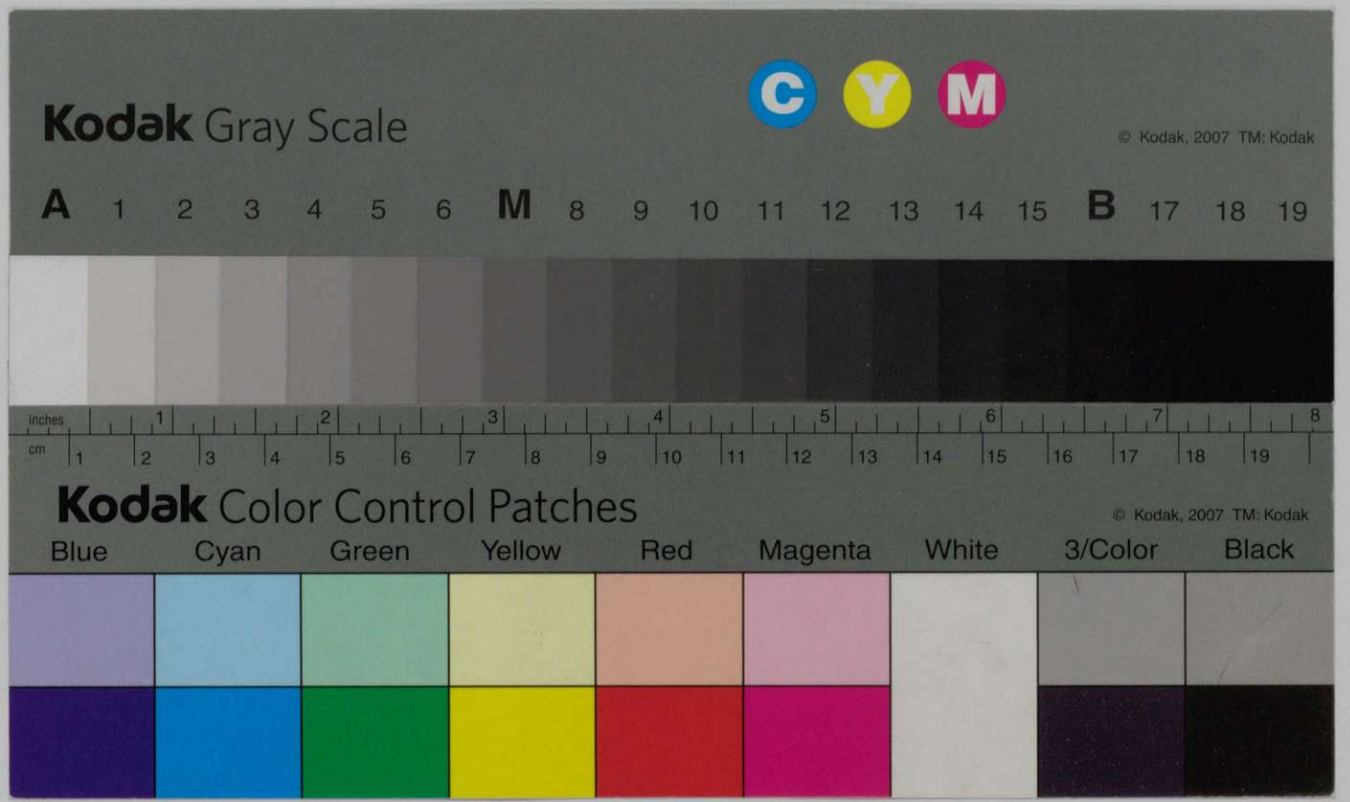
翰墨行脚　後藤朝太郎著　金參圓五拾錢　送料拾八錢

翰墨談　後藤朝太郎著　金四圓也　送料拾八錢

支那後宮秘史　濱本鶴賓著　金貳圓七拾錢　送料拾貳錢

支那情愛文献　濱本鶴賓著　金貳圓七拾錢　送料拾貳錢

支那及支那國民に與ふる書　中里介山著　金參拾錢　送料六錢


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black